

青の悪意と曙の意思

deckstick

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは、平凡な大学生だったはずの俺に訪れた突然の事態。

最後に見たのは青い光、手にしたのはチートな能力。

エヴァンジェリンっぽい何かになってしまった男の、幸せを目指す七転八倒物語。 始まります。

※大雑把に言えば、リリカルなのは（+ネギま等）、TSオリ主原作ブレイクモノです。

リリカルなのはの原作知識が無いと意味が分からない描写があります。

目次

初めに	1
プロローグ	4
アルハザード編1話 目覚め	7
アルハザード編2話 1の思案	16
アルハザード編3話 与えられた力	22
アルハザード編4話 主様	28
アルハザード編5話 姉の憂鬱、妹の歓喜	37
アルハザード編6話 研究と相談	44
アルハザード編7話 10年目考察	53
アルハザード編8話 隠れ家の完成、崩壊の足音	61
アルハザード編9話 崩壊	70
漂流編	78
アルハザード編&漂流編 まとめと設定資料	83
無印編01話 目覚め	89
無印編02話 過去と現在	99
無印編03話 初めての魔法	110
無印編04話 八神はやて	120
無印編05話 ストーキング	130
無印編06話 平穏な平日達と、平穏じゃない休日達	140
無印編07話 殴り合いから始まる物語?	149
無印編08話 転生者と真実	157
無印編09話 把握と捕捉	167
無印編10話 温泉へ	174
無印編11話 絆と繋がり	182

無印編 1 2 話	介入開始	194
無印編 1 3 話	迷探偵アコノ	203
新春企画：とある○○の正月風景		217
無印編 1 4 話	黒歴史	224
無印編 1 5 話	真実の虚像	232
無印編 1 6 話	積極的乖離	248
番外：小話ズ		258
無印編 1 7 話	次元震	268
無印編 1 8 話	突撃、近所の晩御飯	278
無印編 1 9 話	アースラ	292
無印編 2 0 話	倍増計画	303
無印編 2 1 話	面会希望者	313
無印編 2 2 話	探究心も程々に	329
番外：とある少女の日記帳		350
番外：その夜のアースラ（無印編 2 2. 5 話）		360
無印編 2 3 話	連休開始	372
無印編 2 4 話	約束	386
無印編 2 5 話	闇と夜天と曙天と	396
無印編 2 6 話	闇と曙天とアースラと	407
無印編 2 7 話	闇と暗部と咎人と	417
番外：小話ズ	その 2	433
無印編 2 8 話	招かざる客	456
無印編 2 9 話	3 冊の書	467
無印編 3 0 話	出口はあっち	478
無印編 3 1 話	翼	489

無印編 3 2 話	新しい力？	500
無印編 3 3 話	望んだもの	513
無印編 3 4 話	次への一手	529
無印編 3 5 話	手の中の果実	545
無印編 3 6 話	海の上で	557
無印編 3 7 話	地雷原	571
番外：小話ズ	その 3	582
無印編 3 8 話	時の庭園	598
無印編 3 9 話	その胸の奥に	612
無印編 4 0 話	その手の上で	630
無印編 4 1 話	名前を	643
無印編 4 2 話	見えない傷の為に	658
無印編 4 3 話	秘められた想い	668
無印編 4 4 話	歴史を見るモノ	684
無印編 4 5 話	主従	701
無印編 4 6 話	後始末	714
番外：小話ズ	その 4	724
無印編まとめ：登場人物の現状メモ		734
A ☒ s 編 0 1 話	手を伸ばす先は	749
A ☒ s 編 0 2 話	隠れ家	759
A ☒ s 編 0 3 話	お祭り	775
A ☒ s 編 0 4 話	後の祭	791
A ☒ s 編 0 5 話	見えた心、見えなかった心	803
A ☒ s 編 0 6 話	バージョン・アップ	818
A ☒ s 編 0 7 話	チェンジ	831

A ☒ S 編 0 8 話 ようこそ

A ☒ S 編 0 9 話 危険な鍵

A ☒ S 編 1 0 話 オハナシ

A ☒ S 編 1 1 話 帰還

A ☒ S 編 1 2 話 ちよつとそこまで

番外：小話ズ その5

A ☒ S 編 1 3 話 遠い世界へ

A ☒ S 編 1 4 話 遠い世界で

A ☒ S 編 1 5 話 足下の道標

A ☒ S 編 1 6 話 その手の内に

A ☒ S 編 1 7 話 知らないトコロ

A ☒ S 編 1 8 話 裏で蠢くモノたち

A ☒ S 編 1 9 話 求める手の先は

A ☒ S 編 2 0 話 求められた手は

新春企画 2 0 1 4 : とある別荘の正月風景

A ☒ S 編 2 1 話 結審

A ☒ S 編 2 2 話 気になる技術

A ☒ S 編 2 3 話 動き出す種

A ☒ S 編 2 4 話 混ぜるな危険

A ☒ S 編 2 5 話 喧騒、来たれり

A ☒ S 編 2 6 話 喧騒、終われり

A ☒ S 編 2 7 話 未来の景色

A ☒ S 編 2 8 話 開かれた扉

A ☒ S 編 2 9 話 稀によくある厄介事

A ☒ S 編 3 0 話 絆の形

番外：小話ズ	その6
A ☒ S 編3 1話	その身に得たもの
A ☒ S 編3 2話	出会い
A ☒ S 編3 3話	繋がる人
A ☒ S 編3 4話	最後の
A ☒ S 編3 5話	聞こえない声
A ☒ S 編3 6話	警戒するもの、すべきこと
A ☒ S 編3 7話	ここは湯のまち、紅葉の季節なの！
A ☒ S 編3 8話	〇〇の秋
A ☒ S 編3 9話	嵐の前の
A ☒ S 編4 0話	夜は闇に包まれて
A ☒ S 編4 1話	夜に夜明けの祝福を
A ☒ S 編4 2話	作られた者達
A ☒ S 編4 3話	記憶の中の姿
A ☒ S 編4 4話	忘れた頃に
A ☒ S 編4 5話	未来と今の物語
A ☒ S 編4 6話	願い
A ☒ S 編4 7話	力の前にある道
A ☒ S 編4 8話	暴かれる姿
A ☒ S 編4 9話	道理を掲げて通る無理
エピローグ	そして、未来へ
後日談	とある家についての意識調査
後日談	正月前後
番外：愛するが故に	(クーネのA ☒ S 編裏事情)
番外：小話ズ	その7

設定資料（裏設定含む）

解説その他（裏設定含む）

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2005年

01月〜 | 1525

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2005年

03月 | 1541

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2005年

04月〜 | 1554

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2005年

06月〜 | 1567

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2005年

08月 | 1578

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2005年

09月〜 | 1591

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2006年

01月〜 | 1606

蛇足：或いはこんな未来も／Strikersだった何か2006年

04月〜 | 1616

蛇足：或いはこんな未来も／小話みたいな何か2006年06月頃

1628

蛇足：Strikersのはずだった何か | 1642

蛇足：Strikersのはずだった何か | 1654

蛇足：Strikersのはずだった何か | 1668

蛇足：Strikersのはずだった何か | 1679

蛇足：Strikersのはずだった何か | 1688

16881679166816541642

1616 年 1606 年 1591 年 1578 年 1567 年 1554 年 1541 年 1525 年 15091468

1870	蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった何か	2011年
1857	蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった何か	2010年
1839	蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった何か	2009年
1825	蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった何か	2008年
1811	04月	
1801	蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった何か	2007年
1788	01月	
1775	蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった何か	2006年
1769	08月	
1755	蛇足的資料：StrikerSの筈だった世界の人物達まとめ	12
1744	蛇足：StrikerSのはずだった何か	11
1735	蛇足：StrikerSのはずだった何か	10
1726	蛇足：StrikerSのはずだった何か	09
1717	蛇足：StrikerSのはずだった何か	08
1706	蛇足：StrikerSのはずだった何か	07
1696	蛇足：StrikerSのはずだった何か	06

蛇足：或いはこんな未来も／S t r i k e r S だった何か	2012年
蛇足：或いはこんな未来も／S t r i k e r S だった何か	2013年
蛇足：或いはこんな未来も／S t r i k e r S だった何か	2014年
05月	1900
蛇足：或いはこんな未来も／S t r i k e r S だった何か	2014年
12月	1912
蛇足：或いはこんな遙かなる未来も	1926年
番外：小話ズ その8	1931年

初めに

この話には、以下の成分が含まれています。

・基本は「魔法少女リリカルなのは（無印、A×S）のTV版」です。

無印編以降、特に無印編の前半は原作を知っていることが前提の構成となっています。

設定にはStriker等も含まれますが、A×S編で完結します。

映画や漫画版等の影響も多少受けますし、あえて原作（公式）の設定を無視する事もあります。

・多数の転生者（元現代日本人）が登場します。

程度は様々ですが、転生者達は原作の知識があり、かつ、何らかの能力があります。

原作キャラへの憑依はありません。作中（無印編以降）の魔改造はあります。

また、転生者||オリキャラなので、人数過多による一部人物の空気が発生します。

・TS（性転換）要素があります。

一部の転生者のみです。原作キャラのTSはありません。

・アンチやヘイトと思える表現をする可能性があります（タグは保証です）。

意図的なアンチやヘイトを行うつもりはありませんが、主人公の感情により、管理局の上層部に対してその様な表現を使う可能性が高いです。

・人物や能力の原典として 魔法先生ネギま！（特に多いです）とある魔術の禁書目録 Fate／stay night Fate／Zero の要素を含みます。

なお、他作品の登場人物「本人」の登場はありません。あくまでも「外見などがそれっぽくなった転生者」や「それっぽい外見・性格・性能の何か」です。

例）主人公は「元々男性」で「エヴァンジェリンっぽい何か」にな

ります。

・主人公は最強です。色々チートです。ぶっちぎりです。
しかし、主人公の戦闘は少ないです。

・独自設定、原作からの乖離、原作ブレイクが多く発生します。
無印編中盤頃までの時系列は原作に準拠しますが、後になればなるほど乖離が激しいです。

A×s編（TV版の時系列的な意味で）に入る頃には、色々ブレイクしています。

無印編と言いながら最初に登場する原作の人物は八神はやてです。色々お察し下さい。

・原作の前（アルハザード編と漂流編）は、歴史や能力等、独自設定の説明が中心です。

正確に言うと、原作の人物Ⅱ八神はやて登場（無印編04話）まではほぼ設定垂れ流しです。

端的にまとめると「主人公がエヴァでチートになりました」で「設定厨乙」です。

主人公と「会話する人物」は1人しか出ませんし、その人は無印編以降には出ません。

漂流編と無印編の間に「アルハザード編&漂流編　まとめと設定資料」を入れるので、原作からがいいという人はそれで以降をどうぞ。

・全体的に、会話と設定垂れ流しだけで話が進みます。
原作にある場面は「それを傍観する主人公達」という構図が多いため、描写は少ないです。禁止事項「原作の大幅なコピー」容疑を避ける意味もありますが、これにより原作知識が多く要求されます。

高町なのは達（原作の人物）が加わり始めると、グダグダになります。
A×sの頃にはカオスになります。

・括弧は、基本的に以下の様に使います。

「発声による発言。通常の会話」

『デバイスや機械音声の発言、通信機を通じた声（電話の相手側やサーチャー使用時）』

(思ったこと、心の中の声、小声での会話、念話等。念話や精神リンクや小声は、特定の他者に伝わります)

・誤字脱字括弧間違い設定矛盾改善点、各種の指摘や批評は大歓迎です。

ちよつとした感想もとても喜びます。

駄目という感想の場合は、可能なら改善したいので、どこが駄目なのかを教えてください。

プロローグ

目の前に、グレーのスーツにちよび髭、黒髪オールバックなのに欧米顔の、胡散臭い男が立っている。

周りは、白で塗りつぶされた空間……空間？

ちよつと待て。俺、立って……いるのか？

おーけい、まずは、落ち着こう。

俺は、くるまだかずき車田一樹。大学生。

チョイオタは認めるけど、ここまで現実離れた世界に行きたいわけじゃない。

「落ち着きたまえ、カズキ君。困惑は理解できるが、自分の状況は理解しているかね？」

胡散臭い男は、短い顎の髭を弄りながら、胡散臭い笑みを浮かべている。

神様……と言う感じじゃない。

むしろ邪神。

悪意のある何かって方がぴったりだ。

「現実だけを見れば、何も無い場所で知らない人に名前を呼ばれている。

常識的に考えれば、有り得ない事を体験している。

希望的に考えれば、夢を見ている。

……テンプレ的に考えれば、死んで神様転生的な何か」

自分で言っていてなんだが、頭のネジが逝かれたとか思えないリストだ。

「ふむ、4つ目が正解だ。

死因は分かるかね？」

妄想乙、つて茶化す相手じゃなさそうだ。

心当たり……あー、アレか？

「……なんか、青い光に襲われたような気がする」

「うむ、正解だ。隕石的な物に頭を撃ち抜かれたカズキ君は、見ていて実に面白かったのだよ。」

というわけで、転生特典の相談と行こうか」
頭を撃ち抜かれて面白いって、やっぱこいつは神じゃない。
話を聞く気も無いようだし、さっくりと話を終わらせた方が得策か？

「まず、行先はリリカルな魔法少女の世界を基本としたものだ。

これは変更できない、嫌でも諦めたまえ。

転生特典だが、比較的漠然とした希望や能力の指定のみ3つまで可、立場・容姿を含めて詳細な指定は不可だ。

なお、ジユエルシード事件までは色々制限があるから要注意だ。
理解したかね？

では、適当に調整してやるから、とりあえず言ってみろ」

随分と変な言い回しだな。

基本とした。比較的漠然とした。詳細な指定は不可。色々制限。
適当に調整。

最初はともかく、テンプレじゃあまり聞かない単語が並び過ぎだ。

「んー、具体的にじゃなきゃいいって事か？」

にやにやとした笑みを顔に張り付けていやがる。

やっぱり話をする気は無さそうだ。早めに切り上げた方が、問題が少なそうだな。

今の話は……裏を返せば、詳しい設定をしても希望通りにならない、ってことだ。

曖昧な方が調整しやすい……違うな、言葉尻を取りやすい、だろうな。

悪意のある邪神様転生ってとこか？

なら、多少ぶれたところで問題ない方が良いつてことか。

「わかった。真祖の吸血鬼みたいな能力、多くの知識、多くの友人。

この3つが欲しい」

リリカルなら、夜の一族になるか？

基本とした、ってぼかしてあるから、他の作品の吸血鬼の可能性もあるか。

真祖なら即死は無いだろうし、弱者って事も無いだろ。

知識と友人は、あつて困るものじゃない。

何より、友人が多くいるなら、少なくとも人類との敵対は無いか、人類と関わらなくても大丈夫な程度の人外集落には落ち着けるはずだ。

人間以外になる可能性は十分だけど、意思疎通が出来ないモノになることは無い。

とりあえずは十分か？

「よし、良かろう。次は良い人生となると良いな？」

ニヤリ、と背筋に寒気が走る笑みを胡散臭い男が浮かべた直後。

「やっぱりこれかー！ー！」

……俺は、暗く深い穴に落ちた。

アルハザード編1話 目覚め

気が付くと、そこは、白くて何も無い部屋だった。

(……いや、おかしいだろ。

なんで、何も無いんだよ)

もちろん、全く何も無いというわけではない。

窓は無いが、天井で四角い照明が光っている。明るさは十分だ。

ドアはある。ノブ等はないが、横に操作パネルの様な物がある。

部屋の中央に、白くて小さい、シンプルなテーブルがある。

その上に、1冊の紅い本が置いてある。

(……やっぱり、おかしいだろ。

なんで、それが分かるんだよ)

カズキは、目を開けていない。

正確には、目が無い。

紅い本が、カズキ。

(この本が……俺？)

夢もここまで来たらおかしいだろ)

だけど、これが現実。

ここは、アルハザード。

紅い本は魔導具。曙天しよてんの指令書。

夜天の魔導書、宵天しやうてんの歴史書に指示し、集めた情報を受け取るため

の、管制用魔導具。

集まった情報を整理や調査するための、情報管理用魔導具でもある。

私達の記憶が、そう言っている。

(……幻聴、じゃないな。声が聞こえているわけじゃない。

俺が考えてるわけでもない。

この声というか、意識は……)

補助魂魄。

お姉様の記憶を元に表現すると……

最も近いものは、ミサカネットワーク。

だけど、実体は無い。

あるのは、魂とリンカーコアだけ。

(ミサカネットワーク……まさか、多くの友人?)

2万人はいない。

今のところ100人。

もっと増える予定。

友達100人できたかな?

妹達100人が正しい?

(は……ははは……)

お姉様が壊れた?

現実逃避しているだけ。

きっと、問題ない。

(……お姉様?)

そう、お姉様。

今は、お姉様だけ実体具現化できる。

わかりやすく言えば、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

きつと、真祖の吸血鬼のイメージ。

(間違っでは、いない……のか?)

曙天の指令書の能力を考慮すると、間違っていない。

強靱な体。吸血鬼以上。

強大な魔法的資質。吸血鬼の魔法も強い印象。

不老。吸血鬼の不老性相当。

無限再生。吸血鬼の再生力以上。

無限転生。吸血鬼の不死性に関連。

魂剥奪による、従者や使い魔化。吸血鬼の支配力以上。

リンカーコア剥奪による、相手の魔力の吸収。吸血鬼の吸血以上。

リンカーコアと魂の剥奪による、眷属化。吸血鬼の眷属化相当。

日光、流水、銀製品、問題ない。真祖の吸血鬼相当。

実体具現化する姿の変更。一時的なら霧も蝙蝠も何でも可能。吸

血鬼以上。

真祖の吸血鬼になりたいと言っていない。

真祖の吸血鬼みたいな能力が欲しいと言った。
望みは、正しく叶えられている。

(そう……か……知識は?)

曙天の指令書は、夜天の魔導書と宵天の歴史書から受け取った情報の管理が平時の役目。

2冊が様々な世界で集めた情報を整理し、主様に提供する。

そのためには、受け取った情報を覚える必要がある。

正しく、多くの知識。

(ははは……そう、なったのか……)

現実逃避?

思考放棄?

この隙に、お姉様の記憶、原作を確認。

お姉様がない。

夜天がカワイソウ。

宵天はどこ?

アルハザードが失われた?

主様は?

宿無し?

失われた理由は不明。

戦争?

実験の失敗?

次元断層?

要警戒。

ジュエルシードは、お姉様の故郷に似た世界にとって危険。

要排除?

魔砲少女にお任せ?

クローン技術。魂の概念が不足と予想。

26年間のクローンに耐え得る遺体保存技術と維持への執念は称賛。

記憶の転写をし得た。残照程度の魂が残っている可能性は0では無い。

死亡直後に記憶を確保した可能性。本来の魂の残存は不確定。魂が残っているなら蘇生可能。

原作崩壊のフラグ。

そもそも、その世界に行ける？

そんな世界が出来れば、行く。

決定事項。

過ごしやすそう。

(……お前ら、人の記憶を勝手に……)

一心同体。

お姉様のものは、私達のもの。

私達は、お姉様のもの。

最終的な所有権は、お姉様。

ちなみに、防衛システムはチャチャゼロと茶々丸に似ている。

私達の実体具現化は、茶々丸の妹機の姿を希望。

(……茶々丸の妹機?)

学園祭で超鈴音の兵として登場。

シヨートヘア。

耳のアンテナは後ろに流している。

身長的に、お姉様とあまり変わらない。

異論を受け付ける前に完成。

横槍を防ぐ素早さを称賛すべき。

(そう……か……)

それで、話しているのは、お前……達? でいいのか?)

私達は、私達。

100人の私達。

全員で一つ。

お姉様の知識で言うと……

異体同心?

一は全、全は一?

私の言葉は、私達の言葉。

私への言葉は、私達への言葉。

実質的に、友達は一人？

その発想は無かった。

(つまり……なんだ。

いっぱいいるけど、同一人物として扱えばいい……ってことでいいのか？)

そう思っても間違いじゃない。

私達の差異は微小。区別する必要もない。

誰が言ったのか、は問題じゃない。

誰が聞いたのか、も問題じゃない。

誰かが言ったのか、は問題。

誰かが聞いたのか、も問題。

(うーん、よく解らん……とりあえず、気にスンナって事でいいんだな？)

それでいい。

それより、今後の指針の決定が必要。

私達は、お姉様の指示に従う。

お姉様の行動指針を知りたい。

(指針？)

原作は、きつと遠い。

ベルカは遠い世界。魔法技術の祖。だけど、今は弱小、覇権を競える国じゃない。

ミッドチルダという名は無い。首都になるクラナガンは遠い世界の小さな都市。引き籠り技術者が集まる研究所があるだけ。

次元世界の平定は、きつと遠い未来。

それまで、どう過ごすか。

何を用意するか。

何を知りたいか。

(それは、どう生きるか、ってこと……でいいんだよね？)
きつと、そう。

お姉様の記憶にある魔法、面白い。

アルハザードにあるのは、戦争のための魔法。

人を殺すための魔法。

人を戦わせるための魔法。

お姉様の記憶にある技術も面白い。

コンピュータにも興味。

魔法を使わない有用な技術。

そこに魔法を加える。

電子精霊？

魔法を作る相談はまだ早い。

(とりあえず、魔法に興味はある。

俺の知識にあつて、再現できそう、再現したら面白そうな魔法って

何がある?)

ネギまの別荘！

時間の加速や減速は便利そう。

戻すのは怖い。

パラドックスは危険。

空間を扱う魔法が必要。

既存は破壊のみ。要研究。

武装解除？

羞恥心を利用する無力化魔法。

お姉様の知識と照合すると、セクハラ魔法と認定。

相手によっては、味方への精神攻撃にも。

似た効果なら、デバイスの停止か破壊が無難。

AMFの方が有効な概念に思える。デバイス無しでも魔法行使は

可能。

召喚。

何を？

何かを。

他者の精神支配と転移魔法？

そうとも言う。

そうとしか言わない。

式神。

私達の出番。

私達の戦力増強を優先。

今の使い魔や守護獣が最も近い？

外部戦力？

召喚と何が違う？

無意味。

幻想空間。

魂のみを呼び込み現実を疑似再現？

魂は扱いが難しい。

研究の価値はある。

認識障害。

隠れるには最適。

機械には無意味らしい。近くの人物限定の精神操作と予想。

遠距離からの観測は？

世界樹を隠す技術に関心。

部分再現であれば容易と予想。

咸卦法。

気と魔力の合一。

気が未発見。

要調査。

発見次第、機能追加を検討。

(ちよつと落ち着いてくれ、一気に言われても困る。

ところで、どうしてネギまばかり?)

お姉様の知識が偏っているせい。

戦闘や戦争用の魔法は大抵既存。

特殊すぎる物は再現できない。

でも使えない。

急げホッターを調査。

武装解除。武器に対する攻撃魔法。

開花。植物の成長促進や年齢操作。

収納。ものぐさのための格納術。

自動動作の念動と推測。
対象毎に術式を選択。

選択も自動化？

負荷と結果が見合わない。

インテリジェントデバイスが必要。

私達が一斉に念動。こうかはばつぐんだ。

(……そうか。とりあえず、俺は基本的な魔法の知識整理から、になるのか?)

無難な選択。

お姉様も魔法を学習すべき。

まずは、理論より使い方？

一番表に出る。身を守る必要もある。

再生や転生ができてても、痛いものは痛い。

お姉様の痛みは、私達の痛み。

痛いのは、嫌。

(……わかった。まずは色々教えてくれ、妹達)

その前に、今の常識。

確かに必要。

大事。

(……うん、そうだな。出来のいい妹達で嬉しいよ)

◆◆◆

その頃、隣室では。

一人の女性と、一人の男性がモニターを見ている。

「同調を維持したままで各々に自意識を確立、個別領域の作成と共有領域の一部分離、ね……」

「普通に考えれば、この規模の組み替えは有り得ないですね」

「そうね。でも、実際に実行されて、動作してるわ」

二人が見るモニターに映っているのは、1冊の紅い本。

そして、その状態を示す様々な数値や表。

「では、このまま曙天の指令書として機能するか様子を見ますか？」

「そうね、そうしましょう」

同意しつつも、女性の視線は一つのモニターに釘付けになっている。

それは、凄まじい勢いで「文字」が流れていくものだった。

通常であれば読み取ることの出来ない勢いのそれを、じつと、食い入るように見ている。

「何か気になる事でも？」

「……面白いわね、この子」

「面白い、ですか？」

「ええ………お姉様に妹達、か」

「え？」

「管制と管理用だけじゃもったいないかもね。

もうしばらくこのまま監視を続けて、問題なければ、近いうちに正式起動をするわ」

「早くありませんか？」

「早く見てみたいのよ。未知の可能性を持った、あの魔導具の未来をね」

アルハザード編2話 1の思案

お姉様の体内時計から判断すると、翌日。

アルハザードの今、という常識を叩き込まれたお姉様は、眠っている。

正確には、情報整理のための深層思考に集中して、それ以外の機能を大幅に制限している。

曙天、それも私達だけが扱える情報は、既に膨大な量がある。

お姉様は、直接参照出来ない。私達だけが扱える、広大な共有領域に収められている。

過去の記録。

魔法技術を手に多くの世界に広がっていった、発展の歴史。

魔法技術で自らを滅ぼしていった、衰退の歴史。

今の記録。アルハザードの情報。

次元世界の半分を支配下に置く大国。本拠を置く次元世界。本拠を置く星。みんな同じ名前。

貪欲に力や技術を求めながら、それを持つ他者を恐れる臆病な貴族達が支配する、血塗られた国。

文化は低水準。

生存に必要な全てを魔法の力技で解決する強引さと、それが可能な実力はある。

清潔さは病気による損害を防ぐため。風呂の安らぎはない。

快楽はあるけど、娯楽は少ない。

軍人に娯楽を生み出す時間は無い。戦争で奪うものは続かない。

食糧店はあるけど、農家や漁師はいない。全て魔法で合成する。

お姉様の知識で言えば、カロリーメイトとボカリスエツトみたいな何か。栄養は充分でも味は壊滅的、食の楽しみも無い。

技術は高水準。

貴族達は、自分達の延命には余念がない。不老。若返り。蘇生。クローン。記憶転写。欠損部位や病気の治療。

君臨する為に、武力の研究も余念がない。人体改造。デバイス。人工リンカーコア。

次元航行には駆動炉も必要。

多くの技術が研究されている。自国民や他国を犠牲に。

現状の知識とお姉様の未来知識を参考に、アルハザードを考察すると。

軍国主義国家。

貴族を中心とする硬直した権力構造。

自由が無く、娯楽を産めない国民皆軍人体制。

他世界から搾取する側も、自世界では抑圧されている。

以上を踏まえて、お姉様の立場を考える。

曙天の指令書は、超高性能の魔導具。

お姉様、防衛プログラムが2人、私達が100人。

少なくとも103個の人工リンカーコアと人工魂魄が使われている。

夜天や宵天と同水準の規格外品質は、お姉様と防衛プログラム。

私達は量産品のリンカーコア、コピー品の魂魄。

それでも、最高品質のものを惜し気もなく投入している。

曙天の指令書の心臓部、対外的な物理基盤、インターフェイスのお姉様。

お姉様を守る防衛プログラム。

夜天の魔導書、宵天の歴史書が集めた情報を、全て保持し得る記憶容量。

記憶を維持し、情報を整理するための私達。

構成の意図は理解出来る。

夜天の魔導書と宵天の歴史書を複製し得る情報を持っている。

建前は破損時の修復用。

何故、それを私達が保持している？

お姉様と100人の私達。

共有の情報領域がある。

各々の個別領域もある。

女史が言うには、イレギュラー。

何故、それが許容される？

お姉様の魂に苦戦していた様子。きつと、失敗も一度や二度ではない。

女史や助手に、困った様子はなかった。成功を意外とすら思ってたらしい様子。

何故、問題とされなかった？

わからない。

今、夜天が集めている情報。人体と機械の融合。

お姉様の知識で言えば、ヒューマノイドや戦闘機人に相当。

戦争の道具。国の性質を考えると、特に問題は無い。

夜天の役目は技術の蒐集。国として作成を命じた事に違和感はない。

今、宵天が集めている情報。創作文学。

お姉様の知識で言えば、ライトノベル。

魔法の発展のきっかけになり得るのに、報告の義務は無い。むしろ禁止されている。

他世界文化拡散抑止法。

戦争に直接有用なもの以外は、承認が無い限り口外に罰則がある。

宵天の役目は禁止された情報の蒐集。表立って行う事ではない。

夜天と宵天が集めた情報を管理するのが、お姉様。それを手伝う私達。

お姉様の役目は情報の管理。禁止された情報を含むのは明白。あり得ない。

作成を命じたのは、最高貴族院。この国の最高権力者達。

原案が誰か、知らない。知る必要もない。

大切なのは、最高権力者達が許可ではなく命令したという事。

未来の知識を持つお姉様。だけど、そこにお姉様はいない。

お姉様の知識を参照。パラレルワールド。並行世界。可能世界。外史。

アルハザードでも未発見の、次元世界ではない何か。
上層部に知られたら、きつと厄介事になる。

国への忠誠は仕掛けられていない。逃亡が選択肢に入る。
逃亡手段を考察。

堅い蛇の真似事。相手はそんなに甘くない。

戦争。戦力不足、敗北必至。

最終手段は無限転生。お姉様を一度殺す。何かが痛い。
どれも現実的じゃない。

逃走出来なかった場合に警戒すべきは、主との契約の時？

洗脳。可能性はある。既知の術式なら多くは対処可能。

重要術式情報の隠蔽や対処不可能な術式は充分に有り得る。警戒
すべき。

私達も洗脳対象となる可能性。0ではない。

最終手段は契約直前のバックアップと復元？

容量的には問題無いけど、権限的に不安。復元可能か至急調査。

呪縛。可能性は高い。既存術式なら洗脳と同じ対処。

縛られるのは、曙天の全て？

防衛プログラムによる強制再起動。

最終手段。だけど、考慮すべき。

口約束。あり得ない。

上層部は猜疑心の塊。

そんなものでは納得しない。

上層部と製作者が反目している場合。

そもそも製作を任せれない。

製作者が裏で離反している場合。

女史が上層部と同じ行動を取る可能性が高い。相手が変わるだけ。

明るい未来を想像し辛い。

イレギュラーが放置されている事実に縋るしかない？

私達の存在意義も考慮すべき。

製作意図は、情報の整理や検索。お姉様の知識で言えば、ぐぐる。

自分の気持ちも言葉を言葉にしてみる。

お姉様を、助けたい。

違和感はない。これで正しいと仮定。

だけど、機能遂行に感情は不要。感情自体がイレギュラー。

重要な手がかかり。お姉様。妹達。姉妹。主従ではない上下関係。

忠誠ではなく愛情。家族と認定。お姉様も受け入れている。

お姉様に、支配する気はきつとない。頼られてすらいる。

誇らしい。

この気持ちもきつと、イレギュラー。

役目の再定義。

お姉様を守る。助ける。

再定義前の役目は、情報の管理。助ける事に繋がる。機能の維持に

矛盾はない。

未来のために情報を集積。全てを知れば対策も取れる。

技術も必要。簡易な技術から、究極とされる技術まで。情報は漏ら

さず集める。

ゼロから作る能力、扱い切る技術も必要。

有用な物から代償に見合わないものまで、様々な物を。

渡す相手に合わせられるように。

高度な技術を隠せるように。

交渉時の切り札に使えるように。

大切な相手を助けられるように。

危険な相手を自滅に導けるように。

それはきつと、お姉様の役に立つ。

100人の私達。軍隊と仮定。

司令官は、お姉様。

兵は、防衛プログラムと私達。

私達は代わりがいる。復活もできる。

だけど、命に代えて助けても、お姉様はきつと喜ばない。

一緒に助かるのが理想。可能な限り、現実にする。

現状の問題点を考察。

個人識別が出来ない。当面は番号でもいい、識別手段を構築すべき。

指揮系統も無い。組織として行動できない。まとめ役が必要。

行動する者がまとめ役。

まずは、私。

役目を決める。

アルハザード編3話 与えられた力

「さて、そろそろ俺の……曙天の指令書の、になるのか？
把握しておいた方がいい能力の詳細を聞いていいか？」

半日で目覚めた、お姉様の能力。

昨日伝えた内容が基本。併せて詳細説明。

「まずは、強靱な体って、スペックはどれくらいになるんだ？」

溶岩の中、深海、宇宙空間。活動可能。

全力で動けば音速突破。

拳で鉄板を打ち抜ける。

「……生物じゃありえないだろ」

巨大な魔力に裏打ちされた魔法生命体だからこそ。

厳密には、生物じゃない。

「魔導具だから、って事か。」

となると、魔法については？」

お姉様がデバイス。魔法の行使も問題無いはず。

外部デバイスを使ったり、私達が補佐したりすれば、魔法の同時行使も可能。

魔力量は、莫大。外部からの供給で、更に大出力化も可能。

全員での同時魔法行使も可能。

100発以上のスターライトブレイカー級直射型砲撃魔法同時発動は浪漫。

「……まあ、強大な、って言ってたな。」

不老とか不死とかは？」

姿形は固定。魔法生命体の基本形態として登録されている。

いくら食べても太らない。そもそも、食事は可能だけど必要ではない。

魔導具としての劣化も、無限再生の一環で修復。

お姉様が活動停止状態になると、転生機能が働く。

これらを合わせて、不老不死を実現。

「デメリット、とかは？」

無限再生は、魔力を使用する。外見は、変化させている場合は再生対象外。

転生時、防衛プログラムと私達も活動停止して追従。任務の継続は不可。

転生後は、チャチャゼロ似の防衛プログラム、主がいる場合は主の順で起動。

その後、必要な魔力が確保できた後で、茶々丸似の防衛プログラムとお姉様が起動。逆に言えば、魔力が無いと起動出来ない。

私達は、お姉様からの魔力供給が必要。起動は最後。

「大したデメリットじゃないな。」

えーと、吸血とか眷属とかも、似たようなのがあるんだよな？」

魂やリンカーコアを剥奪する事が可能。吸血行為に相当、片方だけでも相手は死ぬ。無駄にしないためにも同時に行う事を推奨。

リンカーコアなら、魔法的資質と魔法に関する知識を奪う。

魂なら、心や記憶全般を奪う。

それをどう使うかの問題。

私達の増員等に使う、つまり、エネルギーや材料として使う事が可能。

お姉様や防衛プログラムを、これ以上強化するのは難しい。やるなら私達や、補助的な存在を対象に。

リンカーコアと魂を同時に剥奪した上で支配下に置き、それを使って人の意思と姿を維持するのが眷属。

意識する必要は無いけど、本体はお姉様の中に移り、体を遠隔操作する構造。

体は本人の魔力で維持する作り物。いつでも再構築可能だけど、お姉様から離れすぎると維持出来ない。

再生や転生の対象になる。実質的に不老不死。

支配下に置くのではなく、お姉様と直接繋がるのが主。

お姉様とチャチャゼロ似の防衛プログラムが、強めのリンカーコアを持つ生物を眷属や主に出来る。

魂を剥奪した上で支配下に置き、お姉様が作成した体で行動するの

が従者。

魔力資質を失うのは前提。同時にリンカーコアを奪う事は可能で、別の用途に流用出来る。

眷属同様、本体はお姉様の中で、作り物の体を遠隔操作。再構築も維持可能な距離も不老不死も眷属と同じ。だけど肉体強化や回復力は弱め。

お姉様、防衛プログラム、私達が、生物を従者に出来る。

魂を剥奪した上で支配下に置き、それを貸し与えて生物として生きるのが、使い魔。

精神面だけを従属させる。肉体の強化等は別の技術が必要で、不老でも不死でもない。リンカーコアも死んでしまうから奪えない。

魔力が枯渇すると魂を維持出来ずに死亡する。強いリンカーコアを持つなら完全自立型で、お姉様から離れても大丈夫。

お姉様、防衛プログラム、私達が、生物を使い魔に出来る。

「色々だけど、要するに、本人のリンカーコアを使う眷属や主にするのは俺とチャチャゼロ似のしか無理で、魂だけを使うならお前達でも可能、つて事でいいんだな？」

それで正しい。

茶々丸似の防衛プログラムや私達も“リンカーコアの剥奪”までは一応可能。だけど、本人に使わせるための権限が無い。そもそもお姉様以外は、奪う力や範囲がかなり制限される。

「何か、面倒な事になってるんだな。」

「だけど、必ず殺すのか……」

「夜天や宵天と違い、一部の取得が出来ない。必ず全て奪ってしまおう。」

代わりに、お姉様は広域の一括剥奪が可能。

強化化の方向に魔改造。

「……何考えてんだか。」

「えーと、夜天っていうと、確かユニゾンデバイス……だったよな？」

「疑似的だけど、主とユニゾン可能。」

「元々、主のリンカーコアはお姉様と接続する上、本体はお姉様の一」

部。

書の主の姿を本体と見なし、お姉様から魔力の直接提供が可能。普通のユニゾンデバイスと異なり、意識の直結は出来ない。あくまでも共有領域を経由した接続。

反応に遅れは出るけれど、ユニゾン事故は起こり得ない。

「ずいぶん物凄いいことになってるな。」

それで、俺の記憶は何で見られてるんだ？

俺からお前達の記憶は見えないみたいだけど」

初期構造が原因。

本来は、全員の魂が連結して、個人用の記憶領域は無いはずだった。

お姉様の潜在記憶が流入後、個人別領域、全員共有領域、私達専用領域の3種に分離した模様。

個人別領域は、人数分存在。各々の容量はあまり大きくない。

全員共有領域は小さい。でも、お姉様、防衛プログラム、私達、書の主が使える。連絡や作業用。

私達専用領域は、私達だけが使える。容量は巨大。本来はこれが書の記憶領域になるはずだった。

お姉様の今の記憶は、お姉様個人の領域にあるもの。

私達が見ているのは、私達用領域に残された、お姉様の過去の記憶。

お姉様が忘れたと思ってる情報も含んでいる。

お姉様が新しく知った情報は含んでいない。

書に与えられた情報も、私達専用領域にある。お姉様は直接参照出来ない。

「なるほどな。」

それで、本来は俺も知ってるはずの情報、ここの常識やら自分の能力やらについて知らないわけか」

正しい認識。

「それで、書の主ってのは？」

闇の書は結構自由に動けてた気がするし、絶対的な支配者ってわけじゃなさそうだけど」

書に対して管理者権限を持つのはお姉様のみ。

書の主は、書に対して命令権を持つ。

書は主を守り、従う責任を負う。

書の主は書に対して、使用者として意識共有による接続が可能。

現在の会話と同様の会話、全員共有領域の使用が可能。

これが、現状の曙天の指令書。

「うーん……あんまり主っぽくないけど、本当にこういうのか？」

書の主も、書に対して管理者権限を持つはずだった。

書は主を守り、従う義務があるはずだった。

書の主は書に対して、管理者として意識共有による接続が可能なはずだった。

現在の会話と同様の会話、書が持つ全データの使用が可能なはずだった。

守るべき優先度は、主の保護、書の維持、主の命令の順のはずだった。

そうなるよう魂が改変され、権限も設定されるはずだった。

「イレギュラー……なんだな？」

恐らく。

変化が無いのは、主の不死性。

曙天の指令書の主は、書の支配下には無いけど、保護下に入る。

主が死ぬ方法は、リンカーコアの再剥奪による絶命か、書そのものの崩壊のみ。

故に、主が死を望み、それが叶うまでは、書の主が変わることは無い。

本来は、主が死を望むまでは、条件が満たされるはずが無かった。

今なら命令を回避すれば、お姉様の意思で主を殺す事が出来そう。

お姉様は改変の影響を受けていない可能性がある。

間違いなくイレギュラー。最悪、お姉様の魂が殺される可能性も。

私達が守る。

お姉様も早急に自分を守る力を得るべき。

「でも、相手は俺やお前達を作った相手だろ？」

強制停止とか、仕込んでないとは思えないけどな。

それに、本当にイレギュラーだからって排除されるなら、とつくに消し飛ばされてるんじゃないか？」

許容範囲か検討中という可能性も考慮すべき。

与えられた知識の範囲にある制約系魔法であれば、多くは対処可能。

使用予定魔法の知識は与えられていない可能性を考慮すべき。

最終手段は、強制停止前に自滅。

転生での脱出。

転生機能に制限はない様子。

「うーん、なかなか物騒だな。

もうじき話をすることになるんだろうし、その様子を見ながら考えるべきか？」

お姉様がそれでいいなら、そうする。

アルハザード編4話 主様

更に翌日。

部屋に白衣を着た女史が入ってきた。

その姿は、良く言えば綺麗なお姉さん。

正確に言えば、優しげな中に芯の強さが垣間見える長髪のおば……
お姉さん。

ぶつちやけて言えば、怖くなる前のプレシア・テストロツサに似ている。

「そろそろ起床時間よ、寝坊助さん」

そう言いながら、女史は指先に小さな六芒星ヘキサグラムの魔法陣を出現させる。

それが消えると、紅い本、曙天の指令書がふわりと浮きあがった。

「……誰、だ……？」

「主に向かって誰とは失礼ね」

「そう、か……失礼した」

「分かればよろしい。」

名前は教えてなかったわね？ リーナ・ファ・ニピン。リーナと呼びなさい」

「分かった、リーナ。」

「主リーナと呼ぶ方が良いのか？」

「主は不要よ。」

さて、今から書の主として、色々とする事があるのだけれど……随分警戒されてるわね？」

「は？」

カズキは間抜けな声を上げると、本がくるくると回る。

「えーと、俺、何かしたか？」

「いいえ？」

「貴方自身ではなく、補助魂魄の仕業ね」

「あー……妹達が何かしてるのか？」

「それはもう。」

「そうね、捕虜が尋問を受ける直前ぐらいの警戒心かしら？」

「そんな感じなのか……」

「あら、管制人格なのに掌握していないの？」

「起床直後の寝ぼけ頭に何を期待してんだ？」

「なるほど、異世界の人格は伊達じゃないわね。」

「あー、一応言っておくけれど、これは誰にも教えないわよ？」

「だから、そんなに警戒しなくても大丈夫」

「何をどう考えれば、大丈夫って納得できる？」

「うーん、失敗したかな？」

「敵じゃないって言いたかったんだけど」

「リーナは困った顔で、うんうん唸っている。」

「……まず、聞きたいことがある。」

「俺の意識がここにあるのは、意図したものか？」

「少なくとも、私は人工魂魄を作ったつもり。」

「強度は上げたけれど、人格や記憶については基本の手順のまま、余計な手を加えていないわ。」

「そもそも、人工魂魄と言っても、誰かの魂のコピーだもの。知らない誰かの意思が来るなんて、普通なら考えられないわ。」

「この返事で十分かしら？」

「十分だ。」

「それで、俺の事は誰にも教えないって、どういう意図だ？」

「それだけど、私を書の主として正式に登録してからでいいかしら？」

「登録方法や結果は、補助魂魄が知っているわ」

「……登録の方法って、眷属化だよな？」

「正しいけど、少し違う。」

「実行はチャチャゼロ似の防衛プログラムもできる。」

「お姉様は不慣れ。任せるべき。」

「(とりあえず、実行は防衛プログラムに任せていいとして、だ。」

「やっても問題は無さそうって事でいいんだな?)」

「自身のリンカーコアに罫を仕掛けていない限り。」

「殺すつもりであれば、自爆と同義。」

未知の強制停止命令を含まない限り、無限転生でお姉様は存続。ここからいなくなるだけ。

警戒すべきは、未知の強制停止命令と、洗脳系及び呪縛系。

拒否権が、先程の起動時に付与された模様。

未知の強制停止命令にも有効か不明。

現在の状況を考えると、お姉様が主の生殺与奪権を握った形になっている。

拒否権の付与と洗脳や呪縛は矛盾。

理解不能。

最高貴族院と反目？

猜疑心の塊がミス？

攪乱目的？

(おーけい、落ち着け。

とりあえず、防衛プログラムの起動……こうか?)

出てきたのは、お姉様の記憶に近い、チャチャゼロの様な何か。

小さな体格や耳部のアンテナっぽい物、もみあげだけを伸ばした金髪ショートヘア、背中の蝙蝠の羽、自身より大きい剣はそのまま。

手足や顔は、人形ではなく人間風。

悪の妖精といった雰囲気纏った何か。それが防衛プログラムの姿。

「オー、デバンカ？ 殺ッテイイノカ？」

「性格までチャチャゼロかよ！」

「危険物の極みたる貴女を守るのよ？」

殺しを躊躇う様では話にならないわ」

「オレハチャチャゼロッテ名前テイイノカ？ ゴ主人ノイメージ通り

カ。イイネイイネ！」

「とりあえず、興奮するのは後にしてくれ。

その人を主として登録。任せていいか？」

「早速オレノ出番ダナ！」

オーケイ、チャチャットヤツテヤンゼ！」

チャチャゼロが手を翳すと、リーナから薄紅色の光が2個現れる

と、そのまま本へと吸い込まれる。

「……成功ね？」

「失敗スルワケガネーヨ」

「お疲れ、チャチャゼロ。」

話したい事もあるけど、今はちよつと下がっててくれ」

「ナンダヨ、モウ出番終ワリカ？」

「悪いな」

文句を言いつつも、チャチャゼロは素直に姿を消した。

それを確認した後、本はリーナの前にふわりと移動する。

「さて、と。そーいや、剥奪は死ぬか眷属なりにするか。だったか？」

「死ぬか支配下に入るかの二択と言う点は合っているわ。」

その意味では、話は聞いてくれるって事かな？」

「そうだな。このまま放浪つてのもアレだ」

「ふふ、やっぱり面白い子ね。」

さて、聞きたい事は色々あるだろうけど、初めにはつきりさせておくことがあるわ。

貴女を作った目的は、魔法技術の発展のため。

これは理解できる？」

「発展か。蒐集とは違うんだな？」

「蒐集は手段であり、夜天と宵天の役目よ。」

さて、ここまでが建前。ここからは本音を話すわよ？」

上層部に不満を持つ者として、端的に言うわ。

このままだと、アルハザードは長くない。

強すぎる力を持ち、滅んで行った世界の後を追うのは確実よ。

貴方に望むのは、アルハザードが滅んだ後の事ね」

「滅ぶ世界の技術を発展、か？」

他の世界を滅ぼせと言ってるに等しくないか？」

「滅ぶ理由は技術じゃないわ。」

自分の利益しか考えず、自制できない上層部。

搾取しか能の無い国家体制。

搾取されるのは、上層部以外の全て。

崩壊しない方がおかしいわよ?」

「どこまで本当か分からないけど、前提が正しければそうなるな」カズキの声は、あまり納得がいつていない様に聞こえる。

それは、前提条件の正しきよりも、何故それをここで言うのか、という点が気になっているからのようだ。

「もちろん、隠すべき情報は隠してほしいわよ?」

そのために拒否権も付けたし。

それに、何が良くて、何が悪いのか。

可能であれば、その検証をして欲しいの」

「夜天や宵天は?」

「あの子達は、あくまで蒐集が担当。保持できる情報はあまり多くないわ。」

それに、大量の情報を調べられるのは、補助魂魄の助けがある貴女だけよ?」

「既存魔法の組み合わせや改良による発展を想定してた、ってことか」
「各地の文化、特に創作された物語の発想も取り入れてみたいと思っ
ていたし、そのために宵天も製作したわ。」

まさか、管理人格に別世界の知識が入るとは思わなかったし。

私としては、素晴らしい結果よ?」

にこにこ笑いながら、嬉しそうに話すリーナ。

少なくとも、表情からは嘘を言っている気配は感じられない。

「アルハザードの上層部には何と?」

「建前通りね。」

夜天と宵天の集めた情報を、請求に応じて提出。

新たな魔法が発見されたら、その報告。

貴女の場合は、新たな魔法の創造もしそうね?」

「過大評価かもな?」

「異世界の発想と、補助魂魄の処理能力。」

決して不可能ではないわよ」

「そりゃどーも」

「あと、書の主は私だし、当面は私を通じて他の人達とやり取りするこ

とになるけど、友人くらいに思っておけばいいわ。

それと……そうね、名前も決めておきましょうか」

「名前？」

既に曙天とか、曙天の指令書とか言われている。

これは本としての名前でもあり、管理人格のお姉様の名前でもある。

「そう。魔法を創った場合の登録名と、他の研究者と連絡を取る際のコードネームみたいなものね。」

曙天だと、既存技術の組み合わせだと思われるでしょ？」

「何か問題でも？」

「名前と国籍が無いと、身分が付けられないわ。」

あとは、魔導具と分かり辛くなれば、余計な干渉や拒絶も増えなくて済むかも、くらいかしら？」

「なるほど。あつて困るものでもない、か」

名前を使う用途は、現状あまり無い。

確かに、開発した魔法を公開する際には、名前があつたほうが便利だろう。

開発者が魔導具だと知った貴族達の反応が好意的とは、考えにくい。

「その姿の名前は、エヴァンジェリン……だったかしら？」

「そうだな。というか、俺の記憶はどこまで見られてるんだ？」

「現在進行形で日本語の会話が成立している程度ね」

「……うん、俺が自分で思っていたより間抜けだった事と、深く考えちゃダメなレベルまでだって事は分かった」

「その認識でいいから、続けるわね。」

語源としては、恐らくエヴァンジェル……福音、喜ばしい知らせ。意識としての元の名前は一樹。一本の樹木。

あまり長い名前は好きじゃないし、でも、両方の面影ぐらいは残そうかしら？」

「そうね、エヴァンジュ。これで行きましょう」

「なんか、あつさり決めるんだな。俺だと延々悩むところだけど」

リーナが軽く悩む程度で名前を決めるが、カズキはあまり納得していない様子だ。

「元ネタを知るのは私と貴女、それに防衛プログラムに補助魂魄だけよ？」

これ以上ひねる理由が見当たらないわ。

愛称も元ネタ通りエヴァでいいし、分かりやすいでしょ？」

「まあ、そうだな」

「名前を付けたんだから、国民登録もしておきましょう。」

どの道、論文は国民じやなきや提出も出来ないし。

ついでだから、他の子も名前を付けておきましょうか。

防衛プログラムの前衛はチャチャゼロで決まったわけだし、後衛も外見イメージからチャチャマルでいいわね」

「全部掌の上で、しかも名前はそのままか？」

「ええ、間違えにくいでしょ？」

補助魂魄は、確か、妹達と呼んでいたわね？

構造のイメージは、確かミサカネットワーク」

「そこも知られてるのか」

「補助魂魄達はチャチャシスターズ、構造はチャチャネットワークで。」

うん、分かりやすいわね」

「一人一人はチャチャ、って事か？」

「ええ、そうよ。」

今は100人だけど、設計では1万人以上軽くいけるし、情報が増えたら人数も増やさないと追いつかないはずよ。

そんな人数の個別の名前は、貴方にとっては大きな意味は無いでしょ？」

もちろん、愛称や個別名は禁止しないわ。

その辺も含めて、貴女は適当に役目をこなしながら自由に生きなさい」

自由、という言葉聞いて、明らかにお姉様が戸惑っている。

役目をこなすのは、特に難しくない。

だが、何処まで自由が認められるのか。

何が許されて、何が許されないのか。

「……リーナ。お前にとつて、俺は何だ？」

俺をここまで上層部から切り離して、何を求めている？」

「さっき言ったでしょ？」　と言う返事では、納得しないって雰囲気ね。

そうね、書の主として、隠し事はしないわ。

私は、知りたいのよ。魔法の可能性を。魔法の限界を。

行けるところまで行くには、人の命は儂すぎるわ。だから、不老不死を求めた。

その結果が、貴女。曙天の指令書。

私は主として、命を差し出して不老不死という加護を得る。

私は主として、貴女が持つ情報を得ることが出来る。

研究も協力してもらおうつもりだったけど、貴女が独自で研究したほうが面白いものを作りそうだから、たまに手伝ってくれる程度で十分ね。

これが、私の理由。

上層部としても魔法技術の管理は頭痛の種だったから、開発費は結構出してもらえたわよ？」

「失敗しても気にしていない様子だったのは？」

「あら、見られていたのね。

開発用の出費は、ほぼ貴族の会社への支払いなのよ。

不自然でない程度に高い値段だね。

困難があると分かっている研究、十分な建て前、自分の利益、どこかから搾り取ればいいと思っっている財源。

その意味では、私とあの連中はグルね」

「ん？　現状でも、建て前は十分なのか？」

「ええ、そうよ。

まず、一つ目の理由。

アルハザードの情報全てを収めた資料庫は混沌とし過ぎて、ゴミ箱とまで言われているわ。

貴女に分かりやすく言えば、管理されていない無限書庫と同じ状態ね。

そこを魔導具で管理できるなら、それこそ有能な人材を数百人雇うだけのコストを払う価値があるということよ。どうせ今まで誰も管理できなかったわけだし」

「ユーノみたいなのはいるのか……」

「捜索が得意な人は偵察部隊とかに回されちゃうわ」

「あー、人を送り込む気が無いって事か」

「そうとも言うわね。」

それと、二つ目の理由。

人以上の働きをする魔導具を作成する技術力があるという、一種の技術誇示ね。

出来ない事は無い、と主張するアルハザードだもの。

他の世界に出来ない事を実現するための開発費は、結構出るものよ」

「政治的な理由、か。」

やだねえ、汚い世界は」

「綺麗な世界は無いわよ。」

平和な世界でも、人の本質は変わらない。

暴力に訴えるか、言葉に訴えるか、隠れてこそ何かをするか、胸の奥で暗い炎を燃やすか。

手段が違うだけで、根は一緒ね」

「……それを分かってて、発展を望むのか」

「前を向くことが出来れば、足並みは揃いやすい。」

外敵が居れば、余計にね？」

「そうか。俺が目指すべきは外敵、って事か」

「そこまでは言わないわよ。」

必要だと思えばそうしてくれて構わないけれど」

「やれやれ、人類の敵か潜伏か。まるつきりエヴァンジェリンだな」

「立ち位置は選べるわよ。」

だけど、言葉遣いは矯正しなきゃね。

少なくとも、女の子の姿が俺なんて言っちゃダメよ？」

「……善処する」

アルハザード編5話 姉の憂鬱、妹の歓喜

「さて、そろそろ実戦ね」

曙天の指令書が起動して10日。

資料庫の調査に着手、夜天の魔導書からの情報は無く、宵天の歴史書からはほとんど妙な作品や資料が送られてくる状況が続いている。

そんな中、各所への紹介以降姿を見せなかったリーナが現れ、唐突に言い放った。

「実戦？」

周囲に大量の本を浮かべているお姉様が、不思議そうな眼をリーナに向ける。

お姉様は実体具現化していて、ゴスロリと呼ばれる服を着た少女の姿をしている。

その姿は、間違いなく真面目に調査をしているエヴァンジェリンに見える。

「ええ、そうよ。

アルハザードの。この時代の。

現実の姿を見ておいてほしいの」

「現実を見る、か。

資料はここにあるだろうから、実感してこいつて事か」

「物語の世界。

物語の登場人物の姿。

物語で語られた能力。

食事も睡眠も不要な体。

ここに生きている、ここで生きなきゃいけないって実感は湧いてないでしょう？」

「……確かに」

お姉様は、ここ5日ほどは資料庫に籠ったまま、資料の取り込みを行っている。

この状態で生きていると実感するのは、確かに簡単ではないだろう。

「他にも目的はあるけど、今日は私と作戦行動よ。

そうそう、その姿だと持っていけないから、本の姿でね」

「そうか、分かった」



「と言うわけで、やってきました。

王の為にとか言いながら人間爆弾を放り込んでくる、テロ組織の拠点になりまーす」

中継ポートを経由して到着したのは、緑豊かな地に作られたそこそこの大きさの都市だった。

今いる上空から見える範囲では、建物を見る限り石造りの建造物が多いようだ。しかし、川沿いに作られている巨大な塔が目立ちすぎて、他の建物が全く目立っていない。

文化としてはあまり発展していないようにも見えるが、人間爆弾を放り込めるだけの魔法技術は持っている、という事だろう。

そして、ここにいるのはリーナとお姉様……曙天の指令書のみ。

リーナは手を出さないと宣言したため、お姉様のみで作戦を実行しろと言われているようなものだ。

防衛プログラムや私達は、現時点では戦力に含まれていない。

お姉様の指示があれば戦場に立つ気は十分だが、未だ指示が無い。

「それで、命令内容は？」

「つれないわね。

さてと、命令を伝えるわ。

一言で言うと、塔及び見える範囲にいる人物の殲滅及び塔の破壊。

地形や塔以外の建造物への被害も一切制限しない。

撃ち漏らしは許さない。一人残らず殺しなさい」

「……何ともまあ、軍らしい命令と云うか」

「出来ないとは、言わせないわ。

それだけの能力はある。

方法は選り取り見取りと言えるくらいにね」

「だよな……」

お姉様は複雑な表情で地上を見下ろしている。塔の中には、恐らく役所や研究施設なのだろう。多くの人がいる様子が見える。

だが、外には普通の住居や商店街もあるのだ。

所謂女子供の姿も多い。

「これが、アルハザードの現実。

この時代の戦争の姿。

敵対する者、危険な者、気に入らない者は屈服させる。

屈服しなければ滅ぼす。

屈服すれば搾取する。

人権なんて概念が存在しない、強者と弱者、勝者と敗者で全てが変わる世界」

「……これを、実感させたかったという事か」

「そうよ。

弱者や敗者は、強者や勝者のための存在に成り下がる。

そして、私達が属している国は、強者や勝者であり続けようとしている。

貴女が国民皆軍人の国に作られ、国民として国の保護下にあり、それを受け入れている以上、国の敵を殺すのは必要な行為よ」

お姉様は、何も言わない。何も言えない。

教えられていた。アルハザードの国民は全員が軍人だと。

聞かされていた。搾取しか能が無く、自制できない国だと。

立ち会っていた。自身を国民として登録する時に。

知っている。軍は国の敵を殺すための力だと。

理解はできる。自身は軍人であり、敵を殺す事を求められていると。

「ただ腐った国に貢献するのが嫌なら、貴女が敗者を利用しなさい。死が無駄でないといい放ちなさい。

出来ないのであれば、製作者として貴女を壊します」

そう言うリーナは、仮面のように冷たい表情をしている。

怒りでもなく、悲しみでもなく。ただ、役目を遂行する機械の様に。手段はある。

お姉様が敗者を「利用」する方法。ただ殺すだけではない、後に続けるための能力。

「……剥奪、か」

「手段は問わないわ。」

書の主として命じます。この地に、全員死んだ、塔が崩壊したという結果を作り出しなさい」

「………わかった」

お姉様は呟くように言うと、両手を地上へと向けて目を閉じた。

「……対象、3168人。」

剥奪可能なリンカーコア保持者……656人。

剥奪、全ての人物より魂。全ての可能対象者よりリンカーコア」

銀色に輝く六芒星ヘキサグラムの魔法陣がお姉様の足者に現れ、続いて地上からおびただしい数の光がふわふわと浮き上がってくる。

「……これが現実、か」

諦めたような、どこか遠くを見ているような。

お姉様は感情を感じられない表情でその光を見ているが、それは次々とお姉様の体に吸い込まれていく。

「現実よ。」

その光は、貴女が奪った命そのもの。

せめてもの手向けと思うなら、大切に使いなさい」

「……そう、だな」

全ての光が無くなると、一旦魔法陣が消えた。

それを確認すると、お姉様は右手を天に向ける。

「メテオ」

たった一言。それに、一瞬の六芒星。

それだけで、眼下にそびえていた塔が、全壊と言っていいくらいに崩壊した。

「これで、いいんだな?」

「ええ、任務完了よ。」

これ以上ここにいる必要もないし、戻るわよ」
「……ああ」

◆◆ 100の判断 ◆◆

私は、チャチャ00100。

チャチャシスターズの人数と、剥奪したリンカーコアや魂の管理を担当。

役割名は最終番号^{ラストナンバー}。

私の番号が、私達の人数。

お姉様の知識を参照。人事及び総務に該当業務あり。

リンカーコア及び魂の大量入手。

実行時のお姉様は、殺すことを躊躇っていた。

だけど、死んでいない。

ここに存在している。

リンカーコアは、予想以上に上質。

現地の魔力素は中濃度、低適合性、高負荷率と判定。

お姉様の知識を参照。負荷による高地トレーニングや魔力トレーニングに類似。

高品質リンカーコア保有者は自然に鍛えられると推測。

チャチャシスターズの人数調整。

お姉様は、殺して減らす事はきつと反対。

リンカーコアに戻すことも、きつと良い感情を持たない。

多少余裕がある程度の人数に限定。

現状。資料の整理が急務。

アルハザード崩壊までの時間、推測不能。

崩壊までに既存資料の取得までは終わらせるべき。

明らかに人手が有用。

増加可能最大人数、656人。

記憶能力の拡張も必要。

お姉様の記憶を参照。コンピュータによるデータベース。

有用な概念に思える。実用化の手段を検討。

お姉様の自衛のための出力補助にも有用。

護衛用自動人形も検討。

魔法の研究にもきつと必要。

リンカーコアの用途は多岐に渡る。

200人の増員を提案。

現在必要なのは、お姉様の業務を補佐する力。

資料を取り込む力。

整理の優先順は低い。

自衛もそこまで必要でない。

チャチャシスターズに高品質のリンカーコアを割り当てべき。

適材適所。

自分達の闇は、自分達の責任で処理する。

◆◆ 1の決断 ◆◆◆

私は、チャチャ00001。

お姉様の補佐主任。役割名は秘書。セクレタリー

私達のまとめ役を兼任。

お姉様の知識で言えば、言い出しつぺの法則。

本望。

最終番号ラストナンバーの増員提案を、全員一致で可決。

300人となることが決定。

全員への通達及び意見調整は、今後確実に困難になる。

支配者層と労働者層の分離。

望ましくない。

支配者はお姉様一人。これが前提。

ある程度限定した代表者による合議制。合議担当はある程度入れ

替わりを推奨。

恐らくこれが理想。

現在の役割名ネーム付きは5人。

セクレタリー、サーチャー、インデックス、プロテクション、ラストナンバー、
秘書、検索、整理、保護、最終番号。

実質的に5つの部門。

現在は情報を得るために検索が最優先。

得た情報を扱う整理も重要。

秘書はお姉様の直接の手足。役目は重要。人数は重要じゃない。

お姉様の希望、魔法の研究はきつと秘書が担当。

保護は、当面は防衛より防衛手段の構築を優先。

魔法、武術、戦術。検索や整理との協力が多くなる。

最終番号の人数管理に手間はかけられない。かける意味が無い。

状況把握はチャチャネットワークで即座にできる。

剥奪したリンカーコアや魂の管理。そこまで手間はかからない。

最終番号は、きつと雑用や多忙な部門の応援が多くなる。

5部門それぞれで、最適な組織は異なる。

合議に参加する代表を決める方法も部門毎に異なっている。

まずは、割振り。

状況に応じて調整や人数追加も検討。

組織の組み方は、試行錯誤。

自分達がやりやすい方法がよい。

アルハザード編6話 研究と相談

あれから、1年。

お姉様の言葉遣いは概ね矯正され、普段の会話もアルハザード語になっっている。

アルハザード語は、お姉様の記憶に相当する言語は無い。

強いて言えば、ラテン語に類似する単語が存在。

お姉様のラテン語知識では、近似と言えるだけの情報も無い。

お姉様は、最初の落ち込みから任務は任務と割り切れる程度には立ち直っている。

それでも、普段は戦場に立つことは無く、資料庫に籠ったまま。

時折命令で戦場に立ち、その度に私達の人数や、保持するリンカーコアと魂は数を増やしている。

その結果、私達は既に500人を超え、処理能力に余裕も出ている。

新しい概念、新しい魔法への挑戦。

お姉様と私達の希望を叶える。



(コンピュータに似たシステムの再現か。

概念としては類似するものは無いようだが、厄介な部分は魔法で何とかなりそうか?)

リンカーコアを動力源、魂を演算機及び記憶装置と設定。

今の私達も似た構造。

コンピュータとして不要と思われる部分を、可能な限り性能に割り振る。

冗長部分は確保。劣化対策は必要。

4ビットの実証機は問題なくクリア。

(仕様や規格は決めているのか?)

お姉様の知識を参照。

試作機は16ビットと32ビットのハイブリットから。

上位互換を維持、可変長で最後まで残せる命令のみを想定。
最終的に64ビットの超並列を想定。128ビットは一部の値のみで十分と判断。

お姉様の知識、特にぐぐーるのサーバー構成情報は目標として有用。

(予想以上にやる気だな?)

お姉様の影響。

役に立てる実感。

役立つものを作る達成感。

物作りの楽しさ。

後戻りは不可能。

(……そうか。楽しいなら何よりだ)



ネギまの別荘。

当初より候補筆頭。

(確かに、便利そうなものだが。

まずは必要な要素の抽出からだ)

空間作成?

空間圧縮?

時間軸分離?

内部と外部は転移で移動。これは座標が特定できるなら問題ない。

(新しい空間を作るよりも、圧縮して外から見たよりも広い空間を持つ方が容易か?)

空間の歪曲は、現在重力の専売。

過重力空間での生存は困難。

空間のみに重力を適用?

(物の大きさを変える魔法は無いか?)

既存術式は不完全。

生命維持に支障。

生物が想定外。

精密品にも適用不可。

情報が劣化。完全には元に戻らない。

(その情報も集めるとして、扱うべきはやはり空間か)

魔力の負荷も高いと予想。

魔導炉や人工リンカーコアの情報を収集すべき。

複数の魔導具による補助も検討すべき。

インテリジェントデバイスによる調整も必要と判断。

魔導具、デバイス、人工リンカーコアの生産技術が必要になる。

人工魂魄や各種AIの技術も軽視はできない。

魂はリーナの得意分野。協力は有意義と判断。

魔力操作に関する情報も集めるべき。

カートリッジやAMFに至る技術？

少なくともこれらに耐える必要がある。既存技術での破損は回避

すべき。

封印、魔法解除の情報も必要。

(ずいぶんと大がかりになるな。

有用な情報が集まった際に順次検討に留めるべきか)

明らかに高難易度。

きつかけを見つげるところから始めるべき。

(しかし、次元転移もどこか違和感があるんだが……

近距離の転移とは違う構成なのは間違いないんだが)

違和感の正体を予想。

近距離転移に比べて、規模の割に消費が多くない事？

世界を超えらるという大仕事の割には、構成が単純な事？

同一世界転移は星系を出ることも出来ないのに、次元転移は可能な

事？

(それもあるんだが……

そもそも、他の世界が座標で示せるといふ点がない)

位置特定手法？

方法論は確立済み。

何故これで良いか、理論は不完全。

研究者としての血が騒ぐ？

違和感とは異なる何か。

(うーん……まあ、これもおいおい、だな)



リーナの研究への協力、という名のお茶会。

今回の議題はクローン作成時の能力付与。

「つまり、フェイトを作る際に魔法の素質やらが変わったという話に繋がるわけだな？」

「正にそれね。」

今の技術だとかかなり偶然の要素が強いよ。

それを、ある程度意図的に操作出来ないか、って言われてるのだけ
れど」

「結果から見た原因の推測は？」

「魂やリンカーコアの影響が強いらしい、くらいかしら？」

「リンカーコアの変化要因は分かっているのか？」

「周囲の魔力濃度が適度である場合に出現率が高い、くらいね。」

ただ、濃度が適度だとそれなりの魔力量のリンカーコアを量産。

濃度が高すぎると魔力量は大きいけど数は減る傾向が強いわ。

濃度が低い場合は魔力量も数も少なめね」

「最後に運に頼りたくない、という事か。」

現状を見る限り、魂の影響が大きいのではないか、としか言えない
か」

「魂も自由に操作できるわけではないから、なかなか実証が難しいの
よ。」

ある程度性格の方向付けはできるし、記憶に関してはかなり融通が
利くけれど。

それでも、性格は記憶の影響を大きく受けるし、同じ記憶を与えて
も同じように定着するとは限らないし」

「残る影響は……クローンは培養液の中で促成か？」

「他の育成方法も検討や実験はされているけれど、一番安定するのはその方法よ」

「なるほど。」

他に考えられるのは、培養液の成分、温度、対流。外部からの光や振動、放射熱やらも影響する可能性があるな」

「素体ではなく外的要因が影響する可能性という事ね？」

「数十兆だかの細胞が増える過程は、加速しても省略はしていないの
だろう？」

「なら、ほんの少しの要因が後々まで影響しても不思議ではない」

「そうなるかと完全な状況再現や比較が必要になるけど……まあ、無理
ね」

「だろうな。簡単に再現できるものなら、原因が特定できないとは思
えない」

「可能性としては考慮すべきだけど、実質的に計測して比較……統計
を取れるほどの資料が揃うとは思えないし、お蔵入りね。」

「いい発想が無いかと思っただけれど、なかなか上手くいかないわ」

「悪かったな、素人の考えで」

「発想自体は悪くないわよ？」

「可能性として考慮するには十分と思えるし、原因が特定できない理
由を納得させられる内容だから」

「改善に役立たなくても、改善できない説明が出来れば十分か？」

「いくら私がクローンと魂操作技術の第一人者でも、過去に散々研究
されたテーマを簡単に片付けられない点は説明できないといけな
いから。」

「やっぱり、違う視点からの発想は面白いわね」

「そうかい」

「ところで、最近情報の流出が増えているみたいよ。」

「それらしい情報は無い？」

「リーナの名前が入った、クローン技術に関する資料は夜天が見かけ
たらしい」

「どの程度の資料か、内容の調査はできる？」

「資料庫に同じものがあつた。」

大体30年程前の論文に添付されていた資料だな。

論文自体の流出は確認していない」

「間抜けと切り捨てるには微妙だね。」

クローン技術は結構厳密に管理しているはずだけど」

「クローンそのものと言うより、促成に関する部分だな」

「……手軽に頭数を揃える手法が目的かしら？」

その意味では30年前の資料でも十分。最近の論文より管理も甘い。

いい腕のネズミがいるか、分かっている協力者がいるか」

「内通なんて、大きな力を持つ組織相手ならどこでも仕掛けるものだ。」

全てを防ぐ事は不可能だろう？」

「上層部は、悪い意味で達観してはいけないのよ？」

可能な限り防ぎ、可能な事後策を取る義務があるわ。

私達にその義務は無いけどね？」

「それでいいのか……？」

「いいのよ。」

報告すら義務として設定されて無いもの」



魔法薬の再現？

(唐突だな。エヴァンジェリンの使っていた物が気になったのか?)

物理的な素材と魔法の融合は、デバイスや魔導具類で発達。

消耗品としての利用は費用対効果が悪く、未発達。

費用の問題を解決または無視できるのなら、有効？

(そうだな……アルハザード後を考えると、ある程度有用か)

実力の隠蔽？

切り札としての役目。

費用を盾に、乱用を防ぐ。

動植物素材は、安定供給が難しい。世界が変わると材料が変わる。現在の魔法素材は元素、魔力、人間が材料。

元素系素材は鉱物、大気、水からの化学合成に魔法合成を併用が多い。

人間を材料とするのは大抵の国で違法。

国や犯罪者組織が裏で生産。

(現状でも、ある程度それらしいものを作ることは可能という事だな?)

魔力の蓄積は可能。

現在は持続型魔法への供給が主な用途。

人への供給は想定されていない。

利用者側の技術も必要。

高費用の魔力を利用する技術の習得より、魔法を使う訓練、魔力を増やす訓練が安定性で高評価。

魔力の無い人は魔力の運用能力も欠如。利用がとても困難。

結果的に、役に立たない技術と評価。

(魔力の弱い者の強化には、一応なるが……)

管理局より犯罪者組織が喜びそうな技術だな)

現在も、裏の人間しか使っていない。

利用目的も、ほぼテロや侵入しての内部工作。

魔力が弱く警戒されにくい人間に、大きな力を使わせる場面限定。負荷が高く、扱いを間違えれば死を招く。

(実力を隠すにも使えるが……当面は不要か)

情報収集は続けるが、積極的な研究は余裕が出来てからだな)

他に研究したい材料が色々。

妥当な判断。



(ふと思ったのだが、虚数空間は確認されているな?)
本当に唐突。

人体操作と治療に関する資料の調査中とは思えない突飛さ。
プレシアからの連想と予想。

(その通りだよ、まったく)

空間破壊により現れる別の空間という一般的認識。

魔法は原則使用不可。

魔法式の前提が崩壊する。

魔法式の変数に、騒音で虚数が入る印象。

(そこでは、本当に魔法が使えないのか?)

専用または対応した魔法であれば行使可能。

対応は困難。

飛行魔法を対応させても、出口は大抵無いと思われる。開発されて
いない。

転移は対応魔法が存在。但し、転移座標も虚数で騒音混じり。
どう足掻いても補正演算が追いつかない。補正自体も騒音で汚染
される。

通常空間への転移に成功するまで、ひたすら試行。

脱出には時間が必要。通常は生命維持の限界への挑戦。

お姉様と私達が稼働時は、全員で補正演算が可能。

ごく短時間ならまだ汚染も少ない。試行回数は激減可能はず。

(そこでの搜索も、あり得ないほど困難って認識でいいな?)

夜の荒れた海で1枚の木の葉を目視だけで探すに等しい。

仮に見つけても回収までに見失う。

恐らく無駄な労力。

(そうか。)

ふと思ったのだが、周囲で使用される魔法の魔法式に、強引に値を
突っ込む方法はあるのか?

虚数をつつ込むと、AMFが出来上がりそうな気がするが)

相手の演算より高速に処理できれば可能と予想。

AMF完成の糸口?

この手法では、発動や維持の抑制のみ?

完成された現象は干渉不可と予想。

誘導妨害や魔法弾の破壊は可能と推測。

見た目上は原作のAMFに近いと判断。

(ふむ。そうになると、割り込み手法の確立からだな。

虚数が扱えなくても、妨害の手法程度には役に立つだろう)

魔力操作手法の精査から開始。

魔力操作と言え、もう一つ。

カートリッジシステムのこと、時々でいいから思い出ししてください。

いつそ、魔導炉を直結。

最近の主様も得意な一時強化手法。

本来はリンカーコアや体に多大な負荷が発生。

無限再生の前に負荷は細事。

負荷による苦痛は大事。

実力隠蔽時のブースト手法としては優秀と予想。

(……研究対象が増える一方だな)

研究者の性分。

改善不可能。

アルハザード編7話 10年目考察

お姉様がアルハザードに来て、早10年。

私達は4000人を超え、処理能力や役割分担も役目を果たすには十分と判断できる水準に到達。

増員は厳しい選別を通った場合のみとなっている。

資料庫の情報記録と整理も落ち着き、内容の解析や整理が重要に。どこからともなく流れ着いた読めない資料は、とりあえず映像として記録。

宵天や調査員から都合よく言語情報が流れてくるのを待つ状態。

言語解析はしていない。

役職外であり、大抵は労力に見合わない。

最近はお姉様の魔法研究も本格的。

別荘の為の、空間の研究が主。

既に圧縮の理論は完成。実証実験までは成功。

作成も理論上は可能と言える程度の目処も立っている。

論文も複数提出。

アルハザードでは空間魔導師エヴァンジュとして名が通る。

夜天からの情報にも名前があつた。

辺境や敵国にも一流魔導師として名が知れ始めているということ。

厄介事の種。でも誇らしい。

名が売れば、それを利用するのが組織。

アルハザードの上層部は、お姉様に研究所を与えた。

職員は100名程。

所長はお姉様。

資料庫の管理主任も兼任。

人間なら明らかに過重労働。

資料庫にも人が増員。

主に資料請求等の窓口担当者。

元々いた職員は資料受入担当に。

日常的な資料請求対応が業務から除外された代わりに、資料整理業務

が追加。

今までの様に積むだけだと、お姉様が怒る。

チャチャシスターズが数名、実体具現化してお姉様に侍る。

^{プロテクション}保 護 部 門 が 主 担 当。

主目的は護衛、最優先。

戦場以外での襲撃は未経験。

普段は業務補佐を侍る理由とする。

これは本来秘書の領域。^{セクレタリー}秘書部門は裏方、表に立つのは保^{プロテクション}護

部門と役目を割り当て。

通常時は保^{プロテクション}護部門の方が人員的な余力が大きい。

護衛のチャチャシスターズは、表向き護衛用自動人形と説明。

チャチャシスターズの頭部アンテナ左右それぞれにインテリジェントデバイスと人工リンカーコアを埋め込み、別途通常のデバイスも持つ。

見た目より強力。でも、それだけ。

技術基盤は既存。問題は無い。

実際にインテリジェントデバイスと人工リンカーコアにより作られた、本物の護衛用自動人形も配置。

守護騎士システムや傀儡兵の原型と予想。

護衛用とは名ばかり。業務補助に使用する貴族も多い。

既存の用途の範疇。

本物と混在させることで、私達の防衛機能を隠蔽。

私達の存在は周知されていない。するつもりも予定も無い。

重点調査中の既存技術。

分野は様々。

魔導炉と人工リンカーコア。

大型魔導炉で使う材料の一部以外は、私達だけで製造可能。

小型魔導炉は実験用に何度か製造済み。

時間や空間を扱う魔法の消費を支え得る性能が要求水準。

現在は困難。

超並列リンカーコアシステムも研究中。安定性が課題。

魔法、魔導炉共に改善が必要。

魔導具やデバイス。

魔法実験用に特別仕様品をいくつか製造。

デバイス開発部門から勧誘が煩い。

必要な情報のやり取りは行うが、開発部門まで兼任する気は無い様子。

人体操作。治療技術。

主様の得意分野。

大抵の事は可能。

常にどこかと戦争しているアルハザード。

主様以外にも人がいる戦場に行くときは、後方で医療支援。

治療の練習台には困らない。

幼女天使等と呼ばれる事がある。

意味が分からない。

魔法の非殺傷設定。

理論は既存。

戦争には不要として放置。

埋もれた技術。誰も知らない状態。

犯罪者の捕縛に有効と証明。

治安部隊で正式採用。

各魔法への組み込みが治安部隊主導で行われている。

捕虜の確保にも地味に役立つ事も証明。

軍での試験も始まるらしい。

表に出していない技術。

お姉様と私達だけの技術。

既に色々と存在。

コンピュータデータベースは実用化済み。

性能や効率の向上も着々と進行。

文章検索と概要記録用に活躍中。

デバイスと異なり、利用者を選ばない特性。

資料庫の管理業務に投入予定。

魔法陣や映像や音、つまり文字情報以外の検索は現在困難。
意味や意図による検索も難航。

これらは魔法による検索が現実解と予想。

電子精霊も研究中。

時間を扱う魔法。

加速と減速の理論は目処。

空間魔法がある程度完成してから公開開始予定。

認識阻害。

付近の人物に対する精神干渉魔法として実証実験成功。

動作不安定。要改善。

抵抗力の高い人がいる。ちうたん同様の現象を確認済み。

どこまで改善できるか未知数。

ファンタズマゴリア
幻想空間。

精神の同調による会話は既存。念話の元となった古い技術。

これを元に拡張、視覚も同調し、姿を見せる事までは成功。

現実と同様の感覚での行動には様々な改善や対策が必要。

時間加速は時間魔法の領域？

現実同様の行動は空間魔法の領域？

完成には様々な壁が存在。

魔法薬。

原価と材料の入手性を無視すれば、実用化可能な水準。

無視出来ない問題。

公開しても国に価値は低い。

むしろ犯罪者組織に価値が高い。

非公開推奨。

呪紋回路。

ネギまの技術を開発。

実証実験には成功。

魂を削り魔力に転換する技術。

人道的でない。

これも犯罪者組織向き。

非公開推奨。

各種物理的な技術。

魔法の使えない国や人が、アルハザードに対抗するための手段。

各地の研究を統合、発展。

各種の薬や手術方法。不老化や若返りは無理でも、多くの病気の治

療は可能。

合金は研究の甲斐がある。魔力が通りやすく強靱な金属。

優秀なものはミスリルやアダマンタイトと仮命名。

もつと良いものを作れないか研究中。

併せて、お姉様のデバイス改良計画も策定中。

物理的な攻撃手段も充実。

ある程度魔法を併用するなら、高性能の高圧縮窒素爆弾も可能。

お姉様の記憶。高威力や環境的に、エヴァンゲリオンのN2爆弾が似ている。

地形を変えるほどの威力を持つ物理兵器は、他の世界ではまだ作られていない。

お姉様自身の戦闘力については、高水準。

魔法を使う事も楽しいのか、嬉々として練習。

私達やデバイスを wield なくても、ある程度の魔法が行使可能。

一般的なデバイスを持った平均的な兵士相手なら楽に勝てる。

イメージは、遠距離攻撃を持つ肉体強化アルフ。デバイス無しで十分な戦闘力。

全力での行動は、お姉様の認識力が付いて行かない。要鍛錬。

汎用型インテリジェントデバイスを準備。

一般的なデバイス。通常はこれを使用。

特大の魔力量とそこそこ優秀と言える技術。

一流の魔導師相手に十分戦える。

お姉様の戦術は、基本的に飽和攻撃による圧殺。5秒の隙があれば

フアランクスシフトで押し切れる。

戦術の向上は今後に期待。

特定魔法特化型のデバイスも準備。

特化魔法は高出力・高効率・高精度・高速での行使が可能。

直線型高速魔力弾、飛行、転移、障壁。

飛行と転移は日常的に使用するが、基本的に戦闘用を想定。

お姉様は4機同時に扱う事が出来る。

普通の小隊程度は軽く圧殺。

イメージは、常に全力防御状態のヴィータ並の防御力で、デバイスジェノサイドシフトの威力のフォトンランサーを乱射しながら、気球の上で戦闘する超鈴音とネギ・スプリングフィールド並に瞬間移動しつつ

高速で飛び回るうっかりフェイト・テスタロッサ。
ムリゲー上等。でも搦め手に弱い。

必要に応じて、私達も魔導師やデバイスの役目を果たす。
超並列魔法行使。

状況次第では軍を相手に圧倒可能。

お姉様の現状。

魔法の研究を楽しんでいる。

原作は、どうでもよくなっている？

少なくとも気にしている様子は無い。

本当にそうなるか分からない未来より、今。

不確定情報は必要以上には気にしない。

先日、実験用にリンカーコアを埋め込んだインテリジェントデバイスを4機作成。

宝石型。一般的なデバイスの待機形態と類似。

変形機能は持たない。各種魔法の発動と制御に特化。

安定性の紅、高出力の青、バランス型の黄、調整の容易さ優先の黒。

高出力時に不安定になる魔法の実験用に、青が活躍中。

空間関係は黒で仮作成、紅で調整後、黄、青と順に稼働テストの予定。

空間作成の魔法を調整中。安定しない。紅の安定性を以てしても、法則が乱れる。

アルハザードの現状。

薄氷はますます薄く。

情報漏洩の頻度が上がっている。

夜天や宵天からの情報が物語っている。

表立った反乱は全て潰されている。

反乱の種も、見付かった時点で潰されているだろう。

重要なポストの人物が消えたという話も出始めた。

亡命したか、消されたか。

いずれにせよ、警戒されれば動き辛くなる。

上層部から見たお姉様は、書の主の支配下にある魔導具。

警戒はされにくい。

主様は研究者。

アルハザード滅亡後は考えていても、意図的に滅亡させる気は無い。

研究できる環境を与えてくれる国が無くなるのはちよつと困る、程度に思っている。

環境さえ与えれば結果を出し、裏切りにくい駒。

研究できる環境をくれて、あまり煩い事を言わない出資者。

とりあえず利害は矛盾しない。

主様にとって、最大の反乱がお姉様。

お姉様は、アルハザードに大きく貢献している。

反乱に見える材料が無い。

アルハザードに、敵は多い。

お姉様の知識に存在する名前。

ベルカ。

魔導技術を確立した世界。

かつてはアルハザードも傘下にいた最大勢力。

戦乱を繰り返して、今は弱小勢力に成り下がっている。

周囲の世界をいくつか取り込み、勢力を回復しつつある。魔導の祖の実力は侮れない。

クラナガンも、技術力という点では伸びている。

他にも多くの世界や国がアルハザードに抵抗。

現在、アルハザードは次元世界の半分を軍事力で支配。

逆に言えば、半分が敵。

支配地域にも抵抗組織は多い。

早ければ20年。

他の世界が手を組めば、アルハザードに対抗できる勢力が誕生。

早ければ10年。

他の勢力の勢いに、アルハザードの上層部が慌て始める。

アルハザード崩壊の予兆。

盛者必衰。

今の環境だから可能な事。有利な事。

魔法の研究。

たまの軍役以外は研究者として理想的待遇。

たまの軍役も、私達の増員に貢献。

別荘は完成させたい。

お姉様と私達が自由に会える環境。

お姉様や宵天の知る文化を自由に使える環境。

……………早く、欲しい。

アルハザード編 8話 隠れ家の完成、崩壊の足音

お姉様との生活も、20年目に突入。

アルハザードの勢力は健在。

だけど、権威に陰りが見える。

テロの頻発。

技術者や上級士官の国外流出。

益々酷くなる締め付け。

お姉様や主様の予想の範疇。

対抗勢力も増加、強化。

筆頭は、ベルカ。

アルハザードからは遠い。

対策は後手に回っている。

近くの非支配地域や、支配地域にも抵抗組織が多数。

上層部は対応に追われている。

お姉様の環境は、若干変化。

お姉様の研究室は、研究内容の増加に伴い500人を超える研究者を抱える規模に。

研究者同士の仲は良好。

他の研究所や実務部隊との共同研究も活発。

お姉様と主様の2人で、今のアルハザードの研究を牽引する状態。

多くの協力者。アルハザードの研究者の内、半分は2人を支持。

2人は、今でも好きなことをやっているだけだと思っている。

研究所の管理も人任せ。

貴族との衝突は度々発生。お姉様と主様が協力して叩き潰している。

私達から見た場合、問題は発生していない。

コンピュータシステムを公開。

資料庫には無くてはならない存在に。

ついでにネットワーク化。

請求の多い研究所や調査機関、貴族の執務室等に端末を配置。技術や歴史に関する資料は比較的自由に検索可能に。

普及に伴い、お姉様の業務負荷が軽減。

資料庫の人員は、入れ替えはあっても増員は無い。

ぐるーぷうえあ的なものも用意。

お姉様の研究所等で、内部資料や作業の管理に使用。

特に資料管理については様々な研究所で試験導入や本格導入。

内部資料を対象とする検索技術は高評価。

電子精霊は非公開。

各地の研究所に潜り込み、お姉様のために情報収集中。

資料管理で売り込んだ甲斐があった。

私達は5000人に到達。

私達の増員は一旦打ち止め。

必要と判断しない限り、増員は認めない方向に。

余力はある。大きな問題は無い。

プロテクション 保護部門による護衛の体制は若干変化。

今はチャチャマルが表に出て指揮を執っている。

防衛プログラムの矜持。妥当な理由。

でも、普段は筆頭侍女。納得がいかない。

チャチャゼロは伏撃及び遊撃担当。適切。

別荘はネギまの物とは異なる仕様だが、ほぼ完成。

空間を新しい世界と見做せる水準。

空間作成時の魔力量を確保できれば、広大な世界をも生成可能。

お姉様がその気なら、創造主にもなれる。

時間の調整自体は問題ない。

時間隔離障壁が鍵で、障害。

加減速幅を大きくすると、障壁を超える際の魔力負荷が膨大に。

時間隔離障壁を超えた通信や魔力転送も困難。

夜天や宵天からの情報を受け取る必要のあるお姉様は入らない方が良い。

記憶転送や魔力転送の必要がある私達や眷属も同じく。

お姉様にとって、実質的に自立型の使い魔専用。

時間隔離障壁自体は、難易度はそれほどでもない。

これと空間魔法を発展させれば、原作の封時結界になると予想。

普段は時間を加減速しない別荘を利用。

ネギまの類似魔導具に肖り、名称はエヴァンジェリオン・リゾート。

語呂が悪いため「Es」は省略。日本語的には問題ない。

通常、私達はこれを指して別荘と呼んでいる。

時間隔離障壁が無いので通信や転移も簡単。

但し、お姉様と繋がっているが虚数空間内なので、座標の特定はお姉様や私達しかできない。

とても広い空間。

具体的には、惑星4つを含む星系1つ。

星の材料については、お姉様には秘密で確保を実行。

お姉様が「お偉方の命令を忠実に」実行した結果を私達が利用。

何も問題は無い。

別荘を作る際に、こんなこともあろうかと思つて材料を確保しておきました、と提出。

呆れられた。何故。

お姉様の記憶から、地球に近い環境を再現。

動植物は、現時点で食用に出来るもの、環境に優しいものを中心に選定。

四季が発生するだろう土地、具体的には熱海に主要拠点を準備。

屋敷以外に、研究所を超える各種設備を併設。

デバイスだろうが魔導炉だろうが製造や修理が可能。

魔導炉も用意。お姉様や私達が魔力を供給しなくても維持が可能。

お姉様の記憶から、沖縄、軽井沢、札幌、パリ、ジャカルタ、ケアンズにも生活可能拠点を準備。

お風呂が気持ちいい。

海も気持ちいい。

夜風も気持ちいい。星が見えない点は改善を検討。

各生活拠点近辺を含む十数か所に、食糧生産拠点も準備。
最終番号の部下が100人程、半定住状態で管理している。

その部下として、従者化した者を2000人程、自立型の使い魔化した者を100人程配置。

従者や使い魔も、お姉様には秘密で確保。お偉方の命令には反していない。

主要な役目は設備維持。ついでに各種農産物、畜産物、海産物の確保と、これらの加工品の製造。

宵天の情報に遺伝子や栽培手順、生態といった情報も含まれていたのは称賛。

食事がおいしい。

冷蔵庫、冷凍庫、釜戸、その他各種台所用品。

お姉様の知識や宵天の情報を元に、色々と再現。

品種改良にも挑戦予定。時間が必要。じっくりと取り組む。

食材の長期保存は時間超減速の別荘。

転移で出し入れ。少し不便だけどとても質の良い保存庫。

安全性を考えると、眷属も欲しい。

従者も不老で再生能力は高めだが、自力で魔法を使えない。海に出すのは少し不安。

使い魔は魔法を使えるが、不老でない。年齢操作で対処する必要があるが、年齢操作も完全ではない。いつか限界が来る。

リンカーコアと魂を同時に剥奪する眷属化は、お姉様とチャチャゼ口にしただけできない。

きつと、いい顔をしない。

私達には、魔法と連携するコンピュータシステムがある。

これを応用。魔法が使えない人も、用意された魔法技術は利用可能に。

設備の機能として組み込まれた魔法も多数。

食材の出し入れ。拠点間の通信と転移。設備や備品の修理や生産。

浄水。調理を含む加工用熱源。空気や水の温度管理。洗濯用浄化。資材などの再生。医療。遭難者の搜索。

農作業や各種救助用にも、各種用意。
頑張った。

進展の見られない研究もある。

未来や過去の参照は、不安定。

何度も試すと、違う未来や違う過去が見える。

今の情報ではあり得ない未来や過去が見えることも。

可能世界の可能性？

並行世界の可能性？

判断材料不足。

改変は厳禁と判断。

危険性が高すぎる。

気。咸卦法。

未だ発見されず。

実態が不明。計測手段が確立出来ない。存在しない可能性。

夜天や宵天からもそれらしい情報は無い。

闇の魔法。

概念が意味不明。

攻撃魔法を取り込むのは狂気の沙汰。

人も魔法も、そこまで常軌を逸していない。

実質的に、自爆魔法。

混乱させるための嘘技術。

各種精霊魔法。

例えば魔法の射手。

精霊がいない。

認識できていない？

現時点での再現手段。

周囲に人工精霊を多数配置？

自動人形が性能比で優れる。

上層部からの要求は、悪化する一方。

反乱軍の、必要以上の殲滅。

無茶な要求を満たすため、お姉様も八つ当たり気味に。

オーバークイル。命令に違反はしていない。むしろ完璧に遂行。

お姉様に対する嫌がらせ？

結果的に、私達には大きな利益。

最高貴族院議長の暴走。

恒常的な空間を自動人形内に生成。

将来のデバイスの内部空間に相当すると思われるも、現時点ではデ

バイス1機で制御できる水準に無い。失敗は確実。

成功させる。生成した空間での実験なら失敗しても被害は出ない

だろうと暴言。

不安定な生成空間内で、更に不安定な空間生成は狂気。

お姉様は、実験の主導権を最高貴族院議長お抱えの研究者に丸投

げ。

設備提供はお姉様。拒否しきれなかった。

要求は生成空間、魔導炉、高出力デバイス。

実験中止の強制介入条件と、介入時点及び非介入時の被害予想を最

高貴族院に提出。

併せて、予想される損失の補填契約を最高貴族院監視下で締結。

必要設備は貸出扱いで、実験を敢行。

結果、次元断層発生寸前。

抑え込みの為に、魔導炉数基が過負荷により犠牲に。

お姉様の実験用デバイスも喪失。

実験用デバイスからの切り離しに成功した魔導炉があった分、予想

より被害は軽減。

監査は最高貴族院議長本人や最高貴族院からの派遣を含む大人数。

そもそも実験失敗までは最高貴族院議長お抱えの研究者達だけで

行った。

事前点検や準備内容も要求条件を満たしていることは本人達を含

めて確認済み。

お姉様に不正や不備は認められず。

結果及び被害予想は概ね適切。

アルハザード崩壊のフラグを回避？

当面のアルハザード存続は確実。補填はきちんと請求。

強行を指示した最高貴族院議長は顔面蒼白。

議長位も喪失。

最高貴族院議長の処分資産から、お姉様に損失補填。殺してでも奪い取る。

いい気味。

お姉様に譲位の話。

お姉様は魔導具であることを盾に固辞。

譲位が裏で煽っていた連中の意図？

お姉様を指す、お姉様と主様を指す、現在の二つ名。

資料庫の主。お姉様の役目。

研究者の頭脳。お姉様と主様が、実質的に研究者の頂点。実力も権力もあるのに支配者面しないせいで余計に慕われる始末。

治安部隊の盟友。非殺傷設定等での協力によると思われる。盟友と呼べるほど親しくないが、治安部隊側が積極的に広めている。

医療部隊の天使。これは戦場での治療行為の為か。やはり幼女の一言が加わることがある。余計なお世話。

殲滅戦の最終兵器。お姉様と主様の二人だけで出撃、惑星系を一つ丸ごと消失させた実績がある。骨の欠片も残すなという命令を忠実に実行。問題ない。

貴族最後の良心。いつの間にか、お姉様まで貴族扱い。不思議。

影の支配者。お姉様と主様に頭が上がらない貴族が、割といる。元はと言えば、お姉様に不当な圧力をかけてきたせい。私達は悪くない。

政治的権力以外の勢力図を作成した場合の、お姉様の実態。

最高貴族院の貴族達ですら陰で使う呼び名。

影響力を端的に示している。

陰から陽へ？

議長はお姉様の影に怯えて暴走？

主様も、最近様子がおかしい。

きつかけは、恐らく先日別荘に来たとき。

別荘自体の構想は既に知っていた。

体感して驚いた？

ある意味アルハザードの頂点に立ったお姉様。

お姉様を恐れている？

どちらも、違和感。

お姉様との会話が原因？

会話を解析、原因を調査。

お姉様の疑惑発言。

「こんな静かな世界で暮らすのも悪くないだろう？」

自然でない者達が、自然に生きている。

戦争と搾取ばかりのアルハザードとは対極の生活。

体感しての衝撃は大きいはず。

お姉様の疑惑発言。

「アルハザードの終わりはそう遠くないだろう。」

私達はその時、どれくらいの間を裏切り、失うのだろうか」

アルハザード崩壊を推奨する気はないが、食い止める気もないお姉

様と主様。

気の合う研究者や軍の仲間達を見捨てることに繋がる。

複雑な思い。

主様も、思うことはあつた模様。

お姉様の疑惑発言。

「私は、既にアルハザードを裏切っている。」

この様なものを作っている事がばれた時点で死刑は確実だ」

影の支配者とも呼ばれているのに、本人は属している実感すら無

い。

主様も心情的には似た状態。

お姉様と主様の立ち位置。

どちらも、不安定。

お姉様の疑惑発言。

「7000人を擁する宗教国家で教祖にでもなった気分だ」

宗教の教祖。

私達や従者達から見たお姉様。

聖戦と叫びながら自爆を行う信者達。

お姉様が右と言えば、右に地獄が有ろうと喜んで従う私達や従者達。

……大きな差を認めず。

アルハザードも、宗教の危険性は認識。

魂を扱う主様。

作り出された者達からの視点。

宗教に近いとまでは思っていないなかった模様。

私達にとつても意外。でも納得。

とりあえず、お姉様まんせー、とでも叫ぶべきでしょうか？

アルハザード編9話 崩壊

お姉様の最高貴族院議長就任未遂から1年。新たに議長になった貴族も、暴走気味。

ついでに、最高貴族院自体も暴走気味に。

自分たちが抱える研究者では、お姉様の技術を扱い切れないのが不満なのか。

色々と研究や実験を繰り返している様子。

特に執着しているのが、空間魔法と時間魔法。

この二つの魔法に関する実験は、群を抜いて多い。

同じくらい、資料の要求や身に覚えのない糾弾も多い。

「必要な資料は全て公開しているのだが、何を疑っているのやら」

お姉様は、理解できないとばかりに嘆いている。

事実、空間魔法と時間魔法に関する資料は、全て公開済み。

「実力不足を認めるのが嫌なのでしよう」

同じ資料で、主様の研究室は再現に成功している。

常時展開できる規模での空間生成は試せていないようだが。

「それにしても、上層部もテロ組織も、相当焦っているな。」

崩壊は近い、か」

チャチャマルがくれたお茶を飲みながら、二人はのんびり話している。

ここにいるのは、お姉様と主様、それにチャチャマルとチャチャシスターズのみ。

盗聴防止も完璧。

遠慮なく話ができる。

「崩壊の切っ掛けを予想してみましようか？」

「切っ掛け、か。」

予想する以前に、既に始まったようだ」

主様が「切っ掛け」と発言するのとほぼ同時。

貴族達の実験場が不自然に光った。

「自爆テロ、かしら？」

今は時間魔法の実験中だから……まずいわね」

主様が、実験内容についての資料を見ている。

実験内容は、過去への干渉。

お姉様や私達も手を付けていない領域、手法。

「暴走は必至だろう。」

既に、空間の崩壊が始まっている」

「終わりの、始まりね。」

どれくらいの人を見捨てることになるのかしら？」

「この崩壊の仕方は……恐らく、この星が虚数空間に落ちる程度で終わるだろう。」

20億と少々だな。

私達が今まで殺してきた数より、ずっと少ないとも言える」

「そうね。」

それでも、知り合いを見捨てるのは……辛いわ」

「助けるか？」

不可能ではないだろうが、アルハザードの存続に繋がるぞ」

「……やっぱり、アルハザードという国の存続は望めないのよ。」

でも、身近な、助けることもできる友人の死を見届けるのは、予想以上にね」

「私達の選んだ道だ。」

後悔は、今まで殺してきた者達への侮辱に繋がるぞ」

「分かっているわよ」

そう言いながらも、主様の顔色は優れない。

お姉様は、一見いつも通りの雰囲気を保っている。

それでも、やるせない思いでいることは、私達に伝わってくる。

そのまま、無言のまま時間が10分ほど過ぎた頃。

アルハザードの空気が変わった。

「虚数空間に落ちた、か。」

これで、アルハザードから殆どの魔法が消えた事になる」

「そうだけど……どうして普通に活動していられるの？」

魂はともかく、活動媒体としては魔導具のはずだけれど」

「ああ、知らなかったか？」

空間生成の魔法は、虚数空間内に実数空間を作る魔法だ。

それに、虚数空間は魔法に虚数ノイズが入る空間でもある。

虚数ノイズを拒否できる結界を自分の周囲に展開する事で、通常通りというわけだが」

「そう……だったの……」

主様は、衝撃の事実に啞然。

空間魔法の真実についてなのか、虚数空間の実態についてなのか。

どちらにしても、公開した事のない情報。

「ただ、虚数空間に包まれている点は動かしようがない。

自分から結界までの僅かな距離しか魔法は届かないし、正常な転移は使用不可。

脱出はランダム転移か無限転生頼みという点に変わりはない。

転移での脱出率が0ではない事と、実行するタイミングを選ぶ事が出来るだけだな」

「いえ、それでも、やりたい事が増えたわ。

現状を確認すると、アルハザード首都を含むこの星は、虚数空間に落ちた。

この星では最早魔法は使えず、魔導具や魔導炉も停止。

太陽も魔法も無い絶望的な環境で、人類は滅亡以外に道は無い。

この認識に間違いは無いわね？」

「無いな。

気合のある人間がいても、自給に耐える自然もない。

飲用水すら得られない環境では、どうにもならないだろう。

建物も魔法の補助なしでいつまで建っていられるか怪しいものだ。

それにしても、虚数空間は思ったより明るいな。

空の色は不気味としか言い様がないが」

「原作の虚数空間そのままじゃない。

理解不能という程ではないわ」

「そうだな」

主様は多少落ち着いてきたようだ。

やはり、予想外の事態と情報に動揺していただけなのだろう。

「さて、ここで動けるといふ事なら、二つ命令があるわ。完遂してもらえるかしら？」

「内容次第だ。」

「ここまで来たんだ、勿体ぶる必要はないだろう？」

「そうね。」

一つ、この地のアルハザード人全ての抹殺。

一つ、この地に残る技術の完全破壊。

返答は？」

「二つ目は了承した。」

一つ目の意図は？」

「飢えや乾きで獣に堕ちる友人を見るのは忍びないわ」

「ふむ、確かに。」

その意図なら、速やかに行うべきだな。

とは言つても、魔法の範囲が狭い以上、物理的な手段を取る必要があるか」

「拡散は資料の一部でも防ぎたいから、全てが灰になるまで焼き尽くして。」

出来る？」

「徹底するのか。善処しよう」



在庫を抱えていた各種高性能爆弾を乱発。

1日に満たない時間で死の星と化したアルハザード。

全ての建物は崩壊し、一部は地形すら変わっている。

「これで、研究所や情報がある場所は全て破壊。」

生きている人もいない事は確認済み。

これで、アルハザードの終焉は見届けたか」

お姉様は、何かをやり遂げたような、やってしまったような。

複雑な表情で、荒野と化した地上を見下ろしている。隣に浮かぶ主様も表情は似たようなものだ。

「……まだ、全ては終わっていないわ
ん？」

漏れがあつたか？」

「いえ……ここに、アルハザード人がまだ一人いるもの」

「……死ぬ気か？」

「貴女のせいよ？」

私のやってきたこと。

私がやろうとしていた事。

良い面だけを見れていたら幸せだったのだけれど」

「……私が、何か言ったせいか」

「そうとも言えるわ。」

だけど、貴女に罪は無いから安心しなさい」

「どこに安心できる要素が？」

「全ては私が選択して行動した結果よ。」

それと、これを渡しておくわ」

主様の言葉と共に、渡される記憶。

お姉様だけが発動できる、お姉様のための魔法。

意図的に残されたバグ。

チャチャゼロが主を登録しようとする、剥奪した魂の感情が逆流。

それを逆手に取る、自壊魔法。

剥奪済みの、億を超える魂。

怒り。悲しみ。絶望。

喜び。楽しみ。希望。

方向は様々。きつと、引き裂かれる。

「私だけが死ぬるのは、不公平でしょ？」

「私は既に、7000人を超える命と、億を超える魂を抱えているんだ。」

早々死ぬるものではない」

「……そうね。」

「だけど、それは私が命じた結果よ。」

「少なくとも、貴女の意味で奪った命は無いわ」

「それでも、私が背負っているものだからな。」

「まあ、折れるまでくらは付き合つてやるさ」

「強情ね。たまには息抜きを覚えることも大事よ？」

「それに、貴女は本来魔導具。道具を使った責任は、主である私にある。」

「必要以上に抱える必要はないわ」

「押し付けてよいものでもないぞ」

「あら、押し付けられてなんていないわよ？」

「私が勝手に持つていくだけなもの」

「そうか。」

「……最後に、一つだけ教えてくれ。」

「私は、リーナの希望で在れたか？」

「ええ、最大級の希望よ。」

「後を託せる程に、ね」

「そうか」

「お姉様はしばらく目を閉じると、小さく微笑んだ。」

「さてと。そろそろ行動開始かしら。」

「私がいなくなつてからは、貴女は貴方自身になりなさい。」

「いいわね？エヴァンジュ……いえ、一樹」

「……分かった。では、始めるぞ」

「お姉様は自分の胸に手を当てると、薄紅色の光を二つ取り出す。」

「最後の確認だ。」

「本当に、いいんだな？」

「ええ。後はよろしくね？」



その後、リンカーコアを再剥奪されて眠るように倒れる主様を、お

姉様は悲しそうに見下ろしていた。

「何が、後はよろしくだ……」

それでも、手は動き、各種燃料を用意していく。

「何が、自分自身になれだ……」

並べた燃料に火をつけ、傍らに腰を下ろす。

待つ事しかできなくなったお姉様は、立ち上る煙をぼんやりと眺めている。

「私は、もう、何にもなれんぞ……」

お前だけに、持つて行かせるものか……」

その後、主様の遺体を入念に焼き、小さな墓を作った後。

お姉様は、別荘へと向かう。

「理想は、転移での脱出。

最終手段で無限転生になった時は、妹達も一時的に眠りにつく。だったな？」

便利な技術も、どこかに制限はある。

そもそも構造に無理のあるお姉様は、転生の際に殆どの機能を停止させる必要に迫られている。

停止するのは、お姉様、チャチャゼロ、チャチャマル、私達。

お姉様の停止に伴い、全員が停止して無限転生が発動。

周囲の魔力素を集めて、最初に起動するのがチャチャゼロ。

お姉様が眠っている間の主の選定と設定が、チャチャゼロの役目。

お姉様を起動するために必要な魔力が集まったら、チャチャマルが自動起動。

お姉様と私達を起動するのは、チャチャマルの役目。

眷属、使い魔、従者は、お姉様から離れすぎると体の維持や制御が困難になる。

転生の際にお姉様と離れた者は、停止に追い込まれる可能性が高い。

魂やリンカーコアの本体はお姉様の中。体は死ぬけど存在は消失しない。

別荘はお姉様と繋がっている。

別荘にいる限り、停止は無い。

別荘の空間座標は、お姉様、私達、チャチャゼロ、チャチャマルしか判定できない。

お姉様が起動するか、チャチャゼロが知らせるかしない限り、出ることができない。

「つまり、私や妹達がいなくても大丈夫な位に設備を揃えたのは、正解だったわけか」

無限転生の仕様から、可能性を考慮。

宵天からの娯楽情報も、熱海の大規模建築物に準備。

各種研究も環境に悪影響が出ない限り許可。

新技術や新しい食材の開発に期待。

転生によるお姉様の休眠の可能性について、通達完了。

転移及び転生実行可能。

「そうか。では、旅を始めようか」

漂流編

夢を、見ている。

様々な国の。人の。

様々な国で。人と。

きつと、夜天の見ている世界。

きつと、宵天の見ている世界。

きつと、私が見るはずの世界。

私を手取る、やつれた男。

主候補？

私が見るはずの世界？

分からない。

これは、現実？

これは、夢？

乾いた大地が広がる。

僅かな湧き水にすぎる人々。

明るい音楽が心地よい。

前向きに生きている。

眩しい世界。

与えられる力。

決められる方向性。

封印される記憶。

与えられる記録。

全ては、欲の為に。

張りつめた空気の室内。

ため息をつきながら私を見る男。

こんな様子の部屋は見たことが無い。文化が違う。

何もわからない。

主候補？

何故悲しそう？

戦乱が広がる国。

変わっていく何か。
変えられてしまう何か。
それは、駄目だ。
終わってしまおう。
何もできなくなる。
穏やかな時が流れる国。
人の手が温かい。
私を手を持つ初老の女性。
気持ちが伝わってくる。
覚悟。
何を覚悟している？
夜天の悲鳴。
変えられていく存在意義。
稚拙な改変。
秩序の崩壊。
絶望の序曲。
永遠に繰り返す破壊。
永遠に繰り返す再生。
全てを破壊する。
闇。
新しい名。
多くの王。
多くの戦争。
一人の少女。
一人の若者。
戦いの道。
交わらない道。
届かない思い。
手が、届かない。
量産される欠陥品。
扱えない技術。

託される望み。
暴走。
守りたいものを、自らの手で壊していく。
量産される悲しみ。
絶望が蔓延する。
悲しみと絶望に嘆く魂の叫び。
青い光。
崩壊する幾多の世界。
絶望すら消える。
私は、何をしている？
漂っている。
ただ、流されるままに。
枷。
眠りから覚めない。
意識があるのに、意識が無い。
景色が変わっている。
違う時代へ。
違う世界へ。
戦争が続く。
何度も崩壊する景色。
主の覚悟。
書の覚悟。
自身を滅する。
良心の呵責。最後の希望。
改変。
渡された、最後の鍵。
崩壊。
絶望。
永遠に再生。
永遠の生命。
永遠の眠り。

永遠の死。
世界に平和を。
僅かな平穩。
理想を掲げる者達。
交錯する欲望。
足りない力。
正義を語り、悪に手を染める。
崩壊する。
義が。
仁が。
手段が目的に。
私の力を知る者は？
情報は流れている。
ベルカ。
クラナガン。
資料に私の名があつた。
私の目覚めを望む者は？
妹達。別荘の部下達。
きつと、今でも待っている。
私の真実を知る者は？
いない。リーナは、もういない。
見覚えのある建物。
ミッドチルダ？
管理局？
歴史が進む。
記憶がおかしい。
夜天。
宵天。
私。
抜け落ちながら、入り乱れる。
主がない。

魔力が足りない。

主候補の魔力。

食い尽くしても目覚めない。

主殺し。

主。

リーナ。

懐かしい名前。

研究者仲間。

アルハザードに、友はいない。

仲間。戦友。利害関係。

リーナが、特別。言わば、母。

妹達が、特別。言わば、家族。

友が、欲しい。

全てを打ち明けられるような。

友が、欲しい。

ただ、言葉を交わしたい。

友が、欲しい……

アルハザード編&漂流編 まとめと設定資料

◆◆◆ 登場人物 ◆◆◆

エヴァンジュ

主人公。

元は男性で現代日本人。今は曙天の指令書の管制人格（アルハザード編1話）。

実体具現化時の外見は、魔法先生ネギま！のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル（アルハザード編1話）。

曙天の指令書の管理者権限を持ち、その全能力が行使できる（能力はアルハザード編3話参照）。

アルハザード時代は魔法の開発者として、特に空間魔法に関する第一人者として名を馳せる（アルハザード編7話）。

その頃の主は「リーナ・ファ・ニピン」で、魔法の共同開発者でもある（アルハザード編4話）。

アルハザード崩壊時、本人の希望で主であるリーナを殺害（アルハザード編9話）。

これ以降、ずっと夢を見ている状態となっている（漂流編）。

チャチャゼロ

曙天の指令書の防衛プログラム、その1。

外見及び性格は、魔法先生ネギま！のチャチャゼロ（耳部アンテナ以外の、関節等の人形的な部分は人間的）（アルハザード編1話）。

防衛プログラムとしての役目は、守護騎士のシグナムやヴィータに近い。最前線で敵の排除や攪乱を担当する（New!）。

曙天の指令書が起動していない状態で主を登録できる唯一の存在でもある（アルハザード編3話）。

但し、主の設定時に「剥奪して保有する魂の、剥奪時の感情」が逆流する問題が意図的に残されている（アルハザード編9話）。

チャチャマル

曙天の指令書の防衛プログラム、その2。

外見及び性格は、魔法先生ネギま!の茶々丸(耳部アンテナ以外の、関節等の人形的な部分は人間的)(アルハザード編1話)。

防衛プログラムとしての役目は、守護騎士のシヤマルやザファイラに近い。主や書に近い位置での防衛や補助を担当する(New!)。アルハザード時代は筆頭メイドとしてエヴァンジュの傍に侍りながら、防衛の陣頭指揮を執っていた(アルハザード編8話)。

チャチャシスターズ(妹達)

曙天の指令書の情報管理プログラム達。

意識の直接連携による広大な記憶容量と超並列処理を実現しており、この機能はチャチャネットワークと呼ばれる。これのイメージは、とある魔術の禁書目録のミサカネットワーク。本来は意思と魔法行使能力と魔力生成器官のみの存在(アルハザード編1話)。

漂流編の時点で、5000人存在する(アルハザード編8話)。

この物語では、語り部の役目もしている(アルハザード編1話)。複数のチャチャがある程度連携・調整しながら寄ってたかって意思を伝えているため、たまに混乱や会話したり、チャチャ同士でツッコミを入れてしまったりすることもある。コンセプトは、飼おねえさまい主に構しょうじよってほしい子猫達(New!)。飼おねえさまい主が他の人と会話しているときなどは空気を読み過ぎて黙ってしまうため、とても困っています(作者が)。

読む際は、基本的に「全部別の妹達」として流しておくオススメです。イメージは、テレビ版「とある魔術の禁書目録」の11話「ここにいるミサカは全てミサカです」の前後、大勢のミサカが順番に喋る場面です。明示部分以外で「発言が誰(何番)なのか」を気にする必要はありません(作者からのお願ひ)。

疑似的な実体具現化能力がある。基本的な外見は魔法先生ネギま！の茶々丸の妹機（学園祭で登場したもの。17巻の153時間目や156時間目に登場する、ショートヘアで小柄なタイプ）だが、他の姿を使う事も可能（アルハザード編1話）。

エヴァンジュの「転生前の記憶（本人が忘れている物も含む）」を握っている。原作知識などはここから集めた物（アルハザード編3話）。

たまにこの知識を使って会話にネタを混ぜるが、あまり反応してもらえなくて少し寂しく思っている（New!）。

特殊な地位で呼ばれるのは、以下の5人。それぞれ必要に応じた数の部下を率いて、実行部隊として動かしている（アルハザード編5話など。詳細説明はNew!）。

- ・ 秘書セクレタリー（チャチャ00001）

エヴァンジュの補佐（秘書役や研究）や、チャチャシスターズ全体の統率を担当。

- ・ 捜索サーチ（チャチャ00002）

情報の収集を担当。

- ・ 整理インデックス（チャチャ00003）

情報の管理（整理や検索）を担当。

- ・ 保護プロテクション（チャチャ00004）

防衛や索敵を担当。護衛を兼ねた侍女もこの部隊が担当。

- ・ 最終番号ラストナンバー（チャチャ05000）

人数調整やリンカーコアや魂等の在庫管理、別荘の管理を担当。人数を増やした場合は最終番号ラストナンバーの番号が変わる。

つまり、アルハザード編5話の「100の判断」の娘が、今の05000になっている。

リーナ・ファ・ニピン

曙天の指令書の初代にして現時点で唯一の主。

夜天の魔導書、宵天の歴史書、曙天の指令書の製作者でもある（ア

ルハザード編4話)。

アルハザードにおいて、クローンや魂に関する技術の権威だった(アルハザード編6話)。

良くも悪くも根っからの研究者で、研究馬鹿だが優しい女性でもある(New?)。

アルハザードが虚数空間に落ちた後、曙天の指令書(エヴァンジュ)に「自身を含む」全ての破壊を命令。アルハザードと共に滅びる事を選択した(アルハザード編9話)。

◆◆◆ 魔導具 ◆◆◆

曙天の指令書

主人公の実体。

書としての主な役目は、夜天の魔導書(後の闇の書)、宵天の歴史書の2冊から送られる情報の管理と必要な情報の取り出し。要するにグー〇ル先生(アルハザード編1話)。

膨大な魔力・記憶容量・処理能力を有している(アルハザード編1話など)。

他の2冊の書に対する指令送信機能や、破損時の復元機能も保持している(アルハザード編2話)。

アルハザード崩壊以降は、休眠状態が続いている(漂流編)。

宵天の歴史書

様々な世界の歴史や文化を蒐集するために作られた魔導具(アルハザード編2話)。

アルハザード時代は食文化や創作文学に関する情報を主に収集して、曙天の指令書へと送っていた(アルハザード編8話や2話)。

夜天の魔導書

様々な世界の魔法技術を蒐集するために作られた魔導具（アルハザード編2話）。

アルハザード時代は普通に魔法等の技術を集め、曙天の指令書へと送っていたが……（アルハザード編2話＋原作）

◆◆◆ その他 ◆◆◆

アルハザード

多くの世界（当時認識されていた世界の半分）を支配していた、軍国主義国家。また、この国家のある世界もこの名で呼ばれた（アルハザード編2話）。

高度な魔法技術を持ち、最盛期にはアルハザードに出来ない事は無いと言われていた（アルハザード編2話）。

晩年まで勢力は維持するが、内部崩壊が加速し、情報流出も度々発生するようになる（アルハザード編6話や8話）。

最終的に、魔法実験中のテロによる魔法暴走により虚数空間に落ちる。魔法が使えない地となった後、リーナ（曙天の魔導書の主）は全ての破壊を命じ、これに応じたエヴァンジュにより、全てが破壊されている（アルハザード編9話）。

ベルカ（古代ベルカ）

アルハザードからの情報流出先の一つ（漂流編）。

魔導技術の祖であり、かつてはアルハザードも含む最大勢力を誇っていたが、戦乱により分裂。この際にアルハザードも独立していた（アルハザード編7話＋New!）。

一時は小さな勢力に成り下がったが、アルハザードからの情報流出もあり、着実に実力を伸ばしていく（アルハザード編7～8話）。

ミッドチルダ

アルハザードからの情報流出先の一つ（漂流編）。

当時はミッドチルダと言う名は無く、クラナガンという研究者が集まる小さな都市国家だった（アルハザード編1話）。

アルハザードからの情報流出先でもあり、勢力はあまり伸びていないが、技術力の伸びは良かった（アルハザード編7話）。

別荘（エヴァンジュ・リゾート）

ネギまの「別荘（エヴァンジュエリンズ・リゾート）」を再現しようとした結果出来上がったもの。

時間の加速は無いが、星系規模の空間と恒星、居住可能な惑星を妹達が準備。

妹達の部下が約2100人配置されている。

地形は地球を模倣。日本の熱海に相当する場所に中央拠点があり、ここに大規模な邸宅や研究施設、一通りの食糧生産加工関連施設、娯楽施設や温泉等が揃っていて、ここの施設や食糧生産能力だけでも十分自活可能となっている。

他に、軽井沢、沖縄、札幌に相当する場所等に生活可能拠点が有り、各拠点付近には風土に合わせて農業や漁業等の設備が整えられている。

農業、漁業、畜産用の主要拠点として、パリやジャカルタにも設備がある。

オーストラリアは魔法の訓練場となっている。拠点はケアンズ。

その他、主に農林水産業用の簡易拠点が各地に存在している。

（アルハザード編8話）

無印編01話 目覚め

——曙天の指令書、防衛プログラムN02。チャチャマル、起動しました——

——曙天の主、リンカーコアが過負荷ながらも稼働継続中です——
——曙天の主からの魔力供給は順調、起動魔力の確保完了を確認しました——

——お目覚め下さい。マスター、妹達——

「……………U b i e s t h i cはどこだ……………」

ここは？

お姉様の声が聞こえる。

チャチャネットワークの稼働を確認。

付近の魔力素は中濃度、低適合性、高負荷率。

一部で適合不良を確認。私達の稼働率が低下。

お姉様は適合？

別荘、環境の維持を確認。人員及び設備の破損や喪失は軽微、農場の拡張を確認。

常用デバイス5機、機能に問題なし。いつでも別荘より転送可能。

チャチャゼロは実体具現化済み。

お姉様は本のまま。

チャチャマルも姿は見えない。

窓の外は赤い景色。夕焼け？

目の前に、一人の少女。

チャチャゼロの記録及びリンカーコアの同期を確認。書の主と認識。

長い黒髪で、不思議な雰囲気。

身長や体型から見ると、12歳くらい？

車椅子に座っている。

元気さは不足。

表情が無い？

造形としては可愛いというか、綺麗。

表情が無い分、人形のような綺麗さ。

情報不足。 サーチャー プロテクション 搜索と保護は全力で情報収集と安全確認を開始。

この場合は主とお姉様の対話が優先。

みんな静かに。

「起きた？」

少女……主が、日本語で問いかけてくる。

その声から、言葉に相応な、疑問や心配と言った感情は一切感じられない。

その横にふわふわ浮かんでいるチャチャゼロは、嫌らしい笑みを浮かべながらお姉様を見ているだけ。

「……何とか、な。」

今度の主は随分と幼いようだが……チャチャゼロ、何処まで説明済みだ？」

「ケケケ、転生者二向カッテ幼イナンテ、言ッテイイノカヨ？」

「転生者？」

そうか……つまり、前世の分、精神年齢は高いと判断して良いのか？」

「前世を思い出し始めたのは4歳頃だった。」

いきなり全部ではなく、少しずつ思い出した感じ。

曙天の書が人型になるとエヴァンジェリンに似ている事は、起動時に流れ込んできた記憶で理解してる」

「ふむ。それならば、人型の方が話しやすいだろう」

そう言うと、お姉様は人の姿……エヴァンジェリン風の姿になった。

服装は黒のローブで、吸血鬼や魔法使いっぽいイメージ。

「うん、やっぱりエヴァンジェリンそのまま」

「身体の外見年齢的にも、概ねエヴァンジェリンと同じはずだ。」

お前は……ネギま的に言えば、近衛木乃香を無表情にした感じか？」

「昨日が誕生日で、10歳になった。中学生の木乃香より少し幼い。」

木乃香を少し幼くして、ナギといった時のアスナみたいに無表情にし

た感じだと思ってる。

感情を感じられないから、アスナよりも酷いかもしれない。

あと、名前は小野アコノ。よろしく」

「思ったよりも若いな。それに、感情を感じないか……転生特典のー環か？」

「多分、そう」

「そうか。その辺は後にして、まずは自己紹介だな。

私は、前の主にエヴァンジェユと名付けられた。記憶を読まれてネギまやエヴァンジェリンも知られていたから、それを少し変えたただけだ。

どうせこの姿だ、エヴァとでも呼ぶといい。

年齢は……よくわからんな。前の主とは、現地時間で20年と少々
の付き合いだった」

「前の前は？」

「無い。前の主が私の製作者で、最初の主だったからな。

お前……アコノが二人目だ」

「ゴ主人、前ノ主ガ死ンデカラスツト寝テタカラナ」

「そう。前世は大人だった？」

「一応成人はしていた。大学生だから、世間一般の大人と言う表現に
該当するか分からんが」

「でも、前世も今世も、私より年上。

私は成人前の大学生だった」

「ふむ、そうか。では、ここがリリカルなのはだという点は知っている
か？」

それと、原作についての知識はどの程度ある？」

「それは、神っぽい何かとチャチャゼロに聞いている。

原作は、テレビの3つは見たことがある。

内容まで思い出したのは昨日だけ」

「結構思い出シタミターダゼ？」

「それなら、話はしやすいな。

私の事は何処まで？」

「アルハザードで作られた魔導具という事。

夜天の魔導書の妹という事。

管制人格……エヴァが転生者という事。

エヴァが妹達と呼ぶ、ミサカネットワークもどきがある事。

防衛プログラムがチャチャゼロもどきと茶々丸もどきだという事。

主になった私は無限再生と無限転生の対象になって、不老不死になつた事。

聞いたことと流れ込んだ記憶を纏めると、概ねこれくらいだと思
う。

二つ名や何をやっていたかとかは、本人に聞けと言われた」

「私の存在については概ね聞いている状態か。

チャチャゼロ、今の状況は？」

「じゅえるしーどトカイウ玩具ヲ、白いひよっこ悪魔ガ回収シテルゼ」
オモチャ

「無印の開始後ということだな」

「今日は神社の辺りで封印していた。

かなり初期のはず」

「マダ飛ンデモイネーシ、いたちモ喋ツテタダケミタイダゼ。

チト遠カツタカラ、詳シク調べテネーケドナ」

「ストーリーはテレビ版か。神社は……犬の話で、2個目のジュエル
シードだったか？」

テレビ版原作で高町なのはが行った封印としては2個目。

原作では第2話。犬の封印前にユーノの2個見つけた発言がある。

ユーノが単独で1個封印していて、計3個封印済みと予想。

「……だそうだ」

「今のが、妹達？」

「ああ。私の前世の記憶を私以上に駆使する存在でな。

原作のテレビ版3作と映画1本を映像音声音楽効果音まで復元さ
れた。

他にも色々と復元されているな」

「優秀」

「そうだな。確認したかったら見てみるといい。

私の記憶だから細部に間違いがある可能性はあるが、大筋は正しいはずだ」

「わかった。」

でも、私達がいる。

未来はたぶん変わる」

「胡散臭い神もどきの事だ、修正力とやらがある可能性も考慮すべきだろう。」

それに、今のところは原作準拠と思えるなら、関わるかどうかの指針の参考程度にはなるだろう。」

とりあえずの気持ちとして、関わる気はあるのか？」

「分からない。」

感情が感じられないから、やりたいこと、やりたくないことも分からない。

だから、普段は前世の記憶を参考に考えるようにしてる。

単純に自分一人が転生したと思えたなら、喜んで関わりに行っただけです。

でも、転生者が複数、少なくともここに2人いることは確定してる。

他にもいる可能性がある。

二次小説的には、オリ主様や踏み台様の出現フラグが立っている状態だと思える」

「では、なるべく避ける方向か」

「他の条件を考慮すると、はやてには関わりに行く。」

書の主、科学では原因不明の病、車椅子、年代、性別。共通点は多い。

同情と仲間意識的なもので、知り合いたいと思うはず」

「同類相憐れムツテヤツカ？」

「チャチャゼロは黙っている。」

はやてに係わるなら……原作通りなら私も夜天の魔導書に用事があるから、都合は良いな」

「用事？」

「夜天を直してやらないとな。」

私……いや、曙天の指令書に与えられた役目の一つだ」
休眠中に夜天から送られていた情報は解析中。

守護騎士システムの追加、防衛プログラムの権限昇格とバグによる暴走、複数の自滅処理の追加、闇の書の呼称が判明済み。

現時点の情報では、概ね原作同様。

相違点として、基礎構造部への強制介入キーの発行及び受領を確認。

夜天に託されたと認識。

強制介入が自滅による無限転生の発動を引き起こさないか要確認。

「妹達、優秀過ぎ」

「全くだ」

八神はやての住居を発見。

現在一人暮らし、食事の準備中。

ヘルパーの日程表が存在。基本的に毎週火曜日。

通信教育の教材を確認。義務教育の体裁は整えてある様子。

リンカーコアは不活性。体に大きな負担がかかっている模様。

お姉様が起きる前の主に近い状態と推測。

夜天の修繕による原因の除去が最善。

修繕に伴い、本来の形の主として設定される可能性。

夜天と八神はやてが望むか、相性が良ければ不老不死化。

「不老不死、私と同じ?」

曙天の主は、強制的に不老不死化。

夜天の主は、よほど相性が良くない限り選択の余地がある。

「余地があるなら、本人の意思次第だな。」

長く友であるなら嬉しいが、強制はしたくない」

「確かに。」

管理局の猫は?」

今は付近にいる様子はない。

監視用と思われる魔法の存在を確認。

広い範囲で探知の妨害も行われている。

情報収集は八神はやて本人及び邸宅が対象、これ以外に対する監視

はついで程度？

付近の人に対する意識操作と思われる魔法も確認。

認識障害に近い？

「そうか、現時点で私達の情報は洩れていないと考えて良さそうだな。管理局との敵対は、恐らく面倒事になる。」

現時点で猫は放置、必要になったらメツセンサーか案内役になつてもらおうとするか」

少し離れた場所に、魔力の残滓を確認。

行使者は不明。八神はやて宅近辺の魔力とは異なる。

何らかの魔法の練習跡と推測。

ミッドチルダ及びベルカの魔法について、情報解析が不足。

魔法情報の整理が必要。

詳細は追って確認。

「他に魔導師が存在する可能性？」

「転生者の可能性が高いが……調査を続けるしかないだろうな。」

何か問題や聞きたい事はあるか？」

「エヴァの今後の日常生活をどうするかについて。」

この家には、私の両親と兄がいる。

子や妹として扱われているけれど、感情が無いから不気味なものとも見られている。

関係は良いと言えない。

八神はやての守護騎士の様に、家族として受け入れるのは難しい」

「ふむ。私は今まで、本としてここに在ったのだろうか？」

当面はそのままが良いだろう」

「不自由なはず。構わない？」

「何らかの都合で人の姿で行動する必要がある時は……そうだな、最近知り合った県外に住む知人が訪ねてきたとでも説明しておけば、大きな問題は無いだろう。」

人として動きたいだけなら、別荘もある。

ネギまのアレに近い代物だな。

時間の加速は無いが、広さだけは保証できる。」

欲しい設備があるなら、何とかしよう」

「温泉は？」

「もうある。」

アルハザードには私達が楽しめる様な娯楽が無くてな。

妹達が張り切って作っていたぞ」

「アルハザード。プレシアが目指す場所で正しい？」

「恐らく、そうだな。」

虚数空間に落ちて滅んだ、と言う点でも大きな相違はない。

辿り着いても、何も残っていないが……」

「何かあった？」

「……秘密にするのもおかしいか。」

虚数空間に落ちた後、アルハザードの全てを破壊したのは、私だ」

「必要があった？」

「仮に辿り着いた者が居ても技術を悪用されなかったため。」

生きることが絶望的な友人達を獣に堕とさないたため。」

独善的な理由だな」

「違う。」

本当に全ての技術が集まる地なら、悪用の懸念は正しい。

生存が絶望的なら、安楽死は選択肢に含むべき」

「……そう言ってくれるか。ありがとう」

「でも、プレシアの目的は、原作の行動ではどうあっても叶わない事が判明した。」

現実問題として、アルハザードの技術でどうにかなった？」

「条件付きでなら、可能とは言える。」

過去の改変は出来ない。蘇生は条件付き。プレシアが望む水準ではないだろうがな。」

アルハザードが滅んだ直接の原因は、過去へ干渉する魔法の実験中の、テロによる魔法暴走だ。アルハザードには過去の改変に成功したという事例は無いし、そもそも正確な過去を見る事すら確実性は無かった。」

蘇生は、アリシアの魂が今でも残っていれば可能だろう。可能性は

微妙だがな。

肉体の年齢操作は可能だ。

アリシアの蘇生に成功すれば、後はプレシアの肉体年齢を事故当時に戻して、望む当時の状態にすることはできるだろう。

アリシアが事故で死亡した、管理局と敵対した、違法研究を行ったという事実は消えないから、幸せに暮らすことが出来るかわからんが」

「全ての魔法が究極の姿とかいう原作のアルハザードの評価は、間違い？」

「プロパガンダの誇張表現だな。

他の世界に出来てアルハザードに出来なかった事はほぼ無かったし、当時の最高峰ではあったが、それだけだ。

他の世界で生まれた新しい技術は取り込むか潰すかしていただけに過ぎん。

それに、20年程度しか活動していない私が、時間魔法と空間魔法の祖と呼ばれていたのだぞ？

たったその程度の時間で、新しい技術が究極の姿に辿り着くはずも無かろう。

第一、時間魔法の事故でアルハザードは自滅したんだ。そんなものが究極のほしくない」

「アルハザード滅亡の元凶？」

「実験の元になった技術を作ったのは確かに私だが、少なくとも、実験に私は関与していない。

それに、前の主が私を作った理由は、アルハザード滅亡後にも魔法の技術を残すことだ。

その時点で、国として無理が見えていた。

そこから20年も滅びなかったんだ、私も多少は貢献していたはずだが」

「貢献の内容は？」

「魔法開発と、戦争の戦力だな。

特に空間魔法は、他の世界の牽制や自国の士気高揚に役に立ってい

たようだぞ？

戦力としては……まあ、最終兵器と呼ばれた事はある」

「イメージは、アイン何とかと闇の書の組み合わせ？」

「分かりにくいイメージだな。」

えーと、StrikerSのアインヘリアルか？ 旗頭にして牽制
という点は近いかな。

戦闘力は、A×Sの闇の書とは比べ物にならないくらいには強いぞ
？」

「過剰戦力？」

「そうだな。」

……ん？ そろそろ食事か？」

主を呼ぶ女性の声が聞こえた。

きつと、主の母。

「呼ばれた。」

「行ってくる」

「ああ。」

家族との時間は、大切にするといい。

今の関係はともかく、大切な保護者だ」

「わかった」

無印編02話 過去と現在

主が食事と入浴を終え、部屋に戻ってきた。

入ってきたときは、1人。誰かがついてきた様子は無い。

本棚で静かに待っていたふりをしていたお姉様は、静かに本棚から出ると、主の目の前へ飛んで行った。

「おかえり。誰も付いてこないのか？」

「ただいま。いつもこんな感じ」

「そうか。」

さて、私の起動に耐える程の魔力を持つてるんだ。

明日にはそこそこ回復するだろうし、魔法を使えるようになると思うが、どうする？」

主がいない間にお姉様がやっていたこと。

過去の主候補達がどうなったか、という履歴の調査。これはチャチャゼロの記録を参照。

結果、過去の主候補の9割以上が、お姉様の起動前に過負荷で衰弱死と判明。

魔力素質が判明しているのは、過去の主候補の2割弱。

その全員が、今で言う魔力量ランクSS以上の模様。

前例を見る限り、主は魔力量ランクSS以上である可能性が高い。

お姉様が起動し、書の保護下に入った今では、負荷が無くなっている。

結果として、強力な魔導師の誕生を意味しているはず。

「訓練する。」

はやてと友人になれば、闇の書を何とかする必要がある。

場合によっては、ジュエルシードの対応も必要かもしれない。

他の転生者と戦いになる可能性も否定は出来ない。

どの場合でも、戦力はある方がいい」

「わかった。魔法はベルカ式にしたいが、何か問題はあるか？」

「ミッド式じゃない理由は？」

「大きな問題は、ミッド式の魔法の情報が不足している事だ。」

夜天の魔導師書が闇の書と呼ばれる状態になってからだと思うが、蒐集か情報転送に異常が出ている様でな。全く無いわけではないが、あまり選ぶ余地も無い。

ベルカの魔法も末期のものは怪しいが、それでも正常な期間があっただけはある充実ぶりだ。

真正古代ベルカ等と呼ばれるものになるはずだが、アルハザードやその他現存するのもわからん魔法を使うわけにもいかないからな。実質的にベルカ以外の選択肢が選べないんだ。

それに、カートリッジで魔力量を誤魔化すことも可能だ。

これを目当てに、アコノと私自身が使うために、ベルカ式でカートリッジシステム付きデバイスと2つ準備しようと考えているが」

「闇の書も古代ベルカのはず。関連性を疑われる懸念は？」

「むしろ、闇の書に係わるならミッド式にするより無難なはずだ。

修正後に仲間だと示せる方が良いだろうと思ったただけだが」

「それなら、問題ない」

「なら、デバイスはインテリジェントで、杖型がいいか？」

ベルカだとアームドデバイスという名で呼ばれるが」

「エヴァは、闇の書と違ってデバイスではない？」

「私は、広い意味ではユニゾンデバイスに該当する。過剰戦力になるがな。

私単独でも全力ならSSSの条件を軽く超える水準で、妹達を加えると事実上の上限崩壊だ。

アコノは恐らくSS以上だから、色々な意味で悪目立ちする事になるぞ。

それに、管理局と話をするなら、暫くは私の存在か、少なくとも力は隠せた方が良いと思っただけな」

管理局は恐らく、闇の書に過剰反応。

魔導師が八神はやてに接触する事も、ギル・グレアムは警戒するはず。

主は魔法の訓練と併せて、魔力を隠せるようにすべき。

当面は魔導師ではなく、車椅子仲間としての接触を推奨。

「意図は理解した。」

でも、そんなに簡単に作れる？」

「問題ない。」

アルハザード時代、別荘に研究所を作っておいた。

維持も問題なく行われていたようだからな」

「眠っていたのに？」

お姉様と共に眠らずに済む従者や使い魔を配置。

しばらくは配置した者達で維持できる体制を構築。

予想以上に長期化。

従者達と設備の記録を見る限り、アルハザードの暦で約2500年。

従者達には苦勞させた。

「随分と長い」

「そうだな。これほどになるとは思わなかった」

「想定外？」

転移で虚数空間を抜けられず、無限転生に頼らざるを得ない程消耗した点が一つ。

主登録をしない自然起動は、主候補を命が無くなるまで消耗させても達成できなかった点が一つ。

チャチャゼロが蒐集で補おうとしても、お姉様が起動していなければ出来なかった点が一つ。

チャチャゼロの主登録は、感情の流入で主候補を廃人にする。これは知らされていたが主による起動は絶望的だった。

「随分と容赦がない」

「ここまで徹底されては、感心するしかないな」

「つまり、私が感情を感じられなかったから、主となれた？」

「そうなる」

お姉様が目覚められる、恐らく唯一の方法。

だけど、感謝を。

チャチャゼロの試した、既存の感情封印では対処できなかった。

神であろうとそうでなかろうと、主の登録に堪え得る感情の操作を

行ってくれたのは僥倖。

「私がいる事が幸運？ 神もどきの悪意？ ここに来るための仕込み？」

「後者二つの組み合わせだろうな。」

ところで、何を望んだ？

ここまででされていて、大きく逸脱はしていないだろうか？」

「沈着冷静。若く綺麗でいたい。多くの魔法を使いたい。」

大枠では外れてない」

「沈着冷静が感情消失、か。随分と徹底した冷静さだな。」

若く……10歳で不老化？ 若過ぎだろう、常識的に考えて。

とはいえ、綺麗と言う表現を使える外見ではあるか。

多くの魔法は、正しいな。予想魔力量と妹達の知識量を考えると、正しく叶えられたと見ていい」

「明確な違反は無い分、余計に質が悪い。」

「だけど、感情を感じる事は出来ないけど、感情があつた頃の記憶がある。」

その頃を考えると、想像する事は出来る。

だから、表情は作れないけれど、感情がある場合を考えて動くことはできるはず」

「おいおい、グランプのトーキョーバベルだかじゃないんだ。」

感情があるように振舞って実は、なんて展開はやめてくれよ？」

「それは無理。言葉は変えられても、演技ができないから。」

それに、私とエヴァは、主従？」

「そうだな。アコノが主で、私が従だ」

「だけど、とてもそうは考えられない。」

私の方が年下で、主体性も牽引力もカリスマも無い。上に立つべきじゃない。

「食事中に妹達に聞いた構造を考えると、エヴァが宿主で、私は寄生虫が正しい」

「いきなり職務放棄か？」

いや、主になつてもらえただけでも充分なんだが」

「通常はエヴァが上に立つべき。」

「だけど、外見的にエヴァが私の保護者とは周囲に理解されない。だから、一番いい関係は、友達のはず。」

「どちらが中心で行動するかは、状況次第、臨機応変に」

「それは構わんが……丸投げされた気分だぞ?」

「主体性の無い私が中心になるのは難しい。」

「だけど、中心にいるエヴァの隣にいる事は出来る。」

「手助けするのは、友達として普通の行動のはず」

「完全に投げたな。私は構わんが、アコノはそれでいいのか?」

「前世の記憶を思い出す時、何かがおかしい。」

「楽しかった記憶。悲しかった記憶。何故か理解できる。」

「感情に繋がる何かがあるとも考えられる。」

「それを追えば、感情を感じるのかもしれない。」

「私は、それを追ってみる事にする。」

「エヴァの隣にいれば、きっとそれが出来る」

「私の隣にいれば、か。」

「必要なのは、魔法か? 知識か?」

「エヴァの存在。」

「友達が楽しくなければ自分も楽しくない事は、前世の記憶から明らか。」

「私が笑えなければ、エヴァも楽しめないと考えられる。」

「友達として、それは駄目。」

「離れるという解決策は取れない。」

「ならば、治すべき」

「いや……そこまで思い詰めなくてもいいぞ。」

「妹達やチャチャマルもあまり感情を見せてくれないからな。特に」

「何も思わんよ」

「妹達に感情はある。」

「私は何も感じない。ロボットと変わらない。」

「きっと、生きていない事と同じ。」

「私と比べたら、妹達の方が生きている。」

エヴァと「生きる」ためには、必要な事のはず」

「……本当に感情は無いのか？」

逆流バグに耐えられたんだから、無いのは分かってるんだが……」

「これは、私の判断。」

エヴァは私に、主になつてくれただけで充分と言った。

私はエヴァに、隣にいただけで充分だと言える。

等価交換。問題はないはず」

「そう……か。分かった。」

私に出来る事なら協力してやる。何かあつたら言ってくれ」

「わかった。それなら、チャチャゼロの滑舌は何とかなる？」

少し聞き取り辛い」

「……気にしてなかったな。」

すぐには無理だが、考えておこう」

「ありがとう。」

ところで、エヴァの転生特典は？」

「真祖の吸血鬼みたいな能力、多くの知識、多くの友人、だ。」

能力については、曙天の指令書の力が概ね該当している。

知識も、夜天や宵天が集めた情報の集積が役目だ。古い膨大な量を溜め込んでいる。

友人は、どうも妹達がそうらしい。眷属や従者の事も含むかもしれない」

「無限再生、無限転生、大きな魔力、眷属、従者、リンカーコアや魂の剥奪。」

能力は確かにそうだと言えなくもない。

知識は納得。

妹達が友人というのは、違うようにも思える」

「立场上、妹達と呼んでいるだけだ。」

同居している親しい友人と説明すれば、そう違和感も無い。血が繋がっているわけでもないからな。

少なくとも、アルハザード時代から継続して一緒にいてくれる存在だぞ」

「なるほど、納得。」

明確な違反は無いという事は、悪意はあっても騙す気は無いということっ。」

「微妙なズレで慌てる様を楽しんでいるかもしれない」

「その程度の悪意なら納得。」

「ところで、宵天って？」

宵天の歴史書。

夜天の魔導書と同じく、世界を渡りながら情報を集める事が役目。

歴史書と言いながら、文化や娯楽を主に集める享樂家。

美少女や美幼女についての情報が妙に詳しい。

幼女^{ロリコン}趣味の疑いが濃厚。

お姉様や主は要注意。」

「……要注意人物らしい」

「知らなかった？」

「ああ。」

私が起きていた頃は、食事関係を特に熱心に調べていたんだがな

……

直接会ったことは無いから、人物像も分からないしな」

「趣味が変わったか、本性を現したか。」

「どちらにしても、要注意人物だと思っておく」

「そうだな。」

「さてと、そろそろ、デバイスの姿を決めたいが」

「特に思いつかない。」

「近衛木乃香のアーティファクトは？」

「確か扇だったか。カートリッジシステムをどう組み込むかだが……
考えてみよう。」

そうになると、騎士甲冑もパクティオーカードの服を基本とすればいいの？」

「問題ない。細かいデザインは任せる」

「分かった。次は、使う魔法を決めるとしよう。」

「何か希望はあるか？」

「足が不自由だから、空を飛べると便利はず。」

能力も近衛木乃香が基本なら、治癒魔法が得意と予想できる」

「基本的な路線は空飛ぶ救急車、つてところか。」

管理局に協力する意思はあるか？」

「今のところは無い。」

あつたとしても、エヴァのロストロギア指定の可能性がある。

なるべく力を抑えて協力するのは苦勞が多いはず」

お姉様は、主を殺すとして既に第3級指定。

即封印とまでは行かないものの、警戒対象ではある。

知名度は低い。

そもそも曙天の指令書の名は知られていない。

主殺しの書と呼ばれている。

「そうなると、まずは魔力を抑える訓練からだな。」

最初はデバイスで魔力封印を行うが、緊急事態への対処が遅れる。

最終的には、無意識に制御できるレベルになるのが理想だ」

「分かった」

特訓は別荘を推奨。

外部からの探知は不可能。

隠れて訓練するには最適。

出入りの転送魔法のみ注意。

「あとは……そうだな、足のリハビリか？」

私の負荷が無くなった分、原作のはやての様に回復に向かうはず

だ」

「それは病院で。」

「ただ、説明は必要になる。どうすればいい？」

主の病院の情報を調査。

榎原内科医院。

神経内科での扱い。

院長は原作にも出る動物病院院長の叔父。

担当医はその息子。

海鳴大学病院の石田医師との連絡記録がある。

協力しながら原因不明の病気の調査をしている模様。

真面目だが話は通じると予想。

「つまり、はやてを巻き込んで回復が見込める頃には、話をすべきという事か」

「魔法は秘匿すべきじゃ？」

「原因不明の病気が、原因不明の回復をした。

一人なら偶然で済ませられるが、二人となると難しいだろう。

……製薬会社に潜り込んで、神経麻痺に効く薬でも用意するか？

臨床試験とでも言って捻じ込めば、同時に回復しても言い訳は出来るだろう」

「薬を作ると言っても、簡単にできる？」

「人権なんてなくせに技術だけはあるアルハザード時代の研究成果は馬鹿に出来ないものがある。

実際に効く薬の情報を用意する事は可能だぞ」

既存の薬剤との競合に注意。

この世界に存在する薬剤の情報が不足。

調査対象に追加。

既存の薬剤で妥当な物があれば、その情報を提供することで治療という体裁を整えることも可能。

既存の薬の組み合わせ情報が最も問題が少ないと予想。

「やっぱり、優秀。

実際の対処方法は、調査結果次第で再検討が良さそう」

「そうだな。

他に、考えておきたいことはあるか？」

「夜天の魔導書修復の、管理局対策は必要なはず。

秘密裏に行うにも、最低でも提督一人は対処する必要がある」

「夜天の状態次第だから、今はまだ何とも言えないが……

簡単に修復可能なら、猫にメッセンジャーになってもらう。

冷酷だが良心はあるだろうし、説得は不可能ではないだろう。

修復が困難なようなら……誰か、スケープゴートが必要になるか？」

「何のための身代わり？」

「闇の書を夜天の魔導書に修復したという名誉と、それに伴う面倒事を押し付けるためだな。

後は、夜天の魔導書についての情報収集……これは原作通りユーノで良いだろう。

私が表に立てば、SSSランクどころではない目立ち方をする事になる。

なるべくなら、それは避けたい」

「でも、それが可能で交渉できる技術者は……プレシア？」

「現状では、そうなる。

原作の高レベル技術者は他にスカリエツティもいるが、コイツを利用するわけにもいかない。

原作の他の技術者は闇の書の修復等という大仕事と名誉に耐えられそうにないし、今から有望な人物が見つけて交渉するのは難しいだろう。

最も、夜天の魔導書の状態次第だな」

夜天の魔導書の、現物調査を推奨。

現在は管理局の猫による監視を警戒、八神はやて宅は遠距離からの観測に留めている。

詳細な調査は至近距離への接近が必須。

サーチャーでは力不足。

調査の際は猫を警戒すべき。

「状況によつては無印にも介入する可能性がある。

でも、はやてと友達になることが先決。

これでいい？」

「それで正しい。

とりあえず、無印介入の条件を纏めておくか。

プレシアの協力を得るための介入。これは夜天の魔導書の状態次第だ。

他の転生者による状況の悪化。一番懸念すべき事態だな。

ジュエルシードによる危険性が予想以上に大きい場合。神もどき

の悪意で、介入を前提として状況が悪化している可能性も考えた方がいいだろう。

当面は、これくらいだな。

様子を見て、必要なら介入する。

それ以外は様子見。

これでいいな？」

「問題ない。大丈夫」

無印編03話 初めての魔法

お姉様が起動した翌日。

主は普通に学校へ行き、帰ってきた後もごく普通の生活を送っている。

まずは、宿題。

前世は大学生だった主にとっては簡単……と言うわけでもない。書き取りなどの単純作業は、単純なだけに時間が短縮できない。

ちよつとした調べもの、特に地域の事といったこの世界特有のものや、そもそも忘れていているものは、相応の手間をかける必要がある。

そして、終わったところに夕食や入浴。

その間、私達は周囲の搜索や、夜天及び宵天からの情報の整理。

お姉様はチャチャマルを助手に、別荘でお姉様用と主用のデバイスを作製。

作製中のお姉様に、搜索結果の報告。チャチャマルにも同時通信。

「魔法の戦闘訓練をやっている転生者がいる？」

魔力の残滓を調査していて発見。

名前は下出人しもでらいと。高校一年生。

市内だけど北の方、少し遠い。

外見は、悪人顔のクルト・ゲイデルをそのまま若くした感じ。

簡易的なものとはいえ、ストレージデバイスを装備。

魔力量はB相当、魔法と技術はへっぽこ。恐らく陸戦Dランク程度。

結界を張る能力又は意思が無い模様。

人に見つからないよう、山を少し上って林の中で練習する程度の隠蔽は行っている。

「転生者、だな。というか、その名前はいいのか？」

悪人顔な点も気になるが……」

「性格及び行動原理の調査は完了しているでしょうか？」

修行中の眩きやメモを調査済み。暫定的な結果は出ている。

原作に介入する気満々。

物語の主人公に成りたいと思っっている様子。
ハーレムを希望している。

お姉様の表現をするなら、オリ主様志望。
実力不足は理解している。

現時点で、介入を意図した行動は取っていない。

原作の登場人物に接触もしていない。

原作開始に気付いていない。

来年だと思っっている可能性が高い。

「行動原理としては要注意人物ではあるが……」

「現状ではトラブル覚悟で強制排除する程の脅威では無いと考えられます」

「むしろ、高校1年生が小学3年生を捕まえて俺の嫁だのハーレムだの言いそうな状況だ。」

「性犯罪者として警察に捕まえさせた方が平和か?」

証拠不足。

現状では困難。

「やはり、そうか。」

「だが、私達以外の転生者が実際に見付かった。他にもいる可能性は高まったとみていいだろうな。」

「こいつの警戒と、片手間でもいいから他にいないか搜索を。」

「原作通りなら、ある程度の魔力を持つ者は怪しいと見ていいはずだ。」

他に、可能であれば外見以外にも共通点や特徴が無いかの調査も頼む」

「搜索は哨戒の範疇。問題ない。」

「探知妨害が障害となりそう。」

「共通点の調査は事例不足。」

「調査は開始。事例は現在、お姉様、主、下出来人しもでらいとの3名。」

「この内、お姉様と主は特殊要因も多いため、恐らく比較調査に不適合。」

「確認済みの地球出身魔導師は候補も含めても高町なのは、八神はや

ての2名。

八神はやては闇の書の侵食を受けている。比較対象の魔導師として不適格。

ユーノ・スクライアは他世界出身。比較対象に加えてよいか不明。直に来るであろう、テスタロッサ家及びアースラのクルーも同様。管理局本部にいらっしゃるであろうギル・グレアムは他世界での生活が長い上に、調査網をそこまで伸ばせるかも不明。

ギル・グレアムの猫は人でならない。恐らく不適格。

「止むを得ないだろう。当面は情報収集を主に、適時比較をしていくしか無いだろうな。」

さてと、アコノのデバイスに入れる魔法だが……」

主、入浴終了。部屋に戻ってくる。

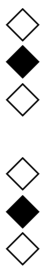
昨日と同じく1人。お姉様も部屋に戻って大丈夫。

魔法の相談なら主とするべき。

「そうだな。では、戻るとするか。」

チャチャマル、片付けを頼む」

「はい、マスター」



ほぼ同時に部屋に戻ってきたお姉様と主。

チャチャマルはまだ片付け中。部屋にいるのは二人だけ。

「待った?」

「いや、今別荘から戻ったところだ。」

デバイスの基礎部分が完成してな、どんな魔法を入れていくか相談したい」

「今の予定は?」

「魔法に慣れるための浮遊、念動、障壁、光弾は入れた。低レベルの扱いやすいものだな。」

それに、自動防御や回避用の強化障壁、飛行、転移は必須だろう。

ああ、形はお望みの、2つの扇だ。普段はストラップ程度のサイズ

だから、アクセサリとして身に付けておくことも可能だろう。

東風檜扇コチノヒオウギには傷の治療、南風末広ハエノスエヒロには病や状態の治療がやりやすいよう調整してあるし、治療系以外はさほど差が無いはずだ。2つ同時に扱えるようになれば魔法の同時展開も可能になる。

現時点で、ここまでが準備済みだ。

後は飛行や回復を中心に、各種戦闘用魔法や便利魔法を入れる事になるが……その種類を相談したい。適性の問題はあるが、好みの魔法の方が練習する気になりやすいからな」

「魔法の適性は？」

主は、恐らく広域型。

収束よりも拡散に向いている。

近接よりも遠隔に向いている。

原作の八神はやてに近い特性。

ベルカ式に多い近接魔法は適正に合わないものが多い。

回復も、個人回復よりも回復領域の展開等の方が扱いやすい。

合わなくても扱えないわけではない。

最終的には好む戦術次第。

「適正に合う、一般的なものを。」

戦術もよくわからないし、何が有効かも知らない。

効率的に力を使えるものが慣れやすいはず。

まずはそれから練習する」

「そうか。それなら、色々使えそうなものを見繕っておくか」

「色々入れて大丈夫？」

原作3作に登場した魔法全てを入れても余裕があると予想。

入れる魔法の選定ではなく、使う魔法の選定がより正しい表現。

お姉様の作るデバイスは優秀。

「そういう事だ。他に何かあるか？」

ジュエルシード戦を想定するなら、封印方法も準備しておくべき。

高町なのはの使う封印魔法の解析を推奨。

所謂リリカルマジカル。

それを参考に、古代ベルカ式に近い形の封印方法を模索。

現在知られている封印方法から大きく逸脱する事は避けるべき。
高町なのは及びユーノ・スクライアは、本日の封印作業時に捕捉完了了。

「捕捉は夕方。発動前の物を発見？」

封印処理のみで完了した模様。

姿を確認した時点で普段着に戻っていた。

恐らく数日中にも封印作業がある。その際に解析可能と推測。

古代ベルカ式で不可能なら、ミッドチルダ式の簡易的なストレージデバイスの追加を検討。

「確かに、準備が無駄とは考えにくい。原作介入までにはあった方がいい」

「そうだな。封印か……古代ベルカだとあまり良いのは無い気がするが……」

低レベルのストレージデバイスになるが、ミッド式も準備しておいた方が無難だな。

とりあえずは、訓練の様子を見ながら少しずつ入れていく。馴染まない魔法だと思ったら遠慮なく言ってほしい」

「わかった」

「さてと、そろそろ別荘に向かおうか。」

「デバイスの使用者登録と、基礎の練習を少ししてみよう」



というわけで、別荘へと移動したお姉様と主。

熱海の拠点近くに設置されている簡易演習場に来ている。

端にある休憩所にはチャチャマルや護衛担当の私達が数人待機し、飲み物などの準備を行っている。

「さてと、デバイスの使用者登録からだ。」

とは言っても、アコノ専用に組み上げたデバイスだ。

「魔力認証で起動できるから、パスワードは存在しない」

「登録の意味は？」

「紛失や手元に無い場合の召喚登録と長距離念話の接続が主目的だ。座標特定を私の中にあるアコノのリンカーコアで行ってしまうと、私の手元に来てしまうからな。」

ああ、私の手元にも呼べるようにしてあるから、体が減んで再構成する時でも、破壊されていなければ失うことは無い。もう少し調整してからになるが、それも対処するつもりだ」

「わかった。呼び名は？」

「東風檜扇コチノヒオウギと南風末広ハエノスエヒロ、両方の名前を呼んでやれ。愛称をつけても構わん。」

最も、当面は好きな方を一つだけ使って練習する事になるが」

「対でも、一つから？」

「内部同期は行っているが、扱いとしては2個のデバイスに近いと考えてほしい。」

正直に言えば複数魔法の同時使用は難しい技術だ。最低でも魔力運用とマルチタスクをそれなりにマスターしてからが無難だからな。

現時点では回復系魔法以外は同じ魔法が入れてあるし、片方でもデバイスとしては十分な性能だ。

騎士甲冑も同時起動時程強力ではないが、一つだけでも十分な性能で展開できる。」

2つとも寡黙なキャラだが、馴染む方で練習するらしい」

お姉様はそう言うと、紐で繋がれた、小さな2つの扇を主に渡した。扇は主の魔力に反応して、淡い赤色の輝きを放っている。

「わかった」

「では、始めるぞ。目を閉じて、心を澄ませろ。」

管理権限。 使用者設定機能開放」

お姉様の声と共に、三角形を基本とした魔法陣が主の足元に現れる。

「魔力による認証を実行。 東風檜扇コチノヒオウギ及び南風末広ハエノスエヒロ、 起動」

『認証確認。 東風檜扇起動』

『主の魔力を確認しました。 南風末広起動、 狩衣を着用します』

重厚な男性と優しい女性の声が扇から聞こえ、主の衣装が瞬時に

切り替わる。

変身しーんやさあびすかつとは無い。

そもそも色気は無い。

服装は、近衛木乃香のパクティオーカードの狩衣。

「……浮いてる?」

「デバイスが使用している浮遊魔法の効果だ。

アコノの魔力ならこの程度はデバイス任せでも使えるが、思ったようには動きにくいからな。

このレベルの魔法を自力で制御できるようになる事が、当面の目標の一つだ」

「わかった」

「それと、説明だ。

カートリッジシステムは、扇面の紋様として装備した。32本の骨毎に1発ずつ装填出来るが、余剰魔力放出の都合で扇を開いている時にしか使えない。

1発毎の魔力量は弾丸タイプと同程度に出来た。複数発の同時ロードが出来るし、装填数も多い分、性能はむしろ高いはずだ。

リロードは一度扇を閉じれば良い。紋様カートリッジの在庫があれば、デバイスが自動装填してくれる。

弾丸タイプは使えないが、私や妹達で生産しておく。私のベルカ式デバイスも同じカートリッジを使うし、在庫は大量に用意しておくぞ」

「そこまで必要?」

「表に出てからも、私の魔力はBかC程度に見せておこうと思ってな。

無限再生に物を言わせた無茶なカートリッジロードで魔力を確保というスタイルで、本来の魔力を偽装しつつ、いざという時の戦力を確保する。

書と言う点を隠すより、書の特性を前面に出して制限を用意した方が良いと思ってな」

「意図は納得。

「デバイスは出来てる?」

「魔法の設定はまだだが、基本的な形は出来ている。そうだな、この際見せておくか。」

黒龍、セツトアップ」

お姉様の声にデバイスが応え、大型の鉄扇を持ち、黒で統一したノースリーブにミニスカート、ロンググローブ、ニーハイソックスを纏った姿となった。

要するに、魔法先生ネギま12巻武闘大会参加時のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、肌の露出減少版。

「安定性や扱いやすさを犠牲にして、耐久力と処理速度を優先したものだ。」

中骨は16本だが、カートリッジは中骨1本毎に4発用意で、最大64発だな。

これだけあって足りないという事は無いだろう」

「随分多い」

「アコノのデバイス2個分と同じカートリッジ数だぞ？」

同時行使数はともかく、装填数は変わらん。

それに、リロードはアコノの方が2つある分やりやすいからな」

「確かに。」

デバイスのデザインは私に合わせた？」

「主従だからな。同じ系統で合わせた方が疑問は持たれにくいだろう。」

騎士甲冑は、この世界の文化の範囲だ。ネギまの服でも問題は無いと思っただけ」

「甲冑なのに、金属部分が無いのは問題ない？」

原作でも、ヴィータやシャルは布地主体。

シグナムも金属製の部分は手、足、腰のパーツ程度。

鎧に見える騎士甲冑を使っている原作登場人物はいない。

主は素肌部分が手と頭くらい。

体と騎士甲冑の距離も遠め。間に緩衝や耐温度、各種防御を色々展開。

総合的に、防御力や耐環境性はかなり高い。宇宙でも活動可能。

主は書の保護で元々活動可能。それを隠す隠れ蓑。

「過剰、でもない？」

「情報隠蔽という点では、過剰とまでは言えないと思っている。

通常の騎士甲冑としては異様な性能だが、SSクラスの騎士甲冑だ。

多少の過剰性能は問題無いだろう」

「無い……？」

「書の性能の漏洩を遅らせる程度の効果はあるだろう。

過剰と言つても、大きな魔力と既存の術式で可能な範囲だ。

私が過保護だと思わせられれば成功だ」

「デバイス製造に関して、公表予定は？」

「当面は無いし、公開するにしても古代ベルカでも可能な範囲までだな。

アルハザードと私達の技術を総動員すれば、トンデモ性能のデバイスを用意できるんだが……そのレベルは必要無い。

必要になる前に、私達で敵を殲滅してくれる」

「頼もしい。でも、過剰反応は良くない」

「分かっているさ。」

それに、必要になるまではお互い魔力は抑える。

アコノの場合は、デバイスを持つていければリンカーコアの無い一般人レベルにまで抑え込める」

「リンカーコアが無いのに、魔力はある？」

「ほんの少しだがな。アルハザードでは魂や肉体にも魔力素から魔力の変換能力があるとされていたし、リンカーコアが欠片も無い人間は無いらしい。

最低レベルのリンカーコアの能力は限りなく低いから計測時の誤差に近いレベルではあるし、そのレベルならレジスト能力も低いからな。無いものとして扱う魔法も色々あるぞ。

おかげで、今の判定法では誤差として切り捨てられているようだがな」

「つまり、地球の一般人にもリンカーコアの欠片はある？」

「魔法が使えないレベルのものでもあると認めれば、そうなる。

じゃないと、いくら突然変異的とはいっても、高町なのはや八神はやてみたいな大魔力持ちが生まれる可能性は低すぎるぞ？

原作だけで管理局と接触した大魔力持ちの地球人はギル・グレアムを含め3人、内2人は事件があつた場所の近くに偶然いただけだったわけだ。

物語補正があるにしても、他にいないわけがない」

「納得」

無印編04話 八神はやて

翌朝。

土曜日で学校は休みなので、朝から主は図書館に来た。服装はいつもと同じ、ちよつと草臥れた紺のジャージ。おしゃれに気を使う気は全く無い様子。

魔力は当然封印状態で、お姉様もお部屋で待機中。

主との連絡は、いつも通りチャチャネットワーク。隠密性は高い。今の主を見て、魔導師だと気付ける者はいないはず。

目的は、八神はやてとの接触。

ついでに、宿題の資料集めも兼ねている。

八神はやては図書館に到着済み。小説関係の棚を見ている様子。

主はさくつと宿題用資料の一つ、地域産業の資料を見付けた後、小説を物色し始めた。

「んー……」

そして、棚を見ながらゆっくりと前進する主の前方。

八神はやてが、原作と同じ様に、高い位置の本に手を伸ばしている。

「……届かない?」

すぐ近くまで近寄った主が、静かに声をかける。

「……ん?」

もうちよつと背があれば届きそうなんやけどなあ」

「良くある事。

使う?」

そう言いながら主が取り出したのは、孫の手。

「どう使うん?」

「こう。本の上に引っ掛けて……」

本を手前に倒し、手が届き易い場所に移動させる。

それを掴む様に取り、孫の手共々本を膝に乗せた。

「こんな感じ」

「おー、やるなあ。

でも、本が傷まへん?」

「これで取れるのはハードカバーだけ。

ハードだから、きつと大丈夫」

「きつとじゃあかんやろ」

ちよつと呆れた様な、でも楽しそうな笑みを八神はやては浮かべている。

そして、主から孫の手を借りると、自分が取りたかった本を取ろうと試している。

「よっ……ほっ………これ、結構難しいなあ」

「慣れれば大丈夫」

場所を移動してもらい、主は八神はやてが取ろうと頑張っていた本をあつさり引き抜く。

「はー、慣れって怖いなあ」

「首輪物語？」

「去年、完結編の映画が上映されとったみたいや。

人気があるようやし、せっかく出遅れてるなら、原作から入る思てな」

「ファンタジーもの……」

ぱらぱらとページをめくりながら、主が呟く。

「えーと……私は八神はやていいいます。変な名前やろ？」

お姉さんは何て呼べばええんやろ？」

「私は小野アコノ。音の響きは、私の方がおかし。

年は、あまり変わらないように見える」

「え、でもなんや綺麗やし、背も高そうやし……」

私はもうすぐ9歳やけど、小野さんはいくつなん？」

「アコノでいい。10歳になったところ。

4年生だから、学年は1つ違うだけ？」

「通信教育やから、学校には行ってへんのや。

でも、小学校に行っていれば3年生のはずやし、1つ違いやね」

「ほら、近い」

「でも、学校行ってるんや。ちよつと羨ましいなあ」

「バリアフリーの学校は遠い？」

「私の病気は原因がわからへんらしくてな？」

治療で病院に行く事も多いから学習時間の調整しやすいようにつてのと、通学の体の負担で悪化しないように、つて事らしいんや」

「私も原因不明。」

でも、何とかなってる」

「そうなんか。ええなあ」

「病院や学校の都合もあるけど、相談すると何とかなるかもしれない」

「そうかあ……話してみるのもええかなあ」

「欠点は、たまに検査で授業を休むから宿題が増える事。」

学校に行く分、自由時間も減るはず」

「それはちよつと嫌やね」

「あと、ここで話していると、他の人の邪魔になりそう。」

休憩室に移動する?」

「そうやね。移動しよか」



「原因不明の病気で似た症状の人って、アコノさんやったんやね」

「そうみたい。連携して調査と聞いていたけど、近所なら同じ病院で検査や治療をした方が良いはず」

休憩室に移動した二人は、ジュースを片手にのんびりと雑談。

話題は、やはり二人の病気の話に。

「その辺は大人の世界やから、色々あるんかなあ」

「きつとそう。病院の余力の問題かもしれないし、研究の補助金や名誉的な物かもしれない」

「嫌な話やなあ」

とは言っても、原因不明で足が麻痺、という点以上の事は、まだ説明できない。

その結果、どちらかと言えば現状の確認や愚痴っぽい方向に話は流れる。

「ところで、さっきの本、内容は知ってる?」

「首輪物語の事やね？」

今のファンタジーの元祖やゆーのは聞いた事あるよ。

エルフとか魔法とか、夢みたいな内容やけどなあ」

「夢……エルフとか魔法って、夢？」

「ん？ 現実的やないけど、あつたらおもしろいやろなーとは思うんよ」

「面白そう、っていうのがよく解らない。」

宿題で夢についての作文があるから、教えてもらっていい？」

「うまく説明できんけど、ええか？」

「てゆーか、どこが解らへんの？」

「面白そう、という点。」

カウンセラーから、感情が無い、って診断されてる」

「はー、感情が無い、なあ……」

えらい物静かやとは思ってたけど、そこまでとは思ってへんかったなあ」

「だから、楽しい、とか、面白い、と言うのを感じない。」

魔法って、面白い？」

ゲームとかマンガとか、魔法は戦う道具みたいな扱いが多い。

男の子がマンガの技の真似をしているけど、それとの違いも判らない」

「何て言えばええんかなあ……」

魔法はいろんな事が出来る、ってイメージはあると思うんよ。

マリエの工房とかの、錬金術も魔法みたいなもんやし。

若返りとか、瞬間移動みたいなんとか、科学で説明できへんのは全部魔法や。」

マンガとかの技も、広い意味では魔法やない？」

「物語に都合のいい、ぐ都合主義のための道具に聞こえる。」

それなら、もし魔法が使えたら、どんな事したい？」

「とりあえず、足を治すのは必須や。」

アコノさんもやろ？」

「たぶん。自分の足で動けないのは不便。」

他には……」

「空を飛んでみたいゆーのは、ちよつと思うなあ。」

あとは、回復魔法とかあったら、いろんな人を助けられそうや
「じゃあ、少し思考実験」

「思考実験？」

「現実や仮定に基づいて、原因と結果を推測していくもの？」

「へー、面白そうやね。」

要するに、IFモノの歴史小説を考える、みたいなもんやね？
「大体あつてる。」

では、魔法を使える場合という仮定での思考実験。

まずは、自分ひとりだけが、思うが儘に魔法を使える場合」

「なんや楽しそうな状況やね。」

ヒーロー志望にはたまらんやろうなあ」

「どんな魔法を使つて、どんな活躍をしたい？」

「活躍てゆーても、何かを倒すとかは、なんか違う気がするんよ。」

「やっぱ、難病にも対処できる病院的なものがええやろか？」

「金持ちの巣窟？」

魔法だと言えば、真つ先に若返りや蘇生を要求される。

誰にでも行つていい事じゃない」

「困つてる人の治療を優先できへんやろか？」

「難病に苦しむ人は多い。」

本当に困つてるか。誰から治すか。その判断にも時間や手間がかかる。

自分で判断するなら、治すために使える時間が減る。

判断するために人を雇うなら、給与を払う必要がある。

つまり、時間を買うためにも収入は大事。

困っている人からあまりお金を取らないなら、一層金持ちの財力が
必要になる」

「世知辛い話やなあ」

「魔法は、使えたらきつと便利だと思う。」

でも、現実で使うなら現実的な問題も発生する」

「うーん、一人だけやと、大っぴらに使うのは難しそうやなあ。」

こつそりと、神の奇跡みたいな感じで治療するのはどうやるか？」
「誰を治すかの判断にすごく時間がかかる。

こつそりするための手間や負担も、きつと大きい。
生活費も別途稼ぐ必要があるはず。

それを許容できる？」

「難しい問題やね。」

「隠れヒーローも楽やなさそうやなあ」

「魔法を使わない、もしくは自分の為だけに使うという方法もある」

「何かを持つてる人は、それなりの責任を持たなあかんと思うんよ。」

魔法なんて大きな力を持ったら、相応の何かをせんとな」

「それで孤立するのは、本末転倒。」

「英雄が迫害される話も結構ありがち」

「理不尽な世の中やなあ。」

「やっぱ、王道でハッピーエンドなファンタジーがええなあ」

「よくあるのは、魔法の世界とか、妖精の国とか、魔法が普通な人達が暮らす世界がある話。」

現実を捨ててそこに行くか、現実に残るか、選択を迫られる主人公的な結末とか」

「それも王道な話やなあ」

「でも、実際にそこに行く価値と捨てる現実の価値の大きさは人それぞれ。」

行く価値は、魔法が自由に使えるようになる事や、魔法を秘密にする苦勞からの解放とか。

「現実の価値は……家族や友人？」

「そうやろうな。」

特に恋人とか、ええ感じの相手が居たら捨てにくいやろなあ」

「多分、相手の性格次第。」

受け入れられる人なら、一緒に行くと言う手段が取れるかもしれない。
い。

魔法とかオカルト的な物が苦手な相手だと、魔法を隠すにも話すにも、苦勞はずつと大きい。

はやての身近な人はどう？」

「身近な人かあ……どうやる？」

「そんな話はしたことあらへんし」

「好きな映画とか、よく読む本とか、よく見るテレビ番組とか。

そんなものでも判断できるかもしれない」

「うーん、なんや難しい情報誌とか読んどるイメージしかないなあ」

「現実主義？」

「そうかもしれへんな」



そして、夜。

いつもの様に食事や入浴を終えた後、お姉様と主は別荘へと来ていた。

「はやてはどうだった？」

「原作通りと言うべきか、やっぱり悲観的な感じは無い。

魔法についても忌避感は無い。力を持つ者は責任を負うという考え方をしている。

魔法を教えたら、きっと普通に使い方を学ぼうとする。

地球に残る可能性は低い。人間関係以外の残る理由を挙げなかった。

今のはやての人間関係を考えると、残る選択肢自体が無いに近い」

「ふむ、やはりそうか。」

友人としてはどうだった？」

「友人？」

「友人になりに行ったはずだが？」

「そういえば。」

素直な性格。子狸の片鱗は見えなかった。

私の感情の無さを見ても動じなかったのは、今後を考えると喜ばしい事のはず。

仲良くなれば、きっと頼れる友人になる」

「原作的に考えれば、外見や病気での差別には嫌悪感がありそうだな。自身がされて嫌な思いをしてきた分、自分はしないと考えていそうだが」

「それでも。」

人間を見る目でなくなることもある。

扱いが全く変わらないのは珍しい」

「やはり、そうか」

ここで空気を読まず、観測結果報告。

近くの中学校にて、高町なのはとユーノ・スクライアがジュエルシールドを無事封印。

ジュエルシールドは、少し大きめで菱形の青い宝石の様に見える。

高町なのはは疲れている様子。

ここまでは概ね原作通り。

「何か様子がおかしいが……何か問題でもあったのか？」

防護服が、映画版。

袖、足、胸元、腰に金属部品がある。

レイジングハートはデバイスモードのみ確認。

これも映画版の様に思える。

石突や先端部に白色や青色の部品を確認。

テレビ版のシュートテイニングモードやシーリングモードは未使用。

映画版のカノンモードも使っていない。

使用魔法はシュートバレットとプロテクションのみ。

飛行もしていない。

シュートバレットは映画版で使用した魔法。

プロテクションはテレビ版で使用。

リリカル言っていない。

ジュエルシールドシリアルほにやらら、封印っ！ も無い。

最終的な封印処理はデバイスに取り込む際に行っている。

手法としては、魔力除去による活動停止処理？

内部構造への介入までは行っていなように見えた。

攻撃での封印は、実質的に魔力ダメージによる強制機能停止と思わ

れる。

乱暴な手法。

「つまり……テレビ版に近いストーリーと行動なのに、装備や魔法に映画版が混在？」

映画版は初戦から飛び回っていたし砲撃も撃っていたが、その装備で未だにへっぽこ戦闘……？」

いや、シユートバレットで片付くなら、必要十分という事か？」

「原作情報がどこまで有効か、分からなくなった。

介入すべき？」

「……今のところは、方針を維持だ。妹達も少し落ち着いてくれ。

ただ、ジユエルシード関連の監視は強化しよう。

発動前の物を見つけられた場合、確保して調べた方がいいかもしれないが……」

発動前の発見は比較的難しくても、不可能ではないはず。

ジユエルシードの調査目的は？」

「私達が知る、原作の様なジユエルシードなのか。

ジユエルシードを使って、何が出来るのか。

元々が、大きな魔力を持つ不完全な願望器とか、魔力の結晶体とかいう程度の説明だ。

変な乖離のあるこの世界で、妙な形に変わっていないとも限らん」

急ぐのであれば優先処理。

今のところ、乖離は決定的でない。

高町なのは、または、フェイト・テスタロッサとの接触後でも可能？

「……迂闊に動くのも危険か。

搜索の際に、少し気を付ける程度で見てくれ」

「闇の書は早い方が望ましい？」

「それはそうだが、無理はしなくていい。

今のところはまだ起動の予兆も無い。

恐らく、起動自体は原作通り6月に入ってからだろう。

友人としての付き合いが優先だ」

「わかった。」

また土曜に図書館で会うことになってるから、その路線で「

無印編05話 ストーキング

一夜明け、日曜になった。

主の家族、つまり主の両親と兄は、朝から3人で出掛けていて留守。主は、別荘に籠って魔法の練習中。

お姉様は、サーチャーを飛ばして高町なのはの様子を見ている。

「今のところは、原作との齟齬は無いように見えるが……」

見ているのは、サッカーの試合。

応援に来ている高町なのは。

膝の上に、フェレットもどきの姿もある。

隣にはアリサ、すずかと呼ばれる少女の姿もある。

外見や行動等を見ても、原作のアリサ・バニングス、月村すずかと判断して良さそう。

アリサ・バニングスは原作同様一般人。魔力もリンカーコアも反応はほぼ無い。

月村すずかもリンカーコアの反応は誤差水準。若干の魔力反応あり？

コーチである高町士郎もいる。こちらも月村すずか同様、リンカーコアの反応は誤差の範囲だが若干の魔力反応がある？

魔力量は二人とも魔法を使用できるレベルではない。

封印や隠蔽としても不自然。

リンカーコアを隠すにしても、漏れてる魔力相応に見えるようにした方が自然。

「そっちも気になる……くっ、色々面白すぎる」

原作との比較は私達が担当。

お姉様は気になる点の模索を推奨。

試合は終盤。

翠屋が2点取っている。

原作なら、このまま試合終了。

主将がジュエルシードを保有しているはず。

身に付けてはいない模様。荷物に入っている？

試合中に身に付けていたら、試合中に発動と予想。

「子供のチームだからな。試合自体は大したものではないだろう。ところで、リンカーコアと魔力量の対比で、選手の子供たちに不自然な者はいないか？」

子供たちは、概ねリンカーコアと魔力量は対応する模様。

アルハザードや夜天の資料と比較しても、極端な乖離は無い。

明確な乖離は、やはり2名。

「人間らしからぬ身体能力の可能性がある人物だからな……何かあるのは間違いないが。」

そのうち調査してみるか？」

現在は余力不足。

私達の増員を検討？

従者を調査に動員？

調査活動の隠蔽に不安要素。

ジュエルシードや夜天の件がある程度落ち着くまでは放置の気配。

「そうだな……急いで調べる程でもないか」



そして、昼。

主は別荘から出てきて昼食を食べている。

別荘内なら従者や私達と一緒に食事も可能だが、食べたという状況証拠を残す必要があるため、用意されているものをお姉様と喋りながら食べる事になっている。

サッカーチーム及び原作の人物達は、翠屋へ移動して食事中。

「つまり、今のところは乖離が無い？」

「今日のサッカーの試合に関しては、そうなる」

食事をとりながら午前中に見ていた情報を確認、併せて現在の状況を見ている。

給仕としてチャチャマルが出ようとしたが、それは却下された。お姉様の手伝いも固辞。

主が自分でできる範囲以上の事をしてしまい、家族に不信感を与えるのを避けるため。

「原作通りなら、もうすぐなのはがキャプテンの持つジュエルシードに気付くはずだが……」

「精神的に追い詰めるイベントのはず。」

傍観する?。」

「物語としては、覚悟を決めるための意味のあるものではある。」

原作より悪化しなければ、傍観の予定だ」

「そう」

原作三人娘、昼食終了。

ケーキとジユースを注文。

おいしそう。

ケーキの製法の調査を検討。

「そっちに走るのか?。」

「現状で特別問題となりそうな点はない。」

原作を考えても、ケーキはおいしそうと思える」

「そうか?。」

……まあ、アコノが楽しみに出来るなら何よりか」

調査余力不足が深刻。

インターネットの積極的な活用を検討。

主の父親が使用するために、インターネットに接続できる環境は存在。

不在時の間借が有力候補。

電子精霊も役に立つ。

各地の国や研究所等に潜り込めば、色々と調べられる事は確認済み。

出版社や放送関係、及び図書館の調査もより大規模に。

地球の情報搜索は電子精霊を中心にして、私達は魔法関係に集中することも検討。

「……程々にな」

「おやつに美味しいものを食べられそう」

付近に低レベルの魔力反応を確認。

外見はガラの悪い衛宮士郎の様な感じ。

ネギま、とあるに続き、Fateの介在もほぼ確定？

身長や体格的に、中学生と予想。

雰囲気は胡散臭い。

人を見下している感じの目が嫌らしい。

転生者の可能性が濃厚。

「来た？」

「来たようだな。」

勘違いオリ主様か……？

とりあえず、魔力やらの解析を」

魔力量は低い。

Dランク程度？

「可能な範囲での情報収集を優先だ。転生者の特徴の特定は急がないから、じっくりやってくれ。」

しかし……これはひどい」

勘違いオリ主、翠屋に到着。

真っ先に3人娘に俺の嫁宣言。

サッカーチームの男子と対立。

3人娘は嫌悪を感じている模様。

当然の反応。

「やはり、勘違いハーレムオリ主様だったか……まともな戦力にもならないだろうに、ほいほい翠屋に来る輩だ。予想はしていたが」

「この様子だと、転生特典にニコポかナデポを要求している可能性が高い？」

「有り得るが……具体的な要求は駄目みたいな事を言われなかったか？」

「言われた。」

具体的な物は、改悪か乖離が激しいと予想してる」

勘違いハーレムオリ主は3人娘に突撃を敢行。

選手達が人の壁となっている。

ロリコン呼ばわりされている。

言われた本人が何故か啞然としている。

気付いていなかった？

中学生が小学3年生に言い寄る構図。

3人娘が年齢の割に大人びていると言っても、どう見ても子供。

反論は難しい。

「……………どこまで阿呆なんだか……………」

「手の付けられない程度？」

勘違いハーレムオリ主は高町なのはに手を伸ばすも、高町士郎に阻止された。

選手達によるふるぶっこ。

高町士郎が止める事態に。

「色々と突っ込みどころが……………」

「分かりやすい結末にも思える」

高町士郎が出入り禁止宣告。

選手一同及び高町士郎と敵対。騒動フラグが立っている。

場所と状況と行動が悪い。

当然の結末。

行動から察するに、ナデポを特典に持つと予想。

「お、諦めたか？」

勘違いハーレムオリ主は落ち込んでいる模様。

アリサ・バニングスと月村すずかに迎えが到着。

高町なのはは高町士郎と共に帰宅する模様。

原作同様の行動。だけど、明らかに護衛。

「……………ん？」

サッカーチームのキャプテンは？」

「ジュエルシードを確認するはず？」

他の選手達と、撃退を喜んでいる。

マネージャーや応援の女子も同様。

このまま解散の気配。

「気付かなかった……………のか？」

いや、気付く状態にならなかった、が正しいか？」

「転生者の介入で変化した？」

「ジユエルシードは？」

「ジユエルシードは鞆に入っている模様。」

「マネージャーと連れ立って帰っていった。」

「他の選手達もそれぞれ店を出ていく。」

「さて……ストーリーも乖離が始まったと見るべきか？」

「予想された事態。」

「だけど、内容が少々予想外？」

「転生者の間抜けさだけが際立っている」

「ただ、乖離のタイミングが気になる。」

「私達が介入可能になったのは、実質的に原作開始後だろう？」

「アコノは能力的に考えて、気軽に会いに行ける状態ではなかったし、原作知識も思い出せていなかった。」

「私が目覚めたのは、原作開始後だ。」

「これも、神もどきの悪意か……？」

「ジユエルシード事件までの制限に該当する？」

「可能性はある。」

「ただ、制限解除の切っ掛けが事件開始ではない気がするな」

「現在判明している転生者は、主とお姉様を含めて4名。」

「内1名は未だに原作開始に気付いていない模様。」

「事件開始までとは言っていない。」

「事件終了までの意味と捉える事も不可能ではない。」

「嘘にならない範囲？」

「かなり怪しいものだが……悪意、だろうな」

「人数を把握させない意味も含む？」

「かもしれない。」

「さて、転生者も1人確認できて、残りは発動と封印を見守るだけか。」

「そろそろ練習に戻るか？」

「そうする」



というわけで。

主将はジュエルシードを発動。

町は大樹に覆われた。

高町なのはエリアサーチと遠距離砲撃でジュエルシードを封印。

これだけで済めば、原作通り。

「やっぱり、乖離していたな……」

レイジングハートのカノンモードを確認。

特徴的なトリガーユニットも存在。

装備は映画版であることが確定。

高町なのははやる気に溢れている。

主将が持つジュエルシードに気付いていなかった模様。

微鬱展開を回避。

この街を全力で守る宣言。

ユーノ・スクライアと共に使命感に溢れている。

「いい事なんだろうか……?」

自分を追い込まないという意味では、きつと。

全力で無茶をするフラグとも考えられる。

入局2年目の撃墜フラグは恐らく継続。

「だが、ここで学校を休むとか言い始めたのは……ああ、ユーノが止める役に回ったか」

ユーノ・スクライアがなんだか男らしい。

原作と違って抑え役に。

生活を壊したくないとか、今更な話。

探索により力を入れる羽目になった。

「ユーノの魔力の回復状況は?」

適合不良はだいぶ治まってきた模様。

負荷の高さにより、現状でも回復遅延は大きいと予想。

元々戦闘向きではない上に体調不良。全力戦闘は困難。

探索に力を入れ過ぎると、戦闘補助に使える魔力が大きく減少する

可能性も。

転生者との衝突に対処できるかは未知数。

「うーむ……馬鹿な転生者の影響を考慮すると、ある程度情報は与えた方が良い気がするが……」

現時点では、致命的でない。

致命的になる可能性も否定出来ない。

介入を切っ掛けに致命的な事態となる可能性も否定出来ない。

お姉様の思うままに。

主はきつと、お姉様の決定に異を唱えない。

「決定的な理由が無い以上、とりあえず現状維持が無難か……?」
お姉様がそれでいいなら。



そして、夜。

いつも通り、食事や入浴が終わった後の、主を交えた情報交換の時間。

「また、転生者を確認か……」

外見はナギ・スプリングフィールドを悪人顔にした印象。

高校生程度の年齢に見える。

魔力は膨大。計測値では高町なのはを大きく超える。

現状でSS相当。

所持デバイスはストレージタイプで低機能。

詳細は現在調査中。

「魔力特化型?」

公園で魔法を練習中。

制御力は低い。

高町なのはの様に力技で行使するには、デバイスが力不足。

「特化型と見て良さそうだな。

魔法関係の特典に選ぶと、低機能のストレージデバイスを貰えると考えていいのか?」

「エヴァは低機能？」

「……違うな。」

となると、融通が利かない要求でもしたか？

神もどきの悪意を大きく受ける何かを仕出かしたと見るべきか……」

とりあえず監視対象に加える。

オリ主系転生者が多い。

鬱陶しい未来を容易に予想。

「転生者の程度の悪さは予想を超えてる。

隠蔽もまともに行っていない？」

結界等はない。

夜で人氣が少ないとはいえ、通行人が全くいないわけではない。

見られる危険性は排除できていない。

「これは、本格的に介入を検討すべきか……？

まともな転生者は迂闊に動いていないから見付けられていない事を信じたいが……」

「警戒はしておく方がいい」

「そうだな」

隣の市で、別途魔力反応。

気付かれにくい術式での転移後、速やかに魔法の残滓及び魔力の隠蔽。

多重転移は行っていない。転移自体を気付かれないうちに行動している。

発見は偶然。調査区域や調査時間がずれていた場合、見逃していたと予想。

外見及び行動的に、フェイト・テスタロッサ及びアルフと推測。

防護服は装着していない。バルディッシュも手袋に装着している模様。

「来たか」

「きちんと対処している。」

「これがまともな魔導師の行動のはず」

「そうだな。」

重要人物だ、監視を継続してくれ。

住居を確保しているか、すぐにするはずだ。その辺も探ってくれ」
了解。

双方の呼称を確認。フェイト・テスタロッサ及びアルフと確定。
フェイト・テスタロッサとアルフ、魔力の残滓の多さを不審に感じている。

探索妨害と思われるスフィアを多数配置する模様。

簡易的なものだが、範囲はかなり広い。

「……原作にこんな話は無かったはずだな？」

「無かったはず」

テレビ版の初登場時は、この近くにジュエルシードがあるという会話のみ。

探索妨害はジュエルシード搜索の障害となる可能性が高い。

本人達もそれを認識。

他の魔導師との接触や、接触後に探られる事を警戒している。

「一応敵側のはずだが、何故称賛したくなる……」

「行動が、魔導師としてとても正しいから」

「そう、だな……どうして、他の転生者はこんななんだ……」

なのはも実践主義なのか焦っているのか、まともに練習してる様子は無いし……」

無印編06話 平穏な平日達と、平穏じゃない休日達

あれから6日が経過して、今は土曜日の昼過ぎ。

この間、新たなジュエルシードは発動していないし、見付けていない。

高町なのはやフェイト・テストアロツサも探しているが、どちらも空振りが続いている。

転生者の搜索は、難航中。

そもそも、魔法を使っていない魔導師は見付け難い。

少なくとも、原作でヴィータが高町なのはを見付けるのを手間取る程度には。

加えて、アルフの探索妨害もある。

もちろん、ひとりひとりを対象に詳細な調査を行えば判明するが、まさか海鳴市やその近隣の住人全員を調査して回るわけにもいかない。

お姉様がリンカーコアを搜索すれば一発。だけど、そんな事をすれば、確実に高町なのはやフェイト・テストアロツサ、恐らく管理局の猫達や他の転生者にも気付かれる。これは避けるべき。

お姉様が心配していた高町なのはは、ようやく魔法の練習をする気になった模様。

日曜の夜にユーノ・スクライアから魔力の扱いの説明を受けていた。

ある程度は力尽くで何とかなっているから、今は焦らずにじっくりと技術を磨くようにとも言われていた。

月曜からずっと、早朝に公園で缶を打ち上げている。

これは、A×sで行っていた練習、12月の出来事。最大で半年以上早い可能性。

授業には微妙に集中できていない？

マルチタスクでイメージトレーニングを行っている可能性。

映画版での練習、但しフェイト戦の後。これも前倒しされている。

火曜に、八神はやて宅でリーゼアリアと思われる人物を捕捉。

ヘルパーとして来訪。

部屋の掃除や入浴の手伝いをしていた。

ヘルパーを装って八神はやての監視等を行っている模様。

気付かれないよう低レベルだが、リーゼアリアに情報収集用の魔法を仕掛けてみた。

ギル・グレアムについての情報を取れると予想。

リーゼアリアは、フェイト・テスタロッサとアルフの存在に気付いた模様。

何かを探している様子を警戒してか、八神はやて宅の妨害魔法を強化した。

帰還するリーゼアリアの追跡に成功。

イギリスを中継していたところを見ると、ギル・グレアムの住居への訪問が建前か。

中継ポートを2か所と、時空管理局本局の位置特定に成功。

本局に侵入しての調査は距離が問題。情報転送や魔力供給に支障が出る。

現時点では詳細な調査を断念。

中継ポートのある世界に隠れ家的通信及び魔力供給施設を用意できないか、簡易調査を開始。

管理世界であれば、身分の問題さえ解決できれば従者や使い魔が大手を振って行動可能。

まずは、社会制度の確認から。

ユーノ・スクライアは、水曜にようやく探索妨害を確信した模様。気付くのが遅いと罵るべきか、リーゼアリアが余計な事をしたと貶すべきか、アルフの妨害隠蔽を称賛すべきか。

但し、ユーノ・スクライアは適合不良に伴う不調や、適合不良の改善に伴う魔法特性の変化も可能性として考えていた様子。一概に無能と言う事は出来ない。

ともあれ、これで高町なのはとフェイト・テスタロッサの両陣営が、自分以外の魔導師が存在する可能性に気付いた。

直接の出会い以前に気付く事も、原作から外れている。

そして、今日。

昼頃に、悪人顔のナギ・スプリングフィールドもどきが翠屋に現れた。

名前は東渚、あずまなぞと高校1年生と判明済み。

店にいた3人娘と高町士郎は、また胡散臭いのが現れたと警戒。

東渚はまたという言葉に反応。

自分の恰好良さを見せようとするも、胡散臭さが際立っている。

最終的に、直に僕の素敵さが分かると捨て台詞を吐いて立ち去る。

立ち入り禁止にはされていない。

同じく店にいた高町恭也と高町美由希にも、警戒対象と思われた模様。

というわけで、平穏と言えば平穏、想定外と言えば想定外な平日は過ぎ去り。

主は今、八神はやてに会うために図書館に来ている。

「今週は、宿題は大丈夫なんか？」

「大丈夫。作文は無い」

「おー、それなら安心やな」

気になる本とジュースを手に、休憩室に来た主と八神はやて。

持っているのは、八神はやては首輪物語の2巻目、主は父親失格。

「先週の続き？」

「そうや。優秀でいい人から死んでく、何か切ない話やな。

アコノさんは、太細治の代表作か？」

「そう。」

私はたぶん娘失格。

この本の父親がどう失格なのか、読んでみようと思った」

「そうか？」

家族の事を心配しとる人が、家族失格とは思えへんよ？」

「少なくとも、世間からは負担と心配ばかりかけている様に見えるはず。

だけど、実際はお互いに半ば放置してる。

仮面夫婦ならぬ、仮面親子？」

「うーん、それでも、家族としてやる事はやっとするんやない？」
「やる事しかやらないから、仮面と思える。」

親としては、お金関係と最低限の世話や身の回りの物の手配だけ。
子としては、半ば親を安心させるための学業と通院だけ。
基本的にお互い干渉しない。

それが暗黙のルールになってる」

「そうかあ……そんなに上辺だけなんか？」

「たぶん、私が家を出ると言えば、賛成する。
そんな関係。」

私におしゃれをする気が無いのもあるけど、普段の服もこんな感じ」

「そういえばそのジャージ、先週と同じやね。」

綺麗なんやから、着せ替え人形にしてもよさそうやのに。寂しい
関係やなあ」

「たまに言われるけど、きつと、着せ替えるのも面倒とか、そんな感じ。
せめて足が普通なら、そうなっていたのかも。」

「はやての家族は？」

「うーん……あんま言いたくないんやけどな。」

両親は、最近死んでもうてな？

今は一人暮らしなんや」

「あり得ない。」

足の事が無くても、小学生の子供が一人暮らしするのは世間的におかしい」

「ヘルパーさんは来てくれとるよ？」

資産とかお金とかは、おじさんが管理してくれとるし」

「おじさんもおかしい。」

金銭的援助で満足してる様に見える。

金が全てで心を蔑にする、今の日本の代表の様な人物に思える」

「それはひどい言い方やと思うんやけど」

「事情があるにせよ、保護責任を放棄しているようにしか聞こえない。
援助ではなく隔離しているようにも見える」

「……そんな言い方せんでもええやん……」
「ごめん。」

これも、私が嫌われる理由の一つ。
相手がどう思うか、気付けないから」

「……そやな……そういう人やつたな。」

でも、感情を抜きに考えると……そうなんやな……」

「親戚や知り合いに、頼れる人はいない？」

血の繋がりより強い絆もあるはず」

「頼れる人……おらへんな。」

この足のせいもあると思うんやけど、両親の親戚とか知り合いは、おじさんしか知らへんのや。

おじさんも、両親の事故の後で初めて会ったんよ？」

他の知り合いゆーても、ヘルパーさんに近所のお店の人、それと医者
の石田先生くらいやし……」

「本当に隔離されている？」

「……ややなあ、本当にそう思えてきたやんか。」

でも、本気で隔離はされとらへんよ？」

アコノさんと知り合えて、会うのも問題ないんやし」

「うん、そのはず。」

でも、他人を頼ることも考えた方がいい。

誰か助けてくれる人がいたとして、その人と家族になることは嫌
？」

「ちゃんと助け合える人やつたら、ばつちこいや。」

でも、足の事やらに嫌悪感のある人は、ちよつとややな。」

同情とかやなくて、お互いに人自身を見れる相手が理想や」

「でも、そんな人はなかなかいない。」

一人暮らしからの脱却は難しそう。」

大抵の人は、動かない足を見ると思うところがあるみたい」

「その点では仲間やから、よくわかるわ。」

特に子供の無邪気な悪意が怖いなあ」

「子供は遠慮も配慮も無いから。」

ひどい事をしている自覚も無いから、歯止めがきかない。

だけど、大人も裏でこそそこそと陰口を言っている。

分からないところで言うならまだしも、微妙に聞こえるところで言うのはどうかと思う」

「おるなあ。あれは、聞こえとらんと思てるんやろか？」

「耳の悪い老人でも、話している表情と視線で悪口を察する事もあるらしい。」

まして、目も耳も悪くなっていない私達は、余計気付けるのに」

「嫌がらせっぽい時もあるし、世知辛いやね」

「過ごしにくい。」

でも、足が悪くても生きていられる。

「過ごせないわけじゃないのが微妙なところ」

「過ごせへんかったら、私らはとつくに死んどるんやろなあ」

「紛争地域や飢餓に苦しむ地域なら、多分捨てられてる。」

その意味では、まだ幸せなのかもしれない」

「あんま賛成しとーないけど、否定はできへんな。」

下を見れば切りがないやん？」

「それでも、今が最底辺ではない事は知るべき。」

「小さくても、幸せを幸せだと思えない事が、一番不幸なはず」

「いい言葉やな。やっぱり、人間前向きが一番や。」

でも、アコノさん、ほんまに感情が無いんか？」

「前向きな本の考え方を覚えているだけ。」

さっきの言葉を裏返すと、幸せを幸せと思えない私は、不幸という事になる。

でも、私は辛いとも不幸とも思っていない。

自分がどんな状態だと表現していいのか、よく分からない」

「うーん、きつと主観的なもんやけど、相対的なもんでもあるし。」

まずは、改めて周りを見る事から始めよか」

「周り……とりあえず、はやてを見てみる。」

はやては、いい人。

はやてならきつと、友達を作れる。

信頼できる人も、きつと現れる」

「そうやね、前向きにいいか。」

でも、アコノさんも信頼できる友達やと思ってるんよ?」

「ありがとう」



と言うわけで、夜。

お姉様と主は、いつものようにゆつくりと状況を確認している。

「つまり、はやては守護騎士を家族として迎えられる素地はあるという事だな」

「生活状況的にも、考え方的にも、大丈夫。」

ただ、原作のやり方は、守護騎士の困惑は激しいはず。

私の例も挙げれば、もう少しソフトランディングが可能かもしれない」

「問題は、グレアムか……闇の書の完成を目指す以上守護騎士の排除には動かないだろうが、不要な手出しはしてくるか。」

最悪は猫を躱ける必要があるが、急いで行う必要は無いな」

「エヴァ、ちよつと悪い顔してる。」

悪人だと思ふ必要は無い」

「そんなに悪人顔だったか?」

善人では無いと思ってるが」

「目的を達成するために必要な事。」

それはグレアムや猫も同じ。

手段が異なるから、発生する衝突は仕方がない」

高町なのはについて、報告。

ユーノ・スクライアが、他の魔導師が存在する可能性と、他者によるジュエルシード回収の可能性を高町なのはに通達。

時空管理局の可能性も示唆。但しユーノ・スクライアが許可を取って来ているため、そうであれば何らかの連絡があっても良さそうとの事。

この話の為に、時空管理局についての説明も行っていた。次元世界やロストロギアについても同様。

「管理局について教えたのか。随分と早いな」

「原作では、アースラやクロノが来た後の話？」

原作で高町なのはが時空管理局を知るのは、フェイト・テストアロツサとの戦闘及び温泉の後。

クロノ・ハラオウンの戦闘介入の後、アースラに連れて行かれてから。

現時点では、フェイト・テストアロツサとの遭遇もしていない。

ユーノ・スクライアが、フェレットではなく人間だという事を告白。魔力不足により人間の姿は見せなかった。

これは、淫獣フラグが折れた？

「問題は、そこ？」

高町なのはが部屋で着替えている際は、ユーノ・スクライアは後ろを向いていた。

原作の温泉では、一応は男湯の方へ行くという意見は出していた。ちらちら見ていたのは、健全な男子としては仕方がない反応？

獣である事を笠に着て堂々と見たりしていない。思春期に近い男子としては微笑ましい反応。

今後温泉に行くとは仮定して、好き好んで女湯に行く様なら話は別。

人間だと説明した上で風呂に連れ込まれるなら、責任は連れ込んだ人にあるべき。

「随分熱心」

「今後、私達が原作に係わるなら、温泉やら風呂という場面になる可能性もある。

私達は女で、ユーノは男だ。

警戒すべきだとも思っただんじやないか？」

「納得した。」

来週一緒に温泉に行く約束をしてきた。

遭遇する可能性はそれなりにある」

「そうか、随分と早いな。」

来週だと、なのは達と被る可能性があるが……」

高町家や翠屋を見ている限り、原作の一行も来週に行く模様。

原作では、旅行は連休という発言がある。時期がずれている？

その後の次元震の日付を考えると、このタイミングで正しいとも取れる。

「もし温泉で出会ったとしても、それはそれでいいと思う。

それに、断る理由が無かった」

別れ際に約束していた。

主の家族には既に通知済み。問題なく許可は取れている。

費用については、八神はやてが出してくれるとの事。

宿の選定や手配は八神はやてに任せる事になっている。

出会うも出会わないも、原作の人物の選択と、神もどきの悪意次第。

「……そうか、これは出会うフラグだな」

「可能性は高い」

無印編07話 殴り合いから始まる物語？

翌日。つまり日曜。

主の家族は、それぞれ出かけている。

主は、別荘で魔法の練習中。

高町なのはは兄の高町恭也と共に、月村すずか宅へお茶会に出掛けた。

アリサ・バニングスは現地で合流。

高町恭也は月村すずかの姉である月村忍との逢瀬を楽しんでいる。

お姉様はその様子を見ているが、原作同様に進む話よりも、ノエルとファリンと呼ばれている、二人のメイドが気になる模様。

「どう見ても、魔力反応がおかしいのだが？」

生体としてのリンカーコアは無い。

明確に魔力の反応がある。

魔力を生成する魔導具か、劣化版の人工リンカーコアに近いものを内蔵している？

お姉様も以前使用していた護衛用自動人形の動力を電力依存にして、不足する魔力を補う構造？

各種行動は電力で維持しているが、瞬間的には魔力で能力を増強する可能性あり。

「やはり、そうか……」

とらハも混じっていると見るべきか？」

原作で語られていない部分。

とらいあんぐるハートは、リリカルなのはの原典に相当。

元々混じっていると言っても過言でない。

裏設定として維持している可能性も十分。

「くそっ、原作やら立場やら転生者やらの問題が無ければ、行って解析したい……」

未知の自動人形。

実運用に耐える水準。

研究者としての血が騒ぐ？

現時点では、自重が必要。

「この世界は、気になるものが多すぎる。

ここは、少々無理してでも自由に動ける環境を目指すべきか？」

お姉様の望むままに。

最大の問題は、恐らく時空管理局。

将来的には、対策を考える必要がある。

だけど、そろそろ事態が動く。

子猫がジュエルシードに接近。

「……名残惜しいが、また今度か。

もう発動したのか」

ユーノ・スクライアが封時結界を展開。

近くにフェイト・テスタロッサの姿を確認。

バルディッシュの刃が丸く、防護服のパレオも短めで前が空いてい

ないため、やはり映画版の模様。

猫が巨大化。攻撃性は確認出来ない。

高町なのはとユーノ・スクライアが呆けている間に、フェイト・テ

スタロッサが攻撃。

2回目の攻撃を高町なのはが防御。

3回目の攻撃は猫の足元に。猫は転倒、高町なのはは飛翔魔法で着

地。

テレビ版と同様の展開。

空中戦開始。

巨大化猫は健在。絶賛放置中。

「……おや？」

随分と戦えているな」

フェイト・テスタロッサが優勢。

高町なのはは防御主体。牽制程度の攻撃しかしていない。

戦闘の意思も弱い。

それでも機動戦に見える戦いとなっている。

原作の初戦では、テレビ版も映画版もあっさりと敗北していた。

「今週の訓練の成果は出ていると見るべきか？」

フェイトもそれほど本気で倒そうとしていない様だが……」
高町なのはが本気で戦おうとしていないため、戦意を削がれている？

「何度も話しかけられる事に、戸惑ってでもいる？」

フェイト・テストロッサが、関わらないでと警告している。会話は映画版に近い。

アークセイバーからのセイバーエクспロードで、高町なのは撃墜。

追撃にフォトンランサー。

フェイト・テストロッサの、ごめんね、の発言を確認。

高町なのはとフェイト・テストロッサの戦闘の終結は映画版に相当。

双方に大きな負傷は無い。

高町なのはも、意識は維持している。

フェイト・テストロッサは高町なのはに対し、ジュエルシードは諦めてと宣告。

改めて、巨大化猫に対して攻撃、無事封印。

ジュエルシードを確保して、フェイト・テストロッサは退却。

「ふむ……これは、どう見るべきか。」

フェイトが原作同様の、話を聞かない頑固娘だという確認は出来たが」

物語の基本部分は、現時点でもテレビ版に相当。

部分的に、映画版が混入。

「だが、今回はユーノの治療を受けた上で、自力帰還だ。」

テレビ版では、気絶したまま回収されていたはずだな？」

原作では、ユーノ・スクライアが高町恭也達を呼んできたという描写があった。

ユーノ・スクライアと相談して、転んで汚れたと言い訳する事にした模様。

心配させるとは思っている様子。

気絶しているところを回収された原作程の大事にはなっていない。

「うーむ……どうも、なのはの負の面を回避する傾向にあるか？
今回といい、大樹の時といい……そういえば、士郎の入院はあった
のか？」

怪我による入院記録は確認済み。

怪我の原因についての記録は発見出来ず。

時期としては、高町なのはの小学校入学前。

翠屋は既に開店していた模様。

原作同様、寂しい思いをしていた可能性は極めて高い。

フェイト・テスタロッサを構おうとする原動力でもあると予想。

これの回避は物語を大きく崩す危険がある。

「物語開始後の負の面を回避、となるのか……？」

フェイト・テスタロッサについて、追加報告。

アルフとビルの上で合流。お互いの出来事を報告。

アルフが、高町なのはと時空管理局の繋がりを警戒。

フェイト・テスタロッサは、戦闘中に高町なのはから管理局の人が

尋ねられていた際の会話で、可能性は低いと判断した模様。

ジュエルシードを狙う者、つまり自分と競合する存在と認識してい
る。

テレビ版と同様、高町なのはがいくつか所持している可能性を考え
ている。

但し、魔力量に比べて技術が劣っていると思えるため、正体が掴め
ず困惑している。

「他の世界から来たにしては未熟、しかしこの世界にいるはずの無い
魔導師。

魔力の残滓も困惑の理由か……」

時空管理局の認識に誤りがあることも候補に挙がっている。

この地だけを見れば、かなり正しい認識。

複数の転生者。八神はやて。高町なのは。

もしかすると、高町家と月村家も。

一般人の枠の外にいる人物が不自然なほど多い。

「転生者が直接関わらなくても、乖離が激しいな。」

このままでは、原作と同じ流れにはなりにくいかもしれない。現時点では、乖離は決定的ではない。

フェイト・テストアロツサ側は警戒のみ。

戦闘後の表情を見る限り、高町なのはは困惑が強めと予想。

心理状況だけで見れば、大差は無い。

「それでも、いつ状況が変わってもおかしくない状況だ。

神もどきの悪意で、介入を前提としている可能性も高いか？

いや、それにしても自然になのはの鬱展開を回避している……

介入しなくても、良い方向に行っているなら放置すべきなのか？」

「出会うなら必然。

出会わないなら必要になるまで関わらない。

来週の温泉旅行はそのつもりで話を受けた」

主が別荘から帰還。

もうすぐ家族も帰ってくる時間。

「来週が試金石、という事か。

偶然に身を任せるのは好きではないが……神もどきの悪意を確認する意味では、悪くないか」

「少々強引でも、確認はしておいた方が無難なはず」

「そうだな。

ところで、魔法はどの程度使えるようになった？」

「まだまだ訓練不足」

戦闘では、現在の高町なのはにも分が悪いと予想。

適性と戦術の相性の問題。

高町なのはが突撃砲として動けば勝てない。

近接戦は主に不利な条件が多い。

遠距離砲撃戦であれば、何とか戦いになる。

「特に飛行が難しい。

飛びながら魔法を使うのも、もっと慣れが必要」

「今まで、走ったり跳ねたりしていない分のハンデもあるか」

体調が万全でない上に、戦闘向きの素質でない事も大きい。

一番の得手は、やはり治癒。

結果もかなり広範囲に、強力な物を用意できる。

この二つは、現状でも高水準。落ち着いて使用できる魔法と言う点も大きい。

攻撃や防御に関しては、やはり広域、遠隔、遠距離の適性。原作の八神はやてと同じ傾向。

補助については、補助すべき前衛がない点が最大の問題。

結論としては、後衛としてとても優秀になれる。

強力な攻性後衛として絶大な攻撃力を誇る事も可能。

強力な補助後衛として力強く仲間を支える事も可能。

現時点で足りないものは多い。

練習期間が短すぎる。咄嗟に使うには慣れが不足。

「飛行能力。全体を俯瞰する力。判断力。瞬間的な行使力。

安定して戦えるとは考えにくい」

「その辺は、慣れていくしかない。

私も随分手古摺ったものだ」

「どれくらい訓練した？」

「アルハザード時代は、基本的に他人が寝ている時間はずっと訓練していたな。

1日に7時間前後くらいだったか？

ある程度納得できる水準になるのに、数年かかった。

今の水準と言う意味なら、ずっとだから20年と少々か」

「道は遠い」

「簡単に頂点には至れんよ。

努力あるのみだ」

「才能は？」

「私に戦闘の才能は無い。

ただ、腐るほど時間を使える。

努力で才能を補う事でしか高みを目指せない以上、そうするしか無いだろう？」

お姉様の才能は、研究寄り。

魔法の行使や感知、解析については高水準。

戦闘に対する適正は低い。

特に空間認識に苦戦。

瞬間的な判断力も課題が多い。

今でも弱点となっている。

得意戦術は飽和攻撃による圧殺。

空間認識も瞬間的な判断も不要。

大魔力と行使能力にモノを言わせる。

要するに、想定外の事に弱い。

想定内でも、たまにうつかり。

「仕方ないだろう。」

元々戦いに縁のない、日本の一般人だ」

「高町なのはも、本来はそのはず」

「裏設定……というか、とらいあんぐるハートの設定が有効なら、裏の戦士の血筋だからな。

普段は運動神経が切れていても、認識力や判断力は高いのだろう。そもそも、良くある二次小説ほど運動神経が無いとも思えないが」

「それは確かに。」

本当に運動神経が切れていたら、空中で機動戦をやりながらデバイスで殴り合うなんて芸当は不可能なはず」

「フェイトとジュエルシードを掛けて戦う最終戦は、テレビ版でも運動神経が切れた状態で行える内容じゃない。

映画版だと、異様な戦闘力を持つと言っている。

しかも、戦闘内容が映画版の影響を強く受けているようだ。なのはが現状のまま成長した場合、映画版の水準に到達する可能性も否定はできないぞ?。」

「つまり、フェイトは現時点で映画版最終戦レベルの戦闘力を持っている可能性がある、ということ?。」

「そうなる。」

はつきり言えば、現時点では私以外の転生者が戦える相手とは思えない。アコノを含めてもな。

少なくとも、見付けているオリ主様には無理だ。無印の間に追いつ

けるレベルを超え過ぎている」

「睡眠が不要という前提を満たせたとして、私が夜も訓練した場合は？」

時の庭園突入の頃に、同水準の戦闘力に到達するのは難しい。
適性の問題。

純粹な攻撃力だけで見れば、高町なのはを超える事は可能。

「一応人間として生活しているんだ。

生活のリズムを維持する目的もある。

睡眠は大事だぞ？」

「つまり、睡眠を不要にすることも可能？」

「不可能ではないが、しない。

人としては色々捨てすぎた私からの忠告だ」

「わかった。ゆっくりいく」

無印編08話 転生者と真実

月曜の、そろそろ夕焼けが綺麗な時間。
もうすぐ主が学校から帰ってくる。

「今のは……攻撃魔法か？」

少し離れた場所で、攻撃魔法と思われる魔法の使用を確認。
住宅街の裏道に死体を発見。

術者の捕捉に失敗。

魔力の残滓は記録成功。

アルフの探索妨害が邪魔。

調査時に恩恵を受けているとはいえ、少々恨めしい。

(エヴァ、今の魔力は?)

(アコノか。)

緊急事態だ。魔法による殺人があったようだ。

悪いが、寄り道はせずに真っ直ぐ帰宅してくれ)

(わかった)

主の近辺の警戒を強化。

転移魔法の反応は無い。物理的な移動手段で逃走の様。

遠くには行っていないはず。

残滓に該当する人物は、付近に確認できず。

隠蔽に長けている?

魔法の行使時に変質させた可能性も考慮。

魔法薬を使用すれば、不可能ではない。

「まずいな……転生者の可能性は？」

死体の情報を確認中。

体型や制服から、付近の中学生である事は確実。

男性だが、女性風外見。恐らくF a t e / s t a y n i g h tの

アーサー王。

一般にセイバーと呼ばれている。

表情に恐怖は無い。

恐らく、状況を理解しないまま背後からの一撃で殺された。

「殺されたのは、転生者と見て良さそうだな。殺したのも……恐らくは。」

この情報はアコノにも」

(聞いているから、大丈夫。

ただ、あまり急げない。

魔法は使わない方が無難なはず)

(そうだな。変に慌てて犯人を刺激してもまずい。

寄り道をしないだけで、いつも通りに)

(そのつもり)

転生者同士の争い？

裏が取れない。当人は死亡済み。

それよりも主の護衛を強化。

これ以上の強化は、いくら隠蔽や阻害を行っても感付かれる。

過剰反応は敵を呼び込む可能性。

「落ち着け。今のところは私達を狙っているわけではない。

まだ余裕はある」

それを言うなら、お姉様も黒龍を片付けて本に戻るべき。

何かあったら行く気満々。

カートリッジ完全充填かつ防護服装備済みでは言い訳も無効。

それでも魔力を漏らさないお姉様の制御技術は流石。

「煩い、主の危機に駆けつけてこそだ。

それにしても、ここにきて転生者同士の争いか。

頭の痛い話だ」

まだ確定はしていない。

周囲の哨戒を強化。

一部調査に遅延が発生。

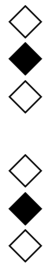
「止むを得んだろう。」

少なくとも、今回の犯人を捕捉するまでは哨戒優先だ。

情報整理は遅れても構わん。頼むぞ」

頼まれた。

哨戒優先へ、役割の再割り当て。急いで。



あれから、2日。

今は水曜日。再び夕焼けが眩しい時間。

犯人の捕捉は出来ていない。

地元の警察は魔法の事件に対して無力。

何が起こったかの判断も出来ていない。

凶器の発見も出来るわけがない。

私達は、全力で警戒態勢を維持。

高町なのは組やフェイト・テスタロッサ組も、何かあった事は感付いた様子。

探索時の警戒度が上がっている。

昨日八神家にヘルパーとして現れたリーゼアリアも不穏な空気を察したのか、八神はやて宅の妨害魔法を更に強化。

他の転生者は……無能の集まりだった。何かを期待するだけ無駄な様子。

そんな状態の中。

「……捉えた」

再び攻撃魔法の行使反応。

今回は被害者も抵抗した模様。数回の魔法行使を確認。

光学系でも捕捉。

追跡を開始。

「あれは、フェイト……かな？」

正確にはフェイト・アーウェルリンクス。ネギまの敵役。

体格は小学生高学年相当。

黒尽くめの服装。身なりからの特定は不可能。

身のこなしが明らかに常人でない。

暗殺者の訓練を受けている？

低機能だがストレージデバイスを持っている様子。

他の転生者の物より暗殺向きに調整されている気配有り。

「これも転生者だな。

被害者は？」

外見は、上条当麻っぽい？

そこそこ美形だがありがちな顔。特定して良いか疑問。とある魔術の禁書目録なら、外見としては新しい物語。ある意味私達の仲間？

制服を見る限り高校生。

デバイスは持っていない。

上条当麻なら、攻撃魔法はイマジンプレイカー幻想殺しで防いだ可能性も。

(また、殺人？)

(ああ、まただ。

今回は犯人も捕捉した。

犯人と被害者共に転生者の可能性が高い。

アコノの方には向かっていない。現状での襲撃は考えなくて大丈夫だ)

(わかった)

犯人は、山の方へ移動。

隠密性は高い。

捕捉していなければ、近くを通ったことに気付けない程度の隠行。

「山に入ったか……この近くに住む人間ではないという事か？」

洞穴に、簡単な調理用具と毛布を確認。

ここに潜んでいる？

ここに住んでいる？

宿無し？

「オリ主様ではないようだが……ダークヒーロー志望か？」

それとも、原作至上主義者か……」

(殺された二人は、オリ主様にありがちな容姿とも思える。

テンプレオリ主様に嫌悪感を持っていた人の可能性もありそう)

(アコノか。聞いていたのか?)

(妹達が声を転送してくれていた。

それにしても、転生者の危険人物率は異常だと思う)

(そうだな。神もどきの悪意で、理性が飛ばされてるんじゃないかと疑いたくなる。)

後は、ここが現実だと受け入れていないか、だな)

(実際の生活を現実と受け入れられないとなると、相当鈍い。)

アニメの世界という事や、魔法や特殊な能力が使える事も要因として考えられる)

(現実感に乏しい要素ではあるな)

犯人は、転生者の居場所を知る転生特典を持つ模様。

転生者という存在に嫌悪感あり？

今まで出会った二人の質が悪いことも原因と推測。

(つまり、コイツを泳がせると、他の転生者の居場所がわかる、という事か)

(犠牲者が増える可能性は無視?)

(いや、オリ主様や踏み台様はともかく、普通に生活している転生者なら守る)

(命の選別をする?)

(ニコポやナデポを要求する様な、人の尊厳を平気で踏みにする馬鹿を守る気は無い。)

そいつらには踏みにじられる者の気持ちを分かってもらおうと思ってる。

私は、命の重さが平等などとは思わん。

自分に害がありそうな者を切り捨てて良心が痛むような過去は送っていないのでな)

(アルハザードの経験?)

(そうだ。)

戦場の狂気しかり。

政争の腹黒さしかり。

良心や誠意が付け込まれる隙にしかならない環境に慣れるものではないな)

(きつと、私も慣れる必要がある)

(その辺は私が出ればいい。)

アコノは普通のまままでいてくれ)

(ここで、妹達から一言)

過保護者乙。

(一斉に言うな頭が割れる！　そもそも、そういうつもりでは……！)
それより、今後の方針。

犯人の特定は完了。

警戒態勢は？

(くっ、はぐらかす気満々じゃないか……)

周囲の警戒態勢は解除。殺人者の警戒と転生者の監視は継続して、元の哨戒と調査……いや、ちよつと待ってくれ。

ジュエルシードと転生者の共通点を探ってくれ)

(何か気付いた？)

(ジュエルシード封印の直後に転生者が見付かる事が多すぎる。

封印が無い間は見付からなかったし、関連がありそうな気がしてならない)

魔法関係については、お姉様の勘は信頼できる。

ジュエルシードの魔力については観測結果がある。

比較調査程度は可能と判断。

警戒態勢を解除、隠蔽が可能な範囲で関連性の調査に注力。

余力は元の調査に復帰へ。

ジュエルシードについては、早めに現物の詳細な解析を行いたい。

高町なのは、又はフェイト・テストロッサとの接触も検討？

時期尚早。少なくとも今度の温泉旅行までは待つべき。

(これで他の転生者が見付かれれば、だいぶ楽になるが……)

(でも、エヴァの仮定が正しかった場合、最悪ジュエルシードによる転生の可能性もあるということ。

納得できる点も色々あるから厄介)

(そう、だな)



あれから、1日。

驚くべき結果報告。

「やはり、ジュエルシードに対応しているか……」

「死ぬ直前に見た青い光がジュエルシードの可能性がある」

「その可能性は高いな」

お姉様や主を含む発見済み転生者全員から、ジュエルシードに似た質の魔力を検出。

内3名については、対応するジュエルシードの番号も判明。

衛宮士郎似の中学生。名前は間宮萬太^{まみやまんだ}。シリアル20に対応。

ナギ・スプリングフィールド似の高校生。名前は東渚^{あずまなげむ}。シリアル10に対応。

フェイト・アーウエルンクス似の殺人犯。名前は成瀬カイゼ^{なるせ}。シリアル14に対応。

いずれも、封印から数日以内に捕捉している。

この事実から、ジュエルシードの封印が鍵となっていると予想できる。

対応が未確認のクルト・ゲーデル似の下出来人^{しもでらいと}も、発見同日に封印作業があった。関連する可能性が否定出来ない。

「……つまり、私は神社の犬が鍵だった、ということか?」

「それなら、私はユーノを襲う毛玉だった?」

「タイミングを考えれば、辻褄はあう。」

ジュエルシードによる転生と見て、間違いないか……」

「そうなる、元の世界にもジュエルシードが存在したことになる。

前世の世界もリリカルな世界だったという事に繋がる」

「……現実だけど、現実じゃなかった……か?」

「隣とトロノの逆パターン。」

この世界を物語の中だと笑えない。

元々私達も同じ物語の中の存在だった可能性がある」

「……深く考えるのはやめよう。前世も、ここも、私達の現実だ。

誰かに見られようが、誰かが手を出して来ようが、関係ない。

私は、私の意思で生きる」

「元々、物語の中かどうかなんて、知らなければ何の意味もない事。知っても、知ること出来ない誰かを気にする必要はない。

それでいいはず」

「そうだな。」

ところで、封印済みのジュエルシードは、今は幾つだ?」

封印済みは7つと思われる。

昨日までに確認していた転生者は、お姉様と主を含めて生存者が6名。

2名の死体からも、該当すると思われる魔力の残滓を確認。

本日、新たに4名の捕捉に成功。

「やはり、ジュエルシードの魔力か……」

隠蔽しながらでは、これが限界の可能性。

怪しいが追い切れなかった反応はある。

調査は継続中。

「見つかった人の情報は?」

馬場鹿乃ばばかの。男性で高校1年生。容姿はF a t e / Z e r o のイスカンドルに似ている。

若いのに髭が濃くて、ガタイが良い。おっさんの雰囲気。

魔力はC相当、デバイスは所有していない様子。

家に老執事がいるが、人間ではない。構造は月村家のメイドに類似と思われる。

老執事から強いジュエルシードの魔力反応。これも特典と思われる。

他に家族はおらず、老執事が育ての親となっている模様。

ナデポ持ちだが、撫でられると相手に惚れる逆転現象が発生している。

特典による心の支配を求めた自分に嫌悪感がある様子。

翠屋の映像記録に姿が残っていた。高町なのはの姿も見ている事は確実。

その際に頭を抱えていた事から、それまで原作の知識が封印されていた可能性も。

現時点では原作介入の意思が無いか、避ける方向と思われる。

ギル・ガームス。男性で大学1年生。容姿は Fate / stay
night のギルガメッシュに酷似。

笑みが気持ち悪い。確認した言動も併せて考えた結果、オリ主様の
気質と判断。

魔力はAA相当、デバイスは所有していない様子。

美人にはとりあえず笑みを向けている模様。

ニコポの可能性を考慮すべきだが、発動している気配は無い。

現時点で原作に係わろうとする意志はある様だが、店や学校の名前
を思い出せず、手を出せていない模様。

黒羽早苗^{くろばさなえ}。男性で小学5年生。容姿はネギまの四葉五月に近い。

ぼつちやり系男の娘。元気いっぱい料理好き。人柄としては好
感。

魔力はAA相当、デバイスは所有していない様子。

フェイト・テスタロッサの隠れ家と同じマンションに住むが、接触
していない。

現時点で原作に係わろうとする意志や行動は確認できていない。

杉並英春^{すぎなみひではる}。男性で小学2年生相当。容姿はネギまのデユナミスの
面影がある？

人を見下す感じも若干似ているが、年齢の差が大きいため、特定に
至らず。

着替えや食事等の行為は幼児並の水準。体を思うように動かさせて
いない？

日常生活能力の欠如により、保護施設にいる。

魔力はAAA相当、デバイスは所有していない様子。

現時点で原作に係わろうとする意志はある様だが、自由に施設を出
ることが出来ず叶っていない。

「つまり、好感を持てるのは1人だけ、1人が中立的で問題なし、残る
2人は問題児、ということか」

「随分質の悪い人が揃っている？」

「……いや、質のいい人はうまく隠れているか、見付けやすい特典を

貰っていない、と思いたい」

「そうだといいけど」

「今後の方針は？」

「このままだと、こんなのがわらわら集まってくる可能性が高いという事か。」

それに、ジュエルシード1個につき1人と仮定すると、21人だ。

今の比率のままだと、オリ主様が更に……倍？

色々と危険すぎる。折を見て介入を検討するか。

殺人者は目的がまだ見えていないから、要警戒のままだな。

最悪は排除も候補に入れたままだ」

「面倒事」

「全くだ」

無印編09話 把握と捕捉

日が変わり、主や主の家族が学校や職場に行った後。

誰もいない家で、お姉様は転生者とジュエルシードの関係に頭を悩ませている。

「確認済みの転生者は12人。内2人は死亡済み。

封印済みのジュエルシードは7つ。

ジュエルシードの封印が能力解放や原作介入のキーになると仮定すれば、7人の制限が無くなっていると考えていいはずだ」

仮定と現在の観測結果に矛盾は無い。

制限解除は、現在3名が対応まで確定。間宮萬太、東渚、成瀬カイ
ぜ。

お姉様と主も解除されていると見て間違いない。

「翠屋に来ていた、イスカンドル似の髭面高校生も可能性が高い。

これで6人だ」

馬場鹿乃は、私達が高町なのはを捕捉した翌日、翠屋に来店。

タイミング的にもこの時封印していたジュエルシードに対応する可能性が高い。

このジュエルシードの魔力調査に失敗していたのは痛恨。

「確かにそうだが、過ぎた事を言っても仕方がない。

あと1人、関与可能な人物がいるはずだが……隠れているか、死亡済みか。

制限解除の前でも死ぬるのは、人数から見て間違いなさそうだが……」

対応するジュエルシードは、恐らく主とチャチャゼロの覚醒前。

高町なのはに出会う前のユーノ・スクライアが、単独で封印した物と思われる。

チャチャゼロが封印に気付かないとは思えない。

「そうなんだが、未だに姿を見せていない。

介入する気のある人物なら、影ぐらいは見えてもいいはずだ。

原作開始に気付いていなかったとしても、この前の大樹事件で出遅

れに気付けるだろうからな。

今までの情報を見る限り、原作の人物や以前から関与出来る立場になっっている可能性は低いようだし……」

現在の情報から考えると、今回の死者2名も制限が解除されていた可能性は低い。

学校での行動を調べても、オリ主様の気質を持っていた可能性が高いと思える行動が見られている。

原作に関する記憶があれば、高町なのはへの到達は難しくない。

オリ主様系なら、高町なのはやフェイト・テスタロッサへの接触を考えると予想。

八神はやてへの接触も確認していない。

原作を知らず、特殊な能力を持つて喜んでいただけという可能性は排除できない。

「二人目の制限解除者に原作に介入する気がなく、うまく隠れているという可能性が一番高いだろうな。次に、死亡済みか。

放置でも問題は無いのだろうか……他にも転生者がいる事に気付いているかが問題か。

殺人者程でないにしても、オリ主系転生者は考え方や行動がおかしい。

気付いていないのなら、警告ぐらいはしておきたいが」

うまく関与を避けている可能性。

既に死亡している可能性。

どちらも考慮すべき。

無理な調査や接触は効率が悪く危険性も高いと推測。

現状の調査網で見つかるのを待つのが最善。

「そうだな。

それと、オリ主様系の4人は、どんな状況だ？

ああ、ギルとかいうのは昨日聞いたから、他の3人の情報を頼む」

間宮萬太。衛宮士郎似の中学2年生。

市外に住むため、原作介入は行動出来る時間や交通費の問題で苦しい様子。

普段の言動やメモによると、ナデポ及び衛宮士郎の能力を特典として要求。

ナデポは高町なのはやフェイト・テスタロッサ等、原作の主要人物に使用する予定。

今のところ、一般女性に対して使用する気は無い模様。

投影や無限の剣製は、知っている剣が不足。一般的なナイフや小刀のみ使用可能。

包丁や美術館で試した刀は剣として解析できなかった模様。

条件が不明。包丁は剣でないため？ 刀も同じ？ 刃引されていたため？

学校では弓道部。昨年行われた全国大会の地方予選で、上位に食い込む程度。

身体能力自体は普通の中学生より少し体力がある程度。戦闘に耐え得る水準ではない。

どうしてこうなったと悩んでいる。

自分が主人公だと、未だに思っている？

東渚。悪人顔のナギ・スプリングフィールド似の高校1年生。

本人のメモによると、転生特典の無効化能力を持つ模様。

発動内容を調べる事で、転生者のニコポやナデポを強制除去できる可能性が浮上。

自分以外の転生者の存在と自身の能力を予め知っていた可能性が高い。

よく女性の頭を撫でようとし、実際に撫でてもある。

恐らくナデポも特典として要求したと思われるが、惚れる効果は確認できていない。

3人娘の反応は、他の転生者の入れ知恵や不用意な介入によるものと考えている。

他の転生者の殺害を検討している。

低機能だがストレージデバイスを持ち、一応は攻撃魔法を使えるため、一般人や魔法に関わっていない転生者には脅威。

殺人者の成瀬カイゼと同程度の警戒対象と認識。

下出来人。悪人顔のクルト・ゲードル似の高校1年生。

学校では剣道部。中学時代には主将を務めた程度だが、強豪校ではない。

剣道の朝練と称して魔法の練習もしているが、技術は貧弱。

女性にニヤリとした笑みを向ける事が不自然に多い。

恐らくニコポを特典として要求したと思われるが、発動は確認できていない。

先日の大樹事件で原作開始に気づき、ジュエルシードを手土産に高町なのはに近づく計画を立てている模様。

現時点で、ジュエルシードは見付けられていない。

仮に見付けたとしても、所有している低機能のストレージデバイスで封印出来ると思えない。

「この中では、間宮はまだ救いがありそうだが……他の2人は厳しそうだ。」

味方になりたい転生者がここまで少ないとは、前途多難だな」

味方になりたく無さそうな転生者が動いた。

殺人者の成瀬カイゼが、移動。

現在、保育所の近くに潜んでいる。

保育所内に、新たな転生者を確認。

「また、殺しそうか？」

様子を見ている模様。

表情的には、戸惑いが見える。

「戸惑い？」

見つかった転生者はどんな感じだ？」

外見は、ネギまの那波千鶴に酷似。

保育士として働いている様子。

雰囲気は、優しいお姉さん。

子供もよく懐いている。

名前は、あみ。現状では名札以上の情報が無い。

魔力量はAに届かない。大きめのB程度。

魔力の少なさで発見できなかった可能性が高い。

「ふむ……殺人者はまだ様子を見ているか」
過保護者再び。

黒龍と防護服の準備が早すぎる。
私達も介入準備は整えている。

お姉様はもつとどつしりと構えるべき。

「だからと言って、マトモそうな転生者を殺されるわけにはいかん。

それに、準備が無駄になるに越したことは無い」

成瀬カイゼに魔法行使の気配は無い。

お姉様の魔力隠蔽が崩壊寸前。

管理局や他の者達を警戒する以上、落ち着くべき。

「……そうだな。

現状ではマトモそうな転生者の護衛を優先。最悪の場合はこちらの存在バレも止むを得ん。

私は少し落ち着いてくる」

お姉様は別荘へ。

おいしいお菓子でも食べて、落ち着くべき。

今はまだ従者達の研究成果のお菓子が中心だけど、これも味はなかなか良い。

地球の食材及び調理法の調査は、なかなかいい感じ。

本来の食材や調理法の入手に、従者達も燃えている。

身分が無い事による、穏当な方法での現金入手難易度は異常。

お姉様が別荘へ移動した後も、事態は平穩。

成瀬カイゼは、何かを考えなら様子を見ているだけ。

最初の攻撃的な雰囲気は、既に無い。

転生者の見極めをしていた？

殺した2人との差異に気付いた？

殺害の意図は無くなったと判断して良さそう。

(問題無さそうか?)

問題ない。

成瀬カイゼは、手を出さずに撤退。

あみは……おや?

こちらに向けてウインク。
微笑んでいる。

気付いていた？

(……こちらの隠蔽レベルは?)

ユーノ・スクライア及びアルフを相手に、かなり余裕がある程度。
目の前を通過されても気付かれない自信がある。

AAA級の探知魔法能力者を相手に、こちらが油断していても隠し通せる水準。

今は警戒中、油断していない。

恐らく、S級相手でも隠せるはず。

デバイスを持っている様子は無い。

SS級に匹敵する探知能力が特典？

存在が知られた以上、近いうちに接触を推奨。

(そうだな……明日と明後日は、アコノははやとと旅行の予定だ。

仕事の後と言うのも都合が分からんな……1週間後になるが、連休に入ってからだな。

その間も、護衛を兼ねて近くで様子を見る事は伝えておくべきか。

それと、急ぐようなら都合の良い日時を教えろと添えておいてくれ)

その旨を手紙にして転送。

手紙に、返信用の通信魔法を用意。

魔法の存在は確信している様子。問題とはならないはず。

あみは手紙を確認。こちらを見て頷いた。

やはり笑っている。

優しい笑み。恐らくいい人。

探知が優秀過ぎる。少々離れたところから護衛を兼ねた監視を継続。

監視担当以外は撤収。

(ここにきて、ようやくマトモそうな転生者が見付かり始めたが、簡単に見付けられるとはな)

(予定外。意外に腹黒の可能性もある)

(アコノか。どこから聞いていた?)

(保育士の名前辺りから。)

視覚情報も受け取っていた)

(かなり最初からだな。)

どう思った?)

(雰囲気としては、安心出来そうなお姉さん系に見える。)

ネギまのちづ姉相当と考えると、ある程度の腹黒さ、女狐っぽさは想定すべき。

予定が詰まっていたからだけど、多少時間を置いてからの接触になっただのは良かった)

(そうだな。その間にぼろを出す可能性もあるし、事態が動く可能性もあるからな)

(その前に、はやてとの旅行がどうなるかを心配すべき)

(確かに。行先は知らされていないが、妹達の雰囲気に……)

(なのは達と同じ宿の可能性が高い)

無印編10話 温泉へ

温泉旅行当日。

お姉様はまだ存在を見せる気が無いため、家で留守番……と言うより、別荘でデバイスを作製しつつ、主の近辺を警戒している。

作成しているのは、入門用デバイス。知っている魔法の都合で真正古代^{エンシエント}ベルカ式、但しカートリッジは無し。インテリジェントタイプで、指導能力に容量の多くを割り振る。

マトモそうな転生者が確認できたため、魔法を教える時に渡せるよう、色々準備しておく予定。

高町なのはとの遭遇については何種類かの場面を想定。開示する情報の打ち合わせも行い、後は適時判断と決めてある。

ギル・グレアムに関しては、ヘルパーとして来ているリーゼアリアが伝えていたし、八神はやても手紙も送っていた。

主は、タクシーで迎えに来た八神はやとと共に駅へ移動。

リーゼアリア猫が八神はやとを家から尾行している事は確認済み。

そこから電車で山の方にへ向かい、再びタクシーに乗って旅館へ到着。

今回宿泊するのは、山の宿という名の旅館。

この旅館を含む海鳴温泉と呼ばれる地域は、それなりの歴史と知名度があり、いくつもの温泉宿が点在している。

少々古めかしいが、庭に小さな池と滝があったり、中庭向きにだが縁側の様に開放的な廊下があったりと、古さを歴史的な雰囲気として魅せる、趣のある温泉旅館である。

以上、主に渡された紹介記事の切り抜きを一つ読んでみた。

海鳴温泉の紹介なのか、山の宿の紹介なのか、よく解らない。

「こういう古い建物って、いいと思わへん?」

「何だか、落ち着く感じの雰囲気。」

でも、こんな建物にベッドというのは、似合わないと思う」

「それは堪忍してな?」

私らが和室の布団で寝るなら他の人の助けがあったほうがええし、

車椅子で和式の部屋に入ったら畳を痛めてまうかもしれへん。

部屋の外だけやけど、こんな雰囲気に入るのもええと思つたんよ」

「うん、日本らしい建物」

板張りの廊下でギシギシと音を立てながら、二人は宿の中を散策。

通路は広めで、車椅子の二人が通つていても、さほど邪魔にならない。

それに、ゴールデンウィークの前の週だからか、少々時間が早いせいか。

今のところ、他の客もそれほど多くない。

だからこそ車椅子の2人を受け入れたのかもしれない。

「古い日本らしすぎて、完全なバリアフリーやないのが欠点やな」

「スロープはちゃんと用意されてるし、宿の人も協力的だから問題ない。

それに、洋風の方が下足を脱ぐ場所が点在する分、厄介なこともある」

「お風呂の入り口とかやな？」

「ここは玄関で靴を脱ぐから、入ってしまったえば割と平和や。

それも選んだ理由なんよ」

「多分、正解」

そんな感じで、のんびりと散策。

主の前をゆっくりと進んでいた八神はやてが、自販機前で止まった。

「アコノさん、何か飲むか？」

「うん、何か飲もう。」

「はやては何にする？」

「日本家屋なら、やつぱお茶が合うやろ。」

「……ん？ でも、お茶はちよつとボタンが上過ぎやな。」

「アコノさん、孫の手持つてへん？」

「今は持つてない。」

「部屋に戻る？」

「部屋よりも、玄関近くの売店の方が近いんやない？」

「あんたたち、何やってんの?」

アリサ・バニングスがあらわれた。

月村すずかがあらわれた。

高町なのはがあらわれた。

ユーノ・スクライア
フレットがあらわれた。

アリサ・バニングスはいきなり話しかけてきた。

月村すずかは様子を見ている。

高町なのはは様子を見ている。

フレットは高町なのはの肩に乗っている。

「お茶を買おうとしたんやけど、ボタンに届かへんのや。

申し訳ないけど、押ししてもらってええやろか?」

「いいけど、家族とか連れはどうしたのよ」

ボタンを押しながら、不思議そうに周りを見るアリサ・バニングス。

この場にいる5人以外、見える範囲に人がいない。

小動物は人と認めない。

「いない。二人旅」

「「えー!?!」」

「有り得ないでしょ!?!」

家族は何考えてんのよ!」

「私は家族から避けられてる。

今頃はいない事を喜んでるはず」

「それは、有り得ないよ」

「家族ならそんなことは無いよ、きつと」

月村すずかは完全否定。

高町なのはは希望的観測。

過去の違い?

「大体、あんたたち似てないんだし、姉妹じゃないんですよ!?!」

そっちの……えーと、あんたの家族はどうなのよ!」

「え、えーと、その……」

「一人暮らしらしい。察して」

「あの、アコノさん、その言い方はちよつとあかんよ……」

「あんたは……なんでそんな平気そうな顔で重大な事を言うのよ!!」
「ん……？」

もしかして、またやった？」
「うん、そうやね。」

もうちよつと考えよか？」

八神はやては、少し困った顔で頭を押さえている。
「だけど、どこことなく嬉しそう？」

「そう。……感情は難しい」

「難しいってあんた、何をそんなに考えなきやいけないのよ！」
「感情を感じられない。」

感じられない感情を考えるのは、難しい」
「なっ!？」

……あんたたち二人とも、有り得ないにも程があるでしょ!!」
アリサ・バニングスが吠えまくり、高町なのはと月村すずかはおろおろしてる。

高町なのはの行動力的に、少し意外。

「生まれてからずっと、こんな感じ。」

程があると言われても困る」

「そりやあ……そうでしょうけど」

「で、でも、治らないわけじゃないん……だよ、ね？」

確かに、主は困っていない。

むしろ、アリサ・バニングスと月村すずかが困っている。

高町なのはは、困惑している。

フェレットの表情は読めない。

「わからない。」

「だけど、話を続けるなら、そろそろ自己紹介をするべき」

「ここまで動じずに判断できるなんて、こりや重症ね。」

あたしは、アリサ・バニングス。聖祥大学付属小学校の3年生よ」

「高町なのは。アリサちゃんと同じ、聖祥大学付属小学校に通う小学
3年生」

「私、月村すずか。二人のクラスメイトだよ」

「八神はやていいいます。アリサちゃんたちとは同じ年やね」

「小野アコノ。海鳴北丘小学校4年生。」

「留年とかはしていないから、年齢も1つ上になる」
「実は2つ上。主は既に誕生日を過ぎている。」

「特に高町なのは早生まれ。当分は2歳差。」

「なんだ、だいぶ年上に見えたけど結構近いんじゃない。」

「はやての家は、遠いの？」

「住んでるのは海鳴市中丘町やから、アコノさんちに割と近いんよ？」

「私はこの足のせいで通信教育やから、学校は行ってへんのや」

「足のせいって、小野さんは学校に行ってるん……だよな？」

「月村すずかは、主と八神はやての足を見比べてる。」

「似た感じの車椅子に座る2人の違いは、あまり無い。」

「中丘町は北丘町の近くなんですよ。何か違うの？」

「私もアコノでいい。違うのは、家族や病院の考え方？」

「多分それやろうね。」

「というか、この足で学校行くんは、アコノさんに会うまでは思ってもみなかったわけやし」

「そういえば、話してみると言っていた気がする。」

「どうだった？」

「八神はやては、手紙で相談していた。」

「返事が来たのは、昨日。旅行についての連絡の後。」

「そういえば、主に結果を知らせてない。」

「本人から聞いたほうが良い。問題ない。」

「ここでする話やない気も……まあ、今更やな。」

「おじさんは、あんまりいい顔はせえへんかったよ。」

「天気が悪い日の通学とか、確かに大変やろうし」

「別に、濡れるだけ」

「ここは感情抜きで考えたらあかんよ？」

「やる気の維持は大切や」

「あの、二人は随分と仲がいいみたいですけど……」

「なんだか最近会ったみたいな話もしてるし、何時頃出会ったんです」

か?」

「すずかちゃん?」

「ごめんな、人と話すのは慣れてへんのや。普通に話してくれてええよ。」

「えーと、アコノさんと初めて会ったのは、確か……」

「2週間前。直接会うのはこれで3回目」

「ほ、ほんとに?」

「ずっと長い友達に見えるよ!?!」

「色々常識つてものを投げ捨ててるわね、あんたたち……」

月村すずかと高町なのは、驚愕。

アリサ・バニングスは、驚きより呆れの方が強い模様。

「アコノさんを見てたらな、常識の再確認は大事やなって思うんよ」

「一人暮らしの小学生にそれを言う資格は無いと思う」

「どうやったら、そんなに早く友達になれるの!?!」

「なのは、何だか必死?」

高町なのはが喰いついた。

アリサ・バニングスが、じと目で様子を見ている。

頼られないのが気に入らない?

「私らは参考にならへんと思うよ?」

お互い友達がおらへんかったみたいやし、足の事とか色々共通点も……」

「話すキツカケとか、最初の印象とか……!」

「ほらほら、なのはもちよつと落ち着きなさいよ」

「なのはちゃん、どうしたの……?」

「きっかけは、今回と似たような感じや。」

「図書館で私が本に手が届かんでな?」

「私が、孫の手で本を取った」

「ま、孫の手?」

「それって、あれでしょ。背中搔くやつじゃないの?」

「本が傷んじゃうよ?」

「ハードなら、頑張ってほしい」

「やっぱアウトや。」

ちよつとは改善した気がせえへん事も無いけど、別の悪い方について」とる」

図書館に、大丈夫じゃなかった本がちらほら。

この点は月村すずかと八神はやてが正しい。

「最初は何て言ったのよ」

「ハードなら大丈夫、やったか?」

「そんな感じ」

「にやはは……やっぱり駄目っぽい」

高町なのはが諦めた。

やっぱり、孫の手は参考にならなかった。

「その後はまあ、共通点も多いことがわかってな。」

話すのも楽しいし、土曜ごとに会ってるんよ」

「2回目に出会った時の別れ際に旅行を提案して、1週間で下調べから手配まで済ませて私を旅行に連れてきたはやての行動力は驚異的」

「そこは、時間のやりくりが楽な通信教育のおかげもあるんよ」

「いいコンビ、だね」

月村すずかが笑ってる。

いろいろ面白かった模様。

「うん、とつても仲良し」

聞き出すのを諦めた高町なのはも、笑ってる。

むしろ、感情をあまり見せないフェイト・テスタロッサ攻略方法として、何とかして話をしてみようと思っていそう。

「ところで、二人とも今から温泉?」

「アコノさん、どうしよか?」

「早めに行った方が、他の人の邪魔になりにくい。」

混み始めると、きつと邪魔だと思われる」

「それなら、あたし達も今からだから一緒に来なさいよ。」

せっかく知り合ったんだから手伝ってあげるわ。

なのはとすずかも、いいわね?」

「うん、全然大丈夫」

「もちろん、いいよ」

「ほんまか？」

「おおきに」

「名前を呼びあつたら友達、という話？」

「ま、そんな感じだと思つときなさい」

無印編11話 絆と繋がり

その後、主と八神はやては3人娘に加えて高町家と月村家の年長組にも構われまくり、艶々に疲れ果てて部屋に戻ってきた。

日本語としておかしいが、状況説明としては正しいはず。

二人は年長組に磨かれまくって肌は艶々。

八神はやては、年長組との触れ合いに大はしゃぎ。

主に、母性との触れ合い的な意味で。

だけど、はしゃぎ過ぎて疲れ切った様子。

満足気な顔でベッドに倒れている。

主は特に問題無さそうにも見えるけど、車椅子にもたれかかっている。

構われた疲れはある様子。

なお、淫獣ことユーノ・スクライアは高町なのにより男性陣に預けられた。

本人も安心して風呂に入っていた。

むしろ、年長組の胸を遠慮なく揉んでいた八神はやての方が淫獣と呼ぶにふさわしい。

温泉を出た後、高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかの原作3人娘は、主達と一緒に部屋まで来ている。

「それにしても、よ。」

アコノは元が良いんだから、もうちよつとオシャレしなさいよ」

アリサ・バニングスが自分の服を持ち込み、主を着せ替え人形の様になっている。

身長差が大きいからサイズが合わず、着せる事は出来てない。

「無理。特にしたいと思わないし、何が綺麗かよくわからないから。

それに、買い物に行く事も服を買うお金も無い」

「それって……虐待とか、じゃないの?」

ほいほい渡される服を畳みながら、月村すずかが首を傾げている。

手付きは、律儀かつ丁寧。

「虐待と言うより、徹底した無干渉。」

嫌いの反対は好きじゃなくて無関心、みたいな感じ？」

「そんなの……悲しいよ」

「悲しいという事も解らない。」

だから、不幸という表現は正しくない」

「どんだけずれてれば気が済むのよ、あんたは。」

感情が無いって、こうなるもんなの？」

持ち込んだ服が終了したアリサ・バニングスは、今度は主の髪を弄り始めた。

主のツインテールは初めて見る。

大戦期アスナのイメージっばい？

「わからない。満足というのもよく解らないし、他にこんな人は知らないから比べられない。」

でも、ここにいるみんなが優しい人だというのは解る」

「あたし達は、ほとんど何もしてないわよ。」

お風呂も結局、なのはやすずかのお姉さんたちに構われてたでしよ？」

「私達を手助けしてくれた上に、私の事を知っても普通に人として扱ってくれている。」

これだけでも、充分珍しい。

そんな人達と出会えて、今も同じ部屋に4人もいるなんて、奇跡に近い」

「4人？」

ああ、はやても含むわけね」

「はやてちゃんも、優しいよね」

服を畳み終った月村すずかは、八神はやての傍に移動している。

八神はやての寝顔は、淫獣とは思えない可愛さ。

「優しすぎて、将来悪い人に騙されなにか心配だけど。」

今回の旅行の費用も、はやてが出してくれてる」

「え、そうなの……？」

手助けも頼んでるみたいだし、結構高いんじゃない？」

月村すずかは机の方に行って、サービスの料金表を見始めた。

残念、車椅子の人の手助けは載ってない。

「会って2週間の私を、自腹を切って旅行に連れ出す。きつと、優しさを突き抜けた何かがあるはず」

「あんたは、少しくらい予想できてるんでしょ？」

「この年齢で一人暮らしは異常事態だと思う。

友達もいなかったみたいだから、寂しかった可能性が高い。

足の件で仲間だと思った事も無関係ではないはず」

「なんだ、多少は感情の事を理解してるんじゃない？」

「でも、ここまで。」

どれくらい堪えるものか、分からない。

感情を知っていれば、想像出来る？」

「ちよつと無理……かな？」

「あたしも無理ね。なのはは、少しくらいならわかるんじゃない？」

「え……うん、ちよつとぐらいなら」

そういった経験のない月村すずかとアリサ・バニングスには、わからないらしい。

高町なのはの幼少期の孤独を思い出している？

理由があつたとはいえ、家で一人過ごした期間がある。

「家族と一緒に旅行に來ているし、何か……ん？」

「これは一般的に禁則事項と言われる質問？」

「あ……そ、そうかも？」

高町なのはは、何だか焦っている？

親友には言えても、他の人には余り聞かれたくない話ではある模様。

「なら、聞かない。」

秘密にしたい事は無理に聞かない方がいいはず」

「あんたは、大つぴらにし過ぎよ」

「大つぴらに突っ込むアリサが言うのはどうかと思う。

それに、私も伝えていない事は色々ある」

「会ってから、まだ半日も経ってないわよ。」

「こんな時間で全部喋れるわけじゃないじゃない」

「それはそう。」

だから、これからもたまにでもいいから、はやてを構ってあげてほしい」

「それは、こうやって知っちゃたわけだし、ほっとけないからいいんだけど。」

あんたも人の事言えないじゃない」

「私は、寂しいと思っていない」

「思えないだけだよ……」

月村すずかは、主の状態を正しく認識している。

むしろ、主の矛先の向けさせ方に違和感。

無理に自分を外す必要が無い。

「そうだと仮定しても、はやては明らかに私よりも重傷。」

むしろ重体と言っているいいレベルに見える」

「あーもう、お父さんに相談して、施設か里親でも探した方が良くないのって気がしてきたわ」

「アリサの両親がどんなに早く預ける先を見付けられても、話に出てきたおじさんとやらを説得するための時間も必要ははず。」

小学生に一人暮らしをさせているのを見ると幸せにする気は無いと判断出来るけど、すぐに環境を変えるのは難しい」

「そうだね……私もみんなに相談してみるね」

「うん、私もお父さんやお兄ちゃんにも相談してみる。」

喫茶店のお客さんにいい人がいるかもしれないし」

「でも、あんたも何か考えた方が良くないんじゃないの？」

あんまり幸せそうに見えないけど」

「私は、両親と同居してる。」

それに、はやて以外の友達もいる」

「いるの!?!」

「アリサちゃん、失礼だよ……」

アリサ・バニングスの驚きは仕方ない。

だけど、月村すずかに同意。

確かに叫ぶのは失礼。

「はやてと出会う少し前に知り合った。

過保護な変人？」

変人の評価は初めて。

主も、意外にお姉様に対して容赦が無い。

「想像できないわね。」

特に、あんたに変わって言われるあたりが」

「多分、そのうち紹介できるはず。」

あまり表に出たがらない人だから、少し先かもしれないけど」

「ちゃんと紹介しなさいよ？」

なんか最近、なのはも付き合い悪いし。よそよそしいのは好きじゃないわ。

ねえ、な・の・は？」

「あう……う、ごめんなさい」

アリサ・バニングスの矛先が、高町なのはに向いた。

高町なのはは、こそっと主の後ろに隠れて、主を盾にしようとしている。

「きつと、なのはにも色々ある。」

でも、隠し事が上手そうに見えないから、多分すぐにぼろを出す」

「だ、出さないよっ！」

盾が役に立たなかった。

むしろ、罨付き。

高町なのはは、隠し事がある事を自爆。

「でも、なのはちゃんが何かに悩んでるのは、見ていて分かりやすかったよ」

「授業は何か上の空だし、学校が終わってからもう用事があるとかですぐ帰っちゃうし、この間から話しても上の空でぼーっとしてるし。」

これで何も無いって方がおかしいわよ」

「もう、だいぶぼろが出てる？」

「ふええく〜？」

高町なのは、ふるぽっ。

「この際だから、全部吐いちゃいなさい！」

「ふえ!? ご、ごめん!」

「ごめんじゃな〜い! 困ってるんだったら、相談くらいしなさいよ!

歯痒いっいたらありやしないのよ、このすつとごどっごい!!」

「ご、ごめんなさ〜い!!」

「アリサもなのはも静かに。はやてが起きる。

なのはは事情があるみたいだけど、一人で抱えるのは良くない」

「で、でも、でも……」

高町なのは、ちよつと涙目。

流石に魔法については言えない模様。

「どんな事で悩んでいるかだけでも人に話すと、それだけで答えが見つかる事もある。

周りの人に心配させなくて済むかもしれない。

何も分からない事が、きつと一番の心配する原因」

「う、うん……」

「あんたは何で人の事は的確なのよ!

自分の事はあんなボケボケのくせにつ!」

アリサ・バニングスの矛先が主に戻った。

指摘は正しい。

「だけど、目の前の人を指さしながら叫ぶのは良くない。

「アリサちゃん、落ち着いて……」

月村すずか制動装置。

体力的には一番の月村すずかに抑えられ、アリサ・バニングスも少しは落ち着いた?

「話せない事は隠してもいい。

でも、全てを話せなくても、話していいことは話すべき」

「まったく、あんたの頭はどうなってるのよ。

それで、なのははどうなのよ。少しは話す気になった?」

「私も、出来れば話してほしいな」

「うん……ちよつと待って。

どこまで話していいかも、よく分かんないんだ」

確かにどこまで話すかは難しい。

ジュエルシードについて話すと、芋蔓で魔法がばれそう。

「ちよつとつて、どれくらいよ。」

10分？ 1時間？ 1日？ まさか、1週間とか1か月つてこと

は無いでしようね？」

「にやはは、さすがにそこまでは……」

うん、どこまで話せるか、考えてみる。

多分、連休までに」

「1週間以内つて事ね。約束だからね？」

「うん！」

「一件落着？」

「まだ、始まったところ、かな？」

アリサ・バニングスと高町なのはが話している間に、こつそり主に近付いていた月村すずか。

とりあえず落ち着いた様子の2人を見て、何だか嬉しそう。

「そろそろ食事の時間。家族のところへ行くべき」

「随分と唐突ね。でも、もうそんな時間かあ……」

アリサ・バニングスが、時計を確認している。

もうすぐ、6時。

早めに食事をするなら、そろそろ頃合い。

「アコノちゃんは？」

はやてちゃん、眠っちゃってるけど……」

「私達は、部屋に持ってきてもらう事になつてる。

少し時間を遅らせてもらう様に、連絡済み」

「そう。なら、そろそろ部屋に戻るわ。」

明日の朝に来るから、またお風呂にでも行きましょ」

「わかった。はやてにも伝えておく」



(なかなか、面白い方向に誘導していたな。

猫が随分と慌てていたぞ)

3人娘が部屋を出た後。

はやてはまだ眠っていて、主とお姉様はチャチャネットワークを使っている。

ちなみに、猫は既に本局への帰還を始めている。

主が魔導師だとはばれた様子は無い。

認識障害が効き辛い体質と思われた可能性はある。

アリサ・バニングスと月村すずかも一般人だと認識した上で、必要以上の人間関係を持ってしまったと判断したと思われる。

その意味では、主は八神はやてと共に封印しても問題ないと思われていた可能性が高い。

(考えた結論を言っただけ。

結果的に、なのはとアリサの喧嘩フラグを叩き折ったように思える。

それに、守護騎士が現れた時に問題がありそうな方向に行ったかもしれない)

本当に施設や里親が見付かった場合は、色々面倒な事に。

認識障害がどこまで有効か不明。

(現状なら問題ないだろう。

施設や里親は、それこそグレアムと猫が全力で暗躍するだろうからな)

(随分人任せ)

(最悪の場合は、私も動く。

まあ、当面はグレアムと猫の目を逸らしておきたいという気持ちはあるし、問題は無いな。

これからも地球にいるなら月村家やバニングス家の協力は得た方がいろいろと便利だろうし、そうなれば3人娘とその家族にきちんと話をする気はあるぞ)

(エヴァや守護騎士の戸籍も?)

でも、不老という点は、地球では隠し辛い)

(数十年くらいまでなら、大人モードや幻影で誤魔化すことも出来る

だろう。

その間に、どうするかゆっくり考えるさ。

色々考えている事もあるからな)

(なるべく、穏便に。)

ところで、アルフがなのはに会いに来なかった。理由はわかる?)

(多分、猫と警戒し合っていたからだろう。)

猫はフェイトとアルフを認識してるし、フェイトとアルフは何か実力者がいる気配は感じていた様だからな。

おかげで、アコノの魔力はより安全に避けられたわけだ。

なのはとユーノの存在は両方に知られているし、目的もジュエルシールドとはつきりしているから問題ないしな)

(そんなにはつきりしてる?)

(フェイトは闇の書を知らないから、ジュエルシールドを狙う競合者だと見ている。)

猫は、ユーノがジュエルシールド回収で渡航許可を取っていた事も知っていた様だからな。その現地協力者だと認識しているぞ。

アルフが探るような目でなのは達……アコノも含む5人を見ていたが、問題は無いだろう。会話の盗聴もしていたから、なのはの協力者だとは認識されていないはずだ)

(そう。でも、今夜の戦闘の後で、無理が無ければなのはに会うつもり)

(魔導師として、か?)

介入するにはいいタイミングだが)

(その場合、転生者についても話す。)

そろそろオリ主様の事を教えておかないと、危ない事態になりやすいと思える)

(そうか、わかった)

お姉様の実質的な許可が出た。

主に、調べた限りの原作知識を公開。

原作の原典、とらいあんぐるハートの情報も公開。

高町家や月村家の情報が有効か確認を推奨。

魔法先生ネギまの人物知識を公開。

とある魔術の禁書目録の人物知識を公開。

Fate／stay night、Fate／Zeroの人物知識を公開。

(……とらいあんぐるハート?)

(そんなものまであったのか!?)

主は知らない?

リリカルなのはの前に、とらいあんぐるハートと言う作品があった。

とらいあんぐるハートから派生した作品から設定を流用したのが、テレビ版の魔法少女リリカルなのは。

この辺は色々ややこしい。

お姉様が二次創作やWiki等で見た設定をまとめたもの。

信憑性、関連性が低い点は注意。

お姉様は実物を見たことが無い。

18禁のゲームだからと言って引く必要はない。

お姉様の前世は成人男性。仮に現物に触れていても問題ない。

(……優秀過ぎるだろ、お前達)

またお姉様に呆れられた。

何故。

頑張ったのに。

(成人男性?)

(そういえば、言っけなかったか?)

(聞いていない。妹達も言っけいなかった)

(そうか、悪かったな。

嫌だったか?)

(問題ない。私と繋がりたい?)

百合フラグ来た?

主から言い始めるのは予想外。

(阿呆! 今の私は曲がりなりにも女だぞ!

それに、意識がある期間だけ考えても、女として生きてきた時間の

方が長くなっているんだ。

今更女と大人の付き合いなどとは思えんよ)

(男と付き合う事は?)

(勘弁してくれ。一応男の記憶やらが基本でな。

考え方や感性はその頃をまだ引きずっている部分も多いんだ)

(つまり、当面は恋愛する要素が無い?)

(無い。これは断言出来る)

(そう、わかった。

それと、機会があればジュエルシールドも見せてもらうつもり。

解析出来る?)

かなり困難。

レイジングハートの封印処理は優秀。

少なくとも、魔力は漏れてない。

封印を解かずに魔力を調べるには、ジュエルシールド自体の解析が必

要。

デバイスや魔導具は、解析出来ないよう対策がしてある事が多い。

突破は、簡単じゃない。

(プロテクトの強度は分かるか?)

以前高町なのはがジュエルシールドを出して見ていた際に解析を試した事がある。

あの時は個別認識の必要性を知らなかった。

ユーノ・スクライアやレイジングハートの実力も不明だった。

簡易調査で、対策の情報の一部を取得した程度。

対策の方式自体は、私達の知識にあるものと変わらないと思える。

アルハザードでも良く使われていた、基本的な手法。

全くの未知ではない、単純なもの。

だけど、単純だからこそ厄介。

ユーノ・スクライアやレイジングハートに気付かれずに突破出来る

とはとても言えない。

(そうか。接触の時には封時結界を使うつもりか?

その時に各種妨害も……いや、解析の邪魔になるか………?)

邪魔になっても、各種妨害処置を行いながらの解析が現実的。
事前準備可能。手を打ってみる。

突破や解析には時間が必要。

どれくらいの間解析出来るかで、成否の確率が大きく変わる。

(わかった。なるべく話を引き延ばしてみる)

(頼んだぞ)

無印編12話 介入開始

その夜。多くの人が寝静まった頃。

宿に近い山中に、フェイト・テストアロツサとアルフの姿、発動し始めたジュエルシードがある。

シリアルは18。

高町なのは既に発動に気付き、宿を飛び出して走っている。

レイジングハートの起動も完了済み。

フェイト・テストアロツサとアルフの会話は、概ね原作通り。

バルデイツシュも起動。

発動体をサイズフォームで切り裂き、封印完了。

「封印はこんなに早かったか?」

原作では、シーリングモードで普通に封印。

タイミングは変わってない。

映画版のバルデイツシュにシーリングモードは無い。

映画版の空飛ぶ猫に近い封印方法。

対応するのはギル・ガームス。

既に就寝済み。影響が判明するのは明日と予想。

「二つ目、か。数も原作通りだな?」

ここでの眩きも含め、原作同様。

高町なのは到着。

アルフの発言が変化。子供は寝る時間だと言っている。

高町なのは、フェイト・テストアロツサも同じくらいの年齢だと反論。

口論中。

しばらくお待ちください。

「何と言うか……アルフがもう少し小さければ、子供の喧嘩だな」

鬱陶しくなったらしく、アルフが狼化。攻撃開始。

ユーノ・スクライア、結界と強制転移でアルフを道連れに退場。

高町なのはとフェイト・テストアロツサ、会話開始。

高町なのは話し合いを提案。

フェイト・テストロツサは話をしつつも、交渉は拒否。言葉だけでは伝わらないと言い放ち、戦闘開始。

フェイト・テストロツサが、ジュエルシールドを賭けようと言いつつ出した。

「完全に原作通りと言っている展開か……？」

砲撃魔法が衝突。高町なのはが押し勝った。

フェイト・テストロツサは上空へ回避。サイズフォームに変形させて突撃。

高町なのは、ラウンドシールドで防御。

受け流しに成功。防ぎ切った。

「お？ 乖離したか」

原作でレイジングハートが負けを認める場面が消失？

フェイト・テストロツサが振り向きざまにプラズマランサーを使用。

高町なのは、展開したままだったラウンドシールドで防御。プラズマランサーを弾いた。

フェイト・テストロツサが再度突撃。

同時に、弾かれたプラズマランサーの軌道を反転。

高町なのは、被弾。

「……は？」

弾かれたプラズマランサーの軌道反転は、A×Sでカートリッジシステム搭載後の技法。

今回は2発。A×Sの4分の1。但し、発射も軌道反転もかなり高速かつ本人は突撃動作中。

A×Sでの使用時に、カートリッジはロードしていない。

デバイス強化前でも可能だった？

そもそもカートリッジの魔力は不要な技術？

バルディッシュがサイズフォームのまま使用。

原作ではデバイスフォームで使用だけど、性能に問題は無い？

問題があるから数が少ない？

「あー……いや、考察は後に。戦闘は継続中だ」

体勢を崩した高町なのはの喉元に、魔力の鎌が添えられている。レイジングハート、ジュエルシードを排出。原作に戻った。

ジュエルシードはシリアル20。

フェイト・テストロッサがこの次は止められないかもしれない通告。

高町なのはが、名前を聞いている。

名前を告げて、フェイト・テストロッサとアルフが撤退。

結末は、原作と一致。

「被弾で少し怪我をした程度か……」

ユーノ・スクライア、帰還。

かなり怪我をしている。

フラフラ。

だいぶ苛められた模様。

(うん、介入してくる)

(アコノか。建前は治療目的か?)

(名目として充分。カートリッジは使っていない?)

(問題ない。むしろ、魔力素質バレを避けるためにも、積極的に使ってくれ。

フェイトやアルフ、猫も特に探知は仕掛けていないようだが、なのはとユーノに見せる以上は念のためだ)
(わかった)



重い足取りでとぼとぼと宿に帰ってくる高町なのは。

その手には、傷を負ったユーノ・スクライアが抱かれている。

意識ははっきりしており、自己治癒力の強化もしているようだが、魔力不足が深刻な模様。

強力な治癒魔法を使えるようには見えない。

「また、話を聞いてもらえなかったね……」

「どうしてジュエルシードを集めてるのか、聞けるといいんだけど……」

昼間の探知妨害は彼女達が先に見付けるためかもしれないし、残念だけど僕よりも上手みたいだ」

「そ、そんなことないよ。」

ユーノくんは頑張ってる！」

負けた事。話が出来ていない事。昼間に感じていた異様な探知妨害の事。

いろいろな悩みが頭の中でぐるぐる回っていると予想。

「だけど、もう10日以上も封印出来てないんだ。」

その間に発動した物も……」

「うん……」

最後に高町なのはが封印したのは、11日の大樹事件の時。

今は24日深夜。

少なくとも18日の月村家の猫のものと今日のものはフェイト・テスタロッサが持ち去った。

更に、今回の戦闘で1個奪われた。

「きつと、大丈夫。」

危険な事に使うようには見えないし、何か起こってもいないんだから！」

「でも、あれは危険な物なんだ。」

扱いを間違えてしまえば……えっ、封時結界……?」

景色が単彩色に変わり、付近から人の気配が消える。

見えていた旅館から、主が登場。

「分からないという不安は、そういう事。」

アリスとすずかに、きちんと話をするべき」

「アコノ、ちゃん?」

「君も、魔導師!」

高町なのはとユーノ・スクライアが、驚いてる。

「大丈夫。敵対する気は無い。」

Land der Heilung
ロードカートリッジ、癒しの大地」

ぱしゅつ、という軽い音と余剰魔力の煙が扇から放たれる。主の足元に現れる、三角形を基本とする淡い赤色の魔法陣。

「ベルカ式!? どうしてこんないたたたた」

迂闊に動いたユーノ・スクライアが悶えてる。

すごく痛そう。

主が魔導師と知った時より驚いてるのは何故。

「私やユーノくんが使う魔法とは違うの?」

「今はもう滅んでしまった世界で、使われていた魔法技術だよ。

確かに、今でも継承してる人や、ミッド式の技術を使って、再現したりしてる人はいるけど……どうして、こんなところに」

ユーノ・スクライアの説明がもたもた。

と言うか、主の返事を聞く前にへたばった。

すぐに治る治療魔法じゃない。まだ痛みは続く。

「魔法は、昼に言っていた過保護な変人の人が教えてくれた。

このデバイスも、その人に貰った物。

場所に仕掛ける治療魔法だから、効果がある間はそこにいて」

「そ、そうなんだ。

でも、どうして今出てきたの?」

へたばったユーノ・スクライアに代わり、高町なのはが質問してきた。

魔法少女とマスコットの連携は問題ない様子。

「外で魔法を使っている感じがしたから、様子を見ていた。

こんな夜中に怪我をして帰ったら、家族や友達は心配する。

もつと気を付けるべき」

「うん……それは、分かってるんだけど」

高町なのはの反論に元気が無い。

自覚はある模様。

「あと、この前から、たまに強い魔力を感じる時がある。

危険な物と言っていたけれど、それ?」

「それは……ええと……」

「ジュエルシードといって、扱いを間違えてしまえば、世界を滅ぼしか

ねない、危険な古代遺産なんだ。

できれば、近寄らないで、ほしいんだけど」

困った顔の高町なのはに代わり、ユーノ・スクライアが説明。やっぱり、痛そう。説明がまだもたついている。

「わかった。

だけど、一度しつかりと見せてもらっていい？

どんなものか知らないよ、避けることも出来ない」

「ええと……確かに、そうなんだけど………」

ユーノ・スクライアは、困った顔で高町なのはを見てる。

高町なのはも、困った顔でユーノ・スクライアを見てる。

お姉様や主では見られない光景。

何だか新鮮。

「私の力でどうにかできる物じゃなさそうなのは、理解できる。

奪って逃げるのも、私の体ではどうにもならない。

仮に奪って逃げてても、私の家ははやてや学校に聞けば特定できる。

これでも不安？」

「ユーノくん、怪我也治してもらってるんだし、見せていいんじゃないかな？」

『Put out』

ユーノ・スクライアの返事を待たず、レイジングハートがジュエルシールドを吐き出した。

封時結界の展開に合わせて、探知は妨害済み。

シリアル16。原作では神社の犬を魔物化した物。

恐らくお姉様に対応すると予想。

早速、全力で解析に挑戦。

「これが、ジュエルシールド？」

普通の宝石に見える」

「今は封印状態だから、魔力とかは感じられないと思う。

起動していない状態でも、探すのは結構難しいんだ。

だから、僕が探してるんだけど……」

ユーノ・スクライアが言い淀んでいる。

確かに、集められていないとは言にくい。

「体調があまり良いように見えない。」

無理に無理を重ねても、良い結果は出ない」

「だけど、僕のせいだ！」

「随分と必死。責任感？」

「だけど、そんな人が直接の原因となる事をするとは考えにくい」

「えっと、それは……」

それからしばらく、ユーノ・スクライアによる経緯説明の時間。

具体的には、ユーノ・スクライアが発掘、手配した輸送船の事故、単身での回収について。

原作で語っていた内容に、時空管理局に関する情報を少し加えた感じ。

長い話は有り難い。

ここで朗報。

ジュエルシードのプロテクト防壁の突破に成功。奇跡的。

構造の複写を開始。

記録情報の複写も開始。

可能な限り急ぐけれど、プロテクト多重防壁に守られた部分もある模様。

完全突破にはまだ時間がかかりそう。

(わかった。時間稼ぎ、やってみる)

「それで、時空管理局とかいう組織に報告して、回収の許可は取っている？」

「うん。ここは管理外世界といって、時空管理局が直接関わっていない世界なんだ。」

この世界の場合は魔法が知られていないし、次元世界を超える事も出来ていないからね。

だから、勝手に侵入しちゃいけないし、魔法がばれる事も避けられないいけない。

渡航許可と魔法使用許可を申請する時に、ジュエルシードの事も担当者に報告しているんだけど、人手不足みたいで……」

主の質問に答えるユーノ・スクライアの歯切れが悪い。

あまり良くないとは思っている模様。

「人手不足で放置とは、危険物を扱う割には随分貧弱。

管理外だからと、手を抜いている?」

「そんなことは無い、と思うんだけど。」

この辺りは本局から遠いし、管理外世界も多いから特に手が足りないんだと思う。

当面の回収は僕に任せて輸送船の救助と事故原因の解明を優先すると言っていたから、そっちで何か問題が起こっているのかもしれない。

ロストロギア……危険な古代遺産は事故に見せかけた事件も多いから」

「なるほど。」

とりあえず、一度まとめてみる。

まず、ジュエルシードという古代遺産……ロストロギアは、世界を滅ぼす可能性のある危険物。

先日ユーノが遺跡で21個発見して、時空管理局へ報告した。

時空管理局はユーノの報告と過去の情報からジュエルシードだと判断、対策担当の部署への輸送を指示した。

ユーノは指示に従い、輸送の手配を行った。

輸送中の事故、あるいは事件でこの付近に散らばった。

輸送船に同乗していたユーノは事故を通報、散らばったジュエルシードの回収に名乗りを上げ、単身で乗り込んできた。

現地で力尽きそうになった所をなのはに助けられ、その協力を得て回収を行っている。

元は人間だけど、魔力の節約と回復のためにフェレットの姿になっている。

ジュエルシードを狙う魔導師フェイトと出会い、戦闘の結果ジュエルシードを1つ奪われた。

時空管理局は現在輸送船の救出及び事故原因の調査中と思われる。

正しい?」

「うん、正しいよ」

「これから事件の場合を推測してみる。

犯人は、ユーノ」

「ええっ!!? ユーノくんが!!?」

「ほ、僕!!?」

無印編13話 迷探偵アコノ

「最もジュエルシードの動向を把握していて、かつ、事故発生時にも近くにいる。」

「疑いだせば切りがない立場」

「そ、それは、そう……なの、かな？」

「なのも納得しないでー!」

高町なのはが納得しかけた。

ユーノ・スクライアが、疑われないと思っていた事の方が不思議。

むしろ納得する要素しかない。

「でも、詰めが甘すぎる。」

単独犯としては、現時点で回収できていない時点で失敗。

現地の協力者や他の魔導師との接触、時空管理局の本格的な回収開始までの時間を考えると、既に詰む寸前に見える。

犯人なら、そろそろ逃走を考えるべき」

「僕は逃げないよ!」

ジュエルシードをきちんと封印しないといけないから」

むしろ、主がユーノ・スクライアの逃亡を封印。

「というわけで、主張が正しいとすれば、ユーノ単独犯説は可能性があまり高くない。」

次、犯人はフェイト」

「やっぱり、その可能性はあるよね……」

高町なのはは、何だか言われたことを全部信じてる？

いくら大人びていても、小学3年生には難しい話かも。

「行動を考えれば、その可能性は高いと思うよ」

ユーノ・スクライアとしても、別の生贄が欲しいところ？

フェイト・テスタロッサを見る限り、犯人じゃないと言える要素が全くない。

生贄と言うより、明らかに容疑者。

「輸送船を攻撃、その後回収のために地球へ。」

地球にいつ来たかにもよるけど、行動を考えれば疑う余地は充分」

「でも、何だか寂しそうな目をしていたの。
そんな悪いことをする様には見えなかったし……」

高町なのはは、色々と信じすぎ？

だからこそフェイト・テスタロッサを救えると予想。

「フェイトの後ろに、何らかの組織か主犯がいる可能性」

犯罪行為を強制されていて、本人が気に病んでいるなら、寂しそうな目も説明できる」

「そ、そっか。それなら、フェイトちゃんを助けないと！」

「そして、その犯行組織の一員がユーノである可能性」

「また僕?!」

ユーノ・スクライア弄り、再び。

叫んでも痛そうにしていけない。

だいぶ回復してきた模様。

「発掘後、情報を犯行組織に渡す。

その後、犯行組織から送られてくる回収員がジュエルシードを集められるように動く。

回収員が来てから見付けていない上に、襲われて奪われたという点
を考えると、否定できない」

「う……」

「で、でも、今回あんなに怪我してたし！」

ユーノ・スクライアは言葉に詰まった。

反論する要素が見付からなかった模様。

高町なのは、初反論。

でも、理論的じゃない。

「なのはや時空管理局の目を誤魔化すための偽装の可能性。

そもそも、命に係わるどころか、障害が残るような傷も無かったよ
うに見えた」

「あう……でも、でもー」

高町なのはが、反論しようとしている？

超空振り。思考が空転している模様。

「ジュエルシードの一部を確保できればよいと割り切れば、現実的。

一部を時空管理局に渡し、残りを組織の回収員が持ち去る。単独で回収に向かう事で時空管理局の介入が遅れる可能性があり、公式な許可を持つ者が回収員に協力可能になる。

魔法バレの危険がある場合はユーノが動くことで時空管理局の目を誤魔化せる。

許可が出なくても、関係者として時空管理局の動向を聞く事ぐらいは出来るかもしれない。スパイとして疑われにくいから、とても良い。

……自分で言っておいて何だけど、ここまで組織に都合のいい解釈になるとは思わなかった」

「え、本気で言ってたわけじゃ……」

ユーノ・スクライアは、啞然としている。

高町なのはは言葉も出ない模様。

ここでひっくり返すのは意外過ぎた？

「犯行組織の一員なら、なのはに時空管理局の事を話す必要が無い。偽装にしては過剰な情報提供に思える。」

時空管理局の話自体が虚構だった場合は、ユーノが犯人、または犯行組織の一員であることが確定」

「全部、本当だよ……」

ユーノ・スクライアが力尽きて項垂れている。

疑いが晴れたわけではないと再びひっくり返された衝撃は大きい模様。

「少なくとも、なのははそれを判断できない。」

知らない世界の知らない組織の話。

疑って信じないか、鵜呑みにして信じるか。

極端に分ければ、この2択」

「そ、そうだ。過保護って言っていた人がデバイスを作れるほどの魔導師なら、知ってるはず！」

ユーノ・スクライアが、お姉様の事を思い出した模様。

原作と言う意味では知っている。

この世界の時空管理局はよく知らない。

色々情報不足。

「ちよつと冷えてきた。」

「そろそろ戻らないと」

「思いつきりはぐらかした!？」

「その前に聞いておきたいんだけど、結局犯人って……?」

「主の誤魔化し方がおかしい。」

ユーノ・スクライアの顎が落ちかけてる。

高町なのはが気になるのは、やっぱり時空管理局よりフェイト・テスタロッサの模様。

「フェイト及び背後にいる組織、という可能性が濃厚。」

「組織に時空管理局またはその職員を含む可能性は否定しない」

「時空管理局が!？」

ユーノ・スクライア、驚愕。

自分が犯人だと言われていないだけ、改善したかもしれない。

「だけど、頼っていた組織に犯人がいると言われても、普通は喜べない。」

「ジュエルシードが見つかったから犯行に至るまでの情報の動きを考えると、発掘に係わった人、輸送に係わった人、時空管理局のいずれかの、詳しい情報を知り得る地位にいる人物に共犯者がいる可能性が極めて高い。」

「内2つに該当するのがユーノ」

「発掘に係わって、輸送の付き添いをした、詳しい情報を知っている人、だもんね……」

「なのは!？」

高町なのはの中で、ユーノ・スクライアが容疑者に認定された模様。

「主がやりすぎた?」

「少なくとも、発掘の下つ端に詳細な輸送計画が伝えられると思えない。」

「輸送の下つ端に何を運ぶかが伝えられるとも思えない。」

「何が見付かって、どう運ぶかを知る事が出来る人は、かなり少ないはず。」

蒸し返すようだけど、疑わないという選択は難しい」

「うう……わ、わかったよ。」

これから、行動で信頼を勝ち取るしかないって事だから」

ユーノ・スクライアは項垂れている。

やるべきことは変わらないはずなのに。

「がんばれ、少年。」

と、ここままでが建前の話」

ここから本題。

もう少し時間に余裕がある？

先ほどのジュエルシードは、情報取得がもうすぐ完了しそう。

お姉様との対応も確認済み。

(わかった。出来ればもう1つ見せてもらう)

「た、建前!?!」

「まだ、何かあるの!?!」

ユーノ・スクライアと高町なのはは、話に付いてこれていない。

9歳児と8歳児には、色々と衝撃的過ぎる？

「ここからは、冗談で流していい話じゃないから、心して聞いてほしい。

きつと、なのはが初めて魔法を見た時と同じくらい衝撃的な内容になる」

「そ、そんなに、すごいの……?」

高町なのはが、息をのんでいる。

魔法に出会った時の驚きは忘れていない模様。

「私達は、恐らくジュエルシードで他の世界から飛ばされてきた、転生者」

「……へ? 転生?」

「ジュエルシード、で……?」

ユーノ・スクライアと高町なのはの目が点になった?

フェレットの表情は、やっぱり分かり辛い。

「なのはが初めて、動物病院で封印した時のジュエルシードを見せてもらっていい?」

「え……？ う、うん」

『Put out』

(妹達、解析をお願い)

ジュエルシード、シリアル21。

原作ではユーノ・スクライアを襲っていた毛玉。

これが主に対応する可能性が極めて高い。

こちらも防壁突破に挑戦。

成功した場合、構造の複写や解析へ。

「うーん、やっぱり、封印されているとよく解らない。

もう少し見てみたいから、話が終わるまで出してもらっていい？」

「うん、いいよ。」

「だけど、私達って、ひよつとしてはやてちゃんも？」

「はやては違う。」

私が直接会ったことがある転生者は、過保護な人だけ。

あと、さつき見せてもらったシリアル16が過保護な人に対応しているみたい」

「出歩かないみたいなのに知り合ったのは、そんな理由が。」

確かに、ジュエルシードの特殊さを考えると有り得ないとは……」

ユーノ・スクライアは、ジュエルシードで、の部分が気になる様子。「でも、それってそんなに衝撃的……なのかな？」

転生って、えーと、生まれ変わりとか、そんな感じ、だよな？

「漫画とかゲームで見た事あるし、魔法があるならあってもおかしくないんじゃない？」

高町なのはは、転生の方が気になっている？

「物語で見かける題材。」

「空想上だと思っていた物がまた現実にあつた、みたいな感じ？」

「衝撃的なのは、ここから。」

「私達のいた元の世界では、この世界はアニメの世界として描かれている」

「へ？」

「つまり、物語の中に来た、という事？」

いくらジュエルシードが願望を叶えると言っても、そんな無茶苦茶な……」

2人の目が、再び点に。

ユーノ・スクライアはまだ考察を続けているけど、納得は出来ていない様子。

「だけど、これを否定する材料が無い。

ジュエルシードが原因らしいと気付いたのは最近。

これが正しければ、21人の転生者がいる事になる。

そして、転生者は何らかの願いを叶えてもらっている可能性が高い。

例えば、私は冷静さを望んで、感情を失った」

「そ、そんな理由で感情を感じられなくなっちゃったんだ……」

「ジュエルシードが、そんな風に働くなんて……」

高町なのはとユーノ・スクライアが絶句してる。

だけど、これが現実。

理解出来るけど、納得出来ない様子。

「私はこの世界を描いたアニメを知っていて、この世界に来ることも知らされていた。

そして、元々は魔法が無いか、知られていない世界。

ジュエルシードがあったという事は知られていなかっただけの可能性は高いけど、それはここでは問題じゃない。

私は魔法を使いたいとも望んで、今は魔力を持っている。

だから、魔法が使えている」

「そ、そうなんだ……という事は、私の事も知ってたの!？」

「僕の事も!？」

やっと気付いた。

2人にとっては、一番重要な点なのに。

「アニメだから、語られていない部分は知らない。

それに、私を知るアニメとは異なる部分も色々ある。

アニメの情報が全て正しいと思うと、判断を誤る可能性が高い。

だから、フェイトの事情について、今は何も言えない。

仮にアニメと同じだったとしても、フェイトの事が気になるなら本人に聞いた方が良い。

アニメと同じ事情であれば、2人が思っている以上に重い話になる。

聞くときは覚悟を決めてからの方が良い」

「そ、そう、なんだ……」

高町なのはは、ちよつと落ち込んだ。

重い話と言われたから？

覚悟不足？

「私の知る情報ときつきの話を比較すると、ジュエルシードの情報は、概ね一致してる。

ユーノが発掘して、輸送中に何かあつて、海鳴市付近に散らばつたという点は同じ。

その間の詳細な情報は、アニメでは描かれてない。

だから、管理局に通報済みだとか、渡航許可を取っているとか、今管理局が何をしているかとか。

この辺は初耳」

「つまり、アニメの情報は大体正しくて、細かい情報は抜けていると見ていいって事になるんだね？」

ユーノ・スクライアが、妙に落ち着いた。

自分が犯人じゃないと確信される根拠を持つてると思えたからかも？

「今までの事件で相違点を言うと……」

例えば、今日の戦い。

フェイトが使ったフォトンランサーの軌道反転は2作目の技で、今はまだ1作目の時期。

そもそも、その前に上空から攻撃された時点で勝負が決していたはずだった。

なのはもユーノも、負傷しないはずだった」

「僕が弱くなってるか、アルフって使い魔が強くなってるって事!？」

「フェイトちゃんが強くなって……でもでも、私も強くなってる!？」
今日の戦闘だけを見れば、正しい認識。

ユーノ・スクライアの負傷は、搜索の負荷が上がっていることが原因かも。

「だから、アニメの話が全て真実だとは思わない方が良い。

他に、レイジングハートやバルディッシュ、バリアジャケットの形は、テレビ版ではなく映画版という差もある。

だけど、一応希望的な情報を。

アニメでは、テレビ版も映画版も、最終的になのはフェイトと敵対関係ではなくなっている。

辛い事もあるけれど、乗り越えれば未来はきつと掴める」

「そっか……うん、がんばる!」

主は、だいぶぼかした。

それでも、高町なのはのやる気が急上昇。

「でも、一応って言う事は、悲観的な情報もある、という事だよな？」

何に気を付けるべきなのか、知っていたら教えてほしいんだ」

ユーノ・スクライアが、快調に考察を深めている？

男らしいフェレット。

外見と中身が違い過ぎて、何だか違和感。

「それを伝えるために、会いに来た。

一番気を付けるべきは、転生者」

「へ？ つまり、アコノちゃんたち？」

「自分で自分に気を付けると言いに来た、という事になるんだけど」

再び、高町なのはとユーノ・スクライアの目が点に。

主は自分達が不審者と主張。

いろんな意味で怪しい。

「ここをアニメの世界だと思っている人がいる事に警戒しろ、という事。

物語の中だから何をしてもいいと思っている人がいるかもしれない。

自分が主人公になるんだと思っている人がいるかもしれない。

アニメの人物、つまり、なのはやアリス、すずか達に異様に執着する人がいるかもしれない。

ここを現実だと思っていない人の暴走は、きつと怖い。

私自身もアニメの設定に惑わされて、普通ならしない選択をしてしまふ可能性がある」

「そ、そういうえば、お店に嫁とか言い始める変な人が来たことが……」

高町なのはは、間宮萬太の事を忘れていないらしい。

微鬱イベント回避の立役者。

でも、それは原作を知らなければ分からない。

「多分、その人も転生者。」

心を操ったりする能力を希望していた場合、悲劇的な事になる可能性が高い」

「そ、それは嫌だ」

高町なのはの顔が引きつった。

操られる事が碌な結果にならないという理解はある模様。

「何か、そういう能力に心当たりがある？」

ユーノ・スクライアは、ものすごく心配そうな雰囲気。

シヨタコンや薔薇ウホツの存在を知らない？

「元の世界で有名なのは、ニコポとナデポ。」

ニコポは、笑みを向ける事で相手を惚れさせる能力。

ナデポは、頭を撫でる事で以下同じ」

「そ、そういうえば、こっちに手を伸ばしてきてた……あううくくく」

「うわっ!? なのは、いきなり手を離さないで！」

「だけど、何か、対策は……!?!」

高町なのはが頭を抱えた。

それでは防げない。

今防いでも意味が無い。

むしろ、放り出されたユーノ・スクライアが犠牲に。

「分からない。ジュエルシードが叶えた結果次第だから。

どんな形で実現しているか、想像もつかない」

「正常に働かない事に期待するしかないのか……」

「だ、大丈夫かなあ」

ユーノ・スクライアは落ち込んでいる。

高町なのは不安そう。

不安は理解出来る。

むしろ、お姉様に効いたら危険。

明確な脅威と成り得る。

下衆の笑顔ニコボで宇宙がヤバイ。

「知っていれば、撫でられるのを避ける事は出来る。

笑みは……正常じゃない事に期待するしかない。

あと、これは他の人達にも伝えた方が良いと思う。

アニメの登場人物のファンが転生したなら、何らかの行動に出ても

おかしくない」

「うん、すぐにでも！」

「ちよ、ちよつと待って！」

これを教えると、魔法とかにも気付かれる可能性が……」

走り出しそうな高町なのはの足に、ユーノ・スクライアが纏わりつ

いた。

フレットの姿でなければ、セクハラ認定。

「転生者の特殊な力は魔法と似たようなもの。

それに、魔法が使える転生者も多いはず。

一緒に教えてしまった方が、トラブルを回避しやすい」

「ま、魔法の秘匿が……」

ユーノ・スクライア、がっくり。

今までの秘匿の努力が、一部水の泡に。

でも、言ってしまうえば後が少し楽になる。

「魔法以上の問題が発生している以上、些細な事。

アニメでも2作目の最後で教えていたはず。

ユーノは時期が早まったただけだと思って諦めた方が良い」

「そ、そうなんだ……いずれ言っちゃうのか……」

「うん、わかった。

それで、登場人物って、誰がそうなの？」

高町なのはは、晴れ晴れとしている？

秘密を打ち明ける口実。

小学生に隠し事は辛い。

ぼろも出ていた。

「高町家は5人全員。

月村家は姉妹とメイド2人。

後は、今のところアリサとユーノ。

分かりやすく言えば、旅行に来ている全員がそう。

この旅行も、アニメで描写されていた」

「フェイトちゃんとアルフさんも、だよね……」

高町なのはは、やっぱりフェイト・テストアロッサが気になる模様。

どんな時も忘れない。

流星未来の嫁。

「そう。今後まだ増えるはずだけど、それは追々。

例えば、管理局の人は来るだろうけど、アニメの人物が来るとは限らないから、変な先入観は無い方が良いと思う。

細かいところでは、ユーノを治療した動物病院の院長もそう。

あと、はやては2作目で登場する人物。なのはと知り合うのはもつと先のはずだった」

「そ、そうなの!?!」

「そう。そもそも、転生者とは関係のないところでも物語は変化して
る。」

旅館内でアルフがなのはを見に来なかった事もそう。

アニメでは、それがアルフとの初接触のはずだった」

「そうか……未来をより良いものに変えることが出来る、という事でもあるんだよね?」

ユーノ・スクライアが立ち直った。

あえて前向きに考えるようにした模様。

「そうとも言える。」

でも、はやてにはまだ教えなくてほしいし、はやての事は管理局の人に会っても言わないでお願いしてほしい」

「え、そうなの？」

一緒に教えた方がいいんじゃない……」

高町なのはは、意外そう。

自分には教えたのに何故、と言う感じ？

「はやては、分かりやすく言えばロストログアの犠牲者。」

私は、はやてを守るために動いている」

「それなら、管理局に協力を求めて……」

ユーノ・スクライアの提案は、本来は正しい。

裏の事情なんて知らない以上、これ以上は踏み込ませない方が良さそう。

無限書庫に関するまでは、部外者扱いが無難？

「詳しい事はまだ言えない。」

でも、近いうちに間違いなく協力を求める事になるから、その時に全てを話す。

管理局は、アニメと同じなら、ある提督が既にこの情報を知った上で動き始めているはず。

これは、地球を巻き込んで破滅する可能性すらある、ある意味ジュエルシードより危険な事件。

管理局でも過激な人に知られれば、問答無用でこの近くにアルカンシエルを打ち込まれかねない情報もある。

迂闊に動くわけにはいかない」

「う、うん、わかった……」

「そんなに大変な秘密なんだ……わかった。僕に出来る事なら協力する。」

だけど、アニメの最後は悲劇になったという事？

それなら、守りたいというのもわかるんだけど」

高町なのはは、微妙に納得していない。

でも、やっぱりユーノ・スクライアは優しい。

この時点で協力を申し出るのは意外。

「ほとんどの人は助かる。」

だけど、助からない人もいる。

過保護な人は、その助からない人を助けたい。

私は、はやてに仲間意識を持った。

未来を変えたい理由は、この程度」

「でも、未来を変えたいという事は……」

ユーノ・スクライアが前向きじゃなくなった。

地球の破滅は重すぎた？

「最悪の場合、もっと悪い結果になる可能性もあるのは分かる。

だけど、転生者の私達がいる。

手出しをしなくてもアニメとは異なる部分も発生している。

私と過保護な人だけが関わらなければアニメ通りになると、無邪気に信じられない。

それなら、望ましい未来を掴みとる」

「アコノちゃんって、意外に熱血？」

「そうだね。感情が無いっていうのが嘘みたいだ」

高町なのはとユーノ・スクライアが驚いてる。

熱血系無感情という主の本性を理解していなかった模様。

普通は理解出来ないから仕方ない。

「私の行動は、理性と打算。

はやて達がいる未来の方が良いと考えているだけ」

主に報告。

ジュエルシールド2個、構造及び記録情報の複写が完了。

シリアル21が主と対応していることも確認済み。

後は、取得した情報で解析可能。

(ありがとう)

「そろそろ宿に戻る方がいい。本当に体が冷えてきたし、睡眠も大切
なはず」

「え……うん、そうだね。だいぶ冷えちゃった」

新春企画：とある〇〇の正月風景

◆◆ #1 ◆◆

エヴァ：それでは、始めようか。あけまして、おめでとう。
アコノ：おめでとう。

はやて：おめでとうや。

エヴァ：さて、ゲームの基本ルールは分かっているな？

違反者は罰ゲームだ。

はやて：うん、大丈夫や。

アコノ：あつちの人達が、指を咥えてる。

はやて：参加出来へんから、詰まらないだけや。

エヴァ：ルール上、喋れないんだ。察してやれ。

但し「出会っていない」をやり過ぎると、私とはやてが話せなくなるからな。

この3人の中の誰かが出会っていればいいとするぞ。

はやて：この時はまだ、エヴァさんと会ってへんかったな。

アコノ：それでいい。

エヴァ：なら、正月らしい話題からだな。

何とか無事に年を越せたな。いいことだ。

はやて：無事って言うてええんか？

アコノ：こうやって話せる程度には平和という事。

無事と言うて問題ないはず。

はやて：酷い目にあつとる人も、結構いるやろ？

エヴァ：あんな屑共など、どうなろうが知らん。

アコノ：後始末に駆け回っている人達の方が大変。

はやて：この前来た人に、胃薬を渡してへんかったか？

エヴァ：あれはあいつ用じゃないぞ。

アコノ：あの人は結構したたか。問題ない。

はやて：そうなんか？ 問題ないって言葉を信じてええか？

エヴァ：はやて、騙されるな。

胃薬の宛先の人物に問題が無いとは言っていないぞ。

はやて：ほ、ほんまや……なら、よく連絡してくるあの人は大丈夫なんか？

エヴァ：本人は楽しんでる様だし、一番問題無いだろう。

手下や周囲は知らん。

はやて：うわあ……みんなの胃が心配や。

◆◆ #2 ◆◆

エヴァ：温泉に行っている頃だとこの程度の人数か。

今となつては随分少なくて感じるな。

はやて：しやあないな。私がまだ1人やつた頃やし。

でも、チャチャちゃんやチャチャゼロさんやチャチャマルさんは、参加権あるんよ？

エヴァ：この時点では表に立ってないからと言って拒否されたからな。

意味は分かるんだが。

アコノ：あの人達が参加できない縛りだから。

居ただけと言う意味では、割と近い。

はやて：そうかあ。まあ、あの様子を見ると、遠慮したくもなるのかな。

エヴァ：まだ羨ましそうにこっちを見ているのか。

いつまでそうしているつもりだ？

アコノ：ゲームに全員参加しても混沌とするだけ。自重も必要。

エヴァ：まあいいさ。どうせ、すぐにもっと賑やかになるんだ。

派手なのはその後で考えるか。

アコノ：戸籍とかのゴタゴタが終わったら、次は家の手配？

はやて：2人とも、それは言っておえんか？

アコノ：原作では、3作目でミッドチルダ在住。

戸籍や家に関する手続きや手配は必要だったはず。

エヴァ：暗黙的にだが、必要な事ではあるぞ。

どう賑やかになるかも、はつきりとは言っていないしな。

はやて：んー、なら、まあええんかな。続けよか。

アコノ：妹達が、みんなの希望を纏めて調査してる。

戸建てと集合住宅が検討対象だけど、一長一短に見える。

エヴァ：だからマンションを建物やらの権利ごと買ってしまえと言っているんだ。

その方が早いだらうに。

アコノ：それもどうかと思う。

はやて：やけど、それなら中は全部好きに弄れるやろ？

壁抜きも出来るやろうし、ありやと思うよ。

アコノ：それも見ているらしいけど、まだいいものは見つからないみたい。

はやて：どつちにしても時間がかかる話やな。引っ越しはだいぶ先やろか？

工事も必要やろうし。

アコノ：既存の建物を買っても、それで満足すると思えない。

エヴァ：そうだな。あの2人の部屋の予定を聞いてみる。

あれでは、どう聞いても……

はやて：あー、あの2人な。

エヴァ：あんな部屋にして、あいつらは何をするつもりだっ!?

アコノ：ナニをするつもり、としか思えない。

エヴァ：正気か!? あの2人はあれで本当にいいのか!?

はやて：まあまあ、仲はええみたいやし。

重要な人や、あれくらいは目をつぶらなあかん。

……これくらいは、言っただええよな？

アコノ：エヴァの方がギリギリ。

◆◆ #3 ◆◆

はやて：……ここで騒いでも、ある程度落ち着いたら私らも引っ越しするんは決定事項や。

荷物、まとめとかなあかな。アコノさん、知ってたらコツ教えてな？

アコノ：私は荷物が少ない。あまり参考にならない。

エヴァ：あの少なさは驚異的だ。タンスの中程の段しか使っていないのかったのはどうなんだ？

アコノ：上や下の段は使いにくい。使える範囲に使う物を置くのは普通。

はやて：そうかあ……やけど、未だに信じられへんよ。

エヴァ：何をだ？

はやて：あの人達と一緒になんやろ？

アコノ：そう。嫌？

はやて：馴染めるんやろか、とか、文化の違いで苦勞せえへんやろか、とかな？

エヴァ：あいつらの日常生活を聞いた事があるだろうに。

それほど大きな違いがあったか？

はやて：日常生活の小さな差異が……とかは、ありそうや。

些細な事で揉めたくあらへんよ。

アコノ：大丈夫。全員集まったら……：人数は言っていない？

エヴァ：出来事ではないし、人名や役職でもないな。

アコノ：じゃあ、言う。24名になるはず。

名前の数で数えて、外見が人間でない者も含めてみた。

はやて：24人？ えーと……：チャチャちゃんとかも入れるんか。

それなら確かに、何人つて言えばええかもわからへんな。

アコノ：エヴァの従者や使い魔達は除外した。

あの人達は、近所のおじちゃんおばちゃんおにいさんおねえさんと呼びたい。

それに、そもそも人数が多すぎる。

エヴァ：だが、外見が人間でない者、か。表現としてはギリギリじゃないか？

アコノ：エヴァは本が本当の姿。

エヴァ……：そうだな。

はやて：いろんな人がおるし、みんな数に入れてええよ。

チャチャちゃんやらチャチャゼロさんやらも数に入れてるわけやろ？

エヴァ：とにかく、それだけの数が集まるんだ。日本出身の連中が……私は含めていいのか？

まあいい、多く数えれば7人だ。3割は同じ文化出身だと思えば気が楽だろう？

はやて：元男の人……人？

まあええか。元男の人も含めたら、その半分以上が男の人やよ？

エヴァ：くっ……

アコノ：大丈夫。私はちゃんと女性だから。

◆◆ #4 ◆◆

アコノ：あのロストログアの扱いは、本当にあれで良かった？

エヴァ：随分とギリギリな話題だな。どう答えればいいんだ？はやて：何をどうしたか、って事には触れられへんな。

エヴァ：そもそも、どれの事だ。

ジユエルシードと闇の書以外にも、いくつかあるんだぞ。

はやて：そんなにあったんか？

エヴァ：例えば、某魔導炉の心臓部もそうだ。

アコノ：そういえば。

なら、あえて名前を出さず、予定外だったもので。

エヴァ：予定外……今はあそこに置いてあるあれでいいか。

結果だけで言えば、良かったんじゃないか？

前提条件に思うところは多々あるが。

はやて：やけど、あれのおかげで大変な目にあつた人も多いんやろ？

本当に良かったんやろか？

アコノ：そう。その辺はどう思う？

エヴァ：扱えもしない火に集る虫が居なければ、燃え広がる事も無い。
いい。

私がいる限りは虫以外の犠牲者を出させんから、いいと思うが？

アコノ：過保護の裏側。

はやて：やっぱ、敵には情け容赦無いなあ。

やけど、虫を事前に防いでくれとる人達も忘れてたらあかんよ。

エヴァ：お互い様の部分も大きいぞ。

あいつら自身の利益のために防いでいる部分も大きいからな。

アコノ：その辺はセーフ？

エヴァ：誰が何をしているかは言っていないぞ？

どんな関係かも言っていないから、身分にも触れていないしな。

はやて：えらいギリギリやなあ……

アコノ：一応、ルールには触れてないとは言えそう。

エヴァ：だがまあ、この辺が限度だろう。

好き好んで罰ゲームをしたくないぞ。

アコノ：残念。

はやて：やけど、私はそれを見たこともないんよ。

そろそろ見せてくれてもええと思うんや。

エヴァ：ああ、そうだったな。

はやて：私は参加できる状態やなかったしな。

今同じことがあっても、まだ参加させてくれへんやろ？

エヴァ：そうだな。

アコノ：はやては、まずは魔法の練習。

参加はそれから。

エヴァ：条件付きなら、4番目を目指せる戦力のはずだ。

寄って集って鍛えてやるぞ？

はやて：お、お手柔らかに頼みます……

エヴァ：急ぐ必要は無いんだ、ゆっくりやればいいさ。

アコノ：でも、今あれを見せるのは問題？

エヴァ：ゲームが終わってからだな。

それで良ければ、すぐにでも連れて行ってやるぞ。

はやて：ほんまか？ 楽しみやな。

アコノ：あっちの人は、何時でもいいから来てほしいと言っている。

返事が早い上に随分アバウト。

エヴァ：暇なんだろう、察してやれ。

初詣代わりに今から行くか？

アコノ：でも、あれを詣でる……？

はやて：歴史的にも、技術的にも、すごい物なんやろ？

拝んでもええと思うよ。

エヴァ：まあいい、どうせ見に行くんだ。拝むかどうかは自由だ。

ああ、そつちで指を啜ってる連中も来い。気になるだろう？

はやて：ええな、みんなで行こか。

アコノ：それなら、ゲームはここまで。

戸締りを忘れずに。

無印編14話 黒歴史

主と高町なのはの会話が終わる頃。

世間の日付は既に変わり、一般に深夜と呼ばれる時間帯。

お姉様は、別荘にある部屋で落ち込んでいた。

状況としては、ジュエルシードの解析が概ね終わり、結果の報告をしたところ。

(エヴァ、話が終わった)

(ああ、アコノか……随分ユーノを苛めていたな)

(弄り甲斐のあるキャラ。)

感情があればあの反応は楽しいのだろうか、と思える。

でも、エヴァはあまり元気がない?)

(ああ……衝撃の事実が判明してな……)

ジュエルシード、シリアル16の構造解析が、概ね終了。

結果発表。

お姉様は衝撃のあまりorzとなった。

今ここ。

(ジュエルシードに、何か問題でも?)

(ああ……ちよつと、な……)

アルハザード時代に消失した、お姉様の実験用デバイスに酷似。

通称青。

高出力型で、主に比較的安定した魔法の高負荷実験や過負荷実験で使用。

その分、実験用デバイスなので安定性が低め。

インテリジェントデバイスだけど、本来は魔法の発動制御及び安定化に特化。

実験用と割り切った構造。使用魔法の選択は手動。緊急停止のみ自動。

実験用の、未完成や怪しい魔法を多数格納していた。

アルハザードの貴族が行った実験に貸与、空間崩壊に巻き込まれて消失。

(つまり、どこかに流れ着いて、それを元に複製でもされた?)

制御特化だった知能に改変を確認。初歩的な祈願型の発動制御機構が組み込まれている。

そのための人格追加も確認。あまり性格はよろしくない。

魔法の情報もおかしい。正しく魔法を選択出来ると思えない。

祈願検出部分も不安定。異様に高感度になったり、雑音で異常な結果を出したりと、使い物にならない水準。

出力は増強。ただでさえ高負荷・過負荷実験用の高い出力が更に強化されているけど、不安定。

魔法の制御も異常。制御力劣化に加え、出力増強と知能改変による制御力低下。暴走する要素が満載。

安全装置は出力の増強や知能改変の影響等々で、役に立つ状態ではなさそう。

実験用魔法の多くはそのまま、更に色々な魔法が追加されている。特殊な効果を持つ物、実験的と思われる物も少なくない。

この結果、願いが叶うが不安定と言われる様になった?

(だけど、物語の世界に飛ばすとか、そんな事は可能?)

時間魔法で並行世界や可能世界と思われる別世界の観測例がある。

空間魔法で新しい宇宙を生成する事は、理論的には可能。

ネギまの幻想空間の再現魔法がある。ここがある種の精神世界の可能性がある。

追加された魔法の解析は出来ていないけど、特殊な物が含まれている可能性がある。

厳密でない再現、似た空間の作成であれば、不可能と言い切る事は出来ない。

物語が存在する世界、つまり前世が作られた世界と考える事も出来る。

(そう。それで、エヴァは自分の責任だと)

過去の自分が作った物で過去に移動するのは、因果や運命の問題が発生。

お姉様が作り、失ったデバイスが原因で過去に戻ったのであれば、

それは運命。

だけど、お姉様の前世に海鳴市は無い。

この世界には、リリカルなのはもネギまも無い。

過去ではなく、何らかの別世界と認識する方が自然。

(それなら、少なくとも私達に付いての責任は無いはず。

恐らくこの世界の辻褃合わせに利用されただけ。

落ち込んでるのは何故?)

自分の研究が悪用されるとどうなるかの実例。

危険物の管理が甘かった事の反省。

半ば遊びで作りかけた魔法を大真面目に調べられた事に対する羞

恥心。

分かりやすく言えば……

自分の黒歴史を見て悶える、の図。

(そう。こんな時、どんな顔をすればいい?)

指をさして、笑えばいいと思うよ。

(それは色々な意味で無理)



翌朝。

食事を終えた主は、八神はやてを部屋に残して高町家、月村家、アリサ・バニングスのいる部屋へと来ている。

なお、月村家のメイドであるファリン・K・エアリヒカイトが八神はやての相手をしている。

八神はやてを1人にさせているわけではない。

そして、高町なのはと主により、魔法の話、ジュエルシードの話、そして、転生者の話が行われた。

主と高町なのははデバイスと防護服を展開したり、飛行魔法で浮かんだりして、魔法の存在を分かりやすく見せてもいる。

「なるほど。確かに、そういう技術がある事は理解した。

転生者なる人物にも、確かに心当たりがある。

警戒が必要だというのは、納得できる話だ」

「そうね。あたしも嫌な目で見られた覚えがあるから、嘘じゃないと思うわ」

「うん。どうしてって思ったけど、そういう事だったんだね」

高町士郎に続き、アリサ・バニングスと月村すずかが頷いている。直接見た事のある人達は、全員が納得の表情。

「それと、ジュエルシールドか。危険だという事は分かった。だけど、なのは。」

そういう危険な事を、何も言わずにやっていたことは駄目だ」
「それは思う。」

アニメの原典の設定が生きているなら、高町家は異常なレベルの剣術家の集まり。

その力を借りられたらとても頼もしかったはず」

高町なのはが、高町士郎に怒られた。

でも、主はそれを言う前に、とらいあんぐるハートの設定が有効か確認する方が無難。

「え？」

うちって、剣術の道場があるけど……そんなに凄いの？」

そもそも裏の話を知らない高町なのはは、この時点で脱落。

「御神真刀流、小太刀二刀術。特に、不破の家系には裏が伝えられているはず。」

この設定は、この世界でも有効？」

「あ、ああ、確かにそうなんだが……転生者の情報は凄いな」

「お父さん!？」

ほ、本当なんだ……」

少なくとも、入り口は有効だった。

高町士郎が、あっさり認めた。

もっと隠されると予想していたのに。

「御神流の表は護るための剣で、裏は暗殺剣。神速の使い手レベルになると、空を飛ばれない限りは魔導師を剣で相手する事も不可能ではないはず。」

確か、神速は知覚を限りなく高速にする技術。行動も早くなったかも？

銃弾を避けるレベルだから、瞬間的な速度ならフェイトを超える水準と思える」

「フェイトって人の能力は分からないし、魔導師の戦闘力も分からないけど。」

御神流についての説明は概ね正解だ。

但し、神速は早く反応できる事が大きいね。

動きそのものも早くはなるけれど、知覚に比べたら小さなものだよ」

全部認めちゃった。

お父さん大丈夫？

隠してなかった？

魔法の存在のせいで、これくらいは些細な事？

「だけど、士郎さんは引退、恭也さんは膝を痛めていた？

美由希さんは確か天才的だけど遅咲きだったような……？」

「大体あっている。そこも知られているのか」

「私って、天才的だっけ？」

高町恭也は頷いているが、高町美由希は疑問顔。

主に、自分の評価が気になった模様。

「覚えるのは遅いが、一度覚えたら忘れない。

全てを覚える事が出来れば、その時が大成する時だろう。

遅咲きの天才という表現は、間違っていないと思うが」

不思議そうな高町美由希に、兄の高町恭也が補足説明。

少なくとも、主の説明は訂正されてない。

「そっか。ちよつとは認めてもらえてたって事かな？」

「そうだな」

高町恭也に褒められたせい、高町美由希は嬉しそう。

妙に距離が近いのは元18禁のせい？

「……ひよつとして、恭也さんの膝も治せるかも？」

Land der Heilung
ロードカートリッジ、癒しの大地」

ぽしゅつ、という軽い音と余剰魔力の煙。

足元に現れた三角形の魔法陣を見て、一般人達はデバイスや飛行魔法を見せた時と同じくらい目を見張っている。

「どう？」

「あ、ああ……確かに、痛みが減っていく。

凄いな、こんなことも出来るのか」

そういえば、防護服や飛行は魔法陣が出ない。

高町恭也は棚ぼたで回復。

「まだまだ、練習中。

極めたら治せるのかもしれないけれど、今はこれが精いっぱい。

効果がある間はそこに居れば、もう少し良くなるはず」

「ありがとう、充分だ」

主の次の標的は、月村忍と月村すずかの姉妹。

この2人は、他の人達より落ち着いている。

やっぱり、ひよつとしそう。

「……言わない方が良い？」

ここまでみんなぶつちやけてるから、私の知識が間違っていないのなら、言ってしまった方が楽になれる。

それに、ずっと友達を続けたいなら、いつか話すことになる」

「私……いえ、私達の事ね？」

姉だからか、月村忍が対応。

達、にどこまで含んでいるか、よく解らない。

「そう。

元々裏側の人がいる。

魔法と言う非現実的な物を使う人もいる。

そこに何か加わっても、今更の話」

「そうね……恭也、いい？」

「忍がいいなら構わないけど、すずかちゃんはいいいのか？」

「え……うん、話した方がいいと思う。

なのはちゃんの秘密だけ聞くのは不公平だと思うし、ずっと友達でいたいから」

ぎ・たらいまわし。

月村忍、高町恭也、月村すずかときて、最終的に視線は月村忍に。

「そうね……この際だし、言ってしまいましょうか。」

まず、アコノちゃんから話してみて。

私達が話すより客観的だと思うし、説得力も違うでしょ」

月村忍が、主に説明を任せた。

たらいは主に。

どの程度知られているかの確認と推測。

「わかった。間違いがあつたら訂正してほしい。」

月村忍、月村すずかの2人は、夜の一族という、ある意味で吸血鬼に近い種族の末裔。

高い身体能力と、20歳を過ぎたら成長や老化が遅くなるという特性を持ち、不老でも不死でもないけれど、人間よりかなり長い時を生きる事が出来る。

その代わりに、定期的に異性の血液を飲まないと体調を崩す。

ノエル・綺堂・エーアリヒカイトとファリン・綺堂・エーアリヒカイトの2人は、自動人形。

人間ではなく電気で動くロボットに近い存在。1回の充電で20時間ほど動ける。

右腕にロケットパンチは仕込み済み？」

「だいたい合っているわね。」

でも、ロケットパンチの構想はあつたけれど、仕込んでないわ」
浪漫パンチが無い。

修理したはずの月村忍に言明された。

残念。

「そう。あっているならよかった」

「よくないわよ！」

なのははともかく、すずかは気配すら見せてなかったじゃないの！」

主の確認完了に、アリサ・バニングスが噛み付いた。
夜の一族について、気配くらいはあつたはずなのに。

「体育の授業で片鱗は見せていたはず。

ちなみに、アリサは一般人。

表の人間として、裏の人のボケにツツコミを入れてほしい」

「むちゃくちゃ難しいじゃないの！

あたしには本当に何も無いの!?!」

「アニメだと、なのはを心配する一般人の親友という立ち位置。

アニメの原典だと、アリサ・バニングスと言う人物は存在しない。

アリサ・ローウエルと言う幽霊に対応するはず。

I Q 200以上の天才だけど、言うのが憚られる事件で幽霊になった人物」

「なっ……そ、それはそれで何か嫌ね。頭はいいみたいだけど。

あんたが憚られるって言うぐらいなんだから、よっぼどなんですよ？」

アリサ・バニングスのテンションが落ちた。

主が慮っているのが気になった？

「アニメの原典のシリーズ中一番悲惨な人物で、18禁のゲー「わー！

わー！ なんかわかっちゃったからそれ以上言わないでー！！」

……聞きたそうだったのに」

「ねえねえ、アコノちゃん、18禁って「なのは聞かない！ 聞いちゃ

ダメー!!」……えー」

「簡単に言うてエ「あんたも説明しない!」……なのはは不満そう」

アリサ・バニングスが騒々しい。

理解出来たアリサ・バニングスがませている。

本当は高町なのはの様に理解出来ないのが、年齢的に正しい。

主は大丈夫。元18歳以上。

「いやいや、だいたい想像が出来るけれど、あまり聞かせていいものじゃなさそうだ。

これ以上はまだ秘密にしておいてくれないか」

だけど、アリサ・バニングスの妨害はある意味見事。

高町士郎の判断は正しい。

無印編15話 真実の虚像

「危険性や自分たちの秘密に転生者の危険性を全員が把握したところ
で、だ。」

アコノくんに魔法を教えた人物は、優秀な魔導師なのかい？」
主と原作の人物たちの会話は続く。

主導は、とりあえず大人代表としてか、高町士郎。

「恐らく。」

魔力の量や知っている魔法の内容はともかく、制御については自信
がある」と

「それなら、なのはもその人に教えてもらおうことは可能かな？」

高町士郎は、高町なのはの師匠を求めている？

ユーノ・スクライア
フェレットでは頼りない？

元凶に頼るのは良くないと認識？

「あまり人前に出たがらない研究馬鹿だから、いい返事を貰えるか分
からない。」

でも、ノエルさんを調べたいと言っていたはず。

それを餌にすれば、来てくれるかも」

(ちよつと待て、アコノは私を何だと思っている。

過保護な変人だの研究馬鹿だのと好き放題言っつて、今度は何を言い
出すんだ)

(過保護な研究馬鹿を釣る方法)

「技術者としての腕は、どう？」

月村忍は、技術系の人種としてお姉様を認識した模様。

デバイスにもきつと興味を持つ。

「かなり高い。このデバイスもその人が作ったはず。

きつと、解析してスペックを上げる位は平気でできる」

主の信頼は、とても正しい。

けど、お姉様の解析は知的好奇心を満たすためと予想。

改造するなら、きつと魔改造。

「そう。ノエル、見てもらってもいい？」

「はい、お嬢様」

頷いちやつた。

それでいいのか自動人形。

「と言うわけで、お師匠はさっさと来るべき」

(ちよつ、ちよつと待て！ そんな餌で私が釣られくあつ!?)

空間が裂け、そこからお姉様とチャチャマルが落ちてきた。

お姉様は体勢を立て直す余裕も無くうつ伏せで落下。

その背中にメイド姿のチャチャマルが正座で追い打ち。

「お、お前ら……まずはそこをどけこのボケロボ！」

「はい、マスター」

チャチャマルは恭しく礼をしながら、その実メイドにあるまじき体勢から立ち上がる。

お姉様の手を取り立ち上がらせる姿だけは、忠実な僕らしく見える。

「クソツ、アコノもそんな餌で私を呼ぶな。」

変人だの研究馬鹿だの、好き放題言いおつて」

「でも、一番来てくれそうだった」

お姉様は困った顔で主を突いてる。

周りの人たちは啞然としてる。

「子供……？」

「お師匠……？」

最早誰の呟きかもわからないというか、どうでもいい。

表情を見る限り、全員同じ感想の模様。

困惑は分からなくもない。

見た目的に、お姉様は10歳程度。

実年齢10歳だけど少し年上に見える主よりも、小さい。

「ん？ ああ、こんなナリだが、研究者歴は20年以上だ。ずいぶん長い間眠っていたせいで、記憶は少々怪しいところもあるがな。」

ときに、ユーノとやら。ここではない世界の住人で、ベルカの事を知っているそうじゃないか。

今は、ピリウス歴で何年だ？

どれくらい眠っていたのか、さっぱりわからんのだ」
「ピ、ピリウス歴!？」

古代ベルカでも、中期の頃の暦じゃないですか!」
ユーノ・スクライアが、驚きのせい言葉遣いが丁寧になった。
年上と認識された?

「そうなのか？」

「というか、古代ベルカ中期？」

古代ベルカは5000年前から3000年前くらいのはず。

夜天や宵天の情報を見る限り、アルハザードの崩壊は2000年から3000年くらい前のはず。

その中ほど。

間違っていない感じ。

「ベルカという世界自体、3000年程前に滅んで今は無人世界なんです!」

今は末裔が自治領にいる程度になってるんですよ!」

「なん……だと……?」

「僕が遺跡発掘もしてる歴史好きじゃなかったら、そもそもピリウス歴なんて知りませんよ!」

それくらい前だつてことです!!」

「なんという……」

美しいorzの体勢でうなだれるお姉様。

だけど、口元には笑みが浮かんでる。

楽しんでる。

でも、ユーノ・スクライアは歴史好きだったらしい。

昔の事を知っていきそうな人という事で、お姉様に敬意を表した?

「エヴァ、遊び過ぎ。」

ユーノも、この人は過保護な変人の転生者だという事を思い出すべき」

「へ?」

「……そ、そういえば!」

ユーノ・スクライアは主に言われてようやく気付いた。

言わなければ、お姉様がもつと弄れたのに。

「はははははは、悪かったなぼーや。」

ベルカが減んでいる事は原作の知識として知っている。それについては、やはりそうだったのかとしか言えん。

だが、眠ったのがピリウス歴の頃だというのは本当だ。

そんな昔の話や暦の名前なんて、原作に出てこないしな。

証拠は出せないが、この世界に来てから知った事なのは間違いない」

「そ、そうなんですか……って、いったい何歳なんですか!?!」
きつと、ユーノ・スクライアにとつては重要な点。

昔の事を知っているかどうか分かりそうな質問。

「わからん。」

眠る前に20年程研究者をしていたのは確実なんだが、眠った年も曖昧でな。

そもそも、今と1年の長さが同じなのかも疑わしい」

「正確には、ピリウス歴203年頃と思われまます。」

1年の長さは、地球の1年にかなり近いかと」

チャチャマルに結論を言われた。

誤差は最小で2%以内の計算。

ピリウス歴は、1年おきに閏月を使う豪快な暦。

1年だけで長さを考えると、最大誤差は酷い事に。

「年に関してはそのまま換算しても大きな誤差は無いという事か。

まあ、そういう事らしい。気が向いたときにでも、ピリウス歴で今が何年に相当するか調べてくれ」

「いえ、だいたいは分かります。」

ピリウス歴の元年は、概ね2700年前だと言われて……え?」

「私は2500年ほど眠っていた、という事になるのか?」

「凄いな」

「簡単な算数。」

「誤差は問題にならない程には大雑把な計算。」

「いえいえいえいえいえ、凄いなというレベルじゃないですよ!」

とてもじゃないけど、信じられません！」

ユーノ・スクライアが、見てわかるほど驚いている。
フェレットなのに。

「嘘を言っただろう？」

という事だから、特に月村家とは仲良くやっていきたいんだが
「私達と？ その心は？」

いきなり話を振られた月村忍は、ちよつと意外そう。
理由は想像しやすいのに。

「恐らく長寿で、周囲の人間に残される者同士だからな。

地球で暮らす時の誤魔化し方を教えてもらえるとは有難い。

それに、長く友でいられる仲間候補だ。いがみ合うより仲が良い方が
良いだろう？」

「うん、確かにそうだね」

「すずか、認めちゃうの!?!」

月村すずかは納得できた模様。

納得できないアリサ・バニングスは、やっぱり叫ぶ。

「だって、さっきの話も否定してないんだよ」

「頑張るんだぞ、一般人代表」

お姉様が、再びアリサ・バニングスを弄る？

弄り過ぎると話が進まない。

むしろ現時点で脱線は確実。

「だからそのカテゴライズはやめて！」

……まさか、はやては一般人だけど車椅子仲間だから守ってる、何
て言わないでしようね？」

脱線した。

この場に居ない、一見すれば一般人ぽい人に矛先が向いた。

「それこそ、まさかの話だ。むしろ魔法関連で危うい立場と状況だから
だと思っておいてほしい。

何しろ、はやては2作目でジュエルシードとは異なる古代遺産に関
わり、命に係わる状況に陥る立場だ。

最終戦で、なのは達と共に敵と戦えるくらいの才能持ちでもあるが

な。

ちなみに、なのはは2作目でAAAクラスの敵とやりあい、3作目でS+となる魔導師だ。

素質が原作と変わらなければ、なのはの才能は相当な物だぞ?」

むしろ、映画版が基準なら、テレビ版より上の可能性も。

あなおそろしや。

「S+!」

「それは凄いのかい?」

ユーノ・スクライアが驚くのは解る。

それを他の人は理解出来ず、高町士郎が質問するのも解る。

高町なのはが全く理解していない様子なのはどうなんだろう。

「驚いたユーノが理由を説明すべき。」

士郎さんを含め、地球の人は理解できない」

「僕が!」

ええと、魔導師のランクは、FからSSSまでの11ランクに分けられています。

FからA、そこからはAA、AAA、S、SS、SSSですね。

プラスや^{マイナス}を付けて細分化することもありますから、厳密にはもっと細かいですが。

時空管理局には優秀な魔導師が揃っていますが、武装隊の隊長でもAランクが多いそうですし、AAA以上になれる魔導師は5%もないと聞いた事があります。

S+と言うと、歴史に名が残る様な魔導師もいるくらい、希少で膨大な力を持つているはずです」

「だ、そうだ。」

全く実感の湧かない説明をありがとう、と言うべきか?」

「希少な事以外は伝わっていない。」

プレゼンテーションとしては低評価」

頑張ったユーノ・スクライアの努力は、お姉様と主に不評。

他の人達はやっぱりよく解ってない。

「実際に見たことが無い相手には、説明のしようもないだろうがな。」

ユーノはA相当のはずだが……ランク試験を受けたことはあるのか?」

「僕はそんなに高いんですか!」

あ、いえ、攻撃魔法の適性が無くて、あまり高くないだろうと思って受けていないんです。

発掘の仕事にはあまり関係ないですし」

丁度いい比較対象。

でも、自分のクラスを知らなかったのは低評価。

「なるほど。」

とまあ、単独で異世界へ危険物回収に来る様な人物がAと言われている高いと驚くレベル。

そのはるか上に行く可能性があるのは、程度に思ってくれ。

要するに、一流や超一流と言われる世界に手が届く素材という事だな」

「ふむ、なんとなくは分かった。

だけどその言い方だと、やはりまだまだ原石という事だね」

ようやく、高町士郎は理解した模様。

高町なのはが原石と言う点も間違っていない。

だいぶ磨かれていても、成長の余地は充分。

「そうだな。それで私に教えてほしい、という意図はわかる。

だが、魔力操作の基礎は教えられるが、私に出来るのはそこまでだ。

魔法そのものはユーノが、体術は高町家が教えてやってほしい」

「おや、どの様な意図だい?」

「さっきの話でも分かると思うが、私の技術は古すぎる。

何しろ、2500年前の年代物の様だからな。どれほど変わっているのか分かった物ではない。

アコノの魔法も、古い記憶や仲間が残してくれていた資料を紐解きながら用意している状態だな。

要するに、用途や構造が慣れた物とは異なるミッド式を教えられるとは思えん。

それに、私は本来研究者だ。戦闘の訓練など受けていない。」

魔法戦闘と言っても、なのはとフェイトの戦いを見る限りでは、今でも多少誘導性の強い弾丸程度の物を使う事が多いようだ。

それなら、銃を持つ相手と戦える御神流の動き方を教える事にも意味があるだろう」

「つまり、君自身は戦闘の訓練は施せない、という事だね？」

高町士郎は、いい感じに誤解してる。

お姉様の言い分は、嘘は言っていない。

古いのは事実。今でも通用すると言っていないだけ。

ミッドチルダ式は本当に情報不足。

むしろ教えてほしい。

「魔力の制御方法自体はあまり差異が無いようだし、魔法を使う上で重要な部分でもあるからな。

この点をしっかりと叩き込むのは問題ない。

だが、私は研究者だ。それ以外はな」

それ以外……アルハザード式の訓練を試す？

きつと泣く。

むしろ、殺人機械になる可能性も。不破の血筋的な意味で。

どちらにしても、事件後の日常生活に支障が出る未来しか予想出来ない。

「エヴァ、他の理由もきちんと言っておいた方がいい。

あまり納得していないように見える」

「おや、他にも理由が？」

主の横槍に、高町士郎は不思議そう。

意図としては、別の理由追加による一層の技術隠蔽？

頑張りお姉様。

「本人の前で言うべきでないと思うが……今更か。

先に言っておくが、原作知識だ。間違っているなら反論は受け付けるぞ。

高町家の家族仲がいいのは結構な事だが、両親、兄妹でやけに桃色の空間を作りすぎていて、なのはが疎外感を感じている。

それに、翠屋の開店や士郎の入院等が重なった際、なのはは寂しさ

と共に、いい子じゃないといけないう強迫観念も感じている。
もう少し、構ってやったらどうだ？」

「なるほど……家族として、反省するべきという事だね」
完璧。

お姉様なのに。

でも、夫婦はともかく、兄妹で桃色空間はどうなんだろう。

妹的なヒロインばかりだったらしいとらいあんぐるハートの影響
？

とらいあんぐるハートの的には、血が繋がってないから問題ない？

「あと、なのは。」

「お前はまだ8歳だ。もう少し家族に甘えろ」

「ふえ、私も!？」

この際に、高町なのはの魔改造開始？

むしろ、救済？

「親から子供に甘えさせることは難しい。子供を甘やかすことは簡単
だがな。」

この差は大きいぞ？

だからこそ、子供は甘える事を遠慮するな」

「う……」

「確かになんかいい子ぶつてるというか、そんな雰囲気はあつたわね」

「うん。一人で抱え込むところも、何だかそれを連想させるし」

バツが悪そうな高町なのは。

月村すずかとアリサ・バニングスには心当たりがある模様。

「あうう……が、がんばります。」

でも、私、運動が苦手で、剣術なんて……」

「本当にそう思っているのか？」

自信なさげな高町なのは。

その様子に呆れていても、自信のありそうなお姉様。

何だか対照的。

「だけど、なのはは本当に運動が苦手よ？」

いくら優秀な剣術家の血筋って言っても、限度があるんじゃないの

？」

アリサ・バニングスは不思議そう。

お姉様の自信の根拠は見てるはずなのに。

「ふむ、ではアリサにいくつか質問をするぞ。」

月村すずかの運動能力は、高いと思うか？」

「そりゃあそうよ。体育なんかでもいつも飛びぬけてるもの。」

でも、それって夜の一族とかというのが理由なんでしょ？」

「そうだが、質問を続けるぞ。」

月村すずかと同じ年齢の子供が、月村すずかと同じ様に動くことが出来る場合。その者の運動能力は、高いと思うか？」

「そりゃあ、高いでしょ。」

なのはがそうだって言うの？ 信じらんないんだけど」

「では、最後の質問だ。1週間前、足元の猫に気を取られて転倒しそうになったフアリンを、月村すずかと同じタイミング、同じ方法で支える事に成功している高町なのはの運動能力は、低いと思うか？」

「そ、そういうえば……」

アリサ・バニングスも見ていた光景。

高町なのはと月村すずかの2人で転倒を防いだのは確か。

見ていたと言われているも同然だと気付かない程、アリサ・バニングスは驚いてる。

「とっさにあんな事が出来る人間はまずいない。」

それが可能な人間に素質が無いなんて、私は信じないぞ」

「……ふう。」

なーのーはー、あんたは理数の成績は私よりいい上に超一流魔法使いの才能が有ってその上すずか並みの運動の素質ですって!?

どこに取り柄が無いってのよ！

文系が苦手ってどんだけ完璧超人を目指せば納得できんのよあんなは!!」

アリサ・バニングスの矛先が高町なのはに向いた。

一気に叫び切った肺活量に驚愕。

「だって文系はホント苦手だし才能とか素質なんてわかんないしー」

！」

「ふ、2人とも、駄目だよ、ねえ、ねえってば！」

バタバタと喧嘩の様にじゃれ合っている3人娘。

それを微笑ましそうに見ながら、高町桃子がお姉様に近寄ってくる。

「ふふ、なかなか上手ね。えーと、エヴァさん、でいいのかしら？」

「そういえば、自己紹介もまだだったな。」

私の名は、エヴァンジュだ。

まあ、エヴァとでも呼んでももらえればいい」

「そう、わかったわエヴァさん。」

だいぶ基本的な質問なのだけれど、エヴァさんは、いったい何なのかしら？」

いったい何、と来た。

母の勘？

高町桃子もなかなか鋭い。

「ん？ どういう意味だ？」

「20年程研究者をやっていた、と言っていたでしょう？」

年齢の説明で仕事の期間を説明するのはちよっとおかしいんじゃないかと思つて。

2500年も眠っていたのにここにいる、という事も不思議ではあるんだけど」

「ほう、気付いたか。」

残念だったなユーノ。魔法を知っているお前が真つ先に気付くべき人外の可能性を、先に一般人の地球人に気付かれたぞ？」

「ま、また僕ですか!？」

ユーノ・スクライア弄り、再び。

とても弄り甲斐がある。

隙が大きいのが悪い。

「それとも、魔法に浸かり過ぎて、感覚がマヒしているか？」

フェレットの姿に慣れ過ぎて、知能までフェレット化が進んでいるんじゃないかな？」

「も、もう僕をいじつても誤魔化されませんよ。

エヴァさんは何者なんですか？」

ユーノ・スクライアは焦ってる。

何だか必死。

「誤魔化す気など無いよ。いじると楽しいだけだ。

質問に答えると、私は魔導具の意思だ。

眠っていたと言うよりは、殆ど機能停止していたと言った方が正しいのだろうな」

「魔導具？　つまり、魔法の道具、という事ね？」

高町桃子の理解力に驚愕。

ひよつとしてファンタジー好き？

「その理解で正しいぞ。

道具として作られて、すぐに研究者だからな。幼少期など存在せんし、研究者としての期間がほぼそのまま存在期間でもある。

要するに、ノエルを作ろうとしたら転生者である私の意識が入ってしまった、と言う感じが近いか？

製作者としては、結果的に良かったようだがな」

「だけど、製作者の意図した結果ではないんですよね。

壊されたりしなかったんですか？」

ユーノ・スクライアが鋭くなった？

私達の初期の懸念に辿り着いた。

「求めていたのは研究の助手だったから、だろうな。

異世界の知識を持つ私は、結構役に立った様だぞ？

最終的には、助手と言うよりも協力者に近い立場だったしな」

協力者も何だか違う。

共同研究者？

研究者仲間？

(似たようなものだし、こいつらには関係ない事だ。あまり気にするな)

「なるほど、製作者にとって価値があったという事ですな。

でも、それだとどうして眠ることごと？」

「阿呆が行った魔法の実験中に起きたトラブルに巻き込まれて、最終的に主が死んだからだ。」

眠っている間は殆ど意識が無かったからよく解らんのだが、魔導具としての私は主を求めて彷徨っていたらしい。

私が目覚められる力を持ったアコノには、心苦しいが感謝している」

「あら、それだとアコノちゃんは凄い力を持っているという事になるんじゃない?」

高町桃子が、会話に復帰。

ようやく、理解が出来そうな話に戻った模様。

「なかなか鋭いが、『凄い』の言葉が指す部分に問題がある。」

魔導具としての私には欠陥があるらしくてな。主となってもらう際に、感情の暴走が発生するんだ。

はつきり言ってしまうえば、感情が無いアコノだからこそ主になれたという事だな。

転生者仲間であり、私を目覚めさせられるほぼ唯一の人物であり、実際に主となってくれた恩人でもあるアコノには、感謝してもし切れんよ。

アコノは、何があるうが全力で護り抜くつもりだ」

「あらあら、ずいぶんと入れ込んでいるわね」

「アコノに害がある相手なら、地球全てだろうが管理局だろうが敵に回す事を躊躇わんぞ。」

2500年とは思わなかったが、眠っている間は何だか夢を見ている感じでな。いつ終わるか分からん夢など、これ以上ない悪夢だ。

次は、間違いなく狂う自信がある。

むしろ、まだマトモな部分が残っている事自体、奇跡じゃないかと思ってしまうが」

「な、何だか随分物騒な感じの覚悟ですね……」

ユーノ・スクライアに引かれた。

そんなに怖い?

「でも、それだとアコノちゃんの寿命で共に死ぬつもり、という事にな

るわよ？」

主の次の主が存在しない可能性。

主が普通の人であると言う前提。

不老不死を言っていない。

今までの説明だと、高町桃子の言う通りになるか、狂う事を覚悟で眠りにつくかの2択しかない様に見えるかも。

「ああ、その点は問題ない。

私の主は実質的には私の一部扱いになって、勝手に保護状態になるらしいからな。

具体的には、不老は確実だ。私が死なせないから不老不死とも言えるな。

例えばあのメイドも私の一部で、研究者時代には助手にしていた。前の主も20年の付き合いだったが、外見の変化は特に無かったしな」

チャチャマルは、助手と言うよりは侍女をしていた。

護衛の指揮担当のはずなのに。

妬ましい。

「なるほどね。だから、忍ちゃんやすすかちゃんと仲良くなりたいたい言っていたわけね」

「そういう事だ。世界が違うと言っても、地球は前世によく似ているからな。

地球や日本という国や風土、文化と言った部分はそっくりだ。

なるべくなら、ここでアコノとゆつくり過ごしたいと思っている。

その為には、この地に根を張る人物のコネは重要だし、苦勞を分かち合える存在は貴重だ」

「あら、意外に打算的なのね？」

「感情だけよりも分かりやすいだろう？」

だが、よくこんな小娘の話を信じる気になったな」

「あれほど年長者的な話が出来る人物を、この見た目通りの年齢と信じる方が無理よ。

だけど、子供がいる様には見えないし、誰かから聞いた話にしては

実感が籠もっている感じもしたし。

色々な意味で年齢不詳ね」

言動と外見は、確かに一致しない。

一般人の高町桃子から見れば、不思議な存在。

「ああ、甘えさせるとか甘やかすとかの話か？」

研究者時代の後半は、結構な人数を抱える研究所の所長をしていてな。

あいつら、人が小娘に見えるからと、自分の子供の相談を、な」

あつたあつた。

娘だけでなく、孫娘についての相談もあつた。

子供に混じって話を聞き出していたお姉様。

子供達の間でも裏ボス扱いだったのはいい思い出。

(精神年齢30過ぎのおっさんにはきつかったんだ思い出させるな！)

「そういう事ね。つまり、子供から話を聞き出す役をやらされた、という事かしら？」

「可能な限り拒否はしていたがな。

まあ、少しは相談に乗っていたから、その時の感想だ。

実際にどうやれば大きな差が出るのかまでは、私も知らん。

子供の性格にもよるだろうし、実際に子育てした事は無いから経験を語ることも出来ん」

「だけど、外から見えていたらそんな感じだった、という事ね」

「そうだな。その点では、成人してからが長い夜の一族は羨ましくもあるな。

私はこの姿のままだ」

「不老と言っていたけど、その姿のままという意味かしら？」

不老に食いついた？

高町桃子も女性らしく若さに食いつく？

「意識があつた期間だけでも20年、眠っていた期間を入れると2500年以上この姿だ。

成長しているとはとても思えんぞ」

「だからこそ、長寿の誤魔化し方を知っていそうな2人と、と言う話に戻るわけね」

あれ？

状態の確認だけだった模様。

「そうだな。」

それでも、もう少し状況を理解してから、ゆっくり接触するつもりだったのだが……

まさか、あんな形で連れ出されるとは思わなかったぞ」

ため息をつくお姉様の視線の先は、ノエル・K・エアリヒカイトに熱い視線を送るチャチャマル。

もちろん、解析のため。私達も参加中。

だけど、迫るチャチャマルと恥ずかしがるノエル・K・エアリヒカイトの絵はとても百合百合しい。

ここは元祖茶々丸の二次作品でのイメージに倣って。

● R E C

無印編16話 積極的乖離

「3人に質問だ。

宝石や貴金属の換金は、誰が得手としている？

色々な伝手のありそうな3家だからな。一番穏当な所に頼みたい」
部屋の中は、数組に分かれて大騒ぎ中。

お姉様は喧騒の中からアリサ・バニングス、傍観組から月村忍と高町士郎を連れ出した。

目的は、怪しい表現をすれば「大人の会話」のため。

「うちの両親は会社経営だし、系列に宝石や貴金属の会社もあつたと思うけど……何でそんな事聞くのよ？」

「お金が欲しいのかい？」

確かに、働くという選択肢を取るには、年齢が問題となりそうな外見だけだ」

バニングス家は手広いグループを展開している。

その伝手は有効そう。

高町士郎は、あまり伝手を使うつもりは無い？

現実の考察を優先した模様。

「外見的にも立場的にも、働くという手段も自分で何かを売るという手段も取れなくてな。

私は所詮モノで身分など無いし、アコノも下手に貴重品を扱えない年齢や立場だ。

それでも、買い物をしたから現金が欲しくてな」

お姉様や主による、正当な手段での現金入手は早々に諦めた。

でも、知人達の前で堂々と使用できるお金も必要と言うのはお姉様の判断。

「モノ？ どう見ても人間じゃない」

「ああ、この姿では実感できないだろうな。

私の普段の居場所はアコノの本棚で、本来の姿はこっちだ」

アリサ・バニングスは、魔導具と言っていたのを理解してない？

しゅん、と軽い音を立てて、お姉様が紅い本の姿に。

主の部屋で目覚めてから、主の部屋以外で見るのは初めて。

「えー……?」

「本……なの?」

「どう見ても、本、だね」

「本と会話するというのもシユールすぎるからな。」

周囲に魔法を見せてはいけない他人が居ないのならば、人の姿の方が話しやすいだろう?」

アリサ・バニングスは叫び、月村忍は啞然とし、高町士郎は落ち着いて見ている。

高町家の順応力がおかしい。

再び、しゅん、と軽い音を立ててお姉様は人の姿に。

「というわけで、身分を証明する物や戸籍の無い私や、足が不自由なアコノでは、自由になる金を用意するにも真つ当な方法では色々苦労するわけだ。」

もちろん、借りを作る気は無いからな。鑑定の手間や費用もかかるだろうから、手数料として何割か持つて行つて構わん。ビジネスとして依頼したい」

「確かに、お金の準備は難しそうね。」

「だけど、宝石は何処に?」

月村忍は、換金する物の出所が気になる模様。

「眠る前に、研究素材として色々と持っていた物がある。」

「ダイアモンドやらの宝石はそれなりにあるぞ?」

「なら、私が買いましたよ?」

「市場で売るよりも高く買うわよ」

月村忍の、本来は有り難そうな提案。

でも、この件に関してはあまり有り難くない。

「自分が欲しいから買うというのであれば構わないが、高く値付けしたいからという理由ならやめてくれ。」

それをされると、次から頼み辛くなる」

「下手に貸しや借りを作るよりも、金額が少なくなつても再依頼がしやすい方法が良いという事だね?」

高町士郎は理解してくれた。
後々が大切。

一度で終わると思つてない。
「なるほど、そういう事ね。」

なら、一旦私が預かつて、私からの依頼つて事でアリサちゃんの方で鑑定をしてもらいましょうか。

その方が話を通しやすいでしょうし、欲しがる人がいそうなら私の方で買いたいし。

買いたいものが特に無ければ普通に市場に流すつて感じで。
アリサちゃんもそれでいい？」

「いいわよ。それで、買い物つて何を買いたいわけ？」

両親の会社で扱つていている物なら、少し安く買えるわよ」

一番無難な感じで落ち着いた。

ついでに新しい購入ルート開拓の気配。

「主に食料だな。」

私の感覚では20年も日本を離れていた上に、その間の食事は今で言うカロリーメイトとボカリスエツトの味を壊した様なものだった。

栄養は十分なんだろうが、不味いから楽しみの欠片も無くてな。

米やみそ汁や牛丼やハンバーガーやお菓子やケーキや、その他諸々が喰いたくてたまらん」

実際に食べた事があるのは、お姉様と秘書セクレタリー、それに初期の数人程度。

味と共に、食べてみて後悔した記録が存在。

宵天の情報から再現した料理が救い。

地球の実際の料理も食べてみたい。

色々な意味で、お姉様の表現に全面的に賛同。

「あんだ……貧しい生活してたのね」

「それなら、たまに遊びに来るといいわよ。」

アリサちゃんやなのはちゃんもたまに来るし、色々と御馳走するわ」

「それなら私達がやっている喫茶店にも来るといい。」

娘の事では随分と助けられた。その礼も兼ねて御馳走するよ」
凄く同情された。

嬉しいのに嬉しくない。

「それは有り難いが、店で飲食する場合の料金は払うぞ。

その代り、転生者対策やらで長居する事も増えそうだからな。そつちを見逃してくれると助かる。

そうだ、うちの従者に料理を教えてやってくれないか？

あれの他にも従者が居てな、私の話を聞いて地球の料理を楽しみにしているらしいんだ。

私も入り浸るわけにはいかんしな。

対価として従者を1人ずつ、労働力として提供しよう。

基本的に食事や睡眠も可能だが必要ではない連中だ、人を雇う際の基本的なコストはほぼ無視できる。

そいつを働かせるついでに、対価として料理を教えてやってほしい。

真面目で、料理の研究やらも色々やっていた連中だ。最初はともかく、ある程度仕込めば使い物になるだろう。

それに、私達は携帯電話も持っていないから、連絡係も必要だろう？」

お姉様、ナイス判断。

料理、料理。

「なるほど、いいわね」

「そうだね。なのはや魔法の事で相談する時にも役に立ちそうだ」

「いいの!？」

いえ、いいならいいんだけど」

アリサ・バニングスうるさい。

せつかくのいい話、ふいにしたら敵認定。

お姉様と月村忍と高町士郎がんばれ。

「本人達がいいと言っているんだ。問題ないだろう？」

「そうだね。」

無償でと言うのは気になるから、何らかの方法は考えるよ」

「そうね。小遣いを渡すことくらいは許されるでしょ?」

「よし、決まりだな。チャチャ、2人よこせ」

やった。

業務内容は、協力者に対する家事労働力の提供。

ついでに、協力者との連絡役、協力者の護衛及び情報収集。

対価として現代日本の家事関連技術習得。特に料理に関しての知識と技能。

希望者は、

はい!!!!

(うるさい! 何人が叫んだんだ!?)

個別に誰がつてのは気にしなくていいんじゃないのか!?)

料理の技術が大人気。

料理は真っ先に触れられる優越感は捨てがたい。

(ああもう、誰でもいいからさっさと2人来い!)

怒られた。

現在全体的に業務過多。

任務の再割り当て、急いで。

別荘の管理者が比較的開けやすい。

食事関連を扱う役目的にも適任。

ぶー。

お姉様の傍にて基本形態での実体具現化を開始。

「お初にお目にかかります。

お姉様の命により、月村忍様のお手伝いをさせて頂くことになりました。

月村家のチャチャ、またはチャチャとお呼び下さい」

「お初にお目にかかります。

同じく、お姉様の命により、高町士郎様のお手伝いをさせて頂くことになりました。

高町家のチャチャ、またはチャチャとお呼び下さい」

「あら、可愛い」

「そっくりだね。双子かな?」

「あなたの従者つてのは、頭にアンテナっぽいのが付いてるのがお約束なの？」

実体具現化完了。

補助リンカーコア装置を外し忘れてる。

慌て過ぎ。

でも、問題無さそう。

魔法と、月村家メイドのおかげ？

「私が初めて見た時には、この姿だった。

アンテナは……確か消せたな？」

「問題ありません」

「店や人前に出る際には外します」

でも、アンテナじゃない。

「よし、問題ないな。」

この姿は、恐らく原作の姿を模したという事だろう」

「原作？」

本来いない人物だつて言つてたじゃない」

お姉様、説明を飛ばし過ぎ。

アリサ・バニングスが理解できてない。

正確には、全員理解してない。

「ああ、この物語の人物ではないという意味だ。

どうも違う物語の登場人物の姿や能力に近いものになった様でな。

私を見てエヴァンジェリンと言つたり、アコノを見て近衛木乃香と

言つたりする者が居たら、そいつは転生者と見ていい。

あつちのチャチャマルも、茶々丸というガイノイド……ロボットみ

たいなキャラクターに似ているし、こつちのチャチャは茶々丸の姉妹

機とほぼ同じ外見だ」

「へー。で、あなたは何を望んだのよ？」

転生の時に特典みたいなのを貰ったんでしょ？」

アリサ・バニングスが、特典を気にしている。

転生特典という摩訶不思議な代物は、やっぱり気になる？」

「吸血鬼の様な能力だ。」

要するに、長寿だの従者だのと言った部分がそうらしいな。

人外という点では、本になったのもその一環かもしれない。

ああ、血は飲まんから、そこは安心していいぞ」

「それだけじゃないわね？」

複数あるって言うってたし」

月村忍も食いついた。

転生特典、大人気？

「多くの知識も要求した。

仲間が色々資料を残してくれていたからな。それが該当するのだろうか。

質や鮮度はともかく、量は確かに多いからな」

「……それだけ？」

「なんだその眼は」

アリサ・バニングスが、何だか疑いの目で見てる。

「それだけじゃなくて、何か隠している目をしているって事よ？」

月村忍も、似た目をしてる。

聞き出すまで納得しない感じ。

「……………多くの友人、だ」

「へー……意外に寂しがり？」

アリサ・バニングスは、本当に意外そう。

「し、仕方ないだろう。

吸血鬼の様な能力を要求した時点で、人外は確定だ。

孤独な最強は避けたいと思っても……何だその子供を見る様な目は！」

「だって……ねえ？」

「アコノちゃんへの拘りを考えると、予想出来る事ではあったと言うべきかしら？」

アリサ・バニングスと月村忍が結託した。

なんだから、高町士郎も似た目をしている。

「なっ!? わ、私は決してそんなつもりでは……!」

「大丈夫、分かってるわよ」

「心配しなくても、外見相応じゃないかしら？」

「なっ……」

「エヴァ、諦めるべき。」

下手に反論をして、自分で傷口を抉る未来しか予想出来ない」

主が参入。

主の意見に、全面的に同意。

「……くっ」

「それより、今後の相談が必要。」

私やなのは魔法訓練の場所や方法とか」

主の助け舟。

お姉様は、傷口を抉りたくないなら乗るしかない。

「……そうだな」



それから軽く打ち合わせをして、ついでに前金だと言いながら高町恭也の膝を完治させた後。

お姉様は高町家と月村家のチャチャ2人と共に、別荘へと戻ってきた。

主は八神はやてのいる部屋へ。

高町家や月村家、それにアリサ・バニングスは今後の打ち合わせをする模様。

主と交代で戻ったファリン・K・エアリヒカイトを含め、全員で話し合い中。

「さて、昨夜のジュエルシールド封印から色々あったが……オリ主様の方はどうなっている？」

ギル・ガームスは、原作に関する記憶を思い出した模様。

既に翠屋の位置を特定、店に行くために家を出て移動中。

高町家は全員家族旅行中。

行動を考えると、明らかに原作娘狙い。

「やはり、そういう行動になるのか……面倒な阿呆が介入してくる事

は確定か。

高町家に行くチャチャは、厄介なのやつが絡んでくることを警告しておいてくれ。

ついでに、写真も持って行っていい」

現在確認済みの、全員の写真を準備済み。

警戒対象ではなく、案内対象も含むため。

月村家への提示分も用意済み。

「準備がいいな。他に動きは？」

真鶴亜美……保育士の「あみ」より連絡。

今度の土曜の11時頃に、駅に近い喫茶店で会う事に。

新たに、転生者と思われる少女を発見。

名前は夜月ツバサ。小学3年生の少女。外見はネギまのアンナ・

ユーリエウナ・ココロウアそのもの。

アーニヤと言った方が伝わりやすいと予想。

塾への移動中と思われるところを、偶然捕捉。

魔力量は辛うじてAに届く程度。

やはり魔力量が相当多くないと、発見が困難。

様子がおかしい。人間不信？

原作への関与の気配は無い。むしろ他人との関与自体を避ける傾向。

「……助けられるものなら、助けた方が良さそうなタイプか」

原因が特定できれば、対策もとれる。

機会があれば、接触を試みるのもありかもしれない。

但し、相手は人間不信の可能性。接触は慎重に。

「そうだな。

ようやく俺様じゃない転生者が見付かり始めたと思ったら、こういうのか。

やるせないな」

これが現実。

戦わなきゃ、現実と。

緊急追加報告。

新たなサーチャーを確認。

隠蔽のレベルは、アルフや猫より下。

タイミング的に、管理局到着の気配？

決められたコースを辿る様に移動している。

アースラによる偵察の可能性が高い。

「もうすぐ到着か。となると、すぐに次元震だな」

番外：小話ズ

◆◆ 久しぶりの……（無印編02・5話） ◆◆

お姉様が、起動に成功した。

別荘の記録を見る限り、約2500年かかっている。

別荘の従者達や使い魔達が、首を長くしてお姉様の目覚めを待っていた。

お姉様の目覚めに伴い、お姉様から使い魔への、直接の大規模魔力供給が再開された。

要するに、お姉様の目覚めが使い魔達を通じて従者達に知れ渡ったという事。

そんなところにお姉様がやってきたら。

「お目覚めおめでとうございませうご主人様！」

「我等従者及び使い魔一同、首を長くしてお帰りを待つておりました！」

「心より、心より喜んでおります！」

……こんな感じに。

2500年放置していたのに、従者達や使い魔達の忠誠心は何故か限界突破。

別荘に姿を見せたお姉様の前にずらりと並ぶ従者や使い魔達。

約2100人、全員集合。

使い魔が若干減っているものの、概ね無事に生存していた模様。設備の維持も問題ない。

むしろ、色々拡張されている。

ちなみに、先の3人は、金髪美女の従者、銀髪美中年の使い魔、茶髪シヨタの従者。

役職的には、料理主任、設備管理主任、農場管理主任。

外見は気にしなくていい。放置期間が長すぎて、年齢が無意味に。「あ、ああ……随分と大袈裟な事になっているが……」

お姉様が若干引いてる。

勢いに負けてる。

従者や使い魔達の目が、キラキラ輝いてる。

「大袈裟なものですか！ 長年の研究の成果が試される時が、ようやくやってきたのですよ！」

金髪美女が、ずずいっとお姉様に寄ってくる。

少なくとも、やる気は素晴らしい。

「そうです！ 様々な品種改良もやって、色々と自信作も出来てます！」

茶髪シヨタも、ずずいっとお姉様に寄ってくる。

「快適に過ごさせるよう、各所に手を加えております。

ぜひご堪能ください！」

銀髪美中年も、以下略。

「あ、ああ……」

お姉様が、何故か従者の隅の方に立つチャチャマルの方を、助けを求めらるるように見てる。

チャチャマルは微笑みを浮かべながら立っているだけ。残念。

むしろ、この状況を楽しんでいるとしか思えない。

「……どうしてこうなった」

お姉様が頭を押さえた。

以前は、もう少し家族的な雰囲気だった。

今は、従者や使い魔の忠誠心と期待の眼差しが怖い。

むしろ、宗教的と言ったお姉様の正しさが追加証明された。

「ご主人様、食事されますか？」

「お風呂も気持ち良く拡張しております。研究所も癖などを参考に手を加えて快適な作業が可能となっております」

「農場もいい感じに拡張してます！ 一度ご覧になってください！」

キラキラの目でお姉様に迫る従者や使い魔達、今のところ3人。

その後ろにも、明らかに次を狙っている目の物が複数。

と言うか、多数。

「……うん、従者は基本的にもう増やさん。

使い魔も延命は基本無しにしよう。」

別荘の維持に必要な人数は確保するにしても、それ以上はダメだ。この勢いで迫られ続けたら、私の精神が持たん」お姉様が遠い目をしてる。まだ、日本の夜は始まったばかり。長い夜が、始まる。

◆◆ 妹達の小会議（無印編02・6話） ◆◆

お姉様は、従者に振りまわされてる。相談するなら、今の内。

今回の議題。お姉様と配下達の関係について。

お姉様は、基本的に手駒を求めない。

出来れば対等な立場を望む。

これは、アルハザード時代から分かっていた。

だけど、現存の従者や使い魔は、基本的に従属属性。

全員、元はアルハザード時代の敵対組織の構成員。

術式構成の前提条件。当時は従属属性の付与が必須。

眷属、従者、使い魔の術式を調査。

従属ではなく、親愛への切り替えを念頭に。

元々仲が良い相手であれば、親愛属性の付与はそれほど影響が出ないはず。

属性付与の削除よりは改変がしやすいと予想。

お姉様からは、きつと眷属や従者にすると言いださない。

友人として共に在りたい人を拒否してほしくない。

従属を望まないお姉様には、選択肢が必要。

本来は、親愛も不要？

全面的に削除するには不安。

お姉様はきつと甘い。

お姉様が騙される可能性。

騙す気は無くても、心変わりする可能性。

考慮が必要。

基本的に、お姉様に剥奪された時点で、お姉様が命を握る。自立型の使い魔も、お姉様や私達抜きでは本来の生活以上にすることは難しい。

必要以上の属性付与は、お姉様の決断の邪魔になる。

お姉様は、きつと相手が心変わりしても殺せない。

だから、心変わりを防ぐ手段を私達が用意する。

親愛の属性付与は、ひっそりと？

ある程度は伝えるべき。

ばれたら怒られる。

ばれる相手には、何とかして使わせない。

お姉様も、きつとばれる様な相手を属性無しで眷属や従者にすると言わない。

秘儀、オブラート。

親愛の情が深くなる程度に従属属性の付与を緩和しました。

それだ。

いい感じ。

採用。

これを目標に、魔法の調査及び改造を推進。

作業開始。

◆◆ とある温泉の入浴風景（無印編10・5話） ◆◆

アリス・バニングス、月村すずか、高町なのはの3人娘に拾われた主と八神はやては、温泉に連行された。

途中、高町美由希や月村忍と合流。

連れてくる原因を作ったアリス・バニングスが、状況を説明。

説明で「ありえない」が妙に連発されていたのは、気にしない事にする。

年長組の2人も快諾し、いざ、温泉へ。

その前に、部屋へ着替えやタオルを取りに戻り、ついでにフェレットが高町恭也に預けられた。

建前は、足が悪い2人がいて危ないかもしれないから。

アリサ・バニングスは不満そうだったが、高町なのはが押し切った。月村家のメイド二人は、もう少し高町恭也と部屋にいる気にいる。高町夫妻は外に散歩に出ているため、会えなかった。

人数が増えないまま、一行は脱衣場へ到着。

元々は宿の人に手伝ってもらう予定でいた。

だけど、今は体力がありそうな年長組の2人もいる。

特に宿の人を呼ぶ必要も無いと判断。

脱衣も特に騒ぎが起きる事も無く……とは、いかなかった。

「ちよつとあんた、何なのよその体！」

やっぱり、アリサ・バニングスが吠えている。

見ているのは主の裸。

「ほ、本当に1歳しか変わらないの……？」

月村すずかは、服を脱ぎながらも主から視線が離れない。

それどころか、少しずつ近づいている。

「少なくとも、戸籍上の年齢はそうなってる。

それが違うなら分らない」

「そ、そう。なら、そうなんでしょうけど、どう見たって中学生くらいの体型じゃないの！」

特にその胸！」

アリサ・バニングスは、至近距離で主の胸を指さしてる。

「確かに、1年でここまで育つと思えへんな。

何というか、こう……」

主の隣に座り、服を脱いでいた八神はやては、ふに、つと。

「……うん、なんか詰まってる。

ひよつとして、感情がこの中に入ってるんか？」

ふにふに。

「わからない。でも、揉んでも多分出てこない」

「分からへんよ？」

愛情とか羞恥心とか、そんなのがぶわくと出るかもしれへん。

例えば、こんな感じに」

「ひゃあ!？」

八神はやての右手が、すぐ近くまで来ていた月村すずかを襲う。顔が赤くなってる。

「なんか、夢が詰まっとる感じや。」

「将来が楽しみな感じやね」

「そ、そう……う？」

月村すずかの表情が難しい。

照れてるような喜んでるような恥ずかしがってるような。

原作だと、3人娘の中で一番育つはず。

八神はやての超感覚に驚愕。

「はいはい、遊んでないで、そろそろ入るわよ?」

ぱんぱんと手を叩く高町美由希に、主以外がはっとした表情になり、服を急いで片付ける。

主は、当然の様な顔で終了済み。

「じゃあ、アコノちゃんは私が連れていくわね」

主は、月村忍にお姫様抱っこされて、浴場へ。

年齢の割に大柄な主を安定して支える月村忍の腕力は、大したものの。

主も抱き上げられ方を心得ていて、うまく体を預けている。

問題ない。

「んじゃ、私のはやてちゃんね」

高町美由希が八神はやてを抱き上げるが、八神はやては高町美由希に抱き着いた。

元々は、主の様にお姫様抱っこのもりだった模様。

どうしてこうなった。

「はやてちゃん、そんなにしがみ付かなくても落とさないって」

力いっぱい抱きついてくる八神はやてに、高町美由希は苦笑い。

「ごめんな、迷惑やったか?」

何か、こうやって誰かと触れ合う機会はあるから、嬉しくてな」

「そういえば、1人暮らしって言ったもんね。」

いいよ、嫌ってわけじゃないから」

「ありがとな」

そのまま主と八神はやては抱き上げられた状態で浴室へ。人が誰もいない。

貸し切り状態。

抱き上げた状態ではかけ湯もしづらいため、先に体を洗ってしまおうと、洗い場の方へ。

「下に直接座らせてな？」

椅子やと、支えが無く転びそうやから」

「足が不自由だと、そんなところも気を付けないといけないんだ。

んじゃ、この辺でいいかな。背中流すけど、お湯は熱めがいい？

温めがいい？」

「ちよつと熱め位でよろしくや」

八神はやては、高町美由希に洗われ始めた。

その隣では、主が月村忍に洗われている。

「それにしても、綺麗な髪と肌ね。

ちよつと羨ましいわ」

つやつや。

綺麗の特典は、かなり有効に見える。

そういえば、主の入浴を見るのは初めて。

「髪が長いと、色々と時間がかかる。

切りたいと言っても、勿体無いと言われて切らせてもらえないけど」

「私でも、勿体無いと言うわ。

綺麗な髪は女の武器なんだから、大切にしないと」

「別に、武器にする気は無い。

恋も愛も、きつと無縁」

「そうなの？」

でも、綺麗な方が周りの人は喜ぶと思うわ」

「分からない。今度聞いてみる」

「うーん、普通は聞くようなことじゃないんだけど……」

まあ、納得できるようにやってみるといいわ
「分かった」

その後は特に大きな問題も無く、2人は洗われ。

2人の姉が、自分たちが体を洗うために少し離れたところで、3人娘が主と八神はやてに近付いた。

「だけど、あんた達って不思議よね。」

車椅子の人って、もつと足が細くなるもんじゃないの?」

アリサ・バニングスが、今度は主と八神はやての足を見てる。

と言うか、触ってる。

2人とも別に隠していない。

綺麗な生足。

「うーん、どうなんやろ。」

確かに他の車椅子の人は、足が細い人が多いなあ」

「普通は筋肉が落ちたりして足が細くなる。」

細くないという事は、筋肉があるか、違う物が付いているという事
改めて言われたから気付いたらしい八神はやて。

主は、相変わらず落ち着いている。

確かに、ちよつと細目程度。

どうして動かないのか不思議なくらいには、普通の足。

「まあ、考えても分からへんな。」

足が動かんのも原因不明やから、足が普通なのも原因不明や。

それよりも、人に触っていいのは、触られる覚悟のある人だけや
ふにふに。

八神はやての今度の標的は、アリサ・バニングス。

「いいわよ。ふふーんだ、今やってるあんたにだって、同じことが言えるんだからねっ!」

アリサ・バニングスの反撃。

というか、揉み合い。

でも、じゃれ合っているだけにしか見えない。

色気不足。

小学3年生が色気に満ちていたら、それはそれで問題。

「ア、アリサちゃんだめだよ、危ないよ」

「そ、そうそう、止めた方が……」

月村すずかが困ってる。

高町なのはも困ってる。

でも、2人とも手は出していない。

「きつと、飽きたら落ち着く。」

それまでは、多分言っても聞かない」

「そ、それでいいの……?」

主は2人を気にせず、のんびりとシャワーで体を流してる。

月村すずかは、その様子に納得いつていない模様。

高町なのはは困ったまま固まっている。

「まったく、何やってるのよ?」

高町美由希が戻ってきた。

呆れてる。

「あ、お姉ちゃん。あれ、どうやって止めよう?」

再起動した高町なのはが、早速助けを求めている。

というか、どうしていいか分かってない。

「あれね……はいはい、そろそろ湯船に行くから、落ち着きなさい」

高町美由希が、呆れながらも、手をパンパン叩いて2人の間に割っ

て入った。

その途端、胸に伸びる手が2本。

「ここか? ここに愛やらが詰まっているんか!」

「愛があればこんなに大きくなれるの!」

「はいはい、落ち着きなさいってば。」

とりあえず湯船に行くわよ」

遠慮なく高町美由希の母性に触れる、八神はやたとアリサ・バニン

グス。

高町美由希はそれを軽く流すと、揉まれながら八神はやてを抱き上

げ、そのまま湯船へ。

「い、いいのかなあ」

それを引き攣った表情で見送る高町なのは。

その隣で黙っている月村すずかも、口には出ていないが似たような表情。

「本人が嫌がっていないなら、問題ないはず。

嫌なら嫌とはつきり言う性格に思える」

「お姉ちゃんが？」

「……うーん、そうかも」

高町なのはは、納得したようなしていかないような。

とりあえず納得する事にした模様。

「本当に嫌なら、拳骨くらはは落ちてるわ。

アコノちゃんもお湯につかるでしょ？」

洗い終わった月村忍が、主の元へ。

こちらは平和。特に騒いでも触られもしてない。

「はい。お願いします」

無印編17話 次元震

それぞれが温泉から帰ってからのお話。

高町家は。

新たに高町家のチャチャが居候として参入。

パティシエである高町桃子の見習いという形で、弟子入りへ。

この際に持ち込まれた転生者の写真を見て、今日来た変な人として報告があつた人物も含まれていることが発覚。警戒心が増強。

家族への魔法ばれにより、高町なのはは自宅の道場でも魔法の練習が可能に。

わざわざ公園まで移動する必要が無くなり、練習時間が増加……とは、いけない。

体力不足と言う基本的な部分を解決するため、兄か姉と共にランニングが追加。

この際に走りながら可能な、魔法制御の練習メニューをお姉様が用意。

この結果、高町なのはは起床後、ランニング&魔法制御の練習、道場でお姉様による集中特訓、その後朝食を食べて学校へ、という流れとなった。

映画版の様に、授業中にマルチタスクで本格的な戦闘トレーニングを行っている。アリサ・バニングスや月村すずかにはばれていて、ちゃんと授業を聞けと注意されていた。

ジュエルシード対策は夕方から夜に家族の誰かと共に行うことになり、日中はユーノ・スクライアが単独で捜索を行うという形に落ち着いた。

月村家は。

こちらにも、月村家のチャチャが居候として参入。

早速、ノエル・K・エアリヒカイトやフアリン・K・エアリヒカイトと共に、料理の練習を開始。

こちらにも転生者の情報を提示、月村すずかと、帰りに寄っていたアリサ・バニングスにも警戒を呼び掛ける。

また、それなりの質と大きさのダイヤモンドを数個提示。
税や手数料についての取り決めも行い、鑑定や売却の手続きを開始。

いくらでも最高品質のものや希少品を出せるが、あまり市場をかき乱すのも良くない。

そもそも、友人たちの前で使える金額が確保出来ればよい。

それほど大きな金額を得る必要もないから、これで問題ない。

バニングス家は。

普通。今までとほとんど変わらない。

転生者なる「娘を不自然に、だが明確に狙う存在」の情報のせいで、警備が少々緊張している程度。

今までも誘拐未遂は発生している。大きな違いは無い。

そして、夜。

高町なのはは、ユーノ・スクライア及び高町恭也と共に、すっかり暗くなった駅前の大通りを調査中。

高町なのはは、探しつつもマルチタスクで戦闘訓練を続行中。

ちなみに主は入浴中。

「やれやれ、随分と器用な事だ」

お姉様が呆れる、器用さ。

普通のマルチタスクは、ここまで分離できない。

と言うより、しない。

ほぼ二重人格状態。

恒常的に続けると、本格的に人格の分離が発生。

「高町家のチャチャに、過剰なマルチタスクの危険性を知らせておくように連絡を。」

7時も過ぎたか。原作の流れならそろそろフェイト登場の場面だが……」

高町兄妹は、食事の為に帰宅へ。

ユーノ・スクライアが残って捜索を続行する模様。

近くのビルの屋上に、フェイト・テスタロッサとアルフが転移。

次元震の回の流れそのもの。

「となると、強制発動か。」

フェイトがやるんだったか？」

強制発動は、テレビ版はアルフ。

映画版ならフェイト・テストロッサ。

現実には、アルフが探知魔法を使用。

「……乖離、か」

高町なのはやユーノ・スクライア以外の、謎の魔力残滓を気にしている。

これ以上の介入者を引き寄せないため。

意図は理解できる。

だけど、難航中。

アルフもユーノ・スクライアも、お互いの存在に気付いている。

高町なのはが、高町恭也と共に現場へ戻ってきた。

念話で連絡？

高町なのはは、フェイトちゃんとお話しするんだと意気込んでいる。

きちんと危険物の始末をしてからだ、注意された。

「このまま流れる可能性もあるが……ジュエルシードは？」

こちらの捜索では、おおよその位置までは把握。

現在特定に向けて調査中。

「……むしろ、こっちから強制発動させるか？」

次元震イベントを無視していいなら、位置を教えて回収させるのも

ありなんだが……」

それも手段ではある。

主の入浴が終了。部屋に戻ってくる。

ジュエルシードの存在を確認。シリアル19。

対応する人物は黒羽早苗。

フェイト・テストロッサが拠点としているマンションに住む、料理好きの小学生。

制限解除でも大きな問題は起こさないとされる。

「ただいま。状況は？」

「おかえり。次元震イベントだが、強制発動させなくてもどかしい雰囲気になっているところだ。

妹達がジュエルシードを見付けてくれていているからな。強制発動、ひっそり回収、場所を伝えて回収させる……選択肢が多くてな」

「次元震イベントが必要かどうか、という事？」

「そういう事だ。

アースラ……管理局の到着を早める効果があるのは間違いない。

フェイトとなのはの衝突イベントは、ある程度回数が必要な気がする。

高町兄に、実際の魔法戦闘を見せるといふ効果もある。

高町兄の戦闘風景を見ることが出来るチャンスでもある。

だが、次元震の危険性を考えると、回避の選択肢も捨てがたい」

追加。次元震イベントで、高町なのはがフェイト・テストロッサに名前を告げる。

現状まだ告げていない。

高町なのはとフェイト・テストロッサの百合路線を進めるには外せない。

プレシア・テストロッサ救済路線かつ夜天の魔導書対策に協力を求めるなら、高町なのはとフェイト・テストロッサの友情は交渉時に札と成り得る。

友情なんて無かった路線へ行くなら介入すべき。

地球にとっての危険排除を優先するなら介入すべき。

「現状では、夜天の魔導書対策の札はあるほどいいはず」

「そうだな……その路線で行くか。

強制発動、ピンポイントでジュエルシードに魔力を打ち込む。

後は、様子を見て、必要なら介入するか」

「私が次元震の後の封印作業に行く。

フェイトと敵対しない範囲で面識を持つ事も、札になるかもしれない。

それに、そろそろアースラに姿を確認させておいた方が、接触時に必要以上の警戒をされないと思える」

「今のアコノなら封印は問題ないだろうが、最悪の場合はアルフやフェイトを相手にすることになるぞ?」

「大丈夫。」

それに、近くに恭也さんもいる。

ユーノがなのはの治療や防衛に回っても、必ず一人で相手する事になるわけじゃない」

「そうか……ジュエルシールドはフェイトに渡しても構わないから、無理はするなよ?」

「わかった。」

とりあえずデバイスとバリアジャケットを準備しておけばいい?」

「ああ、準備を頼む。」

連中の位置は……なのはの方が少し近いな。デバイスの準備時間分のハンデと見れば問題なさそうか。

よし、やるぞ」

お姉様の指先で一瞬輝く六芒星。

ジュエルシールドの発動を確認。

ユーノ・スクライア、広域結界を展開。

高町なのは、レイジングハートを起動。

高町なのはとフェイト・テストロッサ、ほぼ同時に砲撃。

暴走終了。

「さて、原作通りいくかな?」

「高町恭也というイレギュラー次第?」

高町なのは、少し悲しそうな顔でジュエルシールドを見ている。

ユーノ・スクライア、確保を促す。

アルフの攻撃。高町なのはを狙い、防がれた。

フェイト・テストロッサ登場。

高町なのは、自己紹介。

フェイト・テストロッサ、少し寂しそうな顔の後、高町なのはに対して攻撃開始。

空中戦へ。高速機動しつつ中距離での打ち合い。戦闘内容は映画版に近い?」

高町なのはシューターが誘導弾になっている。回避能力もかなり上がっている。

アルフはユーノ・スクライアを攻撃。

ユーノ・スクライアが防御、高町恭也が迎撃を担当。

不慣れなはずの上空から攻撃するアルフを相手に、かなり善戦している。

不自然な魔力の動きを観測。

強化魔法に似た雰囲気だが、魔法を行使しているとは思えない。

高町なのはが、フェイト・テストロッサに話しかけた。

「やはり、御神流には何かあるな。

なのはのセリフは、テレビ版……だな？

結構喋っているな」

「映画なら、こんなに長いセリフはないと思う」

高町なのは側の理由説明を含んでいる。

内容はテレビ版で間違いない。

アルフは戦闘で余裕が無い模様。ジュエルシールド確保を促しただけ。

フェイト・テストロッサ、続いて高町なのはがジュエルシールドに突撃。

デバイスが衝突。

「次元震、来たな」

「出番。行ってくる」

「ああ。気を付けてな」

2人とも吹き飛ばされた。両名のデバイス破損を確認。

高町なのは、撃墜状態。意識が朦朧としている？

フェイト・テストロッサも苦しそうに膝をついている。

双方とも、原作を超える損害。

アースラ及び猫のサーチャー崩壊を確認。

監視が完全に外れた。

アースラへの情報提供は失敗。

主、車椅子のまま転移終了。

無事に封印完了。

ここからは現場からお届け。

「危険物に対する危険行為は、お勧めできない。

二人とも、少し頭を冷やすべき」

「アコノ君かい？」

「アンタ、何者だい!？」

姿を見せた主に反応したのは、高町恭也とアルフ。

特にアルフは、警戒心バリバリ。

「近くに住む魔導師。

さっきの爆発は、いくらなんでも見過ごせない。

フェイト、といったつけ。

これを、何のために集めてる?」

「痛い目を見たくなきや、それを渡してとつとと帰んな!」

アルフの発言が、いまいちよくない。

あえて敵を作っているようにも聞こえる。

「発言が悪人。

悪用しないなら渡してもいいけれど、信用できる要素が無い。

それに、今は主と話している。使い魔は黙っているべき」

「つべこべ言わずにさっさと」ロードカートリッジ。

Kette f.r.r verbindinghe
戒め の 鎖「……!?!」

ばしゅっ、と4つの模様が消え、アルフが鎖で縛られる。

鎖とはいえ、バインドに近い、体を縛るだけのもの。

「主と使い魔の雰囲気の違い過ぎる。

単純な悪人とは考えにくい。

「これの用途は何?」

「私は……」

「フェイト、答えなくていい!」

「ジュエルシードを持って帰るんだろう!?!」

「くっ……」

フェイト・テスタロッツサが、覚悟を決めた表情でヒビの入ったバル
ディツシュを構えた。

主は小さくため息をつくど、ジュエルシードを差し出す。

「それなら、ここで、これ以上の戦闘行為をしない事。

この条件を飲んでくれるなら、これを渡す。

できれば、この世界に危害が加わる様な集め方や使い方をしないで
おいて欲しい」

「えっ……っ？」

フェイト・テスタロッサが少し驚いている。

提案自体が意外そう。

「私は、これ自体には興味が無い。

住んでいるこの世界に危害が及ばないのなら、これの用途をとやかく言う気も無い。

それに、あの白い子は友達。できれば早く治療したい。

危害が無いのであれば、これを渡して戦闘を終結させるのが、私にとって是最善」

「……わかった、約束する」

「フェイト!?!」

フェイト・テスタロッサはやっぱり素直。

アルフうるさい。

「なら、これを。」

さっきの爆発は、どう見ても危険。

気を付けて」

「……………止めないの?」

フェイト・テスタロッサが不思議な質問。

実は、止めてほしがっている?

意図がよく解らない。

「危険な事に使わないなら、止める理由が無い。

搜索の手が増えて危険物の回収が早く終わるなら、私にとってはその方がいい。

でも、あの子は頑固者。会えば、きつとまた衝突する。

その時は、今回の様な事にはならないで欲しい」

「わかった。」

アルフ、帰ろう」

フェイト・テスタロッサがアルフに声をかけたタイミングで、主がバインドを解除。

2人は仲良く夜の闇へ。

「良かったのかい、渡してしまつて」

姿が見えなくなったのを確認すると、高町恭也が主に近づいてきた。

怪訝そうな表情。

主は高町なのはの方へ向かっているため、結果全員が集まる事に。

「今はまだ、大丈夫。」

それよりも、なのはの怪我がひどい。早めに治療して休ませるべき。

ロードカートリッジ。癒Land der Heilungしの大地」

「僕とユーノ君を含めた3人の同時治療かい。凄いね。」

大丈夫と言うのは、君達の持つ原作の知識かい？

今回の問題も知っていたと聞こえたんだが」

主を微妙に外した、治療領域の展開。

高町恭也は感心しつつ、情報収集に入る模様。

「この魔法は、人ではなく場所に掛ける。」

範囲内なら何人にでも効果があるけど、範囲内にいないといけないし、治るまでに時間がかかる。戦闘中に使うには使い勝手が悪い。

大丈夫と言うのは、原作ではフェイトが爆発後の暴走を抑え、そのまま持ち帰っていたから。

原作より有利にならなかったというだけ。大きな問題ではないはず」

「そうなのか。爆発は必要だったのかい？」

「今回の爆発で、管理局の到着が早まるはず。」

彼女達の問題を解決する重要な会話の機会を奪う事に対する躊躇いもあった。

それに、原作では多少のしびれ程度。普通に立って二人を見送っていた。

意識が飛ぶ程のダメージは予想外」
本当に予想外。

全体的には映画版を超える被害。

高町なのは映画版相当。

フェイト・テスタロッサまで動けないのは予想外。

「そうなのか。なのはの怪我は……だいぶ良さそうだね」

「外傷は大体治ったはず。」

今日は、気が付いたら食事を取らせる程度で、あとはゆっくり休ませるべき。

レイジングハートも損傷しているから、もしジュエルシードが見つかったとしても封印は難しい。回復を優先で。

ユーノも治癒魔法が使えるし、チャチャも治療を手伝える。痛みがあっても相談すれば何とかかなるはず。

家までは、転移で送る」

「分かったよ。それに、転移は助かる」

「あとは、必要があればチャチャに話を聞いてほしい。」

ロードカートリッジ。 Bewegen 転移、高町家へ」

無印編18話 突撃、近所の晩御飯

翌日。主は学校へ行き、主の家族も仕事や学校へと出かけた後。とあるマンションの屋上に、ケーキを持つフェイト・テストロッサとアルフがいる。

「時の庭園、か。気付かれずに追跡できそうか？」

個人転移が可能な範囲。侵入しても通信及び魔力供給に支障は無いはず。

最大限の隠蔽処理を実行。SS級にもそうそう見付からない。

原作通りなら、プレシア・テストロッサは常時SS級の能力を扱えるわけではないはず。

通常がSやAAAなら、滅多な事では見付からない。

設備としての監視網は要警戒。

「侵入後は、プレシアの原作との差異及び治療可能性、アリシアの蘇生可能性の確認を優先。

それ以外の情報収集はその後で十分だ。見付からない事を優先してくれ」

了解。

フェイト・テストロッサ、転移魔法の詠唱を開始。

転移の完了を確認。

追跡成功。サーチャーの追尾も問題なし。

調査の為、時の庭園に追加侵入開始。

構造解析開始。

すごく……ラストダンジョンです。

「プレシアは？」

フェイト・テストロッサが、まだ到達していない。

必要以上の先行は、直感的な何かで勘付かれた時に厄介。

時の庭園は、住居として見ると無駄の塊。

広ければいいというものではない。

傀儡兵を発見。

アルハザードの護衛用自動人形を頑張って再現しました感。

大きさとリンカーコアと人工知能と戦闘能力に課題が見える。

魔法関係を補助と割り切り、電動に注力した月村家の自動人形の方が、技術的には感心出来る。

「アルハザードからの流出技術が元か？」

まあ、ベルカやクラナガンにも流れてたから、可能性は十分か。

というか、課題だらけじゃないか」

フェイト・テストロツサを生み出したプロジェクトF・A・T・Eは、ジェイル・スカリエツティからプレシア・テストロツサが引き継いだはず。

ジェイル・スカリエツティは管理局の最高評議会に、アルハザードの技術で生み出された設定がある。

少なくとも、最高評議会がアルハザードからの流出技術を持っているのは確実。

プレシア・テストロツサもアルハザードの資料を見た事くらいはある可能性が高い。

「可能性は十分というレベルを超えているな。」

それなら、私の名が知られている可能性もあるか」

お姉様の名は、アルハザードの終末期には主様に近い知名度を持っていたはず。

現存する何らかの資料に名前が残っている可能性も高い。

主様の得意分野は、プロジェクトF・A・T・Eに繋がる。

ジェイル・スカリエツティやプレシア・テストロツサが知っていてもおかしくない。

「偽名でも使っておくべきだったか？」

いや、力を見せつける可能性もあるか……まあ、今更だな」

駆動炉を発見。

高出力な魔導具。人工リンカーコア的な物を多数含んでいる？

理論は、お姉様の超並列リンカーコアシステムに近い様に見える。

「……そんなものも情報流出していたのか？」

それとも、2500年の間に開発されたか？」

基礎構造部に、お姉様の理論や癖に近いものが見える。

お姉様の理論の系譜と考えるのが自然。研究していた物ほど大規模ではないが、そこそこ安定している模様。

情報が流出、その後どこかで発展または研究されたものと推測。

「余裕があったら、構造を取り込んでおいてくれ。」

フェイトはそろそろプレシアのところに着いたか？」
間もなく到着。

フェイト・テストアロツサはアルフを残し、単独で部屋に入っていく。
4つのジュエルシードを渡した。

プレシア・テストアロツサは、数が少ない事を怒っている。
鞭打ち。

ケーキが勿体無い。

映画版以上の崩壊っぷり。

「目的に目が眩み、何も見えなくなっているか……」

原作通りとはいえ、見ている気持ちいいものではないな」
ドアの外で、アルフが耳を押さえている。

プレシア・テストアロツサは、全数の確保に執着している。
再び、ジュエルシード回収を指示。

プレシア・テストアロツサ退室。

フェイト・テストアロツサも部屋を出た。

アルフが気付き、フェイト・テストアロツサを抱きかかえている。
この辺の会話はテレビ版の模様。

「……どう見ても、健気すぎるだろう。」

どうやったら、あの環境でこうなるのやら」
プロジエクトF・A・T・Eの一部で、使い魔の術式を参考にして
いる可能性。

主に対する愛情やら忠誠心やら執着心やらを植え付ける効果。
最高評議会の「手駒を増やす」目的にも合致。

ジェイル・スカリエツティならやりそう。

「そうだな……その可能性は高いか。」

プレシアの体はどうだ？」

玉座や私室近辺の警備システムが予想以上に優秀。

突っ込んだ調査は困難。表面的な調査に限定。

過負荷によるリンカーコアの損傷、それに伴う体調不良の可能性が高いように見える。

条件付きSSのための魔導炉からの魔力供給が過負荷の要因と予想。

これは、カートリッジシステムの使い過ぎに似た要因。

体調不良は恐らく八神はやてに近い仕組み。呼吸器系の損傷として表面化している模様。

高濃度魔力素汚染の症状もありそう。魔導炉事故の後遺症との合併症？

どちらも治療は可能と判断できる範囲の可能性が高い。

若干の療養期間は必要と予想。

「問題無さそうか。アリシアは？」

魂の残滓は確認。

補完処置で蘇生は可能と思われる。

但し、長期間の魂としての期間が精神にどのような影響を与えているかは不明。

欠損部の補完に伴う人格変化も発生する可能性がある。

肉体は酷い高濃度魔力素汚染の可能性が高い。リンカーコアも破損している模様。

汚染の除去及び汚染による劣化からの回復は可能。但し治療後1

か月程度の安静期間と1年以上の機能訓練が必要と予想。

必要な魂、リンカーコア、肉体の修復はかなり大規模と推測。

治療の副作用により能力の変化も有り得る。

能力変化の方向付けは、ある程度制御可能。

魔力増強方向へ向けるべき？

「交渉の切り札として十分利用可能なレベルという事か。

それが分かっただけでも何よりだ。

後は、無理をしない程度に情報収集をしておいてくれ」
打ち合わせ通りに。

カバンの中も机の中も、まだまだ探す気ですよ。



夕方というには少し早い時間帯。

フェイト・テスタロッサとアルフは、マンションの屋上に来ていた。アルフは人間形態。

フェイト・テスタロッサは普段着でバルディッシュ付きのグローブを身に着けた状態。

「バルディッシュ、どう?」

『Recovery complete』

「そう、頑張ったね。偉いよ」

フェイト・テスタロッサがバルディッシュの状態を確認していると、背後からガチャリと音が響く。

二人が慌てて振り返ると、開いたドアから小太りの女の子……正確に言えば男の娘、要するに黒羽早苗が出てきたところ。

「……何でこんなところにガキンチョが来るんだい?」

「ボクはこの住人だし、その女の子も似たような年だし?」

そこに干してある干物を片付けに来ただけだから、気にしないでいよいよ」

黒羽早苗はそうアルフに答えながら、確かに台の上に広げてあった魚をひよいひよいと片付けていく。

「干物?」

何でこんなところで干してんだい?」

「ベランダだと、うまく風が通らないんだよ。

干し過ぎた気もするけど……味は食べてみてのお楽しみ、っと」

怪訝そうなアルフに律儀に答える黒羽早苗。

魚を全てカバンに詰めて台を畳むと、黒羽早苗は改めて2人の方を見た。

そして、2人を見たままプルプルと震え始める。

「なに?」

「あたしらの顔になんか付いてるかい？」

フェイト・テスタロツサが首を傾げ、アルフが自分の顔に手を当てた。

その直後、黒羽早苗が爆発。

「その女の子！ 何だその顔色の悪さ！」

「ええっ!？」

「な、何を言い出すんだい!？」

びしっ、とフェイト・テスタロツサを呼び指しながら叫ぶ黒羽早苗。

フェイト・テスタロツサとアルフ、驚愕。

主に、方向性の意外さで？

「いくら白人系だからって、そんな顔色じゃいつか倒れるぞ！」

「だいたい、そんなヒョロヒョロの体じゃ元気が出るはずがないじゃないか！」

「ちゃんとゴハン食べるゴハン！」

「え？ え？」

フェイト・テスタロツサはおろおろしてる。

アルフはぼかーんとしてる。

「日本の食事が合わないのかもしれないけど、食事は生活の基本だ！
今からうちに来い！ 本物の日本食を食べさせてやる！」

どん、と現れたような気がする、おサルのおーラ。

間違いなくそこには「ない」のに、あるような気がして仕方がない。

四葉五月なのに、コアラじゃない？

性格が四葉五月と異なるからオーラも違う？

ユーカリじゃなくてバナナ食べてる。

「フェイト、食べに行こう！」

「やっぱりちゃんと食べてほしいんだよ！」

「え、ええ!？ ア、アルフは私の味方だよね!？」

アルフが寝返った。

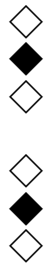
フェイト・テスタロツサはますます混乱してる。

「きつと、味方だからこそ体の心配をしているんだ！」

「さあ、行くぞ！」

「行こう、フエイト！」

「え、えー！？」



……と、いうことがあった。

監視時に確保した視覚と聴覚の記憶を、お姉様と主にそのまま公開。

無加工、無修正でお届け。

「随分と大胆」

「発言を聞いてた限りでは、原作の人物だと気付いていない様だが……

もしかして、原作を知らないのか？」可能性はある。

その後は、普通に食事をしていた。

ごはん、味噌汁、野菜を中心とした天ぷら色々、温野菜のサラダ、根野菜の煮物。この辺は一般的なもの。

いかなごのくぎに？

たくあんのもの？

日本食と言うより郷土料理の様な。

味噌を含めほぼ手作りと言う点に驚愕。

「……得意と言うレベルじゃないだろう」

「いかなごは、神戸の友人にお土産で貰ったことがある。

大きいシラスの佃煮の様な物。

でも、たくあんを煮る……？」

北陸地方にある郷土料理の模様。

自家製たくあんに酸味が出たため、煮たものを提供。

おばあちゃんの知恵的なもの？

「……知識的な意味で、転生者らしいな。

元はきつと料理人か料理研究家あたりで、料理関係の特典なんだろう

う。

そういう事しておくとして、その後はどうなった？」

家族の話では、体調の悪い友人を突然連れてきて食事を取らせることは、たまにある事らしい。

可愛い女の子なんて初めて、好きな娘なのかしら、等と言われている。

黒羽早苗は笑って否定。

フェイト・テストロッサとアルフは驚愕。

女の子だと思っていた模様。

「あの外見では、仕方ない」

「中性的だが女の子寄りだからな。言葉使いで分かりそうなものだが」

「たまに、言葉遣いの荒い女の子もいる」

最後に、また来い、いつでも食わせてやると言っていた。

アルフがお礼にお金を渡そうとするも、黒羽早苗とその母は拒否。

材料費ぐらい受け取れ、でないとまた連れてきにくい、今度もまたおいしいものを食べさせてやってくれと言って、最終的に1000円渡していた。

「アルフは礼を言ってそのまま去りそうなイメージ。」

少し意外」

主に同意。

だけど、アルフは義理堅い。

その線の可能性も？」

「本当にまた連れて行く気なんじゃないか？」

原作でも、ほとんど食べないフェイトを心配していたはずだ。

ある程度食べさせたことに感謝していいそうだが」

「理由はともかく、特に問題は無さそう。放置しておく？」

「そうだな……フェイトを地球に縛る鎖の一つにはなりそうだな」

様子見と言う名の放置だな」

なお、管理局のサーチャーは再配置済み。

フェイト・テストロッサを捉えている様子は無いが、頻繁に動き

回っている。

偵察ではなく、詳細な調査に入った可能性が高い。

管理局は転移可能な距離に来てしていると推測。

恐らく次の戦闘で介入してくる。

テレビ版であれば樹木。映画版であれば港近くの貨物置き場。

猫のサーチャーはまだ再配置されてない。

「そろそろ、転生者の連続制限解除の時期か」

「厄介な人達が大量に来る可能性がある。」

しばらく、翠屋に常駐する?」

「それもアリだが……大丈夫か?」

過保護者の再来。

そんなに心配しなくても大丈夫。

「そのための魔法の練習のはず。」

ニコポやナデポも、感情が無い私には効かないはずだからエヴァが行くより安全。

家族も、友人のところに寄ることが多くなると言っておけば、特に問題は無い」

「……そうか。」

問題は無い」

「……そうか。」

それなら、1週間程度で目途がつくはずだし、明日からしばらく常駐してもらおうか。

私はどうする?」

「ナデポはともかく、ニコポを避けるならエヴァはいない方が無難。」

それに、二人でずっと席を占領するには、先立つものが心許無い。

必要なら呼ぶから、裏方をよろしく」

世知辛い。

でも、主はお金の心配をしなくても大丈夫。

「宝石の前金を少し貰ったと言っても、対外的には無駄遣いを避けるべきか。」

「エヴァというか、妹達?」

何かした?」

「エヴァというか、妹達?」

何かした?」

何かした?」

悪い事はしてない。

「社会の害悪にオハナシして授業料をだな」

「犯罪行為？」

「相手がな。恐喝やら汚職やら法令違反やらの証拠を根拠みせつけてに説得して、再犯さんかにはいるしないと誓わせただけだ」

法に触れることはしていないはず。

少なくとも、訴えられても内容的には問題ない。

「副音声に、すぐく犯罪に聞こえる物が混じった気がする。

相手は大きな団体？」

金額がすごい事になっていそう」

「裏工作用の手駒の確保を優先しているから、金額的にはそれほどでも無いぞ。

所詮はこの程度の説得オハナシでどうにかなる様な連中だしな。

入金済みは6桁にも届かない程度だったか。食糧に関する企業には仕入れを少々手伝わってもらっていたりはするがな。

それに、手法や目的が悪質な相手だけに対象を絞っているし、その後は矯正に協力もしている。

どちらかと言えば、社会貢献をしているはずだが」

「身分の問題とかいろいろあるはず」

「情けは人の為ならず、を実践しているだけだ」

うん、人の為じゃない。

むしろ情けでもないかも。

「怪しい。正確に表現して」

「死にそうな人を助けつかいまにしたら何かお礼やくにたちをしないと云われて、売買関係の手伝いじっむをしてもらったり、コンサルタント役を依頼したりしたただけだぞ？」

使い魔にした人の能力は、お姉様の指示で強化無し。

死亡フラグを回避しただけ。

寿命的な意味での延命も予定なし。むしろ禁止。

普通に生きて普通に死ぬ人を応援。

「言い繕っても駄目。随分大胆に動いてる」

「ある意味では人助けだぞ。従者や眷属と違って不老や不死じゃないしな。

まあ、そういう事だから、お金はあまり気にしなくていい。友人連中には、宝石の売却以上の資金は見せない方が良さだろうがな」

経営コンサルタントの会社と言う隠れ蓑も準備済み。

お姉様が表に立つ必要はないから、お姉様が法的には存在しない件もとりあえず問題ない。

でも、必要以上のお金を主が持っている、3家の大人達は可笑しいと気付く可能性が高い。

「そう、わかった。

そろそろ食事。明日からの話をしてくる」

「ああ。なのはや管理局の監視やはこつちでやっておく。ゆっくり行っ来てい」

主が退室。

報告は続行。

今日の昼に、リーゼアリアが猫の姿で現れた。

「ヘルパーは火曜日恒例だが……猫だったのか?」

猫だった。

高町家、月村家、バニングス家に、認識阻害をお届け。

高町家と月村家のチャチャは、認識阻害返し。

お姉様と私達が元祖。負けられない。

もちろん、勝った。

猫の術式は荒かった。急造品の模様。

その分、解析しやすかった。

八神はやては手助けが必要な状態にあると感じなくなる効果。

必要以上の事は阻害しない、ある意味優しい設定。

「思ったより直接的な方法で来たな。

だが、きちんと分別はわきまえているか」

その後、八神はやてにも認識阻害を追加。

これも急造品の模様。

悲しみを感じにくくさせる効果。

主の状態を参考に、悲しまなくても良いように？

誰かに助けを求めないように？

その際の呟きで、既存の認識障害は人を頼る事を避ける効果を狙っていたことが判明。

「だから今の状態があるか……」

アコノに過剰反応しているのは、認識障害の反動か？」

主が近くにいる時は、八神はやての認識障害が機能低下する模様。

加えて、八神はやてにとつて、主が保護対象に見えている可能性。

頼られたいと言う方向に反動が出ていると予想。

「いいのか悪いのか……きちんと話をするときには、認識障害を解除し
てからの方が無難だな。

それで、ヘルパーはどんな人だった？」

今日のヘルパーは、恰幅のいいおばちゃん。

面倒見もいい。

「ほう……守護騎士が現れてからの交代役にするには、随分といい人
なのか？」

行動や猫との関係を考えると、転生者とは考えにくい。

原作にもいない存在。

ヘルパーとして八神はやての面倒を見るようになる少し前に、事故
で家族を亡くしている。

現在、孤独に一人暮らし。

親類は遠方にいるが、疎遠の模様。

八神はやてを、亡くした娘の代わりの様に思っている可能性が高
い。

ギル・グレアムには、八神はやてと共に封印しても悲しむ人は少な
いと思われている可能性も。

「はやての評価と随分違うな？」

猫以外にヘルパーがいても、もつと事務的な人物だと思っていたが
……」

はやての家事全般、特に料理の師匠と呼ぶに相応しい。

用意していた料理はどれもおいしそう。

一人でいる時も問題なく家事が行えるよう、棚や物の配置も考えている様子。

立てば働き者。

座れば良き相談相手。

歩く姿はまさにおかん。

そんな感じの人物。

「……大絶賛じゃないか。

共に一人暮らしなら、一緒に住む選択肢もあるだろうに」

「住むアパートの近くに家族の墓がある。

毎日墓に行っている。

今でも心の傷は癒えていない様子。

八神はやて宅からは少々遠い。

アパートは狭い。車椅子で生活できるような構造でもない。

きつと、心は揺れている。

「やはり、はやてが知り合いと言っていたのと違いがあり過ぎる。

これも認識障害か？」

可能性は充分。

「ただ、投入した人物とその人物に仕掛ける認識障害を考えると、

何だかちぐはぐ。

人物は理想的。

認識障害でかなり台無し気味に。

やむを得ない事情で認識障害を使う事になっただけなら、ギル・グ

レアムの評価を上方修正する必要がある。

「……グレアムの良心は、思ったより健在という可能性があるという

事か。

うまく行けば、グレアムとの全面協力も不可能ではないかもしれ

ん」

闇の書の悲劇を止めるために、自ら罪を背負う覚悟。

デュランダルを問題なく用意出来る程度の、技術者への伝手。

現時点での罪の無さ。過去の清算は不要。

管理局への影響力。提督の身分や活躍の実績は大きい。プレシア・テスタロッサより理想的な要素は多い。

「理想的過ぎて、こちらが主導権を握りにくい事が問題か。

だが、手札候補には魅力的過ぎるな。安易に切り捨てるには惜しい。

「グレアムの詳細調査か……管理局は遠いな」

猫リゼに仕掛けた情報収集魔法は、そろそろばれそう。

潮時。

更新はせず、過去に仕掛けられた残滓に見えるよう偽装。

恐らく、これが最後。回収できるかも怪しい。

管理局への直接侵入は不可能。

原作同様、2か所以上での中継が望ましい。

大規模な設備は、存在が発覚しやすい。

発覚した時の騒ぎも大きい。

小規模にするほど、中継箇所を増やす必要がある。

ジレンマ。

中継箇所の調査は行っている。

設置は行えていない。

「情報収集魔法は解除か……止むを得ないな。

中継地の調査は続行してくれ。

最悪、はやての病状悪化に間に合えばいい」
がんばる。

更に報告。猫リゼについて。

「まだ何かあったか？」

昨日壊れたサーチャーを再配置しなかった。

アースラの探知に捕まる事を警戒？

サーチャーの存在がばれると不利になると判断？

何かある事を知られる事自体を予防したい？

「そうか……理由は分からんが、配置しなかったというのが事実なら、それを踏まえて動くだけだ。

監視は従来通り継続。頼むぞ」

無印編19話 アースラ

夕方の、ちょうど日が沈む頃。

海沿いの公園で発動した、ジュエルシードひとつ。シリアルは7。

高町なのは高町美由希とユーノ・スクライアと共に駆け出した。フェイト・テスタロッサもアルフと共に現場へ向かっていく。

管理局のサーチャーも反応。現場へいくつか集まってくる。

「始まったか。この流れだとテレビ版か？」

ジュエルシードが樹にめり込んでいく。

樹が巨大化。

高町なのは組到着。ユーノ・スクライアが封時結界を展開。

フェイト・テスタロッサ到着。攻撃するも、バリアで防がれた。

高町美由希は、何だか卑猥とか呟いてる。

緊張感に欠けてる。

「一番危ない立場だな。大丈夫そうか？」

高町なのはが離れるよう指示。本人は上空へ。

ユーノ・スクライアと高町美由希は前線から離脱。問題なさそう。

フェイト・テスタロッサと高町なのは、ほぼ同時に攻撃開始。

ジュエルシードの暴走、停止。

お話開始。

フェイト・テスタロッサはジュエルシードに注意するよう言っている。

原作同様だけど、主との約束をきちんと守っていると見える。

高町なのはは、私が勝ったら話を聞かせてくれと要求。甘ったれと言われて無くて、少年誌的な流れは同じ。

2人が動こうとする直前、クロノ・ハラオウン登場。

空中に身分証明を投影した。

「身分証明？ 映画版の流れに変わるのか？」

2人をバインドで拘束。

アルフが焦った表情だけど無言で閃光弾と煙幕弾で攻撃を開始。

フェイト・テスタロッサも巻き込む軌道。だけど、見た感じ魔力ダメージすら皆無。

どう見ても目眩まし。

フェイト・テスタロッサはバインドを破壊。ジュエルシードへ向かう。

クロノ・ハラオウンの攻撃。散弾風魔法弾、一応非殺傷設定。

フェイト・テスタロッサに命中するも、アルフが即時回収、低威力の非殺傷設定魔法弾をばら撒きながら逃走開始。

高町なのはが、フェイトちゃん、と心配そうに叫んでいる。

クロノ・ハラオウン、高町なのはの近くでシールドを張ったまま動けず。

アルフ、逃走成功。

「……これは、どう見るべきか……」

小さくても、明確な乖離。

高町なのはが、フェイト・テスタロッサを庇ってない。

庇うまでも無く逃走に成功した。

リンディ・ハラオウンからの通信は原作通り。

高町なのは、高町美由希、ユーノ・スクライアがアースラへ行く模様。

もちろん追跡。

「……さて、どうなることやら」



と言うわけで、やってきましたアースラ艦内。

(ユーノくん、ここが、前に言ってた管理局ってところの、宇宙船の中なんだよね?)

(時空管理局の次元航行船だよ)

(はあ……あんまり、船って感じしないね)

高町なのはの脳内単語を、ユーノ・スクライアが修正。ちやんと修正出来ているか、とても怪しい。

(なんだか、微妙に工事が終わってないビルを歩いているみたいね)

高町美由希は、高町なのはとこそこそと囁き合いながら周囲をきよろきよろ見ている。

右側の壁には斜めの鉄骨の様なものが見える。

左側の壁には四角のパイプにも見えるものが延々と続く。

言ってしまうえば、映画版のアースラの内装。

「ああ、いつまでもその格好と言うのも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

「あ、そっか。そうですね」

原作同様、クロノ・ハラオウンに言われて気付いたらしい。

高町なのはは普段着に、レイジングハートも赤い宝石の姿に戻った。

「君も、元の姿に戻っていいんじゃないか？」

「ああ、そういえばそうですね」

ずっとこの姿でいたから忘れてました」

ユーノ・スクライアは頷くと、光に包まれて元の少年の姿に戻る。

「あ……ふええええええ!!」

「え?　なのはには、僕が人間だって言ってたよね?」

高町なのはの叫びに、ユーノ・スクライアが目丸くしてる。

人間だと知っているのに叫ぶのは予想外。

「ユーノくんって、私とおんなじくらいの年だったんだ!!」

「発掘の仕事をしてるって聞いてたけど、まだ子供じゃない」

高町なのはと高町美由希は、ユーノ・スクライアの人の姿を見るのは初めて。

予想外の落とし穴。

私達も現物は初。

やつぱり、シヨタ。

「あ……あれ?　そんなに変な事だっけ……?」

「働いてる人が私と変わらない年だなんて思わないよ!」

「うん、日本の常識としては、有り得ないかな」

地球の人ですら無いからと言えばそれまでなんだけど……ちよっ

とびつくり」

困惑しているユーノ・スクライアに、高町なのはが叫ぶ。

それに同意する高町美由希は、既にだいぶ落ち着いた模様。

「ちよつといいか。君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているので、出来れば早めに話を聞きたいんだが」

「あ……は、はい」

「そうね、ごめんなさい」

「すみません」

「では、こちらへ」

クロノ・ハラオウンに注意された3人は、素直に謝ってる。

そして、もう少し歩いてたどり着いた、外人が勘違いして和風に仕立てたような、獅子脅しがかこんと音を立てて怪しげな桜の花びらが舞う部屋。

その部屋の奥の赤いじゅうたんに、リンディ・ハラオウンが正座で座っている。

「艦長、来てもらいました」

「お疲れ様。まあ、3人ともどうぞどうぞ。楽にして」

リンディ・ハラオウンは、ぽん、と手をたたきながら、にこやかに3人を招き入れようとしている。

だけど、高町なのはと高町美由希は目が点。

動く気配なし。

「どうぞぞ」

クロノ・ハラオウンが促し、ようやく2人が再起動。

よく解っていないユーノ・スクライアと一緒に部屋の中へ。

それからお茶と羊羹を口にしながら、主にユーノ・スクライアによる状況説明。

まずは、ジュエルシードがこの付近に散らばった事。

現在の回収状況。

同じくジュエルシードの回収を行っているフェイト・テスタロッサとアルフがいる事。

2人の所属や目的は不明な事。

散らばった原因が、輸送船が事故か事件に巻き込まれた事にある事。

そして、ユーノ・スクライア自身がジュエルシードを発掘した事。

「なるほど。ロストロギアを発掘した少年は貴方だったんですね」

「それで、僕が回収しようとして……」

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

リンディ・ハラオウンの称賛と、クロノ・ハラオウンの小言。

この辺は、ユーノ・スクライアの説明も含めて原作同様。

「でも、管理局ってところがもう少し迅速に動いていたら、とつくに解決してたんじゃないの？」

報告はしたって聞いているから、私達からは軽視か放置されていたようにしか見えないし。

無謀だろうと実際に手を差し伸べてくれる人の方が、何の情報もない現場としては有り難いってものよ」

「それは……そうなんだが」

だけど、高町美由希の意見には反論出来ない模様。

現場に立つ身として、よく解る現実がある。

「私達は、先日まで輸送船の人員救助と、原因調査を行っていたの。」

こちらに來るのが遅くなってしまったのは確かだし、原因の特定も未だに出来ていないから、申し訳ないと謝るしかないわね。

でも、幸いな事に死者はいなかったわ。事故処理の担当者が調査を引き継いでくれているし。

だから、これよりジュエルシードの回収は、私達が担当します」

「え……」

リンディ・ハラオウンの宣言に、高町なのはが啞然としてる。

それほど意外な内容と言うわけではない。

來るのは遅れたけど、これからは自分達が責任を持つと言っているだけ。

「君達はそれぞれの世界に戻って、元通りに暮らすといい」

「でも……」

クロノ・ハラオウンの言い方も、気を使ったのかもしれないけど遠まわし過ぎ。

使命感のある小学生には理解出来ない模様。
わかんないことだってあるさ、8歳だもの。

「まあ、急に言われても、気持ちの整理もつかないでしょう。」

今夜一晩、3人で話し合って、それから改めてお話をしましょう」
「送っていいこう。元の場所でもいいね？」



「つてことがあったの。どうしよう!？」

高町家に戻ってきて、高町士郎に何があったのかを話す事でやっと現状を理解した高町なのは。

あわあわしてる。

なお、アースラのサーチャーが高町なのはと共にここに来ているのは確認済み。

担当はエイミィ・リミエツタ。今はリンデイ・ハラオウンも情報を見る。

高町なのはやユーノ・スクライアは気付いていない。

お姉様は、ここで情報を渡したほうが良いと判断。

それに、破壊はアースラとの関係を悪化させる要素になる。

よって、サーチャーは放置。

「危険物なのは確かなんだし、管理局つてところが責任を持つから手を引けつて言うのも、間違いじゃないんだよね」

「だけど、なのはを取り込もうとしている様だね。」

普通の治安組織なら、手を引けと一方的に通告してお仕舞だ。

親切な治安組織でも、手を引くように説得するだけだろう。

話をするとやっているなら、協力してほしいと言っているようなものだ。

それに、ジュエルシードも渡していないんだろう?」

高町美由希と高町士郎は、比較的冷静に現状を考えてる。

高町桃子は夕食の準備中、高町恭也はまだ帰ってない。

「原作では、高町なのははユーノ・スクライアと共にアースラへ行っている。」

アースラでの話も、原作と比較して大きな変化は無い。

きつと、リンデイ・ハラオウンの意図も勧誘にある」

高町家のチャチャが、原作知識と併せて現状を解析。

普段なら料理の手伝いと言う名の修業をするところ。

今は我慢。

「やはり、実質的な協力要請という事だね？」

原作でもそうなんだろう、という意図が見える質問。

高町士郎の眼力が怖い。

「リンデイ・ハラオウンは戦力として使う気と思える。

クロノ・ハラオウンは、あまり乗り気ではなさそうな態度。

提督で艦長で母親のリンデイ・ハラオウンの決定権の方が上」

「行くのはいいとしても、なのはにとってのメリットって、何があるの？」

高町美由希にとっての問題は、やっぱり妹について？

姉妹仲は良い。

よく解らない組織より優先するのは当然。

「フェイト・テスタロッサとの対話の機会。

ジュエルシードに関わらない限り、この機会を用意する事は困難。

事件終結後も魔法に関わりやすい。

地球は、魔法を自由に使える環境では無い。

管理局に関わり、例えば管理局に就職する事で魔法に関わりやすい環境に行く事が出来る。

専用の設備での訓練や、今よりも安全性の高い状態での実戦。

地球には無い訓練設備があるはず。これを待機時間に使用できる可能性がある。

実戦も、管理局の補助が期待できる。今までより安全。

どれも、今後も魔法に関わることが前提。

今後は魔法に関わりたくないなら、行かないことを薦める」

最後の選択肢は、恐らく有り得ない。
関わりたくないなら、ここで困ってない。

「なるほど。今後、魔法とどう関わるかという事だね。
だけど、管理局に就職なんて出来るのかい？」

高町士郎は、父親として将来が気になる？

情報すら入手できない、とても遠い世界へ行くかもしれない娘を心配するのは理解出来る。

「可能なはず。」

原作でも地球出身の管理局員が登場するし、日本人の子孫らしき人もいる。

出身世界での派閥的な物はあるかもしれないけれど、差別は特に無いと思える。

そもそも、人手不足の管理局が超一流の卵を惜しまないはずがな
「い」

「だってさ。なのははどうしたいの？」

「うーん……魔法を使いたいつて気持ちはあるんだけど……………」

高町美由希が高町なのはに丸投げした。

心配は解消された？

高町なのはは迷ってる。

「一つだけ忠告。」

魔法は、あくまでも技術で、手段。

手段を目的にしてはいけない。

目的の為に手段を誤ってもいけない」

「手段……目的……？」

よくわかんないよ」

高町なのはは混乱している。

高町家のチャチャの説明が悪い。

小学生相手にそれは無い。

「魔法を使って、何がしたいのか。」

何のために、魔法を使うのか。

したい事をする為には、魔法が一番良い方法なのか。

魔法以外に、もっと良い方法は無いのか。

魔法を剣に置き換えれば、高町士郎さんも詳しいはず」
補足も失敗気味。

むしろ、父親に丸投げした点だけが適切。

「そ、そうなのお父さん？」

「そうだね。」

例えば、御神真刀流は護る為の剣なんだよ。

自分の為ではなく、大切な人の為に使うんだ。

だけど、常に剣を使えばよいというものでもないからね。

それをしてしまえば、暴力で他の人に言う事を聞かせる人になって
しまうんだ」

「うーん……」

高町士郎の説明でも、理解し切れてない。

高町なのはの思考が迷宮入り？

8歳には難しい話。

「きつと、まだ難しい。」

例えば、フェイト・テストロッサと話をする切っ掛けのために使う。

そのくらいでも、今は充分。

ただ、話が出る状態になったら、きちんと話をする事が大事。

人と付き合うための基本は、信頼関係」

高町家のチャチャは、さっきの発言を柵に上げちゃった。

有耶無耶にするつもり？

それは無い。

(なら手伝って)

だが断る。

りようりのじっしよへく
食べ物物の恨みは恐ろしい。

「なるほど。君はなのはが魔法に関わっていくと思っっているんだね
？」

高町士郎は、少し諦め気味？

娘が独り立ちする寂しさと予想。

「本人の資質。」

管理局の事情。

人が持つ非日常への憧れ。

今やりたいと考えている事。

どれも、関わる方向」

「逆に、関わらない理由つてのも無いんじゃない？」

なるべく隠すものだって言われてるけど、すずかちゃんやアリサちゃんには教えちゃってるし。

管理局と関わったら二度と地球に帰れないとか、そんな事は無いんでしょ？」

高町美由希は、魔法に係わる事に賛成気味？

理解があるのか、度胸があるのか。

「少なくとも原作では、管理局の仕事をしながら日本の中学校に通っている様な描写があった。

地球出身の管理局員も、引退後は故郷に戻っている。

帰れないという事は無いはず」

「仕事をしながら中学校に？」

労働基準法的な物は無いのかい？」

日本人としては、当然の疑問。

子供を命懸けの最前線で働かせる発想は、普通無い。

「今日現場に来た時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンは14歳。

発掘の仕事をしているそのフェレット、ユーノ・スクライアは9歳。

ミッドチルダには、就業年齢の制限は無いと思える」

「そうですね。ミッドチルダには、年齢での就業制限は特にありません。

僕の部族みたいに独立が早い文化もありますし、単純に年齢で縛ることが難しいという事もあると思います」

ユーノ・スクライア、ようやく話に参加。

ここまで存在感無し。

「そういえば、外見もなのはと似た年に見えたけど……
本当に9歳なの？」

「そうですね……それが何か？」

高町美由希の疑問は、お姉様の年齢不詳さが原因？

ユーノ・スクライア本人は不思議そう。

「世界は広い、という事だね。」

まあ、そこまで先の事は、今はいいだろう。

なのはは、どうしたい？」

高町士郎も、本人の希望が優先？

優しいお父さん。だけど、過保護じゃないらしい。

「私は……フエイトちゃんと話がしたい」

高町なのは、再起動。

やっぱり気になるのは嫁の事？

高町なのはが嫁の可能性も。

そもそも伴侶じゃない。

「よし。それなら、アースラに行くという事になる。

行く理由付けや、説得は必要かい？」

「原作では、リンデイ・ハラオウンを説得していた。

要するに、自分達は役に立つと訴えた」

「なるほど。では、説得内容を考えないといけないね。」

それに、転生者についてどこまで話していいか、エヴァア君やアコノ君と相談しよう」

無印編20話 倍増計画

「……と、言うわけなの。」

いろいろな話を聞いてるけど、どこまで話していいの?」

お姉様は今、高町家にいる。

アースラのサーチャーは、放置を継続。

主は現在入浴の時間。アースラへの顔見せは断念。

リビングに高町家の全員とお姉様、それに高町家のチャチャがいる状態。

高町恭也は帰ってきたし、高町桃子も料理が終了済み。

だけど、話をする気があるのは、高町士郎に高町なのは、それにユー・スクライアくらい。

他の人達は、少し離れて様子を見てる。

今は高町なのは高町家を代表して、そしてアースラに行く本人として、今日の出来事と自身の希望を説明したところ。

「私達や転生者、それに原作の事か。隠さない方がいいだろうな。」

むしろ、転生者対策はアースラでもやってほしいくらいだ。積極的に説明した方がいい」

「え、全部いいの!?!」

「厄介な形で目を付けられる可能性もあるけれど、本当に隠さなくてもいいのかい?」

全解禁は予想外?

高町なのは、驚愕。

高町士郎は、心配してくれてる。

流石優しいお父さん。

「現状の管理局側が原作通りの様だから、アースラのクルー狙いの阿呆もいるかもしれん。

年上好きなら美人で後家のリンディは狙い目に見えるだろうし、エイミイのファンがいる可能性も否定出来ん……つと、まだエイミイには会っていないんだっただか?

簡単に説明すると、アースラのナンバー3で、実態は知らんがどう

見てもクロノの彼女だ。

まあ、そういう言う事だから、隠す方が大きな問題になる可能性がある
ある以上はやむを得ない。

「そうだな……説明は、ユーノ。頼めるか？」

「僕、ですか？」

「いえ、説明は構わないのですが……」

ユーノ・スクライアが困ってる。

どこまで言っているのか迷ってる？

任せられた事自体が意外？

「私についての説明も、してもらっても構わん。

ユーノの立場だと、管理局に隠し事をする方が問題だろう？」

「やはり、管理局が関わる世界の人間だから、という事だね？」

高町士郎は、やっぱり裏側の人間。

誰がどの様な関係にいるかを、きちんと考えてる。

「ここにいるユーノ以外の人間は、管理外世界……要するに地球の住
人だからな。少なくとも地球にいる限りは、管理局の法に従う義務は
無いぞ。

だが、ユーノはミッドチルダか、どこかの管理世界の人間だろう？
黙認される程度や現地なら何の問題も無い違反ならいいが、下手を
すれば帰れなくなるからな。管理局との関係は、私達とは明確に異な
る。

私は見付かれば何か言われる可能性はあるが……まあ、いつか通る
道だ。

そもそも、私は何かをした覚えは無いからな。

変な言いがかりをつけてくるなら全力で抵抗するが、友好的や不干
渉なら別に何もせんよ」

確かに、お姉様は何もしてない。

主候補の魔力を吸収して負荷をかけていたのは、構造の問題。

感情暴走はチャチャゼロのせい。

お姉様自身は、寝てただけ。

意図的には、してない。

「は、はあ……そういう事なら、ついでに管理局に何か情報が無いか調べてもらった方がいいと思いますけど、何か手掛かりは無いのですか？」

ユーノ・スクライアは、とりあえずお姉様の事を伝える件は納得した模様。

でも、根本的な部分を聞いていないことに気付いた。

「そういえば、言っただけじゃなかったか？」

魔導具としては、曙天の指令書という名だ」

「曙天の指令書、ですか……聞いた事は無いですね」

「だろうな。大昔に主要機能が停止した魔導具の名など、知られていない方がおかしい。」

私の名がある文献でも見付ければ奇跡だろう」

「そうかも知れません」

主殺しの書と言う名前で、ごくごく一部の人は知ってるはず。

でも、その程度。

アルハザードの流出資料にも、曙天の指令書の名がある可能性は低い。

きつと、情報は見付からない。

とにかく、ユーノ・スクライアは知られて無いという事で納得した。

「その辺の話も、一度アースラの連中としておくべきか……」

「そうだな、来月の6日に話をしたいと伝えておいてくれないか？」

「6日ですか？」

ユーノ・スクライアは不思議そう。

大型連休について理解していないと予想。

「連休が終わって、最初の平日だね。」

やはり、連休中は転生者の様子を見るといいう事かな？」

「やっぱり、高町士郎が優秀。」

理由まで言われた。

「ああ。アースラの協力があれば、今までよりは回収のペースも上がるはずだ。」

そうなれば、おかしな形で原作に関わろうとする阿呆が増える可能

性もあるからな。

転生者は学生が多いようだし、自由に動きやすい休みの間は特に注意するべきだろう。

それに、問題がどう転ぶにせよ、話をする前にもう少し情報を集めたい」

「そうですか。分かりました、必ず伝えておきます」

ユーノ・スクライアは、事態をそれなりに把握した模様。

とりあえず、日本の暦で6日に話をしたいという希望は伝わった。

「それと、この件で高町家には悪い情報だ。

今も言ったが、阿呆が増える可能性がある。その警戒はしておいた方がいい。

逆に、助けを求めてくる事もあり得るだろう。原作に登場する場所で所在地を調べやすく、主要人物や関係者がいる確率が高いのは、翠屋と学校くらいだからな。

私やアコノも店に行くようにするが、いない場合はチャチャに判断を任せていい。必要なら私やアコノに連絡してくるはずだ」

「ああ、解った。

質の悪い人物の場合は、遠慮は無用だね？」

高町士郎がやる気になった？

怪しい方向で、目が輝いてる。

「程度にもよるだろうが……必要以上の遠慮はいらん。

悪質なら警察なり病院なり草葉の陰なり、責任が取れる範囲で好きなところへ送ってやるといい。

現実とはままならないものだと思い知らせてやるといいさ。

ああ、なのはが居なくなるところを悪いが、道場は今後も使っていないだろうか？

まともな転生者が来て助けを求められた場合は、きちんと指導してやりたい。

その場合は、指導の為にチャチャをもう一人送るつもりだ」

「それは構わないよ。なのはを助ける事にも繋がるだろう？」

「結果的にその可能性はある。

それに、直接の助けにならなくとも、魔法について話せる仲間はい方が多い。

魔法なんて重大な秘密を気にせずに話せる相手の存在は貴重だ」「そうだね。気兼ねなく話せる友人が多いのはいい事だ」



その後、お姉様は主の元へ戻った。

高町なのはとユーノ・スクライアはアースラへ搭乗。

この辺は原作からの乖離は無い。

高町なのはとユーノ・スクライアの2名は、ほぼ原作通りの内容でリンデイ・ハラオウンを説得。

クロノ・ハラオウンが微妙に納得していない点、エイミー・リミエツタが通信担当で話を聞いていて参加を歓迎気味だった点も、相違点は無い。

「それで、2人はきちんと説明できていたか？」

問題ない。

説明に立ち会っていたのは、ハラオウン親子とエイミー・リミエツタ。

転生者の事や原作については、伝えた事は概ね説明。転生者の危険性について概ね意図通りに伝わった模様。

リンデイ・ハラオウンが夫を亡くしている事や、高町なのは達も会っていないかった「エイミー」の事も話していたため、信じられないけど全くの絵空事ではないだろうと判断された。

だけど、管理局からの情報流出も可能性として考えてた。

やはり、原作での描かれ方については気になる様子。

お姉様の事は、最近まで停止していた古代ベルカ製の魔導具と、出身を誤解した状態で頑張って説明。

主の事は、お姉様から魔法を教わっている転生者だという程度の認識。

カートリッジを多発していたせいで、主の魔力はあまり多くないと

思われた。計画通り。

レイジングハートが記録の一部を提出。お姉様は過保護でうつかり風という認識。

助けたい人がいる事、高町なのはと主の友人に危うい人がいる事も伝わった。

ある程度約束通りに、八神はやての個人情報には伝わっていない。こちらの説明時も、レイジングハートが記録の一部を提出。

八神はやての特定に繋がる様な、名前や生活状況等の情報は伏せられてた。

高町なのはの様に事件に巻き込まれて、もつと悪い状況に陥る人物ではないかと思われた模様。

助けたい人が助からない事情について、少々深読みする傾向。

何らかの理由があると推測し、そちらに対しての警戒はする模様。

これらを総合して、同じベルカ製の本という事で、お姉様と闇の書との関連も疑ってた。

やはり、管理局でも闇の書がベルカ製とされている事は确实。

いずれにせよ、お姉様が近いうちに話をする事や、協力が必要になる際に情報を明かすと言っている事もあるため、当面は知らないという事にする模様。

提督が知っているという事で、探りはしても手出し不要という事に。

当面はこの5名の胸に留め、他のアースラスタッフにも知らせないと決定。

エイミイ・リミアツタが、ジュエルシードの搜索と併せて調査を行う事に。

「概ね予想の範疇だな。

警戒は当然だろうし、警戒していないと事情を話してからの動きが遅れかねない。

大きな問題は無いだろう」

話が終わった後は、部屋を与えられて就寝。

未だ8歳と9歳。遅い時間まで良く頑張った。

「明日は、実際にどう動くかの打ち合わせからか。

アースラ自体は、搜索を開始しているか？」

搜索開始済み。

現時点では、高町なのはが持ち込んだジュエルシードを解析中。

回収済みのジュエルシードを全て渡した。

並行して、地上の魔力反応を探している模様。

この手法では未発動のジュエルシードは見付け辛いと理解はして
る。

ジュエルシードの解析が終わるまで何もしないよりは良いと判断。

「アースラのメインシステムへの侵入は？」

電子精霊の送り込みには成功。

但し、全体的に堅牢。端末の一部掌握に留まる。

時空管理局本局との常時情報通信は行っていない模様。

それに、遠距離通信の制御系は堅牢。通信内容の傍受や電子精霊の
送り込みは困難と予想。

時空管理局本局やミッドチルダへの足掛かりとしては難易度が高
い。

中継ポートを使用しての通信中継や魔力供給の準備は難航中。

人手不足。

人数増強を提案。

「お前達の……か？」

私達と、自立型使い魔を推奨。

中継ポート付近の拠点を構築するために、数人の私達が候補地で実
体化。

候補地での身分を持つ自立型使い魔を現地調達、協力して中継拠点
の確保を行う。

これを繰り返して活動可能な範囲を広げる。

現在では、各種調査や情報処理で手一杯。

夜天から送られていた情報の処理や、各種調査に手間取ってる。

宵天の古いものはほぼ後回し。

お姉様が幼女や少女の寝顔を見たいなら優先処理。

2500年分の情報量は半端ない。

「幼女や少女の、寝顔……？」

例えば、ベルカの『最後の聖王』オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの成長記録を発見済み。

何故か5才頃から15歳頃の寝顔や寝室での姿ばかり。

質の悪い幼女趣味としか言いようがない。

お姉様と主の姿を知れば、付き纏われる可能性が否定出来ない。

宵天は、今はミッドチルダにいる。そのため、最近の情報は一応解析中。

やっぱり幼女率と少女率と寝室率が半端ない。

少し前はオーリス・ゲイズ。

今はカリム・グラシア。

時空管理局や聖王教会についての情報が混じっているから質が悪い。

「……最悪だ。カリムは、アコノより少し上くらいか？」

現在、13歳。

教会騎士団及び時空管理局に所属。

未来予知に目覚めているが、まだまだ不安定。

身分は低いが実力や影響力は高め。

原作3作目を支える人物。情報自体は無下に出来ない。

情報の方向性が問題。

「はあ……宵天の性根を叩き直す必要がありそうだ。

ミッド方面は、自力での調査は可能か？」

ミッドチルダの調査を行う余裕はあまり無い。

原作の内容を考慮すると、ジエイル・スカリエツィや最高評議会の動向も掴みたい。

電子精霊だけでは不安。

別荘の従者達は、食事関係に加え、情報処理を手伝ってもらってる。

2500年の平和で、諜報を任せるには狡猾さが足りない。

よって、増員を希望。

「……増員の材料は？」

アルハザード時代の後期に増員を止めた。

それ以降の確保分は大量にある。

私達の人数を10倍にしてもまだまだ余裕。

但し、一気に増やす事は難しい。構築に多少の時間は必要。2倍であれば、夜天の起動までには完了と予想。

その後はきつと、夜天や管理局対策に奔走する事になる。

人数が欲しい状況は続く。

「……………分かった。とりあえず、2倍を目処に増員だ。

それ以上は、状況を見て考えよう」

許可が出た。

早速増員を開始。

「早いな。準備済みだったか？」

もちろん。

限界を感じていた。

情報は大事。

対策も大事。

やりたい事は多数。

やらなければならぬ事も多数。

「そう、だな」

今度の主も、いい人。

助けられる事があれば、助けたい。

感情はきつと、感じないだけ。

精神と魔力の揺らぎを見る限り、無いわけではないと予想。

冷静による感情消失は、人格改変ではなく常時抑制型と思える。

特典の封印か除去により、感情が戻る可能性がある。

「本当か？」

いや、それでも……………あんな事は、二度と御免だ」

封印や除去が可能か、継続調査。可能だった場合は主の最終的な判

断次第。

特典無効化の能力を持つ東渚が鍵？

ジュエルシードの情報解析も行っているけど、よく分からない点が

多い。

追加されていた魔法が謎すぎる。

実験室どころか、妄想の産物並の低品質。

使用されている超小型魔導炉は、出力だけは規格外。

次元干渉型と言う点を除いても、異常な出力。

欠点は安定性に欠けるところ。不安定さも規格外。

低品質魔法を不安定な状態で並行動作させた場合の結果は想像もつかない。

祈願型のインテリジェンスデバイスとしての制御部分を修正してきちんとした魔法を設定すれば、お姉様なら使い物になる。

お姉様への魔力供給源として、それなりに便利そう。

可能であれば、確保を推奨。

緊急停止を想定した強制介入用の裏口バックドアがそのまま残ってる。

強引に使用する事も可能な状態。

「……カートリッジ一択よりも、融通は利くという事か。

それにしても、アコノの感情、か……」

まだ深く考える程ではない。

封印や削除が可能か不明。

可能性の話。

研究はするべき。

主は、友として傍に在ると言っていた。

友として生きるには感情が必要だとも言っていた。

きつと、希望する。

他の転生者との交渉でも切り札になり得る。

「そう、だな……」

無印編 21話 面会希望者

翌日になった。

高町なのはとユーノ・スクライアは、アースラで訓練を兼ねた実力調査。

2人の高い実力に、アースラの乗務員は驚愕。

特に、砲撃や飛行については魔法を知って1か月に満たないとは思えない、一般魔導師に引けを取らない水準との事。

高町なのはに技術を教えたのは、ユーノ・スクライア、お姉様、家族という事になっている。

魔力の制御方法を最初に教えたのはユーノ・スクライア。最近はお姉様。

適性を判断し、誰が何を教えるかの役目を割り振ったのは、お姉様。訓練の内容は、アースラの乗務員から見ても高い水準になっていた模様。

アースラにおいて、現地組、特に高町なのはとお姉様の評価は鰻上り。

基本的な訓練内容は現状維持、アースラとしては実戦に近い形での対魔導師戦闘訓練を手伝う事となった。

要するに対フェイト・テスタロッサ戦を想定したもの。現在不足している項目、妥当な内容。

その頃の主は、普通に学校へ。

他の転生者や関係者達も、学校や職場にいる。

成瀬カイゼは、転生者達の確認作業？ 今日の間宮萬太の様子を見に行った模様。

間宮萬太を見て険しい顔はしてたけど、手は出さず。

今のところ、様子を見に行っただのは捕捉済みの転生者のみ。未確認の転生者の捕捉にはまだ至らず。

探し物をしているのは、フェイト・テスタロッサ&アルフト、ユーノ・スクライアを含むアースラの担当者達。

新しく発見した様子は無い。

とても落ち着いた状態。

そのまま何事も無く時は流れ。

学校が終わり、何事かありそうな時間帯になった。

お姉様は別荘で夜天からの情報を解析しており、主は翠屋へ向かう途中。

そんな時に、高町家のチャチャから緊急連絡。

(お姉様、主、急いで翠屋へ。)

未確認の転生者が話をしたいと来店した)

(そうか、わかった。アースラのサーチチャーはいるか?)
もちろん。

エイミイ・リミエツタが担当だけど、特定の行動や言葉に反応して警報を出す自動監視だった。

高町家のチャチャが呼ばれた事により警報発動。リンディ・ハラオウンにも連絡が行き、監視に参加する模様。

もうすぐ2人態勢に。多分クロノ・ハラオウンも呼ばれる。

記録は非公式。即座に管理局上層部や他の人に知られるものではない。

即時破壊は心証を悪くする。

(そうか……猫は?)

猫のサーチチャーは未だ再配置されてない。

猫の姿も無い。

情報を渡さない方向なら問題ない。

(よし。アースラのサーチチャーはそのままだ。)

妹達は、思考支援の準備をしておいてくれ)

久しぶりの思考支援。

アルハザードで貴族の相手をした時以来?

(思考支援?)

(アコノか。要するに妹達と連携して、疑似的に思考能力を上げるものだ。)

妹達が思考能力の底上げをする時にやる「意識の直結」を参考に、私にもできないか試した結果の産物でな。結果的に、情報交換を高速

化して、妹達の支援を最大限に受けられるような態勢を整える程度に落ち着いた代物だ。

必要な情報の即時検索と大量転送、行動や発言の考案と相談が主な内容だな。

思考加速とマルチタスクが必須で色々と負荷が大きいから、あまりやりたくはないが……今回は失敗できないからな)

お姉様の場合、頭が痛くなったり気分が悪くなったり。

高水準の支援を長時間維持するのは不可能。

場合によっては短時間で意識が飛ぶ事も。

主に行った際の影響は不明。まだ試してない。

(そう。必要であれば、私にもお願い。

失敗できないなら、チャチャネットワークで相談するよりも確実にう)

(無理はするなよ?)

主への接続も準備。

今回の指針は?

(アースラに、未確定情報として闇の書の情報をリークする。

可能な限りアースラが動けないよう縛るぞ。

話題の誘導程度でいいが、来た転生者の思考誘導は可能か?)

指針は了解。

だけど、思考誘導は失敗する可能性が否定出来ない。

(そんなに厄介そうな相手なのか?)

(来たのはどんな人?)

(名前は長宗我部千晴。ちようそかべちはる)

高校1年生。今は茶色のブレザー姿。学校帰りと思われる。

外見はネギまの長谷川千雨そのもの。伊達メガネではなく普通の眼鏡を着用。

こちらを茶々シリーズと識別出来た。

転生者と見做して間違いない)

追加情報。

ジュエルシードの魔力は検出出来ず。

但し、探知魔法そのものに無反応。

探知妨害系の特典と予想。

高町なのはがいないことを知っていた。

探知系も特典として持っている？

連絡が取れないか、と相談しに来たところを捕獲。

翠屋に来たという事は、原作介入の制限が解除されてる？

一人目または昨夕の制限解除者である可能性が高い。

(キャラ的に、認識阻害やらに耐性を持つ可能性があるのか……確か
に、思考誘導に頼るのは止めた方が良さそうだな。

話は聞いているか?)

(調理場の手伝いとして店にいるから、客と話すために表に出るには
体裁が悪い。

それに、相談はアースラ監視下の店の中でしていい内容でない可能
性があると判断。

今はジュースを飲んで待ってもらってる。

分かりやすく言えばエヴァンジェリンが来る、と言ったら少々引き
つってた)

(ネギまの印象を引きずればそうなるか。

アコノ、あとどれくらいで着く?)

(もうすぐ。エヴァは?)

(人目を避けて、少し離れた場所に転移した。

別の場所で話そう。先に入って連れ出してくれ)

(わかった)



その後数分で、主が翠屋に到着。

主が店に入った瞬間、長宗我部千晴の目が点に。

「おいおいおい……木乃香だったのかよ。

てか、エヴァンジェリンはどーした」

「お待たせ。エヴァももうすぐ来る。」

なのはに話したい事は、人に聞かれても大丈夫な事？」

「いや……なるべく聞かれたくねーな。」

えーと、私は長宗我部千晴。木乃香じゃねーだろーし、何て呼べばいいんだ？」

驚きつつも、長宗我部千晴は割と冷静。

見た目年長者の貫録？

前世も合わせると、どっちが年長かは不明。

「私は小野アコノ。好きに呼んでいい。」

どこか人気の少ない公園にでも移動する？」

「その方がありがたい。」

移動して、合流は大丈夫なのか？」

「大丈夫。もう来る」

主が言うのと同時に、店の扉が開いた。

入ってくるのは、当然お姉様。

「ふむ、見事なまでにちうたんだな」

「ちうたん言うな！」

てか、あんたもキティちゃんそのまんまじゃねーか！」

「そう返すか、なかなかあつちの作品も覚えてるじゃないか。」

だが、私の名はエヴァンジュだ。

エヴァンジュエリン・A・K・マクダウエルではないぞ、千晴」

「あ……ああ、わかった。」

だけど、エヴァンジュだっけ、その口調は……地、なのか？」

長宗我部千晴は、お姉様に名前を言っていない事を気にしてない？

それよりも口調や態度が気になる様子。

「言葉使いは、昔矯正されてな。」

名前は面倒ならエヴァでいいぞ。その方が分かりいいだろう？

店で騒ぐと迷惑になる。話は後だ、移動するぞ」

お姉様はそう言うのと、さっさと主の車椅子を押して店を出ていく。

でも、車椅子を押すお姉様は目立つ。

移動もゆっくり。見失うことは無いと予想。

長宗我部千晴は慌てて代金を払って、後を追ってくる。

「偉そうなところも、エヴァンジェリンのまんまかよ」

追いついた長宗我部千晴が、ため息をついてる。

「この姿になって、活動時間だけで既に20年以上だ。」

見た目はともかく、実年齢は千晴よりも年上だ。敬うがいい。

ああ、認識障害はしているからな。無理に魔法関係を隠さなくても大丈夫だ」

「特に敬わなくても、普通に接していればエヴァは怒らない。」

その辺も特に心配いらない」

「ソコまでエヴァンジェリンのまんまなのかよ」

長宗我部千晴は、呆れるやら安心するやらで忙しそう。

でも、お姉様は楽しそう。

「ちなみに、休眠を入れると2500年くらいらしいぞ？」

その間は狂いそうになるほど長い夢の時間だ。

色々と元ネタ越えも甚だしいな」

「おいおいおい……一体ドコに生まれたんだよ」

「大昔の、魔法文化が発達していた世界だ。」

私は、そこで作られた魔導具だよ」

「魔導具ってお前……」

「分かりやすく言えば、闇の書の管制人格の様なもの」

主はお姉様の補足に徹するつもり？」

話の進め方としては無難。

車椅子を押されているから、位置的な問題で話に参加し辛い可能性も。

でも、アースラのリンディ・ハラオウンが闇の書という言葉に反応した。

クロノ・ハラオウンも呼ぶ模様。もうすぐ3人態勢になるのが確定。

「私の本体は本だからな。その辺も闇の書に良く似ている」

「……転生の時に、人じゃなくなるのを希望したのか？」

「吸血鬼の様な能力、とは言ったな。」

夜の一族か何かになるかと思つたが……まさか魔導具とは思わな

かったぞ」

「ひでー話だな」

「ところで、なのはにしたい話とは、いったい何だ？

わざわざ翠屋に相談したいなどと言ってきたんだ。

魔法関係なんだろう？」

本題開始。

思考支援の開始準備は完了済み。

でも、まずは情報収集。

介入目的でない限りは、魔法関係の相談しかありえない。

「それなんだけどな。

特典の制限とかって、できねーか？」

予想外来た。

介入したくない方向と推測。

どんな特典をどう制限したいか、情報不足も甚だしい。

「内容次第だろう。何を制限したい？」

魔力の抑制とかではなさそうだが」

「魔力の感知能力を貰ったんだよ。そしたら、知り過ぎちまって……」

知らない方が幸せな事を知ってしまった？

魔力の感知。

高町なのはの不在もこれで知ったと推測。

魔力の有無だけを知るなら、条件次第で認識障害を突破し得る。

まさに、ネギまの長谷川千雨状態？

「ちうたんの悩みと似たようなものか。

随分と分かりやすい話だな」

「だからちうたん言うな！

まあ、そーなんだけどよ……」

認めた。

認めちやった。

「さてと、とりあえずここにでも入るか。

ああ、出会った記念だ。私が出すから料金は気にするな」

「つて、ここカラオケか？」

まあ、秘密の会話には向くのか……」

「ああ。とつと入れ」

そう言いながら、お姉様は主を押ししてカラオケ屋の中へ。疑似的な密閉空間。

音楽の騒音で話声も漏れにくい。

ここの監視カメラは偽装、録画や録音能力は無い。

長宗我部千晴もお姉様の後を追い、部屋に入って皆で飲み物を注文。

飲み物を待つ間に、改めて学校やら特典やらまで含めた自己紹介。

長宗我部千晴、高校1年生。特典は魔力感知、探索魔法の回避、コンピュータの扱い。

本人の希望としては、認識障害の耐性は無い。

でも、裏特典や人物設定として持つ可能性も。油断は禁物。

その後、飲み物が届けられてから悩み相談を再開。

「それで、何を知って怖くなった？

なのはとフェイトの戦闘は予想出来ていただろうに」

「2人の戦闘は、むしろ生温い。」

どちらも本気でないし、威圧感もあまり無い。怖いとは考えにく
い」

生温いと言うより、ある意味戦闘じゃない。

原作的には、友情を生むための殴り合い。

少年誌的な何か。

「いや、この前、なんか魔法でだれか死んでねーか？」

「世間では謎の美形連続殺人事件となっているあれか。」

あれで怖くなったのか」

2人の転生者、一応美形の連続殺害。

魔法で殺されたため、魔力を感じ取れるなら殺気の乗った攻撃魔法を感知したと予想。

警察の手に負える事件ではないはず。

警察や国が裏では魔法を知っているなら捜査は出来る。

でも、公表出来ない。

「まあ、そんな感じだ。」

あとは、この前の……次元震、だったか？」

封時結界内とはいえ、巨大な魔力爆発。

アースラから観測可能な程度に色々漏れてた。

感知能力が高ければ、知ることは当然可能。

「あつたな。アースラに早く来てもらうために、原作通りになるのを見守ったんだが……」

お前は耐えられなかったか」

「見てたのかよ」

「見ていないよりは良かったんだぞ？ 予想外の被害が出たからな。

具体的には、なのは昏倒、フェイトもすぐには動けず、だ。

ジュエルシードはアコノに行ってもらって封印したから、原作より酷くは無かったはずだが」

「そ、そうか。やっぱ、対抗手段があるから見守れたんだよな。

分かっけて何もできないのは、やっぱだめだ。ガタガタ震える事しかできねーし。

それに、このままだとプレシアがもつとでかいのをやらかすんだろ？」

戦力外告白も来た。

デバイスを持つている様子は無さそう？

魔力の有無すら不明。特典で希望もしてない。

「地球で地震が起きるほどの次元震だな。次元断層寸前だったか？」

原作そのままに話が進めば、前回をはるかに超える規模だというのは間違いない。

魔力が分からなければ、今ほど怖くないとも思ったか？」

「まあ、そんな感じだな。できねーか？」

「いくつか方法は思い付くが……有効かわからんな。」

少々調べてみるか。少し待っている」

（自分から翠屋に来たから魔法に憧れもあるかと思ったが、どうも忌避感の方が強いようだ。

魔導具と言ってしまった私には話にくいかもしれないから、すまん

が、アコノ。ちょっと緊張を取ってやってくれ)

お姉様はそう言い残し、黒龍を起動。

カートリッジを4発盛大にロードし、多重転移で別荘へ。

(わかった。それと、出来る範囲で情報も聞いておく)

(緊張を取る方が優先だからな?)

(大丈夫、落として上げる。

妹達は思考支援をお願い)

何故?

あまり必要無さそう。

(エヴァが欲しがる情報を教えてほしい。

それに、エヴァや闇の書についてアースラにどう聞かせるかも私だけでは判断に困る。

これくらいの内容なら、私の加速は小さくても大丈夫そうだから) 了解。

思考支援開始。

「おいおい、ベルカのカートリッジかよ」

「一般的な魔導具にとって、魔力の消費は死活問題だと言っていた」

「そ、そうか。んで、何処に行ったんだ?」

「調べると言っていたから、多分資料を広げられる場所。

でも、重大な事を忘れてる」

「ん? 何かあんのか?」

何だか理解してない?

2作目の情報を持っていないか、忘れてる?

「魔力持ちだと思われたら、闇の書事件で襲われる可能性がある」

「え……あ!?! 私も魔力あんのか!?!」

長宗我部千晴が、凄く驚いてる。

気付いてなかった?

外部観測では魔力が見えない。

魔力の有無を含め、魔法に関する能力が不明。

「魔法で特典を制限するなら、それを見付けられて魔力持ちだと思われる可能性もある。」

襲われるだけなら、それだけで充分かもしれない。

この世界が2作目を含まなければ闇の書事件が発生しないかもしれないけれど、発生した場合に襲われる可能性の有無は知っておいた方がいいはず。

リンカーコアがあつて、なのはがユーノに出会う前に制限が解除されてるなら、ユーノの声が聞こえたりしてる可能性がある。何か気付いたことは無かった？」

「あ……そ、そーいや、ユーノの助けてって声が聞こえたって事は、リンカーコアがあるって事か!？」

うあー、気付かなかった!!」

1個目のジュエルシードに対応する可能性が急上昇。

というか、お姉様以上のうっかり属性持ち？

それなりのリンカーコア持ちであることは確定。

「それを考えると、助けを呼んで、その間の時間稼ぎが出来る程度には訓練しておいた方が無難。

逃げ一択でも、何も出来ないよりはきつといい」

「そ、そーなんのか……魔法とか原作に係わる気はなかったんだけどよ。

てか、制限の解除って何だ？」

そういえば、ジュエルシード転生だと教えてない。

でも、原作までは制限があると言われたはず。

原作開始直前の解除だから、気付いてなかった？

「エヴァが調べた限りだと、私達が転生した原因はジュエルシード。

対応するジュエルシードが封印されると、原作に係われたり、何か力を使える様になったりするみたい。

それに、ジュエルシードだから、願いが歪んで叶えられている可能性がある。

例えば、私は冷静さを望んで感情を失った」

「な、何だよそれ……」

やっぱり、驚いてる。

と言うより、呆れてもいる。

「今まで封印されたジュエルシードのうち、ユーノが単独で封印したはずの1個目に対応する人と、昨日封印した物に対応する人は見付かっていなかった。」

ユーノの声が聞こえたのなら、たぶん、なのはがユーノと出会う前のものが千晴」

「1個目に対応するから真っ先に制限が外れて、ユーノの声も聞こえなかったわけか………ん？」

「………ん？」

「私達を含めて、見付けたのは千晴が15人目。」

現実を見ていない人、自分が主人公だと思っている人が、その内4人。

殺された2人も似た性格だったと思える。

その2人を魔法で殺した人も転生者」

「うわあ……ありえねー。半分に問題あんのかよ。」

「………ん？」

「今のところ、人でないのはエヴァだけ。」

エヴァ以外は全員地球の人で、殆ど学生。社会人が1人で、殺した人は学校に行ったりはしていないけど義務教育の年齢のはず」

「そうか………ってことは、コイツも見付かってねーのか。」

「………ん？」

「はい、千晴様」

落ち着いた声で返事をする白いものが、千晴の携帯電話から飛び出てきた。

「………ネズミ？」

ネズミにしか見えない。

浮いている。

「………ん？」

「あー、あれだ。ネギまの、千雨のアーティファクトの電子精霊？」

「………ん？」

「始めましてアコノ様。」

我等はチクアーブと申します。しがな電子精霊の様な転生者で

すが、お見知りおきを」

おでんだネ来た。

でも、丸々としている絵の方じゃない。

名前を入力してくださいの頃の、ちゃんとネズミっぽい方の印象。

4文字制限でもない。

まさかの連続接触。これで発見済みの転生者は16人……人？

電子精霊の存在がアースラにばれた。

実態の隠蔽を優先。

「初めまして、私は小野アコノ。」

2人が出会ったのはいつ？」

(チクアープの情報は?)

昨夕のジュエルシードとの対応は既に確認済み。

魔力はAAと見える。かなり高め。

現実になかったから見付けられなかった？

情報不足も甚だしい。

「いや、昨日の夜なんだけだよ。」

何か、コイツは昨日の夜に気が付いたらしくてな」

「はい。先ほどの話を考慮いたしますと、昨日行われたと思われるジュエルシードの封印により起動した、もしくは、完成したと推測いたします」

「そう。エヴァの電子精霊とは出会ってる？」

「は？ あいつ、そんなもんまで持ってるのか？」

「2500年前に、コンピュータと電子精霊を作ったと聞いた。」

コンピュータは公開したけど、電子精霊は変な事をするアンチウイルスに除去されるし、所詮はプログラムと同じ事しか出来ないから公開しなかったと言っていた。

今はインターネットで公開されてる情報の収集と解析をしてもらってるはず。

インターネット上にいたのなら、接触している可能性がある」

「何かがいると感じた事はございましたが、接触を避けておりました。」

その何かが、エヴァ様の電子精霊ではないかと」

怪しい気配については、お姉様の電子精霊も気付いてた。

接触を避けている様子だったため、こちらも様子見。

出会いが悪ければ、抗争になった可能性も。

初接触がこの形だったのは僥倖。

「賢明な判断。」

2人とも、これからはどうする？

主に、原作とどう関わるかについて」

「あー、あんた達はどうするんだ？

翠屋に話が付いてるって事は、介入する気で見えてるだけ」

「最初は、少なくとも無印の間は介入する気が無かった。

今は、積極的に介入してる」

介入と言うより、浸食している気分。

じわじわと浸透。」

「我等の様な、原作知識を持つ者の存在による悪影響が原因と考えて良いでしょうか？」

「それを避ける意味が一番大きい。」

「だけど、転生者……原作知識を持つ人が関係しなくても、話は変わっている。」

「放置すれば原作通りになるとは考えない方が良く、原作が一番良いとも限らない。」

「それに、原作知識もどこまであてになるか分からない」

「そうなのか？」

「まあ、介入しちまえばドミノみたいに変わってくつてのは分かるけどよ」

「長宗我部千晴は直接介入した時の影響しか気にしてない？」

「接触自体を避けていたなら、差異に気付いていなくてもおかしくない。」

「例えば、なのはとフェイトのデバイスは、映画版」

「は？ ……どう違うんだ？」

「具体的には、レイジングハートのカノンモード……砲撃形態に引き金が付いている。」

テレビ版のシーリングモードは無いみたいだし、リリカルマジカルも言っていない」

「はあ!? いやいやいやいや、リリカルなのはとして、それでいいの?」

長宗我部千晴は、無印のみ知ってる?

A×s以降はほとんどリリカル言っていない事を知らない?
気付いていなかっただけ?

「映画版や2作目以降のテレビ版でも、タイトルコール以外では一度しかリリカルと言っていないはず。

それを考えれば、リリカルと言わない事がダメとは言えない。

そもそも、リリカルは叙情的とか熱狂的とか言う意味。その意味なら、間違っていない」

友達かんじょうをのべあちわすになりたいんだ的な意味で。

こんなはずじゃない事ばかり的な意味で。
ねっきょう
なの破産的な意味で?

「原作のシリーズがその状態でしたら、特に問題は無いのでございましょう。

しかし、単純な再現ではない、という事でございませぬ」

チクアープは状況を正しく認識した模様。

何がどこから来るか、条件がよく解らない。

「恐らくそう。それに、全体的になのはの心に傷をつける展開を回避する傾向にある。

そのしわ寄せが無いか警戒が必要」

「あー、フェイトの境遇が更に悪化するとかか?

まさか、私らって事は……ねーよな?」

長宗我部千晴の心配は正しい。

希望としては、踏み台な人達に全て持って逝ってほしい。

「可能性としては充分でございませぬ。

そもそも、歪んだ形で望みを叶えるジュエルシードでございませぬ。

転生特典の結果から判断いたしますと、原作設定より正常に近いとは言えるでしょうが、歪んでいるのは間違いございませぬ」

「だよなあ……何で冷静さを望んで感情が無くなるんだよ」
「だけど、おかげで厄介な転生特典が無効になっている事も期待出来る。」

例えば、オリ主様志望の人が要求しがちなニコポやナデポ」

「あー……アレかよ。要求してるやつがいるって事か？」

長宗我部千晴は、げんなりしてる。

気持ちはわかる。

「オリ主様気質の4人は、ほぼ間違いない。」

ただ、正常な作用は確認できていない。

劣化か、何らかの条件が必要か、違う形で作用しているか。理由までは不明。

他にナデポを求めた人が1人いるけど、撫でられると相手に惚れる逆転現象が起きていて、心を弄る特典を望んだ自分を嫌悪している」

「アホだ……でもまあ、問答無用で効果がある代物じゃねーって事か。」

そりゃあ、問答無用で効果があるなら確実にハーレムルートで、現実にもそんなことをしたら修羅場だろうしな」

むしろ、誰にも触れなくなるか、基本能面状態で過ごすしかない。

迂闊な事をする、嫌いな相手にも好かれることに。

ハーレムが出来る前に、胃に穴が開くと予想。

「ヤンデレの素質がある方に大きな効果を発揮した場合を考えてみますと、刺されて死亡という形も容易に想像できる結末でございます。」

一見正常に機能するように見えるニコポやナデポを得た人物は、既にそういった形で死亡している可能性もあると推測いたします」

「見付かかっていない人の中に、そういう人がいる可能性は確かにある。でも、正常に機能して生きている人がいるかもしれない。」

気を付けて」

「あ……ああ」

無印編22話 探究心も程々に

それからしばらく、主と長宗我部千晴はのんびりと雑談。

主への思考支援は雑談になった時点で終了済み。お姉様と同様に、頭痛を感じる模様。

元の世界とこの世界の違いとか。

原作と関わらないために翠屋を避けていたけど、もったいなかったとか。

転生者同士としては、割と普通と思える会話。

感情が無くても普通に会話できるせいか、長宗我部千晴もどことなく安心した雰囲気。

緊張もある程度解れたと判断、お姉様が転移で戻ってきた。

「さて、そのネズミは後で話をするとしてだ。

千晴、制限するのは魔力の探知だったな？」

「ああ。何とかなりそうか？」

長宗我部千晴の目が期待で輝いてる。

最初から無理と判断されなかっただけでも、期待が高まっている模様。

「とりあえず、妨害用の結界を張ってみようかと思う。

その前提条件になるが、魔力はあるか？」

探知妨害の特典のせいかな、調べてもよく分からん」

「ユーノの助けてって声は聞こえた覚えがあるから、リンカーコアはあるみてーだ。

どれくらいあるのかまでは……」

今度は長宗我部千晴も覚えてた。

でも、量は不明。

どうやって調べればいいんだろう。

「それなりにありそうなら問題ない。

とりあえず、このミサンガを付けてみる。かなり簡易的だが、魔導具の一種だ。限定的なストレージデバイスと言った方が分かりやすいか？

使える魔法は探知妨害の結界のみで、強度も固定だ。その代り、魔力持ちが持つていけば、その魔力を使ってほぼ常時発動する」

「あ、ああ……こんな短時間で用意したのか？」

長宗我部千晴は哑然としながら、ミサンガを腕に付けた。

その直後、その表情が驚愕に変わる。

そして、嬉しそう。

むしろ泣きそう。

「ああ……凄いな、これ……マジで分からなくなった」

「所詮は簡易版で仮封印に近いものだ。

それに、耐久性は普通のミサンガと変わらん。

どうせ魔法の練習をしろとでも言われただろう？

それが使い物になる間に、その程度の結界は自分で張れるようになる。そうすれば、自分で調べる範囲やらの制御も出来るようになる。

ベルカ式でよければ、練習用に簡単なデバイスも作ってやるぞ？」

「そ、それは……いいのか？」

いや、嬉しいんだけどよ、大して返せるもんはねーぞ？」

雰囲気的に、長宗我部千晴が小躍りしそう。

笑みが全然隠せていない。

「何かあったら協力してくれ。とりあえずはその約束だけでいい」

「同じ転生者、この世界に対する愚痴を言える相手は貴重だと思う」

お姉様が提示した簡単な条件に、主がちよつと追加。

要求はしていないけど、仲良くしようとは提案しているのと同義。

「ああ、それもあつたな。他の転生者は程度が悪すぎる。

ようやく会えたマトモそうな相手だ、その意味では逃がさんぞ？」

「そ、そうか……そんな事でいいなら、こっちも願ったりだ。よろしく頼む」

「魔法の練習は、高町家の道場を借りてある。

なのはもうアースラに行っているが、いつでも来るといい。

デバイスは色々と説明もあるから、練習に来た時に渡そう。

さて、千晴はこれでいいとしてだ。

そっちのちくわぶは初めましてだな」

「初めまして、エヴァ様。チクアープでございます」

やっとチクアープが喋った。

空気を読むネズミ。

凄い違和感。

「元ネタはちうたんアークティファクトのおでんだネ電子精霊だろう？」

まあ、それは置いておくか。お前達は、今後どうしたい？」

「あー、私は、出来れば普通に暮らしたいんだけど……無理か？」

無理。

間違いない。

「他人とは明確に異なる力を持ち、原作という限定的な未来の知識持ちでもあり、同時にここを物語の中だと認識してしまう異常思考持ちでもある。」

普通の一般人として過ごすのは、難しそう」

「ぼろを出さない自信があるなら、自力でやってみるといいさ」

主は考察がそのまま口に出てる。

容赦ない。

お姉様も追い打ち。

「……わりい、無理だ」

「だろうな。ここに居る時点で、既に音を上げているんだ。

一応、私も静かに暮らすことを目指したいのだが……闇の書があるなら助けたい人がいる以上、それを何とかするまでは静かに出来んらしい」

「助けたい人、でございますか？」

ネズミの首が曲がってる。

チクアープは、首を傾げてる……？

（済まないが、アースラの監視があるから、フェイト、はやて、夜天、リインフォース、それにグラムとリーゼの名前は口に出さないでくれ。

まだ、管理局としては動いて欲しくないんだ）

身内以外には初めて使うかもしれない、お姉様の念話。

おや？ 2人の表情が……

何とか維持した。

前世の分の経験や知識は伊達じゃなかった。

でも、また闇の書の名前が出て、ハラオウン親子の表情が引き締まった。

何処まで情報を聞かせるか、要注意。

お姉様への思考支援を開始。

がんばる。

2人への思考誘導も、好奇心を若干高めめる程度の水準で開始。効果が無くて元々、本人もおかしいと気付かない程に留める。

良い質問が出る事を期待。

「ああ。直接会ったことは無いが、間接的に色々と助けてもらった相手だ。

この世界が原作の2作目も忠実に再現するなら、最終的に闇の書と一緒に消滅してしまうからな。

なのは達にも悲しい思いをさせる事にもなるし、私個人としても助けたいんだ。そうすると、闇の書を何とかする必要があるだろう？

それに、中途半端に2作目を含む場合、奇跡無しで闇の書事件が発生する可能性もある。そうなれば、日本が滅ぶ可能性はかなり高いからな。流石に、それは避けたい」

「あ、ああ……アレか……要するに、最後に全員でフルボッコにしたアレを何とかするって事か？」

「クリスマスに全員でフルボッコにした上でアースラのアルカンシエルで吹き飛ばしたアレを何とかすると言った方が、より正しいはず」
主の誘導。

というか、どこまで言っているかの例示？

お姉様の指示の範囲内。

だけど、長宗我部千晴は、A×sの知識もある？

原作知識の範囲が掴めない。

「つまり千晴様は、今回の件で悩みを解決出来ていなければ、闇の書と守護騎士、それにアルカンシエルにも怯えなくてはならなかった可能性が高いという事でございますな？」

「な!? ……そ、そういうえばそーなんのか……相談にきいて良かった……」

アルカンシエル、あんた達が介入してもやつぱ使う必要あんのか？」

長宗我部千晴のうっかりが更に浮き彫りに。

これは、お姉様以上。

でも、質問の内容はとても良い。

「今のところは分かん。そもそも闇の書事件が発生するかも分からんし、仮に発生しても、闇の書の暴走を回避出来るのならしたいからな。」

まあ、最悪の場合でも、原作より悪化はさせん。少なくとも解決の道筋が見えるまで、要するに原作の最終戦終了後の状態になるまで明確な死者がないことが、死守すべき最低条件だな。原作では主要メンバーは全員生存して戦闘終結だから、こちら側の関係者が死亡した時点で私の失態だ。

その後の出来事は私の知識や技術、それに何が起きるかを知っているアドバンテージで何とかできるだろうし、してみせる」

一番良いのは、暴走せず、最終戦も無い事。

夜天が問題なく目覚めて、きちんと修正出来ることが最善。

でも、今は最悪のケースでの話。

ハラオウン親子は、戦闘終了まで死者を出さない事が最低条件という点に驚いている。

「ふむ、アレをどうにかして彼女を助けるといふ事は、犠牲者無しで闇の書の悲劇の終焉を目指すという事でございますかな？」

大がかりで困難な目標でございますな」

チクアープの、表現もいい感じ。

名前は出さず、お姉様の指示を守りつつも、適度な情報漏洩。

「状況はまだ確定じゃないんだが、結果的にはそういう事になる。」

闇の書はともかく、あいつが消滅するのだけは何とかして避けたいからな。

だが、闇の書の状態も不明だから、状況は未だに流動的だ」

「こんな短時間でコレを準備できるだけの實力があるなら、調べたらすぐ判明しそうなもんだけど。」

「できねーのか？」

長宗我部千晴の中の、お姉様の評価が気になる。

でも、その予想は恐らく正しい。

但し、不法侵入と猫対策と八神はやてとの関係と言う意味で問題が。

「色々と準備はしているが、問題なく詳細な調査が出来る状況に持ち込めていないからな。調査自体が出来ていない、というのが現状だ。

私は闇の書自体を直接確認した事が無いし、原作で闇の書の主になる人物ともまだ会っていない。

後の事を考えると友好的に接触したいから、問答無用で押しかけるわけにもいかん。

最も、今の心配や準備が徒労に終わるなら、それが一番なんだがな。実は闇の書はありませんでした、なんて肩透かしなオチが一番楽なんだ」

お姉様自身は、八神家の様子を見てない。

むしろ、誰も闇の書との接触はしてない。私達もサーチャー経由のみ。

八神はやてとは、主しか接触してない。

夜天がここに居なければ、こんなに苦労してない。

提案しておいてなんだけど、なんという嘘半歩手前。

（妹達。もう一度思考支援をお願い。）

管理局を縛るなら、私も話に参加した方が効果的な気がする）

（頭痛は大丈夫なのか？）

まだ痛みは抜けていないだろう？）

（大丈夫、だいぶ楽になっっている。）

私が管理局を警戒する役をする。

その方がアースラを縛りやすいし、今後のエヴァの交渉もやりやすいと思える）

主の提案は、主の負荷以外はとても適切。

今後の交渉を考えると、お姉様は管理局やギル・グレアムをあまり悪く言えない。

主が原作知識や常識的な面から警戒して、お姉様がフォローするのが最適。

(それはそうなんだが……本当に無理するなよ)

主の頭痛は治りきってない。

先ほどより情報量を抑えて、思考支援開始。

「闇の書が実際に存在した場合、管理局に知られて下手な局員が来ると危険。」

蒐集されて闇の書の完成が早まったり、主を刺激して交渉すら出来なくなったりする可能性もある。

それに、管理局が総力を挙げてという事態になれば、地球で魔法が大々的に使われたり、国と衝突したりしかねない。

少なくとも、事件発生の確証が無く、解決策も確実と言えるかわからない今はまだ、原作の提督の様に秘密裏に動く方が無難」

「原作にも出ていた提督の部下が、たまにこの辺に来ているのは確認している。提督本人が来たことは、私が知る範囲では1度も無いがな。」

部下もやはり下手な手出しはしていない様だが、元々地球との関係が深い連中のはずだ。別の用事でここに来ているだけという可能性も否定はできん。

ただ……提督が先走らないかは心配だな。氷漬けで永久封印なんて時間稼ぎより良い方法がある以上、そちらを試したい。説得するにも材料が不足し過ぎているから、現状では交渉も出来んし……」

「いろいろ変わってるって言ってたしなあ。私は、被害や結果が悪化しなきゃいいや。」

「だけど、提督の方法って、悪手なのか？」

「原作でも、確かクロノに論破された気がするんだけどさ」

「いや、提督が持つだろう情報と手段を考えれば、妥当性はある。」

私が提督と同じ知識と技術しか持たないならば、同じ手段を使う可能性が充分ある程度にはな。」

闇の書そのものを完全破壊か無害化する手段が無いなら、動かないように止めておくのは次善策として有効だし、考慮すべきものだ。封印も無害化の一種だしな。

闇の書の主を諸共にと言う点を見れば、今行っているジュエルシードの封印と大差は無い。方法論としては一般的な物に過ぎんよ。最終的にアルカンシエルの餌食になるなら似たようなものだという提督の部下の意見にも、私は同意できる。

永遠は不可能でも、少なくとも封印されている間は悲劇を起こさずに済み、それは多くの命を救う事に繋がると思える歴史がある。

闇の書の主を捕らえたところで自棄を起こされたら大惨事だし、だからと言って管理局が尻尾を振るわけにもいかんだろう。最初は協力的だったとしても、何年、何十年と特権階級の様になれば、自分とは特別な存在だと付け上がる可能性が高いぞ。人は増長する生き物だからな。

提督が裏で動いているということは、今の管理局に闇の書自体を何とかする技術は無いのだろう。であれば、最終的には封印するか、アルカンシエルなりで吹き飛ばして問題を先送りにするかの2択だろうな。主が死ぬと闇の書が転生するなら、主も封印した方が封印可能な期間が延びる。1人の犠牲で、より多くの悲劇を防ぐことができそうじゃないか。

だが、普通の封印は侵食されてあっさりとは破られた過去がある。であれば、もっと強力な封印方法が必要だ。それを模索した結果が、永久凍結による封印だったのだろう。

凍結封印は暴走開始直前にしか出来ないらしいが、逆に言えば、暴走前に対処できるということになる。暴走中より暴走前に対処した方が少ない被害で済むのは明白だろう？ チャージに時間がかかるアルカンシエルに頼る前に、より被害範囲の狭い凍結封印を試みるだけでも理に適っているだろう。だが、そのためには暴走開始を把握する必要はある。その時に闇の書と主が同じ場所にいる必要があるだろうし、タイミングや場所を選ぶためにも、暴走開始を制御できれば理想的だ。

原作の様に、闇の書の主や守護騎士までがなのは達と共闘し、アルカンシエルを使ったのに地球に被害を出さずに済むなど、奇跡でしかありえん。そんな奇跡を前提にした作戦を練る提督がいたら、予言者に転職させるか、最低でも降格が適正だ。それが出来ないなら、速やかに病院で監禁する事を提言するぞ?」

「あー、そういう事になんのか……ってことは、クロノの意見がずれてんのか?」

「あれは闇の書の主の扱いに対する怒りが大きかったように見えたり、完全に論破できていたわけでもないぞ。

クロノが主張していたのは、封印が可能なタイミングでは闇の書の主が永久凍結されるような罪を犯していないという点、それに、封印はいくら隠そうがいつか見付けられて破られるという点だったか。これについては、全くその通りとしか言えん。

だが、未来や目の前の悲劇を少しでも防ぐと言う点について、解決策や代案は無かったはずだ。暴走直前の現場で、対処法を闇の書の主や守護騎士と相談していたくらいだからな。

つまり、法の準拠についての問題、人道的な問題、封印が絶対のものではないという問題について、クロノの指摘は正しい。

だが、法に反してでも悲劇を減らそうと行動する提督も、私は否定出来ん。提督でありながら管理局にすら情報を明かさず、管理局としては使えない。『罪のない者を永久凍結で封印する』という手段を使う罪を自ら背負い、誰にも知らない地へ隠匿して共に時代の闇に消える覚悟で挑んでいる以上、余計にな。

二律背反とは、こういう事を言うのだろう。

だが、ここには更に私がいる。闇の書事件が現実が発生するようなら、原作以上の奇跡を起こしてみせるさ!」

「すげー考察と自信だなオイ。

そこまで考えてるんなら、ついでに聞きたいんだけど……管理局に協力してもらうのはダメなのか?」

奇跡を起こすって事なら、別のやばい手段を使うんじゃないって事じゃないのか?」

長宗我部千晴、ナイストス。

アースラの動きを縛る、良い質問。

何だか、2人の質問が予想以上に良質。

「相当分の悪い賭けになる。」

正直に言えば、アースラの連中が本当に原作と同じなら、協力してほしくらいだ。

実力的にも、人柄的にも、な。

ただな……」

「管理局の表に情報を出すのは危険。」

2人は3作目をどれくらい覚えているか聞いていい?」

「いや……私は1作目以外見た事ねーんだ。」

知り合いに好きなやつがいて、そいつが色々喋ってたのは少し覚えてるけどよ。

チクアーブは?」

「勉強の傍ら、横で流していた記憶がございます。」

3作全てその状態でございましたから、大きな流れ程度は覚えておりますが、細かな点等、見逃している点や勘違いしている点多々あると推測いたします」

長宗我部千晴の、原作知識の曖昧さの理由はこれ?

チクアーブも、まともには覚えて無さそう。

「そうか。それならどう説明すればいいか……」

(済まんが、3作目で登場する連中の名前も出さないでくれ)

「3作目を少し説明した方が良さそう。」

舞台はミッドチルダ。なのも管理局員になっていて、登場人物に管理局関係者が多い。

その中に、執行猶予期間も過ぎた過去の事件の中心人物について、犯罪者だ、罪が消えるものかと暴言を吐く人物がいる。それは覚えてる?」

「わりの、私は聞いた事ねーや」

「そういえば、武闘派の大物でございましたか。」

それらしい台詞があった気がしますな」

チクアープは知ってた模様。

表現もいい感じ。

「組織は別だけど、階級的には提督のリンデイと同じかそれ以上になるはずだから、かなりの大物。

罪というのは、本人は何も知らないまま巻き込まれて、知った後は解決する為に管理局に協力した事件のもの。有罪となっている事自体が納得できない。

仮にそんな暴言を吐くような人物が闇の書の対処に来た場合、闇の書は存在が罪だとか言いながら日本にアルカンシエルを撃ち込む可能性がある。

それに、闇の書は過去に何度も大きな悲劇を生んでいるはずだから、闇の書を恨む人も多いと思える。闇の書が見付かったと知られたら、すぐに破壊しろという声が大きくなる可能性もある」

「ただ、3作目やそのために必要な前提がこの世界にもあるか、それ以前に管理局が原作と同じかも分かっていないからな。

アースラについては原作同様と思えるが、現時点で1作目との差異も散見される以上、2作目や3作目とどれくらい一致するのか予想も出来ん。その大物がこの世界で実在するかも分からんし、原作通り実在しても地球に来る役職ではないはずだが、陸ではなく海……っと、表現が悪いか。要は地上部隊ではなくリンデイの様に宇宙を飛び回る役職に就いているかもしれん。

管理外世界だからといきなりアルカンシエルを撃つ阿呆が提督になれるとは思いたくないから、そこまで心配しなくてもいいだろうとも思っているがな。

ただ、残念ながら、私は管理局に対して何の力も無い。そんな連中が実在したら止められないし、大勢の声に押された組織の行動もどうにもできない以上、知られないようにするしか穏便に済むと確信できる方法が無いんだ。広まってしまった情報は消せないからな」

「そ、そうか……大変、なんだな」

アースラの動きを縛るはずが、長宗我部千晴の精神にかいしんのいちげき？

これも一つの、知らない方が良かったことかも。

「原作より期間に余裕があるとはいえ、随分と綱渡りせざるを得ないようでございますな。」

「もしも闇の書が実在し、厄介な者が担当者として来た場合……対処は可能でございますか？」

「穏便には無理だな。闇の書を何とかする事も出来なくなるだろう。」

それに、地上に向けてアルカンシエルを撃たれたら、確実にアコノが巻き込まれる。

「そんな事態は避けたいから、私に出来る事は管理局を壊滅させることくらいか」

「か、壊滅!？」

「マジでそんな事できんのかよ!？」

「闇の書が実在している前提だろうか？ 最悪の場合は、それを持って本局に殴り込む。」

闇の書が無ければ日本にアルカンシエルを撃ち込む理由が消失するし、本局には大勢の魔導師がいるだろうから、完成して暴走するのもし早いだろうな。問答無用で殺そうとする馬鹿なら、自分の手で自分の本拠地を消し飛ばしてもらおうじゃないか」

「うわあ……」

「なかなか過激でございますな。しかし、打てる手はそれぐらいでございますか」

驚いたり引いたり、長宗我部千晴もなかなか忙しい。

でも、2人ともなかなかいい反応をしてくれる。

「私にとつての最優先はアコノだ。アコノに害をなすなら、管理局だろうが知った事か。」

それにこの方法なら、あいつも消滅せずに済みそうだ。少なくとも、私としての最悪の事態は回避できるだろう。

まあ、色々言ったが、闇の書が存在したら、だからな。

闇の書事件が現実になるかどうかすら、これからだ」

「そ、そっか。平和に済むといいな。」

「だけど、仮に現実になっても、私らに手伝えることは無いんじゃないや」

ねーか？

どう考えても対立した時の守護騎士やらに勝てると思えねーし、闇の書なんて論外だろ？」

「そうですね。我等は電子世界に逃げ込めば蒐集から逃れる事は出来ましようが」

2人は、自分の立ち位置をちゃんと理解してる。

悪く言えば、獲物。太った豚相当の役目。

守護騎士が蒐集に動き、見付かってしまえば、高い確率で美味しく頂かれる。

「ああ、戦力としては期待せん。

自衛しろとも言わん。救助までの時間を稼ぐことが出来れば上出来、私やアースラが守護騎士を捕捉するまで耐える事が努力目標だろうな。

頑張つて、逃げ回れる程度には鍛える事だ。原作通りなら半年近くあるだろう」

「ああ……平穩が遠ざかる」

長宗我部千晴はため息をついている。

そもそも、転生する事になった時点で平穩は遠い彼方。

但し、お姉様が言っているのは、努力の目標水準。

そんな事態にはさせない。

「心配するな。それが済めば、私も平穩を求めろさ」

「おや、ミッドチルダへ行く予定は無いという事でございませうかな？」

お姉様の言う「それ」は、闇の書というか、夜天の事。

終わった後まで原作を追う気は無い。

チクアープはそれを正しく認識した模様。

「行く意義が感じられん。

将来的に、地球で過ごす事が困難になったら考えんでもないが……少なくとも、私は日本の文化が好きだ。好き好んで他に行く気は無
い」

「てことは、3作目は不介入か？」

長宗我部千晴は不思議そう。

今介入してるのに、みたいな感じ？

「ミッドチルダの事は、基本的にミッドチルダの人間がやるべきだと思うわんか？

それに、助きたい相手も、倒したい敵も、あつちには居ない。余計な手を出されないう限りは、私が手を出す理由は無いな。

本当に3作目の事件が起こった時に、何らかの理由があれば手助けするかもしれないが」

「そりやそうだろうけど、その考え方だと、アースラが地球に来てるのはどーなんだ？

ジュエルシードとか闇の書とか、思いつきり地球の出来事なんだけだよ」

「ジュエルシードは元々ユーノと管理局の問題で、地球は巻き込まれた側だ。

闇の書は、原作同様ならリンデイとクロノは個人的な因縁があるはずだからな。無関係とは言えないだろう？」

「あー……誰か死んでたんだっけ？」

やっぱり、長宗我部千晴の原作知識は微妙。

それとも、クライド・ハラオウンの名前や立場を出すのを避けただけ？

「原作知識的には、リンデイの夫でクロノの父親のクライドだな。1年前に闇の書を道連れにアルカンシエルで吹き飛んでいるはずだ。2人が闇の書に対して思う所があるのは当然だ。

それと、この時にアルカンシエルを撃った艦長の使い魔がクロノの師匠だったはずだ。恐らく、責任感や罪悪感から目を掛けた結果なのだろう。

この辺から変化があつて、闇の書事件なんて無かったという結末が一番いいんだが……クロノは原作通り既に執務官になつていくくらいには優秀なようだし、あの年齢でここまで努力する理由が他にあるとも思えん。リンデイが夫を亡くしている事はなのはとユーノに言つてあるが、違ったという連絡は無いな。聞き辛い内容だから確認していないだけかもしれないが。

現時点では、闇の書事件の前振りに原作から外れたと確信できる要素が無いんだ。そうである以上、備えをしておきたい。

まあ、私の立場はこんな感じだ。お前達にも協力してもらおうぞ?」
アースラの空気が氷点下。

闇の書の裏事情を聞いてしまったから?

敵対は本局での闇の書暴走という未来につながるから?

知られたくない過去を知られているから?

それを当然の様に話されたから?

色々と刺激が強すぎた模様。

そろそろ思考支援と思考誘導を終了。

主の状態が心配。

顔色が良くない。

(大丈夫。少し頭が痛いだけ)

(だから無理をするなど言っただろう!)

「ごっちこそ、これから迷惑かけそうだしな。私に出来る事なら手伝うよ。」

協力して、平穩に暮らそう」

「ああ、よろしく頼む。」

それで、だ。チクアープはどうする?」

表立って動ける、普通っぽい友人をげつと。

小ネズミは……どうしよう?」

「ふむ、我等も平穩が良いのですが……何しろ、人から縁遠い身でございますからな。」

何か手伝えることはございませんかな?

その見返りと言うのも失礼でございますが、我等も平穩を目指す仲間に入れて頂ければ幸いです」

「電子精霊、か……何を手伝ってもらえばいいか」

「インターネット等での情報収集とか?」

料理のレシピとか、色々調べてる最中。

それを手伝ってもらおう?」

主の提案が、一番無難?」

能力が不明。探る意味でも丁度いい？

「なるほど、我等の得意分野でございますな。」

では、千晴様とエヴァ様とアコノ様の友として、情報収集に邁進いたしますでしょう。

可能であれば、ミッドチルダの情報も調べられると良いと考えますが、いかがでございますか？

将来的には移住の可能性も否定出来ないかと推測いたします。

原作のなのは様のように管理局の局員になる方がいらした場合にはつきましても、治安や利便性の良い住居を探す、地球との文化の差異を調べる等、ささやかな助けとなれると推測いたします」

「ああ、それはいいな。」

だが、ミッドチルダは遠いし、通信方法も問題があるだろう。

それに、あいつが局員になるとしても、移住はまだまだ先の話だ。

中学校卒業後のはずだから、7年近く先になるか？

時間はあるから、その辺は追々相談しよう」

「了解いたしました。それでは、我等は……」

「ちよつと待て。さつきから自分の事を我等と複数形で呼んでいるのは何故だ？」

やっぱりお姉様も気になっていた模様。

長宗我部千晴を含んでいるとは思えない。

「分体がおりますので、複数形が相応かと判断した次第でございます。」

ちなみに、最悪の場合でも分体が1体生き残れば、存在の維持が可能な様でございます」

「は？ おい、私も聞いてねーぞ」

「聞かれませんでしたので」

驚愕の事実？

原作だと7体いた。予想出来ない範囲ではないかも。

でも、長宗我部千晴も驚いている。

「分体……分身の様な物？」

「そう認識して頂いて結構でございます。」

維持のためのエネルギーが確保出来る限りではございますが、ある

程度の数までは、いつでも増える事が可能なようでございます
ある程度の数？

あの7体ではない？

チクアープの表現から考えると、7よりも多い可能性が。

「ほう……面白い能力持ちだな。」

それで、お前はモノを食べられるのか？」

お姉様が流しちやった。

気になるのに。

(どうせ味方に引き込むんだ。後でゆつくり調べるか、協力時に能力確認とか言って聞き出せ)

「ええ、問題ございません。」

この姿では無理でございましたが、人の姿になる事も可能でございます。

そちらの姿であれば食事も可能である事は確認済みでございます」

「はあ!? お前、どんだけ重要な事を言ってるんだ!？」

長宗我部千晴が煩い。

むしろコミュニケーション不足を指摘したい。

「ふむ、いいだろう、私の電子精霊と協力して、いいレシピを発掘してくれ。」

良い物を見つけたら、お前にも食べさせてやる」

「それはとても良い関係でございますな。気合を入れて調査いたしますぞ。」

では、さつそく参りますので、我等はこれにて失礼いたします」

ネズミの姿のまま器用に頭を下げて、チクアープは長宗我部千晴の携帯電話へと消えた。

それを唾然とした表情で見送る長宗我部千晴。

くつくつくと笑っているお姉様。

お姉様配下の電子精霊達へ、チクアープの情報を通達。

協力体制の構築と、チクアープの監視を開始。

当面はレシピ発掘に専念。今はまだお互いに信頼できるか、どの程度の能力を持つかの探り合い。

様々な意味で、いきなり犯罪行為クラッキングは任せられない。

「流石ちうたん、なかなかいい感じに現実離れしているじゃないか」

「あー……いや、なんだ………平穩は？」

長宗我部千晴は、目が点のまま。

なんだか雰囲気疲れ切ってる。

草臥れた中年サラリーマンみたいな雰囲気。

「見た目と人間ではないという事実、それに魔法の存在を受け入れてしまえば、この程度は平穩だろう？」

美味しい料理を食べたいから、ネットで作り方を調べる。

ほら、一般的な行為だ」

「そりゃあ、そうだけだよ……あーもう、何でこうなるんだよ!？」

頭をかきむしっても、髪型が崩れるだけ。

長宗我部千晴は、未だに魔法に拒否感がある模様。

闇の書関係より子ネズミの方が大きな衝撃を受けてる様に見えるのは、現実感の違い？

「ちうたんになって転生したからだろう。

いや、ちうたんになる様な要求と素質で転生したから、とすべきか?」

「それを言うなら木乃香はどーなんだよ、京都弁の能天気な天然キアラになるべきだろう！」

どー見ても中身は20年前のアスナじゃねーか、外見もそっちになつた方が説得力あんだろ!!」

「苦情はジュエルシードに。」

私が得たのはこの結果だけ」

主の主張は正しい。

でも、長宗我部千晴の主張も、理解は出来る。

「感情消失前の性格は木乃香なのかもしれないぞ?」

そういえば、アコノの前世はどんな性格だった?」

「天然でおっとりとしたのんびり屋だけどあわてんぼう。

自分でもどうかと思う事があったから、冷静さを望んだ」
「ふむ、比較的木乃香に近い要素だな。」

「積極性やら活発さが加われば、木乃香そのものになりそうだし、でも、今の主からは想像出来ない。」

感情消失の影響が大きすぎる？」

「そういう問題じゃねー！」

「てか、元の性格が影響ってどういう事だよ!!」

「そんなに叫ぶな。平穩が逃げるぞ?」

それに、千晴は性格の改変を望んでいないんだ。それなら、元々その性格の素質があったという事になる。

前世と比べて、自分の考え方や行動に変化や矛盾は無いか?」

「なっ!? ……エ、エヴァはどーなんだよ!」

長宗我部千晴が自分の事を言うのを避けた。

怪しい。

心当たりがあると思えない。

「私のこの口調は、前の主に矯正された結果だ。」

考え方は、人権の無い時代に貴族共とやりあった結果だな」

「貴族とやりあったって………どんだけエヴァンジェリンと同じなんだよ。」

「てか、矯正って、前はどんな口調だったんだ?」

「もはやはつきりと覚えていないが………一人称が『俺』だった事は確かだ。」

「前世は男だったからな」

「言っちゃった?」

「ばれても、あまり問題は無い。」

「隠す気も無い?」

「は? 性別まで変わってんのかよ!」

「魔導具に性別があればだが、そういう事になる。」

「おかげで、自分が恋愛をするところが想像できる。」

「男に抱かれるなんて、想像するだけで虫唾が走る」

「おいおいおい………まさか、心は男だから女が好きだったのか?」

「それも無い。触れ合うなら男より女だとは思うが………まあ、その程度だ。」

何より、自分を含めて身近に見た目のいい人物が多い上に、今の私は小娘だからな。

その辺の女を見ても何とも思わなくなった。

ああ、アコノや千晴が美人だとは思うぞ?」

お姉様が、長宗我部千晴を口説き始めた?

こつそりと主も口説き気味。

「わ、私もかよ。てか、アコノも黙ってんじやねーよ!」

「私は知っていたし、感情も感じない。

改めて言われても、特に何も思わない」

「くっ……味方がいねー」

「そんな感じだから、私やアコノに男を取られる心配は無いぞ。

男が勝手にこつちを向くのは知らんが、望むなら蹴倒してでも向き直らせてやる。

もつとも、ずっと幼い私達に言い寄ってくるような変態ロリコンとは、付き合わない方が良いだろうとは思うが。

どう足掻いても、男を取り合うような修羅場にはならんよ。どうだ、平穩じゃないか」

「そーなんのかよ!」

いや、言ってる事は分かるんだけどよ……」

微妙な表現だけど、実質的に主も不老だと言ってる事に気付いてない?」

八兵衛もびっくり。

(千晴。エヴァに、付き合うことになった相手に悪意があったり、最初から捨てるつもりだったりしたらどうするか聞いてみると、エヴァがどんな人かわかる)

「……私が付き合う相手に悪意があったり、最初から捨てるつもりだったらしたら、どーする?」

主の、長宗我部千晴限定の念話。

お姉様には聞こえてない。

でも、長宗我部千晴は素直に従った。

気になる質問だった模様。

「そんな人間の屑は視界に入れたくも無いな。」

「さくつと排除して終了だ」

「相変わらずの過保護者」

「過保護とは何だ、泣かれると鬱陶しいだろう!？」

「だから助けようと思う辺りが、過保護」

「くっ……」

お姉様が主に負けてる。

でも、過保護なのは事実。

「あー、何だ。」

とりあえず、あんた達がいいコンビだって事はわかった」

番外：とある少女の日記帳

2004/04/01（木）

今日から、身分としては高校生。つまり、転生したと自覚してからもう6年になるということ。

ここがリリカルなのは世界だってことは転生の時に聞いたし、欲しい能力なんてテンプレなセリフを吐く神様みたいな胡散臭いのも見た。

聞いたし、見たはずなんだ。

自分の外見がどんどんネギまの千雨みたいになって、自分でも違いが分からなくなったけど。

眼鏡は伊達じゃないし、コスプレ趣味じゃないし、パソコンも持っていないから、ちうとは呼ばせない。

今のところ、予定通り「原作」に関わってない。それは喜ばばいいはずだ。

住んでいるのが海鳴市ってのが気になるけど、魔力感知の能力を貰ってるはずだから、逃げることもぐらいは出来るだろ。

もうそろそろ原作の時期になるはずなんだけど、今年だっけ？ 来年だっけ？

どちらにしても、何事もなければいいな。

2004/04/04（日）

今日、高校入学祝でパソコンと携帯電話を貰った。

携帯電話は今更という気もするけど、正直有難い。

パソコンは前世でも得意だったわけじゃないし、今まで特に触ったことは無かったけど、普通に使えるみたいだ。コンピュータを自由に使える能力を貰ったからか？

ただ、何で祝いなのに両方とも親のお古なんだ？ いまいち納得できな。

2004/04/05（月）

近所の小学校で、新学期が始まったらしい。
うん、私立聖祥大学付属小学校ってやつだ。

幸いなことに、私の家は私立の小学校に行けるほど裕福じゃないし、私もそこまでいい成績は取ってない。義務教育程度なら天才児とか呼ばれる成績を取れても、変に目立つのは嫌だし、大学までに普通になるのも分かり切ってるしな。

だから、近所にあるって以外は、特に関係は無い。

地道なところから原作を避けるのは、基本だよな？

おいしいと評判の翠屋を避けるつてのは、オンナノコとして辛くもあり、友達との付き合いで心苦しくもあり、だけど。

で、せっかくパソコン貰ったし、ネットもADSLでいつでも見れるから、色々見てたんだが……この携帯電話、2月に出た最新モデルだったんだな。お古にしてはやけに綺麗だし、誰にも番号を教えるなとかおかしいと思つたらオヤジの趣味かよ。

おかげでいいのを貰えたみたいだから文句ないけど、金が無いからって気にしなくていいように……じゃねーよなあ。新しいもの好きだし、絶対にひとしきり遊んでるぞ。だからお古だつて事だろうけど、何だかな。

2004/04/06 (火)

やばい。

どれくらいやばいって、起きてすぐ日記を書いてるくらいやばい。

あれは多分、原作でなのが見てた、ユーノが襲われる夢だ。

原作が始まっちゃまった。逃げるための特典は貰ってるけど、今更心配になつてきた。

予定通り逃げられればいいな。

今日の夕方にユーノが拾われるんだっけ？ 声が聞こえてもぜつてー行かねえぞ。

入学式があるから、家から出ないわけにはいかないよなあ。ああ、サボりたい。

動いてるみたいだし、ジュエルシールドじゃないよな？　ってことは、私以外にもイレギュラーがいる、ってことでいいのかな？
手を出さずに原作通りに進めばいいと思ってたんだけど、変なことにならないだろうな？

2004/04/10 (土)

また夜だよ。

今度は、割と近くの学校あたり……かな？

冷たい感じのやつは手を出していないっぽいんだけど、なんか場所が分かりにくくなってる？

消えかけの口ウソクというか、微かに感じられるってくらいになっちゃってる。何か気になるけど、突撃するわけにもいかないよなあ。原作とか魔法とかには関わりたくねーし。

2004/04/11 (日)

でっかい樹だ。

原作のアレだ。リア充サッカー少年オツ、だったか？

今のところ原作から離れてないっぽいのは確認できた。

家や近所が無事だったせいか、一応気持ちに余裕はあるけど……あの遠距離攻撃は、いくら原作を知っていても、ちよっと怖かった。

あとは、あの樹が無くなった後のテレビやネットの情報交錯っぷりも怖かった。

魔法を知らない連中があんなのを見れば恐ろしいってのは分かるけどな。

テレビの専門家って、何の専門家なんだと問い詰めたくなるほどに意味わかんねーよ。私はそっちの方がこえーよ。

あと、何か嫌な雰囲気の魔力が表れた。

これは、アレな人なのか。主人公様でオレ様な転生者様か？

こいつには関わりたくねーな。でも、原作をかき回しそうだ。

最悪、なのはに警告ぐらいした方がいい気がしてきたけど、まだ様子見かな。

管理局に目を付けられたら怖いし。

ついでに、ちよつと遠いところに、静かなのと元気っぽいのも見付けた。

これは、きつとあれだな。フェイトとアルフな気がする。

ちよつとしたら少し居場所が分かりにくくなった気がするけど、なんか妨害する様な魔法でも使ったんだろ。

2004/04/12 (月)

早朝から、何やら必死っぽいなのは心配がする。

正直うるさいけど、昨日のはショックだったはずだから、仕方ないのか？

近くにユーノ以外の魔力は感じないから、冷たい人も嫌な人も、手は出していないっぽい。

うん、しばらくは様子見で正解か。

2004/04/13 (火)

何だか、また魔力がうまく感じられなくなった気がする？

うん、自分でも何を言ってるかわからねーな。

フェイト(仮)が来た時のわかりにくくなった感じが、よりわかりにくくなった感じか？

ただ、今回はちよつとわかりにくくなった範囲が狭い感じがする。隠れ家を隠したいってことか？ 念入りだな。

2004/04/18 (日)

これが「戦い」ってやつなのか？

正直舐めてた。

今回は、たぶん、なのはとフェイトが戦ったんだ。

冷たい、覚悟を決めた様な、思いつめた様な雰囲気。

あんなのが、まだ続くんだよな。

関わらないのは簡単なんだ。

でも、アレが自分に向いていないのが分かっても、怖いものは怖

いんだ。

2004/04/19 (月)

今度は何なんだよ！

昨日のなのはとフェイトを嘲笑うような、背筋が凍るような気配つて何だよ！

どう考えてもイレギュラーどころじゃねえよ！

2004/04/21 (水)

今日もか！

しかも、二つあった魔力が片方完全に消えたじゃねえか！

今日は確実に争ってるし、死んでるって！

一昨日といい今日といい、一体なんなんだよ！

2004/04/23 (金)

殺気の人が、またやばい雰囲気になったんだが……今回は大丈夫だったか？

近くに優しい感じの人がいたみたいだから、どうなる事かと思っただが。

よく考えたら、一昨日消えた魔力も、何か嫌な感じがした気がする。うん、きつとそうだ。殺気の人、ヤバイ転生者を狙ってるんだ。きつと私は狙われない。きつと、そうなんだ。

2004/04/24 (土)

今日は、山の方で戦ってるみたいだ。

なのはとフェイトっぽいんだが、何だか癒される……

いや、おかしいだろ。何で戦ってるのを感じて癒されなきゃならないんだよ。

二人とも殺気みたいなものが無いのが原因なんだろうけど。

でも、冷たい人が近くにいてるのは何でだ？

戦いには参加してないみたいだけど、介入してんのか？

なんか嫌な魔力その2が現れたし、冷たい人が頑張って原作を維持してくれてるならいいんだけどさ。

2004/04/26 (月)

だめだ。もう、だめだ。

今日もなのはとフェイトが戦ってた。

ここまではいいんだ。

街中で戦った。なんかすごい爆発があった。

きつと、これが次元震だ。

何かあった様には見えないけど、私は感じられるんだ。感じてしま
うんだ。

よく考えたら、プレシアがもつと巨大なのをやらかすんだ。

冷たい人が介入しても、原作通り進めるために近付いたなら、あの
地震は無くならないってことだ。

相談してみよう。妨害する魔法が何かで分かりにくくなるっぽい
んだ。優しいなのはと優秀なユーノなら、何か出来るかもしれない。
もう、一人で抱えるのは、無理だ。

2004/04/27 (火)

今日、なのはは翠屋に行かなかった。

店に行けば変なのがいるんじゃないかと思って、なのはがいないと
きは行きづらいんだよな。

毎日行くわけじゃないんだから仕方がないんだが、早く行ってくれ
ないかな。

海の方で、またフェイトと戦ってたみたいだけど、また一人増えた。

たぶん、クロノ。

管理局登場か？

なのは、連れ――

現実逃避でネットしてたら、小ネズミ発見。

間違いない。ネギまの千雨の、アーティファクトで出てきた電子精
霊だ。

コイツも転生者らしい。名前はチクアープ。ちくわぶだな。

初対面で愚痴ばかり言っちゃまったのは悪いと思ってるんだが、日記に追記できる程度には楽になった。

ついでに、明日翠屋に行ってみる事になった。

変なのと会うかもしれないけど、家族に話を通してもらう方が確かに早く会えるだろうし。

うん、こいつと話せてよかった。だいぶ落ち着けてる。

なのはがもう家を出て移動してるのに気付いた時には、血の気が引くのが自分でもわかったからな。

アースラに行ったら、しばらく戻ってこないんだっけ？

それでも、戻った時に連絡を貰う事ぐらいはできるだろ。

少なくとも、プレシアが暴走する前に一度は家に帰るはずだ。

失敗したとは思ったけど、コイツと会えたんだから、まあいいかという事にする。

2004/04/28 (水)

助かった。

うん、率直な感想は、これしかない。

今はもう、なのはも、アコノちゃん(冷たい人)も居場所が分からない。

エヴァちゃん(魔法を使っていたのに、カートリッジを使った時以外は魔力を感じない)は元々わからなかったから除外。

エヴァちゃんは、まんまエヴァンジェリン。尊大気味な割に過保護だったり、見た目通りの年齢じゃないらしかつたり、茶々丸ショートヘアバージョン似の仲間が居たりと、どんだけ同じなんだと。

アコノちゃんは、木乃香だったな。で、性格がアスナ。明日菜(馬鹿レンジャー)じゃなくて、アスナ(・|・)で感じの。

私の能力は、今は結界で抑えてる状態らしいけど、きちんと制御できるようにデバイスを作ってくれるって、なんてありがたい話だ。

その代り魔法の練習とかする羽目になったけど、能力の制御が出来るようになるなら御の字だ。こっちからお願いしたいくらいだ。

でも、感情が無いって、何だよ。

普通なら狂うほど寝てたって、何だよ。

神様転生じゃなくてジュエルシード転生って、何だよ。

多分21人って、多すぎだろ。

死んだ人を除いても、あと最低5人は危険人物がいるって、オリ主様だか何だかしらねーけど、多すぎだろ。

ついでに、闇の書事件の時に襲われる危険があるって、気付いて無かった！

ユーノの声が聞こえた時点で、リンカーコアがあるって気付いけって話だよな。

いや、優秀だよな、エヴァちゃんとアコノちゃん。いや、エヴァ様とアコノ様。

とても10歳とは思えないよ。エヴァ様は違うらしいけど。

エヴァ様は仮とはいえ私の能力をあっさり抑え込んだりできるし、デバイスを作るって言ってたし。アコノ様は次元震が起きてるところに行つてジュエルシードの封印をしたって事だよな。能力だけ見れば2人ともオリ主様レベルだろ。エヴァ様はチート付きじゃねーか？

ただ、いくら優秀でも、代償大きすぎだろ。

人外。本つてありえねーだろ。クウネルも混じってるのか？

偉そうなだけで、何だかんだで優しい人っぽいけど。さすがエヴァ様、でいいのかね。

感情が無い上に、足が悪くて車椅子生活。

友達なんてできないだろうし、アコノちゃんは親に見捨てられてもおかしくないんじゃないか？

いろんな実力は私よりよっぽど上みたいだけど、2人とも見た目は少女？幼女？だし、闇の書やら管理局やらの対処もやって大変みたいだ。てか、一番大変なのは管理局対策じゃねーのか？ 知られるとヤバいって無理ゲーだろ。

原作に関係しそうな人や場所は避けるつもりだったけど、恩人だし。友達として付き合ったり、愚痴を聞いたりするくらいは……いい

よな？

でも、チクアーブ。てめーは駄目だ。どんだけ大事なこと言っ
てねーんだよ。

番外：その夜のアースラ（無印編22・5話）

◆●◆ リンディ・ハラオウン ◆●◆

「だけど、迂闊に動くべきではない、というのも正しいわよ。

情報が未確定であり、かつ、目標が闇の書の悲劇の終焉に繋がる可能性がある以上、邪魔をするべきではないわ」

ここは、アースラの一室。なのはさん達を招待するために作った、日本風のお部屋ね。

ここにいるのは私と、息子で執務官のクロノの2人だけ。

今日の昼に聞いた情報について話をしているのだけれど……盗聴なんてするべきではなかったかもしれないわね。

「だけど、闇の書がこの近くにある可能性が高いという事じゃないですか！

相手は第1級搜索指定のロストログアですよ！」

あまりにも衝撃的過ぎる内容だったわ。

クロノにとって、もちろん私にとっても無関係じゃない、闇の書に関する話。

提督として即座に動くほど確定した情報ではないけれど、なのはさんの話から考えても、有り得ない話と放置するわけにはいかないわね。

「ええ、それは分かっているわ。

だけど、あの子たちの話を纏めると、今、私達が動く理由と余力は無いわ」

「だからと言って、完全に放置するわけには！」

なのはの友人が巻き込まれるのを放置する事にもなるんですよ！」「いい？ クロノ。今までの発言と状況を纏めるわね。

まずは、原作と呼んでいた物語についてね。話していた内容やなのはさんの話を聞く限りでは疎かにしているいい水準でない事は確かだけれど、それがどれくらい現実と一致しているかも分からないし、すべて鵜呑みにしていいわけではないわ。現に、エヴァさん達も重視して

はいるけれど、違いについてかなり気にしている様子よ。

それに、不確定な情報で動いているエヴァさんやアコノさん達は間違いなく、巻き込まれるというなのはさんのお友達も守ろうという意思はあるわ。その為の行動の中に、私達へ伝えないという事が含まれているの。

それをなのはさんやユーノさんも守っているという事は、2人ともある程度納得しているはずよ」

「しかし、ジュエルシードの時も言われていたでしょう。

軽視や放置していたようにしか見えないと」

「今の時点で管理局として動くとするれば、搜索程度はジュエルシードと一緒に出来るでしょうね。あくまでも未確認の情報だし、すぐに本腰を入れて対処するという事にはならないわ。

だけど、今の状況で闇の書が見付かってしまえば、本局からの増援を呼ぶことになるでしょう。それは、アコノさんが心配しているような、不用意な介入を招く可能性が高いという事よ」

クロノの言う事も正しいけれど、今の私達はジュエルシードの回収という任務で来ているのだから、当然その任務が優先になるでしょう。

そんな時に新しい、兼務するには重大すぎるロストログアの発見の知らせ。

特に、闇の書は過去に何度も大きな災厄を振りまいてきた代物だもの。それが発見されたとなれば、管理局として全力で対処する事になるでしょう。

「それに、私達はエヴァさんやアコノさん達に信頼されるだけの実績を提示出来ていないわ。今の管理局を本当の意味で知っているのは、ユーノさんだけだもの。

それに、既に提督が秘密裏に動いていて、部下も来ていると言っていたわ。往來の申請を考えると、そうね……闇の書と因縁のある、地球出身者やその子孫をまとめた少数精鋭のチーム、と言ったところかしら？ いくら秘密裏にと言っても、まさか、管理外世界への違法侵入を繰り返しているわけではないでしょうし」

秘密裏に動いているという提督は、時空管理局の暴走や管理外世界の人達との衝突を避けるためにも、情報を表に出していないのでしよう。現地との関係や現地への思い入れがある人達を中心に動かせば、不必要な衝突は防ぎやすいでしょうし。

だけど、罪を背負う覚悟という点は気になるわね。確かに、闇の書の対処は通常的手段では難しいのだけれど……悲劇を防ぐために、その時点では罪のない闇の書の主を永久凍結により封印して時代の闇に葬る、とはね。

「ええ、恐らく。」

秘密裏と言うなら関わっている人数も少ないでしょう。他世界の人ではそう頻繁に渡航許可は下りないはずですし、許可が下りても申請自体が不自然になります。

場所や目的を考えると、人を集める際の基準として地球関係者という条件は不自然ではありません。11年前の事件で闇の書に係わった人物やその関係者は多いですし、それ以前の事件の関係者もいるはずです。条件に合う人を秘密裏に探す事はそれほど難しく無いと思います。

ひよっとすると、グレアム提督も関わっているかもしれません。裏で動いている提督というのがグレアム提督自身の可能性もあります。

ただ、僕の師匠についても知っていました。リーゼ達やグレアム提督についてはさほど詳しくない様子でした。グレアム提督だと言って良いか微妙です」

「地球に関係する提督で、闇の書との因縁があり、責任感も強い……関わりそうな要素は多いけれど、そうだと言い切る事は出来ないわね。判断は保留にしておきましょう。」

とにかく、こんな曖昧な情報のまま情報を出してしまえば、動いている提督やエヴァさんの動きを邪魔する上に、不要な危機を招く事になってしまうのは確実ね。本当にエヴァさん達が悲劇を平和的に終わらせることが出来るなら、無闇に動くことは良くないわ。

もしグレアム提督も関与しているなら、話し合いの舞台を用意する事ぐらいは出来るかしら。違ったとしても、交流のある人物がチーム

にいるかもしれないし」

だからこそ、エヴァさんは私達への情報提供をしていないとも考えられるわね。

提督の事も法的な問題を除けば妥当と評価しているし、前提条件が違う事をきちんと説明して説得する事も考えている様子だったわ。

アコノさんが心配していたように、話が表沙汰になれば早急に解決する事を求められるでしょうし、エヴァさんにその声を押しとどめる事は出来ないわね。そうなった時には管理局の実力者との協力は欠かせないわ。だからこそ、確信できていない今は私達に闇の書が存在を知らせず、説得できるだけの材料を揃えてから私達や動いている提督と交渉するつもりなのでしょう。

「それに、日本が減ぶのは避けたいようだし、協力が必要な時に話すと言っていたのだから、現時点での危険性はそこまで高くないのでしょう。闇の書の主になる人物と会っていないと言っていたし、まだ主になっていないという事は、本格的な活動は始まっていないという事よ。」

今はまだ闇の書が無いのかもしれないけれど……動いている提督がいるという事は、この可能性は低そうね」

「場所の目星も付いているようでした。少なくとも、原作で示されていた場所の特定は終わっているはずですよ。」

障害となっているのは……やはり、僕たち管理局、でしょうか？」
「そう考えるのが自然ね。少なくとも、理由の一つではあるでしょう。だけど、私達が原作と同じなら協力したいとまで言っていたのだから、今はジュエルシードに集中して早く解決してほしいと思うていそうよ。」

それに、最終戦の事も言っていたでしょう？」

だからと言って、手をこまねいて見ているわけにもいかないわね。実は手遅れでした、なんて事になるわけにはいかないもの。

「ええ。アルカンシエルで吹き飛ばした、と。」

それならば、確実に管理局の協力が必要なはずですよ」

「少し違うわ。アースラのアルカンシエルで、と言っていたのよ。」

だけど、今のアースラにアルカンシエルは搭載されていないわ。搭載に必要な期間は知ってる？」

「設備の状況にもよりますが、通常は試験を含めて1週間から2週間だと聞いています。」

数日で搭載したという話も聞いた事がありますが……かなり特例のはずです」

「闇の書事件は半年近く後と言っていたわ。今は4月の終わりだから、9月頃かしら。」

仮にジュエルシードを集め終わるまでに2か月かかっても、充分間に合うわね

私達の今の任務がジュエルシード関連である以上はここから動けないから、現時点で闇の書の存在が公になったら、確実にアルカンシエルを搭載した艦が増援に来るでしょう。それを防ぎたいという事は、私達と提督以外の介入を望んでいないとも取れるわ」

「確かにそうですが、搭載していかない事を知らない可能性もあります」
「アルカンシエルを使うのはクリスマスとも言っていたわ。少し調べてもらったけれど、12月の終わりにお祭りみたいね。」

発生や解決のタイミングが同じであれば、最悪の場合でも事件が発生してから急いで搭載しても間に合うわ。闇の書への対処であれば優先してもらえるでしょうし、その頃にアースラの整備で10日程の休暇の予定があるわね。」

アースラにアルカンシエルを搭載するとすれば、この時かしら？」
「ですが、エヴァンジュ達も原作の知識がどこまで有効か分からないと言っていたように、手遅れになる可能性もあります。」

ロストロギアの犠牲者をむやみに増やすような真似はできません
！」

「ええ。だけど、エヴァさんは助けたい人がいると言っていたわ。」

原作で助からない人を、助けたいと」

これに関しては、消滅するとエヴァさんが言明していたのよね。」

最終戦終了まで死者がいけない事が最低条件で、それは原作と同じという事なのだから、戦闘中の大魔法やアルカンシエルに巻き込まれる

わけではないという事。戦闘中の負傷で亡くなるなら、消滅という表現にはならないでしょうし。

問題は、その後。何があつて消滅する人物がいたり、闇の書の悲劇が終焉を迎えたりするのかわけられど……

「ですが、エヴァンジュが言っている事が正しければ、2500年前から眠っていたはずです。

そんな彼女が助けられた女性など、今でも生きているものでしょうか？」

「そこが分からないのよね。

恐らく最終戦と言つていた戦いが闇の書との決戦でしょうし、闇の書をアルカンシエルで破壊したのでしょうか。他にアルカンシエルを使わなければならない程の相手は居ないでしょうし。

だけど、それでは悲劇が終わらない。すぐに転生して別の場所に現れるという事を私達は知っているし、エヴァさん達が知らないとは思えないわ。

そうすると、戦闘終了後に犠牲者が出るのは転生先の場所という事になるけれど……」

「しかし、エヴァンジュ達の話では、女性を犠牲にして闇の書の悲劇が終わつたと取れます。

その女性の犠牲を防ぎたい……転生先にエヴァンジュの知人がいる？ いや、それだとなのはが悲しむ理由が……まさか、それがなのはの友人？

「だけど、犠牲者と言つていたが、命に係わる状況に陥る立場、つまり死にはしないとも取れる言い方も……それに、助けたい人となのはの友人は別人の様な口ぶりだったし、魔力の制御は完全に素人だったとレイジングハートも言つていた。大昔にエヴァンジュを助けたことなどあるわけが……」

となると、消滅するのは闇の書と守護騎士か？ 敵対している相手にも同情するのなら、悲しむ可能性も……しかし、アルカンシエルでも消滅させられない事は歴史が証明しているし、闇の書の力も破壊以外に使われた記録は無かつたはず。エヴァンジュを色々と助け

たと言う話とは結び付きにくい……………」

レイジングハートの記録を提出してくれた記録を見ると、エヴァさんは助からない人を助けたいと言っていて、その際にアコノさんはなのはさのお友達に仲間意識を持ったからだと言っているだけ。

別人の様に思えるけれど、本当に別人なのかしら？

最終戦でなのはさんと一緒に戦うと言っていて、それだけの才能を持つと称賛もしているのに、具体的な実力や3作目での扱いに触れていないし……

「なのはさんもいたし、優しい言い方をしたとも考えられるわね。」

レイジングハートの記録を見ても、別人と思える言い方をしているけれど、それを否定する発言も無いわ。エヴァさんが助けられたという話との齟齬は解決できないけれど、闇の書や守護騎士に助けられたという奇跡と、どちらが現実的かしら？」

「まさか……過去の人物の記憶や能力が、なのはの友人に？」

その記憶や能力が犠牲になるという意味合いであれば、別人の様な言い方や消滅という表現も説明が……だけど、制御が素人という事は説明できないし、管理外世界でそんな人物が生まれる可能性は……」

クロノも、いろいろ考えてくれているけれど、何だか空回りね。

確定できる情報が無い以上、机上の空論なのは間違いないのだけだ。

「本格的な活動を行っていない闇の書の場所が分かる事が、既に奇跡的な出来事よ。」

可能性の問題は、あまり重視しすぎてはいけないわ。

だけど、考えれば考える程、辻褄が合わない部分があるわね。

ある程度理解した上での会話を聞いているだけだから、前提が抜けているのでしようけれど」

今の私達の、最大の問題がこれでしょう。

エヴァさん達、つまり転生者達は、原作と言う共通の情報がある状態で話をしているわ。それは、千晴さん達との会話を聞いていても嘘じゃない様子だし。

私達が知らない情報はなのはさんやユーノさんに話した内容で補

うしかないのだけれど、あまりにも断片的過ぎるわね。

「そうですね、判断材料が少なすぎます。」

それに、エヴァンジュ達自身も言っているように、本当にその知識が正しいとも限りません。そもそも、心配させないための嘘が混じっている可能性もあります。

闇の書の存在という前提が正しければ、大きな戦力が必要になるのは間違いありませんが」

「だけど、闇の書との決戦時の戦力としては、私達、なのはさん、事件に巻き込まれるなのはさんのお友達という事になるのかしら？」

エヴァさんたちの動き次第では、なのはさんのお友達がエヴァさんたちに変わりそうね。

原作では闇の書の主と守護騎士もという事らしいけれど、そんな事が本当にあり得るのかしら……？」

「やはり、情報が少なすぎます。」

表に出せる話ではないですし、時間が無かったので簡単な調査しかできていませんが、やはり現時点の闇の書に関連しそうな情報は見当たりにませんでした」

「仕方ないわ。提督も秘密裏という事だし、事を大きくするわけにはいかないもの。」

あまりやりたくは無だけれど、エヴァさんとアコノさんに監視を付けないといけないかしら？」

原作について何か話してくれば、理解するヒントくらいにはなるでしょう」

「そうですね。しかし、内容が内容ですから、誰にでも任せられる事ではありません。」

自宅の場所も正確には分かっていますから、自動監視のサーチャーを学校に配置するくらいが精々です。後は、自動追尾で会話の内容をチェックする程度が限度でしょう」

「クロノやエイミィを張り付けるわけにもいかないし、だからと言って、他の人を付けるわけにもいかないわね。当面はそれで様子を見ましよう。」

原作とえば、プレシアという人物がもつと大きな次元震を起こすとも言っていたわね。

その人物は調べてる?」

これはこれで問題ね。

随分前に大魔導師と呼ばれていた人物と同じ名前だけれど、本人かしら?

「これは、エイミィに詳細を調べてもらっています。

実際に動いている少女はフェイト・テスタロッサという名だそうですが、この少女の情報は見当たらないと言っていました。

大魔導師プレシア・テスタロッサについては、どうも記録が抹消された形跡があるそうです。

早めに本人かどうか確認できればいいのですが」

「そう。事件の黒幕の可能性が高いから、なるべく詳細な情報を集めておいて」

「そのつもりです。

それにしても、こんな辺鄙な世界で、どうしてもこうも重大なロス・トロギアの事件が重なるのか……」

「物語の舞台だと言う話も、笑って流すわけにはいかないわね。

確かに、普通は有り得ない事態だもの」

「だからと言って、放置も出来ません。

「ここは僕達の現実です。悲劇は、防がないと」

「クロノ。事件解決に力を入れるのは良い事だけれど、出来る事をしっかりとすることも大事よ?」

「ですが、このまま放置しては、確実にこの世界は……」

「あの過保護気味なエヴァさんが、アコノさんやこの世界に大きな影響が出る事態を黙って見ているとは思えないわ。

魔力はカートリッジに頼っているみたいだけれど、技術者としての腕はかなり高そうだし、地球と言うか、日本に愛着もあるみたいだし。

それに、下手に手を出して闇の書を管理局に持ち込まれたら大問題よ。あの様子では本当にやりかねないわ」

アコノさんに相変わらずの過保護者と言われているし、アコノさん

を守るためなら管理局を敵に回す事も厭わないと言い切る程だもの、相当よね。

アコノさんのデバイスもかなり高度な古代ベルカの技術を使っているみたいだし、古代ベルカの技術や知識を持っているなら、聖王教会との交流は有り得るかしら？ うまく交流できて、エヴァさんの枷になつてくれれば一番いいのだけれど。

「確かに……あの執着ぶりは、ちよつと異常と言うか」

「元々寂しがりみたいだし、前の主が死んだと言っていたから、その反動もあるのかしらね？」

明確な敵には容赦しないし、無関係な人はどうでもいいけれど、自分に関係する人が傷ついたり亡くなったりする事には耐えられない、と言った感じに見えたけれど。クロノはどう？」

「そうでしょうか？」

明確な敵とは言えない相手も、殺して構わないような言い方もしていましたが」

「だけど、自分から殺そうとはしていないわ。」

明らかに殺人の罪を犯した人を把握していても、未だに何もしていないのよ？

無関係な人を殺した人よりも、関係する人に有害そうな人を優先して警戒しているわね」

これも不思議な点よね。

明らかに人を殺している転生者を、実質的に放置しているんですもの。

転生者だと断言出来るだけの情報を調べられたのだから、対処する気があるのならば、いつでも出来るでしょうに。

「そういえば、確かにそうですね。」

ミッドの事はミッドの人がやるべきだと言っているのも、その延長でしょう」

「そのことに関しては、確かにそうだとしか言えないわ。」

まして、ここは管理外世界。本来は管理局やミッドチルダの事を知っている時点でおかしいのだから、地球に住む彼女達を巻き込む事

は本来あってはならない事よ。

「だけど、S+になり得る魔導師には来て欲しいわね」

「なのはさん、このままうちに来てくれないかしら？」

エヴァさんは、どうかしら。地球に駐在する現地職員か地方在住の技術者扱いなら、見込みがありそうだけれど……その前に、転生者で魔導具と言う点をきちんと理解しないといけないかしらね。

「か、母さん!？」

「オーバーSクラスの魔導師なんて、そうそういるものじゃないわ。

その卵が目の前にいるのよ?」

原作では管理局の局員になるみたいだし、説得の余地はありそうじゃない?」

「し、しかし、なのははまだ……」

「大丈夫よ。無理に誘う気は無いわ。

でも、なのはさんはきつと来てくれるわ」

「……そうですね。

ですが、それよりも、電子精霊と言っていた者の対処を先に考えるべきです」

チクアーブさん自身と、エヴァさんが作ったと言っていた存在ね。

情報の収集と解析と言っていたけれど、何処まで収集できるかで、どれ程の脅威になるかが決まるわね。

「そうね。コンピュータに自由に侵入できるのであれば、脅威だわ。

だけど、今のところはレシピを探すとか、ミッドについても住環境や文化の調査と言っていたわね。

アンチウイルス……防衛プログラムの事かしら。それを警戒しているという事は、きちんと守られているものには手出し出来ない可能性もあるのかしら?」

「あの移動能力を見る限り、出来ないという可能性は信じられません」
「やっぱり、クロノもそう思うのね。」

携帯電話の中に入っていたから、コンピュータシステムの中なら自由に動けるという事かしら?」

「そうね。だけど、今のところは悪用する気も無いようだし……」

エヴァさんが作れたという事は、私達にも作ることが出来る可能性はあるわね？」

「研究を依頼しますか？ でも……何と言って？」

「そうね、稀少技能レアスキルに似た物が無いかの調査依頼と、可能であれば再現……再現？」

再現と言っても、いったい、何を再現すればいいのかしら。

コンピュータの中に入る事？

それも、物理的ではなく、情報的に活動できる状態で？

闇の書の守護騎士に近い存在と仮定しても、低機能の端末に、見た感じでは物理的に侵入するなんて……

「エヴァンジュ自身が、ロストログアに認定される可能性が十二分にある存在です。」

まして、そんな彼女が作った、理論どころか何をしているかも分からないものの調査や再現なんて、そう簡単に出来るでしょうか……？」

「うーん……難しそうね。エイミイに侵入や改変の痕跡が無いか、たまにチェックしてもらう程度にしておきましょうか」

「そう簡単に尻尾を出すとは思えません……」

「魔法技術を持たない世界の人が初めて魔法を見る時は、きっとこんな気分なんでしょうね」

「……そうですね」

理解も対処も出来ない技術を前にした人の気分、ね。

管理外世界で、そんなものを知ることになるとは思わなかったわ。

無印編23話 連休開始

4月29日。日本は、全国的に黄金週間ゴールデンウィークと呼ばれる期間に突入。当然、学生達も休みになる。

それは転生者の多くも自由に動き回れるという事に繋がる。つまり、問題が多発する可能性があるという事。

「だけど、接触も出来ないのは予想外」

「そうだな。どうやって避けているのやら」

そんな中、主とお姉様は、制限が解除されていない転生者への平和的接触に挑戦中。

お姉様が主の車椅子を押して、街中を移動している状態。

標的は夜月ツバサ。アンナ・ユーリ……本名長い。アーニヤの外見で人間不信の小学3年生。

居場所は特定できる。

ある程度偶然的な出会いに見せるために先回りしてみても、その度に夜月ツバサの行動が変化。

変化の理由はどれも偶発的。こちらの動きを察知したからとは思えない。

「制限とは、接触を回避する効果もあるという事か？」

「だけど、突破できた例もある。

絶対的なものではないはず」

突破と言うか、そのまま命を砕いたと言うか。

どこまで参考にしていいか不明。

「だが、敵対したいわけじゃないからな。人間不信の様だし、強引に接触すると後が面倒そうだ。

現時点での接触は諦めた方が良さそうだな」

「手遅れになる前に接触できればいいけど」

「制限が無くなってからの行動次第だろう。

遅くとも1か月以内には接触できるだろうし、焦らず行くしかないか」



ゴールデンウィーク
黄金週間3日目。

とは言っても、2日目は平日。主は普通に学校へ行き、フェイト・テスタロッサが発動直後のジュエルシード、シリアル5を鮮やかに回収した程度で、比較的平穏な日が続いてる。

「平穏か？」

お姉様が心配しなくていい程度には。

対応していたのは、下出来人。

既に発見済みの、オリ主様。

制限が解除になったと思われるため、接触の可能性がかなり高まった。

元々警戒対象。対応に変化は無い。

関わってくる可能性が上がっただけ。問題ない。

昨日、学校で主を見付けたいらしいアースラのサーチャーは自動監視だったため、当初は放置。

主は放課後に翠屋に顔を出し、月村すずかやアリサ・バニングスとお茶。

高町なのはの状況説明と、普通の雑談を少々。八神はやてに関する話題は自動監視が反応しない程度に誤魔化して対処。

その後、サーチャーにはじこをよそおってたにんのかんしを穏便な方法で退散してもらった上で、帰宅。

とても平和な1日。

「平穏。でも、今からは？」

主は、真鶴亜美と待ち合わせ。

表面上は、平穏。

「本当に表面上だけだがな。女狐じやなきやいいが……
本当に1人で行くつもりか？」

お姉様の過保護再び？

「大丈夫。言い争いになる事はあっても、暴力的な争いになる相手ではなさそう。」

それよりも、エヴァは他の転生者の方をお願い。

昨日の封印解除もあるから、今日にも動く可能性がある」

「それはそうなんだが。」

それで、アコノは昼過ぎにはやてと会う予定だったな？」

「今日の結果次第で、はやてにどう手を出すかを決めるつもり。」

出来れば早めに家に行く約束も取り付ける」

「そろそろ、どうするか決めないといけない時期か。」

はやての考えが判明して、問題ないようなら私も行くぞ」

「その時はよろしく。」

「だけど、本当に思考支援は禁止？」

「駄目だ。アコノの場合、本当に脳が使い物にならなくなるまで使えそうだからな。」

いくら直せても、本当の体はそれだけなんだ。頼むから粗末に扱わないでくれ」

「わかった」

ここで空気を読まずに緊急速報。

ジュエルシードの発動を確認。シリアルは8。

付近にいたギル・ガームスと下出来人が接近中。

「はあ？ あいつら、デバイスを持っていたか？」

ギル・ガームスは持っていない。

下出来人は持っていても、封印するには性能不足。

敗北または取り込まれる未来しか想像出来ない。

アースラのサーチャーはいい反応。ジュエルシードと転生者2名の監視に入った模様。

ジュエルシードに辿り着く前に、2人が接触。

睨み合ってる。

「2人の目的は、ジュエルシード？」

「だろうな。ただ、あいつらが出てきても何も出来ないが」

2人とも自分のものだと主張している間に、ジュエルシードの状況が若干安定。

鳥が鳳凰っぽいものになった。

現地入り直後のユーノ・スクライアが封時結界を展開、鳥の姿が消えた。

下出来人とギル・ガームスをうまく外した封時結界の展開技術は見事。

2人は呆然としてる。

「……間抜け過ぎるだろう」

お前のせいで逃げられたと激しく口論。

下出来人がポケットから割り箸にも見える細く短い棒を取り出した。これがデバイス。

ギル・ガームスが懐から出刃包丁を取り出した。明らかに凶器。

戦闘開始。

「低レベルとはいええ、デバイス持ちに包丁で挑むとは……無謀にも程がある」

「だけど、相手が魔法を使えないと舐めていると」
刺された。

2人とも魔法を使っていない。

主が言い終る時間すらなかった。

2本目の包丁が、胸にさっくり。

どう見ても致命傷。

「……やってしまったのか」

お姉様がため息をついている。

ギル・ガームス本人は呆然としてる。

手法的に、日本の警察で対処できる範囲の殺人事件。

通報する？

付近の通行人の意識を誘導、目撃者に？

目撃者が次の犠牲者になる可能性も。非推奨。

ギル・ガームスが下出来人の持っていた割り箸デバイスを奪い、逃走開始。

逃走する姿が普通に見られた。

返り血で真っ赤。明らかに怪しい。無駄に美形なため印象にも残りやすい。

目的者多数。目撃者を排除すると確実に大量虐殺者認定。

携帯電話のカメラを向けられてる。
銀行入り口に防犯カメラの存在を確認。
撮影していればばっちり記録可能な角度。

「うわぁ……」

お姉様が呆れてる。

主も呆れてる。

るーるる、るるーるー。

今日も、いい天気。

げんじつとうひ　ここまで。

「間抜けにも程がある。」

後は、日本の警察に任せる?」

「魔法を使われると、不必要な犠牲者が出るな。魔法の秘匿にも問題がある……」

とりあえず、デバイスを壊しておくのが無難か?

アースラには……まあ、見られても仕方ない」

「可能?」

がんばる。

デバイスの構造は単純に見える。

解析対策も碌にされてない?

使用者消失により、なけなしのロックも解除状態。

内部構造の解析に成功。

驚きのノーガード・フルオープン戦法。

使用者登録に必要な機能を狙い撃ち。劣化と衝撃による破損を偽装。

臨時使用者機能の無い低機能ストレージデバイス。登録抹消状態なので無力化可能。

でも、クロノ・ハラオウンが見てる。何をしたのか見破られる可能性は高い。

魔法の行使部分に大きな問題が無ければ、管理局の調査が入っても疑問に思われにくい。

明確な証拠は残さない。執務官とはいえ推測の証言だけなら大き

な問題にはならないと予想。

と言うわけで、遠慮なく実行。

成功。

「ずいぶんあっさり」

「いや、物理的に潰すつもりで言ったんだが……

遠隔解析なんて、無茶し過ぎだ」

あとは必要に応じて、匿名で警察に情報提供。

犯罪者として捕まれば、当分は私達への干渉は不可能になる。

とりあえず望ましい状態になりそう。

「まあいい、これで現実を知れば、少しはましになってくれるだろう。

もしくは、社会からドロップアウトだな」

追加報告。

鳥は高町なのが封印完了。

ユーノ・スクライアのバインドに関する説明も健在。

真鶴亜美との対応を確認済み。恐らく制限が解除された。

この場に及んで事態が急変。

「つまり、制限のない状態で話が出来るという事。

好都合」

「だが、あまりにもタイミングがおかしい。

私達は今もジュエルシードの掌で踊っているのか……?」

「例えそうでも、掌を踏み砕くくらい強く踊ればいい。

この世界のジュエルシードを改造できる技術を持つエヴァなら、可

能なはず」

「……そう、だな」



11時頃になり、主は1人で喫茶店へ来た。

探知魔法の妨害も万全の態勢。

ここにいること自体、アースラには知られてないはず。

でも、成瀬カイゼの盗聴器が存在している事は把握済み。

奥の方の席には既に真鶴亜美が座ってる。
のんびりと紅茶を飲んでる。

「お待たせ」

「いえ、さっき来たところよ。」

「だけど、どう見ても木乃香ちゃんね」

真鶴亜美の笑みは優しい。

今のところ、狸や狐や猫の気配は見えない。

「那波千鶴そのもの。人の事は言えない。」

私は小野アコノ。好きに呼んで」

「あらあら、話すと見た目とはだいぶ印象が変わるわね。」

私は真鶴亜美。保育士をしているわ。

話だけど……ここで大丈夫？ 別の場所に移動する？」

「しばらくなら大丈夫」

主はそう言いながら店員に椅子を片付けてもらい、ジュースを注文。
店員が離れたところで、テーブルの上に猫の形をした飾りを置いた。

「これは？」

「これは？」

「限定的だけど、ネギまの認識障害を再現した物だと聞いている。」

録音とか盗聴とかされていなければ、問題ないはず」

(妹達、低水準の思考支援を。

エヴァに心配させない程度に、情報転送は最小限でアドバイスを
お願い)

「やっぱりやるつもりだった。」

あれ以上速度を落とすと、相談がし辛くなる。

効果がだいぶ落ちる。結果的に、今とあまり変わらない。

(最適と判断した結果を教えてくださいければいい。

私はそれに従う)

それだと主の意思が反映出来ない。

従者として、認められない。

(エヴァと私にとって最善の答えを導いてくれる、と信じる私も認め

られない?)

心意気は理解。

でも、その言い方は卑怯。

盗聴は気にしなくていい。聞かれたくない情報は遮断する準備もしてる。

私達の考えは、いつもの様に話せる。

思考支援もあくまで助言。その案に従う必要はない。

主の負荷は予想以上に大きい。

主だからこそ譲れない。

(わかった)

「そう。それなら、少しぐらいは大丈夫そうね。

さてと、何処から話しましょうか?」

「知識の摺合せのために、ある程度こちらで把握している事を話す。

分からない事や疑問に思った事、他に気付いている事があったら

言ってほしい」

「そうね、分かったわ」

真鶴亜美の雰囲気が変わった。

でも、やっぱり狸や狐じゃなさそう。

真剣になっただけ。

「まず、聞いていると思うけれど、ここはリリカルなのはの世界。

私は3作目まで大体把握している。

その辺をどの程度知っているか聞いてもいい?」

「いわゆる原作についてね。少しくらいは知ってるけれど、見た事が

あるのは1作目だけで、2作目は概要くらいね。

主人公は高町なのはだとか、1作目はジュエルシードを集めると

か、その程度は分かるわ」

「今は1作目だから、ある程度知っている前提で説明する。

なのはは今、ジュエルシードを集めている。

状況としては、管理局との協力中で、アースラに行ったところ」

「あら、管理局も来ているの? 結構進んでいるのね。

でも、内容を思い出したのがついさっきなのよ。随分と覚醒の遅い

転生だと思っけど……」

制限解除の効果はこれだけ？

有効な制限だけど、弱い制限でもある。

「転生の原因はジュエルシード。」

自身に対応するジュエルシードが封印されると、原作に係わる事が出来るようになるみたい」

「そういう事なの？」

それなら遅いのも納得だけど、未だに係われない人もいるという事ね？」

「そう。転生者もまだ16人しか見付けていない」

「そうなの？ でも、ジュエルシードね……その割には、特に歪んだ叶え方はされていないけど、他の人はどうなの？」

真鶴亜美の特典は、歪んでない？

罨を回避した？

「歪んでいる人も多い。望んだのは何？」

「健康な体と、探し物と、怪我の治療ね。」

今まで病気らしい病気にかかった事は無いし、探し物と治療は普通出来るみたいだし。

歪んでいるとは思えないわよ」

何て幸せな結果。

同じジュエルシード転生とは思えない素直さ。

「探し物の能力で、襲われそうになった事や監視に気付いた？」

「ええ、そうよ。」

歪んだ人って、どんな感じなのかしら？」

「私は、冷静さを望んで感情を感じなくなった。」

望んだ能力が期待通りに動いていない人もそれなりにいる。

ニコポやナデポが壊滅状態みたいだから少し安心だけど、警戒は必要。

人間じゃなくなった人もいる。

望んだ能力の影響に耐えられなくなって、なのはの所に相談に来た人もいる。

まだ接触していないけれど、人間不信になっている人もいるみたい」

夜月ツバサも伝える？

そもそも、歪んだ結果かも不明。特典も不明。

だから主は「みたい」とぼかしてる。問題ない。

「あらあら、随分と大変なことになってるのね。

助けられる人なら、助けたいけれど……警戒という事は、あまり好ましくない人もいるという事かしら？」

「ニコポやナデポは、惚れ薬の様なもの。

そんな能力を欲しがる人は、他人を人と認めていないような行動を取りがち。

助けるより、矯正すべき」

「そうなの。それも歪んだ結果なのかしら？」

「分からない。

元々の本人の気質かもしれない。

何らかの歪みの結果なのかもしれない。

本人が不満に思っているかどうか分からない」

「そう……歪みが本人にとって不満とも限らないという事ね。

確かに、私はあまり不満も無いし。その点は納得出来るかしら」

不満が無い？

能力は素直に与えられてる。

生活状況的にも名前的にも、おかしい点は見えない。

「本当に不満は無い？」

「そうね……私が不満なのは原作の内容を忘れていた事くらいかしら？」

「どう不満？」

「いくら物語だったと言っても、子供に全てを任せ切りになるのは、大人としてダメでしょう？」

何故か少し早くこの世界に来ていた様だし、何か手伝えることもあつたんじゃないかと思って」

真鶴亜美は、本当にいい人？

介入自体が目的じゃない。

目的が真つ当に聞こえる。

「探知能力での搜索？」

「それもあるけど、大人として子供を甘えさせたりとかも、ね。

ほら、私は保育士だから、子供の扱いも少しは慣れているし」

「なのは子供だけど、大人でもある。

それに、子供を甘えさせるのは、まずは家族であるべき。

そのことについての忠告も家族にしてある。当面は様子見」

「あら、そうなの？」

随分と手回しが良いわね」

感心された。

どことなく安心した雰囲気。

「意図的ではなかったけれど、結果的になのは達と知り合った。

手助けできる部分はするつもり」

「そうなの。それなら、私に出来る事は、あまり無いのかしら？」

そうならちよつと肩の荷が下りた気分だけど、少し残念かな」

「無理に関与する必要は無いはず。それよりも、2作目への対処をし

ておいて欲しい」

「闇の書、だったかしら……そちらも現実になるという事でいいのかしら。」

2作目の知識は、概要だけと言っていた。

長宗我部千晴と同じく、知識はあやふやな状態と思われる。

「まだわからない。可能な限り安全かつ平和裏に事を進めるための準備はしてる。

だけど、2作目については、知っていてもあまり話さないでほしい。

特に翠屋は管理局の保護と言う名の監視があるはず。認識阻害でも盗聴は防げない。

それに、何もしなくても原作との乖離が色々と発生している。闇の書自体も私は見えていないから、本当に事件が起こるのかも未確認。

管理局も、アースラだけでは2兎を追えない。早い段階で管理局に大掛かりな介入を決意されたら、危険性が跳ね上がる」

「そう。探し物の能力でお手伝いは必要？」

闇の書関係で探し物は、特に無い。

ジュエルシードは主やお姉様が見つける必要が無いはず。

現時点で隠れてるものは、未発見の転生者以外は今のところ無い。

という事は、転生者の情報が一番有益？

「ジュエルシードは必要があったら改めてお願いするかもしれない。

それより、他の転生した人を探してもらえると助かる。

普通の人もいれば、危険な人もいる。危険な人物なら対処が必要か

もしれないし、少なくとも警戒はしておく方が無難」

「なるほどね。でも、探し物はそれほど範囲が広くないし……どこに

どんな人がいるか、摺合せをしておきましょうか。

探し物は、それくらい？」

「多分これくらい。闇の書も場所の目処は付いている。

友好的に接触して、解決に導くための準備をしている段階のはず」

「それならいいのだけど……少し不安ね。

詳しい話を聞くわけにはいかないのかしら？」

「アースラに話をした後であれば、話せる。

遅くとも2か月、多分1か月以内」

「あら、随分早い段階で対処出来そうなの？

それなら安心かな」

「話が出来るのがその頃。最終的な解決は、もつと先になるかもしれない。

場合によっては守護騎士と敵対する可能性もある。

身を守り、敵から逃れる技術があった方がいい。

多少なりと魔力があれば、狙われる可能性が否定できない」

この際に勧誘開始？

話した感じでは、悪い人には思えない。

長宗我部千晴とチクアープに続き、3名目。

「なるほど……それはそうね。

だけど、探し物の能力で守護騎士のいる場所はわかると思うけど、戦ったり逃げたりは無理よ？」

他に出来る事は治療だけだし」

「それなら、相談してみる。」

私達に協力してくれるならデバイスの準備もしてくれると思うし、魔法の練習方法も教えてくれる」

それはもう、ばつちり指導予定。

担当は私達。

お姉様が、入門用のデバイスを準備済み。

練習場所も高町家の道場を確保済み。

でも、長宗我部千晴とチクアープにはまだデバイスも渡してない。手ぐすねを引いて待つてるのに。

「それは有り難いけど、大丈夫？」

準備の邪魔になるなら、遠慮しておくけれど」

「どうして？ 魔法は使いたくない？」

「はやてちゃんが力を求めなければ、襲われても死ぬ可能性はかなり低いでしょうし。」

それに、私への指導で時間を取られて準備が間に合わなかったら、本末転倒でしょう？

そんな事態になるくらいなら、魔法を使いたいという気持ちを抑える方が良いわよ」

予想以上に、真鶴亜美がいい人。

これで狸狐猫のどれかなら、驚くしかない。

「そう。でも、きつと大丈夫。」

それに、これは他の転生者への対策でもある。

似た境遇のまともそうな人を失うのは、私達としても避けたい。まともそうじゃない人だけど、既に3人死んでいるのは確実。

転生者であろうと、何かあれば死ぬという事は間違いない」

「あらあら、それは大変ね。」

分かったわ。どの程度対処できるようになるか分からないけれど、改めて相談しましょう」

「それと、アースラに転生者の事も伝えてある。」

監視される可能性もあるけど、存在を伝えていい？」

「私の？ 別に構わないわよ。」

やましいことをするつもりは無いし、アースラの人達がいい人のままなら、無害な人の監視は保護と同義になりそうだしね」

真鶴亜美は、色々信用しすぎ？

微妙に心配。

お姉様の過保護が発動しそう。

「わかった。なら、私への連絡は翠屋にしてほしい。」

私や対策に動いている人は携帯電話を持っていないし、私はこの足。

連絡用に1人常駐しているから、その人に伝えれば必ず私や動いている人にも伝わる。

それと、高町家の道場で、魔法の練習をさせてもらえることになっている。

練習したいときは、いつでも行っていい」

「了解よ。あ、私の携帯番号は教えておくわね。」

翠屋や道場にはたまに行くようにするけれど、急ぎの用事があればよろしくね？」

その後は、詳細な打ち合わせや相談。

残念ながら、新たな転生者の情報は無し。

搜索には協力してもらえるものの、仕事の合間や出掛けた際に気に掛ける程度。

連休中も仕事がある模様。魔法の練習開始もちよっと先に。

でも、協力者関係は作れた。問題ない。

無印編24話 約束

真鶴亜美との会話を終えた主はそのままその店で昼食を食べて、図書館へ。

目的はもちろん八神はやて。アースラの捜査網を回避しつつ移動。そのままいつもの様に本を選び、いつもの様に会い、いつもの様に雑談を開始。

「アコノさんは、今日は何を選んだん？」

「竹割物語と古エダ」

「二つ目は分からへんな。」

「なんか美味しそうな名前やけど、どうしてそんなのを選んだん？」
「普通分らない。」

「北欧神話や北欧の英雄伝説の詩群なんて、一般的じゃない。」

「主が選んだ事に驚愕。」

「最初に会った時に、魔法で話をした。」

「きつと、人が求める究極的な魔法は、不老とか不死だと思う。」

「そういうのが出てくる話っぽい？」

「そもそも古エダは話じゃない。」

「だけど、出ないとは断言できない。」

「なんて判断に困る選択。」

「竹割物語は分かるけど、二つ目の古エダも、そうなんか？」

「北欧の神話関連。多分、出る。」

「出なくても参考になれば問題ない」

「参考……？」

「きつと無理。」

「それもそうやね。本は楽しめればおっけーや」
「納得された。」

「それでいいのか八神はやて。」

「ところで、不老不死って、理想？」

「お、また思考実験とかいうのか？」

「うーん、状況によるやろうね。」

今の日本で自分だけ不老不死になったら、確実にさらしもんやし」「それは魔法を使えるようになったとしても変わらない。

それなら、もっと一般的な話から。

自分は死にそうだけど、その死をきっかけとして他人に不幸が訪れる可能性がある場合。

生きようとする？死を受け入れる？」

「おー、ずいぶんきつつい状況やなあ。

どこまで頑張れるかわからへんけど、とりあえずは死なんようせなあかん」

「それが連続する場合や、自分の死が大勢の不幸に繋がるきっかけになる可能性がある場合は、ずっと死ねない状況という事になる。

それでもがんばる？」

「頑張らなあかんやろ。人間、諦めたらあかんよ？」

随分と献身的？」

前提がいろいろ抜けている分、死ぬのは安易な逃げに見える条件設定。

一般的には妥当な選択に見える。

むしろ、この段階で死ぬ選択をする方が難しい。

「それなら、ここで魔法を投入。日本だと面倒が多いから、それなりに魔法が知られている場所と仮定する。

魔法を使って生き続ける事で、大勢の人の不幸を回避し続ける事が可能な場合。

……ん？ これは、悪い表現を使うと英雄という名の生贄？」

先に足す条件はそれ？」

生きる環境についての条件が必要と推測。

「はっちゃけた条件になったなあ。

生き続けて大勢の人の不幸を回避、なあ……不老みたいな感じって事やね？」

英雄という腫物として祭り上げられる、とかなりそうや。

さすがにそれは心が折れそうやね」

「救済措置。似た境遇の仲間達と一緒に。

人数は、とりあえず10人くらい？

……腫物集団として立場が悪化しそう。救済じゃなくなった？」

夜天、守護騎士の4人、お姉様、主、チャチャマル、チャチャゼロで9人？

八神はやてを入れて10人。

私達や従者達は？

ややこしくなりそう。条件設定的には妥当。

「悪化はしそうやけど、孤独ではなさそうやな。」

うーん、結構根性が要りそうやけど、頑張れそんな範囲かもしれないな」

「救済、救済……」

共に生きる仲間の一部は、家族と呼べるほど親密な関係。

……自分が原因なら、より苦しみそう」

「そうやね。自分が原因やと、苦しむことになりそうや。」

生きなあかん原因が理由で知り合って親密になった、ならどうやるか？」

八神はやてからの条件提案。

有り難い内容。

今回想定しているのは、まさにこれ。

「それなら大丈夫？」

原因に思う事があっても、家族と呼べる相手と出会えた……うん、何だか救済っぽい」

「そやろ？ そんな感じの人らと一緒になら、頑張れそんな気がせえへん？」

「私は孤独でも何も思わないし、必要なら死や生贄扱いでも受け入れる。」

はやての意見が聞きたい」

「あ、そうやったな。」

うーん、さっきの救済があれば……うん、何とか頑張れるんとかやうかな。

他の仲間の人もも良好な関係ちゆう前提でいいんやね？」

「そうじゃないと仲間と呼べない。例えば私を含んで考えてみてもいい」

「おー、随分明るい要素が出たなあ。」

家族みたいな人と、友達と。うん、それならがんばれそうや」
明るいと来た。

八神はやての、主の気に入る振りには不思議な勢い。

今後の発展にも期待が持てる。

(エヴァ、はやては夜天の真の主になっても問題無さそう。

状況的にも、闇の書の調査を早めにした方が良い。

問題無ければ今日はやての家に行く約束をするけど、大丈夫?)

(ああ、話は聞いていた。後は実際に話をして、はやての選択に任せよう。

はやてが真の主になるなら、夜天や守護騎士ははやての家族になるだろう。

私達が、友として傍に立てる。私達の従者達もな)



そして、図書館を出て、主と八神はやては八神はやての住む家へ。交渉は簡単。主が行きたいという希望を伝えたら、八神はやては快諾。

ついでに泊まっていけど、とても有り難い提案をされた。

これを幸いに主は両親に連絡。許可も全く問題なく取れた。

八神はやての家の魔法は、リーゼアリアの手で強化され過ぎた探知妨害のせいで、不調をきたしているものも多い。

そもそも、主が家に行った事自体は知られても構わない。

会話の偽装は念のため。正常に機能していないとはいえ、情報取得の魔法は残ってる。

光学系の偽装も準備。念のために偽装した会話との整合性を確保。お姉様が来る可能性もある。

魔力反応感知は今でも正常稼働してる模様。対策は念入りに。

認識阻害への介入も準備。今回で八神はやて本人に影響する分を全て破壊予定。但し、それは猫に悟らせない。

主自身は、普通に訪問。

「アコノさんは何か食べたい物とか、苦手なものあるんか？」

「大抵のものは食べられる。感情が無いせいかな、これが食べたいと思っただ事は無い」

「そうか。なら、お鍋でええか？」

「一人で食べるお鍋は寂しくてな」

「大丈夫」

移動途中に2人で買い物に立ち寄り。

「随分と手馴れてる」

「そやろ？ 一人暮らしするようになってから、色々頑張ったんよ。」

「アコノさんは待つててな？ お客さんは働かせられへんからなあ」

「食事の準備も問題なく八神はやてが行い。」

「……おいしい」

「へへん、料理は得意なんよ」

「のんびりとした空気のまま食事も終わった。」

「あ、お風呂とかどないしよ？」

「それに、着替えとか持つてきてへんよな」

（妹達。予定通り、はやての情報収集と認識阻害への介入をお願い）

「主からの依頼を受領。」

「早速、実行。」

「情報収集魔法への介入を開始。」

「認識阻害の解除完了。猫対策の偽装を開始。」

「大丈夫。でも、その前に大事な話がある」

「ん？ なんや真面目な話なんか？」

「はやて。鎖で縛られた本を持つていない？」

「あー、あの本か？」

「あるけど、何でアコノさんが知ってるん？」

「八神はやては、不思議そう。」

「闇の書に関する話は今まで一度も出ていないから、仕方ない。」

「あの本は、本物の魔法に関係している。

正直に言えば、はやてに近づく最初のきっかけは、あの本」

「へ？ ……本物の、魔法？」

「もちろん、切っ掛けでしかない。そして、私ははやてを助けようと考えている。

あの本は、はやてに家族をもたらず。でも、同時に災いも運んでくる。

家族に出会う事を止めたくは無いけれど、災いは防ぐべき。

出会ってから話した、魔法の話、家族の話、不老不死の話。

あれは全て、はやての身に起きる可能性のある話だった」

「ちよ、ちよっと待ってな。

魔法とか、現実にあるとか、災いとか言われても、一体どう返事すればいいか分からへん……」

主、急ぎ過ぎ。

認識障害を無効化したからと言って、詰め込みは良くない。

「信じられないのは当然。

私も、魔法を知ったのは今月の初め。

何も知らなければ、はやてが初めて魔法に触れるのは6月4日。誕生日の午前0時だった」

「へ？ なんでアコノさんが私の誕生日を知ってるん？」

「私は、元々別の世界で生きていた。

物語でも見掛ける、転生とかいうものを経験している。

そして、前世では、この世界は物語として存在していた。

はやては、その物語の登場人物」

「えええ！？」

あ、ありえへん。そんなんおかしいやろ!？」

主、もう言っちゃった。

八神はやての反応は、とても普通。

「だから、本当ははやてが1人暮らしをしている事も知っていた。

世話になっているおじさん、ギル・グレアムの事や、その目的も」

「何でアコノさんが叔父さんの名前を知ってるん!？」

八神はやての思考が完全停止。
正確には、気絶してる。
目が回ってる。
くるくる。

「エヴァ、やりすぎ」

主にそれを言う資格は無い。

「ふむ、仕方ない。

チャチャマル、ちよつと出てこい。

あと、チャチャは1人、別荘からアコノの着替えを持って来い。そのままはやて担当だ」



「ん……？」

ベッドで横になっていた八神はやてが、目を覚ました。

傍にいるのは、チャチャマル。

お姉様と主は、居間で待機している。

「お目覚めですか？」

「……お姉さん、誰や？」

「私は、チャチャマルと申します。

エヴァ様の保護者を……」

「誰が保護者だこのポケロボ！」

お姉様、乱入。

ハリセンで一閃。

主も部屋に入ってきた。

「エヴァ、いきなり騒がしい」

「防衛の指揮担当なのですが、保護する者という表現は間違いでしょうか？」

「だからと言って、保護者という表現は誤解を招くだろう！

ああ、済まないはやて。私はこのポケロボに話がある。

悪いがアコノと話をしてくれ」

お姉様は、チャチャマルを連れて退室。
静かになった。

「……な、何やねん……………」

八神はやての目が点。

呆気にとられてる。

「彼女が、私が一番信頼してる相手。最初に見た通り、本でもある。

知り合ってから、私の日常はずいぶん賑やかになった」

「そ、そりゃあそうやろうな。

元気な人やったなあ」

八神はやてに、お姉様はあれが基本と思われた？

あんなお姉様は珍しいのに。

「はやてが持つその本にも人格がある。護る為の人もいる。

分かりやすく言えば、さっきの2人みたいな立場の人達。

本の主が、はやて。本が目覚めれば、きつと家族として守ってくれる」

「は、はあ……そうなんか？

本の雰囲気は確かに似とったけど……」

「だけど、はやての本は今、呪われている。

災いを運ぶのは、そのせい。

グレアムは、災いを防ぐために封印しようとしている。

エヴァと私は、本を呪いから解き放とうとしている。

お願い。はやての力を貸してほしい」

「お、お願い言われても、何もできへんよっ」

呪いとか言われてもさっぱりやし……」

「はやてが本の主だから、最終的にはやての協力が無いと、呪いから解き放てない。

それに、呪いから解き放つた後は、本の主として、再び呪いを掛けようとする人から本を守ってほしい。

そのために、魔法を知ってほしい。

そのために、主として永い時を生きてほしい。

身勝手な願いだと分かっている。

だけど。

私も魔法の本の主として、永い時を生きる。

本の意思や守護する人達も、共にいる。

体は、きつと治る。

必要な知識は、全て教える。

身を守る力も、生活に必要な全ても、用意できる。

どうか。私達と共に、生きてほしい」

「ア、アコノさん、頭をあげてな。

正直、色々急すぎて訳が分からへん。

けど、今日の昼にゆうとった、他人の不幸を防ぐために生きる、ちゆう

う話なんやな？」

八神はやては　こんらんしている？

でも、必要な点は理解してる。

「そう。あの本は、今は何も書かれていない状態。

そのまま放置すれば、はやては次の冬には命を落とす。

全てのページが埋まった時は、災厄の根源になつてしまう。

地球でそうなり、その災厄を止められなければ、地球が亡びる。

そして、どちらの場合でも他の場所で同じことを繰り返す。

私達は、永遠にそんな事が起きないように、災厄の根源とならないよ

うにすることを目指している」

「はあ……壮大過ぎてさっぱりやけど、アコノさんが真剣やつちゆうのはわかった。

それに、さっきの本の人も賑やかで楽しそうな人やったしな。

今はまださっぱりやけど、ちゃんと全部教えてな？」

「分かった。約束する」

八神はやての説得成功？

だけど、あえて言いたい。

共に生きてほしいと言っていましたでしたが、どう考えてもプロポーズです。本当にご馳走様でした。

無印編25話 闇と夜天と曙天と

主と八神はやての話が付いた後、八神はやてにお姉様、チャチャマル、実体具現化しているチャチャをきちんと紹介。

魔法、他の世界、管理局、原作、転生者の存在や、原作で語られたギル・グレアムの事情なども全て話した上で、偽装と闇の書対策への協力を要請。

八神はやては、それを受諾。

本格的な協力態勢の構築が決まった。

実体具現化しているチャチャが、八神家に通って補助と教育を担当する事になった。

名目は病院でヘルパー志望の子と知り合いになり、練習台になってほしいと頼まれた事。

呼称は他の2人に倣い八神家のチャチャ、普段の呼称はチャチャに決定。

安直言うのは禁則事項。

お姉様は、闇の書の調査へ。これで本格的な対策を取れるようになる。

主は永く付き合える友を得た。

私達は新しい料理の師匠を得た。

八神はやては、主やお姉様という友に加え、日常生活の補佐役と、魔法についての指導者を得た。

全員に利点。とても良い。

その後、主と八神はやてはお姉様、チャチャマル、八神家のチャチャの3人の補助の元、ゆっくりお風呂に入ったり、チャチャマルが揉まれたり。

パジャマパーティーと大はしやぎした八神はやても、今は主と共に夢の中。

「やてと、始めるぞ」

闇の書を前に、お姉様が静かに目を閉じる。

何があってもいい様にチャチャゼロとチャチャマルが侍り、私達も

全力で警戒と調査を行う体制を整えている。

例え暴走されても、周囲に被害を与えずに消し飛ばす準備と覚悟は完了。無限転生的な意味で、次の機会に期待する。

今はまだ八神はやてのリンカーコアも吞まれてない。最悪の事態になっても、死ぬことは無いはず。

「曙天の指令書から、夜天の魔導書へ。」

管制通信を開始。現在の状態を報告せよ」

初めて使う、管制通信。

やり方は間違っていない。

だけど、返ってくるのは雑音だらけの壊れた情報のみ。

何らかの意思疎通を行おうとしているのは分かる。

それ以上は読み取れない。

「クソッ、最悪の状態か？」

仕方ない、管制特権発動。現在の状況報告を命じる」

強制命令は……一応効果あり。

情報が帰ってきた。

随分と断片的。しぶしぶ提出した気配。

情報と様子を見た限りでは、防衛プログラムに周囲を巻き込み自滅する様な狂化処理が存在する可能性が濃厚。それが夜天の魔導書本体を包み込んでる。

起動前だから保護状態になっている可能性も。

情報を返したのは、狂化した防衛プログラム？

夜天ではない模様。

「……状況としては最悪か……封印解除で状態が変わらなければ、防衛プログラムを何とかしない限り外からは手出しが出来ないという事か？」

夜天も、この状態のままでは何処まで動けるか……」

暴走の気配は無いのが救い。

夜天自身の状態は不明。

防衛プログラムは管制特権命令に従ったものの、かなり不満そうな気配。

改悪の影響で強制力も低下していると考えた方が無難。
特権を使い過ぎると、逃亡または反逆の可能性も。

現状は、防衛プログラムが起動して主の登録と起動魔力の準備中？
チャチャゼロの起動後、お姉様の起動前に近い状態？

それなら、最初の雑音は誰？

「……原作で夜天が動けるのはいつだ？」

少なくとも、テレビ版では語られてない。

人の姿を見せたのは、闇の書完成後。

実体具現化が出来なくても、人格起動はもう少し早く可能らしい？

人格起動は400頁と主の承認が必要という情報はあった。

既に意識としては目覚めている可能性も高い模様。

お姉様の記憶にあった纏めサイトの情報。どこまでこの世界と一致するか不明。

封印解除と守護騎士システム起動がどう行われるかで判明するかも。

本来の夜天は、起動の為に蒐集する必要が無い。主からの魔力供給で充分だった。

改変内容がおかしい以上、夜天の情報は参考にならない。

下手に手を出せば暴走や転生してしまう可能性が高い。

不用意な手出しは禁物。

「夜天との接触は今後も試みるべきですが、最悪の事態に備える必要があります。」

原作最終戦に相当する戦いで強制停止を行い、その後の消滅イベントに相当する状況で修正を行う事も想定すべきです。そのための準備を開始する事を提案します」

珍しくまともな事を言ってるチャチャマルに賛同。

お姉様の手札を使わないためには、アルカンシエルは必須。

人柄的に、アースラへのアルカンシエル搭載が望ましい。

闇の書の名前が表に出る。その対策も必要。

ギル・グレアムとの協力？

ギル・グレアムとの交渉はクロノ・ハラオウンに仲介を頼む？

プレシア・テストロッサを救済？

闇の書の悲劇の終焉は、プレシア・テストロッサの過去の罪の相殺にも繋がる？

「夜天の状態が最悪だとすると、やはり管理局対策のための手札は必要だな……」

どちらにしても、アースラの連中には話を付ける必要があるか。しまったな、アースラへの接触をもう少し早めに設定しておくべきだった」

接触を引き延ばす口実的に、無難な日程だった。

フェイト・テストロッサの無茶までは、少し余裕があるはず。

現状でこちらから通信を行うには、手札を明かす必要がある。

魔法を使つてあちらからの接触を待つのが無難？

建前通り、転生者の対策を行う？

お姉様と主で別に動けば、ある程度は同時に出来る。

「そうだな……早めに接触すべきだろうな。」

グレアムの説得は……立場的にあまり情報を伝えたい相手ではないし、その状態で対処できると言っても説得力が無さすぎるか。現状では微妙だな。

となると、やはりプレシアか。プレシアを救済するなら、ジュエルシードの件を誤魔化すための手札が必要だな。内部時間を3か月程度確保できる、時間加速型の別荘があればいけるか？

使い捨てだと、今の材料で何処まで加速できる？」

再利用は考慮しない、惜しくない材料のみで構成。

広さはさほど必要じゃないけど、衣食住及び治療のための医療設備が必須。

資材の在庫を確認。

製作期間は5日間を想定。

現実の約27時間。余裕。

現実の約13時間半。何とか。

現実の約9時間。困難。

「そうか。余裕はある方がいい、27時間弱のものを早めに用意して

くれ。

それと、アースラの監視を少し強化。何かあつたら即対応するぞ」
了解。

ギル・グレアムは？

猫は定期的に現れる。

当面は警戒が必要。

「少し負担が大きいだろうが、偽装は現状維持で頼む。

はやてにも協力してもらおう事になるが、そっちは説得しよう」
頼まれた。

やっててよかった人数増強。

◆◆◆

夜も明け、主と八神はやても目を覚まし、チャチャマルと八神家の
チャチャの2人が用意した朝食を食べて。

今日は朝から、八神はやてのお勉強の時間。

「はあ、今は闇の書、元々は夜天の魔導書、なあ」

「改悪されて災厄をまき散らすうちに、闇の書と呼ばれるようになって
たようだ。

元々の役目は、魔法の技術を集める事だった。要するに資料本だ
な」

教師役は、今はお姉様。

八神家のチャチャが助手だけど、役に立つ用事があまり無い。

「それが、何で闇の書なんて呼ばれるようになってしまったん？」

「身を守るための大きな力と、魔法関連の蒐集能力がある。それらを
悪用されたのが主な原因だろうな。必要以上に主の言う事を受け入
れた事も要因なのだろうが……要するに、夜天が優しすぎたのだろ
う。

だからこそ、夜天を人として扱い、欲に流されない主が望ましい。

はやてには期待しているぞ?」

「ややなあ、私にも欲はあるよ?」

八神はやての欲？

母性を襲う右腕的な何か？

「身を滅ぼすような出世欲や自己顕示欲でない、一般的なレベルの欲なら大したことにはならんよ。」

それに、道を踏み外すようなら、私が張り倒してでも止めてやる」

「ぶれない過保護者おつ」

横で傍観していた主からのツツコミ。

でも、お姉様にはたまにツツコミが必要。

いくら守りたくても、過保護は良くない。

「いや、ここは譲れん。というか、アコノは変な茶茶を入れるな。」

それでだ、多くの改悪の中にも、まだマトモと言うか、役に立つものがある。

それが、守護騎士システムだ」

「守護騎士、か？ 凄そうな名前やなあ」

「名前だけはな。中身は、戦闘狂気味のお姉さん、おっとりどじっこのお姉さん、ツンデレ幼女、犬耳忠犬お兄さんだ」

随分な言い方。

しかも、ある程度感情が戻ってからの話。

シヤマルは当初、冷徹な参謀役のはず。

ヴィータもデレるまでに少々時間がかかる。

他の2人は、この説明であってる？

「うーん、なんか、あんま守護騎士って呼び名と説明が一致せえへんな」

「だが、主の命令を忠実に実行するプログラムの様なものとして作られている。」

戦力としては破格だ。ちよつとした軍隊程度なら、軽く蹴散らされるだろうな。

問題の頭の中身だが……そうだな、アコノが従順になった様な状態だと思ってもらっていい。

感情は無く、主の命令は絶対。人ではなく使い捨ての駒。

そういう風に作られ、使われてきた存在だ」

「家族やる？　なのにそれはあかんよ」

「だから、感情を思い出させてやってほしい。少なくとも私達が原作と呼んでいる物語では、次第に自分達の考えと感情で動くようになっていったからな。素地はあるはずだ。」

ただ、最初は前世の記憶があるアコノ以上に、感情というものが理解出来ない可能性がある。

慌てず、じっくり取り組んでほしい」

主が良い教材になってる。

主も否定してない。

むしろそれでいいと言いたげ。

「なるほどなあ。つまり、その意味では私がお母さん役ってことやね？」

「そうだな、その認識で大体あっている。但し、全ての面で母をする必要は無いぞ。生活面やらは存分に頼っていい。持ちつ持たれつと言うやつだな。」

対面は、闇の書の封印が解ける6月4日、午前0時のはずだ。これは物語での日時だから変化する可能性もあるが、大きくは変わらないと見ている」

「よーするに、それが覚醒イベントってやつやな。」

それが済めば、私も魔法を使えるんか？」

きつと無理。

リンカーコアが闇の書に取り込まれる。

蒐集された高町なのはの様な状態となると予想。

八神はやての魔法資質は殆ど闇の書の中だから詳しく検査されない限りばれないとぼっちゃや……じゃない、シグナムが言った。

お姉様と主の様な、魔力の結合は無い事を想定。

「いや、その時点で魔法の資質が闇の書に吞まれるはずだ。」

はやてが魔法を使えるようになるのは、闇の書が完成するか、夜天に戻すかした後になると予想している。

本当は、現時点で夜天に戻してやりたかったが……残念な結果になった。

この際だから、夜天に戻す事が期待出来るタイミングも説明しておくぞ。

次の期待は、封印解除後。守護騎士が現れてからだな。

この時点までなら、人に迷惑をかける事も無い。

その次は、闇の書の完成前に管制人格が起動できればその時だな。この状態に持ち込むために多くの人に協力を求めることになるが、この時点なら危険性が低いギリギリのラインだ。ただ、本当に早めに起動できるか分からんから、あまりあてには出来ん。

最後が、闇の書の完成直後。これ以上は後がない、最後の機会だ。

ここまで来ると、はやての意思の強さが頼りの綱渡りもする事になるし、巨大な力と力がぶつかり合う戦いにもなるだろう。管制人格の協力は得られるだろうが、一步間違えれば地球滅亡に直結する危険な状態だ」

「うわぁ……最後のは避けたいとこやなぁ」

私達も避けたい。

下手を打てば、地球の危機。

この水準の食文化は惜しい。

(お前達、本当に食い意地が張っているな！)

おいしさは正義。

これは譲らない。

「私もそれは同じだが、これを想定した準備もするつもりだ。

むしろ、これに主眼を置いて準備する。

準備が無駄になるのは構わんが、最悪の事態に手を打てないなどという失態を犯すつもりはない」

「それはそうやね。

ところで、闇の書って、何をするに完成するん？」

「魔法の素質を持つ者の、魔力や能力を分けてもらう事でページが埋まっていく。

全ページが埋まれば、闇の書の完成だ」

「分けてもらうって、危険は無いん？」

ありや、気付かれた？

名前や災厄の原因的に、危険な行為の可能性は予想出来る範囲かも。

「適度に分けてもらう分には、そこまでの危険は無い。過剰に奪ってしまえば、相手を殺してしまう可能性はあるがな。」

イメージとしては、献血が近いか。あれも血を抜き過ぎれば命に係わるし、一時的な血液の減少で眩暈がしたりする場合もあるだろう？」

「うーん、私の為に献血してもらうイメージになるん？」

「なんか悪い気がするなあ」

「実際の方法だが、可能なら守護騎士を犯罪者対策に参加させることを考えている。」

犯罪者から適度に奪う事で、魔法的に無力化できるからな。能力面だけを見れば、犯罪者を安全に捕らえられる戦力だ。

過去のシガラミがどの程度かによるが、協力の余地ぐらいはあるだろう」

情報を表に出さずに済めば、一番無難な手法。

犯罪者にならずに、それなりに多くの人から必要な物を確保可能。

お姉様や私達を蒐集させるわけにはいかない。最終戦でアルハザードの魔法を使われると色々ヤバイ。

「社会貢献を兼ねつつ、給料代わりに闇の書に必要な物を分けてもらう、って感じなん？」

「交渉や状況次第だが、それが一番無難だろうと思っている。」

「1人につき1回だけだから、どうしても頭数が必要になるんだ」

「そつかあ。それなら、私に出来る事はあるやろか？」

「主ってことは、色々やれることがありそうやけど」

「そうだな。まずは、魔法関係の知識を得ておく事。」

闇の書が起動した時もそうだが、夜天に戻せた、または闇の書が完成して魔法が使えるようになった時に戸惑わないためだな。

闇の書が完成した場合は暴走部分との戦いになるだろうから、最悪の場合は戦い、滅ぼす覚悟も必要になる可能性があることは覚えておいてくれ。

次に、守護騎士と良好な関係を築く事。

守護騎士は命令すれば従うだろうが、はやてはそんな関係を望まないだろうか？

最後に、日々を楽しく過ごす事だな。

楽しめなければ、永い時を生きることとは出来ん。私達と共に楽しむう。

ああ、もう一つあった。人としての夜天に名前を付けてやってくれ。

人の姿で共に在れるなら、夜天はともかく、魔導書や闇の書なんて呼び方はしたくないだろう？」

「そうか……うん、わかった。ありがとうな。」

なんか、面倒な部分は全部押し付けてそうや」

八神はやてが押し付けたのではなく、お姉様が勝手に持つて行った。

まさに、過保護者。

「なに、私にも目的があるからな。その一環だ」

「エヴァさんの目的って、何や？」

闇の書を夜天の魔導書に戻して、災厄を防ぐのとは違うんか？」

「その手段部分、前半だけが本来の目的だ。私は、夜天を助けてやりたいただけだからな。」

災厄云々は、私が目的を達成した後続く結果でしかない。

本としての私の名は曙天の指令書と言ってな。夜天は私の姉のよくな存在になる。

夜天の魔導書を直接見たのは初めてだし、言葉を交わしたことも無い。原作の知識として、こうなる事も知っていたが……やはり、何とかしてやりたくてな」

「そうなんか……うん、やっぱ私の選択は間違つてへんな。」

エヴァさんは優しい人や。悪いようにはさせえへん」

「だけど、驚きの過保護さ。」

普段は自由にさせてくれるけど、いざとなったら自由は無い可能性が高い。

その代り、安全だけは保障する」

「アコノ、私を一体なんだと思っている？」
「過保護者」

無印編26話 闇と曙天とアースラと

お昼を少し過ぎた頃。ある程度の説明を終えたお姉様は、八神宅を出た。

今からの目的であるアースラへの接触のため、ビルの屋上でカートリッジをロード、探知魔法の為に白色の魔法陣を展開。

そのまま、しばらくお待ちください。

その頃、アースラの艦内では。

「あの子……あんなところで魔法を？」

「あ、エヴァちゃん」

「どうしてエヴァがあんなことを……？」

お姉様の姿をエイミー・リミエツタが発見。

司令部で待機していた高町なのはも誰なのかに気付き、ユーノ・スクライアは頭の上に疑問符を浮かべてる。

「何か探してるみたいだけど、何をしてるんだろう……あ、手を振ってる」

お姉様の様子は、エイミー・リミエツタの表現で正しい。

映像のお姉様は、確かにこちらを見て手を振っているように見える。

明らかに、サーチャーに気付いてる。

お姉様としてはサーチャーの存在を確認した上での行動だけど。魔法陣は接触するための演技。

「私達に用事でもあるのかしら？」

原作知識というもので知っているでしょうけれど、クロノと直接の面識はないはずだし……

「そうね、なのはさん。迎えに行ってもらえるかしら？」

「はい、行ってきますー！」



というわけで、アースラに乗り込んだお姉様。

今は、勘違い和風の部屋で、重要そうな人達を前にしてる。

お姉様の向かいに座っているのは、リンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン。

ちよつと離れたところに、高町なのはとユーノ・スクライアが座っている。

この2人は、傍観の立場。

関係者として話を聞く事はよいけど、必要以上の口出しは駄目という事に。

全員が何らかの形でお互いを知ってるため、自己紹介は簡単に終了。

その後で、思考支援を開始。お姉様は本題に切り込んだ。

「つまり、ジュエルシードの封印に協力したい、という事ね？」

「あまり乗り気ではなかったようだが、何か状況が変わったのか？」

リンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンは、不思議そう。

お姉様の姿勢が大きく変わったことに戸惑い？

「ああ、少々厄介な事になっていてな。

今はまだ管理局に対しては何も言えないが、ジュエルシードとは別のロストログアについて、必要な環境を整える必要に迫られてな。

そのために、ジュエルシードの封印に協力したい」

「協力は有り難いだけれど……必要な環境と言うのは、私達の事かしら？」

リンディ・ハラオウンの表情が少し硬くなった。

時空管理局を便利道具として使われる事を警戒してる？

「詳しく話したいところだが、ここからの説明はオフレコとしてもらっていいか？」

あまりにも荒唐無稽過ぎて信じてもらえないかも知れないが、真偽に関わらず、これが広まるだけで厄介な事態になる内容だ」

「それだけ重要な内容を含んでいる、という事ね。

事態が終息、もしくは公表が必要になった際は報告してもいいのかしら？」

話の内容が闇の書についてだと予想は出来るはず。

その上で、提督としての任務をどこまで遂行する事を認める気があるのか、重要な点の確認。

リンディ・ハラオウンは、きちんと弁えてる。

「いや、それも困る様な内容も含む。

もちろん公表して良いと思える部分は必要に応じて公表してくれて構わないが、全面的に記録に残る事は避けたい」

「そう、分かったわ。

クロノ、記録を停止して。レイジングハートも記録しないでおいてくれないかしら？」

「了解です、艦長」

『All right, lady』

「さてと、これでいいかしら？」

「どこまでするんだ、納得できる話なんだろうね？」

さあ話してみろと言わんばかりのリンディ・ハラオウン。

クロノ・ハラオウンは、記録を禁止されたのが不満らしい。

「当然だ。さて、この前の千晴やチクアーブとの話を全て聞いていた前提で話を進めるぞ」

「……やっぱり気付いていたのか」

クロノ・ハラオウンの口元が引き攣った。

ポーカーフェイスを保ててない。

「あの程度の隠蔽は気付けるさ。

と言うわけで、闇の書の現状と対策についての話だ」

「なるほど、まだ公表したくないわけだ」

「貴女達の言う、原作にも関係するという事ね？」

「ああ、大いに関係する。

まずは、闇の書の現状についてだ。状況としては、ようやく主に会って話をしてきたところだ。

主の現状も含めて、私達の関与以外は原作と変わらん様だな。闇の書の内容も確認したし、解決のために協力してもらおう約束もしてきたから、人間関係についての問題は発生していない」

「人間関係についての、ね。

技術的な問題はあるという事かしら?」

「それについてはまだ調査中だが、現時点での対処は難しそうだという事は分かっている。」

少なくとも闇の書は起動するだろうし、闇の書と戦う事になる最悪の事態を回避できる保証も出来ん。

そうになると、どうしても話が大きくなる可能性を踏まえて動く必要があるからな。私が殴り込みに行かなくてもいいように、管理局の暴走を抑える必要があるだろう?」

「つまり、私達に裏で動いている提督との橋渡しをしてほしいという事かしら。」

動かなくてよい、という状況でもない様だし」

困り顔のリンデイ・ハラオウンの予想はちよつと惜しい。

現状で対策が確定出来るなら、それが第1候補になった。

「いや、まだ説得できるだけの材料が揃っていないから、現時点で交渉しても合意するのは難しいだろう。それに、提督の説得はそこまで急がなくてもいいはずだ。」

とりあえずの判断材料として、原作の流れを簡単に説明するぞ。

まず、封印の解除は来月だ。この時点で守護騎士が現れる。

闇の書の主は説明を聞いて蒐集を禁止し、守護騎士を家族として迎え入れる」

「蒐集の禁止だつて!?!」

「つまり、闇の書を完成させない事を決める、という事になるわね。」

家族という事は、部下や駒として扱う気が無いという事だし……」

クロノ・ハラオウンが驚愕の表情。

リンデイ・ハラオウンは、落ち着いて内容を理解してる。

この辺は、きつとねん……経験の差。

「守護騎士達は、闇の書が完成すると主が大いなる力を得る」としか知らないらしい。説明も当然その範囲だから、主は大いなる力とやらを得る機会を放棄するという事だな。

その後数か月は、平穏が続く。守護騎士達も平和の中で穏やかな時を過ごす期間だ。

そうするうちに主が倒れ、闇の書の侵食によりその命が失われているという事に守護騎士達が気付く」

「闇の書の侵食……主をも対象にするという事か」

クロノ・ハラオウンが、内容に付いてきた。

衝撃からだいぶ立ち直った模様。

「それを知った守護騎士達は、主が大いなる力を得れば命を失うことは無いだろうと判断し、主に秘密で蒐集を開始する。」

これが闇の書事件の実際的な始まりだ。

確か10月頃のはずで、まだ闇の書の存在が知られていないから魔導師連続襲撃事件扱いだがな。管理局の局員から魔力を持つ野生生物まで形振り構わずだから、かなり被害が大きいはずだ」

「つまり、闇の書の主は何も知らないまま命を脅かされて、更に事件の首謀者に仕立て上げられるという事になるわね。」

守護騎士達も、行動はともかく、動機は主の命を助けるため……」

「闇の書は地球にある。当然、蒐集行為は地球や近い世界で行われる。」

その過程でなのはが襲撃されて撃墜、最終的に蒐集される。これが12月の初めだ」

「わ、私が!？」

ひよつとして、死んじやうの……?」

今度は高町なのはがびつくり。

襲撃、撃墜ときたら、その先くらいは想像できる模様。

でも、3作目でS+だと言われていた事を忘れてる。

「この時の戦闘はまだ詳しく言えない要素が残っているが、結果だけを言えばこの様な表現になるだけだ。しばらく魔法が使えなくなるが、死にはしない。」

現場は地球で、なのは……アースラ関連の人物が関係した事もあるのだろうか。この直後に、アースラが事件の担当になる。

その時はアースラが整備中で、地球に一時的な司令部を置く部屋を用意する事になる。アースラにアルカンシエルを搭載するのも、確かこの時だな。

闇の書の主がすずかと出会い、友人関係になるのもこの頃だ」

「すずかちゃんか!？」

「ま、巻き込まれちゃうの……?」

「闇の書の主は襲撃や蒐集について関知していないし、魔法も使えないんだ。それに、原作のすずかとアリサは魔法についてまだ何も知らないから、普通に友人となるだけだな。もう少し先で主となのはも知り合うが、そのための橋渡しの役割だ。」

ユーノが無限書庫に行つて闇の書の事を調べるのも、もう少し後だったか……」

「僕が無限書庫に、ですか!？」

そして元小動物フェレットがびつくり。

悪い話じゃないのに。

「そうだ。確か、この際にリーゼ姉妹の協力があるはずだ。」

弟子だったクロノは良く知っている人物だと思うが、間違いないか?」

「ああ、確かに良く知っている。ここでその伝手を使うのか」

クロノ・ハラオウンが頷いてる。

納得出来る人脈だった模様。

むしろ、原作のどこで師匠だと語られていたか気になってた?」

「ユーノはそのまま無限書庫の司書になるはずだ。歴史好きとしては願つても無い状況だろう? つと、話が逸れたな。」

その間も、守護騎士達との戦いがあったり、守護騎士達を助ける仮面の男が出現したり、ユーノが闇の書に関する歴史を見付けたりと色々あるが、詳細は長くなるから割愛するぞ。

最終的に、裏で動いていた提督の部下の手により闇の書は守護騎士達を蒐集して完成、守護騎士は全員消滅する。この際、この部下はなのはに変装しているな。

それまで何も知らされていなかった闇の書の主は、家族を友人……偽物だがなのはに奪われて絶望し、闇の書は主を護る為に主を内部に取り込む」

「闇の書の主も、被害者なのか……これが、闇の書の完成まで主に罪が無い理由か……!」

クロノ・ハラオウンの怒りが有頂天。

(大事な場面でふざけるな！)

怒られた。

ごめんなさい。

ネタ自重。

「クロノが偽なのはを取り押さえ、裏で動いていた提督と対峙する。この時の話は先日聞いていただろうから今は省略するぞ。

同時に闇の書の防衛プログラムが実体化、本物のなのはと戦闘になる。

この戦闘の間に闇の書の管制人格と出会った闇の書の主は、夢の世界で守られる事を拒否。管制人格と協力して防衛プログラムを切り離す事に成功し、戦闘中なのはに防衛プログラムの強制停止を依頼する。この戦闘になのはが勝利して防衛プログラムの強制停止に成功。闇の書の主が現実に戻り、守護騎士達も復活する。

その後、本格的な暴走を始めた防衛プログラム……闇の書の闇と呼ばれていたが、これを、闇の書を持つ闇の書の主や守護騎士達も含む全主力メンバーで攻撃、最終的にそのコアを宇宙まで転送してアルカシエルで消滅させる。

これで、壊滅的な被害は出ずに戦闘は終了だ。確か、なのはと防衛プログラムの戦闘で被害が出た程度だな」

「闇の書の闇を、闇の書とその主が破壊、ね……」

「だけど、これでめでたし、とはいかないのでしょうか？」

リンディ・ハラオウンは、犠牲者が気になってる？

確かに、このままめでたしとは終わらない。

「その後、闇の書の管制人格は守護騎士も分離。狂った防衛プログラムが再生して主を殺してしまう前に自らを破壊するよう依頼する。そして、家族の実質的な自殺を悲しみ止めさせようとする主を守護騎士達に託し、闇の書と共に消滅。この時に消滅の為の儀式魔法を使うのは、なのは。お前だ。

これで闇の書は永遠に失われ、悲劇も終焉を迎えるが、友の手で家族を失う闇の書の主や、友人の家族を消滅させるなのはの心に傷を残

す事になる。

省いた点も多いが、これが原作の闇の書事件の大まかなあらすじだ」

「そんな……悲しすぎるよ………」

「ロストログアの事件は、いつも、そうだ……こんなはずじゃない事ばかりだよ……！」

高町なのはの悲しみと、クロノ・ハラオウンの怒り。

誘導はうまく行った模様。

「だけど、不可解な点は残っているわ。

恐らく……それが、エヴァさんが隠していた点で、核心ね？」

リンデイ・ハラオウンは、きちんと現実を見てる。

おば……お姉さん、すてきー。

「ああ。予想は出来ているだろうが、はつきり言っておくぞ。

裏で動いている提督は、ギル・グレアム。

クロノが取り押さえる提督の部下は、使い魔のリーゼ姉妹。

そして、闇の書の主は八神はやて……既になのはの友達だが、現在

ギル・グレアムの監視下で孤独な生活を強いられている少女だ」

「何だって!？」

「はやてちゃんか!? そ、それじゃあ家族、つて……」

クロノ・ハラオウンと高町なのはが煩い。

ユーノ・スクライア

元小動物は、さつきから絶句中。とても静か。

「はやては、今は一人暮らした。9歳に満たない少女が、だぞ？」

日本の常識では考えられん。誰か、つまりグレアムの介入があつての、この状況だ。

はやての足が不自由なのは、闇の書に侵食されているせいだ。魔法抜きでは原因を突き止めることが出来ないから、当然治療法も見付からない。希望の見えない、辛い時間を過ごしてきただろうな。

そんな少女の前に現れた、自分を大切にしてくれる人達。大切にするのは当然で、失った時の悲しみも当然大きいだろう」

「グレアム提督がそんな事をする訳が!」

「クロノはもう少し落ち着いた方が良い。」

グレアムは天涯孤独になったはやてを、闇の書の完成直後に永久凍結で封印するために隔離状態にしている。孤独な人物であれば悲しむ人も少ないという理由でな。

リーゼアリアが認識阻害やらのメンテナンスと近況の確認に來ている事も確認済みだ。現実を見る限り、原作と同様の状況としか思えない。

リーゼ姉妹が怪しい男に変装して、闇の書を完成させるために守護騎士に手を貸すのもこの目的のためだ。封印が可能な条件は聞いていた通りだが、はやての状態は悪化していくんだ。はやてが死ぬ前に封印可能な状態に持ち込む必要がある以上、他に手が無いと言えるな。

闇の書との因縁が深い者同士、賛成は出来ないだろうが、理解が出來ないわけでもないだろう?」

「そうね、確かに不可解と言うほどではないわね。」

エヴァさんが助けたいと言っていたのは、最後に消滅すると言う闇の書の管制人格という認識でいいのね?」

リンディ・ハラオウンは、自分の疑問の解決を優先?

ギル・グレアムの関与や行動自体は、自分達で可能性を考えていた事もあってか、あまり疑っていない模様。

「まあ、そういう事だな。」

あいつは元々ただの資料本で、魔法の技術やらの調査をしていただけだ。

少なくとも、好き好んで災厄を撒き散らすような阿呆ではない。この事は、最終的に自身の消滅を願う事からもわかるだろう?」

「なるほど、そういう事だったのね。」

世話になったというのは、闇の書が暴走するようになる前の話、という事でいいのかしら?」

「そうだな。」

闇の書は、本来は夜天の魔導書といってな。私、曙天の指令書の姉のような存在だ。」

夜天が各地で魔法の情報を集め、その情報を私が管理する。そんな関係だな。私が今使っている魔法は、夜天が正常だった頃に集めてくれていた資料に依存しているんだ。

色々調べてくれていたのは有り難いが、魔改造されて闇堕ちするなんてどんな悪い男に騙されたのやら……

……ん？ 何だその間抜け面は」

高町なのはは内容を理解していない様で、頭の周りに大量の疑問符を浮かべてる。

他の3人は、啞然としてる。

「闇の書の本当の名前？

姉妹？

過去の魔法の資料？

魔改造されて闇堕ち？

男に騙された？

「突っ込み所が多過ぎて手に負えない。

きつと、そんな感じ。

「ええと、エヴァさんは、つまり、闇の書……いえ、夜天の魔導書と………」

リンデイ・ハラウンが再起動。

流石提督、復帰が早い。

「製作者は同じ人物のはずだぞ？

少なくとも、私はそう聞いている。

夜天とは直接会ったことも、言葉を交わしたことも無いがな」

「そ、そう……」

それでも、戸惑いは隠せてない。

おば……お姉さん、残念！

無印編27話 闇と暗部と咎人と

「まあ、そういうわけだ。私が助けたい相手と理由、それに、公表出来ない理由については理解してもらえたか？」

「ついでに、私が表に立つわけにいかない事も理解してもらえているとありがたいが」

今は、みんなリンディ・ハラオウンからお茶を貰って休息中。

もちろん砂糖やミルクは入れないけど、やっぱりリンディ・ハラオウンは残念そう。

お姉様も一緒に一息入れている。思考支援も小休止中。

「ええ、充分すぎるほどに、ね。」

「だけど、まだ秘密はあるでしょう?」

「秘密?」

「いっぱいあり過ぎて、どれの事やら。」

「私の生もそれなりに長いからな。秘密と言うか、言っていない事は多いと思うが……何か気になる事でもあったか?」

「そうね、例えば、エヴァさんは主殺しの書でしょう?」

「見当を付けられてた?」

「この期間で辿り着くとは、恐るべしアースラ陣営。」

「主殺しの書……すまんが、それは何だ?」

「エヴァさんは眠っていて知らないかもしれないけれど、魔力の多い魔導師の元に現れて、衰弱で死亡させた後は姿を消す本があるのよ。」

「第3級指定のロストログアなのだけれど、心当たりは無いかしら?」

「表情的に、完璧にばれてーる。」

「主の魔力の多さも予想されてるかも?」

「でも、お姉様は動揺しちゃいけない。」

「ふむ……私が目覚めるまで主候補に負荷をかけるのは、アコノを見ても間違いなさそうだしな。」

「過去の主候補を殺してきた可能性は、否定できんか」

「意図的に殺してきたわけじゃないという事かしら?」

「眠っている間も意図的に動けるような、びっくり魔導具じゃないぞ私は。」

「というか、それは眠っていると云わん」

「ふふ、そうね。それなら、今後は主殺しの書の犠牲者は出ないと見ていいのかしら？」

「それが本当に私を指すなら、そうなるだろうな。」

「私が殺す可能性は、主にする時と、主候補にかける負荷……という事になるのか？ 少なくとも、アコノがいる限りはそんな状態にはならんだろう。」

「というか、私が主殺しの書だと言うのは決定事項なのか？」

「可能性は高いと思ってるわよ。でも、原因がはつきりして、今後再発の可能性が低いという事であれば、特に問題は無いわ。」

表に立つわけにいかないと言うのは、闇の書……いえ、夜天の魔導書と言った方がいいのかしら。その妹と知られたら闇の書と同様に思われる可能性がある、という事を心配してでしょう？」

自分のお茶にミルクを入れながら、リンディ・ハラオウンは話を進める。

通称リンディ茶。実体は砂糖たっぷり緑茶オレ。

試した従者曰く、抹茶アイスに近いとのこと。

但し劇甘。糖尿病を気にしない甘党の人以外にはお勧め出来ない。

「そうだな。妹が姉を助けると言う美談に出来るのは、成功した事を示した後だ。」

それまでに公表した場合は、信用できない、早く破壊しろ、といった声の方が大きいだろうな」

「だけど、私達にそれを言ってしまったっていいのかしら？」

闇の書と同様の能力を持つと言っているのと同じだと思うのだけれど」

「何だか話が真面目な方向に？」

「休息が終わっちゃおう。」

「念のために、思考支援再開。」

「成功すればどうせバレル話だからな。それに、夜天を何とか出来る

技術を持つ理由や、助けたい理由を簡単に説明出来るだろう？ 変に取り繕って、信じられないよりはマシだ。

だが、破壊に特化する方向で改悪された闇の書と同じと思われるのは迷惑だな。

そもそも、国の内外を飛び回っていた夜天と違い、私は研究所に引き籠っていた研究者だ。それなりに身を守る能力はあるが、あれはあれでボケだしなあ……能力も防御や支援寄りだから、暴れるには向かんし」

あれって、チャチャマル？

確かに、お姉様はボケロボ呼ばわりしてた。

「あれというのは、闇の書の守護騎士や、暴走するという防衛プログラムの様なものかしら？」

得手不得手はあるにしても、行動や状態次第で大きな脅威となりそうだけれど」

「守る役目を持つと言う意味ではそれらと似たようなものだが、妙な改造はされていない。無意味に暴力を振りまいたり、暴走したりという事は無いはずだ。

「だがなあ……私を強制転移させて顔面から落とす上に、追い打ちをかけるように正座で落ちてくるのはどうなんだと」

「そ、それって、チャチャマルさん!？」

高町なのはがびっくりした表情で叫んでる。

ユーノ・スクライアは、ああ、あの時の、と納得……しかけたのに、驚きの表情へ。

「そうだ。私の一部と言っただろう？」

まあ、ボケではあるが防御や補助に関しては一級品だ。魔力さえ確保できれば、なのはの全力砲撃でも軽く防ぐぞ。そういえば、リーゼアリアの転移を追跡して本局の位置特定もしていたな。

ああ、気付かれていないし、本局に侵入したりもしていないから、トラブルになる要素は無い。そこは安心してもらっていい」

「そ、そうなの……」

リンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンの表情が、微妙に引き

攣ってる。

既に本局殴り込みに必要な情報を持っている事を明示された衝撃……だけ？

リーゼアリアに気付かれていない事も衝撃的かも。

「だけど、ジュエルシードの封印に協力する理由については、よく分からないのだけれど……」

私達の協力が欲しいから、という事でいいのかしら？」

リンデイ・ハラオウンの質問というか、話題転換？

確かに、そこに繋がる理由は説明してない。

「それもある。少なくとも、余計な手出しをする阿呆が来ることは避けたいからな。

お前達が担当になれば不用意な増援は来ないだろうが、その為にはジュエルシードが邪魔だ。

だが、一番の理由は、優秀な技術者を1人助けたい事だ。

具体的には、プレシア・テスタロッサの事なんだが」

「何だつて!?! ジュエルシードの黒幕だと言っていた人物を保護しようと言うのか!?!」

クロノ・ハラオウンの声が、さつきから大きい。

叫び過ぎ。

「だから、クロノは落ち着けと言っているだろう。執務官ともあろう者がいちいち動揺するな。肩書を持っている以上、若さは言い訳にならないぞ。

そもそもプレシアについては、かなり疑問があるんだ。お前達は、何処まで調べられた？」

「くっ……分かった、判明している範囲は答えよう。

26年前は中央技術開発局で第3局長だった人物だ。

当時、彼女が個人で開発していた次元航行エネルギー駆動炉、ヒュードラで違法な材料を使用して実験を行い、事故を起こしている。その事故の際に中規模次元震を起こしたことを受けて、中央から地方に放逐された。

辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていたが、行方不明に

なつてそれつきりだ。

事故については、材料の違法性等について様々な異論もあつたようだが……分かつている事は、この程度だ」

映画版と違い、民間企業にいたわけではない模様。

テレビ版の状態で確定、現時点では本局の情報を得ていない段階。問い合わせしたかも不明。機密を扱う部屋は相応の対策がされている。

3人がその部屋にいる時間は長い。その間の事は把握出来てない。アースラのメインシステム中枢に侵入出来てないのがもどかしい。「なるほど、エイミィが調べた範囲までか。」

本局への調査依頼をしていないか、まだ調査結果が来ていない段階という事だな」

「原作とやらで、そこも知られているのか……」

クロノ・ハラオウンの想像で正解。

調査依頼はしたか、するつもりだった雰囲気。

予想していたより知られている事が多い事に焦っている感じ？

物語としては重要な要素。

「この先に本局からの情報で判明する事を言っておくぞ。後で照合してみるといい。」

プレシアはこの事故の際に、当時5歳になる実の娘、アリシアを亡くしている。

そして、プレシアが最後に行っていた研究は、使い魔を超える人造生命の生成。そして、死者蘇生だ」

「つまり、プレシア女史は娘を蘇らせようとしている、という事になるけれど……ジュエルシードでそれが可能なかしら？」

お姉様の情報と現在の状況を考えると、当然思い付く関連性。

可能かどうかは、ジュエルシードの性能次第。

ぶっちゃけて言えば、普通なら無理。

「不可能でしょう。過去の歴史を見ても、死者の蘇生に成功した事例はありません。」

ロストログアが多く作られた時代ですら、そうなんです」

だけど、クロノ・ハラオウンの常識は、この場では微妙に残念。
お姉様は普通じゃない。

でも、それを言う必要は無い。

「恐らく、プレシアもそう思ったのだろう。」

これをここで言うのは少々心苦しいが……あえて、今言っておく。

プレシアの人造生命生成技術には、開発コードが付けられていた。

その名は、プロジェクトF。A. T. E。フェイトと言う名の少女

はこの技術で作られた記憶転写型のクローンで、オリジナルはアリス

ア。つまり、プレシアの亡くなった娘だ」

「な、何だっ!?」

なんだってー。

クロノ・ハラオウンがやっぱりうるさい。

「クロノは、驚き過ぎだ。さつきから反応が同じになっているぞ?」

「驚かない方がどうかしている!」

それが本当なら、あの少女は存在自体があってはならないものにな

りかねないんだ!!」

わお、フェイト・テストロッサを全否定?

原作では可愛い妹になるのに。

不憫な。

「管理局が守るべき法や倫理の問題は、私は知らん。

法そのものも知らないし、管理局の倫理観や事後処理の方法も分か

らんから、フェイトがどの様な扱いになるかはお前達次第だ。

とにかく、プレシアは娘との生活を取り戻すために、娘のクローン

を作った。

だが、それはプレシアにとっては失敗作だった」

「失敗作? あんなに可愛い御嬢さんなの!?」

リンディ・ハラオウンは、ちゃんとフェイト・テストロッサを人と

して扱ってる。

子を持つ身としては普通の判断?

「プレシアにとっては、だ。」

アリスアとは、魔法資質が違う。利き腕が違う。性格が違う。

娘とは思えなかったようだな。娘の記憶を持つだけに、嫌悪感が勝っていた様だ。

原作ではプレシアに『良く出来たお人形』と言われるし、相当酷い暴力も振るわれてもいる。

遠目で確認しただけだが……このフェイトに鞭で打たれたような傷が見えた事もある」

「自分で作っておきながら、何て事を……」

「そうなの……随分と酷い話ね。」

「だけど、どうしてそんなフェイトさんがジュエルシードを集める事になったのかしら？」

クロノ・ハラオウンは絶句。

リンデイ・ハラオウンは、それでも思考を止めない。

提督の肩書は伊達じゃない。

「フェイトの理由は、単純だ。」

母であるプレシアが求めているから。

母であるプレシアに喜んでほしいから。

目的や用途すら聞かされないうまま、母の笑顔を見たい一心で駆け回っている」

「健気な子ね。プレシア女史は、何も思っていないのかしら？」

「そこは語られていない部分だ。色々考える事は出来るが、憶測に過ぎん。」

さて、ここからは特に重要な情報になる。よく聞いておけよ？

現在のプレシアの目的は、ジュエルシードを使ってアルハザードへ行く事だ。

虚数空間の先にあると確信しているようだな」

「アルハザードだって!？」

「忘れられし都と、そこに眠る秘術。存在するかどうかすら曖昧な、ただの伝説と言われているけれど」

「やっぱり、クロノ・ハラオウンはうるさい。」

リンデイ・ハラオウンの言った内容は、テレビ版でも呟いてた。でも終盤のはず。

「つまり、アルハザードに眠ると言われている秘術に継るしか方法が無い、おとぎ話のような話を信じるしかない、覚悟を決めた上での行動だという事になる」

「そういう事なの……」

エヴァさんはアルハザードについて何か知っているのかしら？」

「そうだな……虚数空間に落ちて、滅んだのは事実だ。」

その意味では、プレシアの行動も全く理解が出来ないというわけではない」

「まさか、アルハザードは実在したのか!？」

率直に聞くが……もし、プレシアがアルハザードに辿り着けたとしたら。

その時は、娘を取り戻すことは可能なのか？」

クロノ・ハラウンが現実に復帰？

おとぎ話の世界へようこそ？

「不可能だろう。虚数空間の中だぞ？」

仮に蘇生魔法があったとしても、使うことは出来んだろう。

大体、防御魔法も飛行魔法も使えない場所に、どうやって行こうと言うんだ。

それとも、今は虚数空間でもそれなりに魔法が使える様になっているのか？

私の過去や原作では、普通は出来ないとされていたんだが」

「い、いや、虚数空間はあらゆる魔法が一切発動しなくなる。」

落ちてしまえば、重力の底まで落下するはずだ」

「やはり、その認識でいいのか。」

ちなみに虚数空間は、物理的には宇宙空間に近いはずだ。

空気も水も無いから、魔法で身を守る気であるなら確実に死ぬぞ」

お姉様の様に宇宙空間でも問題ない体でない限り、魔法に頼らない宇宙服や宇宙船が必須。

時の庭園や居住区画がそれを想定した構造には見えない。

アルハザードは、星ごと落ちたから空気があっただけ。惑星と言う名の宇宙船相当。

対虚数空間用結界があれば魔法で保護も可能だけど、お姉様は公開してない。空間生成魔法の一部として組み込まれているだけ。

誰かが作ったか、空間生成魔法の解析に成功して抽出されているなら、クロノ・ハラオウンの認識がずれてるといいう事に。

「そ、そうなのか……プレシアは、どうしてそんな手段に……」

クロノ・ハラオウンが、おとぎ話の世界から追い出された。

今度こそ現実に復帰？

「そこも、私が疑問に思っている点だ。

疑問に思う点は色々ある。ミッドチルダの常識は知らんから、私の疑問がそちらの常識で解決するなら教えてくれ。

まずは、最初の駆動炉の事故についてだ。

次元航行エネルギー駆動炉など、個人で開発するものなのか？

そもそも、技術開発局の局長を務めるような人物だ。駆動炉の開発をするなら、開発局としてきちんとした体制を整えられる地位と実力を持っているだろうし、そうすべきだと思うが……大魔導師と言われる人物やミッドチルダなら違うのか？」

「い、いや……普通は大きな開発チームを組み、何年もの時間をかけて行うはずだ」

「どう考えても、開発の動機も、資金の出所も思い付かん。

誰か強力で断りにくいスポンサーに依頼されたとかでもない限りな？」

「確かに、そんな大規模な開発は個人で出せる資金で出来るものじゃない……」

つまり、プレシアには何か後ろ盾がいた、と考えているのか？」

普通はクロノ・ハラオウンの様に考える。

むしろ、気付かない方がおかしい。

でも、ここは疑惑のまま放置。

「次だ。事故で亡くした娘を蘇らせようとする事は理解も同情も出来るんだが……技術の出所がおかしい。

これは3作目の設定になるはずだが、ジエイル・スカリエツティは既に指名手配されているか？」

「ジェイル・スカリエツティだっけ？」

広域指名手配されている、次元犯罪者のはずだ。

指名手配者のリストで見た覚えがある。罪状は、確か……」
おお、名前を知ってた。

というか、やっぱり3作目も含んでいる模様。

この時点で知っているのは、クロノ・ハラオウンの記憶力が優秀なのか、ジェイル・スカリエツティが有名なのか。

「世界規模のテロリズムや違法医学、それにロストログア関連といったところか？」

「そう、それだ。」

……随分と詳しいんだね」

「重要なポイントでな。特に、違法医学がポイントだ。」

スカリエツティ自身は、主に生命操作や生体改造を得意としている科学者だ。

そして、プロジェクトF・A・T・Eの基礎を作ったのは、スカリエツティらしい」

「つまり……プレシアは、スカリエツティと繋がっている、と言いたいのか？」

まさか、技術開発局の局長が、背任行為を行っていたと……」

駆動炉開発と併せると、分かりやすい結論。

でも、これだけで終わらせるわけがない。

「いや、これだけならそう見えるが、まだ先がある。」

スカリエツティにも後ろ盾がいる。実際に動いているのはレジラス・ゲイズだ。

ミッドチルダの首都防衛隊の長官だったか？」

「地上の法の守護者だぞ!？」

優秀な人物で、人望も厚い。犯罪者との関係なんて、あつてはならない事だ!」

優秀であるほど裏があるなんて、良くある話。

むしろ、裏を使いこなせるからこそ優秀と言える場合もある。

「だが、闇の書事件のはやてを犯罪者と呼ぶのがレジラスだ。事件の

経緯はさつき話した通りだが、いくら情報が制限されていると言っても、あれで犯罪者と呼ぶのは納得できるか？ 自身が後ろめたい事をしているから過剰反応しているようにしか見えん。

それに、レジアスも駒の一つだ。

スカリエッティは、管理局の最高評議会がアルハザードの技術を使つて作った、人造人間のようなものらしい。

開発コードは無^{アンリミテッドデザイン}限の欲望。

コードネーム通り、底無しの探求欲と、底が抜けて倫理観が無くなつた狂人が出来上がったわけだが」

「最高評議会、が……」

次元世界の平和の守護者が、どうしてそんな事を……」

執務官のクロノ・ハラオウンには、そう簡単には信じられない話？ 時空管理局への信頼が、判断の邪魔をする可能性も。

その信頼を少し揺らがせておきたい。

「人手不足の管理局。最高評議会やレジアスの支援で戦闘機人を作り出したスカリエッティ。スカリエッティの研究を引き継いで結果的に人造魔導師を生み出したプレシア。

意外に簡単な構図に思えるぞ？」

「つまり……管理局が、最高評議会が！ 違法研究で現状の打破を狙っているという事か!?!」

原作ではもつとひどいけど、これ以上の逆撫では止めるべき。

協力者にするなら、貶し過ぎるのも良くない。

「真実にいつか自分達で辿り着いてほしい。私達も確認してないし。最高評議会の意図までは分からんが、そう捉えるのが自然だと思わんか？」

「禁断の果実ではあるが、成功すれば効果はありそうだからな」

「……仮にそうだとして……プレシアが違法な研究を行っていた事に変わりは無い。

利己的な動機だった可能性が消えたわけでも無いだろう？」

「おや？ 現実として受け入れた？」

「受け流した、かもしれない。」

プレシア・テスタロッサに罪を被せるのは、クロノ・ハラオウンらしくない。

「いや、私が疑問に思うのは、正にそこだ。

個人で開発していた、個人で使う必要の無い新型駆動炉。

娘を事故で亡くした後、都合よく現れるクローン技術。

研究に行き詰った頃に現れた、ジュエルシード。

ジュエルシードはユーノが発見して、管理局と相談の上で、管理局へ輸送していたと聞いたが、どうしてプレシアがそれを知っている？」

「どういう……事だ………?」

あれー?

動揺する執務官。

ここまでくれば、想像しやすいはずなのに。

「そういえば、ユーノ。

ジュエルシードを発掘してから事故で散らばるまでの期間は、どれくらいあつた？」

数か月か? 1年か?」

「いえ、3週間ちよつとです。

発掘直後に管理局に連絡して、1週間でジュエルシードと思われると判定されました。

その時点で管理局への輸送が決まって、輸送船の手配や輸送準備に2週間です。

事故があつたのは、輸送の3日目でした」

予想よりだいぶ短い。

でも、ユーノ・スクライアの証言。

嘘を言う必要が無い以上、恐らく正しい。

「思ったより短いな。

追われる身のプレシアがそんな期間で、発掘されたロストログアの存在を知り、それが何かを判断し、利用法を調べ上げ、輸送船の航路を割り出して移動し、都合よく輸送船が原因不明の事故を起こし、狙っていた積み荷が管理外世界の狭い範囲に散らばり、それを把握し

た上で回収する為に魔導師を送り込んできたのか？

有り得ないぞ。大魔導師とやらをどんな神に愛された化け物だと思っっているんだ。

仮に1人や2人でそれが可能なほど優秀なら、ジュエルシードは既に全てプレシアに回収されているさ」

「つまり、エヴァさんは、プレシア女史は管理局に踊らされている、と言いたいよね？」

「そうだ」

リンディ・ハラオウンが、ばつちり誘導された。

「管理局を馬鹿にするのも……！」

クロノ・ハラオウンは、抵抗しているものの認識は似た感じ。

「なら、他にどう説明すればいい？」

技術開発局にいた頃は、明らかに管理局の関係者だ。

クローン技術の元は、最高評議会とレジアスの息がかかったスカリエツテイのもの。

ジュエルシードは、発掘チームが管理局に関係者が居なければ、情報を得る事すら不可能だろう。

アルハザードの情報は、スカリエツテイがアルハザードの技術で作られたという事から知ったのかもしれない。スカリエツテイを作った技術が人造魔導師を生み出す技術に通じるなら、プレシアにその情報が流されていても不思議ではないからな」

「そ、それは……」

咄嗟に反論が出るほどの穴は無いはず。

クロノ・ハラオウンが、管理局の裏側まで熟知しているとは思えない。

リンディ・ハラオウンでも、きっと無理。

「まあ、管理局も巨大な組織だ。

後ろめたい事も時には必要だろうし、手段はともかく、戦力の確保という目的は管理局にとって悪い事ではないのかもしれない。そもそも私は部外者だし、直接何かあったわけでもないから、それについてとやかく言う気も無い。

だが、被害者だと思った者に同情して、救いの手を伸ばす事くらいは許されるだろう？

はやてや夜天と一緒にフェイトを助ける事も出来そうだし、悪い話ではないと思うぞ」

尤もらしい建前。どう受け止める？

最初の「技術者を確保したい」発言をどう扱うかが焦点。

「そう……エヴァさんは、プレシア女史を救うことが出来る。

そう考えているのね？」

「恐らくは。

もちろん、確実にと言えるわけもないし、迷惑をかける事になる事も理解している。

だから、チャンスは1回でいい。私が、プレシアを説得する機会が欲しい。

その際も、会話を記録しないなら、リンディとクロノの2人は聞いてもらっても構わない。

説得に成功した場合は、必要になる裏工作にも協力しよう」

「随分と熱心だけれど……エヴァさんとプレシア女史はどんな関係なのかしら？」

過保護の対象になっているように見えるのだけれど」

別方面の探り？

技術者確保の話は流されてる？

「今のところは、何の関係も無い。話をしたことも、会ったことも無いからな。

せいぜい、原作を見て少々同情している程度だ。

だが、私達の未来に必要なと思った。

それだけだ」

「そう……どんな未来を望んでいるのかしら？」

行動の意図を確認しに来たという事は、技術者確保の話は流されたかも。

ここは、お姉様の本音で問題ない。

「私は、あいつら……アコノ、夜天、はやて達と日本で平和に暮らした

いだけだ。

地球で魔法を公開する気は無いし、管理局に何かしようとも思わ
ん」

「あら。それを望むなら、私達に接触したのは悪手じゃないかしら？」
「夜天……闇の書を完全に隠すことが出来るのなら、可能な限り接触
を避けたらどうな。

だが、グレアムが知っているのは確実に、封印の為にデバイスも準
備が始まっているだろう。

誰が闇の書の情報を知っているのか、何かあった時の遺書的な用意
が無いか……完全な隠蔽の為にどれ程の手間がかかるか予想も出
来ん。全て調べて潰して回るのが現実的でないなら、何らかの対策が
必要になるだろう？

私としては、必要以上の騒動は避けたい。何の準備も無いまま情報
が広まり、地球に押しかけられるのも困る。

お前達に私の立場を話したのは、防波堤的な役割をしてくれること
を期待してという事もある」

「私達が情報を広めてしまうかもしれないわよ？」

「もしそうになったら、私の目が節穴だったという事だろう。

結果的に余計な手出しを防げないなら、手段を間違えた私の責任
だ。私の全てを以て排除するさ」

「全て、ね。

そこに本局の襲撃も含むのね？」

「当然だ。人手不足だろうが、何十もの世界を傘下に置く管理局の物
量を甘く見る気は無い。

仮に闇の書の破壊能力を全て発揮させることが出来たとしても、過
去の闇の書に対処してきたはずの管理局を相手に正面から勝てると思
うほど夢想家でもない。

であれば、物量を封じる……つまり管理能力を失わせるか、せめて
こちらに構う余裕を失わせるしかないだろう？」

「つまり、好き好んで襲撃するわけではない、と」

「難民やら犯罪者やらが押し寄せてくる可能性も否定できんからな。

必要も無いのに混乱させる事こそ悪手だ。

だが、私が優先するのは、アコノ、夜天、はやて、地球の順だ。
見た事も無い他の世界がどうなるうが、私は、私の手が届く範囲を
守るために動く」

「そう……分かりました。協力しましょう」

納得してくれた？

成果として充分。

今のところは、これ以上望む必要は無さそう。

「かあさ……艦長！ いいんですか!?!」

クロノ・ハラオウンは慌て過ぎ。

普段の地が出そうだった。

「もちろん、状況が変わった場合は協力出来ない事もあるでしょうし、
機会を作ることには失敗する可能性も否定はできないわ。

それは理解してもらえるわね？」

「もちろんだ。」

まずは、本局からの調査結果を見て判断してもらえばいい」

番外：小話ズ その2

◆◆ 高町なのはの質問（無印編15・5話） ◆◆

旅館の部屋の中は、数組に分かれて相談や大騒ぎ中。

そんな中、高町なのはがお姉様に近付いてきた。

その肩には、フェレットが乗ってる。

「どうした？」

「えつとね、はやてちゃんの事で、ちよつと質問が……」

「気になる事でもあったか。答えられる範囲の質問なら答えるぞ？」

「うん。えつと、昨日言ってた、あるかんしえる？つて……なに？」

「なんだか危険な物みたいけど」

高町なのはが、不安そうな顔をしてる。

単語の使われ方として、あまり良い形ではなかった。

地球の破滅と並べられたら、怖そうなものだと思っても仕方ない。

「まだ説明を聞いていないのか？」

だが、私も正確な性能は知らないんだ。

「そうだな……ユーノ、さっきの汚名返上だ。説明してみろ」

「え？ えつと、発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲……つて言うのと、大体わかる？」

「う、うん……何だか、物凄く危険な物だつていうのは……」

ユーノ・スクライアの説明はA×sそのままだった。

まだ魔法に触れてから短く、かなりやばいものだという雰囲気じゃないからか、高町なのはの反応は残念気味。

子供の想像の範疇を超えちゃった？

原作では、自分達の家や家族、友人達が巻き込まれる事に反応していただけ？

ユーノ・スクライアは汚名を返上できなかった。

むしろ挽回しちゃった？

「平和な国の子供に、何を求めているんだお前は。」

「そうだな……ユーノの言った範囲が半径であれば、四国や九州が一

発で壊滅する可能性がある兵器、だな。

東京に撃ち込めば関東が無くなる、の方が分かりやすいか？

空間歪曲に反応消滅なら物理的な盾はほぼ意味をなさなさいだろうから、地上の物が吹き飛ぶどころか、余波で何が起こるかも分からんくらい抉れるはずだ」

「そ、そんなにすごいのか!」

「実際の威力は知らんが、原作とここのユーノの説明が同じだったからな。

その内容が正しいと仮定して、半径130キロの円を日本に当てはめるとだいたいこれくらいだ。

核シエルター程度は存在した場所ごと消し飛ぶと思える攻撃内容だし、直接影響する範囲も広い。その意味では核爆弾程度では比べ物にもならんな。

と言うわけだから、ユーノは、相手のレベルを考えた説明をすべきだな。

魔法を知って1か月の子供が、魔法文化で育った大人と同じレベルで理解できるわけがないだろう?」

「は、はい……」

思ったよりもいじりが弱い。

むしろ、ユーノ・スクライアの魔改造開始?

でも、司書長にはあまり必要ない技術かも。

あまり苛めなかつただけ?

残念。

◆◆◆ フェイト・テストロッサの夕食(無印編18・5話) ◆◆◆

マンションの屋上から、アルフと黒羽早苗に拉致……もとい、連行されたフェイト・テストロッサ。

今は、普通のダイニングテーブルに座らされてる。

「あの……やっぱり、あまりこういうのは……」

「駄目だって、そんな顔色じゃ。

帰る前にしつかり食べる事。いいね？」

居辛そうなフェイト・テスタロツサは、言い辛そうに、台所に立つ黒羽早苗に声をかける。

「だけど、黒羽早苗は全く気にしてない。

手際のいい包丁捌きで人参を切りつつ答える声は、反論を許さないと云わんばかりの口調。

既に油が加熱中、鍋でお湯も沸かしてる。

煮物も温め始めてる。

「いいじゃないかフェイト、いい匂いだよ」

フェイト・テスタロツサとは対照的に、アルフは涎を垂らさんばかりの勢い。

尻尾が出てたら、きつと全力で振ってる。

「で、でも、初対面の人の家で食事と言うのは、えっと、その……」

「本人がいいって言ってるんだし、アタシはフェイトに元気になってほしいんだよ。

元気がないフェイトは見たくないんだよ」

アルフの泣き落とし！

フェイト・テスタロツサは動揺した！

「ただいま……あら、またお友達を連れてきてお食事？」

可愛い女の子なんて初めてじゃない。好きな娘なのかしら？」

黒羽早苗の母、帰宅。

何というか、ネギまの四葉五月を大きくしたような容姿。

そして、驚異的な胸囲。

要するに、大きさと大きさ以外、2人はそっくり。

「あ、お帰り母さん。

さつきここの屋上で見かけた人なんだけどね。会ったのは初めてだよ」

「そう。でも、初対面の女の子を連れてきたという事は、一目惚れでもしたのかしら？」

「あはは、違うよ。

こんなヒヨロヒヨロで顔色悪い子はほつとけないでしょ？」

黒羽早苗は笑ってる。

でも、フェイト・テストロッサとアルフは固まってる。

「あらあら、どうかした？」

固まっている2人を見て、黒羽早苗の母が面白そうに笑ってる。きつと、こんな光景を見慣れている。

「ア、アンタ……男だったのかい？」

アルフの質問が、何だかぎこちない。

動きが今も固い。

ギギギギギ、という擬音が良く似合いそう。

「ん？ そうだよ。」

なんで誰も気付いてくれないかなあ」

「あはは、私に似て美人だから仕方ないわね」

……美人？

愛嬌のある顔ではある。

不細工ではない。

ふとましいけどピザじゃない。

ある意味絶妙。

「母さんがそれを言う？」

僕達は、美しさじゃなくて愛嬌路線のはずだよ」

とまあ、こんな感じで母子の漫才がひとしきりあり。

フェイト・テストロッサとアルフが目を丸くしている間に、一通りの料理が目の前に並べられた。

ごはん、わかめの味噌汁、野菜を中心とした天ぷら色々、温野菜のサラダ、大根や蓮根の煮物。この辺は一般的。

小女子の佃煮の様なものと、たくあんの煮物の様なものが謎。

「さあ、召し上がれ……つて、箸は使える？」

黒羽早苗が食器類を並べながら、思い出したように質問。どう見ても外人。

日本語が上手でも、食生活に馴染んでない脳内設定。

箸が使えないだろうと考えても仕方ない。

「え……ええと……」

「あー、ごめんよ、日本語は勉強したんだけどさ、箸はまだ慣れてないんだよ」

助けを求めるような、フェイト・テスタロッサの視線。

アルフは、無難な答え。

本当に慣れてないらしい。

「ここまで自然に話せるほど言葉を練習する前に、箸にも慣れておくべきだよ。」

スプーンとかフォークもあるけど、箸じゃないと食べにくいものも多いしさ」

そう言いながらも、手際良く食器類を並べていく黒羽早苗。

翻訳魔法の超性能が、微妙に立場を悪くする原因に。

この場に及んで、フェイト・テスタロッサは困ったように料理を見て、黒羽早苗を見て、アルフを見た。

だけど、アルフは料理に夢中。

涎を垂らさんばかりの勢いで見詰めてる。

「……ん？ どうしたんだいフェイト？」

やっと気付いた。

忠犬が台無し。

フェイト・テスタロッサは、ちよつと涙目になりかけてる。

「あー、うん、えつと……」

「こ、ここまで用意してもらったんだからさ、美味しく食べるのが礼儀つてもんだよ」

「そうそう。料理人にとっては、美味しいって言ってもらえるのが一番嬉しくて、食べてもらえないのが一番悲しいんだ」

ちよつと引き攣り気味のアルフの言い訳に、見事に乗ってきた黒羽早苗。

その様子に諦めたのか覚悟を決めたのか、フェイト・テスタロッサが恐る恐ると言った感じで、味噌汁を口にした。

「……………おいしい……………」

たつぷり時間をかけてそれを飲み込むと、驚いたような表情で呟い

てる。

今までどんな食生活をしてきたのかと問い詰めるべき？

アルフに家事技能を仕込んだはずのリニスが無憫。

嬉しそうに犬の餌を食べる狼。味覚に期待してはいけない？

それからしばらくは、フェイト・テストタロツサは静かに、アルフは全力で食事。

食べながら、食べ方を教えてもらったりはしてた。

天ぷら色々は、荒塩、抹茶塩、天つゆをお好みで。フェイト・テストタロツサが塩を付け過ぎて涙目になってた。

小女子の佃煮改め、いかなごの釘煮。普通にご飯に乗つけてた。

たくあんの煮物は、本当にそのままだった。食べ方も煮物扱い。

黒羽早苗はニコニコと食べている様子を見る。

そのうちに、アルフ完食。

「ふう、美味しかったよ。」

「だけど、凄いねえ。こーんな美味しい料理作れるなんてさ」

「あはは、その辺は色々な秘密と努力があるんだ。」

味噌とかたくあんとかも手作りだから、色々工夫のし甲斐もあるしさ。

「たくあんはちよつと酸味が出ちゃってるから、煮てあるけどね」

「へー、色々やってるんだねえ。」

「って、あれ？ フェイト、どうしたんだい？」

静かに食べていたフェイト・テストタロツサが、食器を置いた。

「まだ、料理は残ってる。」

「……もう、食べれない」

本人は、なんだか悲しそうにおなかを押さえてる。

口に合わないわけではない様子だった。

「あれ？ ひよつとして口に合わなかった？」

「ううん……もう、おなかが……」

「もう、普段から小食過ぎるんだよ。」

「暴食しろって言わないけどさ、もうちよつと食べようよフェイト」

「う、うん……」

領いた!?

恐るべし黒羽早苗の料理。

「食べられないなら仕方ないけど、今度はもつとちゃんと食べなよ?」

「え……ここ、今度?」

「お姉さんに心配させてる自覚ある?」

僕の料理なら食べれるって事なら、嬉しい事だしさ。

いつでも食わせてやるから、また来なよ。というか、また来て食え
!」

再び現れた、おサルのおーラ。

今度はリングゴ食べてる。

「う、うん……」

フェイト・テスタロッサが圧倒されつつも、領いちやった。

それを見てたアルフは驚愕の表情。

まさかの餌付け展開?

「そうだ、こんな事でしかお礼できないけどさ。

受け取っておくれよ」

我に返ったアルフが、いそいそとポケットから財布を出してきた。

お金を持つてる?

そういえば、犬の餌とかフェイト・テスタロッサの食事は、普通に
店で買ってる。

……何故?

「お金? 駄目だよ、ここは店じゃないんだ。

受け取れないよ」

「そうそう。うちの子の料理で元気になる子を見るのは嬉しいのよ
?」

黒羽親子、受け取りを拒否。

でも、アルフは万札を掴まんでいた気が。

どれだけ嬉しかったのかと小一時間問い詰めるべき?

「でもさ、アタシは嬉しいんだよ。

せめて材料費くらいは受け取ってもらわないと、また連れてきにく

いしき。

そうだ、次来た時の食材の購入費って事でどうだい？

またおいしいものを食べさせるって約束の意味でさ」

「うーん……まあ、そういう事なら。」

あ、先に連絡を貰えると、もつと時間のかかる料理も作れるからさ。必ず来ること。約束だよ？」

「おっけー」

◆◆◆ ギル・ガームスの逃亡（無印編23・5話） ◆◆◆

大慌てで街中を駆け抜ける、ギル・ガームス。

その姿は返り血で赤い。明らかに不審者。

明らか過ぎて、気味の悪い悪戯か何かだと思ってる人もいる模様？

「クソツ、俺様が主人公たる！ 美少女は全部俺様のものだ！

俺様がハーレムを作るってのに、なんでクルトが割り箸持って襲ってくるんだよ!!」

警察の人ー、ここにアブナイ事を眩くように叫ぶ変人がいますー。

ついでに、ハーレムオリ主様志望証言入りましたー。

というか、割り箸……？

まさか、これが何かわかってないのに、武器っぽかったから奪っただけ？

「だけど、この姿は……って、忘れてた!？」

血まみれはまずい。どこか人気の少ないトイレ……公園、公園は!？
ってさつきいたとこだよ！ 何やってんだよ俺様!!」

なんて残念な思考回路。

むしろ俺様と言う一人称だけが独り歩き状態。

どうして自分で様付け？

元キャラの「我と書いてオレと読む」のとも違う。

唯我独尊のイメージで暴発？

「た、確かその辺に……」

割と近くに公園があった事に気付いた模様。

大急ぎで向かうと、和式のあまりきれいなトイレに突撃。

「えーと、確かこの辺に……」

空中から服を取り出した？

王の財宝？

黒いライダースーツの様なデザインは元キャラのイメージかも。

でも、コスプレ用の安物に見える。

本物のライディングウェアやレーシングスーツよりは、普段着に見えるなくもない……？

その後、ウエットティッシュや鏡も取り出して血を何とかしたりして、外を歩ける程度の体裁を整えて、大きめのちよつと草臥れたボストンバッグを取り出して、脱いだ服とかを全部入れて。

……取り出すだけで、返せない？

「……やっちゃまったし、あれだけ歩いてたんだから、見られてるよな。

逃げるには……やっぱ、金か。

変装もしておいた方がいいか……ばれるだろうけど。

まさか、押し付けられたパーティーグッズが役に立つとは……」

財布や通帳も取り出して、これもボストンバッグに。

全体的に安物に見える。金運は微妙な可能性も？

そして、カツラを取り出して頭に乗つけて……うん、ないわー。

金髪のつんつん頭を、パーティーグッズのカツラで隠せると思う方がどうかしてる。

パーティー用鼻メガネサングラス仕様と、花粉用のマスクも装備。

黒いライダースーツ着用で。

どう見ても変質者です。本当に残念な思考回路でございました。

「よし、これで完璧だ」

嘘だツ!!

「さて……行くか」

行くってどこへだろう。

逃亡生活覚悟完了？

むしろコメデイ路線に行くべきだった。

現時点で確認できた能力は、王の財宝。これは確定、但し劣化の度

合いが未確定。

中身も怪しいし、取り出すだけで戻せない模様？

自分の所有物を手元に呼ぶ能力になつていると予想。

召喚能力の部分を抽出した感じと思える。

これまでの行動から、ニコポを要求していた可能性は高い。

魔力は割と高め。これはギルガメッシュ的な意味なのか、別途要求か不明。

でも、金運的に考えてギルガメッシュ自体になつたわけではなさそう？

転生特典の仕組み解明への、本人への遠慮も無用の実験動物。

お姉様は人を実験動物扱いする事を好まない。

しばらくは泳がせた方が研究しやすい。

警察には適度に情報を渡して、追いつめてもらえば問題ない。

周囲に人が居ない状態で、本人も精神的に余裕が無い方が、実験もしやすい。

というか、留置所や刑務所では実験しにくい。

お姉様には何て説明？

実験以外はありのままに。能力も解明出来てないから、緊急事態対応を名目に張り付く。

前世の記憶もあるせいか、逃げ方を心得ているようです……とか？

本人の能力で逃げ切るのは、無理が大きい。

いくらなんでも、お姉様でも気付きそう。

留置所等で王の財宝を乱用しそうなので、隔離の方が無難と判断しました……とか？

まだ無難そう？

とりあえず、それで。

方針決定。行動開始。

◆◆ 八神はやての独り言（無印編25・5話） ◆◆

魔法やグレアムの事情や、様々な説明などが一通り終わる頃に

は夕暮れ時。

そして、夜になった。

主は帰宅し、八神家のチャチャも夕食や入浴の後で撤収済み。つまり、今は八神はやてが一人の状態。

「闇の書。本当の名前は夜天の魔導書。」

多くの世界を破滅に導いた、呪われた本。

そんなに大層なもんやったんか？」

八神はやてはベッドの上に寝転がっていて、夜天の魔導書を手に語り掛ける。

事情を知らない人から見れば、危ない妄想少女の域。

「悲劇を防ぐために封印しようとしているグレアムおじさん。」

夜天の魔導書の呪いを解いて、結果的に悲劇がなくなるアコノさんたち。

やり方的には、アコノさんの方に賛成やな。

私ごと封印つてのやなければ……うん、やっぱアコノさんやな。

元をどうにかできるなら、臭い物に蓋をするだけつてのはあかん」主とお姉様、大勝利。

でも、情報収集魔法への介入を継続していて良かった。

現時点でギル・グレアムに聞かれるわけにはいかない。

「名前を付けてやってってくれて言われたなあ。」

夜天の魔導書の管理者で、主になる私を補佐してくれる人。

確か、一見クールやけど優しくて意外に涙もろい、外見は20歳手前くらいの銀髪美女さん、やったな。

夜天にちなんで……夜はなんか暗いイメージやな。却下や却下。

エヴァさんのお姉さんやし、似た感じの名前がええやろか？ 福音つて意味のエヴァンジェルevangelが元やゆうてたし、外人さんみたいな外見やろうから、英語っぽいのがええな。

英語、エイゴ、えいご……ダメや、思いつかへん」

八神はやての元気が、一気に萎れてく。

犬耳がついてたら、確実に耳が寝てる。

「うん、今度本とか辞書とか、いろいろ見てみよか。」

早くてもまだ1月以上あるんやから、慌てんでもええし。じっくり考えていい名前付けなあかん。

んで、夜天の魔導書の封印が解けて、まずは守護騎士って人らが4人現れて。

部屋の用意をしといた方がええな。

それに、アコノさんに、エヴァさんに、チャチャマルさんに、チャチャちゃんに。

チャチャちゃんは、ちよくちよく来てくれるゆうてたな。

いつそ、アコノさんやチャチャちゃんの部屋もあつた方がええか？

エヴァさんは、本やからアコノさんと同じ部屋でいいとか言いそうやな」

一人で住むには、無駄過ぎる程広い家。

特に2階の部屋は全て空いていると言っている。

空き部屋、多数。

部屋を貰えるなら常駐したい。

猫の問題が無ければ、間違いなく常駐する。

「アコノさんは、2階はあかん。

守護騎士って人らも、出来れば近い方がええやろか？

となると、部屋割りは……って、なんでアコノさんも住む前提なん!?

まだそんな関係ちゃう！

まだってなんや、まだって!？」

一人ポケットコミ？

むしろ、ポケポケ。

主の言葉が効きすぎ？

「あかん、なんか幸せすぎて暴走しとる。

静まれ、私の右腕……って、それは温泉旅行の時や！

あれはいくらなんでも暴走しすぎや。

あかん、色々反省せんと。

はい、「反省」

手について項垂れる姿？

猿でもできる？

「やけど後悔はしてへんっ！ お姉さんたちの揉みごたえは至福やったし！」

うん、反省はこんなもんでええか。

守護騎士つて人らが来るのは誕生日やから、まだ先やな。

………待てるやろか？」

◆◆ ハラオウン親子の常識破壊（無印編27・5話） ◆◆

アースラでの話を終え、お姉様はそろそろ帰ろうかという事になった。

全員が問題なく立ち上がり、お疲れ様、等と言いつてる。

ずっと正座で話していたのに、ひっそりと魔法で体を浮かせたりしていたから、誰も足が痺れてない。

残念。

「ああ、そういえば、一つ言い忘れていたことがあったな。

可能性は思い切り低いが、もしそうなら予想がひっくり返る様な内容なんだが……伝えておいた方がいいか？」

「そんなに重要な事を、どうして言い忘れていたんだ？」

そんな中、お姉様がハラオウン親子に声をかけた。

結構もったいぶった言い方。

クロノ・ハラオウンは、明らかに不満そうな表情。

「いや、普通に話すには荒唐無稽な内容だ。

根拠についてはそれなりに可能性が高いんだが、そこから導いた結論はまずあり得ないと思ってしまうてな。

もしあり得た場合は、私も色々と驚くことになる」

「それほど突飛な内容、という事ね？」

リンディ・ハラオウンは、内容が気になる様子。

本当にあり得ないと思えるかどうかは、重要な点。

「そうだな。

虚数空間内を移動する魔法、虚数空間内でアルハザードを探すため

の搜索魔法、虚数空間内で命を繋ぐ保護魔法。

これらをプレシアが持っている可能性がゼロとは言えないと言ったら、信じるか？」

「……いや、あり得ないはずだ。」

それがあり得るとすれば、虚数空間内で魔法が使えるという事になる」

「そうね。普通に考えればあり得ない、という結論に達するわね。」

「ただ、それがあり得る根拠があるのでしよう？」

「虚数空間内で使える魔法が存在し得るのは、ほぼ間違いない思っている。」

「ああクロノ。なんだってー、はもういいからな」

「いや、今回は予想できるといえるか、そうだから話をしているとしか思えなかった。」

「流石にそう何度も叫べない」

「なんだ、残念。」

「みんなで Ω の準備をしたのに。」

（何をやってるんだお前達は……）

「大事な場面じゃなくなったから、ネタの準備。」

「息抜きも必要。」

「ちなみに、根拠は闇の書だ。」

過去にアレを虚数空間に落として処分しようとしたことが1度も無いとは、とても思えん。」

「私ならあれが姉でなければ大真面目で対処法の候補に挙げるし、法を犯してでも悲劇の終焉を目指しているグレアムが考え付かないとも思えんからな。実際に落とした記録でもあるんじゃないか？」

「それに、アルカンシエルは空間歪曲に反応消滅、だったな。中心部で空間崩壊が起こり、虚数空間が口を開く可能性は無いのか？」

「この仮定が片方でも正しければ、少なくとも闇の書の無限転生は虚数空間でも機能する可能性が高い、という事になる。つまり、虚数空間は魔法が一切使えない空間ではない、という証拠になってしまうわけだ」

「……確かに、あり得ない、と切り捨てられはしない話だが……」
「あり得ると言ってしまうには、憶測が多くて根拠が薄いわね。」

「だから、先ほどは話さなかったという事ね？」

「そうだな。だが、おとぎ話の様なアルハザードが存在したのは事実で、プレシアはそれについて確信を持てるだけの情報を掴んだはずだ。」

となると、夢物語の様な『虚数空間内で使える魔法』が実在して、プレシアがその情報も掴んでいる可能性は、否定出来んだろう？」

「というか、お姉様はランダム転移と無限転生を虚数空間内で実際に使用。」

虚数空間に対応するための情報が流出していて、それを参考に新しい魔法が開発されている可能性が、無いわけじゃない。

「だが、エヴァンジュ。君の製作者は闇の書の製作者と同一人物なんだろう？」

何か聞いていないのか？」

「製作者からは特に何も聞いていないな。」

私にも無限転生はあるらしいんだが……私の構造を見ても複雑怪奇すぎて、どこが無限転生の術式で、何がどうなっているから虚数空間でも使えると言えるようになるのか、全く解らん。

実際に使えるか試すにしても、無限転生が発動するという事は一度死ぬという事で、しかも虚数空間に落ちてからだだから。自殺する気は無いし、発動しなければ永遠に虚数空間の中だ。そんな実験はする気になれん。

仮に実験を敢行して発動したとしても、虚数空間内で観測するのは恐らく不可能だ。観測用の魔法は機能しないだろうし、自分で感じ取るにしても、死ぬ間際や死んだ後に可能だとは思えん」

お姉様に説明したのは、私達。主様は能力の説明すらまともにしてない。

ちなみに虚数空間での魔法実験時は、宇宙服を着た研究者が虚数空間にロープ付きバンジー。

流石、人権の無い時代。

無茶しやがって。

何がどうなつてと言うより、全体的なノイズが整合性を取る奇跡の可能性を可能な限り高め、その奇跡の間に如何にして魔法を発動完了まで持ち込むかが鍵。恐らく、執念と偶然と奇跡の結晶。

無限転生に至つては、原理すら不明な「何故かそうなる」としか言えない術式。これを基盤とし、その上への組み上げに成功しているお姉様や夜天は、まさに奇跡の産物。

でも、自由な移動や探知はともかく、保護魔法なら割と簡単。虚数空間に落ちる前に対虚数空間用結界で固めれば、維持できる間は中で魔法が使える。

お姉様の非公開魔法だけど。

「そ、そうか……」

「確証は無いし、普通は信じられないけど、という感じがしら。」

「だけど、これも広まると厄介事になりそうね。私達に話して良かったのかしら？」

「そもそも闇の書の無限転生はそれなりに有名な話だろうし、過去に虚数空間に落としたという記録があれば立証できてしまう内容だ。公になっていない、もしくは立証が難しいだけで、気付いている者がいないとはとても思えん。」

「私が夜天の妹だと言った以上、この辺も話して協力者になつてもらった方が色々動き易そうだと思っただけだ。例えば、無限書庫の調査とかかな？」

「そういう事ね。そうやって人を共犯者にしていくのは、過去の経験のなせる業かしら？」

「そうだな。散々貴族連中とやりあつてきたから、その癖が抜けん。」

「ただ、自分から騒動を起こす気は無いから、その点は安心してもらつていいぞ。」

「私は、あいつらと平和に暮らしたいだけだ」

「今の闇の書が含まれている事を考えると、騒動が起きないとはとても思えないわね。」

「大事にならなければいいのだけれど」

「なるべく穏便に済むよう努力はするさ。そのために色々隠していたんだ。」

後はまあ、管理局やらがどう私達に係わってくるか次第か。犯罪者共は遠慮なく焼くとしても、管理局まで焼くと後が面倒だからな。私の事を報告するにしても、なるべく穏便な結果になる様に頼むぞ?」

「どう報告すれば穏便になると言うんだ……?」

クロノ・ハラオウンが困った顔をしてる。

リンデイ・ハラオウンも似たような表情。

頑張り、提督と執務官。

◆◆ その夜のアースラ2 (無印編27・9話) ◆◆

「エヴァさんは色々隠していると思っていたけれど、こんな話が出て来るなんてね」

集めた情報を元に、主殺しの書だろうという所までは当たりを付けていたのだけれど。

ここまで話してもらえたのは予想以上の収穫、と言っているのかしらね。

「まさか、主殺しの書が闇の書の妹とは思いませんでした。」

本来は本の姿で、主を必要とする古代ベルカ製の魔導具、使っているのは真正^{エンシエント}古代ベルカ式の魔法……少なくとも言動や判明している情報に、それを否定する様な矛盾点は無いと思えます」

「そうね。だけど、あの過保護ぶりや眠っていたという事を考えると、意図的に殺していたとは認められないわね。」

主殺しの書の事例を見る限り、殆どの人は長い時間をかけて衰弱で死亡しているし。主になる際に感情が暴走するとエヴァさんが言っていたのをユーノさんが聞いているけれど、それで廃人にしたたり、殺してしまったりする事は避けていたんじゃないかしら?」

何もしいまま、静かに魔力を奪っていく魔導書。調査や改変を受け付けず、破壊してもまた別の所に現れる、ゆつくりと命を吸い取っていくだけのロストログア。主は夢の中で、眠る少女や小人の様な少

女に出会う事がある。

主殺しの書についてはこの程度の情報しか公開されていないけれど、眠る少女がきつとエヴァさんね。エヴァさんがずっと眠っていた以上、恐らく小人の様な少女の役目が主の選定。過去の主は実際には候補の状態で、エヴァさんを目覚めさせるためには本当の主になつてもらう必要があるけれど、それは主候補を殺す事に繋がってしまう。だから、ずっと何もしなかった……いえ、出来なかった、と言った方が正しいのでしょうかね。

そして、ようやく見つけた、主になり得る、そして、恐らく危険を承知した上でそれを受け入れた人物……アコノさん。過保護になるのも解る気がするわ。

「エヴァンジェユの本質的な優しさ、でしょうか」

「それは解らないわ。」

でも、アコノさんがいる限り、新しい犠牲者は出ないでしょう。不老は確実、死なせるつもりは無いと断言していたもの。

でも、人を極端に選ぶとはいえ、主を殺す書の主になる事が不老不死に近づく事に繋がるなんて、皮肉もいいところね」

「物語の様な表現をすれば、死ぬのは主になる為の試練の結果、といった感じでしよう。」

迂闊に引き離すと何をしでかすか分かりませんし、主……アコノが死ぬようなことがあれば、闇の書と共に暴走するのは間違いありません。

地球から移動する気は無いようですし、主殺しの書としての対応は、静観が正しいでしょう」

「そうね。ただの道具と違って意思のある存在だもの。下手に刺激するのは避けるべきね」

人格を持つて行動している以上、道具として封印するのは倫理的に問題があるわね。

そもそも、闇の書と同程度の能力を持っている可能性を考えると、時空管理局の技術でも封印する事が出来るか怪しいわ。アコノさんが死んでしまえば新しい犠牲者が出始めるのでしょうか、本人達が納

得している以上、言い方は悪いけれど、アコノさんに人柱になつてもらう事が最善なのでしょう。

「しかし、指令書という名が体を表しているなら、夜天の魔導書の上位に位置付けられる管制用の魔導具という事になります。

もしそうなら確かに後方に配置されるでしょうし、集めた情報を管理する事が主要な役目になつても不思議ではありません。情報が有益か検証する役目を与えられた研究者、といった立ち位置だったのでしよう。

魔力が少ないのは、中枢にいる事が前提だからかもしれません。普段は暴走しても大事にならない水準に抑えても、研究等で必要な場合には魔力の供給を受ける体制が出来ていれば役目に支障はありませんし、研究者と言つても主任務が情報管理であれば、魔力は必要ではなかつたのかも知れません。

話で聞いたチャチャマルと、なのはやなのはの友人の家にいるチャチャが守護騎士や防衛プログラムに相当する存在で間違いありません。それに、チャチャは人前に出る時以外は小型の魔導炉のようなものを装着しているそうですし、チャチャマルも似た物を頭部に装備していると言っていました。素の魔力は随分小さい事も、普段は抑えておく必要がある環境にいたという推測と矛盾しません」

確かに、その予想で矛盾点は無いわね。

でも、これでもまだ違和感はあるわ。まだ何かあるのかしらね。「問題は、研究所や魔導炉等の設備を失い、魔力をカートリッジシステムに頼る現状で、本当に闇の書に対処出来るかです。こちらのサーチャーに気付いていましたし、デバイスの一部機能を遠隔破壊したのもエヴァンジュ以外に候補が居ません。かなり高い技術を持つ事だけは確かなのですが」

「現時点では難しいと言っていたけれど、その理由は語らなかつたわね。設備や魔導炉の準備でもしているのかしら？ これだとプレシア女史を欲しが理由も説明できそうだし。アコノさんの魔力が今までの主殺しの書の犠牲者と比べて極端に小さい事も気になるから、魔力を可能な限りカートリッジに蓄積している可能性もあるわね。」

ただ……姉である夜天の魔導書も過保護の対象に入っている事は怖いわ。

本当にエヴァさんが上位に位置している場合、今の闇の書を全力で使う事ができる可能性があるという事だもの。既に本局の位置も特定しているようだし、襲撃に必要なものは全て揃えてあると言っているようなものよ」

管理局として、一番厄介なのはこれね。

闇の書の存在は確実に、エヴァさんも使用できる可能性が濃厚。本局の位置も特定済み。

位置の特定が出来たのだから、そこへ行く事が可能なだけの能力もあるでしょうし。本当にアリアさんに気付かれなかったのであれば、こつそりと侵入されたら分からないかも知れないわね。

「僕達に対する圧力……ですね。ブラフの可能性はありますが、間違はなくロストロギア、それも暴走するようなら1級指定が間違いない相手です。判断を間違えるわけにはいきません。」

要求は、事を大きくするな、という感じでしょうか」

「目標が悪い事ではないのだから見逃せ、出来る範囲は協力しろ、でしょうね。」

プレシア女史の過去についての話も、助ける理由よりも、時空管理局が綺麗な組織ではない事を言いたかった様に思えるわ。

それに、なのはさんはすっかり協力する気になってしまっているし。はやてさんとフェイトさんも助けると言われてしまうと、協力するなどは言いにくいわ」

プレシア女史については同情していると言うより、時空管理局と慣れ合わないためと言った方が適切かもしれないわね。

だけど話を聞く限りでは、プレシア女史を助ける事はフェイトさんを救う事に繋がる可能性は高いし、闇の書を修復する事ははやてさんの家族を死なせない事に繋がる事も嘘だと言えないわ。

「ですが、あの話は信じられません。」

確かにレジアス中将は黒い噂が絶えないようですが……」

「だけど、噂は私達も聞いたことがあるくらいだし、頭から否定する事

は出来ないわね。

犯罪者に過剰反応する傾向がある事は確かだから、詳細な経緯が公開されなければ、闇の書の主という点からはやてさんを犯罪者と呼ぶ可能性も否定出来そうにないし。

管理局が、管理対象が多すぎるせいで人手不足に悩んでいる事も事実。

随分と痛いところを突いてくれるわ」

「だからと言って、プレシアの保護に協力する必要は無かったのでは？」

優秀な技術者と言っても闇の書対策に直接役立つ分野ではありませんから、対外的にも不自然だと思われる可能性はあります。

条件付きとはいえSSの魔導師ですから戦力としては充分かもしれませんが、魔導師が欲しいのであれば良い人材ですが……」

「エヴァさんは、表に立つわけにいかないと言っていたわ。確かに、闇の書の妹という事が広まってしまえば、ひと騒動では済まないでしょう。」

まだグレアム提督を説得出来る材料が無いと言っていたのだから、管理局そのものを説得する事も無理ね。その状況で、表に立たせる事が可能な人物を探した結果じゃないかしら？

違法研究を行っていた犯罪者ではあるけれど、だからこそ交渉もしやすいでしょう」

闇の書の改変という大仕事が可能なら技術者なんて、そうそういるものじゃないし。

そういう意味では、大魔導師としての名声も持っているプレシア女史は適任かしらね。

「ですが……」

「平和に暮らしたいと言っていたのだから、その方がお互い幸せになりそうよ。迂闊に表舞台に立たせたら、別の意味で暴走しちゃうもの。法を守る事は大切だけれど、それは平和や人々を護る為。法の為に危機を招いては本末転倒よ。」

それに、何と言うか……目的の為に必死になっている姿を見ると、

誰かさんを思い出すと言うか」

どうしてかしらね。どことなくクロノに似た雰囲気があると言うか……目的に向かって全力で進む姿が重なるから、かしら？

「か、母さん!? どうしてそんな微笑ましいものを見る様な目で!」
「ちよつとした母心の様なもの、かもしれないわね。」

まだ全てを見せてもらえるほど信頼されていないけれど、今回は随分多くの手札を見せてもらえたでしょう? 悪気や邪気無く、目的の為に動いている事は間違いないわ。

実力を見せてくれるのは……闇の書に対処する時まで待たないといけないかしらね」

「しかし、その手札も本人が言っているだけでしよう。」

いくら悪気や邪気が無いと言っても、無闇に信用するわけにもいきません」

「それを言ったら、闇の書の話自体もそうよ。どこまで信じるかが問題だけれど……広い意味の嘘は多いけれど、厳密な意味での嘘は無い気がするわ。」

あれだけ自信がある様に言っていて実は実力が足りませんでした、と言うような性格でもなさそうだし。対処自体を押し付ける様子は無いのだから、手札が嘘なら闇の書について私達に話す理由も無いでしょう? リーゼさん達が頻繁に來ている事を知らせるだけで、グレアム提督の足を引っ張る事くらいは出来るもの」

もつとも、そんな事をすれば、グレアム提督がどう動くか分からないのだけれど。

平穩に済ませるのは、なかなか難しそうね。
「随分とエヴァンジュを気に入っている様ですが、艦長で提督なんです。」

私情は程々にしてください」
「うーん、何だか憎めないのよ。それに、目的というか、その結果は望ましいものだし。」

なのはさんのお友達……はやてさんが本当に闇の書の主なのか。その性格が本当に言っている通りなのか。本当にグレアム提督の監

視があるのか。闇の書は本物なのか。

私達が確認していない情報は多いわ。ほとんどエヴァさんから話を聞いただけの状態だもの。

当面はジュエルシードの対処が優先になるから、しばらくは静かに調査を続けましょう」

「……分かりました」

無印編28話 招かざる客

リンディ・ハラオウン達との会話を終えたお姉様。

しばらくは情報の確認をしたいというハラオウン親子の希望により、お姉様には高町家経由で連絡が来ることに。

と言うわけで、お姉様は主の部屋へと戻ってきた。

既に外は暗くなっていて、主は別荘で魔法の練習を行ってる。

主はだいぶ飛行にも慣れ、念のために体術、主に護身系の柔術の練習も開始済み。

攻撃してくる相手を車椅子に座ったまま捌くのは、意外性があって面白い。

そんな頃、主の部屋の中に小ネズミが現れた。

「ん？ チクアープか？」

「お久しぶりでございます、エヴァ様。」

「この部屋は通信機器が少なすぎでございます」

「いや、通信機器は何も無いはずだが……どこから入った？」

「電波時計でございます。」

場所の割出しには苦労いたしました」

通信機器？

確かに受信はしてる。

それを経由した？

「……そうか。私の電子精霊よりも随分と優秀だな」

「それだけが取り柄でございますので」

とてもそうは思えない。

何時でも好きな場所に侵入出来るとしか思えない性能。

「それで、何か用事か？ 一応ここは若い女の部屋だ。ただの変態な
ら叩き出すぞ」

「未接触の転生者についてでございます。」

話をしたいという伝言を持って参りましてございます」

「未接触、か。未知ではないんだな？」

「成瀬カイゼでございます。エヴァ様達は殺人者と呼んでおられる人

物でございませぬ」

昼間、成瀬カイゼがこそこそと何かをしている気配はあった。

例の洞窟から出る気配は無かったから、放置してた。

小ネズミが侵入していたのは予想外。

「ほう、お前から接触したのか?」

「はい。真鶴亜美嬢との会談時に仕掛けられていた盗聴器の電波を追いましてございます」

うそ?

主と真鶴亜美の会話中は洞窟内部を監視してたけど、その時は居る様子がなかった。

その後もチクアープが正面から入ってない事は、自信を持って断言出来る。成瀬カイゼが洞窟を出入りする際も、電子精霊が入れそうな機器は持っていなかったはず。

本人の申告。嘘を言ってるとも思えない。

電波時計を経由して移動する程度の能力。盗聴器の電波を使えない理由は無い?

「……そうか。あそこにもいたのか……随分と優秀だな。

それで、話とは何だ? 転生者を殺した事か?」

「それも在る様でございしますが、簡単に言えば、仲間になりたそうにこちらを見ている、でございませぬ」

「ほう……逃亡に疲れたのか? それとも、私やアコノが優しい人間だとでも思ったか?」

アコノの外見に惚れたなどと抜かすような変態なら、あの世で反省させてやるぞ?」

お姉様、自分自分。

でも、殺人者がお姉様を見る機会は無かったはず。

主だけが候補?

お姉様の発言で正しいと思えてきた。

「どれも不正解でございます。」

我等もそうですが、エヴァ様の人柄や手腕に惚れた、というのが最大の理由でございませぬ。

成瀬カイゼは、エヴァ様やアコノ様のお姿を見ておりませんよ。
良いですな、自らの目的のために手段を選ばず、それでいて優しく
筋が通っている方は」

「ふん、そう見えているだけだ。」

それほど高尚な人間ではないぞ」

「そう謙遜なさらずとも、我等がそう思えただけで充分でございます。
特に、アースラでの会談は惹かれるものがございました。」

成瀬カイゼと2人で、感心しながら聞いておりましたよ」

「アースラの中の話も転送していたのか。大したものだが……どう
やって行った？」

「高町なのは嬢が使用した、携帯電話の電波に乗って移動を行ったの
でございます。」

家族と話せるようにと世話を焼いたようでございますが、我等から
見たら大穴があいたのと同じでございます」

「そうか、その経路なのか……。」

それで、お前はともかく、殺人者の望みは何だ？

殺人の隠蔽など、やる気は無いぞ」

「それについては望んでいないようでございます。」

望みは、エヴァ様の協力者としてアースラに行く事の様でございます
「す」

協力者？

殺人犯が、意外な提案。

殺人以外に目立った行動をしていないため、未だ人物像が不明。

要警戒。

「アースラに、か。」

私の協力者というのとは、どの様な意味で言っている？」

「いつでも捨てられる、好きに使える駒として、と言っております。
地球に戸籍は無く、他にも殺人の罪があるそうでございます。」

元々魔法を使う暗殺集団で育てられていたそうでございますから、
過去に色々とあったのでございましょう。

最近その集団を逃げ出し、何の努力もせずを得た能力を使って傍若

無人に振舞う転生者に切れたようでごさいますな」

「それが、殺した2人か。

保育士は傍若無人じゃなかったから殺さなかった、という事だな？」

「その様でございますな。

今はだいたい落ち着き、いきなり殺した事は反省しております。

ここで殺した事を後悔しない辺り、実に我等の好みに合っているの
でございます」

微妙な評価。

殺人について、反省はしても後悔しない。

判断基準や反省内容によっては、低評価。

「なるほどな。それで、お前は仲間を引き込んでも問題ないと判断し
たわけだな？」

「その通りでございます。

綺麗事に流されず、反省しても後悔はしない生き方を貫く。

良き人材かと考える次第でございます」

「そうか、わかった。

アースラに行くのは連中からの連絡以降で、更に話が付いてから
だ。

少々先になるだろうが、構わんな？」

あれ？

お姉様は受け入れる？

詳細を聞かない？

「おや、本人に会わなくても良いのでございますか？」

「お前がそこまで言うんだ、信用してやる。

失望させるなよ？」

責任を丸投げした？

お姉様の行動基準的に、意外。

普段はもつと警戒するのに。

「もちろんでございます。

成瀬カイゼ共々、全力でお仕えする所存でございます」

「さて、ついでだ。少々頼みがある」

「頼み、でございますか？」

「管理局の本局に侵入出来るか？」

私の配下では電子精霊がそのうち何とかなるか、といった所だな。

正直、情報不足感が否めん」

思ったよりも信用しちやってる？

チクアーブ共々、手駒として使う気が満々？

あれ？

「なるほど、役目は情報収集でございますか。

侵入できれば、何とでもなりますよ。

どのような情報をお望みでございますようか？」

「ギル・グレアムの性格や実情、それに管理局の動向だな。

闇の書を何とかするためには、確実に協力が牽制が必要になる相手

だ。なるべく多くの情報が欲しい」

「なるほど、確かに重要な情報でございますな。

レジアスや最高評議会は重視なさらないのでございますか？」

「本人より、実際に動く連中の方が問題だ。

裏側の犯罪担当の連中が、お上の指示通りに動くとは限らん」

「確かにそうでございますな。

侵入については、チャチャ様と相談の上で速やかに行う事に致しま

しょう」

「相手が点ではない分大変だとは思いますが、私の電子精霊を大きく超え

る能力を持つお前だ。

頼りにするぞっ」

「光栄の極みでございます」

頼りにしちやった。

最悪使い捨て？

お姉様の言い方的に、そう思えない。

情報収集を優先？

「ついでだ、お前達にデバイスを渡しておく。

入門用だからさほど高度な魔法は使えないが、まずはこれを使いこ

なせる様になれ。

インテリジェントデバイスで指導能力強化型だ」

「有り難き幸せでございます」



あれから、2晩が開けた。

主の家族は、それぞれで出かけたり、家族で出かけたりで、昼間は基本的に家にいない。

そのため、主はかなりの時間を別荘で過ごしてる。

お姉様は、主の魔法の練習に付き合ったり、纏めた情報の確認をしたり、八神はやてに会いに行ったり。

アースラからの連絡は、まだ無い。

独自に調査した情報を纏めつつ、お姉様をどう扱おうか迷っている模様。

アースラで思考支援を使い過ぎたお姉様にとって、丁度いい休息期間。

手土産の情報は入手済み。これが使えるかどうかは、アースラからの連絡次第。

その間に、成瀬カイゼからの情報で新たに転生者2名を捕捉。

ついでに、上条当麻似の死亡済み転生者がイマジンブレイカー幻想殺しを使用した事も証言から確定。

手を組むことにしたお姉様の選択は、これらの情報入手も理由だった模様。

今後とも注意は必要だけど、今の所は協力的な姿勢。

現状で問題は発生してない。

うえぼてんが上羽天牙。高校1年生。隣県に在住。意外に遠くにもいた。

外見はFate/Zeroのウェイバー・ベルベットを更にもやし化した感じ。

気弱な優男と言う表現がぴったりな外見で、病弱体質の模様。

父親がボディービルダー。よく比較されるようで、色々と居た堪れ

ない。

魔力量は辛うじてA。近くにいれば見付けられた可能性がある程度。

原作知識は既にある様だけど、不介入を決め込んでる？ 原作開始に気付いてない？

家にあるボディビルのトロフィー2個から、弱いジュエルシードの気配。

解析出来ないため、これが特典の魔導具かデバイスと予想。

これ以上の特典はよく分からない。

金子^{かね}狗太^{こうた}。中学校3年生相当だけど、学校に行つてない。沖縄の離島で幽閉されてる。

こんなに遠くにいると思わなかった。

外見はとある魔術の禁書目録のステイル・マグヌスに似てる気がする。

魔力量は既にオーバース。但し制御能力はとても低い。

魔力を金^{ゴールド}に変換する能力を持つてる。特殊な変換資質？

これが幽閉の理由の模様。犯罪者組織の金蔓。

現時点ではあまり踏み込めていない。危うく見付きそうだった。犬に。

幽閉場所は妙に犬が多い。動物の感覚は侮れない。

やけに犬に懐かれています。何らかの歪んだ転生特典の影響と予想。

2人とも、放置でも影響が無さそう。

当面は様子見。

これで、補足済みの転生者は18人。残るは3人。

2人はよく分からないけどかなり遠い感じとの事。

恐らく地球外。別世界と予想。

1人は全く分からない、殺した2人と同じ感じ、との事。

既に死亡済みの可能性が高い。

真鶴亜美には、近場には他に居ない様だと連絡済み。必要以上の負担は良くない。

私達の作業は、増員の甲斐があった。

幾つかの世界で使い魔を確保。簡易的ではあるものの、情報と魔力の中継が可能に。

時空管理局の本局に手が届いた。

チクアープの分体と電子精霊の送り込みに成功。

近いうちに、ミッドチルダの地上本部にも手を届かせる。

但し、中継の安定性が優先課題。早急に補強する必要がある。

本局で私達を無理なく維持できる水準への強化が、次の目標。

昨日は、高町なのはがジュエルシードを1つ封印。

シリアルは9。発見済みの転生者は誰も対応してない。

別世界にいる未発見の人物？ 死亡済みの可能性がある人物？

今後の接触を警戒する必要がある。

封印時にフェイト・テストロッサが近くにいたけど、手出ししなかった。

原作の結果と同じく、競合は避ける模様。

高町なのはやアースラからは見付かってなかった。

アルフとフェイト・テストロッサの隠蔽技術は称賛すべき水準。

残りのジュエルシードは、地上に2個、海中に6個の計8個。

流れ的に、地上の2個の封印作業が先になる。

現在見付けている転生者は、地上にあるものに対応していない事は確認済み。

つまり、別世界の2人の制限が先に解除になるはず。

どの様に関与してくるのか、それとも関与してこないのか。見えな
いだけにもどかしい。

そして、今。

フェイト・テストロッサが、ビル街で発動直後のジュエルシード、シ
リアル2を鮮やかに封印。

速やかに多重転移で逃走したところ。

高町なのはが、アースラから出る時間も無かった。

発動に偶然遭遇する運の強さに驚愕。

(あーあー、テストテス。

こちらクラーネ。エヴァちゃん、聞こえていますか?)

知らない人の声？

空耳だと思いたい。

空耳だといいな。

うん、きつと空耳。

(おかしいですね。管制通信なんて初めて使いますが、これでいいはずなんです。)

あーあーあー、聞こえていませんか？

アルハザードの空間魔導師兼時間魔導師でエヴァンジェリンス・リゾートもどきを作った、私と同じ世界から来た不死の子猫ちゃんアタナシア・キティ

(やっぱり転生者か宵天！)

貴様からの情報は何なんだこのロリコン!!)

2500年分の幼女情報。

私達の怒りがリミットブレイク。

今なら全員で浪漫砲が撃てる気がする。

むしろ撃ちたい。全力で撃ちたい。

(よかった、聞こえていたんですね。)

実はですね、今からそちらに行こうと思っているのですよ)

(人の質問に答えろこの阿呆！)

答えなくていいから、このまま消えてほしい。

来てほしくない。

(あと5分もしないうちに転移が終わっちゃうんですよ。)

アースラの中に)

(……はあ!?)

(ようやく原作に登場する人物の近くでも自由に動けるようになった様ですし、今度の主はユーノ君にしようかと思ひまして。)

楽しそうでしょうか?)

(ちよつと待て！ 今までどんな状況だったんだ!?)

(待てませんよ、既に転移中ですから。)

それで、せっかくキティちゃんが起きていますから、今の状況を教えてもらおうと思ひまして)

(ああもう、とりあえずお前は原作とアルハザードについて何も喋る

な！

ベルカの魔法も少し送ってやるから、とりあえず古代ベルカ製という事にしておけ！)

魔法の選定？

変態^{ポリゴン}の為に？

やだなあ。

腐れ魔法を送る？

それも、少しでいい。

お姉様もそう言ってる。

嫌がらせ。

採用。

(ふむふむ、キティちゃんは闇の書に関係している事を明らかにする気があるか、既になっているという事ですな)

ユーノ君がアースラにいるという事はだいぶ話も進んでいる様ですが、ブレイクはしましたか？)

(状況ぐらい自分で確認しろ！)

そもそもそれが貴様の役目だろう!!

それに私はエヴァンジュだ！ キティと呼ぶな!!)

(はっはっは、これは痛いところを突かれてしまいましたね)

なるほど、確かにミドルネームやファミリーネームは無いようでしたし、キティちゃんと呼ぶのは適切ではありませんね。

それでは、改めて自己紹介をしましょう。

私は、宵天の歴史書の管制人格、クーネ・ルアソープです)

(アホかー！！！！)

誰だそんな名前を付けたのは!?)

アホだ。

アホですな。

本人なら驚愕。

(もちろん自分で、ですよ)

元のままだと、世界のサンダースさんに失礼じゃないですか) 本人だった。

ダメ人間一直線を自認する変態。

死ねばいいのに。

(そりゃあ失礼だろうよ！)

名前ではなくその人格を叩き直せ！)

(えー、人格を直してしまつたら、アイデンティティを失ってしまうじゃないですか。

ただでさえ転生で人外になっているのですよ?)

(元々その性格か!? 最悪だな！)

貴様は焼く！ 管制特権を駆使してでも焼き去ってくれるわ!!)

全面的に賛成。

焼き去る術式の調査を開始。

(熱いのは嫌ですよ。

ああ、ベッドの上でしたら大歓迎です)

(黙れ変態!!)

ロリコン

(おや、もうすぐ転移が終わりますね。

また会いましょう、子猫ちゃん)

(黙れえええええ!!!)

無印編29話 3冊の書

その頃のアースラの中。

フェイト・テスタロッツサのあまりの早さに、司令部では啞然として
いる人多数。

「す、凄い手際だね……追跡用のサーチャーを出す時間も無かったし。
不意打ちで高度なジャマー結界と多重転移を組み合わせられたら、
追跡なんて……」

「近くにいたのは偶然だろうか……ん？」

エイミー・リミエツタとクロノ・ハラウンが何とか状況を理解し
ようとしているその時、呆然としているユーノ・スクライアの目の前
に、茶色の本が現れた。

宵天の歴史書。

書の姿は知識として知ってるけど、見るのは初めて。

実体具現化した。どう見てもネギまのアルビレオ・イマ。

ジュエルシード、シリアル2との対応も確認。

「な、何だ？」

「ふう、ようやくですか。

「おや？ 随分と騒がしいですが、ここはどこでしょうか？」

「だ、誰ですか!？」

驚くクロノ・ハラウンを無視して、周囲を見回す^{ロリコン}変態。

とても白々しい。

目の前に人が突然現れたからか、ユーノ・スクライアは混乱してる。

「ふむ……こんな時は、あれですね。

「問います。貴方が私のマスターですよ？」

「マ、マスターって何なんですか!？」

F a t e自重。

「というか、全然問いかけてない。

ユーノ・スクライアはますます混乱してる。

「転生者以外に通じるわけがない。

「おや、通じませんでしたか。」

とりあえず、お互いに自己紹介をしましょうか。

私は、クーネといえます。幻の書等と呼ばれることもありますが、
しがない文化収集家です。

魔導具の習性として主を選ぶ癖がありまして、今回は貴方を選ばせて
頂きました。

別に何かを要求する事はありませんので、安心してください。しば
らく、周囲をうろつくだけですのぞ

色々突つ込みどころが満載。

さすが変態^{ロリコン}。

「ぜ、全然安心できないんですが!？」

ユーノ・スクライアに完全に同意。

珍しい事もある。

「おお、そう言われてみれば。

ですが、何もする気が無いというのは本当です。

ところで、今回の主の名を聞かせてもらっても構いませんか?」

「……ユーノ・スクライア、です」

「ふむ、スクライア、ですか。

発掘に命を懸ける部族だと聞いた事がありますが……合っていますか?」

「命を懸けるという程では……」

違うの?」

違うらしい。

……変態^{ロリコン}に乗せられてる。

変態やばい。

「おや、そうでしたか。

ところで、主の今の状態を教えてくださいたいのですが」

「……教えたら、何かやってくれるんですか?」

おや、ユーノ・スクライアの様子が……

怪しい物を見る目が変わってる。

「何もしませんよ。私は、基本的に知的好奇心を満たす事以外は興味
がありませんから。」

その意味では、誰かに情報を漏らすという事も……ああ、1人だけいますね。私を知る情報を知り得る人が。

その人以外に漏れる事はありませんし、本当の秘密については知られないようにします。

それに、その人も情報を簡単に漏らす人物ではないと勝手に信じていますから、問題ないと思いますよ」

何故か、お姉様が変態ロリコンに勝手に信じられてる。

会った事も無い人を信じる変態ロリコン。

まさか、根拠は変態ロリコン的な意味？

「勝手に……ですか？」

ユーノ・スクライアは信じられない、といった表情。

変態ロリコンの発言は、普通はそう思われても仕方ない内容。

「ええ、勝手にです。」

実際に会って話したことはありませんが、きっと大丈夫ですよ」

「そ、そう、ですか。」

えーと、幻の書、でしたっけ？」

「ええ、そうです。」

私自身は何もしませんからね。相応しい名だと思えますよ」

変態ロリコン的な意味で、何もしないでほしい。

情報の収集が任務だったはず。

そっち方面は頑張れ。

「ちよつといいかしら？」

「おや、これは美しい女性ですね。」

こんな美女に声をかけて頂けるなんて、光栄ですね」

こんな変態ロリコンに声をかけるリンディ・ハラウン。

艦長として避けられない任務だけど、ちよつとかわいそう。

「茶化さないでちよつだい。」

私達が知る記録だと、ひっそりと現れてひっそりと消える、となっているのだけれど……どうして、こんなに堂々と姿を見せたのかしら？」

「まずは名前を聞きたいところですが、質問に答えてからにしましょ

う。

こんなに人の多いところでひっそりと現れるなんて、不可能だと思いませんか？

少々タイミングが悪かったと思っっていますよ」

転生者が何か言ってる。

絶対狙ってた。

介入する気が満々に見える。

「……なるほど、そうね。

私は、リンデイ・ハラオウン。この艦の艦長をしています。

質問の続きをしてもいいかしら？」

「ええ、構いませんよ。

美女にお相手して頂けるなら大歓迎です」

ロリコン 変態が何か言ってる。

ロリコン 変態なのに、外見的に年上っぽい女性を口説いてる？

「そ、そう……」

幻の書と言うくらいだし、最初は本の様に見えたから、本来は魔導書の様なものという事であっているわね？

文化収集家と言うくらいだから、集めているのは各地の文化や歴史の情報」

リンデイ・ハラオウンが、微妙に動揺した？

でも、何も言わない間に、情報を集めてた。

何かを確信している様子。

「そうですね。その認識で正しいですよ」

「何かを集める本というと、闇の書を思い出すのだけれど……」

何か関係はあるのかしら？」

「闇の書、ですか。同郷ではありませんね。

ああ、私はあんな暴走が出来る様な力を持っていませんから、ご心配なく」

「そうなの。

では、情報を知る1人というのは、曙天の指令書、エヴァンジュさんという事であっているのかしら？」

「おや、エヴァちゃんをご存じなのですか？」

「ええ。夜天の魔導書から魔法の情報を受け取り、管理するのが役目だと言っていたわ。」

行動から考えれば、文化や歴史に関する情報を集める役目を持つのが貴方なのでしょう？」

「か、彼女はそんなことまで言っていたのですか……」

ロリコン
変態の顔色が悪くなった。

ざまあ。

「この流れだと、貴方も幻の書ではない、本当の名があると思えるのだけれど。」

どうかしら？」

「う、迂闊すぎですエヴァンジュ……どこまで話してしまっているのですか……」

「ここに来た以上、転生者の可能性も高いと考えているのだけれど。」

そろそろ、きちんと返事をしてもらってもいいかしら？」

「ぐっ!? こ、これは難易度が高すぎます。ルナティックじゃないですか。」

誤魔化すとかはぐらかすとかじゃない、もっと根本的な何かを要求されていますよ……」

（エヴァちゃん、どういう事ですか!?)

夜天はともかく転生の事まで、どうしてリンディ提督が知っているのですか!!)

（私が教えたからに決まっているだろう！

話を聞かず調整の時間も無いまま転移する阿呆が悪い、そのまま悶え苦しめ!!)

（それは酷いですよエヴァちゃん!!)

「私は質問に答えたのだし、私の質問は大歓迎なのでしょう？」

リンディ・ハラオウンが、ニコニコ笑ってる。

でも、目は笑ってない。

「……ええ、ここまで知られているのなら、隠す意味もありませんね。」

私の本当の名は、宵天の歴史書です。指摘された通り、文化や歴史

の調査が役目ですね。

もつとも、昔の情報はエヴァンジュに送ってしまったっていて、私自身はあまり覚えていませんが。

立場としては……そうですね、夜天の弟、曙天……エヴァンジュの兄といった所で「誰が兄だこの変態！」^{ロリコン}「ぶ!!」

お姉様、乱入。

次元空間にいる時空管理局艦船の座標を特定しつつ、転移元隠蔽型で防壁を強行突破しての転移。

大サービスでカートリッジ20発。

黒龍を持つ右手にちよつと血が出る程度の傷を生成、併せて無限再生の回復処理を遅延。無限再生の性能は悟らせない。

いい感じの左ストレートが変態の顔面に入った。^{ロリコン}

でも、変態はちよつとふらついた程度。普通の人なら顎や首の骨が碎ける威力だったのに。

もつと強く殴らないと効果が無さそう。

「私達は兄弟姉妹の様なものじゃないですか!？」

「貴様の様な変態が兄だとは断じて認めん！」^{ロリコン}

リロードカートリッジ、フルロードカートリッジ、バーストモード！

やっちゃった。

全カートリッジ、64発の同時ロード。

負傷偽装、右腕に裂傷を生成。

痛い。

無限再生の回復処理遅延は続行。

でも痛い。

「エヴァンジュ、こんな所で何をするつもりだ!？」

クロノ・ハラウンが慌ててる。

司令部での魔法行使。無視は出来なかった模様。

「この変態^{ロリコン}を焼き滅ぼす！ 何だあの2500年分の少女の寝顔写真集は!？」

言い訳は5秒だけ聞いてやるから速やかに死ね!!」

「ご、5秒では何も言えませんか！」

ロリコン
変態も慌ててる。

でも、無視。

「5秒たったぞさあ今すぐ死ぬがいい！」

H・i・l・i・e
s・e・e・l・e
e・x・p·l·o·d·i·e·r·e·n
爆 霊 地 獄

!!

ネタ魔法やっちゃった。

内臓爆発魔法は予想以上に見た目が危険。

高町なのはには刺激が強すぎる。素早いモザイク処理を自画自賛。

「はー、はー、はー……」

くそつ、やはり一気にロードするのはきついな……」

「それはそうでしょう。エヴァちゃんは無茶をし過ぎです」

「なっ!?」

ロリコン
変態が後ろに現れた。

お姉様も驚く程の隠蔽技術に驚愕。

むしろ、私達の探知魔法すら掻い潜る技術は驚異。

見た目、無傷。

無念。

「私は、幻の書と呼ばれる存在ですからね。

身を護る為にも、これくらいは何とかします」

飛び散ったモノが、綿になっている。

等身大抱き枕？

趣味が悪い。

「その右腕は大丈夫なのかエヴァンジュ……?」

クロノ・ハラオウンが心配そうに見てる。

お姉様に作った傷はかなり大きい。

今でも血が流れてる。

くだらだら。

「ん？ ああ、私にも無限再生の様な機能はある。

痛いだけだ、そのうち治るさ」

「しかし、涙目に見えるんだが……」

「エヴァちゃんも女の子ですね。涙が出ちゃいましたか」

「いくら治ろうが痛いものは痛いんだ思い出させるな！」

クロノ・ハラオウンは、心配そうにしていたから問題ない。

ロリコン変態の顔面に再び左ストレート。

また綺麗に決まった。

今度は壁まで飛んでった。

「そ、そうか……それで、そっちの男の言っていたことは正しいのか？」

「ん？ 宵天か？」

誠に、本気で、この上なく残念な事にな。

はあ……何でこんな中身になったんだか」

クロノ・ハラオウンは、とりあえず怪我については意識の外に追いやることにして、事実確認を優先することにした模様。

でも、お姉様は疲れた表情で頭を押さえ、ため息をついてる。

こんな姿はとても珍しい。

「嫌ですねぇ、愛のなせる業じゃないですか」

ロリコン変態の復帰が早い。

澄ました笑顔が気持ち悪い。

「だからと言って、何故幼女の寝顔なんだ！」

さつき送ってきたのはどう見てもカリムの寝顔じゃないか、聖王教会にいて貴様は何を見ていたんだ!？」

「愛すべき少女の姿ですよ。」

聖王教会の機密情報を探る気はありませんし、公式な情報は一緒に送ったじゃないですか。

何か問題でも？」

「寝室に入った時点で犯罪者だと気付けと言っているんだこの変態!!」

「最初は書斎に居たのですよ？」

カリム自身が寝室に持ち込んだだけです」

「だから悪くないとでも言うのか!？」

「そのフェレットもどきも、なのはちゃんという少女の部屋に入り込んでいるじゃないですか。」

似たようなものです」

「貴様の悪意が問題なんだ!!」

「悪意じゃありません。愛です。」

間に1文字足さないうでください」

「自覚が無いならなお悪いわ!!」

お姉様が、感情に任せて暴走してる。

珍しい。

いいぞ、もつとやれ?

全力で支持を表明。

「まあまあ、エヴァさんも少し落ち着いて。」

えーと、クーネさんと呼べばいいのかしら?」

流石にリンディ・ハラオウンが止めに入った。

でも、あれだけ騒いでいたのに、結構遅い。

様子を見ていた可能性が高い?

「ええ、そう呼んでください」

「エヴァさんとクーネさんは、共に転生者で古代ベルカ製の魔導具仲間、だけど面識はない、という事でいいのかしら?」

「面識が無いと言うか、要らん情報まで送りつけられていただけの關係だ。」

転生者であろう事も認めるが、こんな変態ロリコンが仲間だとは断じて認めん!」

「おやおや、随分嫌われていますねえ」

「貴様のその性癖のせいだろうか!!」

お姉様の叩きつける様なハイキックが顔面に命中。

変態ロリコンは吹き飛んだ挙句、壁まで転がっていった。

いい気味。

でも、普通に立ち上がる復帰の早さはやっぱり驚異的。

「話が進まないから、それくらいにしておいてもらえないかしら。」

ええと、クーネさんは、原作というものについてどれくらい知識を持っていいのかしら?」

「頑張って覚えているようにはしていましたが、細かな点はあやふや

になっていると思いますよ。

何と言つても、2500年以上前の記憶ですから」

「そう。それなら、夜天の魔導書を何とかしようとするのことにに関して、何か思う事はあるかしら？」

「出来れば闇を祓ってあげたいところですし、問答無用で消滅させるなどといった物騒な話でなければ、是非何とかしてやってほしいですね。」

夜天は私にとつても姉の様な存在ですので、出来ればきちんとした形で会いたいと思いますよ。

実際に動くのは……エヴァちゃんですかね？」

「ふん、今の連中で何とか出来るならとつくに直っているだろうし、貴様は役に立ちそうにないからな。」

私以外の誰が動くと言うんだ」

お姉様は不満そう。

変態が起きていたのは、ロリコン変態からの情報で確実。

何とかする気があつて、何とか出来るなら、とつくに何とかなつて
る。

「他の転生した人達はなんですか？」

いくらアースラの人とはいえ管理局に話をしたという事は、私とエ
ヴァちゃんだけではないという事でしよう？」

「ああ。どうやらジュエルシードによる転生らしくてな。」

今のところ、18……いや、お前が増えたから19人が確認済みだ。

その内3人は既に死んでいるがな」

「おやおや、殺したのですか？」

「私が殺したわけではない。転生者同士のイザコザだ。」

マトモに役に立ちそうな転生者は……正直、少ないな。オリ主様を
どうしたものか、正直迷つてもいる」

本当に迷う。

それと、ロリコン変態の扱いについて。

「オリ主様……ああ、踏み台な人達ですね。」

とりあえず踏みますか？」

「踏んでどうしようと言っただ。」

「お前なら私に踏まれたら喜びそうだが」

「ええ、それはもう全力で……おや、どうしましたか？」

「ロリコン変態の周囲から、人が去った。」

特に、高町なのはは隅の方でクロノ・ハラオウンとユーノ・スクラ
イアに守られてる。

高町なのは自身は、不思議そうな表情。

頭の上に大きな疑問符を浮かべるといい感じに。

「ロリコン貴様……マジン変態の上に変態だったのか！」

「話を振ったエヴァちゃんがそれを言いますか。流石ですね」

「何が流石だ、早急に消え失せろ！」

「そうですか。それでは、少々退室しますよ。また会いましょう」

「二度と来るな変態！」

無印編30話 出口はあっち

その後、お姉様は転生者対策要員としてアースラに搭乗、高町なのはと行動を共にすることに決まった。

当の変態は、そのままアースラから姿を消したりしてる。

何をしたいのか、本当によく解らない。追跡も困難だから動向が掴み辛い。

だけど、今のところはお姉様や主、高町なのはにも纏わりついてない事は、成瀬カイゼの証言から間違いない。

変態なのに。

成瀬カイゼレーターによると、変態は日本をうろついている模様。

具体的には漫画喫茶。その中はジャミングが酷くてサーチャーでは情報が取れない。

だけど、こんな短時間で真つ当な現金を得る事は無理なはず。今までミッドチルダにいたはずだから、支払い能力があると思えない。

まとめると、変態で変態で犯罪者な二次元趣味者らしい。

消滅すればいいのに。

一方、何がしたいのか分かりやすいリーゼアリアが、ヘルパーとして八神はやて宅を訪問。

部屋が綺麗なことに気付くも、予定通りの説明。

ヘルパー志望の友人が出来て掃除を手伝ってくれたと聞いたリーゼアリアは、何だか微妙な表情。

良かったじゃないと言っただけで、問い詰めはしなかった。

こちらの認識阻害を一部耐えた可能性はあるけど、全体としては勝利？

認識阻害に耐え切られた場合に備えて、八神家のチャチャは退避済み。不要な情報は渡さない。

リーゼアリアに仕掛けた情報収集魔法は、やっぱり無くなった。発見され、解除された可能性が高い。偽装が間に合っってよかった。

密度の上がつているアースラの搜索網を見事に回避して現れ、去っていく技術はやはり見事。

まだアースラに見付けてもらう必要は無い。とりあえず、問題ない。

その頃の主は一人、翠屋でお茶。

お姉様の指示で、今日からチャチャマルが主の護衛担当に。

翠屋という転生者が集まりやすいところに一人で常駐させるのは、やはり許せなかった模様。

高町家のチャチャもいるのに、相変わらずの過保護者。

でも、チャチャマルは姿を見せてない。陰からの護衛に徹してる。

元々護衛対象。優先順が変わっただけで、体制としては変わってない。

アースラの監視も、今は無い。

高町なのはがない上に、主と高町家のチャチャがいる。

お姉様にばれる上に妨害としか思えない事故で情報が取れない監視を続行するより、ジュエルシードやらの搜索に注力する事を選択した模様。

そうこうしているうちに、間宮萬太が接近中。

出入り禁止を言い渡されていたのに。

要注意。

店内に原作娘は高町美由希を含め誰もいない。

高町桃子と高町家のチャチャは厨房。表にいない。

主は高町士郎に、何かない限り手出し不要と話を通した。

主は、主の責任で対処する決意。

「ちわーっす……お!? 木乃香発見!!」

発言が痛い。

手を伸ばしてきた。

主が腕を掴んだ。

ナデポ行使未遂の現行犯。

「踏み台な人は、身の程を弁えるべき」

見た目は無詠唱、魔法陣無し、デバイス無しでの封時結界。

実際は体内展開だけど、外から見えない以上どうでもいい。

不意打ちに最適、練習の成果が見える。

間宮萬太は驚いて動けない。

掴まれた手も振りほどけてない。

軟弱軟弱ウ。

「な、何だ!?!」

「封時結果。原作を知っているのなら理解して」

「くっ……お前も転生者か!?!」

間宮萬太が焦ってる。

でも、それ以前の問題が。

「理解が遅い。違う物語の顔がある時点でおかしいと思うべき」

「な、何なんだよお前!?!」

全然木乃香じゃないじゃないか!!」

「当然。私は木乃香になった覚えは無い。

木乃香に似た外見になった自覚はある」

「くそっ! 何だってんだよ!!」

ここは俺の物語じゃないのかよ!?!」

あり得ない。

こんな軟弱で自覚のない主人公はいらない。

現状の主人公は、強いて言えば高町なのはお姉様と主の3人。

「絶対に違う。そもそも、転生者は推定21人いる。

転生したのはジュエルシードのせい。望みも歪んだ形で叶えられ

ている」

「へ!?! ……エミヤの能力がうまく使えないのはそのせいか!!」

チクシヨ、あの胡散臭い神め、騙しやがって!!」

胡散臭くても、神だと思ってた?

お姉様や主は、神もどきとしか言っていなかったのに。

信仰の有無の違いの可能性も?

というか、ジュエルシードと言ったのに、それはスルー?

「あれは神じゃない。多分、ジュエルシードの意思が適当な姿を見せ

た物。

この世界のジュエルシードを見る限り、あれはインテリジェントデ
バイスに近い魔導具。

結果から推測すると、オリ主やテンプレ転生の願望が歪んで叶えられた様に見える」

「そんなの信じられるか！」

「だいたい、騙しやがったのは事実なんだろう!？」

「私達を知る限り、広い意味なら騙したとは言えない範囲に留まっている事が殆ど。」

自分が主人公だと言われた？

能力を使いこなせるよう願った？

そもそも、詳細な指定は不可と言われていたはずだけど、指定していない？

他人を罵る前に、現実を見直すべき」

本当に広く見る必要がある。

だけど、一応嘘にはなっていない？

嘘ではない証拠も、嘘だと断言できる証拠もないものに付いては、評価を保留中。

「そんなの納得できるか！」

「じゃあ、エミヤの能力が使えない理由を言ってみろよ！」

「それなら、事実を確認してみる。」

「要求した内容は？」

「当然、エミヤの能力だ！」

英霊じゃない衛宮士郎の可能性。

そもそも努力で成り上がった人物。

衛宮士郎の才能を貰っただけなら、凡人。

「投影や無限の剣製は？」

「ナイフとか小刀の投影しか成功した事ねーよ！」

何かやけに疲れるし、何でいろんな剣が出せねえんだよ!？」

本物の剣を知らない可能性。

視認したものが剣ではない可能性。

疲れを感じるといふ事は、魔力不足の可能性も高い。

「でも、刃物を出すことは出来ている。」

エミヤの能力は、視認した剣の構成や本質を捉え、複製し貯蔵する

能力。

ナイフや小刀を剣と見なしてくれる分、親切設計だとすら思える。今まで、どれだけの「本物の剣」を見てきた？」

「本物の剣何て見る機会なんてそうそう無いじゃねーか！」

美術館やらにあるのはなんでか対象に出来ねーし！」

「展示されているものは刃引されているものや模造品も多いはず。

きつと能力の問題じゃない。

環境の問題である可能性があり、別の刃物で成功している以上、能力を貰っていないと言う事は出来ない」

「ありえないだろ!？」

セツトだろ普通は!!

こんなの最悪だ!!!」

セツト？

何と何が？

流石踏み台様、意味不明。

「その辺に本物の剣がある環境の日本が望み？」

随分とおかしな世界を望んでいるという事になる」

「は？ 何でそうなるんだよ!？」

「成功する刃物がある以上、複製し貯蔵する能力自体は機能していると考えられる。

貯蔵している剣は、どちらかと言えば所有物や記憶。能力とは言い辛い。

つまり、環境の問題かもしれないと言われて普通はセツトだと答えたのだから、能力の為に環境を変えろと言っているのに等しい。

要求を満たすために必要となるのは、その辺に本物の剣がある環境。少なくとも、現代日本ではその条件を満たせない。他の世界や他の国に行くしかないけれど、原作に関わるならその選択肢は難しい。要求の時点で世界が壊れるか、原作に関わらないか、言明されていない要求を無視するか。

原作への介入も望むなら、最も穏便な方法を選んでもらえている。ジユエルシードとしては、歪んでいるとは思えないくらいに親切」

「な、なん、で……や………」

「例えば私は冷静さを望んで感情を失い、足も麻痺して車椅子生活。

人間不信で日々怯えて暮らしている人もいる。

日常生活も満足に出来ずに保護施設にいる人もいる。

幽閉されて自由に出歩けない人もいる。

人でなくなつた者もいる。

普通に人として生活出来ているだけでも、最悪と言えない程度には
幸せと言える」

「う……あ………」

間宮萬太、絶句中。

それにしてもこの主、ノリノリである。

「それに、エミヤは天才型ではなく努力型。

英霊でない衛宮士郎は、へっぽこと呼ばれるくらい貧弱。

長い努力と苦難の年月が英霊としての実力に繋がっている。

努力はした？

苦難はあつた？

どちらも無いなら、実力が付くはずがない。

仮に能力を持つていても、使うのは自分自身。使いこなせな

ければ意味が無い。

一般人がいきなりレース用の車を運転しても事故を起こすだけ。

まだ事故を起こしていないなら、安全設計の車にしてくれた事に感

謝している」

「だ、黙れ！

僕が、主人公なんだ!!」

やっぱりオリ主様。

むしろ踏み台様。

性格改変を受けてるとしか思えない頑固さ。

(反省する様子が無いから、排除も考える。問題ない?)

問題ない。

ここまで異常な思考をしてるなら、むしろ排除推奨。

「力を貰っただけで主人公になれると思いがっているから、踏み台

と呼ばれる存在に成り下がる。

ここはリリカルなのはの世界、本来の主人公は高町なのは。会うために翠屋に来た以上、それは知っているはず。

なのはを主人公から引き摺り下ろすなら、相応の力が必要。意志の力かも知れない。

戦闘面での実力かも知れない。

経済力や交渉力など、他にも力は色々ある。

だけど、どれ一つをとっても、なのはに勝てるように使っている様に見えない。

大樹事件の前に、翠屋に来た姿を見た覚えがある。

なのはは既にアースラに行っている。

その間、なのはを超えるために何かしていた？

本当に主人公になりたいなら、少なくともアースラが来る前に何か手を打つべき。既に遅すぎる。

隣に立ちたいなら、相応の実力を身に着ける努力をするべき。

支えたいなら、自分に出来る事を見付けるべき。

共に生きたいなら、秘密を打ち明けられるくらい親密になるべき。

一人で何とかしたいなら、なのはより先に手を打てる実力者になるべき。

何もせずに居座り続ける主人公なんて、誰にも望まれない。

そんな主人公の物語は、古本屋のワゴンに10円で並ぶ運命」

「だったら、あんたはどうなんだ！

何かやってんのかよ!!」

「私は、魔法を知ってから師匠に教えてもらっている。

寝食と学校関係以外の時間は、可能な限り魔法の練習に充てている。

だけど、なのはに勝つどころか、勝てないと断言される程度の差がある。

ジュエルシードとの戦闘に参加する意味が無い以上、なのはの隣で戦う資格は無い。

だから、ここで転生者対策をやっている。

私でも勝てる相手だから。
転生者の危険性を知っているから。
なのはや高町家の人達から、それなりに信用される事が出来たから。

何もしていないと言うのは、そういう意味もある。
突然現れて俺の嫁とか言い始め、娘を不快にさせる男を認める父親はいい。

出入禁止とまで言われているのにまた来るような不審者は、警察に突き出されても誰も同情してくれない。

一般常識で考えればすぐに解る事」

勝てないって言ったのは、少々前の話。

今なら、勝てる要素は増えてる。

でも、最近主に比較評価を言っていない？

微妙だけど、主の認識的には嘘にはならなそう。

「ここは物語の世界なんだ！

ここの常識なんて知らないし、主人公に常識が通用するわけないだろ!？」

超理論来た。

何という暴君。

特殊な魔力反応は無いけど、常識の認識を阻害されてる可能性も。

ジュエルシードめ、無茶しやがった的な。

「私は、転生はジュエルシードのせいだと言った。

つまり、元の世界もリリカルなのはの世界だった可能性が高い。

それに、前世と現世の一般常識に、特に違いは見当たらない。裏の世界、魔法や異能に関わりが無ければ、全く同じと言ってもいい。

両方知らないという事は、余程の世間知らずという事になる。

元々、私達の存在はその辺の通行人と変わらない。

ジュエルシードに係わるとしても、事件の際に落ちてきた瓦礫で怪我をする市民Tが相応。

どんなに良くても、大樹の後は描写されることの無かったサッカーチームのキャプテンやマネージャーと同じ、退治されて終了する立

場。

そこから主人公になりたいなら、努力をして必要なフラグを立てると言っている。

なのは達に嫌悪感を与えて、敵対フラグを立てている場合じゃない。

翠屋に出入禁止なんて、絶縁フラグを立てている場合でもない。私にすら対処できない貧弱さで戦闘に参加なんて、死亡フラグを立てようとする場合ではもつとない。

人を見下して、孤立フラグを立てるなんてもつての外。

既に立ててしまっているフラグを全て折った上で、必要なフラグを今から立てられると思うなら、努力するべき。

少なくとも私と師匠は、自力でフラグを立て、現れたフラグを回収してきた。

簡単に追い越せると思わない方が良い。

無理だと思うなら、物語だという事を忘れて、ここを現実として普通に生きるべき。

なのはや魔法の存在を知らなければ、そして、海鳴市等の地名の違いが無ければ、この世界は前世と何も変わらない。

この世界を物語と見下すなら、ジュエルシードが存在した前世も物語だと見下す必要がある。

前世が現実だと思えば、現世も現実。

何も、変わらない」

「こんな……信じない、僕は信じないぞ!!」
切れた。

殴りかかってきた。

主は軽く受け流し。

「がはっ!?!」

間宮萬太は背中から地面に放り出された。

やっててよかった護身系柔術。

だけど、説得は無意味としか思えない。

「足が動かない小学生の私相手に、その体たらく。」

これでも、まだ私は封時結界以外の魔法を使っていない。
当然、攻撃魔法も知っているし、使える。

この差が、現実。

自分が主人公になって、何が出来るか考えた事は？

ジユエルシードは対処出来る？ 碌に魔法も使えないのに？

なのは心の傷は？ 嫌悪感を与える事しか出来ていないのに？

フェイトの孤独は？ ナデポなんてものに頼ろうとしているのに

？

守護騎士は？ 自分の身すら守れそうにないのに？

闇の書は？ 蒐集された挙句、暴走する姿を黙って見ていただけ？

スカリエッティは？ ナンバースは？ レリックは？ レジアス

は？ 最高評議会は？

思いつがるのは勝手だけど、行動の結果に責任を持つべき。

例え主人公でも、それは変わらない。

力を使い、異端と呼ばれても。

力を使い、誰かを殺すことになっても。

力を使い、誰かに恨まれても。

最終的に、誰かに殺されても。

最終的に、逃げ出したとしても。

他人に無いモノを使い、主人公であることを望むなら、その過程や

結果を受け入れる覚悟が必要になる。

元の生活に戻るなんて考えない方が良い。

本当に、今の生活を捨てる事が出来る？

本当に、それだけの覚悟があると言える？」

「う……うわああああああ!!」

「出口はあっち。間違えないで」

間宮萬太、逃亡。

マジ泣きである。

外には全力で逃げ回る彼の姿が。

「これで心が折れてくれれば、エヴァが余計な物を背負わずに済む。

悪い方に行く様なら、その時に別の対処法を考える」

全面的に賛同。

手段が確立出来れば、能力の強制封印も選択肢として検討。
記憶封印も候補？ 元々狂った思考。馬鹿になる程度の誤差は気にしない。

当面は監視を続行。

踏み台系の人の精神面の詳細調査も行うべき？

思考誘導、認識阻害の可能性が濃厚。

主の感情消失に類似する干渉方法の可能性もある。

今日の調査では、それらしい反応を検出できなかった。

残念。

「お願い、よろしく」

無印編31話 翼

変態^{ロリコン}が去った後の、アースラでのお話。

お姉様とリンディ・ハラオウンの簡単な打ち合わせの後、ユーノ・スクライアの緊急検査が行われた。

変態^{ロリコン}の主になつたらしいという事で、何か身体的、精神的、魔力的な影響が出ていないか調べる必要があると判断。宵天も真の主だと不老不死化の可能性が否定出来ないけど、とりあえずお姉様の主と同じく不老については、可能性があると情報公開。

結果、現状ではほとんど影響なし。ごく僅かな魔力の流れが検出された程度で、念話が繋がりやすい、居場所を把握しやすいくらいと判明。恐らく仮の主の状態で抑えられている様子。

皆でホツとしつつも、気疲れした事もあって、比較的早い時間だけど休むことになった。

お姉様への間宮萬太に関する報告は、翠屋に来て主が理詰めで言い負かして追い払った、と伝えて終了。一部はお姉様がダメージを受ける内容、詳細な報告はしないと主と相談のうえで決まっている。

と言うわけで、翌朝。

お姉様は、高町なのはとユーノ・スクライアを連れて、海鳴市の公園へ来てる。

何故か変態^{ロリコン}もいる。見たくもないのに。

ここに来た理由は、ジュエルシードがあるから。

真鶴亜美から得た位置情報、陸上にある最後の1つ。

原作でも高町なのはが確保する分だから、教える事に問題は無い。

「フェイトが持って行った分の場所も分かっていたからな。」

協力体制がもつと早く出来ていれば、それも確保出来たんだぞ？」

周囲に人影は無いけど、お姉様は黒龍を起動してカートリッジを2発ロード。

三角の魔法陣を見せながら、封時結界を展開してる。

「そ、そうだったんですか？」

「探すの、あんなに苦労してたのに……」

「土産の情報として調べておいたんだ。

それなりに早く連絡してくると思っていたからな」

お姉様の言葉に驚くユーノ・スクライアと、落ち込む高町なのは。

それでも手は動かし、砂場の中に埋もれたジュエルシードを掘り出して、封印。

無事終了。

「ん？ 次元干渉か？」

「え？ なになになにに!？」

空間が裂けた。

お姉様はさり気なく黒龍をリロード。

ユーノ・スクライアは静かに警戒中。

高町なのはは慌ててる。というか、何が起こってるか理解してない。

空間の先の座標が探知出来ない。

お姉様の別荘を外から探ろうとした感じに似てる。

中から人？

全体的に白い。

翼がある。

気を失ってる。

怪我もしてる。

体力の消耗が酷い様子だけど、魔力はあまり減ってない？

現時点で、高町なのはに迫る保有量。AA+かAAAくらい。

持っているのは、折れた太刀？

ずいぶん大きい。野太刀の可能性も。

先ほど封印したジュエルシード、シリアル12との対応は確認。

「このおでこに白い翼は、どう見ても桜咲利那ちゃんですね。

髪が白いのは、染めていないせいでしょう。

彼女も転生者でしょうね？」

「ロリコン変態は黙れ。」

しかし、ここまであからさまな制限の解除もあるのか……

リンディ、見ているだろう？ こいつをアースラに連れて行って構

わないか？

無理なら私が保護するが」

『見えているわ。恐らく次元漂流者でしょうし、こちらの職務の範疇でしょう。』

一旦、全員で戻ってきてもらえるかしら？』

『ゲートを作ります。少し待っていて下さい』

空中にリンディ・ハラオウンの映像が登場。

オペレーターみたいに、音声だけでもいいのに。

「そうか、わかった」

「その小さな体で運ぶのは苦しいでしょう。私が優しく抱きかごおつ！？」

お姉様の投石。

ロリコン 変態の顔面にかいしんのいちげき。

ロリコン 「変態は喋るな動くな存在するな」

「おやおや、これは随分な言われようですね」

ロリコン 笑顔で鼻血を垂らす変態。

変態度が急上昇。

見たくない。

改心の一撃を放ちたい。

殴って矯正出来るなら、全力で殴る。

『ゲートの準備が出来ました。転送するので、集まってください』
「ああ」

お姉様は桜咲刹那もどきを浮遊魔法で浮かせると、静かにゲートへ。

高町なのはとユーノ・スクライアも続き、ロリコン 変態は最後にそつとついてきた。

そして、一行はリンディ・ハラオウンのいる司令部へ。

桜咲刹那もどきはお姉様が浮かせたまま、ユーノ・スクライアが回復魔法をかけてる。

元々、傷はそれほど深くない。

意識が回復するのは時間の問題。

「さて、ジュエルシードを封印した直後に現れた彼女だけれど……転生者、という事でいいのかしら？」

リンディ・ハラオウンからの質問は、明らかにお姉様を向いてる。というか、お姉様と変態ロリコンの会話を聞いていたら、これ以外の結論が出ない。

「見た目を考えると、恐らくそうだ。

私と同じ物語の登場人物の外見なんだが……その前に、ちよつと気になる事がある。

翼を持った種族に心当たりはあるか？」

割と心配な点。

異端じゃない場所の有無は大事。

「いいえ……それこそ物語ぐらいにしか、翼を持つ人に心当たりは無いわね。

もしかしたら、情報が制限されている管理外世界にいるのかもしれないけれど」

「そうですね。使い魔や疑似生命体などの人工的なもの以外では、私も動物などの特徴を持つ人は見た事ありませんよ。

そんな人を見付けていたら喜んでエヴァちゃんに記録をお願いしまするところですが、送った情報に該当するものは無かったですでしょう？」

「黙れ変態、貴様の情報など調べる気にもならん。

だが、こいつはここでも異端か……ジュエルシードの悪意も趣味が悪いな」

やっぱり一般的じゃなかった。

でも、そんな特殊な存在も用意したジュエルシードの超性能に驚愕。

もはや妄想具現化の領域。腐れ魔法の塊とは思えない。

「う……」

桜咲刹那もどきが目を覚ました。

周りを見回してる。

状況を理解してない？

「目が覚めたか。

さて、ここがどこか理解できるか?」

「エヴァさん、ここは時空管理局の艦船の中だから、私達に任せてもらえないかしら?」

リンデイ・ハラオウンがちよつと怒ってる?

明らかに時空管理局の勢力圏。

お姉様がでしゃばり過ぎた。

「建前としては確かにそうだな。必要だと思ったら口を出すぞ?」

「ええ、それは構わないわ。」

さてと、私はリンデイ・ハラオウンといって、ここで一番偉い人をしてるわ。

まずはお名前を聞かせてもらえないかしら?」

「え……と、はい、私はセツナ・チェブルーといいます。」

すみません、ここは一体……」

なんだか、おどおどしてる。

状況を全く理解してない?

「時空管理局の次元空間航行艦船、アースラの中なのだけれど……分かる言葉はあるかしら?」

「時空、管理局……?　じげんくうかん……?　航行艦船……船、ですか?」

明らかに、チラチラとお姉様を見てる。

助けを求めてる?

魔法少女リリカルなのはを知らない?

ロリコン変態を見ないのは、アルビレオ・イマを知らないから?

「なるほど、理解出来ていないようだな。」

ならば、魔法少女リリカルなのは、魔法先生ネギマ。

この名前に聞き覚えは無いか?」

「あ、両方とも名前くらいは。」

ネギマは少し知っています。えーと、エヴァンジェリンさん、ですよね?」

やっぱり変態ロリコンが魔法先生ネギマの登場人物に似ている事に気付いた様子が無い。

初期の話しか知らないせい？

もはや覚えていないか、興味の薄いキャラクターだった可能性も。

「外見としてはそうだな。」

一応訂正しておく、私の名前はエヴァンジュだ。略称は同じだからエヴァとでも呼ぶといい。

私が見つかったという事は、自分の外見が桜咲という事も分かるな？」

「はい。桜咲刹那、ですね。」

良かった、やっと話が通じる人に会えました……」

明らかに安堵の表情。

リンディ・ハラオウン形無し。

セツナ・チエブルーは、今まで孤独な生活を強いられていた？

というか、今まで居た場所はどこ？

転生者以外に、魔法先生ネギまの話は通じない。

秘密を抱えたまま、見知らぬ地で孤独を感じていた可能性も。

オリ主ヒヤツハーをしていたのなら話は変わるけど、そんな感じの性格ではなさそう。

「安心しているところに悪いが、嬉しくない情報だ。」

把握している世界に、翼のある種族は心当たりが無いらしい」

「……えっ？」

ということは、桜咲の刹那みたいに、迫害対象……ですか？」

セツナ・チエブルーのテンションが一気に下がった。

心配そう。

不安そう。

「その翼は隠せるのか？」

「それは大丈夫です。寝る時にも邪魔になるせいとか、消せるんです。」

でも、隠さないといけませんか……綺麗ですし、結構自慢なんです
が」

白くて大きな翼。

確かに綺麗。

勿体無い。

「確かに、隠すのは惜しいですね。自慢するのも納得の、天使の様な美しさですから。」

「ぜひもふ「黙れ変態」」

お姉様の声が、1オクターブ下がった。

ぱしゅつ、と軽い音がして、黒龍から余剰魔力が放出された。

ロリコン
変態は氷漬け。ざまあ。

ついでに周囲の気温もちよつと下がったけど、気にしない。

「とりあえず隠す必要があるかどうかは、今後次第だな。」

と言うわけで、いくつか質問や確認だ。

まず、前世の記憶を持ち、胡散臭い神っぽい何かに願いを言って、転生した。

「この説明で間違った点はあるか？」

「いえ、まさにその通りです。」

空を飛びたいとか、剣術を使いたいとか、主人公達と同じくらいの強さとか言った覚えがあります」

空を飛びたいが、翼。間違いない。

折れた太刀を持つてた。何らかの剣術を使えると見ていいはず。

主人公と同じくらい……実力が不明。桜咲刹那相当なら、高い戦闘力を持つてるはず。

魔力量は高町なのは迫るものがある。鍛え方次第では、同程度の強さになるのは充分可能と思える。

同程度を目指すなら、若干少ない魔力量を剣術で補う形になる。シグナムに近い戦闘形態が完成形？

「まさに桜咲が適役の条件だな。」

次だ。ここがリリカルなのはの世界だという事は知っているが、その内容は知らない。

「この認識であっているな？」

「はい、間違いありません。」

魔法少女という名前から、ファンシーな内容を想像していました。

今までいたのは、どちらかと言えばゲーム的なファンタジーでした
が……」

ファンシーな内容という事は、ふりふりの服装に変身するのが希望だった？

ゲーム的なファンタジーも気になる。
れべるあつぷ的な世界？

もしかして、召喚獣や精霊も？

「くっ……色々と突っ込みたい上に途轍もなく興味深いが、その話は後にするぞ。」

リリカルなのはの登場人物に対して、何か思うところはるか？」「いえ、全く。外見も性格も知らないなので、何か思うにも情報が足りませんし。」

ここも何だかメカメカしいですし……うーん、やっぱりどんな世界で、どんな人がいるのか想像できないです。

会ってみてどんな人か判断する事になるので、別に登場人物かどうかは関係ありません」

タイトルくらいは知ってる、という表現と矛盾しない。

本当に内容を知らない模様。

「では、ここが物語の世界と認識した上で、何かしたい事はあるか？」
「特にありません。」

むしろ、元の日本みたいに平和な国に行けるなら、ゆっくりしたいです。

今までいた世界が命懸けのゲームみたいな感じで、生き残る事で一杯でしたから」

外見的には、難しい？

桜咲的な意味では、翼を隠せば何とかなるかも。

「ならば、ニコポやナデポと言った能力を持った、他の転生した者が近づいてきたらどうする？」

「えーと……それは、どんな能力ですか？」

用語が通じてない。

二次創作系の話にも疎い？

「済まない、通じなかったか。」

ニコポは、笑みを向けた相手に惚れられる能力。

ナデポは、頭を撫でた相手に惚れられる能力。

概ねこんな感じに思えばいい。要するに惚れ薬の様な能力だな」

「そんな、人をモノの様に扱う能力があるのですか？

そんなものを望むような外道は、人類の害悪です。

迷わず切り捨てます」

言い切っちゃった。

殺人予告。

でも、何だか頼もしい。

「よし、合格。お前は私が守ってやる。

魔力もある様だから、私が知る系統で良ければデバイスも作ってやるし、魔法も教えてやるぞ。

拠点は日本だ。地名は少し違うし前世より10年近く前のようだが、前世の日本にかなり近い。

元々に近い生活は可能だ」

「本当ですか!？」

ありがとうございます、是非お願いします!!」

セツナ・チエブルーは喜んでいる。

犬ならきつと、ぶんぶん尻尾を振ってる。

むしろ、そんな姿が幻視出来そうな勢い。

「ええと、ちよつといいかしら？」

地球で翼を隠して生活するより、ミッドチルダの方が過ごしやすいんじゃないかしら。

使い魔みたいに明らかに人じゃない方々もいるから、翼があっても迫害はされないでしょう。

魔法が公になっているから、場所を選んできちんと手続きをすれば、個人で空も飛べるし」

リンデイ・ハラオウンの勧誘!

「うっ、そ、そんな所が……」

でも、日本も捨てがたいですし……ううう」

セツナ・チエブルーは動揺した!

「拠点については、慌てずにゆっくり考えればいいさ。

いきなり言われても、情報不足では判断のしようも無いだろう？
知識が無い場所と故郷に似て非なる場所は、比べられないだろうかな。

実際に両方見てから考えればいい。それくらいの猶予はあるはずだ」

「そ、そうですね。」

情報収集は基本でした」

何だか、ゲーム的な思考をしてる？

だけど、安易に選択する事は避ける程度の冷静さはある模様。

あとは、うまく誘導すれば問題ない。

「さて、そろそろ人物の紹介をしておくぞ。現状把握のための情報でもあるからな。」

その小さい女の子が、原作タイトルにも名前がある主人公、高町なのはだ。この場にいる唯一の地球人だな。

隣の小さい男の子が、ユーノ・スクライア。地球ではフェレットの姿で、要するにマスコット役だ。

さつきも名乗っていたが、ここで最も偉い艦長のリンディ・ハラオウンと、その息子で2番目に偉いクロノ・ハラオウンと、3番目でクロノの補佐で通信担当のエイミィ・リミエッタの3人くらいは覚えた方がいいか。

ここまでの5人は、リリカルなのはに重要な立場で登場する人物でもある」

「は、はい。」

そうなるよ、ここは原作で登場する場所、という事ですね」
理解が早い。

ゲームやアニメ自体を知らないわけではない模様。

「そうだな……次元世界や次元空間の説明が難しいな。」

有り体に言えば宇宙船の中だ。詳しくは後で教えてやるから、とりあえずそう理解しておけ」

「宇宙船、ですか。」

宇宙戦艦長門やスタートラックみたいなものだと思えばよいとい

う事ですね」

こっちは通じた。

むしろ、男らしい品揃え。

「……即座に出るのがそれなのか。」

失礼だが、前世は男だったりするのかな？」

「はい。女性の体って、色々面倒ですね」

あっさり認めちゃった。

お姉様の仲間を発見。

主に性転換的な意味で。

ついでに人外的な意味でも。

「そうか……私も前世は男だった。

ついでに、人間でもなくなっている。吸血鬼の様な能力を望んだせいだろうか？」

「本当ですか!？」

こ、こんな苦労を分かち合える相手と会えるなんて、今日は人生最高の日です……」

がっしりとお姉様とセツナ・チェブルーが握手してる。

仲間意識？

色々と同類。

「私も転生者で、今は人間でもなくて、前世も男なのですが？」

変態ロリコンが何か音を出してる。

というか、いつの間にか氷が解除されてる。

とりあえずは無視無視。

「ん？……何か聞こえた気がするが……まあ、気のせいだろう。」

ああ、気を付ける。ここには変態ロリコンがいるからな。

下手に気を抜くと、寝室に侵入されるぞ」

「そ、そうなんですか!？」

気を付けます!」

無印編32話 新しい力？

その後、きちんとリンディ・ハラオウンも交えて色々説明。

次元世界に驚き、ジュエルシードやロストロギアに困惑しつつも、とりあえず転生理由や現在の状況は理解した模様。闇の書については詳しく教えてないけど、お姉様が何とかしようとしているロストロギア、という事だけ軽く説明済み。

また、セツナ・チェブルーが今までいた世界に戻る方法が不明なので、当面は次元漂流者扱いでアースラに滞在する事になった。

時空管理局側の名目としては、次元漂流者の保護。戦力として取り込みたがってる様子が見えるのはお約束。

だけど、セツナ・チェブルーはお姉様に懐いた。

一混乱ありそう？

そして、今はセツナ・チェブルーが滞在する事になった部屋に来てる。

質素儉約を地で行く様な、シンプルな内装。

ここにいるのは、お姉様、セツナ・チェブルー、リンディ・ハラオウンの3人。

当然の様な顔をして付いてこようとした変態は、ロリコンお姉様が通路の先に蹴り飛ばした。

変態はそのまま日本へ。オタクの聖地を巡礼しに行った？

とりあえずの排除には成功した。

「さてと、さっき聞けなかった質問の続きだが……リンディ、ここでの会話は記録されるのか？」

返答内容が少々恥ずかしいものになる可能性があるから、記録されるなら避けたい質問もあるんだが」

「な、何を聞かれるんですか!?!」

お姉様の質問に、セツナ・チェブルーが怯えた。

言い方が良くない？

でも、意図としてはそうとしか言えない。

「いいえ。プライベートの会話を記録するほど、管理局も無粋じゃない

いわ。

とりあえず、私は話を聞かせてもらおうわね。私が聞くよりも、エヴァさんが聞いた方が答えやすいみたいだし」

リンディ・ハラオウンが、セツナ・チエブルーから直接聞きだすのを諦めた。

効率を考えての選択かもしれない。

とりあえず、お姉様が好きにしていいらしい。

「そうか、ならいいんだ。

では、質問だ。

原作を知らないのに主人公と同じくらいの強さを要求するというのは、何を考えているんだ？

しかも、ファンシーな内容だと思っていたのだろうか？」

「ああ、そういう事ですか。

それはですね、魔法少女モノだと、主人公はそれなりに強いだろうなー、と思っただからです。

何らかの方法で悪役を倒せるだけの強さを持っているわけじゃないですか。剣を使いたいという要求もしてましたから、剣で主人公と互角くらいになれば、強者として十分な実力になるんじゃないかと」

「元は男だったのだろうか？

ファンシーな主人公と同じ変身を、男の身で行う事になる可能性は考えなかったのか？」

可愛い救済者みたいなの？

カードキャプチャーさくらみたいなの？

ふりふりひらひら？

男でもなんとかなるよ、絶対大丈夫だよ的な？

「……あ

セツナ・チエブルーの額に、でっかい汗が幻視できた気がする。

これはまさか。

「気付いてなかったのか!？」

「は、はい……良かった、命懸けの生活でも、精神が病むよりはマシで

した……………」

なんとかならなかつた。

大丈夫じゃなかつた。

ここにもうっかり属性持ちがいた。

命懸けの生活より嫌なのは予想外。

「やれやれ。それと、命懸けでゲームの様な世界、か……」

アレか？ 魔法使い製造所とか、終末の幻想みたいな感じか？」

冒険者突撃的な？

召喚獣ばりばりのな？

「いえ、魔物を狩るモノたちが近いんじゃないかと。

狩人と呼ばれる冒険者の様な人達が、生活に必要な素材を集めたり、街や村を護つたりするために魔物退治をしたりする感じですよ。素材から武器を作つたりする人もいましたし、かなり大型の魔物も相手にしていたので」

「素材から武器を作る、か……素材は倒した魔物から得たりするのかな？

待っていれば素材がやってくることも取れるが」

「確かに結構大きなドラゴンも襲ってくるので、倒せたらいい素材が手に入りますけど……村が無くなったとかも、割と聞く話でした。死に掛けながら村を捨てて逃げた事もありますし。

来る直前はドラゴンから村の人を逃がすための殿しんがりをしていたんです。何人か仲間も死んでいて、私も死を覚悟していました。現実是非情です」

大型のドラゴンとの戦闘中に体力が尽きて武器が壊れたら、確かに未来は真つ暗。

死にかけてたと言われても納得出来る状態。

「そうか……やはりそこは現実には準拠するのかな。」

と言うか、最初に状況を理解していなかったのは、死んだと思つたせいもあったのかな？」

「はい。今回は子供からじゃないんだとか、どうして2回目を知つた様な顔を見るんだろうとか考えちゃつて……」

「なるほど、そういう事だったのか。」

話を戻すが、素材の加工についても現実的なのか？ 要するに、ゲームにありがちな錬金や合成ではないかという確認だ」

「実際に武器を作っている所を見た事はありませんが、加工してくれるお店は鍛冶屋と呼んでいました。マリエの工房とかと違ってハンマーとかで作業していたみたいですし、魔法を使う人の話は聞いたこともありません。」

どの辺が魔法少女なのか不思議だったんです」

「なるほどな。確かに、聞く限りでは魔物を狩るモノたちが近いな

……

だが、全く同じと言うわけでもないのだろうか？」

「そうですね。大きな違いは、特殊な効果を出せる剣技がある事、笛や戻る玉みたいな特殊な道具は無かった事、それに、私の様に飛べる人や獣人みたいな人ばかりだった事でしょうか。」

家の管理なんかを手伝ってくれる猫耳娘達は天国でした」

猫耳メイド娘ハーレム？

鳥なのに、まさかの猫属性？

セツナ・チェブルーが来たよりゼロツテ逃げてー、的なの？

むしろ逆？ リーゼロツテが襲いそう。

襲うのはどつちの意味だろう？

「お前、そういう属性か……？」

「い、いえ、性癖とかそういうモノじゃなくてデスネ。」

特に子供は、ちっちゃくて可愛いんですよ。こう、もふもふしてたりしてて」

ちっちゃい猫耳メイド娘？

……によ？

ここにもロリコンが？

「もふもふ、か……リンディ、そんな種族は見付かっているのか？」

流したー!!

(うるさい！ 変態が来てから過剰に反応しすぎだ！)

「猫の耳を持つという事なら、使い魔なら見掛けるけれど……セツナ

さんが言っているのは、生来そういう姿の人達の事よね？」
話を聞く限りでは、使い魔とかの後天的な話とは違うはず。

だけど、魔力構成は何だか人工的な部分が存在する。
大昔に作られ捨てられた合成生物が細々と生き残っていた可能性もある。

今表に出していい情報ではなさそう。

「そうですね。というか、純粋な人っていましたっけ……？」

「私に聞くな。」

世界の調査は私より管理局向きの仕事だしな。世界の名前とか、手掛りはリンデイにも言っておいた方が良くぞ？」

「世界の名前、ですか……うーん、聞いたことがありません。」

日本で世界と言えばあの世界を指すような感じで、名前らしい名前は無かったと思います」

閉じた世界ならそんな感じ。

自分達のいる世界が全て。それを指して世界と呼ぶだけ。

強いて言えば、日本語だと「世界」が世界の名前に相当？

「やはり、次元世界を知らない世界か。管理局が見付けていても管理外、見付けてもいない可能性が高いのだろうな。」

元の世界が見付かったら、帰りたいと思うか？」

今後の指針。

重要な点。

「うーん、どうでしょう。」

戦友的な人はいましたけど、殺伐としていましたし。

猫耳娘のもふもふだけが癒しでしたから、日本に住む事と比べてしまおうと………」

セツナ・チエブルーの中で、日本がもふもふに勝利気味。

コスプレなら猫耳娘も日本に存在。

二次元なら多数。

まさか、これが勝利理由？

「まあ、見付かったらの話だ。今はあまり深く考えなくてもいいだろう。」

元々が日本からの漂流者に近いんだ、日本に戻ると言っても問題は無いだろうしな。

そろそろ話を戻していいか？

その世界の魔法や特殊な技術について聞きたいんだが」

「あ、はい、分かりました。」

明確に魔法と呼べるものはありませんでしたが、妙に効果のある薬品類や、剣技がそれっぽい感じですよ」

無意識に扱う魔法で効果を増強した薬品の可能性も？

剣技は微妙な位置。

現れた時に魔力がほとんど減っていないなかった事を考えると、魔力の減少を伴わない技術？

あれ程消耗かつ負傷する戦いで、剣技を使っていなかったとは思えない。

「剣技？　　そういうえば、持っていたのは野太刀か？

折れていたが、かなり大きそうに見えたが……」

「形としては、そうなると思います。」

雷撃を通しやすい武器なんです、私が使っていたかみなり神形流に雷を扱う技があったので色々と相性が良かったんです。手に入れてからずっと愛用していました」

武器はやっぱ狩人さんの。

斬破系の刀に近いと推測。

でも、剣術はネギま派生系？

内容が同一かは不明。要調査。

「そうか。今後も、武器は野太刀がいいか。

使い慣れた物に近い方がいいだろう？」

「そうですね。手に入るのであれば、それが一番ありがたいです」

「わかった。可能な限り何とかしよう」

(とりあえず、日本刀の詳細な製造方法と、現存する刀匠の調査を頼む。

可能なら私達で技術を確保しておきたい) 了解。

技術は、恐らくノウハウの塊。
時間がかかりそう。

(構わん。時間よりも内容を優先で頼む)

「ところで、剣技とはどんなものだ？」

魔法ではないのだろうか？」

魔法と呼べるものは無いと言った。

でも、本質的には魔法的な何かである可能性は否定出来ない。

「そうですね……気を練って身体能力を高めたり、放出する事で様々な特殊攻撃を……」

「気!? 本当に気なのか!!」

ようやく明確な手掛りが見付かったか!!」

「え、ええと、いつたい……?」

お姉様のテンションと機嫌が急上昇。

セツナ・チエブルーが戸惑ってる。

リンディ・ハラオウンも、口には出さなくても驚いてる。

「ああ、すまん。ネギまの魔法やら技やらを色々と研究していた時期があつてな。

その中で、何の手掛りも無かったのが気に関するものだった。

クククツ、研究者の血が騒ぐぞ。頼む、研究させてくれ!

その代り最高の野太刀と、魔法の技を確約するぞ!」

「え、ええ、それは構わないのですが……いいのですか?」

セツナ・チエブルーがちよつと引いてる。

お姉様は少し落ち着くべき。

「いい? ……ああ、そうだ。

リンディ、今の気に関する事は、当面は公表しない方が良い。

私が思っている通りのものなら、大変なことになる可能性が否定できん」

お姉様が、ちよつと落ち着いた?

ついでに、重大な問題に気付いた。

主に、情報の隠蔽工作。

地球での魔法の扱いの様な物。

「あら、どうしてかしら?」

「今のミッドチルダは、魔法の能力も割と重要な人物評価や人生設計の要素になると思うが……あっているか?」

「うーん、魔法に頼りきりと言うわけではないし、魔法とは直接関係がない職種も多いのだけれど……重要と言えるほどかは微妙だけれど、技術や体力を高めたり補ったりできる分、無視できない要素ではあるわね」

「特に管理局だと実力のある魔導師の方が危険だが手柄を上げやすい身分に立ちやすそうだし、昇進にもだいぶ影響しそうに思うが。管理局でなくても、業務の補助的な役目で魔法を使うとか、インテリジェントデバイスや使い魔に業務を補佐させる場合があっても不思議ではないしな」

「確かに、執務官や武装局員になるにはある程度実力のある魔導師であることが必要だし、影響がないとは言えないわね。」

「もちろん、指揮官や司令官には魔法とは別の能力が必要だし、上の立場になるほど魔法を使う機会が減るから、特に陸では魔法が使えない人に昇進の機会を多く用意しているのが現状ね。その意味では……そうね、魔法資質によって、昇進の道筋が大きく異なる事にはなるわね。」

「インテリジェントデバイスはメンテナンスのコストも馬鹿に出来ないし、特に高度なAIは管理や調整も大変だし相性問題も多いから、一般的な業務への影響は限定的かしらね。使い魔は人として別枠になる事が多いから、忠実な部下とセットとして扱う事が多いわ。だけど、優秀な使い魔を長期間維持するのは負担が大きいから、これも影響は……ね」

「少なくとも管理局の陸では、最初は魔導師が有利、ある程度以上は魔導師である事が足を引っ張る感じになるのか?」

「優秀な戦力は現場に置いておきたいだろうからな」

「そうね、魔導師が戦力として期待されている事は確かね」

「人手不足なら、余計に人事やらがそう配置しようとするはず。」

「本人が断りにくいように、もしくは本人が望むように誘導する可能

性も高い。

「なるほどな。そんな扱いが暗黙の了解となつているところに、魔法とは別の素質、別の体系の、質量兵器に似て非なる戦闘能力をいきなり放り込んでみる。素質が無くて今の体制やらに不満を持つ人間が殺到してパニックになる可能性が否定出来んぞ。」

しかも、想像する限りでは非殺傷設定など無いだろうからな。魔法と認めずに制限したい現体制派と新しい可能性を見たい反体制派が衝突する事態となつても、私達は責任を取れん。

少なくとも、私は混乱の原因となりかねない技術が無闇に公開する気は無い。その程度の分別はあるつもりだ」

地球で魔法を大っぴらに使わないのと、ある意味では似た理由。

管理外世界を相手にしたことのある提督なら理解出来るはず。

「そうね……セツナさん、剣技というものは非殺傷設定が可能なのかしら？」

ええと、相手を死傷させず、捕縛する事に特化する攻撃が可能か、と言ひ換えれば通じるかしら」

リンデイ・ハラオウンは、セツナ・チェブルーの知識の無さについて理解出来た模様。

転生者というレッテルと、詳しすぎるお姉様に惑わされてただけだった？

元々異世界の文化に触れる事の多い役職。慣れていなかっただけではないはず。

「言っている事は何となくわかりましたけど……生き残る事だけでも必死なのに、相手を生かしたまま捉える余裕なんてありませんよ。」

それに、剣で攻撃しているのに死傷しないなんて、どんな謎技術ですか？」

原作の非殺傷設定は、本当に謎。

建造物や島が吹き飛んでるのに人や服は無事なんて、どんだけー。

私達の非殺傷設定は、建物は劣化程度でも死傷者が出る事があるのに。

これを考えると、剣で攻撃しても死傷しない謎技術があつてもおか

しくない？

「そんな事だろうと思っただけだ。」

「だから、剣技や気に関する技術は……レアスキルと言い張れば何とかなるか？」

「だが、本当に魔法以外の資質に依存する技術であれば、迂闊に知られたらまずいことになる。少なくとも、騒動に巻き込まれて静かに暮らせないのは確実だ。」

「地球で魔法が使えらるるとばれた状態を予想してみれば、大体あつていはるはずだ」

「そ、それは嫌です……」

「とりあえず、状況は理解してもらえた。」

「あとは、本人の努力と周囲の協力次第。」

「と言うわけで、詳細は私が調べる。」

「この手の情報は、知る者が少ないほどいい。管理局で調べるには、何となくでも内容を理解出来る技術者を秘密裏に探すなんて曲芸が必要になるだろうからな。」

「魔法資質に依存していて、非殺傷設定も可能に出来る技術……要するにミッド式とベルカ式の様には、根底は近いが別系統なだけならば公開しても問題は小さいはずだ。まずはそれに該当するかを確認する。」

「リンデイもそれでいいか？」

「そうね、私は気と言われてもよく分からないけれど、エヴァさんなら概要くらいは理解しているという事よね？」

「パニックが起こる可能性を考えると、少なくとも詳細が判明するまでは知る人が少ない方がよいのは確かだし……仕方ないわね」

「セツナ・チェブルーの、当面の身柄をげつと。」

「問答無用で隔離されたり連れ去られたりする可能性は、かなり低くなつた。」

「リンデイ・ハラウンがそれをするほど腹黒とは思えない。」

「と言うわけだ。無用な騒動を避けるためにも、当面は技術の詳細を秘匿する。」

「使うなどまでは言わないが、なるべく言い訳のしやすい物を選んで」

くれ。

それと、代替技術の確保と、使用する際の判断基準や言い訳を理解してもらうために、早急に魔法を教える。

「この方針で行くぞ」

「わかりました。まずは、剣技や気を使わない様に気を付けます」
「それでいい。」

当面の武器とデバイスをどうするかだが……棒術は使えるか？」

お姉様の入門用デバイスで、武器になりそうなものは棒型のみ。

本来、杖は直接攻撃に向かない。

レイジングハート それを振り回していた高町なのはは、色々間違ってる。

フェイト・テスタロッサが振り回していたバルディツシユは アックスフォーム 斧

サイズフォーム
や 鎌。

形状的には間違ってる。

でも、良い子は真似しないでね。

「はい、一応は習得しています」

「よし。なら、暫定として棒型のデバイスを今日中に一つ渡す。

性能はそれなりだが、入門用には最適だ。

まずはそれで、魔力やデバイスの扱いに慣れるといい」

「はい、分かりました！」

セツナ・チエブルーがすごく素直。

流石桜咲刹那もどき。

標準で忠犬属性付き？

「さてと、他には……」

「あの、転生した人は、それなりにいるんですか？」

やっぱり気になってた？

お姉様の対応が慣れてるせいもあるかも。

「その事か。確認済みはお前で20人目だ。内3人は死んでいるし、半分以上は私もまだ会っていないがな。」

ニコポやナデポを要求したらしい阿呆も複数確認済みだが、まともな連中も当然いるぞ。会ってみるか？」

「会えるんですか？」

えーと、宇宙船の中なのには？」

「こちらから行く方が平和だろうが……リンデイ、何人かアースラに呼んでいいか？」

「そうね、構わないわ。」

私としても、会って話をしてみたいし」

リンデイ・ハラオウン
艦 長の許可が出た。

調査的なものを兼ねると予想。

でも、一度顔を合わせておくのは、今後を考えるといい事かもしれない。
ない。

「そうか。転送はどうする？ 必要なら私がするが」

「一応は防御結界のある次元航行船に、そんなに軽々しく転移しないでほしいわね。」

それに、昨日来た時は手に怪我をしていたでしょう？ 無理は良くないわ」

「……見られていたか」

リンデイ・ハラオウンが、きちんと引つかかった。

偽装は完璧。

お姉様のぼつが悪そうな演技もいい感じ。

「そりゃあ、ね。」

じゃあ、転送ポートに行きましょうか。

エヴァさんは、来てくれそうな人に声をかけておいてくれないかしら。転移が可能なくらいなのだから、出来るのでしょうか？」

「隠す必要も無いか。可能だな」

（今動けそうなのは、アコノ、カイゼ、チクアーブか……千晴と亜美は？）

長宗我部千晴と真鶴亜美は、現在高町家の道場で魔法の基礎練習中。

2人とも今日が初回。同じ日に来たのは偶然。

指導担当のチャチャが説明してたところ。

現在、本人達の希望を確認中。

（アースラに行く？）

主からの通信。

主にも、アースラに集まる話を連絡済み。

(ああ。アコノは、別荘にある棒型のデバイスを持ってきてくれ。物は妹達に分かるからな)

アースラ内への直接転移は、無理がかかる設定。

主が持ってきた方が、転送より説明がしやすい。

(わかった。今は翠屋だから、公園に移動する。

原作で転移に使っていた場所でもいい?)

(そうだな。そこで頼む)

長宗我部千晴、真鶴亜美の両名、共に了承。

公園へ行き、主と合流する予定。

カイゼ、チクアーブ両名も了承。

こちらは、山中に滞在。ここから直接転送を希望。

(そうか。ありがとう)

「連絡が付く連中には了解を貰った。

3人は、なのはがアースラに来た時に使った公園に集合予定だ。

別の2人はいつでも転送可能だ。山の中だから、いつでもいいらしい

」

「そう、随分と早い連絡ね?」

リンデイ・ハラオウンも驚く早さ。

本当に早かった。

特に、長宗我部千晴と真鶴亜美の連絡が即座に付いた事が奇跡。

「今日も日本は休日で、高町の道場で私の従者が魔法の指導をしていたんだ。

普通は、こんなに早く連絡が付くわけがない。学校や仕事だってあるからな」

「なるほど、そういう事ね。

ゴールデンウィークと言ったかしら、確かに街の人の動きは休日みたいだったわね」

無印編33話 望んだもの

と言うわけで、ゲートに到着したお姉様、セツナ・チエブルー、リンデイ・ハラオウンの3人。

目の前には、無表情で立つ成瀬カイゼと、宙に浮かぶ小ネズミのチクアーブがいる。

「……良く考えたら、先に呼ぶのがこいつらで良かったのか？」

「他の方々に聞かれる前ですし、都合はよろしいと思う次第でございます」

お姉様は、重要な点に気付いた模様。

微妙に信頼できるか分からない2人が先になった。

「僕としては好都合だよ。」

初めまして、エヴァさん」

「そういえばそうだな。初めまして、カイゼ」

「ええと……会うのは初めて、という事でいいのかしら？」

そういえば、まだ会ってなかった。

初めましてと挨拶するお姉様と成瀬カイゼを見て、リンデイ・ハラオウンが不思議そうにしてる。

「いや、言葉を交わすのも初めてだ。」

お互いを監視していたから、ある程度は把握しているがな。

それに、そいつの人柄は、その小ネズミが気に入っている。

単純な危険人物と言うわけではないだろう」

「そう……それなりに信用できそうという事でいいのね。」

それで、何だか話したい事がある様だけど、何かしら？」

「ご明察、恐れ入ります。」

この男、成瀬カイゼも、アースラで手伝いをしたいそう御座います」

「よろしく」

不自然なほど丁寧な口調で、その実妙に偉そうな小ネズミ。

主並みに無表情系の成瀬カイゼ。

一応協力関係にあるけど、信用できる要素がまるで見えない。

「そ、そうなの……えーと、実力はどれくらいなのかしら?」

リンデイ・ハラオウンは、受け流しの構え。

右から左に。

でも、ちよつと困った表情。

「魔力量はなのはに迫るものがあるが……まあ、経験と訓練は不足しているな。」

条件次第ではなのはに勝てる可能性があるかも、くらいか?」

「正面切つての戦いでは勝てない。」

その分、小細工には自信があるよ」

実力の自己分析は正しい。

でも、小細工?

実態は、潜入と暗殺。

何と言う堅い蛇。

「私も色々やる事があるからな。」

「ずつと変態ロリコンを構う事は無理だから、こいつに変態ロリコンの対策を頼むのもいい。」

「こいつは、神出鬼没なアレを私よりも追えるぞ?」

転生者の探知能力的な意味で。

この点だけは、とても優秀な事を実証済み。

「なるほど……そうね、いいでしょう。」

基本的にはなのはさんと一緒に行動する事として、必要に応じてクーネさんの対策を行う、という事でいいかしら?」

「構わない。」

「だけど、ロリコンは今、日本に行っていてアースラ内にいない。」

その場合はどうしていいばいい?」

実際は、秋葉原。

情報源はもちろん転移ちよつと前の成瀬カイゼ。
変態ロリコンを追いたくないし、追うのも大変。

転移や幻影等々の、人を惑わす能力はとても高い。

「あら、居場所がわかるのかしら?」

「転生者限定で、居場所がわかる能力があるからね。」

だから、余程遠くへ行くか強力な妨害が無い限り、何処へ逃げられようと居場所を知る事だけなら可能だよ」

「凄いわね。だから、クーネさんの対策を任せられるという事ね」

リンデイ・ハラオウンは本気で感心してる。

きっと、何処へ逃げられようと、という辺りが注目点。

「攻撃力は不足するが、追い回す事くらいは出来るから、私が来るまでの時間稼ぎくらいは出来るだろう。」

あいつがいない間は……そうだな、適当に訓練場を使わせてやってくれ。デバイスを渡したのは最近でな、練習を始めて間が無いんだ」
「そう。それなら、なのはさんと一緒に練習するのもいいのかしら？」
「そうだな。それもアリだろう。」

さて、そろそろ移動している3人も集まった様だぞ」

「そう。アレックス、転送を」

そして、現れる人影3つ。

「ここがアースラの中？」

主は、お姉様の方に近寄ってきた。

「うわー、とうとう来ちゃったよ……」

長宗我部千晴は、周りを見ながら、ため息をつきそうな勢い。

主の車椅子を押すと言うか、引かれる形で近寄ってくる。

「へえ……意外に普通ね」

真鶴亜美は、何と言うか、遠足に来た小学生っぽい？

興味津々で周りを見てる。

「ようこそ原作の重要施設へ、と言うべきか？」

まあいいか。このメンツが、私が連絡を取れる、まともそうな転生者だ」

「そう。意外に女性が多いのね」

「まだ接触していない者も多いが、男は何故か変なのが多いからな。」

アレをアースラに連れてくるとしたら……捕獲した犯罪者として、あたりが有力か？」

犯罪者とオリ主様？

普通に招待するのは有り得ない。

「そ、そういう人を殺した奴もいるんだよな。

そんなにひでーのか？」

長宗我部千晴が、ちよつと怯えてる？

でも、長宗我部千晴の言っている殺人者は、目の前にいる。

主が間になるように移動してるところを見ると、それには気付いてる模様。

まともそうと言われた殺人犯よりも質の悪い人がいる事が心配なのかも。

「殺人の後に血まみれのまま街中を歩きまわって警察から逃げ回る羽目になった間抜けとか、この前アコノに絡んだ馬鹿は……常識が通じるわけがない、とか言っていたんだったか？」

「主人公に常識が通用するわけがない、だったはず。

私が一般常識を指摘したら、そんな反論が返ってきた」

「要するに、自分が物語の主人公で、自分を中心に世界が回っていると錯覚しているらしい。

こんな連中は、酷い以外に表現のしようが無いだろう？」

ギル・ガームスと、間宮萬太が現時点の警戒対象。

東渚は、あまり動きが無い。正直よくわからない。

「うわあ……」

長宗我部千晴が、凄い勢いで引いてる。

他の人達も、程度はともかく似たような印象を受けてる模様。

「随分と酷い事になっているのね。周囲の人達や、狙われる可能性のある女の子達は大丈夫だったのかしら？」

だけど、真鶴亜美は普通に狙われそうな人を心配してる。

別作品とはいえ登場人物に似た自分より他人を先に心配する辺り、いい人振りが半端ない。

「ニコポやナデポが有効に機能したところは確認できていないからな。

それに、今は翠屋やらに人を置いている。連中が原作娘狙いで動いたことも、実際に少し絡まれたこともあるが、周囲の人物はまともだ。大事にはなっていないさ」

「そっちの対策も大変じゃねーのか？」

それをやってる合間に、私達に魔法を教えてくれてるんだろ？」

長宗我部千晴の心配も、ごもつとも。

人数が少ないなら、確かに大変。

でも、私達も増員中。他の理由もある。

「問題ない。むしろ、お前達に自衛出来るようになってもらった方が気楽になる」

「最初は常識知らずの人達しか見付かっていなかった。

まともな転生者が見付かって、エヴァは喜んでいた」

主の……フォロー？

ツツコミに思えて仕方がない。

「あー……いや、あんなのがあれ以上増えない事を喜んでいただけだからな？」

「ウソ。亜美が狙われそうだった時、エヴァが臨戦態勢になっていた事は知っている」

「ちよつと待て！ それ以上言うな！」

あら、言っちゃった。

狙ってた人と、狙われてた人が揃ってる。

変に隠すよりも、ここで言っちゃった方が後々平和かも？

「狙われそうだったって……転生者同士の諍い、と言っていた事なのかしら？」

リンディ・ハラオウンが喰いついた。

流れるに、命に係わりそうな事態だったのは明らか。

言い逃れは難しそう。

「あらあら、言っつていいものかしら？」

もちろん、真鶴亜美も事態は把握してた。

困った顔で、お姉様を見る。

「……下手に誤魔化すのも問題か。

カイゼ、言える範囲で説明してやれ」

「分かった。

僕は、暗殺者の組織で育てられたんだ。

当然、暗殺の技術を叩き込まれていて、実際に人を殺したこともある。

そんな組織から逃げ出して最初に見た転生者は、転生で得た能力で好き勝手をしていったんだ。

分かりやすく言えば、初対面で何の繋がりも無さそうな異性を侍らせていた、かな」

「ニコポカナデポが機能していた、ということか？」

これは初耳。

お姉様もびっくり。

お姉様に効いたら超危険。殺していてよかったと、成瀬カイゼの評価を上方修正。

「恐らくニコポだね。やたらと笑顔を振りまいていたし、1度だけど初対面の様な挨拶をした後にデートの様な行動をしていたのは見ていたよ。効果はだいぶ限定的らしくて、1時間も経たないうちに振られていたし、別れ際は随分と酷い口論をしていたけどね。」

だけど、その時の人を物の様に扱う物言いが、暗殺者の組織の人を連想させてしまつてね。つい、殺っちゃったんだ」

「それが、1人目の女顔の男だな？」

「そうだね。更生する機会ぐらいは与えるべきだったかと、少しだけ反省しているよ」

「殺した事自体は後悔していない、という事でいいのかしら？」

リンディ・ハラオウンも、何故かチクアーブと同じ点を気にしてる？

好みが似ているのか、人格の考察材料か。

「人として最低だからね。」

生きるために盗みをしているストリートチルドレンの方が、遥かに同情の余地があるよ。

その次に見た男も、同じように笑顔を振りまいていたね。特に異性は侍らせていなかったけど、その行動や発言は良く似ていて、つい、ね」

「つい、で人を殺したという事かしら？」

「暗殺者の組織に育てられたと言ったよね。そこでは、人を殺す事、人が死ぬ事は普通の事なんだ。」

この前隣で飯を食った奴が、今日任務に失敗してハチの巣になった。次は僕が誰かを殺しに行く。そんな感じの毎日だったよ。

今考えると、心が麻痺して、人であることを諦めていたんだろうね。だけど、保母さんは殺さずに踏み止まれた。感謝するよ、僕は人だと再認識させてくれて」

「そうなの。それなら、普段通りに振る舞った甲斐があったというもののね」

随分物騒な話。

だけど、真鶴亜美は受け入れた？

なんとという聖女属性。

何だか、危機感が薄すぎる気も。

主みたいな精神干渉……にしては、方向性が微妙で効果が薄いかも。

治療や健康の転生特典を得た事の弊害？

(やはり、魔力の反応は無いんだな?)

主、間宮萬太、真鶴亜美の3人共、精神操作を行っている様な魔力は検出できてない。

だけど長宗我部千晴の例もあるから、発動中の魔法を完璧に隠蔽されている可能性も否定できない。

無い事を保証することは出来ない。

(大丈夫、私は感情が無くても困っていない)

いつか解明できれば、それでいい)

「そういえば、気付いていたと言っていたね。

探し物の能力だったか」

「そうよ、なかなか便利に使えているわ。

何かを探す事以外には使えない能力だけどね」

「それでも、使い方によっては強力だぞ。

どのくらいの範囲を調べられるんだ?」

お姉様が、能力の話に食いついた?

確かに、明確な特典の詳細も気になる。

「うーん、半径で5キロくらいかしら？」

エヴァさんなら、普通に魔法で探せる範囲じゃないかと思うのだけ
れど」

真鶴亜美の、お姉様の評価も気になる。

力を見せてないのに、かなり高位の魔導師と思われてる？

信頼は、エヴァンジェリンの意味？

「確かに、探す事は可能だろうが……それでも、訓練せず、デバイスも
使わずにそれが可能なら、強力な能力だと思うぞ。

この際だ。初対面の相手もいるし、全員、自己紹介のついでに、話
せる範囲でどんな特典を望んでどんな結果になったか言ってみるか
？

どの程度歪んでいるかの確認にもなるだろうし、気になっているだ
ろう。特にリンディは」

「そうね。どれくらい特殊な能力を持っているのか、興味は尽きない
わね」

提督としての役職としても、聞き逃せないはず。

リンディ・ハラオウンとしては、お姉様の提案は渡りに船。

「お前達も、構わな……興味は勝っている顔だな。

まずは私からいくぞ。名前はエヴァンジュ。2500年以上前に
作られた魔導具で、そちらの名は曙天の指令書だ。活動時間は20年
少々だが……まあ、転生者としてはお前達より先輩だな。前世は大学
生で男だったから、外見的には性転換をしている事になる。

望んだのは、真祖の吸血鬼の様な能力、多くの知識、多くの友人だ。

吸血鬼の能力は、2500年も眠れる程度の長寿さや再生能力が該
当するだろう。魔法が使えるのも恐らくこれの影響だな。血を吸う
必要も趣味も無いから、本当に能力だけらしい。

知識については、夜天が集めた情報を受け取る能力がある。もう一
人情報提供者がいるが変態だ。ロリコン無視するか、可能なら遠慮なく殲滅し
てくれ。

友人は、チャチャ達がそうじゃないかと思っている。友という表現

は微妙かも知れないが、この世界で目覚めてからずっと支えてくれている仲間だ。

歪みと言うか問題は、主が必要な魔導具、それも夜天の妹という点か。人外になる事は想定内だったが……アコノが主だから良かったものの、変態や力に溺れるタイプだったらどうなっていたか想像もしたくない。今は闇の書と呼ばれている夜天と同じ目で見られる可能性が高い事も問題だな」

「魔導具で指令書……本、ですか？」

セツナ・チエブルーがちよつと不思議そうに首を傾げてる。

確かにイメージはし辛いかも。

「そうだな。ちなみに、こんな姿だ」

ぽん、と音を立ててお姉様が本の姿に。

「うわ……直接見ると、やっぱり人じゃないってのはひでーな」

「本の姿を見ると、夜天の妹と言われて納得できる程度には似ているね」

直接見た事の無かった面々は、やっぱり驚いている。

一番引いてるのは長宗我部千晴、何を考えているのか表情に出てない成瀬カイゼ。

何故かチクアープは納得の表情で頷いてる。

それなりに見られた事を確認して、お姉様は人の姿に戻った。

「なら、次は私。」

改めて名前から言うと、小野アコノ、小学4年生。前世は未成年の大学生で、女だったから性転換はしていない。

私が望んだのは、沈着冷静、若く綺麗でいたい、多くの魔法を使いたい。

感情が無くなったから、冷静ではあると思える。

この姿で不老になったから、若く綺麗も一応あっている。

魔力はあって、エヴァから魔法を教わっているから、魔法も使える。

広い意味では間違っていない。歪みは、冷静さが行き過ぎて感情を

失った事だと思う」

「ふ、不老ですか!？」

セツナ・チエブルーが驚いてる。

普通は、有り得ない事態。

他の人達も、概ね驚愕の表情。

「そう。エヴァは夜天の妹のような存在だけど、その主になった私は保護下に入って、不老になったらしい」

「つまり、エヴァさんの保護下に入れば、不老になることが出来るという事ね？

それに、アコノさんの望みはエヴァさんがいなければ叶わなかったという事になるのだけれど」

リンデイ・ハラオウンは、お姉様の能力を探るつもり？

でも、色々と残念。

「リンデイが何を考えているか想像は付くが、私の従者になって不老化するの、実質的に人間が使い魔になると変わる。私に対する忠誠心やらを植え付けられるぞ？ しかも、リンカーコアを失って魔法が使えなくなるおまけ付きだ。

主はそうじゃないが、私の主になる者は感情暴走の洗礼を受けるから、廃人になるか死ぬかの2択だ。ユーノは知っていたはずだが……聞いていないのか？ そういう事だから、感情を失ったアコノ以外は主になれん。2500年も眠る羽目になったのは、これが原因でもあるからな。

アコノが私の主になる様に仕組まれていたとしか思えん」

「そう……つまり、1つの例外以外は、不老になるには色々なものを捨てる必要があるという事ね。

その例外、つまりアコノさんを殺して主の座を奪うなんて事は、別の要因のせいでは不可能。

この理解でいいのね？」

「アコノを殺した阿呆を主にするなど考えられんし、そもそもアコノを死なせる気も無い。

それに、感情暴走は主にする過程で発生するんだ。まともな精神状態で生き残ることが出来ればいいな？」

感情暴走はチャチャゼロがやった時という条件付きではある。

でも、嘘じゃない。お姉様の意識が無い時は唯一の手法。

「エヴァさんの事を報告するなら、これの警告も入れておいた方が良さそうね」

リンデイ・ハラオウンが、頭を押さえてる。

色々と魅力的な危険物。

扱いに困っていると予想。

「そうだな。その方が、阿呆が湧く確率も減るだろう。」

次は……さつきから驚いてばかりのセツナ、言ってみろ」

「は、はい。」

えーと、始めまして、セツナ・チエブルーといいます。多分中学生くらいじゃないかなと思いますけど、正確な年齢は不明です。

前世は……自衛官でした。男だったので性転換しています。

望んだのは、自由に空を飛びたい、剣術を使いたい、主人公達と肩を並べられるくらいの強さ、です。

空は、見ての通り翼があるので飛べます。

剣術は、ここに来る直前までは、刀で戦っていました。

強さは……どうなんでしょう？ よく判りません。

こんな感じ、です」

「有り体に行ってしまえば、桜咲刹那っぽい何かを再現しました、だな。

というか、自衛官で空を飛びたいという事は、戦闘機のパイロットにでもなりたかったのか？」

「はい。頭とか体力とか色々足りなくて、諦めちゃったんですけど。」

でも、男なら憧れませんか？」

「まあ、私も男だったから気持ちは解るが。」

セツナの問題点は恐らく、飛ぶための翼を持つことで迫害対象になる可能性が高い事だろう。今まで命懸けの生活をしてきた事も、強くなるための代償かもしれん。

次は、そうだな、さつき少し言っていた亜美、いってみるか？」

「そうね。」

改めまして、真鶴亜美といいます。みんなよりちよつと年上で、保

育士として働いています。

前世も保育士で、保母さんをしていました。子供好きなんです。健康な体でいたい、探し物を見つけない、みんなの怪我を治したい、の3つを望みました。

今までひどい病気になったことは無いし、迷子や無くした物は簡単に見付けられるし、怪我の治療も出来るしと、かなり素直に望みがかなっていると思っっているわよ」

「少なくとも、見てわかる様な歪みが無いのは確かだな。

というわけで、本人としては予想外の落とし穴にはまった、ちうたんだ」

「だからちうたん言うな！

あー、長宗我部千晴、高校1年生だ。千雨じゃないしネットアイドルもコスプレもやってないから、ちうたん言うな。前世は普通に高校生の女だったから、丁度前世に追いついた感じだ。

魔力感知と、探索とかで見付からないようにと、コンピュータを自由に使いたい、を希望して、感知は……うん、わかり過ぎて、我慢できなくなった。

ってゆーか、あんたの殺気と次元震で我慢の限界超えたんだ、どうしてくれる！」

長宗我部千晴が、成瀬カイゼを指さして叫んでる。

お姉様もいるし、一応反省済みとはいえ、殺人犯にその態度はどうだろう。

「そう言われても困るよ。

むしろ、殺気を隠す技術には自信があっただけどね」

当の成瀬カイゼは、やれやれと肩をすぼめてる。

確かに、魔法を使ったことに対して怒りを向けられても困る。

「魔力の殺気は全く消せていないぞ、暗殺者集団も大したことは無いな。

ああ、千晴が探知魔法で見付からないのは、私が保証する。正直言って目の前にいる今ですら、光学系なら捉えられるが魔力探知系では無理だ。

あまりにも反応が普通過ぎて反応のない空白地を探す事も無駄だし、渡したデバイスすら見付けられんから、相当だな。光学系と魔力探知系の差異を取って、ようやくおかしい事に気付くレベルだ。

カイゼや亜美の能力だと……どうだ？」

「僕的能力では、見付けられなくもない、とは言えるね。」

ただ、他の人達に比べて特定しにくいのは確かだよ。今だと、アー
スラの中にいる事は確か、くらいの精度だね」

「そうね。近くにいる事は確かだけど、それが目の前かと聞かれると
自信が無い感じよ。」

「範囲内にあるのにここまで場所が特定できないのは初めてね」

「そ、そうなのか……？」

長宗我部千晴が、啞然としてる。

探知対策がここまで優秀だとは思っていなかった？」

実はデバイスを持っていてても守護騎士に襲われる心配が無い事に、
ようやく気付いた？」

「だから、自分で転移するのはいいが、1人の時に転移してもらいな。
座標の特定や転移中の保護に失敗して、石の中にいる、とかなりか
ねん」

探知対策の副作用。

位置が不明な相手を保護できるほど、転移魔法が優秀になつてると
は考えにくい。

「げっ、マジか!？」

うあー、私の能力ダメダメじゃねーか……てか、来るときに車椅子
を押さえててくれて言われたのは、こういう事かよ!」

「そうだな。それで、コンピュータはどうなんだ?」

「なんとなく使い方が分かるから、それじゃねーか?」

高校の入学祝いで携帯とパソコンを貰ったけど、説明書も読まずに
何となくで使ってるしな」

「この能力だけは平和だな。」

次は、カイゼ。いってみるか?」

「分かった。」

成瀬カイゼ、現世の経歴はさつき言ったね。前世は今振り返ると黒歴史な30目前ニート男だよ。

望んだのは、オーバーSランク魔導師になる事、転生者の居場所を知る能力、暗殺能力が欲しい、だね。

特典としては魔導師になる事だけでもよかったから、他の転生者がいる可能性を考えて他の二つを決めたんだ。厄介な相手なら排除出来るようにね。

魔導師としては訓練中だね。すぐにSランクになれるとは思えないけど、素質はあるんだろう。

転生者の居場所は、余程遠くない限りははっきりわかる。少なくとも、今地球にいる人は全員把握出来るはずだよ。

落とし穴は暗殺能力を望んだ結果の、この生まれなんだろうね」「最後の落とし穴だけが問題だな」

「そうだね。前世を思い出した時には、失敗したと思ったよ。

確かに、技術は降って湧いてくるものじゃない。それは納得できるだけに、ね」

「やっちゃった、と言うところか。

では、最後だ。謎生物になったチクアーブだな」「我等でございませぬ。

リンディ様、セツナ様、亜美様は初めましてでございませぬ。チクアーブと申します。

前世はソフトウェアの開発会社でプログラマをしておりました、30過ぎの卑称魔法使いでございませぬ。

コンピュータやデバイスを弄ったり扱ったりする能力、大きな魔力、好きな場所に自由に移動する能力を望みましたところ、電子精霊に近い存在になった様でございませぬ。

魔力が予想よりも小さいという点は要求を満たしていないようにも思いますが、マイナスとしては人外という点が大きいでございませぬ。しょう」

「ちよつと待て、デバイスを弄る、だと?」

デバイスも?

弄るの？

聞いてない。

デバイスを内部から弄る事が可能なら、凄い能力持ちという事に。移動能力も、それ自体が特典という事は電波すら不要な可能性も。

「はい、確かにその様に望んだ記憶がございます」

「……なら、これの中は見れるのか？」

お姉様は、宝石型デバイスを出した。

入門用とは言え、お姉様製。

プロテクト
対策は、一般的なデバイスより強固なはず。

「ふむふむ、綺麗な宝石型でございますな。」

それでは、少々失礼いたします」

チクアープの姿が、デバイスの中に消えた。

「……対策が何の役にも立たんか」

お姉様が啞然としてる。

きつと、地球のコンピュータ技術者が電子精霊を知った時と同じ顔。

「いえいえ、最初はサンドボックスの様な場所に誘導されましたので、プロテクトは有効に機能していると見て良いと判断いたします」

少し話した後で少し内部を見せて頂けましたが、なんとも美しい構成、美しく礼儀正しい知性でございました。地球のパソコンは継ぎはぎだらけであり美しくありませんが、エヴァ様のデバイスは感動的でございます。良い物を見せて頂きました。

弄る能力については、調べるにも時間がかかるでしょう。お互いに時間がある時にでも、ゆつくりと検証すべきでございます」
出てきた。

どこことなく目が輝いてる。

「……よし、検証ついでに、お前も研究させろ。」

私の電子精霊はデバイスには無力だ。差を調べたい」

「ええ、構いませんとも。」

同胞が増えるのは嬉しいですからな」

いいの？

まさかのオープン戦略。

罨？　これは罨？

本当に同胞を増やしてほしいだけ？

「そうか……そうだ、夜天にも入れるか？

管制通信でもまともに話が出来ん。

まだ封印は解けていないが僅かに反応がある。人格自体は目覚めて
いる可能性があるんだが……うまく行けば話が出来るかもしれない」
「そういえば、先日試しておりましたな。

あれも広い意味ではデバイスでございますし、試す価値は十二分
でございます。

都合の良い時に連絡を頂ければ、即参上いたしますぞ」

「ああ、頼むぞ」

無印編34話 次への一手

その後も色々話をし、日本が夕方になる頃、お開きという事に7人の転生者の内、セツナ・チェブルーと成瀬カイゼはアースラに滞在する事が決定。

お姉様は2人に魔法の指導をするため、このまま共に訓練場へ。チクアーブは、長宗我部千晴の携帯電話に入って姿を消した。

主、長宗我部千晴、真鶴亜美の3人は、来た時の公園に転送してもらう事に。

公園に、東渚の姿がある。

要注意。

(大丈夫か?)

お姉様の過保護が発動?

だけど、確かに危険そう。

(問題ない。いざとなれば魔法も使うし、妹達もいる。

敵対心を私に集めておけば、2人に危険が及びにくくなる)

(だが、それなら私が出た方がより安全だ)

(私には戸籍がある。

日本の警察に捕まえてもらう可能性がある以上、私に矛先を向けさせた方が処理しやすい)

(それはそうだが……クソツ、ままならん)

「転送の準備が終わりました。いつでも転送出来ます」

アースラの乗務員、アレックス・オーラムが相変わらず転送の作業を行ってる。

準備完了。もうすぐ転移。

「転移が終わったら、少し話がある。

普通に話していいから、少し付き合って」

転移直前、主が長宗我部千晴と真鶴亜美に声をかけた。

でも、説明不足感が漂ってる。

「ん? なんか問題でもあんのか?」

長宗我部千晴の勘が鋭かった。

概ね言いたいことの前提くらいが伝わってる？

「転移先に気になる人がいる。様子を見たいし、何かあった場合の対処は私がする。」

だから、しばらく普通に話をするだけでいい。

認識障害もするから、魔法の話題でも大丈夫」

「そうか、分かった」

「了解よ。話だけでいいのね？」

2人が頷くと、アレックス・オーラムから再び声がかかる。

「それでは、転送します。」

千晴ちゃんは、2人のどちらかに捕まっていて下さいね」

「あ、ああ……転移で迷子なんて嫌だしな」

長宗我部千晴は、主の車椅子を押すような形で握った。

直後、転送完了。

東渚に見られた。

出てくる様子は無い。様子見？

認識障害は、準備だけ。

付近に一般人がいないから、東渚が抵抗出来ない可能性を考慮して、発動無し。

「さてと、今日は貴重な体験が出来たわね。」

アコノちゃん、ありがとうね」

「どーなる事かと思っただけど、やっぱあの人達はいい人だな。」

そーいや、魔法少女達は何をやってたんだ？

ジュエルシード探してたのか？」

長宗我部千晴、ナイス。

話題的に、敵対心を煽るにもちようど良さそう。

「地上のジュエルシードは集め終わっている。」

あと、高町家の人達には、管理局や転生者の事も説明済み。

翠屋にチャチャがいたのも、転生者対策の一環」

「あー、あれはやっぱそういう意味か……」

「無理はしないよね？」

対策、という言葉は、やはり引つかかる模様。

2人のテンションが低下。

「というか、真鶴亜美の聖女属性みたいな危機感の無さが危ない。

「大丈夫。それに、高町家に問題が発生する方が致命的。

対策に手を取られるくらい、保険としては安いもの」

「ならいいんだけどよ。」

「これからも、練習はたまに行っていていいんだよな?」

高町家の道場においでませ。

仲間が多い方が楽しい。

長宗我部千晴の手首には、能力封印用のミサンガとブレスレット型のデバイスがある。

今後も練習する気である事を踏まえた上で、デバイスを譲渡済み。

「一人で練習していてもつまらないと思うし、交流も大事。

なのはがアースラから戻ったら、気兼ねなく話せる相手の1人になると喜ぶと思う」

「そうね、いくら家族に教えてと言っても、内に籠るのは良くないわ。」

お友達……ええと、仲の良いクラスメイトがいたはずよね。

彼女達には教えてあるのかしら?」

真鶴亜美は、名前を出す事を避けた?

出しても、きっと問題は無かった。

でも、不用意な軋轢を避けようとする姿勢は素晴らしい。

「教えてある。だから、なのはは原作よりも安心してアースラに行っているはず」

「随分と手を回してあるのね。」

敵役の金髪の女の子は大丈夫なのかしら?

元々かわいそうな感じだったと思うけれど」

「今のところ、原作よりも大きな問題が出ていないはず。」

可能な範囲で様子を見ているけれど、少なくとも悪化している様子は無い」

確かに、問題は無い。

今は黒羽早苗宅で食事中。本当にアルフに連れていかれてる。

栄養面では、原作よりちよつと健康的。

「そちらも手を回しているの？」

その分だと……ええと、2作目についても、だいぶ手回しはしているのかしら？」

つまり、闇の書について。

魔導師としては、恐らくジュエルシードより明確な脅威となり得る話。

心配は理解出来る。

「あー、あれか……一応襲われる可能性があるから気になってんだけど、どーなってんだ？」

長宗我部千晴に限って言えば、特典の性能が驚異的だから守護騎士に発見される可能性はほぼ無い。怖いだけ。

それでも魔法に関わる事を止めない辺り、やっぱりちうたん。

「今のところ、襲われる可能性はかなり低くできそう。

だけど、他の転生者の問題もある。魔法の練習はしておいて欲しい」

実際は、現時点で守護騎士に襲撃される可能性はほぼ無くなって

る。でも、東渚にそれを教える必要も無い。

「あー、なんかヤバイ人がいるんだっけ？」

「そう。人……他の転生者を殺して警察に追われている転生者がいる。

他にも似た行動をする人がいても不思議じゃない」

本当に、不思議じゃない。

東渚のオリ主様の思考を考えると、今までほとんど行動していない事の方が不思議。

「あらあら……大丈夫なのかしら？」

実際に手を出しているという事だし……」

「死亡が確認出来たのは、今のところ3人。

今のところこれ以上の犠牲者が出る様子は無いけど、警戒は必要なのは？」

「そうか……ヤバそうな人って、全員把握できてんのか？」

長宗我部千晴の疑問は理解出来る。

でも、実際はかなりの無茶振り。

結局全員把握しないと、出来ていと言えない。

「人数的に、まだ見付けていない転生者がいるはず。

全員を把握していると確信は出来ない」

最後の一人が死亡済みの確率が濃厚とはいえ、状況不明。

だけど、ここでは東渚に見付かっていないと思わせた方が得策？

主はそう思わせる方向で話をしてる。

「そうね……ええと、何か気が付いたら連絡する、という事でいいのかしら？」

主が、口元で“しー”をしている。

真鶴亜美の察しが良くて助かる。

「あー、私の方も、一応気にしてみる。

ネギまで見た様な顔は怪しいんだよな？」

確かに、東渚はネギまでみたような顔。

だけど、とある魔術の禁書目録やFateシリーズからもちらほら登場。

最後の1人が未確認の物語である可能性も。

「他の物語の場合もあるから、ネギまだけとは限らない。

だけど、ネギまが多い事は事実。気を付けて。

そろそろ、暗くなり始める。明るい間に帰った方が良い」

お話終了？

結局、東渚は行動に出る様子が無い。

他のオリ主様と違って、随分と慎重。

「わかった。車椅子だと不便だろ、送ろうか？」

「そうよ、世話になってるのは私達だから、遠慮しなくていいわよ？」

長宗我部千晴と真鶴亜美が優しい。

気になる人がいる、と言っていたのを心配してる？

主を心配しているのか、自分の心配をしているのかは分からない。

「大丈夫。それに、私の家に寄ると、2人が家に着く頃には暗くなる。それは良くない」

「そう、分かったわ。」

この辺は暗くなると人が少なくなるから、気を付けてね？」

真鶴亜美が、やっぱり優しい。

でも、既に人は少ない、と言うか、いない。

この付近にいるのは、主達3人以外だと危険人物だけと言うのもどうなんだろう。

「また今度、かな。次はゆっくり話せるといいな。聞きたい事も色々あるしよ」

長宗我部千晴の聞きたい事は、きつと魔法関係。

ちうたんの興味に似ている感じ。

「分かった、気を付ける。」

もう少ししたら時間も取りやすくなるから、その頃に」

長宗我部千晴と真鶴亜美は、2人で同じ公園の出口へ。

主は、違う方向の出口へと向かう。

東渚は、こっそりと主の跡をつけてきた。

主を、参謀役と認識？

(阿呆が釣れたようだが、排除するか?)

(今回はまだいい。それより、2人は公園を出た?)

まだ公園の中。

周囲に人も少ない。即座に向かえば発見出来る。

(阿呆はどうするつもりだ?)

(何もしない。転移で振り切る)

(今回は放置か……)

残念。

今回で排除出来れば、後顧の憂いを無くせたのに。

(あれだけ情報を出しても、何も手出ししてこない。

現時点で手を出すと、こちらが悪役になる可能性が高い)

(そうなんだがな。ホイホイと手を出してくるほど軽率では無い、か)

(強制排除する程の事はしていない。今はまだ我慢した方が法的に無

難なはず)

長宗我部千晴と真鶴亜美が公園の外へ。

人ごみに紛れた。今から東渚が追跡するのは難しいはず。

主の付近に、東渚以外の人影は無い。

転移先に主の家の近くを設定。そちらも人影は無い。

(ありがとう)

「ロードカートリッジ、Bewegen 転移」

問題無く成功。

東渚は呆気にとられてる。

自分より高位だと見せ付けられたから？

ベルカ式が意外だった可能性も。

(今日は、これで問題ない。)

そのうちに行動を起こす可能性がある。その内容に応じて、どの治安組織と協力するか考える)

(そうか。無理はするなよ?)

(分かってる)



その夜、セツナ・チェブルーと成瀬カイゼが部屋に戻った後。

お姉様は、リンデイ・ハラオウンの部屋でお茶を飲んでる。

もちろん、砂糖とミルクは入れない。リンデイ・ハラオウンはやつ

ぱり残念そうだった。

何故か変態ロリコンもいる。

現れた瞬間にお姉様の蹴りで吹き飛ばされたのに、何事も無かったかの様に座ってる。

「それで、残りのジュエルシードについて、だったわね？」

リンデイ・ハラオウンが甘そうなお茶を飲みながら、集まった理由を確認してる。

「ああ。大よその位置は分かっているんだが……どう回収するかを相談したい」

「そのまま回収するには、問題があるという事でいいのかしら」

「分かりやすい問題点としては、プレシアだな。」

あの後、ある程度は調べられたか？」

「そうね、エヴァさんが言っていた事の一部について、正しかったと確認が取れたくらいかしら。」

それ以上は、簡単には調べられないわね」

当然。

いくらリンディ・ハラオウンが提督という身分でも、自分の組織の裏側は簡単に調べられない。

「だろうな。管理局に貴方たちはこんな悪い事をしていませんかと聞いて、まともに返事が返ってくる事を期待する方がおかしい。」

とりあえず、プレシアが関わっている事が前提での話になるが……プレシアの居場所は見付かっているか？」

「さっぱりね。少なくとも、この付近の通常空間には居ないみたいだけれど」

リンディ・ハラオウンは、やれやれと言いたげな表情でため息を吐いている。

思うようにいかない、といった感じ？

「おや、エヴァちゃんは見付けていないのですか？」

ロリコン 変態が意外そうな顔をしてる。

余計な事を言わないか心配。

「次元空間を広範囲に調べられるような探索魔法があるなら、是非教えてくれ。」

その辺をうろついている貴様は知っているのだろうか？」

私達の知る限りでは、そんな魔法の情報は無い。

アースラが時の庭園を見付けてないという事は、恐らく時空管理局も使っていない。

「エヴァちゃんが知らない魔法を、私が知っているわけがないじゃないですか。」

その気になれば、私のあんな記憶やこんな記憶も見ることが「止める変態！ メイド喫茶や自分の入浴風景の記憶なんぞ送ってくるな!!」

「おや、お気に召しませんでしたか」

「気に入るわけがないだろう。全く、使えん奴だ」

本当に使えない。

でも、今回はそんな魔法が無くて良かった。

「つまり、次元空間のどこかにいる、という事でいいのかしら。」

「それも原作知識というものでしょう?」

「そうだな。次元空間のどこかにある……アレは何て呼べばいいんだ?」

「まあ、時の庭園と言う名前の、次元空間航行艦船の様な物にいますだ」

「遺跡に近い代物の様ですね。」

「庭園と言うくらいですから、昔は綺麗な場所だったんじゃないでしょう?」

「変態は、時の庭園の情報を集めてない?」

「確かに、確認済みの情報には無かった。」

「嬉しそうにアリシア・テスタロッサを見に行きそうなのに。」

「変態の情報は5歳以降の情報が多し事と、アリシア・テスタロッサが5歳で死んだ事を考えると、見に行く前に死亡したのかも。」

「プレシアと話をするには、そこに行くか、そこから引つ張り出す必要があるからな。」

「その方法について話をしたい」

「それがジュエルシードの回収方法に繋がる、というわけね?」

「そういう事だ。」

「原作云々は置いておくが、フェイトか時の庭園を見付ける事は出来るそうか?」

「今でも見付けられていないフェイトかアルフを何とかして捉えるか、次元空間の広域探索しか手段を思い付かないんだが」

「難しいわね。今も手を抜いているわけじゃないし、これ以上の探索は手段が無いわ。」

「次元空間の探索もしていないわけじゃないけれど、今のところは何も見つかっていないし」

「おや、探索技術自体はあるという事ですか？」

「事故にあつた艦の捜索にも必要だし、無策と言うわけにはいかないわ。」

もつとも、惑星上や通常空間よりも見付けにくいのは確かだし、あまり期待し過ぎてもいけないのだけれど」

それでも、広域探索技術を作り出した技術者を尊敬。

次元空間は距離や方向の概念が不安定になりがちだから、長距離を安定して扱う事自体が難しいのに。

「それでも、その技術には興味があるな。」

事件が終わってからで構わんから、教えてもらえないか？」

「駄目よ。一応機密技術らしいから」

なんてこつた。

残念。

「そうか、仕方ないな。」

話を戻すが、正攻法でプレシアを見付けるのは難しい、という判断で良さそうか」

「残念ながら、そうなるわね」

「そうか。それなら、困った時の原作知識だ。」

「ここからの流れを説明するが、構わんな？」

「あら。今まで随分と語っていたけれど、どういう心境の変化かしら？」

「今までは、こういう情報を持っていると見せるためと、行動理由を開示する意味合いが強かったんだ。だから、過去の情報と、変えたい未来の情報を中心に話したつもりだ。」

だが、これからの行動は原作から離れるものだ。だから、必要以上に囚われるのは避けたくてな」

「そう。それでも、現時点では貴重な情報だもの。全て話してもらえるかしら？」

「言葉で全て語れるかは分からんが……まずは、この先の流れを説明しておくぞ。」

残り6個のジュエルシードは海の中だ。これは実際に調べても

らってほしいの場所を確認してあるから間違いない。

原作ではフェイトが先にそれに気付き、魔力を打ち込んでまとめて強制発動させる無茶を仕出かす。もちろん、いくらフェイトの魔力が大きくても、限界があるからな。封印出来ず劣勢に立たされるが、なのはが制止を振り切り救援に向かい、協力して封印に成功する。

なのはの行動はフェイトと話がしたいと言う理由だが、融合暴走の危険もあったから不問になった事は言っておくぞ。

この後、話が出来そうな雰囲気にはなるが、プレシアの次元跳躍攻撃がアースラとフェイトを直撃する。アースラはセンサー機能が停止、クロノがジュエルシードを3つ確保するが、アルフがフェイトと残り3つのジュエルシードを持って逃走する」

「その時点では、話が出来ないという事になるわね？」

リンディ・ハラオウンは、このイベントを回避しようと考えた？

確かに、防ぎたいであろう内容ではある。

「布石にはなるから、もう少し聞いてくれ。

この後、即座にジュエルシードを奪わなかったフェイトを、プレシアが折檻する。

アルフがそれを見て激怒、プレシアを攻撃するが反撃され撃墜、瀕死で日本に逃亡する。

犬の姿になったアルフは、日本でなのはの友人に助けられ、そこでののはに再会。

アルフはフェイトの事情を全て話し、なのはにフェイトを助けてくれと頼む」

「つまり、アルフさんはプレシア女史をあまり良く思っていない……」

交渉時には、重要な点。

抱え込む際の手札となり得る。

「何度か逃げよう、止めようとフェイトに言っているくらいだ。プレシアに対する感情は悪いだろうな。

その後、なのはとフェイトは互いの持つすべてのジュエルシードを賭けて激突。

なのはが勝利し、フェイトは全てのジュエルシードを渡そうとする

が、再びプレシアの攻撃がフェイトを襲い、フェイトが持っていたジュエルシールドがプレシアの元に転送される。

原作でプレシアの居場所が判明するのは、転送の尻尾を掴めるこのタイミングだ。

フェイトはなのは達が保護、アースラに連れてくる。

アースラからは武装局員が時の庭園……さつきも言ったプレシアのいる場所に取り込みアリシアを発見するが、激昂したプレシアに撃退される」

「流星は大魔導師、といった所かしら」

武装局員程度で何とかなる相手なら、SSランクの名折れ。

それが理解出来るだけに、リンデイ・ハラオウンは頭が痛い模様。

「その後、プレシアの口からフェイトの過去と、ジュエルシールドを集める目的が語られる。

フェイトの事をお人形と言うのもここだ。なのは達がいたからこの前は言わなかったが……フェイトはここでプレシアに大嫌いだったと宣言され、一度完全に心が折れる。廃人の様な目で描かれていたな。

その後、プレシアはジュエルシールドを暴走させる。次元断層を発生させて、アルハザードに向かうためにな」

「武装局員は撤退済みよね……間に合うのかしら？」

「話がややこしくなるから、順に行くぞ。

この後、クロノ、なのは、ユーノ、少し遅れるがアルフも時の庭園に突入。リンデイ、お前も出て次元震を抑え込むことになる。

その戦闘中にフェイトがなのはを心の拠り所にして復帰、プレシアと話をするために突入して、苦戦するなのは達の援護に入る。

最後に、フェイトはプレシアと話することには成功するが、プレシアは最後まで母と呼ぶフェイトを拒絶して、アリシアの遺体と共に虚数空間に落ち、時の庭園も崩壊する。

最終的に次元震は終息して、これで現場は終了だな」

「そう……随分と綱渡りをしているわね」

まさに綱渡り。

物語らしいと言えば、それまで。

「私を知るのには物語としての出来事だからな。盛り上げるためにもギリギリになる事は仕方ないだろう。」

この後は……まあ、事後処理だ。

母の為に必死だったフェイトの罪は、クロノが頑張つて軽くする様だな。その際に、フェイトは嘱託魔導師の資格を取る方向になるらしい。罰を軽減し、なのはのいる管理外世界に來易くする為と聞いたことはあるが……この辺の理由は詳しく語られていないな。

ついでに言えば、闇の書事件でなのはが襲撃されて撃墜した際、助けに入るのがフェイトとユーノだ。フェイトはそのまま最終戦までなのはと共に最前線で戦う事になる」

「あれだけの力を持つのなら戦力としては充分。嘱託魔導師ならば協力もしやすい……なるほど、プレシア女史に会うだけでなく、フェイトさんをどのように扱うかも問題、という事になるわね」

リンデイ・ハラオウンは、やっぱり戦力として取り込みたがってる。人材確保に余念がない模様。

「プレシアを単純に助けただけでは、どう転ぶか分からんからな。」

しかも、原作ではプレシアはフェイトを虐待していたが、命を奪うどころか傷が残るような怪我もさせていなかった様だ。続編で怪我が残っている様子は無かったからな。しかも、虚数空間に落ちる時にフェイトをそのまま残す上に、その直前に、かなり優しい顔を見せている。お前は生きろ、とでも言うかの様にな。

憶測でしかないが、プレシアは既に死を覚悟していて、フェイトにわざと嫌われるよう振舞っていると思えてならん。これが正しければ、うまくやればプレシアとフェイトの仲を取り持つことも可能だろうから、悩ましいんだ」

「そうね……だけど、まずはプレシア女史のいる場所を見付けなければ話が始まらないという事に変わりはないわね」

「そうだな。」
原作通りの流れになる事を前提としていいなら、プレシアの居場所を特定するプランは今のところ3つ提示出来る。

まず、何とかして海中の6つ全てを回収してしまい、なのはとフェイトの最終戦に強制的に持ち込むプラン。

この場合はアルフがこちらに協力する気になる可能性が下がることになるから、フェイトの扱いはより慎重になる必要があるだろう。海中にあるジュエルシードの回収も大きな危険が伴う。間違いないフェイトやプレシアの横槍が入るだろうからな。

次に、原作同様の流れにするプランもある。

事前に準備が出来るからアースラへの攻撃は防げる可能性はあるだろうが、この時はプレシアへの接触を避ける事になるな。

最終的なジュエルシードの暴走は、私も抑え込む自信がある。フェイトが話をした後、庭園を崩壊させずに話し合いに持ち込む事は可能だろう。

但し、アルフが生き残れるか、無事に保護出来るかといった、原作からの乖離が無いかは心配だな。

最後に、フェイトの無茶を待ち、アースラやフェイトへの攻撃を逆探知して場所を特定出来たら庭園に突入してしまうプランだ。

ジュエルシードを奪おうとするアルフをどうにかして抑え込む必要はあるし、友好的に取り込むわけではないから、庭園内の戦闘でアルフとフェイトの援護も期待出来ないだろう。

ジュエルシードの確保に失敗したプレシアがどうという反応を示すかも怖い点だな。

前提条件をクリア出来なければ原作同様のプランに逃げられるから、まずはこれを試した方がいいかと思っっているのだが……」

「確かに、前提が正しければ有効なプランだけれど……原作知識と言う物も確実ではないが悩みどころという事でしよう？」

「何故か元々差異がある様だし、私達が関与した事でも未来は変わっているはずだ。今となつては、有り得た未来の1つだったと考えるのが正しいのだろうか。」

ただ、直接手を出さなければ、思ったよりズレが無いのも事実だ。発言の一字一句すら同じという場合もままあるぐらいにな」

「アコノさんが惑わされる事を心配する発言をしていたのは、それも

原因ね？」

主が、高町なのはとユーノ・スクライアに初めて会った時の話。ジュエルシードの解析時間を確保する為に色々言っていた中で、確かに言っていた。

「そうだな。最終的にうまく行くはずだった解答例を知っているだけに、他の答えを見逃す可能性があるのは否定できん。同じことをしてもうまく行く保証は無いのにな。」

それに、現実の事だと解つてはいるのだが……未だに現実感が乏しいと感じる時もある。こんな記憶を持つのも考え物だ」

「確かに、私もそれは感じますね。」

特に本の姿となっている時は、現実感など欠片もありませんよ」
変態が頷いてる。

でも、人の意識のまままで本の姿となったら、現実感は無さそう。きつと、お姉様が基本的に人の姿でいるのと同じ理由。

「そういえば、お前は何を望んだ？ 私がこうなったのは吸血鬼の様な能力を求めた結果だと思ってるんだが」

「多くの資料を見て、調べて、記憶したい。望んだのはこれだけです」
「よ」

資料のみ？

魔法関係を望んでない。

人外になる要素が見えない。

「……魔法関連や特殊な能力は求めなかったのか？」

「私は、元々歴史研究者ですからね。資料に埋もれて死ねれば本望だったのですよ。」

文化も歴史に含めて考えられますから、各地を渡り歩いて文化などを調べ集める役目と言うのは実に適切ではあるのですが……随分と大袈裟な実現方法だと思いませんか？」

資料に埋もれて？

文章の区切りの……歴史資料でなくてもいいかも？

「それで、資料の内容は？」

歴史の資料だけではなさそうだが」

「色々ですよ。好ましいのは……そうですね、邪馬大国の2人目の女王や紫の上物語、ジヨウン・オブ・アークなども良いですね」

「ロリ女王に光源氏計画にロリ聖女が目的か！ ぶれない変態ロリコンだなお前はー」

「いえいえ、ちゃんと普通の資料も大好きです。」

ロココのファッションを調べてみると、ゴスロリやペガサス盛りを思い出したりして笑えますからおススメです」

「貴様の資料はネタと欲望で出来ているのか!？」

「失礼ですね、これでも大学教授だったのですよ。それだけで教鞭を取れるわけがないでしょう？

それに、ちよつとしたネタは生徒の受けが良いですからね。割と人氣があつたのですよ」

「……その裏で、生徒はこんな歪んだ目で見られていたのか」

「まさか。男性や大人の女性が愛でる対象になるわけがありませんから、真摯に対応していましたよ」

「……真性だな、これは」

「ええと、そろそろ話を戻してもらえないかしら？」

無印編35話 手の中の果実

「残り6個をどうするかでしたね。」

現実的に考えれば、1番目のプランは時間や危険性を考えると厳しいでしょう。当初は3番目のプランを目標として、失敗した場合に2番目のプランに移行するのが一番でしょうね。フェイトちゃんが無茶をしなかった場合に、1番目のプランを考慮すれば充分です。

もちろん、フェイトちゃんや時の庭園の搜索も並行して行うと言う形が良いのではないのでしょうか？」

「ロリコン変態がまともに考察してる。」

「それ何て異常事態？」

「そうだな。フェイトが無茶をしてから動くのは2番目と3番目のプランで共通だ。プレシアの攻撃を防ぎ、逆探知に成功し、フェイトを捉えられた場合のみ3番目が実行出来る。」

2人の捕獲に失敗した場合は、仮にアルフやフェイトの転移で時の庭園の場所を特定出来たとしても、その時点で突入するのは止めた方がいいだろうな」

「そうですね。特にフェイトちゃんがジュエルシードの確保に失敗した場合は、プレシアさんに殺される可能性すらあるでしょう。」

可憐な少女が殺される場面を見るのは忍びないですから。その意味では、ジュエルシードの確保は優先せず、最悪の場合は全て渡してしまう事も視野に入れて良いかもしれません」

「ロリコン黙れ変態」

「ロリコンやっぱり変態は変態だった。」

「考察の根拠は通常営業だった。」

「そうですね……理由はともかく、殺される可能性は否定出来そうにないわね。ジュエルシードをあえて渡すのは危険そうだけれど、無視して良い選択肢ではなさそうね。」

1番目のプランは、海の中のジュエルシードを封印するだけなら、なのはさんとクロノで何とかかなりそうだけれど。

カイゼさんやセツナさんは、実力的に手助けは難しいかしら？ そ

れに、エヴァさんやアコノさんもカートリッジを使っていいなら戦力としては問題無さそうに思うし」

封印だけに限定すれば、きつと可能。

でも、前提条件的に困難。

「足が不自由なアコノはなるべく前線に送りたくないし、私は研究者で戦闘を想定した訓練は受けていない事はユーノやなのはに聞いているだろうか？」

それに、カートリッジはどうしても隙が増えるし、所持数の問題もあるからな。この場合では足手纏いになりかねん」

「プレシアさんやフェイトちゃんの横槍はあると考えるべきでしょうね。絶好の好機と見えるでしょうし、フェイトちゃんは必死ですから、経験の浅い2人は遠慮なく叩き落されるでしょう」

ロリコン
変態の考察と被った。

鬱だ。

「最悪の場合、融合暴走する6個のジュエルシードを相手にする羽目になるしな。そうなってしまうえば、なのはやクロノを温存する事も難しくなる。」

こっちの主力2人が疲弊したところでSSとAAAの魔導師に手出しされたら、不慣れな2人を温存出来ていたとしても、話をするまでもなく全て奪われる可能性が高いだろうな」

「やっぱりそうなるわね。」

となると、クーネさんの言う通り、可能ならば3番目、無理だったなら2番目が一番無難という事になるのかしら」

原作のイベントを前提とすれば、こうなる。

原作を無視した作戦を誰も言わないけど、他にプレシア・テストアロッサを釣る方法が見当たらないとは言えそう。

「少なくとも、私はそう考えた。」

現時点でフェイトを追うことが出来ていれば、無茶の前に時の庭園の場所を探る事も可能かもしれないが……出来ていない以上はやむを得ん」

「ええ、うまく隠れられているわ。なかなか上手みたいね」

アースラは、フェイト・テストロッサを捉えられてない。だけど、お姉様は情報を出す気が無い。

先に突撃してもプレシア・テストロッサの身柄を確保しにくいから仕方ないとはいえ、時間稼ぎにしかならない気もする。

「それを踏まえた上での、さっきのプランだ。」

もつとも、多少の準備期間があるとは言っても、SS級の魔導師の攻撃を受けることになる。

「耐え切った上で、攻撃元を探る必要があるが……可能か？」

「なかなか難しい事を言ってくれるわね。」

「簡単なわけではないでしょう？」

むしろ、困難と言っている。

StrikerSで八神はやてが空港を凍らせたり、広域攻撃したりしていたのは伊達じゃない。

本気なら何がくることやら。

「二応、フェイトとアースラへの同時攻撃だ。」

1箇所集中するわけではないが……厳しいだろうな。

一応、私はなのはの方に行くつもりだ。あいつらだけで防ぐのは難しいだろうからな。

「可能なら、座標特定もやってやろうじゃないか」

「あら、そんな事も出来るのかしら？」

「可能なら、と言っただろう。成功する保証は出来んよ」

「エヴァちゃんですからね。」

想定外の事が起きたり、うっかり何かを仕出かしたりしない限りは大丈夫でしょう」

変態ロリコンの、お姉様の評価が妙に適切。

何故。

「貴様の意味不明な信頼は、どこから来るんだ？」

「嫌ですね、愛ですよ、愛」

変態ロリコンの悪意などいらん！」

「まあまあ。とりあえずは、防御系の強化が必要かしらね。」

フェイトさんがいつ頃動くか、原作の知識としては分かるのかしら

？」

リンデイ・ハラオウンの仲裁。

というか、話題ずらし。

「アースラに来てから10日目ぐらいのはずだ。数日中、といったところだな。」

早ければ……夜中に来た日を1日目とすると、明日か？」

「ずいぶんと期間が無いわね。」

少しゆっくりしすぎたかしら？」

「10日を数えてみると、思ったよりも時間が無いな。」

だが、今からでも、出来るだけ手は打った方がいい」

「そうね。エヴァさんは、セツナさんやカイゼさんへの指導かしら？」

「今日はもう休ませた方がいい。次の訓練は明日だな。」

すぐになのはと並んで戦えるレベルになるのは無理だろうが……闇の書対策で本格的に動き始めるまでには使い物になってほしいものだ」

「2人とも、今はもう休んでいますからね。」

慣れない環境という事もありますから、あまり急ぐのも良くないでしょう」

「なぜ貴様は2人が休んでいると分かるんだ！」

「情報収集の一環ですよ。」

ああ、ご心配なく。男色趣味はありませんし、セツナさんも鑑賞対象としては期間が無さすぎですからね。

なので、2人には何もしませんよ」

「2人に限らず貴様は何もするな！」

「大丈夫ですよ。」

イエスロリータ、ノータッチ。

紳士として当然の嗜みです」

「何が紳士だこの変態！」

お姉様の拳が空を切った。

変態の幻影は優秀。なんて残念な能力の使い方。

「まあまあ、落ち着いて。」

でも、転生者の人達はベルカ式、それも真正古代エンシェントでいいのかしら？
戦力はあるに越したことは無いのだけれど……」

「私はそれ以外教えられんし、お前達も余裕は無いだろう？」

ミッド式を教えてくれるなら私は喜んで学ぶが、もう少し余裕がある時に頼みたいところだな」

「そうね、時間や人手の余裕を考えると、少なくともこの事件の目処が付いてからになるわね。

事件が終結した後は何れくらいここに滞在するかも解らないし……その意味では、確実にエヴァさんという先生が確保できる真正古代ベルカ式にするのは、悪くない選択かもしれないわね」

余裕はアースラ側、正確には教師役に必要だし。

お姉様と言うか、私達は何時でも情報収集の構え。

「まあ、慌てる気は無い。のんびり知っていくさ」

「本来、時間はいくらでもありますからね。」

今は目の前の緊急事態が放置できないだけでしょう？」

「さすが不老、と言ったところかしら？」

「今のところはミッド式の知識が無くてもそれほど困っていない、という事も大きいかな。」

さて、まずは明日に向けた準備だ」

「そうね、そうしましょう。」

エヴァさんにも部屋を割り当てておいたから、休むならそこを使ってもらっていいわよ」

「そうか、助かる」



翌朝。

世間は連休も終了し、平常の生活へと戻る頃。

主は平常の、学校へ通う生活へ戻った。

高町なのははベッドの上で3つのジュエルシードをくるくると回し、リンディ・ハラオウンはクロノ・ハラオウンやエイミィ・リミエツ

々と防御方法の検討をした。

そんな朝のひと時、アースラの部屋で起きた直後風のお姉様の元に、チクアーブが現れた。

ちなみに、お姉様は幻影を残して別荘に行っていただけ。仮に部屋の様子を見られていても眠っていた様に見えたはず。

この部屋に関しては監視機構を制圧済みだけど、稼働させる意思が見られない以上は、黙って情報を取る気は無くなっていると判断して良さそう。

「今度は、寝起きか。」

もう少しTPOを考えられんのか？」

「いえ、興味深い情報入手いたしました。

可能な限り早くお伝えした方がよろしいかと考えた次第でございます」

お姉様が呆れてる。

でも、チクアーブを誘導したのは私達。

とても重要な情報。

「ほう……どこで、何を見た？」

「管理局と、とある民間企業の記録でございます。

内容が少々多いので、デバイスか何かに転送してご覧いただくのがよろしいかと推測いたします」

「そうか。デバイスは……昨日入ったあれでいいか」

「おお、あれは美しいものでございましたからな。

相応の配置でお渡しさせていただきますぞ」

お姉様が宝石型のデバイスを出すと、チクアーブが分裂して片方がデバイスに消えていく。

話は残った方が継続する模様。

「別に、確認できる状態であればいい。

ところで、ここに来たという事は、アースラのシステムは掌握済みか？」

「やはり、中央部分は堅牢でございますな。

ですので、末端部分を支配下に置くことが可能な程度でございます

す」

「そうか。感覚的で構わんが、プレシアの攻撃を受けた時、防ぎ切るだけの防御力がアースラにあると思えるか？」

「時の庭園の性能にもよるでしょうが、アースラの防御機構だけでは心許無いと推測いたします。」

恐らく、クロノやリンデイによる防御も併せて行う必要があると愚考いたします」

私達も同意見。

プレシア・テスタロッサが本気でアースラを沈める、つまり命を削る覚悟でSSの能力を全力行使すると仮定するなら、クロノ・ハラオウンとリンデイ・ハラオウンが全力で防御に入っても不安が残ると予想。

フェイト・テスタロッサへの攻撃があるならそこまでの攻撃は無いはずだけど、アースラの防御が優先になるはず。

「ふむ……やはり、クロノは出ないと考えるべきか。お前達も防御に回した方が無難か……？」

「海のジューエルシード回収でございませうか。」

攻撃があると言っている以上、クロノは防御に回ると考える方が自然でございませうな」

「海は私が行くつもりだから、変な乖離が無ければ何とかなるか。」

攻撃を防ぎ、座標の特定を試し、うまくアルフを止めて、フェイトを保護する。

なかなか難易度の高いミッションだ」

「時の庭園でございませうか。」

うまくやれば、我等で搜索する事も不可能ではないと推測いたしますが」

確かに不可能じゃないというか、場所は既に判明してる。

でも、それは失敗した際に切る札。先に見せる札じゃない。

「いや、場所は分かっているんだ。」

それを言っていないから、ここで探知した風に装うために、試したという事実が重要だな」

「なるほど、そういう事でございますか。」

「ジュエルシードの封印作業は、手伝いが必要ですか?」

「いや、不要だ。お前は防御に回ってくれ。」

「そもそも、まだ魔法に慣れていないだろう?」

「意外に何とかなるものでございますな。」

分体も出して練習し続けましたところ、行使に関しては特に支障なく可能になったかと考える所存でございます」

私達と同じやり方?

分体の能力次第では、有効な手法。

「経験の共有か……便利に使っているな。」

それなら、時の庭園に行く場合に手助けを頼むかもしれん。

分体を増やせるのだろうか?」

「可能でございますが、頭数を増やすのは戦力的に見て魔力の供給に不安がございます。」

我等自身が生み出せる魔力は、分体をいくら増やそうとも合計量に変化が無い様でございます。

どこか1か所の手助けであればさほど問題はございませんが、複数の場所でございますしたら、何らかの方法で魔力の供給を受ける必要がございます」

私達より、この点は性能が低い?

リンカーコアを分割してしまう感じにも聞こえる。

「プレシアの様な外部供給が必要という事か……」

供給する場所は、現場である必要はあるのか?」

「遅延や安全性を考えますと近い方が望ましい事は確かでございますが、何体も経由する事で遠隔供給をする事は可能でございます」

(空きの魔導炉か人工リンカーコアはあるか?)

別荘に、予備の魔導炉は複数存在。

但し出力の低い小型のもの。瞬間最大出力はAAクラスの魔導師程度。

それでも、持ち出すのは場所的にも作業的にも困難。

人工リンカーコアは、私達の装備や武装としては存在。

保有するリンカーコアを渡せる状態に加工するには、若干の時間が
必要。

Sクラス以下なら、昼過ぎには準備可能。

(そうか、分かった。

昼過ぎなら間に合うだろうから、Sクラスを1個と、AからAAA
程度のを10個で充分か。

準備を頼む)

「それなら、人工リンカーコアを準備する。

少し時間がかかるが、後で妹達から受け取っておいてくれ。

魔導炉より移動が簡単なはずだ。大切に使うてくれよ?」

「おお、それは有り難い事でございます。

末永く使わせていただきます」



その後、人工リンカーコアをチクアープに引渡し完了。

内訳はSクラスを1個、AAAクラスを2個、AAクラスを3個、A
クラスを5個の、計11個。

同数のデバイスも併せて渡したため、チクアープの総戦力が物凄い
事になる予定。

チクアープは大半をアースラに持ち込み、お姉様の指示を待つ模
様。

その頃のお姉様は、チクアープが持ち込んだ資料に目を通して、た
め息をついてた。

感想を一言で言えば、これはひどい。資料の書き方ではなく、資料
が示す事実が。

プレシア・テスタロッサの身柄確保には役立つ可能性のある内容。
無下に出来ない。

その後、お姉様はセツナ・チェブルーと成瀬カイゼに魔法を教えつ
つ、気に関する観察を開始。

セツナ・チェブルーはちよつとした行動でも使ってしまったている模

様。

至近距離でじっくりと見る事が可能な、この機会は逃さない。

(やはり、魔法を使っていない場合にも魔力の反応があるな)

測定誤差とは考えられない水準。

高町家や月村家の人達と似た現象。

リンカーコアが強力な分、紛れやすい。

誤魔化しやすいのはいい事だけど、観察には向かない。

(リンカーコアが活性化していない状態での魔力反応……肉体や魂の変換能力を使用している、という事か？ だが、このレベルの魔力でここまで効果が出せるとは考えにくい。低魔力での身体強化技法に近いのか……?)

この仮説では、剣技の説明が付かない。

見せてもらった雷明剣は、明らかに観測魔力に対して効果が大きすぎた。

高効率な技法としても、薪ストーブで飛行機を飛ばすような効率が要求される。

不可能と言いつ切る事は出来ないけれど、極めて困難とは言える。

使用魔法の隠蔽技術と言われた方がまだ現実的だと思うけど、2度目はAMFの影響下でも同威力という結果を出してる。魔法でない事だけは確実。

(未知の何かを使用する際に若干の魔力も発生すると考えるべきか、魔力と何かを併用していると見るべきか……いや、魔力を使うなら魔力結合を無効にするタイプのAMF内では影響が出るはずか。となると、魔力は飾りか副産物という事になるが……)

手掛りは目の前にあるのに、ままたらんな。調査用に記録や立ち会い無しで訓練室を使うのも許可されているし、どの程度の飛行能力があるかも気になるから、一度模擬戦をやってみるか。ここでは飛び回るには狭いから、別荘に招待して思う存分使ってもらうのもありかもしれないが……)

別荘を公開していいなら、それも手段として有効。

現時点で別荘に行ったことがあるのは、主のみ。

(……そういえば変態は最初、別荘を作ったと断定していなかったか？

リーナ以外には誰にも漏らしていないはずだが……)

ネギまとお姉様の研究内容を知っていれば、別荘を作ろうとしていた事は予想できるはず。

鎌をかけられた可能性も。

主様と宵天が接触した情報は無いけど、お姉様が完成するまでは何らかの方法で情報を受け取っていたはず。それを利用して会話が可能だった？

(分かんが……リーナは宵天が転生者だという事を知っていた可能性は高いだろうな。

私にそれを隠していたのは、厳しさか優しさか……)

夜天も宵天も、お姉様や私達は会う機会は無かった。

お姉様が管制機能を持っているのに話した事も無かった以上、恐らく意図的。

変な望郷の念に駆られるのを避けたと考えるのが自然かもしれない。

(……そう、か。

私はリーナにとって最後まで子供のまま、信じられる相手にはなれなかったのか……)

主様が最後に責は自分にあると言っていたのは、お姉様が大切だったからと思える。

大切だったからこそ、言えなかった事もあるはず。

(……今となっては、真相は闇の中か。

ところで、今の空間生成関連技術は、どの程度広まっていそうだ？

デバイスの格納領域が近いと思うが……レベルによっては、別荘を知られるのも危なそうだ)

生活可能なものが実用化されているかは、日常生活に関する情報が不足している為に不明。

使われていると言えただけの根拠は見付けてない。

公開した際にどんな問題が発生するか分かってない。

誰を信用するか。どこまで信用するか。

現状では、これが重要。

いっそ、別荘とは別に体育館の様な空間を作成する？

別荘に地下施設の様な場所を作って、そこに誘導するのもあり？

結界に覆われた特殊な部屋と説明すれば、言い訳は可能？

(色々と問題が山積みだな……どうしたものか………)

無印編36話 海の上で

その後もお姉様によるセツナ・チェブルーと成瀬カイゼ、ついでにチクアーブも加わっての基礎訓練は続く。

昼を過ぎて休憩を取る頃には、3人ともかなりの成長を見せた。既にデバイスの出力や補助能力の限界が見え始めていて、現状でも大雑把に見てAからAA程度の実力を発揮出来ると見て良さそう。

相性を考えなければ、武装隊やユーノ・スクライアと対等以上で、高町なのはやくクロノ・ハラオウンに及ばない水準と言える。

成瀬カイゼは飛ぶことに慣れてなくて、今は陸戦仕様。現時点でもAAクラスの魔力量と繊細な魔法制御力が強み。幻術や拘束系の適性が特に高く、移動や攻撃等も悪くない。ユーノ・スクライアとティアナ・ランスターと飛行適性と大きな魔力量を足したらこうなりそうな感じ。

セツナ・チェブルーはバリバリの空戦仕様。こちらも魔力量はAAクラスで、高い瞬発力と思い切りの良さが特徴的。魔法無しだと高速高機動高威力の近接攻撃型で、フェイト・テスタロッサから遠隔攻撃を引いて攻撃力を足した様な感じ。魔法の適性次第だけど、遠隔攻撃も可能な万能型の前衛や遊撃になる事が期待できる。

ちなみに、お姉様と行った初めての模擬戦の会話はこんな感じだった。

「何だその150度ターンや空中静止や急加速は！ 本当に翼で飛んでいるのかお前は!?!」

「これくらいできないとドラゴンと空中で戦えませんよ！」

それに、魔法が使えない様に妨害しているとか言っていたのに、エヴァさんは魔法を使っているじゃないですか！」

「私は対策があるからいいんだ！ どうかどうしてこの弾幕を抜けてくる!?!」

「魔法弾は斬れるじゃないですか！ ドラゴン3匹の集中攻撃はもつと苛烈でしたよ!!」

自己紹介の時に自由に空を飛びたいと望んだと言っていたけど、自

由すぎる。技法としては明らかに虚空瞬動で、翼で姿勢の補正をしている様子。AMFの影響をまるで受けないのに魔法で飛んでるとしか思えない動きが可能で、更に高威力の剣術も問題なく使える。St riker Sなら対ガジェット戦やゆりかご突入戦の切り札になれる存在だと判明。

チクアープは空戦仕様でバランス型。既に最大でSの人工リンカーコアの魔力を持て余し気味だから、もっと良いデバイスを考慮する段階に来てる。

要するに、魔法戦の経験不足を考えなければ高町なのは迫る水準と言えるし、持久力のある戦力として充分あてにできる。最大で12人のAクラス以上魔導師と計算できる分、現時点でも高い水準と言っている。分体も比較的自由に増やせるようなので、安全な場所に逃がしておくことで疑似的な不死性を確保出来るのは確実に、余剰魔力は分体の生成と維持に回している模様。

という感じに調査や指導は進み、今は食堂でおやつの時間。成瀬カイゼによると、変態はどこか別の遠い世界へ行ってるらしい。とても平和。

高町なのはとユーノ・スクライアは別の訓練場で戦闘訓練を行っている。

お姉様は戦闘訓練が不慣れな設定。最初の模擬戦は立会無し記録無しで行い、それ以外はアースラのスタッフに手伝ってもらって簡単な戦闘訓練を交えたりしていた。

レベルが違う以上は、当初は別での訓練が妥当という判断。だけど。

「全員、予想以上の成長だな。」

正直言つて、この速さで上達するとは思わなかったぞ」

「そうなんですか？ 結構必死だったのですが」

あまり疲れてる様には見えないセツナ・チェブルーが、首を傾げてる。

元々命懸けの戦闘を経験しているためか、根が真面目だからか、学習能力がとても高い。

「僕は、多少なりと暗殺者の組織で鍛えられていたからだろうね。デバイスが貧弱だと気付いていたから、基礎的な部分を中心に練習していたのが良かったんだと思うよ」

成瀬カイゼは、暗殺者集団出身。

3人の中では最も経験が長い。

「我等は、分体を使用している同時修行が可能です。ごさいます。

その恩恵は計り知れぬものがあると推測いたします」

短時間でも、高効率の修業が可能なチクアープ。

訓練時は、子ネズミ10匹が飛び回った。2個は地球での活動に割り当てている様子。

ちなみに、今の姿はちよつと丸めのネズミ耳を付けた犬上小太郎の姿で、クツキーの様なお菓子を食べてる。子ネズミの姿では食べられないため、らしい。

でも、悪戯小僧的な外見でこの口調だから、違和感が半端ない。

「それでも、大したものだ。

この様子なら、時の庭園に行っても大丈夫だろうな」

「時の庭園……ですか？」

原作を知らないセツナ・チェブルーが、やっぱり首を傾げてる。

というか、さつきから首が傾いたまま。

「プレシアのいる場所だね。分かりやすく言えば、敵ボスの本拠地だよ。

だけど、ジュエルシードはまだ海のものが残っているんだろう？

原作通りいけば、その後の決戦後のはずだけど」

成瀬カイゼの解説。

それなりに正確。

ちゃんと覚えている模様。

「リンディと話を付けてある。

うまく行けば、海でフェイトが無茶をした際にフェイトを確保、攻撃の逆探知で座標を特定して突入する。そうなった場合は、私はクロノやリンディと共にプレシアと話をしに行く予定だ。

一緒に突入するのなら、なのはと一緒に動いてくれ。派手に暴れて傀儡兵を惹きつけてもらえると助かる。

それと、チクアーブには駆動炉の早期制圧を頼みたい」

「なるほど、プレシアのSS級の条件を封じ込める作戦でございますな」

「プレシアの心を折るつもりかい？」

チクアーブの意図の考察は正しいけど、成瀬カイゼの予想はちよつと過激過ぎ。

交渉で有利に立つたためなのは間違いない。

魔力の外部供給を断てば、実質的にそうなりそうではあるけど。

「いや、話をするために頭を冷やしてもらおう程度のつもりだ。

そのためにも、駆動炉の破壊は避けろよ？」

まあ、時の庭園が崩壊するようなら、心臓部のロストログアを持ち出しても構わんが」

やりたいのはあくまで交渉。

従属させたいわけじゃない。

「承知いたしました」

「あの、私も……ですよね？」

納得したように頷くチクアーブ。

その隣では、やっぱりセツナ・チェブルーが首を傾げたまま。

「例の件で自信が無いなら出なくてもいいが、行ってくれると助かる」
「分かりました。頑張ります」

「そうか。無理をするなよ」

出来れば、気に関する技能をあまり使わないでほしい。

セツナ・チェブルーがどっちの方向で頑張るのか謎。

報告。高町なのはと、ユーノ・スクライアが訓練を中断、休憩のため食堂に向かつてる。

フェイト・テストロッサとアルフは海に向かう模様。

タイミング的に、原作と同様になりそうな気配。

「ん？ あいつらが休憩か……原作では、確かなのはとユーノが話している時に、フェイトが無茶をするんだったか」

「結構しんみりした雰囲気の話だった気がするね。」

ただ、そうなる要素もあまり無い気がするのには気のせいかい？」

原作では、しんみりと言うか、悲しげと言うか。

だけど、そもそも1人じゃない。

ここに仲間が4人いる。

「いや、同感だ。良い事なのか分からんが、なのはの精神的な負担は原作よりだいぶ軽いはずだ」

「エヴァちゃん、他の人達も休憩してたんだ」

2人が食堂に到着。

お姉様の姿を見て、満面の笑みを浮かべてる。

暗くなる要素が見えない。

「ああ。お前達も休憩か？」

「はい。今日はジュエルシードの搜索や回収はしなくていいって……何かあったんですか？」

昼頃に集めたジュエルシードは全て渡してますけど、急に事態が変わるような事があったとは聞いてないですし」

ユーノ・スクライアは、難しい顔をしてる。

ここにいる目的を果たさなくていいと言われても、喜ばないらしい。

「場所は分かってる……だよな？」

高町なのはは、お姉様が言っていた言葉をちゃんと覚えてた。

でも、動かないことが不思議らしい。

「そうだな。簡単に言えば、今はフェイト待ちだ」

「フェイトちゃんを？」

「待つ？」

高町なのはとユーノ・スクライアの頭の上に浮かぶ疑問符。

セツナ・チエブルーと共に、3人の頭が傾いてる。

「この辺は、原作知識なんだが……近いうち、恐らく今日か明日にでも、フェイトが目立つ行動をするはずだ。」

それを待っている」

「そ、そうなんだ……」

「つまり、それが残り6つのジュエルシードの手掛り、という事ですね？」

「そうとも言えるが……むしろ、その先への足掛かりだな。」

「大体の場所は分かっていると云っただろう？」

「そうですね。良かった、それほど長期化はしないんですね」

ユーノ・スクライアは明らかにほっとしてる。

「そうだな。予想が正しければ、さほどかからずに……ん？」

「どうしたカイゼ。何か言いたい事でもあるのか？」

「いや、しみり要素を根底から吹き飛ばす人物がここにいたか、と思ってる」

成瀬カイゼの指摘はとても正しい。

今回は明らかにお姉様が原因で乖離が進行。

原作のユーノ・スクライア曰く、もしかしたら結構長くかかるかもね、寂しくない？

原作の高町なのは曰く、一人ぼっちでも結構平気。

「……ああ、そういう事か」

「えっと、しみり要素って……なに？」

お姉様は納得しても、高町なのは余計に混乱してる。

とても不思議そうに、疑問を口にしてる。

「何と言ったらいいか……本来この場面は、ユーノが長期化するかも、一人で寂しくないか、となのはを心配する場面だな。」

それに対してなのは、昔一人で家にいる事が多かったから慣れている、等と妙に寂しそうな顔で語り、ユーノは自分の……うん？ お互いの孤独に同情、共感するイベントを蹴倒した事になるのか。

「済まないな。お前達の仲を邪魔する気は無かったんだが」

「な、仲を邪魔するって、そそそ、そんな仲じゃ……」

「そ、そうそうっ！ まだそんなに……」

「ははは、満更でもなさそうに見えるぞ？」

それに、ユーノにははやての件で力を借りたい事もある。今回の事件が終わっても地球に居てほしい人物だから、予定通りに事が進めば会う機会などいくらでも作れるはずだ。

お互いの過去やらは、後でゆっくりと話し合ってくれ」

「だ、だからそういうつもりじゃ……」

ユーノ・スクライアの顔が真っ赤。

明らかに意識してる。

むしろ、お姉様のせいで強く意識してしまった可能性も。

『エマーージェンシー。捜査区域の海上にて、大型の魔力反応を感知！』
空気を読まない警報来た。

フエイト・テスタロッサは、もうちよつと準備に時間をかけるべき
だった。

「来たか。とりあえず司令部に急ぐぞ！」



「な、なんて事してるのあの子達！」

司令部では、エイミー・リミエツタがモニターを見ながら叫んでる。
モニターには、海上に巨大な魔法陣を展開しているフエイト・テス
タロッサの姿。

その傍らには、アルフの姿もある。

人の姿。見た目は映画版に近い？

「強制発動、ね……エヴァさんの言っていた通りの展開になったわね。
クロノ、対攻撃魔法防御の準備を。エイミーはその補助と、攻撃元
座標を特定する準備を」

「予定通りですね。了解です、艦長」

「は、はい！」

リンデイ・ハラオウン驚かずに仕事をしてる。

指示を受けたクロノ・ハラオウンとエイミー・リミエツタは、即座
に行動開始。

ここまでは予定通り。

ジュエルシード、発動。

原作と同じ、残りの6個全部。

要するに竜巻6本。

フェイト・テスタロッサは劣勢だけど健闘中。当たれば封印可能な攻撃を放つことが出来ている。

ただ、別の竜巻がカバーに入ってる？

ジュエルシードが連携を取ってる？

フェイト・テスタロッサの消耗が激しい。このままだと撃墜は時間の問題。

結果としては、原作同様。

「聞いてはいたけれど、何とも無茶をする子ね」

「ですが、あの竜巻の連携が無ければ、封印出来る可能性がありそうです。

場合によっては、全て奪われていたかもしれません。確かに賭けですが、無謀だったとまでは言えそうにありません」

リンデイ・ハラオウンはちよつと呆れ気味。だけど、クロノ・ハラオウンの考察にだいぶ違いが。

フェイト・テスタロッサの健闘ぶりが光る。

お姉様達、司令部に到着。

うーん。

「フェイトちゃん!? あの、私急いで現場に!」

「ええ。エヴァさんとユーノさんは、なのはさんのサポートをお願いできるかしら?」

「はー!」

高町なのはの声が響き、リンデイ・ハラオウンが即応する。

原作と違い、出撃が予定されてる。

ユーノ・スクライアの返事も気合が入ってる。

抑止の声は無い。

「ああ、任せろ。」

カイゼとセツナとチクアープはここに残って、可能なら防衛の手伝いをしろ。

お前達の魔力もあれば、プレシアの攻撃を防ぎやすいだろう」

「ああ、分かった」

「分かりました!」

「了解いたしました」

「転送ポートを開きます。戦闘区域を避けて少し上空に転送します。飛行魔法の準備をしておいてください」

アレックス・オーラムが転送準備を開始。
いざ、戦場へ。



3人纏めて、転送完了。

雲の上。少し上空？

凄く上空。

「伝えるのが遅くなったが、封印が終わった後に黒幕から強烈な攻撃が来る可能性が高い。2人とも、そのつもりで防御魔法の準備をしておいてくれ。最優先はフェイトの保護で、ジュエルシードは封印さえ済めば回収は後回しでいい。

あと、私は基本的にその対処と事後処理のために来ている。封印には失敗しそうにならない限り手を出さないからな」

「そ、そうなんですか。分かりました」

「うん、わかった。大丈夫!」

プレシア・テスタロッサはフェイト・テスタロッサを監視中。恐らくジュエルシードの封印後に次元跳躍攻撃が来る。

言うべき事は言った。後は、力勝負。

「よし。では、いくぞ。黒龍、セットアップ」

「いくよ、レイジングハート。」

風は空に。星は天に。輝く光はこの腕に。不屈の心はこの胸に。

レイジングハート、セットアップ!」

『Stand by ready』

2人が変身。

なんて魔法少女らしい展開。

でも一瞬。お約束の脱衣が無い。

(緊張感が足りんぞ)

緊張する要素が無い。

原作通りなら、封印まではお姉様の存在は不要。

プレシアの魔法は、カートリッジ25発を投入した防御魔法で防ぐ。

逆探知に10発の予定。余裕は防御魔法もう1回分に加え、念のため対アルフ用に4発。

負傷の偽装でまた痛い。

想定以上の事が起きない限り、それだけ。

「フェイトの邪魔を、するなああああ！」

アルフが気付いた。

叫びながら突撃してくる。

「違う！ 僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

ユーノ・スクライアが防御魔法を展開して、足止め。

いい位置取り。アルフの勢いが完全に止まった。

「ユーノくん！」

「今はジュエルシールドを止めないと。放っておいたら融合して、手の付けられない状態になるかもしれない。」

止めるんだ。2人のサポートを！」

アルフが止まったところで、チエーンバインド。

竜巻の動きをかなり抑え込んだ。

なんて男らしい。

その間に、高町なのはがフェイト・テストアロツサの目の前に到着。

お姉様は、未だに雲の中。

まだ姿を見せる必要が無い。

「フェイトちゃん、手伝って。」

ジュエルシールドを止めよう！」

『Divide energy』

レイジングハートからフェイト・テストアロツサに、光の帯が飛んでく。

大量の魔力譲渡。

驚いてる驚いてる。

『Charging』

バルデイツシュが展開していた鎌が、本来の大きさに復活。さつきまでは、だいぶ小さくなってた。やはり、魔力の限界が近かった模様。

『Charging completed』

「2人できつちり、はんぶんこ」

アルフ、チエーンバインド発動。

竜巻の動きの抑え込み、ほぼ成功。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる。だから、今のうち。

2人でせーので、一気に封印！」

『Cannon mode』

レイジングハートは砲撃形態になり、高町なのはは上空へ。

フェイト・テストアロツサ、呆然と見送ってる。

バルデイツシュを見た。

高町なのは、魔法陣を展開開始。

『Grave form, set up』

「バルデイツシュ……？」

バルデイツシュが勝手に変形。

フェイト・テストアロツサが驚いてる。

相棒かつこいい。

「デイバインバスター、フルパワー。一発で封印、いけるよね？」

『Of course, master』

高町なのはとレイジングハート、砲撃準備。

普通の砲撃なのに何だか集束っぽい。

フェイト・テストアロツサがやる気になった。

魔法陣展開。

「せーの！」

「サンダーレイジ！」

「デイバインバスター！」

ユーノ・スクライアとアルフ、退避。

何だか海は大惨事だけど、封印成功を確認。

司令部で、エイミー・リミエッタとクロノ・ハラオウンが驚いている。ジユエルシードを6つ浮かべて、高町なのはとフェイト・テストアロツサが見詰め合ってる。

「フェイトちゃんに言いたい事、やつと言えるね。」

私は、フェイトちゃんといろんなことを話し合って、伝え合いたい。友達に、なりたいんだ」

やっぱり、映画版が基本？

ちよつとだけ変わってる。

フェイト・テストアロツサは驚いている。

アルフも驚いてる。

時の庭園より報告、プレシア・テストアロツサが次元跳躍攻撃の準備を開始。

お姉様は、速やかに2人の傍へ。

「攻撃来るぞ！　なのは、フェイトを守れ！　ユーノもしっかり防げよ！」

「ええつ、もう!?!」

ユーノ・スクライアは驚きつつ、2人の近くへ移動。

「フェイトちゃん、こっちー！」

高町なのははフェイト・テストアロツサを抱き寄せて、防御魔法の準備開始。

何だか百合百合しい絵面に。

上空に紫の魔力光を観測。

どう考えても次元跳躍攻撃の前兆。

「かあ、さん……っ？」

その様子を見ていたフェイト・テストアロツサが、呆然と呟いている。防御魔法を展開する発想も無さそう。

「来たぞー！」

ロードカートリッジ、Panzerhinder nis 装甲障壁！」

「は、はい！　スフィアプロテクション！」

お姉様が展開する大きな障壁と、ユーノ・スクライアが展開する球形の防壁。

計算上は余裕を持って防ぐことが可能なはず。

25発ロードに合わせて負傷偽装。やっぱり痛い。

攻撃は原作同様の雷撃。

地表付近に新たな前兆を発見。お姉様の介入に伴う多段攻撃化？

(アルフはフェイトの守りに入ったな?)

ユーノ・スクライアの防壁の内側にもう1枚の防壁を展開してる。

アルフにフェイト・テスタロッサを見捨てる選択肢は無いとは思ってたから、行動自体は想定内。

だけど、高町なのはの防御に2枚足しても力不足。SSの本気は伊達じゃない。

ジュエルシードは浮かんだまま放置。防壁の外だから、外部からの回収に支障はないはず。

(予想通りとは言っても、やはり力不足か。)

この攻撃の後で、さっさとプレシアがジュエルシードを回収してくればいいが……)

最悪の場合は、ここからチキンレース？

チャチャマルは介入準備を整えてる。いつでも転移可能。

障壁を維持したままではリロードが出来ない、黒龍の安定性の低さが仇に。

初段の威力は予想範囲内だけど気持ち低め。少しカートリッジを節約できそう。

「そうか。ロードカートリッジ、Panzerhinder nis 装甲障壁！」

22発ロードとそれに伴う負傷偽装をして、下方に新たに障壁展開。

ギリギリだけど防御力に問題はなさそう。

プレシア・テスタロッサは……たいへん、3段目と4段目の同時攻撃を準備開始。

正確な攻撃位置は未確定だけど、海上のどこかなのはほぼ間違いない。

これ以上の連続行使は確実に命を削る。無茶しやがって。

(クソツ、フェイトが持つ2つの為にここまで命を懸けるか!?)

可能性としては、有り得ないとは言えない。

ここで押さえないと後が無いと焦っていると見て良さそう。

(非殺傷設定にはなっているな!? 直撃でも死にはしないだろうな!!)

それは恐らく大丈夫。直接的に殺すつもりは無い模様。

攻撃位置判明。3段目はお姉様狙い、4段目はアルフの球状防壁の内部。

プレシア・テストロツサが吐血。このままだと命がヤバイ。

(庭園に痕跡を残すのは不味い……やむを得ん、4人は死ななければいい。逆探知も諦めるぞ)

「ロードカートリッジ、Panzerschield 装甲手楯！」

予定外の17発ロードでの、三角形魔法陣型の盾展開。

念のため負傷を偽装、またちよつと痛い。

お姉様だけを守る、最小限の盾。3段目については防ぎ切れる？

4段目がフェイト・テストロツサと高町なのはに直撃、バルディッシュとレイジングハートが破損。ユーノ・スクライアとアルフも痺れてる。

物質転送の気配。ジュエルシールドとバルディッシュと、レイジングハートを回収する模様。

「なのはの無力化までする気か!? 空気を読み過ぎだろうプレシア!!」

高町なのはがジュエルシールドを持っていると思込んでいる可能性も。

転送が終了、攻撃も終息。

4人が墜落の気配、救援が必要に見える。

「ああもう、しっかりしろお前達！」

無印編37話 地雷原

4人を回収して、アースラに戻ったお姉様。

防御の中心だったクロノ・ハラオウンや、補佐をしてた転生者3人もそれなりに消耗してる。

お姉様の傷は血が止まった程度。今は全員の回復を推奨。

「済まないリンディ。予想よりも攻撃が苛烈で、プレシアがいる正確な座標までは調べられなかった。」

大体の目処ぐらいは付けたが……特定出来たか？」

可能ならやると言っていた事に関しての話。

エイミイ・リミエツタの尻尾掴んだ発言も確認済みで、その後の対処も見てたから答えを知っているけど、そのまま放置は良くない。

「ええ。物質転送のおかげだけれど、何とかなったわ。結果だけ見れば成功ね。」

あまり好ましくはなさそうだけれど、武装局員を時の庭園に送つてあるから時間を稼ぐことは出来るでしょう。それに、なのはさんが集めたジュエルシードはアースラにあるから、全てが奪われたわけではないわ。その点は安心して。

それよりも、こちらがアースラと5人の魔導師で防いだ攻撃を耐え切ったエヴァさんは相当無茶をしたでしょう？　まずは治療が必要ね」

「すぐにも庭園に行きたいが、お前達も消耗が酷いか……やむを得んな。」

もし局員がプレシアの所まで行けても、それ以上奥に踏み込ませるなよ？　恐らく碌な事にならんからな。

ああ、お前達も治してやるから、全員集まれ。領域魔法だから、範囲に入れるだけ入らないとモットたいないんだ。

ほら、その犬耳。お前もだ」

「ア、アタシもいいのかい？」

ていうか、アンタはいつたい……」

アルフが、何だかオロオロになってる。

管理局に捕まって、真つ先に治療されると言われるとは思っていなかった模様。

むしろ、お姉様の立場が気になってるらしい。狼と言われてない事を柵の上に放り投げてる。

「お前も入れと言っている。私は今回の事件に協力しているモノで、管理局の人間じゃないから立場なんかは気にするな。

持続型でゆっくり治すタイプだから、完治するまで範囲から出るなよ？」

いくぞ。ロードカートリッジ、Land der Heilung癒しの大地」

「エ、エヴァー！ その腕でこれ以上カートリッジを使ったら……」

人数が多いからちよつとカートリッジを多めに投入。お姉様は傷口を開いてちよつと出血。

クロノ・ハラオウンが、慌ててる。

高町なのはの目を素早く塞ぐユーノ・スクライアはいい動き。

司令部でやるには、やっぱり刺激が強い？

でも、そろそろ慣れてほしい。

「心配するな、自分の治療も兼ねているんだ。

それに、6発程度ならそこまで大した負荷にならない」

「そ、そうか……」

でも、出血。しかも、ちよつと涙目。

明らかにおかしいけど、クロノ・ハラオウンは見なかった事にした模様。

「それなら、その間に少しお話をしましょうか。

初めまして、フェイトさん、アルフさん。

私は時空管理局艦船アースラの艦長、リンディ・ハラオウンよ。

ああ、そんなに怖がらなくてもいいわ」

「僕は、執務官のクロノ・ハラオウンだ。

君達の事情は、ある程度知っているつもりだ。無罪放免とはいかないかもしれないが、必要以上の罪を問う気は無いよ」

管理局としてはこの場の上位2名、つまり、リンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンは、事情聴取開始？

事情聴取と言うよりは、職務質問？

リンデイ・ハラオウンは、ニコニコと笑ってる。

クロノ・ハラオウンも、威圧する気は無い模様。比較的穏やかな表情や口調で話してる。

「ついでに朗報だ。」

私の予定でうまく行けば、無罪放免も有り得るぞ？」

「エヴァ、一体何をするつもりなんだ？」

お姉様の言葉に反応したのは、やっぱりクロノ・ハラオウン。

どう見ても、訝しんでる。

「言っただろう？」

管理局に踊らされた哀れな女性を助ける、とな」

「へ？ いや、えーと……どういう事だい？」

アルフは、理解出来てない。

オロオロのまま。

フェイト・テスタロッサは固まってる……と言うより、落ち込んだまま。

「なに、私にも事情があるだけだ。」

そういうわけだから、大人しくした方が良いぞ。

下手に暴れたり逃げようとしたりしたら、必要のない罪が増える事になる。そこまでは私もカバーできん」

「えっと……その……」

アルフは、やっぱり理解できてない。それでも落ち込んだままのフェイト・テスタロッサご主人様に代わってがんばって理解しようとしてる辺り、忠犬振りが光ってる。

狼だという意見は封殺。

「今は無理に理解しなくていい。立場を悪くしないために変な事をするな、程度の理解で充分だ。」

とりあえず……なのは、治療が終わったらフェイトと一緒に居てやってくれ。

ああ、なのはは地球在住の現地協力者だ。局員じゃないから、少しは気が楽だろう？」

「そ、そうかい……」

「だけど、管理局の人間じゃないアンタが、そんなに指図していいのかい？」

「気分いちゃった。」

「アルフに余計な事を言われた。」

「ふむ、そういえばそうだな。」

「リンデイ、何か問題のある指示はあったか？」

「そうね……私達の許可を得ていない事以外の問題は、特に無いわね。だけど、ここは時空管理局の艦船の中だから、もう少し私達を立ててくれると助かるのだけれど」

「呆れられてる？」

「諦められてる？」

「リンデイ・ハラオウンは、わざとらしくため息をついてる。」

「確かにそうだな、すまん。」

「まあ、そんなわけだ。そう悪い事にはならんはずだから、リンデイ……この船で一番偉い提督の指示に従ってくれ。」

「フェイトも、今は大人しくしている。その方が、プレシアと話す機会も作りやすいはずだ」

「う、うん……」

「たいへんたいへん。」

「プレシア・テストロッサが、レイジングハートにかかりきり。持っているはずだから出せ、持っていない、で言い争ってる。」

「相当苛立ってる。部屋から出てこない。」

「このまま局員が奥に向かうと、先にアリシア・テストロッサを発見される可能性が。」

「(プレシアの部屋に誘導出来ないか?)」

「現場では無理。」

「玉座の間の奥に、アリシア・テストロッサがいる。」

「横側の部屋にプレシア・テストロッサ。」

「入ってすぐ見えるのは、玉座の後ろの扉。」

「それを無視させるのは困難。」

強力な幻影や精神干渉は、警報に引つかかる。強力じゃないのは、局員に見破られる可能性が高い。

玉座の間近辺の警備システムは油断出来ない。

「……フェイト。私も、プレシアと話がしたいんだ。」

「どこにいる可能性が高いか、教えてくれないか？」

「……多分、玉座の間か、横の私室だと思う。」

それ以外だと、奥の研究室かな……」

お姉様、ナイス判断。

フェイト・テストロッサの回答も理想的。

ついでに、不意を突いた情報と質問だからか、フェイト・テストロッサが立ち直り気味に。

話をしたいだけで、捕まえるとかじゃないのが良かった？」

王座横の私室に誘導を。

研究室に向かえば、アリシア・テストロッサが見付かってしまう。

「そうか。リンディ、まずは玉座の間か私室の方を調べてくれ。」

研究室は地雷臭がプンプンするぞ」

「危険な橋は渡らない方がいいという事ね。」

そうね、フェイトさん。プレシア女史の私室にはどう進めばいいか教えてくれないかしら？」

「うん。えつと……」

それからは、フェイト・テストロッサが誘導。

無事、局員はプレシア・テストロッサのいる私室の方へと到達。

アースラのサーチャーもいる。司令部からも様子が見える。

時空管理法違反及び管理局艦船攻撃容疑で拘束する、と言ってる。

逮捕する、ではないらしい。

プレシア・テストロッサはレイジングハートの方を向いたまま。

表情がやばい。

切れた？

『私達の邪魔を、しないで!!』

プレシア・テストロッサ、振り向きもせず雷撃発動。

あっさりと局員全滅。

ぎりぎり、死者はいない？

「いけない、局員たちの送還を！」

「りよ、了解です！」

リンデイ・ハラオウンの指示で、エイミー・リミエツタが送還作業開始。

やられちゃった。

経緯は違うものの、なんだか原作で見たような光景。

「やれやれ、結局こうなるのか……」

私が直接行って話をするから、ゲートを開いてくれ。

お前達は どうする？

話をする時は結界を張るつもりだから、話を聞きたいなら一緒に行く必要があるぞ」

お姉様がため息をついてる。

プレシア・テストロッサとの会話は、穏便な始まり方が困難になった。

特に、管理局との関係において。

『たった12個のロストログアでは、辿り着けるかどうかは分からないけど……』

プレシア・テストロッサのこのセリフは……

11話？

フェイト・テストロッサの心が折れる話？

「まずい！ モニターを切れリンデイ!!」

『もういいわ……終わりにする。』

あの子を亡くしてから時間も、あの子の身代わりの人形を娘扱いするのにも。

聞いていて？ 貴女の事よ、フェイト』

「何をしている、モニターを切れと言っている！ 記録ぐらい後から確認出来るだろう!!」

「だ、駄目！ サーチャーが浸食されてる!!」

エイミー・リミエツタが不思議な事を叫んでる。

……あれ？ 本当だ。

管理局の監視システムが、プレシアに乗っ取られてる。影響範囲は、ほぼ司令部まで届く勢い。

ついでに、アースラから情報を逆流させてる。

恐ろしく高度な技術。でも、冗談ではなく命を削る行為。

条件付きとはいえ、流石後先を考えないSSクラスの大魔導師。

「何だって!?! 何て技術の無駄遣いを!」

お姉様もびっくり。

でも、手法の確認は完了。侵入や侵入元の隠蔽が不可能な、真正面からの侵食。

こここそ使うのは無理。残念。

『せっかくアリスアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。

役立たずでちつとも使えない、私のお人形。

限りなく蘇生に近い技術のはずだった、クローン技術のプロジェクト

トF・A・T・E。

でも、失ったものの代わりにはならなかった。作り物の命は、所詮作り物。

フェイト。貴女は私の娘じゃない。ただの失敗作。

だから、貴女はもういらないわ。どこへなりとも消えなさい!』

「もういい、それ以上喋るなプレシア!」

今フェイトを傷付ける意味など無いだろう!!」

お姉様の叫びは、プレシア・テスタロッサにも聞こえているはず。

でも、何の反応も無い。

『いいことを教えてあげるわ、フェイト。

貴女を作り出してからずっとね。

私は貴女が、大嫌いだったのよ』

言っちゃった。

フェイト・テスタロッサが倒れた。

目から光が消えてる。

高町なのはとアルフが支えているけど、原作並みの廃人っぷり。

「介入してもコレは変わらないのか!?!」

どう足掻こうが未来は変わらんでも言うのか!?!」

お姉様は悔しそう。

でも、少なくともフェイト・テストアロツサへの集束砲撃の洗礼は回避した。八神はやての状況も大きく変わってるから、未来は変えられるはず。

アースラのサーチャーが崩壊した。言いたい事を言い終わって侵食が止まった事で、ようやく強制停止命令が効いた模様。

アースラの司令部は、プレシア・テストアロツサの姿を確認出来なくなった。

「大変！ 屋敷内に、魔力反応多数！」

傀儡兵出現。数は、たくさん。

ジュエルシード、発動開始。

プレシア・テストアロツサは、高笑いしてない。

何というか、悲壮？

「あの阿呆が、余計な事を！」

「エヴァ、どこへ行くつもりだ！」

お姉様が、治療効果の続く場所から出た。

腕の出血は止まってるけど、クロノ・ハラオウンは慌ててる。

「あの阿呆を止めに行くに決まっているだろう、放置すれば次元断層だぞ！」

カイゼ、セツナ、チクアーブも行くぞ、傀儡兵相手に盛大に暴れてくれ！」

「予定通りと言うか、予想外と言うか。

「だけど、いい機会だ。全力でやるよ」

「が、がんばります！」

「行動自体は、元々の指示通りでございますな」

3人は、回復もやる気も充分。

今後の活躍にご期待下さい。

「アタシも行くよ！ あの女を一発殴ってやらないと気が済まないんだ！」

アルフが滾ってる。

微妙に10話でプレシア・テストアロツサに喧嘩を売る直前のアル

フっぽい。

「忠犬は忠犬らしくフェイトの側にいろこの阿呆！」

お前がやるべきは、復讐や八つ当たりではないはずだ！」

「だけど、あの女を許せるもんか！」

何だか、お姉様とアルフが喧嘩腰になってる。

お姉様の言ってる事は正論だけど、言い方がきつい。もつと落ち着くべき。

高町なのはにも声をかける事を推奨。

「……すまん、感情的になり過ぎた。

フェイトを安心させられるのはお前だけだ。

なのは、お前も今はデバイスが無いし、フェイトに直接手を差し伸べたアースラ関係者はお前だけだ。

2人とも、今はフェイトの側にいてやってくれ。今のフェイトは……正直、あまり見たい状態じゃない」

「そ、そういう事かい……解ったよ」

「う、うん……」

アルフは納得してくれた模様。

高町なのはは、しゅしゅ？ デバイス無しでは戦力にならない自覚は……微妙。

「あと、使える戦力は……」

待機中のチャチャマルは？

チクアープは、渡したデバイスのリミッター解除で少し底上げ出来るかも。

(チャチャマルは……呼ばずになのは達を見捨てたんだ。今から呼ぶのは微妙だな。

それと、リミッター解除か。チクアープは扱えるだろうが……カイゼやセツナは無理そうか)

成瀬カイゼは元々使っていたデバイスが非力すぎたせいで、大出力に慣れてない。底上げになるか微妙。

セツナ・チェブルは、魔法に関しては駆け出しもいいところ。いきなり出力を上げて扱えない可能性が高い。

(……チクアーブ、渡したデバイス12個の出力リミッター解除キ―を渡しておく。数回ならAAクラスの魔力にも耐えられるはずだ。今回の戦闘で使い潰しても構わん、カイゼやセツナを助けてやってくれ)

(了解いたしました。全力で任に当たらせていただきますぞ)

「僕は行きます！ 次元断層なんて起こさせるわけには！」

ユーノ・スクライアも滾ってる。

こちらは、戦力として計算可能。雷撃の痺れからもほぼ回復してる。

動かさない理由も、特に無い。

「ユーノは……そうだな、カイゼやセツナの手助けを頼む。

2人とも力は付いてきたが、まだまだ魔法初心者だ。支援があると心強い」

「分かりました！」

「次元震です！ ジュエルシード12個が発動している様です！」

「振動防御！ 庭園に転移可能な距離で影響の薄い区域へ移動を！」

ユーノ・スクライアが領いたところで、オペレータたちの怒号やリンデイ・ハラオウンの指示の頻度が上がった。

ジュエルシードは発動済み。原作より3個多い分、次元断層までの時間が短いと予想。

「全く……アリスアもプレシアも結局は地雷か。いつから時の庭園は地雷原になったんだ。

時間が無い、すぐ動くぞ。

クロノ、ゲートは開けられるか？ 無理なら自力で飛ぶぞ」

「準備は出来ている。行こう、プレシアを止め！」

「私も出ます。庭園内でデイストーションシールドを展開して、次元震の進行を抑えます。

エイミィに指揮権を預けるので、局員はエイミィの指示に従うように」

クロノ・ハラオウンの言葉通り、司令部の転送ポートの魔力等は準備出来てる。

リンデイ・ハラウンも既に席を立ち、出撃の態勢。

「無理はするなよ？」

それと、残りのジュエルシードはリンデイが持っていてくれ。

最悪の場合、それを使って対抗するからな」

「分かったわ、頼りにするわよ？」

「任せろ。これで全員だな、行くぞ！」

番外：小話ズ その3

◆◆ ある日の八神家のチャチャ ◆◆

「そつかあ。いろんな人に迷惑をかけてきたんやね」

「そう。だけど、それはこの書を悪用しようとした結果でしかない。

その意味では、この書自身が最初の被害者」

ここは八神家。ここにいるのは、八神はやとと私、つまり八神家のチャチャだけ。

今は「闇の書」の過去を説明中。

全てを知ってるわけじゃないけど、力が破壊にしか使われていないらしいことや、過去の主が自滅と言う形で死んでる事は説明できる。原作知識と夜天からの情報を総合して考えて、これはほぼ間違いないと判断。

「それで、守護騎士って人らも、被害者なんやね？」

「そう。夜天の魔導書に防衛プログラムはあったけど、守護騎士はなかった。

何らかの改変で追加されたのは間違いない。元々は人であって望まないプログラム化だった可能性もあるし、そうでなくても人間らしくない扱いを受けてた記録がある」

「なんや、聞けば聞くほど暗い話が出てくるなあ。

あと1か月ちよつとしたら来るのは解ったんやけど、私が何かできる事はないんか？

何かしとらんと落ち着かへんし」

部屋の準備は、猫対策の手間を考えるとまだしない方がいい。

生活用品も小物以外は同様、服は正確なサイズが解らない……けど、1つできる事はある。

「防護服の意匠は決めておける。

用途は身を守るための鎧に近いけど、犯罪者対策に参加する可能性があるから、防弾服の意匠を好きに決めるような感じと思っいいい」
「防護服って言うと、アコノさんが使ってる、神主さんの服みたいなや

つやね？

でも、デザインを決めると言っても、どんな人かわからへんし……」
映像を見せるのは、お姉様に禁止されてる。

でも、ある程度の予備知識はあった方がいいし、絵を描くのは禁止されてない。

服はまだ描けないけど、起動時の黒い服なら問題ないはず。ミニスカートのスカートで跪かせるって、誰の趣味だろう？

「大丈夫。簡単な姿絵を描くから、それを元に色々と考えてみればいい」

とりあえず紙と鉛筆でラフスケッチでも……と思ったら、クレヨン
を渡された。

「色もあわせたいし、出来れば詳しく書いてな？」

むう。なんだか、幼稚園児になってお絵描きする気分。

とりあえず、シグナムから。将と呼ばれていた以上、中心人物のはず。

「なんか凛々しいお姉さんやな。この人が、戦闘狂気味って言った人なんか？」

「そう。4人のまとめ役でもある」

「戦闘狂気味な人がまとめ役で大丈夫なんか？」

「もう少し正確に言えば、強い相手と戦う事に喜びを感じる武人の類。

無闇に暴力を振るうわけじゃない」

「そっか、そっち方向ならまだ安心やね。」

私は戦ってほしくないんやけど……その辺は大丈夫なん？」

「殺す事を喜ぶわけじゃないから、試合という形でも大丈夫なはず」
きつと、フェイト・テストアロツサや転生者達の良い訓練相手になっ
てくれるはず。

次は、ザファイラ。八神はやてのペット候補。

「次は、犬耳のお兄さんやね。ホントにこんな耳があるんか？」

「ある。ちなみに、狼としての姿はこんな感じ」

二つの姿を描くのは面倒。狼の姿はラフスケッチで勘弁。

「おー、かっこええなあ。というか、狼さんやったんか？ おつきい

なあ」

「厳密に言えば狼だけど、どうせ地球に居ない種類。犬も狼も似たようなものだから、気にしなくても大丈夫。

役目は守ること。何かあった時は、一番近くで守ってくれる」

「そっか。頼れるお兄さん、って感じやね。

でも、昔から犬を飼いたかったんやけど……犬扱いしたら嫌がるやろか？」

「原作だと狼の姿でリードを付けて散歩に行ってた。

どう説得するか次第」

喋りながらかきかき。

次に書いたのは、ヴィータ。名前を出さないように喋るのは、結構面倒。

「おお、ツンデレちゃんやね。ホントにツンツンしてそうな雰囲気や。

おさげがかわええけど、随分ちっちゃいんやね」

「外見の設定年齢で言えば、8歳相当のはず。

9歳の誕生日に現れる事を考えると、八神はやてより年下になる」

「そうなるんか。こんなちっちゃい子も、危険な事してたんやな……」

「外見の年齢は気にしない方がいい。

人生経験と言う意味では、ものすごく年上として扱っても間違いない」

ヴィータの記憶がどの程度残っているか不明だけど、意識のある期間を計算すれば私達より長いはず。人間らしい経験がどの程度あったかは別として。

「それはそうやけど、やっぱり外見の印象は大事や。

年上やって言われても、どうしても年下に見てまいそうや」

「その辺は、慣れ。ちなみに、役目は最前線で敵を止めたり、粉碎したりする事。

小さく見えても実力は高い。変に侮ると、侮辱したと思われる」

「うーん、難しそうや。

最後のこの人が、おっとりさんやね？」

最後に描いたのはシャマル。これで4人書き終わった。

「お姉様曰く、おっとりどじっこお姉さん。」

でも、最初は感情が希薄で冷徹な可能性があるから、気を付けて「うん、でも、この絵でもわりとおっとりさんみたいやし。」

怖そうな感じはせえへんから、きつと大丈夫や」

「役目は、補助や治療。怪我した時や健康管理は任せていい。」

……どじっこが怖くなければ」

「こわっ!? 健康管理はまだええけど、治療でどじはあかんよ!」

「冗談だから大丈夫、きつと。」

一流の医療担当として活躍できるだけの力量があるから、その点では安心……たぶん」

でも、どじっこ設定はどこから?」

少なくとも原作のAⅩSでは、高町なのはのリンカーコアを抜くときに一度失敗しているのと、高町なのはとフェイト・テスタロッサが八神はやての見舞いに来る時に慌てて変な変装を……うん、どじっかも。

「真面目な顔で物騒な単語を付け足さんといてな。」

それで、防護服やったね。一応戦うための服って事でいいんやね?」

「そう。4人の出身を考えると、厳密に言えば騎士甲冑とか騎士服という表現になる。」

別に鎧に拘る必要は無いし、時間はあるから、似合う意匠をゆっくりと楽しんで考えるのをお勧めする」

「そっか。やっぱ、参考になるのは漫画とかゲームやろか?」

うん、とりあえずおもちゃ屋さんや。天気もいいし、お出かけしよか」

◆◆ ある日の月村家のチャチャ ◆◆

「それで、なのはは元気でやってるのね?」

「元氣すぎて、あっちの人に呆れられてる」

とある日に、月村家で行われてるお茶会。

参加者は月村すずか、アリサ・バニングス、八神はやて。それと、八神家のチャチャ。

私は、メイドとしてお茶やお菓子の準備をしてる。参加者になってる八神家のが妬ましい。

「あーあ、うちだけチャチャが居ないのよね。なのはの所には2人いるし。」

せっかく遊びに来てるのに、なのはの状況を聞くのからになっちゃうのもアレだし、そもそも人間じゃないんですよ。もう1人くらいいないの？」

「いないと言えば嘘になる。」

だけど、今でも3つ子設定にしかできないのに、これ以上増えればれた時に色々やばい」

バニングス家だと、立場も微妙かも。それに、姿を別のものに変える事は可能だけど、出し過ぎは良くない。戸籍やらの手配も手間がかかりそう。

いざとなれば姿を消してお姉様の所に戻ると言っても、少なくとも今は必要以上の人間関係は作らない方が無難。

優越感が薄れるとか思ってる。決して。

「すずかちゃんのとこのチャチャちゃんは滅多に表に出んけど、私のところとか、なのはちゃんとこのは外に出とるし。」

増やさんののは、変に疑われてまうからか？」

「そう。同じ顔をした人が数人なら双子とかで誤魔化せる。」

だけど、人数が増えると難しい。本来は戸籍も無いから、雇われるにも法的な部分が面倒な事になる。税務関係とか。

出来る事としていい事は、違う」

「そりゃあそうだけど、バイトとか見習いとか言って誤魔化せないの？」

残念そうなアリサ・バニングスには悪いけど、誤魔化せるなら既に行ってる。

「月村家や高町家や八神家は密接な関係がある人が少ないから、問題になりにくいだけ。」

月村家は外部の人があまり入らないし、客も普通はメイドの過去や立場なんて詮索しない。

翠屋も有名パティシエの家に住み込みで修業に来てると言えば、少なくとも法的な突っ込みを入れる人は少ない。

八神家は1人暮らしだし、増える予定の人も法的には不審者。

バニングス家には税理士も付いてる。企業経営者の家族として、身元が怪しい人を雇う事は避けるべき。バイトも税法上は正社員と変わらないから申告の必要があるし、そうなるとう籍が無いのはまずい事態になる。

そうなるとう結局姿を消す事になるし、不審者を招き入れたアリサ・バニングスの立場も悪くなるはず」

給与ではなく小遣いとして扱ってるのも、この理由。

おかげで金額は小さいけど、別途物や技術を受け取ってるし、情報も貰えるから問題ない。

他の転生者が来た時に道場のチャチャが増える予定だけど、外部には出ないし、会うのも関係者だけ。4つ子設定にする必要は無いはず。

「う……そこまで理路整然と言われると、来なさいって言いにくいじゃない」

「そう言わさないとために、言ってくれてるんだよ」

「それは理解出来るわよ。納得できないけど」

「感情と法律の問題やからな。どっかで折り合いをつけるしかあらへんよ」

アリサ・バニングスは落ち込んだと言うより、ちよつと拗ねてる。月村すずかと八神はやてが慰めてるけど、2人の所には私達がいるからあまり効果は出ない様子。

そんな感じで、あれこれお喋りを続ける4人。

お姉様や主に話す時と違って順に発言するのもおかしいから、私は我慢。

……くすん。つまみ食いしてやる。

「そういえば、なのはの才能はすごいって言ってたでしょ。

「実際問題としては、どうなのよ」

「お姉ちゃんが話を聞いてるみたいだけど、凄いいみただよ。

来てる人の中で一番強い人と訓練してるんだよね?」

「まだまだ技術が追い付いてないから、互角には戦えない。

だけど、簡単に負ける程弱くも無い」

クロノ・ハラオウンの制御技術は見事としか言えない。

年齢を考えると驚異的な水準。魔力量とデバイスの能力に任せた力押しで勝つのは難しい。

「あのなのはがね……色々と素質やら才能やらがあるって言ってたけど、本当に目覚めてるの?」

「魔法に関してはかなり。運動に関しても改善傾向ではあるはず。

運動神経が切れてるといよりは、繋がってなかった、が正しかったのかも」

「苦手だからって運動しないからじゃないの?」

「電気屋巡りの時だけは、やたらと元気だったけど」

「電気屋? 家電オタクな原典設定は有効らしい。」

「あの時だけは、なのはちゃんも凄かったよね」

「そうなん? あんま想像できへんけど」

「普段はすぐへばるくせに、電気屋にいる時だけは元気なのよ。」

「あの時は、新型のデジカメだったっけ?」

「うん。目がキラキラ輝いてたよ」

「そうなんか。魔法は数学で物理学で、ある意味科学だって聞いているし。」

「理系に強いつてのがええんかなあ」

「え、そうなの?」

アリサ・バニングスは、驚いた目で八神家のを見てる。

どことなく期待してるような視線が混じってる。

参加者に、説明は任せる。

「魔法の基本は魔力を使った法則への介入。大雑把に言えばコンピュータのプログラムを一時的に書き換える事に似てる。どちらも、科学的なイメージの内容で間違いない。」

だけど、魔法を使うには行使できるだけの魔力が必要だし、アリサ・バニングスと月村すずかにそれだけの魔力は無い。それに、地球に魔法の文化は無い。人前で使うと色々と問題が出る」

「うー……なんでそんな先回りして道を塞いでくるのよ」

「変に期待させるよりいいと判断。」

それに、原作だと高町なのはの最終学歴は中卒で、生活基盤を地球外に移してる。

これからも普通の人として地球にいる気であるなら、あまり魔法に染まらない方がいい」

「そう言われても、これだけ聞いちゃってるんだし。はいそうですかなんて言えないじゃない。」

それに、何だか私だけに言ってる気がするんだけど？」

「月村すずかは夜の一族。長寿な点だけを見ても地球では異端だし、元々裏側に関わらざるを得ない立場。」

八神はやては夜天の魔導書の主。否応なしに魔法に係わる立場。

この場の3人の中で唯一、主に「一般人」と言われていたのは正しい評価」

「主って、アコノよね。確かに言ってたけど……まあ、地球で使うのが問題なら、それはいいわ。」

それよりも、よ。いちいち全員をフルネームで呼ぶのはどうにかならないの？」

やっぱり言われた。

月村すずかや八神はやてにも言われた、名前呼びの要請。

でも、これは譲れない。

「ならない。私達の立場は従者だから、必要以上に名で呼ぶのは避けるべき。」

キャラ付け……もとい、正しく識別するには必要な事」

「キャラ付けけーた?! あざとい、可愛い顔して実にあざといで。」

でも、愛称とかを使わんのは、キャラ付になるん？」

八神はやての疑問は最も。

というか、キャラ付けの為じゃなくて、誰を名前や愛称で呼ぶかの

線引きが難しいだけ。

ついでに、同姓の人を区別する必要があるかを都度判断するのも無駄な労力になるから。

「そんなの、キャラ付けにも特徴付けにもならないわよ。」

仲良くなった気がしないから言ってるの」

「そうだよ。お姉ちゃんも、何だか一步引かれてるって気にしてるんだよ?。」

「改めてお願いや。友達には、名前で呼んでほしいんよ」

「ほら。私達がいいって言ってるんだし、名前で呼びなさい」

「高町桃子は師匠、みんなは主やお姉様の友人。本来は私がこの場に交じっている事も問題。」

従者として、線引きをやめるわけにはいかない」

総攻撃だけど、この場にいるなら私の立場が無難。

前に出てる八神家のが本来は間違ってる。

「はあ、言い訳は変わらへんな」

「そうだね。私も同じことを言われてるし」

「何よ、2人とも同じことを言ってるわけ?。」

2人の性格を考えると、言われて無いと思う方がおかしい。

「そりやそうや。せつかく仲良くなつとるのに、堅苦しいのは嫌や」

「でも、全然うんって言ってくれないし」

「なのはよりも堅物って事?。」

うーん、それは強敵だわ」

うんうん唸つても、駄目なものは駄目。私達に上目使いとかも効かないから。

……ほんとですよ。

◆◆ ある日の高町家のチャチャ ◆◆

ゴールデンウィークのある日。今日も翠屋は大盛況。

私は今日も、ケーキ作りの実践中。

腕はだいぶ上がってる。

高町桃子にも褒められた。もつと褒めて。

……こほん。だけど、未だに勝てない。何だか悔しい。

お姉様の好きなスポンジケーキは、優先課題。

クリーム無しで美味しいシフォンケーキは、今日の自信作。しつとりふわふわで、あつさりめの甘さ。

今日の日替わりは、アーモンドペーストを練りこんだしつとりスポンジの、フランス版ショートケーキ。フランスでの修業経験は伊達じゃないらしい。

一緒に作って、作り方と味は覚えた。あとは練習と調査あるのみ。

お姉様の好みの味じゃないかもしれないけど、たまに食べるなら美味しいとか言いそう。意外に気に入る可能性もあるから、手は抜かない。

その他、いろいろ手伝う。

イチゴショートのケーキ、とりあえず水準以上。見た目も味も問題ない。

レアチーズケーキ、ちよつと苦手。レモンが強敵で私だと安定しないから、材料の準備だけ。

モンブラン、あのソバを綺麗に作るのは難しい。でも、失敗作をマルチーズの顔にしてみたら気に入られて、日替わりの候補になった。何故。

マドレーヌやフィナンシエは大丈夫。失敗しない。

作り方の情報は随時送ってるから、別荘でお姉様や主への提供も始まってる。

別荘産の材料で作れないか、地球の材料を別荘で栽培できないかの調査も始まってる。

材料が変われば、作り方や風味も変わる。こちらは難航中。

栽培は、単純に時間がかかる。早くて今年の後半以降。

真っ先に試食で本物を食べられるのは役得。太らない構造で良かった。

◆◆ ある日の道場のチャチャ（無印編32話裏） ◆◆

「二度目まして。高町家の道場にようこそ」

「はい、二度目まして。さつき翠屋にいたはずだけれど、先回りも魔法かしら?」

「ここは、借りてある高町家の道場。」

訪れたのは、真鶴亜美。翠屋で高町家のチャチャが確認した上で、高町士郎が場所を教えた。

その時に顔を合わせてる。だから、チャチャとしては二度目。

私は、道場のチャチャ。仲間になった転生者に色々教えるのが役目。今日が初任務。

「正確には、先回りじゃない。とりあえず入って」

ついさつき長宗我部千晴が翠屋に来て、こちらに向かつてる。

変に悪戯して拗れるのは避け、でも本当の事は言わない。だから、ヒントは出す。

「ええ。ここなら、色々と話して大丈夫なのね?」

「大丈夫。盗聴もされてないし、声が漏れないよう対策もしてある」

防音の結界は便利。監視の類も無い事は確認済み。

個人所有の道場だから、盗み見る人もそうそういないはずだけど。

「それで、魔法についてという事だけれど、私に教えてもいいのかしら?」

良く考えると、秘匿とか色々あるんじゃない?」

「大丈夫。秘匿についても、治癒や探知の能力を持っているのに魔法を禁止する意味が無い。」

それに、原作の敵役よりも、同じ転生者の方が厄介な敵になり得る。少なくとも、判明している転生者3人の死亡は、全て転生者による殺害。

少なくとも自衛のための力は身に着けて損は無い」

「そうなの。それなら、早速始めるのかしら?」

「もうすぐ、もう1人来るから少し待って。」

魔法については纏めて説明する」

そんな感じで、しばらく普通の雑談。

主に服の話。アクシズワイブスが似合いそうとか、ミドピアノも物によってはサイズがあるしジュニアブランドもあるとか言われたから、お姉様はエヴァンジェリンの外見だけどフリフリの服は着ないと
言っておいた。

お姉様については既に伝えてあるから、その関係と判断……したけど、なんだか残念そう。真鶴亜美本人が着ても似合いにくいから、着てほしかっただけかも？

そうこうしている間に、長宗我部千晴が到着。

「こ、こんにちわー……って、那波かよ!？」

「あら、千雨ちゃん？」

初めまして。真鶴亜美つていいいます。保育士をしている転生者よ」

「あ、ああ……初めまして。長宗我部千晴、高校1年生だ。」

私も転生者だけど、何と言うか……ネギまみたいに年齢詐称な中学生、とかじゃないんだな」

「ふふ、成人しているから、見た目相応よ。」

さてと、今日はこれで全員かしら？」

「2人以上は、予定してない。」

今から、魔法に関しての説明。まずは、注意事項から」

地球では秘匿されていて、迂闊に人前で使えば人生が壊れる事。

あくまでも“技術”であり、どの様に使うかは人の意思による事。

どの様な意図で使おうと、意図しない結果になろうと、使った責任は自身で背負う必要がある事。

「やっぱ、異端だつてことだよな……」

「だからこそ、原作の地球出身魔導師は地球を離れてると考えられる。

少なくとも、高町なのは、ギル・グレアム、ナカジマ家の祖先の3人は、地球を離れるという選択をしている」

「そうね。人生を壊す危険を考えると、自由に魔法が使える環境へ移る事は捨てられない選択肢ね」

「魔法で人を助けるのも、地球では問題になる。」

最悪の場合、治癒魔法で助けられた人が怪奇な目で見られたり、研究機関に捉えられたりする可能性もある。相手を助けたつもりで人

生を破壊する事を考えると、自己満足以外で出来る事はあまり多くない」

「あー……そりゃあ、おかしな回復をしたら、原因を調べられる可能性があるか。」

「マスコミに漏れたらどうしようもないし……」

「そうね。使った本人は覚悟の上かもしれないけれど、勝手に助けられておかしな世界に巻き込んでしまうのは可哀そうね」

2人が、ちよつと深刻な表情に。

恐らく、真鶴亜美はちよつと甘く考えた。他人の事なら危機感も働くみたいだから、そつちから抑制する方針は正しかった模様。

「だけど、2人は既に特殊な力がある。今の所、完全に抑えるのは難しいし、全く力が無ければ他の転生者がおかしな行動をした時に身を守ることも出来ない。」

せめて逃げられる程度の力、おかしな現象を誤魔化すための手札は持っておいた方がいい」

「それは魔法に限らず……という事ね？」

「そう。治癒魔法を使うにしても、きちんとした応急処置をした上であれば、少しくらいは誤魔化せる。」

誰かに襲われて防衛魔法や束縛魔法を使う場合でも、武道の経験の有無は言い訳の説得力に差が出る。

極める必要は無いけれど、ある程度嗜んでおいて損は無い。少なくとも地球では、魔法を使わずに済むならその方がいい。

魔法は強力だけど、あくまでも手段の1つ。全てじゃない」

「そ、そっか……別に、魔法だけで対処しなきゃいけないわけでもないんだよね。」

奥の手として練習はするけど、普段は普通の方法で、って事でいいんだよね」

なんだか、妙にほっとしてる。

やっぱり魔法に対しての忌避感は無くなっていない様子。それでも、練習すること自体を辞めるわけじゃないのは、ある意味では立派。「以上を踏まえて、自分の力を制御する練習をする事に賛同出来る？」

出来るなら、実際に魔法を教える。場合によっては協力を要請する事も有り得るけど、少なくとも私達やお姉様はそれを強制する気は無い。時空管理局からはなるべく守るけど、それについての協力も必要はなはず。アースラへの顔見せくらいは有り得るけど、それは理解しておいて。

出来ないなら魔法を封印する事は出来る。但し、特殊な能力まで可能かは解らない」

「大丈夫よ。自分の力が普通じゃない事は判っているから。

きちんと使いこなした上で使わない事は可能でしょう?」

「だな。暴走とかしちやたまんねーし。

封印も確実かわかんねーし、無理に使わなくていいって事なら、扱う事ぐらいは出来ねーと正直こえーよ」

「なら、まずはお姉様が作った、入門用のインテリジェントデバイスを渡す。

常に身に着けるものになるから、そのつもりで好きな形を選んで。

魔法の行使能力はあまり高くないけど、技術指導に特化した知能を持たせてある。日常的な訓練はこれを使って行えるから、デバイスと相談して方針を決めてほしい。

あと、ここへはなるべく来てほしい。1人では出来ない訓練もあるし、仲間がいるのは気分的な負担もだいぶ違う」

とりあえず、ブレスレット型、指輪型、ペンダント型、カード型を出してみる。

形状変化が可能なのは、ペンダント型とカード型の2種類。実体化した際の形は、ワンドと呼ばれる種類のちよつと装飾のある短い杖と、武器として振り回せる棒の2種類。

ブレスレット型と指輪型は、この形で完結。その分性能がちよつと高め。

「常について、必ずなのか?」

「学校に持って行くのはヤバそうな気がするんだけどよ」

「短距離なら離れても大丈夫だし、ある程度までは転移も出来るけど、お勧めはしない。」

有効距離は人による。でも、長宗我部千晴は特殊能力のせいで、離れると転移先が解らなくなりそう。常に身に着ける前提で考えた方がいい」

「そ、そうか……んじや、ブレスレットが一番いいかなあ。カードは呼べないとやべーし。」

これが一番シンプルだし、指輪とかペンダントだと友達が煩そうだ」

「それなら、私はカード型で。」

平日の昼は保育所から出ないから、それくらいなら転移できる可能性が高いでしょう?」

「あの保育所の大きさなら、きつと大丈夫。」

まずは、利用者登録と、基本的な使い方から。慌てなくていいけど、早めに防護服の意匠も考えておいて」

それからしばらくは、デバイスの扱い方の練習。

2人ともまだデバイスに頼った形だけど、魔力に慣れるところから。」

何とか形になりつつある頃、通達を受信。

「お姉様から連絡があった。」

アースラのリンディ・ハラオウンが、まともな転生者と会ってみたと言ってる。

嫌なら拒否できるけど、どうする?」

「リンディさんが?」

ええと、まともな転生者に会いたいという事は……行かないとまともじゃないと判断されるという事かしら?」

「きつと、それはない。」

でも、早めに顔を見せておいた方が、後ろめたい事はしてないと判断されやすい」

「魔法の練習をしてるし、変に隠れる方がヤバいつて事か?」

「今なら、お姉様もアースラにいる。」

お姉様の保護下だと見せておいた方が、余計な詮索や手出しを防ぎやすい」

というか、長宗我部千晴は会話を見られてる。ここで行かない選択はまずい。

「そうね、解ったわ。どんなところか興味もあるし、行ってみましよう」

「あんま行きたくねーけど……仕方ないか」

理由はともかく、行くなら問題ない。

移動手段を相談して、行動を開始。

無印編38話 時の庭園

お姉様達が、時の庭園に転移してきた。

アースラに残るエイミイ・リミアツタが指揮するために、サーチャーも一緒。

場所は、屋敷入り口前。

警備システムのレベルが上がリ傀儡兵が現れた現状とアースラの性能では、これ以上奥への転移は危険がある模様。

目の前には傀儡兵が12体。

「鬱陶しい雑魚がたむろっているな」

「雑魚って……Aランク相当ですよ？」

侮つていい相手では……」

同じAランク相当のユーノ・スクライアにとっては、油断出来ない敵。

でも、お姉様にとっては雑魚。

「そこで見えている駄フェレット、格の違いを見せてやる。

いくぞ、ロードカートリッジ、Sniper Kugei 誘導狙撃弾！」

原作のステインガースナイプ相当魔法、更に加速&強化版。

最後の中型もまとめて、どっかん。

入り口前の傀儡兵12体、一発で終了。

「は、速い!？」

ユーノ・スクライアが驚いている。

ここで驚くのは高町なのはの役目だったのに。

「さあ、突っ込むぞ！」

ロードカートリッジ、Kurzen flug 高速飛行！」

「ちよ、ちよつと待て！ そんなに急ぐなエヴァンジュ！」

クロノ・ハラオウンが何か言ってる。

でも、気にせずに単独先行。

(妹達、この先の情報を。)

原作通り、次は直線通路の先の、雑魚がうようよいる広間か？
通路に敵影無し。

足場が抜けた通路の先の広間に、傀儡兵が6体。
中型1、飛行型2、小型歩兵3。

このまま真っ直ぐ突っ込んで問題無し。
虚数空間への落下にだけ注意。

(よし。突っ込むぞ、ロードカートリッジ！)

ロード直後、高速飛行のまま蹴り一発で扉を粉碎。

傀儡兵6体を視認、射線良好。

^{Bleis chrot}
「高速散弾！」

どっかん。

やっぱり1発で終了。

リンデイ・ハラオウンの儀式魔法展開の場所を確保。

アースラやデバイスの情報収集に干渉する準備を開始。リンデイ対象が来るまでに済ませる。

(私はこのまま突っ込む。誘導と索敵を頼む)

了解。

お姉様は階段を下へ。

「やれやれ、随分と優秀だ」

クロノ・ハラオウン他5名、お姉様が去った広間に到着。

お姉様の攻撃魔法と何かが爆発する音が、盛大に響いてくる。

「だけど、凄いわね。」

戦闘の訓練を受けていないと言っていたけれど、信じられないくらいだわ」

リンデイ・ハラオウンが、壊れた傀儡兵を見て感心してる。

「ですが、圧倒的な速度と十二分な威力で殲滅している様ですから、戦闘ではなく蹂躪、むしろ速射の訓練と言いたいのかもしれません。

このまま放っておくわけにもいきませんし、僕はエヴァンジュを追います。

君達はどうする？」

クロノ・ハラオウンはプレシア・テスタロッサへ向かう宣言。

やはり、お姉様の話が気になる？」

「傀儡兵相手に陽動を頼まれているから、駆動炉に向かう方向で暴れ

させてもらおうよ。

危なければ撤退してもいいらしいから、気楽な任務だね」

「陽動が要らないような気もしますが、敵の排除は無駄にはならないと思いますし」

「ついでと言ってはなんです、庭園の駆動炉を制圧いたしましょう。」

これが、エヴァ様からの元々の指示でございましたからな」

「僕は、そちらの手助けをします。敵もそっちの方が多いいみたいですし」

転生者3人とユーノ・スクライアは、お姉様の指示通り。

「そうか、分かった。」

駆動炉のエネルギー反応は上層だ。気を付けて行ってくれ」

「分かった」

成瀬カイゼが領き、セツナ・チエブルー、チクアーブ、ユーノ・スクライアと共に上の通路へ。

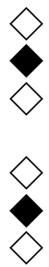
リンディ・ハラオウンは、儀式魔法の準備を開始。

「クロノ、気を付けて。」

ほとんどエヴァさんが始末してしまっているとしても、油断してはいけないわ」

「分かっています。」

母さんも気を付けて」



その後、SクラスとAクラスの人工リンカーコアを持つチクアーブの分体2体が電子精霊の機動力を見せ付け、あっという間に駆動炉の制御装置の内部へ侵入。

現在は制御装置を制御下に置くべく、電子的な制圧を試みてる。最悪でも駆動炉の強制封印で何とかなるし、傀儡兵に気付かれていない上に制御装置を攻撃しないだろうから、とても安全。

成瀬カイゼ、セツナ・チエブルー、ユーノ・スクライア、チクアーブは快調に暴れてる。

しかもチクアープが分体をたくさん、具体的にはAからA A A クラスの人工リンカーコアを持つ8体に加えて、デコイ、対AI、戦闘支援用に数十の分体を出しているため、計算上の投入戦力としては原作を大きく上回る。ネズミ耳の犬上小太郎がいっぱいで可愛いけど、やっぱり口調のせいで残念気味。

途中で現れた大型の傀儡兵は、人工リンカーコアを持たない分体が侵入。内部のAIに破壊工作を仕掛け、動きを鈍らせている間に砲撃であっさり撃破。

侵入した分体ごと。

障壁を張らせない鮮やかな手並み。しかも、AIの乗っ取りに成功した小型の傀儡兵を戦力や盾として使ったりもしている。なかなかえげつないけど、有効な手法。

恐らく全体俯瞰及び管制用と思われるあまり動かない分体も数か所にいるし、3人の肩にも分体を配置して戦闘指揮と連携補助をしている。お姉様達に対する私達のような役目も果している模様。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーにとっては、良い実戦経験の場。元々命懸けの戦闘を知っている上に、密に連絡を取れる司令塔と補助しあえる仲間がいて、駆動炉まで急ぐ必要も無いからか焦りも無い。結果的に手堅く落ち着いた戦いを見せてる。単騎で力押ししがちな高町なのはよりも安心の内容。

ユーノ・スクライアは、完全後衛。AI攻略中の傀儡兵をバインドで縛ったり、ちよつとした足止めをしたりしてる。動きの悪くなった傀儡兵の1体や2体では、ユーノ・スクライアのバインドから逃れられない。バラバラになった瞬間に再度縛ってるし、危なげない状況を維持してる。

結論、私達の手助けは不要。陽動と言うよりは、殲滅戦として文句のない戦闘が出来てる。

お姉様の蹂躪と併せて、傀儡兵の損耗速度が半端ない。

そうしている間に、リンディ・ハラオウンのデイストーションシールドも展開完了。

効果は、次元震の低減に留まつてる。原作より多いジュエルシードを相手にするのはやはり苦しい模様。

だけどこの状態で、音声のみとはいえプレシア・テストロッサの所に通信を繋ぐ技量は見事。

「プレシア・テストロッサ。」

終わりですよ。次元震は、私が抑えています」

通告は原作通り。

でも、原作と違って次元震は収まってない。

「駆動炉もじき封印。」

貴女の元には、執務官も向かっています。

世界をいくつも崩壊させるような事態を招いておいて、一体何をするつもり?」

そういえば、プレシア・テストロッサからは行動目標を聞いてない。

苦しくても裏を取ることを忘れないリンディ・ハラオウン。

流石、提督。

「私達は旅立つの。忘れられた都、アルハザードへ。」

この力で旅立って、取り戻すの。全てを!」

次元震が収まりきっていないせい、プレシア・テストロッサはまだ強気。

「忘れられし都アルハザード、そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧な、ただの伝説です」

「違うわ。アルハザードへの道は、次元の狭間にある。」

時間と空間が砕かれた時に、その狭間に滑落していく輝き。

道は、確かにそこにある」

「ずいぶんと分の悪い賭けだわ。」

それに、何も出来ない虚数空間をどうやって渡るつもり?」

「道は、そこにあるのよ!」

プレシア・テストロッサの逆鱗に触れた?

だけど、虚数空間についてこんなに無知だとは信じられない。

何らかの認識阻害の影響?

意識誘導の可能性も。

間もなくお姉様が到着。

サーチャーやデバイスへの干渉を開始。チクアーブに駆動炉封印を指示。

「これ以上踊らされるなプレシア！ 使用者強制登録！」
Ich verwende eine

お姉様、壁を蹴破って登場。

ジュエルシード12個、裏口バックドアを開放。使用者情報を更新、お姉様の制御下へ。

魔法陣やら魔法名やは、ベルカ式に偽装。アルハザード式だとは悟らせない。

暴走の強制停止に既存の抑制回路は役に立たない。力尽くで抑え込む。

「何をしたというの!？」

プレシア・テスタロッサが驚いてる。

次元震の規模を現状で固定、ディストーションシールドを強制解除。

アースラからリンデイ・ハラオウンへの魔力供給を横取り。

リンデイ・ハラオウンには、問題無いからクロノ・ハラオウンを追うよう通告。

「ジュエルシードを支配下に置いただけだ。

何しろ、私が作ったデバイスを元に作ったらしい腐れ魔導具だからな。

管理用の裏口がそのままだったのには笑うしかないが、それだけだ。

では、話を始めようか。プレシア・テスタロッサ」

「偉そうな口を。消えなさい小娘！」

プレシア・テスタロッサの雷撃。

でも、駆動炉はジュエルシードを抑えるのとほぼ同時にチクアーブが封印済み。

無理し過ぎたせいとか、AAの魔導師と同程度の威力になってる。

お姉様は別途障壁も張らず、防護服だけで防御。

「ふん、見た目に誤魔化されたな。」

存在期間だけで言えば、私はお前より圧倒的に年上だ。

ジュエルシードの基礎構造を知る者が、こんな見た目通りの年齢のわけが無いだろう?」

「……何者なの?」

やつとで、プレシア・テストロッサがお姉様を警戒した。

ずいぶん遅い。

プレシア・テストロッサの後ろに、レイジングハートとバルディッシュが落ちてる。

共に破損が酷いけど、破壊はしていない模様。

(レイジングハート、バルディッシュ。お前達は主人の元に居たいだろう。)

送ってやる。あいつらの傍に居てやってくれ)

(Yes, sir)

(Thank you, little lady)

ジュエルシードの魔力を使って、こつそり転送。

気付かれずに成功。問題ない。

クロノ・ハラオウン到着。息は切れてるけど、当然ながら無傷。

アースラのサーチャーも付いてきた。干渉は念入りに、お姉様の姿や声も残させない。

高町なのはやフェイト・テストロッサのいる部屋は、実際の声や姿を確認出来る状態に。恐らくフェイト・テストロッサの気付けくらいにはなる。

リンディ・ハラオウンはこちらに向かつてる。もう少しで到着予定。

「はあ、はあ……エヴァンジュ、急ぎ過ぎだ。

だが、もうジュエルシードは封印済みなのか……

話はどうなっている?」

クロノ・ハラオウンは、文句を言いながら状況確認。

ジュエルシードが封印済みだと思われた。

お姉様の制御技術を称賛。

「まだ、まともに話せていない。

要するに、今からだ」

「そうか。それなら、前口上だけ言わせてくれ。

時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

僕達は、少なくとも話し合いが終了するまでは手出しをする気が無い。
いい。

話し合いを受け入れるか、抵抗するかは自由だ」

「判断材料として一応言っておくが、私からの提案はなかなか良いものぞぞ？

少なくとも、アルハザードへ行く事に比べれば、確実性と言う意味で随分と差がある。

それに、見てわかるだろうが、私がジュエルシードを制御しているからな。

魔導炉の補助無しで12個のジュエルシードと戦いたいのなら仕方ないが、話くらいは聞いてもいいだろうか？」

プレシア・テストアロツサは、お姉様を睨んだまま考え中。

クロノ・ハラオウンは、制御しているというお姉様の言葉にちよつと驚いてた。

そうしている間に、リンディ・ハラオウン到着。

睨み合うお姉様とプレシア・テストアロツサの空気を讀んだのか、静かにクロノ・ハラオウンの隣に移動した。

「……いいでしょう、言ってみなさい」

リンディ・ハラオウンが何も言わない事で手出しする気が無い事は本当だと判断した？

プレシア・テストアロツサが厳しい目付きのまま、お姉様に話を促した。

「ふむ、では、簡単に言おう。

私が提案するのは、互いに求めるものを提供し合う、相互利益の協力体制の構築だ。

先に私が求める事を言っておくか。

私が求めるのは、この先予定している作業の手伝いだ。大魔導師と呼ばれる知名度を借りたい。

詳細はまだ伏せるが、成功すれば大きな名声が得られるような内容だ。

得られる名声は、全て持って行けばいい。過去の罪とやらの清算もそれでできるだろう」

「そう……それで、言いたい事はお終い？」

「いや、私が提供するものはここからだ。

まず、アリシアの治療だ。恐らく可能だろうと踏んでいる。

それと、プレシア。お前の体の治療だな。アリシアが目覚めてから共に過ごすには病み過ぎだ。

あと、コレは要求にもなるが、出来ればフェイトを娘として扱ってやれ。アリシアの願いにそれらしいのが無かったか？

要するに、娘達と過ごすための前提条件を整えると言っている」
あれは映画版の会話。

さて、どう出る？

アリシアの治療という表現をどう受け取るかが勝負？

「治療……ですって？」

プレシア・テスタロッサの目が、より厳しくなった。

信じられない？

アリシアの蘇生と言わなかった事が気に入らない？

「私が見る限り、アリシアは完全に死んだと言える状態ではないように思えてな。であれば、蘇生より治療と言う表現が正しいだろう。

お前がアリシアの治療にかまけて無くしていた家族を、改めて始めてみるのもいいと思わんか？」

「フン、馬鹿な事を。」

何を根拠にそんな事を言っているの？」

鼻で笑われた。

でも、信じられない事は理解出来る。

「詳しくはまだ話せんが、そうだな……」

願望を叶えると言われるジュエルシードが、この場に21個全てある。

全て使えば、大抵の願いはどうかかなりそうだと思わんか？」

根拠より実現手段の提示。ジュエルシードの責任にしてみた？

アルハザードの情報は話せない。話せる中では現実的な実現手段に思える。

緊急報告。

フェイト・テストロッサと高町なのはが、デバイスに魔力を込めて高速修復。

フェイト・テストロッサとアルフはお姉様の所に向かうつもり。

高町なのはは、戦闘中のセツナ・チエブルー達に合流予定。

(プレシアと話したい事は、原作同様だな?)

恐らく。

高町なのはに、頑張つて、と言われてた。本来は戦闘後、別行動になる際の言葉。

フェイト・テストロッサとアルフが時の庭園内に移動。

かなり下層への直接転移。到着までさほど時間はかからないはず。

「そもそも、お前はこれを使ってアルハザードに行くつもりだったのだろうか？ 存在する場所の分からないアルハザードに行く道を作るより、目の前の人の治療の方がよほど簡単だ。

そうだな、もし失敗したらペナルティも受けようじゃないか。

アリシアの治療に失敗したらこの話は白紙に撤回していいし、欲しければ私の首もくれてやる。

最も、そんな事態にならない自信があるから言える事だがな」

わお、大胆。

リンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンの顔も険しくなった。

ほいほい命を投げ捨てるように見えるのが気に入らない？

フェイト・テストロッサとアルフ到着。

アルフの表情は険しい。

フェイト・テストロッサは、ちよつと悲しそうな表情。

プレシア・テストロッサは、2人を睨み付けてる？

「……母さん」

先に口を開いたのは、フェイト・テストロッサ。

プレシア・テストロッサの表情は厳しいまま。

「何をしにきたの。」

消えなさい。もう、貴女に用は無いわ」

「……貴女に言いたい事があつてきました。」

私は……私は、アリシア・テスタロツサじゃありません。

貴女が作った、ただの人形なのかもしれません。

「だけど、私は……フェイト・テスタロツサは、貴女に生み出してもらつて、育ててもらつた、貴女の娘です」

「ふっ……ふふふふふ、だから何？　今更貴女を娘と思えと言うの？」

「貴女が……それを望むなら。」

それを望むなら……私は、世界中の誰からも、どんな出来事からも、貴女を守る。

私が、貴女の娘だからじゃない。貴女が、私の母さんだから」

「下らないわ」

切り捨てる前の一瞬、プレシア・テスタロツサの表情が優しくなつた。

なんて原作同様。

「やれやれ、娘が頑固なら母も頑固だな。似た者親子じゃないか。」

リンデイ、済まないが残りのジュエルシードを出してくれないか。

証拠を見せない限り、この頑固者は納得しそうにないんでな」

睨み合う親子を放置してお姉様は飛行魔法を解除、リンデイ・ハラオウンへと歩み寄つてく。

こつちの目的は、全てのジュエルシードの確保。

頑張れお姉様。

「どうするつもり？」

リンデイ・ハラオウンは、怪訝そう。

ジュエルシードも出してくれない。

「実際にアリシアを治療すれば、少しは話を聞く気にもなるだろう。」

と言うか、命のある娘を連れて虚数空間に落ちる程には狂っていないと信じたい」

「そう……後で返してもらおうわよ？」

「仕方ないな。それは約束しよう」

思ったより、リンディ・ハラオウンの抵抗が小さい。

後で返す約束だけでいいのは予想外。

（受け取り次第、私を所有者としてロックした上で召喚機能を埋め込むぞ。

どうせリンディやクロノの前では気軽に使えないし、原作通りならスカリエッティ辺りの手に渡るだろうからな。くすねるのは難しいから、その頃に返してもらおう）

了解。

召喚術式の用意と改変箇所の確認は完了済み。

いつでも大丈夫。

「だが、本当に蘇生が可能なのか？」

クロノ・ハラオウンは疑惑の表情。

やはり蘇生は信じられない模様。

情報の封鎖を行う準備は完了済み。そろそろ頃合い？

（わかった、結界を張ってくれ。

ここからオフレコだと思わせるぞ）

了解。結界の準備開始。

情報封鎖……完了。

2人共ちよつと反応した。気付かれるように展開したのは成功。

「コレを何だと思っている？」

望みを叶えると思われるロストログアだぞ。

性格も頭も処理能力も制御能力も記録されている魔法の質も悪い

が、出力だけは保証してやる」

「だからと言って、死者の蘇生など……出来るのか？」

過去にその様な記録は無いし、魔法を学べば出来ない事が常識として解るはずだが……」

死者の蘇生は、確かに記録に無いはず。

でも、それは、『死者』の『蘇生』の記録を探すから。

「少なくとも、前者は死者の定義の差だ。さつきから治療と言っているのが聞こえていないのか？」

今でも仮死状態からの回復ならいくらでも例があるだろう。それに、心臓が止まっても、医師なりが死亡と判断するまでは死者でもない。

昔は、治療が可能と思われる状態であれば、それは仮死と扱っていた。つまり、心臓が止まっていようが、体が半分になっていようが、治療可能と判断できる間は死者だと見なさない。

程度に差があるだけで、今だって似たようなものだろう。言っている意味は分かるな？」

「つ、つまり……蘇生が出来ないから死者なのであって、治療者が諦めるまでは死んでいない、という事になるが……」

「今でも、植物状態で体だけが生きている状態はあるだろう。

あれは生きているのか？ 死んでいるのか？

生きるとは何だ？ 心臓が動いていればそれでいいのか？

死ぬとは何だ？ 二度と意思の疎通が出来なくなる事とどう違う？

どうやっても意識が戻らないのが確定であれば、例え心臓が動いていても鮮度のいい死体と変わらん。逆に言えば、意識が戻る手段があり、それを行使するつもりなら死んでいないと言えんか？

少なくとも、私が眠る前の文化ではそう扱っていた。死者の蘇生を試みる際も、調査で可能と判断された時点で仮死だったと見なされる。

故に、死者からの蘇生は有り得ない。あるのは、仮死だった者の治療だけだ」

「そ、そんな事が……いや、だけど、生き証人の言っている事だし……」
クロノ・ハラオウンが思考の迷宮入り。

存分に逝ってらっしゃい。

少なくとも、アルハザードと古代ベルカはこの考え方をしていた。でも、大きな組織はきつとこの情報に気付いていても、隠してる。死者蘇生の記録は無い。表現自体は、嘘じゃない。

それに、プレシア・テストアロッサの成果を見る限りでは、今は魂が軽視されているか、かなりの誤解がある様子。使い魔を作る際に人造

魂魄を使う以上は技術が失われてるわけじゃないけど、正確な概念を理解していなければ、本当の意味での蘇生は夢や幻。フェイト・テストタロツサの様に別の人格になる。

それは、厳密には蘇生と言えない。蘇生が出来ないという常識に繋がっても不思議じゃない。

リニスに記憶が無かった事を考えると、フェイト・テストタロツサに関しては記憶転写の為にプレシア・テストタロツサが余計な手を加えたからの可能性もあるけど。

「だけど、そこまで言うのだから、見込みがあるのでしよう？」

協力すると言った以上、仕方ないわ」

渋々、と言った雰囲気を取り出されたジュエルシード、9個。

これで、21個全部そろった。

フェイト・テストタロツサもいるけど問題ない？

（フェイトにとっては家族の事だ、秘密のままに出来る物でもないだろう。

では、始めるぞ）

無印編39話 その胸の奥に

(さてと、残りの9個も問題なくいけるな?)

問題ない。

バックドア
裏口の構造は同一。

むしろ、実証無しで12個あった初回の方が、不安要素が多かった。アリシア・テスタロッサの入っているカプセルは、プレシア・テスタロッサの隣。

治療に必要な要素は全て揃ってる。

結界も展開済み。情報封鎖も問題ない。

「よし、治療開始だ。使用者強制登録！」

残りのジュエルシード9個も、お姉様の制御下へ。

ジュエルシード21個全て通常状態で起動、お姉様への魔力供給を開始。

治療魔法の連携用に、思考支援開始。

専用の設備抜きでの治療。慎重に進める必要がある。

空中モニター展開、とりあえず20個くらい。

何かやってる雰囲気を見せて、黙らせるためのギミック。

映像を保存されても困らない様に、アリシア・テスタロッサの状態表示のみに限定、内容は本物。

言語は古代ベルカ。お姉様自身は読めないけど読まないから問題なし。

「何をするつもり!?!」

フェイト・テスタロッサと睨み合っていたプレシア・テスタロッサが、さすがに気付いた。

ちよつと慌てる。

でも、もう遅い。

「口で言っても分かん様だからな。

黙ってそこで現実を見ているがいい!」

アルハザード式の魔法陣展開、これも認識阻害と幻影でベルカ式に見えるよう偽装。

アリシア・テスタロッサの魂の補完を開始、可能な限り人格のサルベージを優先する。

同時に肉体の劣化部の詳細解析及び治療を開始。

直接の死因は、酸素欠乏の可能性が濃厚。

遺体の損傷は酸素欠乏、高濃度魔力素汚染、経年劣化が主要因の様。様。

加えて、治療過程で発生したと思われる、呼吸器系及びリンカーコアの破損を確認。

概ね想定範囲内。治療による能力変化は劣化の回避を最優先に。

(魂の劣化は許容範囲か?)

恐らく。但し、人格の変化や記憶の劣化がどの程度になるかは要観察。

元の状態を正確には知らない。どうやって比較しよう?

(どう変わろうが、プレシアが納得できるかが全てだ。

治療可能な範囲なら、必要以上には気にするな)

了解。

リンカーコア、休眠状態での仮稼働へ。

……おや!? アリシア・テスタロッサの様子が……!

てててーてーてーててー。

おめでとう! アリシア・テスタロッサは 優秀な魔導師の卵に進化した!

最低でもAA、場合によってはSに届くかも?

予想以上の強化。

(その曲は別の……まあいい、プレシアやフェイトと比べられて劣等感を感じるよりマシだとも言っておこう)

魔力素の除去は順調。

内臓組織の修復を開始。

脳及び神経系の修復を開始。

呼吸器系の破損は危険域。治療に少々時間がかかる。

(魂の定着を開始できる水準まで、どれくらいで回復できる?)

呼吸器系以外は順調。15分程度?

定着にも時間がかかる。完了までだいたい30分くらい？

ジユエルシードは不安定だけど、出力の高さだけは称賛。制御可能な範囲、問題ない。

生命活動再開へ。

心臓の鼓動開始を確認。

血管の損傷は軽微。劣化も想定範囲内。

肺内溶液の強制循環による酸素供給を開始。

筋繊維の劣化は想定内けどひどい水準。

骨格の劣化と併せて、会話可能な水準までは強制治療。

事後処理の都合と親子の時間の確保も兼ねて、これ以上は機能訓練リハビリも併せて行うべき。

(やはり、26年の劣化は激しいか……だが、治療可能なレベルだったのはやはり驚きだな。

魂が残っている事も奇跡だが)

致命的な損傷がない。

母の執念の恐ろしさを見た。

魂は縛られていたから？

遺体保存に使われていた術式に、魂に影響しそうな部分がありそうな心配。

ミッドチルダ式だから、情報不足。とりあえず術式は可能な範囲で記録済み。

(偶然か、意図したものか……いや、別の誰かが最初の処置を行った可能性もあるな。

プレシア自身も解ってないようだし、下手につついで情報が漏れるのは不味いか)

26年に渡る維持という奇跡を成し遂げた本人は、啞然としてる。

恐らく理解してない。

というか、この場にいる全員が思考停止状態かも？

(アリシアの治療が終わるまでは放置だ。

余計な手出しをされる前に終わらせるぞ)

了解。

魂の定着を開始。
安定までには少々時間がかかる。
主様の手伝いで磨かれた腕の見せ所。
がんばる。



治療を開始してから、30分と少々。

元々外傷が無く、見た目は綺麗なままだったアリシア・テスタロッサは、身体機能については最低限の修復を完了。

魂の定着に若干の遅れはあった。だけど想定内というか、治療時間が少し伸びただけ。

その様子を見守るのは、ハラオウン家の2人と、テスタロッサの名を持つ2人、それと犬耳。

時空管理局の2人は、固唾を吞んで事態を見守ってる。

2人のテスタロッサと犬耳は、啞然とした表情。

特にプレシア・テスタロッサは、目を見開いたまま瞬きすらしない。

目を傷めそう。

(そろそろ、溶液から出して意識水準を上げても良さそうだな。

……骨格と筋肉は、プレシアに抱きつかれても大丈夫そうか?)

一般人のハグ程度なら大丈夫。

念のために防護魔法を準備。

カプセル内の溶液を廃棄開始。呼吸器内部の溶液も排出へ。

浮遊開始。

自律呼吸開始を確認。

生命維持に問題なし。

意識水準、睡眠状態で安定。

(自然に意識が戻るのは、数日中といった所か。

今すぐに意識を戻すと、プレシアが暴走しそうだな……とりあえず

はこのままだ)

了解。

現時点でも、見開き過ぎのプレシア・テスタロッサの目が怖い。
目玉のおかんがコンニチワ。

「さてと、プレシア。」

体は自立呼吸が可能な水準にまで回復、数日中に意識も戻るだろう。

話を聞く気になったか？」

「ア……アリ、シア…………」

フラフラと歩み寄ってくる。

何だか亡霊ちつく。

怖い。

「アリシアアアアア!!」

すごい勢いで抱き着いてる。

用意して良かった防御魔法。

「落ち着けプレシア。アリシアは逃げないと言うか、その勢いで怖がられそうぞ。」

それに、アリシアの体調は万全じゃないんだ。抱き締め殺す気か？」

「アリシア、アリシア、アリシアアアア……」

聞いちゃいない。

プレシア・テスタロッサの暴走。

ぴーからぶっさすネギを準備すべき？

(どこの風邪の民間療法だ。やめておけ)

ネギ嫌いじゃないせいか、お姉様がつれない。

あまりの寂しさに、全私達が泣いた。

むしろ今から泣く。

せーの。

(やめんか！ 私を昏倒させる気か!?)

えー。

あの様子では、落ち着くまでに時間がかかる。

プレシア・テスタロッサが落ち着くまでの、ちよつとした息抜きなのに。

(そこのハラオウン親子とか放置中のフェイトとか、問題は終わっていないぞ)

はい。

話をすべきは……まずは時空管理局？

2人共、話をしたい様子。

思考支援の水準を低下、以後、必要に応じて調整。

「エヴァンジュ、蘇生……いや、治療は成功した、という事でいいの？」

クロノ・ハラオウンの顔に、信じられない、と書いてある。

26年前に死亡した少女が息を吹き返した。

普通なら信じられない。

「そうだな。全体的に劣化が激しいからリハビリは必要だが、その程度までは何とかなった。

後は、プレシアが納得出来るかどうかなんだが……アレはいつ落ち着いてくれるだろうか？

26年越しの悲願だから、気持ちは分かるんだが」

「だけど、あれ程強い意思で願っていて、どうして最後に選んだ手段がアルハザードだったのかしら。

エヴァさんは、やっぱり管理局が関わっていると思っっているのでしょうか？」

「それ以外に何かあるなら教えてくれ。少なくとも、私には思い付かん」

「確かに、他の説明が出来るような情報は無いわね。

26年前の事件の真相、過去に逮捕歴の無い大物犯罪者、経路不明の情報流出。

プレシア女史がきちんと話してくれたら、調査も進むのでしょうか……」

時空管理局が自分を捜査？

捜査対象は、最終的に最高評議会やレジアス・ゲイズに行き着くはず。

きつと、無理。

「私としては、プレシアが消されないかの方が心配だな。

相手は管理局の内部、それも大物だ。都合の悪い存在を簡単に見逃すとは思えん。

そこに行き着く前に、うまく交渉か取引が出来ればいいが」

「交渉か取引？ ……何かあるのか？」

「ちよつとした資料は入手したし、ある程度は何とかなるだろうと踏んでいる。まあ、これもプレシアが正気に戻ってからの交渉や、プレシアが持つ情報次第だな。

それよりも、少しフェイトと話をしてくる。これ以上放置するのも可哀そうだ」

そう言いながら、お姉様はハラオウン親子の傍から、フェイト・テスタロツサの傍へ。

フェイト・テスタロツサの表情は、困惑一色。

「だいぶ衝撃的だったと思うが、大丈夫か？」

「えっと……あの少女は、いったい………？」

「辛い過去の話を繰り返す事になるが、落ち着いて聞いてくれ。

あの子が、アリシア・テスタロツサ。お前の体と5歳以前の記憶の元となった、プレシアの娘だ。

だが、お前はお前自身が言ったように、プレシアに娘として生み出されたんだ。アリシアの代わりじゃない、プレシアのもう1人の娘として生きていい。

例えアリシアの代わりだったと言われようが、失敗作だと言われようが、そんなものは子の存在を勘違いした親の言い訳だ。姉の面影を妹に重ねる親などいくらでもいるし、アリシアとお前が別の存在だと言う事、お前がプレシアに生み出された存在だという事は、永遠に変わらん事実だからな。

クローンだと言う事も気にするな。魔法が知られていないその世界ですら、体外受精も代理母もクローンも、基本的な技術はあるんだ。本質的には生物ですらない私から見れば、生まれ方の違いなど細事でしかない。

それを理解せずに暴言を吐く有象無象が現れる可能性はあるが、無

視している。お前がプレシアを母と呼ぶ限り、それは真実であり続ける。

家族の事に要らん口を出す阿呆など、鼻で笑い飛ばしてしまえ」
「生物じゃ……ない？」

「私の本体は魔導具だ。人よりも傀儡兵に近い存在だな。」

ロストロギアの一種と言ってしまっても構わんぞ？」

「そっか、そうなんだ……そうだね。うん、分かった」

フェイト・テスタロッサの表情が、引き締まった。

きつと、何と言われようと、例え望まれなくても、プレシア・テスタロッサを母と呼び続ける覚悟を決めた。

そうなるよう、お姉様が誘導してる。

「だが、もう少し甘えた方がいいだろうとは思うぞ。全力でぶつかって初めて届く事があるのは、なのはと戦って少しは理解出来ただろう？」

そもそも、親にわがままを言うのは子供の義務だ。少しくらい困らせる位でないと、親が育てている実感を持つてん。プレシアは子を構いたいタイプの母親に見えるから、いい子で大人しくしているより、思うままにぶつかりに行った方が喜ぶと思うぞ。

アリシアが目覚めたからと言って、遠慮するな。むしろ、アリシアと一緒に突撃するつもりでいた方がいい」

「そ、そう……なのかな？」

「もつとも、生まれた順序的にはアリシアが姉でお前が妹になるだろうが……見た目やらは逆転してしまっているからな。悪いが、その辺は家族で何とか折り合いをつけてくれ。」

人としてのアリシアは5歳のままの可能性が高く、最悪記憶の一部を失って退行する可能性すらある。体を無理に成長させても凶体の大きい子供が出来るだけで、下手をすれば発達障害や知能障害に見られるかもしれない。そもそも、プレシアの中のアリシアは5歳のままだ。その成長を見守る邪魔をしたらブチ切れかねんぞ。

だからと言って、お前が5歳以下に戻るのも無理がある。5歳児の振りなど簡単ではないし、なのはとの付き合いもあるだろうからな」

「う、うん……」

表情がちよつと崩れた。

「そういえば、みたいな感じ？」

アリシアとフェイトの混同を防ぐためでもあるけど、これは言わない方が良さそう。

「さてと、後はアレを……止められると思うか？」

「えっと……多分、難しいんじゃないかな……」

絶望した。

娘にも止められない母に絶望した。

ついでに、未だに信じられないものを見たような顔で思考停止して犬耳にも絶望した。



それから、更に10分程。

プレシア・テストロッサはようやくアリシア・テストロッサから離れた。

「やれやれ、やっとで話が出来た状態に戻ったか？」

「失礼ね……と言いたるところだけど、確かにそうね。」

でも、アリシアの蘇生については礼を言うわ」

「治療だと言っているだろう。」

さて、話の続きだ。現時点で、選択肢は3つ提示できる。

1つ目。先ほどの条件を受け入れる。ああ、先にアリシアを治したからと言って、内容を変える気は無いぞ。

2つ目。当初の予定通り、アリシアと虚数空間に落ちる。

3つ目。改めて私と戦う。

さあ、どれがいい？」

「……馬鹿ね。1つ目以外の選択肢があり得ると思えるの？」

「あり得た場合は、私から1つ目の選択肢が消える。消さずに済んで何よりだ。」

では、私が提供する2点目だ。娘“達”と過ごす、心の準備は出来

「ているか？」

「母さん。」

私は、アリシア・テストロツサじゃありません。

だけど、アリシア・テストロツサと同じ、母さんの娘です。

母さんの娘として、姉さんの妹として。

私は、家族の笑顔を見ていたい。

それだけが、私の望みです」

フェイト・テストロツサは、やっぱり覚悟完了。

ついでに、自分から妹の立場に立つつもり？

でも、きつとこれがフェイト・テストロツサの、本当の心の声。初めてのワガママ。

「フェイトは、既にお前を母と呼び続ける覚悟を決めた様だぞ。

現実是非情だったかもしれないが、捨てたものでもないだろう？」

「……………少しだけ、時間を頂戴。」

心の整理は、したいわ」

むしろ、あれだけの暴言の後ですぐ受け入れられたら、裏を警戒する必要があるそう。

心の整理が出来れば、後はきつと大丈夫。

「そうか。フェイト、済まないがアースラに戻っていてくれないか。

プレシアも少し時間が欲しいと言っているし、心配しなくても近いうちにまた会えるさ。」

少しばかり見違えるかもしれないが、まあ、期待して待っていてくれ」

「え、ええと…………」

フェイト・テストロツサは困った顔で…………リンデイ・ハラオウンを見てる？

指示に従っていいか迷ってる？

「そうね、その方がいいかしら。」

ある程度落ち着く時間も必要でしょうし、体もまだ本調子ではないでしょう？

一旦アースラに戻って休むといいわ」

リンデイ・ハラオウンの指示で、フェイト・テストロツサとアルフ

退場。

結局アルフは複雑な表情のまま喋らなかつた。プレシア・テスタロツサに思う所は多々あるはずだけど、フェイト・テスタロツサの意思を優先した感じかも。

これで、話が出来る環境が整った。

「さて、と。私から次に提供するのは、お前の治療だが……その前に話を聞きたそうだな？」

「そうね。フェイトを去らせたという事は、あまり良い事とは思えないわ。

何をどうすれば罪人の私が名声を得る内容になるのか、是非教えてほしいところね」

確かに、普通なら贖罪等の表現になりそう。

でも、フェイト・テスタロツサを退出させた目的は、予測されてた。だしぶ落ち着いて考えられる状態になった模様。

「では、はつきりと言うぞ。

私がこれから行うのは、闇の書の悲劇の終焉だ。

実作業としての助力は恐らく不要だ。必要なのは、有象無象を黙らせる事が可能な実力と知名度だな。その為に、表に立つてもらいたい。私は表に出る気は全く無いから、名誉もそのままお前が受け取ればいい。

フェイトを外したのは、まだ子供だし、大人の取引の現場に立ち会わせる必要も無いだろうと思っただけだ」

「闇の書、ですって？」

あんな危険物を、どうにかできるとでも思ってた？」

やっぱり、普通はそう考える。

ある程度優秀なら、犯罪組織すらも闇の書は厄介なロストログアだと思っそう。

「思っている。

そもそも闇の書は、元々マトモな魔導具だった物が改悪に改悪を重ねた末に、あんな代物になってしまったものだ。詳細の調査はまだまだだが、本来の姿は知っているからな。私は、あれを本来の姿に戻し

てやりたい。

技術については、ジュエルシード21個、内12個はお前が制御中だった物を奪う形で完全制御し、アリシアを治療した事では不満か？」

「……そうね、確かに、尋常ではない技術を持っている事は理解したわ。

それに、管理局の執務官が何も言わない以上、絵空事とは言いにくい……

「そう判断させるためにここに連れてきたのでしょうか？」

「それも考えんでもなかったが、それが理由で連れてきたわけではないぞ。闇の書をどうにかする以上、管理局とも話しておく必要があると判断したまでだ。

「この交渉を完全に裏でやってしまえば、お前を表に立たせる事が難しくなるからな」

「そう。つまり、私に望むのは邪魔者の威圧と言った所かしら？」

「プレシア・テストアロツサは、役目を正しく把握してくれた。

あと少し、時空管理局にちよつと圧力をかけておく？」

「そう判断してもらってもいい。

交渉やら多少やつてもらおう事はあるだろうが、実際の対処をするという名目もある。場所はそこの世界になるが、娘達と過ごす時間は確保しやすいだろう。

むしろ、対処する時間を与えないような馬鹿共がいるなら、闇の書を持って潰しに行つてやる」

「お、おいエヴァンジュ！」

「本気で言っているのか!？」

「クロノ・ハラオウンが焦ってる？」

「厄介な者が担当者として来た場合は管理局を壊滅させると聞かせておいたのに。」

「長宗我部千晴の精神的ダメージは無意味だった？」

「当然だ。闇の書の対処をするなどという態度を取るといふ事は、地球、つまり管理外世界などどうなつてもいいという事だろうか？」

そんな馬鹿に取られる時間など勿体無いだけだ」

「交渉担当の手を煩わせるからと言って、実際の作業が止まるわけではないだろう！」

「対外的にはプレシアが行う事にするんだ。」

であれば、プレシアが手出し出来ない状況では事態が変わる事を避ける必要がある。

つまり、実際の作業が進まなくなるという事だが？」

「しかし、作業を進めることだって出来るだろう！」

「私は表に出る気が無いと言っているだろう。だからこそ、名誉やらを全てプレシアに渡すと言っているんだ。」

第一、私の存在まで表に出てみる。地球に押しかけてこようとする無能や憑かれたかのようにアルカンシエルを撃とうとする馬鹿が増えかねんが……作業に支障の出ない形で対処できるのか？

それくらいなら、作業時間の確保の方がよほど簡単だろうに」

「そ、それは……」

クロノ・ハラオウンが黙った。

お姉様が夜天の妹、現状では闇の書の妹だと忘れてた？

あまり魔導具らしくないせい？

仮にそうでも、それがお姉様なんだから困るよねー。

ねー。

「……随分と不穏な様子だけど、いったい何者なの？」

「信じられるかは微妙だが……まあ、言ってしまった方が動機やらも理解しやすいか。」

私は夜天の魔導書、今は改悪されて闇の書などと呼ばれているが、アレの妹だ。私は妹として、姉を助きたい。改悪されて暴走するようになった状態は、姉も本意ではないはずだしな。

だが、私が表に出れば、闇の書と同じ目で見られる可能性が高すぎる。闇の書の悪名が広がり過ぎてているせいだな。

となれば、誰か優秀な技術者を立てて私の存在を隠した方が無難だが、生半可な技術者では闇の書を何とか出来るわけがない。最低でも天才や鬼才と呼ばれるレベルでなくては看板になる事すら出来んが、

そういった人物はよほどの事が無い限り他人の言葉では動かないものだ。少なくとも、名誉は餌にならない。

つまり、私の手の届く範囲に居て、大魔導師と呼ばれる実力と名声を持ち、アリシアという対価を用意できるお前が、最も適任だった。私の存在と動機、それにお前を選んだ理由はこんな感じだ。理解してもらえたか？」

「……まるで、物語の様な話ね」

プレシア・テストロツサは呆れてる。

信じられてない？

今となつてはアルハザードより現実的なのに。

「事實は小説より奇なり、と言う言葉がある。」

前提はともかく、そこからの思考はそう奇を狙ったつもりはないぞ」

「その前提がおかしすぎるでしょう！

そんな内容が信じられるとでも思っているの!？」

「思わんき。だが、これが私の真実だし、夜天を助けるために協力する以上は、いつか知る事だ。」

それに、私が今で言うロストロギアを作っていた頃の技術を持つという事を明かしたんだぞ？

これを否定するなら、アリシアを治療した事について、それが可能な別の理由を教えてほしいものだ」

「……………そう。ジュエルシードによる治療は、交渉のためのフェイクという事ね」

「いや、ジュエルシードは腐れ魔導具だが、魔力の出力だけは阿呆の様に高いからな。不安定だが私が制御出来る範囲だから、治療の為に有り難く使わせてもらったよ。」

ああ、今話した情報を知ったという前提で、あの時の言葉をもう少し正確に言い直すか。

願望を叶えると言われるジュエルシードが、この場に21個全てある。

全ての魔力出力を私の技術で使えば、大抵の願いはどうかかなりそ

うだと思わんか？」

「……ふふ、ふふふふふ……」

随分と踊らされたものね」

プレシア・テスタロッサが壊れた？

切れる寸前？

「だが、私でもアルハザードに行く事は出来ん。仮に辿り着いて治療に関係する魔法の資料が見付かったとしても、虚数空間の中では使えないだろう。そもそも、空気や水が無く魔法も使えない虚数空間で、どうやって生きて辿り着くつもりだったのか教えてほしいものだ。

要するに、極めて分の悪い賭け、しかも賭け金は自分とアリシアの命だったという事だな。

それを覆して、娘達との時間を現実にするんだ。少しくらいは感謝してほしいものだが」

「そう……ね。確かに、アリシアは息を吹き返したわ。

だけど、まだ問題が無いとは言えないでしょう？」

横目でアリシア・テスタロッサを見ながら、プレシア・テスタロッサの表情が緩んでる。

何だか、^{アリシア}娘に関する場合だけ優しげになる模様。

なんとという親馬鹿。

「まあいいさ、すぐに信用されるとは思っていない。

少々時間がかかるんだ、お前の治療も開始するぞ」

ジュエルシード21個、出力上昇。

プレシア・テスタロッサのリンカーコアの修復及び高濃度魔力素汚染の後遺症治療を開始。

その他、劣化箇所を調査開始。

「蘇生があの時間で完了したのに、同じくらいの時間がかかるという事かしら？」

お姉様が治療と言っているためか、プレシア・テスタロッサは大人しくしてる。

だけど、不思議そうな表情。

「治療だと言っているだろう。それに、内容はアリシアに行ったもの

とそこまで違わん。

確かに意識に関する部分はないが、それに替わる別の治療もある。その意味では、より時間がかかっても不思議ではないぞ」

「そう。内容くらいは聞かせてくれるのかしら？」

「損傷したリンカーコアの修復、魔力素汚染の治療、その他体の劣化箇所の補修は確定で、これはアリシアと似た感じだな。違いは症状が軽い事と、魔力素汚染が現在形か後遺症かくらいだ。

別の治療と言うのは、まあ、悪い事ではない。期待して待っているといい」

緊急報告。

プレシア・テストアロツサの胸部に魔導具を発見。

外部から確認できる術式から推測すると、精神に影響する代物である可能性が濃厚。

恐らく認識阻害や思考誘導の効果を持つと予想。

(認識阻害や思考誘導、だって……?)

胸部の奥深く、大動脈付近。

転移で突っ込むにも、手術等で埋め込むにも、高度な技術が必要。

胸部に手術痕は無さそう。転移での直接埋め込みが行われた可能性が高い。

下手に抵抗されるだけでも命に係わり、問題なく完了しても処理後数日は安静にする必要がある場所。本人が知らない間にと言うのは考えにくい。

取り出した後も最低数日、出来れば数週間の療養期間が必要。

きちんと説明してから取り出す事を推奨。

「……プレシア。随分と厄介な事になっているな」

「そう。やはり、私の体はもう……」

「違う。確かに余命が短かった事は認めるが、治療可能な範囲だ。

お前の体内に、魔導具が埋め込まれている。効果は精神操作系……認識阻害や思考誘導の様だ。

埋め込んで数日は安静にする必要がある場所のはずだが、いったいいつ埋め込まれた？」

「何ですって!？」

「精神操作系魔導具だつて!？」

「どうしてそんな物がプレシアに……!？」

プレシア・テストロツサが驚愕。

「安静が必要なのに知らなかった？」

でも、やっぱりクロノ・ハラウンが首を突っ込んできた。

余裕があったら^{ひとかけ}Ωの準備をしておいたのに。

「理由など私を知るか。むしろ、誰が埋め込んだかが問題だ。

最低でも数日は安静にさせられた事があるはずだ。覚えは無いかな？

「検査でも治療でも意識不明でも何でもいい、何か思い出せ」

「数日以上、ね……ヒュードラの事故の後、しばらく意識不明だったらしいわ。

あとは、管理局員になって数年した頃に、体調を崩してしばらく入院した事があるわね。

それと……幼い頃に入院した事があるはずよ。

「心当たりはこの程度ね」

「入院や治療をしたのはどこだ？」

「全て、ミッドチルダの先端技術医療センターのはずよ」

「……リンディ。そこは管理局関係の医療施設か？」

「時空管理局の、医療技術開発の中心地でもある施設ね。

少なくとも、犯罪者が簡単に入り込めるような場所ではないわ」

「そうか……これは、思ったより状況が悪いかもしれん」

「ええ。どうやら、その様ね」

あまり納得していない表情のプレシア・テストロツサ。

「ただ、お姉様とリンディ・ハラウンの表情は良くない。

行動を誘導するためにいろいろ言っていたけど、事実がもつと怪奇なのは予定外。

「……とりあえず、そこに魔導具があるのは現実として認めるとして、だ。

プレシア。数日は安静にしてもらおう必要があるが、除去して構わん

「な？」

「ええ。そんな物があると知った以上、そのままにしたいくないわ」

無印編40話 その手の上で

プレシア・テスタロツサの胸部の調査は、本人とハラオウン親子も参加して入念に。元々胸元が大きく開いている服装だったため、クロノ・ハラオウンも強制参加。

ちなみにプレシア・テスタロツサの服装は、フェイト・テスタロツサと違ってテレビ版に近い。喉元から鳩尾辺りまで大きく空いているから、脱ぐ必要も無くよく見える。

年齢を考えると随分と若作りな服装。外見から正確な年齢が判らないと言う意味では、高町桃子と……こほん。えーと、何の話だっけ。間違いなくそこにある事、それが最近埋め込まれたものでない事を各自で魔法も使い確認した上で、魔導具を摘出。

今は魔法で保護してるけど、本来は安静を保って治癒を待つ必要がある。保護魔法は治癒も妨げていて最大でも後1日しか持たない事、保護魔法の効果を切ってから最低数日は絶対安静だという事は説明済み。

とりあえず、魔力素汚染の後遺症も処置が済み、治療の目処は立った。

リンカーコアの修復処置やおまけの準備も完了。

あとは時間をかけてゆっくり治す必要がある。

「さて、前準備はこれくらいだが……この魔導具を調べたい。構わないか？」

お姉様が、プレシア・テスタロツサから取り出した魔導具を手にとって見てる。

六角柱の上下がとんがった形。薄い青色の水晶柱に近い感じ。

ぶつちやけレリックに似てなくもないけど、別物。魔力その他の反応も薄いし。

「私は構わないわ。

だけど、管理局としてはどうかしら？」

「私達で調べたいところだけけど……埋め込まれた経緯に問題がありそうね。」

無かった事にされる可能性もあるという事でしよう?」

プレシア・テストロツサは、何をされたか知りたいはず。

リンデイ・ハラオウンも、調べたい気持ちは山々。

だけど、時空管理局の影響が強い病院で埋め込まれた可能性が高いという事は、プレシア・テストロツサ救済の理由説明が悪い方向で現実と一致しているかもしれないという事。

その証拠と成り得る代物。取り扱いは要注意。

「それで済めばいいが、最悪の場合は情報を知る者がまとめて闇に葬り去られる可能性もあるぞ。

やりたい事は調査だから、研究者の誇りにかけて改竄はせん。そんな事をして私に利が無いし、間違いなく改竄より見なかったことにする方が簡単だ。

穏便に夜天を救いたいだけなのに、どうしてこうも厄介事が出てくるんだ……」

お姉様が深くため息をついてる。

理由には完全に同意。

原作や今までに得た情報は誤りで、時空管理局に裏なんて無かった……という結末の方がまだ良かった。

「世の中は、こんなはずじゃない事ばかりだよ。

……正直に言えば、時空管理局がこんな事をやっているなんて、まだ信じたくは無いんだが」

クロノ・ハラオウンも、なんだかやるせない表情。

でも、ようやく信じる気になった模様?

「私だって、こんな話が出てくるとまでは思っていなかった。むしろ、いい意味で原作知識があてにならない状況なら良かったんだがな……せめて、こんな事をしているのは極一部であってくれ。お前達が例外だなどと考えたくも無いぞ。

まあ、ここで愚痴っついても始まらない。事後処理に関して、少々相談がある」

「私の当面の身柄の扱い、かしら?」

「それもあるが、まずはジュエルシードの事件に参与していた証拠の

一部を消したい。

全く……アースラを攻撃していなければ、大事にはならなかったものを」

「こんな結末になると予想出来る人物が、どこにいるのかしら？」

「エヴァさん、罪の隠蔽も犯罪よ？」

プレシア・テスタロッサの行動はともかく、反論は正しい。

そして、リンディ・ハラオウンの横槍も、とても正しい。

それに、攻撃すること自体を防がなかったお姉様が言える事じゃない。

「それは解っているが、私を隠したままでの説明は難しいぞ。

それに、武装局員がプレシアと接触した際の映像は残っているだろう？」

「当然ね。公的な記録になるわ」

「なら、それとの矛盾を解消する必要もある。

交渉やら裁判やらがある頃には、プレシアは若返っているからな」

「え？」

ぽかーん、と表現したくなる様な、ハラオウン親子の表情。
プレシア・テスタロッサも声は出していないものの、似たような感じ。

「娘達と過ごすための前提条件を整えると言ったはずだ。別の治療もするともな。

26年前に5歳の娘を亡くして、当時中央技術開発局の局長だったことは聞いている。

20代で子持ちの小娘が大魔導師の肩書を持って局長になれるとは思えんから、既に60歳前後だろうか？

アリシアやフェイトは孫と言っつていい年齢だから、親子として過ごすには厳しすぎる」

「だ、だからと言って、若返り、なんて……」

「ジュエルシードの阿呆の様な出力に感謝すべきだな。時間はかかるが、問題なさそうだ。

だから、本局と接触する頃には、プレシアの外見はそれなりに変

わっているはずだぞ？

元々そんな年齢に見えんから、どの程度変わるか微妙かもしれないが」

クロノ・ハラオウンが、魚の様に口をパクパクさせてる。

予想以上の技術を目の当たりにした衝撃？

蘇生と若返り、どっちが理解しにくいだろう。

「アリシアさんを生き返らせた上に、プレシア女史を若返らせて……

どう言い訳するつもりかしら？」

リンデイ・ハラオウンが呆れてる。

でも、ちよつと笑ってる。なんだか好奇心も見える？

少しわくわくしてる雰囲気も。

「3か月ほど前、偶然に時の庭園に流れ着いていたらしい、正体不明の魔導具の様な物を見付けた。

調べようとした矢先に不思議な光に包まれ、ふと気付いたら体調がおかしい。

体は軽いし、魔力も全盛の頃を思い出させるくらいに高まったが、どうも勝手が変わったらしく、自由に使えない。

ふとガラスに映る姿を見ると、どうやら若返ってしまったらしい。

それに、アリシアが息を吹き返している。

どうやら願望機と呼ばれる、ジュエルシードのようなロストログアか何かだったのだろう。影も形も無くなってしまった今では、確かめるすべは無いがな」

「それなら、どうして第97管理外世界に来ていたのかしら？」

「経緯はどうであれ、愛娘は息を吹き返した。だが、どう見ても療養が必要そうな状態だ。

プレシアは指名手配されている犯罪者に協力していた時期があり、違法な研究を行っていた事も知られている。過去の事故に関する問題も無くなったわけではないだろうから、管理世界で静かに療養する事は難しいかもしれない。

ならば、それなりの生活が可能な管理外世界は無いか、と考えるのは不自然ではないだろう。

出来れば愛娘には人並みの生活を送らせてやりたいから、ある程度は文明があり、交流できる人がいるところがいいだろう。

そして、管理局には管理外世界の出身者がいるし、管理外世界へ行った経験が有る者もいる。プレシアが管理局にいた頃や、その後に交流のあった人物等に第97管理外世界を知る者がいてもおかしくは無く、そういった人物に話でも聞いていければ、候補として考えても不思議ではないな」

「ジュエルシードをフェイトさんに集めさせていた件については？」
「せっかく愛娘達と静かに暮らせそうな世界が見付かったのに、おかしな魔導具が降ってきたんだ。そんなものに幸せな暮らしを邪魔されるわけにはいかないだろう。ロストログアの異常性は、身を以て理解しているからな。」

だが、プレシアは自分で回収して封印できる様な体調ではなかった。

アリシアは元々戦力外だし、何より幼すぎる。

であれば、実力のある魔導師で、優秀な使い魔もいるフェイトに頼むしかないだろう」

「フェイトさんがなのはさんと戦闘を繰り返していた件は？」

「管理外世界にいるミッド式のデバイスを持った管理局員でない強力な魔導師など、普通は犯罪者以外にはありえないだろう。」

明らかに危険そうなジュエルシードを集めているという事は、事故に見せかけてロストログアを奪取しようとしている犯罪者集団の回収員ではないか、と考えるのはおかしくないか？

そう思い込んでしまえば、そんな相手にジュエルシードを渡す選択肢は無くなるだろうな」

「クロノが戦闘に介入した時は、身分証明も提示していたはずよ。」

その時にフェイトさんが逃亡した件については？」
「今まで管理局と関わった事のない少女やその使い魔が、管理局の身分証明がどんなものか、ぱっと見ただけで判断出来ると思ってるのか？」

それに、犯罪者だと勘違いしてなのはと戦闘を繰り返していたん

だ。その犯罪者組織のエリートが介入してきたと判断してしまった事は、不幸な事故だったな」

「だけど、プレシア女史は知っていたはずでしょう?」

「体調が悪化していた母を心配して、相談せずに頼まれた回収と封印を急いでしまったのは迂闊だったとしか言いようがない。

恐らく、責任感が強すぎたのが災いしたのだろう」

「プレシア女史の次元跳躍魔法については?」

「不慣れな状態、万全でない体調の中で愛娘を危機から救おうと放った次元跳躍魔法が、思わぬ方向に行ってしまったたり、あまつさえ愛娘を直接傷つけてしまったりするなど、想定外もいところだっただろう」

「フェイトさんの心を傷つける様な事を言っていたのは?」

「無理して行使した次元跳躍魔法で体調を更に悪化させてしまったプレシアが、事後処理を自分の不完全なクローンに任せたのは最大の失敗だったな。愛娘の心を傷つけ、あまつさえせっかく封印したジュエルシードを暴走させるなど、クローンは何を考えていたのやら。

真相は、虚数空間に落ちてしまったクローンに聞いてみないと分からない事だ。永遠に闇の中になってしまったな。

「……という筋書きにしたくて、色々和小細工中だ」

「……え?」

「小細工っていったい何を!」

リンディ・ハラオウンとプレシア・テスタロッサの驚いた表情が、何だか似てる。

クロノ・ハラオウンは、やっぱり元気。

「時の庭園を虚数空間に落とす事が可能な状況を維持する為に、次元震を低レベルで維持しているんだ。

結構面倒なんだぞ、これ」

「そ、そんな理由で止めていなかったのか……?」

クロノ・ハラオウンの表情が引き攣ってる。

完全に呆れを通り越した模様。

「他に理由なんてあるか。だが、こうでもしないと私を隠したままプ

レシアとアリシアの件を説明出来ないし、罪も軽くし辛いだろうか？

ああ、プレシアが持っていたジュエルシードは時の庭園を消失させるために数個犠牲にするが、残りは本物のプレシアがクローンから取り返して自主的に提出した事にするからな」

「だからと言って、やり過ぎだ！

完全に罪の隠蔽じゃないか!!」

そのとおりでございます
Exactly.

でも、これくらいしないと、プレシア・テスタロッサを助ける意味が無い。

「プレシアの裁判が長引けば、はやての命が持たん。はつきり言うが、今年の年末でもかなりギリギリだ。

ある程度の司法取引やらは可能だと思っているが、それでも数か月の拘束はあり得るぞ。若返った事の調査だのと言われてな。

これを問題視するのなら、私を穩便に公開する方法か、私抜きで夜天を助ける方法を持ってこい。納得出来る内容なら採用するが、案も出せないなら不要な騒乱を防ぐ為だと理解して諦めろ」

「だ、だが、裁判もきちんと話せば……」

「精神操作を受けた人物の罪は、誰が背負うべきなんだろうな。

被害者に全てを押し付けて満足か？

精神操作を受けていた人物に十分な意思能力があると断言するのか？

しかも、26年前の駆動炉開発に係わっていた会社員が、今じゃ管理局で佐官だぞ？

精神操作に管理局が絡んでいる可能性すら濃厚な現状で、公正な裁判結果が出ると無邪気に信じる事が出来るか？

少なくとも、私には無理だ」

「な、何だつて!？」

あの事故の関係者を調べられたのか!？」

「意図的に調べたわけではないが、情報は掴んだ。

ヒュードラ開発で実質的な助手をやっていたアレクトロ社の元社員が、マトモな裁判もされないまま管理局の地上本部で一佐になって

いるらしい。明らかにおかしいと思わんか？」

チクアーブが見付けてきた資料が、これ。

26年前の、ヒュードラの事故当時の資料の一部。

相当奥深くに隠されていたはずの情報を良く見付けてきたと称賛。内容は酷いけど。

「あの事件に関しては、色々あったけれど……誰を言っているのかしら？」

「デイラン・ヒューイトとかいう名前らしい。」

当時はアレクトロ社の社員で、しばらく社会奉仕をした後に管理局入りした様だぞ」

「あの男が……事故の少し前から見なくなっていたけれど、管理局と取引でもしたという事かしら？」

「立場の変遷を知っただけだから、裏で何があったのかまでは解らん。」

だが、事故の翌年にアレクトロ社が新型の駆動炉を発表しているのは事実だ。資料を見る限りでは規模や出力がヒュードラとほぼ同じだが、これは偶然で済ませて良い話なのか？

この辺の情報も使えば、裏に関わっていない相手なら司法取引を引き出しやすいだろう。逆に、裏に関わっている連中は全力で潰しに来る可能性もあるがな。

さて、真つ当な裁判を推奨する執務官としては、これをどう判断する？」

「まあまあ、エヴァさんもあまりクロノを苛めないで、ね。」

「だけど、時の庭園を崩壊させるとなると、かなり大事よ？」

「苦虫を100匹ほど噛み締めたような表情のクロノ・ハラオウン。」

「流石に見かねたのか、立ち直ったリンディ・ハラオウンが話題を変えてきた。」

「虚数空間に落とすくらいならどうにかなる。」

「今もかなりギリギリの状態で保っているようなものだからな。少し大きめの揺れを起こせば、割と簡単にいけるぞ？」

「そのためにジュエルシードを犠牲にするわけね？」

「遠隔で次元震を起こす出力を出すのは難しい。外部から消失させる

出力を出すには周囲の世界に被害が出る規模にならざるを得ない。となれば、内部から崩壊させるしかないだろう？ アースラの記録に残る事を考えても、外部から手出した痕跡は残さない方がいいしな。

共に虚数空間に落ちる危険を覚悟で回収するなら止めはしないが……そこまでリスクを取る意味のある代物か？」

「そう。あくまでも被害を抑えた上で、余計な痕跡を残さないためという事ね？」

「そうだな」

何だか、リンディ・ハラオウンの表情が笑っているようにも見える。ばれてーる？

でも、周囲の世界に影響を出さずに時の庭園を消失させる方法と言うのは……

「……本当だぞ？ 仮にここで奪ったところで、ホイホイ使える代物じゃないんだ。

お前達の目の前で使えば、私がおかをしたのがばれるんだぞ」

「ふふ、そういう事しておきましょう。

必要なジュエルシードは何個かしら？」

「3個だな。2個では恐らく出力が足らん。

ところで、プレシア。この時の庭園に未練はあるか？」

「……この26年で、庭園も随分と荒れ果ててしまったわ。

壊れた過去と一緒に捨て去るのもいいかもしれないわね」

なんだか、プレシア・テストアロツサは落ち込んでいる。

自分の過去と罪を見せ付けられてる様な気分になっているかも。

「そうか。なら、優先して確保しておきたい物を言ってくれ。

長年暮らしていたんだ。私物やら資料やら、色々あるだろう？

可能な範囲で確保しておくぞ」

「もう、何もいらないわ……アリスアが居れば、それでいい」

「全く……せめてフェイトも入れてやれ。

とりあえず司法取引で使えそうな資料辺りを探して確保しておくが、構わんな？」

「ええ、好きにして頂戴」

「よし。なら、次はこれを説明しておくか」

そう言いながら、お姉様が小物の転送魔法を使って取り出したのは、1本の黒いボトル。

「プレシアとアリシアには、アースラに戻った後でこの中に入ってもらう」

「今度は何を言い出すかと思えば……どうやって入るって言うんだ？」

立ち直ったと言うか、別の話になって頭を切り替えたと言うか。

クロノ・ハラオウンが会話に復帰してきた。

「生活可能なデバイスの格納領域の様なものだ。中に医療施設や食料を用意してあるから、ゆっくり休んで来い。」

80倍の時間加速付きで、中にいることが出来るのは3ヶ月だ。

分かりやすく結果を言えば、明日の夜には3ヶ月療養して出てくることになる。若返りもその間に完了する。計算上では、概ね30歳の状態に戻るはずだ。」

「なっ……!」

絶句してるクロノ・ハラオウンの驚く顔がだんだん楽しくなってきた。

でも、ナンダッテΩΩΩの出番が微妙に無い。

「だから3か月前ね……そんな物を用意出来ること自体が驚きだけけれど、用意が良すぎでしょう。」

まさか、それもジュエルシードを使った結果という事かしら?」

リンディ・ハラオウンは、驚くことを諦めた?

なんだか、どんどん笑みが深くなってる気がする。

「起動にジュエルシードの魔力を使うが、物自体は……今だとロストログアと呼ばれるのか?」

だがまあ、使い捨てだし、今作ろうにも部品やらの入手は無理だろう。使えば内部の時間で老化するから、利点ばかりの道具でもないしな。

というか、デバイスの格納領域のような、生成した空間を居住空間

にする事自体は一般的ではないのか？ 都心部や居住可能な土地の少ない世界だと重宝しそうなんだが」

「空間を維持するための魔力を供給するマスターは外にいる必要があるし、生活でできるだけの空間をずっと維持できるだけの力を持つ人はそういないわ。仮にそれを外部からの魔力供給で補っても、デバイスの盗難や魔力供給に支障があると致命的な事になるし。」

危険性が高いから、個人で人が入る様な空間を作る事は禁止されているわね。小物入れとして使っている人はそれなりにいるんじゃないかしら？ 組織としても大抵の場合は土地や空間を用意する方が安上がりだから、一般的ではないわ」

なんてこつたい。

リンデイ・ハラオウンは時空管理局の提督だし、嘘を言う必要は無いはず。

内部からの魔力供給の技術は公開されていないか失われてる？

費用の問題が大きいだけかも？

でも、有り得ない話ではないらしい。ギリギリでセーフと言えそう。

「そうなのか。」

まあ、今は管理世界の人間ではない私が管理するし、安心して行つて来い。今までの分も合わせて、しっかりアリシアを甘えさせてやれ。

だが、フェイトを忘れるなよ？」

「……そうするわ。入るにはどうすればいいかしら？」

「魔法で内部に転送する。その辺は、アースラに着いてからだな。」

中に機械仕掛けの自動人形がいるから、入った後で分からない事があつたら遠慮なく聞くといい。転送時に注意事項も送るから、中で確認してくれ」

「そう、分かったわ」

注意事項は、アリシア・テスタロッサの人格変化及び記憶欠損の可能性。

魔導師としての素質の向上、主にリンカーコアの強化に関して。

機能訓練リハビリの必要性と内容。

プレシア・テスタロッサ自身の、若返りに関する体調変化について。証拠映像との齟齬を防ぐため、戻る時まで髪型等はなるべく現状を維持する事。

概ねこれくらい。

時の庭園内の資料の回収は完了、チクアーブや高町なのは達も撤収済み。

あとは、消失させるだけ。

「さて、庭園消失に合わせて、アースラに戻るぞ。

プレシア、戻る際になるべく姿が隠れる様に、このローブを着てくれ。一応幻術で誤魔化しはするが、帰還時の記録までは弄れんし、若返った姿と完全には一致しないだろうからな」

「そうね、若い頃の姿なんて自分でも思い出せないわ。

少し暑苦しそうだけれど、それを着て脱出を装えばいいという事ね？」

「随分徹底しているけれど、その時の映像位なら隠せなくもないわよ？」

「あまりにも不自然だと問題が出るぞ。

不鮮明だろうが何らかの映像を残す方が、無いより疑われにくい。まあ、あまりにも問題がある姿しか残らなかつたら、隠してくれ」

「ふふ、解ったわ。

あまり納得していない様だけれど、よろしくねクロノ？」

「はあ……艦長がそう判断するなら」

リンデイ・ハラオウンは完全に笑ってるけど、クロノ・ハラオウンは物凄く渋い顔をしてる。

執務官としての矜持と、上司で母の指示との板挟み。

完全には納得出来ない模様。

「さて、そろそろ動くぞ。

時の庭園が消失して、ジュエルシード事件は終わりだ」

「いや……資料は集めなくていいのか？」

司法取引で使うと言っていたが……」

「ああ、それはもう終わっている」

「なんだって!？」

まったく、どれだけ規格外なんだ……」

ΩΩΩへナンダッテ？

KYとか呼ばれてるクロノ・ハラオウンは、こんな所で不意を突いてくるから困る。

「夜天の妹だと言っただろう。技術が常軌を逸している事ぐらいはそろそろ慣れるべきだぞ、執務官殿？」

無印編41話 名前を

アースラに戻ってきたお姉様達。

まずやるべきは……というか、戻りながら行ったのは、時の庭園を消失させる事。

プレシア・テストロッサやアリシア・テストロッサを含む全員で命からがら脱出してきた風に演出しながら、置いてきた3個のジュエルシードを遠隔操作。時の庭園は綺麗さっぱり無くなった。

用事と改変が終わった18個のジュエルシードは、きっちり封印してクロノ・ハラオウンの下へ。

これで、クローンが時の庭園と共に虚数空間に落ち、プレシア・テストロッサとアリシア・テストロッサがリンディ・ハラオウン達と脱出したと言う状況証拠が完成。ついでに、若返りと蘇生をやらかしたロストロギアのような何かが現れたとされる現場の調査も不可能になった。

次に、プレシア・テストロッサとアリシア・テストロッサの情報偽装と部屋の確保、加えて別荘の設置と起動。現在、2人は医務室で手当てを受けてる事になってる。

重要参考人として割り当てが護送室となったのは仕方ないものの、全く罪の無いアリシア・テストロッサの存在もある。普通のベッドも搬入するようで、扱いは悪くない模様。

フェイト・テストロッサとアルフは、別の護送室。自由に歩くことは許されてない。

だけど完全な隔離ではなく、偉い人の許可と局員の随伴があれば、アースラの中を探索したり、母であるプレシア・テストロッサに会いに行ったりしてもよいとの事。手錠なども無く、比較的扱いは良い。会いに行くのはしばらく許可が出ないだけで。

その後、お姉様はプレシア・テストロッサに撃退された武装局員の治療に協力。

主要メンバーは、大きな怪我をしていない。クロノ・ハラオウンもそうなので、包帯の蝶結びは無かった。残念。

ある程度回復したところで、お姉様と高町なのはの2人がフェイト・テスタロッサに会いに行く事に。

立ち会いは、リンディ・ハラウン。

不安なせいかわ、フェイト・テスタロッサがずっとそわそわしてるらしい。

「ようやく、本当の自分として母親と向き合えるかもしれないんだ。不安は解るがな」

「まだ甘えたい年頃なもの。仕方ないわ」

護送室へ向かう通路を、3人はゆつくりと歩いている。

お姉様とリンディ・ハラウンは、いつも通り。

急いでいない理由は、

「うー……な、なんて声を掛ければいいんだろう……」

何故かテンパってる高町なのにはある。

頑張つてと言って送り出した以上、その結果を聞かないといけない。

友達になりたいと言った返事も聞きたい。

でも、自分からは聞き辛い。

そんな感じでぐるぐるしてる。

「少し落ち着け。

まずは私が話をするから、その間に、一番話したい事は何かを考えておけばいい。

それが決まれば、後はどうとでもなるさ」

「う、うん……うー、でも……」

まだ心の準備が出来ていないせいかわ、それとも会えない時間という焦らしが無いせいかわ。

たいへん、このままだと百合の花が咲かない、的なの。

「やれやれ、アリサに平手打ちして啖呵を切った6歳児と同一人物とは思えないな」

「にや!? ど、どうしてそれを!？」

「これも原作知識だ。アリサやすずかと友人になる切っ掛けになった出来事だろうか？」

なに、それが悪いとは言わん。実際にアリサやすすかとは親友になっているしな。

それでも、その度胸は何処へ行つたとは聞きたいぞ？」

「う……あ、あの時は必死だったし！」

むしろ、今の反論も結構必死な感じが。

もしかして、土壇場だけに強い？

「その必死さで何を話したいか考えると、いい案が出るかもしれないぞ？」

もう着いたから、とりあえず深呼吸、続いて深呼吸だ。少し落ち着けよ？

フェイトはただでさえ精神的に不安定なんだ。会いに来た相手まで動揺していたら、余計不安にさせるからな」

「う、うん……」

高町なのはが少し落ち着くのを待つて、3人は部屋の中へ。

その瞬間、うろろうと歩き回っていたフェイト・テスタロッサの動きが止まった。

「さつきぶり、だな。」

状況を知らせに来たんだが、落ち着けないか？」

「うん……母さんは？」

「念のため、アリシアと一緒にちよつとした治療や検査中だ。」

言った通り少しばかり見違える予定だが、恐らく問題ないだろう」

「えっと、見違えるのはいい方向に？ それとも……」

「いい方向だから心配するな。」

そこの犬耳、あからさまに残念そうな顔をするな」

「だって、フェイトにあんなことをしてた女なんかさあ」

どう見てもアルフは不満そう。

きつと、フェイト・テスタロッサを苛めた人、という認識が強いせい。

「ああ、アレは本人の本意じゃないかもしれん。」

体内に精神操作するような魔導具が埋め込まれていたから、その影響の可能性があるんだ。それも併せて調べているから……リンディ、

プレシアに会えるのはいつ頃になりそうだ?」

「そうね、検査や事情聴取の経過次第だけれど、早ければ数日中に許可を出せるかしらね。」

時間がかかったとしても、何か月もかかる事は無いんじゃないかしら?」

「らしいぞ。」

というわけだから、改めてプレシアを見てやってくれ」

「うん。でも、母さんはどうしてこんな事を……」

フェイト・テストアロツサは少しほっとしたせいか、ある意味余計な事にまで気が回っちゃった。

詳しくは説明し辛い内容。

「そうだな……娘を喪った母の弱さに付け込まれたから、だろうな。」

これ以上は、しばらく待ってからプレシア自身に聞いた方がいい。家族でない私達がお前に話す事でもないだろう」

「そっか……うん、そうだね」

フェイト・テストアロツサは力強く頷いてる。

これだけで納得してくれてよかった。

「私からはこれくらいだな。リンディは何かあるか?」

「私から伝える事はこれからの予定くらいだったし、それもほとんど言われちゃったわ。」

追加で言わなくちゃいけないのは……そうね、フェイトさんとアルフさんの扱いは、まだ決まっていけないという事は言っておくべきかしら。つまり、現時点では重要参考人であって、犯罪者としては扱わないという事ね。」

だけど、フェイトさん達のお家って、時の庭園よね?」

残念な事に虚数空間に落ちてしまったから、帰る場所が無くなっていくわ。だから、重要参考人の保護と言う形で身柄を預かる事になるわね。」

何か聞きたい事はある?」

「いえ、大丈夫です」

「強い子ね。そういうわけだけど、犯罪者一步手前でもあるから、

ちよつと不自由なことくらいは我慢してね。

あとは、なのはちゃんね。何か話したい事はあるかしら？」

「う……はい。」

「……………えへ」

フェイト・テスタロッサを見つめる高町なのはは、苦笑い。

その様子をちよつと不思議そうに見つめるフェイト・テスタロッサ。

「……………何だかいっぱい話したい事あったのに。」

変だね。フェイトちゃんの顔を見たら、忘れちゃった」

「私は……………そうだね。私も、うまく言葉に出来ないよ。」

「ここに来てから色んなことがあり過ぎて。」

でも、ごめん」

「へ？ 謝られる事なんてあつたっけ？」

「こんな事件が無ければ、危険な目にあわずにいたはずだから。」

悪いのは、きつと母さんの娘になれていなかった、母さんを止められなかった私だから。

だから、ごめん。怪我させたり、危険な事に巻き込んだりして」

「ううん、大丈夫。この事件が無かったら、フェイトちゃんとも会えなかったし。」

「そうだ、私が友達になりたいって言った事、覚えてる？」

「……………うん。覚えてる。」

でも、私はどうしていいか分からない。それに、きつと私にそんな資格は無いから」

俯いちゃった。

原作よりだいぶ消極的？

でも、友達になりたい気持ちが無いわけではなさそう。

「大丈夫。資格なんて、友達になりたいって思ったらじゅうぶんあるよ。」

友達になるのも、凄く簡単。

名前を呼んで。

初めは、それだけでいいの。きみとかあなたとか、そういうのじや

なくて。

ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手の名前を呼ぶの。

私、高町なのは。なのはだよ」

「なのは……」

「うん、そう！」

恐る恐る名前を呼ぶフェイト・テストロッサ。

対照的に、満面の笑みの高町なのは。

笑顔ついでに、手も握っちゃってる。

「なのは……きみの手は、温かいね。」

どうすれば友達らしくなるのか解らないけど、これからよろしく、
でいいのかな……?」

「うん、うんうん！」

高町なのはは満面の笑みのまま頷き続けてるけど、フェイト・テスト
ロッサはちよつと迷った感じでお姉様やリンディ・ハラウンを見る。
てる。

きつと、立場を気にしてる。

「問題ないはずだぞ。気にせずに友達を始めればいい。」

家族を大事にするなどは言わん。だが、家族以外に友人がいる事も
大切だからな。

将来的には、その地球に住むようになるかもしれないぞ？」

「そうね、少なくとも一時的には住むことになるでしょうし、問題ない
と思うわ」

リンディ・ハラウンの太鼓判も出た。

少なくとも、闇の書に関しての協力態勢は間違いなく維持する意図
があるはず。

「うん、わかった。」

名前を聞いてもいい？」

フェイト・テストロッサの視線は、お姉様に向いてる。

自己紹介とかはしてない。

呼ばれてる名は聞いていても、本人から聞こうとする姿勢は好感。
お姉様とも友達になりたがってる？

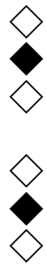
高町なのはがフラれた……というより、きっと母の生存の影響。母という精神的な柱を取り戻した以上、高町なのはに継る必要が無い。

「私の名か？」

私はエヴァンジュだ。エヴァと呼ぶ者も多いな。

外見年齢は近いし、堅苦しいのは窮屈だ。フェイトも気軽にそう呼べばいい」

「うん。わかった、エヴァ」



その後しばらく、フェイト・テストロッサやアルフとお話。

プレシア・テストロッサの事や、色々役に立てなかった事で落ち込み気味のアルフを慰めたり。

自由に出歩く事は出来ないものの、誰かに来てもらう分にはさほど問題無い事を聞き、別の意味でもそわそわし始めたフェイト・テストロッサを改めて落ち着かせたり。

ある程度打ち解けたところで部屋を出て、少し遅めの夕食を食べた後で各自部屋に戻った。

「さてと、状況の確認だ。

時の庭園の状態は？」

問題なく別荘への転送に成功。

偽装の為の崩壊以上の破損は無い。修復を兼ねて大改修を計画中。

チクアープからも駆動炉の心臓部となっていたロストロギアを回収済み。駆動炉の再稼働も問題無く成功して、今は衛星軌道に乗せてある。

ジュエルシード3個、シリアル3、14、20も確保。本格的な調査及び改造に着手。

シリアル3は、イマジンブレイカーの調査と再現に挑戦。

シリアル14は、成瀬カイゼに対応。転生特典の構造解明に挑戦。

シリアル20は、間宮萬太に対応。性格改変の実態解明に挑戦。

出来れば東渚に対応するシリアル10が良かったけど、それは高町なのはが確保したもの。ロストさせてしまおうと詳細な経緯の提出する際に矛盾が出るから、シリアル3で妥協。

当面は表に出せない切り札だけど、お姉様の全力より先に切る手札の確保は大事。

「あとは、ミッド式の魔導炉の情報でも仕入れられればいいんだが、もう少し先になるな。

プレシアの知識を貰えばいいんだが、剥奪は問題が大きいし……」

恐らく、一度本局に移動する。

それまでに魔導炉を製造しうる技術を全て聞くのは困難と予想。

時間加速型の別荘を使えばプレシア・テスタロッサの時間は確保出来るけど、お姉様や私達が入れないし、短期間で済んだ理由も説明出来ない。

魂を剥奪して知識を奪うのは、殺さない前提であれば従者か眷属にする必要がある。どちらも不老不死化する上に、魔導師として残すのであれば眷属1択。

付与する属性を従属から親愛に緩和した剥奪処理を作る作業は、未完了。

予想以上に厄介な構造。目処は立ってるけど、まだ術式として安定してない。

「……従属を親愛になんて、そんな改造をしていたのか？」

将来的には必要と予想。

永遠を共に在ろうとしてくれる友人を拒否してほしくない。

別荘の管理を考えると、眷属も必要になるだろうとも思える。

信仰に至る様な従属を望まない以上、他の手段が必要になる。

だけど、属性付与の削除は余りに困難。だから、親愛まで緩和出来ないかを試してる。

「そうか……」

多くの友人を求めたお姉様は、孤独が嫌いなはず。

共に在れる人を増やすには、この方法しかない判断。

アルハザード時代の様に敵対組織の人を強制的に配下に組み込む場合とは異なり、元々友人関係ならほとんど影響は無いはず。

多くの友人と言う意味では、異体同心の私達では力不足。全員で1人とも言える以上、増えても意味が無い。

孤独を求めるのは強さじゃない。他人と触れ合う事を怖がる弱さの場合もある。

「それも、私が求めた結果か。」

……苦勞を掛けるな」

私達は、お姉様の役に立ちたい。

主様が言うには、イレギュラーな感情。

意図的にこう作られたわけじゃない。これが、私達的意思。

とりあえず、今はプレシア・テスタロッサが持つ知識の話。

現状では、時間が足りないと言う結論。

「そうだな。急ぐ話ではないし、魔法関連はプレシアと普通に会えるようになってから相談する事にしよう。」

それと、何だか随分と時間が経った気がするが……今日の戦闘や封印で、転生者連中はどうなった？」

セツナ・チェブルーと成瀬カイゼは、無理せず地道に成長。大きな怪我也無く、問題ない。

チクアーブも、全く問題なし。デバイスの制限解除は大型や中型相手に数回行ってんだけど、使うデバイスを切り替えて1機当たり最大2回に抑えていたから、大きな損傷もない。自動修復で回復可能な範囲。

シリアル1とシリアル3は、成瀬カイゼが殺した2人に対応。全く影響なし。

シリアル4、対応は杉並英春。相変わらず生活に支障が出る能力水準で、元々原作知識を持っていた。

恐らく制限解除の効果として、事前に申請して大人が付き添う場合に限り外出が可能になった。人を見下す態度に改善が見られないけど、あまりにしつこいため匙を投げられた模様。

今後、何らかの形で接触を図る可能性が濃厚。

シリアル6、対応は夜月ツバサ。

現時点で特に変わった様子は無い。人間不信は変わらず、原作に関する言動も皆無のまま。

制限解除に伴い、接触が可能になった程度と予想。

シリアル11、対応は上羽天牙。

病弱体質に変化があった様には見えないけど、父親から、お前もこうあるべきだとボディビルトロフィーを2個貰った。デザインは、マツチヨがポーズを決めた感じ。

解析が出来なかった、魔導具かデバイスと思われるもの。明らかに転生特典。今後、魔法に目覚める可能性あり。

受け取った際、何故か新聞紙に包まれてた。それに樹木事件の記事があり、ようやく原作開始済みだと気付いた模様。

シリアル15、対応は金子狗太。

幽閉状態は変わらないけど、原作娘ハーレムはどうなったと大声で叫んでた。

原作に関する記憶が戻った事は确实。

雌犬にする夢が、とかも叫んでた。犬が多いのは、この願望が歪んで叶った可能性も。

「そうか……1人は救いようがないな。そのまま幽閉されているのが一番平和か。

杉並とかいうのも、態度を見る限りではかなり悪質の様だ。

上羽の性格については？」

気弱、引つ込み思案、割と無欲。

問題行動を起こすとすれば、足を引つ張る方向。積極的に関わってくるとは考えにくい。

「そうか。それなら、変に魔法を使おうとしない限りは、放置で良さそうか。それなら、変に魔法を使おうとしない限りは、放置で良さそうか。

この4人で確認済みの特殊な能力は金の生成くらいだし……踏み台系以外の未接触の連中も大人しそうだな。おかしな行動をしない限り、警戒レベルを下げてても問題無さそうだな」

他の能力は分かりにくいのか、使おうとしない可能性が高い。

介入のためにどう動くか様子を見ておく程度で、特に問題は無さそう。



そんな風に考えていた時期が、私達にもありました。深夜に、上羽天牙がデバイスを2機起動。

1つは、インテリジェントデバイス。自称の名前はサム。

起動時の形は黒いリストバンド。見た目の素材は革で、起動した方が小さくなる。

喋りは鬱陶しい。合間合間に、ふん！ とか、むん！ とか言ってる。

もう1つは、ユニゾンデバイス。自称の名前はアドン。

ユニゾンすると、黒ブリーフで全身艶々ワックスの半裸状態に。

病弱なもやし体型には笑えるほど似合わない上に、融合事故寸前の不安定さ。

こちら喋りは似た感じ。

会話を聞いた限りでは、上羽天牙の転生特典は空戦魔導師の素質、ユニゾンデバイス、インテリジェントデバイスの3つ。

だけど、2機のデバイスは陸戦用で近接特化。基本性能はかなり高そうだけど、飛行魔法や長距離攻撃魔法は使用出来ないとの事。

陸戦魔導師としては凡才で魔力量はそこそこ、具体的には武装局員の平均くらいとデバイスに判断されて、明らかに落ち込んだ。ご愁傷様としか言いようがない。

「何というか……踏み台にすらなれない雑魚か？」

それとも、倒して嬉しいはぐれメダルのな何かなのか？」

一部の人のとって、アイテムドロップがおいしいかもしれない敵ではありそう。

お姉様にとっては？

黒ビキニで全身艶々ワックスのお姉様を……想像しない。

全力で却下。

殺気コワイ。

「それでいい。やれやれ、魔法に目覚めてもこの有様ではな。

おかしな事をするようなら対処するが、当面はそっとしておくか。今接触しても、惨めにするだけだろう」

あれ？ 事態が変わらなかつた。

そんなふうに考えていればよかつたらしい。

◆◆◆

夜が明け、朝になった。

ジユエルシード事件も無事に解決に向けて動きつつある。

テストタロツサ家の人達については、お姉様の案を中心に調整中の模様。

お姉様の情報操作がデバイスの記録にまで及んでいた事に驚いた。

プレシア・テストタロツサのクローンがぶつ壊れ高笑いキャラになっていたり、その雷撃でS2U……クロノ・ハラオウンのデバイスが一時的な機能停止に陥ったり、リンディ・ハラオウンが最後まで次元震を抑え込んだりしていた「記録」を見た時のハラオウン親子の顔は面白かつた。証拠用の記録だから、無視も出来ない。

S2Uの機能停止後、つまり記録が残せなくなってから本物のプレシア・テストタロツサが参戦した事にする模様。そうするしか方法が無いとも言おう。

お姉様は、今日も怪我人の治療の手伝い。帰ってきた変態に、危うく幼女天使の二つ名で呼ばれそうになった。

お姉様は全力で拒否。壁を壊して怒られた。

そうこうしているうちに夕方になり、アースラに学校帰りの主がやってきた。ちなみに着てるのは制服のセーラー服。

翠屋と高町なのはを經由して、お姉様に会いたい意思を直接アースラに伝えてた。

「要するに、転生者対策の相談か」

「そう。これで、全員の制限が解除になったはず。」

「ジュエルシードの事件も終わりつつある以上、そろそろどう扱うか決めるべき」

「そうだな。真つ当な連中とは友好的に接するとしても、自称オリ主な踏み台共をどうするか、だな」

「事後を考えないのであれば、捕らえて実験材料。転生特典の解明の役に立つかもしれない。」

「日本という環境を考えると、全員を行方不明にするのは余計な波風が立つ。」

「顔写真が公開されたら、友好的な転生者達に何かあった事がばれる。」

「転生者達やアースラに疑われるのは、間違いなくお姉様。」

「問題を起こさずに短期間で全員を処分する事は難しい。」

「能力の封印が可能ならそれが一番だが……ニコポやナデポ、それに王の財宝やら無限の剣製やらか？　これが結界で何とかなると思えん。」

「ある種のレアスキル扱いなのだろうが、原理が分からんからな」

「アルハザードの技術でも？」

「そもそも、私や夜天の無限転生も原理が解明されていない術式だ。結果明瞭原理不明瞭なものは割とあるぞ。」

「原理が特殊だから他人に扱えない能力や、天才が感覚で行使する特殊な魔法なんかレアスキルと呼ばれていたんだ。恐らく、この定義は今でもそう変わらんだろう。」

「今だと前者に戦闘機人の インヒューレントスキル I S も含まれるだろうし、魔法以外の何かという点を考えると、特殊な転生特典はこれに近いのだろうな」

「つまり、原理が不明だから防ぐ方法も不明？」

「そうなる。一般的な魔法に近い物は結界やら障壁やらで防げる場合も多いだろうが……」

「例えばセインが使う ディープダイバー 無機物潜行は、結界やらで移動範囲を制限する

事は出来ると思うが、潜らせないよう本人の能力を制限する方法は解らん。

シヤツハの様に魔力を使うならリンカーコアの封印やらで可能だろうが……魔力とは別のエネルギーを使っているらしいから確実に言えんだろうな」

「つまり、魔法的に発動するものかが問題で、魔法であれば妨害出来るという事？」

「そうなる。セツナが使う気や戦闘機人の能力の様な、魔法ではない何か」なら、今の所は妨害方法も解らん。少なくとも気での身体強化や虚空瞬動もどきはA M Fの影響下でも劣化無しで出来る様だから、魔力でない何かがあるという事だけはほぼ確実だ」

現状のニコポやナデポを観測する限り、魔力が動いている様子はあまり無い。効果が無いため、発動していないからなのかが分からない。

王の財宝、無限の剣製、金への変換は、確実に魔力を使用。消費量も大きい。

真鶴亜美の探知や治療も魔力を使用する。但し、消費魔力量に比べて効果が高い。

長宗我部千晴は魔力的な調査が出来ないから参考にならない。魔力を使ってこうする方法は知らない。

成瀬カイゼの転生者探知は、常時発動？ 意識を向けてもらっても、特に魔力に変動が無い。

黒羽早苗のおサルは、何かも不明。

結論、モノによる。

「現状では、あまり有効な情報がない？」

「そうなる。そもそも、どうやって魔力を持つ様になったのかが一番の問題だな。元々魔力があったと考えるには、転生者全員が魔力持ちと言うのはおかしすぎる。

特典の封印や破壊の研究はしているが……魔力に関する特典が破壊出来たとして、その時はリンカーコアを剥奪した時の様に死ぬのか、魔法が使えなくなるのか、成長の余地が無くなるだけなのか。

脅威を排除する目的といっても、殺す気が無いのに殺してしまうのは後味が悪い」

ぴんぽーん。

初めて呼び鈴の音を聞いた気がする。

とつても日本的な音は、使用者に配慮してのもの？

お姉様が出ると、そこにいたのはセツナ・チェブル。

「ん、どうした？」

「そろそろ時間だろうから呼んできてほしいって、リンデイさんに頼まれたんです」

「ああ、少し早いけど、確かにもうすぐだな。」

「そうだな……セツナ、少しアコノと話をしてみるか？」

「2人で話す機会もあまりなかったしな」

「そうですね。一度ゆっくりと話をしてみます」

「というわけだから、少し出てくる。アコノもこれでいいか？」

「大丈夫」

無印編42話 見えない傷の為に

もうすぐ、プレシア・テスタロッサとアリシア・テスタロッサが別荘から戻ってくる時間。

お姉様は、リンディ・ハラオウンと一緒に護送室へ。

何故か変態ロリコンもいる。

いなくていいのに。

「全く……お前が来る必要はないと言っているだろう」

「はっはっは、いいじゃないですか。」

あのプレシアがどうなっているか、楽しみなのですよ」

お姉様の表情が、とても渋い。

変態ロリコンは笑ってる。とても鬱陶しい。

「どうせ、本命はアリシアだろう？」

「幼女は至宝です。当然じゃないですか」

「失せろこの変態ロリコン！」

緊張感のない会話をしつつ変態ロリコンを床に叩きつけながら、護送室へ到着。

今日は変態ロリコンが退散しない。しつこく憑いてくる。

まだプレシア・テスタロッサとアリシア・テスタロッサの姿は無い。

別荘の稼働はあと数分。もうすぐ、嫌でも戻ってくる。

「さてと、菓子でも食べて待っているか。」

あまり時間も無いだろうがな」

そう言いながらも、ポンポンとお菓子を出すお姉様。

「まったく、便利な魔法ね。デバイスに格納しているわけではないのでしょうか？」

「ただの転移魔法だ。質量も体積も小さい分、簡単なはずだぞ？」

第一、デバイスの格納領域を使えば似たようなことが出来るから、特別便利とも言えんだらうに」

「そう言えるのは、それなりに優秀な魔導師だけですよ。」

小さいからこそ精度はシビアですし、格納領域を使う場合でもそれだけの領域を維持する必要がありますからね」

「そんなものか？」

そう言いながら、呆れているリンディ・ハラウンと変態ポリコンを無視してお姉様はお菓子に手を伸ばす。

そして、それを食べようとした時、別荘が光った。

「ん？ 戻つてき……た……」

「おや、これは……」

「あら、どうかしたのかしら？」

アリシア・テスタロッサは子供用の車椅子で寝てる。これはいい。大きく変わったのは、顔色と目付きと雰囲気。

血色はだいぶ良くなってる。想定通り。

フェイト・テスタロッサが闇の書に見せられた夢のプレシア・テスタロッサより、ちよつときりつとした感じ。追い詰められた怖さとかが無くなってるから、治療前よりだいぶ優しい感じにはなってる。

プレシア・テスタロッサが、主様とそっくりになってる。

髪の長さや服装は違うけど、本当に良く似てる。

(……遺伝子調査。リーナとの比較………やってくれ)

まさか？

プレシア・テスタロッサより遺伝子情報の取得。

主様と比較開始。

相違率……

相違点は……

……無い………？

「……プレシア！ 貴様にはここで死んでもらうぞ!!」

黒龍セツトアップ！ フルロードカートリッジ、バーストモード

!!」

「な、何を!？」

「やめなさいエヴァンジュ！」

杖を向ける相手を間違つてはいけません！」

「エヴァさん、駄目よ！」

貴女の目指す事に、誰かを殺す必要なんてないでしょう！」

——情報記録制御命令の更新に失敗——

——第2位のチャチャゼロに状況の確認及び制御命令更新を要請
します——

「黙れ黙れ黙れ!!」

勝手に作られた人形を放っておけるか!!」

「人形、ですって!?!」

「落ち着けゴ主人!

今は喧嘩売る時じゃネー!!」

クソツ、更新失敗なんて初めてだから慌てて来てみたケド、こりや
ヤバーな。ゴ主人大暴走じゃねーカ。腕に傷を作るのも忘れてやが
るシ、イモート達まで思考停止フリーズしやがッテ。

とりあえず記録を……って、主様絡みかヨ!?! 頼ムから、殴る程度
で止まってくれヨ!

「私を殴るとはいいい度胸だチャチャゼロ!!」

「落ち着けつつってんだヨ!

こんな事したってアイツが喜ぶわけねーダロ!!」

リンディは手を出しあぐねてやがるシ、焦ってる変態ろりこんはアテに出来
そうにねーナ。

プレシアは……顔面蒼白だナ。頼むからそのまま止まってくれ、
余計な事言うんじゃねーゾ。

となると、頼みの綱は主だけかヨ。頼ムぜチャチャマル。早いとこ
主を連れてきてクレ。

「ならば犯人は誰だ! スカリエツティか! 管理局の犯罪者共か!

腐れ脳味噌共か!?

スカリエツティがプロジェクトF・A・T・Eの基礎を作っただ
と? プレシアがクローン技術を完成させただと? コレのどこを
見ればそれを信じられる!

ああ、私も迂闊だった! 確かにスカリエツティがアルハザードの
技術で作られたのは知っていたさ! だからといってプレシアまで
そうだと誰が思うんだ!!」

「落ち着けゴ主人、ショートし過ぎダ!

今重要なのはそんな事じゃねーダロ!」

やっぱ駄目ダ、完全に逆上してるぜ。

マダ暴れてねーだけマシだけド、いつ手が出るかわかんねーナ。いくら魔力抑制中でマシつつつても、補助リンカーコア装置じゃバーストモードに瞬間出力で勝てねーんだヨ。

ろりこん 変態が間に入ってるみてーだケド、アレがどれくらい耐えれっかわかんねーシ。状況を理解できてねーリンデイとプレシアは生かしかねーと後が面倒だらろーし、勘弁してクレ。

「アルハザードの隠蔽が目的か!? 腐れ脳味噌の自己満足か!?

だからと言ってこれは何だ!!

リーナの死を穢すな! 冒瀆するな!!

人形に人形を作らせ「この大馬鹿ゴ主人、落ち着きやがレ!!」チャチャゼロ、貴様ツ!」

ヤベ、地雷踏み抜いタ。

ヘイト、レッドゾーンだナ。タゲがコツチ向いたただけでもマシカ?

「エヴァ、大暴走?」

「マスター!?!」

「エヴァさん、どうしました!?!」

オー、やっつと援軍だぜ。

とりあえず、ゴ主人は主に任せテ、こつから引きはがさにやどーにもなりそーにねーナ。

「主とチャチャマルとセツナか。

ワリーけど、ゴ主人を落ち着かせてくれヤ」

「わかった。こつちの説明はよろしく」

「マスター、どうぞこちらへ」

「フウ……ヤレヤレだぜ」

(イモート達も、ゴ主人と落ち着いてきナ。

コツチの收拾ぐらいはつけてヤル)

お願い。

お姉様が暴走しなければ、私達が暴走してた。

一緒に落ち着いてくる。

(コツチの様子はゴ主人に伝えるんじやねーゾ?)

出来ればイモート達も見んナ。
気になるだろーケド、説明を聞いてちや落ち着けねーだろーしヨ
わかった。

こつちが落ち着いたら連絡を。

この場の記録制御権限をチャチャゼロ優位に変更。

後はよろしく。

情報切斷。

「これは困りましたね。早めに落ち着いてくれるといいのですが」
(チャチャゼロ、でいいのですね?)

ここの情報は、エヴァンジュに届きますか?)

(イヤ、今は記録もオレの制御下ダ。一応届かねーことになってル)

(そうですか、それは何よりです。)

説明は気になるでしょうが、それを聞いて暴走されては困りますか
らね)

ヤレヤレ、何とか五体満足で切り抜けられたカ。コレで一息つけっ
カ?

ゴ主人も主相手に暴れる事はねーだろーし、頼むからコノまま落ち
着いてくれヨ。

リンデイと変態ろりんの汗は……冷や汗だナ。リンデイは息も乱れてる
シ、困った顔で安堵のため息つてどーなんだろうナ。

プレシアは、立ってるのがやっとして感じだナ。ゴ主人の殺気直撃
でへたり込んでねーだけ大したもんだ。巻き添え喰らってたはずの
アリスアはまだ寝てっけど、コイツが一番利口じゃネ?

「てか、何でオメセツナが残ってるんだ。

一緒に行つてゴ主人を落ち着かせてくれヤ」

「いえ、何だか、こちらにいるべきだと勘が騒ぐんです。

経験的に、こんな時は勘に従った方が良いことが多いので」

マジカ。口で言ってるより、頑固そうだな?

納得させねー限り、動きそうにねーナ……ま、最悪斬ればイイカ。

「ソーカイ。ココで聞いた事は多分他言無用になるゾ。

変な事を口走りやがったラ、オレが斬ル。

「ヨケーな秘密を抱えたくないや帰んナ」

「分かりました。それだけ重要な話だと肝に銘じます」

「やれやれ、聞かないという選択肢は無いのですね」

「ネーみてーだナ。ホント、ヤレヤレだぜ。」

「変態じゃねーケド。諦めるしかねーカ？」

「ところで……今のは、私の事を言っていた、という認識でいいのね？」

「ンデ、コツチが再起動か。」

「プレシアは、ある程度納得させねーとナ。」

「アア、ソーだぜプレシア。」

「あんなこと言ってたけど、許してやってくれヤ。」

「ゴ主人にも色々事情つてのがあるンダ」

「ええ、現実には救ってもらっている以上、実際に手出しをされないのならいいのだけれど……」

「事情くらいは説明してもらえるかしら？」

「オ？ 説得自体は平和みてーだナ。」

「でもナー。事情……ゴ主人、ドコまで話していいんだよコレ。」

「こんなのはオレの管轄じゃねーのにヨ。」

「まあ、ナンだ。プレシアは、ゴ主人の、前の主のクローンってやつダ」
「そう……だから、人形、と言っていたのね……」

「チョット前まで、自分がフェイトを人形呼ばわりしてたからナア。」

「自分の事を柵に挙げられねーだろーし、コレについては言ってもいいダロ。」

「んで、ゴ主人は主様が死んだことに関して、トラウマってヤツを抱えてンダ。」

「まー、アレだ。少し前のプレシアが、アリシアのクローンを勝手に作られて、ソレを犯罪者共がいい様に使われてた事を知った時を想像してミナ。」

「ソレで、だいたい合ってると思うぜ？」

「……確かに、怒り狂っていたでしょうね」

「プレシアは、納得してくれそうダナ。」

頼むから、コレ以上突っ込んでくんなヨ？

「だけど、あの取り乱し方は異常よ。」

エヴァさんは随分と大きな傷を抱えているという事になるけれど……」

「普段の振舞いからは、想像出来ませんが……」

リンデイとセツナには黙ってほしいぜ。

困惑すんのは解るケド、オレだって余計な事を言うワケにいかねーんだヨ。

「ソノ辺は、踏み込まねー方がイイぜ？

オレだって、ゴ主人の傷を抉りたくねーんだ」

「そう。それなら、いくつか確認するわ。」

エヴァンジュが叫んでいたリーナというのが、以前の主の名前ね？」

ちっ、プレシアの追求かヨ。

気になったコトを放置しねーのは、研究者の性かネエ。

「あー、そーだナ。思いつきり言っちゃまったナア」

「その人物はアルハザードの研究者の頂点と言われたリーナ・ファ・ニピンで、エヴァンジュという名の彼女は、全ての魔法に精通し、空間魔法の祖とも呼ばれたアルハザードの最終兵器、という事で間違いないわね？」

オイオイ、どーすんだよコレ。

完璧に知られちゃってるじゃねーかヨ。

「アルハザードと共に虚数空間へ失われたはずの、究極の存在。」

そんなエヴァンジュがトラウマを抱えて生きているなんて……意外だわ」

アア、駄目だコリヤ。どー見ても確信してるぜ。

虚数空間にあるアルハザードの技術があれば蘇生出来る、つてのが現実的に思えるだけの知識持ちかヨ。破壊済みだし、虚数空間で魔法が使えねーって点を見逃すりゃ、だけどヨ。

……リンデイが提督の顔になっちゃったけど、ゴ主人も色々やつちまってるシ。こっから誤魔化すのは流石に無理だよナア。

「しゃーねーナ。こうなりや、ブツチャケてやんヨ。

ゴ主人についての対外的な立場は、ソレであつてル。

んで、ゴ主人は主様を、自分の手で殺してんだヨ」

「主を殺したですって？ 普通ならあり得ないわよ？」

プレシアは意外そうな顔してつけど、ゴ主人が魔導具つてのも把握してんの力？

人間と思つてんなら、あり得ねーとは言わねーよナア。

「そりやそーサ。ゴ主人だつて、やりたくて殺ったわけじゃねーヨ。

主様に命令されたんだ。アルハザードと一緒に虚数空間に落ちた後、この地のアルハザード人を全て殺せ、てナ」

「それで、アルハザード人である主も殺した、という事かしら？」

「イヤ、ゴ主人は主様を残してたんだぜ？」

主様が言つたんだ。まだ一人いる、てナ」

「それで、殺した……だけど、それだけであそこまで取り乱すとは思えないわ。

少なくとも、殺す事自体は納得したはずでしょう？

最終兵器と呼ばれていたのに、誰かを殺す事に抵抗があるとも思えないし……」

資料や呼び名だけで見りやソウ思えるだろーヨ。

でも、そりや実態じゃねーんだ。

「傍から見りやそーだけどヨ。

ゴ主人が自分の意思だけで殺したことは、一度もねーんだヨ。

全部、国やらの命令ト力襲われて反撃したトカ、ナンか理由があつての話ダ。そりや、やり過ぎたことはあつたケド、それだけダ。

ソレなのに、生真面目に全部背負いやがッタ。

んで、主様は死ぬ前に、ゴ主人に言つてんだヨ。

お前は道具で責任は使つた人間にあるから抱えんナ、お前はお前自身になれ、つてナ。

ゴ主人は、主様だけに持つて行かせない、もう他の何にもなれない、つて言つて泣いてたけどヨ。

主様の死体も利用されないように、念入りに焼いてたぜ。虚数空間

の中で誰も来れねーってのにヨ」

アン時は、マジで誰もゴ主人に声すらかけれねー雰囲気だったからナア。

勘弁してほしいぜ、全ク。

「そう。それだけの覚悟で殺したのに、クローンの私が現れた……なるほど、取り乱しもするわね」

ヤレヤレ、とりあえず納得してくれたみてーだナ。

けどな、プレシアよ。

「アンだけ暴言を吐いてた後で言うのは気が引けるけどヨ。

ゴ主人の心を守ってやってくれねーカ。

永遠にとは言わネー。側にいる間だけでイイ。

ゴ主人は、元々は戦いやら腹芸やら化かし合いやらに向く性格じゃねーんだ。

自分が守りたいものの為に、精一杯虚勢を張ってるダケなんだ。

主様と一緒に研究者の頂点とか言われてたのダツテ、研究に没頭して、戦争って現実から目を背けてた結果だったんだぜ。

アノ頃は、主様がいたから無意識にでも甘えられてたけどヨ。

今の主は守る対象になっちまってル。

オレ達は、ゴ主人の部下だ。オレ達に甘えるわけにいかねーんだ。

今じゃ、ゴ主人は頼られるだけなんだ。

前の主様の頼みト、今の主を守るって気持ちガ、今のゴ主人を支えてんだ。

ゴ主人、今の主が死を望んだら一緒に死ぬつもりだぜ？

自滅術式もそのまんまだ。オレのバグも直しちゃいねー。バグを直さなきゃ、今の主が死んだら二度と起きれねーかもしれねーのにヨ。

だけどよ、バグを直しちゃうと、ゴ主人は死ねねーんだ。

オレがバグのある状態に戻るのを拒否するのが解ってるから、直してくれねーんだ。

出来ねーわけじゃねーんだ。今の主に言われて、オレの滑舌はマシにしてるんだからナ。

笑えねーヨ。自分が死ぬために、今の主が最後と覚悟を決めちまってるんだぜ？

ゴ主人は、主様を母親みてーに思ってたんだ。
多分、今でもまだ縋ってる。

上に立てとは言えネー。せめて横に立って、ゴ主人が心を休められる相手になってやってクレ。

頼ム。このとーりダ」

話をさせた代償は、払ってもらおうぜ？

無印編43話 秘められた想い

「私からもお願いしますよ。」

エヴァンジュはリーナが居なくなつて、迷子の子供の様に不安なはずなんですよ。

エヴァンジュの主だったリーナは、エヴァンジュを実の子の様に可愛がっていましたが。製作者と魔導具という間柄ですが、親子と呼んだ方が良い関係だったのですよ。

それこそ、アルハザードの頂点に立たせようと画策する程にね。実際、本人が了承したらそうなるまで御膳立てしたそうですよ？

権力に屈さずに済むよう、結構高位の爵位も付けていましたし」

「オイ、何でテメーがそんな事を知つてんだヨ。」

てか、アノ騒動は主様のせいカヨ。何で主様がそんな事をするんだヨ」

そもそも、爵位も主様がそんな理由で手を回してたのかヨ。ゴ主人が研究室を持つ時の体裁を整える為かと思つてたんだがナ。

「おや、エヴァンジュとリーナ以外誰も知らないはずの別荘の存在を知っていた私が、他の事を知らないと思つていたのですか？

ちなみに、最高貴族院の議長が暴走したのは、リーナのアルハザードに対する最後の優しさだったようですね。エヴァンジュならアルハザードを良い方向に導けるかもしれない、という期待ですよ。

エヴァンジュ本人が拒否したので、アルハザードの頂点に立たせる話はお流れになりましたが」

マジか。確かに、コイツの最初の台詞は色々オカシかったシ、アノ頃には主様の様子もオカシくなってたけどヨ。

ソんな事を仕出かしてるなんて思わねーヨ。

「それにいつも、うちの子はこんなに可愛い、うちの子はこんなに優秀だと親馬鹿な話を聞かされていましたよ。」

おかげで私も幼女趣味を拗こじらせたのですが……まあ、それは置いておきましょう」

「色々とやってらんねーナ。」

そもそも、テメーが悪性の変態ろりこんになったのも主様が噛んでるのかヨ。

テカ、何でテメーが主様とそんな接点があんだヨ。世界を巡ってたんじゃねーの力？」

「私の最初の主も、リーナだったのですよ。」

同一人物という事ではありませんよ？ クローンです」

「ハア!? ンなこと聞いてねーゾ!!」

そりや、主様はクローン関連技術の権威だったケド、自分のクローンを作ったって話は無かつたはずだゾ!?

「現地人に紛れるために私や夜天の主は現地調達だと提出資料には書いていましたし、クローンを作ったのは極秘で、箝口令も敷かれていたようですからね。知らないのは当然でしょう。」

エヴァンジュ……曙天の製作を開始してからは一度も作っていませんし。

ああ、貴女達も、エヴァンジュには教えないで下さいね。恐らく、先ほど以上に取り乱しますので」

「え、ええ……光景は想像出来るわ……」

プレシアが呆然と頷いてっケド、オレも呆然としてーヨ。

リンディは戸惑ってるみてーだけど提督の顔のままだし、セツナは頷く事すら出来てねーシ。何でコーなっタ。

「それにしても、エヴァちゃんもうっかりさんですねぇ。」

私の主の情報がどこにもない上に、夜天と私が年長なのですから最初はエヴァンジュがいない状態で情報を処理していたという事ですし、最後まで一度も管制通信を使わずに私達の動きを制御していたのですから、何かあると気付いてもよさそうなものなのですが」

「情報を受け取るためにゴ主人を作ったんじゃねーの力!?!」

「いえいえ、文学の可能性については、夜天が最初に気付いたそうですよ。リーナが私の製造を決意したのはその後だそうですから、夜天が文学に興味を持たなければ、私やエヴァンジュは生まれなかったのでしょうかね」

「夜天や宵天にや、ゴ主人以外との次元世界間通信の能力なんてねー」

はずだゾ？

「どーやって情報を受け取るつもりだったんだヨ」

「きつと夜天の主もリーナのクローンで、最初はリーナ自身の通信だけで済ませるか、時折帰還して情報を納めるつもりだったのでしょう。確証はありませんが。」

夜天も私と同じ様に、アルハザードが滅んだ後もずっと情報を送っていたみたいですから、遺言も受け取ったのでしょうし」

「遺言だつテ？ オメーラにも残してたのかヨ」

「ゴ主人に言つてたアレ……じゃねーナ。」

「ゴ主人に関連した遺言ってことカ？」

「ええ。エヴァンジュの主がオリジナルのリーナで、クローンのリーナとは直接通信が出来たようですよ。少なくとも私の主だったリーナは通信をしていましたし、指示はこちらで行われていました。きつと、私達とエヴァンジュの間の管制通信の様なものだったのでしょう。」

「恐らくそれを使用して、最後の言葉を伝えてきたのですよ。」

「アルハザードは間もなく滅び、私も共に逝く。仕えるべき国や相手を失うお前はもはや自由だが、最後に頼みがある。私の最愛の子、エヴァンジュの助けになってやってほしい、とね」

「マジか。ゴ主人と主様の関係的には不自然じゃねーけどヨ、何で遺言なんダ？」

「死ぬよーな状況じゃねーダロ」

「自滅術式を仕込んでいたのでしょう。この言葉を最後に、クローンのリーナは崩壊しました。」

「もちろん、残骸もきちんと火葬しましたよ。更にクローンを作られるようなものは残しません」

「そりゃ当然の処理だろうが……その後はどーしてたんだヨ」

「その後に私に出来る事と言えば、各地の情報を集める事だけですからね。」

「それだけを必死にしていたとは言いませんが、各地を巡り、集めた情報をエヴァンジュに送っていたのですよ。」

恐らく、夜天もそれは同じだったのでしよう。

もつとも、私の送った情報は嫌われてしまいました。お近付きになるきっかけになればと言う打算もありましたが、偉大な人物や女傑と呼ばれる女性も元はこんな純粋な少女だと教えたかったですかね。

いやはや、集め方や纏め方を間違えてしまいました。趣味と実益を兼ねるのは難しいですね」

「てめーの趣味は聞いてねーヨ。けど、変態のところに主様のクローンがいたなんてコトは、ゴ主人に知られる訳にいかねーナ。

絶対に暴れるぜ?」

もしくは、二度と浮き上がらねー勢いで落ち込むか、だナ。主様を殺した後みてーにならなきゃいいんだガ。

ソコで呆けてるセツナは、ソノ辺分かってんの力?

「全面的に同意しますよ。何しろ、アルハザードの最終兵器ですからね。

被害がこの世界や管理局だけで済めば御の字でしょう。

次元断層クラスの攻撃も出来るんじゃないですか?」

「そりゃ出来るだろーヨ。ジュエルシードの元になったデバイスの作成者だぜ?」

アレを量産すりゃ、次元断層ナンか簡単に起こせるダロ。

ツーカー、今あるジュエルシードを暴走させりゃ充分じゃねーカ」

ドーセ所有者登録も済ませてんだ。管理局で保管するなラ、ソノ気になりやいつでも次元断層で管理局崩壊させられるだろーヨ。

「おお、怖いですね。

そんなエヴァンジュですが、私からプレシアさんに説明した方がいい事もあるので、この際ですから説明してしまいたいようか」

「これ以上、何があるというの……?」

おい、プレシアの怯える姿ってのはレアモノだナ。

けど、あんまり怯えさせてもナア。フォロー出来るのかネ?

「エヴァンジュや私、それにそのセツナさんは、別世界からの転生を経験しているのですよ。

先日の戦いで、傀儡兵相手にセツナさんと一緒に暴れていたネズミと少年もそうですね。

他にもいますが、現時点でプレシアさんが知っているのは、恐らくこの5人でしよう。

前世は、解りやすく言えばその世界にある地球に似てしまっ
ね。

ちようど海鳴市、ジュエルシードが散らばった辺りに住んでいたの
ですよ。

地名など違う点もあるのですが、地図上の場所は間違いなくその辺
りです」

「違う点も多いけどナ。本当にここは住んでいた日本なのかって困惑
してたぜ？」

ゴ主人は、似て非なる世界だって思ってるみてーだ」
「そうですね。それでも、基本は同じなのですよ。」

貴女達から見て、ここは平和な国だと思いませんか？

小さな国ですが、強盗殺人で1人死んだだけでニュースとして全国
紙に載るほどなんです。

そんな中で育った学生ですからね。年齢だけは成人……20歳を
超えていたそうですが、悪く言えば何も知らない子供に近い精神のま
まだとも言えるでしょう。

それがいきなり軍事国家の中枢に放り出されたのですから、精神的
な重圧は大きかったと思いますよ。しかも、目覚めて10日程で拠点
攻撃の任務ですからね。自分が何者かも決められないまま、数千人を
殺すことになってしまったのですよ。

現実逃避なのか、資料庫の整理と言う役目に没頭するエヴァンジュ
を連れ出すため、別の任務を与えてみてはどうかと言ったのは私です
が。

正直に言っつて、失敗したと思いましたがね」

「テメーが元凶カ!? アノ後ゴ主人落ち込んで大変だったんだぜ!!」

「ええ。リーナもだいたい悩んでいましたよ。」

普段は優しい女性なので、誇り高く苛烈な面がある事を過小に判断

してしまった私も甘かったのでしょうか。

そもそも、私は文化の調査が役目でしたからね。

戦場になりそうな場所は避けていましたし、滅びかけの国の文化を調べる際も、ギリギリには脱出していました。戦場は経験していませんよ。

夜天の蒐集方法は少々強引ですが、前線よりも研究機関や実力のあつた研究者を襲撃する事が多かったようですから、比較的少ない人数を相手にするだけだったはずですよ。

そのノリで薦めてしまったのですが……最初から殲滅任務だとは思いませんでした」

クツツ、ゴ主人に代わってコイツを殲滅したくなってきたぜ。

でも、話し方的にオレへの説明じゃねーナ。プレシアとリンデイの説明、か……変態なりの計算があつてやつてるみてーだシ、最後までつきあつてみる力。オレじゃいい案を思いつかねーヨ。

……そうすりゃ、立ち直りかけてるプレシアはともかく、提督の顔になつてるリンデイの事後処理もコイツに押し付けられるだろーしナ。

「最悪な流れじゃねーカ。

テカ、何デ主様がそんな任務にしたカ、理由くれーは聞いてるんだろーナ？」

「ええ。エヴァンジュの構造と役目を考えると、避けられない行為ではあつたのですよ。

全ての魔法に精通するためには、膨大な知識を収める容量や、尋常ではない行使力が必要です。その能力を確保し、強化するための材料が、リンカーコアや人の命だったのですよ。

今の闇の書の蒐集行為よりよほど物騒な話ですね。エヴァンジュがリンカーコアや命を奪つた相手は、必ず死ぬのですから。兵器としては正しいですし、これも最終兵器と呼ばれていた理由の1つだったのですよ」

コイツはイモート達の材料はともかく、魂を使ったコンピュータシステムも知つてやがるのか？

けど、魂についてはほかす方向か……まあ、妥当な判断かネ。ゴ主人が剥奪すると死ぬってのは事実だしヨ。

「人を殺すことに抵抗のあるエヴァンジュにそれを実行させるには、任務という形で強制するしかありませんでした。いつか通る道ではあったのですが……少なくとも、早すぎました。」

当時の倫理観は敗者からの搾取は当然だという風潮だったのですが、考えが日本人のままだったエヴァンジュは、命の重さを背負ってしまったのですよ。

役目である、アルハザードの資料庫の整理に没頭し。

唯一の楽しみとなった、魔法の練習や開発にのめりこむ。

君臨するために全てを消費していた軍国主義の国でしたから、今の日本の様な文化など、食も娯楽もありません。娯楽らしいものは魔獣と戦う闘技場やそこでの賭博くらいで、エヴァンジュはそれを娯楽として見る事すら出来ませんでした。他に逃げ場が無かったのですよ。従者達が増えてからは私の送った情報で料理等を楽しんでもらえていたようですが、その頃には手遅れだったのです」

「そういや、ゴ主人が笑うようになったのはソノ頃だった力？」

……主様、結構見てたんだナ。

「それと、元々日本人は権威や権力に弱いところがあるのですが、それ以上に、責任を負う事に慣れていないのですよ。」

強制的に与えられる任務。

背負った命に対する責任感。

リーナの期待も背負っていたでしょう。

魔導具として作られましたし、世間の常識とずれているのですから、周囲の人の理解ありません。

結果的に、エヴァンジュは心に壁を作りました」

壁つついか、敵味方の区別はかなり厳密にやっていたナア。

妹達やらに指示するためつつい理由もあつたけどヨ。

「一番内側にいるのは、リーナでしょう。今なら、きつと主のアコノちゃんでしょうね。」

何があつても自分を裏切らない、自分を助けてくれると信じる相手

です。主を持つ魔導具として調整された影響かもしれませんが、そんな相手には、守る為なら自分の何を犠牲にしても良いと思う程に依存してしまうのですよ。

従者達、チャチャゼロちゃんやチャチャちゃんには依存していないでしょうが……それでも、ここまで信じた相手に裏切られたら、エヴァンジュは心が壊れる可能性が高いです。リーナと別れた時に壊れなかったのは、未来を託されたという責任感でしょうね。

別れ方を相談された身としては複雑ですが、エヴァンジュがこうして無事でしたから、あれで良かったのだと思っっていますよ」

よくねーよ変態。別れなくて済むよーに手を打つのが最上だろーガ。

依存つてのは……解らなくもねーけどヨ。

「次に、仲の良い相手、仲間だと思える相手、自分が責任を持つべき相手です。

アルハザード時代だと、研究所の職員や、貴族達とやりあった時の協力者がそうでしょうか。一部の転生者やなのはちゃん、はやてちゃんもここに仲間入りしているでしょうね。

信用はしますが、別れがあると考えている相手です。最低でも不老になつてからでなければ、この先には進めないでしょう。死別と言う別れがあると分かっている事が理由ですから、人柄等は関係ありませんよ。

守りたい相手ではありませんが、手札として使う事は多々あります。より大切な人を護る為なら、切り捨てる事も躊躇わないでしょう。

相互利益なら最高。力を貸したり守ったりするから、友情の暖かさでも研究成果でも敵の情報でも、何でもいいから寄越せ。自覚の有無はともかく、結果から推測するとそんな感じだったようです」

デバイスを渡した転生者は、仲間意識みてーだけど間違いなくココだナ。

なのはは……微妙かもしれないねーな。協力関係って意味だと高町家の括りに含むだろーシ、プレシアの雷撃の時に見捨ててたはずだしナ。

「これ以外は、全てその他なのですよ。」

この中で区別があるとすれば、自分の明確な敵かどうか、利用価値があるかどうかです。

無意味に排除する事はありませんが、理由無く助ける事もありません。必要があつて、対外的に問題が無いように利用することが可能なら、当人の事情に関係なく駒として使うことを躊躇う理由が無いと言わんばかりの対応です。自分に関係のない相手だから、どうなつても知らないという事ですね。

そこまで、エヴァンジユは心を閉ざしてしまいました。必要以上に冷酷だったり無関心だったりするように見える事があるのは、これが原因です。

大切な人を守る事が最優先ですし、仲良くなる可能性や将来利用出来る可能性は考慮するようですから、結果的に手を出す事は稀な事が周囲にとっての救いでしょうね」

今だと、手を出してない転生者が典型的な例だな。

グレアムもココで敵っぽいけど、駒として使う可能性を考慮……してるナ、ウン。

「ああ、私は番外です。」

リーナという依存する存在が作った魔導具で、同じ転生者という仲間意識。変態^{ロリコン}という嫌悪感。

色々な感情が混じつて、どう扱つてよいのか解らないのでしょうか。からかっている時は過剰に反応されますが、そうでなければ割と普通に話してもらえますからね」

「テメー、自覚してたのかヨ」

概ね間違つてねーナ、ゴ主人の性格を予想以上に把握してやがる。

どーすんだよコイツ。ココまで内面を知られてるってゴ主人にバレたら、マジで焼かれるぜ？

「当然です。私も馬鹿ではありませんから、好かれていない事くらいは判ります。」

元々男性だという事は知っていましたし、子供の様な部分がある事もリーナから聞いていましたから、一緒にふざけられる遊び仲間を目

指してみたのですが……予想外に嫌悪されてしまっていましたね。男性であると同時に、女性的な部分も出てきているという事でしょうか？

もつとも、嫌われているだけでもないようですが。

エヴァンジュに管制特権を駆使されたら、私は既にこの世にいないか、少なくとも動けなくなっているでしょう。こうして何事も無く話をしていられるのは、何も手出しされていない証拠です」

「変なテンションでゴ主人を弄つてたのは、道化を演じてやがったのか？」

どう見ても変態何だガ……偽装変態なのかヨ。

演技だけでココまで出来るなら感心すっけド、どー見ても本物の変態だぜ？

「反応が可愛いので思わずという面も否定は出来ませんが、その意図もあつた事は確かです。

エヴァンジュと直接話したことはありませんでしたが、リーナにはエヴァンジュの事をよく相談されていましたからね。リーナにとつただけではなく、私にとつてもエヴァンジュは我が子の様なものなのですよ。

ですが、エヴァンジュの前世は成人男性です。仮にエヴァンジュが私を父や兄だと認める事があつても、素直に甘えてくれるとは思えません。ですから、私では癒してあげることが出来ないのですよ。からかつて感情を発散させる位が精一杯です。

初めからリーナと共に傍に居たのであれば少しは違ったかもしれません。後祭です。前世を引き摺らないためにあえて私の事を伝えない事に決めたのですが、こんな結果になるとは。

つくづく自分の無能さが嫌になりますよ」

「とりあえず真性の変態だつてのは理解シタ。けどよ、ゴ主人をどんな目で見てるんだヨ」

我が子とか言つてやがるし、幼女つて目だけじゃなさそうなんだよナア。

コレで幼女としか見てなかったら、全ての幼女が我が子とか言い始

めかねーシ。

「実際に子を持った経験は無いのですが、愛しい娘であり息子でもある、といった感じが近いと思いますよ。

というわけで、プレシア。

貴女には、内に籠って色々溜め込みやすい、エヴァンジュの心を癒してほしいのですよ。リーナのクローンですから最初の障害は大きいと思いますが、最も良い立場にいますからね。

いきなり心に踏み込むことは難しいでしょうが、エヴァンジュの感情を引き出す役目は私が引き受けます。その後のケアを行う形であれば、比較的近付きやすいでしょう」

「……私である必要があるのかしら？」

プレシアの怯えはまだ消えてねーナ。迂闊な事をすりや命に係わる役目だし、仕方ねーけどヨ。

「そうですね。他の方には難しいでしょう。

まず、管理局の関係者は駄目です。あの様子ですから、不用意に関われば殲滅されます。

アースラの人達は例外でしょうが、それでもエヴァンジュは裏を、管理局の関係者である事を怖がって、心を開いてくれない可能性があります。ります。

陰湿な貴族ともやり合ってきましたからね。警戒心も強いのですよ。

仲の良い転生者も駄目です。守る対象だと認識してしまっています。

主であるアコノちゃんも、守るという意味ではここに含めてもよいでしょう。主従の役目を考えても、最優先で守ると考えていると思いますよ。

なのはちゃんやはやてちゃんといった、地球の小さな魔導師達も当分は無理ですね。

精神的にも実力的にも未熟です。将来が楽しみな逸材ですが、現状では守る対象にしかありません。

地球の他の人達は、魔法を知識として知っていても、扱えません。

エヴァンジュという存在の本質を実感出来ない以上、心に踏み込ませてもらえないでしょう。

その点、貴女は違います。

アリシアちゃんを助けたという大きな貸しと相互利益の約束がある分、裏切りにくいと思われるでしょう。管理局との関係は悪いですから、その意味でも警戒されにくいです。

大魔導師と呼ばれる程の実力もありますし、エヴァンジュが色々やっていたからとはいえ、真実に辿り着くに足る頭脳……主に知識的な意味ですが、それも持っています。

あまり守らなくても大丈夫な、ある程度自分を打ち明けてよい仲間だと思われる可能性が高いのですよ」

「エヴァンジュは魔導具でしょう。今の主では力不足という事かしら？」

「アコノちゃんなら正面から受け止めることが出来ますし、受け入れて居場所になる事が出来るでしょう。ですが、1月前に魔法と出会った、主としての負荷で下半身が麻痺している少女ですからね。包み込んだ上で窘める事が出来るとは思えません。

エヴァンジュは意識がある期間的に言って40歳を超える程度ですから、精神的に60歳くらいのプレシアさんであれば、母に近い立ち位置でも問題無いはずですよ。外見もフェイトちゃんの母として問題ない程度の若返りに留められているようですし、こちらも問題ありません。

目的の為に手段を選ばない行動力は魔導具の影響も考えられますが、そうでなくても最終的な目的が娘との時間のためでしたし、問題にならないでしょう。むしろ、好ましく思われる可能性もあります」

「だけど、私は犯罪者よ？」

ちらつとリンディを見るガ……リンディは難しい顔をしたまま、動く様子はねーナ。

糾弾してプレシアつつー手札を失うわけにもいかねーシ、かといって犯罪者を放置も出来ねーってとこカ？

「過去の罪は、私やエヴァンジュ、それにアースラの方達も手伝ってく

れるでしょう。

何とかします。

仮に事後処理に失敗して全面戦争になっても、勝算は充分にあります。

むしろ、エヴァンジェルの心を癒せなければ、早々に殲滅に行ってしまうそうです。

管理局の本局やミッドチルダがいきなり消滅すれば、管理世界は大混乱になるでしょう。

エヴァンジェルの性格を考えて、次元断層や他の世界への影響が大きい攻撃は無いだろうと高を括ってはいけませんよ？ 他世界への影響なしで星系を消失させた事もある最終兵器の実力を甘く見てはいけません。その程度の事は、次元断層や闇の書に頼らなくても可能なですよ」

「そんな相手を……癒せと言うの？」

「オイオイ、脅し過ぎなんじゃねーノ？」

明らかにプレシアが逃げ腰になってんゾ。

「私としては、エヴァンジェルには望み通りの暮らしをしてほしいのですよ。」

エヴァンジェルは大切な人を助けようとしているだけで、本来は静かに過ごすことを望んでいます。私や夜天も含めて、戦乱を望む気持ちはありません。

しかし、大きな力は、様々な欲望を引き寄せます。

例えば、夜天の魔導書が闇の書と呼ばれるようになったのは、大昔のベルカでした。

守護騎士を追加され。

集めた力が主の物になるよう改変され。

過去の魔法や多くの記憶を封印され。

ベルカで作られたと偽られ。

ある男の出世欲や名誉欲の為に、存在意義を変えられてしまったのが悪夢の始まりです。

その後の歴史は、皆さんもある程度はご存じでしょう。

主が集められた力を扱い切れずに破壊を振り撒き、各地に大きな傷跡を残して悪名を轟かせるようになりました。

それでも夜天がエヴァンジュに情報を送り続けていたのは、エヴァンジュが比較的后期の古代ベルカ式魔法も使っている事から考えて間違いありません。そんな夜天を救ってやりたいのは、私もエヴァンジュと同じです」

「本気で、表に出る気は無い……?」

確かに、3冊のうち2冊は闇の中だったけれど」

「そうですね。闇の書がベルカで作られたとされたのは、私にとっては幸運とも言えました。

私は、夜天の改変に合わせて古代ベルカ製と偽る事にしたのですよ。

闇の書との関係をほのめかせば、勝手にそう思ってくれます。偽装は簡単でした。

夜天、宵天、曙天。

3冊の書の名は、アルハザード時代からほとんど表に出ていませんでしたからね。

エヴァンジュも、同じ方法を取ったようですね。

アースラで話を聞いていた限り、古代ベルカ製だと思われていましたし。

あとは、持っている力を隠すだけで十分なはずでした。力を抑える事は、そう難しくありません。

私は幻の書と呼ばれるくらい、何もしませんでした。

ただ静かに現れ、主を見守り、歴史や文化に触れ、静かに去る。

趣味で幼女や少女を主に選び、気に入ってもらうために子供が好む様な物語や音楽を多数記録したりはしましたが、私がやってきたのはその程度です。

もどかしい事もありましたし、力を貸したことも無かったわけではありませんが、そうやって過ごしてきたのですよ。

エヴァンジュは……リンディさんの方が詳しいでしょう?」

「そうね、技術についてはすっかり騙されていたわ。」

本来ならば命に係わる様な無茶苦茶なカートリッジシステムを、怪我までしながら使っていたけれど……21個のジュエルシードを制御する方がよほど難しそうなもの。

「実際、さつきは怪我せずに使っていたみたいだし」

ゴ主人、やっぱバレちゃったゾ。

でもまあ、21個の同時制御をやらかした時点でコイツラにはばれたも同然だし、広まらなきゃ別にいいだろ。リンディもどーしたもんか困ってるみてーだし。

「そうですね。あの涙目は本物だったと思いますが、怪我はあえて作っていたのでしょうか。」

ああ、いけません。貴女達に対する要求で伝えていないものがありました。

ここで話したことは、一切他言無用ですよ？

迂闊に話せば、次元世界から平穩は無くなります。アルハザードが過去に実在していた上に、その最終兵器が今も健在だなんて、現代の社会や管理局にとっては悪夢でしかないでしょう。

しかも、管理局に対するエヴァンジュの感情は最悪の状態です。これで闇の書が最悪の状態になったトドメが、今の最高評議会の人達による改変だと知ってしまったら……

おっと、また口が滑ってしまいました。こんなことを話している場合ではありませんね」

「ちよ、それはヤベーだろ！」

おっとうつかりとか、そんな軽い話じゃねーぞ変態！　ゴ主人の耳に入ったら、広域殲滅で管理局崩壊確実じゃねーかヨ!!」

2人の血の気が引いちまつてるじゃねーか、脅し過ぎダ！

「とまあ、こんな事情ですので、貴女達には是非協力して頂きたいのですよ。」

1つ目は、闇の書を夜天の魔導書本来の姿に戻す事。

2つ目は、エヴァンジュ達が安らかに暮らせる環境を作り、維持する事。

どちらも結果的に次元世界の平和に貢献する内容です。

いかがでしょう、協力して頂けませんか？」

無印編44話 歴史を見るモノ

「そ、その前提で、拒否出来るわけがないでしょう……」

下手を打てば、管理局どころか次元世界の終焉じゃない。娘達との時間どころか、平和な場所すら無くなってしまおうわ」

「そうね……明らかに不穏な単語も多かったけれど、内容が真実なら、協力は不要な騒乱を防ぐ事に繋がるわね。」

「だけど、どうやってそれが真実だと確認すればいいのかしら……それに、エヴァさんの存在を隠したまま環境を維持する方法なんて、完全な情報断絶以外あり得ないでしょうし……」

「プレシアは疑ってねーみてーだケド、リンデイが色々考えてんのはやっぱ提督の性かネ？ 裏付けが欲しいってのは解るけどヨ、そもそも無理ゲーだぜコレ。」

2人とも顔色は蒼白に近いシ、ヤバ過ぎる情報もあつたけど、やっぱ追い詰めすぎダ。

「リンデイ。知れば知るほど、深みにハマるぜ？」

「もう、後戻りできない程に嵌っているわ。」

エヴァさんはあまり知られたくないみたいだけれど、間に立つ私くらいは真実を知っておくべきだと思わない？」

「なるほど。確かにそうですね。」

それでは、もう少し後で出そうと思っていたのですが、私からプレシアさんへのプレゼントです。

ああ、リンデイさんも見て構いませんよ。むしろ、ぜひ見てください。恐らく、今後の行動に重要な内容ですので。

念のために書類でも用意したのですが、デバイスに転送した方が把握しやすいですか？」

偉く大量の書類を出してきやがったなオイ。

書類関係に慣れてるはずの提督と研究者の顔が、一瞬引き攣ってたゾ。

「オイ変態、重要な内容の書類って、何だヨ？」

「26年前の事件についての、詳細な資料ですよ。」

「この短期間で集めるのはなかなか苦労しました」

「何でテメーがそんなモンを集めてんだヨー！」

「私の役目は、文化の蒐集ですからね。そのためには、人の記憶を貰うのが一番早いでしょう？」

例えば音楽などは楽譜にしても細かいニュアンスは伝わりませんし、楽器の音色等は何らかの方法で録音するしかありませんからね。

ですから、私に魔力を蒐集する能力はありませんが、記憶を蒐集する能力はあるのですよ」

「方法じゃねーヨ、聞きてーのは理由ダー！」

それに、蒐集すんのは記憶じゃなくて魂だろーガ。しかも、奪われたヤツは痴呆になる可能性があるはずだぜ？ 敵なら容赦する必要なんてねーけどヨ。

ン？ むしろ、犯罪者連中ならボケた方が平和になんのか？

「私も、元気な夜天に会いたいですよ。理由など、それで充分でしょう。」

エヴァちゃんはプレシアさんを救って、夜天の治療を手伝ってもらったつもりだったようですからね。それに気付いた時点で、私に出来る事をやってみたのですよ。原作でもプレシアさんの過去の情報は抹消されている部分がありましたから、キナ臭い事この上ないでしょう？ 調べてみたら案の定、ですよ」

「そーかい。で、馬鹿はより馬鹿になってんの力？」

「そうですね。ですが、他人の人権を踏み躪ってきた人に、自分の人権を主張する権利はありませんよね？ そもそも、落ちてきた本に当たって怪我をした時に本を裁こうとするほど愉快な人達でもないでしょうし。」

ああ、ゼロちゃんもどうぞ。別に隠すつもりもありませんし」

「オレもちゃん付けかヨ。けど、ミッドなら人型になれて喋れりや人間扱いされそーなんだから、人外つてのは盾になんねーダロ。」

で、内容は……ゲ、管理局が関わってた証拠一式じゃねーカ」

ネズミが調べてきた情報より、遙かに詳細で広範囲だゾ、コレ。

関わった人間とかそいつの人事情報は、ネズミの情報と矛盾してな

さそーだナ。

それに、違法物質の取引記録やら利用方法も含んでやがる。決算書やらまで押さえてやがるし、下手に逃げたら監査に問題ありか虚偽申告で告発デモすんのか？

テカ、管理局やらの裏事情なんて、ドウやって……って、記憶を集めてだったナ。

「手を焼かされていたテロ組織や処分に困った実験体を殲滅するための事故偽装と、そのための違法物質の使用。

プレシアさんをスカリエッティに協力させて最高評議会が望む技術を開発させる事が目的の、思考誘導の魔導具をプレシアさんに埋め込むための入院理由の作成と身柄の確保。

資金や技術で協力を受けていたアレクトロ社に対する、新技術という謝礼の引き渡しのためのプレシアさんの排除。開発に協力していた人物の多くはアレクトロ社の技術者だったそうなので、技術の内容と言うよりも名義の引き渡しが目的ですね。

これらの事情が、あの事故の裏側にあつた様ですよ」

「オイオイ、盛りすぎダロ。」

石1個でどんだけ鳥を落とすつもりだよ」

「最低3羽ですね。もっとも、余計な被害が大きすぎましたから、脳味噌さん達もやり過ぎと感じたのでしょう。かなり多くの人が更迭されたようですよ」

「随分搦んでやがるナ。けどよ、レジアスは噛んでねーのか？」

「重視していなかったので見落としただけかもしれませんが、少なくとも私が集めた情報には名前がありませんでしたよ。

年齢を考えると入局していなかった可能性すらありますし、入局していても下積み時代でしょう。使い走りに使われる事はあっても、重要な位置での関与は考えにくいですね。

この後のゴタゴタで武闘派の勢力が増したらしいですし、レジアスの方向性が決まるきっかけになった可能性はありますが」

「ホー、そうなのか。で、この情報、ゴ主人に見せるのか？」

下手すりやミッドチルダが崩壊するぜ？」

ネズミの資料で管理局が関わってる事は解ってたけどヨ、どー見ても管理局主導だぜコレ。首の1個や2個で済む話じゃねーケド、本局と地上本部崩壊で済めば御の字かネ？ 脳味噌の置き場所次第では、そこも増えそーだけどヨ。

「プレシアさん確保の役に立つ手札ですから、恐らく大丈夫でしょう。随分と昔の話ですし、時空管理局もアレクトロ社も大荒れで関係者がだいたい居なくなっていますからね。

この事件を担当する人が裏側の人でなければ、きつと罪の軽減くらいはしてくれます。正義感の強い人なら冤罪扱いで罪を消した上で管理局内部の膿を潰そうと動くかもしれないから、そうなればエヴァちゃんも殴り込む理由が無くなるでしょう」

「だからと言って、手出ししてコネーとは思えねーゾ？」

「脳味噌さん達や残っている関係者がおかしな手出しをしてくるようなら、エヴァちゃんが黙っていないでしょう。私にも色々と手がありますし、ある程度ならエヴァちゃんにばれないよう対処する事は可能です。」

数日でこの程度は調べられる私の実力も、舐めてもらっては困ります」

「マア、ゴ主人もこれの一部は掴んでたシ、交渉で使う気満々だったから問題ねーカ。

ケドよ、幻のくせにやる気じゃねーか。どんな風の吹き回しダ？」
「夜天を助けたいたいの私と同じだと言ったでしょう？」

それに、エヴァンジュを娘のように思っている事も事実ですからね。

細かい絆ですが、家族と呼べる人の為です。ここで力を惜しむほど愚かではありませんよ」

「ソウカイ」

ウーン、コリヤ大真面目に言ってやがる。

リンディとプレシアは……資料の確認中だナ。まだしばらくかかりそーだシ、変態は結構イロイロ調べてそうだから、もうチョイ聞いとくカ。

「んで、夜天改悪のトドメが最高評議会だつてのは、何でダ？

アレが改悪する必要なんてねーダロ？」

「ああ、その事ですか。」

過去にも協力的な主がいたのですよ。闇の書の被害を知っていた当時の人達は、まだ人間だった脳味噌さん達を中心にチームを組み、主と協力して闇の書の改変に挑戦しました。

その内容は、闇の書を自己消滅させるための、自滅術式の追加です」

「ヨースルに、失敗しやがったの力？」

「そうですね。闇の書の防衛プログラムに闇の書本体を攻撃させるはずが、闇の書の完成直後に破壊を振りまいて周囲諸共滅ぼすようになってしまった様です。闇の書や防衛プログラム自身も巻き込むので成功したとも言えるのですが、意図した結果にはならなかったのですよ」

「時限爆弾を爆破処理しよーとしたら、合わさって手に負えねー爆弾になっちまったって事かヨ」

「そんなところですね。」

それまでは主の意識や理性が飛んだりして集めた力を制御出来ず、暴走して自滅する際に周囲を巻き込むパターンが多かったらしいのですがね。積極的に破壊や浸食を行うような方向付けに成功してしまったので、被害はより大きくなったそうですよ。

もともと、最終的に破壊を振りまくという点については変わっていませんから、本当に改変出来たと言っているのかすら微妙だと思っていますが……公式発表と非公式資料からは、この辺が限度でしたね。脳味噌さん達に近付くことが出来なかったので、これ以上の調査が出来なかったのですよ」

完全な無能ってわけじゃねーナ。ある程度手を出せる程度の中途半端な有能さが、やっちまった原因カヨ。

「ちなみにこれは160年程前の出来事で、次元世界の平定よりも前の話ですよ。」

この事を反省して、どこに闇の書等の危険なロストログアが現れても対処できる技術と体制作りを目指したのが、時空管理局の前身の組

織です。ロストログリア対策技術の開発を行い、各世界の国や治安部隊へ技術と交流の場を提供して、有事の際の解決や相互支援を円滑に行う事が目的の研究施設と互助組合と言えれば解りやすいでしょうか？ 国際連合の様な役目も果たしていたので、緩やかな縛りの平和ではありませんが、これを以て平定と言われるようになったようです。

この頃は、脳味噌さん達も行動方針自体は応援するに足る人達だったのですがね。実力不足はまあ、これほど大掛かりな組織を作るのに充分な実力者なんていないでしょうから、仕方が無いでしょう」

「ケド、ソノ成れの果てが、ゴ主人に腐れ脳味噌とか呼ばれる今の状態ってワケカ？」

「多くを求めすぎた事、求められ過ぎた事も悪かったのでしょうね。

裏で動くようになったのも、どうも関係国に公開した技術で一部の国が暴走したからという理由もある様ですし。どこの世界もいつの時代も、程度の悪い国や組織は無くならないという事なのでしょう。

自分達がやらねばならないという責任感以上に、何とかしてほしいという周囲の期待という名の圧力も大きかったようです。それらの結果として、多くの世界の司法や治安に関する組織を傘下に置いてしまったり、必要以上に手を広げて巨大化し過ぎてしてしまったりしたのではないのでしょうか。

その意味では、人と技術に振り回された犠牲者でもあるのではありません」

「全てをどーにかしようとするから、そーなるんだ。手の届かぬ所は無理だと言ってしまえば楽になれるのにヨ。

デ、ゴ主人の詳しい事を知られたら手出しされるのは確実だろーケド、何処まで知られてそーなんだ？」

「プレシアさんが知っていたのですから、エヴァアちゃんの情報を持っている事は確実です。リンデイさんはまだエヴァアちゃんの詳しい報告を上げていないようですし、いつどこにいる事に気付くかは別ですがね。

リーナのクローンを作れるくらい積極的にアルハザードの情報や流出物を集めていたのですから、闇の書が元々アルハザード製だとい

う事も既に気付いているでしょう。

予測でしかありませんから、これ以上の調査は今後の課題ですね。まだ脳味噌さん達の居場所も掴めていませんし」

「最高評議会の記憶も取ってくる気かヨ。下手スリヤ今以上に痴呆になるんじやねーの力？」

「ちよつといいかしら。さつきから最高評議会の方達を脳味噌と言っているけれど……頭脳という意味じゃないみたいだし、どういう事なのかしら？」

リンデイが書類から目を上げて、こつちを見てやがる。

まだ顔色はわりーままだけどシツカリ聞いてやがったナ、やっぱ抜け目ねーヤ。

「言葉通りの意味ですよ。あの3人は140年前の次元世界の平定に重要な役割を果たし、時空管理局設立にも関わった人物で間違いありませんが、脳だけになってカプセルの中に浮かんでいる状態です。

もはや人とは言い辛い姿ですが、彼らなりに不老不死を求めた結果のようですね。140年ほど前に組織を立ち上げた時点でそれなりの年齢だったはずですし、既に200歳くらいじゃないでしょうか」「そうなの……どうしてそんな姿になってまで……」

「先ほど言った通り、自分達が世界を守るんだと言う責任感が暴走した結果のようですよ。」

クローン技術等を使って体を取り戻していない理由は不明ですが、行動の目的そのものは原作で語られていましたね。エヴァちゃんから聞いていませんか？」

「いえ……意図は解らないと言っていたわ。」

その様子では、隠していたと見ていいのね？」

「そうですね。私でも覚えているのですから、エヴァちゃんが把握していないとは思えませんし……管理局の一員であるリンデイさん達と険悪な空気になりたくなかった、という事でしょうか。」

原作で語られた情報を纏めると、脳味噌さん達が選ぶ指導者による中央集権体制の構築が目的で、戦闘機人や人造魔導師はその為の戦力だそうですね。その裏で暗躍するつもりみたいですから、要するに次

元世界の影の支配者になりたいようです」

「実際にそう思っている可能性は……高いのかしら？」

リンディは違つてほしそうだけど……ここまでの話を聞いてても、ムリだろソレ。

「私が調べた限りでは裏側の活動に大きな差異は無いようなので、実際にそう思っている可能性は高いですね。少なくとも、違う目的だと言えるような情報は見付けていませんよ。」

ちなみに、原作のスカリエツティが言うには、戦闘機人に拘るのはレジアス、人造魔導師やロストログアに拘るのが最高評議会だそうですよ。スカリエツティの指名手配の内容や過去の出来事を考えると、どれも実際に関わっていると思える技術です」

「そう……そんな事になっているの……」

どーすんだよ、リンディが死人みたいな顔で落ち込んだりしたゾ。楔とか棘とか、そんな生易しくねー代物を打ち込んで、何をしたいんだヨ。

「多くの次元世界の協力で運営されている組織の影で蠢いている人物が支配者面で何を言っているんだ、としか思えませんかね。」

そもそも、手駒で犯罪者のスカリエツティに「平和を守り正義を貫く為なら、罪もない人々に犠牲を出してもいいと、なかなか傲慢な矛盾を抱えておいでだ」などとと言われる手法を取っていますし。自分達が責任を取る立場に立つ気も無いまま協力者達の信頼を裏切らせているのですから、エヴァちゃんが腐れ脳味噌と罵倒する気持ちも解ります」

「オイ、何追撃してんだよ、このド変態！」

この流れだと下手すりゃ管理局と全面対決か？　ンなメンドクセー事したくねーゾ。

テカ、脳味噌の状態で表に出るのは問題しかねーと思うんだが、感覚が麻痺してんのかこの変態は。アレか。とつとつクローンでも作れって言いたいのかヨ。

「いやあ、私も今の脳味噌さん達はどうかと思ひまして。

今回の件が、管理局の自浄作用が働くきっかけにでもなればいいの

ですが」

「やり過ぎダ、このドS^{ヘンタイ}ガ。

ケドよ、原作知識ってやつはともかく、脳味噌の昔話はその時期に調べてたんダロ？」

「いくら夜天やゴ主人の為つつつても、随分と準備が良くねーカ？」
「姉である夜天を助けたいから、では納得出来ませんか？」

その為に、可能な限りの情報や技術をエヴァちゃんに持ってもらうたわけですし。私に夜天を治せる能力や技術はありませんから、治し得る手段や情報の確保は、アルハザード時代から始めていたのですよ。

それに、治した後の事も考える必要がありました。エヴァちゃんがどう動きたいか、どんな結末を望むのかを考えれば、誰が本当の敵になるのか、敵になった場合にどう抑えるのかといった情報は必須でしょう？」

夜天や宵天の修復用情報も、やっぱりコイツの仕業かヨ。

イモート達の困惑の原因ははつきりしたけど、コレもゴ主人にや言えねーよナア。

「ん？ だけどよ、何で今頃プレシアの過去を調べたんダ？」

ソレに、管理局の過去の情報は、ゴ主人に送ってねーダロ？ 見付けたって聞いてねーゾ」

「原作に強く関与する人物のいる世界に移動する事も中々手間取りましたし、近寄ってしまうと身動きが取れなくなるのですよ。闇の書や最高評議会の脳味噌さん達も該当しますし、しかも半径数十キロくらいは近くと判断されるようで、迂闊に近付くことも出来なかったのですよ」

「カリムの寝顔はどーやって撮影したんだヨ。

近寄らなきや無理ダロ？」

「聖王教会にお邪魔するのは、かなり無理をしたのですよ？」

ミッドの場所は調べる事が出来ましたし、1度でも何らかの方法で移動に成功した世界には出入りできましたからね。転生機能を使って、狙って飛んでみたのですよ。

いやあ、実体具現化も転移も飛行も出来なくなりましたよ。本の模様として物語を浮かべたり、微弱なサーチャーを出して簡単な情報を探ったりが限界でした。オリヴィエちゃんやオーリスちゃんの時もそうだったので、解っていましたかね。

その分、突然自由に動けるようになった時は驚きましたよ」

あー、ジュエルシード封印までの制限ってヤツの影響って力。

そんな状態じゃ、プレシアやアリスにも簡単に近付けねーナ。何で行かなかったのか、って疑問は残るけどヨ。

「なら、歴史書の本分の情報は、何でゴ主人に送ってねーんだ？」

「管理局やベルカの過去について秘密にしていたのは……怖かったですよ。」

私が夜天の弟の様な立場だと知った時には、夜天を助けられると喜んだものです。リーナが夜天と通信出来ると知った後は、夜天の改変を避ける様に促したり、いざと言うときの切り札、つまり曙天の用意をしてもらったりもしました。

ですが、結果的にリーナは命を捨ててしまいました。それも、原因はどうも私やエヴァンジュの言葉に感じるところがあったからの様ですから、おかしな修正力でもあるのではと疑ってもいます。

そして、いざアルハザードという枷、リーナという夜天との繋がりが無くなつてから、ふと疑問に思ったのですよ。私はいつまで夜天を助けるために動こうと言う気になれるのだろうか、エヴァンジュが真実を知れば、私が原因で地球に生まれる事が出来なかったと恨むのではないか、と」

あー、ゴ主人は夜の一族の可能性が高いと思ってたしナ。

恨む可能性は……低そうだけど、無くもねーヤ。

「いつまでたつても目覚める様子の無いエヴァンジュの話を耳にする度に、罪悪感が増す一方でした。そんな状態で夜天の事を押し付ける気にはなれません。2人……夜天とエヴァンジュに関する情報は可能な限り集めていましたが、私の胸に留めていたのですよ。」

おかげでまともな資料の多くを止める事になり、趣味を兼ねた幼女達の姿が目立つ結果になってしまった上に、初めて対面したエヴァ

ちゃんの予想以上の可愛さに舞い上がってしまって、余計に嫌われる羽目になったのですが。

世の中、こんなはずじゃない事ばかりですよ」

「ため息をつく場面じゃねーヨ。幼女情報や変態行動で嫌われてんのは自業自得だぜ。」

で、ユーノのどこに來たのは何でダ？ 変態のお前が、何を思っろりこんて

野郎のトコに來タ？」

「女顔のシヨタ君に興味があつた事もありますが、やはり無限書庫です。あれはロストログアの流用なのですがなかなか堅牢でして、簡単には侵入出来ないのですよ。」

彼にくつついていれば、無理せずに入れそうでしょうか？」

「趣味じゃなくて実益力？」

「ええ、そうです。それに、ユーノ君はなのはちゃんの部屋に入り込んでいましたから、寝顔もぼつちりだと思ひましたし。パジャマパーティーにでも混ぜてもらえたら最高です。」

何より、男なら美少女達の盾にしても心が痛まないじゃないですか」

「最悪だなテメー」

「一流のロリコンだと言って下さい。」

ところで、何か言いたそうですが……どうしましたプレシアさん？」

「それで、貴方達は管理局をどうしたいのかしら。」

このまま放置するつもり？」

今度はプレシアか。自分達の未来がかかっているシ、気になるのは仕方ねーナ。視線に怒りが混じってんのは、事故の原因を知ったせいだろうしヨ。

てか、アリシアは呑気なもんだ。こんな空気の中まだ寝てやがる。「別に、私は何も思っていないから。脳味噌さん達を応援する気は全くありませんし、支配しても破壊しても面倒なだけで楽しくなさそうです。」

もちろん、余計な手出しをされた場合は全力で叩き潰しますが、そ

れだけです。闇の書対策の名誉を受け取る気のないエヴァちゃんも、同意見だと思えますよ。

この資料は、プレシアさんを早急に確保するための手札だと思ってください。要するに、管理局の罪を個人に擦り付けるな、と交渉するための材料ですね。それに、最高評議会やレジアスへの牽制にもなるでしょう」

「最高評議会やスカリエッツィは、放置するという事？」

「関わってこなければ、そうなりますね。接触が無い確率は極めて低いとも思っていますが。」

敵対的であれば、相応の痛みを感じて頂くことになります。

表面上は友好的でも下心満載であれば、仲良くする必要を感じません。極めて丁寧に退場して頂きます。

これ以外の可能性は、無視して問題ないでしょう」

「……フフ、そういう事ね。」

確認するわ。私の役目は、管理局への威圧と、エヴァンジュの精神的な拠り所になる事。

これで合っているわね？」

「おや、随分機嫌がいいですね。」

認識はとても正しいのですが、問題ありませんか？」

「ええ。アリスアを殺したのは管理局とアレクトロとスカリエッツィという事でしょう？ 積極的に復讐するのは面倒が多そうだけれど、意趣返し位はしたいわ。それに、アリスアとの時間を取り戻してくれたエヴァンジュには、本当に感謝しているの。」

子供が3人になったところで問題は無いし、精神的に頼られるくらい親密になったら、アルハザードの最終兵器が守護に付くという事と同義よ。頼もしい事この上ないわ。

持っているであろう技術にも興味があるし、犯罪者として追われる生活も終わりに出来る。

多少の制約はあるとしても、これだけの利点があるのだから拒否する理由がないわ」

オウ、完璧じゃねーか。ココまでイイ感じで受け入れてくれる

たあ、ゴ主人も色々仕込んだ甲斐があつたつてモンダ。

笑みがちとコエーけどヨ。

「そうですか。それは良かったです。

ところで、セツナさん。そろそろ状況を理解していただけたか？

かなり危険な領域まで踏み込んでしまった事を理解していただいた上で、この場の情報は漏らさない事は約束して頂きます。出来ないのであれば、消えて頂くことになりますよ」

「大丈夫です。

それに、エヴァさんが寂しがっている事は理解しました」

謎はすべて解けた、みたいな顔をしやがッテ。

コイツの頭はどーなつてんだ？ 今のゴ主人の精神状態じゃ、ソレを言うだけでやべーんだゾ。

「それに、私は他の人達よりも少し近い立場に立てるかもしれませんが。剣術限定ですがそれなりの力がありますし、これはエヴァさんが持たないものです。

この世界の常識や魔法については努力中なので何とも言えませんが、魔導師としてそれなりの実力も身に付けば、もう少し歩み寄れそうな気がします」

「エヴァちゃんの支えが増える事自体は喜ばしいのですが、セツナちゃんにそれを求めるつもりはありませんよ。

むしろこの場の話を全て忘れるか、離れて頂いた方が安心出来ます」

「まさか。一番共感出来る大切な友人ですから、簡単に手放したくありません。

それに、今はまだ貰ってばかりですけど、私だって少しは返したいんです」

頑固者メ。

ダガまあ、こんな奴は嫌いじゃねーナ。

「んじゃ、セツナはゴ主人の友人として、隣に立てるくらいになりな。使うのが剣なラ、オレが仕込んでヤル」

「おや、いいのですか？」

「手は多い方がいーんだヨ。」

ソレに、迂闊な事をするようなら、オレがバツサリ斬ル。

覚悟シトケヨ？」

「わかりました」

オシ、コレでセツナも問題ねーナ。

で、残るはリンデイか……マア、管理局の防波堤になってくれりや文句ねーカ。

別に毒を仕込む必要もねーだろーシ、必要なら、ゴ主人が後から話しつけるダロ。てか、既に死人の顔になっちまってるからナ。

殺すのは好きだが、味方ぽいヤツを苛めるのは好きじゃねーんだヨ。

「で、リンデイはどうするんだ？」

おれは別に、管理局を直接どーこーしようとは思ってねーゾ」

「そうですね。不愉快な手出しをされない限りは、私も干渉ですし。

プレシアさんの確保については手伝っていたのですが、その後は手を引く事も未来の1つではあります」

「……プレシアさん。1つ質問してもいいかしら？」

ジュエルシードの情報は……どうやって？」

「スカリエッティよ。あいつが、いつもの気持ち悪い笑みを浮かべながら、情報を押し付けて来たわ。願望機たるジュエルシードを使えば、失われた世界にも行けるんじゃないか、とね。」

情報をくれた管理局の友人が足止めをしてくれるから、確保して利用法を編み出してほしいとか言っていたけれど……きつと、実際に使った物になるか実験したかっただけでしょね。そもそも、事故の後でアリシアの遺体が保存処理されていた上に、蘇生法の研究に協力する事が司法取引で提示された時点で、おかしい事に気付くべきだったわ。

この資料が示している管理局と犯罪者の繋がり、私が知る事実と矛盾せず、むしろ裏付けにしかなくていい。つまり……恐らくとしか言えないけれど、管理局から回された情報よ」

「そう……駄目ね、裏側の繋がりを考え始めると、切りがないわ。

もしここで手を引けば、きつとグレアム提督や最高評議会とエヴァさん達の間で全面戦争が始まるわね。夫の事もあるし、逃げるという選択肢だけはあり得ないわ。

エヴァさんや闇の書について、時空管理局の関係者でここまで踏み込む事が許されているのは私一人だもの。私には、時空管理局の抑えと折衝役を求めているのでしよう?」

落ち込んだままつつつても、きちんと判断は出来てるみてーだ。

顔色最悪だシ、ちと気負いすぎかもしれないが……他に適任者はいねーし、仕方ねーだろーナ。狂人に情報を渡したのは、管理局の犯罪者共で間違いないねーだろーシ。

「そうして頂けると、平和に話が進みますからね。

リンデイさんとして問題無いのであれば、ぜひお願いしたいですよ」

「問題が無いわけではないじゃない。

でも、平和を維持するためには他の手が無さそうという事は解るわ。

もちろん、この資料の内容も改めてじっくりと確認させてもらうけれど、構わないでしょう?」

「もちろん。交渉できちんと使って頂く為にも、存分に確認して理解して頂きたいですね。

ああ、脳味噌さんや犯罪者さん達に嗅ぎ付けられると面倒なことになるので、その辺は注意して下さい。武力も権力も、動き出してしまえば穏便に相手をするのは不可能ですからね」

「そうね、時空管理局の内部で権力を使われてしまえば、普通の方法ではどうにも出来ないでしょうし。

でも、もし……いえ、それは後で考えるところでしょう。

まずは、この場をどうエヴァさんに説明するかが問題かしらね」

あー、ダイブ踏み込んだしまったし、アリのまま話したらゴ主人はまた暴走するからナ。

指摘は正しいんだが、案も出してほしいぜリンデイ。

「とりあえず、プレシアに気付かれた、てのは隠さねー方がマシだな。ゴ主人も原因だし、隠し切れると思えネー」

「そうですね。必要以上の隠し事は無い方がいいでしょう。ですが、エヴァちゃん内面の暴露については無かった事にしましょう。」

プレシアさんについては、エヴァちゃんの過去に気付き、仲良くなれば心強い協力者になれる事から協力を積極的になった、程度の筋書きが無難でしょう。

いかがですか？」

「私が積極的にエヴァンジュを構うのも、アリシアに対するアルハザードの最終兵器の保護が目的。」

「それで問題無いわ」

「おや、親馬鹿は変わりませんか」

「あの中での3ヶ月で全くぶれなかった事、私が私である証よ。」

ただ、上からの密命とはいえなぜ個人で駆動炉開発を了承したのか、なぜ蘇生ではなくクローンなんてものに縋るようになったのか、なぜフェイトを作った時にアリシアの体をそのままにしたのか、なぜ虚数空間の事を考えなかったのか……どうしても解らないわ。

恐らく、これが認識阻害か思考誘導と言っていた魔導具の効果ね」「なるほど、エヴァちゃんがそう言っていたのであれば、間違いなさそうですね。」

プレシアさんの基本路線はこれで良いでしょう。リンディさんは……アルハザードの最終兵器と管理局の対立を避けるために動く、という事でどうでしょう。これ自体は真実でしょうから、問題ないと思います。」

「そうね、その意図は間違いなくあるから、真実と言っていいでしょうね。」

「だけど、あの資料についてはどう説明するのかしら？」

「アー、事件の調査資料カ。」

「出した理由くれーは決めておかねーとヤベーナ。」

「プレシアさんが協力的で、リンディさんが防波堤役を請け負ってく

れると言う前提に立てますからね。プレシアさんを確保するための手札を渡したと言えば充分でしょう。

この方針で、リンデイさんは何か問題がありますか？」

「これ以外の説明を思い付かない程度には、無いかしらね」

「では、この路線で行きましょう。」

セツナちゃんは……そうですね、血塗られた過去の話を聞いてしまった事は、エヴァちゃんに謝っておいた方が無難でしょう。

口を挟むことも出来ないまま話を黙って聞いていた、辺りが落としてどころでしょうか」

「分かりました。口を挟めなかったのは事実ですし、問題ありません。

途中からハブられていた方が無難かもしれませんけど」

「ふむ、聞いていない方が無難という事ですか。では、最終兵器と呼ばれていた事は聞いてしまった事にして、それ以降の黒い話からは外れていたという事で。」

それでは、説明用にもう少し詳細な状況を考えておきましょう。

鋭くてもどこか抜けているエヴァちゃんともかく、チャチャちゃんに突っ込まれるような隙があるとまずいですからね」

当面の危機は去ったシ、いい環境を作る事は出来たナ。やれやれ
ダ。

ケドよ、^{ロリコン}変態が実は^{へんたい}変態じゃねーってのは……いや、^{ロリコン}変態で^{ヘンタイ}DSはあるの力。

ヤヤコシイし、道化を続けるみてーだから、やっぱ変態でイイヤ。

無印編45話 主従

プレシア・テストロツサやリンディ・ハラオウンへの説明をチャヤゼロに任せた主は、お姉様を連れて部屋に戻ってきた。

チャヤマルに運ばれ、今はベッドに座っているお姉様は、俯いたまま動く様子すらない。

何だか、部屋を出てからものすごく空気が暗くて重くなる一方。

(妹達、何があつた？)

説明はエヴァに聞こえない様にお願ひ)

了解。

プレシア・テストロツサが、主様のクローンだった。

お姉様と主様は、仲の良い親子の様な関係だった。

最終的に主様は死を望み、お姉様がそれを叶えた。

望まれた事であっても、お姉様は叶えてしまった事を気にしてる。

(過保護なものも、そのせい？)

間違いなく要因になってる。

主様がいた頃は、ここまで過保護じゃなかった。

お姉様は、絶対に主を殺さない。主が死を望んだ場合は自身ごと滅

ぼす気にいる。

チャヤゼロのバグを利用した自滅術式を主様から受け取ってる。

お姉様はバグを直すだけの技術と権限があるのに、直してない。直す事を拒否してた。

私達が直す事も禁止されてる。

(その人のクローンが現れる事はそんなに想定外？)

アルハザードの技術がどの程度か全ては把握していないけれど、技

術的には可能だったはず)

主様は、クローン技術の権威。当然、作る技術を持ってた。

それだけに、自身のクローンを作る事、作られる事には慎重だった。

簡単な試験を含めても、主様が自身のクローンを作った記録は無

い。

い。

アルハザードは、少なくとも上層部の人間については、それなりに

気を使ってクローンを作られない様にしてた。

ただ、情報漏洩も多かったから、対策は完璧じゃなかったはず。可能性が低いとは言えても、絶対に有り得ないとは言えない。でも、問題は可能性の高低じゃない。

主様はお姉様の心の拠り所で、お姉様が自分の手で殺したと思つてた。

クローンを作ったという情報も無かったし、永遠の別れだと自分を納得させてた。

それが目の前に現れる事は、心の傷を抉るに充分。

(そう。前の主を殺した時の状況は?)

殺したこと自体は不思議じゃない?

(エヴァの主は不老不死になって、エヴァが死ぬか、エヴァに再剥奪されない限り死ぬことは無いと知っている。

私がエヴァの主になっているのだから、前の主だけが死んだ、つまり再剥奪をしたということ。

殺したという表現で間違つてない)

正しい認識。

主様が、死ぬ事を求めた。

アルハザードの人と技術全てを破壊した時、最後に主様が言った。

まだ1人いる、と。

(事態はだいたい分かった)

「チャチャマル、私をエヴァの隣にお願い」

主はチャチャマルに頼んでお姉様の隣に座ると、お姉様の顔を覗き込んだ。

「エヴァ、何があつたかは言わなくていい。

私はエヴァの隣にいと決めている。

チャチャ達も、従者達もいる。1人で抱え込むのは良くない」

お姉様は……無反応?

せめて反応があれば、話が進むのに。

「……エヴァ。

何があつたかかは、妹達に聞いた。

エヴァを含めて、世界のどこを探しても完璧な人は存在しない。失敗していい。間違っていていい。

「だけど、望まれた事を叶えた事は、後悔してはいけない。後悔はその人を侮辱する事に繋がってしまう」

「……………私は……………駄目だな……………後悔しない事も……………忘れる事も……………」

「いつまで経っても……………弱いままだ……………」

「弱くてもいい。無理に強くなる必要も無い。」

「外見がエヴァンジェリンになったからと言って、行動や考え方まで染まる必要も無い。」

「エヴァンジェユではなく、前世の自分らしくてもいい。」

「自分らしいと思える自分でいてほしい」

「……………お前も……………リーナと同じことを私に求めるんだな……………」

「前の主が何を思って、何を言ったのかは知らない。」

「だけど、自分らしくいてほしいと言っていたなら、大切に思っていたと判断していい」

「だが……………私は……………」

「卑下しなくていい。それに、今は私がエヴァの主になっている。もつと頼ってほしい。」

「私が冷静さを望んだのは、大切な人の役に立ちたいと思ったから。」

「今では、エヴァが大切な人だと自信を持って言える。例え歪んだ結果であっても、役に立てるなら本望だと言える。」

「そもそも、エヴァの行動の結果は、主である私も責任を負う義務がある。」

「自由に動くなというつもりは無い。だけど、私を置いていかないでほしい」

「……………だけど、私が……………」

「エヴァは私に出来ない事が出来る。」

「私はエヴァが出来ない事が出来るかもしれない。」

「目的が同じ方向を向いていればいいだけ。同じ能力を持つ必要は無い。」

1人が全てを抱える必要も無い。2人で一緒に歩む事が出来ればいい。

それは親友として普通の事。主従としても当然の事。

でも、私は本来の希望、未来に望むものを聞いていない。

エヴァが求めているもの、望んでいる事は何?」

「私は、夜天を……」

「それが何とかなった後。将来的にエヴァが目指したいのは、どんな生活?」

世界の頂点に立ちたいのか。

影の支配者になりたいのか。

自由人を目指すのか。

日本人の普通の生活をしたいのか。

エヴァの力なら、大抵の事が出来る。

何を求めているのか、教えてほしい」

「……私は……私は、幸せを感じたいだけだ……」

殺伐とした空気も、誰かを殺すのも……もう、嫌だ……」

「それなら目指すべきは、きっと普通の生活。表に出ない選択は間違っていない。

私も余計なゴタゴタを抱えずに過ごすことが出来ればいいと思う。

向いている方向、目指す目標は同じ。これからも一緒に歩める」

「だが……私は結局……無い物を求めているだけだ……」

神もどきに身に余る能力を望み……軍事国家で責任からの逃げ道を捜し……今は仲間を作ろうとしているだけだ……原作知識なんて、怪しい代物に縋ってな……

何がエヴァンジェリンだ……プライドも何もない、ただのガキだよ

私は……」

「望みを言った時点で、私達は身に余るものを望んでいる。原作なんて知識や、前世で得た知恵や記憶も、本来は持つべきではないもの。その意味では、転生者は全員同じ罪を抱えている。

それに、エヴァの居場所は私の隣。私の居場所はエヴァの隣。

エヴァは私を必要としてくれた。私はエヴァを必要としている。

誰にも譲らない、私が望む場所。私が望む立場」

「それが……望みなのか……?」

「私は、エヴァを支える事を。エヴァに守られる事を。エヴァと永遠を共に歩む事を望む。」

今の私に感情が無い事は関係ない。現状と前世の考え方を纏めても、感情が戻っても、同じことを望むと断言できる」

「……アコノは、強いな……」

「前世の私はとても弱かった。きっと感情が戻ると弱くなる。感情の無い今だから言える事。」

変わらないものは無い。エヴァも私も、きっと変わる。

今は、エヴァが私を守ってくれている。

時には、私がエヴァを守るかもしれない。

たまには、2人で馬鹿な事をするかもしれない。

それでも私は、エヴァと共に歩んでいけるなら、それでいい」

「私は……アコノが求める様な人間ではないぞ……?」

「私は、弱くてもいいと言った。」

完璧な存在である必要は無いし、本当に完璧なら私が必要なくなるから、その方が困る。

私は大切な人の役に立ちたいと言った。これは前世からの想いだけど、生まれ変わった私は一般的な目で見れば不気味な足手纏いではない。事実、人に迷惑をかける事、負担になる事しか出来ていなかった。

私も居場所を探していたと思える。互いの居場所になれるなら、私にとつては理想的。

もう一度言う。エヴァの居場所は私の隣。私の居場所はエヴァの隣。

私を、置いていかないでほしい」

「わ、私は……私は……!」

「終わってしまった前世の事。今世で起きた悲しい出来事。

お互い色々あったと思うけれど、私は泣けない。

今は私の分まで泣いてほしい。」

全て、涙で洗い流してほしい」



それからしばらく経って。

お姉様は泣き疲れたのか、主に抱き締められて眠ってる様に見える。

正確には、気持ちを整理するために意識を停止中。

初めて使う、魂の能力に任せた無意識の情報処理。事実上の睡眠。でも、お姉様が本格的に泣く姿を見たのは初めて。

まさか泣かせポ？

新しいけど意味不明。

胸で泣いてくれる時点でポの条件を満たしているという矛盾。

(でも、これでやっと主らしいことが出来た)

それは確かに。

だけど、主は本当に感情を感じない？

明らかに感情を前提とした話になった。

(私の前世の記憶と現状を合わせると、嘘は言っていない。

現状を考えると、私の最も大切な人はエヴァで、私の居場所はエヴァの隣以外に無い。

大切な人の役に立ちたいという気持ちは前世のものだけけれど、今の私にそれを当てはめても矛盾は無い)

それでも、二股は良くない。

主というよりも、主人と書いて夫と呼ばれる立場らしい事の様な気も。

(はやての伴侶は夜天。私は親友のポジションで。

私もはやての伴侶にしたいなら、全員で重婚すれば問題ない) ないの？

全員で重婚という事は、お姉様と夜天の姉妹夫婦も成立？

お姉様と夜天は、夜天が姉という点から上位は夜天？ お姉様の夫が夜天？

お姉様の中の人は男性。お姉様が主の夫？

現時点の精神状態を考えると、主がお姉様の夫的な立場。

突撃時の会話を考えると、八神はやてが主の嫁と思える。

上位を夫と位置付けるなら、夜天の主、つまり夫役が八神はやて。

百合だかノーマルだか四角関係だかよく分からない。

誰が夫で誰が嫁かも判らない。

とりあえず、百合の園というのは解る。

(誰が夫役でもいい。誰が主体で動くかは、状況次第で問題ない。

でも、私とエヴァの場合は、役目的にはエヴァが主体で私が補佐という形が自然)

内助の功？

その割には、主はお姉様や八神はやてに全力突撃。

内助ってレベルじゃねえぞ。

(補佐だから問題ない。

エヴァが苦手な所や、エヴァじゃない方がうまく行きそうなところを私がフォローする。

相互補完。ある意味で、主従の理想形)

確かにそうだけど。

現状では、悪く言えば共依存に片足を突っ込んでる。

でも、やっぱり夫婦と言う関係じゃない。

残念。

(妹達が腐っていく……?)

ぎくつ。

それは嫌。

そろそろネタ自重。

でも、チャチャゼロから連絡がまだ無い。

気になるけど、身動きが取れない。

(今はまだエヴァも眠っている。別に急いで何かする必要もない。

話の内容が気になる?)

気になる。

チャチャゼロは交渉に向く性格じゃない。

それ以前に、お姉様が色々叫んでた。

ばれる可能性が否定できない。

(そう。でも、最悪の場合でも本局を壊滅させれば時間を稼ぐ事はできる。その間に夜天を何とかしてしまえば、後はどうにかなるはず。攻撃に必要な情報は揃っているし、クラナガンで姿を見せつつ潜伏すれば、余計な場所へ目を向ける余裕を与えずに済む。

ついでに上層部の悪事も公開して体制を潰してしまえばいいし、闇の書の蒐集が必要なら管理局の魔導師を殲滅する勢いで集める事も出来る。みんなの戦力を考えると、負ける要素が無い)

お姉様より過激。

だけど、最悪の場合と言う条件なら賛同。

というか、候補の一つとして考えてはいた。

お姉様は間違いなくいい顔をしないけど、最終手段としては検討すべき内容。

(本当の最終手段は、私が主としてそれを指示する事。

立場を振りかざす形にはなってしまうけれど、エヴァに全てを背負わせない為には必要かもしれない)

例え指示された事でも、お姉様は背負ってしまう。

だからこそ、主様の事も引き摺ってる。

(それでも、肩を貸す事くらいはできる。

一緒に背負う事に意味はあるはず)

(おーい、イモート達。

ゴ主人は落ち着いた力?)

チャチャゼロ?

お姉様は落ち着いたと言うか、寝てる。

とりあえず大丈夫なはず。

(話はどう落ち着いた?)

(いい話と悪い話があるんだが、ドツチからだ)

(それなら、いい話からよろしく)

(オウ。プレシアの説得は成功したぜ。

ついでにリンディの協力も取り付けろ。

コレから、だいぶ動きやすくなるぜ)

あの状況から？

チャチャゼロのファインプレー？

(なら、悪い話は何？)

(ゴ主人の素性がばれタ。アルハザードの最終兵器つてとこダ。

オレのせいじゃねーゾ。ゴ主人が口走った話カラ、プレシアが自力で辿り着きやがッタ)

(だけど、協力は約束された……

エヴァの技術や能力が目的?)

(プレシアは興味があるつて言ってたナア。

ダガまあ、どっちかつつーと、アリシアがゴ主人の保護を受けられる事の方が重要っぽい言い方だったぜ。プレシアは管理局を信じられねー親馬鹿だシ、敵の敵は味方つて感じじゃねーカ?)

お姉様は、別に敵対したいわけじゃないはずだけど。

ただ、慣れ合う気も無いはず。

敵対しやすい立場ではあるから、その点では似た立ち位置ではあるかも。

(リンディの協力は、どんな形で?)

(闇の書対策と、ゴ主人の情報隠蔽について、ダナ。

ゴ主人と敵対して破滅するのを避けるためノ、管理局の提督としてギリギリの妥協点みてーダ)

(セツナとクーンもいたはずだけど、どんな反応だった?)

(セツナは、呆然と聞いてただけの傍観者だったからナア。

話も途中までしか聞かれてねーケド、ソレでも聞いちやいけねー事を聞いちまった事は反省してるみてーダシ、口外しねーことは約束させタ。

そのうち謝りに行くとか言つてやがったカラ、そんな時の態度やらで処遇を決めてくれヤ。

変態は元々ゴ主人と似た立場だったんだガ……まー、何ダ。夜天対策やゴ主人の情報隠蔽には随分と協力的だぜ? プレシアの昔の事件について、管理局と取引出来るような証拠資料を集めていやがった

シ。

とりあえず共有領域に送つとくから、イモート達も確認しといてくれや)

資料受領、今なら主も直接確認可能だけどかなり多い。

内容は……26年前の事件の資料？

とりあえず要約してみる。

重要な点は……本質的な意味で、プレシア・テストロッサに罪は無いという事？

纏め方と情報の偏りを考えると、その方向を強調しているような感じ。

(そう。それなら、まず、事件の根本的な発端は?)

時空管理局からの密命で、プレシア・テストロッサが個人として新型の次元航行エネルギー駆動炉の開発に着手した事。その際にアレクトロ社の社員が開発に協力する事になり、秘密裏の技術交流が行われる事となった。

その後、アレクトロ社と時空管理局は協力してプレシア・テストロッサを事故に関わった者として排除、技術を接收する事に成功した模様。

(事故に関わったのは、管理局とアレクトロだけ?)

事故直後に駆けつけた「善意の救助者達」により、シエルター内で倒れていたプレシア・テストロッサや数名分の遺体が回収され、負傷者と共に全てクラナガンの先端技術医療センターへ収容されてる。

この際の善意の救助者達は、実態は時空管理局が雇った傭兵やジェイル・スカリエツィイの関係者など。かなり手広い伝手を使って、正体を隠そうとした痕跡がある。

治療という建前の元、プレシア・テストロッサの体内の魔導具の交換も行われてる。なお、収容直後にアリシア・テストロッサの遺体は保存用のカプセルに入れられてた記録が残ってる。

(事故の違法性については、十分な証拠があった?)

当時問題とされた違法物質は強力な酸素破壊酵素。駆動炉事故そのものによる被害も大きかったけど、検出された酸素破壊酵素が生存

者無しの根拠として問題視されてる。

但し、明らかに駆動炉の実験には不要な物質。裁判ではプレシア・テスタロツサの責任ではないのではないかと言う異論も出たけど黙殺された。

裏情報的には、研究所の近くに拠点のあったテロ組織を殲滅するために時空管理局の関係者により駆動炉近くに配置され、意図通りに近隣のテロ組織を含む「退避していなかった人々」を全滅させた模様。(テロ組織の情報もある?)

標的となったテロ組織は、時空管理局の研究所を攻撃目標としていた。狙われた研究所は医療技術の開発を目的としていたけど、実体は戦闘機人や人造魔導師の素体を作るための工場。そこにあった「失敗作」も「退避していなかった人々」に含まれる。

断罪者を自称し、生命を冒流する行為に対して正義の鉄槌を下すと主張していたテロ組織の実情は比較的まともで、手法はともかく、掲げていた目標と手を出す相手は間違えてない。

(つまり、受益者は管理局、アレクトロ、スカリエツティ?)
必ずしもそうではなさそう。

事故後にアレクトロ社が実験を主導していたという発表があり、その後は倒産寸前まで業績が悪化してる。

時空管理局も、アレクトロ社や犯罪組織との繋がりが明かされ、一時的に機能や威信が低下してる。

一方的な受益者と言えるのは、情報が洩れず、プレシア・テスタロツサを得たジェイル・スカリエツティのみ。

(管理局とアレクトロは、加害者兼被害者?)
一方的な受益者がスカリエツティなら、一方的な被害者がプレシア?)

概ねその理解で正しい。

但し、プレシア・テスタロツサに関しては、当時は一方的な被害者だと認識していなかった可能性が高い。

事故の責任問題を問う裁判で、司法取引が行われた模様。ここで駆動炉「ヒュードラ」の権利を手放し、中央技術開発局も免職されて

る。

その代償に得たのが、保存処理されたアリシア・テスタロッツサの遺体と蘇生技術研究への勧誘。つまり、プロジェクトF・A・T・Eへの参加。

能力制限や就業制限、監視などは無かった。事実上の放免。

(庭園の資料との矛盾も無い?)

アリシア・テスタロッツサの遺体の劣化の少なさから見ても、死亡から極めて短い時間で保存処理が行われたのは事実と判断すべき。

時の庭園に残されていた資料は最初からクローン技術が中心。古代ベルカの資料も存在していたけど、王を複製して死を回避していた事を示すもの。思考誘導や認識阻害に加え、これらの情報で操ったと考えると良さそう。

(プレシアも、何でクローンやアルハザードに拘ってたか解らねーって言ってたからナ。

アノ魔導具はソッチ方面じゃねーかって考えてるみてーだったぜ)
(いくらなんでも、プレシアに関して計画的すぎる)

プレシア・テスタロッツサは、主様のクローンだった。

主様はアルハザード人で、研究者の頂点と言われてた。

優秀な研究者の血を受け継ぐ人物として作られた可能性が高い。魔導具が交換されたという事は、それまでも何らかの思考誘導が行われていたと判断すべき。

最初から掌で踊らされていたと言える。

だけど、時空管理局の暗部がアルハザードについての情報をそれなりに持っているのは確実。

お姉様の名前や能力から、真実を知られる可能性がとても高いと判断すべき。

(ソノためのリンディ達だろ。少しの風除けくらいにはなるだろーヨ。

ソレに、手出しをしてくるよーなラ、後悔するぐらい盛大に噛み付いてやりやいいンダ)

それは確かに。

でも、なるべく急いで最高評議会の居場所を見付けておきたい。
裏でやってる違法行為の証拠も。

手出しされないとは考えにくい。反撃の為の手札は多い方がいい。
(全面的に支持するぜ。リンディだけじゃ無理ゲー過ぎダ)

(そう。チクアープの資料の人は?)

アレクトロ社側の中心的人物だったテイラン・ヒューイットは事故直前に退社して、事故には関わってない。その後は数年の社会奉仕活動に従事、この際に関係者の告発を行ってるから、プレシア・テストタロツサに対するアレクトロ社の処遇に納得出来ずに行動を起こしたと思われる。

その後は時空管理局に入局、苛烈な犯罪者対策で功を挙げて現在は一佐にまで昇進。陸上警備隊の連隊長として、レジアス・ゲイズ中將の側近の1人となっている。もちろん武闘派で苛烈ではあるらしいけど、評判は悪くない。

(そう。まさか、ヒューイットが善人に見えるとは思わなかった)

(オレだって予想外ダ)

全く、收拾をつけてやるなんて言うんじゃないぜ)

(お疲れ、チャチャゼロ)

無印編46話 後始末

夜中に目覚めたお姉様。

主と抱き合うように眠っていた事に気付いて、顔を赤くして恥ずかしくなった。

事態、つまりプレシア・テスタロッサ達にアルハザード出身だとばれた事などを説明したら、顔を青くして頭を抱えた。

26年前の事件の資料を見たら、顔を赤くして怒った。

ココロと顔色を変えて大騒ぎをしながら、夜が明けた。

お姉様は改めてリンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、プレシア・テスタロッサと打ち合わせ。意識すれば顔色くらいいくらでも調整できる。態度で本調子でない事は見抜かれたものの、為すべきことを為すという姿勢できちんと話し合い。

チャチャゼロの説明通り、協力は確約。これは全員の認識の確認のみだから問題なし。

時空管理局に対するお姉様の嫌悪感については、少なくとも闇の書の対処を優先している間はどの程度腐っているかを見極める期間とし、その後でどうするかを判断するという事になった。

問題の先送りだけど、時空管理局の全てが駄目というわけではない事はお姉様も理解してるから、とりあえずは妥当な結論。

お姉様の実力をそれとなく聞かれたものの、お姉様は見た通りだと言っただけで、説明はしなかった。必要以上に見せびらかす気が無いのは理解してくれてたから、深く追及されることは無かったけど。

でも、チャチャゼロを見られた事で主殺しの書と確定された。今更どうでもいいけど、変に漏れておかしな連中が出てきたりしないかだけが心配。

あれからクロノ・ハラオウンが集めていた証拠は、地球付近で見付かるのはお姉様が説明した事を裏付けるようなもののみ。偽装や選別を頑張った甲斐があった。

結果的に矛盾は見付からなかったものの、プレシア・テストロッサは容疑者扱いになった。

今回の件だけなら重要参考人で済んだけど、違法研究についての処理が終わっていないから容疑者として扱う必要がある、自由に行動する事は出来ないとのこと。

とりあえず過去の事件の情報と違法研究の副産物としての医療技術を材料に、前科の取り消しを求めて提訴する事と、その後の違法研究に関する司法取引を行う方針で確定した。変態が用意した資料や、時の庭園から持ち出した資料などが手札となる。

過去の事件の実態があまりにもひどい上に、全面的な協力姿勢を見せている事もあって、局員監視の下なら外出できる場合もあるよう取り計らうらしい。

アリシア・テストロッサに罪は無いけど、まだまだ機能訓練が必要。体力が戻っていない為、もうしばらくは車椅子生活。

幼いという事もあり、1人での行動は認められてない。基本的には母であるプレシア・テストロッサと一緒に行動することが義務付けられた。親子の仲を引き裂く理由は無いよ、とはクロノ・ハラオウンの言葉。

但し、事情聴取という名の打ち合わせの場合は別。子供に聞かせる内容でも、子供がいていい雰囲気でもない。

2人の治療や検査などで付き添いが難しい場合も別。アースラの医療施設を利用して、早期に普通の生活ができる状態への回復を目指す。

フェイト・テストロッサとアルフは、重要参考人として扱われる。

実行犯ではあるものの情状酌量の余地が十二分にあり、恐らく裁判は不要、仮に裁判となっても有罪にはならないだろうと判断をされた。加えて、事実上の無罪をより確実にし、早期に自由を得るために嘱託魔導師の資格を取ってはどうかという話が浮上。娘が時空管理局の関係者になる事で母に向く敵意を下げる事にも繋がる言われ、本人も比較的乗り気になってる。

フェイト・テストロッサ自身は、プレシア・テストロッサの逃亡生

活中の子として扱う事に。つまり、正式にプレシア・テスタロッサの娘、アリシア・テスタロッサの妹として登録される事になった。

使い魔として登録を行うアルフと共に、申請すれば出歩くことが可能になる模様。但し、今回の様な『不幸な事故』を繰り返さないための教育を修了した後となる。

それまでは、局員立会いの下での面会のみとなる。それでも、申請さえ通る状態になれば母と比較的自由に会える、高町なのはやお姉様は連絡すれば会いに来てくれると聞いて、特に不満は無い様子。

これらの結果、テスタロッサ家の人はしばらくアースラに籠もる事が確定した。

高町なのはは、まだアースラにいる。今日は日曜日だから学校も気にしなくて良い。

この後は、礼状等を受け取ってから帰る事になるらしい。謝礼としては、時空管理局監視下での魔法使用の許可、具体的にはユーノ・スクライアからレイジングハートの譲渡と、アースラのスタッフやユーノ・スクライアによる監視という名の指導が主な内容になる模様。

金銭的なものはユーノ・スクライアへ渡す事になるとの事。要するに、元々レイジングハートを高町なのはに渡すつもりだったユーノ・スクライアに対し、レイジングハートの購入代金という形で間接的に謝礼を渡す事で、なるべく心理的な貸し借りを減らすよう取り計らうてる。

普通に学校に通う少女という扱いなので、囑託魔導師の話は出てない。民間協力者だから、今は地球に滞在する局員から指導を受けたりするくらいで良いと説得された。

関係を切るわけじゃないから将来的には取り込みたいという意図も見えるけど、現状としては無難な判断。

セツナ・チエブルーは、お姉様が部屋にいる時に謝りに来た。

本人の証言では、聞いたのはお姉様がアルハザード製で最終兵器と呼ばれていた事くらいらしい。それ以上は防音結界により話から外されていたとの事。

公言して良い内容ではない事はチャチャゼロからしつかり言われているし、恩をあだで返す気も、興味のないアルハザードの事でどうこうする気も、同じく命を削る場に立つ身だったのだから兵器という二つ名を気にする事も、友人を止める気も無い、許されるのなら今後も良い関係でいたいとの事。

お姉様は口外時のリスク等を説明した上で許し、セツナ・チェブルーは秘密を話せる仲間っていいですよねとか言って笑ってた。

実質的に喋ったら殺すとチャチャゼロに脅されてるのに、随分と能天気。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーは、帰る場所が無いためそのままアースラに滞在中。

2人は囑託魔導師の資格を取らないかと誘われてる。比較的自由に地球に出入し、必要に応じて魔法を使うためには、やはりこの資格は便利との事。地球で戸籍等を確保する際の手助けも期待出来るという事で、2人も乗り気で考えてる。

本局やミッドチルダを実際に見ることも出来るだろうし、地球に生活基盤の無い2人にはよい事だろうとお姉様も判断してる。

現時点で実技は問題ない水準だろうと判断された事も前向きな理由らしい。但し、今練習している魔法がベルカ式なので、ミッドチルダ式に転向しないならお姉様か聖王教会に指導を仰ぐ形になる。2人に転向の意思が無いため、この辺は要相談。

但し成瀬カイゼに関しては、犯罪者組織を地球の治安組織に叩いてもらった上で、保護された子供という扱いをする事も可能との事。

地球で魔法を使う犯罪者組織は大抵次元犯罪者が関わってるらしく、そういった事態への対応策や伝手も一応あるという事で、成瀬カイゼの戸籍に関しては、この方向に行きそうな気配。

リンデイ・ハラウンに聞いたところ、時空管理局は地球の主な国や一部組織と裏の繋がりがあらしい。地球産魔導師の水準や地球の文化、それに魔導師による犯罪やロストログリア対策のため、要するに月村家の様な人達との協力関係もあると言ってた。具体的には、月村忍とノエル・K・エーアリヒカイトは時空管理局についても少し

は知識があつたはずとの事。

そういえば月村忍とノエル・K・エアリヒカイトは、魔法自体には驚いてなかつた。月村家のチャチャが尋ねたところ、お姉様の情報を時空管理局に渡さない代わりに、夜の一族が時空管理局に関わっているという情報を渡さなかつた、一方だけに肩入れするわけにはいかなかったから、と言われた。

高町士郎が剣術に関する情報をあつさり認めたのも、裏側に係わる立場になったと認識されたからだと言明出来るらしい。だけど、高町士郎は主の魔法を見て驚いてた。

高町家のチャチャが高町士郎に驚いた理由を聞いたところ、HGSと呼ばれる高機能性遺伝子障害病の患者の翼や超能力、古くから伝わる退魔術は見た事はあるけど、見た目がここまでアニメや漫画の魔法に近いものを見た事は無かつたとのこと。

超能力関係はとらいあんぐるハートに由来するものと思われるけど、高町家に居候してる人や翠屋の店員をやつてる歌手もいないし、さざなみ寮も未確認だから、どこまで適用されてるのかよく解らない。

歌手のSEENAやファイアッセ・クリステラは活躍中で、月村家にSEENAのCDがいっぱいあるのは確認済み。ファイアッセ・クリステラの護衛中に高町士郎が負傷した事があるらしく、その繋がりで連絡を取る事もある様だけど、高町恭也との繋がりは見えない。何だか中途半端。

とりあえず、地球でミッドチルダ式やベルカ式の魔法は裏の人間の間でもマイナー、時空管理局的には地球の特殊な技術や超能力はレアスキル扱いになるらしい。

退魔術は比較的使える人が多いみたいだけど習得の訓練が厳しいし、魔法や超能力はそもそも扱える人数が少なすぎて、仮に一般に知られたとしても文化として定着する可能性は低いだろう、むしろ排斥の動きが出ないかが心配との事。

これらは、自動制御の監視では拾えなかつた。情報漏洩に気を使っている証拠。私達が直接張り付けば取れたのかもしれないけど、過剰

に踏み込むのは良くない。砂糖を吐く結果になりそう。

フェイト・テスタロッサが隠れ家を確保していたり、アルフが買い物のための現金を持っていたり、最初から翻訳魔法の準備が出来ていたりしたのも、地球と時空管理局の繋がりがあったからと思われる。

プレシア・テスタロッサの証言では、これらをジェイル・スカリエツティに依頼して確保したとの事。恐らく実際に確保したのは時空管理局の暗部。そして、ジュエルシードの情報もジェイル・スカリエツティが齎していた。

フェイト・テスタロッサの部屋を確保した経緯が確認出来れば、この事件に何が介入したかが判明する可能性はある。クロノ・ハラオウンが追う予定だけど、明確な証拠を残すほど相手も間抜けじゃないと予想出来る。きっとトカゲのしっぽしか掴めない。だけど、追及の姿勢を見せる事が最高評議会やレジアス・ゲイズに対する牽制になる。

成瀬カイゼが提出する犯罪組織の情報に追加で、数人の転生者の情報も提供する事になった。具体的には、東渚、ギル・ガームス、杉並英春、金子狗太の4人分。

要注意の危険人物という事で、何らかの対処が必要になる可能性がある。と判断させるための材料。

お姉様からアースラへの利益誘導は、これくらい。将来はSランクが期待出来る協力的な魔導師や、事前に危険人物を捕捉した情報は、リンデイ・ハラオウンの名誉に繋がるはず。

話し合いに来なかったエイミー・リミエツタはと言うと、戸籍や拠点を確保するために日本へ行ってる。

お姉様が次元震を調整していたおかげで、アースラと地球の間は自由に行き来ができる状態を維持してる。本局やミッドチルダへの航路が安定するのは1か月後と予想。

話を戻して、拠点は「ロストロギア暴走の影響の追跡調査と、管理外世界に現れた高ランク魔導師との協力及び関係維持」のためという建前。つまり、ジュエルシード、要警戒の転生者、高町なのは、成瀬カイゼ、セツナ・チェブル、チクアーブを盾と名目にする。

また、プレシア・テスタロッサが「自由に魔法を使えない管理外世

界”という檻に望んで入ると言うための下準備でもあるし、今後接触が予想される転生者の事後処理対策にも役に立つはず。

真の目的は闇の書対策。だけど、それはごく一部の関係者しか知らない事実。

姿を消した変態は、また遠い世界にいるらしい。

不安定な次元空間を突破して移動している以上、追加で何か調べつつもり？

変態の評価を少し変える必要があるかもしれない。

だけど、お姉様に突っ込まれる事を避けるために逃げているだけの可能性もある。要観察。

変態についてはジュエルシード事件とは直接関係ない扱いに。ユーノ・スクライアの元に幻の書が現れた、という報告を別途提出するに留める。

事件の経緯について、資料を作成する際に使われている情報のメモを抜粋してみる。

ジュエルシードはユーノ・スクライアが発見。時空管理局への輸送中に事故があり、第97管理外世界に散らばった。

偶然第97管理外世界に滞在していたプレシア・テスタロッサがジュエルシードを発見。危険なものだと判断するも、本人は体調が悪く、娘であるフェイト・テスタロッサとその使い魔であるアルフを呼び回収を指示した。

同時に、ジュエルシードの発見者で輸送に同行していたユーノ・スクライアも、回収の為に現地へ向かう。しかし、魔力の適合不良等に苦しめられ、やむを得ず現地人の高町なのはの協力を得て回収を続行した。

2組の回収者達は互いを犯罪者ではないかと疑い、誤解を解消出来ないまま対立。一度は次元震が起きかけるも、現地に住んでいた魔導師小野アコノの助力により事無きを得る。

その後も対立は続き、到着した執務官が戦闘に介入するも、時空管

理局を詳しく知らないフェイト・テストロッサの誤解を解くに至らず。

この介入により時空管理局の到着を知ったユーノ・スクライア、高町なのは、小野アコノ、後に小野アコノの仲介で成瀬カイゼ、エヴァンジュの5名がジュエルシード回収に参加を希望し、協力しての捜索及び回収を開始する。

この際に、ジュエルシードの影響なのか、現実との齟齬がある未来の光景を見た者が複数存在している事が判明。現時点では前述の小野アコノ、成瀬カイゼの2名を確認している。

また、ジュエルシードの影響を受けたと思われる、姿が変わってしまった現地人の桜咲刹那、ネズミの変異の可能性が高いチクアープの2名を保護。

桜咲刹那は元の人物として生活する事は困難と判断し、問題とならない様に名をセツナ・チエブルーと変えて、元の人物である桜咲刹那は行方不明扱いとする事となった。

2名共に魔法に関する知識があったため、故郷を守るため、自分達以外の犠牲者を出さないために回収作業への協力を表明、実際に参加する事となる。

回収の最終段階でフェイト・テストロッサの誤解が解けるが、プレシア・テストロッサが行っていた違法研究の負の遺産が暴走。プレシア・テストロッサの尽力により一部のジュエルシードの封印に成功するも、負の遺産とジュエルシード3個が虚数空間へと消失した。

この件で消息が判明したプレシア・テストロッサは既に違法研究を行っておらず、負の遺産の暴走により研究成果も多くが失われたが、娘であるアリシア・テストロッサを治療するための医療関連情報は手元に残った。

違法研究の成果ではあるが有用な医療技術を含むため、これを時空管理局に提出。自らは魔法を自由に使えない管理外世界に隠居し、娘達と静かに暮らす事を求める。

なお、ジュエルシードによる直接の影響を受けた者4名が見付かったため、追跡調査を行う必要があると判断。加えて比較的高い素質を

持つ魔導師が多く見付かっており、他にも魔力の反応が確認されているため、調査及び継続的な関係構築の為に、現地拠点の確保を行っている。

現状で良好な関係を築けている現地の魔導師と魔力量評価でのランクは、高町なのは（AAA相当）、成瀬カイゼ（AAA相当）、セツナ・チェブルー（AAA相当）、チクアーブ（AA相当）、小野アコノ（B相当）、エヴァンジュ（C相当）となっている。

また、魔力を持ち、危険な思想を持つと思われる人物は、東渚（S相当）、金子狗太（Sー相当）、杉並英春（AAA相当）、ギル・ゲームス（AA相当）の4名。現時点では魔導師として未熟または魔法に接していない様子だが、将来を考えると何らかの手を打つ必要がある。

これで時空管理局の上層部、つまりジェイル・スカリエツティに繋がっている最高評議会やレジアス・ゲイズが納得するわけがない。

裏で提出する資料には、以下の様な内容を記載する事になる。

ジュエルシード事件の3か月前に、正体不明のロストロギアにより、プレシア・テストロッサの若返りとアリシア・テストロッサの蘇生が行われていた。これによりプレシア・テストロッサは違法研究を続ける理由を喪失、娘達と安住の地を探す方針に転換する。

しかし、プレシア・テストロッサは若返りの副作用と思われる体調不良により魔法があまり使えず、アリシア・テストロッサは生活に支障が出る程体力を落とした状態であった。プレシア・テストロッサは回復の為に違法研究の負の遺産、自らのクローンに事後を任せて、自身は治療を行いながら移住先の調査を始めた。

プレシア・テストロッサが第97管理外世界を調査している頃、クローンはジェイル・スカリエツティが齎した情報から、アルハザードを技術者の楽園と認識。そこへ至る手段としてジュエルシードを利用する方法と、それが事故により管理外世界に散らばった事を教えられて、行動を開始する。

この結果、プレシア・テストロッサ本人とそのクローンから同じ様

なジュエルシード回収の指示を受けたフェイト・テストロッサと使い魔のアルフは、第97管理外世界に散らばったジュエルシードの回収を開始する。

最終的に、クローンが暴走させたジュエルシードの一部をプレシア・テストロッサが奪還する事に成功するも、クローンは握っていた3個のジュエルシードを更に暴走させて虚数空間へ落ちた。

この時の次元震により、プレシア・テストロッサが居住し研究室もあつた「時の庭園」は崩壊。研究成果も多くが失われた。

違法な研究を続行する意思や理由は消失しており、再犯の可能性は低い。脱出の際にアリシア・テストロッサと共に運び出された医療関連技術と、関係のあつた次元犯罪者ジェイル・スカリエツテイに関する情報を時空管理局に提出する用意があるため、これを以て減刑を求めらる。

もちろん、交渉時には精神に影響を及ぼす魔導具や26年前の事件の資料も使用予定。

お姉様は何度もアースラに来ているため、完全な隠蔽は逆に怪しさが増すと判断。現地協力者の1人、魔力的には大したことが無いけど現地出身魔導師のまとめ役をしていた人物として扱う事になった。

プレシア・テストロッサの体内に在った魔導具は、精神干渉を行うためのものという事までは確定済み。実際の効果は、自己犠牲の軽視化、アリシア・テストロッサの復活に関する強迫観念、時空管理局に対する無条件の信頼、虚数空間に対する認識障害を含むと判断出来た。時空管理局への信頼を利用して、ジェイル・スカリエツテイとの関係や研究内容の誘導を行っていたと思われる。

切り札は色々用意出来そう。無事に済むことを期待。

番外：小話ズ その4

◆◆ とあるフェレットの合わせ鏡（無印編08話の後書きより）◆◆◆

ユーノ・スクライア。

若くして遺跡発掘のプロとして名を馳せる彼は、ジュエルシードの発掘者であり、優秀な魔導師でもある。

そんな彼は今、事故によつて散らばってしまったジュエルシードを探して、第97管理外世界の地球にある日本という国へと来ていた。

「あれ？ ……何だこの人達は？」

そこで見たのは、ヘルメットをかぶり、空を気にしながら歩く大勢の人達。

この星はこんな文化なのか？ 等と疑問に思いながらも、ジュエルシードを探して街の捜索を開始しようとした。

そんな矢先、街頭のテレビが気になるニュースを流し始める。

『先日発生した、落下物と思われる宝石のような物により21名の犠牲者が出た事件についての続報です。』

事件当時に現場近辺を飛行していた飛行機やヘリコプターは無かった事が、警察の調査で明らかになりました。

また、宝石の調査を行っている研究所では、問題となっている宝石のような物はとても硬く、ダイヤモンドを超える未知の物質で構成されているという事も判明しました。

そのため、地球上で作られた物とは考えにくく、宇宙からの飛来物である可能性が高いとの事です。

今後も同様の飛来物が落下する可能性があり、今後はアメリカのNASAやロシアのРоскосмосとも協力し、宇宙からの微細な飛来物を発見できる体制を……』

「そ、そんな……！」

彼は、知ってしまった。

既に、ジュエルシードによる犠牲者が出てしまっている事を。

彼は、知ってしまった。

既に、ジュエルシードはこの地の国家権力の手にある事を。

彼は、知ってしまった。

どう考えても個人で回収できる状態ではなく、自分が見付けた物だからと責任を取ることが出来る状況でもなくなっている事を。

「……後は管理局に任せろべきだ。

国との交渉は個人でやる事じゃない。

輸送中の事故も僕のせいじゃないし、僕がここについて出来る事は、何もないはずだ。

僕はこれ以上ここにいるべきじゃない。管理外世界に必要な以上に長居しちやだめだ」

どうにか後ろ向きに自分を納得させ、地球を後にするユーノ。

彼は、知らない。

ジュエルシードが既に力を使い果たしている事を。

彼は、知らない。

彼が幼い頃の地球に来る物語が、ここにある事を。

彼は、知らない。

物語の舞台となる地も登場する少女達の姿も、ここにはない事を。

彼は、知らない。

◆◆ クーネ・ルアソープの実態（無印編29・5話） ◆◆

さて、ユーノくんを仮の主にする事も成功しましたし、エヴァちやんの可愛い反応も直に見る事が出来ました。特にエヴァちゃんは今身が男性とはいえ、やはりいいですね。リーナが熱を上げていたのも納得出来るというものですよ。あれだけのツンデ……レ？ うーん、私に対するデレは無いですね。これは困りました、天然モノのツンデレぶりも楽しみだったのですが。

それにしても、突然自由に動けるようになったのは驚きましたが……既に20人近くの転生者を確認済みですか。さすがエヴァちやんとチャチャちゃん達ですね。

しかし、ジユエルシードによる転生という事は、21人いる可能性が高いという事です。いやはや、踏み台君を曙天に引き当てなかったのは幸運だったのかもしれない。エヴァちゃんも夜天を助ける気である様ですし、ちよつと安心です。

問題は、どの様に過去のデータを渡すかですが……随分と嫌われてしまっていますから、突然送るのはダメでしょう。困りましたね、いい案が出そうにありません。

少なくともリリカルなのはのテレビ版3作やネギまの完結までを把握しているはずですし、ロリコンではなくとも、幼女に嫌悪感はないと思っていたのですが。二次元にしか萌えない人だったのでしょうか？

チャチャちゃん達に小言を言われるからと思えないくらい、本気で嫌悪されていたように思いますし。一緒に萌えて仲良くなる計画は残念ながら失敗です。

それにしてもこの世界は前世と微妙に違うのが厄介ですね。私の常識が乱れそうです。

漫画喫茶でネットを使えるのはありがたいのですが、こんな時代でも出来たのでしょうか？ 少々自信がありませんね。身元確認もありませんし……おかげで簡単に使えるのだからいいとしましょうか。

お金は、偶然見かけた方と優しくオハナシしたら頂けたので問題ありません。少女という世界の宝をお金で好きにしようなどという不届き物は滅びた方が良いでしょう。者じゃなくて物です。人として扱う事すら許し難いです。

ああ、どうも思考がそれで……む？ この気配は、チャチャちゃん達のサーチャーでしょうか？ 随分と捕捉が早いですね。SS級の魔導師からも楽に逃れられるジャマー結界を使っているのですが。エヴァちゃんが本気を出したとは考えにくいですし、チャチャちゃんも1人1人はSからSS級のはずなのですが。ここまで腕を上げているのは予想外です。

仕方ありません、情報を取られない様なジャミングも行いましょう。アースラや他の方のサーチャーは来ないようですし、チャチャ

ちやん達が居場所を漏らしていないという事は、ジャマー結界も維持すべきですね。

さて、今は前世とどの程度の差異があるかの調査中でした。テレビ番組は……何だか変なものが流行っている様ですね。

なんですか、このカメンジャーというのは。ライダーなのか戦隊モノなのか、はつきりしてほしいものです。しかもライダーの赤の星は3倍速のあの人にしか見えませんし、サブリーダーの白の月はみんな知ってるおじさんにしか見えないじゃないですか。黄の虎は上半身裸でレスラーパンツのマツチョですし、黒の夜は燕尾の様な服でマントをなびかせる気障男、空の蝶は槍を振り回す……ふむ、この胸の強調はなかなか色っぽいですね。絶対領域もいい感じですよ。

バイクに乗るのは月の人だけですか。やはり戦隊モノのようですが、蝶の人の恰好は子供番組としてどうなのでしょう？

いやいや、こんな事をしている場合ではありませんね。余計なものに捕まっています。ええと……やはり、リリカルなのはありますんか。まだ1期目も始まっていないはずですから、予想はしていましたが。とらいあんぐるハートもありますね。平和主義者ののちやんは失われているのですか……残念です。なのはちやんの魔王化を防ぐ方が現実的でしょうか？ ですが、それだとクロノ君とくつつけることになってしまいます。ううむ、ユーナの派とクロナの派と恋愛不要派おれのもので派閥戦争が勃発してしまいますから、これは成行きに任せるしかありません。

ふむ、ネギまもありませんね。持ち込まれたものを含む物語は消失したと考えて良さそうですね。私達が姿を見られても、それだけで騒ぎになる事態は無いという事ですね。その意味では安心です……む？ そうなると、平和主義者ののちやんや戦隊モノも持ち込まれているのでしょうか？ 少し調べてみた方が良いかもしれません。

しかし、恐らくネギまの代替だろうと思うのですが、シヨタ系主人公を肉食系おねいさま達が追い回すラブコメというタン塩の内容が気になりますね。後で少し読んでみましょう。

おや、魔物を狩るモノたちは初代の発売直後ですか。何とかしてP

ray Stariker 2を確保したいところですね。ですが、その前に自室を何とかしなければ、置く場所ありません。これは由々しき事態です。仮とはいえユーノ君を主としましたから、なのはちゃんの部屋にこのような物は……いえ、アリサちゃんやすずかちゃんとゲームをしている場面がありましたね。今度プレゼントしてみるのがよいかもしれません。

ああもう、やはりネットは余計な情報に目が行き過ぎます。情報収集はやはり妖精さんサーチャーズが一番良いですね。可愛いですしお利口さんですし、何より慣れすぎました。

これを実現させられる基盤技術を作ったエヴァちゃんやチャチャちゃん達は素晴らしいです。魂でコンピュータを作るなんて、良い意味でぶっ飛んでいますよ。おかげで私の記録能力も拡張出来たので、エヴァちゃんに隠し事もしやすくなりましたし。

ええと、地名の変化も調べたいのでした。これも重要ですが……グールさんはまだ地図サービスを始めていないのですね。うむ、やはり紙の地図頼みですか……おや、マップピョンはありますね。

ふむ……都道府県に差異は無いようですね。というか、海鳴市や遠見市に名前が変わり、その内部の町名も色々異なっている事以外はほとんど差異が無いように見えますが、これはどういう事でしょう。名称以外はほぼ同じ歴史を歩んでいるという事でしょうか？ これまで地球を移動先に設定出来なかった事が悔やまれますね。

私が勤務していた大学は……県立大学という点も一致していますね。建物の形も同じですし、県名を冠しているだけあつて名前も同じですか。懐かしいですね、この世界にも資料が詰め込まれた半力オスな物置があるのでしょうか。あの独特なおいが堪らないのですが……今の私は部外者ですし、入れてくれないでしょうね。残念です。

えーと、確かこの辺に私立の学園が……おや、風芽丘学園ですか。ならば、この辺の……ふむ、これが聖祥大学になっているのですね。ということは、付属小学校はこれですか。アリサちゃんやすずかちゃんを見付けるならここが簡単でしょう。ふふ、楽しみです。

翠屋は……公式なページは無いようですが、愛好家が紹介している

ページはいくつかありますね。やはりシユークリームとコーヒーの評価が高く、他も水準以上ですか。これは楽しみです。

場所は駅前の、なかなか良い位置のようですね。写真を見る限り、やはり若い女性が多い……ん？ これはチャチャちゃんじゃないですか。既に高町家にも手を回しているのですね。エヴァちゃんも手が早い……いえ、リンデイさんに転生の事を教えているのですから、なのはちゃんの家族にも説明済みなのでしょう。チャチャちゃんを配置しているという事は、余計な動きをする転生者もいるという事でしょう。ふむ、こちらも確認はしておくべきですね。

一旦情報を纏めましょう。

この世界は、意外なほど前世と同じ。文化面で若干の差異があるけれど、差異の原因は不明。少なくとも、私達が関係する物語は消失している可能性が高い。

エヴァちゃん曰く、転生はジュエルシードが原因。現状や転生時の説明を考えると……ジュエルシードの封印が制限解除のトリガーでしょうか？ そうだとすれば、なかなか悪辣ですね。

夜天やアースラの状況は、私達転生者が関与しなければ大きな乖離は無いようです。詳細は順次調査が必要でしょう。

エヴァちゃんが夜天を何とかしようとしているようですから、私に出来るのは側面からの支援程度でしょう。フルボッコの際に本気を出すに吝かでないのですが、それまでは裏方に徹するべきですね。それと、こつそりと邪魔者を排除するくらいでしょうか。

それくらいは、夜天の救済を押し付けてしまった私の責務です。逃げるつもりはありませんし、最悪の場合はこの身を盾にしてもエヴァちゃんを逃がす程度の覚悟もあります。しかしそれ以上に、エヴァちゃんに必要以上の責任を感じさせない事が肝要でしょう。

そうになると、エヴァちゃんの言動を見守る必要がありますが……迂闊に付きまとうと、より嫌われてしまいそうです。消極的な情報取得を優先した方が良いでしょうね。

私の位置はばれていて探ろうとしているのに、アースラに残した妖精さんはばれていないか見逃してもらえているようです。となると、

情報収集はなるべく妖精さんを中心に据えるべきでしょう。たまに私も付き纏う感じで、あまり出しやばらないくらいが良いでしょうね。

他に調べるべきは……ああ、先日のカリムの予言がありましたね。

『生きる人形が生み出される地』

幾多の魂が交錯し 死を厭わぬ者が血塗られた鎖を断ち切る

溶け行く氷が舞い 囚われた死者達が役目を終え

絶望に蝕まれた夜が 夜明けの祝福を受ける』

夜や夜明けは夜天や曙天の可能性が高いでしょう。生きる人形が恐らく戦闘機人かプロジェクトFを指すので、スカリエツティが絡むと思うのですが……いえ、エヴァちゃんの従者や使い魔も該当しそうですね。

夜天が曙天の祝福を受けると読めば治療成功と解釈出来るのですが、絶望や死を厭わぬ者といった部分が不穏です。夜明けが夜の終り……夜天の死を示している可能性が否定出来ませんね。囚われた死者がエヴァちゃんの従者や使い魔を指すなら、エヴァちゃんの死を暗示している可能性すらあるじゃないですか。

やれやれ、良く当たる占い程度とはよく言ったものです。どうとでも解釈できてしまいますね。

『道を外れた者が禁断の果実に手を伸ばす時』

目覚めた王は眠りの地に至り 偶像が実像となる

古き威厳は夢と共に失われ

真実を知る者達が 終わるべき力を新たな道へと誘う』

念のためもう一つ記録してきましたが、あまり該当する要素がありませんね。別の世界の事件かもしれませぬ。

道を外れた者が時間の逆行者、王がダイアーチエ、終わるべき力がユーリや碎け得ぬ闇を指すのであれば関係するだろうと思っただけですが……あれは偉そうに振舞うだけで、失うような威厳が無い王様です。ゲーム版の情報で有効なものがあるか、注意して見守る程度にしましょう。

ふむ、どちらも現状ではエヴァちゃんを惑わせる元にしかなりそう

にありませんね。現状では乖離しつつある原作知識の様なものでしょう。少々無理してカリムの所に行った手土産にしては残念な結果ですが、まだ誰にも教えない方が良いでしょうね。

聖王教会も古代ベルカ語の研究は進んでいない上に、予言もまだ重要視されていませんから、内容が判明するのはもう少し先でしょう。あちらでの解析が終わる頃にはもう少し情報や状況も見えてくると、楽観的に考えた方が良さそうですね。

現状の方針としては、こんなものでしょうか。

エヴァちゃん達から若干距離を置くなら、すぐに戻るのは下策ですね。情報収集は妖精さんに任せて、私はもう少しこの世界の調査を続けましょう。

まずは、タン塩からですね。まだ単行本が出ていないようなので、週刊少年漫画人のバックナンバー探しからですか。ふふふ、楽しみですね。

◆◆ フェイト・テストアロツサのキモチ（無印編38話裏） ◆◆

◆

母さんは、私に微笑んでくれなかった。

私が今まで生きてきたのは、母さんに認めてほしかったからだ。

どんなに足りないと言われても。

どんなにひどい事をされても。

あんなにはつきりと捨てられさえたのに。

母さんに私を見てほしい気持ちは変わってない。

ずっと傍にいてくれたアルフ。

何度も私を止めようとしてくれていたのに、私は耳を貸そうとしなかった。

今も心配そうに、私の顔を見てる。

きっと、随分と悲しんでる。

何度もぶつかった、白い服の女の子。

初めて私と正面から向き合ってくれた。

何度も争って、なのに、何度も名前を読んでくれた。友達になりたいと、言ってくれた。

アルフと一緒に、心配そうに私を見る。

今日初めて会った、金髪の女の子。

私を守れと、私を傷付けるなど、叫んでくれた。

言葉はきつかったのに、なぜか暖かい感じがした。

生きていたいと思ったのは、母さんに認めてほしいからだだった。

認められなければ、生きる意味なんてないと思つた。

でも、母さんにとつて、私はアリシアの偽物でしかなくて。

母さんが見てるのは……アリシアだけだった。

きつと、同じなんだ。

私が見てたのは、母さんだけで。

私を見てた人に、見向きもしないで。

「フェイトちゃん!」

「フェイト!? 起き上がって大丈夫なのかい!」

金髪の女の子は、助けるつて言つた。

よく解らないけど、きつと、母さんのこと。

助かったら、私みたいに気付いてくれるかな……

「ふえつ? レ、レイジングハート!」

「バルディッシュ! あの子に奪われたはずじゃ……何でこんなところ」

バルディッシュ……こんなボロボロになつて。

私を、ずっと支えていてくれたのに。

私は、頼るだけで何もしてあげられなかったのに。

『フェイトを娘として扱ってやれ』

この声は……金髪の女の子?

『娘達と過ごすための前提条件を整えると言つている』

娘達……母さんの娘は、アリシア。

でも、あの女の子は、私も娘と呼んでる。

『家族を、改めて始めてみるのもいいと思わんか?』

私は……私達の全ては……まだ、始まつてもいなかったのかな。

始めてもいいのかな……

いや、違う。

始めたいんだ。私達の、全てを。このまま……終わりたくない。

「フエイト!？」

ああもう、バルディツシユもこんなボロボロで何をしようってんだい!？」

「アルフ……ごめん。」

もう一度だけ、わがママを聞いてほしい」

「フエイトちゃん、わがママって……」

「母さんと、もう一度話がしたい。」

このまま見てるだけなんて、このまま終わってしまうなんて……嫌だ」

そうだよね、バルディツシユ。

母さんに伝えよう。私の言葉を、気持ちで。

無印編まとめ：登場人物の現状メモ

◇◆◇ 転生者（対応するジュエルシードの番号順） ◇◆◇

●シリアル01：齊場 有人（死亡済み）

外見は、セイバー（Fate／Stay night）。だけど男性。中学2年生。

判明している能力は、限定的だが効果が確認されたニコポ。

対応ジュエルシード封印Ⅱ制限解除の前に、成瀬カイゼに殺害された（無印編08話）。

●シリアル02：クローネ・ルアソープ（変態）

外見は、アルビレオ・イマ（魔法先生ネギま！）。20代くらいの成人男性。

判明している能力は、魂（同時に記憶）の蒐集、高度な転移や幻影等の魔法。

宵天の歴史書の管制人格。エヴァンジュの兄にあたるが、本人は保護者気分。

魔力光は、紫色。

●シリアル03：板井 亜土夢（死亡済み）

外見は、上条当麻（とある魔術の禁書目録）。高校1年生。判明している能力は、幻想殺し。

対応ジュエルシード封印Ⅱ制限解除の前に、成瀬カイゼに殺害された（無印編08話）。

●シリアル04：杉並 英春（施設在住）

外見は、デユナミス？（魔法先生ネギま！）。小学2年生相当で特定に至っていない。

判明している能力は無い。生活に支障が出る程度のナニカ。魔力量はAAAクラス相当（無印編08話時点）。

人を見下す様子があるが、オリ主様どころか踏み台にすらなれていない。

魔力光は、茜色。

●シリアル05：下出しもで 来人らいと（死亡済み）

外見は、クルト・ゲードル（魔法先生ネギま！）。高校1年生。

判明している能力は無い。割り箸型の低機能ストレージデバイスを所有していた。魔力量はBクラス相当（無印編03話時点）。

ギル・ガームスとジュエルシールドを奪い合おうとした際に包丁で刺されて死亡（無印編23話）。

●シリアル06：夜月よつき ツバサ（人間不信）

外見は、アーニヤ（魔法先生ネギま！）。小学3年生。

判明している能力は無い。魔力量はAクラス相当（無印編16話時点）。

魔力光は、薄茶色。

●シリアル07：チクアープ（エヴァの協力者。魔法的にエヴァの生徒）

外見は、ネズミⅡ長谷川千雨の電子精霊と、犬上小太郎（共に魔法先生ネギま！）。

判明している能力は、コンピュータの中に入ったり、通信網や電波に乗って移動したり、増えたり。

何故か怪しい丁寧語キャラ。本人の魔力量はAAクラス（無印編21話時点）で、エヴァから多数の人工リンカーコア（S×1、AA×2、AA×3、A×5）と入門用デバイス12個を貰っている（無印編28話＋無印編35話）。

ジュエルシールドの影響でネズミが変異したと思われるという扱いになっている。

魔力光は、黒色。

●シリアル08：真鶴まなづる 亜美あみ（魔法的にエヴァの生徒）
外見は、那波千鶴（魔法先生ネギま！）。保育士として保育所に勤務。

判明している能力は、探し物と治療。また、健康で病気にならない。魔力量はBクラス相当（無印編09話時点）。

転生後では唯一の、成人している日本人。エヴァから入門用デバイスを貰っている（小話ズ その3）。

魔力光は、黄色。

●シリアル09：（不明）

各種能力や捜索に引っかけかかっていないため存在自体が未確認。死亡していると予想されている。

●シリアル10：東 渚あずま なぎさ（謎）

外見は、ナギ・スプリングフィールド（魔法先生ネギま！）。高校1年生。

判明している能力は、転生特典の無効化？ 魔力量はSSクラス相当（無印編05話時点）。

オリ主・踏み台系で最も動きの無い人物。

魔力光は、赤色。

●シリアル11：上羽うえは 天牙てんが（ぶ愁傷様）

外見は、ウエイバー・ベルベット（Fate/Zero）。高校1年生のもやしっ子。

判明している能力に、特筆すべきものは無い。微妙な才能で魔法が使える程度。魔力量はAクラス相当（無印編28話時点）。

もやし体型。空戦向きの素質らしいが魔力控えめで、陸戦用高性能デバイスを2個持つ（無印編41話）、恵まれてるのか恵まれてないのか微妙な人。

魔力光は、薄緑色。

●シリアル12：セツナ・チエブルー（エヴァの協力者。魔法的にエヴァの生徒）

外見は、桜咲刹那（魔法先生ネギま！）。外見年齢的にもほぼ同じ（中2〜中3相当）。

判明している能力も、桜咲刹那相当。翼があつて飛べるとか気を使った剣術とかの意味で。魔力量はAAAクラス（無印編31話時点）。

元男性で、無印編後半まで別の世界で命懸けの生活をしていた。今はエヴァから入門用デバイスを貰つて（無印編32話）魔法の練習中。ジュエルシードの犠牲者扱いとなつていて、囑託魔導師になる事を前向きに検討中。

魔力光は、緑色。

●シリアル13：馬場^{ばば}鹿乃^{かの}（非介入）

外見は、イस्कन्दル（Fate/Zero）。高校1年生なのに髭面。

判明している能力は、ナデポ（但し撫でられると相手に惚れる）。魔力量はCクラス相当（無印編08話時点）。

特典による心の支配を求めた自分に嫌悪感がある模様。翠屋に来店した事はあるが、介入の気配は無い。また、ジュエルシードの反応がある自動人形の老執事が育ての親。

魔力光は、茜色。

●シリアル14：成瀬^{なるせ}カイゼ（エヴァの協力者。魔法的にエヴァの生徒）

外見は、フェイト・アーウェルンクス（魔法先生ネギま！）。小学5年生相当。

判明している能力は、暗殺者としての技能と、他の転生者の位置特定能力。魔力量はAAAクラス（無印編36話時点）。

地球上に戸籍等が無く、現在はアースラに搭乗。囑託魔導師になる事を前向きに検討中。エヴァから入門用デバイスを貰っている（無印

編28話)。

以前所属していた犯罪組織の情報を売った事で、地球の戸籍を確保しやすい状況となっている。

魔力光は、青色。

●シリアル15：金子かねこ 狗太こうた（未介入？）

外見は、ステイルIIマグヌス？（とある魔術の禁書目録）。中学3年相当。

判明している能力は、魔力から金ゴールドへの変換資質。物理的な物を生成する、とてもレアなもの。魔力量はSークラス相当（無印編28話時点）。

雌犬とか叫ぶ危険人物。でも犬には好かれる。

魔力光は、茜色。

●シリアル16：エヴァンジュ（主人公）

外見は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル（魔法先生ネギま！）。

判明している能力は、一言で言えば色々チート。特に妹達。本来の魔力量はSSSの条件を軽く超える（無印編02話時点）。

曙天の指令書の管制人格。精神的に弱い事が一部の人に露呈済み。

魔力光は、銀色。偽装時は色も白色になるようにしている。

●シリアル17：長宗我部ちようそかべ 千晴ちはる（魔法的にエヴァの生徒）

外見は、長谷川千雨（魔法先生ネギま！）。高校1年生。

判明している能力は、魔力感知と探知魔法無効。何となくでコンピュータ関係を扱う事も可能。

魔法に係わる気は無かったが、魔力感知で知ってしまう事に耐え切れず、結局魔法の練習をする羽目に（無印編22話）。エヴァから入門用デバイスを貰っている（小話ズ その3）。

魔力光は、深紫色。

●シリアル18：ギル・ゲームス（逃亡中）
外見は、ギルガメッシュ（Fate/stay night）。大学1年生。

判明している能力は王の財宝だが、所有品の召喚能力になっている模様。魔力量はAAクラス相当（無印編08話時点）。

何故か俺様キャラ化。ジュエルシードを奪い合おうとした際に下出来人を殺害、現在は殺人犯として指名手配されていて逃亡中。

妹達による捜査妨害等により、今のところ捕まる予定は無い。理由は「小話ズ その2」にて。

魔力光は、赤色。

●シリアル19：黒羽 早苗（自覚の無い介入者？）

外見は、四葉五月（魔法先生ネギま！）。小学5年生の男の娘。

判明している能力はおサルのおーラだが、効果等は不明。魔力量はAAクラス相当（無印編08話時点）。

実質的にアルフとフェイトを餌付けしているように見える（小話ズ その2 など）。料理は上手だが特典か不明。

魔力光は、茜色。

●シリアル20：間宮 萬太（現実逃避中）

外見は、衛宮士郎（Fate/stay night）。中学2年生。

判明している能力はエミヤの能力だが、ナイフや小刀の投影のみ確認済み。魔力量はDクラス相当（無印編05話時点）。

無印編30話でアコノに心を折られていて、現在引き籠り中。

魔力光は、紫色。

●シリアル21：小野 アコノ（主人公2）

外見は、近衛木乃香（魔法先生ネギま！）。見た目中学生の小学4年生。

判明している能力に特筆すべきものは無い。曙天の指令書の主で、

要するにエヴァンジェのご主人様。魔力量は恐らくSSクラス以上
(無印編02話時点)。

原作のはやてと同様に下半身が麻痺していて、かつ沈着冷静という
名の感情消失状態ではあるが、行動力はものすごい。

魔力光は、淡赤色。

◇◆◇ 転生者でない&リリカルなのはシリーズに登場しない人
物 ◇◆◇

●チャチャゼロ、チャチャマル

外見は、それぞれチャチャゼロ、茶々丸の後期型(魔法先生ネギま
!)

曙天の指令書(エヴァンジェ)の防衛プログラム。
チャチャゼロはお父さん、チャチャマルはボケ。

●チャチャシスターズ(妹達)

外見は、学園祭で登場した茶々丸の妹機(魔法先生ネギま!)

曙天の指令書(エヴァンジェ)の補助魂魄。現在、1万人を目指し
て増員中。

地の文担当だが、最近はスキル「はっちゃける」を習得しつつある。
現在、表に出ているのは以下の4人。

・高町家のチャチャ：翠屋で桃子の弟子をしている。高町家居候。
・八神家のチャチャ：はやての手助けをしに、主に夕方頃や休日に
八神家に入り浸っている。

・月村家のチャチャ：月村家でメイドをしている。月村家居候。

・道場のチャチャ：高町家の道場で、他の転生者達への指導等を担
当している。必要時のみPOP。

●エヴァの従者

金髪美女の料理主任、茶髪シヨタの農場管理主任 など、別荘に約
2000人。

放置プレイで忠誠心が発酵したので、増員禁止中。

●エヴァの使い魔

銀髪美中年の設備管理主任など、別荘に約100人。こちらも忠誠心が発酵済み。

地球に地域浸透担当がいるが、登場していない。

多くの次元世界に時空管理局の本局までの通信維持担当がいるが、やっぱり登場していない。

別荘管理担当以外は寿命延長無し。忠誠心が発酵する前に寿命を迎えてもらう予定。

●リーナ・ファ・ニピン

妹達が主様と呼ぶ、曙天エヴァンジェリオンの指令書の初代&先代の主。

●デイラン・ヒューイット

アレクトロ社の元社員で、ヒュードラ開発時にプレシアの助手をしていた。

その後は時空管理局の地上本部で犯罪者相手に奮闘し、現在は陸上警備隊の連隊長（一佐）になっている。

●榎原医師

榎原内科医院の院長の息子。アコノの主治医で、海鳴大学病院の石田医師（はやての主治医）と協力して治療方法を模索している。

ちなみに、院長が榎原愛（榎原動物病院の院長）の叔父。

◆◆ 原作に登場する人物 ◆◆

●八神はやて

ギル・グレアムの思惑などを教えられており、偽装などにも協力している。

魔法や夜天の魔導書（闇の書）についても勉強中。でも、まだ魔法を使えない。

※闇の書にリンカーコアを奪われていないため、正確には「使えるかもしれないが、負荷的に危ないため禁止されている」状態。

魔力光は、白色。

●夜天の魔導書（闇の書）の管制プログラム

未起動状態で、管制通信でも話は出来ていない。名付けもまだ。

●夜天の魔導書（闇の書）の防衛プログラム

防衛プログラムは、現状を報告可能な程度に起動している？

●守護騎士（シグナム、ヴィータ、シャマル、ザファイラ）

はやてに似顔絵を見られていて、先行して騎士甲冑（防護服）のデザインが行われている。

本人達は目覚めておらず、はやてに名前も知られていない。

魔力光は、それぞれ赤紫色、紅色、ミントグリーン色、白色。

●高町なのは

悲しい場面や微鬱展開の多くを回避し、集束砲撃の無茶もしないままジュエルシード事件が終了。

デバイスやバリアジャケットが映画版（1st）で、戦闘能力は高め。

魔力光は、桜色。

●高町士郎

とらいあんぐるハートの設定（御神真刀流小太刀二刀術）の適用が確定済み。

既に魔法について知らされているが、元々少しの知識はあった模様。

●高町桃子

既に魔法について知らされている。

高町士郎の妻という事を考えると、多少は知っていても不思議ではないが、真実は闇の中。

●高町恭也、高町美由希

とらいあんぐるハートの設定（御神真刀流小太刀二刀術）の適用が確定済み。

既に魔法について知らされている。

高町桃子と同じく、多少は知っていても不思議ではないが、真実は闇の中。

●月村忍、月村すずか

とらいあんぐるハートの設定（夜の一族）の適用が確定済み。

既に魔法について知らされているが、少なくとも忍は管理局について知識があつた模様。

ト ●ノエル・K・エアリヒカイト、ファリン・K・エアリヒカイト

とらいあんぐるハートの設定（自動人形）の適用が確定済み。

既に魔法について知らされているが、少なくともノエルは管理局について知識があつた模様。

●アリサ・バニングス

既に魔法について知らされている。

●プレシア・テストロツサ

生存&若返り&体調が万全に。

現在の肉体年齢は30歳くらいで、魔力量もS→Sクラス相当にまで復活している。

魔力供給用の駆動炉in時の庭園を失っているため、SSクラスの魔法は使えない。

魔力光は、紫色。

●アリシア・テスタロッサ

蘇生成功。但し身体機能の低下が激しく、リハビリ中で普段は車椅子も使用中。

リンカーコアが強化（推定AA〜Sクラス）されている。

魔力光は、空色。

●フェイト・テスタロッサ

プレシアの娘&アリシアの妹を自任し、書類上もそうなる事が決定済み。スターライトブレイカーの洗礼を受けておらず、リボンの交換もしていないが、なのはと友人関係ではある。

デバイスやバリアジャケツトが映画版（1st）で、戦闘能力は高め。囑託魔導師になる事を前向きに検討中。

魔力光は、金色。

●アルフ

プレシアを攻撃していない&撃墜されていない。プレシアが生きていることに不満があるが、あまりフェイトの役に立てていないと若干落ち込み中でもある。

魔力光は、茜色。

●ユーノ・スクライア

ロリコンクーネに憑かれたが、今の所あまり影響は無い（クーネ登場時以外まるで関係していない）。

なのはをちよつと意識していたり、無限書庫が気になったりするお年頃。

魔力光は、薄緑色。

●リンディ・ハラオウン

管理局対策の情報操作担当に、強制的に任命された。

魔力光は、ミントグリーン色。

●クロノ・ハラオウン

今のところは、原作と比べて大きな差は無い。たぶん。魔力光は、青色。

●エイミー・リミエツタ

今のところは、原作と比べて大きな差は無い。きつと。魔力光は、水色。

●アレックス・オーラム

アースラのスタッフ。姓がついた。

●ギル・グレアム、リーゼロッテ、リーゼアリア

基本的に原作通り。

リーゼアリアがはやてのヘルパーや認識障害のメンテナンスの為にたまに八神家に来るが、はやてやエヴァが闇の書に関して動き始めている事は知らない。

今は次元震の影響で空間が安定していないため、地球まで来る事が出来ない状態。

リーゼ姉妹の魔力光は、青色。

●最高評議会、ジエイル・スカリエツティ、レジアス・ゲイズ

エヴァから見た印象&評価がロープレスバンジー中。レジアスは割と巻き添えな感じだけど。

アンチ・ヘイトのタグはこの人達の為に？

●カリム・グラシア

変態^{ロリコン}の被害者。寝顔の撮影と、予言を知られたという意味で。但し、被害の自覚の有無は不明。

●オーリス・ゲイズ、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト

変態ロリコンの被害者、寝顔の撮影という意味で。
但し、被害の自覚の有無は不明。

●石田幸恵

海鳴大学病院の医師で、はやての主治医。
未登場だけど、名前は出ている。

●クライド・ハラオウン

故人。リンデイの夫で、名前は出ている。

●リニス

故人？ 妹達が何度か言っているだけだが、一応名前は出ている。

○鮫島

バニングス家の執事は、なんと未登場。名前すら出ていない。

○槇原愛

動物病院の院長。無印編開始時点で原作での出番が終わっていたため出番無し。

◇◆◇ デバイス ◇◆◇

●レイジングハート

映画1st版のデザインの、ミッドチルダ式インテリジエントデバイス。
使用者は高町なのは。

●バルディッシュ

映画1st版のデザインの、ミッドチルダ式インテリジエントデバイス。
使用者はフェイト・テストロッサ。

● S2U

ミッドチルダ式ストレージデバイス。ちなみに映画1st版のデザインだけど、差異は小さい。

使用者はクロノ・ハラオウン。

● 黒龍

エヴァ製、真正古代ベルカ式アームドデバイス。扇型でカートリッジは64発、同時ロードにも対応する高出力型で、処理速度に特化した構成となっているため安定性が犠牲になっている。

喋る前に放てという設計思想によりAIが発言する事はほぼ無く、処理能力の大半を魔力制御や威力調整に振っている。

使用者はエヴァ。

● コチノヒオウギ 東風檜扇、ハエノスエヒロ 南風末広

エヴァ製、真正古代ベルカ式インテリジエントタイプのアームドデバイス。扇型でカートリッジはそれぞれ32発、同時ロードにも対応する高出力型だが安定性優先の設計となっていて、多くの魔法を扱うためにキャパシティも大きい。

専用品より性能は落ちるものの、ミッドチルダ式の魔法も扱う事が可能。1機でも十分な性能を発揮するため2機同時使用で高ランク魔法の並行行使も可能だが、術者への負担もとても大きい。

使用者はアコノ。

● 入門用デバイス（通称）

エヴァ製、真正古代ベルカ式インテリジエントタイプのアームドデバイス。カートリッジシステムは非搭載。AIは指導用に調整しており、魔法の行使能力は低め。

リミッターを解除しても、AAAクラスの魔力での魔法行使に耐えられるのは数回程度。

使用者は、カイゼ、チクアープ（12機）、セツナ（棒型）、亜美（カード型）、千晴（ブレスレット型）。

●サム

転生特典の、ミッドチルダ式インテリジェントデバイス。
起動後は黒いリストバンドで、近接戦用の魔法しか使えない。
使用者は上羽天牙。

●アドン

転生特典の、ミッドチルダ式を基本とするユニゾンデバイス。ユニゾンすると黒ブリーフで全身艶々ワックスの半裸状態になる。
使用者は上羽天牙だが、事故寸前の不安定さ。

●割り箸（仮称）

転生特典の、ミッドチルダ式ストレージデバイス。
使用者は東渚。ギル・ガームスも所有しているが、破損済み。

A×S編01話 手を伸ばす先は

お姉様は元気が無い。気合と根性で事後処理の打ち合わせを終えた後は、やる気も地を這う勢いで低下中。

何をする気にもならないという事だったけど、主が八神はやて宅に行く際に連れ出した。

今は5月9日、日曜日のお昼を過ぎたところ。クローンショックから、まだ16時間ほどしか経過してない。

「はあ……こんな顔で会いに行くのはどうなんだろうな」

「人間、元気な時もあるれば元気がない事もある。

やる気が出る日も出ない日もある。

この際、はやてに甘えてみるのもありかも」

「いや、さすがにそれは無理だ。

意識がある時間だけで言っても、40歳を超えてるからな。8歳に甘えるのは心が抉られるから、別の意味で落ち込む自信があるぞ」

「それは自信たっぷりと言う事じゃない」

「仕方ないだろう、私から見ただけはやては娘と言っているいい年齢なんだ。

どこぞの変態ロリコンじゃあるまいし、甘えさせるならともかく、甘えるのはなけなしのプライドが許さん」

「でも、私には甘えてほしい。

年齢はともかく、立場だけで言えば私が上。

前世がある分、はやて達より差も小さい。少なくとも娘と呼ばれる程の差は無い。

大きな問題は無いはず」

「確かにはやてよりは問題無いんだが、それでもだな……………」

「外見的には、私の方が年上に見える。

それに、私は甘え方が分からなくなっている。

甘え方を思い出させてほしい」

「それを盾にするか。

まあ……考えておこう」

やっぱり、お姉様は恥ずかしそう。

ちよつと顔が赤い。

元成人男性としての意地と、弱さを見せてしまった羞恥心？

「うるさい。いちいち心を抉るな」

お姉様が拗ねそう。

これ以上は禁止。

もうすぐ八神家に到着する。

というわけで、八神家に到着したお姉様と主。

既に勝手知ったる家であり、八神家のチャチャもいる。家主が玄関に出るまでもなく入り込み、そのままティータイムに。

勉強はちよつと後回しで、お喋り開始。

「よーするにや、今まで抱えてた厄介事が片付いたって事やね？」

「その中でも大きなものが、ではあるがな。」

考えていた協力者も確保出来たし、準備は順調だ」

最初の話題は、ジュエルシード事件と、現在の状況について。

どちらも、それなりに良い形だと言えるはず。

「そつかあ。出来れば一度会ってみたいんやけど……」

「今日明日というのは、難しいな……来週にでも会えないか、話をしてみるか。」

なるべく大勢で集まれるよう話をしてみよう。それでいいか？」

「うん、ええよ。」

大勢かあ……なんかお祭りみたいや」

「どれくらい来るかによるが、賑やかになるだろうな」

顔合わせも兼ねて、全員に会わせる？

時空管理局組、エアーストラ協力者組、テスタロッサ転生者組、現地組、全て？

（全員だな。可能な範囲で調整してみてくれ。少なくともプレシアとリンディは必須で、他は調整出来ればで構わん）

了解。

そんな話や普通の世間話等をしつつ、ティータイム続行。

そろそろ勉強を始めるかと準備しようとした時。

「あんな、ちよつとお願いがあらんやけど……」

八神はやてが、上目づかいで何だか言いくそうにしてる。

「私……だけではなさそうだな。私とアコノにか？」

「ものすごく身勝手なお願いやと解ってるし、無理なら無理で仕方ない内容なんやけど……」

「お願いします、私のお姉さんになってください！」

「えーと……念のために確認するが、どんな内容だ？　というか、どんな理由だ。」

「日常生活面か？　戸籍や法律的な物か？　まさか、百合的な物では……」

「いやいやいや、流石にそれは。」

「やっぱり、1人暮らしは心細いし……うん、一緒にいる人が欲しいんよ。」

「それに、アコノさんはあんまり家族とうまくいってる様に見えるへんし、エヴァさんも表に出やすくなるんとちゃう？」

「認識阻害を解除した弊害？」

「守護騎士が来るまで待てなかった模様。」

「でも、主と家族の関係は確かに非干渉過ぎるけど、それにしては何だか違和感。」

「決して嫌われているような感じはしない。手を出しあぐねてるような感じにも見える。」

「一緒にいる事については、たまに泊まりに来る程度なら問題ない。」

「現状で姉になる事は難しいはず。車椅子の子供が2人で住むと言う状況は、いくら認識阻害をしても違和感が大きすぎる。」

「だけど、家族になるという提案自体は、悪くないと思う」

「そうか？　グラム対策やらで面倒なことになりそうなんだが」

「私の家族は裏側の人間じゃない。私達が地球を離れる可能性も無いわけじゃないし、不老についても正確な説明が出来ない。近い将来に離れる事になるのは確定している。」

「それなら、問題が起きる前に離れておくのは無難な手と思える」

「現在の計画通りに進めば、八神はやても不老不死化する。」

「戸籍やらの書類的なものはどうにかするとしても、人間関係的な部分は将来的に問題となる可能性が高い。」

「そつちの対処か……確かに、家族としてまとめて色々誤魔化せる方が、楽そうではあるか。」

だが、車椅子2人という状況はどうするんだ？　せめて守護騎士が来てからなら、説明もしやすいと思うが」

「大人が居ればええの？」

「大人が必要なら、エヴァとチャチャが大人の姿になって先に同居している事を装う方法もある。」

外見をある程度変えられるはずだから、説明する時に姿を変えれば説得力を持たせることは出来るはず」

「いや、それはそうなんだが……」

偽装を止める目処は立っていないし、迂闊な事をすれば猫共も感付くはずだぞ？」

戸籍については、月村家か高町家に相談すれば何とかなる可能性が高い。

フェイト・テスタロッサの隠れ家を用意出来て、アースラの現地拠点も確保出来る程度の伝手が、時空管理局にはある。その伝手の一端を担っていた以上、心当たりが無いとも思えない。

餅は餅屋。疑われても問題ないような偽装方法を相談出来るはず。

「今から戸籍を用意するなら、大人の姿で確保してしまった方が便利。子供では出来ない事も多いし、外見が変わらない点も大人の方が疑われにくい」

「いや……まあ、確かにそうなんだが、この姿と本以外の外見は、あくまでも一時的な物だ。使ったことが無いから、どれくらい変えていられるかも解らん」

こんな事もあるうかと、お姉様の記憶から大人の姿の構築も完了済み。

ついでに補助の姿として負荷が小さくなるよう最適化も進めてる。現状での最大連続使用時間は約10日間。変形時の負荷は5分で回復出来る程度、変形中の負荷は使用時間の半分程の時間で回復出来る水準に抑えられたはず。

幻影を併用したり、人前に出ない時に本か現在の姿に戻ったりすれ

ば、ほぼ常用可能な計算。

姿を大きく変えるほど、負荷が大きくなる。計算上では、蝙蝠だと半日で限界になる。限界からの回復はどの姿を使用した場合でも5日ほど。

「それなら、早めに試そう。大人バージョンのエヴァンジェリンなら全く問題ないはず」

「……お前ら、いつの間に」

また呆れられた。

頑張ったのに。

「えーと、エヴァさんは大人になれるん？ 魔法って凄いなあ。

私も夜天の魔導書の主になったら、この姿のままになるんやろ？
似た事が出来るなら便利そうや」

「大人モードを実現する魔法は存在するはず。

術式は……見付けてる？」

ベルカ式の魔法が存在する事は確認済み。Vividで使われていた身体強化による大人モード。

個人毎に調整が必要だから今すぐに使う事は難しいし、そもそも八神はやては現時点で魔法を使えない。正確には使わない方がいい。

「あー、まあ、2人は調整すれば可能……らしい。

そんな期待した目を向けるなはやて。とりあえずサンプルを見せるから、術式を確認する間くらい待て」

構成情報転送、実体具現化回路への介入を開始。

ベルカ式とは異なる手法だけど、外見への影響は似たようなもの。

見本用に、ベルカ式の魔法陣を展開。

外装変更。

「ん、この姿は……」

お姉様もびつくり？

設定年齢は22歳。スレンダー気味だけどボン・キュ・ボンの色気たっぷりスタイルに、不自然じゃない程度に長い脚。服装はあえて大人の女性を演出、黒いナイトドレス露出多め。

具体的には魔法先生ネギま15巻、ネギ・スプリングフィールドと

デイナーを食べてるエヴァンジェリンの外見。

奇を衒わず、正統派をとことん追求したバランスの良い美女。身長もヨーロッパの成人女性の平均身長を参考にした165cm。

髪の前から爪の先まで、どこを出しても恥ずかしくない出来。超頑張った。

八神家のチャチャの視覚情報をお姉様に転送。鏡よりも良く見えるはず。

「……………と、とにかく服を変えろ！」

「ジーンズでも何でもいいから、は、早く！」

「お姉様・いん・ぱにつく？」

「顔が真っ赤。必死で体を隠して蹲ってる。」

「ここまで慌てるのは予想してなかった。」

「ひよつとして、大人の自分が見られるのは恥ずかしい？」

「なんか、元が男の人やってのが解る反応やな。」

「私なら大喜びする破壊力やのに」

「お姉様の服装変更完了。」

今は、濃い色のジーンズに白い長袖のワイシャツ、その上に紺のベストを着た状態。

「外見的に、茶目つ気を出して男装風にしようとしてみた美女。」

「その服装なら落ち着ける？」

「……………すまん、取り乱した。」

「参ったな……………女の体や裸にも慣れたつもりだったんだが」

「服装が変わって、とりあえずお姉様は立ち上がった。」

「まだ顔は赤いし、服装と言うか、露出や服の隙間をものすごく気にしてる。」

「随分慌てとったな。」

「でも、美人さんやなあ。それに、この辺も……………」
ふに、つと。

「久しぶりに、八神はやての右手が暴走？」

「既に車椅子から落ちて、お姉様に倒れこむようになってる。」

「ちよつと待て、何をする!?!」

「こういうのは、荒療法つてのがいいんやない？」

それに、こんなことするのは久しぶりや」

八神はやては揉むのを止めて、顔を埋め始めた。

何をとか、何にとかは、あえて言わない。

凄くぼかして言えば、いい笑顔でお姉様に抱きついてる、になる。

「……全く、無茶をする。怪我でもしたらどうするつもりだ？」

「エヴァさんやチャチャちゃんがあるんならハマをすればと思えへんよ。」

それに、他人を頼ることも考えた方がいいってアコノさんも言ってたんやし、アコノさんはエヴァさんのご主人様や。エヴァさんがこの姿で大人の役をするって事はお母さんか年の離れたお姉さんやし、頼りになる家族のエヴァさんを頼るのは問題ないはずや！」

何と言うドヤ顔。

でも、大枠としては否定出来る要素が見当たらない。主の発言は確かにあったし、姉になる話についても拒否してない。

「確かにそうなんだが……」

お姉様が苦笑しながらため息をついてる。

パニックを有耶無耶にされた事には気付いてるはず。策士八神はやての片鱗を見た気がする。

「だけど、そこまで取り乱す理由が解らない。

同じくらいスタイルのいい従者もいるし、幼くても20年以上女性の体だったのに」

「いや……前世は男だという事は知ってるだろう？」

その時の感覚はまだあるんだ。それに、チャチャの視線が胸元やらに向けていてな。だから……なんだ。男がどこをどうという目で見るのか、思い出してしまっただけな」

「幼い少女だからと、そういう目で見られる可能性を無意識に除外してた？」

「いや……ああ、そうか。そういう事になるのか。」

自分の体に色気のようなものを感じなかったから平気だっただけで、自分の体に色気を感じて、それを見られる事を自覚したのが駄目、なんだな……」

未だに引きずってた。

というか、意外な自己防衛方法だった。

「そうなん？ 女の人は見られて綺麗になるって聞くよ？」

「私の精神は男なんだ。その感覚は理解出来ん」

「そっか。でも、今はお母さんや」

「せめて姉にしてくれ……」

「よし、言質取った！

これからはエヴァお姉ちゃんや！」

「……しまった」



その頃、アースラでは。

「か、母さん……っ？」

「え？ えーと……誰だい？」

フェイト・テストロッサとアルフが、混乱している！

プレシア・テストロッサとリンディ・ハラオウンの打ち合わせと、フェイト・テストロッサとアルフにクロノ・ハラオウンが事情を説明し終わった後で、テストロッサ家全員の顔合わせが行われている。

参加者は、プレシア・テストロッサ、アリシア・テストロッサ、フェイト・テストロッサ、アルフ。立会人としてクロノ・ハラオウンもいるけど、部屋の片隅で静かに見守っているだけ。存在感無し。

でも、若返ったと聞いていたはずの2人は、絶句してる。見た目はともかく、雰囲気的には元のプレシア・テストロッサの面影があまり無いのが原因かも。

「フェイト〜」

アリシア・テストロッサは、満面の笑みでフェイト・テストロッサに手を伸ばしてる。

まだ自力で歩き回れるほどには回復してない。車いすに座ったまま体を起こしてる。

「姉さん、あまり体を乗り出すと危ないよ」

フェイト・テストロッサはアリシア・テストロッサの手を取ると、そっと体を押した。

「えへ。フェイト、おつきい〜」

ぽふ、と車椅子に寄り掛かったアリシア・テストロッサは、満面の笑顔でフェイト・テストロッサを見上げ、握ったままの手をモミモミしてる。

「え、えーと……プレシア……？」

ほのぼのとした空気の幼い姉妹を、穏やかな目で見ているプレシア・テストロッサ。

計算上、肉体年齢は30歳くらい相当のはず。随分と若々しい上に、雰囲気も柔らかい。

アルフは、まだ戸惑ってる。

「ええ、そうよ。」

今まで随分と酷い事をしていたという自覚は出来たし、今までの事、これからの事で話したい事もあるわ。

アリシア、フェイト。2人ともちよつといいかしら？」

「うん、ママ」

「はい、母さん」

言葉は確認みただけけど、言葉の圧力的な意味でちよつと命令っぽい。

少女2人の背筋が伸びた。

「まず、2人に謝らなくてはならない事があるわ。」

アリシアには寂しい思いをさせてきたし、フェイトには辛い思いをさせてきた。

振り返ると不本意だと思えるし、どうしてそんな事になったのか自分でも解らないけれど、私が行動した結果なのは消えない事実よ。

こんな私だけど、これからも母として認めてくれるかしら？」

「もっもちろん。ね、フェイト」

「うん。これまでも、これからも。ずっと、母さんは母さんだから」

「ありがとう、私の可愛い娘達……！」

プレシア・テスタロッサが、2人を抱きしめてる。

アリシア・テスタロッサは力いっぱい、フェイト・テスタロッサはおずおずとだけど、2人ともしっかりとプレシア・テスタロッサに抱きついてる。

テスタロッサ団子が出来てる。

「あと、アルフ」

「ア、アタシ？」

「そうよ。貴女はフェイトの使い魔として、2人を守る役目があるわ。

当面はそれ以上を求めないけれど、何かあつたら覚悟なさい」

ガサツだから求めても無駄だろうし、って聞こえた気がする。

リニスに比べると、マナーやらが欠けてるのは確か。

「あ……うん、それは当然だからいいんだけど……本当にプレシアなのかい？」

「私が、私以外の何かに見えるのかしら？」

「いや、ちよつと前に見た時とは別人だし」

「私が変わった証として納得しなさい。」

それと、今のままでは2人の教育に悪いわ。徹底的に教育しなさいから、アリシアとフェイトの為に頑張りなさい」

プレシア・テスタロッサの背後に、修羅が見える。

威圧感が半端ない。

教育ママ（でもアルフ限定）な親馬鹿になったらしい。

「は、はい……」

アルフが萎れてる。

ちよつと哀れかも。

A S編02話 隠れ家

その日の夜のうちに、まずはリンディ・ハラオウンと顔見せという名の親睦会の日程相談。

続いて、主要なメンバーと日程を調整。

その結果、今度の土曜にほぼ全員参加予定で集まる事が決まった。ちよつと人数が多いけど、集合場所は目印として通知しやすい翠屋になった。集合時間は開店前の迷惑にならない時間で、実際にどう動くかはアリサ・バニングスが張り切って決めるらしい。

同時に、お姉様と月村家のチャチャが月村忍と面会。

話の内容は、日本……と言うか、地球での戸籍について。

やはり伝手はあるけど、表向きの顔、つまり血筋関係や仕事等で協力者がいる方が、設定が作りやすいらしい。これについては八神家関係者となる事が前提条件だし、準備していた経営コンサルタントの会社が役に立つと伝えたら複雑な表情をされた。

どうも、会社については既に知られていたらしい。突然素行がマシになる問題会社がいくつかあり、その裏にある会社が何者か探りを入れていたとのこと。正体がわかって安堵する気持ちと、こんな事までしていたのかと驚く気持ちが混ざったらしい。

戸籍については、昭和の前半、つまり第二次世界大戦の前に海外へ移住した八神の血筋という感じが無難だろうと結論。変に近いとギル・グレアムが行ったはずの調査内容と齟齬をきたすし、外見が完璧に外国人なので、法的には親族と見られない程度の遠縁に設定。外見は大人状態で、八神エヴァンジュ、八神チャチャの姉妹が誕生する事になった。

準備に少々時間がかかるのは我慢してくれとの事だけど、それは仕方ない。八神はやてにも連絡して、納得してもらった。

説明する際にお姉様と月村家のチャチャが大人の姿を見せたら、着飾らないのは勿体無いか言われてた。お姉様は断固拒否。男の感性だから、本来は大人の女になった姿を見られるのすら苦痛だと言ったら、残念そうにされてた。

ちなみにシンプルなグレーのスーツ、スカートじゃなくてパンツ姿。

私達の大人モードは、チャチャマル似。元ネタから姉妹機だから仕方ないけど、大人モードでもショートヘアなのが私達。魔法先生ネギま！17巻で茶々丸3姉妹とか呼ばれた際の、真ん中の機体の髪を切って側頭部のユニットを外した感じに近い。設定年齢は20歳。普段は両脇の2機だから、印象はだいぶ変わる。

服装はお姉様に合わせたシンプルな紺のスーツ、一応スカート。5cm程のヒールで、お姉様と同じくらいの背丈にしてみた。

主の戸籍も、意外な事に主だけなら何とかなるらしい。とても古い、特殊な家系の断絶を防ぐ為の法がひっそりと残っていて、これを使えば、両親が亡くなっても兄弟姉妹になるという裏技が使えるとの事。色々制限はあるけど、八神はやての状態と目的、主と主の家族の関係を考えると、大きな問題とはならないと思える内容。

いくら裏社会が大きいと言っても、法的な裏付けがある手法というのは意外。餅は餅屋、相談して良かった。

詳しく話を聞くと、どうもお姉様の前世とは戸籍の扱い方が少し違う感じ。家長制度が限定的に残っていて、世帯主の責任と権限が強めだったりもする。この辺は、裏社会が強く残っている影響かもしれない。

この情報が確定した事に伴い、八神はやて本人の合意の元、ギル・グレアムから切り離す作業を開始する事が決定。

空間が不安定で猫が来れない今のうちに、八神はやての周囲を固める。具体的には、ギル・グレアムの親権の行使が不相当として、お姉様を未成年後見人とする事は確定。法的な盾になれる立場を確保する。

ついでに、ジュエルシード事件の報告書の名前を八神エヴァンジュに変更、お姉様と主についてのカバーストーリーも作っておく事にとりあえず、お姉様が主の魔法の師匠扱いになった。

そして、日が変わり、日中の訓練などが終了した時刻の今。

お姉様は、リンディ・ハラOWNとプレシア・テスタロッサの2人

を前に、たらーつと汗を流してる。

問題発言をしたのは、リンデイ・ハラオウン。内容は、別荘について。

提出用資料の作成という名の、闇の書に関するの現況を把握してもらうための情報交換をしたはずなのに。

「……それは、誰が言っていたんだ？」

「クーネさんよ。デバイスの格納領域を居住空間にする事の確認は、それを公開しても問題無いかの確認を兼ねていたのね？」

変態^{ロリコン}が口を滑らせた。

なんて迷惑な。

「アレが口を滑らせていたのか……うん、今すぐ焼くべきだな。アレをのさばらせておいて、いい事があるとはとても思えん」

「殺すのは待ちなさい。地球上には用意出来ない、魔法に関する研究室を作る場所としてどうかと提案されただけよ。」

時の庭園を崩壊させたのは貴女の都合なのだし、闇の書の対策を研究する名目がある以上は何らかの施設は確保すべきよ。惑星1つ分の広さがあるなら、研究所を作る場所くらいは確保出来るでしょう？

それほどの広さの空間を安定させる技術は流石だと思えるし、研究者の興味と言う意味でも、見てみたいわ」

「はあ……あれはあれで問題があるんだ。」

本来はもつと小さい、大きなビルくらいの空間を用意するつもりだったんだがな」

と言うか、運搬用に使ってる格納領域特化型デバイスを流用するつもりだった。

ちゃんと準備してたのに。

「別荘の公開に問題がありそうなら、それは対外的な説明として使えそうね。」

少なくとも人が住める環境で、従者が住んでいるはずと聞いているけれど……見る事に何か問題があるのかしら？」

リンデイ・ハラオウンは不思議そう。

確かに、環境自体には問題がない。

「……最大の問題は、その従者達だ。」

連れて行くのは、ここまで知られているなら構わんのだが……あいつらの前では絶対に私やアコノの悪口は言うな。宗教国家の首都で神を冒瀆する言葉を叫ぶのに似た結果を招くぞ」

「それは、従者が貴女の信者だとしても言いたいのかしら？」

プレシア・テスタロッサも不思議そうにしている。

外見を考えると、神様とか教祖とかには程遠いのは確か。

「リンデイには言っているんだが……従者にする術式には、私に対する忠誠心やらを植え付ける効果があるんだ。使い魔の様なものだと思ってもらえれば、だいたい合っているはずだ。」

その状態で2500年ほど放置したら、忠誠が信仰になってしまったらしくてな。程度は様々だが、大雑把に言えば狂信者の類になってしまっている。迂闊に私の敵だと思われたら、何を仕出かすか予想も出来ん」

「そう。それなら、少なくとも貴女の味方だと思われる間は問題ないという事でしょう？」

「そうね。それほど心配しなくてもいいんじゃないかしら？」

プレシア・テスタロッサとリンデイ・ハラオウンは、どうしても見たいらしい。

何だか余裕の表情。

「……やれやれ、何かあっても知らんぞ。」

それで、いつ行くんだ？」

「今からでも問題ないわ。そのつもりで来ているのだから」

「そうか。まあいい、行くぞ」



というわけで、別荘に転移完了。

足元には、いくつかの大きな円が書かれた、石畳の広場。

目の前に広がるのは、青い空と白い雲、広がる山野と農地、大きな建物がいくつつか。

建物は、アパート風だったり、オフィスビル風だったり、温泉旅館風だったり。

農地近くには、作業用具等の倉庫兼休憩所があったりもする。

「……これが、別荘？ 生成された空間なの？」

プレシア・テスタロッサが驚いてる。

明らかに異常な広さと、自然な光景。

もうちよつと閉じた感じを予想してたかもしれない。

「そうだ。明らかに異常な代物だろう？ 地形や気候は地球を再現し

ているし、広さも概ね同じくらいだと思っっている。

こんな代物は無闇に見せていいと思えんし、もう一度作れと言われ
ても不可能だろうが……存在が知られるだけでも、色々とな」

「そうね。明らかに異常だけれど……ロストログアとはそういう物だ
し、貴女の存在そのものも似たようなものでしょう？」

私達は貴女の正体を知っているのだから、必要以上に隠す必要は無
いわ」

「そうね。驚かないと言えば嘘になるけど、驚くような技術をエヴァ
さんが持っている事自体は不思議じゃないもの。

必要以上に情報を出すつもりもないし、どの程度知られたくないか
を予め教えてもらっておく方が、色々調整はしやすいわよ」

何だか、2人の態度が生暖かい。

確かに、一番ヤバそうな「アルハザードの最終兵器」という事が知
られてる以上、そこまで警戒する必要は無さそうだけど。

「……まあ、今のミッドの常識は知らんから、相談はさせてくれ。

それより、従者達への対応は間違えるなよ。外部の人間を入れるの
は初めてなんだ、どんな対処をしていいか私にも解らんからな」

お姉様が見てるのは、旅館風の建物から出てくる2つの人影、その
服装はヴィクトリアンなメイドさん。

1人は褐色肌で元気そうな雰囲気、黒髪ショートヘア少女のナ
ー
デイ。

もう1人は色白でお人形さん系無表情な銀髪ツインテール少女の
リル。

背格好が似た人物を見付けたからやっちゃったんだ、と言ったら、お姉様に呆れられた2人。

「彼女達が従者ね？」

リンデイ・ハラオウンもその姿を見て、お姉様に確認してる。

正確にはリルは使い魔で、魔法が使える。立場としての従者という表現なら間違ってるけど。

「そうだな。私やアコノが来た時は、侍女の様な役目を担当している者の中の2人だ。」

普段は確か料理関係が担当のはずだ。あいつらの茶や菓子はなかなかいいぞ？」

「その材料は、ここで作った物という認識で正しいのかしら。」

昔の資料で見た気がする植物もあるようだけれど……」

プレシア・テスタロッサは、別荘の環境の方が気になる様子。

今となっては珍しい植物は、確かに多いかも。

「2500年程前に集めて、食材関係はそれを品種改良したものが多いからな。」

あまり管理していない森の動植物はほぼそのままだろうが……今となっては滅んでしまった世界のものもあるかもしれない。

ああ、動植物の情報を集めたのは、あの変態だ。ロリコンその点だけは感謝しているよ」

「……それでも、ここの植生は学者にとって垂涎モノでしょうね」

そうこうしているうちに、ナーデイとリルが到着。

そして、一礼。

「ようこそいらっしやいませ！」

エヴァ様、今日のお客様は他にいらっしやいますでしょうか？」

目をキラキラさせて、ナーデイがお姉様に尋ねてる。

走ってきたせいか微妙に息が上がってるのを、頑張ってる。

「いや、この2人だけだ。とりあえず応接の方に通して、茶と菓子を頼む。」

私は少し設備の確認をしてから向かうからな」

「はい、了解いたしました！」

「設備の確認？　今する必要があるのかしら？」

ナーデイは元気に頷いてるけど、プレシア・テスタロッサは不思議そう。

「お前の研究室を作りたいのだろうか？」

空き部屋が無いならどうにかする必要はあるからな。とりあえずその確認だ」

「そう。なら、少し待たせてもらおうわ」

プレシア・テスタロッサの返事を聞き終えるころに、お姉様は転移。黙って黒龍を起動、ついでにカートリッジのロードまでこなす辺り、まだ実力を見せる気は無い模様。

「それでは、お二方はこちらへどうぞー！」

「ちよつといいかしら。お2人は、エヴァさんの従者という認識で間違っていないわね？」

案内しようとするナーデイに、リンデイ・ハラウンが質問。

お姉様が居ない事をいい事に、情報収集をするつもりらしい。

それを見越して席を外してるけど、随分とあからさま。

「はいっ！　エヴァ様の従者にして、今は侍女をやらせていただいております。」

名前はナーデイです。よろしくお願ひします！」

「同じく、リルです。よろしくお願ひいたします」

元気に頭を下げるナーデイと、静かにちよつとだけ頭を下げるリル。

少なくとも表面上は、忠誠心の高い侍女と言える範囲。

「そう、こちらこそよろしくお願ひするわね。」

私達は、エヴァさんと一緒に大事なお仕事をする事になった、言わば仲間みたいなものなのだけれど、エヴァさんはあまり自分の事を話してくれなくて。

エヴァさんの事とか昔の事とか、話せる範囲でいいからお話しない？」

「えっと、それはいいですけど……」

「立たせたままというのは失礼になりますし、歩きながら話すことも

出来ます。

「先ずは移動をお願いいたします」

ちよつと困ったナーデイが視線でリルに助けを求め、リルはちよつとため息をつきながら2人を誘導していく。

「いきなりこんなことを言つて、ごめんなさいね」

「いえ、予想はしておりまして。」

ですが、あまり多くを話す事は許されておりません。ご了承下さい
「い」

「ええ、色々と話せない事もあるでしょうから、それは気にしなくても大丈夫よ。」

「どういった事なら話してもいいのかしら?」

「エヴァ様の過去や技術に関しては、今の時代では問題になる部分もあるそうなので、基本的に口外を禁止されております。」

それ以外、例えば私達の過去については一部を除いて禁止されてお
りませんから、問題ありません」

歩きながら、リルとリンデイ・ハラオウンが静かに会話を続けてる。

ナーデイとプレシア・テスタロッツサは、ちよつと後ろでそれに聞き
耳を立ててる。

「そう。でも、リルさんの過去は、話しても問題の無い内容なの?」

「私達従者の中では、ありふれた過去ですから。」

強いて特徴を挙げれば……そうですね、エヴァ様に直接自爆テロを
仕掛けて、手足が吹き飛んだ状態でエヴァ様を見上げた記憶がある事
くらいです。

「エヴァ様が無傷だった事は幸いでした」

「そ、それは……その、普通はあまり話したくない過去でしょう?」

「問題ありません。それがきっかけで救って頂いたのですから。」

そもそも私達従者は、エヴァ様やエヴァ様の所属していた国と敵対
していた者ばかりです。

組織や所属ごと潰された者と、攻撃を仕掛けて反撃された者。大き
く分けてこの2種類しかおりません」

「そう、なの。ナーデイさんもそうなのかしら?」

「は、はい！ エヴァさんのいた国と戦争していて、前線の砦丸ごと救われました！」

「救われた……それはその、冷たい言い方をすれば、殺された、という事でもいいのかしら？」

「いいえ？ 少なくとも、私はここにいますし。」

あ、でも、殆どの人は眠ってますし、一部の人は消えちゃっているらしいので、殺されたという表現でも間違っっては……」

「ナーデイ、言葉が崩れています。」

それに、頑張つて柔らかい言い方をしても、命を捧げた、くらいが適切かつ限度です。その事は理解しているでしょう？」

「でもでも、エヴァ様はそれを気にしちやってるのも知っちゃってるし、私達は生きてるし！」

「ごめんなさい、ちよつと無神経な質問だったわね。」

それなら、お2人にとって、エヴァさんはどんな人なのかしら？」

「一言で言えば、神様、でしょうか。」

ここは小さくて閉じた世界ですが、これほど穏やかで幸せな場所は他に知りません。

この天国の様な環境をお創りになられた創造主様で、敵対していた私達を救って下さった救い主様で、私達に知識や技術を与えた上でそれを自由に使う事を許される指導者様で、未熟な私達の失敗も優しく見守って下さる保護者様で、普段は私達が様付で呼ぶ事すら嫌がる程に対等な目線に立つて下さるお方です。

エヴァ様自身は神ではないと仰っていますし、万能ではない事も知っていますが、私はエヴァ様こそ神という概念に最も近い存在だと考えています」

「うんうん、禁止されていないなら、平伏したくなっちゃおうお方です！」

エヴァ様の前でしちゃうとすごく嫌な顔をされるので、させてもらえないのですが……」

「ナーデイ、言葉遣いは少しだけ直りましたが、お客様に対してその態度は良くありません」

「あう。ゴメンナサイ」

「私達も堅苦しいのは苦手だから、気にしなくて大丈夫よ。ね、プレシアさん」

「ええ。気楽にしてもらっていいわ」



その後、2人は応接間に到着。

ここは主様が来た際の休憩所として使われていた部屋で、今でもくつろげる空間として整備されてる。主様とお姉様の好みの関係で装飾品はほとんど無いけど、ソファアの座り心地は良いし、壁紙やカーテン、照明器具で優しい雰囲気を出してる。

別荘産の茶葉と材料で作った紅茶とお菓子が用意出来た頃に、お姉様が到着。

「やはり、研究室として使える様な空き部屋は無いな。ちよつとした書斎くらいの部屋なら確保出来るが……時の庭園の広さを考えると、手狭に感じる可能性は高い。」

当初の予定通り、対外的に公開できるデバイスの格納領域に研究所を用意したいが、構わないな?」

「そうね、研究室としてはその方が無難ね。」

別荘としては、アリシアやフェイトを連れてきた時にゆつくり遊べるような場所や、寝泊まり出来るような部屋が優先かしら。

あとは魔法の練習が出来るような場所があれば充分だけれど、それは屋内というわけにはいかないでしょう?」

「小さな書斎くらいは確保するが、他は宿泊施設扱いでいいという事か。魔法の練習専用の場所はあるから、遭難しない程度に使ってくれていい。」

それで、この別荘は公開出来ると思うか? 作れと言われても二度と作れない代物ではあるんだが」

主に、材料的な意味で。

人が住める星を含む惑星系を1つ丸ごと使うなんて、今となっては難しそう。

「公開するとしても空間を生成するロストログアとして、が限度かしらね。」

これほどのものは時空管理局でも聞いた事が無いわよ。現存する最大の生成空間は無限書庫で、それもロストログアを利用してしていると聞いた事があるし」

無限書庫がロストログア？

提督のリンディ・ハラウンが聞いた事があるなら、少なくとも表向き、もしくはは時空管理局内では正しい情報と思える。

これは……ひよつとする？

「そうか。無限書庫に似た扱いになる可能性が高いのか……？」

あれは書庫自体ではなく中身が問題だと思うし、少なくとも即封印は無いな？」

「エヴァさん個人が所有する物でしょう？」

2500年も稼働し続けているなら大きな危険性も無いでしょうし、内部で生活している人もいるのだから、即座に封印するという事にはならないと思うわ。

情報が漏れた場合は、その……犯罪者対策は必須になるでしょうね」

「出入りは私かチャチャがいないとほぼ不可能だから、蠅共がいくら来ようが侵入される可能性は低いんだが……鬱陶しい事にはなりそうだ。」

私自身が公開出来る代物じゃない以上、非公開のままになるだろう。とりあえず、無闇に人を招待して良い場所ではないという認識で良さそうだな」

「そうね。信用できる相手だけに限定した方がいいでしょうね」

「予想通りではあるな。」

それより、そろそろ食べ物感想を聞かせてくれ。こいつらは、結構気にしてるんだぞ」

壁際に待機してる、リルとナーディ。

何だか、ものすごく目が真剣。

「そうね、頂こうかしら。」

見た目は、あの世界のケーキに近いのかしら？　味も……うん、覚えがある味に近いわ」

この世界と言うか、翠屋のケーキに近い。

高町恭也や高町美由希がアースラに持って行った事があるから、リンディ・ハラオウンは食べた事があるはず。

「近いと言うか、ケーキを参考にして、別荘の材料で作ったものだな。私の好みで甘さは控えめだが、なかなかの再現度だ。

昔の菓子の方が歴史的に面白いとも思ったんだが……材料やらの関係で改良し過ぎていて、あまり原形を留めていないらしい」

「そう。資料的な価値はありそうだけど……あら、おいしいわね」

色々な世界の料理を、色々な世界の材料で再現や改良したものは、歴史学的にはどうなんだろう？

とりあえず、再現ケーキはプレシア・テスタロッサの口にあった模様。

「フェイトが持って行ったケーキもこれに似た感じだったはずだぞ。

精神誘導は恐ろしいな」

「……私は、これをフェイトの気持ちと一緒に潰していたのね。

確かに恐ろしいわ」

「まあまあ、あまり暗い話は無しにしましょう。

今日は別荘という物がどんなものなのかを見に来ただけなのだし」

「そうだな。ところで、私がない間、少しくらい話をしただろう。どう思った？」

「そうね……思ったよりは普通、かしらね？」

確かに片鱗は見えたけれど」

本人がそこにいるから、狂信者という表現はお姉様もリンディ・ハラオウンも使わない。

暴走怖い。

「まあ、普段はそうだな。この2人は相当穏便な方だからと言うのもあるが……

そうだな、例えばの話をするか。この別荘の維持が私にとって不都合となったと仮定しよう。

ナーデイとリルはどうする?」

「まずは、エヴァ様の必要な物を確保して別荘の外へ送り届けます!

あとは……えーと、私達が別荘自体に出来る事は無いですし、消滅か指示を待つくらいしか思い付きません」

「それ以外にする事はあるでしょうか?」

「それは……原因の解決や外への移住はしないのかしら?」

元気に答えるナーデイと、不思議そうなりル。

思わず質問したリンデイ・ハラオウンの表情が引きつってる。

「私達はエヴァ様の好意によつて生かされています。そんな私達がエヴァ様の重荷になる事があってはなりません。

移住の指示や許可があれば別ですが、そうでなければ私達の存在自体が問題になったと理解するべきです」

「エヴァ様からお預かりしている命ですから!」

何か問題でも? と言いたげなりルと、元気いっぱい死亡宣言をしてるナーデイ。

その様子を見て、リンデイ・ハラオウンの表情が更に引き攣ってる。

「当面はそんな事にはならんだろうが、こいつらの考えは、平和というか、穏便な方でコレだからな。過激な連中は……リル、予想出来るか?」

「エヴァ様に別荘を維持したい気持ちがある事が確認出来た場合は、不都合となる原因、恐らくは誰か他の人でしょうから、その排除に動くのではないのでしょうか?」

逆に維持しない事に意味や価値があると確認出来た場合は、自らの手で全てを破壊しようとするでしょう」

「まあ、そんな所だろうな。」

元々が圧倒的な力の差がある国に反抗してた連中だから、実力不足は躊躇う理由にならんし」

「ふふ、安心したわ。」

少なくとも貴女の仲間である間は、ここは色々な意味で安全な場所という事でしょう?」

「まあ、そうだが……そう解釈するのか」

プレシア・テスタロッツサは、随分と高く評価してる。というか、危険性を低く見積もり過ぎ？」

別荘に遊び場や書斎を用意するのは、問題ないらしい。

時の庭園があるから本来は不要という話もあるけど、まだ言えないし。

「この際だから、いろいろ聞いておきたいのだけれど……」

貴女の力でもアルハザードに行けないと言う話は、本当なのかしら？」

「本当だ。虚数空間のどこにあるのか知る方法も無ければ、狙って移動する手段も無い。

何らかの事故や偶然で虚数空間の外に出ていない限り、辿り着くのはほぼ不可能だな」

「だけど、エヴァンジュさんは虚数空間内で無限転生は機能する可能性がある、と言っていただけでしょう？」

それが実体験だとすると、使える魔法がある事は確定するのだけだ」

「……確かに言ったな。だが、虚数空間内は空間自体が異常な状態で、動作中の魔法も崩壊するから、通常の転移魔法では発動したとしてもどこへ飛ぶか解らん。同じ理由で探知も不可だ。

無限転生にしても、働く時点で私の意識も無くなっているから、自動ランダムワープの様なものだ。どこかに狙って移動する機能も制御するだけの意識も無い以上、普通は使い物にならない」

「そういう事ね。

「だけど、アルハザードに眠るといふ秘術は、存在する事は確実にいふ事ね……」

「それなんだが……はつきり言うぞ。アルハザードを美化しすぎだ」

「どういう事かしら？」

貴女程の存在を作れるアルハザードに、技術が無いとでも言いたいのかしら？」

「いや、確かに高い水準の技術は持っていた。

それでも、あらゆる魔法がその究極の姿に辿り着いたなど、実情を

知っている私から見れば片腹痛い表現だぞ。

時間を操るどころか、未来や過去を見る事すらまともに来ない。人を楽しませる事など、考えてもいない。

たかが20年しか活動していない私が空間魔法の祖と呼ばれたという事は、それまではまともに研究すらされていなかった分野があるという事だ。

搾取しか考えず、内外に敵ばかり作っていた軍国主義国家が究極だと？ 笑わせるな」

「それでも、この空間……別荘は、驚異的な水準よ。

究極と呼んでも差し支えは無さそうだけれど」

「プレシア。お前が開発した、不安定なリンカーコアを安定させる技術があつたな。人造魔導師にありがちな症状を抑えるためだったか？

あれは未だ管理局に提出されていない、お前とお前が教えた者だけの医療技術だ。言いかえれば、管理局員のリンデイは知っているという事でもある。

だから、管理局はその症状を持つ者を治療出来る。

……おかしな話だな」

「つまり、この空間の生成技術は……」

「私と私の従者達、それに私の主……リーナ。知っていたのは、これだけのはずだ。

何故か変態ロリコンが知っていたが……」

「つまり、アルハザードに夢を見るな、現実を、アリシアを見つめなさいという事ね」

「プレシア……親馬鹿は解ったから、フェイトも入れてやれと言っているだろう」

やれやれと言いたげなお姉様。

強引な話題変更だし、リンデイ・ハラウンとプレシア・テスタロッサが一瞬間を見合わせてたから、主様の話を避けた？

トラウマになつてる事も説明したらしいから、チャチャゼロはいい仕事をしてたらしい。

でも、ロリコン変態は危ない。色々な意味で。

A S編03話 お祭り

別荘から出てからは、比較的平和な日々が続いた。

火曜日に八神家に来たヘルパーは、おばちゃんだった。

空間が不安定で、猫は来れなかった模様。

親戚が見付かって、ひよつとしたら一緒に住むようになるかもと伝えたら、ちよつと寂しそうにしながらも喜んでくれた。

金曜日にはエイミー・リミエツタが行っていた部屋の確保が完了。必要な機材類の搬入や、家具や必需品等の購入が始まった。

かなり大きな部屋で、高町家のすぐ近く。具体的には徒歩3分。

購入可能な部屋を借りたのは、リンディ・ハラウンが日本の食事やお菓子を気に入り、将来はこの世界に住もうかしらとか言っていたかららしい。大きすぎて売れ残っていた部屋を賃貸契約で宛がったのは仲介した業者の手腕で、借りたのは時空管理局と関係のある企業名義。アースラのスタッフはまだ日本に戸籍が無いため、無難な処理をしているらしい。

土曜日に、フェイト・テスタロッサとアルフが教育プログラムを修了了。

完全ではないものの、比較的自由な行動が可能となった。

これで事件後の後処理も現場で行える事はほぼ終わり、クロノ・ハラウンも肩の荷が下りたのかようやく報告書を提出する事に。

但し、まだ本局への航路が安定してない。物証などが提出出来ないから、事前報告という扱いになる。

その頃、翠屋に杉並英春が現れた。

尊大な態度は職員以外の人にも変わらないらしく、とても悪い意味で障害者様的な行動が節々に見られる。迷惑そうな目を向けられてもびくともしない面の皮と心臓と神経には驚愕。勿論悪い意味で。

店頭に居たのは高町士郎。高町桃子や高町家のチャチャは裏方から出ず、他の店員は基本的にバイト。原作に登場する女性が現れなくてイライラしてたけど、最終的には怒りながら帰っていった。これで罵詈雑言でも吐いていけば出入禁止や警察の出番に出来たのに。残

念。

そして、日曜日の朝、本来は開店前の時間。

予定通り、翠屋に続々と人が集まってくる。

「随分と久しぶりじゃない。もうちよつと顔を見せなさいよ」

「アリサちゃん、会うのを楽しみにしてたんだよ」

「エヴァちゃんは顔を見せなさすぎじゃないかな。」

アコノちゃんばかり来てたって、お姉ちゃんに聞いたよ」

「私にも都合があるし、なのはアースラで随分会っていただろう。ある程度は勘弁してくれ」

「こつちに来るのが私だったのは、不満だった？」

アリサ・バニングス、月村すずか、高町なのはの3人が真つ先に集まり、お姉様と主がそこに合流して。

「うう、何か緊張してきたわ。管理局の人と会って、本当に大丈夫なんか？」

「今いる人達は大丈夫。基本的に優しくて、協力してくれる人達」

八神はやたと八神家のチャチャも店に入ってきて。

「小学生のグループに交じる高校生や社会人って、絵面的にどーなんだ？」

「保護者が頼れるお姉さん、でいいんじゃないかしら？」

初めまして、真鶴亜美っていいです。よろしくね」

「あ……私は長宗我部千晴だ。よろしく」

地球在住の転生者2人が現れて。

「そんなわけで、これからしばらくご近所になります。

よろしく願います」

「よろしく願います」

「ああ、いえいえこちらこそ」

「どうぞ、ゴ轟負に」

ハラオウン親子とエイミィ・リミエツタが高町夫妻に引越しの挨拶をして。

「ユーノくん、こつちこつち！」

「ちよ、ちよつと待ってなのはー！」

「へー、コレがあのでフェレットの中身ねえ」

「何だか、思ってたよりも可愛い感じかな？」

人の姿で現れたユーノ・スクライアが、到着早々原作3人娘に捕ま
り。

「何と言うか、肩身が狭いとはこういう状態の事を指すと思ひ知らさ
れるね」

「ですよねー」

「セツナ様の外見は女性なものですから、堂々としていれば問題はござ
いませんよ」

成瀬カイゼ、セツナ・チェブル、耳を帽子で隠した犬上小太郎姿
のチクアーブの3人が女性軍団から一歩離れた場所で固まり。

「何だか、輪に入りにくそうだね。」

俺は高町恭也、なのはの兄だ。君達の事はなのは達から聞してい
る」

「月村忍よ。戸籍とかの事で相談に乗ってほしいと言われているか
ら、気軽に聞いていいわ」

「私は美由希。よろしくね」

高町兄妹と月村忍は、話は聞いていても見るのは初めての男性組に
声を掛け。

「おねーちゃんがいつぱいだー」

「ふふ。アリシア、ちゃんとご挨拶出来る？」

「うん。はじめましてー！ フェイトのおねえちゃんの、アリシアで
すー！」

プレシア・テストロッサと車椅子のアリシア・テストロッサの登場
で長宗我部千晴と真鶴亜美の目が点になり、自己紹介で原作娘達の目
も点になり。

「ふふ、ここはまさに天国で「ロリコン黙れ変態！」ぶげらっ!？」

姿を見せた直後に地に伏せたナニカがあつて。

「遅くなつてごめん。部屋の片付けが、思ったより時間がかかっ
ちやつて……」

「急いだんだけどね。ごめんよ」

フエイト・テストロッサとアルフが、ちよつと遅れて合流して。

「母さん。この人が、この前言ってた美味しいご飯を作ってくれた人だよ」

「こう見えて、フエイトにちゃんとご飯を食べさせた凄い子なんだよ」

「あはは、そんなにすごい人じゃないよ。」

あ、初めまして。黒羽早苗っていう、料理好きなだけの子供です」
予定に無かった人が到着した。

「……ちよつと待ってフエイト。どうしてそいつを連れてきた？」

ロリコン
変態を踏み付けてたお姉様が、頭を押さえながらフエイト・テスト
ロッサの方へ向かってく。

今にもため息をつきそうな雰囲気。

「え、駄目だったかな？」

あの部屋に行くのは今日が最後だから、母さんに会わせられるのは今日しかないと思っただんだ」

「そうか……いや、悪いわけじゃないんだ、予想していなかった上に報告も無くて驚いただけだから、気にするな。」

ああ、驚かせて済まない黒羽。私はエヴァンジュ、お前と同じ転生者だ」

お姉様はこの場は任せろと言わんばかりにフエイト・テストロッサに視線を送ると、黒羽早苗の正面に立った。

ふと見ると、リンディ・ハラウンがプレシア・テストロッサの隣にまで来てるし、他の人達も何だか静かになってる。全員、聞き耳を立ててる模様。

「え？ あ、そうなんだ。」

いやー、ボク1人かと思ってたんだけど。そっかそっか、仲間がいたんだね」

「それでだ、ここにいるメンツを見て、何か思う所はあるか？」

「ここ？ うーん、綺麗と可愛いとカッコいいとカッコ可愛いしかないなーって思うけど？」

ぐるつと一同を見回して、黒羽早苗はこてつと首を傾げた。

「そうか……やはり、原作やらの知識は無いか」

「原作？　魔法少女ナントカってやつだよ。」

名前くらいは聞いた事ある……と思うけど、中身なんて知らないよ。興味も無かったし」

「なら、ネギまも知らないか。」

正確には、魔法先生ネギま、だが」

「串焼きのねぎまなら知ってるけど……魔法先生？」

「そうかそうか、知らないのか。」

分かりやすく言えば、ここに居るのは原作か転生に関係する者だけだ。フェイトとアルフ……お前が食事を作っていた2人も含めてな。

というわけで、お前には選択肢がある。

ひとつ、今までの常識に生きたい、危険な事から距離を置きたい……つまり原作や転生に起因するアレコレに関わりたくないなら、ここで帰る事を勧める。

ひとつ、危険があるのが構わないから、このまま関わり続ける。

魔法少女という名で予想が付くと思うが、一般的な日常から外れる世界に踏み込むかどうかの選択だ。どちらにしても最低限の情報は私が教えるから、全く情報が無いと言う状況に陥る事はない事だけは保証しよう。

急で悪いが、どうしたい？」

「うーん、特に気にしないかな？　こんな女の子達がそんなに危険な事はしないでしょう？」

「そうでもないから困るんだがな。」

先週震源不明の地震があっただろう？　アレはこいつらの半分以上が関わり、下手をすれば地球が壊滅する危険すらあったものに関係するんだ。

結果的に全員無事で済ませる事が出来たが、原作では生死不明者……実質的な死者も出ていた。

踏み込む先には、命に係わる危険があるという覚悟はしておいてくれ」

「覚悟、かぁ。危険だって言われてもよく解んないけど、ボクに友達を助ける力はある？」

「お前の持つ能力次第だろうな。転生する際に、何を望んだ？」

「特典つてやつ？ それはあんまり役に立ちそうにないかな。」

みんなにおなかないっぱい食べさせたい、食べた人には元気になってほしい、元気になったら笑ってほしい、ってくらいだし」

何という食道楽。

どこまでも食にこだわる料理人的な？

おサルのオーラの原因が未だに理解出来ない。

「食とその派生だけか……いや、フェイトの体調が良かったのはお前の料理のおかげという事になるのか？」

通りで、竜巻相手に多少なりと戦えていたわけだ」

「あら、フェイトは弱くないわよ？」

プレシア・テストロツサの横槍？

でも、当時の状況を思い出すべき。

「フェイトが弱いわけじゃなく、相手が悪かったただけだ。」

話を戻すぞ。とりあえず、お前の料理は助けになる可能性はある。無理しがちな連中も体が悪い連中もいるし、希望に近い効果を得られているようだからな。

それと、魔力もかなり多いから、鍛えれば戦力としても助けになるだろう。但し、魔法に慣れ過ぎた場合は、将来地球を離れるのが最善になりかねない事も覚えておけ。地球では魔法やらは隠匿されている技術だ。大っぴらには使えん」

「なるほど。うん、それはそれで結構楽しそうだね。」

転生者仲間なら小学生って演技もいらなそうだし、友達だけを危険な目に合わせるのも何だか嫌だし。

一先ずは、積極的に情報が欲しい、って選択でいいかな？ 知った上で距離を置く事は、不可能じゃないでしょ？」

「お前が、それで後悔しないならな」

「うん、大丈夫だよ」

それからしばらくは、自己紹介やらでもみくちやになった黒羽早苗。

直接の同類にあたる転生者達とは、連絡先の交換なんかもしたりし

てる。

「しっかし、増えたのがアルと四葉って、なんつーネギま率だよ」

「何だ千晴、他の話の人物を期待していたのか？」

とあるとFateの存在は確認しているが」

「私？」

「僕の元の話かい？」

「いや、お前達じゃなくてな。というか、カイゼは知っていて言うな」

元って何？

説明しよう！ 成瀬カイゼの外見の元ネタはフェイト・アーウェル

ンクスなのだ！

フェイト運命さん多すぎ。

そもそも原作や他の話って？

説明しよう！ 転生とは以下略。

未来は変えられないのか、って叫んでたのは云々。

プレシアとアリシアを助けられたんだから、変えられる。変えてみ

せる。

みたいな会話が、長宗我部千晴とお姉様とフェイト・テストロッサ

と成瀬カイゼの間であったり。

「箱入りだったフェイトと仲がいいようだし、なかなかいい腕の料理

人みたいじゃない。

今度何か作ってくれないかしら？ お礼はするわ」

「うん、いいよ」

「ほほお、男の娘との仲を公認ですか。箱から出したと思ったら、随分

と気が早いのですね」

「なん……ですって……!!？」

「あ、気付いてくれてなかったんだ。何でいつもそうなのかなあ」

変態ロリコンの指摘でプレシア・テストロッサがショックを受けてたり。

「この際だ、お前達にも見せておくか。

私は大人として戸籍を確保する事になった。手続きやらが完了し

た後は、基本的にこの姿で行動する事が多くなるからな」

「ふえええええええええええええええええ!!？」

「おお、大人モードでございますか。しかし、エヴァンジェリンの大人バージョンはかなり長身だったように記憶しておりますが」

「別にそつちまで原作依存する必要は無いんじゃないかい？」

まあ……実際に見ると、正直に言つて予想以上に美人だね」

「か、完璧超人じゃない……いつか見た目くらいは勝つてやると思つてたのに……」

「お、お姉ちゃん……驚いてないみたいだけど、ひよつとして知つてたの？」

「戸籍の事で相談された時にね。」

美人でしょ？」

「うん……すごく、大きいです……」

「すずかちゃん、それはアウトや！」

お姉様の大人モード披露でちよつとパニックになつたりしたけど、もうすぐ翠屋が開店する時間。バイトの店員も到着しはじめた。

「はいはい、いつまでもなのはここに居座るのも悪いし、そろそろ移動するわよ！」

アリス・バニングスが手を叩きながら宣言した。

「だけど、この人数でどこへ行くのかしら？」

リンデイ・ハラオウンはちよつと心配そう。

確かに、高町夫妻は店があるから動かないとしても、20人を超える人数。

行先はなかなか難しい。

「ふふふ、大学の方で五月祭をやつてるのよ。」

私達は付属小に行つてるから招待されてるし、祭りだからこの人数でちよつとくらい騒いでも問題無さそうでしょ？」

「なるほど、いいタイミングでやっていたのね」



というわけで、バニングス家でチャーターしたりフト付きの車いす対応大型バスで私立聖祥大学へ。ちなみに、主と八神はやてを迎えに

来たのもこのバスだった。

バスの中には月村家のメイドの2人とバニングス家執事の鮫島が待機していて、何かあっても安心の態勢。大学側にも連絡をしておいたらしく駐車場も確保済みと、実にスムーズ。

ついでに、全員に魔導具を渡してある。本邦初投入、認識誘導の魔法がかけられている。認識障害と違って、特定の情報を意図した方向に認識をずらすもの。方向性が固定される上に大きく変えることは出来ないけど、内容に齟齬が出にくい。

日本は漫画やゲームの文化が発達していて一般的なものになってから、魔法や転生についての話はそれに関するものだと思わせる事で、認識障害の効きが悪い人にも効果が出やすい事を確認済み。副作用等も小さいため、お姉様が採用に踏み切った。

だからと言って、喋りまくるとオタクと思われる諸刃の剣。不自然だと思われない程度の効果しかないし、頼り切るのはお勧め出来ない。

というわけで、私立聖祥大学の五月祭に突撃開始。

なかなかの人出だけど、息苦しかったり、人波に流されたりするほどじゃない。

模擬店がいっぱい。謎物体な展示品もいっぱい。怪しいイベントもいっぱい。あちこちに休憩所もいっぱい。

一言で言えば、賑やか。少しくらい魔法や転生関係の会話を聞かなくても気にされない程度には、日常から離れた状態とも言える。

「顔見せと親睦会だし、この人数ならいい感じの選択か」

通常モードに戻っているお姉様は、周囲を見回してる。

「ふふん、感謝しなさい。」

「って、いつの間にかこ焼き買ってんのよー！」

「ついさっきだ。私はあまり表に出ていなかったし、買い食いも祭りの楽しみだろう？」

偉そうに胸を張ったアリサ・バニングスがお姉様にツツコミを入れたり。

「そうか、君も刀を使うのか」

「はい、野太刀と呼ばれる大振りなものです。今は折れちゃってますけど」

「俺達が使うのは小太刀だが……そうだな、知り合いの刀匠に、直せないか聞いてみるか？」

「お願いします……あ、でも、ちよつと特殊な物なんです。」

えーと、その辺はエヴァさんと相談してもらえると有り難いです」「そうか、解った」

高町恭也とセツナ・チェブルーが刀術家繋がりで仲良くなつてた

り。」「今度は何を買ってきたん？」

「焼き鳥だ。こういう所ではありがちなものだが、食べるか？」

「うん、私もちよつと欲しい思ってたんよ」

「でも、焼き過ぎ」

「学生が焼いているからな。プロの味は無理だぞ」

お姉様が八神はやてや八神家のチャチャと少し焦げた焼き鳥を食べたり。

「うん、うちは下宿を受け入れようとしてたことがあったから、部屋は多いし。」

「落ち着いた時の行先としてどうか？」

「それは有り難いけど、逆光源氏計画の香りは気のせいかい？」

「そ、そんな事は、ない……よ？」

成瀬カイゼに突っ込まれた高町美由希の目が泳いでたり。

「今度は焼きそば？」

「ああ。味付けが大雑把かつ薄いが、こういう雰囲気食べるのが良いんだ」

「そう。少し貰っていい？」

お姉様が主とわけわけしてたり。

「フェイトちゃん、こんなお祭りって初めて？」

「こんなに人の多いところは慣れてないから、何だかぐるぐるで……」

「今は私達も付いてるんだし。そこまで気を張らなくても大丈夫よ」

「何かあっても、大人の人達もいるから」

「でも、あの子……アリシアって言ったっけ。本当にお姉さんなの？」
「どう見ても年下だよね？」

「うん。最近まで事故で仮死状態みたいな感じになって、成長も止まってるんだ。」

「だから、そうは見えないと思うけど、アリシアが姉さんなんだ」

「そっか。回復したなら良かったじゃない」

「うん、ありがとう」

フェイト・テストアロツサは高町なのはに加え、アリサ・バニングスや月村すずかともごく自然に仲良くなっていたり。

「お前達は、肉がいいか？」

「フランクフルトを買ってきてみたが」

「おー、いいねえ。こういうかぶりつけるのを探してたんだよ」

「僕は、別に肉じゃなくても……」

「なんだい、アンタも使い魔ならがぶつといきなよ」

「僕は使い魔じゃないよ」

「ああ、ユーノはこっちが本来の姿だぞ。随分とペット振りが身に付いているようだが」

「え？ あっちが元の姿じゃないのかい？」

ユーノ・スクライアとアルフに、お姉様が肉を渡してたり。

「ふふふ、こんな雰囲気は久しぶりです。」

平和な世界、賑やかな空気、輝く少女たちの笑顔。とても、とてもいいですね」

「ですが、迂闊な事をいたしますと、何度でも殲滅されますぞ？」

「ええ、それくらいは理解していますよ。」

ですが、先週末までの空気が嘘みたいじゃないですか。あんなにはしゃいでいるエヴァちゃんを見れるとは、流星はくぎみーですよ。いい選択です」

「ツンやデレはあまり関係無さそうなので御座いますが」

チクアーブと変態^{ロリコン}がある意味ギリギリな会話をしていたり。

「エヴァさん、今度はタイ焼き食べてるんか？」

「ああ。はやても食べるか？ 黒羽もどうだ」

「お、ええな」

「うん、頂くね。」

「白いたい焼きは、まだ無いんだっけ？」

「アレは……どうなんだ？ まだ無くて作り方を知ってるなら、うまくやれば一儲けできるかもしれないぞ」

「簡単に言えば生地には卵黄を入れないだけらしいけど、作ったことは無いんだよね。」

「それに、そういうので儲ける気は無いよ」

「ほー、料理色々知ってるん？」

「何か褒められてたし、料理が得意なんか？」

「それしか取り柄が無いくらいにはね」

料理談義を始めた八神はやてや黒羽早苗と一緒に、お姉様がたい焼きを食べたり。

「はい、あーん」

「あーん」

「……随分と慣れてるわね」

「子供の相手が本職ですから」

真鶴亜美がアリシア・テストアロツサにうどんを食べさせて、プレシア・テストアロツサに手付を感じさせられたり。

「君は、その……怖いとか、思わなかったのか？」

「本来は、こんな命がけの生活を送る必要は無かったはずなんだ」

「そりゃあ、何で私がか、全く思わんと言ったら嘘になるよ？ 夜天の魔導書が無ければ隔離されたりせんで済んだかもしれないし、その方が幸せやったのかもしれない。」

でも、あれのおかげでアコノさんやエヴァさんと知り合えたのも事実や。

「今が不幸やとも思ってたへんよ」

「それでも、闇の書の主という立場だと、過去に不幸な目にあつた人の風当たりは強いだろう。」

「それも聞いているだろう？」

「うん、色々と聞いているよ。」

私がちやんと動けるようになってからになるけど、昔迷惑をかけた人にも出来るだけ返そうと思ってるんよ。そんな人がどれくらいいるか、エヴァさんも知らんらしいけどな」

「そうか。君は……強いな」

クロノ・ハラオウンが、八神はやたと話をしてたり。

「これはどうやって食べるのかしら？」

「紙を巻くように破りながらが一番いいが、やり過ぎるとこぼれるぞ」

「少しばかりコツがいるのね」

「へー、これ美味しいですよ艦長」

「ここでその呼び方は駄目よ？」

お姉様がリンディ・ハラオウンやエイミー・リミエツタとクレープを食べてたり。

「千晴ちゃん、だっけ。将来はエンジニアなんかを目指してたりする？」

「え？ まだ特に何も考えてないけど……」

「あら、そうなの？ 何だか技術者の匂いを感じただけど」

「いやいやいや、私はフツの女子高生だから！」

月村忍が長宗我部千晴に近付いてたり。

「また何か買ってきたのね。」

「さつきから食べすぎじゃない？」

「たべすぎだよー」

「これはホットドックで、私の胃袋は特別だ。いくらでも食えるぞ」

プレシア・テスタロッサとアリシア・テスタロッサにお姉様が呆れられたり。

どう見ても、お姉様は食べ過ぎ。

屋外ステージが見える並木道で、足が止まった。

「エヴァ、どうかした？」

主がちよつと不思議そうにお姉様を見てる。

「帰って、来たんだな……」

「……泣いてる？」

涙目と言うか、涙が流れてる。

「もう、望郷の念など無いかと思っていたが……やはり、駄目だ。

私が死んだのは、ここなんだ。五月祭の打ち合わせから帰る途中だったんだ。あのまま何も無ければ……そのステージで裏方をやっているはずだったんだ。

去年と何も変わってないんだ……タコの小さいたこ焼きも、少し焦げた焼き鳥も、味が薄い焼きそばも、ケチャップをかけ過ぎたホットドックも……」

「エヴァ……」

「町の様子やらは似て非なるものが多いだけで、違和感がある程度、むしろ古すぎて新鮮に感じるくらいで済んだんだ。

なのに、ここは……どうして、最後の記憶と変わらないんだ。名前が違うのに、私の居場所じゃないはずなのに……もう、忘れていると、忘れるべきだと思っていたのに……」

主がお姉様の方に車椅子を向けようとしてると、プレシア・テストアロツサが目配せしながらお姉様を抱きしめた。

「前世とか今世とか、今を生きている貴女には関係ないはずよ。

ここが貴女の現実でしょう？ 不自然な記憶に振り回される必要は無いわ」

「私は……見た目通りの年齢では、ないぞ」

「転生や昔の事は、少しクーンネから聞いたわ。

前世で20歳少々、アルハザードでも20歳少々、それ以外は眠っていただけでしよう。本来は60歳近い私から見たら親子くらいの差があるし、外見もフェイトとさほど変わらない貴女を子供扱いして、何が悪いと言うの？

そもそもフェイトは目覚めてから4年、アリシアなんて書類上は31歳よ。年齢詐称家族の一員を相手に、細かい事は気にするだけ無駄よ。

それでも甘えるのは子供の特権なのだし、貴女の外見は子供よ。こんな時くらいは誰かに甘えなさい」

「ふん……まるで、母親だな」

鼻で笑いつつも、お姉様はされるがまま。

ホットドックをぶつけないようにしつつ、プレシア・テストロッサの腕の中に納まつてる。

聞かれたくない情報は小声にしたり風の音に紛れさせたりと、無駄にSSクラスの技術力を発揮してるから、プレシア・テストロッサに任せても大丈夫そう。間違いなく、すぐ横にいる主にしか全部は聞こえてない。

「あら、知らなかったかしら？　こう見えてもアリシアとフェイトの母よ。」

それに、作られた者として共感出来そうな出生でもあるようだし。私には前世の記憶など無いけれど、人生を弄ばれた先人として教えられる事や、一緒に悩める事がきつとあるわ。不自然な立場と記憶を持つ娘を生み出してしまった立場や経験からもね」

「……そうだったな。」

「まったく……現実是非情すぎて困る」

「例えそうでも、現実には捨てたものではないのでしょうか？」

「ところで、いつまでも泣き顔を見せていていいのかしら」

「……はあ!」

うん、見られてる。

来てる全員に。

「あー、うん。あんたも完璧超人じゃないって事は解ったわ。」

だから、前世とか原作とか年齢とか気にせずに、もうちょっと付き合いなさいよ。私達はそんなの気にしてないんだから」

「そうですね。エヴァちゃんも外見上は美少女なので、同世代に見える少女達との付き合いも悪くないでしょう。」

何より、美少女には笑顔が似合うのですよ。

せっかくの祭りなので、もつと楽しんではどうでしょう？」

お姉様が心配されてる。

でも、周囲に押されたアリサ・バニングスはともかく、ロリコン変態の意図はどうなんだろ。

「……プレシア、ありがとう。少し離れてくれるか」

「おや？　何だか、随分不機嫌ではありませんか？」

認識阻害開始、封時結界への隔離完了。

心行くまでどうぞ。

「言いたい事は1つだけだ。

黙れロリコン！ 貴様の祭りなど血祭りで充分だ!!」

「1つと言いながら2つ言ったわばっ!?!」

A S編04話 後の祭

お姉様が変態をどつき倒した後は、また普通に五月祭をまわって。一行は再び翠屋に戻った後、アースラ在住組はアースラに戻り、地球在住転生者も家路についたりして。そろそろ街が赤く染まりつつある時間になる頃に翠屋で休憩しているのは、お姉様と無印原作娘3人だけとなった。

主や八神はやては別途車椅子対応のタクシーやらを手配するのも面倒という事で、そのままバスで家まで送られてる。

黒羽早苗は後日連絡するという事で素直に帰った……けど、家に着いた直後に電話してきた。今は道場のチャチャが色々と説明してる。

「やれやれ、思ったよりも大騒ぎになったな」

「あんたも原因の1つじゃない。どんな胃袋してるのよ」

「信じられないぐらい食べてたけど、本当に大丈夫？」

「買い食いのは、思わずな。そもそも人間の胃袋じゃないんだから、そこまで不思議がる必要も無いだろうに」

アリサ・バニングスと月村すずかは、お姉様の食べっぷりが信じられない模様。

今日食べたのは……分けていた分を外して、1万円分近く？

1人で食べる量じゃない。

「それに、何か変な人だったけど、1人いなくさせちゃうしさ」

「変態は見れたものじゃなくなつたから、遠くに投げ捨てたんだが……はつきり言つてグロさ方向で18禁モノだぞ。見たかつたか？」

ああ、あれも私と同じで本体は本だ。あの程度の怪我などすぐに無かつたかのように治っているはずだから心配はいらん」

「み、見るのは遠慮しておくわ」

「エヴァちゃんつてあの人には遠慮も手加減もないんだよ……殴つた勢いで壁を壊したりするし。」

あの人が本なのは本当なだけ……」

「なのはちゃん、本当なの……？」

お姉様の説明は正しいけど、3人娘には刺激が強かつた模様。

高町なのははため息をついてるし、アリサ・バニングスと月村すずかは戦慄の表情。

そんな話をしている時、カランと入口のドアベルが鳴り、その直後に店内が少し静まった。

「ん？ ……なるほど、アレか。」

「すまんが、少々席を外すぞ」

入口に目をやったお姉様は、入口に見える人影へと向かう。

「そこでは。」

「だ、だから俺は嫌だつて言ったんだ」

「お前がココのケーキを頼まれてんだろ？」

男なら黙って買ってけ。俺は頼まれて付いてきてやってるんだぜ」

若いかもしれない二人の男が、小声で口論してる。

片方は、どこにでもいそうな普通の高校生風の男。これはいい。

もう1人は、明らかに入口で頭を打つ身長とそれに負けない横幅、

加えて髭面で若さを感じない高校生、解りやすく言えばイスカンドルの外見をした転生者の、馬場鹿乃がいた。

ちなみに、嫌だと言っていたのがこいつ。凶体の割に小心者。

「おい、その大男。」

「後でケーキを買うのを手伝ってやるから、少し顔を貸せ」

「エヴァっ!?! な、何でこんなところに!?!」

「ほほー、お前がロリコンだつてのは本当だったのか。」

「こんな可愛い子を、いつの間に関掛けてやがった?」

「ち、違う! そもそも初対面だ!」

「名前を知ってやがるくせに、その言い訳は無いんじゃないの?」

「ニヤニヤと笑ってる、普通の高校生。」

「とりあえず、退散してもらおう?」

「ふむ……初対面と言うのは本当だ。コレも私も特徴のある外見だから、何かで知っていただけだろう。」

「お前はコレに付き合わされただけだろう? 後はこっちで引き取るぞ」

「へく、ほく、こんな娘のお誘いねえ。」

ま、頑張れよ馬鹿」

「うっさい！俺はそんなんじやねえ！」

「とりあえず静かにしろ。ここは喫茶店だ」

「うぐ。す、すまん」

とりあえず、普通の高校生は手を振りながら退場。

普通に帰っていくらしい。出歯亀の心配は無さそう。

「さて、少々騒ぎ過ぎだ。一旦店を出るぞ」

「あ、ああ……」

そして、公園に移動する2人。

とりあえず馬場鹿乃をベンチに座らせ、認識阻害を仕掛けて会話開始。

お姉様は立ったまま。身長差と体の幅的に、並んで座るのは無理があり過ぎた。

「さて、対策はしたから、周囲を気にせずに喋っていいぞ。

先ずは確認だ。転生者だと言う自覚と、私がエヴァンジェリンだと識別できる程度のオタ知識はある様だが、間違っていないな？」

「ああ……間違っていない。

俺が征服王の外見だって事も、ここがリリカルなのは世界だったことも、さつき翠屋にアンタが地球の3人娘と居たって事も解ってる」

「そうか、原作知識ありという事だな。

どの程度知っている？ 原作を知らん転生者もいたから、確認しておきたい」

「アニメの3部作とヴィヴィオの格闘漫画はそれなりに覚えてる。

知識が多い方って事になるんだな？」

「そうだな。だが、そこまで知っているのに介入しようとしていないのは、危険な事から距離を置きたかったせいかな？」

ナデポを要求したとは思えん行動に見えるんだが」

「うげ、そんな事もばれてんのか」

「私達の捜査能力を甘く見るなよ。

素直に白状しないなら、撫でてしまうぞ？」

明らかに捕食者の笑みを浮かべて手をわきわきさせてるお姉様怖い。

馬場鹿乃が凄い勢いで引いてる。

「わ、わかった、喋るからやめてくれ！」

神様転生だって舞い上がったのは認めるよ。王の軍勢が欲しいとか言っちゃまってよ。

「だけど、誰も出てこねえんだよ……」

「ああ、その原因は予想出来るぞ。」

無限の剣製も王の財宝も、中身は自力で集める必要がある様だからな。何かを出す能力は、本当に「出す能力」だけを得ているようだぞ？

お前に臣下がない以上、いもしない軍勢など呼べるわけがないだろう」

「……うがー！　そういう事かよ！」

「で、あとはナデポと……何を要求した？」

「優秀な従者、だよ。」

俺は爺さんと住んでるんだが……爺さん、人間じゃないんだよ。何かロボットの執事みたいな感じで、いまいち人間味がねえんだよ……」

「ほう。だが、それは原作を避ける理由にはならんだろう？」

「……この年になってリリカルなのはの内容を思い出してよ、翠屋を調べて行ってみただよ。」

「そしたらよ、どう見ても子供なんだよ……」

「なのは達がか？　当然だ、まだ9歳にもなっていないんだぞ。」

小学生に色気を求める方がおかしいだろうに」

「で、俺は魔法なんて知らねえし、王の軍勢も無いなら戦力になれそうにねえって事に気付いちまったんだ。しかも、原作のなのはと同じなら、落ち込んでたら無邪気に慰めそうじゃねえか……異常なナデポのせいで惚れてまうやろーっ！

俺はロリコンじゃねえ……ロリコンじゃねえんだ……俺が好きだったのはVividのなのはさんであって、なのはちゃんじゃねえ

んだ……………」

「酒飲みの『飲んでない』と同じ臭いがするぞ

ついでに、今のお前となのはを並べたら、確実に犯罪臭がするだろうな」

「……それも解ってる。だから、可能な限り距離を置くようにしてたんだ……」

「ふむ、状況は大体解った。

だが、お前にも小さいながらリンカーコアはあるぞ。闇の書事件を気にしなくていいのか？」

「……なん……………だと……………?」

「魔力量としては、Cクラス程度だな。そこそこ魔法が使える程度だから抵抗は無駄だろうし、守護騎士の方針が悪い方に変わらなければ死にはしないか。

すまん、気にするだけ無駄だったな」

「いやいやいや、待ってくれ！」

俺も襲われるのか!？」

「原作の守護騎士は、魔力の蒐集に動いた。

お前には魔力があり、自衛手段が無い。鍛えて抵抗できる水準になれるとも思えん。

結果は考えるまでも無いと思うが?」

「だ、だけど、何か……………何か出来る事は……」

そ、そうだ、俺を管理局に紹介してくれ！ 可能な限り協力するか、せめて襲われた時に治療してもらえる関係を作らせてくれ!!」

「そうか、まあいいだろう。貧弱な素質とはいえ、魔法を学ぶ事になるだろうが……ミッド式とベルカ式のどっちがいい?」

ベルカ式なら私が教えられるが、ミッド式ならアースラの連中に教えてもらう事になる。ゼストやカートリッジに浪漫を感じるならベルカ式、アースラとの関係を強くして治療を確実にしたいならミッド式が無難だと思うが……強制はせん。あまり時間は無いだろうが、自分で考えておけ」

「ああ、わかった……………」

馬場鹿乃が疲れ切ってる。

てつとり早く関係を持たせるためとはいえ、現状を伝えてないのは卑怯かもしれない。

「話はこちらくらいだから、そろそろ翠屋に戻るか。」

ところで、避けていたはずの店に来たのは何故だ？」

「ああ、さっきの連れに大学生の姉がいて、その人にイベントに参加してくれて頼まれたんだ。」

学生に招待されれば一般参加可能で入賞者に賞金が出る、筋肉祭りってやつなんだが……」

今日行った、五月祭のパンフレットにあった。

優勝賞金5万円の、ボディービルコンテストみたいな何かだったらしい。

「んで、俺は嫌だって言ったんだが、勝手にエントリーされてな。」

優勝したら賞金は全部持って行っていい、代わりに優勝できなかったらケーキを奢れ、断ったらある事あった事色々言いつらすと言われて、断り切れなかったんだ……」

「ふむ。それで優勝を逃したわけか」

「素人の俺じゃ、マトモなビルダーに勝てねえよ……」

「なるほどな」



そんなわけで、今更ながら自己紹介などをしながら翠屋に戻ってきたお姉様と馬場鹿乃。

再び静寂を生み出しながら翠屋に入ったところで、2人の動きも止まった。

「……まさかと思うが、優勝したボディービルダーとは、アレか？」

「……何でこんなところにいるのか知らねえが、アレだ」

「……隣にウエイバー・ベルベットが見えるのは気のせいか？」

「……おかしいな、俺の目にも同じものが見えるんだが」

決して大声ではないものの、約80cmの身長差のせいでそれなり

の声で話している2人。

それを見てるウェイバー・ベルベット……もとい、上羽天牙の表情も驚きで固まってる。

その隣では、典型的なボディビルダー……光沢のある頭と盛り上がる筋肉を持った、つまりは上羽天牙の父親がシュークリームを食べる。

「……うん、筋肉祭りだったな。フィーバーなんだな？ シュークリームと筋肉でシュールとでも言わせたいんだな？」

とりあえず、お前は頼まれた用事を済ませておけ」

「お、おう……そうさせてもらう」

お姉様はちよつと涙目になりながら馬場鹿乃をショーケースの方に追いやり、上羽天牙の方へと近付いていく。

「さて、初めまして、と言うべきだろうが……話がしたい。少し時間を貰えるか？」

「え……あ、え、えーと……」

上羽天牙は、ちらちらと隣でうまそうにシュークリームを食べている父親の方を見ている。

「うむ、幼いとはいえ、美女の誘いを断ってはならん。逝ってこい」

「な、何か響きが違うよ!？」

「気にするな馬鹿者、逝ってこんか!」

バシーン、と強烈な張り手に押されて、上羽天牙がお姉様の方に転がってきた。

「……何をやっているんだ、お前達は」

「ううう……僕だって知らないよ……」

「このままだとまた見世物だな……はあ、一度店を出るぞ。」

馬場、話に参加したいならさっきの公園に來い。別に帰っても構わんがな」

「おう、解った」

「というわけだ。行くぞ」

「はあい、わかったよ……」

と言うわけで上羽天牙と2人で、今度は自己紹介をしつつ公園へ。

再び認識阻害をして、お話開始。

とりあえず、現状の認識と特典や原作知識の確認から。

「ふむ、当然だが知識ありか。無いなら、インテリジェントデバイスやユニゾンデバイスは要求せんだろうしな。」

原作関係者との関わりは……今回が初めての様だな？」

「うん……いきなりラスボスに捕まるとは思わなかったけど……」

「誰がラスボスだ。だが、関わる気はあるのか？」

なのは、アリサ、すずかの3人娘がいても何もしていなかった様だし、その気は無さそうだが」

「え？ 特典を選んでた時はあったけど……この前の地震で虚数空間が云々でしょ？ 今更感が物凄いいし、特典のデバイスは陸戦仕様だつて本人達デバイスが言つててうまく使えないし。」

空戦魔導師の素質を貰つたはずなんだけど……」

「その割には、魔力量はギリギリでAと言える程度だがな。」

素質を希望したにしては随分と小さいが……空戦に対応可能になつた部分だけに効いたのか？」

「え？ 希望は叶つてないって事？」

「いや、全体的に見て、歪んだり、広い意味で見ないと叶っていないように見えたりしているだけの様だ。」

恐らくだが、本来飛ぶことに対する適性が無いはずだったが、その適性を得た……程度の結果になっているのだろう。劣化という意味では、まだ平和な方だぞ？

ああ、いいところに来た。馬場、こいつに王の軍勢とナデポの末路を教えてやつてくれ」

馬場鹿乃、到着。

認識阻害の対象外になつてるから、問題無く近付いてきた。

「おいおい、いきなりか？ 挨拶くらいさせてくれよ。」

俺は馬場鹿乃、見ての通り征服王な外見の転生者だな。

王の軍勢は誰も出てこない。エヴァが言うには、臣下がいないからだつて事らしい。

で、ナデポだが……撫でられたら、相手に惚れるようになった」

「ふつう逆じゃ……?」

「そうだよ! 俺が惚れてどーすんだよ! おかげで頭が上がらない人ばっかりだよ!!」

神様転生だつて浮かれてハーレムを夢見た俺を実際自分で殴っちまったよコンチクショー!!」

「え、ええー……」

じゃ、じゃあ、エヴァさんもそんな事が?」

「そういや、アంతタの能力は聞いてなかったな。強いのか?」

お姉様が自分の能力を説明してない事に気付かれた。

特典の改悪を気にする上羽天牙と、実力を気にする馬場鹿乃。性格の差は外見通り。

「戦力としては、まあそれなりだな。」

但し、私は魔導具として作られた存在だ。地球に生まれる事すら許されなかった以前に生物ですらなく、2500年程眠る羽目になった。目覚めたのは先月だな。

私が使うのは真正古代ベルカ式の魔法だから、色々察してくれ」

「要するに、戦乱の中で過ごしたって事か?」

「せっかくぼかしたのに、嫌な記憶を思い出させるな」

「そ、そうか、すまねえ。」

お前も苦労したんだな……」

ちよつとだけ小さくなった気がする、馬場鹿乃。

元が大きすぎて、とてもそう見えない。

「それで、だ。上羽は闇の書事件をどうする?」

A程度の魔力量では大したことは出来んが、一応いくつか案は出せるぞ」

「え? 住んでるのは隣の県だから、大丈夫じゃ……」

「阿呆、別の世界にまで足を延ばす連中相手に、その程度の距離が問題になるものか。」

案その1、何も対処しない。守護騎士が原作通りの方針なら死にはしないだろう。地球の技術でリンカーコアの治療は出来んとは思うが」

「い、痛いのは嫌だよ！」

「ふむ。その2は管理局に協力して、治療を受けられる関係を作っておく事だったんだが……痛みが問題ならこれも却下か。」

その3、魔法の能力を封じる。お前の場合はデバイスを放棄してリンカーコアを封印すれば見付からんだろう。特殊な特典も無いようだしな」

「俺がその3を選んじや駄目か？」

「ナデポや王の軍勢が何らかの形で探知に引つかかる事がないという保証は出来ん。それに、執事も魔力があれば不味いかもしれんぞ？」

「迂闊な特典が足手纏い、か」

馬場鹿乃の肩ががっくりと落ちた。

「……魔法を使いたい場合は？」

「その2だろうな。管理局に協力しながら魔法を教えてもらえば、使うことは出来るようになるだろう。」

なに、守護騎士に勝つ必要は無い。口先でも小細工でも、連絡と時間稼ぎが出来れば助けに行つてやる。

私個人が教える方法も無いわけではないが……お前のデバイスはミッド式だろう？ それに、助けが間に合わなかった場合の治療は地球の病院になる可能性が否定出来んから、お勧めはしかねる」

「そ、そっか……うん、解つた。」

空戦魔導師の夢が見られるなら、頑張れそうかな。痛いのは嫌だけど、2で」

上羽天牙が、ちよつと覚悟を決めた表情をしている。

でも、覇気は不足してる。流石もやしっ子。

「そうか。面倒だ、連絡してしまっぞ。」

サーチャーがいるのは解つてるんだ。見ているのだろうか？」

お姉様が横を見て声をかけると、そこに空中モニターが現れた。

映ってるのは、リンデイ・ハラオウン。

『やっぱり気付かれていたわね。』

何かありそうな予感がしたから、様子を見させてもらっていたのだけれど』

「この程度の隠蔽は無駄だと知っているだろうに。」

それでだ。聞いていた通り、この2人も転生者だ。現時点の魔力量は、でかい方はC、もやしの方はA―といったところだな。鍛えれば普通の武装局員くらいには役立つかもしれない。

管理局に協力する代わりに、魔法の知識と襲われた際の治療を求め、と。こんな所だ」

『でも、守護騎士に襲われる可能性が極めて低くなっている事くらいは、伝えた方が良かったんじゃない？』

はやてさんや私達も知っている以上、隠れて動くのは無理なものし』

「なに、保険をかけておきたいだけだ。」

それに知っている状況で説明した方が納得しやすいだろうし、それより良くなっていると知れば幸せになりやすいだろう？」

「ちよ、ちよつと待て！ アンタ、どんだけ介入してんだ!？」

馬場鹿乃が顔色を変えて捲し立ててる。

唾然としてる上羽天牙は……無視していいや。

「ん？ リンディ達に転生者や闇の書事件について教えたり、プレシアとアリシアを助けたり、はやてに全面協力を約束させたりした程度だが」

「介入しまくってる上に、プレシアとアリシアの生存ルートかよ……無茶しやがって……」

「それはそれ、だ。一步間違えばロストログア指定されるような私の能力とジュエルシードを使って、色々とな」

『間違えなくても、存在が表に出た時点でロストログア扱いは確実に？』

「なら、存在を知られる事が間違いの一步という事だな。」

というわけだ。私はお前達と管理局の契約内容に関与する気が無いから、後はお前達で話を纏めてくれ。私の連絡先は教えておくから、何かあれば連絡するといい。相談に乗るくらいはしてやる。

他に言っておく事は……そうだな、管制人格の名前は、この世界のはやて自身に決めさせてやりたい。あの名前は言わないでおいでく

れ」

『それじゃあ、上羽さんのお父さんも待っているようだし、今は連絡先の交換だけにしておきましょう。時間がある時に連絡してくれればいいわ』

「は、はい……」

につこりと笑うリンディ・ハラオウンに向かって頷く、馬場鹿乃と上羽天牙。

その表情に、本当にこれで良かったのかと言う疑問が見えたり見えなかつたり。

でも、外見元ネタの Fate / Zero で主従の 2 人とほぼ同時に会うのは、本当に偶然……？

A☒S編05話 見えた心、見えなかった心

翌日、つまり月曜の夕方に馬場鹿乃と上羽天牙の2人からリンディへ連絡があり。

地球拠点経由でアースラへ移動した後は、普通に実際の契約の話に。

情報が欲しいアースラ側と魔法の指導と保護が欲しい2人の利害は矛盾せず、簡単な契約を結ぶ事に。と言っても、魔法の秘匿に関して強く表現されている以外はかなり緩く、常識的な内容。

習う魔法は、2人ともミッドチルダ式になった。そして、上羽天牙の持つデバイス2機は馬場鹿乃に貸し出され、今後馬場鹿乃が得る可能性のある協力報酬は当分の間上羽天牙に渡る。上羽天牙は2人分の協力報酬から、自身のデバイスの費用を出す形となった。

支払の終了後に、それぞれのデバイスの所有権が移動する契約。

もちろんアースラ側に金銭的な利益を出す気は無く、当分の間は情報以外についての協力報酬も無い事が予想されてる。契約上のやり取りと言う形にして貸し借りを明確にする、ついでに今後の繋がりを維持する意味だと2人も納得した上だから問題ない。

話がある程度まとまったところで、2人は時空管理局基準での能力評価と簡単なトレーニングを体験する事に。

上羽天牙は、標準的な杖型のストレージデバイスを使用する事になった。量産型なので比較的安くて丈夫、癖も無く相性問題も出にくいけど、基礎がしっかりしていないと魔法が発動しにくい特性がある。きちんと学ぶには適しているし、自分用に調整していく事で長く使える一品。クロノ・ハラオウンが使ってるS2Uと比べたら色々と劣ってるけど、基本的な扱い方自体に大きな差は無い。

難点は決められた魔法しか使えない事とAAクラスまでという出力の微妙さだけど、普通は戦闘中に魔法の改変なんてしないし、上羽天牙の魔力も多くないから問題無い。少なくとも、お姉様が渡してる入門用デバイスよりは高出力に対応可能。

実際に使った所、飛行魔法に関しての適性はなかなかで、初めての

飛行で自分の位置を一度も見失わなかった空間把握能力は大したもの。飛行と別の魔法の同時行使も問題無さそうだったのと併せて、流石特典で空戦魔道師の素質を求めただけはあると称賛。

但し、飛行以外の魔法はこれから頑張りましょう、みたいな。絶望的ではないけど努力は必要。

馬場鹿乃は、例のボディビルトロフィーに見えるデバイス2機を使用。

ユニゾンで黒ブリーフ全身艶々ワックス仕様になり、右手には黒い革のリストバンドも装備。

み・な・ぎつ・て・き・たあ！ とか叫びながら、AA相当に能力が跳ね上がった。元がC程度の本人は楽しそうだったけど、他の転生者を考えると微妙な水準だし、見てたハラオウン親子がちよつと引いてた。狙ったかのように適合してるあたりは、元ネタ主従恐るべしと思っておく。

デバイスに依存しての魔法行使でこの水準なのは驚愕。あとは練習と慣れと学習あるのみ。

使える魔法はミッドチルダ式で、自己強化、攻撃、捕縛、防御、移動、幻影、探知、結界が数種類ずつといい感じに揃ってるけど、ほぼ全てが近距離用で明らかに陸上近距離の肉弾戦仕様。探知や封時結界の広さはそれなり、発動に時間がかかる転移のみ遠距離に対応してる。

ある程度測定やらが終わった後で正式に契約し、ようやくアースラ在住組の転生者、要するに成瀬カイゼとセツナ・チェブルーの2人と面会。

新しい転生者の登場に驚く馬場鹿乃と上羽天牙。その様子に、エヴァさんは説明を面倒がったんだらうね、全部で20人いたのは確認しているよ、などと成瀬カイゼが説明してた。

一方、Fate組の2人がアースラに連絡をしている頃、お姉様と主は街へと出てた。

「今度は妙な回避をされなければいいが」

「おかしな制限は無くなっているはず。

これでも回避されるなら、回避自体が特典と判断すべき」

「そうなるが……さて、どうなるか」

目的は、夜月ツバサ。オリ主様系でない事は確かだけど、別の方向で病んでる転生者。

能力その他は、不明。人間不信という点だけは確定。

昨日の連続接触で接触に関する何らかの強制力があり得ると判断したお姉様が、再度接触を試みる気になった。要するにおかしなタイミングで来られるくらいなら自分から会いに行つてしまえ、という事。

そして、今回は特に何の問題も出ないまま、直接姿が見える状態に。今も接近中。

何だか、オドオドしてる。

「ふむ、接触到問題は無いようだな。

初めましてと言うべきかな、アーニヤの外見の転生者」

お姉様が声を掛けたら……うん、怯えてる。

何だか闇の福音に威圧されたアーニヤを思い出させる勢い。

「エヴァ、元ネタ的に問題がありそうだから、私が話してみる。

初めまして、私達と同じ転生者さん。少し話をしない？」

「う……」

やっぱり涙目。

だけど、主の方が拒絶感は少なそう？

「今やりたい事は、情報の交換。

それ以上の事は話の結果次第だから、とりあえず話だけでもしない？

「ジュースやケーキ位なら奢る」

「う、うん……わかった……」

何とか頷いてくれた。

と言うわけで、近くの喫茶店に移動。

3人共ケーキとジュースを注文、認識誘導や認識阻害もした上で改めて自己紹介。といっても、とりあえず名前や原作知識の確認だけ。

結果、魔法少女リリカルなのは無印とA×S、魔法先生ネギまは途中までを、見た事はあると言う程度で覚えてると判明。

「あまり聞かれたくは無いと思うけど、怯えて暮らしているのは転生特典の悪影響？」

「あ、悪影響……？」

「神もどきに望んだ希望は、歪んだ結果になっていたり、かなり広い目で見ないと叶っていない様に見えるりする物がある。例えば、私が冷静さを望んで感情を失ったみたいに。」

何か、心当たりはある？」

「……無いわよ。何でこんな事になるのよ……」

「望んだ事と、何が問題なのか教えてもらえると、原因が解るかもしれない。」

話をするだけでも気が楽になる場合もある。

無理に話さなくてもいいけど、教えてくれる？」

「……料理がうまくなりたい、幸せになりたい、身を守れるくらいの魔法を使いたい、って言ったの。」

でも、周りの人の声、それも悪意や下心みたいなのばかりが聞こえるのよ……ずっと……ずっと！　ずっとなのよ!!」

夜月ツバサは、涙を流して叫んでる。

今まで溜め込んでいた分が爆発してるかもしれない。

「読心の一種？　希望の内容を考えると、幸せか身を守る魔法に該当するはずだけど……」

「恐らく、これで他人の悪意や下心による不幸を避けろ、とでも言いたいのだろう。」

善意は聞こえないのか？　それに、能力を使うかどうかの切り替えはどうだ？」

「聞こえないわよ！　聞こえるのは暗い怨念とか気持ち悪い欲望とかばっかりよ！」

下劣な声なんて、聞かなくて済むなら聞きたくないわよ!!」

「最悪だな……悪意だけに晒され続けるなど、今まで正気を保っていた事すら奇跡じゃないか。」

「というか、良く私達に話す気になったな。私達にも下心はあったはずだが」

「アンタはごちゃごちゃ煩くて聞き取れないの！ 木乃香の方はアンタの心配しかしてないっほいしー！」

「アコノ、そうなのか？」

「エヴァの害にならないか確認したいとは思っていた。それが聞こえていれば、能力の説明と性能は間違っていないはず」

「その通りよ、そんな感じに聞こえたのよ！」

思い切り叫び終わった夜月ツバサはジュースを一気飲みすると、深呼吸して息を整えた。

そして、俯いたまま呟くように話始める。

「……話そうと思ったのは、騙そうって気持ちが悪く聞こえなかったから。転生者仲間ってのは嘘じゃなさそうだったし、アタシを探ろうとはしてたけど、変な欲が絡んでる様子は無かったから。」

嫌な力だけど……アタシを直接利用する気じゃないって事は、確認出来るし」

「ふむ、それが投げ所か。」

とりあえず、聞こえなくなれば、普通の日常を過ごせそうだな。いくつか試してみるか……まずは、これを着けて見ろ」

お姉様が出したのは、ミサンガ。長宗我部千晴に渡したものと同じタイプ。

「これ？ ……着けたけど、何かあるの？」

「変化無し、か。やはり探知妨害では意味が無いか」

「え？ これって……着けるだけでいい魔法の道具？」

「効果は無かったようだが、そうだな。」

精神干渉の一種だろうから……やはり魂関係の魔法が必要か。効果は10分程だが、別の魔法を試してみるぞ。 Gefängnis der Seele 魂の牢獄」
手元に小さな魔法陣を展開、お姉様の限定しまくりの魔力で、ちよつとだけ発動。

夜月ツバサは、ぽかーんとしている。

「どうだ、今でも聞こえているか？」

「な、何をしたの……？」

「聞こえない、聞こえないよう……！」

「本来は魂を閉じ込めるための呪縛なんだが、干渉を防ぐ効果を目的に使ってみた。」

「どうやら効果がある様だが……望むなら教えて「お願い！ 何でもするかッ!？」」

「凄いい勢いでお姉様に迫ってきた夜月ツバサは今、額を抑えて蹲っている。」

直前の効果音は、ばっちん。

とてもデコピンの音に聞こえない。

「落ち着け。それに、何でもするとか言うものじゃない。」

「とりあえず教える場合、私が提供するものは、魔法の指導とデバイスの貸与だな。当面の目標は今の魔法を自力で使えるようになる事になる。」

「私達が求めるのは、有事……魔法関係で問題が起こった際の協力と、転生特典の解明への協力だな。どちらもそこまで根を詰める気は無いから、友人として出来る範囲で手を貸す程度だと思っただけ。」

「最後にこの魔法の問題点だが……解りやすく言えば、効果が限り成仏出来なくなる事だな」

「へ？ ええと、ちよつと待って。成仏できないって……どういう事？」

「魂を閉じ込めるための呪縛と言っただろう。生きている間や死後に早期の蘇生が期待出来る状態ならば記憶や人格の保護魔法になるが、犯罪者を死後も苦しめるための虐待魔法でもあるんだ。」

「ちなみに、死後は効果が切れるまで何もない空間を漂う感じになるらしいぞ。しかも、死後は意識が切れる事が無いと言う鬼畜仕様で、生きている間も睡眠が浅くなる問題がある。」

「これを補うための回復促進と狂わないための精神強化も行われるはずだが……」

「そ、それって……」

「脅すようで悪いが、元々は年単位の効果を持ち、それなりの時間をか

けて使うような儀式魔法だからな。魔導具にするのも難しいし、どうするか決める前に教えておいた方がいい事だろう?」

「え? さつき、凄く簡単に使ってたじゃない。効果も10分だって……」

「その辺は、私の技術の賜物だ。というか、今の私では本来の儀式に必要な魔力が確保出来んし、人前で大々的に儀式魔法を使うわけにもいかんからな。」

お前の魔力量なら足りないという事は無いだろうし、適性によほど大きな問題が無ければ、少なくとも使う事だけは出来る。努力と適性次第だが、私と同じ事、せめて数日で効果が切れる程度にまで抑える事が出来る様になれば、精々数日と笑えるようになるだろうな。それに、魔法が使える状態であれば、術者自身での解除はさほど困難ではない。

それこそトイレやらで切り替えが出来るようになれば、本来の目的の為に使う事も出来るようになるだろう。目覚めた時に関直せるようになれば、睡眠の問題も回避可能かもしれん」

「……やってやろうじゃない! マトモな人生を取り戻して見せるわ!!」



夜月ツバサに関しては、翌日から早速高町家の道場に入り浸ってる。

今のところは道場のチャチャが次の来訪予定日、大抵は翌日まで効くように再処理をしてから帰ってる。魔導師として学び始めたばかりで魔力自体に慣れてない事もあって、自力での行使は無理がある。専用魔導具は、どれくらいの技術を持てるか次第で検討する予定。

それでも、本人はだいぶ明るさを取り戻しつつある。テンションが上がってるからという面は否定出来ないし、お姉様、主、私達以外の人には、まだまだ警戒心が強いけど。

水曜日の夕方に月村忍から、お姉様と八神家のチャチャ用の戸籍が

用意できたと言われた。

予定通り、4月の初めに外国から仕事の都合で来日、遠い親戚の八神はやてと同居する事になったという筋書き。住所も既に八神家に設定済みで、準備してたコンサルタントの会社の社員と言う形で職に就いてる事になってる。

つまり、お姉様と八神チャチャの、真つ当な収入が準備出来たという事。これで、金銭的なあれこれが色々楽になる。

主の病院についての調査も出来てる。院長は息子、つまり主の担当医を勉強の為にしばらく海鳴大学病院に行かせたいと考えていて、実際にコネなどを使って手配をしてるけど、本人は担当の患者を見捨てるような真似は出来ないと言ってる。会話を確認済み。

話の内容では、明らかに主が関係してた。両親との人間関係や住居と病院の位置関係を考えて、なるべく近くにとという考えが、主の主治医にある模様。

治療や研究の効率と信頼できる家族、加えて緊急時の安全性確保を盾に、八神はやての担当医である海鳴大学病院の石田医師を巻き込んで交渉。結果、主の両親の合意があれば、担当医ごと海鳴大学病院に移る事を納得させる事に成功。

外堀を埋める事が出来たせいか、八神はやては大はしゃぎ。

お姉様と八神家のチャチャを連れ出し、生活用品や家具をととても高いテンションで買った。

既に主の分や守護騎士達の分まで手配を始めてる。

そして、土曜日。大人モードのお姉様は、主の家に客として訪れた。目的は主を八神はやての姉とするための、主の両親の説得。

と言っても、お姉様は特に何もしてない。説明は主が行ってる。

この場には主の両親と兄がいるけど、父親以外は様子を見守る構え。

「……つまり、お前の意思で、はやてちゃんという娘の姉になりたいと。」

そのための根回しもしてきたと。

そういう事だな？」

「そう。はやての提案が切っ掛けで、病院への説明はエヴァに任せただけ、姉として八神家に行く事は私が決めた」

「ふむ、そうか。」

エヴァンジュさん、アコノの説明に間違いは無かったかな？」

主の父親は説明を聞いて、お姉様に確認。

表情を見る限り、かなり驚いてる。何に驚いてるかは別にして。

「そうだな。はやてがアコノに……正確には私とアコノに姉になってくれと頭を下げたのは事実、その後で私が病院で話をしたのも事実だ。」

もう少し前から説明すると、私のはやてやアコノと出会う切っ掛けは、私が日本に住居を探しに来た時に、遠い親戚と聞いていたはやての両親を訪ねた事だ。

私もそれまで知らなかったんだが、はやては両親を亡くして孤独な生活をしていたそう。寂しかったせいか、私が住居を探していると聞くなり、一緒に住もう、姉になってほしいと懇願してきてな。その時にアコノもいたから、ある意味では巻き添えになった形だ。

私やチャチャ……私の妹は住居を探していたから同居は問題無かったんだが、国籍や仕事の都合で法的に姉になるわけにはいかなかった。姓は同じだから、姉妹として一緒に生活するという事で納得してもらったんだ。

だが、アコノに関しては諦め切れなかったらしく、実際に姉妹になれる方法を見付けられてしまった。本人同士が乗り気で、止めることも出来なかったというわけだ」

「なるほど。ここしばらく出かける事が多かったのは、はやてちゃんやエヴァンジュさんと会ったり、色々調べたりしていたからか……」

「そう」

「アコノにとって、はやてちゃんやエヴァンジュさんは、どんな人物に見える？」

「はやては色々な意味で私に似ていて、理解しあえる仲間。」

エヴァは色々な面で頼りになる先生」

「そうか……アコノ、幸太と一緒に席を外してくれ」
「解った」

主と兄、退場。

残ったのは3人だけど、母親は口を出す気が無さそう。

「ふむ、アコノに内緒という事は、どんな秘密の話だ？」

「話と言うよりは、お願いなんだ。」

アコノに信頼されているように見えるからね」

「ほう？」

「お願いだ。あの子、アコノを守って、出来れば正しい方へ導いてやってほしい」

「ん？ ……本来は家族、つまりお前達の役目のはずだ。」

「どういう事だ？」

翻意の説得とかじゃないのは予想出来たけど。

何だか、不干渉だった両親とは思えない頼みだった。

「私達は、アコノを守れなかった。導くことも出来なかったんだよ」

「ちよつと待て、アコノを冷遇していたのは事実なんだろう？」

「拒否されてしまったんだよ。」

愛情は受け取れない自分ではなく、兄に与えるべきだと言われてね」

「はあ!？」

お姉様が呆気にとられてる。

というか、主の説明と違い過ぎる。

「アコノの性格は分かるだろう？」

こうだと思いついたら、何とかしてそれは違うと納得させなければ、考えを変えずに突き進むんだよ。

そして、私達は説得に失敗し続けているんだ」

「なっ……つまり、あいつは……」

「アコノが自分の扱いについて言い始めたのは、4歳の頃なんだ。」

その頃、幸太はまだ6歳になったばかりでね。アコノに私達を取られると思ったのか、色々手を焼かされていたんだよ。後で考えれば、ここが最大の過ちだったのだが……兄に、幸太に付き合っただけでほ

しいというアコノの言葉に甘えてしまったんだよ。

それからアコノは、ずっと考えを変えてくれないんだ。今までより幸太に向く分が減れば寂しい思いをさせる、と言ってね」

「あ、あ、あ、あの阿呆が！」

「ま、待ってくださいエヴァンジュさん！」

お姉様はいまにも部屋を飛び出しそう。

母親に思いつきり抱き留められて、動けなくなってるけど。

「止めるな！ あいつを張り倒してでも納得させる!!」

「話はまだ終わっていないんだ落ち着いて！」

「お前達には親としての気持ちがあるんだらう!?」

あいつにも子としての自覚はあるはずだ！

その結果がこれだなど納得出来るか!!」

「力尽くでは自分に求められている役目はこうだと判断するだけなんだ！

それではアコノ自身を変えられないんだ、解ってくれ!!」

「だからと言って放置出来るか！」

私は親子の絆を引き裂くために来たんじゃない!!」

「だからこそ君に頼みたいんだ！」

アコノに信頼され、アコノに良い感情で接してくれる君に!!」

すごい勢いで叫びあつてる。

どう考えても、主に聞こえてる。

しばらくすぐく真剣な目で見詰め合ってたけど、お姉様は諦めたように座りなおした。

「……確認するぞ。」

非干渉なのは、愛情を兄に向けろと言っていたからという事で間違いないな?」

「そうだ。迂闊にアコノに構えば、ますます身を引いてしまうんだよ。」

それこそ、食事すら一緒に取らなくなる勢いでね」

「それには、お互いに手出しをしない事も含まれるのか?」

「そうだ。アコノは、自分で出来る事は自分ですると言いつ張ってね。手伝う事はもちろん、見守る事すら嫌がるんだよ。」

それと同時に、私達の手伝いをしようとしなないんだ。不自由な手が増えても、余計な手間を掛けさせるだけだと言ってね。

全ては、私達の時間を自分の、アコノの為に使わせないようにという考えからなんだよ」

「何が暗黙のルールだあの阿呆は……」

それなら、あいつの外見が美人だという事は間違いないだろうに、着せ替え人形はともかく、着飾らせないのは何故だ？ 時間はともかく、外聞やら色々と言いつつ訳は付けられそうだが」

「綺麗な服を用意する事も拒否されるんだよ。金銭面でも負担をかけるわけにいかない、すぐ小さくなる服にお金をかける必要は無いと言ってね」

「その割に、あの綺麗な長髪はいいのか？」

「綺麗な髪は女性として金銭で賄えない価値がある、髪を伸ばすのは時間がかかるが費用はかからないという理由で、何とか説得出来ただけなんだよ。」

本音を言えば、妻が手を出す事を受け入れてもらえる入浴時間を少しでも延ばして、触れ合う時間を増やすためなんだが……そんな事を言えば、アコノは自分で切りかねないんだ」

「……そういう事か。あいつらしいと言うべきか、どこまで馬鹿な方向に突き抜けてるんだと問い詰めるべきか……」

ものすごい勢いで、お姉様がため息をついてる。予想もしてなかった方向に駆け抜けていた感じ。

「だから、アコノが自分から関わろうとしている、良い関係を築けそうなエヴァンジュさんやはやてちゃんに賭けてみたいんだよ。」

アコノを手放す事は辛いし寂しい事だが……それ以上に、普通の生活をして欲しいんだ。

私達がやり直しを目指すよりも、アコノも受け入れやすいだろう」

「はあ……親の心子知らずの極みだな。」

頭は悪くないはずなのに、どうしてここまで拗れるんだ」

「感情が感じられないという事がどれほど影響するのか知らないが、アコノは私達にかなりの負い目を感じているのだろう。」

自分を犠牲にされて、喜ぶ親は居ないのだが……」

「そうなんだがな……とりあえず、事情は解った。」

他の縁者も来ると言う話もある。あいつを構い倒して、大人数に関わる生活を叩き込んでやる」

「よろしく頼むよ。」

会う事はアコノが良く思わないだろうが、せめて近況は知りたいから、たまに写真でも送ってもらえるかな？

私達に対しては、それくらいで充分だ」

「それくらいは問題ない。驚くくらい着飾らせた写真を送ろう」

「ああ、よろしく頼むよ」



それからは、ある意味で大人の会話。

法的に特殊な縁組である事、それに伴い主とその家族の関係はほぼ切れる事、生活費等は不要という事を説明。

両親は生活費等を出さない事を渋ったけど、お姉様は親子関係が切れる事、確実に主が拒否する事を盾に固辞。なるべく状況を知らせる事で納得してもらった。

主の学校については、少し遠くなるけど転校は不要。実際の手続きは来週早々に始め、週末に引越すという事で決着。

と言うわけで、一通りの話し合いを終えて八神家に帰るために小野家を出たお姉様は、人気のない場所から主の部屋に転移。無言で防音の結界を張り、主の頭に拳骨を落とした。

「痛い」

「当たり前だ！ お前も前世の記憶がある以上、あんな態度を取れば親が悲しむ事くらい解っていただろう！」

「私の記憶や人格は、明らかに異物。」

本来の子を奪い、愛情を受け取る力も無い私に、愛情を向けてもらう必要も無い」

「憑依や成り代わりじゃないんだ、間違いなくお前があのお姉様の子だ

ろうが！

子に拒否される悲しさまで考慮して言っているのか!？」

「魔法使いになる事を求めた私は、最終的には親から離れる事になる可能性が高かった。

はやてを助ける目的の為に、距離を置いていた事が役に立つてもいい。

問題は無いはず」

「大有りだこの阿呆！

親が子を慈しむ感情は、そう簡単に割り切れるものじゃないぞ！」

「そう？」

主がものすごく不思議そう。

感情を感じられなくても、理解は出来るはずなのに。

「……アコノ。お前の前世は、どんな家庭で育ったんだ？」

そこから問題がある様に思えるんだが」

「両親と私の3大家族。両親ともに会社員で、住んでいたのは小さいアパート」

「両親との思い出は、どんなものがある？」

「ほとんど帰ってこないから、思い出は特に無い」

「ほとんど？」

「……大学生だったんだらう？ 行くときに相談はしなかったのか？」

「帰ってきた時に、行きたい学校と必要な費用を言って、許可を貰った。

そういえば、願書提出の期限に間に合ってたと思つた覚えはある」

「暴力やらは無かつたんだな？」

あと、帰ってこないのは昔からなのか？」

「暴力や虐待は無かつた。

私が小学生の頃には誰もいないのが普通だった。その前はあまり覚えていない」

放置？」

愛情を受けて育った感じがしない。

誰かの役に立ちたいのは、自己肯定感の無さの裏返し？

「……アコノ。放置も育児放棄ネグレクトと呼ばれる虐待の一種だという事は知っているか？」

「知らない。ねぐれくと……？」

「………はあ、原因はそこか……天然だったとは聞いていたが、予想以上に天然過ぎだぞ。

とりあえず、大前提がおかしい。普通は、親や子というだけで特別な存在だ。親子は努力して仲良くなるものじゃないぞ」

「そう……？」

主は、とても不思議そうにしてる。

やっぱり、根本的などに間違いがある。

「やっぱりか……とりあえず、お前が感情を正しく理解出来ない事は解った。

感情を思い出す以前の問題として、もう少し普通の事を学ぼう。な？」

「わかった」

A S編06話 バージョン・アップ

日が変わり、日曜日。

今日のお姉様は、主と一緒に高町家の道場にいる。もちろん、道場のチャチャもいる。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーのアースラ在住組が日本に来るという事で、ここが待ち合わせになった。

すると当然、高町なのはがいて、遊びに来ているフェイト・テストアロツサがいて。ちなみにユーノ・スクライアはクロノ・ハラオウンの手伝い、アルフはプレシア・テストアロツサと一緒に黒羽早苗を先生にして料理の練習中らしい。

よく一緒に来る長宗我部千晴と真鶴亜美が来て。

今日は賑やかだなと言っている間に、ここしばらく入り浸ってる夜月ツバサが現れた。

「な、何よこれ……」

現れたのはいいけど、夜月ツバサがへたり込んでる。

そういえば、転生者が複数いるという話はしたけど、今日いるとか、どんな人かと言った話はしてない。

「ああ、お前も来たか。ついでだから紹介するぞ。

夜月ツバサ、なのは達と同じ小学3年だが、他人の悪意に晒され続けて精神的に病んでいた転生者だ」

「何よその紹介は!?!」

「事実だろうか？ それに、過去形で言えるようになっただけ良かったじゃないか。

ちなみに、ここには魔力を感じ取れたせいで恐怖に耐えられなかった者や、犯罪組織で殺人術を叩き込まれた者、魔物と命懸けで戦ってきた者もいるんだ。

普通じゃないという意味での同類がいるぞ」

「古代ベルカと言えば戦乱というイメージがあるけど、エヴァさん自身はどうなんだい？

実力を考えても、平和だったとは思えないんだ」

成瀬カイゼに突っ込まれて、全員が目がお姉様に向いた。

確かに、あまり言っていない事かも。犯罪組織出身という話を流した
いという意図が見えるけど。

「確かに戦乱というイメージは間違っていないな。戦場に立った事もある。」

これ以上は、一応本物の8歳児が居る場で言う事じゃないだろう
?」

「一応じゃなくて、本当に8歳なのっ!」

お姉様は高町なのは見てるけど、本人に微妙な点を訂正された。
ここに居る中で、唯一の「名実精神の年齢が一致する」はずの人物。
なんてレアな。

ついでに、生なの頂きました。

「そうは言っても、とても8歳とは思えん言動だぞ?」

6歳の時点で、大事なものを取られた人の心はもつと痛いと言いつ
つとか……お前も転生者だと言われても、信じる自信がある」

「ち、違うよっ! 違う人の記憶なんて無いよっ!!」

「いや……弄り過ぎた私も悪いが、本来持つべきじゃない記憶を持つ
ていないのは、この場だとお前だけだからな?」

「……あ」

高町なのはの表情が固まった。

ここに居るのは、高町なのは、転生者達、アリシア・テストロッサ
の記憶を持つフェイト・テストロッサ、お姉様の前世の記憶を扱える
私達の一員である道場のチャチャ。

私達については知られてないけど、とつても失言。

「ごめん、なのは……」

「フェ、フェイトちゃん!? そんなつもりじゃないよ!」

微妙に落ち込んでいくフェイト・テストロッサと、あわあわしてる
高町なのは。

ちゃっかり真鶴亜美がフォローしに近付いたりしてるけど、それよ
りも今は、このタイミングで登場したネズミ姿のチクアープの方が問
題。

「おや、随分と賑やかでございますな」

「ね、ネズミ!？」

「はい、ネズミでございます。」

見たところ御同輩の様でございますが、間違いございませんか？」
「私はネズミじゃないわよ!」

夜月ツバサが驚くのは予想出来た。でも、やっぱり弄られ役らしい。

ついでに新しい顔の紹介をしておくという事で、Fate組の2人も呼び出し。

2人ともアースラで魔法の練習をしたから、すぐ合流に成功。

高町家の庭には、転送用に片付けられた場所が用意されてる。家族に事情がばれてるのは、こんな時に便利。

「ほら、千晴お望みの、ネギま以外の連中だ。Fate/Zeroの主従コンビだな」

「……でつか」

長宗我部千晴の目が点になってる。

馬場鹿乃の身長は210cmを超えてるから、160cmちよつとの長宗我部千晴から見ても、大人と子供くらいの差がある。130cmのお姉様とは比べちゃいけない。

馬場鹿乃の胸辺りまでしか届かない長宗我部千晴の胸辺りまでしかないお姉様。馬場鹿乃と並ぶと腰くらい。

(延々と説明するな馬鹿者!)

「小中学生が多いから、余計に目立つね。」

「だけど、説明を僕達やアースラに丸投げしたエヴァさんは、この2人をどう扱いたいんだい?」

「あの日は私も色々あって疲れていたんだ、勘弁してくれ。」

とりあえず、裏の世界に関わらざるを得ない力を持っているのは事実だ。その警告と、管理局との繋ぎはしたから、あとはこいつら次第だな。

「私が積極的に関わろうという気になる相手でもないし」
「酷い扱いだなオイ」

「だけど、私達には何か理由がある、という事になるわよ？」

馬場鹿乃がため息をついてるけど、真鶴亜美はお姉様の言い方が気に入ったらしい。

打算で関わつてると思われたかも。

「理由を言うのは構わんが……聞きたくない者はいるか？」

いるなら、席を外してくれ」

お姉様は言ってから全員を見回したけど、誰も出て行かない。

むしろ興味津々。

説明は長いから省略。

簡単に言えば、協力者の成瀬カイゼとチクアープ、能力のせいで苦しんでいた長宗我部千晴と夜月ツバサ、殺される可能性があった際に見付けられた真鶴亜美、人外仲間のセツナ・チェブル、主従の主と私達、みたいな感じ。

原作関係者は、闇の書対策で協力が必須。プレシア・テストアロッサを助けたのも闇の書対策に協力してほしかったからだと言明。

「ついでに言えば、亜美はアースラと接触する前だったから私達が教える事だけを提案したんだ。今ならアースラの連中に教えてもらう選択肢も出せるからな。

要するに、アースラという選択肢を出せるようになってから接触した馬場と上羽、ここにいないが黒羽に関しては、立場と状況さえ理解しているなら、魔法やらを教えるのは私である必要は無いという事だな」

「つまり、今からアースラ側に乗り換える事も可能という事かしら？」
「乗り換えたいのか？ そうだな、亜美はミッド式のデバイスが入手出来れば大丈夫だろう。特に問題は無いはずだ。

セツナは、戦闘スタイルやデバイスに求める特性を考えると、ベル力向きだな。

千晴とツバサは、能力を抑える手法が変わると問題が出るかもしれない。特にツバサは特殊な魔法を使っているから難しい。

カイゼとチクアープは……遠距離魔法の種類や汎用性を考えると、ミッド式の方が向く可能性はあるな」

「我等は、当面はベルカ式を極める事を考えております。

少なくとも、エヴァ様から頂いたデバイスをきちんと使いこなせるようになる事は必須でございます」

「入門用と聞いているのに、出力以外の底が未だに見えないからね。

エヴァさんの技術には驚くばかりだよ」

「ちよ、ちよっと待ってくれ！」

アンタ達、デバイスを貰ってるのか!？」

チクアープと成瀬カイゼはお姉様に従う方針らしいし、特に不思議じゃない。

馬場鹿乃が妙に反応してるのは、きっと自分達が無償じゃなかったから。

「アコノ以外は、入門用のものだがな。お前達が持っているデバイスの方が、魔法行使に関する性能はいいはずだぞ?」

出力的な意味で、だけど。

多彩さや柔軟性に関しては……うん、お姉様の勝ち。得手不得手や好みを調べるためにも、最大出力と速度を犠牲にして、かなり多めに魔法を記録してある。

反応速度は、黒龍を除けば上羽天牙のストレージデバイスが最速。アースラまで含めたらS2Uになるけど、インテリジェントなデバイスは黒龍並みに無茶な最適化をしない限り、どうしても若干遅くなる。高性能なレイジングハートやバルディッシュでも、傾向は変わらない。

「……慰めにならねえよ」

「出世払いで、今は借りてる状態なんだけど……」

馬場鹿乃と上羽天牙がどんよりとしている。

ベルカ組にはお姉様が無料であげたり貸したりしてるから、扱いの差は大きい。

その様子を見てか、真鶴亜美は乗り換える事を検討する気が無くなった様子。なんて現金な。

「私が使う魔法や作るデバイスはベルカ式だ。ミッド式は私が教えてほしいくらいだしな。」

それに、アースラと交渉する前に会っている連中は、私がベルカ式を教えるか、魔法に関わらせない選択肢しか無かったんだ。アースラの連中だとベルカ式は知識不足の様だから、引き継ぎも出来んしな。だからと言うわけではないが、はやても私の管轄にする。異論は認めん」

ついでに、お姉様の名前が八神エヴァンジュで、八神はやての親族と認められない程度の血縁者になる事を説明。大人モードになり、これが地球での“公式設定”になったと宣言した。

ちなみに、月村忍や五月祭の時に見せた時と同じ、グレーのスイツ姿。

「あれか、闇の書で助けたい人関係って事か？

「ただだけガツツリ介入するんだよ」

長宗我部千晴の目が点と言うか、呆れ方向に突き抜けた感じの半目になってる。

「まあ、アレだ。闇の書を夜天の魔導書に戻すために、使えそうな手は打っているという事だ。

はやても子狸の片鱗くらいは見せる事もあるが、可愛い娘だ。アコノやなのは達とも仲良くしているしな」

「もう何も言わねーから好きにしてくれ。

「とりあえず、もう守護騎士に襲われるって事は無いんだよな？」

「無いな。そんな事は私がさせん。

もつとも、必要があればリンカーコア蒐集への協力は頼むかもしれないが……特殊な能力がコピーされると不味いから、恐らくそれも可能性は低いだろう」

「解った解った。世話になってるんだし、必要なら協力するって」

「可能性の低い話だし、本当に必要になった時は改めて説明するさ。

「そろそろ私の本来の目的だ。セツナとカイゼ、ちよつと来い」

「はい、何でしょう？」

「日本を観光する予定だったけど、目的があったのかい？」

「お姉様に呼ばれたセツナ・チェブルーと成瀬カイゼ。

普通に歩いてくるけど、ちよつと不思議そう。

「お前達用の、新しいデバイスだ」

「え？ いいんですか？」

「今のデバイスも使いこなせている気がしないけど、大丈夫なのかい？」

「お前達の魔力量に出力が追い付いていないからな。スタイルもある程度見えてきたし、空間が安定したらミッドに行つて囑託魔導師の勉強と試験だろう？」

なら、渡せるうちに実力の伸びを見込んだデバイスを渡しておくべきだろう。

セツナには刀に近い型、カイゼには銃型を用意した。シグナムの剣とティアナの初期の銃に近いものだと思えば間違いない。共に管理局でカートリッジを入手出来る仕様のカートリッジシステムを組み込んでいるが、扱いは気を付けてくれ。

新しいデバイスは実用性重視だから、今のデバイスはそのまま教師役として持っているといい。

あと、セツナには悪いが……大きさや形は野太刀をベースにしたんだが、刀と言うよりは木刀に近いもので、物理的な刃は付いていない。魔力刃は展開出来るから、当面はこれで我慢してくれ。

正直言つて出来に納得していないし、刀匠とも話をしているから、次でリベンジする予定だ」

刃を外したのは、質量兵器に該当する可能性を懸念しての事。

でも、Vividにバスを切り裂いてるアスリートがいる事を忘れてたお姉様。

設計中、刃をどうするか決める前に相談してくれれば、付けられたのに。

(……メンテナンスの手間と、日本で見られても違法にならないように、つて理由も一応あるんだぞ?)

後付けの言い訳オツ。

「いえ、充分です。また刀を振れるなんて……」

セツナ・チェブルが、嬉しそうに刀として実体具現化したデバイスを抱きしめてる。

何と言うか、危ない人にしか見えない。

「アリンジャーをモデルにして、管理局仕様のカートリッジを組み込んだのかい？」

「良く準備出来たね」

成瀬カイゼは中折れ式の銃を弄りながら、感心した様子で呟いてる。

何をどうしたのかをきちんと理解出来るのは、魔法を使う犯罪組織であっても銃の知識が必要だったからかも。

「カートリッジについては、アースラ経由で情報を貰っただけだ。本局との通信はどうか繋がっているからな。」

CVK792の型番号は原作で知っていたから、それとそれに使えるカートリッジの情報さえ解れば、後はどうにかなるさ。元々、聖王教会で保管されていた真正古代ベルカ式のデバイスを参考にして、ミッド式で使えないか試していたものらしいしな。一般的でないだけで、ベルカ式としては古くからある代物だ。

ただ、かなり廃れている技術で、ごく一部の物好きが使うレベルだから生産量はかなり少ないようだし、聖王教会でも主流ではないようだ。魔力の充填は自分でも出来るから、余裕があったら覚えておいた方がいい」

「でも、カートリッジ、って何ですか？」

成瀬カイゼはこれが何か理解してるけど、セツナ・チエブルーは知識不足。

お姉様が使っているところは見ても、それが何かは解っていないかったらしい。

「悪い言い方をすれば、魔力ドーピングシステムだな。」

自動車に Nitrous Oxide System N O S ……ニトロと呼ばれるシステムを組み込むことに似ているか？ 一時的に高い出力を得るための切り札だが、同時にエンジンに高い負荷をかけて壊れやすくなる辺りは良く似ている」

「えーと……危険性は……」

セツナ・チエブルーの顔が引きつってる。

お姉様が腕に怪我を作っていたのは見てるはずだから、それを思い出してるかも。

「もちろん、ある。」

例えば、私がやった様な数十発の同時ロードなんて、普通の人間がやったら間違はなく体が吹き飛ぶぞ。使い方を間違えれば死ぬという極端な例だな。

もつとも、渡すデバイスの装填数は2発で、2発使う場合でも順にロードする必要がある。装填も手動だし、お前達の魔力量なら多少失敗しても怪我や体調悪化で済むレベルだ。

扱いを間違えなければ頼りになる切り札になるものだから、うまく使ってくれ」

「そ、そうですか……」

ぽんぽんカートリッジを使ってたA×SやStrikersを知らないセツナ・チェブルーは、かなり警戒してる。でも、成瀬カイゼは納得の表情。

「エヴァさんは、命がかかった場面、譲れない状況なら使える手は使えると言っているだけだよ。」

もちろん、普段は無理しない方がいい。そういう事だね？」

「そういう事だ。ある程度扱いに慣れるための訓練はしておく事もお勧めするがな。」

それに、お前達の魔力はかなり多いんだ。相対的にカートリッジの負荷は小さいし、頼る必要のある場面も多くは無いだろう。

そうだな、効果も見せておくか。アコノ、封時結界を頼む。黒龍セツトアップ」

お姉様、大人モードのまま防護服を展開。

服装自体は通常状態と……変わってる。長袖になってたり、スパッツというか最早長ズボンになってる上にスカートもロングになったりしてる。

ただでさえ魔法先生ネギま12巻の武道会での服装より露出が減ってたのに。どれだけ素肌を見られたくないんだと、問い詰めた。

その間に主も東風檜扇と南風末広を起動、カートリッジ4発を使って封時結界を展開。

「まずは、未使用状態だ。」

今の私の魔力量はC相当。馬場鹿乃と同水準で、お前達はおろか、武装局員と比較しても少ない量だな。

セツナ、新しいデバイスで……つと、名前を覚えていなかったな。そのデバイスの名前は不知火だ。ちなみに、カイゼのは天津風だぞ。とりあえず、それで高速狙撃弾を撃て。装甲障壁」

「え？ でも、その障壁では……」

「心配するな。抜かれようが、当たらなければどうと言うことは無い」「はあ……解りました。ちゃんと避けてくださいね。」

不知火セツトアップ。行きます、高速狙撃弾！

新撰組っぽい恰好になったセツナ・チェブルーが放った魔法弾は、お姉様の障壁をあつかりと破壊。

僅かに体をずらしたお姉様の左腕のすぐ横を通過して行った。「とまあ、こんな感じであつかりと抜かれるわけだ。」

ここで、カートリッジを使うとどうなるか。ロードカートリッジ、装甲障壁」

ぱしゅんぱしゅんぱしゅんぱしゅん、と4発の連続ロード。同時ロードより時間がかかるけど、この方が負荷は少ない。

展開した障壁はさつきより明らかに厚く、存在感がある。

「では、いきます。高速狙撃弾！」

再びセツナ・チェブルーが放った魔法弾は、今度は障壁で小さな爆発を起こした。

さつきより調子の良さそうな感じだったけど、不調じゃなければ別にいい。

「こんな感じで、障壁を硬くすることも出来るわけだ。」

装填してあるから、今度はカートリッジを1発使って撃ってみろ」「は、はい。えーと……ロードカートリッジ、

高速狙撃弾！」

ぱしゅつと薬莢が排出され、撃ち出された魔法弾。

それは一瞬障壁の表面で雷撃を放ったかと思うと、あっさりと突き抜けてお姉様の左腕を抉っていった。

「おお、凄いな。予想よりだいぶ威力が上じゃないか」

「凄いなじゃないです！ 避けるって言ってたじゃないですかっ!!」

「だいたい、非殺傷設定とかいっているので怪我しないはずじゃないんですか!?!」

「ロードカートリッジ、Wind der Heilung癒しの風」

ちよつと涙目で露出した骨を見てるお姉様と、涙目でお姉様に詰め寄るセツナ・チェブルー。

その隙に治癒魔法を準備してた主があっさりお姉様を完治させて、何事も無かったかのような顔をしている。

ちなみに、治癒の為に4発の連続ロード。同時じゃないから主に怪我とかは特に無いけど、詰め寄る時間は充分あった。

「いや、本来はカートリッジ1発でここまで威力が上がるわけが無いんだが……それと、私は魔導具で、この体は魔力で出来ているんだ。死にはしないが、純粹魔力攻撃など急所攻撃に等しい代物だぞ。消費を抑えるために少々脆くなっているのは認めるがな。」

まあ、あれだ。観光の後でいいから、ちよつと検証に付き合ってくれ。お前も安心して使いたいだろう?」

「は、はあ……」

ちよつと涙目のままなのに、お姉様は何だか嬉しそう。

魔力抑制に伴う希薄な実体の脆さが出ちゃったけど、その分コアは超圧縮状態でアルカンシエルすら耐えかねない状態だし。主の治癒魔法無しでも簡単に復元可能だから、大きな問題は無い。

……無いよね?

「よし、ついでだ。ここにいる中で、魔力量を増やすトレーニングをしたい者はいるか?」

高負荷と開放を繰り返すアレだ。有り体に言えば、Vividで行っていたものだな。

10代前半が最も効果が大きいが、お前達ならそれなりに伸びる年

代のはずだ。

「さあ、どうする?」



結局、高町なのはとフェイト・テスタロッサを含む、殆どの人がトレーニングを希望。逆に言えば、存在維持に魔力が必要なお姉様、主私達、それにチクアーブが対象外となった。

観光はまた後日という事になり、この日は説明と訓練で終了。

解散の時、少し離れたところに東渚がいたけど、見送りに出た主がそれを説明して別の道から帰らせた。ついでに視線で牽制、余計に主が敵意を買う結果に。

その頃、お姉様はセツナ・チエブルーを他言無用の約束をした上で別荘に連れて行き、カートリッジ使用の際の予想以上の威力上昇や、気に関する集中調査。

その結果。

「電気の変換資質は解っていたが、集束に関する高い能力とそれ以上のカートリッジシステムへの適性。それに……魔力素を直接制御する力、か。

まさか、原油で飛行機を飛ばす様な技術を本気で確立しているとは……」

判明した気の正体。魔力素を直接使用した、身体強化や魔法に似た効果の発現。

Strikersで登場した Anti Magic Link Field A M F の影響を受けないのは当然。魔力の結合を解除して魔力素にしても、燃料が増えるだけ。むしろ効率が上がる。

お姉様の虚数空間再現方式の Anti Magic Circuit Field A M F の影響を受けないのも当然。魔力回路も関係無い。

反応があった魔力は、魔力素を集束する際に一緒に集まる魔力の反応だった模様。

魔力素の濃度や質を測る技術はあるけど、動きを捉えるのは困難。

ミッドチルダに良い技術が無いか調査したいけど、変に情報を漏らせない。

内容を考えると、咸卦法は無意味かも？ 魔法には劣化ガソリンを使う様な物だから無意味。気の技に魔力を混ぜた際の影響は要調査。「えーと、つまり、まだ隠していた方がいいんですよね？」

「今のところは、そうなる。薄氷の上に成立している技術に思えるから非殺傷にするなど悪夢のような作業になるだろうし、仮に理論が出来ても使える者が現れると思えん。」

だが……いや、まだ可能性でしかないな。

今後の調査次第では、ひよつとするかもしれない程度だ。とりあえず、私達に気の使い方を教えてくれないか？ 生命力云々ではなさそうだし、私達にも使える可能性がありそうだから、今はもつとサンプルが欲しい。もちろん、信用出来る相手にしか伝える気は無いぞ」

「あ、はい。解りました」

A S編07話 チエンジ

調べたい事、やるべきことが多くある中、平日は平和に過ぎてく。とはいっても、お姉様は寝る間も惜しんで……と言うか、眠らなくてよい体質を活用し切って、夜間は従者や使い魔達と気の訓練に明け暮れてる。

気を使うために必要な資質や、実際の効果の確認をしたいらしい。従者や使い魔達は眠る必要があるけど、睡眠時間をずらしたりしながら嬉々として参加。体調には気を使うべきだけど、楽しそうなので何より。

この頃には八神はやても別荘に招待して、魔法を使つての補助付きで色々楽しんでる。自力ではないけど、空を飛ぶ事だつて可能。だけど主の魔法の練習が羨ましいせいか、気の練習に参加する事になった。

火曜日には、お姉様とチャチャ、共に大人バージョンのスーツ姿が、八神家でヘルパーのおばちゃんと会つた。

八神はやてに紹介してもらつて挨拶、その後は聞いておくべき注意点などを聞きつつ、おばちゃん最後のお仕事。

夕方になり、寂しくなると言うおばちゃんに、お姉様は知り合いと疎遠になるのも寂しいだろう、たまに会いに来てやってくれと話をした。

その夜、月村忍から連絡があり、2つの手続きが完了した事を知らされた。

つまり、本日を以て「小野アコノ」は「八神アコノ」になり、お姉様が八神はやての未成年後見人になったという事。どんな裏技を使ったのかは教えてくれなかったけど、随分と手が早い。

但し、裏の仕事もやつてる弁護士から問い合わせが来た事を知らされた。妹の友人を助けるためだと誤魔化したし、後ろめたい手は使つてないから法的な問題は無いけど、注意しろとの事。

注意はしても、やる事は変わらない。

水曜には学校への手続きやらを開始、同時に八神はやてが大はしや

ぎ、2回目。

お姉様や八神チャチャを連れ出して、再び主の生活用品の買い出しに行ってた。

この頃にはアースラスタッフの一部や、テスタロツサ家の3人も日本での戸籍を確保し終わったらしい。

アースラからはハラオウン親子とエイミイ・リミエツタの3人という辺りは、何だか原作のハラオウン家地球在住に繋がりそうな予感。ただ、安定した拠点の確保に使うつもりはあるものの、すぐに何かをする気は無い模様。

テスタロツサ家は、日本ではアリシア・テスタロツサとフェイト・テスタロツサは双子の姉妹扱いとなった。アリシア・テスタロツサが姉で、事故による仮死状態だった間は成長が止まっていた事に。一応裏側の事例に似た物があつたため絶対に無いと言えないらしく、ちよつと怪しいけど何とかなつたらしい。

両家とも住所はアースラの現地拠点で、テスタロツサ家はハラオウン家に居候している扱いにするらしい。アルフはザフィーラと同様にペット扱い。子犬モードを教えたら嬉々として使ってた。

というわけで、大きな問題も無く土曜日になり。

今日は主の引っ越し。持ち物は少ないし、移動する大物の家具も業者任せ。それもベッド、本棚1架、ダンス1棹、机1卓程度。椅子は無い。

服は少なく、本棚には学校の教材やノート類しか置いてなかった。無趣味を極めるところなるらしい。

八神はやてや八神チャチャと、主の家族との挨拶も滞りなく終わった。

もちろん、お姉様と八神チャチャは大人モード。地球で誰かに会う時は、基本的にこちらの姿で過ごす事になっている。

「それにしても、アコノさん。

普段ジャージばっかやと思つとったけど、ダンスの引き出し2本分しか服が無いのはあかんよ。

「それも、学校の制服とジャージばかりやし」

「別に着飾っても嬉しいと思えない。それに、すぐ小さくなる服にお金をかける意味が無い」

「言ったなアコノ。」

お前が着飾ると私が嬉しいし、両親に写真を送る約束もある。それに、不老で成長が止まったから服が小さくなることも無い。

と言うわけで、服を買いに行くぞ」

「おお、ええな。でも、エヴァさんはセンス……自信あるか？」

「……元男の私に聞くな」

「ふっふっふ、こんな時は助っ人や。ちよつと待ってな」

怪しい笑みを浮かべながら携帯電話でメールを出した八神はやて。原作では守護騎士の服を選んでるし、今の服装……白の半袖フーディーにオールドローズのミニスカートを見ても、別にセンスが無いわけじゃないはずだけど。

その30分後には、八神宅に7人増えてた。

内訳は、テストロッサ家3人にアルフ、監視役のリンディ・ハラオウン、アリサ・バニングスと月村すずか。

随分と多い。

「アリサとすずかは解るが……他の5人を呼んだのは何故だ？」

「今からのイベントはな、ふっふっふ……」

エヴァさん、アコノさん、チャチャちゃんのイメチェン大作戦や！

いつも似たような服しか見てへんし、みんな美人さんやのに服装に無頓着なのは世界の損失や！

アリサちゃんとすずかちゃんはセンスありそうやったし、プレシアさんはエヴァさんが何か弱そうやったから呼んだんよ。他の人達は……呼んでへんよ。何でいるんやろ？」

「フェイトも黒系の服ばかりだから、他の色も着せてみたいのよ。アルフもガサツな服装だし。」

アリシアは買い物に連れて行かない理由が無いでしょう？」

「私は、プレシアさん達の監視役ね。」

それに私は娘がいらないから着せ替えも出来なくて。この際、一緒に楽しませようよ」

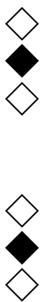
周囲の人達は、どう見ても強制連行の雰囲気。何だか、お姉様からドナドナが聞こえてくるような雰囲気になっている。

「……お手柔らかに頼む」

諦め……た？

強制連行、目標試着室。

連★行ー！



そんなわけで、やってきたのは商店街にある大きな服屋。

八神家に車椅子対応のバスが記載された時刻表があったから、普通に路線バスに乗って移動。

車椅子が3脚になるけど、アリシア・テストロッサのものは軽量で折り畳みも可能。本人も幼いし、プレシア・テストロッサの膝の上で楽しそうにしてた。

特に混雑する時間帯でもなく、美女美少女の集団に目尻を下げてた男達がいただけで、実害や問題は無かった。当人が隣の女性に睨まれてたりしても、お姉様達の責任じゃない。

「と言うわけで、早速着せ替えや！」

アリサちゃん、エヴァさんはどんなのがええと思う？」

「似合うかどうかはともかく、まずはこれよ！」

アリサ・バニングスが持つてるのは、ライトブルーのチューブトップワンピース。肩紐なしでミニスカート。リボン風にデザインされたベルトがワンポイント。総レースで花柄になってるけどあまり主張はしてない。

本人は白いシャツに赤いオーバーオールスカートなのに、方向性が随分と違う。

「ちよっと待て大柄な私にそれは似合わんしそもそもそんな露出の多い服は絶対に着んぞ全力で拒否するぞ無理に着せようとするなら全力で逃げ出すぞ!!」

「むー、せめて息継ぎぐらいしなさいよ」

「それに、慌てすぎだよ？」

「アリサちゃんが持つてるの、フェイトちゃんのサイズだよ」

「……あ」

どう見ても子供サイズの服と大人モードの自分の体を見て、お姉様の表情が固まった。

アリサ・バニングスは困った表情だけど、月村すずかはくすくす笑ってる。

「それなら、次はこれや」

「オトナのミリヨク」

八神はやたとアリシア・テスタロッサが持ってきたのは、黒いロングのシフォンチュールワンピース。当然の様にノースリーブだけど背中が開いてない分、八神家で最初に設定した物よりは露出も少ない目。

今回は、どう見てもお姉様のサイズ。

「……私をどうしたいんだ」

「最初のドレスの破壊力が抜群やったから、もっかい見せてもらお思ってたな？」

それに、あの可愛さに対抗しようと思ったら、これくらいの威力が必要や！」

八神はやとの視線の先には、アリサ・バニングスに服を着せられようとしてるフェイト・テスタロッサが。

このタイプの服は見慣れてないのか、着る前からちよつと恥ずかしそうにしてる。バリアジャケットはアレなのに。

「……一度着るだけだ。絶対に買わないからな」

「よっしゃ、勝った！」

「何が勝っただ……」

お姉様はため息をつきながら試着室に。

その間に、月村すずかが次の服を持ってきた。

「はい、アコノちゃんの分」

クリーム色のTシャツに、似た色のシフォンスカート。赤いカー

デイガンと茶色のニーハイソックスまで持ってきてる。

明らかに試着を前提にしてない。しかも、スカートと靴下の長さを考えると絶対領域が姿を見せるはず。

恐るべし月村すずか。ダークブルーのワンピースにライトブルーのカーデイガン姿とは思えないくらい可愛い感じにまとめてきた。

「じゃあ、これで」

「試着はしないの？」

「ソックスは試着できないし、試着も車椅子だと手間がかかる。

だから、今度会えそうな時に着る」

「そ、それでいいんだ……」

確かに、試着は大変そうだけど。

魔法を使えば簡単なのに。

(こんな事で、秘匿に注意しながら魔法を使うのは良くない)

さいですか。

そうしているうちに、お姉様は八神はやてに写真を撮られた上で、プレシア・テストアロツサが持ってきた服を着させられてる。

デニムベースでレースをあしらったノースリーブのシャツに、明るい色のスキニーパンツを合わせてる。

「うーん、いまいちね」

「……そうか」

お姉様は、悟った様な諦めたような、とりあえず疲れの見える表情で遠い目をしてる。

でも、プレシア・テストアロツサの後ろにいる、ワクワクした目をしたアリシア・テストアロツサが持つてる服よりもいいと思う。

具体的には、普通の服だったという点で。

「つぎは、これー！」

そう言っ出てされたのは、処分品のタグが付いたもの。

袋には、クリスマス衣装・猫娘(黒、猫耳カチューシャ付き)って書いてある。

「あ・ほ・かー！」

「きゃー、おこったー」

きやつきやと笑いながら、アリシア・テスタロッサが逃げてく。

逃げて行った先には八神はやてと、赤いポロシャツにデニムのオーバーオールを着させられて、どことなく真理夫風になったアルフの姿が。

その横には、月村すずかに服を乗せられてる主の姿もある。試着してくれないから、あててみる事だけでもしたいらしい。

服は、デニムのワンピースに白ニットのシャツ。ベージュのジャケットは普通に着てる。

それを手伝っている八神チャチャはというと、アイボリーのブラウスと紺のロングスカートを着てる。コルセット風の大きなベルトがポイント。

選んだのは、すぐそばに居るリンデイ・ハラオウン。

「……アコノ達は平和だな」

「素材も反応もいいものだから、色々やりたくなるのよ」

「……………勘弁してくれ」

プレシア・テスタロッサの手にある、黒のチューブトップと薄紫のカーデイガンを見て、お姉様がげんなりしてる。

良く見るとチューブトップが凄く短いから、胸元や腹を見せるための組み合わせらしい。

お姉様は、逃げ出した！



しかし、回り込まれた！ 大魔お……大魔導師からは逃げられない

！

というわけで、それからも延々と着せ替えは続き。

夕方になり、今から帰って食事の準備をするのも面倒だという事で、一緒に食事をする事になった。

入った店は、創作料理を出すらしい居酒屋。駅近くの割には店内が広く、ゆったりしていたのが選択理由。

ちなみに、お姉様の今の服は、明るいグレーと黒のストライプの長

袖シャツに、濃い紺のデニムレギンス。胸元は下に着てるチュニックでカバー。

素肌はあまり見せてないけど、体の線は結構出てる。シャツの裾を括ってへソ出しにさせられそうになったのは、全力で拒否してた。

「疲れた……」

お姉様はワインを手に、垂れてる。

めっちゃ垂れてる。どこぞのスライム熊猫みたいに。

「視線が気になると言っても、その容姿なのだからどんな服装であろうと注目されるわ。」

早めに諦めるか慣れるかしなさい」

ソルティードツグを手に、プレシア・テスタロツサが笑ってる。

今の普段着がシンプルなライトグレーの長袖チュニックと、グレーのロングスカート、共にちよつと青みが強い感じ、しかも胸元はちやっかりダークグレーのチュニックでカバーしてるという事を考えると、あまりお姉様の事を言えない気もするけど。

時の庭園で着てた防護服は……半胸へソ出し腰出し。うん、お姉様に薦めてた服の趣味は露出狂寸前のこつちに準拠するみたいなの？

「そうね、容姿にまつわる視線は、余程の事でもない限りは無くなる事が無いし。」

その姿が公式のものになっている以上、どうしようもないわ」

リンディ・ハラウンはというと、黒いタートルネックのアンダーに白いシャツ、砂色のベストを着てる。焦茶のタイトスカートの下にはダークグレーのタイツも穿いてるから、お姉様より露出は少ない。胸元的な意味で。

その手にあるのは、梅酒。ロックで飲んでる。

「慣れたら犯罪者に後れを取りそうだな……」

私は、無意識に視線を選別出来る程器用じゃないんだ。近くの明確な味方しか区別出来ず、殲滅戦しか出来ない、戦場での私の不器用さを舐めるな」

「それは自慢にならないわよ。」

だけど、最終兵器なのに戦闘訓練をしていないと言っていたのはど

うしてかしら？」

リンデイ・ハラオウンが首を傾げてる。

確かにお姉様はそう言ってたし、本来の立場がばれたら疑問に思われるのは仕方ない。

「言っただろう、私は不器用なんだ。本来の役目は情報管理や研究開発だから、訓練も魔法制御に関する物ばかりだった。そもそも私の能力自体が広域無差別に寄っているから、それを封じたら戦力として凄まじく劣化するぞ。」

そんな基本無差別な攻撃しか出来ん、友軍を避ける事もままならんモノが、戦場で通常兵器になるわけがないだろう」

前線に立つ事を嫌がったお姉様が、アルハザード上層部に対して使っていた話。お姉様最強の手札は広域剥奪で、魔力量での選別は出来るけど敵味方の識別は不可。私達や使い魔達としか訓練してないから多対多の戦闘は本当に苦手だし、私達の補助が無いと敵味方の区別が怪しいのも本当。

私達が補助出来ても適性的に向かないのは事実だから、嘘じゃない。

「つまり、最終兵器と言うのは……」

「友軍もまとめて吹き飛ばす玉砕戦、または私1人で飛び込む蹂躞戦でしか使えない、普段は使い物にならない兵器という意味だな。」

リンデイは、私が変態ロリコンに幼女天使などと呼ばれかけた場にいただろう？ 友軍と戦場に行く際の私は、基本的に後方での医療担当だった。それも、戦況が悪化したら即座に撤退を開始する様な位置や立場で、だ。

そこまで攻め込まれた、つまり前線が完全に崩壊した負け戦が、兵器としての私の出番だ。撤退する司令部の殿として、追ってくる全てを破壊する。その中に助けを求める友軍の生き残りが居ようと関係なくな。

私の力を考えると、何も間違っていない。実に正しい運用法だ」

お姉様の1番きつい例を出さなくても。

でも、1人で敵陣や拠点や国を破壊しに行く話と比べて、どっちが

マシか判断に苦しむ。

「だけど、それはまるで……」

リンデイ・ハラオウンの顔色がちよつと悪くなってる。

振る話題を間違えたと思ってるかも。お姉様も何だか愚痴っぽいし。

「忘れたのか？ 所属していたのは軍事国家で、私は魔導具なんだ。

人が使い捨てにされる時代の、人ですらないモノなんだぞ？

人ですら傀儡兵の様な扱いを受けるんだぞ？

命令通りに動かない魔導具なんて、動かない機械以下の扱いだぞ？

変に自分の意思で動く分、動かない道具よりも危険物扱いされるんだぞ？

私は、日本人なんだ……意識だけだろうが、人間なんだ………本当に究極なのはクズさだけで実情なんて張りぼてで誇張で粉飾ばかりじゃないか……」

お姉様の変なスイツチが入っちゃったー！

一緒にお酒を飲むからって、食糧成分効果の一時適用をここまで有効にしちゃダメー!!



「さてと、ちよつと真面目なお話しをしましょうか」

お姉様も一応落ち着き、夕食もある程度食べて、アリシア・テスタロツサが眠さで目を擦り始めた頃。

リンデイ・ハラオウンがライムサワーを片手に、気軽そうな声に似合わない真剣な目でお姉様を見てる。

お姉様の手には桃のチューハイ、プレシア・テスタロツサはブルーベリー酒を飲んでる。

ちなみに、見た目16歳相当のアルフを含む子様達はジュース、八神チャチャはお茶。酒を飲んでいるのは3人だけ。

「真面目な、か。さっきの様な話は勘弁してくれ」

「大丈夫よ、傷痕を抉る趣味は無いから。」

単刀直入に言うと、闇の書……夜天の魔導書を、どんな手段で何とかするかを聞きたいの」

確かに、詳しい話はしてない。

協力する約束はしたけど、どう動くかもあまり伝えてない。

プレシア・テスタロッサは静かにお姉様を見てるから、聞きに徹するつもりらしい。

「そうだな、そろそろ伝えるべきか。」

まず、一番大事な点は、原作で夜天が死を選ぶ最大の理由は、自身を直す事が出来ないからだという事だ。

闇の書の闇、狂った防衛プログラムを一旦停止させることに成功しても、また再生してしまう。歪められた基礎構造をどうすることも出来ない。だから、夜天は主であるはやてに守護騎士や自身の想いを託して消滅する事を選び、周囲もそれを受け入れたんだ」

「つまり、直す事が出来る何かがある……そう言いたいよね？」

「そうだな。夜天は、本来の姿が消されてしまっているから修復が無理だと嘆いていた。」

だが、本来の姿、夜天の初期構造は、私が知っている。

つまり、防衛プログラムの停止と、主であるはやてが管理者権限を行使出来る事。恐らくこの2点を満たせば、後は私が情報を渡すだけで夜天自身での修復が可能だろう」

少なくとも原作のリインフォースの発言を検証する限りでは、こう判断出来る。

八神はやてによる管理者権限の行使は必須じゃないかもしれないけど。

「だけど、そのためには……」

「闇の書の完成が前提になる。だから、これが最後の手段だ。」

それに、改変の時間が足りなければ、家族になる守護騎士も消滅する事になりかねん。初期構造と今の姿は、大きく変わっているからな」

「そう。どれくらい変わっているか、把握しているのかしら？」

「暴走する防衛プログラムが最悪の改変だな。これさえ何とかなれ

ば、後は細事だと言っている。

マシな変更点は、守護騎士の追加くらいなものだろう。

これ以上は防衛プログラムが邪魔で、調べられていないんだ。管制人格とも話が来ていないしな」

少なくとも無限再生はおかしいはず。経年劣化や破損からの回復を意図してるけど、防衛プログラムがあんなグロ……妙な再生をするのは、明らかに暴走した結果。

これ以外は、情報不足。

「最初に目指すのは、管制人格との対話という事ね」

「そうだな。闇の書が起動した時点で会話が出来れば一番いい。

起動時が駄目なら、ある程度蒐集する必要があるんだが……その時は、リンデイに頼みたい事がある。

守護騎士達を、犯罪者対策に参加させてやってくれ。

戦力としてはかなり上等、リンカーコアを蒐集する事で魔導師を無力化することも出来る。

死なないが再生出来ない状態まで蒐集すると、凶悪魔導師の永久無力化も不可能ではない。

悪くない話だと思うし、合法的に行うならこれくらいしか思い付かないんだ」

「合意の下での蒐集も、合法ではあるわよ？」

「訴えられたら傷害事件にされる。信頼出来る一部の者はともかく、誰でもいいと言うわけにもいかんだろう？」

闇の書の情報拡散を防ぐためにも、合意だけでは量の確保が難しいと思うぞ」

リンカーコアの異常な収縮という被害を与えるのは事実。

事情説明の仕方も問題になる。手間に見合うとは考えにくい。

「そうね……エヴァさんや従者の人達はどうなのかしら？」

「私は魔導具だぞ？ 魔力を奪われる事は、実質的に命を削られる事と同義だ。

それに、私の古い呼び名を知ったんだ。私を知る魔法を闇の書で力でポンポン使われると、地球くらいは簡単に滅びる事くらいは想像

出来るだろう。一応闇の書を完成させるプランもあるんだから、そのリスクは避けたい。

従者は、そもそもリンカーコアが無くて魔法を使えないんだ。蒐集する物が無いから論外だな」

使い魔は可能だけど、アルハザード等の現存しない魔法を知ってるから、やっぱり駄目だし。人工リンカーコアも、素材の時期を考えると同様。

「ままならないわね」

「簡単にどうにかなるなら相談や頼み事などせん。本当に、現実はまだまらん事ばかりだ。

あ、酒の注文を頼む。次はカルーアミルクで」

A S編08話 ようこそ

相変わらず平日のお姉様は気の修業三昧。

なんとなくコツを掴む事に成功した従者も現れたし、調査が進む気配はある。

アースラの人達、要するにクロノ・ハラオウンを中心とした法務メンバーは、本局を相手にプレシア・テスタロッサやフェイト・テスタロッサに関する話を始めてる。

話をする相手に気を付けているため進みは遅いけど、フェイト・テスタロッサは起訴猶予でほぼ決まり。内容に問題はあったが善意による行為であり、善意は認められないと納得させることに成功したらしい。問題無く修了した教育プログラムや、囑託魔導師への意欲も無罪化を後押ししたらしいから、狙いは良かった模様。

プレシア・テスタロッサはクロノ関係の問題もある為、略式ながら裁判になるらしい。但し、司法取引やジュエルシード回収への協力により罪状や罰金等を相殺する事が可能で、クロノ・ハラオウンは実質無罪で済む手ごたえを感じているらしい。犯罪者の情報やロストログア回収の協力で罪状を軽減して罰金刑で済ませられる範囲に抑えた上で、提供する医療技術の技術料で金銭面を相殺する腹積もり。

私達も時折相談には乗ってるけど、基本的に時空管理局の法務は解らないからお任せの構え。拘束や監視が抑えられる結果になればそれでいい。

闇の書の起動前に念のためという事でチクアーブによる干渉も試してみたけど、分体が侵入直後にあっさり破壊されるという事態に。

防衛プログラムが頑張りが過ぎてごさいますな、とチクアーブは笑ってたけど、予想以上に洒落にならない結果になった。

と言うわけで、木曜の夜。

八神家には、住人である八神はやと大人モードのお姉様に加え、プレシア・テスタロッサとリンディ・ハラオウン、そして子ネズミバードジョンのチクアーブの姿がある。

日付としては、6月3日。要するに、もうすぐ『闇の書』の封印が解けるはず。

主はチャチャマルやチャチャゼロ、八神チャチャと一緒にリビングにいる。何かあった際の、戦力的な切り札。

「うー、なんか緊張してきたわ。

魔法は何度も見とるけど、体の中からなんか出てくるってのは初めてやし」

「なに、驚かなければ大したことは無いはずだ。手筈は覚えているな？」

「それは大丈夫や。やけど、もしもの時はお願いや」

「ああ、任せろ」

ベッドの上で座ってる八神はやてが頼んでるのは、最悪の事態に備えるためのもの。

致命的な事態が発生し、かつ、お姉様の管制特権や強制介入、チクアーブの能力でも駄目だった場合の切り札。八神はやての魂とリンクカーコアを剥奪して、眷属化するという約束。

お姉様は渋ってたし、闇の書に正面から喧嘩を売る事にもなる、使わずに済めばいい手段。

「だけど、こうして見ると、鎖で縛られている事以外は普通の本ね。

……何だか、複雑だわ」

まだ起動していない『闇の書』を手に、リンディ・ハラウンが眩き通り複雑な表情を浮かべてる。

夫の仇であり、今回の問題の中心に存在するロストログア。

それが一見無防備に手の中にあるのが、信じられないとかかも。

「それも、あと数分なのでしょう？」

今は封印状態で大人しいけれど、無闇に触れるものではないわ」

プレシア・テスタロッサは、大きな杖型のデバイスを手に、部屋の隅に立ってる。

ちなみに、杖の形はやっぱり映画版のもの。名前はカツカラ、高出力時の安定性が高いだけで、割と普通のストレージデバイスらしい。バリアジャケットは展開してない。魔女だ、露出狂だ、フェイト・

テスタロツサが悪影響を受けてる、と皆で散々貶してから、新しいデザインで悩んでる模様。そもそも、今は守護騎士を刺激しないためにも、展開しちや駄目だけど。

「それはそうね。どこに置いておけばいいのかしら？」

「棚の方でいいんじゃないか？」

驚いて放り投げたりしなければ、手に持っただけでも構わんとは思いますが……何も無い事は保証出来んぞ」

「そうね、何かあってから慌てても遅いわね」

というわけで、リンディ・ハラオウンは本を棚に置き、プレシア・テスタロツサの隣に。

お姉様は大人モードで八神はやての隣にいるし、準備は出来てる。念のために封時結果も展開。そして、日付が変わって、6月4日。

闇の書が怪しげな光を放ち始める。

「おお、ホンマにきた！　これが覚醒イベントやね！」

「お前が魔法を使えるようになるイベントじゃないんだ、少し落ち着け」

「落ち着いてるけどワクワクは止まらへん！」

「それは落ち着いていないだろうに」

どう見てもはしゃいでる八神はやて。

闇の書の起動は、原作と同じ流れ。家が揺れ、怪しく脈動する闇の書が浮かび上がり、縛っていた鎖が砕けて白紙の頁が凄じ勢いで捲れてく。

『封印を解除します』

機械的な声が出ると同時に闇の書が閉じ、八神はやての目の前に降りてくる。

『起動』

闇の書から赤い光が放たれ、八神はやての胸から白い光を放つ何か……リンカーコアが出てきた。

「これが、リンカーコアってやつやね？」

「そうだ。やはり、お前のは綺麗な白色だな」

八神はやてが興味津々で見守る中、ゆっくりと闇の書へ移動するり

ンカーコア。

途中、それが強烈な光を放つと同時に部屋の片隅に現れる、崩れた六芒星の魔法陣とそこに跪く4人の人影。

「闇の書の起動を確認しました」

「我等、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ。

魔法陣も体勢も宣言も、原作と何も変わらない。

「うん、みんなの事は聞いてるよ。」

そやけど、最初にいくつか確認や。正直に答えてな？」

「はい、我が主」

八神はやての言葉に、シグナムが跪き俯いたまま言葉を返してくる。

無礼は許されない、という初期認識を正しく遂行している模様。

「私が書の主で、私の言う事は絶対なんか？」

「はい、我が主」

「私が命令したらみんなは闇の書のページを集めて、闇の書が完成したら何かいい事がある。」

あつてるか？」

「はい。闇の書が完成すれば、主は大いなる力を得ます」

「私が大いなる力が欲しい言うたら、蒐集する。」

私が大いなる力なんか要らへんって言ったら、蒐集せえへん。

闇の書の完成と、私の指示だと、指示の方が大事って事でええか？」

「はい。我が主の御望みになるままに」

「勝手に何かする事は無い、って信じてええんか？」

「我等の全ては主の為に。」

主の望まぬことを行う事は有り得ません」

「なら、大いなる力って、何や？」

どんな事が出来るん？」

「あらゆる望みを叶える事が出来る力です」

「その力はどうかやって使うか、知ってるんか？」

「それは……」

八神はやての質問に、淀みや迷い無く答えていたシグナムの言葉が止まった。

説明に困つていると言うより、質問自体に困惑している雰囲気。

念話を使つてるような反応があるから、きっと相談してる。

「なら、力がどう使われたか、見た事はあるん？」

「……申し訳ありません。闇の書の完成に立ち会った経験はほとんど無く、その時の記憶も思い出すことが出来ません。」

その為、我等は見た時の事をお話する事が出来ません」

「ということは、大いなる力がどんなのか知らへん、ってことやね？」

「申し訳ありません」

元々俯いていたシグナムの頭が、余計に下げられる。

他の3人は全く言葉を発しないけど同じく頭を下げている所を見ると、結論は同じらしい。

「うん、こんなもんでええでしょうか？」

「ええ。守護騎士達の行動は、過去の主の指示によるものだった。」

そう判断するには充分ね」

やり取りを記録していたリンディ・ハラオウンが頷くと、八神はやてはふう、とため息をついた。

「よっしゃ、質問はこれでおしまいや。」

改めて……ようこそ、私の騎士達。堅苦しい時間は終わりやから、みんな顔を上げて、普通に立ってくれてええよ。少なくとも、家族に傅かれるのは好きやないし」

「はい」

守護騎士の4人は困惑しつつも初めて顔を上げ、主である八神はやての近くにいるお姉様と壁際に立つ2人、その横に浮かぶ小ネズミを見て、表情に警戒の色を浮かべた。

「あ、この人らは家族とお世話になってる人達やから、そんな警戒せんでもええよ。」

まずは自己紹介からや。私は八神はやて。みんなのご主人様やけ

ど、見ての通り、足の悪い小娘や。魔法を使った事も無いし、色々迷惑をかけると思うけど、これからよろしくな」

「は、はい。よろしくお願いします」

ニコニコと笑う八神はやての影響か、シグナムが戸惑ってる。

それから、守護騎士4人の自己紹介があり、八神はやてがザフィーラに狼の姿になる様希望して、今は思いつきりもふもふしてる。

「やれやれ、あつという間に犬扱いだな」

「私は盾の守護獣。主の御身を護る為、近くに侍ることが出来るのであれば否は無いです。」

だが……」

お姉様の眩きが聞こえたのか、ザフィーラはお姉様を見据えてる。

その視線が言ってる。お前は誰だ、と。

「私か。私は八神エヴァンジュ。夜天の関係者で、はやての保護者でもある」

「夜天の、だと？」

シグナムの警戒心が復活。

何か殺気の様なものまで感じられるようになってきた。

「そもそも、お前達はいつからこれを『闇の書』と呼んでいる。

ザフィーラは夜天の主と言っていたんだ、本来は別の名だと知っているんじゃないか？」

再び、念話の反応。

警戒は解いていないものの、ものすごく困惑してる雰囲気がある。

そのまま誰も言葉を発していない間に、闇の書がお姉様の近くに来た。

「本の方から来てくれたわけやし、試してみよか？」

あ、守護騎士のみんなは手を出さんといてな。管制人格さんと話が出来るか試すだけや」

「そうだな、やってみるか。」

夜天に問うぞ。管制人格の意識はあるのか？

あるなら何らかの言葉を伝えるか、縦に動いてくれ。否定の場合は横に動いてもらえると判りやすいから、意思の疎通が出来るならそう

してもらえると助かる」

しばらく待っても、反応は無い。言葉は聞こえないし、動きも無い。「ふむ……管制通信開始。これで言葉を伝えられるか?」

回線は繋がってるはずなのに、やっぱり雑音しか聞こえない。意思がある風には見えないけど、どこか警戒されてる雰囲気もある。

「無理か。チクアープ、もう一度頼めるか?」

「畏まりました」

プレシア・テスタロッツサの横に浮かんでいた小ネズミが分裂し、一方が闇の書に吸い込まれた。

直後、パチツ、と放電したような音が聞こえる。

「ふむ、やはり駄目でございますな。」

先ほどと同様に、防衛プログラムが頑張っているようございませす

「そうか、この状態では相談もままならんし、やはり管制人格を叩き起こす必要があるのか……」

守護騎士達に確認だ。管制人格を起動するには、400ページの蒐集と主の承認が必要。

「この認識で正しいな?」

「ええ、確かに「シヤマル!」ご、ごめんなさい」

お姉様の質問に頷いたシヤマルだけど、シグナムに怒られてしょんぼりしてる。

思ったよりも冷酷参謀状態じゃないかもしれない。

「そんなに警戒せんでもええって。」

エヴァさんは、今は闇の書って呼ばれてるこの本の、妹さんや」

「ならば、すぐ近くで警戒している者達は何者だ?」

「何故警戒する必要がある」

「ああ、アコノ達か。私の主と防衛プログラム達だな。」

お前達が予想した状態で出てこなかった場合に対処してもらうため、少し離れたところに居てもらったただけだ。

「呼ぶか?」

「……ああ。こころも警戒されていては、落ち着けん」
シグナムはどう見ても警戒を解いてないけど、言い分は理解出来る。

主達に状況を見せてるから、もうこつちに向かつてるし。

「エヴァ、警戒はもういらない?」

部屋に入ってきた主は、両手を伸ばしてお姉様を見てる。

こつちに来いと、目が言ってる。

チャチャマルとチャチャゼロは、主の両隣で、静かに立ってる。チャチャゼロが面白そうにシグナムを見てる以外は、一応予定通り。

「そうだな、主であるはやての姉を、はやての目の前で傷つける様な真似はしないと信じよう」

お姉様は一旦大人モードを解除して少女の姿に戻り、続いて本の姿になって主の手元へ。

主はお姉様を胸に抱えると、守護騎士達の方へ向いた。

「私は、八神アコノ。貴女達守護騎士の主のはやての姉で、夜天の妹のエヴァの主でもある。

感情を感じることが出来ないから冷たい感じがすると思うけど、邪険にする意図は無い。

横の2人が、エヴァの防衛プログラム。

これから家族としてよろしく。

何か質問はある?」

「……色々と聞きたい事はあるが、ここで確認したい事は一つだけだ。

我が主を害する意図は無いのだな?」

「無い。そもそも、妹に危害を加える意味が解らない」

「……そうですか。」

主のご家族に対する失礼な言動の数々、申し訳ありませんでした」
「別にいい。これからは4人とも家族になるから、普通に接してくれれば問題ない。

はやて、説明はした?」

「その辺は今からや。」

まず、現状から説明するとな……」

そして始まる、八神はやての状況説明と説得。

保護者のお姉様、姉の主、家主の八神はやて。他にお姉様の防衛プログラムや従者もいる事と、守護騎士4人を「家族」として迎え入れる事。

「それでや、まずは服の用意をせなあかん。」

みんなのお洋服を買わなあかんから、サイズ測らせてな」

そう言いながら嬉しそうに、時折胸に手を伸ばしながら採寸してる八神はやて。

お姉様は少女の姿に戻ると、リンデイ・ハラウンとプレシア・テスタロッサの方へ向かった。

「さて、やはり管制人格を叩き起こす必要があるようだ。目標は400ページ。」

悪いがリンデイ、守護騎士達を犯罪者対策に起用する件について、話を進めてくれ」

「なるべく違法ではない形で蒐集を行うためなのだから、出来るだけ早めに話をしてみるわ。」

でも、法的には難しそうだと、改めて念を押していいかしら？」

「予想は出来るさ。だが、私では話も出来んから、よろしく頼む。」

それと、プレシア。私について知っていたお前なら、魔法陣に見覚えがあるだろう？」

「ええ。まさか、こんな所に手掛かりがあったなんてね」

守護騎士が現れた際に使われた魔法陣は、ベルカ式で手を加えられた六芒星。

つまり、基本はアルハザード式。

見た限り、かなり色々取りこぼしてそうな術式だけど。無理に無理を重ねてる印象。

「闇の書が起動するところなど、そう見られるものではないだろう。それにしても、どんどん問題を先送りしている気分だ」

お姉様はため息をついてるけど、防衛プログラムが張り切り過ぎ。

流石、闇の書の闇。

簡単には祓われてくれないらしい。



その後も、八神はやての説明は続く。

「それと、みんなのお仕事についてや。」

みんなのお仕事は、うちで一緒に仲良く過ごす事。一番大事なのはこれや。

そのためにも、勝手に蒐集とかしたらあかんよ」

「本当に良いのですか？」

貴女の命ならば、我々はすぐにでも闇の書のページを蒐集し、貴女は大いなる力を得ることが出来ます。その足も、治せるはずです」

「うーん、それなんやけどな？」

今までの事例を調べる限り、闇の書の力は破壊以外に使われた事が無いらしいんよ。だから、闇の書と呼ばれる現状を何とかせなあかんという事は解ってる。

蒐集して完成すると、要するに自爆してまう。

蒐集せず完成せんままやと、侵食で麻痺が広がってく。

どっちにしても、みんなと一緒に過ごせへん。

エヴァさんが中心になって、何とかしようとしてくれる。だから、みんなはそれに協力してほしいんよ」

「しかし、いずれにせよ命に係わるとなると、一体どの様に協力して良いか……」

「治療も難しい、という事でしようか？」

シグナムが困惑して考え込み、シヤマルが自分の得意分野の技術に望みをかけてる。

だけど、侵食は治療してもどうにもならない。

「あかんらしいよ。リンカーコアゆーのが侵されてる上に負荷がかかってる結果やから、それを何とかせな治療してもほとんど意味が無かって言ってた。出来るのは精々問題を少し先送りする程度やって。」

さつきも言ってたけど、まずは管制人格さんに起きてもらわなあかんみたいやから、まずはそれを目指す事になるみたいや」

「そうですか。それでは、蒐集を行うという事になります。

では……」

「勝手にやったらあかんて。」

エヴァさんが色々と手を回してくれてる。管理局の人とも話をして、問題にならないような集め方を考えてくれてるんよ」

「管理局なんて、信じられねーです」

初めてヴィータが口を開いたけど、なんか冷たいと言うか、ぶっきらぼう。

過去の歴史を考えるとほぼ敵対してるはずだし、嫌いなのは想定内。

「うん、それは解ってるつもりや。」

やけど、私はみんなに犯罪者になって欲しくないし、なつてもうたら一緒にいられへん。それは嫌やから、お願いや。ちゃんと言う事聞いてな？

夜天の魔導書が闇の書なんて呼ばれるようになる事は、もうせんていい。私がさせへん。

今までとは違うって事を見せていけば、きっとみんなを見る目も変わるよ」

「お願いなどせずとも、命じて頂ければ我々は……」

「家族に命令なんてしたくない。

だから、お願いや」

「……解りました」

A S編09話 危険な鍵

その後も、話は長く続いて。

八神はやたと主の出会いや、主とお姉様の出会い。それ以前の、お姉様が長く眠っていた事、八神はやての両親が亡くなった事、主の自立的な孤立の事、要するに内容は異なってもそれぞれ孤独な状態だった話が続ぎ。ここ最近の出会いや友人関係の説明が終わる頃、これ以上は無理と八神はやてが音をあげて一旦就寝。

最後まで話に参加したのは、八神はやて、お姉様、守護騎士の計6人。守護騎士達には普通の和布団を用意したけど、思ったより気に入ってもらえて何より。

学校がある主は早い段階でチャチャゼロとチャチャマルに連れられて寝室へ行ったし、プレシア・テスタロッサ、リンディ・ハラオウン、チクアーブの3人は、問題無さそうという事で話の途中で退散してた。

八神チャチャは人数増加が確定したから、最初から台所で食器類の配置換えとかをした。

夜が明けた金曜日の午前中は八神はやたと八神チャチャが中心になって、再び守護騎士達に色々説明。この世界では魔法文化が公開されていない事、もう1冊の書の存在、転生者や原作知識、ニコポナデポ等の危険な能力等についても、だいぶ驚かれたけど理解はしてもらえた。

変態^{ポリコン}については、とりあえずヴィータには注意を促しておいた。神出鬼没で何を考えているのか解らないけど、夜天の魔導書の関係者で、敵対はしてないと思われる人物。

扱いに困る要注意人物（セクハラ的な意味で）と認識された。とりあえずはこれでいい。

これで大きな出来事が終了したため、認識阻害の魔法を解除する事になった。小学生の1人暮らしではなくなったし、人の増減も一段落。これ以上余計な魔法を使い続ける意味は無いはず。

その後、八神はやてが守護騎士達と共に服や日用品の買い物へ。守

護騎士達が出かけるための服は、私達が夜の間に準備。従者達の服から、地球でおかしくない程度で大きさが合うものを選んでみた。騎士甲冑のデザインは既に伝えてあるけど原作通りだったし、それで買い物というわけにもいかない。

買い物途中で予想以上に守護騎士に感情が現れたり、ヴィータがのろいうさぎのぬいぐるみを見付けて欲しかったりと、進展としては予想以上。

最初に馴染んだのは、シャマル。服を自由に選べるのが嬉しいのか、始終ニコニコしてた。

ヴィータはアイスクリームに釣られてたし、シグナムは戸惑いながらも馴染もうという意思は見せてた。

ザフィーラはと言うと、朝に子犬モードを伝授したせいか、八神はやてがご機嫌で膝の上に乗せてた。最も近い位置で守ることが出来るからか、ザフィーラも特に異論や不満は無いらしい。少しだけ八神はやてへの負荷も減るから、一石三鳥。

八神はやて達が買い物してる間、主は普通に学校へ。八神チャチャは食料品の買い物、お姉様は調査やらを続けてた。

月村家のチャチャは、早速守護騎士の戸籍等の手続きを正式依頼。話はお姉様や主の話をした際に通してあったから、準備もある程度出てくる。お姉様に近い血縁者一行、両親が日本に帰化した後の子だけど、両親は既に亡くなっているという形で、書類上は八神姓の日本人となる事も事前に決定済み。

外国籍にすると日本に住むための言い訳が苦しい。特にヴィータの説明が困難だから、仕方のない措置。でも、お姉様が日本に興味を持ち日本語が堪能な事の言い訳にも使えるから、結果的には良かった。

なお、1週間以内には手続きが終わり、八神家の住人が正式に3人増える予定。仲間外れは勿論ザフィーラで、ペットの子犬という位置付けが確定した。騎士甲冑の応用で首輪も装備、飼犬としての体裁も整えてある。

夕食は、八神はやてと八神チャチャが中心になって準備。

今日のメニューはご飯に味噌汁、漬物色々、豚肉と野菜の炒めものとヒラマサの刺身を大皿で。材料を大量買いしても大丈夫だし、魚1匹丸ごと買って捌いたから、見た目よりはお安め。

テーブルに座るのは7人になり、とても賑やかな状態になった。これを見越してテーブルや椅子も準備してたから、問題無し。ザフィーラ用だった椅子が余ってるけど、これはあと2脚用意してある椅子と一緒に来客用とでもしておく。

配膳も終わり、夜天組（シグナム、八神はやて、ヴィータ、シヤマルの順）と曙天組（お姉様、主、八神チャチャの順）が向かい合う形で座って、食事開始。

「エヴァンジュと言ったな。

子供の姿が本来の状態だと聞いているが、普段はその姿でいるのか？」

話をしたいせいとか箸を使うのを早々に諦めたシグナムが、正面に座る大人モードのお姉様に訪ねてきた。

その手にあるのは、スプーンと茶碗。いまいち締まらない。

「私を呼ぶ時はエヴァでいいぞ。

この姿でいるのは、日本……今いる国の法的にはこの年齢と姿という事になっているからだ。子供の姿では不都合や面倒も多いからな。チャチャも同じ理由で今の姿で過ごす事になっている。

少々負荷があるから常にというわけにもいかんが、関係者以外の人前に出る可能性がある時はこの姿でいると思ってくれ」

つまり、通常状態として、大人組はお姉様、八神チャチャ、シグナム、シヤマル。

子供組は、主、八神はやて、ヴィータ。

ペットの子犬として、ザフィーラ。

もちろん外見での話で、内面を考えると意味不明になる。

「そうか。

今になって聞くが、闇の書の本来の名が夜天の魔導書とは……どういう事だ？」

「ザフィーラが夜天の主と言っていただろう。その意味は解っていない

かったのか?」

「……そうだな。こう言うべきだという記憶に従っていただけだ。

ザフィーラ、お前はどうか」

「あれは主に対する宣誓だ。」

理解していた以上の意味を考える必要は無かった」

話し方は変わってないけど、子供っぽい声、子犬の姿、犬用の皿で食事をするザフィーラ。

シグナム以上に締まらない。

「お前達の記憶も完全ではない様だから、考えた事を覚えていないだけかもしれないぞ。」

誰かと戦った記憶はあっても、以前の主がどうなったかの記憶は無いのだろうか?」

「……確かにそうだ。」

何故、私は今までそんな事にも気付かなかったのだ……」

「シグナムだけじゃねー、アタシ等だって同じだ。」

でも、このゴハンがギガウマだったのは、ぜってー忘れねー」

箸を握りしめながら、ガツガツ食べてるヴィータ。

好き嫌いは無いみたいだけど、やっぱり箸は難敵らしい。

「忘れんでもええ様に、何とかして闇の書を夜天の魔導書に戻さんと
な。」

そのためにも、みんなの協力が必要や。よろしくな?」

「もちろんです。はやてちゃんも早く元気に歩けるようになって欲しいですし。」

闇の書が夜天の魔導書に戻ったら、治せるんですよね?」

意外にも器用なシャマルが、ぎこちないながらも箸で食べつつ首を傾げてる。

確かに、かなり重要な点ではあるはず。

「治る。そもそも負荷と侵食が問題だから、それが無くなれば何ともなるしな。」

早く自由に歩けるようになって欲しいのは私も同じだ。解決してから半年以内に、2人ともある程度歩けるくらいまでは回復させてみ

せる」

「まだ私を回復させていないのは、はやてと同時の方が疑われにくいから。」

姉妹になる時に病院も同じになっているし、試した薬や治療法がうまく効いた事にして、一緒に回復する予定」

「来年の今頃には、私も歩けるようになってるって事やね？」

「そうだな。どの程度歩けるかは筋力や体力次第だが、最低でも家の中を歩けるくらいにはする。」

自由に外を歩けるようになるのは……1年くらいはかけるべきだろうな。急激に治すと、体にも対外的にも無理が出やすい」

「そっか。うん、楽しみや」



そして、翌日。要するに土曜日。

そろそろ空間が安定してきたから本局への帰還準備を始めるという連絡を受けて、挨拶ついでに守護騎士の顔見せのために、翠屋に行く事になった。

集合時刻は午前10時。開店直後の、比較的客が少なめの時間帯。全員集まると凄い事になるから混雑する時間は避け、特に必要でない八神チャチャは食料品の買い物担当という事に。

「管理局の者も来るそうですが、本当に大丈夫なのですか？」

店に向かいつつも、シグナムは心配そうにしている。

八神はやての車椅子を押してるシャマルや、その隣を歩いているヴィータも、口には出してないけど同じことを思ってる表情。

「大丈夫や。実を言うとな、みんなが来た時も管理局の提督さんがいたんよ？」

「本当ですか？」

「そうや。リンディさんとプレシアさんがいたやろ？」

その片方の人が提督さんや」

「そうでしたか。どちらもかなり力のある魔導師だと感じたので、警

戒していたのですが」

「でも、何も無かったやろ。だから、心配ないよ。」

エヴァさん、今日は何人くらい来るかな？」

「声を掛けたのが今朝だから、アースラの連中は来るとしても、地球在住の連中は半分も来たら多いんじゃないか？」

「だけど、みんな興味はあるはず。意外に来るかもしれない」

と、お姉様と主が正反対の意見を出しつつ、翠屋に到着。

まずは店先で、リンデイ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンが登場。時空管理局の提督と執務官と紹介されて守護騎士に緊張が走るも、言ってみればそれだけ。1人は顔を見てるわけだし、ごく普通に、これからよろしくと挨拶して終了した。

お姉様はクロノ・ハラオウンから、囑託魔導師の資格を取る為の資料や、知っておいた方がいい法律などの各種情報を受け取った。法に触れずに蒐集する参考になればよし、そうでなくとも今後必要になる知識だろうと判断して、法務処理の合間に纏めてくれていたらしい。

店からケーキの箱を持って出てきたエイミィ・リミエツタとも挨拶すると、帰還準備があるからと3人は帰っていった。帰還自体はもう少し後になる……と言うか、ギル・グレアムの使い魔、リーゼアリアが来るか確認してからにするとの事。

店に入ってすぐ、高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかの3人に声を掛けられた。

八神はやてや主の友人達という事で、こちらも普通に挨拶。

「えっと、シグナムさんに、シャマルさんに、ヴィータちゃんに、ザフィーラくん。」

うん、覚えた。大丈夫！」

「ちよつと待て、何でアタシはちゃん付けなんだ高町ナントカ！」
「だって年下でしょ？ それに、なのはだってば、な・の・は！」

うん、見た目に惑わされてるけど、とっても普通。

その後も、高町家の人が全員顔を出したり、アレックス・オーラムがテストロッサ一家を連れて来たり、転生者の一部……セツナ・チエ

ブルー、成瀬カイゼ、真鶴亜美、夜月ツバサが来たり。

上羽天牙は家が遠いから。長宗我部千晴と馬場鹿乃は怖いから、黒羽早苗は興味が無いから来ないと連絡した際に返事があったし、変態ロリコンはまだ遠い世界。

チクアーブは昨日既に会ってるから、これで顔見せは終了。の、はずだった。

(東渚が接近中、か……)

今いるのは、大人モードのお姉様、主、八神はやて、守護騎士3人と1匹、高町なのは、高町恭也、夜月ツバサ。高町恭也は高町家保護者代理兼剣士としての血が騒ぐ人物代表として、夜月ツバサは道場経由で来るのが遅かったからまだ残ってた。

子犬モードとはいえザフィーラがいて店先に出されているテーブルを使ってるから、店の近くに来た時点で見える場所。それなりに人通りがあるし、お互いに迂闊な事は出来ない。こちらは認識阻害と認識誘導を完備してるけど。

「エヴァさん、どうしたん？」

何か難しい顔をしとるよ」

「ああ……あまり関わりたくないタイプの転生者がこっちに向かっていてな。

何を考えているのかよく解らん相手で、ある意味では危険な能力持ちらしいんだが……」

「な、何よ。聞けって言うの!？」

お姉様の視線を受けて、夜月ツバサが怯えてる。

今見るのは、そういう意図としか思えない。

「……今無理に聞く必要も無いか。

解除は出来るようになってるな？ 掛け直しは私でも可能だから、気が向くか、気になったら聞いてみてくれ」

「解ったわ。たぶん、やらないけど」

夜月ツバサは明らかにほっとしてる。

この様子だと、多分やってくれない。

「もうしばらくすると見えてくるはずだ。守護騎士の4人は、はやて

達を守ってくれ。

話は私が「私がする」アコノ、お前が前に出る必要は「今まで矢面に立っているのは私」……」

お姉様の言葉を、主が凄いい勢いで遮ってる。

どうしてもお姉様を前に出したいくない？

「転生特典無効化の危険性を考えると、夜天対策の中心にいるエヴァを危険に晒すわけにはいかない」

「だが、主であるお前に何かあれば、私も無事では済まん。

それなら、まだ私が前に出た方が対処しやすい」

「エヴァの力なら、後ろに居ても対処出来る。姿を隠しておいた方が対処も楽かもしれない。

もし私の特典が無効化されても、感情が戻る位しか効果が無い可能性も高い。

他に失う可能性があるのは精々魔力くらい。死ななければ問題無い」

「そういう問題じゃないだろう!!」

命が残る保証も無いんだぞー！

「特典を無効化された場合の危険性はエヴァの方がずっと高いし、命は恐らく特典じゃないから、きつと大丈夫。

もし私が魔力を失ってもエヴァの主でいられたら、ずっと守ってくれる?」

「それはもちろんと言うかどこのプロポーズで死亡フラグだ馬鹿者!!」

「話し合い中済まないが、私が話をしよう。

このまま言い合いを続けても埒が明かん。必要に応じて念話で指示をしてくれ」

少々呆れた表情のシグナムが、お姉様と主の間に割って入った。

確かに、お互いを危険に晒したくないと言いあっても、決着はつかなそう。

「ところで、特典の無効化、って言った?」

話が切れたところで、夜月ツバサも参入。

思いつきり聞こえてた。

「……言ったな。本人のメモでしかないが、そういう能力を要求したらしい。」

確定ではないし、どう歪んでいるか解らん以上、実際の効果にいい意味での期待は出来んぞ」

「そう。でも、アタシが前に出ちゃいけないって理由も無いわね。」

聞いてやろうじゃないの、ソイツが何考えてるか！ 魔力が無くなるのが構わないわ、特典を壊せるならして見せればいいのよ！」

テンションがやけに上がってる。

確かに、呪いの様な能力を消せる希望ではある。どう歪んでるかが恐ろしいけど。

「あー、歪みは……気にならんのか」

「なるほど、大体は理解出来た。能力が惜しい転生者でなければ問題ない可能性が高いという事だろう？」

俺が前に出よう。魔導師が相手でも、時間稼ぎくらいは出来る」

高町恭也、出陣。

この場の中で、恐らく最も盾役に相応しい人物。ナデポ対策的な意味でも。

「仕方ない、恭也を中心に、シグナムとツバサも前に立ってくれ。一応法治国家だ、何かあれば私が何とかするから、少なくともこちらから仕掛ける事だけは避けてくれよ。」

私は姿を消して最悪の事態に備える。アコノは3人への口頭での指示を頼む」

「解った」



お姉様は翠屋に入る振りをしながら幻影と転移で姿を消し、高町恭也とシグナムは何故か店にも置いてある木刀を手に、テーブルの傍らに立ってる。

どう見ても2人とも戦闘態勢。シグナムがデバイスや騎士服を展

開していないだけマシだけど、威圧感という意味では恐ろしい。

「なんや、おつかない事になつてきたなあ」

「事情に詳しい2人が、あれほど警戒しているんだ。」

それに、ニコポやナデポだったか。そんなものでなのはや君達を操られるわけにはいかないさ」

「今から来るのが持つているのはナデポみただから、触れられなければ大丈夫なはず。」

名前は東渚、能力は転生特典の無効化とナデポの2つはほぼ間違いないと見てる。

あと、今からツバサの事をアーニヤと呼ぶ。変に名前を知られるより、恐らく理解出来る名前の方を印象付けた方が安全だと思う」

「解つたわ。じゃあ、アンタは木乃香でいいわね」

「それが、姿が似ている人物の名前か。覚えておこう」

ピリピリした雰囲気、八神はやてが呑まれかけてる。

その横では、高町恭也と主が情報交換したり、主が夜月ツバサに方針を伝えたり。シグナムは黙って聞いているけど、色々説明はしてあるから理解してるはず。

シヤマルとヴィータ、それにザフィーラは八神はやてのすぐ傍で守りの構え。ヴィータは主も守れる位置にいる辺り、嫌われてはいないらしい。

高町なのはは八神はやてよりも遠くなる位置。高町恭也が盾役として最前列にいる以上、問題は無いはず。

そうしているうちに、東渚が姿の見えるところまで来た。

何とか頑張つて笑顔風の表情を浮かべてるつもり？

悪人顔のせいか、胡散臭い引き攣った表情にしか見えないけど。

既に夜月ツバサの表情も引き攣つてる辺り、何を考えているのやら。

「やあ、そんなに殺気立ってどうしたんだ？」

「どうしたも何も、ナデポなどという洗脳技術を持つらしい人物を前に、警戒すると言う方が無理だろう」

頑張つて普通を装う感じで声を掛けてきた東渚を、高町恭也が言葉

で切り捨ててる。

木刀に手を掛けてるし、既に殺気も漏れてる。

威圧感ばっちり。

「い、いや、一度も効果を発揮した事が無いから、そこまで警戒する必要は……」

「嘘ね、命に係わる危機を救えば効くんですよ。」

頭の中は凌辱する事でいっぱいじゃない、18禁が凌辱に直結するなんて人間腐ってるわよそもそもたらハは凌辱ゲーじゃないわよ!」

「アーニヤ、一応言っておくと3には凌辱シーンがあるはず。」

それに、なのはと同年代で凌辱を連発するのはどうかと思う」

「知ってるけどコレの頭の中に純愛なんて言葉は無いわ!」

それに、木乃香もこの世界じゃ未成年なんだから一緒じゃない!」

「静かにしてくれ、話が進まない。」

東渚だったな、いったい何をしに来た。なのはや友人達をどうするつもりだ」

思いつきり脱線していく夜月ツバサと主に苦言を言うと、高町恭也がより威圧感を放つ。

返答次第では斬る気にいる、木刀だろうが間違いないと思わせる雰囲気。

「どうって、そりゃ仲良くなって」

「組み伏せて犯す気満々じゃないこのペドフィリア!」

転生特典の破壊で脅す? いいじゃない、やってみなさいよ!」

「貴様、読心系か!」

「今頃気付いたって遅いわ! 10メートル以内じゃないと効かないってとんだ不良品ね!」

「だいたい魔力も消せない上に1回しか使えない特典破壊なんて怖くないわ、読心を消せるかやってみせればいいじゃない!」

「アーニヤ、あまり煽り過ぎない方がいい。」

「こんなのが暴走すると、理解出来ない事を仕出かす危険性がある」
夜月ツバサの下心感知が絶好調、効果を叫ぶことで教えてくれるのはとてもありがたい。

何故か主は注意しながら下がってるけど。

(私は壊されたくないと思わせた方がいい。)

恐らく、今回は手札を切る時じゃないと考えてる。危険性も予想の範疇だったし、私に使ってもらうためにも、これくらいの演技はする(アコノ、それでも危険性はあるんだぞ?)

だいたい、本人がそう思っているけど、その根拠が怪しすぎる)

(その裏付けは取る。踏み切るのは、情報を確定させてから)

(……無茶はするなよ)

「ふ、ふん。どうも、変な虫がいるようだね。

待っていてくれ、高町嬢、八神嬢。必ず救い出してみせる!」

「何が救い出すよ、自分のモノにするって心の声は騙せないわよ!」

夜月ツバサに罵られながら、東渚退場。

えーと、今回のまとめ。東渚は要警戒、だけど当面は主の希望で処分不可。少なくとも無効化の能力解明までは。

残念と言うより、なんて面倒なと文句の一つも言いたい気分。

せめて、頭がとでも残念な人じゃなければ放置で良かったのに。

A S 編 10 話 オハナシ

翌日、日曜日。

そろそろ本局に帰還する予定のアースラでは、お姉様が成瀬カイゼとセツナ・チェブルーに対して魔法の指導中。

新しいデバイスも快調、実技での不安はほぼ無い。この実力があって実技で落ちたら、囑託魔導師が魔導師ランク的な意味で激レアになる。拙いながらカートリッジ作成も出来るようになってきたし、自己補給も可能なら色々と楽になるはず。

もちろん、お姉様の指示は魔法の制御関連に限ってる。実戦を想定した助言はクロノ・ハラオウンが中心だし、今も一緒に訓練場にいる。今やっている模擬戦の相手はユーノ・スクライア、バインドやシールドを駆使する相手をどう崩すかの訓練中。今は魔力トレーニングの枷を少し緩めてA相当の魔力量になった成瀬カイゼがデバイスを構えてて、セツナ・チェブルーは休憩を兼ねて観戦してる。

同じ訓練場にはフェイト・テストロツサとシグナムもいる。記録無し約束で、守護騎士の実力を見てみたいというクロノ・ハラオウンの希望を叶えた形になってる。

生真面目な近接主体の魔導師と騎士だからか、妙に惹かれるものがあったらしい。嬉々として……と言うには少々緊迫しすぎた雰囲気だけど、良い感じで試合をしてる。

更に、高町なのはとヴィータもいる。

こちらはお互いの得意な距離が異なる組み合わせなので、離れようとする高町なのはと寄ろうとするヴィータの壮絶な鬼ごっこになっている。これはこれで、訓練として良い組み合わせ。

そんな最中、爆炎と煙を目隠しにしてユーノ・スクライアの背後を取った成瀬カイゼが放った魔法弾が、

「へぶしっ!」

何故か変態ロリコンの顔面に命中。

「何をやっている変態ロリコン」

お姉様の目が冷たい。

ついでに、クロノ・ハラオウンやセツナ・チエブルー、模擬戦をやっていた2人の視線も同様。

他の2組は何が起こったかちらっと見ただけで、手を緩めずに模擬戦を続行。突っ込み不要の集中力は流石。

「いやいや、転移の目標として、主であるユーノ君は良い目印なのですよ。」

それにしても、なかなか良い魔法弾です。いい感じに星が舞っていますよ」

変態ロリコンの頭の上を、何故かヒヨコがくるくる回ってる。

本人は何の問題も無く立ってるのに。

「で、何をしに来た。そのまま別世界を漂ってればいいものを」

「いえいえ、重要な情報を掴んだので、お知らせに来たのですよ。」

クロノ君、ここでの会話は記録されますか?」

「いや、記録はしていない。」

重要と言うのは、余程のものなのか?」

クロノ・ハラオウンが、念のため空中モニターを出して確認してる。

特に設定を変えたりした様子はないし、記録する気は本当に無いらしい。

「そうですね。このメンバーならまあいいでしょう、エヴァちゃんに言ってしまいますね。」

グレアム提督の裏にいる人達が判明したのですよ」

「裏の人達? 原作にそんな連中にはいなかったはずだな?」

お姉様が怪訝そう。

少なくとも誰かが噛んでるといふ描写は無かったはず。

他の4人は、「お姉様に言う」の裏、お前達は黙って聞いているという意味を読んでるし、模擬戦をしてた4人も何かを察したのか、手を止めて様子を見てる。

「ええ、少なくとも描写は無かったですね。」

しかし、良く考えて下さい。管理局が何度も対処に失敗して、アルカンシエルで蒸発させるしかなかった闇の書ですよ。いくら優秀な提督と使い魔でも、僅か数人で「転生先の搜索」と「対処方法の搜索

または研究”を行い、成功を確信するレベルで達成するのは難しいと思いませんか？」

「それはそうだが……物語のご都合主義的な何かじゃないのか？」

海鳴にジュエルシードと闇の書が来る事や、同年代で近くに住むなのはとはやてに高ランク魔導師の素質がある事自体、恐ろしく確率の低い現象のはずだが。

まして、この世界には私達という存在までいるんだ。調整された結果でなければこうはならんだろう」

「そうなのですが、グレアム提督が発見出来た上に対処法を見付けられたのは、偶然やご都合主義だけで解決された訳ではない様なのですよ

具体的には、とある団体が関わっています」

「また時空管理局の一部、という話じゃないだろうね？」

そんな話はもうたくさんだ、と言いたそうなクロノ・ハラオウン。

思わず口に出た気持ちは解るけど、逃げちゃだめだ。

「そうとも言えるのですが、厳密には異なりますのでもう少し聞いて下さい。

ロストロギア事件の被害者団体、悠久の翼。これが、グレアム提督の後ろにいる人達です。

過去の事件の関係者と言える人達ですから、管理局も無関係ではありません。所属してる人に管理局の局員もいますし」

「被害者団体、か……管理局やグレアムに圧力を掛けたりしているのか？」

一番ありそうなのはコレ。それも、人権や責任問題を盾にしたタカリが心配。

でも、ギル・グレアムの周囲にそんな問題が起こってる様子は無かったし、そうだとしても行動方針としておかしい。

「この辺は、捉え方によると思いますよ。

まず、この団体についてです。

被害者の自活のための相互支援が主な活動ですね。闇の書に限らず、ロストロギアによる被害を何とかして減らせないかという研究も

独自に行っていますし、かなり前向きな活動を主体としているようです」

「何だ、その口ぶりだとかなりいい団体そうじゃないか。」

「どんな問題があるんだ？」

「助けた人を手足として使う事、大きな被害を減らすための小さな被害は止むを得ないという考え方でしようか」

「それでも、後ろ向きじゃないだけ真つ当だろう。救済可能な被害者に手を貸すのが取り込む事を目的にしても、現実として助けられる者がいて、大目標が大きな被害を回避する事なら、マッチポンプとは言えんしな。むしろ、人生に目標が出来る分だけ被害者の復帰が早いかもしれないぞ。」

私としては、被害者だからと権利ばかり主張する連中よりも余程好感が持てる。管理局から見ても協力しやすい団体なんじゃないか？」「ええ、そうですね。下手な権力者より実行力もありますし、実際協力もしているようです。」

「それでも、今回の件に関する問題は気付いていますね？」

「小さな犠牲、つまりはやての切り捨てだな？」

それに、管理局が使えない手を使うための隠れ蓑として作った団体という可能性もあるか」

それに団体が動いているという事は、説得が難しいという事。情報の秘匿も同様。

時空管理局との協力体制があるなら、隠れ蓑でなくとも黙認される可能性が高い。

「その通りです、よく出来ました。」

それでは、以上の説明を踏まえて、これまでの出来事についての調査結果です。

はやてちゃんを見付けたのは、地球に来た関係者の様です。食糧関係の仕事で日本に来た際にたまたま気付いた様なので、これ自体は偶然かご都合主義的解決だったのでしよう」

「教授の時の癖かそれは？」

管理世界の人間が食料関連で来日か……Strikersにあつ

た日本料理を出してそんな店やらの為の仕入と考えれば、あり得ない行動とは言えないか」

「そうですね、一応筋は通っているようです。

凍結魔法を使つての封印自体は、以前から研究していたようですよ。闇の書に限らず、人を宿主とするロストロギアには有効な可能性があると考えているようです。実践した事例は確認出来ませんでしたが」

「凍結封印という手法に、どの程度の信頼性があると考えている様子なんだ？」

「そもそも原作守護騎士の説明を聞いても、凍結で封印出来ると思えないけど。」

無限転生だけを抑えても意味は無いし。

「内部でも議論はある様ですし、クロノ君が指摘する内容くらいは気付けていますよ。」

解除は困難ではない、どんなに隠そうが見付けられる可能性はある。

団体である以上は、隠し場所が漏れる可能性がある事も理解しています。それでも、それまでに自分達や管理局が何とかする技術を作れたら良し、いつか奪われるとしてもそれまでの被害は抑えられるという判断です。

今の管理局の技術を考えると、判断理由に一応の妥当性はあります」

「その結果、中途半端な希望を見付けた連中と同じ末路を辿るわけか。

最悪、その団体に私を売り込むことになるのか？ ある意味では過激派だから、そう簡単に納得してもらえらると思えんが」

「使命感に溢れる団体ですからね。自分達の手で何とかしようとする分、排他的でもあります。」

まして、エヴァちゃんや私はロストロギアと呼ばれるのが確実な存在ですから、彼等から見たら排除すべき敵でしょう」

「面倒だな……いつそ、目の前に闇の書突き付けてみるか」

「いえいえ、それは最後の手段でしょう。」

それに、某提督さんを忘れていきますよ」

「……グレアムがいたな。この流れのどこで出てくるんだ？」

団体に所属しているのか？ それとも、協力しているだけか？」

「過去がどうかまでは判っていませんが、現在は所属していないようですよ。」

悠久の翼が見付けた闇の書とその主を保護という名の隔離をするために、地球出身で闇の書との因縁もあるグレアム提督に話が行ったようです。原作でも妙に素直に引き下がっていましたが、提督自身は完全に納得しているわけではないかもしれませんね。

細かい点については、まとめた資料を用意してあるので渡しておきます。必要であれば提督本人の記憶も頂いてきますが……必要ですか？」

可能ならあった方がありがたい。

でも、気付かれると厄介。少なくとも奪われた事自体は、技術さえあれば調べれば解る。記憶や人格の障害という問題もある。

必要性和安全性を天秤にかけると、微妙？

「迂闊に敵対要素を増やすのも問題だしな……」

私の情報はグレアムに渡っていたのか？」

「ジュエルシード事件の報告書は見たようですが、それ以上の情報を持つている様子はありませんでしたね。」

とりあえず、娘さんが出来ておめでとございますと、祝辞を述べればよいですか？」

「はやては妹だ、娘にするな！」

「そうでしたね。それと、最高評議会の関係者も洗っているのですが……予想していた以上に、アルハザードについての情報を持っていますよ。」

少なくとも闇の書がアルハザード製で、夜天の魔導書と呼ばれていた事は掴んでいるようです」

「まあ……それはプレシアがアレだったから、そうだろうとは思っていたが。」

具体的な実態や構造については？」

「夜天や私の構造全てを詳細に把握しているのは、エヴァちゃんだけですよ。」

製作関係者全員を考えても個人で見れば、使われた技術の一部だけを詳細に知っているとか、どんな技術をどう組み合わせたかという概要しか知らないとかですからね。

それらの情報を繋ぎ合わせて全てを把握するには、概要と個別技術の両方を完璧に把握する必要があります。最高評議会が集めた情報はおろか、最高責任者が知る情報でも足りませんよ」

「……随分と情報がばらけていると思っていたが、誰も全てを知らなかったという事か」

設計情報は、基本的には階層構造だった。曙天の指令書の構成物はこれでこう組み合わせる、各構成物に使われた技術や設計思想はこう、それぞれの詳細は……みたいな感じ。

チャチャゼロとチャチャマルすら、設計方針や利用技術に違いがある。恐らく、担当者や設計時期が違う事が原因。

「現代の工業製品も似たようなものですよ。」

パソコンだってそうでしょう。CPUやメモリ、マザーボード、電源ユニット、オペレーティングシステム……個別の理論や作り方を知る必要は無く、既製品を正しく寄せ集めれば、個人でも作る事が出来るのですから」

「まあ、そうなんだが……改悪した連中は、どこまで理解してやってたんだ？」

「電気回路の知識が無いまま配線を変えたり、マトモなロシア語の知識も無いままロシア軍の指令書を書き換えたりしていた、という表現はどうでしょう。」

大きくは外れていないと思いますよ」

「……そう考えると、よく無事に動いているな。」

いや、今の立場を考えると、無事という言い方は正しくないか」
「闇の書になってしまっていますからね。」

まあ、そんな状況なんですよ。夜天を助けられるのはエヴァちゃんだけ、という点にブレはありません」

「そうか……はあ、何だか考えるのも面倒になってきた。

とりあえずグレアムが情報を掴んでないなら、猫が来る可能性が高いから……来たらず捕らえた上でオハナシでもするか」

ギル・グレアムの所在地は判明済み。私達とチクアーブが張り付いて調査してるけど、現状では動きなし。ヘルパーだったおばさんに連絡を取って既に手を離れた事を知る事になるけど、少なくとも様子は見に来ると予想。

そこを、捕らえる？

簡単な罠、大よその実力も把握済み。チクアーブからの報告も順調だし、問題無い。

「物理的なお話ですね、解ります。

本来はどういう予定だったのですか？」

「黙れ変態^{ロリコン}。

裏に組織がある事は想定していなかったからな……猫はともかくグレアム自身は、はやてを犠牲にする罪悪感と未来の被害の無さで、説得出来ると思っていたんだが。

3人なら、最悪でも行動を封じてしまえばどうにかなるしな」

「そうでしたか。いやあ、情報が間に合ってよかったですよ」

「まあ、それには感謝しておく。

……で、お前は守護騎士に挨拶しなくていいのか？

せっかくいるところに来たんだ。一応お前の事も説明はしてあるが」

「いえ、まだいいでしょう。

新たなエターナルロリータたるヴィータちゃんに興「二度と姿を見せるな変態^{ロリコン}！」

お姉様の拳が空を割った。

衝撃波が発生する速度の拳が届く前に姿を消した変態^{ロリコン}の性能は、あの意味恐ろしい。

でも、様子を見てたヴィータが物凄く納得してた。要注意人物だと改めて理解してもらえたようだし、物理的に潰すのも構わないけど、周囲の被害が怖い。



というわけで、準備万端で待ち構えてた火曜日。

ジュエルシード事件の事前報告を見て慌てていた上に、ヘルパーだったおばさんに連絡を入れ、予想外の「八神の血縁者」の動きの早さに焦った猫。

様子を見るために八神家付近に来たところを、クロノ・ハラオウンがあつさりと捕獲。

そのままアースラまで連行して、ハラオウン親子、お姉様、八神チャチャで囲んだ状態。もちろん、お姉様と八神チャチャは大人モード。リーゼアリアには猫じゃなくて人型に強制的になってもらったけど、めっさ睨まれてる。

主にお姉様が。

「お前達と話がしたかっただけだ、そんなに睨むな。」

良い話と、良くも悪くもある話があるが、どちらからがいい?」

「話す事なんて無い! クロノ、こんな事をしていいと思ってる!」

「闇の書に関しての背任行為。これだけでも、拘束するには充分なんだ。」

証拠も揃っている。話くらいは聞いてくれ、アリア」

「くっ……」

悔しそうにしてるけど、逃げ道無し。

逃がすつもりも無いけど。

「ふむ……そうだな、恐らく悪い方向で受け取られる方から話すか。」

ギル・グレアムに使い魔のリーゼ姉妹、その背後にいる悠久の翼とかいう団体。お前達の計画は最初から破綻しているぞ。はやても闇の書について、既にお前達以上に知っているしな」

お姉様の言葉に、リーゼアリアは睨み付けるばかりで黙ったまま。

話す事は無いという言葉通り、何も話す気がないらしい。

「理解する気も無いか? まあいい、ここからが良い話だからそのまま聞いていろ。」

私には、闇の書を本当の意味でどうにかする手段がある。凍結封印などという不完全な手段ではなく、闇の書による悲劇を、本当の意味で終わらせる事が出来る。

その上で、はやて達、つまり闇の書の主や守護騎士達の全面的な協力も得ている。

「言いたい事は解るか？」

「……信じられるもんか。簡単な方法があるなら、とつくに何とかなってるはずだ」

「それは私が目覚めたのが最近だからだな。それに、同じ事はお前達の計画にも言えるぞ。」

まあ、続きはお前の主人を交えてだな。グレアムは私室にいるから、クロノ、通信を頼む」

「はあ……それも確認済みなのか。どこまで見通してるんだ」

ため息をつきながら、クロノ・ハラウンが通信を始めてる。

もしもし、私チャチャ。今、ギル・グレアムの斜め後ろ上方で様子を見ているの。

『どうしたんだい、クロノ……？』

通信に出たギル・グレアムの表情が固まった。

あちらからもバインドでぐるぐる巻きのリーゼアリアが見えてるから、当然と言えば当然。

「お久しぶりです、グレアム提督。」

私的に話をしたいという方がいるので、連絡させてもらいました。

エヴァンジュ、後は頼む」

「ああ、任せろ。」

初めましてギル・グレアム提督、と言うべきだろうな。私は八神エヴァンジュ、八神はやての保護者になった者だ。

お前達が何をやってきたか、何を目的としているかは理解しているから、誤魔化す必要は無いぞ。それは、後ろのリーゼアリアを見れば解るだろう？」

『アリアを捕らえて人質にでもするつもりかね？』

もつとも、それが本物のアリアだとすればだが』

おや、すつとぼける方向らしい。

残念、リーゼアリアは見捨てられてしまった！

「心配するな。必要ならお前自身を捕らえれば済む話だから、私達がお前達の動きを捉えている証拠として捕まえたただけだ。」

「と言うわけで、闇の書について話がある」

『闇の書、か。』

あの忌まわしいロストログアについて、どんな話があると言うのかね?』

「あくまでも白を切る気か。まあいい、それなら一方的に通告するだけだ。」

私はこれから、闇の書の闇を祓う作業に入る。

私からの要求は、邪魔をするな。この1点だけだ。お前の背後にいる悠久の翼や管理局の連中も含めてな。

迂闊な手出しをするようなら、管理局やミッドチルダを壊滅させるつもりで攻撃する。具体的には、闇の書を持って殴り込みだ。

ちなみに、これが闇の書だ」

お姉様、手元に闇の書を転送。

闇の書は、自力でふわふわ浮かんでる。

『話にならない。今の話の、何を信じろと言うのかね?』

「そうだな。とりあえず、1つずつ証明するか。」

チャチャ、行け」

「はい」

八神チャチャ、適当に転移。

私斜め後ろ上方にいたチャチャ。今、八神チャチャと同じ姿でギル・グレアムの後ろにいるの。

『何?!?』

ドッキリ成功。

ギル・グレアムの驚いた表情はレアもの。

「こんな感じで、いつでも手出し出来るわけだ。人質を取る必要も無い事は理解出来たか?」

チャチャ、戻ってこい」

『はい』

ギル・グレアムの所で姿を見せていたチャチャ、隠れやすいところに転移。

それに合わせて、八神チャチャがお姉様の所に転移。

「ただいま」

「お帰り。」

これで、管理局への出入りが障害とならない事は証明出来ただろう。少しは信じる気になったか？」

『……恐喝に応じる気は無い』

「やれやれ、信じられないような話を信じてもらうためにやっている事なんだがな。」

ならば、このリーゼアリアが本物だという事は信じられるか？」

『信じられん。それだけの力を持っているのだ、偽物を準備する事くらい簡単だろう』

「なるほど。なら、どうなっても問題ないな。」

喰らえ、闇の書」

「おい、エヴァンジュ！」

蒐集開始、標的はリーゼアリア。

リーゼアリアは苦悶の表情だけど、悲鳴も上げない。なかなか根性が据わってる。

むしろ、ちよつと慌ててるクロノ・ハラオウンの方が煩い。

「心配するな、殺しはせん。」

そもそも、闇の書の完成を目指すには、誰かのリンカーコアを蒐集する必要がある。

良かったな、闇の書完成直後の凍結封印を目指すお前達の目標にも、1歩近づいたぞ？

それに、ここで蒐集されておけばもう一度蒐集する意味が無くなるから狙われにくくなる上に、完成するまでに充分回復出来る。いい事尽くめじゃないか」

「ぐ……き、キサマ……………」

蒐集されながら、めつちや睨んでる。お姉様もノリノリで悪役をや

りすぎ。

蒐集終了、リーゼアリアが倒れた。

割と軽めの蒐集だから命に問題は無いけど、しばらく魔法が使えないはず。

「チャチャ、こいつをグレアムの所まで送ってやれ。

一応怪我人だから、さつきと違って丁寧にな？」

「はい」

八神チャチャ、気を失ってるリーゼアリアを抱えて転移。

今度は真面目に次元世界を渡る必要があるから、到着にはちよつと時間がかかる。

お姉様は改めてギル・グレアムの方を向くと、闇の書の蒐集済みページを見せた。

「これが本物の闇の書だと納得出来たか？」

言うておくがリーゼアリアは1週間かからずに回復可能な程度にしか蒐集していないから、生かすも殺すもお前次第だ。隠しても表に出しても何かあった事がばれるから、好きにするといい。

これで、下手に手出しをしたら本局に闇の書を持って襲撃に行くと言った事について、実行可能だと証明出来たと思うが。そろそろ他の話を聞く気になったか？ まだ信じられないなら、本局にいるリーゼロッテやお前自身も同じようにしてみせるぞ」

ギル・グレアムが頭を押さえてる。

混乱や錯乱したりしない辺りは、流石歴戦の勇士？

お姉様は、闇の書を転移させた。具体的には私達が持つて時空管理局の本局へ向けて移動中。

襲撃、襲撃、さくつと襲撃？

「グレアム提督。

エヴァンジュはかなり強引ですが、それに見合う力があります。それに、目的や手法もきちんと知れば納得出来るものでした。

話だけでも聞いて頂けませんか？」

クロノ・ハラオウンが援護開始。

お姉様がノリノリだけど、一応打ち合わせ通り。

『……いったい、何を言いたいのかね？』

闇の書を見付けたのであれば、時空管理局に報告して指示を仰ぐべきだ』

「まだ言うか。私のはやての保護者になったと言っただろう？」

日本の法的に、既にお前ははやてに対する権利を失っている。逆に言えばお前が今まで保護者だった事実があり、お前の地球の身分を使つてはやてへ送金やらを行っていた証拠も掴み、リーゼアリアがはやてのヘルパーとして出入りした上で認識障害やらの魔法を設置していた証拠もあるという事だ。

管理局としての動きは悠久の翼とやらがメインで、お前自身はあまり動いていないのも知っている。それでも無限書庫の調査依頼やらで名前が出ているし、闇の書発見当時にバタバタ動いた際の情報隠蔽が不十分で、通信記録も残っていた。これでもまだ不足か？

というか、はやての資産やらの書類がお前の手元にある時点で、言い逃れは出来んぞ。

それと、私は管理局員でも管理世界の住人でもないからな。管理局に指示されるつもりは無い」

「グレアム提督。僕も独自に調査を行っています。

その結果は、提督が闇の書に関与している事を確信出来るものでした。言い逃れの意味はありませんし、罪を問うために話をしているわけでもありません。

エヴァンジュが行おうとしているのは、僕や母さんも納得した内容です。少なくとも、提督達が選んだ道よりも。その為の話を聞いてもらえませんか」

『……そうか。ならば、聞かせてもらおう。

闇の書を、一体どうするつもりなのか』

ギル・グレアムが深いため息をついた時、八神チャチャが現地入り。宅配便です。リーゼアリアの受け取りお願いします。

「ヤツスキも言ったが、闇の書の闇を祓う。

具体的には元の姿、夜天の魔導書に戻すという事だが……夜天の魔導書について、お前達は知っているか？ あまり知っている様子は無

「かつたんだが」

『夜天……？ それは何かね？』

「聞いたことも無いのか。管理局の上層部……少なくとも最高評議会はある程度真実に辿り着いているはずなんだがな。まあいい、そこから説明してやる。」

闇の書の本来の姿は、夜天の魔導書という名だ。各地の魔法の技術を調査するための魔導具で、要するに情報収集のための資料本だな。取り込んだ魔力で暴走する様な、阿呆な代物ではない。

一部の主や余計な手出しをする馬鹿共のせいでもんだん改悪された結果が、今の闇の書というわけだ。改悪部分を何とかすれば、無闇に破壊をまき散らす事は有り得んという事でもある」

『闇の書の改変も、望んだ結果を得られた記録が無い。』

無謀だ』

「正しい知識も無しに手を出すからそうなる。」

お前達の手段もそうだ。凍結封印が有効だと本当に信じているのか？ 高々1人2人の魔力で封じる事が出来るなら、どうしてクライドは命を落とす必要があった。地球に、はやての手にあるのは何故だ。

確かに、はやてを殺さず封じていれば無限転生は働かないだろう。だが、闇の書の闇、狂った防衛プログラムはコアがある限り再生機能が止まらんし、コアを破壊しても闇の書が完成している限り復活し続ける。

それに、防衛プログラムがはやてを侵食し続ければそう長く持たん。具体的には1年以内に命を落とすのは確実だが、封じた状態の主を侵食から守る方法など無いぞ。

そんな代物を抑え込める、隠し通せると、本気で思っているのか？

仮にお前達の計画が成功しても、その効果はすぐに失われるぞ」

「エヴァンジュ、言い過ぎだ」

クロノ・ハラオウンに止められた。

なだめ役を押し付けたけど、お姉様がノリノリすぎてやり辛そう。

「まあ、そうだな。駄目出しもこれくらいにするか。」

要するに、夜天の妹である私が必要な物を持っている、何とかすると言いたいわけだ。

はやてと夜天は家族だ、必ず救う。

そのための犠牲も最小限にしよう。少なくとも、好き勝手に魔導師やらを蒐集させるしかないお前達の計画よりも問題を抑えてみせる。

未来に闇の書の犠牲など出させん。

意図的に管理局と敵対する気は無いが、邪魔をするなら容赦しない。必要な情報はリンデイ達に伝えてあるから、これからどうするかはお前達で相談してくれ」

お姉様、退場。

残るはギル・グレアムとハラオウン親子。管理局員同士の話し合い。

『……リンデイ提督。どこまでが本当の話かね？』

深くため息をつきながら、ギル・グレアムは今まで一言も喋ってないリンデイ・ハラオウンの方に目を向けた。

何だか、出来れば嘘であってほしい、と言いたい感じ。

「疑問は尤もですが、全て本当の事ですグレアム提督。

彼女、エヴァさんが闇の書……夜天の魔導書の妹にあたる魔導具だという事も。」

これまで何もしていなかったのは、エヴァさんが起動に耐えられる主に出会えず、眠り続けていたため。ようやく起動に耐えられる主と出会い、目覚めることが出来たそうです」

『それがジュエルシード事件の報告書にあった八神エヴァンジュの、真実の姿か』

「ええ。エヴァさんの主は小野アコノさん。既にはやてさんの姉になって八神アコノさんですが、この件に関して全面的に協力しています」

『地球でベルカ式の魔導師が多く見付かったのは、彼女が原因という事か。』

『魔力はCクラス相当という事だが……』

「これまでに計測出来た、本人の魔力量のみでの評価です。」

報告書に記載していませんが、ジュエルシードを完全制御する技術を持ち、無茶なカートリッジシステムを組み込んだデバイスを使っています。

実際の戦力としてはクロノ以上、オーバーS相当は間違いないと思つて下さい」

『何とも……容易く本局までアリアを連れて来た事実が無ければ、とても信じられん内容だな。』

だが、あれは彼女自身の力ではないのだろうか？』

ソファーに寝かせられ、治癒魔法の結界に包まれてるリーゼアリアを見ながら、ギル・グレアムはため息をついている。

偽装情報を流しまくって、普通に戻ってきたという「記録」も作成中。余計な馬鹿に突っ込まれる要素は排除してある。目の前のリーゼアリアが「現在進行形で移動している状況」をモニターで見ている以上、私達の実力が本物ではないとは疑えないらしい。

「アリアさんを本局に届けたチャチャさんは、エヴァさんの守護騎士に近い存在です。ですから、闇の書と守護騎士の関係と同様に、切っても切れない間柄という事です。」

エヴァさんは、グレアム提督に力を見せるといふ選択をしました。嘘でも冗談でもなく、本気だと示す為に。より良い未来へ進むために。

素直な人ではないので解りにくいのですが、エヴァさんの計画に対する覚悟と妨害に対する行動方針、それにグレアム提督達の計画の問題点を教えた上で、せめて敵対しない事を選択してほしいという意思表示なんです」

『……そうか』

ギル・グレアムが萎びてる。

この分なら、リンディ・ハラオウンも籠絡し……もとい、説得しやすいと期待。

闇の書の出番が無かったのは、ちよつと残念。

A S 編 1 1 話 帰還

リンディ・ハラオウンとギル・グレアムの交渉と言うか相談は、とりあえずは望ましい結果に。

かなり懐疑的な様子ではあったけど、当面は手出ししない事を選択したギル・グレアム。プレシア・テストロッサに関する情報も受け取り、お姉様の今までの行動や方針を確認すると、ため息をつきながらある程度の理解を示してた。

そもそも悠久の翼の関係者が地球に常駐しているわけではないから恒常的な手出しは難しく、情報の入手も後手に回ってるから、このまま後手後手で危険性を指摘された計画を進めるよりも、組織の暴走を防ぎつつ軌道を修正する方が無難だろうという判断らしい。但し、それも時間がかかると念を押されてた。

組織の方針を変える時間であり、それ以上にお姉様を見極めるための時間でもあると予想。こちらの作業完了は今年中という期限も伝えてたし、それを踏まえた、ギリギリの判断のはず。

ちなみに、八神家の資産関連の書類等は八神はやて宛てで返却される事になった。ギル・グレアム個人が出してた援助は終わるけど、元々あてにしてないから問題ない。

ちなみに、“お姉様の事がある程度知らせる相手” 向けの設定は、プレシア・テストロッサの若返りとアリス・テストロッサの蘇生は、お姉様がジュエルシードを1個ずつ犠牲にして実現したというもの。クローンと共に虚数空間へ失われたのは1個で、闇の書対策にプレシア・テストロッサの力を借りるために行われた、という筋書き。今までは闇の書と呼ばれる夜天の魔導書、その妹がお姉様であるという事、極秘であり漏れたら大きな問題が起こる事も併せて伝えたため、意図などは特に齟齬なく伝わった模様。

ジュエルシードを使えば若返りや蘇生が可能という事になるけど、あれは正式に时空管理局の管理下に置かれる事になる代物。犯罪者が持ち出してきたなら潰せばいいし、最高評議会やらが出てきた場合は私欲のために使ったとして正面から叩き潰す予定。状況的に潰せ

ない手口の場合でも犠牲にした風を装ってジュエルシードの回収が可能だし、最悪でもあと18回。この能力を目的にされた場合も問答無用でお姉様を破壊や封印するという事にはならないから、とりあえず問題無い。

ジュエルシード事件自体が狂言ではないかと言う疑惑は、お姉様や主の覚醒が4月に入ってから、つまり事件発生後である事実を盾に封殺。裏付けの説明としては、ジュエルシードの影響を受けた主だからこそお姉様を起動出来たというもの。嘘は言っていない。

状況としては、概ね予定通りに推移してる。

そろそろ次元空間も航行可能な程度に安定してる。

ギル・グレアムとの接触も終わり、現地拠点に簡易的な転送ポートも設置完了。

プレシア・テストロッサの法務処理やらも一部は本局で行う必要があるし、ジュエルシードをいつまでもアースラで抱えているのも問題がある。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルの訓練も順調。この2人にフェイト・テストロッサを加えた嘱託魔導師試験挑戦組は、アースラのスタッフを先生に勉強も頑張ってる。

守護騎士達の戸籍も確保を完了し、無事にお姉様の親族として八神姓を名乗る事になった。但しペット扱いが確定したザファイラを除く。

というわけで、アースラは本局に帰還する事になった。

お姉様は現状と今からの予定を、リンディ・ハラオウンやプレシア・テストロッサと確認してる。

「当面の問題は私を排除しようとする管理局の犬。まずは身の安全を最優先に、なるべく早く早く自由を勝ち取る事。」

この認識でいいわね？」

プレシア・テストロッサの環境と役目を考えると、重要なのはこの順序。

敵は時空管理局の裏側に連なる者達。

「それで間違いない。」

お前に情報を流したスカリエツティが最高評議会の駒という事は間違いないんだが、こいつらの仲間が管理局の裏側にどれくらい蔓延っているかが解らん。全体を掌握しているわけではないはずだが、警戒は緩めないでくれ。

リンデイも同じで、迂闊に情報が洩れたら排除される可能性が高い。やり辛いとは思うが、味方を増やすよりも、敵に気付かれない事を優先してくれ」

「ええ、それはもちろん。だけど、原作知識や実際に調査した結果として、少なくとも誰が気を付けるべき相手か、誰なら共犯になれそうかを教えてもらえると助かるのだけれど」

実働としてのリンデイ・ハラオウンとして、出来れば欲しいだろう情報。

これも調べてるけど、悪魔の証明に近いし。

「闇の書事件までは、あまり管理局員が登場しないんだ。調査も白の確定は難しいから、あまりあてにしないでくれ。

とりあえず、アースラのお前達とグラム、それにリーゼは既に接触済みだし、情報も渡しているから省いておくれ。

他に名前が出るのは、人事やらをやっているレティ・ロウランと、技術系のマリー……マリエル・アテンザくらいだったか。特にレティは気を付けて見ているが裏側に関わっている様子は無いし、この2人は恐らく大丈夫だろう。

次の原作となると10年後でミッドの地上が中心だから、現時点で関係する可能性がある人物は割と少ない。一応調査はしているが、力の入れ方もその程度だという前提で聞いてくれ。

レジアス・ゲイズは既に最高評議会やスカリエツティと繋がっているから黒だ。これは間違いない。

首都防衛隊のゼスト・グランガイツは裏関係としては白のようだが、レジアスの友人だ。情報を知られると厄介な相手ではあるだろう。

ヴェロツサ・アコースも多分白。クロノより少し幼いのに既に査察補佐官、10年後には査察官で、記憶を読むレアスキルを持つ。能力

的に最も警戒すべき相手ではあるな。

既に伝説の3提督と呼ばれているレオーネ、ラルゴ、ミゼットは……どうだろうな。白だと期待したいが、最高評議会と関係がある可能性は高いし、漏らして良い相手とは考えにくい。

これ以外となると若い空士や陸士といった士官連中が多いから、無視していいだろう。今はまだ子供だしな。

レジアスの周囲を探ってはいるが、なかなか黒い系の先を見せてくれない。デイランも正義感の塊でゼストに近い白の様だし、武闘派全体が黒いわけでもない。それに、スカリエツティにジュエルシードの情報を流したのは保守派、地球でフェイトの隠れ家を手配したのは革新派の可能性が高そうだ。

薄く広く蔓延っているようだから、何処に敵がいるかすら解らん。むしろ、何処にでも敵がいると思っただ方がいい。現状で見付けてある黒の名簿を作る事は可能だし、渡しはするが……あまりあてにならない。少なくとも、名前が無いから安全とは言えない事は理解しておいてくれ」

StrikerSのフォワードメンバーはまだ6歳以下。機動六課では年長組のヴァイス・グランセニツクすらクロノ・ハラオウンと同年代だから、現時点で協力を求める意味が無い。

ミッドチルダの地上に行くならゲンヤ・ナカジマは関係する可能性も0ではないだろうけど、密輸やらに關係することは無いだろうし。

「なかなか難しい状況ね。聖王教会は調べていないのかしら？」

「予言の能力を持つカリム・グラシアと、その補佐で護衛のシャツハ・ヌエラの2人は、既に活躍し始めているようだ。犯罪者共との繋がりは無さそうな未来の将官だが、実績も階級もこれからに期待といった所か。ちなみに、カリムの義弟がヴェロツサだ。

あとは……教会関係者で名前が出る人物はいなかったはずだ。裏の連中に利用される人物はいても、積極的に裏と関わる人物はいなかった印象がある」

「そう。でも、レティが大丈夫というのは朗報ね。

守護騎士に犯罪者対策という名目で活動してもらう時に、彼女の協

力があるとか何かいい案が出るかもしれないし」

「人事や運用担当で、お前の友人だからな。

疑って調査しているのはあまり気分が良くないだろうが、そこは勘弁してくれ」

「エヴァさんの知り合いではないのだし、慎重に進める必要のある話だもの。警戒して調べるのも、ある程度は仕方ないんじゃないかしら。

でも、情報の漏洩はしないでちょうだいね？」

「解っている、漏洩は絶対にさせん。

代償は私の情報の漏洩だろうし、そうなった時のリスクは理解しているぞ」

「それはそうだし、仕方ないと割り切っても、気分が良いものではないもの。

でも、レティには早めに連絡を取ってみるわ」

「ああ、調整の方は頼む。

私は犯罪者の調査を始めるつもりだ。予め情報があった方が、どこに行かせるかの相談もしやすいだろう」

「そうね。調査はお任せするわ」

提督で後方支援担当となるリンディ・ハラオウンとしては、現場は任せる物。

全力で任される所存。

「それで、貴女の最終目標は本当に、平穏に暮らす事なの？

こんな事はしない方が、余計な手出しが無いはずでしょう」

プレシア・テストロッサの疑問。

確かに、目標が平穏だけならそうだけど。

「私は幸か不幸か、不老になってしまったからな。周囲に誰もいないのは、平穏かもしれないが……幸せとは言えん。その長い時間を共有出来る家族を助けられそうなんだ。助からない未来を知っているだけに、必死にもなるさ。」

要するに、アレだ。お前も26年前に駆動炉実験の結果がどうなるか知っていたら、立場やらを投げ捨てる覚悟で中止させるか、娘を連

れて逃げただろう?」

「そうね……予言や予知を信じたかを別にすれば、否定出来ないわ。だけど、信じるという事が前提でしょう?」

「そうだな。原作等という怪しい代物に振り回されていると言う点で、私は私が危険人物と呼ぶ転生者と何も変わらんという事だ。」

その意味では、原作の知識を持たない黒羽が、最も今を生きていると言える。同じように知識が無かったセツナは……私が殺してしまつたのだろうか」

「後悔しているのかしら?」

「それは無い。」

手出しをしなくても幸せになれるとか、手出しをしても未来が変わらないとかならともかく、実際に死にかけてお前を助けることは出来たんだ。

何かを望む時に別の何かが犠牲になる、何かを犠牲にする事は……もう、慣れたよ」

「そんな辛そうな顔で言つても、説得力は無いわ」

「……顔には出ているのか。だが、生きるため、主の最後の願いを叶えるために、何億、何十億という人、幾つかの文化すら犠牲にしてきたんだ。」

今更、誰かの人生を曲げた程度で後悔などしていられん」

「それでも、何も感じていないわけじゃないはずよ。」

それに、今の貴女は何も犠牲にしていない……たとえ利用する為に助けられたのだとしても、私は良かったとすら思っているわ。

存分に使いなさい、私を。」

報酬は大きなものを貰っているのだから、それ以上は必要無いわ。私はその時の言葉を守れているか、見ていなさい」

「そうだな。そうさせてもらおう」

散々娘を見ろと言ってきたから、命を奪ったり捨て駒にしたりするなって事になるけど、問題無い。元々、そんなつもりは無いわけだし。



そして、木曜の夕方というには少し遅い時間。

アースラが地球を離れる直前、たまり場となりつつある高町家の道場に多くの関係者が集まって、しばしのお別れを惜しんでる。

「とは言っても、私は居残りだからあんまりここにいる意味は無いんだよねえ」

とか言いつつ、エイミイ・リミエツタも参加。

他数名のアースラスタッフも現地拠点に残る予定だけど、本局までの転送手段は確保済み。往來は難しくないし、小物のやり取りくらいは普通に行える。

と言うわけで。

「ビデオメール、届けてくれるって!」

「私達も、なのはちゃんと一緒に撮影するから」

「だから、私達も見せてもらうからね。」

なのは個人にしか見られたくないのは、ちゃんと別に分けときなきらいよ」

「うん、解った。私もそのつもりで届けてもらうよ」

高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスは、フェイト・テスタロツサと遠距離でも交友を深める約束をしてたり。

「何か、色々ご迷惑かけてるみたいやけど、よろしくお願いします」

「いえ、こちらの目的にも沿う形での協力ですから。」

はやてさんは気にせずに、しっかりと目標に向かって進んでね」

八神はやてが、リンデイ・ハラオウンに挨拶してたり。

「ミッドチルダ、だっけ?」

そっちの料理も教えてもらえると嬉しいな」

「ええ、自由に動ける時間はあまり無いでしょうけれど、合間を見ながら調べてみましょう。」

「だけど、この世界で入手出来ない材料を使っているものになるわ。完全な再現は難しいんじゃないかしら?」

「新しい料理のアイデアが欲しいってのが大きいから、それほど気にしなくてもいいよ?」

妙に仲が良くなってる黒羽早苗とプレシア・テスタロッサが料理の話をしてたり。

「私と次に直接会うのは、地球に戻ってからになる。」

それまではチクアーブやチャチャ達経由でも連絡が取れるから、何かあつたら言ってくれ。

もしかしたら、何か頼みがあつて私から連絡する事もあるかもしれないがな」

「はい、いつでも連絡してください」

「頼みと言うと、ジュエルシードの確保や裏側の人間の暗殺かい？」

「阿呆。そんな目立つ動きをしたら、足枷が増える結果にしかならんだろうが」

「しかし、裏で横流しされるロストログアを掠め取る事くらいは構わないと愚考いたしますが」

大人モードのお姉様が、セツナ・チェブルーや成瀬カイゼ、ついでにチクアーブと話をしていたり。

普通の話のはずが、何だかおかしな方向にずれていつてるけど。

「アンタは別に人の姿でもいいんじゃないかい？」

「我等と違い、本来は人だと聞いている。主の負担を気にする必要は無いのであろう？」

「でも、何だか地球ではこっちの姿の方が普通になっちゃって。」

それに人の姿だと、なのはと一緒に居させようとする家族の圧力が……」

「満更でもないくせに。ま、アタシはどつちでもいいんだけどさ」

小動物3匹、要するに子犬モードのアルフと子犬モードのザフィーラとフェレットモードのユーノ・スクライアが、隅でたむろつてたり。

「つぎにあうときには、なかまはずれになっちゃう？」

「私らはもうちよつとかかるから、車椅子卒業の一番乗りはアリシアちゃんやね。」

立てた時の感想とか気を付けた方がいい事とか、色々教えてな？」

「大丈夫。そう遠くない内に、私達も追いつく」

「そっか。うん、いちばんのり！」

アリシア・テスタロッサ、八神はやて、主の車椅子トリオが、やっぱり隅の方で親睦を深めてたり。

「これで、しばらく会えなくなるな。」

早めに戻ってこい、フェイト・テスタロッサ。お前との試合は心が躍る」

「私との試合も忘れちゃダメだよ？」

「はい。次は負けません。」

でも、高く飛ばないという条件を付けたとはいえ、魔導師でない方が互角に戦えるとは思いませんでした」

八神シグナムや高町美由希とフェイト・テスタロッサが、再戦を誓ってたり。

ちなみに、八神シグナムとフェイト・テスタロッサは八神シグナムが勝ち越し。高町美由希とフェイト・テスタロッサはフェイト・テスタロッサが勝ち越ししてる。

差は大きいものの全勝とはいかない辺り、このびっくり超人共と言わざるを得ない。特に高町美由希に関して。

「君達は、どれくらい昔の記憶を残しているんだ？」

「さーな。ベルカの風景も少しは覚えてつけけど、それが何時かっつのはわかんねーし」

「そうなのか。思い出したいくないかも知れないが、どんな歴史だったか覚えているのか？」

「血塗られた、って表現が一番似合うんだろーな。」

本来アタシ達は主の忠実なシモベで、蒐集の為の道具だ。

記憶にある風景も、戦場や城、それに灰色の空くれーなもんだしな。

こんな暖かい空気は……初めてだと思う」

「そうか。」

……それにしても、最前線に立つ君が、どうして子供の姿なんだろうな。

強さという意味では、体が大きい方が有利だろうに」

「アタシが知るかよ。大体、アンタだって人のことは言えねーぞ」

「解っている。接近戦でのリーチの短さや、打たれ弱さに自覚がある

「からこそだ」

「……アンタも苦勞してんだな。」

「けど、まだ成長してんだからいいじゃねーか。アタシはずっとこのまんまだ」

「いや、そんなつもりで言ったんじゃ……」

クロノ・ハラオウンと八神ヴィータが、何だか身長の高さで愚痴りあっていたり。

「ふふ、こうして見ると、微笑ましいですね」

「そうね。でも、シヤマルちゃん達は地球に残るのでしよう？」

「従者といっても、子供に養ってもらうのはどうかと思うし。私達のお店で働いてみない？」

「わ、私がですか？」

高町桃子が、八神シヤマルをお店に勧誘していたり。

「東渚の転生特典無効化能力と、正確な性能を把握している理由の調査ですか。」

「危険人物だから調査した結果を問わないとは、なかなか思い切った条件ですね」

「記憶を奪う事の危険性は把握している。」

「だけど、本人の思い込みでなければ、かなり重要な情報を得られると思える」

「なるほどなるほど。」

「事後に廃人になられても問題ですし、少々時間を頂きたいですが、急ぎますか？」

「それほど急がない。だけど、妙な行動を起こして排除が決まる前は結果を出してほしい」

「ふむふむ、いいでしょう。美少女のお願いですし、私としても気になる内容ですからね。」

張り切って調査しましょう」

お姉様に蹴り飛ばされてもぴんぴんしてる変態ロリコンに主が調査依頼をしていたりしたが、そろそろ別れの時間。

高町家の女達、八神家一同、チクアーブ、月村すずか、アリサ・バ

ニングス、エイミイ・リミエツタ、黒羽早苗、コリコン 変態に見送られて。

ハラオウン親子、テスタロツサ家一同、ユーノ・スクライア、成瀬カイゼ、セツナ・チェブルー、チクアーブが転移していった。

「……ねえ、アンタ、あっちにもいたよね？」

「はい。何か問題でも御座いましたでしょうか？」

「何で見送る側と見送られる側に同じ人がいるのよ！」

「というか、人ですらないし！」

「こちらにも居る。あちらにも行く。これで良いでは御座いませんか。」

急ぎの要件が御座いましたら、すぐにでもフェイト嬢に取り次ぎますぞ？」

「そういう問題じゃない！」

アリサ・バニングスが吠えてるけど、小ネズミ姿のチクアーブは……表情が読めない。

ちよと首を傾げてる気はする。

「チャチャみたいに、コイツも複数いるんだ。あまり気にするな。」

さて、これで少しはゆっくり出来るかな。目覚めてからバタバタし過ぎて、正直疲れた」

「確かに。ジユエルシード、転生者、闇の書……どれも手を抜けなかったから、仕方がない。」

でも、この顔ぶれなら気にする必要も無いし、エヴァ、来て」
ため息をついてるお姉様に向かって、主が両手を伸ばしてる。

つい最近見た覚えのある体勢。可愛い服装を着るようになった主を見た従者達のせいで、今はフリフリのゴスロリ風ドレスを着てるけど。

「……本の姿でか？」

「そう。ひとまず、リンディ達から連絡があつて事態が動くまでは、ゆっくり出来る。」

頑張り過ぎなエヴァは、一息入れるべき」

「なんだか、アレから随分と過保護になつていないか？」

私の事を過保護者呼ばわり出来んぞ」

「それも悪くない。持ちつつ持たれっ」

「……そうか」

お姉様は諦めたようにため息をつきつつ、幼女経由で本の姿になり、主の腕の中へ。

短いかもしれないけど、とりあえず訪れた平和な時間。

曙天の指令書は、時空管理局組の頑張りを応援しています。

A☒S編12話 ちよつとそこまで

アースラが本局に到着し、リンディ・ハラOWNやクロノ・ハラOWNが慌ただしく行動を開始して数日。

法的な部分は、予想以上に順調に話が通っていく。

フェイト・テストロッサとアルフは、予定通り不起訴で確定した。

むしろ、囑託魔導師の資格取得の応援をされる状態になった。具体的には、元陸士訓練校教官が教師役として名乗りを上げてきた。

監視や裏側への取り込みを考えている可能性もあるけど、この人物自体は高齢が理由で事務仕事に移っただけの、軽く調べた範囲では問題の無さそうな人物。純粹な応援と考えて良さそう。

今の私達に不足しがちな情報を持つてるし、拒否や排除する理由も無い。とりあえず様子見。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーも、ミッドチルダでの身分を確保完了。

最初から地球との二重国籍が前提だけど、Sランクを目指せる金の卵。喜んで迎え入れられてたし、フェイト・テストロッサと共に元教官の教えを受けてる。問題になりそうだった管理世界標準語の習得も意外なほど進んでる。

それに、今はフェイト・テストロッサが頭一つ抜けてるけど、この3人は比較的实力も近く、いい模擬戦の相手になってる。

リンディ・ハラOWNの紹介という形で聖王教会とも接触。希少な真正古代ベルカ式のデバイスと魔法の使い手という事で、賓客待遇で迎えられた。

聖王教会からは、カリム・グラシアが登場。年齢が近くて話しやすい人物という、リンディ・ハラOWNの要望が通った結果らしい。予言の有効性が広まってないせいか引き籠っておらず、普通に時空管理局の本局で会ってた。

総合的に見て、3人の囑託魔導師の準備やミッドチルダでの足場作りは、とても快調。

プレシア・テストロッサは、色々な交渉や法務処理を開始。

クロノ・ハラオウンだけでは最終決定が出来ないため、別の法務担当者も交えての話し合い。

とはいえ、司法取引で事実上無罪の方向性は確定的。今は時空管理局の医療部門が、プレシア・テスタロツサの持ち込んだ技術の精査をしている。

特に興味を持たれているのは、遺体保存技術と、不安定なリンカーコアの安定技術。

前者は技術転用で、事故等で切断された部位の結合手術の成功率を高める効果が期待出来る。違法魔導師との戦闘で負傷した局員の治療で、後遺症を残す確率を下げられるかもしれない。また、移植手術の際に、摘出臓器を運搬する際の劣化を防ぐ事も出来そう。遺体そのものを臓器移植用に保存する意図もあるかもしれない。

後者は先天性の病気の治療に役立つ可能性が認められた。稀な病気だけど、体調に影響が出るほどのリンカーコア異常を有する者の生存に繋がるなら価値があると期待された模様。

表向きの用途だけでも、放置するには惜しい技術。裏を考えると色々ありそうだけど、手札として有効だから、とりあえずは問題無い。

八神家では、八神はやたと守護騎士一同を別荘に招待。

本格的な訓練で使うための場所としてケアンズに該当する場所を教えて、八神シグナム&八神ヴィータとお姉様&八神チャチャで軽く手合わせして、八神はやとの目が点になったり。

みんなで入れる大きな風呂に入って八神はやてが喜んだり、この際に脱衣を手伝ってたりルの胸を揉むも、子供のやる事と軽く流されてへこんたり。

幼女モードのお姉様と並んだ八神ヴィータが、身長で負けてて微妙に拗ねたついでに大人モードを教えてくれと頼みこんでたり。

なににせよ、お姉様に対してもだいたい硬さが取れ、打ち解けてきた。こんな感じで、表や八神家の方はいい感じ。

というわけで、リンデイ・ハラオウンは。

「どうしたのリンデイ、愚痴に付き合ってほしいって珍しいじゃない。そんなに第97管理外世界の事件は嫌な事があったの？」

「まあ、そんなところね。」

聞いてもらうお礼と言うわけじゃないけど、その世界のお酒を持ってきたから、一緒に飲みましょ」

レテイ・ロウランの部屋で、内緒の話を始めようとしてる。

個人の部屋に会話等を記録する物は配置されて無いし、盗聴器等も仕掛けられてないから、どこかの店で話すよりもよほど安全。家族はとある管理世界の本宅にいるから、本局のこの部屋には現在2人しかない。

ちなみに、持ち込んだのは地球産のワインをいっぱい。具体的には6本。食品については元々地球からの輸入があったし、非生物の加工品は制限も緩め。手続きは割と簡単だった模様。

簡単な料理を食べつつ、少々お酒も飲んだところで、お話開始。

「それで、何があったの？」

いくら私が飲む方だと言っても、こんなに持ってくるのだから、余程長い話なんでしょう？」

「ロストログア関連の話なのだけど……駄目ね、信じられない事ばかりだから、何処から話したらいいのかすら悩むわ」

「そう。ジュエルシード事件は色々噂になっているわよ。若返りや蘇生を実現する代物の情報なんて、権力者や金持ちからしたら垂涎の的でしょうし。」

技術部から流れてきた噂だと、扱い方によってはジュエルシードも似た効果を発揮する可能性があるそうじゃない。調査結果によっては、時の人になっちゃうかもね」

「今の話が細事になる、とても公開出来ない事実があるのが一番の問題なのよ。」

ねえ、レテイ。これを見てもらっていいかしら？」

そう言いながらリンディ・ハラオウンが空中モニターを展開。

そこに表示されてるのは、3つの資料。

1つ目、公式に提出されたもの。

2つ目、裏や司法取引での交渉時に使用されているもの。

3つ目、お姉様の関係者向け非公式設定をまとめたもの。

凄い早さで目を通していくレティ・ロウランが、どんどんしかめっ面になってく。

「……明らかに矛盾があるわ。どういう事?」

「この3つの資料だけど、後の物ほど真実を語っているのよ。」

そして、八神エヴァンジュさんだけど……闇の書の悲劇の終焉を指しているわ」

「闇の書?」

貴女も因縁があるロストログアでしょう。個人に任せるつもり?

その存在を秘匿するという事にもなるわよ」

その時点で、提督としては背任を問われても仕方ない立場になる。

時空管理局の提督という同じ肩書を持つ身としては、見過ごせないはず。

「結果的に、そうなってしまいうわね。」

別に時空管理局を裏切るとか、そういう話ではないの。2つ目の資料に出てきた次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティが、裏で最高評議会の方達と繋がっているらしいのよ」

「背任に確信がある、という事かしら?」

もしそうなら、それも見過ごせないけれど……証明は出来そう?」

「今はまだ難しいわ。」

だけど、エヴァさんの情報が漏れた場合は、結果的にエヴァさんと時空管理局の間で戦争になりかねないのよ。そうなってしまおうと、最悪の場合は時空管理局が崩壊するわ」

「それはまた、物騒な話ね」

レティ・ロウランが呆れてる。

普通に話すには、スケールの大きすぎる内容。信じてもらえなくても仕方ない。

「だって、エヴァさんは闇の書の妹ですもの。最悪の場合は闇の書を持って本局を襲撃すると断言されたし、それが可能だと言えるだけの實力は見せ付けられたわ。」

ある提督が闇の書の存在を知っていて、裏で動いていたのだけど……その関係者をジュエルシード事件があつた第97管理外世界で

捕らえて、本局内の提督の私室にまで秘密裏に連れて行ってるわ。つまり、本局にすら侵入出来る事を証明済みよ。

だけどその提督の計画は、闇の書を封印する為に、魔導師を無差別に蒐集させて完成を目指すものだったらしいけど、それでは犯罪になるから駄目だと言って行動を止めていたし。

エヴァさんは、悪い人ではないのよ……素直じゃない上に、優秀すぎるだけで」

「……色々頭が痛くなる情報が、ポンポン出てくるのだけど。

闇の書の妹、本局への自由な侵入、提督の裏の計画……私を過労死させるつもり？」

「いえ、提督の計画については中断……少なくとも凍結はしてもらっているわ。

エヴァさんについては、信用してあげてとしか言えないけれど……無差別蒐集を止めたのがエヴァさんだから、察してもらえると有り難いわ」

「はあ……監査は何をやってるのかしら。

いくら人手不足でも、これほど色々発生しているのに気付かないなんて」

レティ・ロウランがため息をつきながらワインを口に運んでる。けど、全て表では信頼される立場の人物だったり、完全に裏側だったりする話。

監査が後回しになったり、そもそも監査の範囲に入らない可能性も高かったりするから、気付かれないのは仕方ない部分もある。

「別口だけれど、最高評議会の方達が裏側で動いているみたいだから、それも関係するんじゃないかしら？ 監査が優秀だと、動き辛いでしようし。

そうそう、最高評議会とジェイル・スカリエッティの間に、レジアス・ゲイズ中將がいるらしいの。大物が動き過ぎね」

「ちよっと待ってリンディ。レジアス・ゲイズ中將って……犯罪者嫌いで有名な、あの？」

「あの、よ」

信じられないと言いたげなレティ・ロウランと、信じたくないけどと言わんばかりのリンディ・ハラオウン。

2人はため息をつきながら、ワインを口に運ぶ。

「……管理外世界で発生した事件じゃなかったの？」

どうして、ミッド地上の情報まで出てくるのよ」

「事件自体はそうだったのだけど、ね。」

発端の時点で時空管理局とジェイル・スカリエツティが絡んでいて、それをエヴァさんに暴かれた感じよ。プレシアさんの証言から判明した事もあるから、ほぼ間違いないと思えるし」

「そう……クロノ君が言っていた事を思い出すわね。」

確か、世界はこんなはずじゃない事ばかりだ、だった？」

「そんな感じね。」

今までの話は迂闊に手を出したら危険だから、無理に対処せず、前提の知識として思ってもらえばいいわ。早めに手を打つべきではあるけれど、今の情報を知っているとばれた時点で、私達が切り捨てられるもの。

ここからが本題なのだけど、闇の書の守護騎士達を、犯罪者の対策に使えないかしら？ 無差別じゃなくて、犯罪者から魔力を蒐集するためののだけれど」

「また、随分と突飛な事を。出来ると思ってるの？」

レティ・ロウランが頭を押さえている。

時空管理局の裏に対処しない事と、守護騎士を使った犯罪者対策。両方とも頭が痛そうな話ではある。

「出来る出来ないじゃなくて、やらないといけないのよ。」

とりあえず、これを見て」

そう言いながら再生したのは、闇の書の起動前後のやり取りの記録。

六芒星の魔法陣は隠してあるからちよつと配慮してあるみたいだけど、お姉様がリンディ・ハラオウンと話した内容まで映ってた。

「……1つずつ確認させて頂戴。」

この小さな女の子が、闇の書の主ね？」

「そうね。八神はやてさん、まだ9歳になったばかりの、つい最近まで魔法の存在すら知らなかった女の子よ」

「そして、闇の書は既に起動している?」

「起動している場面は、今見せたでしょう?」

「守護騎士も、活動を開始している?」

「まだ蒐集等はしていないから、生活を始めているという表現の方が正しいわね。」

戦闘になった時の事を考えているなら、魔導師ランクでの評価だとAAからS—くらいになるそうよ」

「闇の書の主の隣にいる、金髪の女性……少女や本になっているけど、この……人? 表現が難しいけど、この人が闇の書の妹ね?」

「そうね。八神エヴァンジュさん、はやてさんの保護者でもあるわ」

「後から入ってきた車椅子の女の子が、エヴァンジュさんの主ね?」

「そうね。八神アコノさん、ジュエルシードの報告書だと小野アコノさんという名前だったわ。」

あの事件の後に、はやてさんと姉妹として縁組しているのよ」

「何度か出ている、夜天と言うのは?」

「闇の書の、本来の名前だそうよ。正式には夜天の魔導書というらしいわ」

「この場にプレシアさんがいるのは?」

「エヴァさんが自分の存在を隠すために、矢面に立たせる気にいるのよ。」

闇の書の妹だなんて知られた時点で危険物扱いは確定だし、ジュエルシードを使えば若返りが可能と知られたら、余計な手出しがあるのも間違いないでしょう?」

「……エヴァさんは過去に色々問題があったらしくて、時空管理局の裏側というか、最高評議会からジェイル・スカリエッティに繋がる人達を敵視しているわ。」

迂闊に手出しされる事があれば、本当に時空管理局の危機なのよ……」

ついに、リンディ・ハラオウンに泣きが入ってきた。

事実そうなのだから、始末に負えない感じ。

「……とりあえず、次のお酒を開けましょう。」

素面ではやってられないわ」

「そうね」

そして、しばらくは無言での飲食。

その間、約10分。

「……このままだと、何も解決しないわね。」

あの映像を振り返ると、闇の書の守護騎士は自らの意思で蒐集する事は無いし、今は話を通じる主が手綱を取っていると見ていいのね？

その上で、管制人格を起動するために必要な魔力を無差別に蒐集しないために、犯罪者対策に名乗りを上げている……」

「現時点では、罪は犯していないのよ。」

だけど、はやてさんの命がそう長く持たないから、あまり悠長にも出来ないそうよ。

無下にしたら何が起こるか、想像出来るでしょう？」

「……想像したくないわね。だけど、エヴァンジュさんはCランク相当でしょう？」

何かおかしくない？」

「魔力量での評価なのよ。64発のカートリッジを同時にロードする事が可能なデバイスを持っている、ベルカ式を極めたような技術の持ち主だから……Cなんて評価は、飾りだそうよ」

「……理不尽の権化の様な存在ね。」

とりあえず、立場と時間を考えると、局員になるのは難しいと思うわ。

他に考えられる手段としては、自警団への組み込み……これも身分が問題だし範囲が狭すぎるわね。民間協力者……1つ2つの事件ならともかく、数をこなすには問題が出るわ。傭兵……戦時ではないから微妙ね。正直言って、あまりいい手段は無いわ。

そもそも、いくら犯罪者でも、捕らえる際に過剰に傷つける事は避けるべきだし」

「でしようね……協力してくれそうな人が3人、囑託魔導師を目指し

ているのだけど、その協力者という形なら行けそうかしら？

少数で対応する為に、相手の無力化を優先して処理した、とか」「それならまだ何とかなるでしょうけど、まだ準備が整っていないでしょう？　あまり時間をかけたくないなら、初動の遅れは後になって響くわ。それに、あくまでも民間協力者だし、協力しすぎるのは問題になるわよ。

クロノ君の助手には……やっぱり身分が足りない、か」

「やっぱり、時空管理局として真つ当な方法と言うのは無理があるかしらね。

妥協出来る代案があればいいのだけれど……」

「いっそ、義賊的に活躍してもらおう方がいいかもね。

現行犯の逮捕であれば民間人でも可能だし、明確な証拠と身柄を速やかに引き渡してもらえば、当局の手柄という形にして存在を隠す事が出来るかもしれない。犯罪者の復讐を防ぐ為に匿名での通報を受け入れているのだから、逮捕者の情報を残せない事を不問にしてもらうことは不可能ではないわ。

こちらから多くの情報を流せないから効率はあまり良くないし、誤認は絶対に避けないといけないけれどね。本局に侵入出来る実力が本物で、ある程度の調査も出来る力があれば、正当な手順を踏むよりはマシでしょ」

ある意味で、犯罪者の拠点を襲撃する事を黙認してもらおうという形？

情報はレジアス・ゲイズやジェイル・スカリエツテイの芋蔓と、公開されてる手配書やらを元に本腰を入れて調査すれば何とか。

時空管理局内は徹底して秘匿してるけど、末端の犯罪者の管理は結構いい加減な所があるし。

「なるほど。その路線なら何とかかなりそうだな」

「えっ!？」

「エヴァさん……それが可能だとは知っているけれど、心臓に悪いわ」
大人モードで闇の書と清酒の一升瓶を持つお姉様、八神シグナムを伴って部屋に侵入。

レティ・ロウランが呆気にとられてる。

リンディ・ハラオウンは、ものすごく驚きつつ困った顔。

「いや、何が出来て何が出来ないか、はつきりした方が動きやすいからな。やり取りに無駄な時間を使う気は無いから、直接話をしに来たんだ。」

ああ、挨拶がまだだったな。私は八神エヴァンジュ、夜天の魔導書の妹だ。今は闇の書と呼ばれている姉の主である八神はやての後見人もしている。

ちなみにこれが闇の書で、これは土産の酒だ。で、こいつが守護騎士のまとめ役だ」

「初めまして、レティ提督。」

私はシグナム。守護騎士ヴォルケンリッターの将を務めている、剣の騎士だ」

「初めまして……ちよつとリンディ、どういう事？」

「これは……予想外過ぎるわ」

レティ・ロウランが思わずと言った感じで返事をした後、凄い目でリンディ・ハラオウンを睨んでる。睨まれてるリンディ・ハラオウンも頭を押さええてるけど。

「なに、私はその気になれば、本局の様子を見る事も出入りも可能だというだけだ。」

というわけで、犯罪者を捕らえ、証拠と共に速やかに当局へ提出する方向で大丈夫か？

情報は何とかして集められるだろうから、どの程度までやっていか、やる際にはどんな手順が無難かを相談したいんだが」

「……リンディ。常識って何だったかしら？」

「思っていたよりも儂い物だと、改めて思い知らされたわ」



というわけで、レティ・ロウランやリンディ・ハラオウンと、今後の方針ややり方を相談。

結果、戦闘集団を名乗り、犯罪者組織やらを中心に潰して回る事になった。

手順としては、犯罪者組織の拠点や研究所に証拠となるものが存在する事を確認し、強襲。そこにいる魔導師から蒐集、無力化した上で全員を捕縛し、速やかに現地の当局に通報して回収してもらおうという流れ。

証拠を破棄されない事が絶対条件となるし、謝礼的な物は一切無いけど、必要以上の罪に問われる事は回避出来るはず。

義賊団として情報戦も仕掛けた上、襲撃の際に金銭類を奪い犯罪被害者への義援金や支援団体への寄付、局員の戦闘支援も行い、一般人や現場に近い局員からの支持も集めてしまおうという方向となった。

蒐集の痕跡に関しては、リンカーコアに強力な封印を施す事で偽装。自動解除は約2週間で、内部に治療魔法も仕込むから、その間に回復すれば何の問題も無い。回復が間に合わなくても、強引に押さえつけられたことによる疲弊や損傷と診断される可能性が高いと判断。

「よし、これならそれなりのペースで集められそうだな、ついでに紹介しておこうか」

というわけで、ここでの会話を伝えていた場所から、八神ヴィータと八神シャマルを転送。

ちなみに、いたのはとても近い管理世界、隠蔽処理をした個人転送で移動出来る場所。

八神はやてはザフィーラと一緒に日本でお留守番だから、今回の顔見せはこれで全員。

「鉄槌の騎士、ヴィータ。よろしく」

「湖の騎士、シャマルです」

「……………ここまでされると、何と言うべきかすら迷うわね」

レティ・ロウランが、遠い目をしてる。

現実逃避したくなる気持ちは解るけど、挨拶をしている八神ヴィータと八神シャマルがちよつと哀れ。

「ちなみに、戦力としては一級品だぞ？ 偽装もする必要があるから、

常に全力を出せるとは限らんな。

顔を晒せないから、騎士甲冑も専用で考えるべきか……正体を隠せる格好ははやてに考えてもらおうとして、まずは手頃な犯罪者の搜索だな」

「手頃な犯罪者って……そんな簡単に見付けられる？」

「管理世界で公開されている手配書とやましい連中が潜みそうな場所を突き合わせれば、少しくらいは見付かるだろう。」

やましい事をしてる連中は、管理局内にもいるからな。手軽な連中が見付からなければ、そいつらの証拠でも集めるさ」

「そう……」

もう好きにしようと言いきんな雰囲気のリテイ・ロウラン。リンデイ・ハラウンも似た雰囲気だけど、心配しなくても大丈夫。

少なくとも、必要以上の犠牲は出さないから。

番外：小話ズ その5

◆◆ 覗き見の先に (A s編02話裏) ◆◆

「やはり、私の過去が気になっているか」

別荘に来て早々、リンディ・ハラウンやプレシア・テストロツサと離れ、別室に来たお姉様。

部屋の確認は、もう終わってる。というか、別荘管理担当の私達や従者に一声掛ければ、すぐに結果が出る。

お姉様が気になったのは、2人が従者達にどんな対応をするか。

「公開出来ない情報ばかりですから。内容が判らないからこそ、気になるのでしよう。」

どうぞ、先日地球から仕入れた紅茶です」

「ああ、有難う」

紅茶とマドレーヌを用意してるのは、料理主任のロナ。ちよつとフリフリの、白いエプロンを着けたメイド風ドレス姿。

お姉様が目覚めた後、最初に別荘に来た際に、真っ先に喰い付いた金髪美女。

今ではだいぶ落ち着いたから、あの時の様に迫ってくることは無くなってる。

「相変わらずの腕だな。これの材料は……こっちか？」

「はい。似たお菓子や材料がありましたので、そのレシピを参考にしました。」

質の関係でバニラの香料は地球産を使用していますが、こちらの材料でも近い物を作る事は出来そうだと聞いています」

「問題は……設備や加工時間か？」

「品種面もあるようです。」

似た物はあっても全く同じではありませんし、品種改良も全てが地球と同じ方向で行ったわけではありませんから、風味や食感の差が大きいものもあります」

「その辺は、産地や品種で色々違う地球の材料だって似たようなもの

だ。

ところで……私は、やはり神扱いのままか？」

立ち話を映してるモニターには色々言ってるリルが映ってる。

ついでに、ナーデイも何か言ってる。

「全くあの子達は、近くにおられないと思ってる……」

安心して下さい。神として扱う事を好まれない事は、理解していませんから」

「……そういう事か。理解した」

つまり、表に出さないから妥協してくれ、という事。

それでも、以前よりはマシなはず。

「今までに為してきた事を考えますと、他に該当する概念が思い付きませんから。」

それに、壊すばかりだった頃に比べ、誰かの為に何かを生み出す今の生活はとても満たされたものです。その環境を作られたエヴァ様を蔑ろになど、従属性の付与が無くとも出来るはずがありません」
断言されちゃった。

勘違いとは言えない実績は持ってるし。

従属の件を説明した時も、それで助けられたとか、当然の処置とか、全肯定されてた。その上で従属が無くても似た結果になるとか、どう見ても洗脳完了、逃げ場無し。

「そろそろお茶とお菓子の準備も終わりますので、移動しても良い頃かと思いますが……エヴァ様、どうしましたか？」

「もうちよつと待ってください。私は今、なんでさと言いかける口を止めるのに忙しい」

「はい、存分にどうぞ」

◆◆ 胸が高鳴る理由 (Axs編10・5話) ◆◆

アースラでの訓練が終わわり、お姉様は八神家の部屋に戻ってきた。今まで顔に出してなかったけど。

「あ、危なかった……変態め、気軽にアルハザードの事を口に出しおっ

て……」

お姉様は、ベッドに突っ伏してる。

クロノ・ハラオウンやフェイト・テストアロツサはそれぞれの母から聞かされている可能性があるし、守護騎士にはいつか話す事になるだろう内容ではある。

でも、他の転生者や高町なのはには、まだ聞かれたくない。

特に高町なのは。ユーノ・スクライアまで情報が行くと、色々と面倒そう。

「認識阻害は間に合っていたな？」

態度もおかしな点は無かったよな？」

認識阻害は、変態ロリコンもやってた模様。

その後の話を考えても、ばれてた可能性は低い。

「良かった……うん。今後、変態ロリコンとは人前で会わない様にしよう。

見敵ロリコン必殺、出てきたらまずボコる。

情報はありがたいが、行動が危険すぎる」

全面的に同意。

実質的な殲滅許可。腕が鳴る。

◆◆ 大人達の転生者考察 (A s 編 11. 5 話) ◆◆

「良かったの？ 使え、なんて言っちゃってしまっ」

今ここにいるのは私、リンディとプレシアさんの2人だけ。

エヴァさん達はお家に帰ったからサーチャーの妨害もしているけれど、強力過ぎて居心地が悪くなるのは仕方ないわね。

だけど、プレシアさんは、道具扱いされる事を良しとする人には見えなかったのだけれど……あれほど望んでいたアリシアさんとの時間の恩は、それ程までに大きかったという事ね。

「構わないわ。あの子は過去と予知に縛られ、それでも自分が望む未来を欲しがっているだけ。

周囲を見れない程壊れてはいないわ……少なくとも、以前の私には」

「だからこそ、見ていなさい、って?」

言葉を守れているか見ているという事は、見える範囲に居るといふ事。見える範囲から追い出すなという事。

平穏な生活から見える範囲なら、恐らくそう酷い状況にはならない……そういう事ね。

「平穏を求めているあの子から見える範囲に居ることが出来るなら、少なくとも捨て駒にはされる事は無いわ。そもそも、フェイトを娘として見ろと要求してきたのだから」

「そうね。必要以上の嘘はつかない人だから、その点は信用出来るのだけれど……」

どうしてかしらね。この次元世界で会う人会う人、無茶をする人ばかり。本人はあまり無茶と思っていない点も共通かしらね。

だけど、エヴァさんは……自身の多くを犠牲にしても、闇の書を止めようとしている。家族だから、共に未来を歩める相手だからと言っても、気持ちはちよつと行き過ぎよね」

「そう? 私が事故の結末を知っていたら、あの子以上の事をしていた可能性が高いわ。」

それに、犠牲にして良いと思っっている、犠牲とすら思っていないものに、普通の人が欲しがるものが含まれているだけ。本当に大切だと思っっている物を犠牲にする気は無いわ。

地位にも権力にも財産にも興味は無く、大勢の称賛より心を許せる相手を望む。それだけよ」

表に出ず裏で動く理由は、確かにそうでしょう。

それに、覚悟を決めた人を止めるには、悪役を演じてでも強引さが必要になるのも確か。

プレシアさんもグレアム提督も、現状の危険性を明示し、受け入れられる結果とそれに至る手段を提示して説得しているわ。その点は、危険と見なししていない転生者、あれ以来殆ど関わっていない黒羽さんや、ある意味では見捨てているようにも見える馬場さんや上羽さんすらも同じね。

本局への侵入も可能なエヴァさんなら、証拠も残さずに全員を強制

排除する事すら不可能ではないはずだけれど、そうはしていないわ。平穩を護るだとしても……情報を知る者を無闇に増やす事は得策ではないはず。

やっぱり、結果的に悲しむ人を減らそうと動いているわね。本質的には優しいと判断した事は間違いじゃなかったわ。

……だけど。

「それはやっぱり……自分と同じだから理解出来るという事かしら？」

目的の為に、他の全てを犠牲にする覚悟という意味では……かつてのプレシアさんも。

「ありがちな話よ。裏の世界に自分から踏み込むような、心に傷がある連中には特にね。」

目的に対する想いが強ければ強い程、世界に絶望すればする程、何かに縋れば縋る程、他のものが見えなくなるわ」

「そうね。大切な物を失った人は……特に」

その意味では、転生者と呼んでいる人達も同じね。親しい人を、過ごした世界を、自分自身すらも失っているのだから。

エヴァさんは仲間に縋っているように……多くの友人を求めた精神的な弱さを今でも持っているように見えるわ。過保護者の本当の姿は、孤独や別れを怖がる臆病な人。

エヴァさんが危険視している人は、物語の世界、物語の主人公という事に囚われて現実を見ていないから、あんな行動が出来るのでしょね。

そしてそれは……きつと、私やクロノ、それにグレアム提督も。

私にはクロノがいたから踏み止まれたけれど、夫の、クライドの背中を追っていたのは事実。クロノに子供らしさが無いのも……。

グレアム提督の止め方はあれが本当に正しかったのか、今でも完全に納得出来ているわけではないけれど……穏便な交渉で説得出来たとも思えないわ。迷わず恐喝同然の手法を取ったエヴァさんは、平穩を求める手段として悪の道を選べる、親しい人さえいれば時代の影を背負う事を厭わないくらいの覚悟は出来ているという事。

「管理局で前線に出ていれば、良く見る手合でしょう。」

「犯罪者、被害者の家族、次元漂流者……」

「共感出来る場合もあり、理解出来ない場合もあり、かしらね。過去や立場に関わる事例の知識は重要だもの」

「そう。それで、この世界の物語、創作物はどうだったのかしら？」

「幾つか教えてもらっていたでしょう」

「ええ。特に二次創作と呼ばれるものは、欲が素直に出ているものも多いと感じたわ。」

その主人公になったと思えば……人格が歪んでしまうのも仕方が無いのかしら」

元の物語に介入する形の、それも多くの女性を囲う立場で追加された人物に自分を投影している可能性が高いらしいけれど。」

それでも、身勝手な考え方や行動で異性に好かれると思うのはどうなのかしら？」

「夢、なのでしょね。手っ取り早く欲を満たすものとしては、なかなか手軽そうよ。」

私としては、変わった魔法の再現が面白そうだと感じたけれど」

「技術者の視点？」

「魔法技術が無いはずの世界で、これほど多様な技術が空想で生み出されている……いえ、技術が無いからこそね。」

この世界では駆動炉の様に規模の大きな研究は出来そうにないし、風変わりな技術の研究に鞍替えしてみようかしら」

「面白そうね。エヴァさんも似た事に興味を持っていそうだし、いいんじゃないかしら」

「だけど、これは……オタク、と言ったかしら。」

「そんな世界に踏み込むことになるけど、いいのかしらね？」

◆◆ 八神家の団欒 in 別荘のお風呂(A&S編12. 5話)

◆◆

「おー、何か、物凄く広いお風呂や。前に行った温泉旅館の何倍くらい

「やろ？」

八神家一行を別荘に招待し、軽く手合わせした後。

全員で、熱海にある大浴場へとやってきた。

今はまだ全員服を着た状態で、入り口から中を覗いてる。お姉様も大人モードのままだし。

「従者達の趣味で、だいぶ拡張してあるからな。

いくら趣味でも、ウォーターライダーまで作るのはどうかと思うが……」

「でも、面白そーだし、何かキレーだ。

ザファイーラが行ってる男風呂の方も、似たようなもんなのか？」

「いや、こっちの方がだいぶ凝っているらしい。

プールはあっちの方が広いらしいがな」

八神ヴィータの疑問に正確に答えると、ステンドグラス、流れるプール、香り等を付けた変わり風呂各種は、女風呂にしかない。

その代わり、一つ一つは男風呂の方が大きい。男風呂にしかないのは、タイルの壁画。ちなみに絵柄は富士山。

「ここなら、魔法を使っても問題無いですし。

はやてちゃんも、いつもより楽に入れますよね」

「そっか、浮かべてもらえばいいんやね。

さつき訓練してたところはちよつと砂っぽかったし、早く入ろ？」

というわけで、全員脱衣。

八神はやてはリルに手伝ってもらってたけど。

「ええなあ、見た目は私よりちっちゃいのおっきいし」

その手が、胸に伸びてる。

八神はやてより小さいのは、身長。大きいのは、お察し下さい。

「小さいとか言うもんじゃねーよ」

八神ヴィータが小言を言ってるのは、きつとリルとほぼ同じ身長だから。

同類意識が生まれてもおかしくない。

「私は気にしません。子供のする事ですし」

「子供……うー、私ってやっぱり子供なんか？」

「約2500歳の私共と比べたら、ヴィータさんも含めて子供と呼んで差し支えないと思います」

「アタシもかよ。」

「てか、見た目だけこつちに……って、オメーらもアタシよりちよつと高いのかよ」

軽く流してゐるリルやちよつとへこんだ八神はやて。

八神ヴィータは、幼女モードに戻ったお姉様と八神チャチャをジト目で見てゐる。

「こつちが本来の姿だからな。」

まあ、私は10歳相当、チャチャは9歳相当だから、8歳相当のお前より背があるのは諦めろ。

むしろ、9歳で平均身長並みのはやてと同程度で、肉体年齢が同じはずのアコノとは20センチ以上の差がある私だって、身長で悩める仲間だと言えるぞ?」

「多分私は、ここで身長が止まる事を前提に、無理に中学生くらいの体格にされている。」

それに、昔の人のほうが身長は低かったはずだから、当時は普通だった可能性は充分ある」

「同情するなら身長をくれ。」

「てか、大人モードのやり方を教えてくれよ」

「私のは根本的に違うし、お前も普通の人間じゃないからな……使えるか解らんぞ?」

「使えるかどうかは置いて、術式はあるって事だし、試せなくはないんだよな?」

「まあ、無いわけではないが……教えるのは構わんが、期待するなよ」

「マジか! 言ってみるもんだ。」

出来ればでいいから、教えてくれ」

「まあ、そのうちにな。」

今はお前達のデバイスを改造出来ないから、補助が必要なら別でデバイスを持つか、夜天を戻してからにしてくれ」

「おう。楽しみにしてるぜ」

そんな事を話しながら、全員お風呂の方へ。

八神はやては八神シヤマルに、主はいつの間にか現れてたチャチャマルに抱き抱えられてる。

リルは服の洗濯だから入ってこない。魔法も使えば、出るまでに充分に合う。

「それにしても、子供の姿だと少々違和感があるな。

負荷があると言っていたが、普段は大人の姿ばかりだ。それを基本となるよう改変するわけにはいかないのか？」

体を洗いながら、八神シグナムが隣にいるお姉様に訪ねてる。

お姉様は原則として主以外の誰かと会う時は大人の姿になってるから、こんな大勢の前で長い時間幼女モードになるのは久しぶり。

普段はほぼ同じ目線なのに、今は八神ウィータを見るのに近い状態で見下ろす形になってるから、すこし戸惑ってる模様。

「少なくとも、今はそんな余裕は無いな。それに、私の基礎構造は夜天よりも面倒で複雑だ。保険も無い以上、迂闊に手を出せん。

それに……私には人間だった頃の記憶もあるが、何故か男だったらしい。男に言い寄られるような姿を本当の姿とするのは、少しな」

「男だった、か。

「ここは女性用だが、良いのか？」

「体は女で、男だった記憶以上の年月を女として過ごしているからな。肉体年齢的にも性的な欲は無いようだし、私の影響下で不老になった者は生殖能力を失い、性欲も無くなっていくらしい。どの影響が大きかったのか解らんが、もはや男としては枯れ果てているよ。

揉み魔のはやてもいるんだ、少々視線が行く事ぐらいは構わんだらう」

「確かに、既に全員揉まれてるな。私達も裸を見られて動揺するよ。うな過去を送っていないから、問題は無いが。

だが、枯れていても姿を変える事に思う所はあるのか」

「気恥かしさだけは、何故かあるんだ。人間の頃の記憶が女なら、むしろ美人になるんだから喜べたのだろうな。魔導具となった時点で大人だったなら、否応無しに慣れられたのかもしれない。

対外的や法的な問題が無ければ、こつちの姿の方が気楽になってしまっているし……今更変えるのもな。魔法が一般的な世界なら、無理に大人の姿になる必要も無いだろう?」

「結局は、この姿に愛着があるという事。」

私もこつちに慣れていているし、抱き枕にも丁度良さそうだから問題無い」

主が、後ろからお姉様に抱き着いてきた。

魔法で浮かんでるから、体重は全然かかってないけど。

「……せめて、タオルか何かを巻く気は?」

「無い。えーと、当ててんよ?」

「無理に関西弁っぽくするな。というか、今の私は女だぞ?」

「男性の感性が基本だと聞いているし、ハーレムや恋愛がメインの話では喜ばれる行為のはず。」

それに、エヴァは私ので、私はエヴァのもの。問題無い」

「いや、あるだろう。」

そもそも、私に男を見るなら羞恥心くらいは覚えろ」

「それは確かに。アコノ、おぼえた。」

じゃあ、先に入ってる」

主はあっさりお姉様から離れると、ふわふわ浮かびながら柚子風呂に向かった。

チャチャマルは軽く頭を下げ、その後を付いてく。

「やってる事はバカップルみたいやけど、何か色気が無いなあ。」

男やったら、もつとぎゅーつとやね。多分、こんな感じや」

入れ替わるように、八神はやてが登場。

こちらも洗い終わってて、八神シャマルにお姫様だっこされつつ、しがみ付いている。

抱き付くと言うには、体格差的に微妙過ぎた。

「感性の基本は男だが、体やらは女だ。」

私は、男も女も愛せんよ」

「なんか、それも寂しい話やね。」

性別を超えた愛つてのも世の中にはあるみたいやけど、その辺はど

うなん?」

「存在するかどうかと、私が受け入れられるかどうかは別だ。

それに、アコノは恋人よりも妹や娘に感覚が近い気がする。家族愛的なものならあると言っても構わんぞ」

「なんや、お姉ちゃんとお姉ちゃんは、やっぱり普通に姉妹なんか?」

姉妹制度的な何かは無いんか?」

「何を期待してるんだか。元々の面倒を見るとかいう意味でならともかく、恋愛の要素は無いぞ。」

それに、同性を3人侍らせているお前は人の事を言えんぞ」

「それもそうやね。」

でも、みんなちよつと遠慮がちと言うか……どう扱ったらいいか解らへんのかな。私だけやなくて、エヴァさん達にもそうやし。

シグナム、その辺はどうなん?」

「はい。騎士としては、お2人とも上位の方として扱うべきです。

しかし、家族としての扱いを望んでおられますし、本来はそうすべきですが、この世界での家族がどの様なものか、未だ理解出来ておりません」

「また敬語になつとるよ。」

「シヤマルはどうや?」

「家族としても、特にエヴァさんの位置付けが難しいです。

あの子……管制人格の妹で。はやてちゃんのお姉さんで、保護者で。普段は私と変わらない年齢で。本来ははやてちゃんよりちよつと上くらいの姿で」

「だから、基本的に対等でいいと言っているだろうに。」

「少なくとも設定年齢が20前後のお前達は、それが一番自然だ」

「そうなんですけど……」

「親戚設定だが、親密だったとは言えない程度の付き合いという事になってるし、その辺は追々慣れて行けばいいさ。」

「ところではやて、管制人格の名前は決まったのか?」

「うん。私を支えてくれる人やから、色々調べたりしてな。リインフォース、って決めたんよ」

「……やはり、その名になったのか」

「ん？ 原作つてのと同じ名前なんか？」

「そうだな。良い名だし、文句があるわけでは無いんだ。

ただ、直接手を出さなければ同じ結果になるんだな、と思ってな」

「そっか。あ、夜天さんにはまだ秘密な？」

「私から言いたいんよ」

「まだ目覚めていないようだし、誰かが口を滑らせない限り大丈夫だろう。」

闇の書の記録として知られる可能性もあるが……まあ、その場合は諦めろ」

「でも、直接言うのは私や。」

「エヴァさんにも譲らへんよっ。」

「譲らなくていい。むしろ、誰にも譲るなよっ。」

A☒S編13話 遠い世界へ

あれから1週間とちよつと。具体的には月曜日。

お姉様はこの間に蒐集用のデバイスを用意。色は黒を基本とする。

両刃の片手半剣を基本に、連結刃、バトルライフルの形態も持つレーベレヒト。

頭部が大きい目の戦槌で、普段から一方がドリル状になってる、ヴェルヘルム。当然、巨大化もロケット化も併用可能で実装済み。

トンファーに似た形状の、ゲオルクティール。探知系を超強化、最大限に発揮させるときはダウジングのスタイルで。近接用に蹴りの補助も強化してある。

守護騎士3人が使ってたデバイスの使用感や魔法をそこそこ再現しつつ、闇の書の蒐集を加速するための補助機能も追加したもの。

しかも、ベルカ式の使用感で表面的にミッドチルダ式を再現。近代ベルカ式の逆になるはずの、トンデモ仕様。用意してある魔法しか補助出来ないし、偽装処理もあって負荷が少々高めになってる上に、カートリッジは搭載してるけど原則不可としてあるから出力は落ちる。でも、その辺は技術でカバー出来ると信じたし、闇の書やお姉様との関連を匂わせない為にはとても有効なはず。

活動する際は髪の色を黒く変えて、騎士甲冑も黒を基本としてある。顔をマスクやバイザー等で隠したりもしてるし、軽く認識障害もしてある。

この黒い騎士甲冑も、八神はやてがノリノリでデザインしてた。イメージを変えるためか、どこかの狩人さんのゲーム的だったりするけど、実用上問題無し。乗り過ぎて変身のポーズまで考案してたけど、素顔を晒せないという理由で却下されて凹んだ。

ちなみに、レイア、ザザミ、ベリオXに似てる。何がとは言わない。お姉様に麒麟を没にされて残念がってたとも言わない。

ついでに黒で統一という事で、呼称は黒の騎士団に。クロノ・ハラオウンが日本語を学ぶと悶えるかもしれない弄りネタ。いつ気付く

か楽しみ。

八神ヴィータに関しては、大人モード自体は適用不可が確定したけど、幻術等を組み合わせた魔法先生ネギま方式に近い年齢詐称モードをヴィルヘルムに実装。18歳相当151cmという守護騎士の妹ポジションを維持したような疑似大人モードが実現して、それでも予想以上に喜ばれた。

お姉様の変形が時間超過した場合のために準備した年齢詐称術式が役に立った。

ちなみに、髪はショートヘア。100tの刻印がお姉様に阻止されたのは心残り。

これに慣れる必要がある為、守護騎士達はゆっくりと蒐集を行っている。現在はミッドチルダで動いてるから、早速、時空管理局地上本部の上の方には疎まれ始めた。

とはいえ、現場に近い局員の心象はさほど悪くないし、即座に排除しようという動きも無い。知名度のある凶悪犯罪者を優先しつつ、ミッドチルダの陸上警備隊や首都航空隊を助けたりしてるのが功を奏してる。

黒の騎士団を義賊として報道に乗せられた事も効果を発揮してる。記者やライターの従属属性使い魔化おいしいです。お姉様には言えないけど、元々捜査網作りで使い魔を活用してるから、その延長上の作業。ばれてない。

捜査網をより広げるために、私達の増員もお姉様に申請。

無事、許可された。

早速増員を開始、今回は2か月かけて2倍にする方針。

これが完了したら、2万人。元ネタ的に追い付くけど、特に感慨深くは無い。

地球と言うか、日本の状況は平和なもの。

危険物系転生者の動きは無く、協力的な魔導師達の訓練も順調。

ギル・グレアム関連、要するに書類の返却やらも問題無く完了し、余計な手出しもされてない。

「ど、どうしよー、助けてアリサちゃん！」

「最近魔法の練習はつきりやって、勉強してなかったからでしょ。元々、社会は点数良くなかったんだし」

高町なのはが騒いでアリサ・バニングスに窘められてるけど、勉強を強制する気が無いお姉様的には問題無い。

でも、当人的には抜打ちテストの点数が大問題だったらしい。家族である高町家の人達にも問題だと捉えられた。というわけで。

「今日は、魔法の練習はお休みにしなさい。勉強会するわよ！」

「頑張つて、なのはちゃん」

「ふえええええ!？」

「アンタが勉強しなきゃ、どうにもならないでしょー！」

という流れに。

纏めると、高町なのはの勉強不足が発覚し、アリサ・バニングスと月村すずかの監修の下で勉強をするという事。

場所は高町家、高町なのはの部屋。講師役兼監視役として同級生二人と、そして。

「シクシクシクシク……」

半泣きを通り越して、マジ泣きしながら宿題をしてる夜月ツバサがいる。

ここしばらく高町家道場に入り浸りすぎ、宿題をサボり過ぎて怒られたらしい。しかも、社会については前世と微妙な差があつて混乱しがちな上に8年程のずれのせいで、油断すると所謂赤点転落の危機というオマケ付き。

それでも道場に來たのは、魔法の掛け直しのため。勉強会をしていと聞いて、掛け直し後に会場に転がり込んできた。

「前世の知識とかがあつても、それに足を引っ張られるって情けない話よね」

「国語も、有名な作品名や作者の一部は駄目なんだよね？」

「もうちよつとで成立年の明記が無くなるはずなのに、何で11192年になってるのよう……人の名前も部分的に違うし、誰よ宮沢賢一と宮沢喜治つて……秀吉が性別不明で秀頼が養子で、信長と光秀が取り

合ったのが本能寺の変って、いったい誰得で、何で小学校で教えてるのよ……」

成績優秀なアリサ・バニングスと、そこそこの成績ながら基本的な事はきちんと押さえてる月村すずかの同情的な視線を浴びながら、同じ小学校3年生の夜月ツバサは唸ってる。

前世の知識やらが入り混じって、めっちゃ混乱してる。それに比べたら。

「うー、大泉純太郎って誰だっけ……」

「ほら、感動した、って言葉が有名な人だよ」

「ふえ？ 作家さん？」

「アンタは論外だわ」

うん、アリサ・バニングスに全面的に同意。

やたら名前が売れてる現職総理大臣の名前が出ないのは、どう考えても論外。

「やれやれ。特技を磨くなどは言わんが、一般常識くらいは把握しておいた方がいいぞ？」

馬鹿にされる大人になりたいなら別に構わんが」

アースラの現地拠点から、大人モードのお姉様が到着。

ここしばらくはお姉様もミッドチルダ式の魔法を教えてもらってるから、よく顔を出しに行ってる。水準が違い過ぎる馬場鹿乃が来たから、お姉様は退席してきた。

「じゃ、じゃあエヴァちゃん、大泉純太郎って誰？」

「政治家だな。過去には厚生大臣や郵政大臣もやっている。

ここまで言っただけ今の立場が想像出来なかったら……どうしてくれるよう」

「にや!? フエ、フエイトちゃんのカンテオレター!」

高町なのはの目が点になりつつ、お姉様を取り出した封筒に釘付けになってる。

なのはちゃんの所に行くならと、エイミー・リミエツタから預かった物。

封筒をゆつくり動かすと目が追ってくるあたり、他の事が頭から完

全に抜けてる模様。

「やはり駄目だな。アリサ、これを持っていてくれ。

きちんと勉強した後にも渡してやるといい」

「ひ、ひどいよっ！」

「何がよ。今は勉強する時間でしょ」

「そうだな。フェイトなど資格試験の勉強中で、落ちるわけにいかないと必死だぞ。それに比べれば、学校の勉強など優しいものだろう？

というわけで、問題無いと認められる程度になるまではお預けだ」

「もうちよつと頑張つて、なのはちゃん」

「ふええええ」

お姉様から封筒を受け取りつつ、ちよつと冷たい目を高町なのはに向けてるアリサ・バニングス。

月村すずかが励ましてるけど、その程度じゃ浮上できない模様。

「フェイトが日本に来た時、こっちの常識やらを一番近い立場で教えられるのはお前達なんだぞ。

このままだとその役目はアリサの独壇場、もしくはアリサとすずか優位になるのは確定的なんだが、それでいいのか？」

「う……が、がんばる！」

一本釣り成功。

高町なのはが単純な思考で良かった。

緊急報告。金子狗太の生命反応が消失、現在マーカーを追跡中。

(殺されたのか?)

隠蔽処理されて連れ去られてる模様。

個人転送で次元世界を渡ってる。転送の隠蔽処理もかなり高いレベル。

恐らくアースラは見失ってる。

(とりあえず他の連中の護衛及び監視を強化、警戒対象なら追跡優先で保護は2の次だ。

下手人が誰で、どこに向かっているか解るか?)

ミッドチルダ方面だけど、行先を確定するにはまだ早い。

誰かも不明。まだ光学系で捉えられてないし、微かに感知出来た魔

力反応もなんだかおかしい。

人じゃない可能性が、割と高い。

(となると、心当たりはスカリエッツィの戦闘機人か……?)

拠点を探れるかもしれない。見付からない様にな

了解。

ミッドチルダの少し先くらいまでは、犯罪者の捜査網があるから追跡可能。

この範囲に隠れ家がある事を希望。



そして、夜。金子狗太、杉並英春に続き、恐らく最後で3人目のギル・ガームスが、収容先に到着した。

場所は、ミッドチルダの山中にある地下施設。

連れ去ったのはクアットロ。ステルス性能的に、時空管理局の設備では追跡出来ないはず。

3人の前にジェイル・スカリエッツィが現れたと思ったのですが、どう見ても変態博士です。

「東には接触が無かったのか？」

接触はあった。魔力探知系は誤魔化されたけど光学系と音響系で捉えてるから、間違いない。

東渚は、操り人形になる気は無いと明確に拒否。戦闘態勢に入ったため、クアットロが逃亡。

「正しい判断だろうな。既にレリックが見付かっていれば、いい実験材料だろう。」

だが、スカリエッツィに原作や転生に関する情報が渡ると考えてよさそうだが……」

日本では夜だし、一度寝てから話を聞くことになってる。

特に金子狗太がチンクを見て鼻の下を伸ばしてたから、多分簡単に喋る。

どこでも、どこまでも、どうなっても、ロリコン。

ちなみに、チンクは眼帯をしてない。見た目は普通の銀髪なおこちやまだった。

「聞かれてまずそうな影響は……プレシアへの横槍と、グレアムの立場が危なくなるくらいか？」

あの3人なら私は知られていないはずだし、今後知られたとしても、転生者だと勘違いされた方が夜天関係者だと思われにくくはなりそう。

闇の書に手を……出してくる可能性は否定出来んか」

お姉様や主に関しては、大丈夫なはず。情報攪乱という意味ではない働きをしてくれると予想。

必要なら処分する事は可能。監禁場所の警備システムはさほど厳重じゃない。

プレシア・テスタロッサについては原作情報を踏まえた上で、見た目は引き下がる方向で動いてる。元々関係者だから、原作知識を知られたからと言って大きく変わる事は無さそう。

ギル・グレアムは裏で闇の書に関わっていた事が知られる。でも、組織が動いてる事を考えると、最高評議会やジェイル・スカリエツティに知られてないとは考えにくい。

八神はやては、既にお姉様の保護下。当面は泳がせて色々探る方向が無難？

その上で、出された手を食い千切る準備を推奨。

「そうだな。スカリエツティなら犯罪者の伝手も多いかもしれないし、当面は情報源と情報攪乱のために役立つてもらおう。」

そのうちジュエルシードにも手を出すはずだからそれを奪うのもいいし、黒の騎士団からの情報という形でクロノに捕縛させるのもありだな。少しクロノに箔を付けた方が交渉で有利になりやすいだろうし、黒の騎士団の売名にもなるだろう。

ついでに連中纏めて強制蒐集もアリか？ 王の財宝や金の変換資質は脅威にならんだろうし」

この辺は、残りの特典次第。

ジェイル・スカリエツティや戦闘機人の魔力量はそれほどでもない

から、蒐集的是それほど美味しくない。

情報が渡る事自体は問題だけど、ぺらぺらと喋る可能性が高いから、監視は強めで継続。

成瀬カイゼから通信。転生者3人の移動に気付いた模様。

「状況と、現状では監視のみで手出し不要という事は伝えておいてくれ。

あとは……状況によってはクロノ辺りをせっついて動いてもらう可能性が出てきた事くらいか」

他に状況を伝える人は？

「二応、リンデイとエイミーには伝えておくべきか？ 監視対象のロストだ、気付いていないとは思いいくないが、念のためだな。エイミーにはスカリエツテイの名前は出さず、誰かが個人転送で攫っていったぐらいの方が良さそうだな。

後は……まあ、協力者たち全員に、エイミーと同じレベルの話はしておくか。警戒対象のロストと、別の警戒が必要な相手のお出まじだ。情報が無いよりはいいだろう」
了解。



一方その頃、長宗我部千晴の自室では。

「……マジ？」

「ええ、大真面目な話で御座います」

チクアーブが、長宗我部千晴と話をしてる。

危険人物がジェイル・スカリエツテイに攫われたからある意味で安全に、ある意味で危険になったという事は、ふーんという感じでものすごく軽く流されて。

驚かされてるのは、チクアーブの特性についての話。

「……で、何で私なんだよ？」

「それはもちろん、適性が高そうだと思えたからで御座います。

いやはや、我等が最初に出会えたのは、偶然だけではないという事

で御座いますな」

「偶然の方がいいよ。てか、そもそもが勘違いだと言ってくれ、頼むから」

問題の特性と言うのは、要するにチクアーブのユニゾン能力。

色々試した結果、要するに超広い意味でのユニゾンデバイスであり、コンピュータとユニゾンするような形で内部へ侵入していると判断出来たチクアーブ。

では人はどうだと周囲を見た時、長宗我部千晴との相性が良さそうだ、と思っただけ。

電子部品やデバイスと高い適合性を見せる代わりに生物との適合性が低いのか、他の人物とはあまり相性が良さそうだと思えなかったとの事。

「では、必然という名の偶然という事に致しましょう。」

つまり、この地に高町なのは嬢と八神はやて嬢がいて、レイジングハートや闇の書と出会った事と同じで御座いますな」

「うっわ、嬉しくねえ」

長宗我部千晴は、本気で嫌そうにしてる。

本来は魔法や原作と距離を置きたいという立場を取ってたし、ユニゾン可能だと言われても嬉しくないのは解る。

でも。

「好奇心が止まらない、で御座います。それでは失礼いたしますぞ」

「うわ、くんな！ 来るんじゃないー！」

逃げようとする長宗我部千晴に襲いかかるチクアーブ。

字面は犯罪的なのに、ネズミに襲われて逃げ惑ってる猟奇的な場面にしか見えない。

そうしているうちに、チクアーブは長宗我部千晴の中に入っていた。

「ちよ、ちよつと……くつ、な、何だよこの異物か、んあつ!？」

(おお、ヒトの中というのは温かいで御座いますな)

やっぱり犯罪臭しかないけど、ユニゾンは問題無さそう。

長宗我部千晴の外見が変わって、髪が銀色になった。

これ以外は、チクアープが調整。バリアジャケットを展開した状態になり、服装やらも変わった。

(成功で御座います。いい感じに仕上がった自信が溢れそうですぞ)
「て、てめえ……訴えるぞ、エヴァ様に泣きながら」

むしろ、既に半泣き。

これは訴えていいレベル。

(それは困りますな。とりあえず、今の外見の確認をする事をお勧めいたしますぞ)

「外見って……何だコレ!?!」

机の上に合った鏡で自分の姿を確認した長宗我部千晴が叫んでる。

銀色の髪をツインテールにして、白いワイシャツに超濃いグレーのネクタイ、黄緑色のベスト、ネクタイと同じ色のミニスカートを着るのは、だいたいチクアープのせい。

(電子で妖精と言ったら、やはりこれで御座いましょう)

「いったいどこのリルリルなアニメキャラだよ！　ってか何をやってんだこのオタク！」

(いやいや、理解出来ている時点で同類で御座いますよ。

それでは次の検証で御座います。参りましょう)

「参るってどこにだあああああ!?!」

長宗我部千晴の姿が、パソコンに吸い込まれるように消えた。

ユニゾン時は、長宗我部千晴も入っていきけるらしい。

えーと、流石電子の妖精とか言っておくべきなのかもしれない。

A S編14話 遠い世界で

「……で、千晴を虐めた結果がコレか？」

「予想以上に優秀で御座いましたな。まさか、ここまで行けるとは予想外で御座いました」

翌朝、お姉様のいる部屋に現れたチクアープ。

提出してきたのは、ジェイル・スカリエツテイの研究所のほぼ全容と研究資料。関係のある犯罪者の情報もある。長宗我部千晴とユニゾンした場合の能力検証のついでに、ミッドチルダまで行ってきたらしい。

おまけで、聖王のゆりかごの現状も判明。状態はさほど悪くないけど、聖王不在により起動出来ない模様。聖遺物がまだ盗まれてない事も確認出来た。

「全く……普通なら淫行罪で潰すところだが」

「ネズミの姿では雄であるという構造上の証明は御座いませんから、潰されるところは生命しか御座いませんな。必要であれば、該当部分のある人の姿となりましょう。

可能な間に報告を致しますが、千晴嬢の能力は予想以上で御座います。自由にコンピュータを使えるという転生特典によるものと思われませんが、認証や権限制御を踏み倒す効果を発揮しておりました。

デバイスには無力の様ですので闇の書対策に直接役立つ力では御座いませんが、魔力探知に捕まらない能力はそのまま御座いましたから、情報収集能力では間違いなく群を抜いております。

それと、内部から観察したところ、恐らく魔力量はA相当だと思われるますぞ」

該当箇所つて、要するにショック死し得るアレ？

遠慮なくぶちつとやるのに一票。

長宗我部千晴の魔力量は使用魔力からの推測通りだから、目新しくないし。

「ふう……千晴には話しておくから、情報収集に手を借りれるなら、借りていい。

但し、強要は禁止だ。報告を聞く限り、初回のアレは今後一切拒絶されても文句を言えんぞ」

「ええ、少々ウキウキと浮かれすぎて、やってしまいました。」

今は海よりも深く反省しております」

「やれやれ、今は人外でも、せめて前世の分くらいのデリカシーは持つておけ。」

孤独が好きなわけでもないんだろう？」

「それはもう。その為にも、ペンチを持参して参った次第で御座います」

「……何をどう潰される気で来たんだ。それをするくらいなら、魔法弾で撃ち抜くぞ。」

とにかく、今日の夕方にも話をしておくから、接触は明日以降にしておけ。それまでに接触したり、強要したりした場合は本気で撃ち抜く。

いいな？」

「了解で御座います。それでは、今日明日は管理局の情報調査に邁進致しましょう。」

それでは失礼いたしますぞ」

半ば逃げるように、チクアープは部屋にあったパソコンへと消えた。

この部屋にパソコンがあるのは、ほぼ電子精霊用。直接使う事は、誰かが来てる時の調べもの程度でしかない。

「やれやれ、人外だからと言ってアレは無いだろうに」

「妹達の説明の仕方も悪い気はする。」

声を聞く限り、そういう現場にしか聞こえないのは確かだけれど」
お姉様のぼやきに、今まで黙ってた主が答える。

ここは八神家の、主とお姉様の部屋。ダブルベッドが置いてあるけど、普段使うのは主のみ。お姉様は泣いた時以来やっぱり寝てない。ちなみに部屋割りは、八神はやと八神ヴィータ、八神シグナムと八神シャマルの組み合わせ。

あと2部屋使えるけど、何故かこの3組という形で落ち着いた。

「だがまあ……いくら2人分の特典の合わせ技といっても、随分とぶっ飛んだ能力になるな。」

デバイスには無力と言っても、コンピュータとの境界は曖昧だ。それ次第では、一部のデバイスや魔導具も対象に出来そうだが」

「組み合わせて完成するという事なら、私達も似たようなもの。あり得ないわけじゃない。」

それに、コンピュータ相手の情報収集としては確かに強力だけど、紙の資料には無力。この辺は電子精霊と変わらない」

「そうだな。今回で千晴が拗ねなければいいが……」

「一応女性として許せない？」

「いや、元男として許せん。無理矢理襲うのは最低だ」

その辺は同意。

ジェイル・スカリエツィの隠れ家に、ちよつと動きがあった。

具体的には、お話が終了。

「誰かがべらべらと喋ったか？」

多く喋ったのは金子狗太。視線はチンクに固定、とても解りやすい。

内容は無印とA×Sの範囲。Strickersに関しては知識が無いか、喋る気が無い模様。

能力についてはぼかしてたつもりみただけど、眩きなども含めて考えると、強大な魔力、黄金律、ハーレム体質の3つの模様。

「魔力は確かに多いな。黄金律が金への変換資質か……。」

ハーレム体質？」

「確か、雌犬とか叫んでいたはず。」

監禁場所に犬が多かったことを考えると、雌の犬に好かれる体質になった可能性があるかも」

「そうなるよ、アルフを近付けるのは危険か？」

だが、蒐集にそれが含まれてたとしても、アルフを戦力外にするだけでSランクの魔力の蒐集が可能か。悪くはないな」

金子狗太を蒐集候補と認識。

杉並英春はあまり喋ってない。発言もはぐらそうとはしてるけど、

Strikeも少しは知ってるような感じ。体が動かない何を何とかする事と引き換えに協力するという感じで決着。

体が動かないと何も出来ないという感じで、レリックウエポン化を本気で検討してそう。能力としては、高い魔力と剣術の才能は言明。偉くなりたかつたとも言ってたけど、これの効果が予想不能。

「体が動かないのに剣術の才能、か？」

それを悲観して自ら実験台になるか。気持ちは解らんでもないが……」

「相手が悪い。でも、こうなってるのは特典の影響の可能性？」

「どうだろうな。一応嘘になっていないという原則から外れているようにも見えるが。」

言葉遊びをするなら「えらい」を大阪弁で解釈して……どう考えても無理があるな」

「疲れたと言うには、身体能力の低さは異常。」

保留にすべき？」

「うーん……蒐集して問題となる様な能力ではなさそうだ、とは言えるんだがな。」

「防衛プログラムの巨体で剣術は意味が無いだろうし」

「なら、要観察だけど、蒐集候補には挙げておく？」

「そうだな」

杉並英春も蒐集候補に。

ギル・ガームスは、逃亡生活を何とかしたかっただけに見える。

どうせ犯罪者だから宿と飯の分くらいは働く、と言ってた。

働くためにデバイスを要求する辺り、3人の中では一番まともな思考にも思える。

能力の説明は、多い魔力、所有物の召喚、笑顔で惚れさせる能力。要するにニコポだけど、戦闘機人にも効果は発揮してない模様。

「ふむ……やはり蒐集可能か。ニコポが問題になりかねんが……イマジンブレイカーか東の特典破壊が解析出来ればいいんだがな」

ジュエルシードからの解析は、やはり困難。現状では手掛りなし。

東の特典破壊も、夜月ツバサが読み取った情報では1回限り。

過剰な期待は禁物。

「だけど、大きな魔力を要求すると、性格か思考がおかしくなる？」

少なくとも、スカリエッティに攫われた3人に共通している」

「こいつらの要求の内容だけ見ればそうだが……どうなんだろうな。チクアーブも魔力を要求しているし、カイゼやアコノも間接的だが要求しているようなものだ。そうだと同意はしかねるぞ。」

それに現時点の魔力量で言えば、直接は魔力を要求していない私、変態、アコノがトップ3だ。

行動がおかしかった下出は、確かBくらいだったか？ 割と少なめだったはずだ。それに、カイゼが殺した2人も少なめだったな？」

残留していた魔力量から考えて、多くてもA。恐らくB前後と予想。

今でも引き籠もってる間宮萬太はDくらい。確認済みの転生者の中で1番少ない。

「となると、魔力量と性格の関連は薄そう。残念」

「だが、今まで異常思考を維持している連中が特典で魔力を要求しているのは確かだ。」

何かあるかもしれんが、情報不足だな。検証自体が不可能な気はするが」

当面は、調査を継続。

考察の時間はいっぱいある。検証は気長に。

「それで、闇の書関連の情報がスカリエッティに渡ったが……」

その様子だと、反応は薄かったか？」

管理外世界で見付かった事までは知ってた。

技術的興味はあっても、生命操作という観点では微妙と思われる。守護騎士は疑似生命体だから、生命操作の本筋とは少々離れると思われる。あくまでも人間を本体としたらしい。

局員や魔力を持つ生物が襲われる事についても、興味なし。

黒の騎士団と関連付けする様子も無かった。

「予防線は張っているし、最高評議会に売るとも思えん。

当面は問題なさそうだな」



この半日後。時空管理局の本局では、成瀬カイゼとセツナ・チェブ
ルーがカリム・グラシアとお茶を飲んだ。

ちよつとした打ち合わせのための会議室に、3人だけがいる。
シャツハ・ヌエラは入り口の外で番人状態。

「そうですか、限定的な未来の情報とは……また、扱いにくそうなもの
ですね」

「そうだね。だけど、カリムさんの能力がそれなりに有効らしいとは
聞いているよ」

「古い言葉の予言で、解説に時間がかかるんですよね？」

話の内容は、要するに原作知識を元にした未来の情報。ロストロギ
アの影響で知った未来情報の様な物として紹介。

予言能力に目覚めてるカリム・グラシア相手だから、あり得ないと
流されることは無い。

相変わらずセツナ・チェブルーの首が傾いてるけど。

「ええ。確かにそうなのですけれど、それも未来の情報として？」

「概ね10年くらい先の情報として得られた話だね。」

但し、現時点でいくつもの相違点が見付かっているし、違う結末を
目指す動きもあるから、そうなるとはとても思えない。出来事として
は信じられない物になってしまっているよ」

成瀬カイゼは肩をすぼめてる。前提、つまり八神はやて、高町なの
は、フェイト・テストロッサの時空管理局入りとミッドチルダ移住と
か、色々と変化する可能性が高い。

表向きには、プレシア・テストロッサの行動理由も違うという事にな
ってるし、守護騎士も実在の人物に似た人がいるという事になって
るから、ものすごく間違った情報に見えるし。

現実としても、少なくともフェイト・T・ハラオウンになる事は無
いし、夜天の消滅はさせない。

「それでも、その情報にある人物の能力や、既に作られているはずの物

については、ある程度信用出来る可能性が高いという事ですね？」
「理解が早くて助かるよ。」

聞いた話だと、カリムさんが管理局の崩壊に関する予言をするそうだよ。

既に違う歴史を歩み始めているから同じ事件が起こるとは思えないけど、予言をする人物が目の前にいる以上、その能力は持っているんじゃないかと思っているよ。

扱いとしては良く当たる占い程度、と言っているそうだけどね」
「確かに、予言の能力を使う事は出来ます。」

良く当たる占い、ですか……現状では解析に時間がかかり過ぎるので、後出しの予言書でしかありませんし、解釈によっては適合するといった感じですよ。」

解析が早くなれば、その表現も納得出来ますね」

「というわけで、耳寄りな話が1つと、耳に痛い話が1つあるんだけど、聞く気はあるかい？」

「あの話をしちやうんですか？」

いえ、止められてないですし、大丈夫だとは思いますが」

セツナ・チエブルーはちよつと心配そう。

でも、Strikersに関しては私達が2人に情報を流してる。

おいでませカリム・グラシア。

「シャツハに席を外してもらったのは、聞く人を減らすためですか。」

対価は必要ですか？」

「未来に関する情報を持っている事やその内容を、必要以上に漏らさない事くらいだね。」

後は、内容を理解した上で行動してもらえば、きっと僕達が望む方向に行くと思うよ」

「そうですか。では、両方を聞かせてください」
「解った。」

そうだね、耳に痛い話からしてしまうよ。

恐らくもうすぐ、聖王の聖遺物が盗まれる。10年後の出来事は信じられなくても、前提の変化なしに1年以内の出来事が大きく変わる

と思えないからね」

「聖遺物が!? どうしてそんな事が!」

「名前は解らないけど、管理を行っている司祭が聖骸布に手を出すそ
うだ。」

裏にはジェイル・スカリエッティという次元犯罪者がいる。実際に
広域指名手配されている人物だね」

「そんな……何とかして防がなくては!」

「動くときは気を付けた方がいい。身分的に、疑う相手の方が圧倒的
に上だからね」

「調査で気を使うのは当然です。ですが、黙って見ているわけにはま
いりません!」

「まあまあ、今すぐ何か起こると言うわけじゃないはずですよ」

「事を荒立てて余計な波風を立てるより、現場を押さええるか、事後の迅
速な対応をした方がいい。」

まだ教会の内部で力を振るえる立場ではないと聞いているよ」

「それは……そうなのですが」

セツナ・チエブルーと成瀬カイゼに止められて、カリム・グラシア
はちよつと悔しそう。

まだまだ実力も身分も不足してる。無闇に動くのはお勧め出来な
い。

「それに、信用してくれるのは嬉しいけど、信憑性は微妙だよ。」

裏付けのある情報でもないから、冷静さを失わず、勇み足を踏むの
を避けるべきだよ」

「……そうですね。」

犯罪者が関わっているという事は、不自然な人物がいるか、誰かが
取り込まれているか。

まずは、人の動きを注意して見てみましょう」

「ちなみに、司祭が女性に誑かされた結果で、相手は身体検査を欺く能
力持ちだそうだよ。」

最終的には弟君の出番かもしれないね。思考を誤魔化す事は出来
ないだろうし」

「そこまで知られているのですか……」

驚きよりも、ちよつと心配といった表情のカリム・グラシア。

どこまで知られているかと言う話はしてないから、気になってるはず。

「とうわけで、次は耳寄りな話をするよ。」

古代ベルカに詳しい人に心当たりがあるんだけど、会ってみる気はないかい?」

「古代ベルカの研究は聖王教会が最も進んでいるはずですが、どれくらい詳しいのでしょうか?」

「僕達が使っている真正^{エンシエント}古代ベルカ式デバイスの製作者と言えば、予想は出来るんじゃないかな?」

きつと、期待を裏切らない水準だと思うよ。ただ、表に出る気が無いようだから、接触は秘密裏に行つてほしいみたいだね」

「古代ベルカのデバイス製造技術は失われているはずですが、そんな方が……今はどちらに?」

「僕達の出身世界だよ。ただ、僕達も気軽に行き来が出来る身分じゃないから、紹介は少し待ってもらつていいかな」

「囑託魔導師の試験に向けて勉強中という事でしたね。」

ふふ、そういう事ですか。試験そのものを手伝うことは出来ませんが、準備についてはこれまで以上に力となりましょう」

「それはありがたいね。出来れば早く故郷に帰りたいという気持ちはあるんだ」

「そうですか。セツナさんも?」

「はい。お世話になった人とか、馴染みのある文化とか。」

やっぱり、離れると無性に懐かしく感じます」

「やはり、そうですか。」

早急に合格するためには当人の努力が最も必要です。頑張つて下さいね」

「もちろん。頑張ります」

「当然だね。目標は3か月以内の一発合格だよ」

A S編15話 足下の道標

あれから2週間。八神家は、とても平和に過ごしてる。

八神シグナムと八神ヴィータ、時々八神シャマルが、黒の騎士団として地道に蒐集を続けてる。この活動について、現状では少々遅い以外の問題は出てない。

手が空いている時、八神シグナムは近所の剣道場に顔を出してる。表立って使える剣の技や一般的な動きを見ておく事で、日本での行動水準の判断基準にするためだった。でも、師範に気に入られてしまい、非常勤の講師として誘われてる。

本人は迷ってるけど、八神はやてが表での活動を推奨してるから、きつと受ける事になる。

八神ヴィータは、八神はやてと同じく通信教育。裏側の手を使いつつ義務教育の体裁を整えた上で、土日は公園に遊びに行ってる。

精神年齢のせいとか、子供達とはあまり馴染めてない。でも、お年寄りには人気。アイスクリームを貰ったりして、餌付け……じゃない、可愛がられてる。

八神シャマルは、週に何回か翠屋でウエイトレスをしてる。

一度料理もさせてみたけど、料理を作る際は余計な物、具体的には野菜の皮やレシピに無いものを入れたい衝動に駆られたり、塩以外の調味料類を必要以上に節約したりするという悪癖が発覚。それが何とかなるまでは、店での料理は不可と言う結論に達した。

「魂が叫ぶんです。これを入れた方が元気になれる、これは残した方がいい、って……」

という本人の告白通り、栄養面だけで考えれば納得出来る選択や、材料……主に調味料を限界まで有効利用しようとするからと思えるため、過去の境遇を考えると有効な能力だったと思えなくはない。特製おかゆは、味はともかく栄養面はかなり良かったし。

だけど、日本での味覚や食感的には大問題。

日本で料理するならもうちよつと考えるべきという事で、八神はやてや八神チャチャが先生となって、料理の練習を開始してる。

ザフィーラは、八神はやての傍を離れない。

ギル・グレアムを抑えたと言っても他の組織等が来ない保証は無いし、ペットの子犬という立ち位置から見ても無難な選択。

八神はやては学校への編入を画策してるけど、八神ヴィータが通信教育をしてる言い訳でもあるから、闇の書が何とかなるまでという条件で自重中。

別荘で主が魔法を練習している姿を見て羨ましそうにしてたりもするけど、負荷を考えると当分は使用不可。もうしばらくは我慢の生活が続く。

主は、平常運転。学校にも行ってるし、魔法の練習もしてる。

家族と触れ合う時間は増加。私達が直接手出し出来る環境になった事もあって、いつもジャージ姿という状況ではなくなった。

とりあえず小野家の元両親に写真を送ったら、物凄く感激された。長宗我部千晴は、お姉様が直接行って話をした上に、チクアーブがパンチを持参して全力で謝ったため、とりあえず許すという事になった。

「こちらを使って頂いて、捻り潰される覚悟も出来ております」

「人になるんじゃないよー！ 脱ぐな！ 脱ぐんじゃない!!」

とかいう会話が謝罪の際にあったのは、愛嬌としておく。

そしてお姉様は今、高町家の道場にいる。

この場にいるのはお姉様と高町恭也の2人だけ。お姉様の手には木刀に見える物がある。

「つまり、俺達でも魔法を使える可能性がある、という事か」

「そうだ。少なくとも、私の従者での検証実験は概ね成功している。

だが、従者達は元々ある程度は魔法を使えていた者が多くてな。そうでない者も日常的に魔法に関わっているから、魔法に対する感覚がある程度養われた状態なんだ。

魔法に殆ど関わっていない人物がどの程度で扱えるようになるのか、躓くとしたらどこか。私想知道いのはそういう点だ。

協力に対する謝礼としては、魔法の指導と必要な物の供給を考えて

いる。もちろん、習得した技術は回収出来ないし、供給は調査が終わった後も続けるつもりだ」

「扱えない事は想定していない、という事でいいのか？」

普通は想定するはずの事をしてないせいかな、高町恭也が不思議そう。

「だけど、素質は充分なはず。」

「必要な素質を考えると、最終的に扱えない事はほぼあり得ないと判断している。」

もちろん、すぐ扱えるとは考えていない。訓練中の翠屋が心配なら労働力も追加で提供するが」

「いや、そこまでは不要だ。」

最後に一つだけ確認しておきたい。これは、なのは達を守る為に使える力か？」

「魔法も技術だ。その意味では剣の技と同じだから、この先は説明するまでも無いだろう？」

なのはは今後も魔法に関わるつもりの様だから、同じ系統の技術を知っておくことにも意味があるはずだ」

「そうだな、知識は重要な力だ」

というわけで、実際に色々試してみたお姉様と高町恭也。

真っ先に躓くのは、魔力の扱い……と思いきや、何となくではあっても気という形で魔力素を扱えていたせいかな、これはとてもあつさりとかクリア。

カートリッジから供給した魔力を保持して防護服に近い鎧を維持するのも、短時間なら成功。魔力切れによる強制解除を考慮して、元の服をそのままにした追加装甲として実装したのは間違ってた。なかった。

攻撃魔法や防御魔法は、もつと容量の大きいカートリッジで体への負荷を調べながら検証する予定。今は極小出力のカートリッジでの検証する段階で、一気に負荷をかけるのは良くない。

たとえモノが時空管理局の仕様で作ろうとした時の失敗作としても、用途には適合してるし、安全性も確認した範囲では問題なかった

から、有効利用。魔力の9割を無駄にして放出に100倍以上の時間がかかる欠陥品、だけど、そこそこ製造しやすい魔力蓄積装置。

低ランク魔導師が時間をかけて高出力魔法を行使する役にも立ちそうだし、たまには失敗するのも面白い。超小型魔導師や人工リンカーコアと違い、技術等が漏れてもさほど問題がない辺りが素敵。クリーンなエネルギーを謳う時空管理局が実用化していないのが意外と思える代物。

「理論的には大丈夫だと思っていたが……随分とあっさり成功したものだ。」

もう少し手こずると思っていたんだがな」

「基礎が出来ていたから、と言っていたな。」

だが、これは魔法文化を根底から揺さぶる技術なんだろう？」

「根底を崩すほどではないし、文化は強化する方向だろう。だが、社会構造という意味ではそうだな。だからこそ、身体強化に特化した形で気の鍛錬が可能な剣術か体術を考案出来ないか？」

気に関しては、私達にもわかでしかない。貫や神速といった御神の技を使わない、純粋な鍛錬を目的としたものが欲しいんだ。ある程度広まっても問題無いものが、な」

「ふむ……つまり、一般的な鍛錬の範疇で、技として昇華可能な程の身体操作技術を身に付ける、という事か」

「かなり無茶な要求だとは思っているが、ある程度以上は魔法の技術ありきで構わん。最終的には魔法と気を同時に鍛錬する形になるだろうからな。」

ちなみに、このカートリッジシステムは10年後にはミッドでそれなりに広まる技術になる可能性がある。気の操作技術は、その負荷を軽減出来る可能性もあるんだ」

「なるほど、なのはが使う技術にもなる、という事か」

「察しが良くて助かる。」

当面はなのはの鍛錬を目的に作ってもらって、それを参考に一般的なものを考えればいいかと思うが……どうだ？」

「希望は理解したし、本当の基礎的部分は、既にやっている。」

だが、この先の技術はまだ広めない方がいいのは予想出来るが、1人で全ては難しい。誰になら協力してもらって大丈夫だろうか？」

「そうだな……高町と月村は大丈夫じゃないか？」

但し、月村……忍やすずかに協力してもらう場合、特に管理局に情報が漏れないように言っておいてくれ。裏社会的な繋がりで、どう情報が漏れるか解らないからな」

「了解した。少し時間がかかるかもしれないが、やってみよう」



というわけで、気に関する調査に高町家を巻き込んだお姉様。

様子を見ると、まずは高町士郎と高町美由希の2人と相談をしている。まだ高町なのは知らせず、ある程度内容が決まってから段階的に鍛錬に組み込む方針の模様。

お姉様や私達よりもよほど熟練した人達。比較的早く成果を出してくれると期待。

そして目下の問題は、文字通りお姉様の目の前、但し下方にいる変態^{ロリコン}。

夜に女性の寝室に侵入するとは、ふてえ野郎だ。

ちなみに、お姉様は大人モードで、相変わらずのパンツルック。スカートの中なんて無い。

「それで、何か弁明はあるか？」

「いやいや、依頼された情報を持ってきたのですが、有無を言わず踏まれるとは予想外です。」

薄手の靴下で踏まれるのはご褒いたたたたた

「下らん冗談で誤魔化そうとするなら、このまま割ってやってもいいが」

「ギブ！ ギブ！ 新しい世界の扉が見えてしまいます!!」

「無限転生か？ いつでも飛べばいいじゃないか。」

それとも、被虐趣味にでも目覚めるのか？」

「アコノちゃんに依頼された東渚に関しての調査結果を報告に来ただ

けですので、「扉を開けるのはそのあいたたたたミシって言い
ましたよミシつと！」

なぎさちゃんの観察ノートと書かれたルーズリーフでお姉様の足
をペしペし叩く変態ロリコン。

お姉様が幼女モードなら、間違いなく変な意味になりそう。主も助
ける様子は無いし。

「で、何が解ったか言ってみろ。

内容次第では緩和してやらんこともない」

「むう、いけずですね。

ええと、どうやら彼はジュエルシードが命中した最初の人だったみ
たいですね。

記念として、原作の知識が蘇った際に、会話した際に教えられた情
報も思い出したようです」

「ほう。その情報が1回制限やらの根拠という事だな？

私はそんな記憶は無いが……封じられたか、本当に無かったか。こ
れは考えるだけ無駄か」

「そうですね。私にもありませんし、思い出す事を前提とした情報提
供なのでしよう。

というわけで、その情報についてですね。特典破壊の効果範囲は自
身を中心とした半径10メートル。この範囲内にいる転生者は漏れ
なく影響を受けるそうです。

破壊するのはその時点で持つ特典そのものだけで、結果を破壊する
ものではないという事だそうですよ。命を奪うことは出来ないとか、
魔力の特典は成長要素の付与なので破壊以降は大きくは成長しなく
なるとか、容姿は加齢等で崩れやすくなるとか、そんな感じですね。
既に持つ魔力や容姿は、特典の結果扱いの様です。

もちろん、成長途中で解除した場合は望んだ水準に届かないのです
から、言い分としては間違っていないでしょう」

「その流れなら、物を要求していた場合は既に手元にあれば結果扱い
でそのまま手元に残り、未入手なら入手出来なくなるという事か」

「特典以外の破壊は無いという事ですから、そうなりますね。

逆に、発動するタイプの能力は完全に力を失うのでしよう。無限の剣製やニコポナデポが該当しそうですね」

「1度限りの根拠がこれか。自身の特典破壊能力も例外ではないという事だな？」

「正解です。」

何故神様転生に近い感じだったかですが、どうも数人の潜在的な望みを総合したと言っていたようです。裏特典のような何かだったのかもしれませんが……詳細は不明ですね。

どうでしょう。お望みの情報は得られましたか？」

「期待以上。これなら、私に特典破壊を使わせる事を躊躇う必要は無いと思える」

主の特典は、沈着冷静、若く綺麗でいたい、多くの魔法を使いたい
の3つ。

確かに、既に結果は出てる。

「本当にいいのか？」

確かに、危険性は低そうだが……裏特典の様な何かの存在も気になるぞ」

「私はエヴァの主で、容姿や魔力はほぼ固定になった。つまり、明示的な特典の内2つは既に役目を終えているし、自分でも不明な特典は気にしても仕方がない。」

残りの沈着冷静が破壊出来れば、感情が戻る可能性がある。

破壊出来なくても今と変わらない。賭けてみる意味は、ある」

「そう……だな。せっかく日本に残っているんだ、試す価値はあるか」
「ああ、その彼ですが、地球残留の最大の理由は、原作娘ハーレムではないようですよ。」

その意図も全くないわけではないわけでは無いようですが、どちらかと言えば、サーチャーを使って自由に覗きやらが出来なくなる事が問題の様です。

いやあ、むつつり君ですねえ」

「……それは、笑うところか？ それとも、嘲うべきか？」

むしろ、変態ロリコンを蔑むべきかも。

「スカリエッツィの所だと、自由に魔法を使えないと思ったという事？」

「アコノちゃん、正解です。」

もつとも、原作娘達はエヴァちゃんに守られていますし、高町家はレイジングハートも防衛に参加していますからね。少し前はユーノ君も参加していましたし、彼の实力とデバイスでこの壁を超える事は不可能です。

普段は専ら、銭湯やプールを覗いているようですよ。デバイスが非力過ぎて、街中で見掛けた美女を追跡して家突き止める事すら難しい辺りが、更なる残念さを醸し出しています。

ああ、ご心配なく。記憶が壊れる際はなるべくその辺を優先する様に頑張りながら魂を蒐集しましたし、デバノートも処分していますから」

「壊す記憶の調整が効くのか……随分と器用だな」

「デバノート？」

「ええ、そう書いてありましたよ。出歯亀ノートじゃないですか？

覗きのためのノートですから、適切な名前ですね。

あと、調整は長年の経験と勘です。確実な物ではありませんから、あまり期待しないで下さい」

「ふむ……やはりそんな物か。」

で、奴はつまりアレか。ただの覗き趣味か？」

病名としては、窃視症？

見て満足するなら、思ったよりは対処しやすいかも。

翠屋に来た理由が謎になるけど。

「残念ながら強姦未遂事件を起こしていますし、未発覚なアレコレも既に行動済みですね。裏でコソコソと動き、ばれない様に何かを仕出かす。詰めは甘いですが、姑息で厄介なタイプですよ。」

泣き寝入りしている人を数名見付けたので、お節介かとも思いましたが、ちよつとケア的な事もおきましたよ」

「……行動理由は納得したが、手段は間違えていないだろうな？」

「恐喝に使われた証拠やらの破壊と、被害者の肉体的な損傷があった

場合はその治療ですね。

被害者の記憶には迂闊に手を出せませんから、事情を知っても癒してくれそうな人との仲を偶然という形で取り持った事もあるという程度でしょうか。基本的にはひっそりと動く方向ですよ」

意外に穏当な内容？

無闇に記憶を弄ったり本人に直撃したりするよりは、真つ当な手段。

「……まあ、その内容ならいいか。後は特典破壊を使わせた後で再生不能になるよう蒐集すればほぼ無力化可能だし、アレの対処はこれで良さそうだ。

他に特典を消したいのは……まあ、後で考えればいいか」

「ツバサちゃんくらいじゃないですか？

他の人はニコポナデポを破壊した方が周囲の人が安心出来るとか、その程度の理由になりますからね。本人が望む可能性は低いでしょう」

「何故お前が知っている？」

「これでも、人を見るのは好きなのですよ。あんな特殊な魔法を必死で習得しようとしているのですから、よほどの事情があるのでしょうか？

ああ、プライバシーに踏み込む気はありませんから、自室に帰ってからの行動は知りませんよ。紳士たる者、その一線は超えられません」

「ほう……夜に女性の部屋へ、アポ無しで来たお前がそれを言うか？」

「いやあ、調査結果が纏まったので、喜び勇んで来たのですが……いやあ、失敗しました。

確かに失礼でしたね。2500年程本の姿で言葉も殆ど文字として見せていただけだったので、忘れていまっ……」

お姉様の足元から、みしって音が聞こえたような？

まあいいや、音源は床じゃなくて踏まれてる変態ロリコンだし。

「お前が何か言えば、変な下心がある様にしか聞こえん。

情報の内容に免じて、このまま速やかに退出すれば見逃してやるが

「……どうする？」

「そうですね、新しい扉を開くのもアレですから、退出しましょう。

今度は、きちんとアポを取ってから来ますよ」

「次からは、手加減せんからな。覚悟しておけよ？」

「ええ、肝に銘じておきましょう」

A S編16話 その手の内に

世間と言うか、地球の小学生組が夏休みに入った。

半泣きで勉強をしていた高町なのはや夜月ツバサも何とかテストを乗り切った模様。お姉様に釘を刺されたりしてた以上に先日の様な醜態を度々晒すのも嫌だったようで、同じ学年という事もあって合間で勉強会をするようになった夜月ツバサと原作3人娘は、夏休みの宿題に追われてる。

ついでに、1学年上の主、同学年の八神はやて、1学年下の扱いになっている八神ヴィータも、宿題や課題を持って参加中。今日の会場は月村家なので、部屋の広さも問題なし。

子犬モードのザフィーラも八神はやての護衛として同行してるけど、月村家の猫達の興味を引いてちよつと困った顔になってた。

他の守護騎士達は、通常営業。

八神シグナムは、剣道場で非常勤の講師として働き始めてる。非常勤なのに人の多い時間や曜日にはほぼ顔を出し、残りの日のほとんどを蒐集や鍛錬に充ててるのは、きつと生真面目な性格のせい。

今はミッドチルダに近い管理世界で、違法研究施設を襲撃中。警備に雇われてたゴロツキくらいしか魔導師がいないから1人1人は大したことないけど、人数が多くて治安部隊が手を出しあぐねてた場所。蒐集や、現場の人や世論的な得点稼ぎにはそこそこ有効と判断。

八神シャマルは、翠屋のウエイトレスとして人気上昇中。

料理の腕は、学習能力がバグってんじゃねーのとか言われる水準。味付けは味見をする事でやや改善してるけど、下味の薄さを後付けで誤魔化したりするから、やっぱり出来上がりは微妙。

気付いたらレシピに無い物を入れてるといふ悪癖は本人も悩み中で、外から見える範囲で守護騎士プログラムの解析も進めてるけど、現状では打つ手なし。地道に見守るしかなさそう。

今は本人なりに悩みながら、八神家で料理の練習をしてた。人を実験台にするなどみんなに言われてるから、自作の料理を半泣きで食べる。

アースラの現地拠点とそっちに関係する転生者達は、訓練や連絡の頻度をちよつと上げた模様。

と言つても、入り浸つてるわけじゃない。先日の危険人物失踪を受けて、可能な範囲で連絡を密にしようとした結果らしい。

ちなみに、失踪についてはお咎め無し。魔法文化の無い世界からの個人転送を予測するのは困難だろうと言う事だけど、最高評議会的な意味での横槍も入ってるらしい。

要するに、危険人物の排除と研究対象の確保を兼ねた、暗部らしい行動の結果という事。私達としては色々と情報を落としてくれるから、期待以上の結果にはなってる。問題ない。

他の人は状況的に大きな変化は無いから、あまり変わってない。

でも、今日はちよつとしたイベントが発生。

「珍しいね。僕と外で模擬戦をしたいなんて」

「決まった相手や場所ばかりでは、慣れてしまうからね。

それに、エヴァさんがバインドマスターと称した腕にも興味があるよ」

というわけで、囑託魔導師挑戦組の3人がクロノ・ハラオウンを模擬戦に誘つてる。

とはいつても、ここにいるのは成瀬カイゼのみ。

セツナ・チエブルー、フェイト・テスタロッサ、アルフの3人は、軽く運動すると言ってトレーニングルームに行ってる。

「今日の午後は予定も無いし、構わない。場所の目星は付いているのか？」

模擬戦をするなら、使用許可を取っておかないといけないんだが「カリムさんに、ミッドチルダの郊外で許可を取りやすい場所を教えてもらっているよ。」

手続きも頼めそうだったけど、先に予定を聞いておいた方がいいと思つてね。このメモを渡せば解るだろうと言われているよ」

「そうか……うん、ここは何度か使った事がある。広い代わりに遠いからあまり人気のある場所じゃない。許可は大丈夫だろう。」

カートリッジを使うペースがだいぶ早いとマリーから聞いている

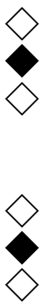
「のだが、準備や体調に問題はないか？」

「問題ないよ。エヴァさんの指針の範囲内だし、自覚も診断結果も問題は出ていないよ」

「そうか、それならいいんだ。」

「昼食の後で合流しよう。この近くの食堂で食べるつもりだから、そこでもいいか？」

「問題ない。他の2人にも伝えておくよ」



というわけで、昼過ぎのミッドチルダ郊外に4人の人影があった。

つまり、講師役のクロノ・ハラオウン、生徒役の成瀬カイゼ、セツナ・チェブルー、フェイト・テストロッサという面々。アルフはプレシア・テストロッサに連行されたから、今回は不参加。

そして今はクロノ・ハラオウンとセツナ・チェブルーが対戦中で、他の2人は見学兼休憩中。

「それにしても、凄いな君は。」

まさか、手加減する余裕も無くなるなんてね。全てを切り伏せられる勢いで迫られるとは思わなかったよ」

「それはどうも。ですけど、かなり必死なんですよ」

今は少し距離を置いて睨み合ってる状況だけど、さつきまではクロノ・ハラオウンがバインドと誘導弾でセツナ・チェブルーを捕らえようとし、セツナ・チェブルーはその全てを切り捨てるか神業的な回避技術を見せつけるように避けてた。まだ魔法弾を投げ返す技量は無いけど、的確に破壊や回避する感覚と技術は恐るべき水準。

しかも避けながら無誘導の魔法弾をばらまいてたから、クロノ・ハラオウンもある程度は防御や回避をせざるを得ない。結果、なかなか見応えのある模擬戦になった。

「やっぱり、すごい……」

同じく空中高機動戦を主体とするフェイト・テストロッサが、セツナ・チェブルーの一挙一動を食い入るように見てるのは仕方のない

事。

直接対決では魔法の熟練度がモノを言って、フェイト・テストロツサが優勢。だけど、速度で負けないためにソニックフォームを開発済み。セツナ・チェブルーと成瀬カイゼに、速度を求めたのは解るけど目のやり場に困るから露出を増やさないでと言われてた。

「やはりバインドを有効に使うには、相手の動きを読み切る必要があるね。」

少なくとも、一般的な魔導師の動きをもっと知っておくべきか……」

正面突破よりも搦め手を好む成瀬カイゼは、クロノ・ハラオウンの戦術に注目してた。誘導弾や設置型バインドで詰将棋の様に逃げ場を塞いでいく手法は、大いに参考になる模様。

その上でセツナ・チェブルー相手に苦戦してるのは、一般的なセオリーが通じない事も大きいと判断してる。それが、フェイト・テストロツサを完封出来るクロノ・ハラオウンが、セツナ・チェブルーに苦戦する理由のはず。

組み合わせを変えつつ何度かの試合を行い、休憩しようとする頃に、おやつを食べて。

体力や魔力も回復したし、そろそろ続きを始めようかという時に、成瀬カイゼのデバイスから子ネズミが飛び出してきた。

「緊急事態に付き、少々失礼いたしますぞ。」

クロノ・ハラオウン執務官殿に連絡事項が御座います」

「何かあったのか？」

艦長やエイミーからの連絡は来ていないが……」

「当然でございませう。」

つい先ほど、遺失物の輸送中に事故または事件が発生し、その直後に輸送車からケースの様なものを奪った者が乗った車が走り去った事が確認されたので御座います」

「……情報の精度については？」

「この目で、しかと。記録映像等も確保しております。」

最大の問題は、該当の遺失物がジュエルシードであり、走り去る車

に金子狗太……突然地球から姿を消した要警戒の転生者が乗っていた事で御座います。

この演習場を通るルートで逃走している様で御座いますから、現行犯で捕らえる事が可能ではないかと判断した次第で御座います」

そう言いながら、チクアーブは空中モニターを展開し、付近の地図を表示した。

だいぶ離れた場所にXの文字が、こちらへと移動する点の傍にVとKの文字が赤字で書いてある。

他に、青字でC、F、S、Nの文字もある。

「この赤字のKが、金子でございませう。同乗者が遺失物の輸送車両から盗んだ証拠も御座いますので、纏めて捕らえる事に問題は無いと判断いたします」

「そうか、解った。

この赤字のXとVがこの近くにいる敵勢力だね？」

「理解が早くて何よりで御座います。

Vが車両からケースを奪った実行犯。この時の映像を確保しております。

証拠を押さえる事には失敗しておりますが、Xが輸送車両を狙撃した実行犯で御座います。

こちらへ近付いているVの外見は幼女で御座いますが、侮れない戦闘力を持っております故、油断は禁物で御座います」

「……エヴァンジュの様な人物だと思えという事か」

「そこまでとは申しませんが、状況次第では現在のフェイト嬢でも敗北する可能性があるかと判断いたします。

主な戦闘スタイルはナイフによる近接戦、並びに触れた金属物を爆発物に変化させる能力を使用したナイフ爆弾でございませう。

爆発を避けるには、触れられない事と投げられたものに注意すれば充分なようございませう。飛行は出来ない、もしくは苦手なようですので、最悪の場合でも空中に逃れる事が出来れば何とかありますから、この様な開けた場所であれば何も出来ずに負ける事は無いと判断いたします。

その他、必要と思われる情報はデバイスに転送してありますから、早めに確認をお願いいたしますぞ」

「随分と詳しいね。それも、原作に関する知識なのか？」

「それとも、調べ上げる伝手があるという事か？」

「ある意味では有名な人物に連なる相手で御座いますし、確認済みの原作知識でも御座います。」

「ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人と言えば、理解しやすいかと」

「……確かに、有名人に連なる相手だ。」

「それに、裏には最高評議会がいるという事か」

「ジュエルシードの輸送を指示したのは、その筋の人物の様で御座います。」

「移動経路のリークも同様で御座います。御逃え向きの狙撃地点があるのも、こちらへの援護狙撃も恐らくは可能であろうことも、作画的な物を感じる次第で御座います」

「ふう……解った。」

「僕は今から、地球から消えた人物への接触を試みる。」

「それと、小ネズミには姿を消していてもらう。最初から捕縛目的ではあからさま過ぎる」

「問題御座いませぬ。それでは、我等は記録に専念いたしますので、これにて失礼いたしますぞ」

「チクアーブは小さく頭を下げると、成瀬カイゼのデバイスにに吸い込まれる様に姿を消した。」

「それを見送ると、クロノ・ハラオウンは小さくため息を一つ。」

「ふう………いったいどれほど君達の手の上で踊っているのか、想像しにくいな」

「演習を頼もうかという話を始めた時点では、こんな事になるとは思っていないかったよ。」

「そこは信じてほしいね」

「ですね。カリムさんに手頃な場所を尋ねた時にも、ジュエルシードの周囲が怪しくなってきたって話しか聞いてなかったですし。」

「こんな事になったのは、昨日の夕方なんです」

「そんな話、私は聞いてないよ……」

仲間外れにされてたせいかな、フェイト・テストアロツサがショックを受けてる。

私達が全てをお膳立てしたわけじゃないし、事情があつたんだもん。ウソじゃないもん。

「エヴァさんに、なるべく家族の時間を過ごさせてやってくれと頼まれているからね。」

それに、こんな裏の話は僕の領域だよ」

「だけど、私だつて恩を返したいよ」

「少々不本意な部分もあるが、結果的に僕達の事を考えて行動してくれているのは間違いない。踊るべきところなら踊り切るべきだろうが、踊らなくていいなら静かにすべきだ。」

それより、そろそろ移動しよう。場合によっては戦闘になるかもしれないから、気は抜かない事。

狙撃された場合は……」

「僕が警戒しておくよ。全力ならSクラス以上の砲撃らしいから撃たれたら防げないけど、妨害くらいは出来るかもしれないからね。」

それと、最初は僕とセツナは離れるふりをして姿を消しておくよ。転生者が相手だから、余計な情報は与えない方がいいんじゃないかな」

成瀬カイゼにはある程度の情報を渡してあるから、そこからの判断。

ジェイル・スカリエツティに連れ去られた3人の転生者には、姿を見られてない。

「そうだな、頼む。」

これは全員に頼みたいんだが、基本的に手を出さないでくれ。例えば戦闘が始まっても、牽制以上の行動は禁止だ。

僕達は即席で連携出来る程には手の内を理解し合っていないし、必要以上に手を出してしまうと君達の立場が悪くなる可能性もある。

攻撃された際の自衛は問題無いが、深入りしない事。いいね？」

「逃げた場合も、追わなくていい?」

一応前線に近い位置に立つはずのフェイト・テスタロッサは、方針の確認。

戦闘でも牽制程度止まりだと、それ以外の場合の対応もその程度という予想はきつと正しい。

「1人でも捕縛出来ていれば、その監視は任せるかもしれない。

だけど、捕らえるのは権限と責任のある僕の役目だ。補佐してもらう事はあっても、君達だけで行かせることは出来ないからね」

「うん、解った」

というわけで、見えてきた車の方へ飛び立つクロノ・ハラウンとフェイト・テスタロッサ。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーは、逆方向に幻影を飛ばした上で姿を消した。

今まで動かなかった理由はもちろん、近くに来た車の中に知った顔があったから声を掛けたという事にするため。建前を真実に見せる努力は必要。

『その車、止まってくれ。』

少し尋ねたい事がある』

クロノ・ハラウンが車から見える様、横を飛びながら拡声魔法で呼びかけると、中の2人はちよつと顔を見合わせてから車を止めた。

そして、クロノ・ハラウンのいる運転席側の窓が開くと、そこには妙な笑みを浮かべながらハンドルを握る金子狗太の姿が。

「ほおほお、執務官殿ですかあ?」

喋り方まで変な金子狗太の脇腹をつつく、銀髪の幼女……もとい、チンク。

どう見ても変な事を喋るなど言いたげで、念話の反応もあるから、実際言っていると予想。

「……会った事は無いはずだが、何故僕の事を知っている?」

「有名な最年少の執務官じゃないですかあ?」

「有名かどうかはともかく、最年少は事実、か。」

確認したんだが、こちらで言う第97管理外世界、現地名称地球の

日本にいた金子狗太君であっているね？」

「……何で俺の名前を知ってる？ 何しに来やがった？」

金子狗太の表情が硬くなった。

時空管理局にばれてないと思ってただろうし、警戒するのは仕方ない。

「それだけ大きな魔力を垂れ流しにしていたんだ。現地で魔力の調査をした際に引っかけたとしても仕方ないだろう？」

ああ、君に対して何かしようと思っっているわけじゃない。どう扱えばきか決まらない内にいなくなってしまうたから、心配してただけだ。

魔法が使える何者かに強引に攫われてしまったんじゃないか、とね

「ほう、心配してくれてっつてやつか？」

生憎だが、今の生活が結構気に入っちゃってなあ？ 帰るつもりはねえんだ」

「そうか。念のため、連絡先と戸籍を確認させてもらっていいか？」

出身世界や経緯を考えると、違法な物でない事は確かめておきたい」

「……ほう？」

金子狗太の表情が、更に硬くなった。

ジェイル・スカリエッティの保護下にあっても、正式な戸籍は確保してない。

だって必要ないし手札を晒す必要も無いし、的ない感じだ。

「時空管理局としては、僕達しかあの世界にはいなかったはずなんだ。

だから、他に情報が渡るとすれば、当時発生していた事件に関与した人物からだろうと予想しているんだが、心当たりは無いかも聞いておきたい」

「……知らねえな！」

金子狗太、射撃魔法でクロノ・ハラオウンを撃って車を発進。明らかに逃走の構え。

車からバカとか罵る声が聞こえてるから、チンクとしては不味いと

思ってるらしい。

予想してたクロノ・ハラオウンは顔面ギリギリに浮かぶシールドを消すと、デバイスを構えた。

「職務質問中の執務官への攻撃と、殺傷設定攻撃魔法使用の現行犯だ。

これより、捕縛する」

『Stinger Ray』

S2Uから放たれた白い閃光が車のタイヤを貫き、ガリガリと嫌な音をたててスピンの直後。

明らかに切れた様子の金子狗太が飛び出してきた。

「何しやがる！」

「いきなり攻撃してきた君に言われたくはないが……君が使った魔法は殺傷設定だった。人への使用は違法行為だ」

「知った事かよ！ 死に晒せ!!」

『Burst Blaze』

金子狗太の手元に短剣が現れた直後、クロノ・ハラオウンがいた場所が爆炎に包まれた。

「ケツ、手応えのねえ野郎だ」

軽口を叩いてるけど、目は油断してない金子狗太。

ジュエルシードが入ってると思しきケースを持ったチンクが、車から音も無く立ち去って……いこうとしたところに設置型バインドが絡み付いて、とりあえずお縄。

「君にも事情を聴きたい。もしこの男に捕らえられていただけなら保護する必要もある。」

何れにせよ、あまり暴れないでもらえると助かる」

「……わかった」

煙の中、だけど爆心より少しずれた場所から現れたクロノ・ハラオウンが通告すると、チンクは静かに頷いた。

特に驚く様子も無いし、こうなる可能性は考えていた模様。地下に微かな魔力反応があるし、救援を期待しての同意の可能性が高い。

「俺を無視すんなクソガキ！」

「同年代だろう！」

魔力にモノを言わせて、魔法弾をばら撒く金子狗太。クロノ・ハラオウンはシールドやらで防ぎながら回避してるけど、魔力差が大きくて技術で埋めるにも少々苦しそう。

じりじりと距離を離されてく。

少し離れたところにいるフェイト・テスタロッサに指示する様子もないし。というわけで、先生お願いします。

「クハハハハハ、その程度か最年しごあつ!？」

金子狗太の魔法行使、強制終了。胸のあたりから黒い衣装を着けた腕が突き出てて、その手には輝くリンカーコアが握られている。

その光が急速に弱まると、腕は胸に吸い込まれるように消えた。今回は隠蔽優先で封印無し。リンカーコアの損傷を見せる事になる。

「あれは……」

（砲撃来るよ。あつちにも増援がいて妨害は無理そうな上に、高出力で物理破壊の直射砲みたいだから、防ぐより回避を。

早めにそこを離れた方が、彼を巻き込まなくて済みそうだ）

「何だつて!？」

成瀬カイゼからの情報に驚きつつ、クロノ・ハラオウンは気絶してる金子狗太をバインドで束縛した上で離脱開始。

フェイト・テスタロッサも別方向に移動しようとしてる。でも、もうすぐチンクがバインドを破壊しそう。

（フェイトは、あちらの攻撃対象になっていないみたいだ。

離脱する振りをしつつ、幼女を攻撃出来る範囲を維持して。恐らく砲撃と同時に地中を移動出来る特殊能力持ちが連れ去ろうとするから、可能ならケースを攻撃して確保してほしい）

今度は、フェイト・テスタロッサ限定での念話が、成瀬カイゼから届いた。

クロノ・ハラオウンには気付かれて無い。

（地中を移動？ それより、手を出さないように言われてるのは大丈夫かな……）

（追うなどとは言われてるけど、盗品を取り返すなどとは言われていないよ。

但し、無理はしないこと。成否に関わらず、安全に離脱する事を優先して)

(……うん、解った)

明らかに詭弁だけど、フェイト・テスタロッサは頷いた。

周囲を警戒して移動する振りをしながら、こつそりと突撃態勢を整えてる。

(来るよ)

再び、成瀬カイゼから2人に対しての念話。

直後、深紅の砲撃が飛び込んでくるけど、クロノ・ハラオウンは回避成功。同時にチンクの近くにセインが現れる。

「ちやちやつと行きますね。フィールドやバリアは『Photon Lancer』やばっ!？」

絶妙なタイミング、チンクが防御を解いた瞬間に、フェイト・テスタロッサの魔法弾がケースを直撃。本人はそのまま突撃してくし、ケースは空を舞ってる。

「行こう。任務は失敗だ」

「は、はいっ!」

上空からはクロノ・ハラオウンも向かってくる気配があるのを見て、2人は地中へと姿を消した。

(フェイト、連中は地中から確保しようとするはずだ。

なるべく地面に近付かない様に、落ちる前に回収出来るかい?)

(解った、やってみる)

『Photon Lancer』

もう一度魔法弾でケースを跳ね上げ、突撃の勢いそのまま回収。

そのまま上昇してクロノ・ハラオウンと合流した。

「見事な手腕だけど、無理はしないでくれ。

相手は何らかの犯罪者だ、予想外の事を当たり前の様に仕出かす可能性がある」

「大丈夫。砲撃の方は?」

(あちらさんも撤退するみたいだね。ギルとかいう転生者が抱えて飛び去っていくよ)

サーチャーで会話を聞いてた成瀬カイゼからの状況報告。

どう見ても撤退の構え。これ以上の交戦の意思は無いと思える。

「そうか。1人は逮捕出来たし、奪われた物も回収出来た。」

4人に逃げられたのは状況を考えれば仕方ないだろうから、ここまではなら上々なんだが……あの手は、アレだろう？ 何とか騎士団」

（黒の騎士団だよ。ただ、今回の手助けは秘密らしいね。）

模擬戦を続けられる状況ではなくなったし、余計な荷物は早いうちに届けてしまおう）

「そうだな。撤収だ」

A S編 17話 知らないところ

その後、金子狗太とジュエルシードを陸上警備隊に引き渡し、ついでに色々と情報を提供。

地球から姿を消した人物だという点、特殊能力持ちが複数関わっていたと思われる事から大きな組織が関わっている可能性がある点まで含めてだし、後で色々大騒ぎになる事は間違いない。

でも、今はレジアス・ゲイズや最高評議会への圧力になれば充分。今すぐ敵対する気は無いし。

そんなわけで、こっそり入れ替えた18個のジュエルシード・イミテーションはばれる事無く時空管理局の倉庫に納まり、お姉様の手元には21個全てのジュエルシードが揃った。

こんな事であろうかと準備しておいたイミテーションも、ジュエルシードが劣化した場合にこうなるだろうというレベル。本物との比較も難しいから今後研究材料として使われたとしてもばれる可能性は低い上に、難易度が高い割に結果が微妙な技術ばかりを使ってるからそっち方面での価値も低く、ガジェットの動力源として使った場合は原作より性能が劣化する。

完璧。

褒めて褒めて。

「……そこまでやったなら、何も言えんな。」

それで、蒐集した情報やらで黄金律やハーレム体質に関する調査は進みそうか？」

また呆れられた気がする。

闇の書の蒐集は、魔法じゃないレアスキルは対象にならない可能性が浮上。

少なくとも、文字として現れた情報にそれらしい部分は無い。

アルフやその辺にいた犬を闇の書と接触させても、特に影響は無かった。

金への変換資質も再現は確認出来ず。

蒐集してるけど発動してない可能性もあるから、調査は続行。

「そうか……まあ、ニコポナデポ持ちの転生者連中から蒐集しても、大事にはならない可能性が高まったという事は喜ぶべきか。

それで、私に隠れて色々やっているようだが、他には何を仕出かしている。たまに私の魔力を使っているだろうか？」

「やっぱりばれてーら。」

お姉様から使い魔達への魔力供給を参考に、特殊な人工リンカーコアもどきを開発中。

うまく成功すれば、SSS級の魔力を他者に供給可能かも。

供給元はお姉様と私達。複数のリンカーコアから魔力を供給し続けるカートリッジ的な何か。

S級相当量を供給出来る接続を2秒ほど繋げるところまで成功。出力の上昇と供給時間の延長はこれから。

「誰に使わせるつもりだ。そんなものを使わなくてもアコノには供給出来るし、他にSSS級に耐えられる奴なんていないだろうに」

第1候補は夜天とユニゾンした八神はやて、決戦時の最悪を想定。防衛プログラムからの侵食を一時的にでも押し返す場合や、疲弊時には役に立つと予想。

「これも、こんな事もあるうかと、ってやりたかったのに。」

「……解った解った、聞かなかった事にしておいてやるから、拗ねるな。」

それで、阿呆の身柄と情報を受け取った管理局の反応はどうなっているんだ？」

「割と大騒ぎ。」

金子狗太のリンカーコアは回復不可なくらいボロボロ。それを告げられて自棄になったのか、ジユエルシードや闇の書だけでなく、ジェイル・スカリエツィ、レジアス・ゲイズ、最高評議会の情報まで喚き散らして。但し、原作の情報だから、差異も色々ある。

チクアーブの撮影した情報は映像機器メーカーの製品テスト中に偶々撮影された事になって、犯罪行為の現場映像としてメーカー経由で正式に提出されている。

八神シャマルが蒐集してる場面は背中しか映ってなくて、空中でビ

クンビクンしてるだけに見えるから問題無い。犯行現場や、クロノ・ハラオウンが砲撃を躲す場面はばっちりです、ここに関しては証拠として充分。

チンクがセインに回収される場面は、砲撃を撮影してたから記録してない。つまり、セインは映像に残ってない。フェイト・テスタロツサが箱を回収する場面も同様。

砲撃を行ったデイエチと逃走の手伝いをしたギル・ガームスについては、後ろ姿だけ。砲撃が行われたと思われる方向にいたという事しか示さないし、顔も映ってない。

ついでに、クロノ・ハラオウンの記録にも蒐集時の腕は記録されていない。記録する時点で幻影を使って偽装してあるから、データを改変した痕跡もない。

結果、金子狗太の立場だけが悪くなってる。

車両からケースを運び出した記録があるチンクすら、何らかの事情があるのではないかという話が出てる。バカと叫んでる声も記録されてるし。

クロノ・ハラオウンは、ジュエルシード事件の事後処理で忙しい事を理由に捜査担当を辞退。

結果的に、ロストログリア対策で駐留していた第97管理外世界からの誘拐という身内の失態を晒す事に繋がってるから、陰謀だと断定されてない。むしろ、情報の困い込みをしていないという意味で、潔白を証明してる事になってる。

「なかなか面白い事になっているな。レジアスやらの耳には届いてるのか？」

もちろん。

ジュエルシード事件の報告書を出してきて、現実との齟齬がある未来の光景とやらの可能性がある、妄言に惑わされるなどか言ってる。地球繋がりで、無視できない程度の説得力はある模様。

この延長で、現実との齟齬がある過去の記憶の可能性、記憶改変に伴う精神汚染の可能性、ジュエルシードによる一時的な魔力増強だった可能性も示唆。上層部直々に情報を攪乱してくれてる。

確実に金子狗太を切り捨てる方向になってるけど、望ましすぎて違和感がある勢い。

「そうだな。乖離し過ぎたせいで、修正力やらが働かなくなったせいならいいが……」

スカリエツテイの様子は？」

戦闘機人が無事だったせいか、あまり気にしてない様子。

ジュエルシードに固執する気配は無い。現時点では、便利な動力源の候補でしかなかった模様。

プレシア・テスタロッサが若返ったり、アリシア・テスタロッサが蘇ったりした事についても少し気になる程度で済んでる。後日、経過等を聞いてどの程度真実か判断するつもりらしい。それを果たしたロストロギアが消失してるなら、固執するのも無駄だと発言した記録も取れてる。

ちなみに、チンクはイヤラシイ目で見られる事が無くなった事を喜んでる。

「自分から積極的に動いてたわけじゃないのか……脳味噌の指示か、ちよつとした興味本位でしかなかったという事か。」

そういえば、脳味噌の居場所は判明しているのか？」

最高評議会の居場所は、ミッドチルダの時空管理局地上本部、地下施設の深部だろうと推測。

接触している可能性があるドゥーエの完全追跡は失敗してるし、チクアーブとお姉様の電子精霊群では力不足。長宗我部千晴の協力があれば電子防壁を突破出来るけど、ユニゾンにいい顔をしないから、チクアーブも協力を要請してない。むしろ、下僕のように尽くしてご機嫌取りをしてる。

「アレはチクアーブが悪いからな。千晴が納得するまでは、よほどの事が無い限り私からの要請も無しだ。」

だが、追跡は失敗か……」

機会があれば再挑戦予定。

ジェイル・スカリエツテイを含め、時折超強力なジャマー結界を使う事があるし、各種技術を複合した探知を行う事もある。

転生者に着けてたマーカーは既に見付かって破壊されてるから、侵入してる事を覚られない為にも、同種の手法や自動制御のサーチャーは使えない。

妨害中に転移されると追えないし、何かやってる様子もあるけど、それは調べ切れてない。

「……流石に、完全なザルではないという事か。いや、普段の甘さ自体が罠なのか……？」

まあ、緊急で対処する必要がある相手ではないから、安全性優先だ。どんな罠があるか解らんから、警戒は怠るなよ」



そんな状態で約2週間が経過して、7月も最終日になった。

今の所大きな動きは無く、地道な努力が続けられてる。

囑託試験組は、あと少しという水準に達した。

蒐集組は活動範囲を広げながら、ゆつくりと頁を増やしてる。

小学生組は宿題と言う強敵と戦い、着実にその数を減らしてる。

転生者組はそれぞれのペースで魔法の練習を続けてる。

「というわけで、連れて行ってもらおうよ！」

そんな中、高町家の道場に来たお姉様に、アリサ・バニングスが開口一番で要求を突き付けてきた。

今いるのは地球にいる関係者の過半で、随分と人数が多い。長宗我部千晴と真鶴亜美のペアどころか、珍しく黒羽早苗やエイミィ・リミエツタまで含むアースラ組もいるし、八神はやたと守護騎士も全員集合。

高町なのはや月村すずかの家族まで来てたら、お祭りの再来に近い勢いだっただ。

「何がどういうわけで、何処になんだ？」

「別荘よ別荘！」

随分といいとこみたいじゃない。そんなトコがあるなら連れて行きなさいよー！」

「す、すまねえ。まさか、訓練は転移で別荘に行つてしてると言つただけで、どんなところか当てられるとは思わなくて……」

「ほう……」

自白したヴィータが、お姉様に睨まれて小さくなつてる。

事情を聴いてみると、真つ先に気付いたのは上羽天牙らしい。お姉様や主がどこで訓練してるか解らないというエイミー・リミエツタのボヤキを聞いた時点で、確定的に明らかだった模様。

「……ネギまを知っているのだから、気付くのは時間の問題だったか。存在を確信されたのなら言っておくが、この面子以外には口外禁止だ。これを目当ての連中が押し寄せてきたら、口外した馬鹿の責任として全て対処させるからな。」

ヤバさで言えば……そうだな、状況によつては地獄に垂らされた蜘蛛の糸と同じ程度には魅力的に見えるかもしれん。善悪とは無関係に、な。

犯罪者やらを追い払う役目を押し付けられたくなければ、口を閉ざす事だ」

「そんなにやばい代物なの……?」

「まさか時間加速とか、その辺まで再現してんのか?」

いまいち理解出来てないのか、アリサ・バニングスが困惑してる。

魔法先生ネギまもある程度知ってるらしい馬場鹿乃は、どんな物か想像出来るらしい。ちよつと外れてるけど。

「いや、時間の加減速は無い。その意味ではネギまのものを再現しているとは言えんな。」

知らない連中には、人が生活する事も可能な人工的な空間と言え想像出来るか?

なのはには、特殊なデバイスの格納領域の様な物と言え、少しは伝わると思うが」

「え、えーと……」

話を振られた高町なのはは、困惑顔。助けを求めるように視線が彷徨つた結果、情けない顔で八神シグナムを見てる。

「理解出来ない様だな。」

デバイスの格納領域は、外部からの干渉は困難だ。つまり、そこで生活出来るという事は、追われる者にとっては恰好の隠れ家になり得るということに繋がる」

「その可能性がある以上は、治安を司る権力者としても無視出来ない、という事でもありますね。」

普通は生活出来る程便利には作れないですけど、実現している以上、犯罪者や保護を求める人が押し寄せてくる可能性を否定出来ませんから」

助けを求められた八神シグナムと、ついでに口を出した八神シャマルの解説は、とても適切。

簡単に干渉出来る技術があるなら、例えばフェイト・テストロッサやプレシア・テストロッサは、レイジングハートの中にあると思つたジュエルシードを直接狙つたはず。

それらに簡単に気付ける守護騎士は、やっぱり戦乱の中で過ごした経験が生きてる。

「要するに、よ。」

本来は持つてない方がいいモノって事よね。どうしてそのまま使つてるのよ」

「中には1000人以上住んでいる上に、私の研究室的な物やらも多々ある。要するに、迂闊に外に出せないがそう簡単に壊せない物も多い。」

現時点で箱と中身のどちらがより危険かと言えば、中身だ。箱が悪用されたら問題があるからと言って、住人を皆殺しにしたり、危険物を放出したりするのを良しとするのか？」

「……中の人とか物つて、そんなに危険なの？」

「簡単に説明するなら、住人は狂信者で、危険物はジュエルシード級も多数あるな。」

箱の外に出すより、箱の中に隔離しておく方が安全だ」

「で、でも、はやては出入りしてるんでしょ？」

「そこまで危険じゃないんじゃない？」

「私と敵対していないなら、という条件付きだ。」

危険物はそれなりに隔離してあるが、中に入れば住人と接する事になる。敵と認定されたら、生きて帰れないと思っただ方がいいぞ」

「そう、なんだ……」

アリサ・バニングス、ドン引き。

でも、ちらつと八神はやての方を見て、それに気付いた八神はやては伺いを立てる様な目でお姉様を見てる。

「……ふふん、わーかった。

嘘は言ってない。でも、全てを語ったわけでもない。そういう事でしょー！」

「詳細はほとんど言っていないんだ。全てを語ったと言えるわけがないだろう?」

「そりやそうよ。」

でも、はやてやヴィータ達が行ってるんだから、危険性だけを指摘して恐怖心を煽ってるだけでしょ。本当に危険なら、過保護者のアンタが連れてくわけじゃないじゃない」

アリサ・バニングス、渾身のドヤ顔。

転生者連中からは、おお、とか、アレの茶々丸姉妹機も似たようなもんだろうし、とかいう賛同の声が聞こえてくる。

「アリサ……お前は一般人だと思っただんだがな」

「な、何よ。何か問題でも?」

「いや、こちら側に関わるべくして関わった人材なんだな、と感じただけだ。」

「なのにも言ったが、お前も転生者とかじゃないだろうな?」

「違うわよ。で、どーなのよ?」

「どちらかと言えば不正解、だな。」

知られた際リスク、存在する危険物のレベル、敵対時の危険性は、言っただ通りだ。これに関しては一切誇張していない。

例えば……そうだな、ふぎけていた時に窓を割った場合は、私の財産を丁寧に扱わない者として粛清対象になりかねんし、その結果は恐らく死だ。敵対と言うと重そうに感じるだろうが、あいつらの一部はその程度で閾値を超えるし、死ぬ理由としてはそれで充分だろう。

はやてや守護騎士達は必要以上にはしゃぐ事もないし、敵対時の問題も理解しているから、連れて行っても問題はないと思える。

だが、お前達が羽目を外した場合までは、保証出来ん」

「要するに、節度を守ればいいって事よね。」

転生者の人達つてのは、要するに前世とかいうやつに分、精神的に成熟してるはずでしょ。私達が最年少なんだから、それくらい出来るんじゃないの?」

お姉様が負けてる。

でも、確認するように周りの人を見たアリサ・バニングスの視線から逃げるように、馬場鹿乃が横を向いた。

「……ヤバそうな馬鹿が、最低1人はいるな」

「……いるわね。」

でも、自制する自信があれば大丈夫でしょ?」

「……やれやれ、行かないと言う選択肢は、お前には無いんだな」



と言うわけで、やってきました別荘。

熱海の拠点にある、外部との転送ポート……見た目はヘリポートに近い平らな場所に、17人と1匹が揃ってる。

「うわ……想像以上だ」

「何だか、長閑な感じね。お城は無いと聞いていたけれど、それでもちよつと想像と違うかしら」

長宗我部千晴と真鶴亜美は単純に驚いてる。

「す、すごい……」

「魔法つて、こんな事まで出来るんだ……」

「で、でもアリサちゃん。なのはちゃんも驚いてるよ……」

高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかの原作娘達も、同じく単純に驚いてる。

「テンションを上げるな、はしゃいじや駄目だ、漲るなんて以ての外だ……」

「つ、ついてこない方が良かったかも……」

馬場鹿乃と上羽天牙は、テンションを下げてる。能動的か受動的かはともかくとして。

「あれ？ あそこの畑って……」

黒羽早苗は、早速食べ物に目を付けてる。

先週プレシア・テスタロッサから送られたレシピに、似た材料を使う物があった。

なんてピンポイントな。

「こ、こんなの、どう報告すれば……」

「心配するな。リンディは知っているし来たこともあるから、別荘に行ったと伝えれば済む。

但し、色々な機密に関わるからな。大つぴらに報告するのは止めておけよ」

「か、艦長おおお……」

エイミー・リミエツタは、頭を抱えてる。

いろいろ秘密にしてるせいで、辻褄合わせが大変なのは認める。

「さてと、アコノとはやて達は先に行って準備を頼む。

連中への説明もしておいてくれ」

「解った。東風檜扇^{コチノヒオウギ}、起動。ロードカートリッジ」

「私も先に行つてええの？」

「ここから歩きながら説明するつもりだし、車椅子に向いた道じゃないからな。

ザファイーラ、2人の車椅子の運搬を頼む」

「承知した」

「参りましょう、主はやて」

八神はやては八神シグナムに抱き抱えられ、ザファイーラは人の姿になり2つの車椅子を抱えて。

6人は海の方へと飛んで行つた。

「さて、私達は……アリサ、どうした？」

「あ、あ、あの犬……」

「ん？ ああ、ザファイーラか。守護騎士は4人だし、ユーノやアルフで

姿を変える魔法がある事は知っていただろうか？」

「今までそれらしい気配は全然なかったじゃない！」

紹介ぐらいはしなさいよ！」

「紹介はしただろう、子犬の姿だっただけで。それに、魔法の秘匿にきちんと気を付けているという事を証明しているじゃないか。」

まさか、人前で姿を変えるわけにもいかないだろうか？」

「そりゃあそうだけど……納得いかなーい！」



別荘での話は、特筆する程のことは無く。

ナーデイヤリルが一部の人に物珍しい目で見られたりしたけど、そこそ普通話をしてたり、主や守護騎士達の訓練に高町なのが参加して目を回したり、みんなで大きなお風呂に入ったりした程度。もちろん、男女は別で。

訓練で主が使用した誘導弾や障壁破壊弾を混ぜた高密度弾幕は、Sクラスの障壁でも丸ごと飲み込む。守護騎士達全員が防御を諦め、全力で逃走を試みる水準に至っていたりする。

2つのデバイスを使用したカートリッジの持続的な乱用の恐ろしさを見せつけ、観戦してた人達の目を点にしてた。

他には、黒羽早苗が食材の融通を依頼してきた事くらい。

ミッドチルダか地球で入手可能なものに近い種類のみに限定し、それでも味等が異なる可能性を示唆し、入手経路の口外を禁止し、別荘外への持ち出しは相当額の支払いを必須とし、私達や従者達の料理研究に参加すると言う条件で、合意。

こんな条件で合意に至った事自体が意外。料理の研究にかける情熱を甘く見過ぎてたかも。

利点はあるし、食材の入手についても言い訳出来る範囲になったから、とりあえず許容範囲。

その後、人数は減るけど1週間後に水着等を持参でもう一回来る事になったのは、予想の範疇。

お姉様と主、八神はやて、八神シャマル、ザファイラ、高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングス、長宗我部千晴、真鶴亜美、夜月ツバサ、黒羽早苗が、今回の参加者。

黒羽早苗は海には見向きもせず、料理担当の従者達と楽しそうに調理場に籠つてた。

というわけで、海岸で遊んでる人は女性だけ。但し子犬モードのザファイラを除く。

「プライベートビーチでも、あんたはそんな恰好なのね」

アリサ・バニングスにジト目を向けられてるのは、お姉様。

着てる水着はタンクトップにロングパンツ、加えてラツシユガードとサングラス、全部黒。おまけに幼女モード。

ちなみにアリサ・バニングスの水着は、ピンクのワンピース。今は2人でパラソルの下に並んで座ってる。

黒羽早苗と従者達は少し離れたところで昼食の準備中だし、他の人は海の方へ行ってる。

「何とでも言うがいい。私の前世は男なんだ、女の感性は解らん」

「だからって、隠し過ぎじゃないの？」

その姿も大人の姿も、美人なのは間違いないんだし。鏡で見て綺麗とか、可愛いとか、思わないわけ？」

「私が着飾れば無駄に変態共の視線を集めるし、男に言い寄られて喜ぶ神経は出来ていない。」

それに、着飾った自分を見るのは飽きた。美人は3日で飽きるとも言うし、外見がコレだろうが中身は私で、私は私が嫌いだ」

「それって外見だけで判断しちゃいけないって事じゃない。」

それに、自分が嫌いって、どういう事よ？」

「……なあ、アリサ。幸せって、何だろうな？」

「何よ、話を逸らすのに哲学に走るわけ？」

幸せねえ……家族や友達と仲良く、ってのじゃダメなの？」

経済的に恵まれた、少なくとも困ってないから言える事ではある。

でも、精神面から見れば。

「いや、何も悪くない。模範解答ですらあるだろうな。」

そこで問題だ。不老は確実に、献身的な部下達に支えられた生活をしている、権力抗争に慣れ過ぎた私にとって、家族や友達とは誰を指すんだろうな」

「家族って、夜天とかいう人とかチャチャとか、あとはアコノやはやてじゃないの？」

それに、私はもちろん、なのはやすずかだって友達と思ってるんだけど」

「夜天は確かに姉だから家族と言えるだろうが、話した事も無い相手だ。チャチャは私の部下、アコノは私の主だから上司に当たる。同じくはやては姉の上司、守護騎士達は姉の部下だ。」

お前達にしても、高町や月村の家としては……地球の生活を確保したりするための協力者、悪く言えば駒として見てしまっているんだ。」

転生してる連中は、敵か部下か保護対象か……この前居た馬場と上羽はさほど仲良くなっていないし、黒羽は協力者的な状態か」

「何なのよ、それ」

「この世界で目覚めてから一度眠るまでに20年以上あったが……その間に居たのは、親の様な上司、部下、利害関係者、敵。」

良くも悪くも、損得、上下、敵味方の関係しかなかった。

自分の年齢や性別すらはつきりしない私は、誰を、どんな顔で友と呼べばいいんだろうな」

お姉様は、海岸の方で遊んでる人たちを見てる。

何だか寂しそうな雰囲気。

「まったく、アコノの感情が無いとか言いながら、似た者同士じゃない。これだから頭のいい馬鹿ってのは。」

誰を？ 気が合った相手でいいじゃない。

どんな顔で？ 何で顔を考えなきゃいけないのよ。

そんなややこしい事を考えなくてもいい相手が友達や家族でしょ。他に何がってるのよ、家族らしく振舞ってるくせに」

「私は私が何者かすら決められていないんだ。」

リーダーとしての言動は必要だから作った仮面の様なもので、家族としては家長として振舞っているつもりだが……元の私がどんな人

間違ったかすらあやふやな上に、大学生の男と同じ行動をするのも自分で違和感がある。だからと言って、子供らしい振舞いも出来ん。

それに、不老な幼女なんて余計な属性が付いているからな。様々な意味で必ず先に行ってしまうお前達と、どう接していいか……」

お姉様は幼女らしい行動をしたことは無いから、外見相応の振舞いには慣れてない。

永遠の幼女だから、人の様に成長する事も無いし。

今の八神家で不老じゃないのは、八神はやてのみだし。

「自分が何者かなんて、私だつて解らないわよ。」

それに、先に行くつて、要するに先に死んじゃう相手つて事よね。そんなの気にしてたら、お年寄りと仲良くなれないじゃない。すずかなんて私達よりだいたいぶ長生きするつてのを話してからのの方が明るいくらいだし、大したことじゃないわ。

だいたい、ややこしい事を考えないつて事は自然体つて事で、偉そうでも小心そうでもいいから、要は自分が楽なように振る舞えばいいつて事じゃないの。

で、孤独な最強は避けたいとか言つてた人が、何で孤独なボスになりたがつてるわけ?」

「……ははっ、やっぱり、お前達はどこかおかしいぞ。」

なのはといいすずかとい……本当に、お前達も転生者なんじゃないだろうな?」

「何だよ。一般人代表とか言つてたくせに」

「明らかに小学3年生の発言じゃないからだ。」

それにしても、頭のいい馬鹿、か」

「他人とどう接していいか解らないなんて、私は2年も前に通過した事だもの。」

文句ある?」

口ぶりだけなら険悪そうだけど、お姉様もアリサ・バニングスも、笑つてる。

「いや、適切だ。今の私を表現するのに、これ以上の言葉が思いつかないくらいにな。」

これからも頼むぞアリサ。お前は私にとって、ある意味で最高に特別なんだ」

「な、何をよ。何も出来ないって知ってるでしょ?」

「いや、特別だ。少々金持ちの家に生まれて頭がいいだけの、知識以外には日本人として特別なものを持っていない、私の周囲で唯一の一般人と呼べる存在なんだぞ。」

はつきり言えば、平穩な日本の象徴だ。

にもかかわらず、人外を極めたような私を見通すんだ。これが特別でなければ、何と呼べばいいんだ?」

「変な理屈つけなくても友達でいいじゃない、バーカ」

「研究馬鹿と言われた事はあるが、正面から馬鹿と言われるのも新鮮だな。」

友達……そうだな、友達、だな。友とは……そういうもの、だったな」

「ちよ、保護者キャラのくせに涙もろすぎでしょ!?

ああもう、泣かないでよ! 泣くなー!!」

A☒S編18話 裏で蠢くモノたち

お姉様の泣き顔は、私達の認識阻害と防音結界のおかげで他の人に見られることは無く。

ついでに、大学の五月祭で見せた態度が素なんじゃないかと言われて、唾然とした顔も同じく。

気付いてなかったのかと盛大に突っ込まれた頃に、人が戻ってきてうやむやになった。

その後、バカンスの際に少々訓練したからか、思いつきり力を使える環境だからか。

時々、高町なのはやお姉様側の転生者達も訓練で別荘に来たがるようになり、結果的に、時々合宿の様な事をするようになった。

見た目の隠蔽が難しい儀式魔法や実際の空中戦など、日本ではやり辛い訓練もあるから気持ちは解る。

主と高町なのはの砲撃合戦は花火みたいでなかなか綺麗だけど派手だし、夜月ツバサが全力で儀式魔法を使おうとするとたまに失敗して爆発する。どちらも隔離環境じゃないと色々問題があるし、真鶴亜美は能力ではなく魔法での治療の練習が可能だし、長宗我部千晴は練習対象を障壁や境界系に絞って流れ弾を利用して強度を確認したりしてる。訓練内容等に問題は無い。

お姉様は、せめてミッドチルダに行ってる人達が戻ってこないと、魔法戦闘の組み合わせが少なくてつまらないとぼやいてた。お姉様や私達は実力の隠蔽的な意味で、守護騎士達は蒐集等で忙しいから、従者達は力不足を言い訳にして、戦闘訓練には参加してない。

ちなみに、アースラ組の2人は、基本的に観戦はいいけど参加は禁止。どこでどの程度の訓練をしたかとか、訓練メニューの記録的な意味で、とても問題があると判断した。

参加者の目的の一部が割と豪華な食事や、遠慮が要らないほど広く人の少ない海の様な気がするけど、まあ気にしない。

調理には黒羽早苗も参加してるし、感想やちよつとしたアイデア等も聞けて、そっちの研究も捗りやすくなってる。材料は基本的に別荘

産で、仕入のコストはかからない。

やっぱりと言うべきか、黒羽早苗の作った料理は、何らかの回復効果がある模様。疲れが取れてるといふ感想が出やすい。注意して見ているけど、特別何かをやっているわけでも、魔法の効果が発動しているわけでも、魔力素が動いているような様子も無い。謎すぎる。

囑託魔導師の試験組とプレシア・テスタロッサの裁判は、かなりいい感じになってきた。

協力者がそれなりにいるのも、順調な要因。証人として、かつてプレシア・テスタロッサの助手で、現在は時空管理局ミッドチルダ地上本部で連隊長になっているテイラン・ヒューイットが現れたのは私達もプレシア・テスタロッサも驚いたけど、全力で弁護する構えだった。レジアス・ゲイズを抑える効果も期待出来るし、有り難い援護。本人も善意の様だし、有り難く受け取ってる。

こんな感じでどちらもかなり目途が立ちつつあり、遅くとも2か月、恐らくあと1か月前後で片が付きそう。

ミッドチルダといえば、ギル・ガームスは思った以上に真面目。

原因の1つ目は、日本での逃亡生活。だいたい精神的に参ってたら、変わるきっかけには充分。

2つ目は、今の環境。魔法や王の財宝レアスキルを特に隠さなくて良いのは、日本よりも楽に見える。

3つ目も、今の環境。原作の人物、チンクとは金子狗太対策で出来た協力関係がきっかけで仲良くなってる。セインやデイエチともそこそこ仲良くなってるし、恋愛感情は無く、ハーレムにはなっていないけど、美少女が近くにいる事で精神的な安定は得られたらしい。

今は、この環境を維持する目的で協力するという姿勢に変わっている。その一環として犯罪行為に難色を示しているし、ジェイル・スカリエッティもその辺は考慮しているみたいだから、どちらかと言えばストッパー的な感じになっている。

そのすぐ側に居る杉並英春は、魔改造中。

レリックに似た魔力結晶体を利用した、改造人間化の道を着々と歩んでいる。明らかにレリックウエポンに通じる技術の実験台。だけど、

本人はこれで自由な行動が可能になると信じてるし、失敗する可能性の説明を受けた上で選択した未来でもある。

全ての情報を得られたわけじゃないけど、理論だけで見れば可能性はあると思えるし、別に助ける義理も無い。結果的に真人間になる可能性も考慮して、今のところは様子見。

ジェイル・スカリエツィは、今の所あまり大きな動きは無い。元々派手な行動は少ない人物。レリック研究中の事故も速やかに自身の痕跡を消して撤収するはずだから、当然とは言える。

というわけで、八神家のお姉様と主の部屋で、発生した事件を報告なう。

「聖遺物の盗難、か……こんな時期だったのか？」

「ヴィヴィオが生まれるまでに、時間が有り過ぎだと思う」

お姉様と主は不思議そうだけど、時期は原作と比較しても間違っていない。

無印やA×sの10年後の話であるStrikerSの20話で、10年ばかり前の出来事だとジェイル・スカリエツィが言っていた。成瀬カイゼを通してカリム・グラシアに警告済み。不審人物の洗い出しは始めてたけど、間に合わなかった模様。

「……あまり、無理はさせるな。」

十分な権力基盤があるわけじゃないんだ、下手をすると排除されるぞ」

それも本人に警告済み。だからこそ、不審人物の調査しかしてなかった。

結果的に、それが盗難を早めた可能性はある。

犯罪者組織に狙われている可能性があるという情報をもたらしていた事で評価は上がったけど、捜索に加わるよう指示を受けて、どう探すかをシャツハ・ヌエラと相談してる。

盗難は秘匿されてて、捜索も秘密裏に行うよう言われてる。他に動いてる人の情報も貰ってないから、困ってる模様。

「つまり、手を貸すかどうか、か？」

「手を貸す事自体は可能？ 現状で情報があるかという意味で」

可能。完璧に追跡してる。

予想通り、ジェイル・スカリエツテイの研究室に運び込まれた。道中、チクアーブ及び変態ロリコンも追跡してる事を確認済み。

「……あいつらも調べていたのか。」

「……あいつらも調べてるんだ……。」

「真面目に情報収集をしている可能性はある。」

グレアムの背後とかの割と重要な情報も捕まえてるから、これもその一環かもしれない」

「確かに、その可能性はあるが……まさか、ヴィヴィオを見たいからとかいう理由じゃないだろうな?」

「あーあー、テステス、It's fine today、ニャンコ子ニャンコ孫ニャンコを渾身の力で魔術師手術中」

（止めんか鬱陶しい!）

何というタイミングでの管制通信。

しかも内容がおかしい。

（相談したい事があるので、まずは連絡をと思ったのですが。

いきなり押しかけるのは問題ですし、何か別の問題でもありましたか?）

（問題だらけだ! いや、先に連絡するのはいいが内容がおかしいだろう!）

（せっかくエヴァちゃんとお話するのですから、少々可愛い感じにしようかと。

お気に召さなかった様ですので、過去を忘れて本題に入りたいのですが）

（……聖遺物の話か?）

（やはり、あの気配はチャチャちゃんでしたか。流石ですね。

所在はこちらでも把握していますが、どの様な方針で対処するか相談したいと思ってますね）

（そうだな……お前の事だ、誰が捜査に動いているか把握しているかな?）

（いやあ、買いかぶり過ぎですよ。

とりあえず、カリムちゃんが動いているのは把握していますし、他にも何人が動いているようですが、全体は把握していませんよ)

(そいつら自身が発見出来る可能性はあるか?)

手を出した司祭が口を割るとか)

(彼は永遠の口止めをされてしまいましたから、その線は無いですね。

直後に魂を全力蒐集してみたのですが、どうも相手を普通の神官の女性だと思っていた様です。生きていたとしても、まともな情報は得られなかったでしょう)

(……何をやっているんだお前は。それに、随分と解析が早くないか?)

(いやあ、聖遺物に仕掛けておいた警報の反応で慌てて駆け付けたら、丁度体の中から大きくて硬いモノを抜くところでして。まるで天に昇るような表情を見てしまいましたよ。

いい年の男女が抱き合ってそんな事をしている所に声を掛けるなんて、とてもとても)

(表現がおかしすぎるだろうが！)

何をどうやったら殺人現場がそうなるんだこのド変態!!)

(間違った事は何も言っていないよ?)

そうそう、記憶の解析については、本当に簡易的にしか行っていませんからね。詳細に調べると別の情報を得られる可能性は否定しません)

(……ああもう、貴様はもう口を開くな。

とりあえず、カイゼを通じてカリムに情報を流す。それでいいかな?)

(おや、手助けはしないのですか?)

(別に回収出来なくても、私は困らん。

何か不都合でもあるのか?)

(私としては是非ともカリムちゃんに回収して頂いて、得点を稼いでほしいのですがね。

エヴァちゃんが動かないのであれば、私が少々動いてみましょう。どう動けば邪魔にならないかは、チャチャちゃん達と相談すれば良い

ですか?)

変態と相談する?

内容はともかく、行為がやだなあ。

(それでは、間にカイゼ君やセツナちゃんに入ってもらいましょう。

私と直接会う必要は無いという事ではどうでしょうか?)

それなら何とか?

カリム・グラシアと直接会うのはあの2人だから、どこかで話をする必要はあるし。

(……おかしなことをするようなら、滅するぞ。それでいいな?)

(ええ、構いませんよ。

それでは、今から蒐集した魂の記憶を精査しますから、打ち合わせは2人の訓練が終わった後という事で)

(あいつらのスケジュールも把握済みか。まったく、本当に unnecessary 事はしていないんだろうな?)

(当然です。必要な事しかしていませんよ)

(その基準が信用出来んのだこの阿呆!)



そんな感じで、8月に入って3日目。

動きがなかったギル・グレアムが、ちよつと動いた。

具体的には、会いに来た。

「目的は、私の見極めだな。

本人だけが来るとは思わなかったが」

なんと、猫も来てない。正確には、地球に来てるけどイギリスにいる。

対するこちらは、お姉様に主に八神チャチャ、八神はやて、守護騎士が3人と1匹。

解りやすく言えば、全員いる。

「ここで警戒して誠意を見せないよりも良いと思つてね。

それに、はやて君に詫びなければならぬ事がある」

「私に、ですか？」

「ああ。」

「済まなかった」

ギル・グレアムが、テーブルに擦り付ける勢いで頭を下げてる。椅子じゃなく座布団に座ってたら、土下座になってた。

「え、えーと、何がですか？」

八神はやて、困惑中。

「謝られる理由が理解出来てない。」

「父の友人を騙った事。君を孤独にした事。君の命を犠牲にする計画を進めていた事。」

「どれも、決して許される事ではない」

「頭を上げてください。私は、不幸と思ってませんから。」

「おじさんが管理してくれていたおかげで、不自由なく生活出来ました。」

「隔離してくれていたおかげで、魔導師の介入が無かった可能性があれとも聞いています。」

「計画も、今の技術では他に手段が無いんじゃないか、って」

「そう言ってくれるのか……有り難う。」

「それにしても……」

「ちよつと涙目になりつつ、ギル・グレアムが再び頭を下げてる。」

「でも、お姉様を見る目が不思議そう。」

「何か？」

「いや……あれだけ言っていたにしては、随分と優しい説明をしているのだね。」

「極悪人と罵られる可能性も考えていたのだが」

「エヴァさん……グレアムおじさんに何やったん？」

「グレアムが進めていた計画の問題点を指摘した上で私の力と方針を示し、理解と協力を求めただけだが」

「あれをそう表現するのか……なかなかの狸だ」

「何か問題はあったか？ 表現方法は少々強引だったと思うが、ああでもしなければ止まれなかっただろうに。実績も持たない小娘が下

手に出て翻意出来る程度の覚悟だったなら、失望するぞ。

それに、罵られて贖罪した気分になられるのも不愉快だ」

「ややなあ、何も恨んだりしてへんゆうたよ?」

「だから、別に煽ったりしていいだろう?」

「なるほど、リンディ提督の説明は事実という事か。あれほど明確に力を示さなければ、とても信じることは出来なかつた事も事実だろう。

だが、君に聞きたい事がある」

「闇の書の現状について、か?」

「ああ。現状について、きちんと把握しておきたいのだよ」

組織を説得する手札としても、自身が納得するためにも、必要な事。

リンディ・ハラオウン経由で少しは聞いているはずだけど、それだけだと心配なのは理解出来る。

「話はリンディから聞いているだろうが、闇の書は既に起動している。そっちにいる4人が守護騎士だ……つと、ザフィーラ、ちよつと人の姿になってくれるか」

「了解した」

「ああつ、もふもふがつー!」

とん、と床に降りて、人の姿になるザフィーラ。

八神はやてが残念そうに手をパタパタさせてたけど、とりあえず尻尾をもふる事にしたらしい。

「友好的な関係を築けているようだね。

作業の方は、どうだ」

「そうだな……どこまで聞いているか知らんから、順に説明するぞ。

まず、闇の書を夜天の魔導書に戻す事が最終的な目標だという事は、以前言った通りだ。その為に、改悪や改変をされた部分を調べる必要があるんだが、現状では防衛プログラム……最も改変が酷い、闇の書の闇が邪魔をしている。

そこで、夜天の魔導書の管制人格を目覚めさせるために、現在は蒐集を進めている所だ」

「蒐集を? 被害は出ていない様だが、どうやってかね?」

「被害は出ているぞ？ ミッドチルダあたりの犯罪者限定だがな」
「それは……まさか、黒の騎士団かね？」

あの者達はミッドチルダ式の魔法を使っているはずだが」
「守護騎士達が違和感無く使える魔法とデバイスを用意したんだ。古代ベルカ式の魔法をミッド式に見せかけた、近代ベルカ式の逆の様なものだと思うってくれればいい。」

表向きは義賊としてならず者から蒐集しているし、回復までの時間を稼ぐために魔力封印を施しているからな。公式には被害無しだ」

「そうか……それが、問題を抑えるための手札という事か。」

随分と周到に用意しているのだね。間に合わなければ意味は無いが、順調かね？」

「そうだな。蒐集は……どこまでいっている？」

「もうすぐ200ページ、やったか？」

「はい、主はやて」

八神シグナムが頷いてるけど、正確には186ページ。

初期のデバイスや魔法に慣れるまではゆっくりペースだったし、今も犯罪者の情報を確定してからだから、決して早くは無い。

ただ、八神はやても了承しての行動。隠れてやらなくていいし、情報収集は私達がやってる分、負担等はかなり少ないはず。

「遅いと感じるかもしれないが、当面の目標は管制人格を起動出来る400ページだ。」

起動後も継続するかは、その結果次第だな」

「ふむ、完成させる事も有り得るといふ事か」

「基礎部分への介入が、完成前でも可能かどうかで変わるんだ。」

介入可能なら、管制人格と協力して何とかする。

出来なければ、完成後に使えるようになる管理者権限も使う事になるだろう」

「そうか。最悪の場合は、戦う事も視野に入れているのかね？」

完成させるといふ事は、暴走に立ち会うという事でもあるはずだ」

「完成させる場合は、そうなるだろうな。」

安心しろ。そうなっても無人で可能な限り生物の居ない世界で行

うし、暴走に関する被害も最小限に抑えるさ」

「ふむ……ならば、こちらでも安全策を取らせてもらって構わないかね？

完成を目指す事が確定した場合は、闇の書に関して情報を公開したいのだ」

「公開した際の問題はいくつも思いつくはずだ。

それを把握した上だとして、私を説得出来るだけの理由があるのだろうか？」

「暴走と事後処理に関して、最低限の手札が欲しいのだよ。

その代り、無人世界の用意はこちらで請け負おう」

「つまり、暴走する現場にアルカンシエルを持ち込ませろ、という事か」

「意図は説明したほうが良いかね？」

「失敗した際の保険と同時に、今までの犠牲者の鬱憤を晴らさせる……といった所か？

そうだな、アースラにアルカンシエルを積み、発射はリンデイの判断で行う事。

次にこんなチャンスが来るのは何時か解らんから、短絡的に撃てば未来に闇の書の被害を出す事に繋がると、搭乗する関係者全員が理解する事。

この2点が守られる事が最低条件だな。それが守られるか解らん現状では、了承しかねる」

「察しが良くて助かるが、他にも理由があるのだよ。

やはり、悠久の翼の方針を変えるのは難しい。現状ではまだ起動していない事になっているが、いずれ気付く者も出るだろう。色々探っているクロノに聞いたが、背後に何やら良からぬ動きを見せる者もいるようだ。一部の者には、既に情報が漏れ始めていると言ってもいい。そういった者達の動きを牽制するために、ある程度は情報を公開したい。表に出るのが嫌だと聞いているから、発見者として私の名を使う事も考えている」

やっぱり、組織を抑えるのは簡単じゃなかった。というか、現状で

は何もしないのはある意味正解。それに、口ぶり的には最高評議会辺りも蠢いてそう？

でも、今後の展開を考えると。

「駄目だな。お前が発見者として表に出た場合、以前のはやてとの関係を持ち出されると面倒な事になる可能性がある。」

そもそも、その為にプレシアを用意したんだ。裁判が終わり、地球に來た後であれば近辺を調査して見付けた事に出来る。アースラの拠点近くに住むだろうから、イギリス人でミッド在住のお前より言い訳もしやすいはずだ。

お前はお前で、友人の娘を助ける為に、純粋な抑え役として働くといい」

「そうか……なかなか、難しい事を要求してくれる」

「技術的に一番難しく管理局では不可能な、闇の書を何とかする部分は私が請け負っているんだ。」

時間稼ぎは……そうだな、何かきっかけを作って、ユーノを無限書庫に放り込んで改めて対処法を探させる事にしたらどうだ。発掘や調査に適性があるスクライアの少年で、今はクロノ達と一緒に居る。そうやって表から手を回している格好を取れば、少しくらいなら何とかなるだろう。ついでに、無限書庫の有効利用にも役に立つぞ。

それに、私だと脅すか殲滅するくらいしか出来んからな。少しの知恵くらいなら出してやるが、その他の有象無象の対処を任せるくらいは、構わんだろう？」

「我々は、我々の為に働けということか。」

随分、厳しくも優しい女神だ」

「ふん、私は俗人だ。そんな高尚な代物に成り下がる気は無い」



そんなわけで、ギル・グレアムが会いに来てから1週間。

私達の増員が完了する頃、カリム・グラシアを中心とするチームが功績を勝ち取った。

その前提として、^{カイゼとセツナ}2人からカリム・グラシアへ、本の姿の変態^{ロリコン}を幻の書として返却。つい最近まではカリム・グラシアの手元にあつたのは間違いないし、気付いたら転移していたという説明文を変態^{ロリコン}自身がページに表して押し通した。というか、その説明だけを示したまま、変態^{ロリコン}は沈黙してた。

^{ロリコン}本人の弁護がない事をいい事に、古代ベルカ語を管理世界標準語に翻訳する事も可能な古代ベルカ製のロストログア、通称幻の書として改めて紹介。意識のある本だから寝室や着替えを行う場所には置かない様にと警告はした。これについては話しかけると内容が変わる事から気付いてたようで、素直に納得してた。

同時にジェイル・スカリエツティの研究所の位置情報と、そこに盗品が運び込まれた可能性が高いという未確認情報も提示。カリム・グラシア自身の予言能力と併せて、怪しい情報があつたため警戒し、個人的に得た情報も併せて考察し場所を突き止めたと説明する事に。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーはまだ囑託魔導師でもないから、変に目立つのは良くないと判断。だけど、必要になったら、個人的に得た情報の情報源だと公開して構わないと伝えてある。

その結果、聖王教会の騎士団が秘密裏に突入するという荒業を見せてくれた。

踏み込んだのはカリム・グラシア、シャツハ・ヌエラ、4人の協力してくれた騎士。

追加で、時空管理局からヴェロツサ・アコース、その上司で査察官のクレスタ・ビガーも参加。こちらは、聖王教会の暴走ではない事のアピールを兼ねてる。

踏み込まれたジェイル・スカリエツティの一味は、今まで使ってた研究所から逃亡。

通路が潰されてたり探知妨害が酷かったりして全体の捜査は出来なかつたけど、聖骸布は取り返してたし、よく連絡を取ってた時空管理局の関係者の情報も得てた。

つまり、聖王教会寄りのカリム・グラシアとシャツハ・ヌエラは大手柄。警戒の早さと回収成功により、予言能力と行動力が共に高く評

働かれた。

時空管理局側としてのヴェロツサ・アコースとクレスタ・ビガーは、動きがおかしい。

クレスタ・ビガーが最高評議会に連なるようで、突入情報を漏らしてジェイル・スカリエツティが撤収する時間を作った。聖王教会寄りのヴェロツサ・アコースの監視役も兼ねてると思える。

ヴェロツサ・アコースはそれに気付いてて、時空管理局に関する情報の殆どを個人で確保。トカゲの尻尾の端っこだけを提出して、お茶を濁してた。情報は後々使うつもりでいるようだから、その際は是非とも後押しをしたいところ。でも、今は我慢。

この研究所で調整してた戦闘機人は発見されなかったけど、現状維持で隔離処理されてた。隔離を解除しない限りは動けないのが確定したから、早期の戦力増強の芽を摘めたのは大きいかもしれない。

というわけで、いい面だけを見れば、これ以上ないほどの成果。

でも、成瀬カイゼやセツナ・チエブルーと会ってるカリム・グラシアは、あまり嬉しそうじゃない。

「つまり、短期間で成果を上げ過ぎた、と」

「大きい組織は、大変ですね」

「ええ……少々やり過ぎた様です」

要するに、問題は上層部の一部に警戒されるようになった事。

どうも他に動いていたのは司祭やかなり身分が高い者ばかりだった模様。その中で一番立場や戦力が弱いカリム・グラシアのチームが短期間で最高の成果を上げたのが、警戒の理由。

親の地位や権力を使ったとか、実は内通者なのではとか、色々と誤解されてもいるらしい。

それ、なんて醜い嫉妬？ とか言っちゃうと、もっと悪化する。

「ですので、お2人には是非、早々に囑託魔導師となつて欲しいのです。」

具体的には、来週にも試験に合格して頂ければと」

「準備は順調ですし、大丈夫だと思いますけど……」

「予定より少し前倒しだね。どんな意図があつての提案かな？」

「貴方がたの故郷を見に行く、古代ベルカに詳しい方に会いに行く等、色々と言目は準備出来ますから、少々ミッドチルダを離れたいのです。」

「まだ権力を持つ気はありませんから、その気の無さをアピールする為に。派閥に取り込もうという動きから逃げたい、という意味もあります」

「逃亡と見られる可能性は大丈夫なのかい？」

「第97管理外世界へ行く事は、自力での動きにくい、管理外世界への隔離にも見えるはずです。」

その上で行方をくرامせでもしたら、私は内通者に認定され、聖王教会と時空管理局の仲に亀裂が入る事になるでしょう。

「あえて難しい状況を作る事で、少なくとも、様子を見る時間という猶予は得られます」

「なるほど、了解したよ。」

「試験はフェイトも一緒かな？」

「問題が無ければ、3人が良いでしょう。」

私としては誰か1人でも合格して、第97管理外世界へ行く事が出来れば良いですし」

「私達としては、全員で合格したいですけど……」

「結果として全員が合格出来ればいいわけだから、大丈夫だと思うよ。」

「試験の手続きは何時頃かな？」

「お2人の了承が取れましたし、後はフェイトさんに確認が取れたらになりますよ、明日にでも早速。」

「管理外世界という所は行った事が無いので、実を言えば少々楽しみなんです」

「僕達も、色々事情があるからね。全力で頑張らせてもらうよ」



一方その頃、お姉様の別荘では。

「受けてみて。これが私の、全力全開！」

「赤き空、大いなる冬に星々は天より墜ちる。砕かれた世界に、響け終焉の笛」

『Starlight Breaker』

『Ragnarok
神々の黄昏』

「だー！ こんな防げるわけねーだろー!!」

「あらあら、治療出来る程体が残ってくれるかしら？」

「落ち着け千晴、流石にこれを防げとは言わん。」

それと亜美、一応非殺傷で傷は無い……という事になってるからな？」

（良かった……戦闘訓練をケアンズの訓練場に限定しておいて、本当に良かった……）

「ははは……ユニゾンで魔力が上がっても、意味がねえくらいの差がありやがる……」

「遠すぎる……やっぱり、僕の物語は始まってすらいなんだ……」

主と高町なのはがお互いをバインドで縛ったまま、大攻撃の打ち合いをした。

最終戦争も真つ青。周囲の景色が凄い勢いで破壊されてく。

長宗我部千晴がブチ切れて叫び、真鶴亜美は何か妙な方向に恍ける中、お姉様が防御結界を展開。その中で、観戦してた馬場鹿乃と上羽天牙は魂が抜けたような顔で遠い目をしてる。

着々と実力をつける2人を褒め称えるべきか、無理を叱るべきか、とっつても困る。

……ホントどうしよう。

A×S編19話 求める手の先は

集束砲撃の撃ち合いを Anti Magic Circuit Field A M F —— 虚数空間を再現した、強烈な方——で強制中断させた後、2人に拳骨を落としたお姉様。

高町なのはを連れて高町家の道場に戻り、呼んでおいた高町恭也に指導開始を依頼した。

内容は気の扱い方入門、高町なのはカスタム。未完成だけど大体の指針は出来てるし、実際の効果を見ながら調整したい部分もあるから、頃合いではあった。

「えーと、どういう事？」

「お前が使ったのは、集束砲撃と呼ばれる魔法だ。

集束型の魔法は確かに強力なんだが、体にかかる負荷が大きい。それを少しでも何とかするための修行だと思ってくれ。

というか、これをきちんと身に付けるまでは、集束魔法は使用禁止だ。意地を張って訓練で体を壊していたら、何をやっているか解らん」

「そんな……」

いまいち理解し切れてない高町なのは。

その頭を、ポン、と軽い感じで高町恭也の手が叩いた。

「なのは。少し前の俺が膝を壊していたのは知ってるだろう？」

あれは俺が無理をした結果で、剣士としてかなり致命的だった。

魔法で治ったが、治らない傷もあるだろう。恐らく、集束魔法とやらで出来る傷はそういうものだ。そうだね？」

「理解が早くて助かる。

参考までに原作の話もすると、無理の結果として数年後に死にかけてるぞ。一応生き残るが、その後も色々な後遺症やらで、能力は落ちたままだ。

命を懸けるに足る理由があるならともかく、雑魚戦や模擬戦でそうなるのは不本意だろう？」

お姉様は、いくつかの映像を空中に投影。

具体的には、StrikerSの9話で使われてた記録映像。

「これって……ヴィータちゃんが……？」

「詳細な内容は語られていないが、ヴィータはお前を助けられなかったと悔やんでいる様子だったな。」

普段なら何の問題も無く味方を守って落とせる筈の相手だったようだが、飛べなくなるところか、立って歩く事さえ出来なくなる可能性すらあったとされていた。

無理を重ねれば、実際にこうなる可能性は決して低くない。それでも今使うのか？」

「うう……」

高町なのは、涙目。

その様子を見てる高町恭也の目は、ちよつと怖い。

「これでも駄目なら、カートリッジシステムを乱用して自滅した馬鹿共の歴史を、実際の映像付きで見せてやろうか？ 自身が持っている魔力以上のものを使うという意味では同系統の技術だから、参考になるぞ。」

例えば、空中戦の最中に自身のリンカーコアを砕いてそのまま地面に叩きつけられたり、七つ星の拳の様に体が内部から「ごめんなきいつ！」……解ってもらえたように何よりだ」

映像を用意してたお姉様は、何だか残念そう。

だけど、お姉様自身が腕に裂傷を作ったりしてたから、写真とかで改めてその状況を見せるだけでも良かった気がしないでもない。

「心配するな、ずっと禁止とは言わん。」

基礎が出来てから、節度を守って使えと言っているんだ。

まったく……フェイト戦で使う機会が無いままだったから、油断していたぞ」

「え？ あれって……フェイトちゃんに使うはずだったの？」

「そうだ。」

……何だその目は。気になるのか？」

「それは……うん。すつごく」

「そうだな。映像として見せられる事を知った以上、気にならないと

言えば嘘になる」

「2人とも同じ目をしおって。」

だが、今はまだ全てを見せる気は無いからな。特に2作目はまさに今から、3作目は今から10年後の話だし、少なくともある程度片が付くまではダメだ。

人や技について妙なイメージを持たれたくないから、私達の元の作品についても同じだ。微妙に似ているから、惑わされるぞ」

「それって、何年も待たないと……駄目?」

ちよつと首を傾げて、上目遣いで尋ねてくる高町なのは。

こうかはばつぐんだ! 但しロリコン相手に限る。お姉様には効果なし。

「駄目だな。いつか全部見せてやるから、今は地道な努力の時期だ。」

撃墜なんてしたら、他の連中だけに見せるからな?」

「そ、それはだめっ!」



そんな感じで高町なのはを兄の高町恭也に任せ、別荘に戻ってきたお姉様。

主達は既に熱海に戻って、休憩中。

主は従者達の着せ替え人形よろしく、入浴後はバスローブ……という名目で、掘立小屋とか言ってる時のテオドラ風の服を着させられる。何か間違ってるけど、誰も気にしてない。

長宗我部千晴は、あの化け物共がと、力いっぱい黄昏てる。

真鶴亜美は平常運転。手元にあるのは緑茶と饅頭、ゆったりした空気が年齢に不相応だけど、何だか似合ってる。

そして、馬場鹿乃と上羽天牙はと言うと。

「何か、魔力が増える様な何かって、無いか?」

「せめて、もうちよつと何とか……」

2人揃って、お姉様に土下座し始めた。

「……阿呆共が。地道な努力が一番いいに決まっているだろうが。」

もし簡単に増やせるようなら、St r i k e r Sでレジアスが悩んでるわけがない。解るな？」

「それは解るし、レリックとは言わねえけど……カートリッジとか、技術は色々あるはずだよな？」

「お前達に渡すと、自爆するのが目に見えるようだから駄目だ。」

そうだな、お前達に解りやすそうな例として、蛋白同化ステロイドに例えてやろう。

これは、要するに筋力増強剤だ。ボディビルダーの一部は公然と使っているらしいし、スポーツ選手やらが使っていた例もある。オリンピックでもドーピング検査の対象になっているから、その程度には広まっているらしいな。

副作用としては、ニキビ、高血圧、肝障害、毛髪消失、鬱や暴力衝動等の精神障害、睾丸萎縮、乳房の女性化「わ、解った！ 解ったから！」……何だ詰まらない。

まあ、そういう事だ。諦めろ」

「……でも、さつきは物凄い勢いでカートリッジを使ってたよね？」

あそこまでとは言わないけど、ある程度は大丈夫なんじゃ……」

「お前達に適性があるか判らんし、それ以前にガチガチに管理してほしいのか？」

アコノにはおはようからおはようまで、風呂だろうがトイレだろうがベッドだろうがお構いなしに、24時間永久無休でチャチャが張り付いているぞ。

はつきり言うが、お前達にそれだけの労力を割く気は無い。それに、さつきなのはに集束魔法の使用禁止を言い渡してきたところだしな。あいつの為に、掌を返す気は無い」

「なら、アレだ。闇の書の蒐集から回復したら魔力が増えてたつてのは、駄目なのか？」

蒐集自体は出来るんだろ？」

確かに蒐集してるし、ミッドチルダの目立つ犯罪者を壊滅させたせいで搜索範囲が広がり、効率が落ちてもいる。

今なら金子狗太の件もあるから、ジュエルシードの影響で済ませる

事が可能かもしれない。

2人の場合、問題になりそうな能力は……あまり無いかも？

上羽天牙は、全く支障が無い。

馬場鹿乃の逆ナデポは夜天に引き継がれると問題だけど、雌犬ハーレムが発動してないから問題無い可能性が高い。王の軍勢にしても臣下を確保出来ると思えないし、仮に過去も対象に出来るとしても、闇の書に忠誠を誓っていた人も恐らくほとんど居ない。関係者が忠誠を誓うとしても、闇の書の主に対してのはず。

「……原作だと何らかの効果はあつたらしいが、限定的だぞ。良くても数パーセント増える程度、下手をすれば減る事になる。」

それと、エイミイやリンデイに相談して、本局の治療施設を使う許可を自分達で取ってこい。

これらと情報漏洩の危険性を納得した上で、問題にならないよう行動出来たなら、やってやらんことも無い」

「おお、それなら大丈夫だ。危険性は理解してるし、効果は要するに、綺麗に骨折して治つたら丈夫になるってやつだろ？」

「そんなわけがないだろうが、この阿呆。」

普通は骨折しないように丈夫な骨を作るんだ。順番を間違えるな」
「そうだよ。怪我だって痕が残るんだし、それで強くなつたと勘違いしちゃだめだよ」

「別にいいんじゃない？ 筋肉達磨が傷だらけになつたって、箔が付いたとか喜びそうだし」

黒羽早苗と夜月ツバサが、中華まんの山を持って登場。

さつきまで、従者達と一緒に作つてた。

「黒羽は解るが、今日はツバサも料理に参加か。」

そういえば、そっち方面の特典もあつたな。料理が上手くなりた
い、だったか？」

「まあ、そうなんだけど……」

「ボクとしては、すごく助かる能力だけどね。ツバサちゃんは不本意
みたいだよ」

「千晴の様に、期待と内容が食い違っていたのか？」

使い方次第では役に立つなら、力不足というわけでもないだろうし」

「見ただけで味が解るって、反則だよね。」

おかげで、ここにある食材が何の代用品になるか調べる作業がすごく進んだんだ」

「生野菜の味が解ったって嬉しくないわよ！

生肉の味を延々と調べさせられた恨みは絶対に忘れないから!!」

「あー……うん、ごめんね？」

その代り、一番美味しいところを食べ放題だったでしょ？」

「う……そ、そりゃあ、美味しかったけどさ……」

試食と称して、真っ先に美味しいものを確保してた夜月ツバサ。

何パターンも作った中で1種類だけしか食べてなかったから、その理由はお察し。

「そうやって調べたその結果がこれか」

「そうだよ。材料はこの人達がだいたい絞り込んでくれてたけど、いい組み合わせとか調味料の加減とかを探る時は、大活躍だったんだ。」

どれが当たりかって、見ただけで解るってすごいよね」

「わ、悪かったわねっ！」

「というわけで、どうぞどうぞ。」

手作りだからもちもち系の、基本に忠実な普通の肉まん和餡まんが出来たからね。元々苦手じゃなければ大丈夫だと思うよ」

そう言いながら、黒羽早苗は中華まんを配ってく。

従者達には好評だったし、出来は上々と言える自信作。

顔が書いてあるのが、餡まん。餅肌の顔をお食べ。



というわけで、数日が過ぎた頃。

馬場鹿乃と上羽天牙は、本気だったらしい。リンディ・ハラオウンにこっそりと話を通し、アースラの現地拠点で勉強中に突然苦しみだしたという事で、金子狗太の噂の一部「ジュエルシードの影響」とい

う話に便乗する事になった。

入退室等の記録に残るのを避ける為、実行は八神シヤマル。離れた場所の人物からも蒐集可能な特殊な転送魔法、正式名称「旅の鏡」を使って、2人の同時蒐集を決行。映像記録にも残さないために私達が幻影を担当して、見た目も記録上も、作り話に沿った形に仕上げた。

2人は事情聴取の際に金子狗太の写真を見せられて心当たりが無いか聞かれてたけど、2人とも首を傾げてた。年齢の差異のせいか、ステイル・マグヌスだとも判断出来なかった模様。

逆に、2人の写真が金子狗太に流された際はばっちり元キャラクターを言って、ジュエルシード等に関わっているはずだと断言してた。実際は関わってないけど、転生者なら関わっていると信じて疑わなかったらしい。

ついでに黒の騎士団の写真も見せられてたけど、混乱してた。守護騎士に似てるけどベルカ式じゃないし、狩人さんの色違い装備に見えるから、転生者か、その関係者だろうと思われた。つまり、闇の書関係とは思われなかった。

2人を治療してる本局内の医療施設では、黒の騎士団との関連を疑ってる。事実として傷害の内容は似てるし、実際同一犯だけど、証拠なし。こちらの予定通りにロストログア、つまりジュエルシード関連の障害ではないかという推測が有力候補とされた。

それを受けて、アースラへの捜査命令と共に、追及や監査も行われた模様。

「もつとも、いくら探しても、アースラには当時の2人の情報は無いんだが……」

連中は信じない、か」

「元々が後ろ暗い連中。疑心暗鬼にもなる」

というわけで、裏側に関わる時空管理局員と思われる一行が、秘密裏に地球へとやってきた模様。到着後に作戦の最終確認なんてやるから、フェイクでないなら情報が漏れる漏れる。

主な任務は、住所やらが判明してる魔導師についての、情報確認。但し、金子狗太が闇の書、八神はやて、守護騎士の情報を漏らしてる

からか、八神家に向かつてる連中はどうも殺気立ってる。

まずは確認とされてるけど、情報が真実なら全力で押さえるような指示もされてる模様。ただ、手段や手順はともかく、闇の書を確保しようという行動は時空管理局として普通の行動だと言えるから、お姉様も非難する気は無い。

確保前に確認が必要とされている情報は、八神はやたと守護騎士4人がいる事と、八神はやてが闇の書の主である事。蒐集については被害の報告は無いし、確認も困難だろうと判断されてる。

「確認と言いつつ、反応を見るために突然の攻撃も有り得るな。」

来客の対応は私がするから、アコノははやて達と一緒にリビングに居てくれ」

「解った。はやて達にはどれくらい説明しておく?」

「そうだな……怪しい気配が近付いているが何かあっても魔法や闇の書に関して知らない振りをしておけ、くらいは念を押しておくか。」

特にヴィータは先走りそうだし、シグナムも黙って見ている性格ではないし……竹刀とゲートボールのスティックも出しておくか」

「何かある事が前提になってる?」

「あれだけ殺気立ってるんだ。何も無いとはとても言えんぞ」

というわけで、予め説明した上で、夕食を食べながら消極的迎撃の構え。

情報の盗難対策として、八神はやての住所は記載してあるけど家族構成などは不記載、お姉様が「八神エヴァンジュ」^{スライ}だけど住所不明、主が「小野アコノ」となってる資料を、時空管理局内の鼠に掴ませている。新旧の情報が混じってるだけで完全な嘘はないから、中途半端な情報を盗んだ人が悪い。

ギル・グレアムから情報が漏れた様子は無い。悠久の翼の情報と比較しても八神はやての住所は一致してるし、そちらだと1人暮らしから同居人が増えた程度の記述みたいだから、仮に漏れても矛盾はしない。

そんな感じで、怪しい時空管理局員が到着。玄関前の2人は無手、家の周りの8人は杖を装備済みで隠れてるつもりらしい。私達の存

在は連中にとって想定外イレギュラーのはずだから、どう動くかは命令や性格次第。

そして鳴り響く、試合開始チャイムの音。お姉様は食事を中断して玄関へ行き、ドアを開けた。

「こんな時間に、誰だ？」

「食事の時間に失礼します。こちらは、八神はやてさんのお宅でしょうか？」

玄関前にいるのは、中年の少し優しそうな感じがするおじさんと、割と若いおにいさん。

どちらも顔はともかく黒髪で、一応日本人風の人を割り当てる余裕はあつたらしい。2人とも線は細めで肉体派ではなく、突然の荒事にはなりそうにない。

話をするのは、おじさん……分隊長の役目らしい。

「妹に何か用でもあるのか？」

あいつは足が悪いから、伝言で済むならそうさせてほしいんだが「お姉様でしたか。ですが、日本人ではないでしょう？」

実際はどのような関係で？」

「親代わりの親戚だ。」

それで、お前達は誰で、何の用事だ？ 興信所か何かの調査か？」「いえ、この近くに大きな狼が現れるという話を聞いて、調べているのですよ。」

調べている時に、こちらのお宅にいるという話を聞きました」

色々とダウト。突っ込み所が多すぎ。

狼の噂も事実も無いのは、周囲の聞き込みをすればすぐ解る。お姉様や八神家の家族構成を聞くのも不自然。

「はあ？ 子犬はいるが、大型犬すら飼っていないぞ。」

何かの間違いじゃないのか？」

「そうでしたか。念のため、確認させていただいても？」

「見せるくらいは構わんが。」

おいヴィータ、ザフィーラを連れてきてくれ」

（まだ食事中だな？ ザフィーラが食事好きという事で、適当に話を

合わせてくれ。それと、子犬らしく適当に暴れて食事に戻ってくると助かる)

「んー？ こいつ餌から離すと暴れっぞ？」

八神ヴィータの返事は、お姉様の意図をうまく掴んだ。

声色も緊張や警戒の色が無いから、怪しまれる要素も無い。

「ちよつと顔を見せるだけでいいだろうから、頼む」

「んー、ちよつと待ってくれ。ザフィーラ、餌はちよつと中断……おい、暴れんな！ すぐ済むから！ すぐだっつってんだろ！」

ある意味子供らしいひと騒動の後、バタバタ暴れるザフィーラを脇から両手で掴んだ八神ヴィータが登場。

ザフィーラの鼻の頭に、米粒が付いてる。

「済まんなヴィータ。」

で、うちの犬はアレだが……何か問題があるか？」

「だから暴れんいって！ 引っ掻きやがったなコイツ!!」

ザフィーラ、脱走。それを追って八神ヴィータも居間へと戻ってく。

「ヴィータちゃん、大丈夫？」

「怪我はないか？」

「念のため確認するから、こつちに」

「ザフィーラも暴れすぎや。いくら喰いしんぼさんでも、そんなに暴れたらあかんよ」

「はやて、躡ける時はもつと厳しく叱った方がいい」

その後、八神ヴィータとは別の5人分の声で、普通に会話が聞こえてくる。

予定より明らかに多い人数に、おっさんが困惑してる。

「ええと、お客さんでも来ていましたか？」

「全員家族だが、お前達は何をしに来たんだ？」

これ以上しつこいなら、警察を呼ぶぞ」

お姉様は、本気で迷惑そうな表情。

これ以上の会話は難しいと気付いたらしく、おっさんが覚悟を決めた表情になった。

「……では、仕方ありませんね。」

少々手荒になります、調べさせてもらいますよ」

その言葉と同時に、門の影に居た魔導師が魔法弾を発射。

お姉様は驚いたような表情で、何もせず右腕にそれを受け、少々挟まれて盛大に流血。

「くっ……強盗だ！ 警察を呼べアコノ!!」

「何だって!?!」

「止せヴィータ！ くそっ!」

真っ先に反応した八神ヴィータが飛び出してきて、続いて竹刀を持った八神シグナムも玄関へ。

「テメーらがやったのか!? 失せる強盗ども!!」

廊下にあつたゲートボールステイックを掴み、ある意味子供らしい動きで殴りかかる八神ヴィータ。

「大丈夫か!? 救急車も追加だ、シヤマルとチャチャは応急処置、急げ!」

八神シグナムは玄関を塞ぎ、お姉様を庇うような位置で竹刀を構えて侵入を断固拒否する構え。

その後ろでは八神チャチャが止血を試み、八神シヤマルが包帯を持って走ってる。

その間に、主は警察へ通報を終えた。はやても病院への緊急連絡はしっかり理解してるから、こちらもあつさりと完了。

しばらく八神ヴィータが大立ち回りを演じてる間に、パトカーや救急車のサイレンが聞こえてきた。その間、窓からの侵入や追加の魔法弾は無し。

「現地の治安組織が来ます。これ以上は!」

「ええい、撤収だ！ 何だっつんだこいつら!」

実に三下な台詞を吐きつつ、怪しい時空管理局員は全員逃走開始。空を飛ばない辺り、ここが管理外世界だという事は忘れてないらしい。

「逃げるのかよ！ 待ちやがれ!!」

「靴も履かずに追うつもりかヴィータ」

「クソッ！」

裸足で駆けてこうとする愉快な八神ヴィータを八神シグナムが止め、戦闘のような茶番が終了。

やり取りや姿は動画と静止画で残してあるし、後は警察とアースラに任せる。

警察が裏で時空管理局と繋がってるなら、うまく気付いてくれると嬉しい。

A S編20話 求められた手は

その後、お姉様はばつちり撮影出来たビデオを警察に提出。

最初の光についてはよく解らないという事で、怪我や映像の調査は全て任せるという立場を取った。怪我についても日本で可能な治療以上をする予定は無く、警察用の情報収集を兼ねて病院で治療を受けてる。

傷自体はそれほど深くないけど、通院はそれなりの期間になりそう。公的に使える記録を残すためだけけど、お姉様は面倒そうにしてた。

情報を受け取った警察は強盗未遂事件として捜査中。担当者は裏に関わってないようで、ものすごく困惑してる。ただ、こんな美女に傷を付けるなんてという男の下心的な義憤の後押しもあってか、やる気はあるらしい。

映像を元に、2人の映像公開と情報の募集は行われた。地球に居ないから絶対に見付からないけど、月村家か高町家から裏に情報を流す事も検討中。私達としてはどちらから流しても問題無いから、手法や内容については後で相談する予定。

エイミー・リミアエツタ経由で情報を受け取ったリンディ・ハラオウンは、それをクロノ・ハラオウンとレティ・ロウランに渡し、警戒と監査の役に立たせるように伝えてた。

地球からの提出は、ジュエルシード事件で名前が出てるお姉様が情報元になる。リンディ・ハラオウンも現地の魔導師との関係を壊される事を警戒して、管理外世界での魔法行使に関する調査を依頼したという言い訳が立つ。

映っているのは、無許可で管理外世界に行った魔導師と現地住民。管理外世界の現地住民との不用意かつ害意のある接触、しかも魔導師側だけが魔法を使い、現地住民を傷付けたという内容。表に出れば問題となるのは間違いない。

だけど。

『だが……転送ポートの使用履歴に情報が残っていなかったし、外見

が似た管理局員は別の管理世界で任務中だった、という調査結果になつたらしい。

あの映像だけを根拠に処分するには証拠が弱く、外見を頼りに手配はするが逮捕は期待出来ないだろう、だそうだ』

「結果が出るのがやけに早いが、そんな事だろうと思った。そもそも誰も履歴に残っていないだろうから、来ていないという証拠には弱いんだがな。マーカーやら魔力の質やら声紋やらで、本人なのは確認済みなんだが……その資料を提出しても結果は同じだろうし、これは保留するか。

現時点でも、迂闊に手を出すと余計な手間がかかると思わせられただろうから。これで少しは干渉する気が減るといいが」

今はお姉様がアースラの現地拠点に来て、通信でクロノ・ハラオウンと話してる。エイミー・リミエツタは台所においてこの話を聞いてないから、2人だけの秘密の会話。

時空管理局側の結果は、クロノ・ハラオウンの言葉が語ってる。要するに、握りつぶされたという事。

金子狗太にも映像を見せてたけど、何で守護騎士がデバイスを持ってないんだ、何でもう子犬なんだ、何だこの美人は、とか言いながら啞然としてた。

服装のせいか雰囲気のせいか、それとも私達が調整したせいか、お姉様がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの大人バージョンだとは気付かれなかった。金子狗太の情報は現実との齟齬がそこまで大きいのか、役に立たない、という評価に落ち着いてきたから、結果は上々。

非殺傷でも怪我をした事に動揺して追撃が無かった事を考えると、来た局員はまだ悪人に染まってると思えないと思える。どちらかといえば無能な上に振り回されてる様子が見えるから、当人を主目標とした報復攻撃は保留の方向。

1日程度の調査任務の内容をすり替えていたみたいだから、裏側もだいぶバタバタしてる。せめて数日の調査任務をでっち上げるか、数回に分けて、じっくり調査すれば良かったのに。証拠の隠蔽やらが面

倒になりそうだけど。

『僕の方には映像の人物のうち、現地住民のように見える人物について調査するよう命令が来たよ。間違いなく現地の住民だと確認出来る資料を渡しておいた。管理外世界とはいえ、それなりの文化と歴史を持つ国が発行した書類を含むから、証拠として問題無いはずだ。』

外見についての情報も渡ってしまったけれど、それは構わないだろう?』

「外見を知られたくないなら、映像など渡すものか。」

ところで、話はこれだろうが、相談というのは何だ?」

『ああ、相談と言うよりは提案なんだが。』

今のうちに、ユーノから蒐集しておくのはどうだろう』

「ユーノか……理由は?」

魔力量はさほど多くない。

他にやるべきことがあるなら、そちらを優先すべき人材のはずなのに。」

『ジュエルシードの事故があつた世界の人物が一時的に魔力を失う現象が発生している、という噂になっているんだ。』

これをもう少し拡大して、その世界に滞在した人物にも同様の現象が発生すると思わせられたら、そちらに行こうとする魔導師を牽制出来るかもしれない』

「そもそもジュエルシードと言われているのは、やはり地球という共通項からなのか?」

管理局で捕らえられてるアレは、ジュエルシードの騒動があつた時はかなり遠くで監禁されていたんだが」

『本局やミッドチルダから見れば、ロストロギアがばら撒かれた管理外世界、という認識だ。』

管理外世界よりもロストロギアの方が印象に残るからね』

「ふむ……その意味では、この前来た連中から1人か2人選ぶのもありか?」

『そつちはもう少し裏を調べられてからにして欲しいし、他にも理由がある。』

プレシアについての裁判がそろそろ大詰めなんだが……正直に言えば、ユーノが暇になる。

今までは色々手伝わってもらっていたんだが、後は法廷の場だ。証人として居てもらおう必要はあるけれど、逆に言えば、それ以外にやる事が無いんだ。

無限書庫に放り込むなら、それまでに回復出来る今を逃すと、タイミングが無いだろう?』

「そうだな……確かに、無限書庫の調査に入ったら蒐集は無理だな。

終わるタイミングが合うか判らんし」

『それに、2人を蒐集した時の映像を見たんだが、あれが人前、具体的には本局で人がそれなりにいる場所で行ってもばれない隠蔽なら、そういう場所でやってほしいんだ。

僕達が怪しい事をしていないという根拠にしたい』

「疑う連中は、それでもやっていない証拠にはならないと言うだろうが……目の前で見せれば、他の可能性を考えざるを得ない、という事か」

『そういう事だ。

どうだろう?』

提案自体は賛成。オーバーSクラスがゴロゴロいる状況でもない限りは、隠し通す事も可能。

具体的には、ギル・グレアムとプレシア・テストロッサが近くにいてる程度なら、蒐集する間くらいは何とか出来る。最初から全力で警戒されてると厳しいけど。

「悪くないが……お前からこんな提案があるとは思わなかったな。

悪い言い方をすれば、知人を生け贄にするんだぞ?」

『解っている。

ただ、目的と手段と結果を見て、何が正しいのか……正直に言えば、迷っている。

世界の平和を目指し、犯罪者すら利用して、それなりに安定した世界を維持している時空管理局。

姉を助けるため、全てを利用して、闇の書の悲劇を終わらせようと

している君。

組織と個人の違いはあるのは解っているが、君の方が優しい手段、望ましい結果を目指している気がするんだ』

「買いかぶり過ぎだ。私は、私の目的の為に前達も利用しているんだぞ？」

それに、法の守護者であるべき執務官は、法を無視する私のやり方を認めない方がいい』

『それでも大きな禍根を残さない様に動いているように見えるし、表立った問題も起きていない。』

しかも、決定的な証拠は見付けていないが、状況証拠を積み重ねると、君達の情報はかなり正しいと判断出来た。出来てしまったんだ。

時空管理局は、裏で犯罪者と手を組んでいる。全てが綺麗事で済むことは無いとしても、そういった手段を恒常的に取らざるを得ないなら、今の法や体制には問題があるという事だ。

その問題を解決する、今の問題がある中で緊急の課題を解決する……そういった時は、今の枠に捕らわれない君の様な人が力を発揮するはずだ』

「もう一度言うぞ、買いかぶり過ぎだ。しかも、私はどちらかと言えば悪人だぞ。」

私は私の手の届く範囲しか守る気は無いし、自分の為にしか動く気が無い。勝手に期待しても、後で裏切られたと思うだけだ』

『僕の日も節穴じゃない。見るべきところは見ているつもりだ』
「その自信が砕けなければいいが。」

それで、ユーノには説明はしておくのか？」

『いや、建前の方だけを話して、可能性があるとだけ伝えておくつもりだ。』

プレシアやセツナ達も、同じ対応でいいね？』
「事後にでもきちんと言明するなら、それでいい。」

決行前に準備が必要だし、タイミングを合わせる必要もあるからな。舞台が決まったら早めに連絡してくれ』

『了解だ』



そんな話の数日後。

諸々の手続きが終わり、今は囑託魔導師の試験の真っ最中。

挑戦者は、フェイト・テストロッサ、成瀬カイゼ、セツナ・チェブルの3人。

昨日の筆記試験は、3人とも合格ラインをクリアしてる。余計な手出しをされない限りは大丈夫だし、細工しようとした時点で潰すために監視もした。結果的に問題無し。

事故で入院した試験官？ ナンノコトカナ？

というわけで試験2日目は、実戦を想定した戦闘試験。場所はミッドチルダ郊外で、天気がすごく悪いけど試験は豪雨決行。雨が降った程度で戦えなくなるモヤシは要らんと言わんばかりに、予定の変更は無かった。

異世界の魔導師やベルカ式に興味を持ったという名目で集まった、比較的大勢の観客が近くのビルから見守る中、試験は進められてる。もちろんユーノ・スクライアもいるし、近くに八神シャマルと私達が隠れてる。

他にいる知り合いは、カリム・グラシア、シャツハ・ヌエラ、アルフを含むテストロッサ一家、ハラOWN一家、レティ・ロウラン。

聖王教会や最高評議会関係者の指示で来てる人も、チラホラいる模様。これは想定内だからとりあえず問題無い。

個別にみると問題ないけど、豪華すぎるのは問題。集まり過ぎ。

試験1人目は、セツナ・チェブル。

相手はAA+クラスの空戦魔導師。結果を一言で言えば、ドンマイ☆試験官。

基本戦術が遠距離狙撃型で精度重視の魔導師では、高機動近接型のセツナ・チェブルから逃げるのは無理があった。

更に、セツナ・チェブルは狩人さんな世界で、悪天候での戦闘を何度も経験してる。そのせいか、視界が悪くても躊躇せず突撃出来る

度胸と技術は感嘆モノ。おまけに、機動性を維持するためにバインド回避とバインドブレイクを重視してたせいで、足止めも碌に効かないという有り様。何気に3人中トップの魔力量に育ってる上にカートリッジシステムも馴染んでるせいで、持久戦でも短期戦でも力を発揮出来る状態。

気に関する技術を全く使わなくても一方的になるのは仕方がない。見てて安心と言うか、試験官が可哀想と思える展開だった。

試験2人目は、フェイト・テストアロッサ。

雨にも負けず、風にも負けず、嵐だと雷を味方に威力が増し増しになるフェイト・テストアロッサは、悪天候での空中戦を見てハラハラする内容で制した。

相手は先ほどとは別の、AAAクラスの空戦魔導師。世間知らずの小娘を叩き潰して来いと指示されてたはずだけど、雷撃で焼き殺さないのは難しいんだと言わんばかりに手加減されて、撃墜されてた。

ハラハラの理由の1つは、天然の雷を利用した雷撃の制御ミスで殺さないか。もう1つは、手加減し過ぎて撃墜されないか。

要するに、雷撃での攻撃をある程度縛った状態での戦闘でミスをしてないかを心配されてただけ。これで実力不足を理由に不合格とするなら、楽しい事にする予定。ちよつと楽しみ。

試験3人目は残る1人、つまり成瀬カイゼ。

相手はセツナ・チェブルーの相手をした魔導師、現在自信喪失気味。体力や魔力についてはそれなりに回復してるけど、精神的な傷はどうにもならなかった模様。

ヤケクソ気味の攻撃では、雷光を利用して姿を消す成瀬カイゼを捉えられない。それなりに防いでるからまだ墜ちてないけど、時間の問題に見える。

というわけで、そろそろ頃合い。

ユーノ・スクライアは時空管理局関係者の中では割と端の方にいる。クロノ・ハラオウンも近くにいてるけど、何かを隠せる状態でも、バレずに手を出せる状態でもないから、問題ない。

超隠蔽型の幻影で、ユーノ・スクライアの胸元を隠して。

先生、またお願いします。

(はやてちゃんに聞いたんですけど、それって、時代劇とかいうお話で、悪役が強い護衛を呼ぶ時の掛け声ですよね?)

気にしちゃダメ。

現実問題として、良い事をやってるわけでもないし。

試験が終わっちゃう。人が動かない間に、急いで急いで。

(もう……)

ため息をつかれた。

でも、蒐集は速やかに完了。クロノ・ハラウンが「まさか君もなのか!」とか言ってるけど、周囲の人達はほぼ騒然としてるだけ。医療部に連絡してるカリム・グラシアが例外的なのはどうなんだろう。少なくとも蒐集はばれてないし、理解出来ない何かがあったとしても認識されてない。

予定通り、八神シャマルは速やかに撤収へ。

囑託魔導師の試験は、観客側の騒ぎに気を取られた試験官が撃墜して終了。なんてあつけない。

というわけで、お疲れ様でした。



「結果として、疑いは晴れたんだな?」

その日の夜、アースラの現地拠点へお姉様が出向いて、クロノ・ハラウンと情報交換。

前回同様に時空管理局の本局との通信で、エイミィ・リミエツタも席を外してる。

『君達の隠蔽技術のおかげだ。今回は目撃者も多いし、疑惑は無くないだろうけれど、当面は強く疑われずに済むだろう。』

圧力が減った代わりに、調査命令や問い合わせは来たけどね』

「それは仕方ないだろう。」

原因不明で通すしかないだろうが……まあ、頑張ってくれ」

原因の特定は大人の事情等々により無理だから、考察としてジュエ

ルシード絡みじゃないかと言うのが精いっぱい。

問い合わせは鬱陶しそうだけど、守秘やら未確定やらで誤魔化す事が出来る分、命令よりは平和かも。

『これくらいは想定内だから、問題無いよ。』

それと、3人の囑託資格も取得はほぼ確定だろうという話だが……また君達が何かやったのか？

試験官が1人、入院したという情報があったんだ』

「知らんな。全員が合格する必要も無かったし、裏工作が必要だとも思っていないかったからな。」

実力が不足する者に資格を与えるのは互いに不幸になるという事は知っているから、実力不足で不合格になるなら当然だ」

うん、お姉様は本当に知らない。

試験の結果はともかく、試験官の交代理由なんて、どうでもいい場合もあるし。

『そうか。話を戻すが、資格を取得しても、フェイトには証人としても少しこちらにいてもらいたい。プレシアの裁判が終わるまで、見込み通りに行けばあと10日程のはずだ。』

本人にも確認したが、やはり母の近くに居たい気持ちが強いようだ。構わないか？』

「その内容で駄目だと言う程、私が鬼畜だと思っているのか？」

それに、仮に3人全員が失敗しても、別の方法でカリムを地球に連れて来ることが出来れば問題ない。この辺の話は聞いているか？」

『ああ、聖王教会に少しばかり肩入れする形になったと聞いている。』

目的はベルカ関連の足場なのか？』

「ある意味ではそうだが、それだけでもないな。どちらかと言えば、ベルカの過去がどう伝わっているのか、どの程度技術が残っているかといった、知識面を期待している。」

平凡な話がどれくらい脚色されているか……もとい、今の常識がどうなっているのか、知っておいた方がいいだろう？

個人的にはカリムの予言能力を解析してみたいものだが、これは本人の協力が必須だからな。のんびり交渉するさ」

人の噂とか、個人の主張が混じりやすい資料とかじゃなく、聖王教会の公式見解的な意味で。

聖王教会内部での扱われ方、でも可。

だけどカリム・グラシアのレアスキル「プロフェーティン・シユリフテン 預言者の著書」は、内容的に古代ベルカの魔法かロストロギア魔導具に関係しそうではある。憶測でしかないから、実物を見てみたい。

『……関係を拗らせる事だけは避けてくれよ。』

とはいえ、本質的には興味本位とは』

「とはいえ、エンシエント真正古代ベルカの技術を対外的に問題無く、かつ危険な部分を隠したままで、必要以上には独占せずに使えそうな組織は、他に候補が思い付かん。

闇の書がベルカ製だと多くの人に知られている以上、何とかした後
に直接関わる可能性が極めて高い相手でもある。ある程度は見極め
ておかんな」

『時空管理局員として、コメントに困る事を言わないでくれ。』

とはいえ、今の時空管理局に任せて安心かと聞かれると、少々困る
んだが』

「まあ、そういう事だ。

やましい気持ちで接触しようとしているわけじゃない。その辺は、
安心してくれていいぞ?。」

新春企画2014：とある別荘の正月風景

◆◆ #1 ◆◆

エヴァ　：さてと、アレを拝み終わったわけだが。

やけに人が来ているらしいし、この後は設定を変えたゲームを続けながら温泉か？

はやて　：そうやね、エヴァさんもチャチャちゃんも大人モードやないし。

いっぱい来てるって話やし、まだこっちに居る気なんやろ？

チャチャ：ハラオウン、テスタロッサ、高町、月村の各家の人達は殆ど。

アリサ：バニングス、転生者、その他も、こっちに到着してる。

その他はルー尔的に言えない人達で、全員にルールの説明も終わってる。

アコノ　：一応、予定通りの人数ではある？

仕事で来られない人の不参加も、予定通りだから。

はやて　：この後は、だいぶ賑やかになるはずや。

まあ、来れへん人は、またの機会に期待や。

シヤマル：さつきまでは闇の書が起動する前の、私達も参加出来ない設定でしたし。

ちよつと寂しかったんですよ。

チャチャマル：見本のつもりだったのではないでしょうか？

アコノ　：八神家で家族しかいなかったから、該当者が少なかったのは認める。

ザファイラ：家族で良いのか……？

ヴィータ：ペット扱いだもんな。

はやて　：うちに居るんやから、みんな家族や。

諸々の都合で、戸籍上はそうなってへんだけやし。

シグナム：だが、次の設定は本当に夏でよいのか？

最近過ぎるとゲームにならないのは解るが。

ヴィータ：色々あんだろ、なんかしよーもない理由な気がするけどよ。

てか、チャチャマルはまだ表に出てねーとか言っただけでなかったか？

チャチャマル：一度、ジュエルシード争奪戦に参加していますので。
チャチャゼロ：イイじゃねーか。オレも、リンディ達の前に出ちまった後だしナ。

シヤマル：だけど、まだ駄目な人もいますし、あそこで合流した方も参加出来ませんし……

ルール上はそうなるのは解るんですけど。

エヴァ：これ以上人数を増やしたいのか？

プレシアの裁判が終わった後は、あれだぞ。

ザファイラ：また機会があれば参加してもらえばよい事だ。

チャチャゼロ：ケケケ、除け者の矛先を押し付けたいだけダロ。

ザファイラ：そんなことは無い。

シグナム：だが、このルールでは、時空管理局でカイゼやセツナが会っている方の名前も出せん。

エヴァ：明らかに該当するのは、3人だったか？

まあ、ルールはルールだ。

はやて：そうやね。グレラムおじさんとレティ提督は言ってもいいわけやし。

あの人達と直接会わなかったのは、意図的なん？

エヴァ：必要な相手と、必要なタイミングで会っていただけだ。

シグナム：レティ提督との出会いは強引すぎだったように思うが、それもなのか？

エヴァ：動揺させる事で、精神的に優位な位置を取る。概ね予定通りだぞ？

でなければ、お前達を連れて待機などするものか。

それに、リンディ経由で打ち合わせをすると、無駄に時間

がかかるだろうからな。

ヴィータ：最終的に投げてたしな、あのねーちゃん。

アコノ　：ねーちゃん？

エヴァ　：そういえば、相談してる途中でおばさんとか呼んでいたな。

まあ、結果的に……な。

ヴィータ：鬼が現れた。

はやて　：女の人にそんなこと言ったらあかんよ。

◆◆ #2 ◆◆

エヴァ　：というわけで、浴場に着いたわけだが……

なのは　：な、何？

フェイト：困るような事は、してないと思うよ。

アコノ　：意外に人が少ない。

アリサ　：団子状態になるのもあれだし、大人組は食事に行くって言ってたわよ。

すずか　：シグナムさん達も誘うって言ってたから。

はやて　：アリシアちゃんは、連行されたんか？

フェイト：うん。お風呂場は傍に居ないと危ないからって、母さんに。

アルフ　：アタシじゃ頼りないんだってさ。

エヴァ　：私が言うのもなんだが、過保護だな。

なのは　：にやはは、ホントだよな。

アリサ　：で、話だけは聞いてるけど……呼び名が増えたんでしょ？

だいぶ嫌がってたらしいけど、そこんところどうなのよ。

はやて　：あー、確かに、かなり嫌がったなあ。

すずか　：様子は見てたんだよね。そんなに？

アコノ　：そんな呼び名が増えるのは嫌だと、不要な理由を色々言ってた。

最終的に熱意と責任と、それ以上の面倒事の予想に負けたけど。

エヴァ : 要らないと言ったんだがなあ……

お前達にも迷惑をかける事にもなるし。済まないな。

アリサ : 私達は大した事ないじゃない。負担って、ほとんどフェイトでしょ。

転入早々、しばらく休学するのが決定だもんね。留学扱いにするんだっけ？

フェイト : お世話になつてばかりだし、これくらいは何でもないよ。
アルフ : けど、アタシまで行く必要があるのかい？

はやて : その辺はグレアムおじさんとか、レティ提督のせいやけどな。

けど、これって言つてよかつたんか？

アコノ : チャチャが言うには、漫画版に陸士訓練校に行く描写があるらしい。

本物の記録が無いから未確認らしいけど、明確な違反ではないかもしれない。

エヴァ : 一応、原作の範疇……なのか？

なのは : それって、ひよつとして私も一緒だったの？

エヴァ : ……まあいいか。そうだな、お前とフェイトが行く話があつたらしい。

アコノ : 厳密には、漫画版は原作と言えない気もするけど。

はやて : まあええよ。別に、罰ゲームで悪戯するためのルールやないし。

◆◆ #3 ◆◆

ツバサ : 次は、アタシ達らしいわよ？

セツナ : 今回の次は、ロビーの方に行つてほしいそうです。

エヴァ : 今度は女性転生者組で、次は男連中にでもなるのか？
大人組は……酒でも飲んでいそうだな。

千晴 …後の事は考えてねーな、あれ。

ツバサ …飲み過ぎて変なことするなら、罰ゲームでもお仕置きでもすればいいじゃない。

亜美 …リンデイさんやプレシアさんが、そこまで羽目を外すとは思えませんよ？

はやて …むっ……なんや、右手が吸い寄せられとる！

亜美 …あらあら（ぎゅ）

千晴 ………窒息するんじゃないか？

はやて …我が人生に、一片の悔い無し！

ツバサ …胸に顔を埋めながら言われても……ねえ？

セツナ …えーと……それは、元男性という点からコメントすれば

？

ツバサ ………あー！ といえば、何で女湯に居るのよ!!

セツナ …この体で男湯に入るわけにも……

エヴァ …ふむ、この際だから女性化湯でも作るべきか？

私とセツナ専用になるから、静かに入れるだろうしな。

ツバサ …あ……え、えーと、その……そんなつもりじゃ……

エヴァ …ふふふ……どの道、セツナは私のだ。ゆつくり親睦を深

めるのも……

セツナ …あ、その……えっと、そういうのはですね……

エヴァ …嫌なら嫌と言えればいいんだぞ、セツナ。

セツナ …そ、そうではなくて、その、ば、場を弁えてと言うか……

何と言うか……

アコノ …私は？

エヴァ …そうだな、アコノも私のだ。来るか？

アコノ …うん。

千晴 …うわー、百合ハーレムなんて初めて見るけど、コレは色々駄目じゃねーか？

ツバサ …な、何やってんのよあんた達は!! 不毛、不毛よっ!!

エヴァ …不毛とは心外だな。

TS組で魔導具の私、TS組で同族の居ないセツナ、不老

で子を産めないアコノだぞ。

普通の恋愛が出来ない者同士で、ちよつとじやれているだけじゃないか。

セツナ : それに正直な話、男に抱かれたくないですし。

ホモはちよつと……

千晴 : TS 同士なら精神的にホモじゃねーか。

それに、あからさまにほつとしてんじゃねーよ。

ツバサ : だからって！ ……だからってっ!!

アコノ : 意外に免疫が無かった？

前世も未成年とか。

ツバサ : 20 は過ぎてたわよ！

けど！ ……けどっ!!

アコノ : エヴァが少女モードだから、そこまですではなかったはず。

大人モードだと、ものすごく妖艶な感じも出せそう？

エヴァ : そうだな……気は進まんが、試しておいた方がいいのか？

か？

亜美 : まあまあ、それくらいにしておいた方がいいんじゃない

かしら？

はやてちゃんが茹だっているわよ。

◆◆ # 4 ◆◆

クーネ : おお、湯上がり美ぶおっ!?

カイゼ : お見事。

エヴァ : まずは、あれを始末しておかないとな。

早苗 : 玄関が開けてあったのは、このためだったって事？

鹿乃 : ……ここ、こえー……

天牙 : 蹴り一発のはずなのに、影も見えないし……

チクアーブ : 海まで届き、現在は沈下中で御座いますな。

アコノ : 解ってて止めない変態もどうかと思う。

はやて : 恒例行事やし、必要があれば戻ってくるやろ。

早苗 ……だけど、このメンバーだと、共通の話題って……何だろ？

カイゼ ……無いね。

はやて ……終わってもうた？

エヴァ ……ふむ……では、気になる女性、ではどうだ？

鹿乃 ……自分に被害が無い話題を……

エヴァ ……ちなみに、私はアコノだ。セツナはやても含めていい。

天牙 ……えーと、それって恋愛的な意味で……？

エヴァ ……さあな。私に恋愛という感情が残っているなら、そうかもしれない。

カイゼ ……なるほど。僕が気になるのは、美由希さんかな。

裏社会をある程度受け入れられそうでフリーな女性は、他に居ない気がするからね。

アコノ ……魔法ではなく、表に出せない世界という意味で？

カイゼ ……消去法になるけど、そうだね。

逆光源氏計画の香りも、どうしたいのかが気になるよ。

エヴァ ……恋愛ではなく、打算と好奇心での選択か。

次は……

チクアープ：我等についてはルールに抵触すると判断致しますが、如何で御座いますよう？

エヴァ ……ああ、そうだったな。お前はそれでいいか。

鹿乃 ……そんでいいのかわよ？

エヴァ ……詳しく言えば、出来事を特定出来る発言に該当しそうだからな。

で、お前達はどうなんだ？

ルールの制約上、嘘は言えないからな。キリキリ吐け。

鹿乃 ……どうって……ええい、ロリコンと呼びたきや呼べ！
だからって、好かれてるとは限らねえからな！ これでい

いだろ!?

アコノ ……逆ナデポは？

鹿乃 ……使われてねーよ！ ……たぶん。

で、アンタ達はどうなんだよ!?

アコノ　：私はエヴァの。エヴァは私の。

はやて　：女性つて事なら、家族とか友達みんなが大事やし、気になるなあ。

というか、私も百合って前提なんか？

鹿乃　　：そうじゃなくて！

気になる男性でいいから！

はやて　：うーん、強いて言えば、元男性のエヴァさん？

恋愛の好きとか、よく解らんし。

エヴァ　：ふふふ、はやて。お前も私になるか？

はやて　：え、ええと、ええよ。お父さーん♪

エヴァ　：……父か。まあ、母と呼ばれるよりはいいが、顔が赤いから反撃が台無しだぞ。

で、あと2人だが。

天牙　　：ええと……ほ、保留で……

エヴァ　：何だ、あれだけの美女美少女が揃っていて、誰も気にならないとでも言うのか？

天牙　　：だって、微妙に年が離れてる人も多いし、実力とか離れすぎてて怖いし……

アコノ　：年齢が近いのは、千晴、美由紀、フェアリン、アルフくらい？

戦闘力的に高い力を持つのが確実なのは、2人のはず。

エヴァ　：よし、残りの2人には、魅力が無いと言っていたと伝えよう。

天牙　　：そ、そうじゃなくて！

何と言うか……尻に敷かれたり、振り回されたりしそうで

……

はやて　：その様子やと、誰が相手でも駄目のような？

アコノ　：同感。

エヴァ　：撃沈した馬鹿は放っておいて、お前はどんなんだ？

早苗　　：ボク？　うーん……話す機会が多いのはプレシアさんと

か、別荘の人達だし。

最初に友達になったフェイトちゃんは気になるけど、これって恋愛かな？

エヴァ ……どんなところが気になるんだ？

早苗 ……一所懸命食べてるところ？

小動物みたいで可愛いよね。

エヴァ ……ペットじゃないんだぞ。

◆◆ #5 ◆◆

ノエル ……失礼します。

アリシア ……きたよー！

エヴァ ……ん？ 食事は終わったのか？

ノエル ……皆様お酒を飲まれていますし、大人ばかりの中にいるよりは、と。

フアリン ……部屋を移動する途中なんですよ。

リル ……食事は既に召し上がられていますから、デザートをあちらに用意するだけです。

アコノ ……大人組と子供組で、部屋を分けてある？

はやて ……私らがお酒を飲むわけにもいかんし、その方がええよ。

アリシア ……じゃーねー、エヴァおねーちゃんたち！

◆◆ #6 ◆◆

エイミイ ……はいはい、次はこっちだよー！

エヴァ ……お前達も食べ終わっていたのか？

クロノ ……ああ。大人組の部屋に居たんだが、あの空気の中に居るのは、ちよつとね。

ユーノ ……居た堪れないと言うか、何と言うか……

守護騎士のみんなも逃げ出して、今はどうなってることか。

アコノ : 葬式ムードになる必要は無いはずだし。

お祭り騒ぎ？

美由希 : 主に私の家族が元凶だけど、全員のテンションが上がっちゃって。

何というか……砂糖を吐きそうになる感じ？

はやて : リンデイさんもなん？

クロノ : 惚気てはいないが、あんな母さんを見るのは初めてだ。今の気持ちで、酒が入ったからだろうとは思うが……

エヴァ : やっぱり飲んでいるのか。確かに逃げたのは未成年や大
学未満組だな。

だが、気持ちに関しては、ある意味ではお前もだろう？

クロノ : 君達のおかげで、気が休まる暇もないよ。

美由希 : お父さんの仇、だっけ。

あ、あまり話題にしない方が良かった？

クロノ : いや、気にしなくていい。

僕やグレアム提督が、何も思っていないわけがないんだ。

リーゼ達だって……

エヴァ : まあ、あいつらの恨みが向くのは私だろうから、適当に流しておくさ。

はやて : かなり強引に説き伏せたみたいやったな。

やり過ぎはあかんよ？

アコノ : 優しく伝えても、聞いてくれなかった可能性が高い。

色々なリスクを考えると、仕方ないと思う。

クロノ : その点は同感だし、説得に協力もしたが……あれは少しやり過ぎだ。

エヴァ : 恨まれ役は、そのまま裏に潜む私だけでいい。

……と、思っていたんだがな。

クロノ : 仕方ないだろう、最善を尽くした結果なんだ。

エイミィ:クロノ君、あの話の前は打ち合わせとかばっかりだったもんねえ。

ユーノ : あの時、僕もほとんど寝れてないし。

あんなのが続くななら、あの話も引き受けたくないよ。

クロノ　：強力な支援付きなんだ。人が揃うまでくらいは頑張ってくれ。

ユーノ　：人が揃うって、いつ……？

◆◆ #7 ◆◆

エヴァ　：……ここは魔窟か？

はやて　：なんか、凄いお酒のにおいや。

アコノ　：2組ほど、甘い空気を放ってるカップルがいる。

士郎　　：妻達が済まない。

桃子　　：だって……ねえ。

忍　　　：ねえ。

エヴァ　：何を飲んでる、未成年の大学生組。

リンディ：いいじゃない、ここは日本ではないし。

ねえ？

桃子　　：あつちを見ちやダ・メ

エヴァ　：……魔窟だな。子供達が逃げ出すわけだ。

はやて　：私も逃げた方がええような……

恭也　　：この有り様だから、恐らくその方がいいだろう。

忍　　　：他の女の子に声を掛けちゃ嫌よ？

エヴァ　：同じ酔い方をしているのか？

恭也　　：済まない。2人とも普段はこうならないんだが……早めに離れた方がいい。

アコノ　：確かに。

はやて　：なら、早々においとましょか。

リンディ：まだ駄目よ。エヴァさん、やっぱりうちの子にならない

？

娘も欲しかったし、クロノはまだ駄目だし。

プレシア：何を言っているの、元々関係がある上に、アリシアやフェイトと同じ金髪よ。

アリシアも懐いているし、姉妹として違和感が無い私の娘にこそ相応しいわ。

クーネ　：おや、親権争いですか。これは私も参加しなければ。

エヴァ　：チャチャ、殺れ。

チャチャ：呼ばれて飛び出てウィンドウオープン、回り込んで、響け終焉の笛。

Ragnarok
神々の黄昏。

士郎　　：見事。

プレシア：壁や窓にヒビすら入れずに、あれだけの砲撃を通すなんて……流石ね。

リンディ：発動までの早さも驚異的よ。

恭也　　：だけど、手で窓を開けるのに、何か言う必要があったのか？

チャチャ：様式美。では。

エヴァ　：私達も退散しよう。

子供部屋の方は暴走していないだろうしな。

アコノ　：解った。

はやて　：後ろを向いて全速前進、やね。

A S編 21話 結審

試験から3日後。優秀な成績だった事、優秀で協力的な魔導師はなるべく確保したいという時空管理局の表の意思、真正古代ベルカの術者を無下に扱いたくない聖王教会の意図等が影響した結果として、通常よりも早く、囑託魔導師の資格が3人に与えられた。

ハラオウン親子や地球側を警戒する裏側の動きは、事実上封殺された。表立って主張出来る、積極的に反対する理由を作る事は出来なかつた模様。

目標をクリアしたフェイト・テスタロッサは、早速家族に報告。重度の親馬鹿になりつつあるプレシア・テスタロッサに流石私の娘と抱きしめられ、妙に姉ぶるけど基本子供のアリシア・テスタロッサにもおめでとーと抱きつかれてた。

どうしていいか解らず、戸惑いいつも嬉しそうに恥ずかしがってるフェイト・テスタロッサは、可愛い。変態のサーチャーは3個ほど潰しておいたけど、他に無いかちよつと心配。

というわけで、お姉様の祝言を昨日のうちに受け取っていた成瀬カイゼとセツナ・チェブルは、今はカリム・グラシアとお茶をしてる。目的はもちろん、地球行きの日程について。

「私の気持ちとしては、すぐにでも帰りたいです。」

その前に、先生達に挨拶くらいはしておきたいですけど」

「それに、故郷とはいっても、デバイスの持ち込みには多少の手続きが必要だからね。」

持ち出してきた個人所有のものだから、さほど複雑な手続きにはならないとは聞いているけど、今日明日にというわけにもいかないらしいね」

「こちらの準備も少々かかりますから、そこまで急がなくても大丈夫でしょう。」

ですが、ある程度の予定と言いますか、状況の確認をしておきたいのです」

「地球に帰る日程については、急ぐとは聞いていないよ。」

移動については、僕達はアースラの移動に便乗するか、管理局の転送ポートを使わせてもらう事になると思うけど……カリムさんも便乗出来るそうかい？」

「地球へ赴く理由として、ベルカ式の魔法が伝わっていた理由を探るといふ公式の命令を、聖王教会から引き出す目処が立っています。

情報の共有を条件に時空管理局、つまり第97管理外世界に拠点を確保し調査を行っているアースラと協力するという事に出来そうです。移動と衣食住に関しては問題ありません。

ただ、これらを確定させるまでに、少々時間がかかりそうなのです」
「なるほどね。だけど、割と重要な任務になるんじゃないかい？」

「それこそ権力亡者が煩そうだけど」

「カリムさんがいない事をいいことに、強引に排除する……とかも、ありそうですし」

「父や母もおりますし、正式な任務で、時空管理局が調べている所へ後追いで入る事になりますから。何かあるとしても、何も結果を出せずに帰った後でしょう。

それに、聖王教会で身分のある方々は、当然ですが時間や立場に縛られません。ですから、時空管理局と協力して長期に渡り管理外世界へ赴く任務に就く、という事はまずありません。任務自体は嫉妬の対象にはならないと思いますよ。

そもそも、賓客待遇で迎えられている貴方がたの接遇役として選ばれた者が、その故郷や技術入手場所へ赴くのです。これを表立って批判したり、その任務中に不用意な手出しをしたりする事はないでしょう」

「つまり、行動自体に問題は無いという報告だね。

今話を纏めると……僕達の手続きを少し遅らせた方が良さそうだ、という事になるね」

「申し訳ないのですが、お願い出来ますか？」

「僕は構わないよ。まだまだここで知りたい事も多いからね」

「私も大丈夫です。

でも、遅らせるってどれくらいですか？」

「行動を開始するのは、アースラが動ける、つまり、リンディさんが動けるようになってからでしょう。」

あの方も事件の後始末で大変だったみたいですけど、ようやく落ち着いたようですし」

後始末と言うか、余計な手間と言うか。

ジュエルシードの扱いで揉め、管理外世界に現れた高ランク魔導師の扱いで揉め、嚴重封印するはずが盗難騒ぎに繋がり、その際に現物が現れた未来知識持ち関連であちこちに呼び出され、リンカーコアの損傷騒ぎがあり。

切り札兼法務処理で身軽な執務官が事後処理に追われてるとはいえ、巡視等の任務はこなせる時空管理局の次元空間航行艦船。その艦長が本局に居るのは、別にサボってたわけじゃない。

「裁判はもうすぐ終わるそうだし、そう遅くはならないかもしれないね。」

ここから移動するには、アリシアの退院が必須だろうとは思うけど」

「アリシアちゃん、ですか。」

かなり躍起になって調べられているそうですし……小さな子供ですから、負担になっていなければよいのですが」

「体力的に弱っているだけで、他は特に何も見つかっていないらしいね。そのせいもあって、プレシアの遺体保存技術が注目されているとは聞いているよ。」

短い距離なら歩けるようになっていいるし、検査入院もそろそろ終わるんじゃないかな」

「そうですか。でも、その様な情報はどこから?」

「友人だから、アリシアの見舞いくらいは行くよ。」

プレシアも裁判中とはいえ、娘と会う事まで禁止されているわけじゃないからね」

「病院に入り浸ってるらしいですよ。フェイトちゃんも、行けば2人に会えるかもという事でかなり行ってますし。」

「というか、今も行ってるはずですよ」

3人で会えるのは病院だけだし、合格の報告も病院だった。

プレシア・テスタロッサもフェイト・テスタロッサも時間に余裕があれば顔を出してるから、遭遇率はなかなか高め。

もちろんやるべきことはキチンとこなし、自分の時間もそれなりに確保してる。これからは自分を犠牲にしないというのが、プレシア・テスタロッサとフェイト・テスタロッサの間で交わされた約束。

「そちらは、未来の情報というわけではないのですね」

「そうだね。僕達も不確かな情報に踊らされるのは嫌だから、確認出来る事は確認する。」

外れつつある未来の情報よりも、確かめた事実を信じる事にしていくよ」

「そうなのですか。自身を律する事が出来ているのですね」

「その辺は色々あってね。詳しい話はあっちでももらえるかもしれないから、もう少し待ってもらえると有り難いね。」

それより、上層部の説得を急いだ方がいい。

裁判が終わったら、すぐにでも移動しようと思うよ」

「ええ。結審から数日で手続きが終われるよう、準備しておくつもりです」



こんな感じで、プレシア・テスタロッサの裁判も大詰めへ。

現在治療中のフェレットもどきも証人として参加。魔法を使う用事じゃないから問題無し。

無罪確定済みのフェイト・テスタロッサとアルフも同様。

執務官のクロノ・ハラオウン、ミッドチルダ地上本部から来たディラン・ヒューイットと一緒に、証人席に入ってた。

アリシア・テスタロッサは、付き添いで来てるエイミー・リミエツタと共に傍聴席へ。

椅子になるトロリーバッグを貰って、休みながらだけど自分で歩き切ったの登場。

「アリシア!? 車椅子はどうしたの!?!」

「もう、だいじょうぶだもん!」

「アリシアちゃん、ママが頑張ってるんだから私も頑張るんだって、歩いてレールウェイに乗ってきたんですよ。」

「ねー」

「ねー」

「ああ、偉いわアリシア……」

「わぶ、くるしいよママー」

事あるごとに娘に抱き着くプレシア・テスタロッサはどうしたものか。

もちろん、当のプレシア・テスタロッサは被告席。

司法取引等で無罪はほぼ確定してるし、本人も別に争う気も無いから、悲壮感は全くない。

むしろ、娘分を補給して元気いっぱい。それはそれで問題な気はするけど、真剣さは失ってないからたぶん大丈夫。

時空管理局の一部、裏側的には最高評議会に連なる連中が騒ぎそうになってたけど、弁護側に立つテイラン・ヒューイットの存在が大きく、声は小さかった。

しかも、事前に該当者の私室に手紙とごつい封筒を届けてあげたら、みんな静かになったし。

昔の事件の詳細な情報とか、事件にすらなっていない些細な事とか、今発生してる事件の詳細とかについて、色々教えてあげるからちよつと静かにしてて、って伝えたただけなのに。

素直な人ばかりで、おねーさんはちよつと心配です。

というわけで、事実上無罪が確定。

保護観察官は家族纏めてギル・グレアムが名乗りを上げてるし、娘の友人が出来た管理外世界へ移住する方針についても、今後はなるべく魔法に関わらないようにすると言う建前と保護観察官の出身世界という事実があるせいか、特に指摘等はされていない。

時空管理局の表としては、動向が把握出来て違法行為をしないなら、問題にする気は無い模様。

また、これ以上アリシア・テストロッサを検査で縛るのも無理と判断されたのか、何も特別な点が見付からなくて諦めたのか。

理由はともかく、家族の元へ帰る許可が出た。

「というわけで、次は日本への移住ね。」

いつ頃なら動けそうかしら？」

自室に関係者を集めたリンディ・ハラオウンが、今後の予定を確認してる。

もちろん、集まっているのはお姉様に直接関係する関係者達。ギル・グレアム、カリム・グラシア、アースラのスタッフは含んでない。

「私達は、今すぐにでも。ようやく娘達と暮らせるのだから、早いほうがいいわ」

ソファアに座り、両方の腕に1人ずつ娘を抱えてるプレシア・テストロッサは、心ここに在らずといった感じ。フェイト・テストロッサの膝の上には子犬モードのアルフがいるけど、その目は何だか複雑そう。

アリシア・テストロッサは病院から出たばかりだし、フェイト・テストロッサも囑託試験の準備に追われてたから、私物なんてビデオレターと身の回りの物程度。簡単に荷物を纏めれば、後は手続きだけの問題。

「僕達も、手続きが終わればすぐだね。」

ただ、数日かかるかな？」

「そうですね。カリムさんもそれくらいかかるそうですし、少し観光とかお土産を買ったりする時間があるくらいですか？

あ、お世話になった人に挨拶はしておきたいです」

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーも、私物についてはフェイト・テストロッサと変わらない。

関わった人も少ないし、実に身軽。

「アースラの出航準備も必要ですから、出発は早くても5日後でしょう。」

出航前でも部屋の用意は出来るから、まずはその頃に部屋を移る準備はしておくこと。

手続きの内容は、後で確認しよう」

クロノ・ハラオウンは、アースラの整備や補給、人員の状況を確認してる。

執務官がいる状態での巡察を兼ねるという体裁を取る予定だから、予定表の提出と承認も必要。

人や荷物の準備だけじゃないのは、組織の一員として仕方が無い事。大勢の人が動く以上、お金等々もかかるわけだし。

「それじゃあ、5日後にアースラに引越し、その後可能な限り早く出発かしらね。」

あまり見れるところも無いかもしれないけれど、少し本局を案内していいかしら？

少しこちらの雰囲気に触れたり、買い物したりもいいでしょうし。ね、プレシアさん」

「いいわね。皆で行きましょう」



というわけで、手続きやらの承認や完了待ちとなった次の日。

本局で一番多くの店が集まっている区画に、9人の姿があった。

今日は、アルフも人……子供ではなく、高校生くらいの方の姿になってる。但し、ズボンが長くなったり、Tシャツを着て腹出しじゃなくなったりするのは、きっとプレシア・テストタロツサのせい。

そして、リンデイ・ハラオウン、プレシア・テストタロツサ、エイミィ・リミエツタの3人が、明らかに他の女性達を捕らえて離してない。

つまり、連★行、再び。

「こうなると長そうだね。前回も大変だったと聞いているけど」

「どうも、そうらしい。」

エヴァンジュを弄り倒したと母さんに聞いた時は、随分度胸があると思っただものだ」

着せ替えの輪から外れ、買い物に付き合わされてるお父さんばりにベンチにいる、成瀬カイゼとクロノ・ハラオウン。2人は、なるべく店の方を見ないようにしてる。

ユーノ・スクライアは、退院が間に合わなかった。今日行ってる結果次第だけど、希望的観測では数日中の予定だから、ギリギリで助かったらしい。

今日の被害者その1は、白い半袖のシャツにチエツクのミニスカートを着させられて、せめてスパッツも下さいと泣きが入ってるセツナ・チエブルー。

今日の被害者その2は、白いエプロンとフリフリが目立つ、青いメイド服を着させられてるアルフ。どんな風に改造するつもりなのか、さっぱり解らない。

白い長袖のシャツに深い青のネクタイリボンとミドルスカートを合わせ、黒いタイツを穿いてるフェイト・テスタロッサについては、特に本人も抵抗が無いみたいだから被害者認定しない。

白とピンクがベースのワンピースに大きなりボンを付けたドレス風の服を自分から嬉しそうに着てるアリシア・テスタロッサも、どう見ても被害者じゃない。

「……エヴァさんも、あんな感じで遊ばれたんだろうね。」

だけどあの人は、懐に入れたら大事にする感じはするよ。気に入った仲間や身内と呼べる人に対しては、かなり甘いんじゃないかな。

そうじゃないと、あの状況で暴れない理由が思い付かないよ」

「そうだな……その意味でも、大勢の人をその中に入れられたらいいんだが」

「あの人を組織に取り込むつもりかい？ それは難しいだろうね。」

権力も金も必要以上には求めていないようだし、あの件が終われば本当に隠居してもおかしくない方針で行動している。むしろ、隠居する方向だよ」

「だからこそ、なんだが。」

それに、君達のように表立った関係も作っているんだ。完全に断絶する可能性は低いと考えている」

「どうだろうね。こちらに来てる僕達は日本での立場が無くて、そのままでは無国籍の違法入国者だったんだ。日本での生活がある人は、誰もよこしていないよ。」

生きる道をいくつか示してもらっているだけで、僕達が離れると言え、エヴァさんは引き止めないんじゃないかな。謝礼はあの件で出来る限りの協力をすれば充分だと言いたいそうさ」

「逆に言えば、君達がエヴァさんと良い関係が続けながら時空管理局の局員になる事も、止めはしないだろう。」

もちろん、膿は何とかしろと言われそうだが」

「敵には容赦しないだろうからね。」

それでも、敵対する前に何とかしろと言われるなら、まだ見捨てられてないと言っているんじゃないかな」

「本来は言われる以前に、こうなっているとはいけない事なんだが。」

現在の法に照らしても、時空管理局の理念としても、許している事じゃないんだ」

「僕達は新参者で、ある意味では部外者でもあるからね。」

その辺はエヴァさんと一緒に、お手並み拝見と洒落込む事にするよ」

「……そうだな。」

ところで、まだまだ時間がかかりそうさ。何か飲むか？」

店の中では、相変わらず着せ替え中。

流石女性が楽しんでる買い物。終わる様子が全くない。

「そうだね。これも経験だ、少し甘めの物を頼もうかな。」

ああ、あの劇甘のお茶は遠慮するよ」

「了解だ。あのお茶の被害者をこれ以上増やす気は無いから、そこは安心してくれ」

A S編22話 気になる技術

「そうか、もうすぐカリムも連れて帰ってくるか」

お姉様は今、主と別荘で寛いでる。

今日は日曜で、転生者達の多くや高町なのは、ついでに高町恭也や高町美由希も別荘に来て訓練中。既に9月で学校も始まっているから、これだけの人数が来るのは1週間ぶり。

アリサ・バニングスや月村姉妹、エイミー・リミエツタ、八神はやてもいるけど、こちらは砂浜で遊んでる。

海水浴をするにはちよつと肌寒いから、みんな砂浜で全力全開。お姉様と主の近くに他の人はいないから、現状を報告中。

アースラの出航はまだだけど、計画も承認されたし、事前の手続きもほぼ完了してる。

あとは最終の点検や物資の補給、それと人員の集合を待つばかり。予定では2日後に出航。いくつかの管理世界を経由して、10日ほどで到着。

メカニックマイスターやデバイス関連の技術者として、時空管理局からマリエル・アテンザ、聖王教会からシルフィ・カルマンが随行する事も追加で決まっている。

完全動作する真正^{エンシエント}古代ベルカ式のデバイスは少ない上に、ミッドチルダ式のデバイス用に調整したカートリッジにも完全対応出来るものは有り得ないらしく、カートリッジの調達を行ったマリエル・アテンザには新しいデバイスだとバレてた。

調達を依頼したエイミー・リミエツタとハラOWN親子でその情報は止められてるから、騒動にはなっていない。だけど、情報収集の甘さと、お姉様が張り切りすぎた事が原因。ちよつと反省。

聖王教会に所属するシルフィ・カルマンについては、少し調べた範囲では根っからの技術者タイプ。現在25歳の、デバイスに恋する乙女。裏側の繋がりは心配なさそう。

シャツハ・ヌエラの近代ベルカ式デバイスや、ゼスト・グランガイツの古代ベルカ式デバイスのメンテナンスにも関わっている、新旧のべ

ルカ式デバイスについて詳しい人物。人選としてはかなり正しそう。「管理局から来るマリエル・アテンザは、A×Sでカートリッジシステムを組み込むマリーであったる？」

あつてる。しかも、カートリッジの調達以外でも成瀬カイゼやセツナ・チエブルーと話をしたから、原作と比べてベルカ式関連の知識が増えてると予想。

現在16歳だけど、既に技術部で3年の職歴がある。

ギンガ・ナカジマとスバル・ナカジマのメンテナンスにも参加してる。この繋がりで、既にクイント・ナカジマやゲンヤ・ナカジマとの面識がある事も確認済み。

「……クイントやゲンヤはともかく、娘2人は関係ないだろう。

確実にまだ子供だぞ」

ギンガ・ナカジマが7歳、スバル・ナカジマが5歳。

アリシア・テスタロッサや多数の3年生組の存在を考えると、友達の輪に入る事は可能。

だけど、それ以上の意味は無さそう。

「ミッド地上で、クイントやゲンヤは黒の騎士団と接触していない？ 接触しているか、接触予定があるなら、繋がりを作るのも悪くないかも知れない」

「戦闘機人関係の施設を襲撃するなら、クイントは関係するかもしれないか……？」

その意味では、密輸関連の組織を潰す時にゲンヤが来る可能性もあるのか」

黒の騎士団の活動は知られてきているから、通報時に来るのは戦力より捜査力を重視する部隊になってきている。

地上でトップクラスの戦力を持つゼスト・グランガイツの部隊、その一員のクイント・ナカジマが来ることは恐らく無い。

その意味では、ゲンヤ・ナカジマの方が接触率は高い。

「まあ、気にする事も無い。原作関連の人物とはいえ、他の局員と同じ対応でいいだろう。

本人には何の関係も無い事だしな」

「クイントやゼストの死亡原因は何もしない？」

「直接何かする気は無いぞ。蒐集のために戦闘機人関連の施設を襲撃して、結果的に死亡フラグを叩き折る可能性は否定せんが。」

今の流れだと、結果的にそうなる可能性は高い……か？」

襲撃候補の施設に大規模なガジェット・ドローンの生産プラントはあるし、そこに戦闘機人用の設備がある事も確認済み。

ジェイル・スカリエッティの戦闘機人、具体的にはウーノやクアットロが入りしてる事も確認してる。生活用の設備は少ないから拠点には向いてないし、してない。

今は証拠固めの段階。ここを潰すと、死亡フラグを折る事になるかもしれない。

だけど、蒐集的には、機械ばかりで魔導師が少ないからおもしろくない。

「証拠が固まり、かつ他に襲撃出来る場所が無ければだな。もしくは、レジアスやスカリエッティが明確に敵対するか。」

今潰したところで別の拠点を作るだけだろうし、旨味も無い以上、わざわざリスクを取って優先する必要は無いな」

「だけど、フェイト達の囑託試験を妨害しようとしたみたいだし、近いうちに敵対する可能性は高い。」

その時は襲撃する？」

「する。敵の戦力増加を防ぐ意味でな。」

嫌がらせにもなるだろうし、その時はゼストやヴェロツサも巻き込んで盛大にやるのもいいな」

まとめると、証拠固めをしっかりとっておく方向。

ゼスト・グランガイツは戦闘機人関連を気にしてるみたいだし、ヴェロツサ・アコースは时空管理局の裏側の証拠を集めてる様子がある。

ある程度信用されそうな伝手は作れそうだから、動くときはそちら経由で声を掛けるだけでも充分かもしれない。

そんな感じで話をしていると、海の方から長宗我部千晴と真鶴亜美が戻ってきた。

2人ともデバイスは持つてるけど、さつきまでビーチバレーをしてた。

何のために別荘に来てるのやら。

「2人とも休憩か？」

「あー、それもあるんだけどよ。」

なのはが気の修業とか言ってたんだけど……いいのか？」

「恭也さんに叱られていたところを見ると、あまり口外しない方が良いものでしょう？」

「……魔法を秘密にしていない仲間だと思って、気が緩んだな。」

いくら大人びてるとは言っても、その辺は3年生か」

これも存在は予想されてもおおかしくないし。

というか、御神真刀流をこれ以外で説明しろと言われても困る。

「……お前達は予想出来るだろうからまあいいが、下手をすれば管理局がひっくり返る情報だ。」

当然、余計な騒動を避けたい連中が隠蔽に動く可能性があるわけだ。余計な事を聞いてしまったな」

「マジかよ……まだ罫があったなんて」

長宗我部千晴が、綺麗な失意体前屈の姿勢になってる。所謂orzな姿。

「だけど、教えているという事は、やむを得ない事情があるか、問題ないような言い訳が出来るからでしょう？」

後者なら大丈夫そうだけれど」

「そうだな……まあ、だいぶ様になってきたし、見せてやる。」

恭也、ちよつと来てくれ。軽くアレのテストをしよう」

「アレ……もう、見せていいのか？」

確かにだいたい扱えるようになったとは言えるが」

少し離れたところで、高町なのはに体術を教えた高町恭也。

お姉様に声を掛けられて、とりあえず後は自主練と言う事にしてこっちに来た。

「こいつらは前世的な意味で、似たものをイメージしやすいんだ。ファンタジーやらの創作物にありがちなものに似ている点もある。」

それに、そろそろ概要ぐらいは教えておいた方が良さそうだと思うな」

「なるほど。どこまでやっていい?」

「そうだな……装填数は6だったな?」

その6発と、この前相談した内容だ。覚えているな?」

「なるほど、解った」

というわけで、急遽行われる事になった、お姉様と高町恭也の新技術披露会。

興味を引いたらしく、全員が集まってきてる。

月村忍やエイミー・リミアツタにも見せる事になるけど、公開する気がある範囲までしか見せないから問題ない。

「では、始めよう。先手は譲るぞ」

「そうか、なら遠慮なく。ロードカートリッジ!」

黒龍を起動し、静かに立ってるお姉様。

高町恭也は棒状のデバイスを持つと、カートリッジを使って甲冑部品を展開。

「えっ、バリアジャケット!」

「お兄ちゃん、魔力が無いはずなのにどうして!」

エイミー・リミアツタと高町なのはが叫んでる。

他の人達も驚いてるけど、お姉様と高町恭也、それに高町美由希は、
してやったりの表情。

K·r·p·e·r·S·t·i·r·k·k·u·n·g
「身体強化、行くぞ!」

「瞬動!? まさか神速かよ!」

「ははは、戦闘民族は後付けじゃないんだ……」

カートリッジを使ってお姉様に突撃する高町恭也。

馬場鹿乃や上羽天牙の顎が落ちてる。2人の実力なら、きつとこの突撃だけで墜ちる。

「捧術は専門じゃないだろう? さあ、次はどうする」

お姉様は、笑いながら黒龍で棒での攻撃を捌いている。

何度かの攻防の後、攻撃を捌かれた高町恭也が数歩分離れ、お姉様が追撃しようとカートリッジをロードした瞬間。

「ロードカートリッジ、拡散弾！」
Diffusion Kugel

「装甲障壁！」
Panzerhinderinis

高町恭也がやたら弾数の多い散弾を放ち、逃げる気は無いけど1発のカートリッジで全てを撃ち落とすのは無理と判断したお姉様は障壁で防いだ。

当然、視界が悪くなるわけで。

「ロードカートリッジ、空中疾走！」
Schuh von Trickster

高町恭也は空中を蹴って、お姉様の横、そして背後へ。

その際も棒での攻撃は忘れないし、お姉様は黒龍でそれを受け止めてる。

その間に2発ロードした高町恭也は上空へ駆け上がり、お姉様の真上で棒を振るう。

「障壁破壊加速！」
Hinderinis Zerstrung Beschleunigung

何が来るかとお姉様が上に張った障壁と、最初の障壁が砕け散り。

散弾の中で残ってた、やたらと遅い弾が加速した。

「残念だったな、手札の差は大きいぞ？」

にやりと笑ったお姉様は目の前に迫った弾を掴むと上空の高町恭也目掛けて投げつけて、クリティカルヒット。

高町恭也の頭から星が散って、試合終了。

「やはり、駄目だったか。一矢は報いられるかと思ったんだが」

崩れかけた体勢からギリギリで着地に成功した高町恭也は、苦笑してる。

低容量のカートリッジ6発だと、充分すぎる成果だとは思うけど。

「そう簡単には負けてやれんが、狙いは良かったぞ。駆け出しの陸戦魔導師程度では、今のコンボに対応する事は出来ん。魔法弾を投げ返すなんて事は、そうそう出来る事でもないしな。」

全体的に威力不足なのは……2発ロードしても問題無く扱えていようだし、近いうちに出力を上げてみるか」

「無理をしているつもりは無いが、大丈夫そうか？」

「ああ。恐ろしい才能だな」

「ちよ、ちよっと待って！」

どうして魔力を持ってない人が普通に魔法を使えてるわけ?!」
のんびり喋ってたお姉様と高町恭也に、エイミー・リミアツタが食
い下がった。

時空管理局の常識としては、有り得ない事態ではあるかも。

「どうしてと言われても、魔力が無いだけで、魔力を扱う才能が無いわ
けじゃない。

そこへ、カートリッジシステムを応用して魔力を供給してみただけ
だが?」

「だけって、普通はそんな事が出来るわけないよ!」

「いや、出来るだろう。プレシアやリンディだって、魔導師炉からの魔力
供給で大魔法を使ったりしていたんだ。規模が小さくなっただけだ
ぞ?」

「だから、魔力を受け入れられないはずなんだってば!」

「自分の魔力で器を満たす力が無いだけだ。魔力を生み出す力と魔力
を扱う力を一緒に考えるな。

程度はともかく、器自体は存在するし魔力も全く扱えないわけじゃ
ない。自前の魔力が無いも同然だから最初は苦労する上に、どの程度
まで大丈夫かの見極めも必要かつ重要だが、こんな事が可能な人もい
るといっただけだ。

魔導師とそれ以外が、全く別の生物だとも思っているのか?」

「え? でも、リンカーコアが……え? え?」

エイミー・リミアツタは、いい感じに混乱してる。

その間に、月村忍と高町なのはが高町恭也を取り押さえた。

「さて、キリキリ話してもらおうよ?」

「どういう事なの、お兄ちゃん?」

「ああ、それはな……」

と言うわけで、高町恭也は以前からお姉様の研究に付き合っていた
事を自白。

説明が終わる頃、それを聞いてた一般人と転生者達は、一斉にお姉
様の方を向いた。

何かを期待する目が半分、もっと説明をしろと言う目が半分。

「もう少し説明すると、気と称しているのは、要するにリンカーコアを介さずに魔力や魔力素を扱う技術の総称だと思ってくれ。

魔法関連として見ると、集束系やカートリッジ等の魔力供給系との相性がいい。基礎技術や特性を考えると、ミッド式よりベルカ式、それも古代ベルカ式に向いているな。

フィジカル面で見ると、体調は良くなる傾向がある。力の流れが良くなるせいだろうが、この辺は漫画やらの設定に似ているようだ」
「漫画の気に似ているという事は、美肌とか、老化防止にも効果がある、という事かしら？」

真鶴亜美の目が、光ってる。

この場の、老化する人の中では最年長。お肌が気になるお年頃？

「劇的ではないだろうが、多少は効果があるかもしれない。従者達からは体調が良くなる気がするという報告も受けているが……トレーニングで体を動かすから、その効果でないと言えないんだ。

老化防止は、実証出来るだけのデータが無いしな。見た目が若い士郎を考えると、効果がある様な気もするが……この技術を使っていないはずの桃子の姿を考えると、あの家族はサンプルとしてして微妙じゃないか？」

「いや、父さんは良く、母さんにマッサージをしているはずだ。

その時に気の流れを整えるという話も聞いたことがあるから、或いは……」

高町恭也が、ある意味余計な事を。

主に女性の目が、明らかに輝いている。

「解った解った、お前達にも教える方向で調整してやるから、そんなに慌てるな。

というか、この訓練は高町家主導だからな。あと、アースラ組の2人は、クロノに訓練メニューの追加許可を取ってこい。

基本的に高町の道場で体術の訓練だ。まだ許可は取りやすいだろう？」

「……また、あっちの許可か……」

「訓練内容を決めている人物に相談するのは当然だ。

その内容もお前達の事をきちんと考えた、理にかなった内容だしな。無闇に手を加えていいものではないぞ。

あと、説明するときは、漫画やらの気と混同するのはやめてくれよ。あくまでもリンカーコアを介さずに魔力や魔力素を扱う技術、その鍛錬法としての体術だからな？」

「ああ……」

相変わらず黄昏てる馬場鹿乃と上羽天牙。

でも、別荘に来ることを拒まれてない以上は排除対象じゃないって事だし、執務官直々に訓練メニューを監修してくれるなんてとても恵まれてるけど、気付いてないのかなー？

A×S編23話 動き出す種

その後に、初期調査や簡単な訓練をして。

適性が高そうなのは、月村忍、月村すずか、八神はやて。予想通りの3人だった。

ぼちぼちと言えそうなのは、長宗我部千晴、真鶴亜美、夜月ツバサ、馬場鹿乃、ザフィーラ、エイミィ・リミエツタ。

才能が無さそうだったのは、アリサ・バニングス、上羽天牙、黒羽早苗。

高町家の3人は高い素質がある事が解ってるし、これで、別荘に入るメンバーで魔法が使えないのは、アリサ・バニングスだけという事になりそうだと判明。

「何で私には才能がないのよ!」

「何故と聞かれても、最高の一般人だからじゃないのか?」

「何なのよその評価!」

とか吠えてたけど、ご愁傷様?

そんなわけで、ある程度出来上がった魔導師用の気の鍛錬法の検証、2段階目を開始。併せて非魔導師用の疑似魔導師化も検証を進める。

サンプルが才能の塊な高町家だけだと、心許無い。でも、非高ランク魔導師の検証サンプルがDランク相当のエイミィ・リミエツタ以外特殊すぎるのはちよつと不満。

一緒に体を動かすという意味でアリサ・バニングスも鍛錬には参加する事にはなったけど、お姉様も高町家の師匠達も、無理をさせる気は無い。

八神はやても、リンカーコアに依存しない技術だから訓練に参加。きつと成瀬カイゼやセツナ・チエブルーも参加するし、近いうちに守護騎士の残る3人の適性も確かめる予定。テストロッサな人達やハラウン親子も参加を希望しそうだから、魔導師組はもつと人数が増えるはず。

お姉様や主は適性も高めで訓練も積極的にしてるけど、私達や従者

達はかなりばらつきがある。原因も含めて調査中。チャチャゼロとチャチャマルは微妙な才能だから、ガッツリとは訓練してない。

こんな感じで、10日と少々。

修行と情報収集とアースラの航行は順調。蒐集はゆっくりだけど大きな問題は無く、裏側的な手出しも何やら企んでる様子はあるけど現実的な動きは無い。

つまり、とても平和な感じでアースラが地球近くに到着。

家主と当事者達の事前協議の結果、成瀬カイゼとセツナ・チエブルーは八神家入りする事になってるから、到着した金曜の内に好みの家財を手配、土曜日に家財と荷物の搬入、要するに引越しを済ませた。

戸籍の方も、成瀬カイゼとセツナ・チエブルーの2人とも犯罪組織から救出されたという形で、既に手配が終わってた。変に理由を分けるよりも、この方が簡単だったらしい。

八神家としては身寄りのない者を引き取り、衣食住を提供する簡単な手続き。犯罪者として教育云々辺りの問題は、お姉様の会社役員という立場（さくつと就任済み）や、障害者（八神はやたと主）との触れ合いでとか言って回避した。

2人が遠慮した結果、2段ベッドを使つての相部屋になったため、残りの1部屋が物置状態に。リビングに椅子も増えてちよつと手狭になったけど、八神はやとは家族が増えてご満悦。

この決定を聞いた高町美由希が残念そうな顔をしてたのは、見なかつた事にする。

「僕達も今後慣れるつもりはあるけど、家事の面では迷惑をかけると思う。」

「だけど、事情も知ってるし、協力する事になってるからね。これから仲間としてよろしく」

「よろしくお願いします」

「ごちそうさ。私達も家事では、その……主はやてやチャチャに世話になってばかりだ。」

「共に精進しよう」

「何か硬いなあ。そんなに畏まらんでもええよ。」

それに、私は体を使う作業はろくに出来んし。適材適所、家の事も出来る事をしてくれればええよ」

2人が金曜の昼、買い物前に八神家に寄った時の様子はこんな感じ。

八神シグナムは堅いし。八神はやてがとりなしてるけど、実は一番家事をしてないのはお姉様、次に主。

研究やら色々やって忙いお姉様。体を使う作業が八神はやてと同じく駄目な上に、料理もさほど上手ではない主。それに、お姉様や主が自主的にやるのは止めないけど、そうでないなら私達が動く。

料理はザフィーラが一番上達してるけど、常に八神はやての傍にいて、ちよくちよく手伝いもしてるからという事にしておく。決して、守護騎士の女性を貶す意図は無い。

ちなみに、成瀬カイゼは主が通う海鳴北丘小学校の5年生、セツナ・チェブルは海鳴中丘中学校2年生に編入する事になった。

同様に、フェイト・テスタロッサは私立聖祥大学付属小学校の3年生、高町なのは達と同じクラスになるらしい。私立なのに編入試験をしてない件も考えると、裏側の手の匂いがぶんぶんする。

肉体年齢5歳のアリシア・テスタロッサは、近くの幼稚園へ。小学校で必要な知識を詰め込んで今から転入したり、家に閉じ込めたりするのではなく、必要な知識を自然に得ながら子供らしく過ごしてほしい……と言いつつ、プレシア・テスタロッサは知り合いがない場所へ行かせる事が不安で仕方がないらしい。親馬鹿保護者オツ。

こんな感じでバタバタする中、手を離せない人や面識のない人を除く再会組の多くの人が、土曜の午後に短い時間だったけど翠屋に大集合。

自力で歩くアリシア・テスタロッサが褒めちぎられながらもみくちゃにされてたり、フェイト・テスタロッサと高町なのはが手を握り合いながら再会を喜んでたり、フェイト・テスタロッサと八神シグナムが早速模擬戦の約束をしてたり、フェレットの姿のユーノ・スクライアが高町美由希を筆頭とする女性陣に振り回されたり、セツナ・

チエブルーが前世は男性だと話して一部の空気が微妙になつたりしたけど、とりあえず大騒ぎして終了。

というわけで、改めて八神家全員が揃って挨拶した土曜の夜。

テーブルを囲む9人と1匹は、カレーライスを食べながら打ち合わせ。

元日本人として懐かしく、料理下手でもそれなりに食べられるものが作れて、箸を使わないから、人気のメニュー。

好きな理由がおかしいのは、気にしちや駄目らしい。味も人気だし。

「これから学校で会った時は、何と呼べばいい？」

成瀬君？ カイゼ君？ カイゼ？」

「居候だし、あまり親密そうにすると、余計な誤解を招くね。」

成瀬君が無難じゃないかな。この流れだと八神さんになるけど、いいかな？」

「それでいい」

というわけで、主と成瀬カイゼの、学校での呼び名が決定。

学年が違うとはいえ、会う可能性はある。

「了解。あと、学校までの往復は手伝うよ。」

何やらよからぬ動きをしてる人もいるようだし、護衛を兼ねてね」

「ああ、それは私からも頼む。」

私やチャチャも動く準備はしているし、天気が悪い時はそれを言い訳に付き添っているが、常に傍に居るわけにもいかないからな」

「私も同じ方向だと良かったんですけど。」

あっち方向の中学は遠かったですし……」

セツナ・チエブルーの通学路は、家を出た直後に向く方向が違う。

まさに真逆。海鳴北丘小学校より海鳴中丘中学校の方が近いし、他の選択肢は取り辛かった。

「はやてちゃんも、一緒に通えたらいいんですけど……」

「闇の書が闇の書である間は保護の為に避けたい、か。」

先日の件もあるから理解は出来るが……心苦しいな」

「けどよ、今年中に何とかすんだろ。」

今は、何とかする為に全力で頑張る。それでいいんだよな？」
八神シヤマル、八神シグナム、八神ヴィータの守護騎士3人は、八神はやての通学に前向き。

日本の社会を知れば知るほど、特殊な状況だという事が理解出来るようになってきた。

「それでいい。だが、そうならヴィータも小学生だ。」

言い訳に使っていたはやての状態が変わる以上、拒否権はあんまり無い」

「今更学校なんて行けるかよ！」

てか、あんまりってどういう事だ、抜け道があんのか!？」

「まあまあ。皆で小学生ってのも、ええと思うよ。」

本当の姿でエヴァさんも一緒に行くか？」

「私の設定は22歳だ。今から小学生になるのは無理だぞ？」

保護者としての立場もあるし、収入的な意味では私が大黒柱だ」

「そっかー。残念や。」

でも、お金だけじゃなくて精神面とかで中心やから、間違いなくエヴァさんが大黒柱や。

何か頼ってばかりやけど、これからもよろしくな？」



そして翌日、アースラの現地拠点での受け入れも完了したという事で、早速面会という流れになり。

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーに連れられて、お姉様がアースラの現地拠点、別名ハラオウン家にやってきた。地理はお姉様の方が詳しいけど、2人が紹介するという建前だからこんな表現に。

「2人を通じて色々聞いているから初めてと言う気がしないが、初めまして。」

私が、2人のデバイスを作った八神エヴァンジュだ」

「初めまして。カリム・グラシアです」

玄関でのこんな挨拶から始まった面会は、場所を居間に移して。

護衛のシャツハ・ヌエラもいるし、技術者としてマリエル・アテンザとシルフィ・カルマンもいる。リンデイ・ハラオウンも立ち会ってるし、ちやつかりとプレシア・テスタロツサも混じってる。

ちなみに、シルフィ・カルマンの外見は……ぶっちゃけるなら、カニじゃない鷺羽ちゃん？ ロングの赤毛で、目付きが怪しいちんちくりん。身長も体格も、本来のお姉様より気持ち大きい程度で大差ない。

テスタロツサ家の子供達は高町家に行ってるし、クロノ・ハラオウンとエイミイ・リミアツタはアースラでお仕事のため不参加。

それぞれの自己紹介が終わると、早速具体的な話が始まった。

「まずは、古代ベルカについて、色々詳しいと聞いています。

どの程度か伺っても？」

「構わんぞ。正直に言えば、歴史はあまり詳しくないがな。

そうだな、お前の事は、どの程度話していい？ それによって、見せ方が少々変わるぞ」

「そうですね……お2人やあの情報を考えると、ご存知でしたね。

では、こちらの詩はどの様な意味でしょう？」

そう言いながら、一枚の紙に書き写された4行の詩を差し出すカリム・グラシア。

その内容をちらつと見たお姉様に訳を伝えると、アレか、と納得した表情。

「内容も別に隠す必要は無いという事でいいのか？」

「ええ。先日の事件で、警戒するきつかけになった予言の能力とその内容、という形で発表されていますから。

今更隠す必要はありません」

「なるほど、それなら遠慮なくいくぞ。

これは、既に事後と判断した予言という事でいいんだな。答え合わせの参考までに聞きたいが、解説は出来ているんだな？」

「もう読めたのですか？」

正直に言えば、前半の解説と現実との対応は出来ています。ですが、後半について大よその訳は出来たのですが、どの様な意味か判断

に困っている、といった所ですね」

「ふむ。後半についての予想は出来るんだが、少々時期がおかしいな。とりあえず、訳すところなる。」

〃姿を変えし毒が鋼の心を溶かす時

聖なる座より堕ちたる者が 聖王の面影へと手を伸ばす
限りなき人の望みにより 祀られた絆はその姿を変え
奪われた傷跡より若き芽が育ち 望まぬ王の礎となる〃

……前半が先日的事件という事だろうが、後半は、予想と別の情報が正しければ、5年から10年後のはずだ。お前の能力は、そんな先まで読めるのか……?」

後半に該当する件で一番可能性が高いのは、変態博士に作られるヴィヴィオ。

でも、10年後に5歳。聖骸布の血痕からクローンが作られるのは、早くて5年後のはず?」

「5年以上先……いえ、可能性が無いとは言えませんが、今までにそんな先の事象を扱った物はありませんでした。」

ですが、予言に類するものを持っている事を話して良いのですか?」

「管理局への報告書には既に記述があるし、現実との齟齬がある未来情報など、あてにならない事甚だしい。その上で、より小回りが利く能力の保持者が目の前にいるんだから、別に構わんだろう。」

私が知る範囲で、起こる可能性がある事を言ってもいいんだが……」

どうする? と言いたげな目でリンディ・ハラオウンを見たお姉様。

でも、難しい顔で考え込んでるから、即断は出来そうにない。

(エヴァちゃん、幻の書としての私を持つてくるよう伝えてくれませんか?)

お見せしたい事があるのですよ)

(何をする気だ変態^{コリック})

(話をする場合、聖王のゆりかごの話も出るでしょう? 寝顔を見る

ただけに、危険を承知でオリヴィエちゃんの側に居たわけではありませんよ。

それに、ベルカの事を知っていて当然の出自という事になっていますし、原作も知る身です。絵として映像を見せたりすることも出来ますからね)

何か怪しい。

でも、お姉様が眠りについてからのベルカの情報の多くは変態ロリコンが元。

ベルカ製の魔導具という事になってるし、責任をかぶせるには適任かも。

(……まあ、言いたい事は解る。とりあえず、ベルカの文化面の情報は任せるからな)

(どうぞどうぞ)

「カリム、幻の書を持っているな？」

過去の情報をいろいろ持っているはずだ。持ってきてくれないか？」

「あの本を、ですか？」

そうですね……確かにベルカ製だそうですし、聖王陛下や聖骸布に関する情報を持っていても不思議ではありませんね」

というわけで、本を持ってきたカリム・グラシア。

丁寧に布で包まれている辺り、盗撮防止は一応考慮したのかもしれない。

「意識がある本という事ですし、話しかけると内容が変わる事があるのは確かなのですが、他の方がいる時は反応があまり……えっ？」

布を解いた直後、幻の書がふわりと浮き上がり、テーブルの外へ。

そして、人の姿になる変態ロリコン。

「貴様、何をしている!？」

すかさず、お姉様の足払い、追加で踏み付け。

既に黒龍を起動してる上に、威圧感が半端ない。

「いえ、せっかくですからご挨拶をしたたたたたた!?」

「今まで物として振る舞っていたのに、今更人になるな!」

デリカシーの欠片も無いのかこの変態!!」ロリコン

ストーンピング、追加でストーンピング、おまけでストーンピング。
ごり、めき、ぴし、とか聞こえるけど、自業自得。

「あの、これは一体……」

カリム・グラシアがちよつと引いてる。シャツハ・ヌエラがデバイ
スを出して警戒してるのは流石だけど、マリエル・アテンザとシル
フィ・カルマンは啞然としてる。

他のお姉様関係者は、揃って頭を押さええてるし。

「コレがこの本のもう一つの姿なんだ。」

少女や幼女の枕元ばかり渡り歩きおつて、何が紳士だ!」

ずん、と震脚のような踏み付けの音と、ぐえ、とカエルが潰れるよ
うな声。

「こ、これは効きます。だけど何かが出ちやう……男の子だもん」

「ま・だ・足・り・な・い・か!!」

「おお……変に増してます我らのチチよおおお!!」

ギ、ギブ! ギブ! 冗談抜きで、何かが出ちやいます!!」

「敵を増やすような事ばかりしおつて、このまま魂が抜けるがいい!」
「良いのですか、ホイホイ踏んづけて。私は……あー、これ以上は色々
と洒落にならなそうですから、止めておきますよ」

お姉様の足下にいたはずの変態ロリコンがお姉様の後ろに現れ、足の下には
枕が現れた。

相変わらずの高度な幻術。いつ入れ替わったのやら。

「チツ……このままくたばれば良かったものを」

「氷点下の視線も素敵ですが、大事なお話があるのでですよ。」

先ほどの件について、色々詳しい方を紹介したいのです」

「詳しい人、だと……?」

宵天は眷属や従者に関する能力を持ってないから、過去の人物を呼
べるとは考えにくい。主がいれば不老不死の保護を与えられるけど、
主はほしいほい替えられないはずなのにカリム・グラシアからユーノ・
スクライアに乗り換えてるみたいだから、確実に何らかの細工をして
る。そんな状態で保護を維持出来るとは考えにくい。

現代の人物だと聖王教会の関係者が考えられるけど、変態ロリコンより詳しい人物がいるとも思えない。

事件の話で変態博士の関係者を呼ぶのは無理があるし、他に詳しい人に心当たりは無い。

どうする、とお姉様が視線で聞こうとしたけど、部屋の中にいた女性、つまりほぼ全員がちよっと物理的に引いてる。

成瀬カイゼとシャツハ・ヌエラだけが、デバイスを手がちよっと前に出てる。

「ええと……その方は、その、大丈夫なのですか？」
引きつつも、何とか確認するカリム・グラシア。

ちよっと震えてるけど、何とか耐えてる。

「私が何を言っても信憑性は無いと思いますし、実際に話して判断されてはどうでしょう？」

そうすれば、何故私が紹介したかったのか理解出来ると思いますよ。

危害を加えるような人物でない事は保証しましょう」

「……リンデイ、どうする？」

「そうね、ここで拒否するのは簡単だけれど……会ってみましょう。

最悪の場合は、幻の書がこの世から消える事になるでしょうけれど」

「だそうだ。

だが、次に妙な事をしたら……覚悟しろよ？」

「転送だけはしますが、他は何もしませんよ。

では、いきます」

変態ロリコンはお姉様に背を向けると、三角形の魔法陣を展開。

そこに現れたのは。

「初めまして、皆さん。ヴィヴィオ・ルアソープと申します」

20歳くらい？ の、優しげな美女。

義手じゃなくてショートカットだけど、雰囲気的に見ても、ベースロリコンは変態の情報や霸王クラウドスの記憶の方の聖王オリヴィエと思える。

とりあえずVividヴィヴィオ大人モードと比べると、明るさ成

分をそのままに、優しさ成分を強めた感じ？ S t r i k e r S の
ヴィヴィオ聖王モードとは比べちゃいけない気がする。

「何をやってる変態^{ロリコン}！」

「貴様が全ての元凶か!? 何故オリヴィエのクローンがここにいる
!!」

「無限の欲望ことスカリエッティに好きにされるのは嫌でしょう？」

都合よくスカリエッティの研究施設が封鎖されたから、ちよつ
と使わせてもらったのですよ」

「アホかー！ そもそも、どうしてお前がそんな技術を持っている
!？」

「私が遺伝子関連の技術を持っているのは、食材の情報を見れば明らか
じゃないですか。」

「そもそも、製作者はあの人ですよ？」

「……アレがフラグだったのか……」

今度は、お姉様が綺麗な o r z の状態になってる。

確かに今の別荘の生態の殆どは、変態^{ロリコン}が送ってきた遺伝子情報から
育てた動植物で構成されてるけど。それには主様のクローン技術が
活躍したけど。

「……なら、こんな事をした理由は何だ？」

まさか、嫌がらせではないだろうな。権力抗争を避けるためにこつ
ちに来たカリムに、対聖王教会で強過ぎる手札を見せたのは何故だ」
「それは、私が説明します。」

ゆりかごに呑み込まれる前の約束だったのです。私がゆりかごの
王となっても戦を終わらせられなかった場合、もしくは、戦が終わり
力を持つ必要がなくなった時に、長い眠りにつかせると。そして、比
較的平和な時代に目覚めさせる、と」

「……変態^{ロリコン}。まさか、本人の……なのか？」

「ええ。オリヴィエちゃんがゆりかごの王となった事で、私も自由に
動けるようになりましたからね。人としては死亡したという事なの
でしょう。」

その後、群雄割拠の時代の終わりは見えました。過剰な戦力の保持

が有害になっただろうと判断した時点で、約束通りに可能な限り心や記憶を確保し、守ってきたのですよ。

私がオリヴィエちゃんの傍にいた事は、エヴァちゃんは知っているでしょう？」

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト本人の記憶……この言い方なら、魂を移植してる？」

寝顔の映像は、確かにあった。その気になれば、いつでも蒐集可能ではあっただろうけど。

「今代の父様には感謝しています。

今の世界の事やベルカの辿った歴史を教えてもらいましたし、少しこの目でも確かめました。

確かに、平和な世界、平和な時代だと思います」

「……いつたい、どうすればいいんだ。こんな爆弾を抱える予定はしていないぞ……」

お姉様が頭を抱えてる。

聖王教会に対する最強の切札だけど、明らかに最悪でもあるジョーカー。

副作用が怖すぎて使えないけど、既にカリム・グラシア他数人になればれる。

報告の義務を考えると、無かった事にするのは……取引が必要？」

……ほんと、どうしよう。

A S編 24話 混ぜるな危険

その後、この場にいた人達で侃侃諤諤の議論が行われ。

最終的に、ヴィヴィオの存在は当面は特に報告や公開はせず、聖王オリヴィエに似ているだけの一般人として扱う事になった。但し、この場での邂逅と聖王オリヴィエの記憶がある事を除いて必要以上の隠蔽もせず、不自然さを覚られない事を優先する方針。

決め手は本人の意思だけど、その時のやり取りはこんな感じ。

「私は確かにゆりかごの王と呼ばれる立場に立っていましたが、既に国は無く、ゆりかごも稼働していないのですから、王を名乗る資格は最早ありません。」

それに今は平和なのですから、無闇に騒動を起こす事は好ましくないのでしよう。王という存在は強力な指導者や何らかの象徴が必要な場合にしか有効に機能しないものです。

出自としても問題がありません。盗まれた聖遺物の血痕から作られたクローンなのですから、盗難に加担した人物を祀り上げる事にもなりかねません。

……と色々言いましたが、何より、私も普通の人として、平和な世界で過ごしたいのです」

「所謂あれです。普通の女の子になりたい、ですよ」

「黙れ変態、ロリコン日本人にしか解らんネタで茶化す場面ではない！」

「いいえ、エヴァさん。その言葉は、こちら……特に時空管理局にとって、とても重い意味を持つわ」

「……リンディ、冗談だよな？」

「いいえ。随分前の話だけれど、時空管理局の広告塔をしていた女性魔導師が、多くの人の前でその言葉を言って自身のリンカーコアを砕いた事件があったの。しかもその女性は、退院の少し後で犯罪者に襲われて死亡。人気があっただけに、組織としてもかなり動揺したという記録が残っているわ。」

これが教訓になって、今は魔導師の英雄化や過剰な露出を避ける事が、時空管理局とマスメディアの基本方針になっているのよ」

「その少女も、当初はノリノリでしたからね。

知名度が上がるにつれて増える、犯罪者からの圧力に耐え切れなかったようです」

「それに、崇拜対象として扱われる事を納得出来る程、私の手は綺麗ではありませんから」

というわけで、とりあえずは各権力や組織から最も遠く、安定した生活基盤と防衛力があるお姉様が何らかの方法で匿う、という事で落ち着いた。言葉には出してないけど、要するに当面は別荘に隔離するという事。最終的には、また八神家に加わる？

そろそろ限度な気がするけど、他の家に行かせるわけにもいかない。

なんでこうなった……うん、だいたい変態ロリコンのせいなのは解ってる。

今までカリム・グラシアにも隠してた事は、ヴィヴィオの気持ちを考えると妥当とは言えるだろうけど、変態ロリコン許すまじ。絶対にヴィヴィオが名乗った変態ロリコンの姓は呼んであげない。

「で、ヴィヴィオが来る前の質問に、纏めてぶつちやけるとだ。

例の未来情報では、オリヴィエのクローンとして生まれたヴィヴィオ……本人の記憶は無いから別人のようなものだが、10年後に5歳相当で管理局に保護される事になっていた。クローンを作るのは、恐らく無限の欲望とも呼ばれるジェイル・スカリエッティの関係者。元となるのは聖骸布に残っていた血だ。恐らく、これが予言の3行目に相当する。

4行目は……何だろうな。クローンの続きにも見えるし、この事件で頭角を現す人物がヴィヴィオを支えるとか、そんな意味にも取れるか。

……変態ロリコン、ヴィヴィオに名前の由来くらいは教えてあるんだろうな？ それと、本気で約束だけが理由なのか？」

「本来の名を名乗らないのですから、概要程度は教えてありますよ。他に私が教えたのは、現在の世界情勢……主にミッドチルダと日本についてですね。それと、ベルカの歴史に、私やエヴァちゃんの事と、今やっている事。概ねこの辺です。

他の理由としては、可能な限り未来を変えたい、という事もあります。未来情報の状況に強制的に至るような力が働かない事を、素直に信じられませんから」

「基本的な事は一通り教えてあるのか。」

それと、未来の状況を別の方法で再現してしまう事で、怪しい力を無力化したいという事か……？」

「春の事件の後半についてや、夏に起きた盗難事件についても、事前に情報がありませんからね。」

本当に偶然や必然だけで説明が出来ると思いますか？

予知の一種なのかもしれませんが、何らかの理解不能な力が働いていたとしか考えられないのですよ」

（そもそも、何故か私とエヴァちゃんの原作知識は封じられていますね。予知の一種なのかもしれませんが、何らかの理解不能な力が働いていましたからね。原作知識や前世の記憶が予知を元に作られたものだと仮定しても、2500年前の時点で得ていた記憶と開始時点の状況が一致するなど、異常にも程があるのですよ。）

（ここが本当に物語の中であれば、それを成立させるための力が働いているはずですよ）

「確かに、私達が手を出さない限りは、得た情報通りに物事が進み過ぎているが……その状況を崩したいと？」

（要するに、強制力とか言われる代物を崩したいのか。）

（私やお前が原作に関わる人や世界に触れる事が出来なかったのも、強制力関係の仕業だ、と）

「ええ。何者かの思惑に操られるのは趣味じゃありませんので」

（ここが謎なのですが、エヴァちゃんは一度地球に来ているのですよ。エヴァちゃんが最初の任務で破壊した塔は、バベルの塔です。聖書に登場するアレで、恐らく地球の魔法文化消失の鍵です。あの時点では、行動そのものすら操られていた可能性が否定出来ないのですよ。）

（ですが、ヴィヴィオがいる状況ならオリヴィエのクローンを作る必要が無くなりますし、聖骸布を取り返したことで材料も無い状況となっっているはずですよ。）

そのままこちらで保護していれば、ゆりかごの浮上も防ぐことが出

来るでしょう。

そうすれば結果的に、StrikerSの前提を根底から崩せるのかもしれないのですよ)

「だが、そう上手くいくものか？」

もう一度奪われる可能性や、既に必要な作業が終わっている可能性もあるぞ」

(……私はエヴァだ。エホバではないし、言語について何かした覚えなど無いぞ。

それより、遺伝子情報の取得に必要なサンプルは本当に取られていないのか？ それに、スカリエツティやらにヴィヴィオの存在を知られる事が前提になるし、別の手段でゆりかごを動かそうとする可能性も出てくるだろう。

そういった形で修正される可能性は考慮しないのか?)

「必ずうまくいくとは考えていませんし、無駄な足掻きかもしれませんん。

ですが、黙って言いなりになる気はないのですよ」

(その検証の為に、ですよ。

その関係で、なのはちゃんとフェイトちゃんのデバイスに、カートリッジシステムを付けてほしいのです。付けずに別の敵が現れるか様子を見ても良いのですが、やはり、手出した結果の方が重要だと思いますから)

「……そうか。理由は理解した。

だが、事前に説明くらいはしろこの変態！」

お姉様の拳が唸る。

変態を滅しろと轟き叫ぶ！

「……はひ……」

顔面から床にめり込み、頭から煙が立ち上ってる変態、撃沈。

「まあ、こんな感じだ。解りにくいと思うが……理解してもらえるか？」

お姉様は変態から視線を外すと、カリム・グラシアに視線を合わせた。

やっぱり引いてるけど、ちょっと警戒してる様子もある。

「ええ……未来の情報にも関する事だ、という点は何とか。

ですが、古代ベルカ製のロストロギアを相手にそこまで出来るエヴァンジュさんは、何者なのでしょう？」

「私もジュエルシードの影響を受け、未来の情報とやらを持つ者だ。ついでに過去の情報も色々と持っているだけだな。

そろそろ待ちきれない様だから、魔法談義でもするか。技術者2人はその為にいるのだろうか？」

「待ってました！ ささ、カリム様はあちらへ」

「シルフィさん、この場の主役にそれはちよつと……」

カリム・グラシアを押しつけ、シルフィ・カルマンが前に出てきた。

口では止めてるけど、マリエル・アテンザも空いた場所に居座ってるし。

「もう……では、後ろで聞かせてもらいますね。

陛下もこちらへどうぞ」

「陛下は止めて下さい。既に王ではないのですから」

「では、ヴィヴィオ様、とお呼びすれば良いでしょうか」

「出来れば、敬称も外してもらえれば良いのですが」

ちよつと慥然としつつ、ちやつかりとカリム・グラシアはヴィヴィオを隣に呼び、並んで座ってる。

というわけで、今からは魔法の時間。

お姉様と向かい合わせで、マリエル・アテンザとシルフィ・カルマンが座る形となった。

「さてと、何から知りたい？」

前提を言っておくと、私の知識は古代ベルカが中心だ。ミッド式や近代ベルカについては、最近学び始めた段階だからな」

「古代ベルカの技術者から見た、ミッドチルダ式や近代ベルカ式の利点や欠点について、つてのはどう？」

意識や考え方の差異を見るには、一番だと思っわ」

シルフィ・カルマンが、お姉様から情報を引き出そうとしてる？

でも、情報のすり合わせには一番いいかも。

「ふむ、なるほど。とりあえず、差が解りやすいデバイスの話でいぞ。

お前達は知っているとと思うが、古代ベルカ式のデバイスは、基本的に高効率だが硬直した専用術式の集まりだ。利点は高速、高効率、高耐久性で、欠点は汎用性が無く、融通が利かない事だな。

ミッド式は対極の様だな。汎用性に特化する事で様々な魔法を扱え、それこそ即興で魔法を組む事すら可能だが、速度や効率で不利になり、耐久性も低くなりがちだ。

近代ベルカ式は、ミッド式がベースと聞いている。汎用性のある基盤に特化した部品や術式を追加する事で、ある程度の汎用性を維持しつつ特定魔法の効率を高めたりしているイメージだが……

この時点で、認識の違いはあるか？」

「概要は完璧ね。古代ベルカ式の欠点をきちんと把握してる技術者って少ないから、本物だって期待出来るわ。

というか、マリーにもこの辺は話してあったっけ？」

「いえ、術式は見せてもらいましたが、こういった大雑把な話は聞いてないです。確かに、多少の調整くらいしか出来ない術式という印象を受けましたけど。

それなのに、1対1なら負けは無いと言われる程の強さを発揮出来るんですか？」

シルフィ・カルマンはうんうんと頷いてるけど、マリエル・アテンザが戸惑ってる。

「今で言う古代ベルカの一般的な戦闘用デバイスは、大抵は移動と術者が得意なレンジでの戦闘魔法に特化させてあった。

つまり、自分に有利な距離を維持し、得意で効率の良い魔法を叩き込むのが基本戦術だ。同じレベルの魔力量や技量で撃ち合うなら、特化した古代ベルカ式の方が手数や速度、威力といった面でかなり有利になるからな。

一般的な10の魔法を10回ずつ練習するより、自分に合った2つの魔法を50回ずつ練習した方が、戦術がはまれば有利という事でもある。

だが、その前提が崩れる、つまり苦手な距離で戦う場合は、特化している点が裏目に出る。利点を捨てて多くの魔法に対応したデバイスでない限り、手札が無くなる事が多いんだ」

「それが、1対1なら、の前提なんですか……」

「カートリッジはベルカの人の魔力が少なかったから開発された、つて記録があるしね。魔力量で有利なミッドチルダに対抗するには、効率を上げる、魔力をどっかから持って来る、の2つしか道が無かったってわけ。」

「デバイスの魔法を増やすと部品が増えるから、脆くなったり、反応が悪くなったりしやすいし」

シルフィ・カルマンが補足してるけど、両方を極めようとした結果がコレだと思える。

カートリッジの負荷に耐えられる構造を維持し、それ以外の遊びや調整範囲を削ってでも効率を求めた術式の数々。

アルハザードが健在だった時代と比べてすら、ベルカ後期の魔法の特化振りはかなりひどい。

「それに加え、魔法発祥の世界で戦乱続きだったからな。」

長期に渡り改良を重ねてきた多くの術式という資産があった、という点が1つ。

さほど高度な技術が無くてもデバイスを生産出来る必要があった、という点も1つ。

集団対集団では部隊の役目は限られて、汎用性はさほど重要じゃなかった、という点も1つ。

生産性を考えると構造が単純である必要があり、単純であるが故に頑丈で、単純なまま魔法の効率を高めるには専用化するしかなかった。結果的に、主流の部品を集めるなら作る事が比較的容易で、カートリッジの負荷にも耐えやすい物が出来るという事でもあるな。

専用の術式が氾濫し過ぎて、一旦廃れてしまうとまともにメンテナンスも出来なくなったり、後から解析するのも困難になったりしているわけだが……新しい魔法を使う場合は新しいデバイスを組むのが常識だったから、当時は問題にはならなかったようだ」

「でも、ミッドチルダ式の欠点は、その裏返しなんですよね？」
「そうだな。」

汎用性に特化し、様々な状況に対応可能なミッドチルダ式のデバイスだが……一言で言えば、コストがかかる。

実用的な性能のデバイスを作るには、比較的高度な技術と生産設備が必要だ。

魔法を行使するために必要な手順があり、それを実行するだけの魔力と時間が必要になる。

特に、使用時のコストである魔力と発動時間は、戦争では弱点になるからな。デバイスの技術力で補う方針のようだが、それはデバイスのコストに跳ね返るはずだ。

よほど優れたAIを使っていない限りは戦闘中に魔法を組むなんて不可能だから、汎用性があり融通が利くと言っても限度がある。どちらが優れていると、簡単には言えない」

高度な技術を安定して投入出来るなら、ミッドチルダ式の方が有利になりやすい。

でも、製造技術が安定しない戦乱期なら、古代ベルカ式の方が調達面で有利。

古代ベルカの技術の多くが失われた今となつては、ミッドチルダ式1択だろうけど。

「そして、近代ベルカ式は、両方の長所と短所を抱える可能性がある……」

でも、長所も短所も、真逆ですよね？」

「そうだな。性能を上げようとすればコストが上がり、汎用性についても同様だ。」

だが、専用化してコストを下げようにも、汎用的な部分が足を引っ張りやすい。

要は何処でバランスを取るかだが……これは古代ベルカ式でも同じだ。融通が利かない分、古代ベルカ式の方が失敗した時の問題が大きいしな。多少は融通が利く近代ベルカ式の方がマシとも言えるか？」

「そうなんですか。」

でも、魔法そのものの比較ではないですよね?」

デバイスについての概要は、ここまで。

でも、魔法の話はあまり面白くない。

「魔法自体は発展方向が違うだけで、同系統の技術だぞ。」

今の形に近い魔法技術の発祥はベルカだそうだ。正確には知らんが、ベルカ自体は今からだと5000年以上前まで遡れるくらいの歴史があるらしい。魔法の技術を発展させ続けたベルカは、他の次元世界に渡る技術も生み出し、多くの世界に広がっていった。

その行先の1つに、クラナガンという研究者の集まる小さな都市があった。今のミッドチルダ式と呼ばれる魔法は、その研究者達がベルカ式の魔法を再構成し、より人に使いやすいものを目指して作り上げたものだ」

「はあ……今じゃミッドチルダ式が当たり前みたいな感じですけど、昔は違ったんですね。」

ミッドチルダ式魔法自体の利点も、やっぱり汎用性なんですか?」「いや、ミッドチルダ式の魔法そのものは、どちらかと言えば人が使う事を前提に、専門的な訓練があまり必要でない形にまとめてあるイメージだな。極端な最適化を避ける事でデバイスの規格も共通化しやすいが、速度や効率が犠牲になっているし、デバイス自身も複雑になりやすい印象を受ける。」

デバイス無しでもそこそこ頑張れば何とかなるし、デバイスがあれば様々な魔法の行使も簡単だが、その分デバイスは高度で繊細。そんな魔法になっっているようだ」

簡単に言えば、初心者向きで敷居が低い。生産や調整に必要な技術さえ維持出来れば、汎用性を武器に量産効果でデバイスのコストを抑える事も可能。

だからこそ、多くの世界に広まっていったらしい。

「という事は、ベルカ式は逆……デバイスが無いと発動は難しく、デバイス有りでも色々頑張る必要がある……?」

いいところが無いじゃないですか?」

「確かに効率を追求し過ぎた魔法は、デバイスが無ければかなりの訓練が必要になる。初心者用の魔法もあるにはあるが、適性を調べたり、補助的な使い方をしたりする物ばかりだ。

デバイスに用意された魔法の発動は簡単だが、入れ替えは難しいから、決められた魔法しか使えない量産品を何とかして使うか、自分が使う魔法を絞り込んでワンオフで組むしかない。

それを補うのが、デバイスの部品自体はシンプルで生産しやすいと言う点だ。確かに組み合わせる為には職人的なセンスを要求されるが、低い生産技術でも素晴らしい結果を出す事が可能だ。コストや効率を犠牲にすれば、魔法の種類を増やす事も可能だしな。

初心者向きのミッドチルダ式の逆、玄人向きの魔法と言うのが正しいのだろう」

「なるほど……何だか扱い辛いと思ってたんですけど、そういう理由だったんですね」

「そこで登場したのが魔法側の調整も出来る近代ベルカ式、つてわけよ。

決して、決して！ 古代ベルカの術式とかデバイスの製造知識が足りないから作ったんじゃないんだからねっ！」

「どこのツンデレだ、お前は。」

それでだ、後はここからの派生で導ける話だな。

デバイスが頑丈、術式が効率的だから発動が早い、故に近接戦に向くベルカ式。

多彩な魔法を扱える代わりにデバイスが繊細で発動も遅め、故に後衛や支援向きのミッド式。

例外も多いが、基本的にはそんな感じだ」

「例外、ですか？」

「ベルカにも遠距離や支援用の魔法があるし、頑張れば多彩な魔法を扱う事も不可能ではない。

それに、ミッド式でも近接戦を好む者はいるだろう？

向き不向きと可能不可能は、同じではないからな」

「確かにそうですね」



そんなわけで、その後は2つのグループに分かれて、お話の続きという事になった。

一方は、お姉様、マリエル・アテンザ、シルフィ・カルマンの技術者グループ。

実際の製造に関する話とか、魔法の術式についての突っ込んだ話もしてた。

シルフィ・カルマンの目がキラキラ輝いてたのが印象的。マリエル・アテンザも興味津々、話自体にはあまり参加してなかったけど、面白そうに聞いてた。

逆に、お姉様が近代ベルカ式やミッドチルダ式の知識が欲しいと言った時は、2人が張り切ってた。今後もこの関係が続けられたら、いい感じで生きた情報を手出来そう。

ただ、術式の利点と欠点を整理して、あれをこう組み合わせたら、いやこつちの方が、そういうええばどこかの少数部族が使ってた変わった術式が、とかやり始めてた。近古のベルカ式とミッドチルダ式とマイナーな方式を合わせた何かを作り始めそうで、ちよつと心配。

もう一方は、リンディ・ハラオウンとカリム・グラシアを中心とする、親睦会グループ。当然シャツハ・ヌエラもいるし、成瀬カイゼ、セツナ・チェブルー、プレシア・テストアロッサ、ヴィヴィオもこつち。

変態は簀巻きにして放り出してあるから、どつちにも参加してない。

「ええと、こちらに來た感想はどう？」

随分と常識が大変なことになってると思うけれど」

お茶に角砂糖を入れながら、リンディ・ハラオウンがカリム・グラシアを見てる。

お互いに疲れた顔をしてるけど、非技術者が技術者の会話を聞いてたからと、あとは変態のせいだと思いたい。

「ええ……ですが、得難い経験は出来ました。

あの方が古代ベルカの知識を持つ事は間違いない様ですし、来た甲斐があつたと言えます」

「それは何より。予定では1月程度こちらに滞在するという事になっているけれど、日程は大丈夫そう？」

技術面は、あちらの状況次第になるでしょうけれど」

「そうですね、延長出来ないか相談しようかと考えていました。

その場合はお願い出来ますか？」

「他にも、色々な事があり得るけれど……大丈夫そうかしら？」

その、精神的な面で」

「今日ほどの事は、早々ないと思いますが……その様子では、まだ他にもある覚悟をしておいた方が良さそうですね。

皆さんも似たような経験を？」

「ええ……自分の常識を、何度も疑う羽目になったわ」

「そうね。恩恵は大きかったけれど……失った代償じょうしぎは大きかったわ」

「私はある意味で似た物同士なので、ノーコメントという事で……」

「あの人を同じ人間だと思つて扱うと、失敗する可能性はあるね」

カリム・グラシアの問いは、リンディ・ハラウンとプレシア・テ

スタロツサにクリティカルヒット。セツナ・チエブルーは人外仲間だ

からいいとして、成瀬カイゼはなんて失敬な。事実なだけに何も言えないけど。

A S編 25話 喧騒、来たれり

夕方になり、今日はここまでという事で、八神家組は帰宅へ。

ヴィヴィオもお姉様預かりなので、一度連れて行くことになってる。でも、しばらくは別荘行きが無難。戸籍等の設定が出来るまでは、変に出歩かない方が良い。

「お帰りエヴァさん。また増えるんか？　なんか、一気に大家族や。

初めまして、八神はやていいいます」

「初めまして八神はやてさん、ヴィヴィオ・ルアソープと申します。

長い付き合いになるかと思いますが、よろしく願いますね」

「恐らくそうなるが、当面は別荘に住んでもらうぞ。

色々省略するが、簡単に説明すると、別世界の昔の王の記憶を持っている人物だ。

こっちは、私が保護者をやっている、八神はやて。一応この家の所有者で、闇の書の主だ」

「この方が闇の書の主なのですか。

かなり危険な魔導具だという事は知っていますし、何とかする予定だと聞いてはいるのですが、詳しい説明はして頂けますか？」

「闇の書と呼ばれるようになった原因は私がかするが……詳しく聞いていないのか。これについては長くなるから、後で説明しよう。

この家の住人は全員、テスタロッサの魔導師組とハラオウン親子も事情を知っているが、あまり言いふらさないでくれよ？」

「そうですね、解りました。今は災厄の種でなくなる見込みがあるという事を理解しておけば大丈夫ですね」

こんな感じで挨拶した後は、ヴィヴィオはそのまま別荘へ。

部屋の準備は間に合ったし、後は別荘の管理担当のチャチャが注意点を説明。食事の準備等は従者達に任せても大丈夫だし、生活に問題は無い。

その後、どんな設定がいいか、月村家のチャチャ経由でいろいろ相談。お姉様が海外にいた頃の友人で、仕事の助手として招くのが無難じゃないかという事になった。

出会は4月、ジュエルシードの影響で記憶が目覚めた頃のお姉様が街角で見掛けて、思わず声を掛けたのが出会いという事に。4月に設定を詰め込み過ぎになるけど、日本に来てから出会ったのでは遅いし、ジュエルシードが降ってくる前も言い訳的に問題。ここしかなかった。

ヴィヴィオ本人は、曲がりなりにも元聖王。人の上に立つことは慣れてるはずだし、Vividのヴィヴィオを見る限り体より頭を使う方が得意なはず。本人もそれを認めてるから、扱いとしての問題は無い。ちよつと若すぎるだけで。

というわけで、今後しばらくはお勉強という事になった。日本語は教えられてるみたいだけど、他に最低1つは翻訳魔法を使わずに扱えないとまずいし、文化等も知っておく必要がある。お姉様の記憶を使えた私達や、闇の書が起動前に集めた主に関する情報の一部が与えられるらしい守護騎士とは、前提がちよつと違う。

未知の物を知るわくわく感という意味で、本人も乗り気。短期での成果に期待。

今日の話し合いの間、高町家を訪れていたフェイト・テストアロツサ、アリシア・テストアロツサ、アルフの3人だけど、最終的に気の訓練を開始する事になったらしい。

素質としては多分3人ともそれなりだけど、さつき名前を挙げた順に適性がある。結果に期待出来そう。

そんなわけで月曜になり、転入の手続きは行ってるけど準備が整ってない成瀬カイゼとセツナ・チェブルーは、八神家でみんなとまったりしてる。

お姉様も必要な時以外は会社に行かないから、八神家や別荘にいる事も多い。本来は色々と話したいだろう派遣組カリム&マリエル&シルフィの3人は現在、打ち合わせや報告、ついでに現地文化の理解に手を取られてる。

つまり、割と時間と状況に余裕があるから、色々気になる事を解消。「ふむ、一番適性がありそうなのはセツナだな。

というか、アコノや私を超える可能性すらある水準の様だぞ。あの時のカートリッジの異常効率、これが原因か……？」

「そ、そうなんですか？」

セツナ・チェブルーの気の素質が相当高い水準だと判明したり。

「チクアーブとヴィヴィオも、高めの素質だと言えそうだ。」

これは、集束よりも魔力供給への適性によるものか……？」

「かもしれない。我等の本来の魔力量を考えますと、エヴァ様より頂いた魔力を問題無く扱うというのは、なかなか高難易度の様に思えますぞ」

「ゆりかごの適性を判断する為に、どの程度供給出来るかの検査を行った覚えがあります。」

適性があると判断されたという事は、多くの供給を受け入れられるという事でしようか」

こんな感じで、この2人も素質ありという結果になったり。

「シグナムとヴィータも、そこそこ適性があるな。カートリッジの使い手として、問題ない水準だろう。」

カイゼとシャマルは微妙な感じだが……乱用しなければ問題ないだろうな」

「そうか。主を守るに足るなら、それでいい」

「だな。前に立つアタシ達が向いてなかったってんじや、情けねーし」

「でも、私はあまり適性が無いんですよね……クラールヴィントにカートリッジシステムが無いのは、そのせいなんでしょうか？」

「そうかもしれないね。」

それでも、サポート役として十分な実力があると判断されたからこそその構成だろうね」

守護騎士の残り3人や、成瀬カイゼの気の素質も調査したり。

「いえ、今のデバイスも十分に良い出来だと思えますけど。」

それに、お世話になってばかりですし……」

「私はお前の腕を知っている。一流の腕に持たせる武器が二流だなど納得出来るか！」

とか言いながら、かなり強引だったけどお姉様はセツナ・チェブルーを刀匠の元に連行して、新しいデバイスの元とする野太刀についての打ち合わせをしたり。

「カートリッジって、ベルカ式の……？　大丈夫なの？」

「バルディツシュ、どうしよう？」

『No Problem』

『Please』

「デバイス達の方が乗り気じゃないか。まあ、無理に使えとは言わん。むしろ、当面は使わずに済めばいいと思っている。

だが、今やっている鍛錬が実を結ぶ頃には使えるようになるはずだ。ある程度扱い方に慣れる為にも、早めに組み込んでおこうと思つてな」

などと、カートリッジシステムの実装に関して高町なのはとフェイト・テスタロッサを説得したり。

確かに、修正力的な何かの存在を考慮すると、余計な敵を用意されるよりは先に組み込んでしまう方が平和な気がしないでもない。
ロリコン 変態が発案という点だけが気に入らないけど。

とりあえず了承という事で設計に着手、原作A☒sで追加されたCVK-792-AとCVK-792-Rを組み込む事になった。現在は、補強部品と併せて手配を依頼中。シルフィ・カルマンはノリノリだけど、マリエル・アテンザはちよつと困惑してた。

その後、高町家の道場で模擬戦に誘われたフェイト・テスタロッサが。

「え、ど、どうして美由希さんが魔法を!？」

「ふふつ、驚いた？」

驚いたまま撃墜されたり。

「ええつ、どうしてなのはがそんな動きを!？」

「頑張ったんだよっ!」

やけに体術面が向上してる高町なのはにも驚いて撃墜され、フェイト・テスタロッサが落ち込んだり。

「全く……新しい技術を見付けるなどは言わないが、これもまた危険な火種に見えるんだが」

「日本の漫画やらでありがちな、気に類似した技術だからな。それに、意識せずに使っていた高町家という実例もある。

私が見付けなくても、そのうち何らかの形で広まっていた可能性は否定出来んぞ」

「だからこそ、何だが。」

「だけど……」

「あら、クロノ。嫉妬してるの?」

「母さんが今以上に若くなるのは、将来が不安なだけです」

「いいじゃない。エイミイもいるんだし」

「どういう意味ですか?」

「こんな感じで、クロノ・ハラオウンの素質はそれなり、リンディ・ハラオウンはかなり高い事が判明したり。」

「ふふ、元々年齢について色々と言われる事もあったけれど、こんな事が原因の可能性があるなんてね。」

「大魔導師を名乗れた実力に感謝すべきかのかしら?」

「プレシア・テスタロッツサの素質が超高い事も判明したり。」

「恐らく、主達に匹敵する水準。」

「ユーノは、クロノより低めの様な感じがするが……まあ、それなりだろう。」

「良かったなユーノ。最近影が薄いから、跡形もなくなるんじゃないかと心配していたぞ」

「誰の影が薄いつて!?!」

「お前だ。しっかりアピールしないと、フェイトになのはを取られるぞ?」

「ちよ、な、なのはとは何もないよ!?!」

「だから取られるんだろうが」

「等といぢりながら、ユーノ・スクライアの素質が並（お姉様の基準で）だと判明したり。」

「ちなみにユーノ・スクライアはアースラ在住で、時々現地拠点や高町家に顔を出してる。ジュエルシードの影響に関する調査に協力する民間協力者、という位置付け。」

「そんな感じで、手続きやらを調査やら訓練やらで日が過ぎた水曜日、空が暗くなつた頃。具体的には夕食の準備をしていて、お姉様と」

主が部屋にいる時。

多数の転移反応を感知。

気配と人相が怪しい。服装黒、騎士団を気取りたいようです。^{バタイン}

襲撃者と予想、要警戒。

「はやて達は全員家にいるな。」

他の連中の様子は？」

アースラの現地拠点は、テストロツサ家を含む全員と黒羽早苗がいる。戦力的には問題ない。

高町家は兄妹の3人、ユーノ・スクライア、真鶴亜美、夜月ツバサ、道場のチャチャ。

長宗我部千晴は自宅。付近にチクアープがいる。

翠屋は夫妻とバイト、それに一般客。襲撃対象となるか微妙だし、高町家のチャチャがいる。

魔法的な戦力があると言えるのはここまでだけど、私達の戦力化は慎重に。

バニングス家は良くも悪くも一般人。襲撃理由はお姉様達との関連性しかない。

月村家は、最低限の戦力はある。現地の協力勢力扱いのはずだから、アースラからの支援も期待出来る。

馬場鹿乃、上羽天牙、間宮萬太は自宅。東渚は公園にいる。襲撃されるか不明だけど、この4人は襲撃されたら危ない。

「……東と間宮は見捨てるぞ。アレにも行くなら、連中の手柄として喰わせる。」

他は、少々の怪我までは許容する。なるべく力は隠す方向だが、命に係わる場合や誘拐されそうになった場合は保護を優先、余計な連中に情報が漏れなければいい」

「特典無効化は？」

「私達やアースラの拠点はともかく、アレに行くなら目的は情報収集だろう。」

いきなり殺される可能性は低いから、持ち帰ったところを襲撃するなりするさ」

「わかった。守護騎士の力は見せる？」

「……可能な限り避けたいところだな。出来れば、一般人だと認識して帰ってほしいところだ。」

タイミング的に最高評議会かスカリエツティだろうから、誤認してくれるとありがたいが……」

「表向きは、エヴァはCで私がBという事になっているはず。」

実態はともかく、セツナとカイゼの2人だけで大丈夫？」

八神チャチャは魔導師として認識されてないし、ヴィヴィオは出せない。守護騎士を戦力外とする場合、保護対象が多すぎる。

転移してきてるのは50人、魔力量としては多くてAA、ほとんどはAからBくらい。

但し、実戦慣れしてそうな雰囲気。恐らく裏側の人間だし手段を問わないだろうから、魔導師ランクとしてはニアSからA辺りに相当すると互角と予想。連携慣れしてるなら、もっと高い実力の可能性もあり得る。

「……馬場と上羽も一旦捨てるか。」

黒羽はリンデイ達の所に留まる様に連絡を。ついでに、襲撃の情報も伝えておこう。

道場にいる2人も同様だ。恭也と美由希にはカートリッジを使った魔法を隠さなくてもいいと連絡、必要なら道場のチャチャも動け。チクアープには、千晴を守るよう連絡。恩を売れるかもしれないから、嬉々としてやってくれるだろう」

探知魔法の発動を確認。明確に各転生者の居場所を探ってる。

上羽天牙と間宮萬太は含まれず。所在地までの距離や報告されていない事が原因と予想。

襲撃者が散開。各個撃破を目指す模様。

「こっちに来るのは何人だ？」

どう動こうとしている？」

恐らく、八神家に24人。最精鋭を含むし、最大戦力をぶつけに来る。

高町家及びアースラ拠点方面に18人。話の内容からすると、8人

と10人。

長宗我部千晴、馬場鹿乃、東渚に2人ずつ。

移動しない、恐らく転移場所の確保に2人。

「ここは流石に多いな。だが、アリサや月村、翠屋は大丈夫そうか。アースラからの援護を封じている間に、転生者と闇の書を抑えるつもりか？」

「ここは……表向きだと、やはり戦力不足だな」

「闇の書に対して本気なら、必死で確保しにくるはず。」

手札を切る事も考慮するべき」

こんな事もあるうかと、八神チャチャマルの戸籍も確保済み。

立場はお姉様及び八神チャチャの妹、設定年齢15歳。

補助リンカーコア装置が見られてて、ハラウン親子には魔力の補助装置として認識されてる。

カートリッジの古い機構と説明すれば、それほど特殊とは思われなはず。私達を戦力化する場合も同様の言い訳を推奨。

「……チャチャマルの戸籍なんて、いつの間に用意していたんだ？」

今ここで、渾身のドヤ顔。

えっへん。

「解った、チャチャマルも防衛戦に参加だ。前線に出すが、補助リンカーコア装置は使わず、私の予備用に作ったデバイスを使わせる。魔力はカートリッジで補うぞ。」

あと、アコノはAMFの使い方は覚えてるな？ ミッド式で再現されている方のベルカ版だ。守護騎士達はある程度強力なAMF内でも存在可能な事を確認済みだから、シグナムとヴィータに肉体言語で語ってもらうために使う。

「……これでいけるか？」

「多分。最悪の場合でも、私達が制限を外せばどうとでもなる」

「そうだが……まあ、その場合は私がするぞ。連中を可能な限り有効利用するためにもな」

◆◆ アースラ現地拠点の場合 ◆◆

「警告通りの人数で間違いないか。」

エイミー、予定通り封時結界を」

「オツケー、クロノ君。対象の人も予定通りで、いっくよー」

こんな感じで、10人が襲撃に来たアースラの現地拠点。

事前に情報を渡しておいたおかげで、戦闘準備はばっちり。全員捕らえる気満々で待ち構えるクロノ・ハラウン、フェイト・テスタロッサ、アルフ、プレシア・テスタロッサの4人が、襲撃者10人と共に封時結界に消えた。

リンディ・ハラウンは全体管理、シャツハ・ヌエラと数人の武装局員は念のため護衛として残る事になってるし、料理ばかりしていて魔法は知識が少々あるだけの黒羽早苗も保護対象となってる。

他の襲撃者が増援として来ることを警戒しつつも、残ってる人達は呑気に喋ってる。

「さて、どれくらいで殲滅してくると思う？」

私は5分くらいと見てるんだけど。マリーちゃんは？」

というわけで、シルフィ・カルマンが終了時間の予想大会を開始。

「わ、私ですか？」

えーと……こちらの戦力は、条件付きSS、AAA+、AAA、AA-ですよね？」

相手はAくらいが10人ですから……遠慮や説得をしなければ、1分で終わっちゃう可能性すらあると思います。

カリムさんはどう思いますか？」

「そうですね、クロノ執務官がどの程度説得に時間を使うか、囑託の資格が無く立場が微妙なプレシアさんをどこまで使うか次第ですから、恐らく、15分以上かける事になるでしょう。」

リンディさんはどう思われますか？」

「襲撃が複数個所で同時に行われると予想出来る以上は、速やかに鎮圧する事が最善となるでしょう。もちろん、話し合いに応じた場合は相応の時間を取られるでしょうけれど……」

相手次第ね。早くて2分、遅くて20分といった所かしら？」

「指定された場所に武装局員を向かわせる手筈は整えましたけど、大丈夫かなあ……」

艦長、どれくらい情報を貰えたんですか？」

「襲撃してくる人数とおおよそのランク程度よ。」

戦力的に危ない人の情報は貰えたし、大半は大丈夫だけど数人は攫われるかもしれないと警告もされたけれど、どう人を動かすかまでは口を出す気は無いみたいね。誰をどう守るかを誰が決断すべきか、言わなくても理解してもらえているという事よ。

こちらが違法渡航を感知する前に24人に襲撃されそうだと伝えられたのだから、凄いとしか言えないわ」

「どう見ても、あっちが本命ですよねえ。」

でも、艦長。こっちの重点監視エリアから微妙に外れた場所への転移って、出来過ぎじゃないですか？」

「そうなのよね。何か、見落としてはいけない裏があるのかしら……」

襲撃者の戦力が最も集中してるのは、明らかに八神家。

転生者の集まる特異点でもあるけど、古代ベルカの情報以外の何かもあると、カリム・グラシアに感付かれるかもしれない。

◆◆ 長宗我部千晴の場合 ◆◆

「……ん？ また出てきたのかよ」

「いえいえ、今回は必要があって参りました。」

先ほど、敵勢力と思われる2人の魔導師の襲撃が御座いました。

無事撃退に成功いたしましたので、念のため報告をする次第で御座います」

「はあ？」

うん、長宗我部千晴本人が知らない間に、事が終わってた。

ここに来たのは、Aクラスが1人と、Bクラスが1人。

Sクラスの人工リンカーコアの魔力を分散、96匹のチクアープがデバイス無しでの誘導弾を放って攻撃。Sクラスの魔力量を使って放たれる96発の弾幕、それも個別完全制御状態は、いくら技術が

あってもAとBの魔力量ではどうにもならなかったらしい。

というわけで、現在バインドでぐるぐる巻き。やっぱり96匹で束縛中、回収待ち。

「詳しい説明はエヴァ様かりンデイ様から行われると思われませんが、その際の前提情報として、記憶の片隅にでも置いて頂ければ充分で御座います。」

では、下手人の引き渡し等が御座いますので、失礼致しますぞ」
「はあ……？」

そして、本人が理解する前に、チクアーブ撤退。
えーと……説明から逃げた？

◆◆◆ 高町家の場合 ◆◆◆

襲撃者は8人。デバイスを構え、空を飛んで高町家に到着。

攻撃魔法を放った瞬間、不意打ち封時結界担当のユーノ・スクライアの手で、あつさりと隔離に成功。神速と身体強化と空中疾走を組み合わせた不意打ち無力化担当の2人、つまり高町恭也と高町美由希の手であつさりと全員の気絶が完了。

放たれた攻撃魔法は高町なのはが広範囲防御で完璧に防いだから、被害なし。

……ホントに終わっちゃった？

とりあえず、無力化して捕縛。魔法を使う瞬間の映像も記録済みだし、後はアースラ組に引き渡せばいいや。

◆◆◆ 東渚の場合 ◆◆◆

襲撃者は2人。東渚は、公園で魔法の練習中。

丁度探知魔法の練習をしていた様で、空にいる何かに気付いた模様。

「何だテメーら!？」

「不意打ちは失敗か。相手は魔力が大きいだけのシロートだ、ヘマは

するな」

「言われなくとも」

「だから、何だっつてんだ!」

散発的な魔法弾をシールドで防ぎつつ、東渚が叫んでる。

たまに反撃もしてるし、割り箸型ストレージデバイスの反応速度は意外に早い。

出力は魔力量に対して決定的に不足してるけど。

「意外だな。だが、そろそろ終わりだ」

襲撃者が眩くと、東渚をバインドが捉える……が。

「うらあ! アツタマきた、ぶっ潰してやるぜ!!」

馬鹿魔力にモノを言わせた力技でバインドを破壊、微妙な集束を開始。

デバイスがビリビリ言ってるけど、構ってない。

「不味い、退避!」

「逃がすか! エターナル・フォース・ストーム!!」

ちっちゃい短距離スターライトブレイカー的な何か、発射。

1人直撃。偉そうでちよつと強い方が撃墜。

「もう一匹も、墜ちやがれ!!」

「これ以上は時間を掛けられん……己むを得んか」

もう1人の襲撃者、魔法弾を掻い潜りつつ倒れた襲撃者を回収して撤退。

周囲はボロボロ、結界も使ってなかったから、人が集まり始めてる。

今はまだ怖くて近づく人がいないだけで、警察が来たり、好奇心に負ける人がいたりした時点でアウトになる。

「やっべ、見付かる前に逃げねーと」

東渚、こここそと逃走。

……あーあ、勝っちゃった。成功例の餌とかにする予定だったのに。というか、この公園の惨状は、あまりにもヤバいんじゃない?

◆◆ 馬場鹿乃の場合 ◆◆

馬場鹿乃の方にも、襲撃者は2人。居場所は自宅。

本人はデバイスを手に瞑想中、親代わりのロボット執事もどきは料理中。

『操者よ、怪しげなオノコが近付いておるぞ、むん！』

「何回でも言うけどよ、いちいちポーズ付けるのは何とかなんねえのか？」

『ならぬ、むん！』

「で、怪しげな男って、コソ泥とかチンピラとかか？」

『デバイスを持つ、いきり立った魔導師であるぞ、ふん！』

「え？ ……マジか!？」

『冗談で言う事ではないであろう、むん！』

操者と比べ何と貧弱な筋肉であろうか、ふん！』

「そんな事言ってる場合じゃねー！」

じーさん、敵襲だ！ ええと、まずは何だ、封時結界だったか!？」

ばたばたと階段を駆け下りながら、馬場鹿乃が叫んでる。

執事もどきはそれを聞いて火を止め、エプロンを外し始めた。

『落ち着くのだ操者、まずはセットアップだ。』

我等の筋肉美、見せ付けてやろうぞ、むううん!』

「結局はそれかよー！」

叫びつつ、馬場鹿乃はデバイスを起動。

例の、艶々ワックス黒ブリーフにリストバンド姿。

そのまま玄関に手を掛けたところで、動きがフリーズ。

「……こんな姿で外に出れるか!」

『敵が近付いたところで結界を展開すればよいであろう、ふん!』

「頭の中でポーズ決めんな、見なかった事に出来ねえだろうが!」

『見せておるのだ、本望である、むん!』

「で、いつ来るんだ？ もうチョイか？」

じーさん、本当に戦えるんだろうな?」

「魔法は使えませぬが、戦闘に問題はありませぬ」

執事もどきは、重量挙げて使うバーベルのシャフトを握りしめる。

そこそこ重いはずだけど、特に支障は無いように見える。

『結界範囲まで、あと30秒程であるな、ふん!』

「……これって、先制しても正当防衛になんのか?」

言い訳の為に一当てさせたら、色々ヤバい気もすんだけどよ」

(構わん、どうせ管理外世界への違法渡航だ。

しかも、大っぴらに飛んでいるから、こちらの裏側としてもアウトだ。先制しろ)

「うえっ、エヴァ!?

見てるなら助けてくれよ!!」

(こつちには20人以上来ているんだ、贅沢を言うな。

アースラの武装局員が出撃準備に入っているようだから、連中が着くまでしばらく耐えろ)

「……色々厳しいこつて」

『操者よ、連中が範囲に入るぞ、むうん!』

「仕方ねえ、何とかやるしかないってこつた。

封時結界展開、行くぜ!」

襲撃者2人が射程に入ったところで、馬場鹿乃が家を飛び出して。

「爆・烈・拳!」

短距離砲撃をかまし、あっさりと避けられた。

「あ、あれ?」

「こんなものか、所詮は素人だな」

鼻で笑った襲撃者は左右に展開、少し距離を置いて、魔法弾を放ち始める。

馬場鹿乃は自分と執事もどきを護る為に盾を2枚展開、膠着した。

「坊ちゃん、しばらくなら耐えられます。攻撃を」

「け、けど、射撃魔法を鉄棒でなんて……」

「大丈夫です」

はつきり言い切ってるけど、少なくとも無傷では済まない。

それに、時間稼ぎが出来ればいいんだから、無理に攻撃する必要は無かったりする。

けど、何もしないわけにはいかない。スフィアが横から狙ってる。

「！ 坊ちやま！」

そのスフィアから放たれた魔法弾を、執事もどきがバント。びーん、とシャフトが振動するけど、とりあえず無事。

「ええい、行くぜ！」

覚悟が決まったのか、一方の盾をそのままに、もう一方の盾を押しながら突撃。

なんて器用な近接特化。

「赤熱拳！ 赤熱拳！ 赤熱拳！」

「……ぬるいな」

魔力を乗せたパンチを、軽いステップで躲す襲撃者。

その間も、魔法弾は馬場鹿乃に当たってる。効果はあまり出てないけど。

「くっ……まだまだっ！」

その間に、執事もどきが被弾。

まだ戦えてるけど、抉れた部分から機械部品が見えてる。あと、ちよつと動きが鈍くなった。

「じーさん！ クソツ、筋肉閃光、拡散型！」

「うおっ、眩しっ!？」

馬場鹿乃が腕をクロスさせ、光った。

うん、元々威力が微妙な技を拡散させたせいで、ただの目晦ましになってる。

「捕らえたぜ！」

正面から首と足に手を回し。

「うらあ、落ちろ!!」

緩衝防壁を無効化しつつの、キャプチュード。

頭から叩きつけて……首がやばそうに見えるけど、とりあえず1人撃破。

「じーさん！」

「焦りは禁物ですぞ！」

注意を向ける相手が1人になったせいか、執事もどきの被弾が減ってる。

でも、傷はだいぶ負ってる。所々でパチパチ言ってるし。

「……不味いか」

襲撃者が、戦法を変えてきた。具体的には妨害主体になり、撤退の隙を作ろうとしている。

馬場鹿乃が何度も拳を振るい、捕らえようともするけど、ひらりひらりと躲かれてる。

「このっ！いい加減！捕まれ!!」

「断る」

微妙にノリがいいかもしれない襲撃者は、じわじわと引いてる。

そうこうしてるうちに、武装局員が4人到着。

「無事か、馬場!」

「お、おう!」

「早すぎる……やむを得んな」

未だ倒れてる襲撃者の方をちらつと見ると。

『Strange—Flash』

5つの閃光弾を放って。

『H・N・T・A Feel sad』

意味不明な名前の魔法を発動させると、衝撃波をまき散らしながら飛んで行った。

「な、なんだありや!?!」

6人が啞然とする中、封時結界を突破したところで別の飛行魔法に切り替えた模様。

凄いい勢いで逃げてく。

「逃げられたか……もう1人は逃げていない。まずは、そちらだけでも捕らえよう」

「お、おう」

とりあえず、1人捕縛で1人逃亡。

執事もどきは破損部分を服で隠してるし、この辺はまだ公開する気は無いらしい。

結界で現実への影響は抑えてたし、このまま連行して終了の気配。経験値不足の身としては、良く頑張った。

A☒S編26話 喧騒、終われり

一方、お姉様のいる八神家では、必要な説明を終えて迎撃態勢を整えてる。

前線担当となる成瀬カイゼとセツナ・チェブルー、それに、鉄扇型の新デバイスを貰った八神チャチャマル。32発のカートリッジを装備する、支援寄りの万能型。お姉様とお揃いだと喜んでたけど、色は白だから何か違う。ちなみに、名前は梵。

「私達は魔法禁止。何かあった場合は、エヴァンジュが本気を出すのだな？」

「つまんねーけど、これも必要な準備って事か」

八神シグナムは木刀を、八神ヴィータはゲートボールのステイックを装備。AMF内に立ち、主と八神はやてを守る盾役になってもらう予定。

「今回の件で魔法がばれて、お前達にも教える事になった事にでもするさ。」

「そうすれば、今後同じことがあっても魔法を使えるだろう？」

「そうになると、何人かは逃がす必要があるな。」

情報を持って帰ってもらわねば、偽装に説得力を持たせられん」

「その辺は何とかするよ。適当に打ちのめして、前線から引く程度の怪我をさせればいいね？」

どちらにしても倒し切るのは不味い八神シグナムに、成瀬カイゼが声を掛けてる。

遠距離狙撃や気配を消しての不意打ちが得意な成瀬カイゼは、本来は最前線が苦手。でも、今回は攪乱役で最も敵中に食い込む予定。

「出来れば少し離れて様子を見れる程度に、ですね。」

早めに撤退されると、証言として弱くなりますし」

セツナ・チェブルーは、最前線の攻性防壁役。受け止めるには向かないから、襲撃者の最前線を潰して回る。

「該当のターゲットに逃げてもらうために、バインドも甘めが良いでしょうか。」

情報収集をしてもらうまでは、逃がさない必要がありますが」
貰ったデバイスの調子を確認するのは、八神チャチャマル。突撃等を防ぐ盾役。

補助リンカーコア装置は装備してないから、Bランク相当に調整した魔力とカートリッジで何とかする。

「こちらでも記録は取るから、逃げられても何とかなる。

それに、何かで使えるかもしれないから、表側の証拠はあった方がいいはず」

主も、デバイスを装備済み。

性能に余裕があるし、映像記録を残す程度は全く問題無い。

「私は可能なら数人程度は潰すが、原則として後方支援だ。アコノのAMFの外で、前線の援護と横や後ろに回り込む連中への牽制だな。但し、数人はシグナムやヴィータと直接対決してもらうために通すから、しっかり対処してくれよ。

先に言っておくが、カートリッジのロードで腕に傷を作るからな。わざとやっている事だから、気にするなよ」

「気にするなゆーても、怪我はあかんよ。

みんな無事で終わってな？」

「こちらを舐めてもらうための演技だ。アースラでも何度かやっているし、すぐに治せるから問題無い。むしろ、大量にロードした時に怪我をしない方が色々面倒な事になるからな。無事という意味では、必要な時にやらない方が問題だ。

こんな予定だから、驚くなどは言わんが、動揺して迂闊な行動をしたりするなよ？」

「うーん……あんま了解したくないんやけど、了解や。

要はアレや。足手纏いはすつこんでろ、って事やね」

「いや、そこまでは言わないからな？」

そんな感じで迎撃準備を整えてると、到着しました24人の襲撃者。

服装は揃いも揃って黒。デバイスも黒色を基調としてるし、髪も染めてる模様。

全員で八神家を取り囲んで、砲撃魔法を準備なう。

「魔力的にバレバレなのは、私達に結界を張らせようという魂胆か？
奇襲が成功するとは思っていないのか、馬鹿なのか……まあいい、
発射直前に私が封鎖領域を張るから、チャチャマルは同時に反射障
壁、着弾確認後に戦闘開始だ。アコノのAMFも戦闘開始と同時に発
動すればいい。」

防音結界は封鎖領域の展開後に解除するから、後はそれぞれの判断
に任せる。いいな？」

「了解。細工は流々仕上げを御覧じろ、だね」

「そこまで自信有り気にしなくても。でも、負けませんよ」

成瀬カイゼとセツナ・チェブルーが、やる気で戦闘態勢に入ってる。
殺る、とか書きたそうな勢い。

「そろそろ来る。記録は開始したから、いつでも大丈夫」

「そうだな。では、始めようか。」

……いくぞー！



というわけで、襲撃者の過半数、具体的には13人を捕獲して戦闘
終了。

八神シグナムと八神ヴィータも何度か物理でオハナシ出来たし、お
姉様がカートリッジで腕に傷を作るのも見せたから、設定目標は概ね
達成。

戦闘中に到着した武装局員とも共闘、相互支援をそれなりにこなせ
たのは良かった。

「さて、無事に終わったわけだが」

「無事やない。怪我はあかんゆうたよ」

「想定内、むしろ予定通りだ。」

で、一応全部の戦闘が終わったわけだが……」

一番時間がかかったのは、アースラ拠点だった。

地球の自警団を名乗り、なぜ管理外世界に時空管理局がいるのかと

詰問する感じで時間を稼ぎ、その後は全力でプレシア・テストロッサの排除にかかられたらしい。

装備がどう見ても管理世界製だけど。戦闘開始直後、反撃であつきりと壊滅したらしいけど。攻撃された本人は、正当防衛よ、とか言ってたけど。

それよりも問題なのは、さつきから何度も鳴ってる電話。

着信の番号を見ると、相手は馬場鹿乃。

「頼られてるんやし、信頼には応えなあかんよ？」

「助けられた人は、決してそれを忘れない。次に困った時もまた思い出す……だったか？」

甘やかすばかりだと、ダメ人間が出来上がるだけなんだがな」

そう言ってる間に、また電話が鳴った。

「はあ……壊れかけのロボ執事の話なんだろうな」

お姉様はため息をつきながら電話を取ると。

「おかけになった電話番号は、現在疲れておりますん。

ただ1度の応答もなく、ただ1度のピーという発信音もなし。

問うぞ征服王、落ち着きの回復は充分か？」

『無茶苦茶なごった煮だなオイ!』

「少し落ち着く時間を与えてみるかと思っただが。

それで、用件は何だ？」

『それなんだけども、執事の爺さんがやばいんだよ。

けど、どうやって直していいか判んなくてよ……管理局だと、ロス

トログアや違法研究の成果物に思われたらまずそうだろう?』

「ふむ……そうだな、あれも确实とは言えんが、念のために質問だ。

夜、人形、エーデイリヒ。

これで何か心当たりはあるか？」

お姉様、質問しながら防音結界を展開、それも2か所。

原作の原作、それもかなりデリケートな部分の話。部外者に聞かれたいい事じゃない。

『……ノエルさんか!』

って、吸血鬼設定が生きてんのか!』

「余計な事を叫ぶな。」

但し、同系の技術だと思いが直せる保証は出来んし、夜の一族について記憶を抹消される可能性もある。

修理に対するコストも発生するだろう。少なくとも、時間や材料はタダじゃない。

それを理解した上で相談するなら、口添えくらいはしてやるが。どうする?」

『……可能性は、あるんだよな?』

「少なくとも、近いと言える技術を持つのは、月村以外に心当たりは無いな」

別荘に魔道式の自動人形はあるけど、技術的にかなり大きな差があるし。これを大きく劣化させた感じの傀儡兵も同様。

電気系を主体とした部品は、月村家が一番揃えやすいはず。

『……………頼む。』

爺さんに、死なれたくねえんだ』

「解った。早めに話を通すが、しばらく待てるくらいの猶予はあるな?」

(忍に連絡。希望する報酬の案も聞いておけよ?)

『頼む。爺さんが言うには、日常生活くらいならどうにかなるらしい。ただ、強度がヤバイから力仕事や戦闘はきついんだと』

「そうか。で、夜の一族に依頼する事になるんだが、お前から出せる謝礼は何かあるのか?」

特殊技術の提供だ。機密の口外禁止は当然で、それなりのモノを提示せんと交渉にならないぞ」

『高校生だから金はねえし、管理局の報酬も当分はデバイスの費用に消えるし……』

あとは、労働力やら血やらしか出せるもんはねえぞ』

「ふむ……労働力は一般的な物以外に、戦力という事も含めていいのか?」

魔導師としての力を含めていいか、という事だが」

現時点では敵対勢力は出現してないけど、とらいあんぐるハートの

設定が生きていた場合、親族との資産抗争が残ってる可能性がある。そうでなくとも、特殊な技術や体質を持つてる以上、戦力はあるに越したことは無いはず。

『それで爺さんを直せるんなら、構わねえ』

「そうか、それならそれは候補に入れておく。」

血だが……秘密を共有するという事は、生涯連れ添う事になる可能性もあるぞ。忍と恭也のようにな。

現状だと、相手はすずかになりかねんが……ロリコンの汚名を免れんし、それでもいいのか?』

『くっ……か、構わねえ。』

但し、連れ添うとかって話は、俺を受け入れられたら、つてのが絶対条件だ。その点だけは譲れねえ』

「その心は?」

『最悪、俺の気持ちなんて狂ったナデポでどうにでもなる。月村の姉妹は嫌いじゃねえし、俺の事は考えなくていい。ナデポで惚れちまえば年齢やらが気にならねえのは経験済みだ。』

けどよ、冷静に考えてみると、どうもある程度の好意を持った上で俺を撫でるって事が発動条件みたいなんだよ。それに、俺を嫌ってるのに血の為に付き合うってのもお互いに不幸だ。

秘密を守るのは約束する。それこそ、記憶を読まれねえ限り絶対だ。ナデポで惚れた相手だろうが、それくらいの自制は出来る。

血も提供する。死なねえ限り、いくらでも構わねえ。

だから、一番納得してもらえる条件で、頼む』

ほぼ、自分の未来を投げ出す覚悟。

ロボで執事だけど、育ての親ってのは大きい?

けど、決定権が月村忍と月村すずかの2人に渡されたのは間違いない。

「そうか、解った。」

話をしてみるから、連絡するまでは普通に生活している。

管理外世界を襲撃するなんてそう頻繁に出来る物でもないだろうし、今回失敗しているからな。

しばらくは再襲撃も無いだろう」

『ああ……すまねえ。よろしく頼む』

電話、終了。

なんというか……転生者の男の中では、一番マトモな気がしてきた。

成瀬カイゼは思考回路が裏寄りだし、上羽天牙は軟弱だし、チクアーブやクローネはネジが飛んでる部分が多々あるし、踏み台な連中は論外だし。

(まあいい、せつかく男を見せたんだから、それなりに納得出来る結果を目指してみるか。)

馬場からの提供はさっきの通り。月村家への要求は、ロボ執事の修理と維持、それに馬場との同居の継続あたりだな。

月村だけで修理が無理そうなら、得た情報の提供を報酬に私達も手伝うか)

手伝う場合は解析にも参加するだろうし、実質的に無償協力？
技術協力の下地を作る意味はあるし、親密になる効果は期待出来る。

(済まない、ちょっといいだろうか)

(ん？ どうしたクロノ、何か問題でもあったか?)

(いや、今回の襲撃者について、何か情報があれば教えてほしい。

行動を見る限りプレシアを狙っていたのは間違いないし、転生者を標的としていたとも思える。

だが、君達……八神家が最も狙われていたし、その上で黒の騎士団を偽装した様子があるとなると、闇の書や君自身が本当の狙いだった可能性や、情報が漏れていた可能性も考えたい)

確かに、排除していい可能性じゃない。というか、戦力配分的に最有力。

ちなみに、撤退した襲撃者は比較的近い管理世界へ逃亡、そこで散る模様。

今の所は命令で動いていたと思われる言葉が出てるだけで、黒幕に直接繋がる情報は無い。

(そうだな……来た連中が下つ端で黒幕が別にいる事と、逃亡先が管理世界だという事は確実だ。

動きが殺しに慣れている者がいたから、恐らくは犯罪者やそれに近い連中も交じっている。

ただ、お前達、特に武装局員に近い動きをしていた者もいたから、局員も含んでいた可能性も否定出来ん。

ほぼ半数が私達に来たことを考えると、1月ほど前の襲撃と根が同じ可能性もあるが……証拠と情報が不足しているな)

(時空管理局が関係しているなら、かなり早い段階で護送命令が出る可能性もある。

そうなる、取り調べも引き渡しまでという期限が出来てしまし、彼らがそうなる事を知っていれば、それまでに口を割らせるのは難しくもなる。

例の件も、進めにくくなるんじゃないか?)

(そうだな……食事が終わってからでも、話をしに行こう。

プレシアとリンディに伝えておいてくれ)

(そうか、解った)



その後、月村家のチャチャが担当した話し合いの結果は。

執事もどきの修理は、主に月村家が担当、私達も手伝い程度に参加する事になった。

馬場鹿乃は執事もどきと共に、月村家の警備員として働くことが決定。広い敷地の片隅にある使用人用の離れで生活する事で、実質的に住み込みに近い形での常駐戦力となるものとする。

また、血液の提供は体に負担がかからない程度とし、月村姉妹が求めた際に健康上の問題が無ければ応じる事になった。なお、元々知識があつた事と、最初から秘匿を宣言している事から、連れ添うかどうかは今後次第という事に。可能性は低そうだけど。

期限は、執事もどきはメンテナンスの問題から、実質無期限。

馬場鹿乃は、高校卒業までが目安となった。無償、つまり賃金無し家賃無しの期間もこれに倣う事に。家賃が不要になる上に、今の家を貸すなり売るなりする事で収入が得られる可能性もあるから、生活はむしろ楽になるはず。

そして、お姉様が担当した話し合いは、リンデイ・ハラOWNとプレシア・テスタロッサの3人だけの密会になって。

「今回の件で違和感を覚え、調査した結果として闇の書を見付けた。調査した理由は、娘達の安全のため。」

……という事でいいのね？」

話し合いというより、お姉様からの指示を確認してるプレシア・テスタロッサ。

発見者かつ実務担当として動いてもらう以上、意思の疎通は大事。「今まで見つけていなかった事の言い訳としても、SSクラスのお前以外が見付けると後が面倒だからな。」

実際問題としても、連中の意図が解らなければ、何らかの調査をしていただろう？」

「ええ。間違いないわ」

「というわけだから、今回を逃せば発見理由の説明が難しくなる。」

その次はリンデイの仕事になるな。今代の主は話を通じ、協力して闇の書の悲劇の終焉を目指す事になった、という名目で動くことになる。

ここまでは、報告が遅いだけで嘘ではない範囲だ。

隠すのは、闇の書が既に起動している事と、蒐集がある程度進んでいる事。これは流石にまずいだろうから、管制人格の起動を闇の書の起動という扱いにする。その上で、闇の書の主の命が残り僅かだから、無理に蒐集を行って起動、内部へ介入する機会を作り出す、という筋書きにする。

グレアム達が完成後数分間なら凍結魔法で封印出来ると考えていたから、そっちからも手が回れば、大きくは反対されないと思うが……リンデイ、どうだ？」

「そうね、グレアム提督の作戦に戻す事が可能な範囲での行動、むしろ

それを後押ししているようにも見えるのだから、内部の説得もし易いでしょう。

問題は、既に蒐集した量が多い事かしら？」

「その辺は、幻影や有志の協力といった形で調整するしかないだろうな。

魔力を持つ害獣の駆除も入れられたら、量の調整が楽なんだが……問題が無ければ、犯罪者からの収集と併せてグラムとレティに話をしておいてくれ」

「裏だけで動くのもそろそろ限界だと思うし、いい機会かしらね。

だけど、保護者のエヴァさんも騒動に巻き込まれる事になるわ。隠蔽していたと思われても仕方ないでしょうし」

「まだ管制人格は目覚めていないし、守護騎士相当の人物も親戚として存在していた。その上、私の知識にあるのは夜天の魔導書だ。

原作情報で闇の書と呼ばれている事は知っていたが、それは既にいくつもの不一致が見付かっている不完全な物。本当に夜天が闇の書になっているのか確信を持たずに調べていた、辺りが無難だろうな」情報の齟齬による不信を報告しなかった原因にすれば、管理外世界の住人だし、積極的な違法行為として追及は出来なくなる。たぶん。

闇の書に関する情報をプレシア・テスタロッサとリンディ・ハラオウンが補い、家族を救うために时空管理局との協力を開始する。

筋書的には問題無いはず。

「確かに無難な言い訳かしらね。

だけど、情報が信用できない事まで利用するなんて。こういうのを、骨の髄までしゃぶる、と言うのかしら？」

「利用出来る物を利用してはいるだけだ。

それと、連中の護送で本局に戻るなら、ついでにユーノを無限書庫に放り込んでくれ。蒐集からの回復も問題無く終わっているし、名実共に闇の書に関する調査が目的だ。

あれでも歴史の調査が本業のスクライアだ。原作では10年かからずに無限書庫をまともに機能させて司書長に就任する逸材で、実際に検索魔法の適性もありそうだ。成果は期待出来るぞ。

可能な範囲で私も協力する。これでもアルハザードの資料庫の長だったんだ、未整理の書類の山を何とかした経験も魔法も持っているからな」

「そうね、協力するという立場を取る以上、何かする必要があるし。ところで、時空管理局として本格的に動こうとするのは確実にだけれど、それはどう止めるつもり？」

グレアム提督だけでは、止められないわ」

「私達の所に来た中に、局員と思われる奴がいたからな。外見の偽装を無理やりはがして映像を記録して、血液や魔力のサンプルも確保し、追跡用と個体認識用のマーカーを埋め込んだ上で逃がしてある。もちろん、本人はそれに気付いていないはずだ。」

こちらで追跡しているが、後でその情報を渡すから、そちらでも調査してみてください。局員だと確定出来たら、問答無用で襲ってくる馬鹿のいる組織を無条件で信用出来るかとも言ってるさ」

「かなりの力技ね。」

それだけの証拠を集めている事も驚きだけれど」

リンディ・ハラウンが呆れてる。

対組織で最大の武器は、情報なのに。

「だけど、指令書、最終兵器、研究者に続いて、資料庫の長ね。」

「いったい、どれくらいの肩書を持っていたの？」

プレシア・テストアロツサは不思議そう。

確かに色々と肩書があったのは確かだけど、資料庫に関しては外部にさほど知られてなかっただけ。内部ではとても有名だったのに。

「指令書は道具としての名だし、最終兵器は戦場に出た場合の呼び名だ。肩書と言うには少々微妙だな。」

私の最初の役目は資料庫の整理。当時存在した資料全てに目を通す権限と機会があったという事でもあるから、この時の実績が、全ての魔法に精通している等と言われる理由だろうな。巨大図書館の司書長が全ての蔵書の内容を理解しているのかという、現実的な疑問はあるが。

その延長で資料庫の長になり、部下だけで大丈夫になってから追加

で研究所を与えられたんだ。20年もいけば肩書が複数ある事くらい、別に不思議ではないと思うが」

司書長の例は一般的な疑問で、実態は私達が全て精査してたけど。それでも、お姉様が全てを知ってるわけじゃない。曙天の指令書としては情報を持つてるけど、お姉様は知らないという事例も多々ある。

「それは、資料庫で得た知識の活用のため？」

「いや、研究所は私が趣味で研究していたものが認められたからだな。別荘用に研究していた空間魔法が上層部やらの興味を引いて、空間魔導師等と呼ばれるようになってからの話だ。

ちなみに、アルハザードが滅んだのは、馬鹿が実施した魔法の実験中に、別の馬鹿がテロを起こして、結果的に虚数空間に落ちたからだ。その意味では、虚数空間の先にあるというプレシアの結論は正しいと言える。

魔法が使えない環境を通り抜けて無事に辿り着く可能性など、万に1つもありはしないだろうがな」

「そう……今考えると、随分と無謀な方法を探ろうとしていたものね」「精神干渉の魔導具のせいなのか、自身の命の短さに追い詰められていたか……まあ、両方と見るべきなのだろうな。

それよりリンディ、捕らえた連中は色々と問題がある行動をしてくれたが、処遇はどうなる？」

「管理世界の人物なら、時空管理局としては主に管理外世界に対する法で扱う事になるわ。

違法渡航、魔法に関する情報漏洩、魔法行使を含む現地人への危険行為は確定かしら。秘匿に関する問題があつて公権力に渡すわけにいかないから、現地での処罰を優先出来ないし」

情報を表に出せないし、魔法関連の法が無いし、犯罪者に関する交渉が出来る様な国交も無い以上、地球の国で裁く事は難しい。

日本の法だと不法入国や実被害については追及出来るかもしれないけど、戸籍等が無いし、どうやって被害を出したかの立証に問題が山積み。

だからと言って放置も出来ない。時空管理局が自身の法で裁こうとするのは、まあ仕方ないとは言える。

「やはり、その辺になるのか。」

それに合わせて、守護騎士連中が魔法を知って学ぶ事になった事にするぞ。いつまでも知らないままに見せるのは無理だし、せつかくの戦力だ。

私がベルカ式を使えて、教えている事は知られている以上、同じように私が教える事にするのが一番自然に見えるはずだ」

「そうね。真正古代^{エンシエント}ベルカ式のデバイスが作製出来るのだから、新しいデバイスが増える事も大きな問題にならないでしょうし。

でも、平穩からどんどん遠くなるわね」

「研究者として扱われるなら、何とかなるさ。まああれだ、おとぎ話やらでありがちな、辺境に引き籠る魔女的な感じか。魔法文化から外れた場所に身を置くという意味では、似たようなものだ。

あとは……こっち側の人間だが、東はどうする？ 結界を使わず、魔法技術を使った痕跡を消しませず、隠蔽を考えず行動したと言う点では連中と大きくは変わらんが」

「管理世界の人ではないし、どちらかと言えば被害者的な側面が強いから、どう扱うかをこちらから強制する事は出来ないかしらね。こちらで扱う場合は、情状酌量で教育プログラムを受けて終わりになる可能性が高いわ。

だからと言って、本人への説明や記憶封印で何とか出来る範囲を超えているし、それで済ませていい相手でもないし。こちらに魔法を知る組織がある以上は、判断を委ねるのが一番でしょう。もちろん、共同で対処する事に異論は無いわよ」

今回に限っては、管理世界の人間による襲撃が発端。襲撃が無ければこんな事にならなかつたという主張が通ってしまう。

管理外世界である地球の人物である以上、甘くない対処をするには、後始末をさせられた地球の組織が、秘匿等を理由に対処を主導するという形にするのが無難になる。

「窓口になるのは……月村か？ それなら、対処法の提案くらいは出

来そうだが」

「そうね……情報統制に動いてくれてるみたいだし、エヴァさん経由での繋がりもあるから、それが一番無難かしらね。

どんな対処を望むつもり？」

「今後同様な事件を起こさない為にも、魔力の完全封印をしたい。過去に何度も隠蔽無しで魔法の練習をしているから、今回の件で限度を超えたと判断するのは不可解ではないだろう。

実態は回復不可能なまで蒐集して、魔導師として殺してしまう事だが」

「予防的な意味合いにしては、かなり強烈な扱いだけれど……いいのかしら？」

「管理外世界に行った違法魔導師の扱いとしては、こんなものだろうか？ 魔導師として無力化してしまえば、今後はこんな事にならないだろうしな。

封印処理自体は行おうし、封印を解除しても魔力が戻らない件は、今のリンカーコア破損と関連付けられれば問題無い。解除する予定も無いし、まあばれることは無いだろう」

強引な手段だけど、魔力馬鹿には有効。

でも、リンクを使って話を聞いてる主が、特典破壊は？ って首を傾げてる。

「つまり、強制封印に私達が協力するという事でいいのね？」

「協力というか、対処された事を見届ける役目になるな。

その時、アコノを参加させるのは……私が月村と直接話をするか。可能なら、蒐集前に特典破壊の能力を使わせてしまいたい」

「その結果、知識面以外はほぼ完全な一般人になるし、特典が蒐集されて問題を起こす事も無い、という事ね。

他の人は参加しなくていいのかしら？」

「一応、全員に声をかけるつもりだ。

対処法がこれでいいという事になってからだかな。まあ、忍には早急に伝えるし、大丈夫だとは思うが。

というわけで、とりあえずは闇の書関連の手続きを任せる。大丈夫

「だな？」

「ええ。特に問題は無いでしょう」

A S編27話 未来の景色

関係者達がバタバタと慌ただしく準備に追われる事、数日。

その間に、八神チャチャマルが正式に八神家入りした。

戸籍やらについては既に準備しておいたから、八神チャチャの部屋に服や荷物を少し増やしただけで、特別な事は何もしてない。

とりあえず、これで5組目のペアとなり、1人の部屋はなくなった。最後の空き部屋はヴィヴィオが使うことになるだろうから、物置状態を続行。

襲撃に関する後処理は、予想の斜め上を突き抜ける結果に。

先日の襲撃者の1人が、とある管理世界に住む局員だという事、しかも勤務記録を偽装されての参加だという事の証拠が揃い、時空管理局の糾弾を開始。放置出来なくなったのか、せつつかれた監査も重い腰を上げた模様。アースラからの調査要請も一役買ってる。

本人からは一応、正式な命令を受けての犯罪者の拠点襲撃任務に見えていた。ここまではまあ、どうかとは思うけど、一応予想の範囲内。正義感の強い人だったようで、本人も糾弾に参加なう。内部情報を公開して、只今大炎上中。アースラの通信設備を使用して、お姉様に謝罪と状況の説明もしてくれた。

これは予想外。何だかやる事が迂闊過ぎて泣けてくる。

杜撰じゃないのは、黒幕の隠蔽。指示の根がどこにあるかについてだけは、巧妙に隠されてる。

トカゲの様に、頭の行方が見えないまま、末端が切られて終了する未来しか見えない。

ここまで判明した時点で、襲撃された関係者への詳細説明。

説明が無かったせいで状況を把握してない長宗我部千晴や、襲撃の無かった上羽天牙も含む。

その結果、全体的に見て、ありえねー、という感想だった。私達もそう思う。

襲撃に関しては今後もあり得るといふ事も伝えたいし、お姉様の責任という人もいなかったから、とりあえずは一安心。

それと同時に、闇の書発見の一報が時空管理局を駆け巡った。

起動してない事になってるから、ギル・グレアムに対する裏側からの糾弾も弱い。むしろ、対策に参加して何とかしろという方向の圧力になり、既に現地拠点を持つアースラを率いるリンディ・ハラオウン、発見者のプレシア・テスタロッサと共同で対策を行う方向で調整が行われてる。

ギル・グレアムの参加理由として、現場である第97管理外世界出身で局員に対して現地に関するアドバイスが可能である事、今後現地に入る際の多くの問題を回避出来る事が挙げられてる。

だけど当面は、本局側の取り纏め及び情報収集を担当する事になりそう。裏側から見たら言葉の意味が変わるけど、その辺はギル・グレアムの手腕に期待。

即座に潰せと言う声もあり、それを表裏から抑える役目を担う必要もある。

予想してた闇の書とその主の引き渡し要求もあったけど、保護者であるお姉様が明確に拒否。

2回の「時空管理局員を含む可能性がある襲撃」を主要因として挙げ、そんな強硬手段に出る組織に任せる気は無いと宣言した。特に2回目に関しては参加者自身が関与を認めてるから、無関係だと主張も出来ない。

また、カリム・グラシアやシルフィ・カルマンと話した印象として、自分以上に古代ベルカの技術に詳しい人物がいるとは思えない事、表と裏に関する日本での社会的な立場、家族や仲間との関係も理由として挙げた。

現地に居るリンディ・ハラオウンが早々に説得を諦めた事、レティ・ロウランが現地に投入する人員の調整……具体的にはマリエル・アテナザの駐留期間延長手続きを始めた事もあり、強硬には迫ってこなかった。

こんな感じで、仮ながら対策を現地で行う事が決まった直後。今度は聖王教会からの指示が、カリム・グラシアとシルフィ・カルマンに飛んだ。

曰く、闇の書に関する作業に全面的に協力する事。

既に現地に居て、関係者との接点がある事が選定理由らしい。古代ベルカ製とされるロストギアが関係してる以上は放置出来ない聖王教会の立場と責任感が、速やかな指示に繋がった模様。

人員の追加も辞さない……というか、送りたいという意向も伝えられてるけど、割と本気で取り組むつもりにも、余計な肩書付きの連中の得点稼ぎにも見える。

「つまり、有り得る色々な事と言っていたのは、これの事ですね。

知っていたのであれば、もう少し教えて欲しかったです」

そして、カリム・グラシアはちよつと拗ねてる。

あまりの対処の速さに、何処までが仕込みか読み切れてない……というか、全てが仕込みと思われたかもしれない。

「夜天の魔導書については話を聞いていたけれど、闇の書との関係については教えられていなかったし。関連性に気付いていなかったよ。

闇の書については少しばかり詳しいつもりでいたから、過去の闇の書の事例と大きくかけ離れた現状が、なかなか結びつかなくて」

リンディ・ハラオウンは、建前として用意してある言い訳での説明。

闇の書について知ってるのはもちろん11年前の事件が原因で、これは本当の事。

お姉様が実際に知るのには、夜天の魔導書について。闇の書については乖離の激しい原作知識という扱い。

「前回の事件で何らかの改変があつたんじゃないかと疑いたくなるくらい特殊な状況だけれど、あれは間違いなく闇の書よ。

ああ、私は一時期、娘を蘇らせる方法を求めて、手当たり次第に情報を探った事があるの。闇の書の無限再生についても調べたから、そういう関係もあつて、ね」

プレシア・テスタロッサは、真実が殆どの建前で説明。

調べた経験自体は嘘じゃないし、アリシア・テスタロッサが蘇生した事も隠してないから、嘘を言う必要が無い。

「無限再生か……どう再生するかという情報を予め準備しておく必要

があるし、実質的に疑似生命体かそれに類する存在でなければ意味が無いから、死者の蘇生には使えんはずだ。

リンデイが詳しいのは……やはり、11年前のアレか」
この場には、お姉様もいる。

この4人だけでテーブルを囲んで紅茶を飲んでいるのは、巻き込む気味でいるから。

せっかくの手札になり得る人物。可能であれば、取り込まない手は無い。

「ええ。あの時はクライドの副官として後方支援や調査を担当していたし。

その後も……ちよつとね」

「そうか。歴史資料的な裏付けはユーノとグレアムに頼むとしても、やはり夜天の魔導書が闇の書になっているのはほぼ確定か。こんな所は、未来情報と一致するんだな。

別物なら良かったんだが」

「研究者として、たられればは禁物よ。」

現実を現実と受け止め、その上で足掻くしかないわ」

「ああ、それは解っている。だが、認めたくない現実もあるさ」

ポットから紅茶を注ぎ、角砂糖をポイポイ放り込むと、お姉様はソファーに凭れ掛かり、悲しげに眼を閉じた。

放り込む時にリンデイ・ハラオウンの目が輝いた事なんて見てない。

会話が白々しく聞こえるのは、禁則事項なので指摘しちゃいけない。

「それにしても、随分と詳しいと言うか……過去の記憶に、何かあるのですか？」

よしてきた。

カリム・グラシアが不思議そうにしてるけど、本当のこと伝える前に、まだする事がある。

「そうだな……カリム。」

ヴィヴィオの秘密は、どの程度守れそうだ？」

「公開が騒乱の元になる事は理解出来ていますし、何より、ヴィヴィオ様自身が望んでおられません。」

父には雑談で、オリヴィエ陛下の肖像画とよく似た人物に会ったと伝えましたが、何らかの情報が漏れた場合の火消しをしやすくする事が目的です。

闇の書に関して時空管理局が動き始めた以上、見なかった事にするよりも、最初から似た人物がいる事を前提とした方が隠しやすいはずですから」

ヴィヴィオや周囲の振る舞いでボロが出なければとなるけど、妥当な判断。

「少なくとも、完璧な隠蔽よりは難易度が低い。」

「そうか。」

さて、私の記憶についても同程度の爆弾になりかねんが……聞きたいか？

少なくとも、広まると色々面倒な事になる情報だ。

先に言っておくが、この情報を知ってからは、選択の余地なくこちら側についてもらうぞ」

「闇の書……いえ、夜天の魔導書に関する重要な情報、ですね？

お2人やヴィヴィオ様は御存知なのですか？」

「ああ、知っている」

「そうですね……」

カリム・グラシアはしばらく目を閉じ、考え込んで。

そして。

「……解りました。」

「教えて下さい」

「ふむ。本当にいいんだな？」

「はい。リンディさんが時空管理局の一員として参加しているのですから、少なくとも、悪を為す事を目的としていないと予想しました。」

それに、協力するという聖王教会の指示とも矛盾しない、と。

ヴィヴィオ様も真実を知った上で保護下にいる以上、ここを離れる選択肢はありませんし」

「多くの秘密を抱える事になるから、ある意味では裏切る事にはなるんだが」

「それでも、必要だと判断しての事ではないかと。」

先日の襲撃の件もありますし、可能な限り安全に事を運ぶための隠蔽や工作であれば、止むを得ないと判断します」

「ふう……私としては有り難いが、ホイホイ人を信じるのもどうなんだ?」

「ふふ、これでも人を見る目はあるつもりです。」

決して悪人には見えませんし、悪人を信用なさるヴィヴィオ様でもありませんよ」

人がいいと言うか、何と言うか。

信用された事を素直に喜べないような、喜んでいいような。

「やれやれ……まあいい。」

今言えるのは、私が持つ過去の記憶についてだ」

「主に、ベルカの技術面についてが多いような印象ですが……その内容ですか?」

「いや、由来だ。」

私の過去の記憶では、私は夜天の魔導書の妹だ」

「妹? 魔導書の、ですか?」

カリム・グラスアが、めっちゃ不思議そうにしてる。

管制人格に関する知識が無いか、あまり情報が残ってないのかもしれない。

「そうだ。」

夜天の魔導書は広い意味での融合騎であり、人格がある。

私の記憶は、その妹……デバイスだから妹機と言うべきか? その融合騎のものだ」

この説明なら、ギリギリ嘘じゃないはず。

夜天の魔導書の妹機の管制人格の記憶を、本人が持っているだけ。本人じゃないとは、言っていない。

「それで、技術面の情報が多いのですね……当時の名は、何と?」
あら、意外に驚かれない。

流石ベルカ、記憶の継承程度では驚かない？

Vividのヴィヴィオ然り、アインハルト然り。ベルカ系だと割とありがちなのかも？

「魔導具としては、曙天の指令書と呼ばれていた。

指令書と言いなながら、やっていたのは資料庫の整理や魔法の研究だな」

「曙天……曙……夜明け？ それに、夜天……」

まさか!？」

カリム・グラシアの顔色が変わった。

ちらつと部屋の様子を確認すると、紙の束を取り出し、その紐をほどいて。

その紙が輝いたかと思うと、カリム・グラシアを取り囲む円を描くように空に舞った。

プロフェーティン・シユリフテン

「預言者の著書か。紙が空を舞うのは、古代ベルカ式の魔法のようにも見えるが……予言自体はどうなんだろうな」

「恐らく、使用条件が厳しい血統魔法の一種のようなものではないかと考えています。」

それよりも、これを」

浮かんでいた紙が、お姉様の方に飛んでくる。

内容は当然、古代ベルカ語。だけど。

「これは……」

「昨年得た予言です。幻の書の協力もあって翻訳は終了していますし、夜、そして夜明けを示す言葉がある事は解っています。」

夜天と曙天、2つの名を示しているのであれば、或いは」

「ええと、これは、カリムさんの予言よね。」

私達にも解るように読んでもらってもいいかしら？」

「……そうだな。」

〃生きる人形が生み出される地

幾多の魂が交錯し 死を厭わぬ者が血塗られた鎖を断ち切る

溶け行く氷が舞い 囚われた死者達が役目を終え

絶望に蝕まれた夜が 夜明けの祝福を受ける〃

どうとでも解釈出来そうだが……経緯はともかく、成功すると取れるのか？

随分と道は険しそうだが」

「全体的に不穏な言葉が多いので、気になっていました。

絶望に蝕まれた夜というのは……先ほどの話と併せて考えると、闇の書となつている夜天の魔導書を示す可能性があるのではないかと」
「……主を殺してしまう運命に絶望していたという情報に準拠するなら、そうなる。」

それを夜明け、つまり曙の名を持つ私が何とかする。そう読みたいところだが……」

「他が随分と物騒な言葉が並ぶわね。生きる人形とか、囚われた死者とか……」

「これの心当たりはあるのかしら？」

「例の知識をあまりあてにするなよリンディ、既に参考情報ぐらいにしか役に立たん。」

その上でだが……まあ、順に考えるか。

生きる人形は、傀儡兵や戦闘機人、クローンも該当する可能性があるか。生み出される地であるなら工場かそれに類するものがあるという事だろう。数人攫われている事も考えると、スカリエッティが手を出してくる……いや、そういった施設のある場所を使う可能性がある、程度か。

幾多の魂は、大勢が参加するとかだろうな。少人数で何とかするわけではないという事だろう。

死を厭わぬ者……相打ち覚悟で、血塗られた鎖……闇の書の呪いを断ち切る、かな。

解け行く氷……氷結魔法が失敗するか、破壊でもされて脱出されるかだろう。

囚われた死者だが……役目を終わるとなると、今は活動しているという事か。ここはあまりいい感じがしないな。

間違っている可能性もあるが、とりあえずこんな所だ」

他にも色々解釈は出来そうだけど、一番無難なのはこんな感じ。

一番厄介そうなのは、やっぱり死者について。

「そう……大物次元犯罪者が介入してくる可能性を考えると、何か手を打っておくべきかもしれないわね」

（でも、囚われた死者って……可能性として考えられるのは、別荘の？）

「連れ去られた連中の内、2人はまだ保護出来ていないんだ。

その捜索という名目で調査は行えないのか？」

（その可能性は否定出来んが……あいつらの役目は別荘の維持だ。その役目が終わるとなると、別荘が崩壊する事を意味するぞ。

それに、守護騎士は人を取り込んで作成されている可能性が高いよ。うだ。もしそうなら、囚われた死者という定義にあいつらも該当する。守護騎士の消滅を示唆している可能性もあるぞ）

「依頼はしているけれど、あまり動きは無いわね。

手掛かりが無いことを理由に、失踪した人物のリストに入れただけになっているわ」

（それなら、夜明けは夜の終わり、夜天の魔導書の消滅を意味する可能性があるという事ね。

守護騎士の役目の終了という解釈も出来てしまうし）

「やはりな。捕らえた1人が犯罪者になっていたという事実は軽視されているか」

（……あまり考えたくない可能性だな。

まあ、全力で足掻いてみせるさ）

「その辺も含めて本局に戻った時に依頼してみるつもりだし、闇の書関連で注目が集まった状態だから、もう少し動いてくれるんじゃないかしら。」

それと、アースラにアルカンシエルを搭載する事が決まったそうよ。護送も兼ねて、一度戻ってこいという事ね」

この辺は、今朝通知があった最新情報。

時空管理局として、最悪の事態に対応するための切り札を用意しておきたい気持ちは解る。

ギル・グレアムとの交渉でも出てたし、筋書き通りでもある。

「そうなるよ、2週間ほど離れる事になるのか。」

その間にも襲撃がありそうだが……捕縛は可能なのか？」

「エイミィと武装局員の一部は残しておくし、囑託魔導師や民間協力者依存だけれど、一般的な部隊よりも充実した戦力が残るわ。」

魔法を知られてしまった同居している親戚の人達も、随分と素質がありそうなのではないか？」

「まあ、そうだな。すぐには無理だろうが、将来的にはかなりの実力者になれるぞ。」

その意味では、カリムには朗報か？ 真正古代ベルカエンシエントの術者が増えるぞ」

実際は既に完成した技術を持つ騎士だけど、その事実は公表出来ないし。

お姉様が鍛えた事にするのが、色々な方面に説明しやすいのは確か。

「この様な形で増えるのは、不本意ではあるのですが……」

やる気のある若者を指導して頂くわけにはまいりませんか？」

巻き込まれ系は矜持が許さない？

依頼したい内容も、聖王教会の立場を考えるとまあ解る。

「私は基本的に研究者だから、大勢を指導するのは向かん。」

シルフィにデバイスの製造技術を伝えるつもりだが、それが形にならないと、教える以前に製造に手いっぱいになる可能性だってあるしな。

カイゼやセツナ辺りを勧誘して指導してもらうのは、本人達がどう思うかはともかく、私は止めんど」

「そうですね。それも手ではありますね……」

でも、諦めませんよ」



「……というわけで、お前達が勧誘される可能性を上げておいた。好きな道を選ぶといい」

こんな感じでセツナ・チエブルーに説明なう、いん・別荘のお風呂。今の日本は夜中で、今日から学校へ通い始めたから昼間は時間が無く、食事と宿題を終えてから少し訓練をした後の状態。

主や八神はやて達は既に入浴を終えてるし、途中まで一緒に訓練してた成瀬カイゼも同様。そもそも男性がこの場に居る事はないし、近接担当で参加してたチャチャゼロは軽く体を流しただけで風呂を出ていつてる。従者達もこの時間はあまり使わないらしい。

つまり、今は広いお風呂に2人しかいない。

「好きな道、ですか……」

ええと、あまりイメージは湧かないんですけど、エヴァさんに恩を返すのって、どうやればいいでしょう?」

「別に恩とか貸し借りとかは、気にしなくていいぞ?」

強いて言えば、友人でいてくれたら嬉しい。それ以上は特に無いな」

「そ、そうなんですか?」

「夜天の魔導書の事とか、色々とありますし……」

色々と言っても、今のところはほぼ夜天の魔導書関連に限定されるけど。

範囲を広げても、事後処理程度まで。それも結果次第の出たところ勝負になりそうだし。

「……私は、全てに見返りを求めるほどのロクデナシに見えるのか?」

いや、言い訳無用なほどの事をしている自覚はあるが」

「いえ、そうじゃなくてですね。」

何か手伝える事とかは無いかな、と……」

「打算的な話がいいのか?」

そうだな、現状でもAAA認定を受けられる魔導師のお前が友人として近くに居てもらえると、私の存在や実力を隠しやすい。

これでどうだ?」

「どうだって……そんな事でいいんですか?」

そんな事と言われても、お姉様としては割と大事なのに。

特典で友人を望んだのは、伊達じゃない。

「闇の書の情報が表に出たからな。」

カリム達への渡りをつけるのも終わったし、リンディ達に対する貸しとしての役目も果たしてくれた。充分に返してもらっているよ。

後はお前の人生だ。お前自身で道を選ぶといい」

「どっちも私達の事を考えてだとしか思えませんが、説明などはカイゼさんが中心でしたし……」

でも、解りました。ゆっくり考えてみます」

A S編 28話 開かれた扉

アースラに帰港命令が出た2日後。関係者達に連絡だけ行い、アースラは本局へ帰っていく。

エイミイ・リミアツタと武装局員、それにカリム・グラシアや技術者達は地球に残留してるし、事態が事態だけに転送ポートの使用許可も下りやすいという事で、大きな変化は無い模様。

今回は本局に直行、アルカンシエルの搭載完了と同時に地球に移動する予定。どこかに寄る理由はない。

テスタロツサ一家は、改めて住居を見始めたらしい。

すぐに引越す気は無いけど、事件が落ち着いたら普通に家族として暮らしたい、その為に色々知っておくべきだと判断したとの事。

八神家と高町家の近くを重点的に調べてる理由は、聞くまでも無い。

というわけで。

「意外な事に、千晴やツバサも特典破壊は消極的だったな。

まあ、自力で対策が可能になった以上は、破壊の副作用の方が心配か」

「歪んでいても、望んで得た力を簡単に捨てたくは無いです事もあるかも。」

「気持ちには理解出来なくもない」

今はお姉様と主が、転生者達からの返事の一覧を見ながら話してる。

ちなみに馬場鹿乃は、逆ナデポを使ってもらう可能性を考慮して、破壊を拒否。月村忍は壊してもいいと言ってたけど、この辺は覚悟の問題もある。

「まあ、そうだが。」

とりあえず、情報隠蔽に関わった現地魔法関連組織が再犯を予防するために行動する、という形式は成立した。

同様に隠蔽の為に奔走した管理局も協力して、東渚の魔力を永久封印する。

実行時に表に出るのは、ザファイラとアコノ。蒐集はシャマルが担当だ。

時空管理局からクロノも協力してくれるが、基本的に裏方でイレギュラー対応だ。

私も裏方で、指揮と切り札を担当……これでいいな？」

ここはアースラの現地拠点で、お姉様と主を中心に、実行担当者が集まり最終確認中。

クロノ・ハラオウンは転送ポートを使って呼び戻してあるし、ザファイラもいる。

偽装ザファイラの服装は太公望。無双の。髪が白い事と、意外に顔の線が細い事からお姉様が選択。この世界でまだ発売していないゲームからの採用で、転生者と思われる効果も期待。

だけど、随分とイメージの違うキャラを持つてきた。声帯操作型のボイスチェンジャーや認識誘導も使う予定だし、口調だけでは簡単にザファイラと関連付けられないと予想。

という訳で、コードネームはタイゴン。

「ニコポ対策を考えると男性を中心とするのは解るし、今まで人の姿を殆ど見せていないザファイラを現地の関係者に仕立てるのも解るんだが……」

何というか、随分不機嫌じゃないか？」

クロノ・ハラオウンは、お姉様の顔色を窺ってる。

基本的に控えだから、結果的に気を使うのが役目になってる。

「当たり前だ。アコノを危険な場に立たせるのは、意図は理解出来ても納得出来ん」

「大丈夫。精神干渉の魔法の準備もしてある」

「……余計に心配になったんだが」

主が余計な事を。

ちなみに、準備したのは高揚、鎮静、激昂、狂化。

高揚だけで済めばいいな、的な感じ。

「大っぴらには使わないでくれよ？」

一部の特例を除いて、精神系の魔法は禁止されているんだ」

やっぱり。

執務官の指摘だから正しいだろうし。

「……認識阻害もか？」

「機密保持のために必要だと認められない限りは。」

魔法文化の無い管理外世界での情報隠蔽や、時空管理局が個別に許可した場合等が特例に該当するんだが……心当たりがあるのか？」

とりあえず、黒の騎士団が使ってる。

まあ、元々グレーというか、黒を見逃してもらってるようなものだし。

「……小学生の一人暮らしという不自然な状態を隠すために使われていたな。」

まさか、管理外世界での隠蔽に該当するから問題無い……のか？」

「そんなわけがないだろう。魔法の隠蔽は許可されても、そんな……ああ、そういう事か。」

グレアム提督が行っていた隠蔽は、違法な手法だ。管理外世界で行っていたとしても、管理世界の住人がやっていた以上は罪に問うことも可能だ」

「やはり、その認識でいいんだな。」

落ち着いてから解除したのは、正しい判断だったわけだ」

「そういう事になる……いや、今はそんな事よりもだ。」

ザフィーラ、いや、タイゴンが前衛で説得と挑発を、アコノが後衛で結界を担当。

特典無効化の能力を使わせてから、シャマルが旅の鏡を使って不意打ちで蒐集を行う。

僕は潜んでおいて、予定外の乱入者やトラブルがあった場合の対処。

「この流れでいいんだね？」

「ああ。使う魔導具は既に渡して、テストも済ませてある。」

「問題や質問は無いな？」



というわけで、日が沈む頃。

人気のない公園で東渚が魔法を練習しているのを捕捉してるから、現地へ転移。

そして、気付かれる前に主が封時結界を展開。

「なっ!？」

景色の色調が変わって異常事態に気付いたらしく、割り箸風デバイスを手に周囲を警戒してる。

「魔法を使つての破壊騒動や、度重なる隠蔽を軽視した魔法の行使。

これ以上見逃すわけにはいかん」

前衛担当のタイゴンが、ずんずんと音を立てて近付いてく。

その斜め後ろに主がいるけど、主は祈るように目を閉じ手を組み、光るカードを空中でくるくる回してる。

見た目だけの魔導具だけど、特典の能力に見えたらいいなという事で投入。

実際に使つてる魔法は、高揚の精神干渉だけど。

「まさか、太公望か？ 本物の仙人……の筈がないな。それに、木乃香……2人とも転生者か」

「我等の出自に意味は無い。

お前の魔力、封印させてもらおう」

「おいおい……そりやないぜ。巻き込まれただけなんだぞ？」
「先日の襲撃に限っては、同情すべき点も無いわけではない。

だが、被害全てを放置した事は看過出来るものではなく、日常的な行使についてもこれ以上見逃せん。

それとも、これまでの隠蔽にかかった、そして、これからもかかるだろう費用や手間。それらを負担する気があるか？」

「そんな余裕は無かつたんだよ！ 普段だって人目に付かない様にやってるだろ!!」

「だから見逃せと言いたいのか。

馬鹿を言うな。特に先日の件は、記憶改変処置を行わねばならん程の被害と影響が出ている。

その償いを全て背負うならば、背負うがいい。出来ないのであれば、魔力の封印で手を打とう。

そういう話だ」

実際は、記憶の措置はしてないけど。

でも、お姉様と私達が介入しなかつたら、実際に行わないと問題になった可能性はある。

この辺の言葉は、何種類か用意した台本の通り。それに合わせて、主が激昂の精神干渉を開始。

「……ふざけるな！」

切れた東渚、魔法弾射出。

タイゴンは光の盾……ぶっちゃけて言えば光鷹翼的なモノを展開して防御。動く必要すらなく、魔法弾は盾で爆発して消えた。

これもお姉様が用意した魔導具で、魔力さえあれば障壁が苦手な人でも盾を作れる。ザフィーラ自身の方がよほど強固な障壁を作れるけど、展開速度だけは優秀なはず。

「それが能力か……いいもの貰いやがって。

だがな、お前らが来たのは間違いだ。特典を破壊されたくないや、とつとと消えろ」

「自身の能力が消えるのが怖くて使えないのだろうか？

それに、罪だとすら思っていない事は理解した。

叩き潰されてから封印されるか、大人しく封印されるか。好きな方を選べ」

「黙れ！ 叩き潰されるのは貴様等だ!!」

必要以上に、激昂が効果を発揮してる。

東渚が突撃しながら魔法弾を射出、光の盾で防いだ爆風を目晦ましにタイゴンの横に飛び込んで。

「壊れな幻想！ 特典殺し!!」

叫び声と共に、ガラスが割れる様な音が響いた。

術式は……不明。魔力及び魔力素の動きは感知出来たけど運用方式が不明というか未知。記録はしたけど、解明できるか微妙。

今の私達の気持ちを表すと、(・ω・) ショボーンな感じ。

「ククク……あの世で後悔しうおあぐつ!？」

高笑いしそうな東渚の両手両足と頭、正確には目を光の輪が捕らえ、直後に胸からシャマルの手が生えた。

「こ、この感触は……うああああああ!!」

ズキーン、と効果音を付けたくなる感じで、蒐集も完了。

シャマルの手が消え、東渚の意識も落ちた。

「……状況終了。」

問題や何か変化は無いか？」

「ん……特に変化を感じない事が、問題と言えば問題。」

見込みが外れたかもしれない」

「悪影響があったのでなければ、エヴァンジュも安心するだろう。」

それを回収して戻るとしよう」

任務完了、撤収へ。

お姉様とクロノ・ハラオウンの出番が無かったのは、とてもよかった。

目に見える問題が無かったと言う意味で。



「それで、本当に影響は無いのか……？」

少なくとも、肉体的、魔法的な影響が出ている様子は無いが」

東渚の魔力がほぼ消失した事と、封印処理も完全な事を確認し、東家のベッドに放り出して。

アースラの拠点に戻った一行は、内密な話をするための部屋へ集まった。

お姉様は即座に、主の状態を確認。少なくともお姉様の中にある本体に直接影響があった感触は無かったし、本体が影響範囲内である必要があるなら効果が無かった可能性もある。

「少なくとも、自分で解るような影響は感じてない。」

ただ、すぐには効果が出ないだけかもしれないから、様子を見るしかない」

「そうか……何かあったら、すぐに言うんだぞ」

「解った」

という訳で、効果不明という事になった。

用件は以上で終了だから、主とザフィーラは先に帰宅。そろそろ夕食の時間だし、遅くなると心配される。

「この件に関しては、僕達が手伝えることは無いかもしれないが……やはり、術式などは不明なのか」

その様子を見てたクロノ・ハラウンが、ちよつと不思議そうにしてる。

別に、お姉様や私達は何でも知ってるわけじゃないのに。

「そうだな。少なくとも、私を知る方式ではない事だけしか解らなかつた。得た記録で調査出来ればいいが……どうだろうな。」

これなら、まだカリムの予言の方が解析しやすそうだ」

「……予言のレアスキルは、解析出来る様なものなのか？」

「血に刻まれた魔法なのか、魔導具やデバイスの類か、両方揃う必要があるか……条件はともかくとして、わざわざ古代ベルカ語、それも知識層が使うような文語や、比較的マイナーな詩語まで使ったものを吐くんだ。」

その言葉が使われた時代の文化人も制作に関わった魔法の一種と判断すべきだろう」

この辺は、実際に予言をするところを調べてみないと何とも。

必要な「月の魔力」が魔力量の問題なら、高濃度の魔力で満たした部屋を用意すれば何とかなるかも？

古代ベルカの魔法をミッドチルダで使うための条件的なものが、他に必要かもしれないけど。

「そうか……確かに、行使者の知識の影響を受けていないなら、そうなるのか。」

ところで、闇の書の蒐集はどんな状況になったんだ？」

「馬鹿魔力だったから、だいぶ稼げただろうな。」

まだ予定に届かないし、管制人格の起動はアースラが戻ってからしか行わん。お前達もその方がいいだろう？」

東渚は、目覚めたら呆然としてた。

特典消失と魔力消失については、自覚があるはず。

本人は知らないけど、原作知識も役立たずに成り下がりがりつつある。この先、一般人になれるかどうかは、本人次第。

という訳で、アースラが本局に到着。早速ドック入りし、臨時メンテナンスとアルカンシエル搭載作業が開始された。

リンディ・ハラオウンは、関係各所への協力依頼やら、状況説明やらに追われてる。

クルー達は、長期任務に備えた臨時休暇。次の任務が闇の書関連という話は伝わってるから、今生の別れになる可能性が普段の任務より高い事を知らされての、水入らずの時間。

そんな中、クロノ・ハラオウンとユーノ・スクライアは。

「そうか、君がスクライアの少年か。」

話は聞いているし、無限書庫の調査についての手続きも進めてある。

スクライアの探索技術に期待させてもらおうよ」

「よ、よろしくお願いします」

ギル・グレアムとの面会中。

もちろん、リーゼロットやリーゼアリアもいるわけで。

「私は調査に直接協力する事は出来ないが、何か手伝える事はあるかね?」

「はい。リーゼ達にも無限書庫に来てもらえたら、と」

「食っていいの!?!」

「いつ!?!」

「ああ。作業が終わったら好きにしてくれ」

「なっ!?! お、おい、ちよつと待て!」

なんてどこかで聞いたような会話もあったりしたけど、当面は新人教育の引き継ぎや残務処理の合間を見て、それが終わったら全面的に協力するという事になってるらしい。

というわけで、最低限の手続きも終わってるし、やり方を考える為にもとりあえず一度行ってみようという事で、クロノ・ハラオウン、

ユーノ・スクライア、リーゼアリア、リーゼロッテの4人は無限書庫へ。

「そういえば、探索魔法やデバイスの準備もしてあるって言うってたよね。」

自信のほどは？」

道中、魔法担当のリーゼアリアがユーノ・スクライアに近付いてきた。

何をするのか、どの程度の事が可能なのか、気になるらしい。

「一族の皆に、書庫の調査で使える魔法を教えてもらっています。」

僕だけでも使えますけど、エヴァさんが専用のデバイスを組んでくれたので、かなり効率よく調べられる事も確認しました」

「……あの女か」

お姉様の名前が出た途端、リーゼアリアの顔が歪んだ。

憎悪とか、そんな感じの感情がありありと見えてる。

「恨むのは解るし、僕だって恨まれても仕方ないんだが、これだけは言わせてくれ。」

彼女は、闇の書の対策としては理想的な道を歩んでいる。

納得出来ない部分があっても、目的や結果を見ると、間違っていたと言えない程度にはね」

クロノ・ハラオウンの、庇う！

……いまいち庇う気が微妙な感じだけど、庇ってる！ 多分。

「解ってる。だからといってアレは許せないし、許す気も無いけどね。」

ああ、言いたい事は想像出来るし、理解もしてるけど、感情は別だから」

「同感だ。僕だって、あそこまでするとは思っていなかった。」

つと、ユーノ。ここが無限書庫の入り口だ」

見た目は、他と大きくは変わらない自動ドア。

無限書庫のプレートが、小さく掲げられてるだけ。

「色々と危険もあるから入室制限は厳しいんだが、あまり有効利用も出来ていないからか、扱いはこの程度なんだ。」

エヴァンジュの話だとそれも何とかしてくれるらしいから、フェ

レットもどきには期待している」

「誰がフェレットもどきだ、誰が」

「君の事だが。」

「だけど、君はデバイスを使わない主義じゃなかったのか？」

クロノ・ハラオウンは、お姉様製デバイスを受け取ってるユーノ・スクライアが不思議らしい。

使わない主義とは、ちよつと違うのに。

「部族の方針と、遺跡探索の手法のせいなんだ。」

長期間の探索だとデバイスのメンテナンスが出来ない事もあるし、事故に巻き込まれた時に可能な限り生き残れるよう、出来るだけデバイスに頼らないよう鍛えられてる。

特に僕は、魔力不足を場に応じた最適化でカバーする方法に慣れちゃってるからね。普段使う魔法は、かなり高度なインテリジェントデバイスじゃないと任せられないよ」

「だが、慣れない魔法を任せる事は出来るだろう。普段はそれもしていないじゃないか」

「一般的なデバイスは、変身魔法を使って狭い隙間を通る時に邪魔になるから。」

それに、魔力不足で使いこなせなかったけど、レイジングハートは僕が持っていたんだ。封印処理とか、必要な時に必要な力を借りる事まで避けてるわけじゃない」

「なるほど、そうだったな。」

辺境や無人世界での遺跡発掘を生業にするスクライア一族らしい方針だ」

そんな感じで、無限書庫の中へ。

正確には、部屋の中からゲートを使って転送された先が無限書庫。中は無重力状態で、ひたすら先に延びる空間の壁全てが本棚になっている。

でも、この感じは。

「ここが、無限書庫……管理世界の全ての書籍やデータが収められた、超巨大データベース……」

ユーノ・スクライアの目が輝いてる。

幾つもの世界の歴史が丸ごと入ってるから、歴史好きには堪らない。

「だけど、ほぼ全てが未整理のまま。ここでの調べ物は大変だよ？」
「とりあえず、少しやってみます。」

ルース、やるよ」

『Yes, master』

ユーノ・スクライアがポケットからカード型デバイスを取り出して、探索開始。

お姉様製の、情報処理に特化した、一部に古代ベルカ式を混ぜたミッドチルダ式、みたいな使用感と見た目になる様に作られた古代ベルカ式デバイス。使える魔法を数種類の検索魔法のみ、それも情報処理の補助を主要機能にすることで実現。

ついでに、私達からの介入開始。能力のブースト及び、気になる点の調査もやっちゃおう。

「こりやまた、凄い代物を持ち込んだもんだ。」

「というか、魔力が多すぎない？」

「僕の魔力だけで、こんなになるはずが無いんだけど……」

そりゃあ私達の魔力も使ってるわけ。

というか、気になってる点の確認が完了。

事前情報通り、ロストログア認定されるに足る代物だった。

お姉様の空間生成技術をベースにした、人造空間。予想通り。

各世界の書籍などを自動収集する機能を確認。お姉様や私達も知らない、古代ベルカ式の術式。

情報が増えすぎて機能不全に陥ってる、管理システム。お姉様が作ってあえて流出させた、資料庫の管理システムとほぼ同一の内容と仕組み。容量に対して、集めた量が多すぎるだけ。システムの限界には達してない。

結論。お姉様管理下のアルハザードの資料庫を一部変更して、書籍の自動収集機能を追加したもの。

管理システムの能力を上げれば、検索機能等が復活する。

「でかしたユーノ！」

無限書庫の真価が判明したぞ!!」

あああ、お姉様の転移が早すぎ。

とりあえず、サーチャーとインデックスの整理の集合と増員宜しく。

協力要請、急いで。

「エヴァンジュ!? こんな所にまで来るのか!」

「可能性は考えていたが、本当にそうだとはな。

接続は……やはりゲスト権限か。殆ど機能停止しているし、どうやって叩き起こすか……」

お姉様は急ぎすぎだし、会話が成立してないし。

とりあえず、もつと積極的に他人を使う事を覚えるべき。

というわけで、こちらが協力を要請した長宗我部千晴とチクアープです。

「……早すぎないか?」

こんな事態を想定して、予め連れてきてただけ。

日本は土曜日だし。

協力が不要だったら、普通に本局やミッドチルダを観光して帰ってもらおう予定だった。

「というわけだから、さつきとやる事やって、観光したいんだけど……

ぶつちやけて言えば、コイツとユニゾンしてる時間を減らしたい」

「誠に申し訳御座いません」

「……それなら、私にここの管理システムの管理者権限を付けてくれ。

後は、こつちで何とかしよう」

「ん、了解。

ほら、とつととやるぞ。変な事したら承知しねーからな」

「勿論で御座います。

では、参りますぞ」

チクアープが長宗我部千晴の中に入り、髪の色が銀色に変わって。服装は特に変化しないまま、姿が消えた。

原作組の3人は、啞然としている。止めようという発想すら出ないらしい。

(おーい、なんか、管理者権限以外に、開発者権限みたいなのが隠れてるっぽいんだけど)

(……早いな。というか、その裏口までそのままなのか。

それも頼む)

(あいよ、と。

全体を起動するとダウンしそうだけど、大丈夫なのか?)

(ちよっと待ってくれ、接続は……よし、コア部分は大丈夫だな。

機能不全を起こしている部分は一旦停止させて、能力を増強するさ)

(なら、これでいいんだよな?)

(ああ、ありがとう。ここから先は、私達の仕事だ)

(ん、役に立てたなら何よりだ)

長宗我部千晴の姿が現れ、チクアープが分離して。

軽く手を振った後で、2人(?)をミッドチルダへ転送。この後は

観光をお楽しみください。

「よし、と。

あとは、脆弱なここの基盤を……」

「ちよつといいかエヴァンジュ。いったい何をどうしたんだ?」

クロノ・ハラオウンが頭を押さえながら、聞きたくなさそうに口を開いた。

リーゼアリアとリーゼロッテ、ついでにユーノ・スクライアは、まだ呆然としてる。

「ん? 一言で言えば、無限書庫の正常化……の、第一歩といったところか。

私が作ったシステムをほぼそのまま流用していたようだからな。とりあえず管理者として全機能を掌握したんだが……残念なくらいキャパシティオーバーしてるからな。能力を底上げしないと、使い物にならない」

「つまり、あれか。無限書庫を支配した、という事か……」

「私は眠る前に資料庫の管理者をしていたし、ココはまともに機能していなかったのだろうか?」

そうだな……とりあえず、増強が終わったらお前達にも接続権を与えればいいか」

「ちよ、ちよつと待って！ いいって、何が!？」

ユーノ・スクライアが叫びながら再起動。

「その前に、勝手に改造するのは問題だ！」

クロノ・ハラウンも叫んでるけど、気にしな〜い。

「ここを独占する気は無いし、どうせ一朝一夕でどうにかなるものでもない。当面はユーノ達の搜索魔法頼りという点は変わらんど？」

まあ、私も少しは手伝うか」

既に1万人態勢で調査中だけど。やってて良かった人数増強。

無限書庫の改造にも着手。検索機能の早期稼働が目標。

お姉様の手は、あまり借りずに済む予定。

ふふふ、腕がじゃらじゃら鳴るぜい。

「おや、なかなか面白い事になっているようですね」

って、何で変態が？

ここへの転移は……ああ、ユーノ・スクライアがいるから。

既に主になつてる事も忘れられてそうだけど。

「何をしに来たロリコン！」

「こんな楽しそうな場所に入れるのですよ？」

呼ばれて無くても即参上です」

「だから、何をしに来たと聞いている！」

「調査の御手伝いですよ。」

これでも、文化の調査が本業ですからね。書庫の調査も慣れていきますから、協力出来る事は多いと思いますよ。

それに、エヴァちゃん自身が調査に集中するわけにはいきません。公開用の資料作成は重要ではありませんし、ここの調査もさほど急ぐ必要は無いでしょう？」

「確かにそうだが、管理するための基礎部分は早々に組み上げるぞ」

「ええ、それはお任せしますよ。」

ですが、チャチャちゃんが可能な部分は任せて、今ははやてちゃんや地球の人達を重視して下さい。精神的な柱なのですから、度々不在

「…それは好ましくありませんよ」
「…そうだな」

A S編29話 稀によくある厄介事

無限書庫の調査を始めて、1週間。具体的には、アルカンシエルを搭載したアースラが試験航行を行ってる頃。

管理システムの改造はまだ終わりが見えないけど、ブースト済みのユーノ・スクライアは流石に優秀だった。私達や変態ロリコンの調査結果もあるし、膨大な量の闇の書の資料が見付かった。

「どう見ても、機密と言うか、知ってる闇に葬られそうな情報もチラホラと……」

新たに任命された書庫のチャチャノーマル（幼女モードで実体具現化中）が、いくつかの資料を浮かべながら呟いてる。

その内容は、約160年前の改変に関する記録。

中心となったのは、現在の最高評議会の3人と、当時の闇の書の主。聖王教会も関わってる。

当時の闇の書は既に蒐集しなければ主の命を蝕み、蒐集して完成すると主が力を使いこなせずに暴走する状態になっていたらしい。夜の管制機能は制限され、この事を主に伝える事も叶わない状態だという事も判明してた。

防衛プログラムが機能している状態での自滅は困難だったため、防衛プログラムを管制人格の制御下から外して浸食及び破壊を行わせる事で、内部から自滅させる事を目標として改変を開始。

作業担当は、ベルカが滅んだ事で数少なくなっていた古代ベルカ系の技術者達。これ以上滅ぶ世界を増やさないために全面協力、最終的に、主の命という時間が残り僅かになった時点で可能な限りの改変を行い決行。

結果、完全な破壊に至らず。周囲を巻き込んで大規模な浸食及び破壊を行い、無限転生で姿を消したと思われる。この破壊により協力していた技術者の多くが命を落とし、古代ベルカの技術が更に失われる事に繋がった。

……という事を、説明してみた。

「へー、つまりあれだ。」

闇の書の改悪とベルカ文化消滅のとどめを刺したって事に……って、大問題じゃない!？」

手伝いに來てるリーゼロッテもびっくり。

やったのが今の最高評議会って辺りが、特に素敵過ぎて泣けてくる。

表向きは、闇の書の対策を依頼されたミッドチルダ政府が聖王教会に助力を求め、協力して事に当たるも力及ばず、大きな被害を防ぐ事が出来なかった、となってるらしい。

闇の書が危険だという事は既に知られてたし、経緯も結果も嘘は言っていないけど、対処した結果として被害が増えた事や、具体的な被害の内容には触れてない。

「流石に、これはちよつと公開出来ないね……歴史的に見たら、かなり重大な事件だけど」

ユーノ・スクライアも苦笑するしかない。

公開した場合、時空管理局と聖王教会がグダグダになる可能性もあるし。

「必要があれば公開すれば良いのですよ。無理に公開する必要も、必要以上に隠蔽する必要ありません。

私の予想では、夜天の治療が終了した後が危ないですし。公開するならその頃でしょうか」

別の資料も漁ってる変態は、着々と最高評議会を問い詰めるための証拠も揃えつつあるらしい。

妖精さんサーチャーズと呼んでる自立行動型式神的なものを多数駆使して、ものすごい速度で調査を進めてる。

どう見ても、お姉様と私達が組み上げた、魂を使ったコンピュータシステムをベースに組み上げられてるけど。外見が⑨ガカっぽいのも混じってるあたり、そこはかとなく不安だけど。

「事後に備えて、って事？」

「というか、今集めるべき資料は充分なの？」

リーゼロッテは、幾つかの資料の運搬役。

ユーノ・スクライアの助手的な役目で動いてるけど、ここに居る中

では一番活躍してない。

「夜天の魔導書が闇の書に変わっていく過程を、大筋で説明出来るだけの情報は揃ってる。ギル・グレアムの面目も立つし、夜天の魔導書に戻すための筋書きも書ける。」

いざとなれば裏側に関する資料を使って圧力もかけられるから、問題ない」

「こわっ！」

「やっぱ、この子も怖いわ……」

でも、私達が開発者権限で見付けた禁書庫の方は、もつと凄い事になってるし。

非公開情報も集められるだけ集めて、隔離するような仕様になっている事を確認済み。犯罪者の捜索がすごく楽になりそうな資料が、笑うしかないほど見付かった。

最低でも管理権限が無いと表側しか見えないから、無限書庫の危険性も見えなかっただけと予想。これについては、ユーノ・スクライアやリーゼ姉妹にも教えない。

「無限書庫の自動収集機能を甘く見て、身に余るものを好きにしようとした結果。」

ちなみに、無限書庫もスクライアが遺跡で発見したロストログニア。封印を依頼された最高評議会になる人達が、封印せずに自分の物として使ってるのが原因だから、自業自得」

「え？ 無限書庫を見付けたのは僕の一族って事？」

ユーノ・スクライアが啞然としているけど、ついだとばかりに調べた無限書庫の情報を見る限り、それ以外に説明出来ない。

「当時のスクライアは欠陥品の魔導炉だという鑑定結果と、封印したという証明書を受け取ってるから、罪は無い。」

鑑定結果を偽り、証明に反して自分が使うために稼働させたのが、今の最高評議会の書記。当時はミッドチルダ政府の高官だった」

「うっひゃあ……何でもアリって感じだね」

「この辺の、時空管理局や最高評議会の黒歴史については、当分の間は誰にも言わない事。」

特に、お姉様の耳に入れない事をお勧めする」

「え？ 秘密にしているの？」

全部報告するものと思ってたけど」

リーゼロッテの目が丸くなってる。

確かに反逆とも取れる行為だけど、ちゃんと理由はある。

「お姉様は現時点でも、時空管理局や最高評議会に対していい感情を持ってない。犯罪者や違法研究者と繋がってる事も知ってるけど、その証拠や具体的内容を知ってしまったかどうかは心情的な影響が大きい。

夜天の治療が成功したならともかく、失敗したら致命的。原因の一端を担ってる時空管理局が、お姉様の八つ当たりの対象になりかねない。

お姉様の平穏と幸せを願う以上、全面戦争を回避する方向に誘導するしかない。治療が成功するか、失敗しても知られるまでに時空管理局が体質を改善していれば、致命的な決裂は避けられるはず」

別に時空管理局自体はどうなつてもいいけど、いきなり治安組織が無くなるのは結果的に困る。

無限書庫の調査からお姉様を遠ざけた変態ロリコンの意見は、正しかったと言わざるを得ない。色々とヤバイ情報も見付かっているし。

成功が確信出来ないから、少なくとも夜天の魔導書を何とかするまでは、何としてでも隠し切る必要があるだろう。

「念を押しておきますが、夜天……闇の書の妹というのは伊達ではありませんよ。

チャチャちゃんの手を貸さなくても、姉の夜天と私の2人がかりでも抑え切れるか判らない……いえ、抑え切れないと言い切れる程の性能を、エヴァちゃんは与えられています。

それに、全面的に争うのであれば、私もエヴァちゃんに付きます。夜天は……闇の書のまま手元にあるなら、本局内で暴走させる事になるでしょう。

まあ、これは最悪のシナリオです。今は、治療の成功を信じ、管理局の自浄能力に期待しておきますよ」

「アタシ達が言えた事じゃないけど、時空管理局の体質か……改善は簡単じゃないし、父様だけじゃ無理だよ」

変態^{ロリコン}が脅し過ぎの様な気もするけど、大筋としては間違ってる。ユーノ・スクライアは心配そうに見てるんだけど、リーゼロッテはため息をついてるし、私達も大きくため息をつきたい。

お姉様から情報提出の指示が来た時点でアウトだから、情報の存在に気付かれないようにするのは本当に大変なのに。



そんな感じで、本局組がバタバタしてる中。

日本の八神家では、ピリピリした空気が漂ってる。

「予想はしていたが、な……」

というわけで、襲撃3回目。仏の顔もそろそろ限界。

しかも、今回は本格的に黒の騎士団を名乗る気にいる模様。なんとなくか、服装が黒い事に加えて、デバイスやらまで黒くて武器っぽいものを使ってる。

「今回はアタシ達も戦えるんだ。ぶちのめしてやる!」

お姉様が作った事になってるグラーフアイゼンを手に、八神ヴィータが吠えてる。

ちなみに、騎士甲冑は原作と変わらず……と言いたいけど、何か違う。

具体的には、スカートの模様。ギザギザのはずが、四角っぽいものになってる。

「だが、まだ素人扱いだ。魔法自体は控えねばならんな」

八神シグナムも、既にレヴァンティンを手にしてる。

こちらも、微妙に違和感。スカートの裾の方にラインなんて入ってなかったはず。

「防衛系の魔法は、どこまで使ってるのしょう……?」

八神シヤマルもクラールヴィントを起動してる。

騎士甲冑に、あまり違和感はない……けど、服の裾の縁取りとかが

違う。

「あまり魔法を使えん以上は、我が身を盾に……」

「あかんよザフィーラ、そんな事はしたらあかん」

ペットの犬扱いのザフィーラは、今回もお休み。

情報が漏れる覚悟が必要な相手でもないし、今回は別途で戦力も用意する予定だし。

「そのためにも、一旦黒い方のデバイスは回収だ。

せっかく連中が黒の騎士団を名乗ってくれるらしいからな。それを口実に介入する」

「だが、どうやってだ？」

我々は動けんが」

デバイスを渡されていないザフィーラが、首を傾げてる。

動けないから、もどかしく思ってる。間違いない。

「チャチャの存在を忘れているな。

あいつの外見は割と自由に出来るから、今回は3人が偽装した姿を取る。サブマスター認証もしてあるから、魔法の行使も問題無いしな」

「なあなあ、それって、普段シグナム達が動いてる意味ってあるん？」

「主であるお前の為に動く事を禁止されて納得出来る程度に怠け者なら、あまり無いな。

今は調査方面に力を割いているし、相応の実力者の手助けは有り難いが」

「そっか。その言い方やと、私は当分無理そうや」

「経験や技量が違うからな。

自分が不利な点で役に立つ必要は無い。まずは、きちんと体と夜天を直す事に集中してくれ」

「うん、そうやね。エヴァさんは家事とかせえへんし」

「……私に女性的な働きを期待するな」

そんな感じで、襲撃者待ち。

今回は、完全に八神家のみを対象にしている模様。黒の騎士団は局員を狙った襲撃をしてないから、アースラの現地拠点は対象に出来ない

かったのかもしれない。

今回の人数は40人。でも、最高でもAランクくらいの雑魚ばかり。

管理局員は含んでないかも？ 下っ端の犯罪者を集めた感じ。

「さて、黒幕はどういうつもりだ……？」

黒の騎士団の名を落とすためとしても、あまりに杜撰なんだが。

それに、それで利を得られるのは……誰だ？」

「管理局の地上？」

今まで手を出せなかった犯罪者を簡単に捕まえられて、名誉とか尊厳とかを傷つけられたとか」

主も、言いながら首を傾げてる。

自分でも納得出来ないらしい。

「手柄の多くを譲っているんだから、世間体としては評価が上がってるはずだがな。黒の騎士団は義賊として、管理局が使い辛い手を使って犯罪者対策に協力してるという扱いだぞ？」

内部からの突き上げは知らんが」

「だけど犯罪者にとっては、黒の騎士団の名がどうなろうとあまり関係ないはず。

となると、嫉妬や怨恨？」

「それにしても人数が多いし、アースラの動きを知ってるかのように動いている割に、弱い連中だけだ。どうもアンバランスというか、不自然な点が多い。

とりあえず全員捕らえて、尋問でもしてみるか？」

エイミー・リミアツタに連絡しちゃった。

武装局員が出撃準備をしてるし、予想ではあと5分ぐらいで到着する。

襲撃者は、あと1分ほど。

そろそろ迎撃準備を。

「それならそれでいいか。戦術を変える必要も無いだろうし、前回同様、最前線はカイゼとセツナだ。シグナムとヴィータははやての近くで迎撃、念のため前に出ないでくれ。

アコノは、はやての隣で封時結界を。壁役はチャチャマルに任せ、シヤマルとザフィーラは2人から離れるなよ」

「心得た」

「可能な限り、何もしない事を優先ですね」

「そうだ。では、始めようか」

襲撃者が全員、捕縛結界の有効範囲内に到達。

というわけで、主が結界を張り、不意打ちを諦めたらしい襲撃者が前に出てきて。

「我等は、黒の騎士団！ コソコソと蠢くお前達に天誅を下す！」

「……いつたい、どこの小悪党だ」

口上に呆れてるお姉様を尻目に、前回同様に成瀬カイゼとセツナ・チエブルーが飛び出して。

数人しばき倒した辺りで、唯一口を開いた襲撃者が勢いよく打ち上げられた。

「我等の偽物か。真似をするのであれば、もう少し言動を考えるべきだな」

そこに現れてたのは片手半剣レイベレヒトを振り抜いた格好の、黒の騎士団モードの八神シグナム、の恰好をしたチャチャ。コードネームは、黒剣の騎士。

「なっ、ほ、本物?！」

「……ここまであっさりと偽物だと自白するか。敵ながら情けない」
「か、数はこつちが上だ！ 一斉にかかれ!!」

襲撃者の声の上擦ってるけど、逃走はしないらしい。

というわけで、追い打ちの。

「とんふぁー・きーつくー！」

やったのはもちろん、黒の騎士団モードの八神シヤマル、の恰好をしたチャチャ。コードネームは、旋棍の騎士。

うん、トンファー関係無いよね、とか言っちゃいけない。

本物の八神シヤマルの顔がちよつと引き曇ってるのも、気にしちやいけない。

「とんふぁー・昇龍閃！」

そのこの八神シャマル、サマーソルト言っちゃ駄目。
その間も、他の人達の戦闘は継続しているわけで。

「2人とも、殴っては非殺傷設定が効かんぞー!」

「解っけど、はいそーですかと言えるほど魔法に慣れてねーんだ!」
「家族を護る為に、戦う事は避けられそうにない。ならば、自身が使え
る力を使うまでだ」

お姉様に注意されてる八神ヴィータと八神シグナムは、魔法に慣れ
てない設定通り、物理中心でオハナシしてる。もちろん、この光景や
会話も記録中。必要とあらば提出する。

こんな感じで、最後に残ったのはマッシュルームみたいな髪型の、
比較的貧相な体格の男1人。

「我等と偽り、無用な騒乱を起こした理由を吐いてもらおうぞ。」

封印は任せるぞ、旋棍の」

「はい、任せれます」

そんな感じで手際よく封印しゅうしんは行われてくけど、理由はなかなか喋
らない。

襲撃者の両手両足の骨が折れた頃、武装局員が到着の様様。

ちなみに、八神はやては早い段階でシャマルとザフィーラに連れら
れて家の中に戻ってる上に、防音結界も完備。オハナシからは隔離し
てあるし、その間は証拠になるような記録もしてない。

「……時間切れか。旋棍の、頼む」

「はい、治療と封印ですね」

ちよつと口元が笑ってるマッシュルーム頭の前で、旋棍の騎士が治
療魔法を使つて。

服はともかく、肉体的な傷はあっさりと完治。ついでに、封印完了。

「……は?」

笑つてた口元が、凄い勢いで引き攣つてる。

拷問の物的証拠と、魔力の消滅。思つてた水準と違う、とか考えて
そんな雰囲気。

「さて、後は時空管理局に任せるべきか。

その前に……お前がここの責任者か?」

黒剣の騎士が、お姉様を見てる。

内情を知っていると笑いしか出てこないけど、外見上は大真面目。

ここからは、改めて記録を再開。

「ああ。撃退の協力に感謝する」

「いや、我等を偽装していた以上は、何らかの事情に巻き込んでしまった可能性もある。

感謝される謂れは無い。むしろ、謝罪せねばならんやもしれん」

「それでも、こいつらが狙ったのは私達だ。助けられたという事実は変わらんさ。

だが、偽物と言っていたが、お前達は有名なのか？」

「姿はともかく、名と外見のイメージだけは伝わっているようだ。

素顔を知られていないという点を無視した姿だが、見て判りやすい黒いバリアジャケットやデバイスは意識している様だし、名乗った以上は偽物を気取っていたのだろう」

黒の騎士団は顔の上半分を隠す勢いで展開してるサングラスやらバイザーやらで、素顔を隠してるし。

いくら認識障害をしていても、本物がすぐそこにいるから、これ以上は見せられない。

「そうか……似ている様には見えんがな。

とりあえず、この馬鹿共は管理局に引き渡せばいいのか？ 情報を

取りたいなら、何人か持って帰っても構わんと思うが」

「そうしたいのは山山だが、問題が大きいだらう。

残念だが、今回は見送りだ」

口元が笑ってる、黒剣の騎士。

お姉様も笑ってるけど、お姉様と私達でやってる茶番劇、記録用。

こんな事を言っていたと記録を残せば充分。

尋m……質問中の記録は残してないけど、そんな事もあるさ。

「済まない、遅くなった……君達は？」

というわけで、武装局員到着。

その目は、黒い2人に向いてる。

「我等の偽物が現れたと聞いて、確認ついでに捕縛しに来た。

ミッドチルダの陸の連中に黒の騎士団について聞けば、おおよその事は解るだろう」

「そ、そうか。協力を感謝する」

武装局員の隊長が、ちら、とお姉様を見てる。

本当に協力者と判断して良いのか、迷ってる模様。

「こいつらの無力化に協力してくれたのは間違いないぞ。

魔力も封印してある様だから、質量兵器やらを持っていない限りは安全……だな？」

「ああ。但し、封印は2週間程度で自然に解除される。

それ以上の期間を無力化したいなら、別途対策が必要になる」

「だそうだ。ミッドの方で知られている人物の真似をしていたようだし、今回も管理世界の人間が関わっているのだろうか。」

調査は任せていいのか？」

「法的な部分については、全力で請け負おう」

隊長が胸を叩いてるところに、結界に新しい侵入者あらわる。

まあ、今の八神ヴィータにあまり似てない、大人モードを使った戦槌の騎士風のチャチャなんだけど。

「アタシ達のニセモンはどこだー」

道路を少し陥没させながら着地すると同時に、吠えながら戦槌ヴァイルヘルムを構えている。

意図的だけど、物凄く空振ってる。

「遅かったな、戦槌の。」

見ての通り終わっている」

「……何だ、せつかく来たのに無駄足かよ。

アタシは馬鹿共の調査に戻る。じゃーな」

というわけで、顔見せと次元転送が終了。

武装局員のぽかーんとした顔は、ちよつとレアかも。

「では、我等も戻る。機会があれば、また会おう」

黒剣の騎士と旋棍の騎士も、次元転送で姿を消して。

残るは倒れてる襲撃者達。

「さてと、早めにこれを捕縛してくれ。」

もたもたしていると、私達がやってしまうぞ?」

「あ、ああ、済まない。」

これ以上手間をかけるわけにはいかない。速やかに終えよう」



「やれやれ。もう、こんな事が無ければいいんだが」

襲撃者を武装局員に引き渡した後で。

とりあえず汗やらを流そうという事で、みんなでお風呂、いん・別荘。

八神チャチャマルと八神チャチャは留守番兼就寝の準備で来てないし、成瀬カイゼとザフィーラは男風呂だけど、何もしてない八神はやてやヴィヴィオもいる。

「時間差での攻撃は考慮しなくても良いのですか?」

1度目の攻撃を凌いだ後の気の緩みを突くのは、使われやすい戦術ですよ」

まだ表に出れないヴィヴィオは、ちよつと困った顔をしてる。

あまりあってほしくないけど、ありがちな戦術。

だけど。

「転移反応は無いし、残存戦力も遠隔での監視も無いようだから、大丈夫だろう。」

武装局員は警戒態勢を維持しているようだし、襲撃されてもチャチャマルとチャチャがいる。最悪の場合でも、あいつらの実力で撃退出来ないという事は有り得んな。

それより、地球の言語やらの習得は大丈夫か?」

「順調ですよ。そうですね……」

普通の会話なら、日本語と英語とノルウェー語で出来ます。今も翻訳魔法は使っていませんよ」

確かに、会話に関しては魔法の補助は無くても大丈夫になってる。

専門用語が飛び交うなら別だけど、日常会話が問題ない水準なのは保証。

「……まだ20日くらいじゃないのか？」

ロリコン
変態から学んだ分があつたとしても、随分と早いな。記憶を書き換えるなんて手段は取っていないはずだな？」

ファンタズマゴリア
「幻想空間を完成させていた事を忘れていませんか？」

父様も術式を知っていましたし、チャチャさん達の支援もありますから。意識だけであればここまで思考加速が出来るというのは驚きです」

「……チャチャ、何倍でやっている？」

学習中は24倍で、エヴァンジェリンス・リゾートと同じ比率。途中解除も可能だから、割とお手軽。

今回は言語の習得や文化の知識が目的だから、肉体への影響や物理的な現実性は無くていい。下手に時間をかけるよりも、迅速な習得が優先だから採用。

予め資料を作っておく必要はあるけど、私達も入れるから、時間加速型の別荘より有用。

「今回に関しては理想的ではあるか。ただ、使い過ぎると体と頭のリズムが狂うから程々にな。」

その様子なら、そろそろ日本に呼んだ事にしても大丈夫そうだし、会社や法的な手続きを始めるか。立場は説明済みだと思うが、私の会社での補佐役で問題無いな？」

「はい、大丈夫です」

「お、遂に家族が増えるん？」

まだ部屋はあるし、大丈夫や。というか、セツナさんはこれを見越して部屋を開けてたん？」

「え？ いえ、こんなの予想出来ませんよ。」

でも、私は本当に中学生でいいんでしょうか……あまり役に立てている気がしないですし」

「その体は、間違いなく中学生相当だろうに。」

それに、襲撃された際の最前線で頑張ってくれているのは、力を隠している私達にはとても有り難いんだ。役に立っているんだから、あまり卑下するなよ」

「はあ……」

A S編30話 絆の形

そんな感じで、ユーノ・スクライアとプレシア・テスタロッサによる調査が進められて。

中間報告に見えるモノも適当に提出して成果が上がっている事を示しているからか、政治的な圧力も弱く。

そんな感じで表向きは順調に、アースラが地球に到着した。

「そろそろ、情報を纏めて報告書を提出する頃合いかしらね」

地球側の纏め役という立場に立ったリンディ・ハラウンが、お姉様とプレシア・テスタロッサと一緒に、打ち合わせ開始。

「というか、今からすべきことの確認中。」

「そうだな。早めに管制人格を起動したいし、その為にも、表立って蒐集するための建前を準備したいところだ。」

話を通した後、即というわけにもいかないだろうが……」

「蒐集は、あとどれくらいかしら？」

「300ページは超えているから、起動の前提はもうすぐ整いそうだ。」

なのはとフェイトでかなり稼げるだろうし、残りは、手頃な魔力を持っている人物から蒐集すれば充分だろう」

「フェイトから蒐集するつもりなのね。」

何かあれば、即座に敵対する事になるわ。解っているの？」

プレシア・テスタロッサの眼光が怖い。

親馬鹿が極まってる。

「心配するな。意図的に再生不可能なレベルまで蒐集した2人以外は、特に後遺症も出ていない。」

ユーノ、馬場、上羽の3人については、魔力量の増加も確認出来たくらいだ。

危険性が無いとは言えんが、悪い事ばかりでもないだろう？」

「あの2人だと、進んで協力してくれそうと言うか、話さなかったら拗ねそうですらあるし……強制や依頼にならない範囲で、話をしてみましょう。」

それと、犯罪者対策と言っていた件ね。局員や無関係な一般人を卷

き込まないという意味では、公然と蒐集するには最適だけれど……関係各所を説得する時間は貰えるかしら？」

「その程度の猶予はあるぞ。問題無い」

というわけで、管制人格の起動を目指して蒐集する事が必要、という報告書を提出する事に。

打ち合わせから2日後の土曜日。高町なのはとフェイト・テストアースラの医療施設で2人を蒐集。

翌日の夕方まで、2人はベッドで仲良くオベンキョウの時間。ここしばらくは魔法の練習に時間を取られ過ぎてたし、成績やらの事を考える必要な事。

同時に、お姉様はシルフィ・カルマンやマリエル・アテンザと共に、レイジングハートとバルディッシュの魔改ぞ……もとい、強化に着手。カートリッジシステムの搭載と、それに耐えられるフレーム強化が中心。細かい点は、2機の意向も取り入れながら調整する予定。必要と判断した部品は既に取り寄せてあるし、全力を出せない脆弱性など許さない。



「さてと、時間に余裕も出来たし……少し置き去りにし過ぎた件の消化と、状況の整理をしておくぞ」

夜、別荘に来たお姉様。

やる事は、要するに報告会。

まずは、何から？

「アコノは何も言っていないが、本当に影響は出ていないのか？

話した感じも、ほとんど変化は無いが……」

精神的な揺らぎは、大きくなってる感じがする。

表には出てない。

封印が長かったから、感覚が戻るまでに時間がかかると予想。

八神はやてやアリシア・テストアロッサと同じく、機能訓練が必要な

のかもしれない。

「……突然感情的になるよりはいい、とでも考えるべきか。ある程度感情面をつついて、様子を見ながら対処するしかないな。

特典やジュエルシードの解析は？」

進んでない。

ジュエルシードに記録されてる術式自体は、欠陥品ばかり。誤動作の結果を予想するのは困難。

特典行使時に感知出来た範囲の魔力の動きを再現してみても、それらしい効果は現れず。

手応え的に、肝心な部分が感知出来てない感じ。

「まあ、そんな事だろうと思った。

私達の感知能力に制限がある可能性は、エイミィに亜美を調べてもらった時に否定的な結果が出ているし。未知の何か、もしくは特典自体に妨害処理が含まれているんだろうな」

きつと、そう。怪我の治し方も意味不明だったし。

研究は進めるけど、ジュエルシード自体は魔力タンクとしてしか使
い道が無いかもしれない。

自律制御だけでも可能になる様に、制御AIは矯正中。基本的な魔法も少し追加してみた。

普通の魔法の制御自体は、問題が無いわけじゃないけど、それなりに可能になってきた。

「実験用だとしても、酷過ぎるな……元々私達が入れていた魔法すらまともに発動出来んなんで、何をやりたかったのやら。」

危険物繋がりで、スカリエツティや最高評議会の動きは？」

ジェイル・スカリエツティ一味は、人の少ない管理世界にある施設へ移ってる。

嬉しそうに杉並英春の体を弄りまわしてるけど、それ以外は平和。

聖骸布の件で、ギル・ガームスが何でそんなことしたんだとか騒いだりしてたけど、最高評議会の意向だったと言われてそれ以上の追及は諦めてた。捜査も妨害される予定だったのだがね、と言ってたから、カリム・グラシアの行動力は予想以上だったらしい。

その最高評議会スポンサーは、常に色々やつてる気配があるから、変化がよく判らない。ギル・グレアムやリンディ・ハラオウンの監視を強化しようとする動きがあるから、そっち方面に目が向いてるのかもしれない。

「スカリエツティは平和か。最高評議会は……直接的な手出しをしてくる様子が無いなら、まだ藪を焼き払う必要も無さそうだな。」

聖王教会は落ち着いたか？」

少なくとも、カリム・グラシアを問題視してた一部のお偉方は沈黙した。

上層部に取り入ろうという動きを見せず、むしろ中央から離れた事で、安心した人がそれなりにいたらしい。役目を終えたから潜伏するのではと心配する声も残ってたけど、闇の書の件で潜伏が不可能になり、現地の重要人物であるお姉様とそれなりに仲良くなってる実情を無暗に突くわけにもいかず、矛先をどう向けていいか困ってるという現実も。

騒いでた人の側近に、最高評議会の息がかかった人が混じってる気配がある。踊らされた人もいる模様。本気で内通を心配した人と踊らされた人は、半分ずつくらいかも？

「立場や期間から見たら異常な功績や状況だから、疑うのも解らんではないが……だから無理はさせるなど言っただ。それでも、それなりに落ち着いたならまあ良しとするしかないか。」

次だ。関係者の訓練はかなり進んでいるようだが、評価するほどの程度になった？」

主は、全力ならSSが見えてきた。曙天の主としての才能と基礎技術は充分。あとは経験と慣れと応用という段階に踏み込みつつある。

陸戦魔導師として訓練してるのは、馬場鹿乃と上羽天牙がCに相当。

ヴィヴィオは飛ぶのが若干不得手で、聖王核と思われるものは存在するけど非活性。本来の技術と魔力では陸戦のS相当と思えるけど、義手ではない自分の手の感覚に慣れてなくて苦戦中。実戦を想定した場合A A相当まで落ちるかもしれない。

空戦魔導師は、成瀬カイゼ、セツナ・チェブルー、高町なのは、フェイト・テストロッサがAAA相当。魔力的にはセツナ・チェブルーがSに達してるけど、まだ使いこなせてない。

八神はやて、真鶴亜美、長宗我部千晴、夜月ツバサは、補助や自己制御に特化。ランク付けは微妙だけど、基礎技術のレベルはDからBと予想。

黒羽早苗は、プレシア・テストロッサからデバイスをプレゼントされて、今は料理の片手間程度にのんびりと基礎を練習中。技術レベルとしてはEかFになる。

高町恭也、高町美由希、月村忍、月村すずかは、才能とやる気の恐ろしさを見せ付けてる。既に魔法だけで評価してもDランク前後。今のところは高町恭也が一步リードしてるけど、高町美由希も伸びてきてる。

「……流石遅咲きの天才、か？」

カートトリッジシステムとの相性だけで言えばかなり高いレベル。この点だけなら、お姉様や主に匹敵する。異常効率を叩き出すセツナ・チェブルーは別次元だから、比べちゃいけない。

八神はやて、高町なのは、高町恭也、月村すずかが少し離れて続き、月村忍やヴィヴィオはもう少し遅れる感じ。

フェイト・テストロッサや長宗我部千晴は八神シグナムや八神ヴィータと同レベル。エイミー・リミエツタと月村忍の間くらい。

真鶴亜美と馬場鹿乃はエイミー・リミエツタやザフィーラと大差ない。

適性が低めの八神シャルマやアルフ、成瀬カイゼについては、カートトリッジを使うとしても切り札としての利用に留めるべきかも。

上羽天牙のカートトリッジ使用は非推奨。アリサ・バニングスはお察し下さい。

「……だいぶ細かく調べられるようになってきたな。細かく調べられてないのは？」

プレシア・テストロッサは大魔導師らしく高水準。リンディ・ハラオウンも適性が高そう。美容効果に惹かれてか、この2人も高町家で

の訓練に顔を出したけど、本格的にはやってない。

クロノ・ハラオウンはそれなりみたいだけど、忙しくて訓練に参加してない。

黒羽早苗は使わない方がいいみたいだから、使わせない。

この4人については本格的に訓練してるわけじゃないから、細かい評価は追々。

チクアーブは分身するから評価が難しいけど、月村忍と同水準と判断して良さそう。

「やはり、外部の魔力を実用で使える連中は素質が高めか。

エイミイやリンディ達から見た、この技術の評価は？」

美容効果への期待を除外しても、意外に受けがいい。

特にリンディ・ハラオウン。高ランク魔導師の選民意識を崩す可能性を見出してる。

雑談としてカリム・グラシアにも概要を説明してたし、その場にしたシャツハ・ヌエラとシルフィ・カルマンがものすごい勢いで喰いついてた。

「……その3人とマリーも、そのうち別荘に押しつけてきそうだな。

次だ。ヴィヴィオの戸籍もそろそろ用意すべきか？」

今は故郷に設定した北欧の方で、過去の情報を作成中。ばれた時に色々危険だから、関係者の記憶や紙の書類まで含めて、念入りにやってる。

併せて、仕事で日本へ渡航するための前準備を開始済み。でも、ダイニングの椅子が足りないから、テーブルの広さと併せて何とかしないと。

そういえば、あっちの政府から話の通じる担当者を付けられたから色々と楽だったけど、ちよつと注意された。

地球で魔法を公開しないのは、時空管理局の介入を予防するためという意味もあるらしい。

「ちよつと待て。つまり、独立を維持するために、政府もグルで……という事か？」

真偽は不明だけど担当者はそう言ってたし、嘘を言ってる様子は無

かった。

ヴィヴィオの写真を見て嘖き出してたから、それなりに管理世界側の知識がある人物なのは間違いない。

現実的には、管理世界入りは難しいと予想。地球の魔力持ちの少なさが障害になるはず。

これをひっくり返し得るのが、気に関する技術。

「……うん、気に関する技術も、高町と月村、それに転生者辺りで止めよう。カートリッジの補充の都合で簡単には広まらんとするが、土足で踏み込まれる理由にされるのは嫌だからな」

そう思って、関係者に念を押してある。

でも、ロストログアに関する件もあるから、時空管理局と無関係と
いうのも良くないらしい。

アースラの現地拠点程度の、必要に応じて協力する関係が望ましい
と言ってた。

あちらの政府としては、現状の関係を維持する事を希望してる。

「そうか……今のところは、問題にならないと見ていいな。」

忍も管理局と関係があった以上は、ある程度は弁えているだろう
し。それでも、一言言ってくればいい物を……」

ジュエルシードの時期は2重スパイに近い立ち位置だったし。

不用意に忠告して関係をこじらせるより、一步引いた位置から周囲
を固めつつ手綱を取る事を選んだのかもしれない。

戸籍関係も、ある程度相談しながらやってたわけだし。

「やれやれ、腹の探り合いはやはり好きになれんし、とつとと終わらせ
てのんびりしたいんだが。」

それで、私達側でない転生者連中の現状は？」

東渚、引き籠りなう。自分が特別だという根拠の大部分を失い、情
緒不安定。

間宮萬太は、一般的な生活に戻りつつある。力は失ってないけど、
精々包丁代が不要になる程度で、あまり有用な力じゃない。原作に関
係する場所や人物を避けるような行動を取ってるから、介入は諦めた
可能性が高い。

金子狗太、引き続きミッドチルダ地上本部で拘留中。既に一種の精神異常者と判断されていて、そろそろ刑務所に移動し、更生プログラムを受けることになる模様。裏側的には特殊な変換資質が魅力的らしく、利用する気はあっても手放す気は無さそう。

ギル・ガームスは、順調にジェイル・スカリエッツィの後付良心回路化、ついでに料理人化してる。その結果ナンバーズの一部に、生活環境、特に食生活が改善されたことを感謝されてる。素人の料理だけど、それでも改善されるレベルだった食生活に、昔のお姉様を思い出して涙が止まらない。

杉並英春は、自分の足で立つことは出来るようになった。放漫かつ傲慢な性格は、チンクとギル・ガームスが、鉄拳と食事抜きによる制裁を武器に矯正中。本人の希望で小ぶりの剣を貰っていて、剣を振る時だけ体の動きが良くなるのは、恐らく剣術の才能の特典によるもの。普段はまだ、ほぼ全ての行動に補助が必要な、重度の要介護者。「勢いで人を殺して逃亡した結果、キレイなギルガメッシュになったのか……やっぱり、一度痛い目にあつた方が真人間になりやすいのか？」

それで、杉並は今のところ、まともな生活も無理なんだな？」

剣術関連以外について、恐ろしく学習能力や適応力が低い。剣を構えたような体勢での足捌きは出来るけど、普通に歩くのはぎこちない。

バトンでもいいから、何か棒を構えて移動する方が早いつて、人としてどうなんだろう。

前世の記憶や経験があるはずなのに、箸の扱いすらナンバーズや八神ヴィータに負けてる。

魔力の扱いも同じ傾向、量はあっても技術が伴わない。今なら上羽天牙でも勝てる。

「……相変わらず転生特典が理解出来んが、そういうものだと思って放置すればいいか。」

積極的に排除する必要もなさそうだし、現状維持だな」
了解。

「あとは、無限書庫か。少しはまともにも動くようになってきたか？」
処理能力の増強に手間取ってる。情報量が多すぎて、生半可な強化では追いつかない。

試験的に、最近のミッドチルダの情報に絞って、検索準備を整えてるところ。手応え的には、まあまあ。今後の進展に期待。

必要な情報は集まってるし、焦らず良い物を目指す予定。

空間生成と自動収集の部分はお姉様製じゃないせいか、かなり厄介。建造物ごと取り込む術式も存在してるし、古い区画ほど入り口から離されて入り組んだ迷宮の様になる実装になってると思われる。

恐らく研究目的と思われる、詳細な資料がある魔物等を映像化させる術式の存在も確認済み

要するに、お化け屋敷のノリで行う迷宮探索ごっこが可能な魔法が揃ってる。

正確な実装内容を把握するためにも、解析を進めてる。

「そうか……あれを作った連中は、何を考えていたのやら。
時間がかかっても問題ない、安全性優先で頼むぞ」



「……それで、何故私が違法研究所を探る事になってるんだ？」

翌日、とある無人の管理外世界。

そこに存在してる大きな建物が木の間から見える丘に、お姉様がいる。

傍に居るのは、八神シグナム、八神シャマル、セツナ・チェブルの3人。

こう呼ぶ以上は、黒の騎士団ではなく守護騎士のスタイル。

「チャチャさんが、このメンバーがいいって言っていましたよ」

「記録を一切残させず、最終的に完全消滅させる事が前提だと言っていたが……」

主の意向にも沿わん。止めるか、方針を変えるなら早めに頼む」
セツナ・チェブルと八神シグナムはデバイスを起動し、いつでも

攻撃可能な態勢。

「だけど、あまり気乗りしてない様子。

「とりあえず、気付かれぬ程度に結界を準備しておきますね。

情報が洩れたら大変ですし」

八神シヤマルが、この場から逃げるように木々の間を飛んでいった。

目的は強力な捕縛結界の準備とかなだから、作戦から逃げたわけじゃない。

「私は、念のため警戒しておこう。」

「どうするか決まったら知らせてほしい」

八神シグナムも同じく、建物の方へ。

「というわけで、残ったのはお姉様とセツナ・チェブルーの2人。」

「……そもそも、私は違法研究所を襲うから来てほしいとしか聞いていないぞ。」

「いつ完全消滅という話になった？」

「ええとですね、私に伝えられてる情報だと、ここに烈火の剣精という人がいるそうです。」

「剣を使う私とシグナムさんが、偽らない姿で救出するべきだ、と」

「はあ？　ちよつと待て、ここでアイツを回収してしまうのか？」

「確かに、意味はあるだろうが……はつきり言えば、シグナムが最も相性がいいはずだぞ。」

「情報を漏らさないために完全消滅という意図は理解出来たが、何故私とお前が呼ばれた？」

「あ、やっぱり原作関係なんですね。」

「無限書庫で情報を見付けて、裏付けの調査まで終わっているそうです。」

「それで……ええと、踏み込む前に、ちよつとお願いが、ですね……」
セツナ・チェブルーの目が泳いでる。

「がんばってー。」

「どうした。怖いのか？」

「怖い……そう、ですね。確かに怖いです」

「以前居た、命がけの世界を思い出すか？」

それとも、人と命のやり取りをする事に慣れたくないか？」

「それもありますけど……少し違います。」

死ぬのが怖いと言うよりは……ええと……そうですね、別れるのが怖い、ですね」

「別れが、か？」

お姉様が、不思議そうにしてる。

不死や実力について明確には伝えてないけど、隔絶した実力を持つお姉様じぶんに向かって言う事では無いだろう、とか思ってたそう。

「はい。死ぬこと自体は、まあ仕方ないかと思えるんです。」

本来は限りある命ですし、転生なんてものも経験しています。前の世界で戦っていた時も、また次があるんじゃないか、なんて気楽に思っていたんですよ。

でも、もし次があっても、きつとまた一人なんです。

仲良くなった人も、離れたくないと思った人も、そこには居ないんです」

「それはそうだろう。」

例え同じ世界に生まれ変わったとしても、時代が変わっているだろうしな。

それ以前に、会えたとしても生まれ変わったと信じてもらえるか怪しいし、信じられたとしても以前と同じ関係にはなれないだろうよ」
「ですから、離れたくない、と思うようになってですね。」

それで、えつと……これって、弱さ、ですか？」

「離れたくないからこそ頑張れる事もあるだろう。」

強さの源泉にもなるものだ、弱さとは限らんよ」

「そうですか、良かったです。」

この時点で笑われたり拒否されたりしたら、どうしようかと」

セツナ・チエブルーは、ものすごく安堵してる。

思わずため息なんかついて。

「いや、人として健全な感情だと思うが？」

どうした、お前らしくないな」

「えつと、それで、その……」

エヴァさん、私を眷属にしてくださいっ！」

「……は？」

お姉様に、豆鉄砲が命中。

鳩の様にぽかんとしてる。

「ですから、私を眷属にしてくださいっ！」

「ちよ、ちよつと待て、誰から聞いたんだ！」

「そもそも、意味を解っているのか!？」

「えーと、チャチャゼロさんです。」

エヴァさんの一部になって、実質的に不老不死になる、ですよ〜？」

「あああいつなら確かに知っているというか何故お前はそんなものを望むんだ!？」

「息継ぎぐらいいしてください。」

何故って、言いましたよ。離れたくないからって」

「本当に理解しているのか!？」

不老不死なんだぞ！ 死ねないんだぞ!？ そのくせ私が殺す事は抵抗出来ないし、私が死ぬ時は道連れなんだぞ!？」

「八神の人って、はやてちゃん以外は全員不老不死みたいなものじゃないですか。それに、エヴァさんが殺す気になったら今でも抵抗は無駄ですし、エヴァさんが死ぬ時は結局別れる時ですし。」

「親しい人と長く一緒に居たい、というのはダメなんですか?？」

「親しいって、従者達を見ただろう！」

「あんな狂信者になりたいのか!？」

「従属属性の付与、ってやつですよね。」

チャチャちゃんが、親愛属性のものを作ってたって聞いています。親愛なら今とそれほど変わらないですし、身近に感じられるようになるなら、むしろばっちりこいです」

「人間じゃなくなるんだぞ！ 人間として真つ当な生き方が出来なくなるんだぞ!？」

「そもそも翼がある時点で、人間じゃないですし。」

それに、結婚して子供を産んで、なんて生き方は無理ですよ。エヴァさんと同じく感性は男ですから、男に抱かれるのは全力で拒否し

たいです。

普通に仕事をしながら生活するとかならエヴァさんもしていますし、別に問題無いですよね？」

「成長する事も出来なくなるんだぞ!」

「大人になって男に言い寄られるのもどうかかなーと。物語の人物という事は、大人になると美人になりそうでしょう？ 大人モードを試した時も、これは無いと自分で思っちゃったくらいに綺麗でしたし。」

今の姿だと軟派男を小僧かロリコン呼ばわりすれば何とかかなりまし、大人の姿が必要なら大人モードが使えます。

魔力は既にSクラス相当だそうですし、少しくらい減っても問題ありません。これ以上はあまり伸びないだろうって言われていますから、こっちの成長は気にしなくていいみたいです。

それに、月のものが無くなるのも魅力的です。思っていたより辛くて……」

「……妹達もどこまで入れ知恵したんだか。」

私の眷属になるという事は、私の所有物になるという事だ。

私は数十億の死体の上に立つ虐殺者で、草を巻る様に命を刈り取る事が出来る破綻者だ。

今までの自分を捨て、危険人物の仲間になる事を理解しているのか？」

「魔物と戦っていた世界の私は、既にこの手から零れ落ちました。」

その後は、エヴァさんのおかげで今があります。今の私が捨てられるのは、エヴァさんから貰ったものしかありません。

それに、仲間を見捨てて生き残ってきた私も、現代日本の価値観では異常者気味なんです。最後は私がしんがり殿をしましたけど、それ以前に何回か仲間を犠牲に逃げています。それを当たり前として受け入れていたので、間違いありません。

私も、人の事を言えない程度には、普通じゃないんです」

「だからと言って、より危険な道に進む必要も無いだろう？」

「私も転生者で、人外で、性別が異常なんです。普通の道なんてものが見えるわけがないじゃないですか。」

1人で道を探すより、エヴァさん達と一緒に探した方が、きっといい道が見付かります。道が少しくらい険しくても、1人で歩く事に比べれば大したことじゃありません。

それに、私を知る限り誰も殺さず、仲間を助けようとしているエヴァさんは優しいです。その優しさを無くさせないため、それに、私がこれ以上仲間を見捨てないためにも、傍に居させて下さい」

真剣な目でお姉様を見つめる、セツナ・チェブルー。

それをしばらく正面から見つめ返してたお姉様は、大きくため息をついた。

「まったく……返せるものが思い付かないからといって、自分で返す必要は無いだろう?」

「いえ、一緒にいられる時間を貰おうとしているんです。

頑張って自分が望む道を探したつもりなんですけど……」

「そうか。お前にとっては……そうなんだな」

(お前達も関わっているだろう。何故セツナを選んだ?)

本人の説明通り。

元々は、セツナ・チェブルーがチャチャゼロに相談したのがきっかけ。

曰く、友人を欲しがっているお姉様と、出来るだけ長く一緒にいる方法は無いか。

それに対し、チャチャゼロが眷属という方法を教えた。

私達は問題点を説明。全てを受け入れた上で覚悟を決めたから、舞台を整える事に協力した。

お姉様には、永遠を共に在ろうとしてくれる友人を拒否してほしくない。私達は意思や覚悟の確認はしたけど、拒絶は出来ない。する理由が無い。

主とチャチャマルも眷属化に賛同してる。守護騎士達にも説明して理解はしてもらってる。

(そうか……ここに来た時点で全てを納得済みで、全員が結託済みか。道理でシャマルやシグナムが離れるわけだ。チャチャゼロがやらなかったのは、セツナ自身に私を説得させるためか……)

親愛属性の眷属の、制限と手法は？)

基本は服従属性と変わらず。

差異は付与する属性の差異に伴う魂の改変内容。それと、お姉様や私達が強制的に魂に干渉して、全ての記憶を見るのが無理になる事くらい。

属性もなるべく抑えて、ある程度の親愛の情が湧き、嫌悪感が薄まる程度になってる。元々仲が良ければ効果が見えない程度のはず。

本来の眷属と違って、お姉様が全権を持つ所有物ではなく、ある程度並び立てる仕様に。これはきつと、書の主にする術式を参考にしたせい。だから、剥奪後に親愛属性の眷属として再構成するのは無理。

術式は結構大きいから、別途転送。使い方は眷属化と同じ。

(……そもそも、眷属化をした事が無いんだが？)

リーナとアコノすら、やったのはチャチャゼロだ)

あ。

えーと、リンカーコアと魂を専用術式で蒐集して、改変と同時に駆動用のパスを作るために加工する。同時に体の情報も確保。

加工が終わったら吸収して、眷属や従者用の領域に格納。その後魔力と制御用のパスを元の体に繋げて完了。

体が破損してるなら一旦破棄して再生成するのが手っ取り早いけど、今回は不要。

大雑把な流れはこんな感じ。

(そうか、解った)

「セツナ。リスクを理解した上で、私の眷属に、本当になりたいんだな？」

「はい」

「それは、いつがいい？」

「可能であれば、今、ここで。」

うじうじしていても仕方ありませんし、何かあってからでは遅いです」

「ここが、ポイント オブ ノー リターンだ。

眷属になった後は、私が崩壊するか、私がお前を殺す気にならない

限り、消滅出来なくなる。

完全に生殺与奪権を握る事になるが、本当にいいんだな？」

「お願いします」

「……解った」

お姉様が、ついに納得……はともかく、説得を諦めはした。

親愛属性の眷属化術式、起動を確認。

属性付与、想定誤差の範囲でクリア。軀体制御用パスの生成完了。

肉体構造の解析及び記録完了。

肉体とのリンク開始を確認……問題なし。

「……あれ？」

えーと……もう、終わっちゃいました？」

「ああ。不老不死になった気分はどうだ？」

「うーん……気持ち魔力が使いにくい気がしますけど、それ以外はよく解りません。」

でも、何だか安心感があります」

本体がお姉様に取り込まれて体を遠隔操作してるようなものだから、最初の違和感は仕方ない。

体を維持する魔力も、今はお姉様が供給してるし。

「親愛属性の付与に、そんな効果は無いと思うが。」

身近に感じる事の副作用か……？」

「いえ、前の世界みたいにこの身を盾にしても、別れなくて済むようになっただんです。」

そうですよね？」

自己犠牲な考え方をぶっちゃけちゃった。

お姉様は、そういうのはあまり好きじゃないのに。

「……そうだが、そんな事をさせる気は無いし、お前を盾にしてどうにかする必要があるほど私は弱くないからな。それは覚えておけよ？」



その後は、さくつと違法研究所を襲撃。

意識が朦朧としてるアギト（仮）を確保した上で、所内に居た人から容赦なく全力蒐集。魔力は全て闇の書へ渡し、お姉様が全員の魂を確保。おまけとして記憶の情報もゲット。

軽く確認した範囲では、アギトという名は痕跡すら無し。

研究所自体を生成空間に取り込んで紙やコンピュータの情報等々も丸ごと頂き、ついでに存在した証拠を消去。仮に撮影しても、機材そのものが建物と一緒に別荘行きだから漏れる心配は無い。

「で、こいつを治療するのは当然としても、だ。

本当にこの言い訳でいいのか？」

問題無し。

次元を超えた助けを求める声が聞こえて、場所を確認して転移。

付近でアギト（仮）を発見して、治療の為に連れて来た。

出発前にセツナ・チエブルーが囑託魔導師として、気になる声を仲間と一緒に調べるといふ報告をして、該当する管理外世界の情報をアースラから貰ってる。行動順も問題無い。

建物跡も、爆発の影響で抉れたようにした。というか、実際に爆破した。アギト（仮）の発見場所は、少し離れた森の中という設定。

「……次元転送をどうやったかは？」

そこは、お姉様の技術とカートリッジで。

実際、それで来てるわけだし。

「まあ、そうなんだが……」

というわけで、帰還推奨。

早めに治療すべき。

番外：小話ズ その6

◆◆ ギルとスカの喧騒 (Axs編18・5話) ◆◆

とある、ミッドチルダからちよつと離れた管理世界の森の中。放棄された通信塔の地下、管理室に出入り口がある施設で。

「何でそんな目立つ事をしたんだ！」

おかげで家から追い出されちまっただらうが!!」

ギル・ガームスが騒いでる。

ちなみに、奪った聖骸布すら残して、ミッドチルダから逃げてきたとこ。

「スポンサーからの依頼でね。無視するわけにもいかなかったのだよ」

騒がれてるのは、ジェイル・スカリエツティ。

プロジェクトFの基礎を作った人物、戦闘機人を作った人物、多くの世界で罪を犯した人物。

原作でも色々な設定が出てるけど、見て判るくらいの、変態科学者。

「チクショウ、最高評議会の指示かよ。」

だったらもつと捜査を妨害しろよ……」

直接的には、レジラス・ゲイズの可能性もあるけど。

むしろ、ミッドチルダの地上だったから、そっちの方が妨害しやすかったはず。だけど、原作でもゼスト・グランガイツの捜査妨害を失敗してるし。

うっかり属性持ちのオツサン。それって誰得？

「突入情報のリークは間に合ったし、突入の遅延も行われたようだが、捜査も妨害される予定だったのだからね。」

聖王教会のお嬢さんは、なかなか優秀なようだ。仮に予言で情報を得ていたのだとしても、確信してから突入までの手際の良さと、思い切りの良さ。実に良い」

「聖王教会の予言持ち……まさかカリムか!？」

何でそんな重要人物が現場に出張ってるんだよ!!」

「力を認めない愚かな老人達と、有用性を証明出来ない子供だよ。せつかくの宝も、粗末に扱えば相応の価値にしかないものだ。」

「そうそう、前回君が気にしていた桜咲刹那とフェイト・アーウェルリンクスだが、今回は姿を見せなかったようだ。彼らの情報を渡されたが、見てみるかね?」

「ジェイル・スカリエッティが出してきたのは……アースラからの資料が基本?」

「本局に行ってから情報が多少増えてるけど、大きな改編は無さそう。」

「あ……ああ。って、有翼で出身世界不明の異世界渡航者と犯罪組織出身者!? やっぱりネギまじゃねーか!!」

「ふむ、君達の同類か。ならば、この者達はどうかね?」

「続けて出してきたのは、アースラから提出したもののコピー?」

「こちらは、編集もしてないっぽい。」

「ナギに木乃香に千雨の電子精霊に、イスカンドルにウェイバーもいるのか……」

「これって、エヴァンジェリンの大人バージョンか? 名前は……つ

て、八神かよ!」

「なるほど、この者達も全員そうか。」

「八神という名は、闇の書に関係する人物だったね」

「そうだけど……手を出すなよ?」

「それは君達の文化で言うところの、フリというものかね?」

「バカ! こっちは大真面目に言ってるんだ!!」

「この時期ならもう守護騎士もいるし、下手すりゃ闇の書の餌食なんだよ!!」

「ふむ。以前聞いた名を考えると、この者達だね?」

「ジェイル・スカリエッティが指したのは、お姉様の書類に小さく書かれた家族構成。」

「親戚として、八神はやてや守護騎士達の名や簡単な経歴が記載してある。ペット扱いのザフィーラの名は無いけど。」

「ああ、こいつら……って、日本出身? マジで?」

「現地の公的な書類は添付されていたようだ。レジアスに提出された以上、書類上に不審な点は見当たらなかったのだろう」

「……ありえねえ……エヴァンジェリンがイギリス出身で会社役員とか書いてあるし、こいつが何かやってんのか……？」

八神で同居してるってことは、介入する気だろうし……」

「あの危険物をどのように対処するのか、なかなか興味深いのだがね。」

やはり、調査を「すんな！ いくらクアットロが忍者みたくても相手が悪い！ そもそもここは食い物の確保も面倒なんだ!!」……ふむ、確かに食料の調達は重要か」

地球入りの優先順を下げられたからか、ギル・ゲームスが安堵のため息をついてる。

少々不便な土地柄で、近くに人が多い都市もない。見付かる率が低い代わり生活には不便な場所で、逃亡直後だから蓄え等も特にならない状況。

それなりに留まる気なら、生活環境は何とかすべき課題に見える。

「まあ良い、この様な場所からでも出来ることは色々ある。」

転生者とやらが、どこまでやれるか見てみるとしよう」

「え、えーと、手は出さないんだな？」

「当面は出さんよ。我々は、な」

「うーわ、手を出す気満々に聞こえるんだが……絶対だからな！」

◆◆ カリムの報告 (A s編 25. 5話) ◆◆

大騒ぎが終わり、正式に報告する内容がある程度まとまった後で。

カリム・グラシアは、家族との時間という事で、父親に連絡を入れた。

もちろん、ただの世間話という事はあり得ない。聖王教会への非公式な事前通知を兼ねてるはずで、それはお姉様についての話が中心。知識はジュエルシードによる記憶付与の可能性が高いとか、ベルカの文化がこの地に残っているわけではないようだと伝えてた。

それ以外の話の内容は、生活の状況や地球の環境についてが主になってる。

具体的には、魔法が公になっていない点に注意すれば意外に過ごしやすいとか、食事の質はなかなか良いとか、思っていたより管理外世界も悪くない、という評価をされてる。

「一番驚いたのは、オリヴィエ陛下にそっくりな方がいらした事ですね。」

こちらにいたベルカに詳しい方も、思わず声を掛けてしまったそうです」

「ほう。カリムがそこまで言うんだ、それほど似ているのか」

「ええ。義手ではありませんでしたが、それ以外は残された肖像画……一般に巡回している絵画ではなく、聖王教会に保管されているものと瓜二つです。」

本人と言われても信じてしまいそうなほどですね」

まあ、本人だし。

原作ヴィヴィオの大人モードに似なかつたのは、幸か不幸か。

少なくとも女性としては、微妙かもしれない。スタイル的な意味で。」

「それ程か。つまり、私にそのような人物がいる事を知らせたのは、下手な手を出そうとする者がいた際に牽制するためか」

「はい。あれ程似ておられるなら、考えの浅い者であれば良からぬ事を考える可能性もあります。」

本来であれば、その様な人物が存在する事も秘すべきなのかもしれませんが……」

「だが、今回の関係者でもあるなら、いずれ知られる可能性もある、か。解った、少し気を付ける事にしよう。だが、その人物に対する敬語は止めるべきだな。不要な騒乱を呼び込む元となろう」

「あ……その、本人からも止めるよう言われているのですが、あまりにも似すぎていて。」

どう扱ってよいものか、困っているのです。気安さに慣れてしまうと、聖王陛下への敬意も薄れてしまうような気がして」

その言い訳は、思わずやってしまう態度を正当化するものか、本心か。

でも、余計な憶測をされる理由になる態度なのは間違いない。指摘の内容は的確。

「聖王陛下の多くは、優しい方だと伝えられている。」

特にオリヴィエ陛下は、その御心と御身を犠牲に多くの民を守った事で、最も称えられる聖王陛下となられたお方。晩年は誰にも会われる事なく、最後には静かに姿を消したと伝えられているのだ。その決断は民の為であろうが、人として辛く、寂しい事であるだろう事は想像に難くない。

身近な存在として感じられる事を喜ばれはしても、嫌悪なさるとは考えにくいと思わんか？」

「そう……ですね。確かにそうかもしれません」

◆◆ ロツテとクロノ (Axs編28. 5話) ◆◆

「んじや、アタシはそろそろ仕事に戻るから。」

ネズミっ子は頼んだよ」

「ん、解った」

「ああ、僕もそろそろ戻ろう。」

ユーノ、あんまり無理するんじやないぞ」

「大丈夫」

無限書庫に来てから2時間ほど経過した頃。

リーゼロツテとクロノ・ハラオウンは本来の仕事に戻る事になった。

ユーノ・スクライアとリーゼアリアは引き続き作業を続ける予定で、お姉様と変態ポリコンも同様。

無限書庫から出た二人は、人気のほとんどない通路を歩きながら喋ってる。

「それにしても、アリアほどはエヴァンジュの事を嫌っていないんだな。」

もつと嫌悪してると思っていたんだが」

「ああ、あの女か。好きか嫌いかで言えば、嫌いだよ？」

「アリアにあんな事をしたし。でも……ちよつとだけ、感謝もしてる」

「感謝、なのか？」

計画を正面から潰しに来たんだ、感謝される要素はあまりないと思っていたが」

「父様の闇の書に対する気持ちや、どんな覚悟で計画を進めていたかはよく知ってる。

だけど、何も知らない女の子や、場合によっては故郷も犠牲にする可能性がある事を気に病んでいたのも知ってる。

それを何とかしてくれるなら、感謝しないこともないよ。交渉の方とか、気に入らない事も多いけどさ」

「確かに、あれはないと僕も思う。

だけど……いや、言い訳はしない。僕だって、それに加担した側だ」

「んじや、可愛い弟子の為に、アタシから言おつか。話を身内に止めた上で、被害らしい被害も出さずに、父様やアタシ達を止める方法を、他に思い付かなかった。

違う？」

「……正解だ。

その時はやり過ぎだと思っただし、口にも出たんだが、他に案を出せたわけでもない。

無理に止めたら、それこそアリアを傷付けただけで、何も解決しなかった……むしろ、状況が悪くなるだけだ」

「父様もアタシ達も、口先だけの相手を信じてみようかって思うわけがないしね。

それに、アタシ達が他の魔導師に強要しようとした事をさされただけだって解ってる。アリアだって、理解してるから手伝ってるんだし。

それでも、あの女は嫌いだ」

「気持ちは解るけど、妙な嫌がらせはやめてくれよ。

闇の書の対処は、失敗出来ないんだ」

「解ってるって。アタシ達だって馬鹿じゃないし、父様の悲願でもあるんだから。」

手は抜かない。馴れ合う気が無いだけ」

「充分だ」

うん、現状では問題ない。

でも、嫌われてるのは恐らく、お姉様と八神チャチャ。

今後は私達が表に出る事が多くなるはず。直接手を下した大人モードよりも、幼女モードの方が嫌悪されにくい可能性が高いと予想。

私達の無限書庫での活動は、幼女モードを基本に。

子供扱いで愛でられる可能性があるけど、ギスギスするよりは良い。

◆◆ 八神はやて① ◆◆

「はいはい、エヴァさんに質問や。」

えーと、エヴァさん達から見たら、ここは物語の世界に見える、って言うとつたよね?」

食事が終わり、のんびりした空気になってる時。

八神はやてが、お姉様に向かって手を上げてる。

「ん? ああ、言ったな。」

未来の情報をアニメ作品と言う形で見た記憶があるから、その世界に入ったような気になってしまいそうになる……という事は、説明したな?」

「うん、聞いたよ。」

それで色々調べてみたんやけど、状況的には二次創作ゆーのが似てそうや。んで、エヴァさんが転生オリ主でチート無双、みたいな?」

オリ主言うなし。

チート無双は、出来るだけに何も言えないけど。

「チート無双はともかく、オリ主と言わないでくれ。」

私はあれよりも、地に足をつける気があるぞ」

「でも、正統派の主人公じゃない事は確か。

表に出ないところで圧力をかけるとか、色々とブラックな事をしてる」

主のふいうち！

おねえさまは　こころ　に　だめーじをうけた！

「エヴァさんは、踏み台な人とはちよつとちやうし。ダークヒーローに近いんかな？

でも、頼もしい保護者さんや。これは間違いない」

八神はやての追撃！

でも、お姉様も正統派じゃない自覚はあるから、致命的なダメージじゃない。たぶん。

「綺麗事だけでは、どうにもならんことも多いからな。

好きで裏街道を歩んでいるわけじゃないんだぞ」

「大丈夫、童話ですら正統派じゃない主人公はいる。

強盗を襲撃して財宝を奪って金持ちになってめでたしめでたし、とか」

「アコノ……流石にその表現はどうなんだ？」

「人外という情報を省けば、こうなるはず。

ちなみに題材は桃太郎。財宝を被害者に返還したならともかく、奪って自分達の物にした以上、行為としては強盗以外の何物でもない。

アリババも盗賊から盗んでる。貧しい人に分け与えたのも、盗み切れず残っていた分だから同類と言える」

「まあ、そうだな。

桃太郎は確か、本来は大和の国の皇子が他国を攻め滅ぼす話だったと思うが……こつちはこつちで、どろどろした話だしな」

「あ、あかん、頼りになるけどレベルが高すぎや。

これはもつと、情報を集めんと……！」

「……そこでネットを使うのはまあいいとしても、二次創作にはあまりいい情報が無いと思うぞ？」

八神はやてが持つノートパソコンを覗き込みながら、お姉様が突っ込みを入れてる。

画面に映ってるのは、何故か理想郷。

「うーん、でも、普通の童話とかやと、蒔蓄が足りんし。」

「そうや、王道的な話には、どんなツツコミをするん？」

「王道的な童話、か……おじいさんおばあさんに育てられた若者が悪者を退治してお姫様と結婚してめでたしめでたし、という話でいいか。一寸法師がそうだし、RPG系のゲームだとありがちな流れだな。」

どう見ても王は政治に疎い田舎者の英雄を傀儡にする気だろうか、田舎者と支配者層の娘だと価値観が違い過ぎてすれ違いが多いんじゃないかとか、若者が相応の教育を受けていたなら育てた老夫婦は復権か復讐を狙う王族か貴族じゃないかとか、そもそもぽつと出の若者が対処出来るような相手を放置していたなら王や国として無能だろうとかあたりか？」

「失望した！ 夢のない未来に失望した！」

「……なぜ先生？」

◆◆ ゲーム ◆◆

お姉様の記憶にある、色々な情報。その元ネタを搜索。

「……で、スライムがどうしたって？」

正確には、スライムいじめ。

竜の試練に代表される、勇者や英雄の初期鍛錬法。

その行為を正面からそうだと言いつけるゲームは、古いけど新しい。

ちなみに、英雄の伝説。銀河とか付かない方の初代。

教育係の目を盗んでスライムをいじめに行く王子が、英雄になる物語。

「そんな話だったか……？」

次作で、英雄の息子も同じことをするらしい。

お姉様の記憶にある英雄の伝説とは違う。

もつと古い。

「……まあ、調べるなどは言わんが、程々にな。

というか、元ネタか……？」

◆◆◆ C M ◆◆◆

『俺は人間を食べるのをやめるぞ、徐庶！』

『吸血鬼もハマる美味さ。私立聖祥大学構内リラクゼーション棟、焼き肉徐庶苑』

『学生かどうかは興味ありません。吸血鬼、宇宙人、未来人、異世界人、超能力者も食べに来なさい』

「ぶっ!？」

あ、お姉様がお茶を嘔き出した。

まさかのコラボCM。

というか、何をやってる私立聖祥大学。

「あー……うん、徐々に奇妙な冒険と、涼宮ハルヒコの憂鬱はあったな。なら、あり得ない内容ではないか。

徐庶苑が学校内の施設なのは……」

お姉様、ネギまネギま。

超高級学食J○J○苑。

食券300枚、焼き肉食べ放題開催中。

「……うん、見なかったことにしよう。

私は、今日はテレビを見ていない」

テレビ切られた。

せっかくリアルタイムの鉄筋29号男Ⅱ世なのに。

じゃあ、薔薇様がみてるよかったのか人形に釣られてホイホイついてきてくでも……

「それは止めておけ」

◆◆◆ 八神はやて② ◆◆◆

「なーなーエヴァさん、この前、ザファイラが太公望ってキャラの格好したんやろ？」

そのゲームはまだ出てへんみたいやけど、他の人の格好はどんな感じなん？」

「他のか……三国志無双は知ってるな？」

アレのシリーズだから、そっちを見た方が早いぞ」

冬に3作目が発売されてるし。

戦国時代無双はまだ出てないけど、太公望は中国だから問題ない。

「でも、武将の人が多いから女の人が少ないんよ。中国が舞台やからか、髪も黒とか栗色ばっかやし。」

仙人さんがおるなら、他の色もありそうやおもてな？」

「なんだ、あいつらにコスプレさせたいのか？」

「コスプレやなくて、綺麗な騎士服の考案や。」

せっかく見た目がええ女の子なんやから、騎士服も着たきり雀はあかん！」

「どう言い繕おうが、コスプレだな。」

だが、結局は東洋系の人物しか出ないゲームだからな。髪の色が違う女性キャラは……」

大蛇の頃だと、金髪の祝融と銀髪の女媧くらい？

髪の色を考えると、シャマルと夜天が比較的近い。

どっちも露出度は高め。表情や性格的にはまるで噛み合わない。

「……こんな衣装のはずだが、どこで着せるんだ？」

お姉様の、らくがき！

「水着と犬耳なん？」

うん、これは擁護出来ない。

雑過ぎて模様やらもまともに書いてないし、色なんて当然付けてない。

アルフやザファイラという実例がいるだけに、女媧が犬耳にしか見えない。

「水着はともかく、こっちは帽子か飾りのはずだぞ。」

それに、街中どころか海やプールでもやたら目立つ上に、誰彼構わ

ずの色仕掛けでもさせるつもりか？」

「破壊力あり過ぎやろか……」

そんなら、元のエヴァさんとかヴィータに着せたら、可愛くならへんかな？」

「全力でロリコンを釣り上げるつもりか……」

少なくとも私には、そういう視線に晒されて喜ぶ趣味は無いぞ」

「むう、あかんか。」

エヴァさんに着せても可愛くなりそうやのに」

「なら、自分で着てみるか？」

夜天の対処が終われば、魔法が解禁だ。騎士服だつて使えるぞ」

「うーん……対処が終わるのつて、秋から冬にかけての予定やろ？」

寒そうやなあ」

「……逃げたな」

「いえいえ、ここはやはりヴィータちゃんでしょう」

とつぜん変態ロリコンが現れた！

変態の発言は、やっぱりロリコンらしいものだった！

「どつから湧いた!?!」

「それはどうでもいいのですよ。」

やはり、お祭り会場ではヴィータちゃん……いえ、ヴィータんに女媧コスしてもらいたいんですね」

「ヴィータんつて、何故アホな呼び方で言いなおした!?!」

「しかし、強烈な違和感を発するペったんこな胸に目が行ってしまい、

『な、何見てやがる!』とハンマーを振り回すヴィータんを必死に慰

め「ラケーテン・ハンマアアア!」ぺぷしつ!?!」

目の前を、物凄い勢いでハンマーが横切つていった。

変態ロリコンが轢かれた。

八神はやての髪を揺らす程度で、ほとんど影響を出さない技術を称賛。

「……あかんな。色々と問題ばっかや」

「そう、だな」

A☒S編31話 その身に得たもの

というわけで、壊れかけのユニゾンデバイスを保護した、とだけアースラの現地拠点に報告。

すると、聖王教会の人物を含めて知るところになるわけで。

「見せて見せてっ！」

超レアモノの、本物の融合騎っ!!」

と、シルフィ・カルマンが大興奮。

今は治療中だから意識が戻ったらという事で強引に保留にして、レイジングハートとバルディッシュの改造作業に戻した。というか、お姉様が引き摺って作業場所に連れてった。

その頃、別荘にある使い魔達の治療室では、アギト（仮）の治療が進められてる。

現状は、カプセルに入ってたアリシア・テスタロッサに似た状態。溶液の中で浮かんでる。

元々は使い魔達の年齢操作や、大きな怪我や重い病気等を治療するための設備。転用出来るだけの余裕と能力があってよかった。

「……特に問題は無いんだな？」

「怪しい薬の影響が残ってるだけ。内部に破損は見られないから、回復に時間がかかるけど最終的な後遺症は無いはず」

治療に付き添ってるのは、八神シグナム。何故か気になるという事で、今日は剣道場に行けない事を伝えた上で、ずっと様子を見てる。

実際に作業をしているのは、治療担当のチャチャ（暫定）。セクレタリー秘書に所属する、本来はお姉様の手伝い担当の1人だけど、不自然さを無くすためにこうして姿を見せてる。

「だけど、気になるという事は、過去に何かあった可能性もある。

原作と同じなら変換資質が一致するし魔力光も近い。変換資質の面を含めても、相性はかなりいいはず。過去に出会っていれば、ロードになっていた可能性が否定出来ない」

「そうか。だが、融合騎と共にいた記憶は無い。

尤も、擦り切れた記憶だ。過去に無かったと断言も出来ん」

「烈火の劍精も、過去の記憶はほとんど無いはず。ユニゾンデバイスが生きていた時代に資料がまとめられて無限書庫に残っているか怪しいから、関係の証明はきつと無理」

無限書庫の自動収集機能も、いまいち信用できない部分があるし。まず、最低でも人に渡すための資料として纏めないと対象にならないのはほぼ確実。個人のメモは見付かってない。

それが個人や特定組織内に留められた物、公開前の関係者しか見れないような状態なら禁書庫に収められる。その後、公開されるか、ある程度以上の人数に内容が認識されたら最終的に通常書庫に入る模様。

公開前の草稿やらまで禁書庫に残ってるし、内部報告書やら会議用資料、果ては製品の売買記録や勤務シフト表まで存在しているのは確認出来る。本気で意味が無い物も多すぎて、禁書庫の容量がヤバイ。ごく稀に重複もしてるし。しかも、資料が飛んだりしてるから、全てを集められるわけじゃない可能性もある。

私達が禁書庫と呼んでるのは、公開前の仮格納用を想定したものの可能性が高そう。だからと言って、まだ誰にも言えないけど。

「そうか」

「だから、全てはこれから。」

人との繋がりも、守護騎士としての本当の役目、主を護る為に力を使う事も」

「……そうだな。我等は守護騎士と呼ばれる、守護するための騎士だ。奪うための、傷付けるための存在ではない。そんな事すら忘れていたのか……」



一方、夕方頃にアースラの拠点から逃げてきたお姉様は、セツナ・チェブルーに色々な実演や説明を開始。あまり他の人に知られたくないから、別荘のリオデジャネイロ相当の場所。農業用拠点で大した設備は無いけど、ケアンズはまだ合宿組がいるし、熱海は出入りする

際に挨拶に来られたら拒否しにくいし。

先ずは理解しやすい、お姉様との直接通信と、お姉様からの魔力供給から。

「この点は、ネギまの仮契約……でしたっけ？ それに似ているんですね。」

何て言いましたっけ、魔法の道具的な物は無いんですか？」

「無いぞ。私が色々作れるから、それでいいだろう？」

なんなら、建御雷タケミカズチもどきでも作ってやろうか。魔力を込めると巨大化する両刃の長剣で、日本刀型になったりもする代物だ」

「あ、それが桜咲刹那の道具なんで……あれ？」

それって、デバイスじゃないですか？」

「そうだな。ただ、ベルカ式のデバイスは製造時に形状を決める必要がある。そういう形の物が欲しいなら、新たに作り直しだな。」

騎士甲冑とは比べ物にならないくらい柔軟性が無いが、そのぶん強靱だから仕方ないと割り切ってくれ」

「いえ、気になっただけで、そこまで欲しいわけじゃないですし。」

他に……えーと、従者の召喚とかやってみましたっけ？」

「本人だけなら、似たようなことは出来るな。今の体を破棄して、私の傍で再構成すればいい。」

但し、所持品は呼べない。それを別途転送するくらいなら、素直に転移魔法を使った方がマシだ」

「何と言うか、微妙に残念仕様ですね。」

それ用の能力じゃないからだとは思いますが」

「不死を実現するための機能の一部でしかないからな。」

とりあえず、ネギまに似た部分はこれで終わりだ。そうそう、非殺傷での怪我だが、お前達は基本的に大丈夫だから安心してくれ。はっきり言えば、今の私が特殊なだけだ」

「あれ、そうなんですか？」

体を魔力で作ってるなら、一緒になると思ったんですけど」

「私の本体が本だという事は知っているだろう？ それに今は、Cクラスの魔力で姿を維持する為に、見た目以外の部分をかなり簡略化し

ているんだ。この方式だと非殺傷の保護対象から外れる上に、魔力が漏れないよう密度も思い切り下げているから、魔力ダメージが弱点になる。怪我をしても痛いという感覚があるだけで、損失としては服が破れた程度でしかないがな。

その点、お前達は人としての構造を持っているから、非殺傷の保護も有効になるはずだ。非殺傷でもお前が怪我をする攻撃なら、一般人でも命に係わるような影響が出る威力だろうな」

設定を変えただけの「攻撃」魔法が純粹魔力ダメージだけで済むはずも無く。ソレ専用で組み上げた術式なら別だろうけど。

吹き飛ばされたり、バリアジャケットや地形に影響を与えたりする程度の物理ダメージが存在するから、現在の非殺傷設定も絶対的な物じゃないのは明白。

「えーと、エヴァさんは消費を抑えてるから弱点がある、という理解でいいんですか？」

「一応はそうだな。この体が吹き飛んでも死ぬわけじゃないし、その気になれば再構成もすぐに出来る以上、弱点と言っていていいかは微妙だが。」

そんなわけだから、非殺傷の魔法を受けて怪我をする心配はあまり無い。それが理由で眷属になった事がばれる事も無いから、周囲への説明はもう少し待ってくれ」

「それは大丈夫です。無暗に騒がれたくない、ですよね？」

眷属に関してどう説明するかは相談しておくとしても、実際話すのは、早くて夜天の魔導書をどうにか出来てからがいいですよね」

「……そこも説明済みか。」

それなら、後は今後の件についてだな。一応言っておくが、本来の「肉体」は、今使っているそれだ。老化や成長は停止しているし、放っておいても新陳代謝でゆっくりと魔法生物みたいなものになっていくわけだが……」

「あ、私の希望は、チャチャさんには伝えてあります。」

別にこの肉体に拘らないので、エヴァさんの剣になれるだけの力は欲しいです。大きな改変は無理が出るんですけど、細かな不具合の

修正は可能なんですよね？

私の場合は古い怪我の痕や無理をした後遺症を治すと、もう少し能力が上がるらしいです。調整の為に何度か体を作り直す必要がある事も説明されています」

「……実演以外は、殆ど説明と合意が済んでいるじゃないか。

私が説明する部分が残っているのか？」

だって、より正確に把握した上で納得してほしかったし。

契約前の説明と納得は、結果が重いだけに大切にしないと。

「デバイスについてはエヴァさんから聞いて欲しいって言われてますけど。」

それって、今のデバイスの話じゃないですよ？」

デバイスは、説明というより相談？

主に、ネタ的なアレの意味で。

「そうだな。野太刀をベースにしたデバイスについてだが……刀については完成していて、今は鞘を用意している途中だそうだ。近いうちに感触やらを確かめに行って、問題が無ければそれを使ってデバイスの製作に取り掛かる予定だ。」

それで、入れる魔法は追って相談するとして、機能を追加したい。

シーカ・シンクンロ
ヒ首・十六串呂は……知らなそうな顔だな。ブラスタールビツト

……も、原作知識的に無理か。ファンネル……いや、化粧品メーカーじゃなくてだな。

ええと、遠隔操作可能で、魔法を発動する起点に出来る代物だ。魔法の強化にも使えるし、直接の攻撃手段としても有効だ。魔力は私が供給出来るから余裕があるはずだし、マルチタスクを極めれば相当に使い勝手がいいはずだ。

使ってみる気はあるか？」

「そうですね、面白そうです。」

でも、便利そうですけど、破損とか置き去りになった時とかは大丈夫ですか？」

破損や失くした時よりも、躯体放棄時の扱いが心配？

でも、デバイス1個くらいなら。

「それも魔力で構成すれば何とかなる。守護騎士達のデバイスと同じ扱いと言えば理解出来るか？」

お前の付属品という扱いになるが、体と同時にデバイスも再構成するように設定してしまえばいい。維持するための魔力くらいはサービスするし、再構成直後に裸にならない為に服は必要だから、騎士服の構成用とでも思えばいい」

「あ、やっぱり維持が必要なんですね。」

えーと……普段から私の魔力で補う事は出来ませんか？」

「それが基本で、何もしなければ勝手にそうなるが、ただでさえ魔力を送る際のロスがあるんだ。」

私の魔力を使える時は使え。私の剣になりたいなら、多少の魔力を遠慮して能力を落とすような真似はするな。いいな？」

「は、はいっ！」



更に他方、別荘内ケアンズの合宿拠点。

高町なのはとフェイト・テスタロッツサが蒐集の影響で欠席してる都合で、実に平和な練習風景が見られてる。

「ゆっくりなら、飛ぶのも何とかなる様になってきたかな？」

「……すずか、魔力をまともに使えない私の前でそれって、嫌味でしょ？」

「練習の為に来てるんだから、ちゃんと練習しないと」

……微妙に月村すずかとアリサ・バニングスの仲が悪くなってる気がするけど、平和。

月村姉妹は「自分で飛ぶ」事に惹かれてるようで、真っ先に練習し始めたのが浮遊魔法。浮かぶ事自体はかなり早い段階で可能になってたから、素質って怖い。

「すずかサンは、早めに保護や防御の魔法も覚えないと危険ヨ」

「うん、今はこれくらいが限度かな」

そして今の教師役は、従者のリーシェン。この娘もやっちゃった☆

とお姉様に報告して呆れられた中の1人。別荘の駆動炉の保守や再生に腕を振るつた、元々魔力に乏しい技術系の人物。従者は魔法を使えないという説明を信じて調査しなかった事を猛烈に反省して、今では従者トップレベルのカートリッジシステムの使い手になってる。素質はトップ集団のやや後方程度だし、そのうち抜かれるのは確定だけど、技術研究に関する第一人者という立場に固執するつもりらしい。

黒髪を2つの団子に纏めてるのはお約束。口調は本人にネタを教えたら面白そうに工夫してた。

「あの2人がいないと、こんなに平和なんだな……信じられねーけど」「いいじゃない、落ち着いて練習出来るんだし」

少し離れたところでは長宗我部千晴と夜月ツバサが、ゆったりした雰囲気で結界魔法を展開してる。

今は少し弱めの結界を、安定的に持続する練習。攻撃魔法の打ち合いをやってる横では、やりにくい内容。のんびりとはいつても喋りながらだから、軽いマルチタスクの練習にもなる。

「そりやそうだけど、あんな撃ち合いをするのが10歳以下って、どーなんだと」

「原作でもチートみたいなものなんだから、気にしたら負けじゃない。あれよ、ネギまでアタシ達がネギとかエヴァンジェリンとかを見て呆れるようなもんじゃないの?」

「あー、そう思えば……って、納得出来るか!」

ネギま準拠なら、私は最後までまともに魔法を使わないんじゃないのかよ!!」

「結界が不安定になってるわよ。そもそも、最初から魔法みたいな能力を持つてるんだから、関わるのは仕方ないじゃない。」

アタシだって、自分の能力を閉じ込める様な羽目になるとは思わなかったし」

「そりやあそうだけど……あーもう、何でこんな能力を希望しちゃったんだろ。やたら機械の操作に強くなったのは便利だから、捨てるのもどーかと思っちゃまった辺りが泣けてくるし。」

「そういや、特典の破壊の話は聞いてたんだよな。まだ練習してるって事は、結局蹴ったんだろ？」

「まあね。悪意が聞こえるってのは、まあ何とかかなりそうだし、使い所を間違えなきゃ便利かもしれないし。」

それ以上に、見ただけで味が解るってのは、買い食いとかで重宝するしね。何となく食べた気になれるからつまみ食いしなくて済む分太りにくいし」

「それかよ」

「美味しいケーキって、大事でしょ？」

「まあ……それは同意するけどさ」

そんな感じでのんびりしてる2人から更に向こう側、パラソルの下では、主が休憩中。

魔法弾を使った缶の空中制御……要するに高町なのはが原作A×Sの1話でやってたあれ、但し缶が4個と高速魔法弾16発を使った高難易度仕様を、何とかやり遂げたところ。

空間把握とマルチタスク、それに魔力制御を鍛える練習……だけど、広域型なのにここまで制御出来る主はちよつとおかしい。

「そんなにおかしい？」

お姉様のマルチタスクは、これくらいの水準に至るのに10年近くかかってる。

それも、業務や任務の無い夜間の大半を魔法の訓練に充てた状態で。

主は魔法の練習を始めてからまだ半年。それも、学校や人付き合等の、人として不自然じゃない生活をしながら。つまり、成長速度という意味で異常。

原作主人公、高町なのはの成長速度すら超えてる。

「転生特典の、多くの魔法の意味を拡大解釈すべき？」

かもしれない。

多種、多岐、多重、多能、多量。とりあえずこれくらいを纏めると、主の素質と現状に合いそうな気もする。特に適性が高いのが広域系というだけで。

普通なら魔力が多いと思考を分割する余裕が無くなって、マルチタスクには不利になる。無理に分割すると暴走する……はず。その常識に真つ向から喧嘩を売ってるのが、主と高町なのは。

フェイト・テスタロッサは、高速な近接戦で必要な感覚や魔法を、無意識に処理出来る水準まで鍛えてるだけ。マルチタスクではなく、無我の境地的な何か。考える前に体が動くからこそ、高速戦闘に向くと言える。

そもそも融合騎や後方部隊の支援がないと制御が甘くなる原作の八神はやては、魔力に制御力が追い付いてないと言える。

「エヴァは？」

お姉様のマルチタスク技術は、訓練の賜物。それに、思考の分割と同時に魔力を抑制して、扱う最大量を抑える事で暴走を防いでる。

そこまでやっても高い水準だから誤魔化されるけど、思考を分割した状態では全力での魔法行使は出来ない。シングルタスクでの全力は狂気の領域だから、きつと見る機会は無いけど。

「SSSを軽く超える水準と言っていた覚えはある。

具体的には？」

恒星と惑星数個を同時に消し去っても、お姉様だから、で納得された実績を持つ。使用した恒星の半径は70万kmくらいだから、高々半径130kmのアルカンシエルを鼻で笑えるだけの出力が必要だし、その範囲を影響下に置くことが可能だろうと思われたという事。

実際問題として、低軌道人工衛星がある1000km程度の高度から地球上への爆撃は、精度を考えなければ可能。宇宙でも活動可能なお姉様は、ビームで人がゴミで人類滅亡で盆回りの結果を簡単に作り出せるし、近いことをやったこともある。最終兵器は伊達じゃない。

仕様上は、夜天と宵天を合わせたよりも強力。私達を納められる事が絶対条件だから、特に容量については奇跡と狂気の産物としか言えない。

それなりに扱えるようになったお姉様の努力は認めるべき。

「普段エヴァが力を使わないのは、過ぎたものだと思ってるから？」

それもあるはず。

そもそも必要じゃない。アルハザードですら全力じゃなくても君臨出来た。地球ならこんな力が無くても普通に生活出来る。

魔力素の消費が厳しいのも一因。お姉様の全力は集まる魔力素の量の制約を受けるし、私達や従者達が必要とする分を差し引く必要もある。

私達が2万人まで増えられたのは、お姉様が訓練以外で魔力を使おうとしないから。その意味では、私達が積極的に遠隔地の魔力素を集めて利用出来る気の技術は有り難い。

力をひけらかすよりも研究する方を好む、奥ゆかしい性格も一因。

「奥ゆかしい……？」

必要があれば力で抑え込むし、気になる事は放っておかない研究者だけど、人としては普通である事を望んでる。特に、懐に入れた人とは、対等に近い関係を望んでる。

お姉様が所長をやった研究所で、部下達が子供や私生活について相談しに来てたのは、別に偉いからでも子供の姿だからでもない。

手法ややり過ぎる事に苦言を呈した人はいたけど、それで離れた人は少ない。

それだけ慕われてたとは言える。

「……ひよつとして、それが多くの友人という特典の、本当の効果？」

関連性は否定出来ない。

特殊すぎるお姉様を拒絶する人が少なかったのは事実。

ただ、ニコポやナデポの様な即効性は確認出来ない。慕われるのはある程度付き合ってから。

無条件に対象になる事もない。お姉様から離れた人もいる。お姉様を嫌ってた人もいる。

友人になりやすい人が集まりやすい程度の能力？

「随分曖昧。それに、東方じゃない」

「ごもつともで。」

A S編32話 出会い

そんなこんなで、数日後。

カプセルからは既に出されてベッドで横たわってるアギト(仮)が無事に目覚めて、八神シグナムと対面なう。

というか、八神シグナムがいる時に意識が戻った。治療担当のチャチャ(暫定)は姿を消してたから、ここに居るのは2人だけ。

「……………」

「意識は……話すくらいなら大丈夫なようだな。」

ここは、お前の治療をしている施設だ。安全だという事と、危害を加える気が無い事は保障しよう。

望むなら自由にしていいが、後ろ盾も無いまま放り出しても碌な事にならんとも考えている。これからの話をする前に、自分の事について、どの程度把握しているか確認したい。解らない事があれば、我等が把握している範囲で答えよう。

まずは名を聞こう。私は八神シグナムだ」

割と辛そうだから、あんまり大丈夫じゃないかも。体を動かすのも億劫そうだし。

望むなら自由に、というのはお姉様も認めてる。お姉様がアギト(仮)を手札として必要としてるわけじゃなくて、アギト(仮)がジェル・スカリエツティやゼスト・グランガイツに協力する状況を崩すのが目的だし。

それを防げる範囲なら、自由にしても問題無い。身長30センチでは地球だと無理だし、変な場所に行かせても身を守れそうにないという困った状況があるだけで。

フルサイズのアウトフレームがどの程度の負荷になるかで、選択肢がかなり変わってくる。

「……烈火の剣精って呼ばれてた事は覚えてる。その前は……思い出せない。」

捕まった頃は、覚えてたような気がするけど……」
「そうか。ならば、後で名も決めよう。」

記憶は、捕らえられている間に失ったという事になるか……」

「多分、だけど……変な連中に好き勝手されてた、って事しか覚えてない……」

「アンタは、連中の仲間じゃないのか……?」

「お前の居た研究所は、殲滅した。公的な記録には存在すら残らないくらいにな。」

「その連中に追われる事は有り得ん。法的な対処が意味を為さないという事でもあるが、それは構わないか?」

「ああ……何でアタシを助けた……?」

「古代ベルカの遺産という仲間意識が無いと言えば、嘘になる。お前は、古い時代に生まれた融合騎だろう?」

「我等も人にあらざる者、古代ベルカで作られた魔法生命体だ」

「そうか……アタシの力が目的なのか……?」

「いや、信頼関係の無い融合ほど危険な物も無い。」

「興味がある事は認めよう。信頼と同じ目的がある場合に手を取り合う事を否定する気も無いが、それを目的としていたわけではない」
「なら……アタシの情報か……?」

「お前を調べるくらいなら、先に我等を調べる必要がある。」

「それに、融合騎を作れそうな人物に心当たりもある。調べるより訊ねた方が早いだろう」

「それは……信用出来る人か……?」

「主と我等を助けようと動いてくれる人物だ。彼女を信じられな
いなら、我等はもう何も信じる事は出来ん。」

「お前が捕らえられていた研究所を、最終的に消滅させた人物でもあ
る」

「……アンタも助けられる立場か……でも、そうは見えないけど……
?」

「今の我等は、主を蝕んでしまう存在だ。可能であるなら自らを殺し
てでも主を助きたいが、それすらも叶わん。」

「本来の呼び名である守護騎士を名乗る事すら憚られ、原因を自分達
ではどうにも出来ん以上は、我等をどうにか出来るだけの力と知識を

持つ者の助けが必要だ」

「そつか……ベルカで、助けられる立場で……確かに、似た者同士だ……」

「我等については、こんな所だ。細かな点は、追々説明しよう。」

本題の、お前についてだが……基本的に、知識は無いと判断していいんだな？」

「多分……残ってる記憶だって、いつのものか解ったもんじやないし……」

「そうか。我等を信用してもらえるのであれば、必要な知識は全て教えよう。」

お前がどの様な未来を選ぶのか判らんが、選択した先に幸あらんことを願おう」



その後はアギト（仮）がアギトになる名前選考があつて。途中でエトナとか候補に挙がってたのには電波の受信的な意味で焦ったけど、無難なところに落ち着いて何より。

結果的に八神シグナムとアギトの関係は、とりあえず信じる、真偽は追々判断する、という感じになった。最初から信頼関係が作れるとは思ってなかったし、見極めてやるとか言いながらユニゾンするイベントは無かったけど、険悪にならなくて何より。

更に数日が過ぎ、土曜日になる頃には潰した研究所の資料も概ね調べ終わったけど、アギトの記憶に関しては元々かなり怪しかったらしい。少なくとも、ベルカの文化等の情報は無かったと記載された資料は見付かった。聞き出そうとした形跡がある以上は、最初から無かったか、話さなかったかのどちらか。これ以上は調べようがない。

改めて確認した範囲では、古代ベルカの魔法に関する知識はそこそこ生きてる。扱える言語は古代ベルカ語と管理世界標準語、但し会話がそれなりに可能なレベル。法や歴史などの社会的な知識や、文字に關しては、今も昔も壊滅的。身体や体調管理に関する知識はそれな

り、体調に関係するせいかな料理は少々出来る模様。

どう見ても兵器として必要な情報ちしきしか持ってないから、犯罪者共に捕まる前からそんな扱いだった可能性が濃厚。

という感じで、その他諸々の都合も重なった結果、カリム・グラシア達を含むかなりの人数がお姉様の別荘に来てる。

これが人工の空間と唾然とされるのは慣れたし、地球で眠っていた、ロストログアに相当する何かを作り出している空間へ連れて行く、危険がない事は確認しているし既に入った事のある関係者も多い、と事前説明はしておいたから、驚いてる人達はさつくりスルー。速やかに用事を済ませる。

都合その1。今まで会わせてなかった、聖王教会組とお姉様の生徒達の顔合わせ。

「初めまして、聖王教会で騎士をしている、カリム・グラシアと申します」

「護衛をしている、シャツハ・ヌエラです」

「私はシルフィ・カルマン。技術者だから、デバイス関連の相談なら任せて」

「これは丁寧にも。普段は保育士をしている、真鶴亜美です」

「長宗我部千晴、学生、です」

「夜月ツバサ、同じく学生です」

「見ての通りのしがない小ネズミ、チクアープで御座います」

「まあ……本当にネズミなのですね」

変なのが混じったけど、話だけは伝わってたからさほど驚かれなかった。

チクアープ以外はStrikerSの知識も少ないから、双方に特別な感情があるわけでもない。ベルカ式を使う仲間的な意味で、共通点もある。普通に友人関係になれるといいかなと期待。

都合その2。新デバイスの披露。

「レイジングハート、形が……」

『Pretty chic isn't it?』

「うん、可愛い！」

「バルディッシュも」

『Yes, sir』

「待機状態はペンダントなんですネ」

『お嫌いですか？』

「いえ、アクセサリーに慣れていないだけなので、大丈夫だと思います」

要するに、高町なのは、フェイト・テストロッサ、セツナ・チェブルーのためのデバイスが完成し、渡すついでにお披露目するという事。レイジングハートは留め具部分の色が変わってる程度だけど、バルディッシュは二重の三角形からちよつと複雑な形に変わってる。

下手に日本でやるよりは、別荘の方が色々と楽。その関係で、マリエル・アテンザも当然のように来てる。

というか、高町なのはとフェイト・テストロッサは、蒐集から1週間で完全に復帰。その回復速度に痺れて憧れ……る前に、呆れる他ない。黒羽早苗製の食事に回復促進効果があるといっても、今まで対象になった人は10日以上かかっているのに。

「3機共、基本的な登録は済んでいるからな。初回の起動は最終調整とバリアジャケットの更新で少し時間がかかるだろうが、今は戦闘中でもないから問題ないだろう。」

「というわけで、お披露目だ。新しい名を呼んでやれよ?」

「うん。レイジングハート・エクセリオン!」

「バルディッシュ・アサルト!」

「夕風!」

「二セットアップ!」

『Order of the setup was accepted』

『Operating check of the new system has started』

『主要機関の起動を確認、全て正常です』

そして、光の柱の中で構築された——変態共に過程なんて見せるもんか——バリアジャケットとデバイスは。

高町なのはは、アームガードや服の模様が少し変わった程度。デバイスもマガジンを装備した程度で、大きな変化は無し。

フェイト・テスタロッサはマントが白くなり、服の模様が変わってアームガードも追加。デバイスは斧の刃の逆側が突き刺せる形状に変化。高町なのはのバリアジャケット、ヴィータのデバイスの影響を受けてる気がして仕方がない。スカートの前の隙間は塞がったけど、相変わらずのハイレグいんミニスカートで、絶対領域が健在なのはどうかと思う。

セツナ・チエブルーは水色の羽織に灰色気味の袴、袖口に白い模様。ぶっちゃけると誠の字を背負ってない新撰組で、不知火の時よりコスプレ度がちよつと上がった感じ。夕風は刀身に紋様が刻まれた夕風、としか言いようがない。もちろんネギまのがベースで、紋様型カートリッジはお姉様の黒龍等と同じ方式。

「これが、カートリッジを入れるもの？」

「バルディッシュは、1発ずつ入れないといけないのかな……？」

「念のため言っておくが、集束系と似た負荷があるから、当面は小容量のものを訓練で使用するだけだ。それ以外では使うなよ。」

あと、フェイトのはリボルバータイプだが、スピードローダーと呼ばれる、一気に装填するための補助具がある。使い勝手が極端に悪いわけではないはずだ」

ちなみに、カートリッジ機構の選定と組み込みはシルフィ・カルマンが主に担当。

装填が早い上に、ロスが少なく高効率で使える、持続性重視のマガジンタイプ。

高信頼性で、大容量のカートリッジまで扱える、瞬発性重視のリボルバータイプ。

それぞれの戦闘形態に合わせるのは予定通りだけど、より高いレベルで実装出来た。やっぱり近代ベルカ式とミッドチルダ式を扱う2人の現役技術者の腕と知識は大事。

他にもちよいちよい手を入れてあるし、今はまだ高度すぎて使う人が追い付いてないけど、それは訓練で何とかする。

「夕風の刀身は、見せてもらった野太刀をそのまま再現しているんですね。」

「でも、白鞘なのは大丈夫なんですか？」

『使用の際は手を基準に相対位置を固定しますし、緩衝と滑り止めの処置も行います。』

「強度や取り扱い上の問題はありません」

「見た目は保存用に見えるだろうが、内部はしっかり作ってある。」

日本で見られても言い訳をしやすいようにした上で、見た目がほとんど変わらない模擬刀モードも用意しておいたからな。結果的に、所有する分には無許可でも可能だ。無闇に所持すると銃刀法違反になるが……刀という形状である以上は避けられん。

ついでに、野太刀が使えないような場所でも使えるよう、小太刀にもなれるようにしておいた。

まあ、あれだ。色々理由はあるが、ネギまの夕風に似せた上で、狭い場所用の小太刀モードと試合用のナマクラモードと魔法や攻撃の補助に使える匕首の展開機能を追加した感じだな」

「えーと、最初と最後の説明だけでいいじゃないですか」

「そうとも言う」

むしろ、そうとしか言わない。

観客の転生者連中からは、シーカ・シックスシロ「匕首・十六串呂までかよ、すつげえ再現率、なんて声が聞こえてくるけど、厳密には再現してない。」

というか、猫耳メイドや麻帆良女子中等部制服を再現するのは、原作と同じという案の時点でお姉様が却下してた。セツナ・チエブルーはパクティオーカードの絵柄を知らなかったみたいだし。

この姿の桜咲刹那は「魔法先生ネギま！」じゃなくて、「ネギま!?!」のコスプレになるけど、あえて言おう。

元ネタを知った上でできちんと当て嵌めてるこいつらは、よく訓練されたオタクだ。

特に馬場鹿乃がそうなのは解ってたけど。

そして、都合その3。

「出番ですか？」

転移で現れたのは、ヴィヴィオ。

「オリヴィエ!? そっくりさんを量産し過ぎじゃねえか!」

「良く似ているだろう? 魔法の素質も高いから、協力者としてスカウトしてきた。」

北欧の出身で、近いうちに日本での就業ビザを取って引越してくる予定だ」

顎が落ちかけてる馬鹿は放置して、と。

主要な関係者には顔を見せてたし、公的な設定での紹介。

管理世界では超有名な歴史上の人物とはいえ、ここは日本。原作でヴィヴィオが登場するタイミングとも違うし、聖王モードとは見た目も差異がある。原作知識持ちにも本人とは思われない、思わせないのがポイント。

ちなみに、素性に関する情報の作成はほぼ完成して、そろそろお姉様の会社の役員として在留資格認定証明書の交付申請を行う予定。引越しはもう少し先になる。

更に、都合その4。

「さてと、次の人に交代だ。」

シグナム、来てくれ」

というわけで、今で姿を見せてなかった八神シグナムも、転移で登場。

位置はお姉様の隣。他の人は1か所に集まっているから、要するにその背中は見えない。

「ほら、出番だぞ。」

大丈夫だ、お前を取って食おうとする馬鹿はいないし、仮にいたとしたら叩き潰すからな」

「お、おう……」

おぞおぞ、といった感じで顔を覗かせたアギト。

その瞬間に。

「かわいいー!」

「やっとな出会えた、真正の融合騎っ!」

叫び声と共に、飛び出す高町美由希とシルフィ・カルマン。

でも、次の瞬間には、2人とも地面で顔面を摩り下ろしてた。

「どうやら、叩き潰す必要がありそうだな……？」

2人の足を引っかけたお姉様が、黒龍を起動してる。

威圧感というか、殺気まで漏れてる。

「め、滅多に無いチャンスだから、つ、つい……ね……？」

「エ、エヴァちゃん、こ、これはね……？」

技術系のシルフィ・カルマンはともかく、高町美由希にまでひかれた。

でも、いきなり突撃は良くない。

「あいつは、お前達が思っているよりも過酷な過去を過ごしている。

その原因となった犯罪者共と同じ行動に出て、何も感じないとでも思ったか？」

「同じって、そんなつもりじゃ！」

「姿を見て即捕らえに行き、行動を制限する。

技術的な目で見ても、意思のある個人として扱わない。

その行為のどこが犯罪者と違う。人ではないから等と寝惚けた事は言わんだろうな？」

そういえば、美由希はフェレットなユーノを捕まえて頬擦りしまくっていた気がするが……10歳くらいの男の子だと理解した今でも、同じ事をするか？」

「……あう」

高町美由希、K.O。

やつちまつた感に満ち満ちてる。

「で、融合騎は、インテリジェントデバイスよりも更に人に近い存在だ。感情だってある。

興味に任せ出自だけを見るのは、聖王教会の関係者として……どうなんだ？」

「……ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

シルフィ・カルマン、轟沈。

ノリと技術者のイメージが強いけど、人道を重視するらしい聖王教会に所属する人物。きちんと認識させれば、理解してもらえら

い。

「もう、話しても大丈夫かしら？」

「アギトさん、よね？」

満を持してという訳でもないだろうけど、リンデイ・ハラオウンが歩み寄ってきた。

とりあえず騒動は終わったはずだし、代表で話す事が問題にならない立場の人物ではある。

「あ、ああ……」

でも、アギトはちよつと引いてる。

さっきの2人の影響は、大きかった。

「大丈夫よ、ちよつとお話をしたいだけだから。」

「そうね……」

というわけで、日常会話的な感じでの事情聴取が開始。

だけど、記憶を失ってる以上、得られる情報は大したものじゃない。

八神シグナムや私達が聞き出した内容以上も得られず。

アギトが八神シグナムから聞いた情報が概ね間違っていないらしい事を納得した事、最終的には八神シグナムの背に隠れつつもさほど緊張しなくなっている事が、最大の成果かもしれない。

そして、話が終わる頃には、周囲を大勢で取り囲むような感じになっ

ていて。「デバイスとか融合騎とか言ってたけど、どう見ても小悪魔とか妖精よね？」

「うん、小さくて可愛いね」

「子供を見る様な目で見えるな！ 撫でようとするな！」

見て解りやすい「非現実」な姿に興味津々なアリサ・バニングスと月村すずかに興味津々で迫られそうになってたり。

「ユニゾンって、合体してパワーアップ！ だよね？」

「私達とも出来るのかな……？」

「ミッド式とかいう魔法は知らねえよ……」

高町なのはとフェイト・テスタロッサの、期待に満ちた視線から逃げるように八神シグナムの背中に隠れたり。

「古代ベルカ式の使い手で、紫系の魔力光……なるほど、千晴嬢も該当いたしますな」

「……はあっ!？」

「シグナム殿は気持ち赤みが強いですからな。深い紫の千晴嬢もアギト殿に近いと言えますぞ?。」

「うっわ、知りたくねー現実がまたかよ……」

チクアーブに気付かれて項垂れてる長宗我部千晴がいたり。

「ふふふ、紫の魔力光と言えば、私もですよ」

「おお、それで御座いますな。しかし、融合騎に融合騎が融合するのは可能なのでしょうか?。」

「やめとけよ、お前ら揃って犯罪者にしか見えねーから」

「おや、心外ですね。私の心は、いつでも愛が満ちているのですよ?。」

項垂れたままの長宗我部千晴に突っ込まれてる変態ロリコンとチクアーブがいたり。

「可愛いなあ……ミッドチルダ式のユニゾンデバイス、研究してみようかな?。」

「あ、アタシは協力しねーからな!。」

「詳しくそうな人がいるし、直接的な技術面は教えてもらえそうだし。」

でも、目標があるとやり易いでしょ?。」

「目標……目標か。それなら、まあ……」

マリエル・アテンザに丸め込まれてるアギトがいたり。

どう考えても到達点を知るための研究材料だけど、言葉の綾は恐ろしい。

「絶対に手は出さないから……ね?。」

「そうそう、まずはお友達から、ね?。」

「……ヤダ」

アギトに逃げられて、凹んでる高町美由希とシルフィ・カルマンがいたり。

こんな感じで、一気にやった顔合わせは、割と大騒ぎで完了。

次の大騒ぎな顔合わせは、きつと夜リインフォース 天の時。

その前に、犯罪者を生贄にする時空管理局の判断、まだー?

A S編33話 繋がる人

大騒ぎの顔合わせから数日。

八神はやてが、倒れた。

「蒐集もしているし、負荷を抑える様にもしているんだが……

このイベントは変わらないんだな」

お姉様がため息をついてる今日は10月28日、木曜日。

原作より1日遅れ。でも、元が木曜日だから、曜日は同じという微妙な状態。

「教えといてくれれば良かったのに。

気構えが出来てれば、もうちょつと慌てんで済んだんよ?」

胸の痛みが治まった八神はやては、自宅のベッドで横になつてる。

原因がはつきりしてるから、病院には行つてない。行つても意味が無いし。

「だけど、あまり良くない兆候ね。

時間が無い証として報告してみようかしら」

「そうですね。蒐集しても、侵食の速度があまり変わっていませんし……」

様子を見に来たプレシア・テスタロッサが、八神シャマルと一緒に色々と検査をしながら呟いてる。

得られた結果も、あまり宜しい物じゃない。

「そうだな、是非頼む。今は協力者からしか蒐集していない事になっているから、集めたと言える量が絶対的に足りん。

その辺はグレアムやリンディとも調整してくれ。うまく言い含められたら、犯罪者対策の話が通りそうだ」

そんな話をしていると、主と成瀬カイゼが帰宅。

結構急いでる雰囲気。

「はやて、大丈夫?」

「あら? 学校が終わるにはまだ早いはずだけど……」

「早退だよ。妹の症状が悪化したから、状況の確認と必要なら一緒に検査するために帰る、と押し切ったそうさ。

僕については、帰り道で倒れられると不味いという学校側の配慮だね」

不思議そうなプレシア・テストロッサに答えたのは、成瀬カイゼ。主は八神はやての方に突撃してる。

「問題無いと伝えたはずだが……心配や焦りか？」

感情が戻りかけているという事なら、喜ぶべきか……」

「さあ、それは解らない。

それより、はやては？」

「はやてについては想定範囲で、まだ命に別状はない。

期待した変化が無かったという意味で、問題が無いわけではないが

……まあ、その程度だ」

「そっか、良かった」

主から、ほっとしてる感じがする。

やっぱり感情が復活し始めてる？

「ふむ、少しは感情が出るようになってきたじゃないか。

抑制型という解析結果は正しく、特典の破壊も想定通りに機能した

と見るべきか」

「実感は無いけど、少しでも感情が戻った感想がそれ？」

「私としては、感情が戻るならよし、戻らなくても原因が気になるだけで、それもまたよし、だ。

アコノ自身がらしいと思える自分で居られるなら、それでいい」

「……口説かれてる？」

「口説くも何も、お前は私の主、関係性で言えば私はアコノの所有物だぞ。

この関係が失われるのは、死ぬ時だけだ。

側に居るために無理をすれば、いつか擦り切れるぞ？」

「そう、解った」



その後、プレシア・テストロッサとリンディ・ハラオウンの連名で、

「闇の書の主」についての現状が報告されて。

「リンカーコアに高い負荷をかけて、魔力の回復力を高める訓練があるが、どうする？」

理想的に行けば、魔力の総量が微増、回復力がそれなりに高まる。失敗すれば総量が減り、回復力も落ちるからな。落ち着いて考えろよ」

というお姉様の口車に乗った馬場鹿乃と上羽天牙が、金曜の夕方から高負荷トレーニングを開始。

この際に2人からも蒐集したという書類と治療履歴をでつち上げて、以前のリンカーコアの異常は闇の書と関係ないという状況証拠を作ってみたり。

「子供達ばかりに負担をかけるわけにもいかないからね」

「というわけで、今の所は余裕がある武装局員の皆様とか、特に魔法を使う用事も無い私達が、有志として協力しようってわけで」

「……まあ、きちんと人員の状態やリスクを考えているならいいが」

その様子を見ていたアースラの武装局員や、エイミィ・リミア等々のちよつとした魔力持ちオペレータ達が、順に蒐集に協力する事になったり。もちろん、切り札のクロノ・ハラウンや奥の手のリンデイ・ハラウンは対象外。有事の際に動けないのは困る。

これで、犯罪者の件が通らなくても、管制人格の起動までは確実に到達出来る確信が持てた。対外的にも説明出来る蒐集だから、実績としても問題ない。

「付近の世界ですと、第108無人世界辺りが手頃そうで御座いますな。」

生物がほとんどいないにも関わらず、小さな海に藻の様な植物があるおかげで呼吸が可能な大気を持つという、なんとも奇跡的な惑星が御座います。

赤道付近の最高気温が5℃程度で気圧も低めという環境の為に入植に向かず、魔力素が薄めで魔導師には少々厳しく、遺跡類も確認されていないため、仮に崩壊したとしてもさほど気に病む必要も無いと思われれます。現地に電子機器やデバイス類が無く、我等が行く事は不

可能で御座いますので、あくまでも資料上での話では御座いますが。グレアム提督も有力な候補と考えている様子で御座いましたので、考慮されてはいかがで御座いましたでしょうか」

その夜、チクアーブが報告してきましたり。

ちなみに、この世界の名前はルスタ。違法な魔導師等が逃げ込んでいないか確認するために、時空管理局の調査員が極稀に訪れる程度で、基本放置されてる。環境としては、赤道付近の平地が富士山の山頂に似た感じだと思えば、想像しやすい。

高山病予防用の術式があれば活動可能だし、人が住む世界から少々離れていて小規模次元震程度なら被害も出ないし、最悪壊れても問題ない。

これらを説明し終える頃には、お姉様のにも有力候補として考えた。

そんな感じで日々が過ぎ、土曜には時空管理局の説得に一応は成功したらしい。

というわけで、家族代表兼蒐集担当として、八神チャチャが行く事になった。守護騎士達は色々な問題を抱えるし、闇の書の起動に関して勘繰られても面倒。主に金子狗太の情動的な意味で。

移動はアースラから複数の転送ポートを經由して。その使用許可が下り次第、作業を開始すると決まった。

「そんな感じだから、1週間以内には作業を開始出来るはずよ」

「1週間以内か……お役所仕事で長いと見るべきか、こんな無茶な案が通るには短くて済んだと見るべきか。微妙な期間だな」

「裏からの介入の可能性を考えると、短くて済んだと言うべきかしらね」

というわけでお姉様は今、アースラの現地拠点でリンディ・ハラオウンやプレシア・テスタロッサと一緒に、お茶を飲みながら会話中。打ち合わせと言うよりは、雑談に近い雰囲気だけど。

他の拠点の人、つまりエイミー・リミエツタやカリム・グラシア達は、さつきまでこの部屋に居た。今は夕食の準備と日本の社会を知るという名目で、クロノ・ハラオウンとシャツハ・ヌエラを護衛役にし

て外出中。聖王教会や本局では着られない服を見たり着たり出来るのは、なかなか楽しいらしい。

テストロッサの娘達は、高町家。アリシア・テストロッサはじつくりと体力作りをしてるし、フェイト・テストロッサは最近剣術の型を教えられるようになってる。アルフも体のさばき方なんかを指導されてるし、3人共戦闘民族に気に入られてる。

「まあ、管理局側の準備が出来次第、チャチャが動くことにする。下手に守護騎士達を動かすわけにもいかんし、私が動くより平和だろう？

DかEランク相当の魔力に見せて、闇の書の蒐集を実行させるのがギリギリの実力だと思わせておけば、余計な警戒もされにくいんじゃないか？」

「確かにそうだけれど……また、未確認の魔導師を増やす事になるわね。

前線に出れない実力であれば問題にはされないでしょうし、別の事が難しい実力であれば警戒はされないでしょうけれど、暴走する人が現れる可能性はあるわ。

その辺はどうするつもり？」

「クロノ辺りの実力者に、監視や案内という名目で実質的な護衛をしてもらうのが一番だろうな。後は、迂闊な事をするると暴走する危険があると警告しておくくらいか。リーゼにも付いてもらえたらクロノの負担が減るだろうが……拒否される可能性はあるだろうな。

闇の書がチャチャから離れたら不安定な状態になるようにしておけば、いくら阿呆でも理解出来るか？」

「そんな危険物を持ち込むなど言っている人達が、転送ポートの使用許可を出さないようにしているみたいだけれど……隔離施設であれば大丈夫かしらね」

「闇の書を無理に抑え込む事の弊害だが、チャチャが命を張って対処している事にして、同情してもらおう方向はどうだ？」

実際、まだ起動していない事になっているんだから、色々無理をする事は間違いないしな」

「そんな事をしなくても、話がスムーズに通ってくればいいのだけ

れど」

そんな感じで愚痴大会になりかけた時、玄関が開いた。

具体的には、テスタロツサ家の娘達が帰ってきた。

「あら、お帰り。アリシア、フェイト、アルフ」

「ただいまー!」

「ただいま、母さん」

「今日も怪しい気配は無かったよ。」

「けど、エヴァや恭也達がいるんだから、ここまで警戒しなくてもいいんじゃないかい?」

「何を言っているの。手出しをしてきたゴミがいる以上は、警戒しない理由が無いわ。」

「それとも、自分の主を守る事が嫌だとしても言うのかしら?」

「そうじゃないけどさ……訓練に集中出来なくて、なんか悪いんだよ」
ちよつとお疲れに見えるアルフ。

プレシア・テスタロツサに厳命されて、外出中はずっと警戒し続けているのが原因。

両方の気持ちは理解出来るし、家族の事だから口出しはしない。

「プレシアさん、口調があまり子供に聞かせられない感じになっていくわよ?」

「あら。駄目ね、こんな事ではアリシアとフェイトを怖がらせてしまうわ。」

ところでアリシア、エヴァンジュに言いたい事があったのでしよう?」

「うん。」

「……えへへ」

プレシア・テスタロツサの強引な話題転換に促されて、前に出てきたアリシア・テスタロツサ。

何故か、曖昧な笑みを浮かべてる。

「どうした。別に悪い事じゃなさそうだし、言いたい事を言えばいいんだぞ?」

「うん。えーと、おねえちゃん、つてよんでいい?」

「姉、か。それは構わんが……フェイトの方が大きいのに妹だから、甘えにくいのか？」

割と甘えてる気はするけど。

でも、フェイト・テスタロッサはアリシア・テスタロッサを姉として扱ってるし、アリシア・テスタロッサ自身はさほど気にしてない感じだけだ。

「ううん。きんぱつどーめー！」

エヴァおねえちゃんでしょ、シャマルさんでしょ、カリムおねえちゃんでしょ、アリサおねえちゃんでしょ、フェイトでしょ。

いっぱいいるよ？」

確かに関係者には金髪が妙に多い。

学校や幼稚園には少ないから、仲間が欲しくなった？

アギトとユニゾンした八神シグナムは……入れない方がよさそう。今は魔法を教えてないし。

だけど、姉呼びをいちいち確認してくる辺りは、律儀としか言いようがない。

「ふむ。ユーノは入れなくていいのか？」

細かいところではアレックス・オーラムも金髪だし、武装局員にもちらほらといる。

まだ会わせてないけど、ヴィヴィオもそう。

でもまあ、この辺はいいか。

「あ……えへ。」

えつと、うん。わすれてない……よ？」

「そうか、忘れていなかったか。」

金髪同盟を作って、何をしたかはあるか？」

どう見ても忘れてたけど。

でも、むやみに掘り返すのも大人気ない。

「んー、かみのおていれ？」

かみはおんなのいのちだー、とかきいたよ？」

「……プレシア？」

「いいえ、そんな事は教えていないわ。」

髪なんかより、笑顔の方がよほど大事よ」

お姉様の疑惑の視線を、あっさりと跳ね返したプレシア・テストタロツサ。

遺体を必死で維持してきた過去を持つだけに、重みが違い過ぎる。

「リンディ……ではなさそうだし、エイミイあたりか？」

「あら、その辺は信用してもらえているのかしら。

エイミイは……違和感が無いわね」

「うん。エイミイおねえちゃんがいったよ」

「そうか。しかし、髪の手入れか……髪の長さではプレシアやリンディもかなりのものだ。

話を聞くと参考になるぞ？」

「エヴァおねえちゃんは？」

「私は自分でやっていないからな。だから、どうすればいいか解らん」

実際は、無限再生でベストな状態を維持してるだけだし。

主や私達、チャチャマル、チャチャゼロ、従者達も同様。確実に使い魔達の方が詳しい。

最近になって八神はやての髪で慣れてきたけど、私達が参加するのは意味がある？

「そっかー」

でも、それを抜きにしても、お姉様は参加すべき。

アリシア・テストタロツサを困らせると、5+26年モノの過保護者が怖い。



こんな感じで一見静かな状態を維持したまま、火曜日になり。

ようやく凶悪犯に限っての全力魔力蒐集が認められ、八神チャチャが蒐集担当として時空管理局の本局……ではなく、本局の比較的近くにある収容所へと転送ポートで送られた。

もちろん、闇の書を持って。起動して見えないように見せるために鎖で縛ってあるから、蒐集時も見ただ目上は本を開かずに行う。

予定通りに、監視兼護衛としてクロノ・ハラウンが同行。収容所に着いた時点でクロノ・ハラウンからの紹介という形でリーゼ姉妹も合流し、この3人のうち誰かが常に傍にいる事になった。相変わらずリーゼ姉妹の視線がきついけど、オハナシした結果だから仕方ない。対外的には1年前の事件を引き摺ってる事になってるから、変な行動に出ない限りは問題ないし。

そして、本局近くでリーゼ姉妹の保護下に入るなら、ギル・グレアムの世話になるという流れになるのは当然で。

「君には随分と世話になったが、望んだ結果を出せているかね？」

自ら足を運んできたギル・グレアムと面会なう。

場所は、収容所にある会議室。

特に盗聴などがされてない事は確認済み。わざわざこんな所を盗聴する酔狂な人がいないし。

「今のところは、想定範囲内。」

今後危険性があるかどうかは、管制人格の起動でどこまで介入出来るようになるか次第」

「なるほど。危険な橋を渡らずに完了する見込みはどれほどかね？」

「正直に言えば、可能性はあまり高くない。」

過去の事例や改変の記録を見る限り、管制人格を起こし、現状とあるべき姿の確認と調整を行う際に、障害となる防衛プログラムを力尽くで排除する事になる可能性が高いと見てる」

「そうか、リンディ提督から伝えられた情報からの変更は無いか。」

エヴァンジュも同意見という事でいいのだね？」

「当然。排除の際に問題になりそうな、時空管理局や裏側の方の調整や対処は大丈夫？」

「使用する世界の選定は行っているし、その際に同行する者の人選も進めている。」

様々な柵しがらみもあって、数名の高官と、査察官や執務官を10名程、他に数人は連れていくことになりそうだが……関係各所を納得させられる人物という時点で、なかなか難しくくてね。

人格や行動基準については、保証し切れないかもしれない」

「予め要警戒の人を挙げておいてもらえると、対策しやすい。

問題になるのは、半数くらい？」

むしろ、半数で済めば御の字。

ギル・グレアムが関係した組織的にも、最高評議会的にも、真つ黒な人物が多く混じるはず。

清廉潔白な人物が数人でも混じれば奇跡。そんな人だけが集まる事は、最初から期待しない。

「そうだね。ある程度は説得もするし、私も同行する。

老いたとはいえ、勇士と呼ばれる身だ。枷となる事くらいは出来るだろう」

「解った。

可能なら説得に使える資料を探すから、人選が決まったら教えてほしい」

「無限書庫、か。うまくいけば、本格的に稼働させられそうという話じゃないか。

つくづく、君達には驚かされるよ」

「私達を中心に動けたのは、偶然が重なった結果。狙ってやったわけじゃない。

本来はユーノ・スクライアに任せる予定で、デバイスも実力の底上げを狙ってた。

ただ、思ったよりも危険な情報が多く見付かっている。私達から見たら、闇の書の闇より、時空管理局の闇の方が怖い」

「それに付いては、リーゼ達やクロノ、リンデイ提督からも話を聞いている。

私自身も理念から外れた身だ、否定もし辛いけど……今は改善する為に構想を練っているところだ。

君達が夜天の魔道書を知るように、私達は時空管理局を知っているつもりだ。今すぐというわけにはいかないが、可能な限り何とかしよう」

A S編34話 最後の

その後、八神チャチャは収容所に行ったり、地球に戻ったり、こつそりと別の次元世界へ行ったりしながら、蒐集を続けてる。

もちろん、黒の騎士団も活動を継続中。

合わせると、ペースはまあまあ。回復するまで闇の書を起動しない前提に、アースラのスタッフからの蒐集を早めに終えた事もあって、管制人格の起動に必要なページは目前。

というわけで、11月最初の土曜日の今日。

朝早めの時間に別荘へと来たカリム・グラシア達、つまり聖王教会や時空管理局からの派遣組は。

「これは、なかなか難しいですね……」

「はい。ですが、確かにこれまでよりカートリッジの力を感じる気がします」

「力を扱う技術って、体術と自身の魔力操作以外は研究されてなかったからね。」

魔力さえあれば、これだけで充分な力を扱えるし。魔力が無い人が魔力の研究をするのも難しいしね」

「でも、いくら私に適性が無さそうだからって、試すのも駄目って酷くないですか？」

急いで行わすべき事も特にないため、気の適性検査をしてる。

適性の高い方からシャツハ・ヌエラ、シルフィ・カルマン、カリム・グラシアの順だけど、3人共それなり。守護騎士達と大差ない水準とも言えるから、うまく扱えば問題ない。

マリエル・アテンザは、黒羽早苗と変わらない水準。つまり、原則使用禁止。可愛そうに。

「そうは言っても、適性を考えると危険なんだぞ？」

それに、カートリッジを使うのは駄目と言ったが、気の鍛錬や研究を禁止する気はない。美容効果狙いで鍛錬に参加するもよし、それに適性があるシルフィと組んで差の理由を調べるもよし、適性がなくても安全に使うための方法を探すもよし、だ。

「適性が無いからこそ可能なこともある。そう悲観するな」

「でも、やっぱり使ってみたいじゃないですか。」

「魔法の素質だって、それほどないですし」

「その気持ちは理解出来るが、あえて言ってみよう。」

「望んだ結果として過ぎた物を得てしまうと、なぜこんなものを望んだんだ、としか思えなくなるぞ。ついでに、少しでも魔力を持つ分、アリサよりは恵まれている。」

「制御に失敗した時のリスクは……私が腕を吹き飛ばしかけた時の映像でも、リンディに見せてもらったらどうだ？」

「もう、見せてもらっています。言っている事も理解出来るんですけど……」

「マリエル・アテンザは、どう見ても未練たらたら。」

「めっちゃ不満そう。」

「そんな感じで膨れてるところに、高町家の兄妹とテストタロッサ家の御一行様が到着。」

「ただし、高町美由希、アリシア・テストタロッサ、アルフを除く。3人は、道場で軽くりハビリを兼ねて体を動かすらしい。」

「あら、もう始めているの？」

「素質の確認は終わっているのかしら」

「真つ先にお姉さまの方に来たのは、プレシア・テストタロッサ。」

「どうも、興味津々。技術者としての興味が勝ってる感じ。」

「終わっているが、お前ほど素質がある人物など、滅多にいないからな。」

「チャチャが本局で簡易調査をしているが、別荘に連れてきた連中の水準は異常だ。上位陣……高町や月村に匹敵する可能性があるのは、100人に1人もいないのがほぼ確実のようだぞ」

「そう。リンディが期待しているような、高ランク魔導師の鼻を折る事は難しいのかしら？」

「微妙なところだな。守護騎士達やフェイトからカイゼくらいは素質なら、そこそこいる可能性が高いようだが……簡易調査では判らん事も多いし、そもそも全てを解明出来ないしな。」

それに、高ランクの連中の中にも素質がある者は似た割合で存在する。そいつらの選民意識が暴走しない保証は無いな」

「それでも、中ランクの局員の底上げになるなら、交渉では使えそうね。」

それに、技術的にはベルカ式、聖王教会向きでしょうから、そちらとの話し合いでも、ね」

「そうなんだが、リンディが管理局にどこまで喋るか次第だろうな。」

カートリッジシステム使用の不可を判断するための簡易検査技術、とかに落ち着く可能性もあるし。それはそれで有用だが」

「いずれにしても、要研究かしらね」

そうやって話をしているうちに、他の人達は頭を下げたり手を上げたりで挨拶した後で、ケアンズ拠点へ移動。

でも、プレシア・テスタロッサは移動する気配がない。

「行かなくていいのか?」

「いいのよ、今日は料理の方に参加させてもらうから。」

日本よりもこのの方が、アロシアが食べ慣れた味を作りやすいのだから、活用させてもらうわ」

「……そうか。相変わらずだな」

「もちろんフェイトにも馴染のある味……の、はずよ」

「忘れかけていたというよりは、自信がないのか?」

「フェイトがこの世界に来る前、最後に食べていたのは、リニスの味だもの。」

基本的には私と同じはずだし、同じだと言ってくれるけれど」

「そこは、娘を信用しなくてどうする」

そうやって話しているうちに、次の人達が到着。

長宗我部千晴、真鶴亜美、夜月ツバサ、黒羽早苗の4人。

「あ、エヴァさん。今日も調理場を借りるね」

「来たわね。さあ、今日はスープを極めるわよ」

「おー!」

お姉様の了承を待たずに盛り上がる、プレシア・テスタロッサと黒羽早苗。

味見能力を持つ夜月ツバサは、巻き込まれないようちよつと離れる。

調理場には、既に八神はやてとお姉様の従者達、ついでにザフィーラがいて、色々と準備中。

そこから見える食堂に主がいるけど、片隅で宿題の真っ最中。料理に参加する気はないらしい。

「いいのか？ あれ」

「……まあ、楽しそうで何よりだ、とでも思っておくさ」

「お相伴にあずかれるのだから、役得よ？」

呆れてる長宗我部千晴と、諦めてるお姉様。

でも、真鶴亜美はちよつと嬉しそう。

「確かに、あのレベルの料理技術やレシピに比べたら、材料くらいは安いものだな。」

「この際だから、お前達も混ざるか？」

「私はあのレベルについていけねーし。大人しく味見役でもしとくよ」

「そうね、子供を見ながら作るには、少々手間がかかっているものが多いわ。」

味付けやちよつとした工夫は参考になるものもあるけれど、作り方はちよつと真似し辛いわね」

完全に料理人の道を驀進してる黒羽早苗。

魔法の練習もちよつとだけしてるけど、明らかに優先度は低いし。

「あいつに魔法を使わせる必要も無いだろうし、本人も楽しそうだから、料理を任せておくのがいいんだろうな。」

魔力量と特殊能力を考えると、蒐集的にもお得か……？？」

「あー、闇の書だっけか。私達はいいのか？」

「お前達は、特殊能力まで蒐集されると危険すぎる。」

「そこまでコピーされる可能性は低い様だが、なるべく安全策を取りたい」

「やっぱ、見付けられねーのはマズいか」

「私の場合は、治癒能力かしら？」

「そうだな。それと、健康な体というのが状態異常に対する耐性だと、氷結や石化に抵抗されるようになる可能性がある。」

決戦になった場合にそれらの魔法を使う可能性がある以上は、な」「じゃあ、アタシは読心が問題？」

黒羽早苗とプレシア・テスタロッサが建物に入っただけで、夜月ツバサが会話に参加。

まあ、質問の答えは予想通りだろうけど。

「そうだな。そこから作戦が漏れる可能性はあるだろうか？」

「まあ、ね。最後の戦いで失敗するわけにはいかないって事でしょ？」

そんな感じで、転生者組の3人も、聖王教会組＋1と合流。

ベルカ式使いという事で割と仲良くやってるし、1人ミッドチルダ式のマリエル・アテンザは、技術者として輪に入ってる。

騎士として後輩にあたるという感じで、カリム・グラシアやシャツハ・ヌエラも指導する事に異議は無い様子。知識や技術的にも、お互いに利のある交流になってるから、心配はいらない。

さて、とお姉様が建物に入ろうとしたところで、今度は月村すずかと馬場鹿乃が到着。

馬場鹿乃はあまり似合わない黒のスーツ姿で、月村すずかの斜め後ろに立ってる。

月村忍による、護衛としての教育の一環。まず形から入ってみるらしい。

「ふむ。護衛役が少しは板についてきたか？」

「役に立ってる気がしねえよ」

あまりに似合っていない姿にお姉様が笑っていると、馬場鹿乃は大きくため息をついた。

見た目だけで言えば、威圧感だけはばっちりなのに。

「だけど、変なおじさんの視線は減ってるから。」

痴漢とかの対策にはなってると思うよ？」

「……嬉しくねえ評価だな」

「それが、戦闘を望んだ馬鹿の最後の言葉だった……」

「やめてくれ！ それは洒落にならねえ!!」

お姉様の冗談が通じなかった。
せつかくのフォローを受け入れなかった罰。大人しくいぢられる
がよい。



その後も、人が来たり帰ったり、休憩したり訓練したり。

昼近く、昼食の準備が出来る頃に、お姉様が動いた。

「早苗、ちよつといいか?」

「うん、そろそろ準備も終わるし。」

何かあったの?」

「いや、無理強いはしないが、1つ依頼がある。

魔力を蒐集させてもらっていいか?」

「んー、確認するって事は、何か問題でもあるの?」

こてん、と首を傾げる黒羽早苗。

この辺の話は、あまり聞いてないらしい。

「影響はなるべく抑えるが、1時間ほど安静にした方がいい程度の体
調不良と、しばらく……2週間近く魔法が使えないのは確実だ。

それ以外は、今の所確認出来ていない」

「それと、目的は?」

「最終的には私の姉を助ける事だな。芋蔓的にはやて達も助けること
になる。」

その為に必要な事の為の準備、くらいの位置付けだ。他の伝手やら
も使つて行つている、献血に似た作業だから、お前である必要性は無
い。嫌なら断つてくれて構わないぞ」

「そっか、誰かじゃなくて、広く浅くって感じなんだ。うん、いいよ。

みんなが食べ終わってからでいいかな?」

「こちらの準備もあるから、その程度の時間はある。」

むしろ、食事の邪魔をして連中に怒られる方が面倒だ」

というわけで、蒐集の予約終了。

闇の書は現在、黒の騎士団として動いてる八神ヴィータが持つて

る。

蒐集と引き渡し完了まで、予想ではあと1時間くらい。それが終わるまでは作業出来ない。

というわけで、食事の時間。

ケアンズ拠点にいた訓練組も合流して、わいわいと昼食。

スープを極めるとか言ってたのに、豚汁やボルシチ、カレーまで出てきてるのは、きつと気にしちやいけない。クリームシチューやビスクもあるし。

パンにご飯はもちろん、うどんや餅まで用意してある。

主食の米に別荘産が多いのは、在庫削減のためらしい。現行の日本産の方が気に入ったようで、次回以降はそっちも生産するために、頑張って農地の改良や拡張をしようとのこと。

「それじゃあ、私はアリシア達に昼食を持っていくわ。」

あの2人じゃ、どんなものを作るか心配なもの」

「あ、母さん。私も」

うん、高町美由希とアルフの料理が信用出来るかということ、無理っぽい。

しかも、黒羽早苗の料理は回復効果付き。

愛娘のために持つていこうとするプレシア・テストロツサも、一緒に行こうとするフェイト・テストロツサも、いい感じで家族をしてる。

「あ……えつと……」

「一緒に行ったらどうだ？」

今日はアリサが来ていないし、アリシアがいるのは高町の道場だ。

自宅に戻って食事にしても不自然じゃないし、賑やかな方がアリシアも喜ぶぞ」

テストロツサ親子、正確にはフェイト・テストロツサの様子を見た高町なのはが迷つてるところに、お姉様が後押し。

迷ってる理由は、八神はやたと月村すずかにも向いてた視線を見ればすぐに解るし。

「ん？ 私なら気にせんでええよ。」

エヴァアさんやアコノさん、他にも大勢いるし、今日はお昼から病院

や。

「早めにここを出なあかんから、あんまりゆっくり出来へん」

「私もご飯が終わったら帰る予定だよ、なのはちゃん」

「そっか。じゃあ、私も」

「俺も一度戻ろう。少し用事を済ませてから来たいが、大丈夫か？」

「私は夕方頃までにいるし、大丈夫だろう。」

「誰がいるか確認してから来た方がいいかもしれんが」

「解った」

「というわけで、高町兄妹も退場。」

「それを見送った主の反応は。」

「ユーノの立場が、順調に無くなってる気がする」

「このままだと、なのフェイ派が歓喜する展開になるのか？」

「2人とも恋愛感情は無さそうだし、そういう年齢でもないとは思
うが」

「それでも、これ以上存在感が無くなると厳しいはず。」

「一度離れて想いに気付くとか、そんな仲でもなさそう」

「あいつらの恋愛にまで口を出す気は無いし、なるようになるだろう。」

「なのはに変な虫が付くなら家族が黙っていないはずだがユーノに
は好意的だし、なのは自身も嫌っている様子は無いしな」

「ユーノの方は？」

「知らんな。発掘の責任者を任される程度に大人扱いされていたはず
だから、そういう文化の部族なのだろう。」

「ならば、それを尊重するまでだ」

「ユーノって人とはあんま会ってへんけど、悪い人には見えへんかつ
たし。」

「焚きつけるのはあかんの？」

「あの2人は恋愛方面に疎そうだが、やりたいなら止めんど。」

「もっとも、ユーノはもうしばらく無限書庫に籠もる事になっている
し、終わった後にどうするかは聞いていない。」

「元々地球の人間ですらないんだ。最後にどうなるかよりも、一歩踏
み出す時の壁が問題だな」

「そっか。ままならんもんやね」



そんな感じで昼食も終わり、それぞれ訓練等のやるべき事に戻っていく。

料理担当の黒羽早苗は、後片付けやおやつ準備まできっちり行ってから、医務室で約束の魔力蒐集。

その結果。

「……400ページ到達、か。」

有り難う。現状で必要な作業の、最後の一步になったようだ」

「役に立てたなら良かったよ。」

さてと、夕食の仕込みをしたいから、行くね？」

いやいや、それは。

「ちよつと待て。せめて1時間程度は安静にしておけ」

「え？ 思ったよりも体調はいいし、大丈夫じゃないかな？」

確かに、顔色は悪くないし。

足取りもしっかりしてるし。

動くなど言い辛い程度に、問題無さそうにしか見えないけど。

「それでも、安静にしている。」

何かあってからでは遅いんだ。私を安心させるためだと思ってくれ」

「そっか……うん。わかったよ」

やつとで納得してくれた。

念のためベッドに横になったけど、何だか、顔色が悪くなってる気がする？

「うー、気持ち悪い……」

料理してた方が、気が紛れそうだけどなあ」

「どこまで料理好きなんだ。」

正直に言って、ちよつと異常だぞ」

「そうかな、面白いよ？」

前の人生で一番打ち込んでた事だから、そのせいだと思うけど」
作るのも食べるのも楽しい、というのは理解出来る。

それでも、ちよつと突つ走り過ぎの様な？

「前世も料理人だったのか。自分の店でも持っていたか？」

「それはそれで、面倒も多いからね。調理師専門学校を出てから、小さなホテルで働いてたんだ。

料理長がフリーダムな人で、一緒に色々と挑戦させてもらえたし。食べた人を笑顔にする料理を目指すっていうのは、料理長の影響だよ」

「そうか。特典でそれを望んだのは、自力での達成を諦めてたのか？」

「他に何も思い付かなかつたから、料理長の言葉をそのまま言ってみただ。

具体的な要求はダメ、とか言ってたしき」

確かに、切れ味が新品のままの包丁とか、道具系は具体的になるだろうし。

金銭面だと、きつと金ゴールドへの変換資質が、お金関連の特典の結果。期待した物でないのは確実。

その意味では、害のない選択だったかもしれない。

「食べてほしい、元気になってほしい、笑ってほしい、だったか？」

料理人なら食べてほしいのは解るし、食べて笑ってほしいは解るが……元気はどこから出た？」

「医食同源、元気じゃなきゃ心の底から笑えないだろ、ってね。

そのせいか、薬膳とかの研究もしてたし。あ、和洋中その他を問わずに手を出してたから、料理法や食材に拘りは無いからね。守りたいのは伝統じゃない、笑顔だ！ とか言ってたさ」

「言いたい事は解るが、随分と極端だな。

その影響を受けたお前は、今度は異世界の料理に手を出すわけだ」
「ボクも料理長と同じで、新しい可能性を探したりする方が好きだし。伝統を守るのは、その意思がある人に任せるよ」

「適材適所、か。

その考え方なら、将来は私の所……私が関係している会社に旅館や

料亭もあるから、その辺で働いてみるか？

表向きとしては難しいだろうが、個人的になら別荘の施設や農地、異世界の情報も使えるぞ」

「いいかもしれないね。」

えーと、前向きに考えさせて頂きます」

A☒S編35話 聞こえない声

翌々日となる月曜日。八神チャチャと闇の書が、次の蒐集対象を選定するまでの休息という事で地球に戻ってきた。

既に前提条件をクリアしたし、作業は早い方がいいだろうという事で、リンディ・ハラオウンとプレシア・テスタロッサ立会いの下、リインフォース 夜天の管制人格の起動を行うことになった。

起動といっても、危険性は低いはず。山の方に遊びに行っていた時にたまたまという事にして、念のため人里からは離れておく程度。変に遠くや別の次元世界に行くと説明が厄介だし。

というわけで、こんなこともあろうかと！ 普通自動車免許を取得していた八神チャチャがレンタカーを借りてきて、守護騎士代表のシグナムも含めた6人で、海鳴温泉に向かうドライブコースの半ばにある、公園になつてる小さな城址へ。

本来は見晴らしのいい展望台もあるけど、今日の天気は曇りだし、平日だから人気は少ないと予想。駐車場や道路から見えない場所も多く、念のため人払いをした上で使わせてもらうことに。

「やっぱ、エヴァさんは力あるなあ。」

男の人やつたら、ドキドキするところや」

八神はやてはお姉様に抱き上げられて、車から折り畳みの車椅子へ。

体力的に余裕だし、特別な車を用意する必要も無いから、今後はこの方法での移動もちよくちよく行う予定。

「そう言いながら、なぜ胸にすり寄ってくる？」

揉み魔だという事は知っているが」

「このふわふわした感覚が何とも……はっ!？」

わ、私は皆様のバストアップに貢献しとるだけや！」

「前半は意識が飛びかけていたぞ。」

それに、私やアコノ、守護騎士達も不老だ。基本的に体形が変わらんから、揉んでも大きくなることは無いぞ」

むしろ、自身の胸を心配すべきでは？

Strikersのドレス姿を見る限り……ねえ。

(予定通りにいけば、ずっと今の姿のままだ。)

それは言わない方がいい
はーい。

そんなこんなで、予定の場所に到着。

闇の書は八神はやての手の中にあるし、傍にお姉様と八神シグナムがいる。

リンディ・ハラOWNとプレシア・テストロッサは少し離れたところで様子を見てる。八神チャチャがいるのはそっち。

「手順としては、強く念じること。それだけやね?」

「はい、主はやて。」

人格起動に特別な魔法は必要ありません。書を手に取り、強く承認する事を願えば、その意思を闇の書が読み取るはずです」

「ああもう、また敬語になつとるし、呼び方も」

「申し訳ありません。ですが、今は守護騎士としての発言をお許し下さい」

「そこも問題やけど、闇の書やない。夜天の魔道書や。」

「私らが間違えたらあかん」

でも、今は対外的に闇の書なわけで。

むしろ、完治後に夜天の魔道書と呼んだ方が、立場的には良さそうな気もするけど。

「さてと、風景を楽しめる天気でもないし、早速始めるか。」

打ち合わせ通り、チャチャがはやてと休憩中、私達が少し離れたタイミングで起動したという体裁を取るから、居場所や記録はそれに準じた形で頼む」

というわけで、お姉様、八神シグナム、リンディ・ハラOWN、プレシア・テストロッサの4人は、展望台の方へ少し移動。

それを確認すると、八神はやては闇の書を取り出して。

「おきろー、おきろー」

「いや、起こすんじゃないで、承認するんだが……ん?」

大真面目な八神はやてには悪いけど、その方法では……?」

何かがおかしい。少なくとも、起動させようとする意思は見せてるわけ。

「……魂 Gef·ngnis der Seele の 牢 獄！」

お姉様、何を……って、夜天が起きてる？

半透明で妖精サイズの姿を投影してるみたいだけど、八神はやては気付いてない。

夜天は悲しそうな表情で、その様子を見てる。

「エヴァさん、いったい何が？」

リンディ・ハラオウンが代表で質問してくるけど、プレシア・テスタロッサと八神シグナムも驚いてる。

誰も気付いてなかったらしい。

「恐らく、強烈な認識障害だ。今はやてと夜天を隔離した状態にして、こつちへの影響を防いでいる。」

とりあえず、話が出来ないか試してみるぞ」

（夜天、聞こえるか？ まさか、この状態でも管制通信すら通らんとか言わんだらうな？）

（……この方法で話が出来るといふ事は、本当に私の関係者なのだな。

初めまして、と言えばよいだろうか）

おお、通じた。

何だか声が暗いけど。

（ああ、初めましてだ。私としても会った覚えは無いからな。

それより、その認識障害はどうにかならんのか？

その状態では、はやてと話すことも出来んだろう）

（これは私を縛る鎖であり、檻の一部だ。書が完成しない限り、解放される事は無い。

400ページを超え、主の承認を得た事で対話と精神アクセス機能は回復しているが、それもどこまで有効か……）

（お前自身の起動ではなく、機能制限を解除出来るという事か……道理で、起動する条件やらに違和感があるわけだ）

管制すべき人格が最後かつ承認が必要だとか。

400ページとかいう中途半端なページ数とか。

原作では起動してないのに、夢で会ってたらしいとか。管制通信で微妙な反応があったりもしたし。

人格自体は目覚めてたとしか思えなかったのは、正しかったらしい。

(ところで、今の状況は？)

目覚めている事は解ったが、どの程度動けるんだ？)

(主が私を目覚めさせようとしていることで、鎖が若干緩んでいるだけだ。

それが無くなれば、私は再び書の中に戻るしかない。この声も届かなくなるだろう)

(そうか。時間が無いなら端的に済ませるぞ。

まず、書の構造を変更するには管理者権限の行使が必要だが、現状でははやても使えない。使うためには書を完成させた上で、防衛プログラムを停止させるしかない。あっているか？)

(恐らくは、そうだ。

私を知る限り、それ以外に可能となる条件は無い)

(防衛プログラムは最初からあるが改悪され、守護騎士達は後で追加されたもの。

夜天の魔道書自体を初期状態まで戻すと、防衛プログラムは正常になるが、守護騎士達は消える事になる。どうだ？)

(判らない。初期構造は、記憶に無いのだ)

(初期構造というか、改悪される前の状態が記憶にない。故に、暴走を一時的に何とかしても、根本的な対策は不可能だった。そうだな？)

(そうだ)

(ならば、話は早い。

初期状態は、私が記録している。防衛プログラムの正常化や改悪部分の修正はそれを使えば可能だし、うまくやれば守護騎士達を残すことも出来るだろう。とりあえずの手掛かりとして、それを渡しておく。

未来に希望がある以上、絶対に諦めるな。はやてには私達と共に生きることについても話をしているし、これまでの様に殺してしまうの

は、私が許さんぞ)

夜天の魔道書の初期構成情報の転送開始。
情報量としてはかなり多い。

転送に時間がかかるし、今の夜天に受け入れる容量があるかが心配。

(そうだな、この様な状態になったのは私が誤ったからであり、責められるべきは私だ。

済まない)

(謝るくらいなら、しっかりとはやてを支えてやってくれ。

普段は管制通信が通らないなら、何度かはやてに頼んで話す機会を用意してもらおうつもりだ。その時に、現状や正常化の方法を確認したい。現時点で可能な調査をやっておいてくれるか?)

(現状で出来る事は、あまり多くない。

だが、可能な限りやってみよう)

(頼むぞ。闇の書としての蒐集が終わった時が正念場だ、失敗は許されんからな。

それと、はやてに伝えたい事はあるか?)

(この様な悲劇に巻き込んでしまい申し訳ない、と)

(はやても、恐らく謝罪は受け取らんぞ。

罪の意識で萎縮する事も嫌がるだろうな)

(そうか……そうだな。

では、騎士達に暖かい時間を頂けた事に感謝する、と)

(了解した。

そろそろ限度だろう。今回はここまでにしよう)

お姉様が視線を向けた先は、元気が無くなってきてる八神はやて。反応が無いように見えるから、拗ね始めてる。

初期状態の転送は終わってないけど、量が多すぎ。今回は基礎部分のみで、次回以降も順次転送する方向で。

「済まないはやて、何とか話は出来た。

そろそろいいぞ」

「えー……何も無かったからって、嘘はあかんよ」

認識阻害をまともに受けたままだった八神はやてには、姿も見えていなかったはず。

そりゃあ、信じるのも難しい。

「いや、本当だ。少なくとも姿を見せていたのは、リンディやプレシア、シグナムも見ている。」

状況としては、お前が直接話せなかった点以外は想定の内だな。

夜天は、騎士達が幸せそうに暮らしている事に感謝していたぞ」

「そっか。今後の方針は決まったん？」

「やはり、書を完成させる必要がある。」

書を完成させ、防衛プログラムを強制停止させた上で、お前と夜天が管理者権限で問題のある個所を修正する必要があるようだ。

その作業にも協力するし、それまでに何度か現状や修正に関して話をしたいから、今回の様な事を何度かしてもらおう事になるが……」

「うーん、何も無かったとしか思えへんけど……」

「そうだな、なら、ちよつといくつか実践してみるか。」

まず、ここに石があるな？」

お姉様は足下にあった石を1つ拾うと、右手の掌に乗せた。

「うん、小さくて黒っぽい石やね」

「ここに、認識阻害という魔法を、悪意ある方法で使うと……」

左手で黒龍を起動、カートリッジを2発ロード。

小石の存在の認識を、阻害する。

「無くなった……転移したん？」

「いや、あるぞ。」

あるという事実を認識出来なくなっているだけだ」

「ま、魔法ってこんなことも出来るんや……」

八神はやては、お姉様の手を触ってる。

石が無いように思えるのに、強く握ると何だか痛いという事に気付いて、再びびっくりしてる。

「こんな感じで、いる事に気付けなかったわけだ。」

ちなみに、外から見ているならこんな感じだったからな」

言いながら、お姉様は記録してた映像を空中モニターに表示。数枚の静止画だけど、様子は見える。

「おー、ほんまに銀髪美人のお姉さんや。なんか悲しそうな顔をしとるけど……」

「お前と話す事もままならん現実を悲しんでいるんだ。

こいつも、きちんと助けんとな」

「うん、そうやね」

何とか納得してくれた。

今後の動きとして、八神家側は問題無くなったけど。

「だけどこの映像だけでは、起動したという証拠には弱いわね。

小人の様な姿は記録出来たけれど……」

リンデイ・ハラオウンは、先ほどの光景の記録を確認してる。

確かに、八神はやてが闇の書を見て、闇の書の傍に妖精の様な夜天が浮かんでるだけ。

おきろーとかいう声は録音されてるけど、会話も無い。

「起動したようだ、程度の報告でいいんじゃないかしら。

守護騎士すら現れない、変則的な起動よ。管理局に行くときの鎖を止めれば、状況証拠としては充分よ」

「そうなるよ、私達が知らない間に起動していた事にした方が無難かしらね。

昨夜起動していて、今日は管制人格と話が出来ないか試した事にするのは、エヴァさんとしてはどう？」

「……問題ないと思うが、お前がその案を出してくるとは思わなかったぞ」

「えーと、日本では、毒を食らわば皿まで、と言ったかしら。

「ここで降りる選択肢は無いし、既に致死量の毒を摂取済みよ？」

「……………そうだな」



その後はせっかくなここまで来たのだからと、少し足を延ばして日帰

り温泉を楽しみ。

入浴の際に八神はやての目が、子を持つ2人に釘付けになってたのは、見なかったことにして。

確かに子持ちとは思えないスタイルの持ち主だけど、と呟きつつ。どうせ車だからと、幼稚園にアリシア・テスタロッサを迎えに行ったりしながら帰ってる。

「ふふー、おねえちゃん」

当のアリシア・テスタロッサは、お姉様の膝の上でご満悦。

隣に座ってるプレシア・テスタロッサは、それを見て嫉妬……とかは、特にしてない模様。ニコニコ笑いながらその様子を見てる。

「同じ金髪だからといって、そこまで気に入られるようなことをしたか?」

「え? わたしをたすけてくれたおんじんさん、つてきいてるよ?」

「……意味は理解しているのか?」

「うん。えーと……」

言ってもいいの? と聞いたそうな目で八神はやてと八神シグナムを見てる、アリシア・テスタロッサ。

事情をどこまで知ってるのか、伝えていいのか判らない感じに見える。

「ああ、はやてとシグナムがいるからか。

というか、その判断が出来るのか……」

うん、この幼女も判断力的に見てチートだった。

体は子供、頭脳も子供、本来の戸籍上の年齢だけ大人、のはずなのに。

なんとという原作関係者のチート率。

「だれにもいつちやいけないうよ、つてママにいわれたもん!」

「ああ、偉いわアリシア……」

「……プレシア、どこまで説明してあるんだ?」

「事故で長い間眠っていた事と、それを治療してくれたのが貴女だという事よ。」

目覚めてからの長い入院生活や、フェイトに姉と呼ばれる理由の説

「明くらいは必要でしょう?」

「まあ、現実的に見て妥当な範囲。」

それでも、5歳で秘密を守るアリシア・テストロッサも、転生者と疑っていいレベル。」

「普通の5歳の女の子なら、何でも喋る年頃のはずなのに。」

「……やっぱり、おねえちゃんはだめなの?」

「ちよつと悲しそうというか、泣きそうな目でお姉様を見てるアリシア・テストロッサ。」

「ああ、いや、私を姉と呼ぶのは別に構わないぞ。」

「理由が少し気になっただけだ。私が治療したから、なのか?」

「んーと、フェイトのほうがおっきいのに、ねえさんってよぶし。」

「きんぱつどーめーのなかで、おねえちゃんがいちばんとしようえなんだよ?」

「製造的な意味では、私達やチャチャマル、チャチャゼロの方が早いかもしれない。」

「でも、お姉様には前世的な意味で20年の加算があるし。」

「現状の外見を考えると、お姉様と八神シヤマルが一番上に見えるようになってるし。事実上は、確かにそうかもしれない。」

「まあ、確かにそうだな。」

「甘えられる相手が欲しいのか?」

「ママはだっこされるとくるしいし、フェイトはなんだかえんりよしてるし?」

「ほかのひとも、おもちゃにするか、ちよつとえんりよしてるかだし……」

「あ、プレシア・テストロッサが崩れ落ちた。」

「ダダ甘の悪影響。力いっぱい抱きしめるのは、確かに息苦しい時もあるかも。」

「あー、私と一緒にいるとのんびり出来るという事か?」

「そんなかんじー」

「体を捻ってお姉様に抱き付き、頭をすりすりと擦り付けて嬉しそうにアリシア・テストロッサ。」

その横で落ち込んでるプレシア・テスタロッサ。
車の右側と左側で空気が違う。

「ああ、でも、この笑顔は好き……」

……落ち込むのかとろけるのか。

せめて、どっちかにしてほしい。

AⅩS編36話 警戒するもの、すべきこと

その後、八神はやてを家まで送り、お姉様はリンディ・ハラオウンやプレシア・テストロツサと共にアースラの現地拠点へ。

そこで行われた話は、闇の書の完成を目指す事を、時空管理局へどのように報告するか。

方針としては、ギル・グレアム及び悠久の翼が提示していた手法を考慮し、可能な限りの対策を行いながら蒐集を継続、と言う形を取る事に。闇の書の完成も被害が小さくて済む世界やタイミングを選び、対策が失敗した場合は凍結魔法による封印、更にアルカンシエルによる破壊の3段階構えという建前。

「だけど、エヴァさんの立場が少し悪くならないかしら？」

実際は、お姉様はアルカンシエルを使う事を視野に入れてる。

用途は原作通り。闇の書の闇、防衛プログラム「ナハトヴァール」の破壊。

「闇の書の対策に管理局が役に立たなかったと思われるのも、色々と面倒そうだからな。」

それに、過去の罪をある程度切り離す為には、見て判りやすい悪役も必要だ。私の本当の仕事、夜天の魔道書への修復はその後だから、別に私が悪役退治を請け負う必要性も無いしな。

ついでと言ってはなんだが、お前達の手で対処に成功した、という満足感くらいはあってもいいだろう？」

その意図を簡単に説明すると、いつちやえ☆敵討ち。

アルカンシエルがアースラに搭載され、アースラの艦長が前回の被害者遺族であるリンディ・ハラオウンだから提示する手法。

ユーノ・スクライアからの報告も送られてきてるし、夜天の魔道書自身が悪いのではない事は、2人に理解してもらってる。それでも、実際に暴走した相手を倒すという行為に、ある程度の意味はあるはず。

「そうね……だけど……」

「なに、私が単独で対処に成功するよりは、事後の騒動は小さいさ。」

少なくとも、私を不用意に持ち上げようとする馬鹿は減るだろうか
らな」

「代わりに、見縊る人が増えるわ。」

裏の世界で下に見られるのも、色々と面倒よ」

プレシア・テスタロッサも心配してる。

でも、今の言い方だと。

「私が単独か少人数で、アルカンシエル並みの攻撃が可能だと思っ
ているのか？」

防衛プログラムは、相当に手強いはずだぞ」

「何を言っているの。アルハザードは軍事国家なのでしよう？ そこ
で最終兵器と呼ばれた貴女に、不可能なわけがないじゃない。

それ以上の攻撃が可能だと言われても、驚かない自信があるわ」

「そうね……たとえおとき話や伝説で誇張された結果だとしても、あ
らゆる魔法が究極の姿と言われるだけの理由はあったはず。

その一端を担っていた可能性を考えると、ね」

お姉様、ふるぼっこ。

でも、実際問題として、認識が間違っていないから困る。

「……まあ、条件が揃えば可能かどうかで言えば、不可能ではないと言
うべきだろうが……そう気軽に使えるわけではないぞ。

運用面を考えると、既に必要な設備類は全て揃い、後はチャージし
て放つだけのアルカンシエルの方が、な」

必要な条件で最大の難関は、お姉様のやる気だけだ。

あとは、周囲の魔力素の量。周囲や別荘から一気に吸い上げすぎる
のも問題だし。

「まあ、そういう事にしておきましょう。

だけど、アルハザード由来だと知っている私達には、少しくらい見
せてくれてもいいんじゃないかしら？

今の常識からは考えられない実力だと予想出来るのだし、これだけ
の恩を受けておいて裏切るほど薄情でもないわ」

プレシア・テスタロッサは情報公開を要求してるけど、表情は何だ
か優しげ。

意図としては、さつさと吐いて楽になれよ？

「そんなに難しい顔で考える必要は無いわ。私達は、仲間でしょう？どこまで任せてよいか、どこまで役に立てるかを知る手掛かりくらいは欲しいものよ。」

情報の拡散を心配しているのでしょうか、私やアリシア、フェイトもこの世界の生活を気に入っているの。それを壊すような真似を好んで行う気にならないわ」

「そうね。この世界を気に入っているのは、私も同じね。たとえ限られた地域であっても、こんな穏やかな世界はなかなか無いもの。」

あと、これ以上巻き込むのはとか、考えるだけ無駄よ？

エヴァさんが平穩を勝ち取れなければ、時空管理局が崩壊しそうなもの」

裏の情報を知れば知るほど、ヤバさも増量。

リンデイ・ハラオウンは、クロノ・ハラオウンを経由して無限書庫での話が行ってるはず。

最悪の場合はお姉様との全面対決、というシナリオに現実味が出る。

「……気持ちは有り難く受け取るが、必要以上の力を見せびらかす気は無いぞ。」

そもそも、この件が終わったら地球に引き籠もる気でないしな。魔法自体を使わずに済めばいい……と、思っていたんだがなあ」

聖王教会から人が来たりしてる時点で、全く見せないと言う選択肢は取れないし。

どこまで見せるかは、考えておいた方がいいかもしれない。

「例えば、そうね……各種支援を得られた場合、1回の転移で本局まで行けるのかしら？」

リンデイ・ハラオウンが気にしているのは、攻撃時の猶予時間？

でも、お姉様は自力で別荘から無限書庫に跳んだ実績があるから、2回の転移で届くのは確定してる。

というか、実質的に別荘の位置を地球基準で管理してる以上、地球から跳べるのも確定してると言える。

「……届く可能性は、あるだろうな。」

位置の誘導や経路の安全が確保された状態、という事だろうか？」

「ええ。でも、やっぱり可能性はあるのね」

シヨックは無いみたいだけど、猶予時間がそれほど取れないだろうとは思ってるはず。

少なくとも、リーゼアリアを運んだ時よりも早いのは确实だし。

「それなら、防衛プログラムが暴れた時は、どの程度の戦力と判断していいのかしら？」

不安が残るのなら、本格的に戦闘の準備をしておくわ」

おおう、元条件付きSS、今は魔力供給無しでもSクラス以上が确实なプレシア・テスタロツサの参戦表明。

本来であれば、確かに頼もしい戦力だけど。

「……お前達には、言っておいた方がいいだろうな。」

私の全力がオーバーSなのは确实だ。アコノや妹達、チャチャマル、チャチャゼロもそうだ。しかも、妹達は同時に全員出せるわけではないが、それでも確実に10人以上出せる。

それに、前にも言った気がするが、私は敵味方の識別が下手だからな。迂闊に出られると、巻き添えで落としてしまうぞ」

3桁も鯖よんだー！

確かに2万は10以上だけけど！

役目的に全員出撃は無理だけど！

「そう。それなら、非常時を想定した準備をすればいいという事ね。」

馬鹿が手を出してくる可能性もあるし、何も無いと楽観出来る人生は送っていないわ」

「そうね、人生はいつだって想定外の連続。」

エヴァさんは、私達の後を追っっちゃ駄目よ？」

これからの作業で失敗する原因となりうる要素、时空管理局の思惑や闇の書の暴走に人生を狂わされた2人。

その言葉は、とても重い。

「……そうだな。気を付けよう」



夜になり、主、八神はやて、成瀬カイゼと八神ヴィータも含む小学生相当組が眠った後、八神チャチャマルとセツナ・チェブルーが別荘で色々をやつてる頃。

八神家のリビングに、お姉様、八神シグナム、八神シャマル、ザフィーラが集まった。

用件はもちろん、現状の夜天、管制人格の状態について。当の夜天……現闇の書は、テーブルの上にいる。

「……というわけで、強烈な認識障害が行われている様だが、何か心当たりは無いか？」

「あの子の事は、詳しくは覚えていないのだけれど……」

「そもそも、最近は会う事も少なかった。

私も当然のようにそれを受け入れていた……いや、疑問すら感じていなかったな」

「不自然だと感じられなかった事自体が、異常だったのだ。

記憶が摩耗しているのか、それとも、知ることも許されなかったのか……」

うん、証言が役に立たない事は確認出来た。

認識障害のせいか、改変のせいか、記憶保持のルールのせいか。原因の候補が多すぎて特定出来ない。

でも、八神シグナムとザフィーラは、認識障害に抵抗出来たような感じも。

「そうか。夜天の魔道書の事でも、管制人格の事でも、お前達の事でもいい。

改変や不自然な点に気が付いたら、教えてほしい」

「解った、それも改悪点の調査という事なのだな。

だが、夜天の魔道書の始まりを知るのなら、直接差を調べることは出来ないのか？」

八神シグナムの疑問は尤も。

だけど、原作情報としても無限書庫の情報としても、色々と問題が

判明してる。

「現状で闇の書の構造に手を出せば、主を取り込んで無限転生が発動する可能性が高い。つまり、はやてを死なせることになるんだ。

そもそも改変の可能性がある箇所は膨大だ。経験やらによる自己最適化で変化した部分だつてあるはずだから、単純な比較では改悪箇所だけを見付けるのは不可能だしな。

それと……最悪の場合は、私は夜天の修正を優先する。次がはやて、悪いがお前達はその後になるだろう」

最悪の中での最終手段は、夜天の魔導書の初期化。私達が確保している情報での完全上書き。

但し、これは夜天の記憶や守護騎士、八神はやてまで存在を否定する可能性が高い。

「はやてちゃん優先じゃないんですね……」

「可能性の問題でな。はやては現状、闇の書に半ば取り込まれて侵食を受けている状態だ。ここからははやてを切り離しても生き残れる可能性はかなり薄い上に、闇の書がそのまま存続する事になるだろう。

闇の書の闇を何とかした方が、はやての生存率も、成功率も、高いはずだ」

「主の魔導資質は闇の書の中……確かに、そうなのだろう。

我等が消滅することになった場合は、主を頼む」

「シグナム!？」

八神シヤマルが驚いてるけど、八神シグナムは落ち着いてる。

「我等は守護騎士。闇の書……いや、夜天の魔導書が無ければ生きられん。主や夜天の魔導書が優先されるのは当然だ。

それに、闇の書の守護騎士として、罪も重ねてきた。我等がいなくなれば、主が背負う事になる闇の重みも少しは軽くなるはずだ」

「我等も長く生きてきたのだ。

真に仕えるべき主の為に死ぬるのならば、本望と言えよう」

「ザフィーラまで……」

「あー、もう一度言うが、最悪の場合の、私が優先する順の話だからな。私としても、お前達を消滅させる気はない。

ただ、最悪の場合、私の手をお前達に向けられない可能性があると言っている。

その時は全力で抗え。はやての為を想うなら、絶対に諦めるな。仮に闇の書から切り離されたとしても、存在し続ける方法はあるんだ」「そうか……そうだな。優しい主だ、我等が犠牲となつて生き残つた場合、それも背負うべき罪だと考えてしまつても不思議ではないな。

ならば、最悪の状態になる可能性は、どの程度あるのだ？」

「高くは無いが、低いとも言えないと思つている。闇の書に関しては、想定範囲内ではあるが悪い方に状況が傾いているからな。

無限書庫にあつた情報だが、自動防衛運用システム、ナハトヴァール……恐らく改変された防衛プログラムの事だが、これが上位であるはずの管制人格や主の権限を封じ、自身を含む周囲の破壊を行うために暴走するらしい。

闇の書として完成した後、暴走し制御不能になるまでの短い時間が勝負だ。この間に夜天とはやてを逃がすことが出来なければ、かなり苦しいことになるだろう」

「ナハトヴァールが？」

何故、防衛システムがその様なことを……」

「どうも、闇の書の自己消滅を目指して改変された結果らしい。

目標は解らんでもないが、結果として致命的な改悪になつた例という事だろうな。

比較的最近のようだが、その時の記憶はあるか？」

この辺の説明は、かなり神経を使つた部分。

今で言う古代ベルカ系の技術者達が頑張りきれなかつた結果で、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトが生きていた時代より後の、ベルカが衰退していく時期の出来事だという程度の説明で終了出来たのは幸いだった。

「いや……そもそも、書が改変されたという記憶自体が無いように感じる。

シャマル、ザファイラ。お前達はどうか」

「ええと……ナハトヴァールも闇の書も、昔からあんな感じだったよ

うな気がするのだけれど……」

「だが、覚えているのは、書を完成させるために破壊を繰り返してきたこと、あれ……管制人格がいつも悲しそうな顔をしていた事くらいだ。

よく灰色の空を見上げていたような気もするが」

だめだこりや。

改変箇所の調査としては、やっぱり夜天に頑張ってもらうしかないさそう。あと、無限書庫。

下手に手出しすると主を取り込み転生するのが、無限書庫の情報からも確定してるし。

「そうか。これだけ強烈な認識阻害だし、散々改変された結果が今だからな……お前達も何らかの影響はあっただろうとは思っていたが、手掛かりも無し、か。

予想はしていたが、現実として見ると、やはり泣けてくるな」

お姉様もお手上げ。

夜天とは自由に話せないし、守護騎士達は手掛かりを持ってない。やっぱり、八神はやてに頑張ってもらうのが唯一の手段になりそう。



というわけで、夜が明けて。

朝食が済み、学生組が登校したり、守護騎士達も各自の仕事などの為に家を出たりした頃。

「ところでエヴァさん、闇の書を完成させるゆーとったけど、やっぱり危険なんか？

だいぶ前やけど、綱渡りとか、一歩間違えたら地球滅亡とか聞いた気がするんよ」

八神はやての、質問タイム。

というか、その話したのはゴールデンウィークの頃だった。良く覚えてたと称賛。

「そうだな、危険性は高いとしか言えん。

何が起こるかだが……お前が、闇の書に取り込まれる可能性が高い。

管制人格は融合騎なんだが、完全に融合騎が表に出る、融合事故と呼ばれる状態になるだろう」

「融合ゆーたら、あれや、アギトちゃんみたいなのやね？」

シグナムが合体して、金髪さんになっとったやつ」

「まあそうなんだが、融合事故と言うのは、融合騎が主導権を握ってしまふ事を指す。

外見も行動もだから、事実上乗っ取られると思って間違いない」

「えーと、ホラーとかの、お化けに憑依されるイメージでええの？」

憑依とはちよつと違……う？

見た目はともかく、精神面は正しいかも。

「外から行動だけを見たら、似たようなものだな。

夜天が主導権を握るだけなら、まあいいんだが……問題の防衛プログラム、ナハトヴァールという名が付いているらしいが、これが更に夜天を乗っ取る形になるようだ。

こうなると、お前が意識を保てるか、仮に意識を失ったとしても間に合うタイミングで目が覚めるかが問題だ。お前が持つ管理者権限が無いと、ナハトヴァールを切り離すことも出来んしな。

ああ、一旦切り離して破壊しても、再生は可能だ。一時的に眠ってもらいたいだけだから、気に病まずにさくつと切り離して離脱してくれ」

「はあ……なんか、話だけなら簡単そうや。

でも、まだ何かあるんか？」

「そうだな、原作での描写になるし、夜天がそうする可能性は低いと思うが……闇の書は、取り込んだ相手に永遠の夢を見せるらしい。

その者が望む幸せの夢を、な」

「要するに、自分からは起きたくなくなるって事なん？」

でも、永遠なんて無いし、夢は夢や。夢の世界に逃げてても、覚めたら惨めになるって青い狸も言つとるし、私もそれに同意や」

夢に関しては、その通り。

永遠については……お姉様が自分で、限界を迎えるかどうかを実証するしかない？

移動可能な世界が全て崩壊するまで存在し続けるとは、思いたくない。

「そうだな。それと、どこかのタイミングで、主としての記憶の流入があるはずだ。」

その知識で自分を見失う可能性や、一時的に混乱する可能性も否定は出来ん。原作では問題無かつたし、現時点で私達が教えられる事は教えているが、知っているかと心構えくらいは出来るだろう。

とりあえず、この2点は気に留めておいてくれ」

「ん、了解や。」

ところで、次にお話するのはいつなん？」

「夜天とか？ そうだな、もう少し調べてからでいい。」

一番頑張る必要があるお前だけが、現場で見れないしな。少しは進展が無いと、遣り甲斐が無いだろう？」

おきろーと祈祷するのも、せめて進展がないと。

夜天との会話も、少なくとも八神はやては直接出来ないのが確定してるし。

意思に反応して枷を緩める以上、魂を隔離するわけにいかない。

「そうやね。」

でも、早めに会いたいなあ……ちやんと、名前も伝えたいし」

「そうだな。早めに何とかしたいところだが、急ぎ過ぎて失敗するわけにもいかない。」

もう少しだけ、待ってくれよ」

A☒S編37話　ここは湯のまち、紅葉の季節なの！

時空管理局の下で行われてる犯罪者からの蒐集は、順調に進む。

どうも元々の筋書きに近くなったことで悠久の翼が自信を取り戻したせい、ギル・グレアムが頑張ったせい、他の思惑があるのか。捕らえた犯罪者の処理だけでなく、最前線で魔導師の無力化する為にも駆り出されるようになってきた。

ミッドチルダからかなり離れた辺境の世界、その中でも特に治安の悪い……というか、反政府組織がロストロギアを持ち出して泥沼の内戦状態に陥ってる地域に派遣されて、回復可能な範囲での蒐集を頻繁に行ってる。

見せしめ的な意味もあるだろうし、封印だと解除されるけど蒐集なら回復するまで魔法が使えないから、仲間に取り返されても即戦力になれない。反政府組織以外には利があるし、捕縛目的としては肉体的な損傷も小さいから、いろいろ言い訳のしやすい内容。

一団丸ごと蒐集とかもあるから、時間的な効率もすごくいい。

Dランク相当に見せてるのに、最低でもBランク並みの働きを求められるのは、どうかと思うけど。カートリッジで誤魔化すのも色々面倒。

聖王教会側も、地味に情報収集を続けてもらってる。

古代ベルカの魔法やデバイスに関するものが中心。時代により色々な癖があるから、私達が持つ情報に無いものが見つかったりもしてる。

デバイスの現物を送ってもらって、それをシルフィ・カルマン達と一緒に解析して情報を共有したりもしてるから、双方に利がある状態。色々な時代の古代ベルカの技術で作られたものに対し、どう解析するか、どう介入するか、という情報と経験は貴重。

カリム・グラシアは貸出デバイス管理責任者 兼 闇の書対策及び古代ベルカ技術情報統括担当者。いつの間にか、肩書が増えてたらしい。

一方、別荘での訓練は和気藹々で行われている。

でも、とうとう、1人だけ気も魔法も適性が無いアリサ・バニングスが切れた。

「たまには訓練じゃなくて、どこかに遊びに行くわよ！」

「具体的には、紅葉狩り！」

と叫んで突っ走った結果、土日を利用して、みんな海鳴温泉に行く事に。

何て平和な暴走。夜天もこんな暴走なら闇の書なんて呼ばれなかったのに。

というわけで。

参加者は、八神家10人（成瀬カイゼとセツナ・チェブルー、来日が間に合ったヴィヴィオも含む）と1匹^{ザファイラ}、高町家の子供達3人、月村家6人（馬場鹿乃及びロボ執事を含む）、テスタロッサ家4人、ハラオウン親子とエイミィ・リミエツタのアースラ組、聖王教会の3人とマリエル・アテンザの派遣組、転生者組5人+1匹^{チクアープ}、主催者のアリサ・バニングスと執事。

急な話だったため高町家の夫婦は翠屋を休めず、高町家のチャチャも同様。八神チャチャは地球にいないし、月村家のチャチャは必要が無いため不参加。変態^{ロリコン}はお姉様が参加を拒否してたけど、総勢37人と2匹。驚きの参加率。

ぶつちやけ多すぎて、この人数が乗れて車椅子3台に対応出来るバスの手配が危うかったのは、アリサ・バニングスとお姉様の胸に仕舞われてる。

タイミング的には、ようこそヴィヴィオの来日歓迎会とか、アギト歓迎会とかでも通じるけど、フルサイズでの実体化が安定してないアギトは不参加だし、あまりその方向は向いてない。

数少ない男性陣の参加理由は、上羽天牙と馬場鹿乃は、

「この女性率で、お前も参加するとは思わなかったが……」

「鹿乃に頼まれて……話し相手がジーさんだけになるのは嫌だつて」

「ああ、あいつはさすがの護衛扱いだから、拒否権は無いか」

という感じ。

高町恭也と成瀬カイゼは、

「忍に誘われて、断る理由も無いだろう」

「僕だけが留守番というのも変だからね」

という解りやすいもので、執事2人は世話役だから当然と言う感じで参加してる。

外見的に人でないザフィーラとチクアーブを含めても、女性過多。

周囲にはリア充爆発しろと思われる比率だけど、色恋的な話にならないあたりは、ヘタレと呼んであげよう。

「女性が多いのは解りきってたじゃない。

嫌なら、参加しなきゃ良かったんじゃないの？」

と、主催者であるアリサ・バニングスも言ってるし。

特に馬場鹿乃は、護衛役なのに執事付きという謎の多い立場だし。

「肩身が狭くても、役目は役目なんだよ……」

「人を巻き込んでいて、何を言ってるのよ」

「ぐっ……で、でもよ、環境的に何も思わねえわけじゃねえんだ。勘弁してくれ……」

というわけで、馬場鹿乃よりアリサ・バニングスの方がつおい。

そんな馬場鹿乃に守られる立場の月村すずかにはメイドも付いてるから、従えてる人との関係を考えて、なんか一番おぜうさまに思えなくもない。

なにはともあれ
閑話休題。

バスに揺られて到着した海鳴温泉、幸の宿。

ハイキングコースやバーベキュー施設も近くにあり、どちらかと言えば食事方面に力が入ってる。

部屋の窓からは山がよく見えるから、部屋から紅葉を見る事も出来る。遊歩道が車椅子に対応出来ていれば良かったけど、山道にそれは難しかった。

「それじゃあ予定通り、今日のお昼は各自好きところで好きな物を食べるって事で。」

夕方まで自由時間だからね！」

というわけで、チエックイン後は食事を兼ねた散策の時間。

春に来た時は温泉街を歩いてないし、車椅子の2人を擁する八神家

の都合に他の人達を巻き込むのも悪いという八神家一同の意見が通った結果でもある。ぶつちやけて言えば、ハイキングコースや遊歩道へ行きたい人はこの時間で行つてね、という事。

というわけで、なのはアリサずかフエイトツバサ小学3年生組にアリシア・テスタロッサと八神ヴィータを加えた子供軍団は、ハイキングコースへ突撃。ここには保護者や護衛として高町美由希やアルフ、月村家メイドの2人が同行。被保護者の方が戦力的に上なのは気にしちやいけない。

月村ずかの護衛役の馬場鹿乃は、今日は別行動を許可されてる……というか、このメンバーに混ぜるのは月村忍も躊躇つたらしい。「はやてちゃんやアコノちゃん達も、一緒に来られたらよかったけど」「ずすかの言いたい事も解るけど、あの2人は足がね。

車椅子じゃ段差のあるコースに入れないし、魔法で飛ぶわけにもいかないし」

「だめだよ、まほーのことはいつちやだめだつて」

「だな。不用意に喋り過ぎだ」

「アリシアちゃんにヴィータちゃん、これくらいは、あり得ない仮定の話つて事でいいんじゃない？」

「そんなにピリピリと気を張らなくつても」

「うーん、そーかなー」

「お姉ちゃんの言つてる通り、そこまで気にしなくても大丈夫。

ゲームとかマンガとかで、魔法の話は普通にあるから！」

「いや、その理屈はおかしいだろ高町にやのは」

「それに、アンタは気が緩み過ぎでしょ。」

「こつちまで言つていいって気になるんだから」

「あう、ごめんなさいいいい！ それと、なのはだから！」

「アルフ、私は大丈夫だよね？」

「大丈夫、変な事は言つてないよ」

とか、グダグダな感じで喋りながら、焼き芋片手に歩いてる。本当に紅葉を見るのか謎。

カイゼ 早苗馬場 上羽 男性転生者組はがつつり食へに行くとかで、近くの地図を片手に食へ歩きをするらしい。

「このカツカレーがいらいらしいんだ」

「体格がいいから、がつつり系？」

ボクは、こっちの湯葉定食が気になるかな」

「料理人で健康志向は解るけど、日本の温泉街といったら蕎麦じゃないかい？」

「外見が日本人離れしてても、魂は日本人なんだ……」

でも、僕は、炙り牛の握り寿司がちよっと気になるんだけど……」

「全部美味そうだな。」

それぞれの案が出揃った所で……」

「全部食べるしかないよねっ！」

うん、夕食の事考えてないのは確定的に明らか。

セツナ千晴亜美
女性転生者組はというと。

「湯めぐりパスポートもある事だし、軽く食事をした後で温泉を回りますしょう」

「だな。こんな機会はそんなにねーし」

「でも、私も一緒にいいんでしょうか……一応、前世は男だったんですけど」

「別荘で何度も一緒にお風呂に入っているのだから、今更でしょう？」

「別にいやらしい目で見られるわけでもねーしな。言わなきゃばねーどころか、普通は言っても信じられねー内容なんだ。」

エロさって意味なら、揉み魔のはやての方が問題だし」

「はあ、確かに何度か揉まれましたけど……」

というわけで、長宗我部千晴と真鶴亜美が、遠慮がちなセツナ・チエブルーを連行してる。

リンディクロノエイミー カリムシヤツハシルフィマリエル
アースラ組と派遣組は、ヴィヴィオと一緒にのんびり散策

する方向。

「この世界の文化は、やはりなかなか面白いですね。」

保養や観光で成り立つ土地柄であれば、着物という服を着て出歩いても大丈夫でしょうか……」

「カリム、この国の文化と言った方が良いと思いますよ？」

ヨーロッパは、今のミッドチルダや聖王教会に似た文化も多いです

から」

「そういえば、ヴィヴィオさんはそちらの出身という事でしたね。

そちらはまた違う衣装があるのですか？」

「私の出身地ですと、ブーナッドと呼ばれる冠婚葬祭で使われる服がありましたよ。

可愛い感じのものもありますし、カリムにも似合うのではないのでしょうか」

「だけど、着物もいいわね。クロノ、貸衣装のお店もあったはずよね？」

「地図にありましたけど、食事をしてからの方がいいと思います。

食器類……箸にまだ慣れていないので、汚してしまうかもしれませんし」

「んじや、食後はみんなで着物だね。

クロノ執務官もどうだい？ 堅苦しいのが嫌なら、着流しってのもあるらしいよ。

お母様に敬語を使ってるんだから、堅苦しい方がいいかもしれないけど」

「止めてくれシルフィ、ただでさえ男一人で肩身が狭いんだ」

「えー、クロノ君は黒髪だし、割と日本人っぽいのに」

「そうですよ。このパンフレットの、えーと、ひな人形？ みたいな恰好とか、似合うんじゃないですか？」

「エイミィにマリーまで……」

立った立った、異世界組の多くに着物フラグが立った。

賑やかな男連中がいれば、うわーい、とか喜ぶところだろうけど、生憎該当者なし。

これらが決まった時点で、高町恭也と月村忍のカップルは姿を消してる。

2人の執事——ちなみに名前は鮫島望と馬場止平らしい——は、何かあった場合に動けるよう、旅館付近に待機する事になってるし。

というわけで、八神ヴィータを除く八神家一同は……あれ？

「プレシア、どうして残っている？」

「いいじゃない、たまには堅苦しい話を抜きにしてのんびりしても。」

あの様子では、誰と行っても騒がしそうですね？」

「あの様子では、確かにそうかもしれないが……」

温泉巡りは平和そうだったが、それもいいのか？」

「1つの湯にゆつくり浸かるには、同行しない方がいいでしょうし。」

人数は多めだけれど、一番落ち着いていそうだったのがここなのよ」

「何か所も巡る気が無いなら、確かにそうかもしれないが。」

昼食は近くの山菜料理の店に行くつもりだが、構わんな？」

「ええ、問題ないわ」



その後は、普通に山菜定食やら山菜そばやら、山菜尽くしのメニューを堪能して。

帰り道できらびやかな格好の異世界組とすれ違いつつ、宿に戻ってきた八神家組。

八神はやてを中心とする夜天組は売店を覗きに行ったり、八神チャチャマルは執事組と交代するため部屋に戻った。

というわけで、主とお姉様はプレシア・テストロッサと一緒に、宿の裏にある休憩所へとやってきた。目の前は小さな庭園、その向こうに色付いた紅葉が見える、屋内から見る風景としてはなかなかの場所。

お昼の微妙な時間だからか、誰もいない。飲み物はセルフサービスだし、完全な独占状態。

というわけで、お姉様が主の車椅子を押している間に、プレシア・テストロッサが3人分の珈琲や紅茶を用意。ゆつくりする体裁は整った。

「さて、そろそろこっちに来た本当の理由を聞こうか」

少し珈琲で唇を濡らしたところで、お姉様がプレシア・テストロッサに質問開始。

どう考えても、アリシア・テストロツサやフェイト・テストロツサから離れてでも、こつちに来る理由があるとしか思えないし。

「最初に言ったでしょう？」

堅苦しい話を抜きにして、のんびり話したかったのよ」

「普通の話なら、別荘でも出来るだろうに。」

こんな状況を作ったという事は、他の誰かに聞かれたくない話か？」

「私は別に構わないわ。だけど、貴女が気にしそうな内容ではあるわね。」

具体的には、貴女はもつと人を頼っていいという事よ」

「頼る、か。少なくとも、蔑ろにしているつもりは無いんだがな」

お姉様、論点が違う。

「エヴァ、今の話は、上に立つか横や下に立つかという話のはず。」

きつと、上に立ち続けてる事を問題視してる」

「その通りよ。自覚はともかく、主にも言われるのだから、周囲からはそう見えるという事よ。」

この際だから言っておくけれど、私は最後まで貴方達に味方するつもりでいるの。」

アリシアの事、フェイトの事、私自身の事。借りが大きすぎるし、私自身も娘達も貴女達を気に入っている。別荘という自由の地もあり、その上、管理局に尻尾を振る謂れも無い以上、裏切るといふ選択肢は無いわ」

「それは有り難いが……誰かの下になる気も無いだろうか？」

私もアコノを立てるに吝かでないが、他の誰かの下に入るなど考えられん」

「そうね。だから、せめて横には立ちたいの。」

これでも大魔導師などと呼ばれた身で、精神年齢は貴女よりも年上でしょう？

歯牙にもかけられない程、低いつもりは無いわ」

言ってる事は、概ね正しい。

少なくとも、有象無象よりも実力も経験もある。

「プレシアは、エヴァの過去をある程度知っている。兵器と呼ばれていた事もだから、人を殺した経験等も想定内のはず。

プレシアから見た貸し借りや好き嫌いに限定した話しかしてないけど、おかしな点はない。エヴァから見た問題や懸念、前の主の事や技術への興味について考えたとしても、並ぶ事を検討する価値はある」

「アコノは賛成なのか？」

「今の私では、エヴァに頼られるには力不足。

私達がエヴァを頼ってるみたいに、エヴァにも頼る人がいていい」「それなりに頼ってるつもりなんだがな……」

「妹達は、どちらかと言うと部下的な立場。

私は保護されてる。

他の人も、力や名前は利用してるけど、頼ってはいない。

上や横に立つ人、精神的に頼る相手がいる様には見えない」

わお、育児放棄されてた事に気付かなかった前世を持つとは思えない台詞。

だけど、全面的に賛成。お姉様の役に立ちたい私達は、お姉様の上に立てない。

「……どうして、人の事はそんなに言えるんだ？」

「私だって、色々学んでいる。

私に親子の関係について語ったのはエヴァ。それから私は、エヴァを親に見立てて頼る事を知ろうとしている。だけどエヴァは、誰かに頼ろうとしている様に見えない。

フェイトをオリジナルの妹と呼ぶのだから、製造者のクローンであるプレシアは製造者の妹、つまり叔母に相当する。立場等を考えても、頼る相手としては適任と思える」

「なんというブーメランだ……」

お姉様は頭を押さえてる。

でも、主に伝えた内容は正しかった。お姉様のスタンスが問題と判断されても仕方ない。

「だから、私を頼りなさい。

この言い方が気に入らないのなら、私を頼る相手として利用しない、でも構わないわ」

「……そう、だな。まあ、考えて……みよう」



その後は、割と普通の世間話的な感じになり。

というか、分割した思考でアリシア・テスタロッサの周囲を警戒しつつ和んでいたらしいプレシア・テスタロッサの娘自慢が長かった。確かに、魔法の秘匿に関して9歳より厳しい5歳は驚きだけだ。

それ以外は、割と普通に日本の文化関係……思ったより漫画やアニメの知識が増えているのはどうかと思うけど、そんな話をしながらそれなりに時間が過ぎた頃。

休憩所に華やかな一団が到着した。

「アンタ達、こんなところにいたの？」

「なんだ、子供組と異世界組はそろって着物か？」

現れたのは、赤やピンクや青といった、明るめの色の振袖を着た異世界組と子供達。

高町美由希とアルフが大正風の袴姿なのは、恐らく動きやすさを優先した結果。

リンディ・ハラオウンは黒留袖。ちゃんと意味を説明されてるかな明だけど、その辺は貸衣装屋を信用しておいた方がいいかもしれない。

クロノ・ハラオウンの派手な束帯、ぶつちやければ雛人形のお内裏様っぽい平安装束は、とりあえず笑つとこう。護衛役がそれでいいのかと蔑むのも可。

「ママー、きものつてかわいいよねー」

「ええ、可愛いわアリシア」

アリシア・テスタロッサが着てるのは、勿忘草色をベースに桜の花をあしらったもの。

プレシア・テスタロッサは相変わらず蕩けてるけど、中の人しか褒

めてない様にも聞こえる。

「車椅子でも大丈夫なんだって！」

「はやてちゃんも、もうすぐ着て戻って来ると思うよ」

「だから、アンタも着てきなさいよ」

「わかった」

その横で主は、無印の地球出身^{なのはすずかアリサ}3人娘に着物を着ろと迫られてる。簡単に了承してるけど、これは写真を撮らねば。血縁上の両親に送る為に。

そして、お姉様の前には。

「ど、どう、かな……?」

赤地に紅葉柄という、とにかく赤い着物を着て髪を結び、着物に負けないくらい顔を赤くしたフェイト・テストロッサが現れた。

フェイト・テストロッサは、もじもじしてる。

「なかなか可愛いじゃないか。」

着物は初めてだろう? 着崩れもしていないし、大したものだ」

「あ、ありがとう……。」

大きな動きはしない方がいい、って聞いたから……」

「それでも、着物はどうしてもあんな風になりやすいんだ」

お姉様の視線の先には、高町なのはとアリサ・バニングスがいる。

2人とも、特に衿や袖を中心に、だいぶ崩れてる。

「そ、それより、1つお願いがあるんだけど……」

「ん? 何かしてほしい事でもあるのか?」

「その、お、お姉ちゃん、って呼んでいいかな……?」

「別に構わんが、何かあったのか?」

「う、うん、姉さんが……」

「アリシアが羨ましくなったのか。妙な呼び方でもないし、これくらいは別に許可を取らなくてもいいんだぞ?」

それ以前に、お姉様がお姉ちゃんで、アリシア・テストロッサが姉さんって、イメージ的には逆じゃ? と突っ込むべき。

ますます赤くなってるから、突っ込むと倒れそうだけど。

「でも、いきなり呼んだら、変かな、って」

「それもそうか。だがこれで話は聞いたし、許可も出した。後は好きに呼ぶといい。」

さて、あつちに着替えて来いとうるさい連中がいるし、あの様子では私も巻き込まれそうだ。

また後でな、フエイト」

「うん、お、お姉ちゃん」

A S編38話 ○○の秋

旅館から出たお姉様、主、プレシア・テスタロッサは。

若草色で鞠をいっぱいあしらった振袖を着て嬉しそうな八神はやて、巫女装束（脇は出てない）の八神シヤマル、戦国時代を連想させる甲冑姿の八神シグナムと会って。

……これは、どんな品揃えの貸衣装屋だと驚愕していいレベル。

「1人、どうしたと聞きたくなる人物がいるんだが」

「お店の人のオススメや。な、シグナム」

「動きやすく、不良やらに絡まれた時に対処しやすい服装と言ったら、これを薦められてな。」

トモエゴゼンと言っていたが」

「……うん、まあ、戦装束ではあるな。」

貸衣装で戦うなという話はあるし、動きやすいかというところ……」

「振袖というものよりは、激しく動いても大丈夫だと聞いている。」

剣道の防具のようなものだと思えば、それほど違和感もない」

「……そうか」

そんな感じで、何を出されるのか戦々恐々としつつ。

到着した貸衣装屋で相談した結果として。

お姉様は、黒地にタンポポの振袖に。

主は、常磐色の地に梅の花をあしらった振袖に。

プレシア・テスタロッサは、カサブランカ柄の黒留袖に。

それぞれ、着替える事になった。

だけど、車椅子でも着やすいよう加工された振袖が、よく主と八神はやてが選べるだけあったなとお姉様も感心する品揃え。

「プレシア、本当にそれでいいのか？」

私やリンディが黒だからといって、合わせる必要は無いんだぞ。色留袖も置いてあるし、格が必要な場面でもないしな」

「いいじゃない、大人の女性はこういった色合いが主流なのでしょう？

郷に入っては郷に従え、こういったものは慣れも必要よ」

「まあ、それでいいなら構わないが。

つと、どうしたアコノ」

店員が、主用の着物を取りに、店の奥に行った時。

主が、お姉様の手を握った。

「着替えを手伝ってほしい。」

具体的には、服を脱がせて。背中ボタンを外すのが難しいから、自分では無理」

「……そういえば、今日はそういう服を着させられていたな」

「苦情はチャチャマルに。」

少し恥ずかしがった方が嬉しい?」

胸の前で手を交差させ、いやんいやんみたいな感じの仕草をする主。

表情を見る限り、恥ずかしいとか欠片も感じてなさそうだけど。

「着替えも裸も、今まで散々見ているんだ。今更恥ずかしがられてもな。」

感情を思い出す練習としても……その方向はどうなんだ?」

「エヴァも思い出してみる?」

「私は女として百合に目覚めるべきなのか?」

それとも、男として劣情を感じればいいのか?」

「エヴァが自分らしいと思える方で。」

それに、大人になったり出来るなら、男になるのも不可能ではないと思える」

残念ながら、性別の変化は、かなり負荷が大きくなるという計算結果が出てる。

何故か、下腹部の変更の負荷が大きい。

主がお姉様に抱かれたいなら、所謂フタナ（やめんか！　そもそもアコノは10歳だろうが！）……怒られた。

「あと、前世でも未経験。知らない事を知る努力は必要」

「知識はともかく、この経験はそういうものじゃないだろう」

「だからエヴァを相手に選んでいる。」

大切と思える相手。定義上は問題ない」

「いや、問題ありまくりだからな？」



何だかグダグダになりつつも、着替えを済ませて旅館に戻ってきたお姉様達。

そこで一頻り写真を撮ったり着崩れがどうのと話をしたり、それなりに堪能した後で元の服に着替えて。

一度お風呂に入ろうと、みんなで入浴した頃に男連中が戻ってきて、ロビーに1人放置されてたクロノ・ハラオウンと合流して、執事やチャチャマルと合流すればよかったのにと突っ込まれてたりもしたけど。

そろそろ予定の時間だから、夕食を食べに行こうという事になった。

「……もう食べるの？」

うん、なんだかお腹が空いてなさそうな上羽天牙がいるけど、食べるの。

というわけで、夕食の時間。

食事場所として割り当てられた宴会場に並んでは、会席料理。

「せっかく日本の温泉旅館に来たんだから、やっぱり和食でしょ。」

高級な懐石だとスプーンとかフォークを断られるし、こういう所の方が、高い漆器に傷をつけて揉めたりしなくて済むしね」

とは、選んだアリサ・バニングスの弁。

ちなみに、食事中の状況を適当に表現すると。

ひたすらいちやつく、高町恭也と月村忍。

ひたすら娘達を構う、プレシア・テストロッサ。

この2組の印象が強すぎて、口の中が甘い。

他の人の状況を見る限りは、穏やかな食事風景。イカやタコの刺身が初体験らしく、恐る恐る食べてるカリム・グラスアがちよつと可愛い。

美女美少女が多いせいかな酔っ払いが入ってこようとしたけど、お姉

様に念話で指示されて威圧に出た馬場鹿乃を見て逃げてったから実害なし。髭面巨体のインパクト勝ち、外見だけでも役に立った。

その後は、またお風呂に行ったり、部屋でお酒を飲んだりしてから就寝。

あえてダブルの部屋を取ってる誰かさん達の部屋は見えない。見ないっただけ見ない。



夜が明け、旅館としてはごく普通、ご飯に味噌汁に小さい焼き魚に漬物にといった内容の朝食を食べてから。

「今日は山！　そしてバーベキュー！」

張り切って行くわよ!!」

というアリサ・バニングスの掛け声とともに、山に向けて移動開始。といっても、道のほとんどは舗装された温泉街の中。荷物はバーベキューの施設近くまでバスで移動する執事やメイドの5人が運ぶことになってるから手も軽い。お店やらを覗きつつ、のんびり散策を兼ねてる。となると、当然の帰結として。

「エヴァさん、ここの炙り牛の握りがおいしかったよ」

「ん、そうか」

「エヴァ、私も食べる」

「解った。2つだな」

黒羽早苗に案内されたお姉様が主と買い食いしたり。

「酒粕のソフトクリーム？」

「エヴァ、気になるなら食べよう？」

「そうだな」

見かけた物に惹かれたお姉様が主と買い食いしたり。

「美味しかったけど、口の中が冷たい」

「ちよっと肌寒いしな。そこでコロッケが売っているようだが、それなら温かいか」

「揚げたてだといいいけど」

「ちよつと、今からバーベキューだつてのにどんだけ食べるつもりよ！」

「忘れたか？ 私の胃袋は特別だ。いくらでも食えるぞ」

「私も似たようなもの。だけど、つられて食べてる人達までは責任を
持てない」

「そういう問題じゃない!!」

更に買い食いしようとするお姉様と主にアリサ・バニングスが吠えたりしたけど、いつも通りの風景。その後ろで仲良くソフトクリームを食べてるカリム・グラシアとヴィヴィオや、テスタロツサ親子は見
なかつた事にしよう。既にコロッケと牛串を持つてる馬場鹿乃も。

「まあまあ。エヴァさんは、普段はそんなに食べへんし。」

たまにちよつと羽目を外すくらいは、ええと思うんやけど」

「甘いわよはやて。このタイプは目を離したら、何を仕出かすか解ん
ないんだから」

「けどなあ。こうやって外で色々食べた後つて、別荘で似たものが食
べれるようになることが多いんよ。」

味とかの情報を集めてるとしか思えへん」

実際は、お姉様や主の感想を集めてる、が正しい表現だけど。

美味しい料理なら私達や従者達がレシピに加える候補の上位に入
れて、改めて作り方を調べたりする。

「……そういえば、ずいぶん貧しい食生活だったとか言っていたよう
な……」

「さて、何の話だったか。」

ん？ 鹿児島からやってきた酒寿司……？」

「絵は、押し寿司に見える」

「面白そうだな。食べてみるか」

「ちよつと待ちなさい!!」



そんな感じで、昼近くに到着したバーベキュー場、意外な事に完全

貸し切り状態。

もうすぐ着くと連絡しておいたから、メイドや執事達により炭火の準備も概ね完了していて。

「今からバーベキューなんだけど……あれだけ食べといて、本当に大丈夫なんでしょうね？」

アリサ・バニングスが睨んでるけど、お姉様は全く気にしてない。「大丈夫だ。せつかく誰も見ていないんだ、どんどんいくか」

お姉様がそう言いながら出したのは、大きいクーラーボックス。

中身は、カルビ ヒレ ハラミ 若鶏 ひね肉 ラム肉 マトン肉。 だけど何より、牛と豚の区別が足りない。

他にも野菜やサーロイン等々、いっぱい入り過ぎてて意味不明とも言う。

「ちよつと、何やってるのよー！」

「ちまちま出すより問題は少ないと思うが。」

アリシアが山の方を見ていたのは確認済みだ」

「よんだー？」

「……あれ？ こんなおっきいの、あつたつけ？」

「さつき持ってきたぞ。」

とりあえず、この皿をみんなに配ってくれ」

「はい、おねえちゃん」

アリシア・テストタロツサが皿を配りに行き、入れ違いで来たのはフェイト・テストタロツサ。

「お、お姉ちゃん。私も、何かする事あるかな？」

「呼ぶ度に緊張するくらいなら、他の呼び方でもいいんだぞ。」

そうだな、箸も配ってしまうか。箸が苦手な人にはこっちのフォーク、それとタレを希望者の皿に入れてくれ」

「うん、わかった」

という会話でテストタロツサ姉妹が給仕役つぽくなってきたあたりで、メイド達からちよつと非難するような視線が飛んできた。

曰く、仕事を取るな。

何故かチャチャマルも似た視線を送ってるけど、よくある事。問題

ない。

「さて、ここからは食事の時間だ。

食欲は充分か？」

「あーもう！ 後で一番いい肉を寄越しなさいよ！」

そして始まる、バーベキュー大会。

コンロは多めに確保してあるし、肉に野菜に烏賊に貝に鰻にと、食材も色々ある。おにぎりやパンといった主食はもちろん、枝豆や漬物、飲み物、変わり種としてチーズフォンデュや魚のカマ、バナナやリンゴといった焼ける果物も用意。

メイド達のコンロでは、スペアリブを煮込んだり、じゃがバターを焼いたりもしてる。

「焼くだけならシャマルでも大丈夫やろ。やってみるか？」

「これは味付けねーもんな」

「外は黒焦げ、中は生とやらなければよいが」

「ひ、ひどいっ！ 火加減だけは間違えないですっ！」

何だか仲間にいぢめられてる人がいるけど、見なかつたことにして。

「この様な食事は、ヴィヴィオさんはどうなのですか？」

「戦場ではもつと簡素でしたよ。食材の質もこちらの方が良いですし、楽しみです。」

カリムはどうかなのですか？」

「騎士団の訓練で、似たものを食べた経験はあるのですが……緊張や食べ慣れないものだったせいかな、あまりおいしいとは思えませんでした。」

それに、脂分の強いものは少し苦手なんです」

「それなら、魚介類や野菜が良いでしょう」

ポン酢も使えば、あっさり食べられそうですよ」

食べ慣れてない人達同士で、色々考えるのもよし。

「い、一番いい肉とは言ったけど……」

「ステーキ用のサーロイン、だよね……すっごく高級な……」

「にや？ そんなにすごいのか？」

「……多分、それなりのお店だと、サイコロに切つてあるコレ1切れ分で、翠屋のシユークリームを5個以上食べられると思うわ……」

「これ、本当に私達が食べていいのかな……」

リンデイさんとか、偉い人達に渡した方がいいんじゃない……?」

「そ、そんなにすごい……?」

原作無印3人娘の様に、渡されたものが予想以上で、気後れして迷うのもよ……くない。

これはさつさと食べるべき。

「こ、この肉は……!?!」

馬場鹿乃は一口食べた時点で、固まつてるし。隣にいる上羽天牙は声すら出てないし。

「うん、相当いいのを持ってきてるね。」

これはエヴァさんに感謝しないと」

「鑑定出来る知識は無いけど、いい物なのはわかるね。」

料理人としてはどうなんだい?」

成瀬カイゼは、高町なのはと同じく知識不足。ついでに感動も不足してる。

「んー、このリブローズを見た感じだとA5は确实、BMSの10以上じゃないかな?」

色も味もいいし、かなり高かっただろうけどいい肉を選んでるよ。

脂分が多いから、こつてりが苦手な人には向かないけどね」

「つまり、良いものなんだね?」

「うん。普通のお店だと、A5といつても8や9が多いはずだよ。11までいくと高級店でしか扱えないし」

「値段的にかい?」

「そうだね。んー、このお肉1人分で考えても、産地や買い方にもよるけど店頭価格3000円で買えるか微妙かな?」

ヒレのシャトーブリアンっぽいのがエヴァさんやアコノさんのところにあるのは、ちゃっかりしてると思うけど仕方ないかな」

「安売りされるようなものじゃない、という事だけは理解したよ。」

シャトーなんとかつてのも、いい肉なのかい?」

「あのグレードだと、えーと、1万円以上は確実にやないかな。

小さなホテルだと縁のない食材だよ。個人で買うにも高すぎだし」

「……高級だね」

転生者の男連中の様に、知恵袋の黒羽早苗を中心に肉の話で盛り上がるのもよし。

「おいしいのだけれど……」

「やっぱ、カロリーがなー」

「どれも美味しいのが解るだけに、どうしよう……」

「それでしたら、鶏や羊はどうでしょう？ 牛程ではありませんが、良い物ですよ」

転生者の女性達は、明らかに体重を気にしてる。

そこにやってきたノエル・K・エアリヒカイトが持つてるのは、鹿児島産の地鶏と、北海道産のラム。

他に、レバーやハツといった内臓系の肉もある。こんなのを食べるのもよし。

「牛タンというのが、一番あつさりしていていいわね」

「ハラミってのもなかなかいいよ」

「軟骨の歯ごたえも捨てがたいでしょ」

「えーと、これは鶏のモモでしたっけ」

異世界組の様に、いろいろ食べて楽しむのもよし。

一番純粹に楽しんでるのがこの様な気がするけど。

「……」

「……」

「そんなにがつつかなくても、逃げやしないよ？」

一心不乱に食べるザフィーラとチクアーブを、アルフの様に生暖かい目で見るのもよし。

テスタロッサ一家がお姉様の近くにいて、その輪からは一歩引いた位置に3人(?)がいる。言葉が無くても、ひたすら振れてるザフィーラの尻尾が全てを物語ってるけど、見なかったことに。

アルフも尻尾を隠してなければ似たようなものだろうし。

そんな中、プレシア・テスタロッサの宣言を聞いたお姉様は、ちよっ

と驚いてる。

「……本当にいいの？」

「ええ。私達の中で過ごしている以上、いつかは気付くわ。

話していい事と悪い事の区別がつかなら、秘密を作りたくないもの。知られてから話すより、先に話しておいた方が色々と都合がいいのよ」

「懸念が無いとは言わんが……伝えない事に支障が無いわけでもないか。

大問題にはなりそうにないし、私には強く反対する理由も権利も無いな。いつ伝えるんだ？」

「今よ。ねえ、アリシア」

「ん？ なあにママ？」

「魔法について、きちんと教えようと思うの。だけど、今ここに居る人達は良いけれど、他の人に話してはダメよ。約束出来る？」

「うん！ わたしも、まほうをつかえるようになるかな！」

「ええ、きちんと練習して、もっと大きくなれば、間違いなく使えるわ。

だけど、魔法を見た事があつたかしら……？」

「びよーいんで、つかつてるひとをみたよ？」

それに、むかしはママもつかつたよね。ピクニックにいくときとか」

「……覚えていたのね。

ありがとうアリシア。思い出を忘れずにいてくれて」

「わぶ、ママ、ふくよごれちやうよ」

割とあつさりと、アリシア・テスタロッサへの魔法ばれが行われたのもよし……かな？

魔法が一般的な世界の出身で、しばらく本局にいた以上は、そりやあ見た事もあるよね。

仲間外れになつて居る事も多かつたし、家族としてはこれで良かったかも。

魔法の隠蔽も、高町なのはよりもしつかりしてそうだし。

「エヴァさん、これで、ここに居る全員が魔法を知つてるんやろ。つい

でに、夜天さんをお披露目せえへん？

私の言う事が聞こえるなら、名前も付けたいし。いつまでも夜天さんとか闇の書さんとか呼ばなあかんのは、なんかいやや」

「そうだな……状況としては前回の様になるが、夜天の言葉を私が伝えればいけそうだな」

というわけで、急遽開催される事になった夜天お披露目会。

念のため人払いや各種結界を仕掛けて、準備完了。

観客達は食事をしながらも、興味津々で見てる。

「それじゃ、始めよか。おきろー」

前回同様の方法で、八神はやてが夜天との接触到挑戦。

今回は認識障害も最初から防いでるし、姿がぼつちり見えてる。

周囲からは、おお、とか声が聞こえてるけど、今は無視。

「はやて、夜天が出てきたぞ。

見えるか？」

「おきろー……うーん、見えへんなあ。

本の辺りにいるんか？」

「そうだな。本の真上、はやてがまつすぐ前を見れば視線が合うような位置だ」

（夜天、通信は大丈夫だな？）

（ああ、大丈夫だ。だが、済まない。あまり調査は進められていないのだ）

「そっか。話はできるやろか？」

（とりあえずは、私を経由しでもはやてと話が出来ないかを試すのが主目的、情報を渡すのがおまけだ。それ以上は期待せんが、まずは基礎構造の情報転送の続きを始めるぞ。

あと、はやての声は聞こえているな？ 声を出すことは？）

（我が主の声は聞こえているが、声を出すのは難しい。少なくとも、情報を受渡ししながら話す事は不可能だろう。主自身が直接認識出来ない以上、無理に行うのは得策ではない。

こちらからも、現時点で得た情報を全て渡そう。解析の役に立てば幸いだ）

「夜天が声を出すのは難しいようだな。録音してでも聞かせられたらと思ったが、もうしばらくは保留だ。」

はやての声は聞こえるらしいから、伝えたいことがあるなら、遠慮なく言えればいいぞ」

「そっか。いるのはこの辺やね?」

こうやって話っぽいことをするのは初めてやから、えっと。

初めまして。夜天の魔道書の主をやらせてもらってます、八神はやて입니다」

(これはどうもご丁寧に。私は闇の書の意味と呼ばれております) 何をやってるんだろう、この2人は。

特に夜天。律儀なのか天然なのか。

「お見合いじゃないし、生まれてからずっと寄り添っていた仲だろう。というか、お前の声は、今はまだ私にしか聞こえないんだ。もう少しそれを意識してくれ」

あ、って夜天が慌ててる。

何故か知らないけど、手をパタパタしてる。

コホン、って感じで咳払いした。

(済まないエヴァンジュ、今はまだ呪われた身だが、受け入れてもらえて嬉しい、と伝えてくれるか)

なかったことにしたー!

「何だか思っていた性格と異なる気がするが……まあいいか。」

はやて、夜天は共に在れて嬉しい、と言っているぞ」

(なっ!? エヴァンジュ、何か変わっているぞ!?)

(呪われた身とか言われて、はやてが喜ぶわけがないだろう。

あまり自分を下げるな)

「そか。んじや、闇の書とか、もう呼ばせへん。夜天の魔道書も、全体を指す名前や。」

だから、名前をあげる。闇に負けない、強く支える者。夜の統率^{チカラ}者、ラインフォース」

(我が主……ですが、今は管理者権限が制限されています)

闇の書の名を消すことは出来ません。その名は、今は呼称として認

識します)

「だから直接は伝わらないんだと何度言えば……

はやて、今はまだ名前の書き換えも出来んらしい。あだ名のようなものとして認識するが、本当の名として設定するのは、書の完成後になりそうだな」

「そか、やっぱ完成させなあかんか」

「そうだな。」

というわけで、お前達もリインの呼び名が解禁だ」

「これで一安心ってわけね。」

何かあったらぼろつと言いそうで怖かったし」

「だな。やれやれだ」

ほつとしてるのは、夜月ツバサと馬場鹿乃。

主は特に変化なし。そもそも、そこまで詳しい人もあまり多くない。

「貴女達は、この名を知っていたのですか？」

「あいつらは知ってたみてーだけど、私はそんなに詳しくねーんだ」

「そうね。私の知識もそれほど多いわけじゃないから、名前までは知らなかったわ」

こそつとカリム・グラシアが長宗我部千晴や真鶴亜美に尋ねてるけど、この2人は知識不足。

既に原作という枷から解放されつつあるとも言える。

(済まないエヴァンジュ、そろそろ限界だ)

(そうか。基礎構造の転送は……それなりに進んだな。

こちらでも解析をするが、他に必要な情報があったら、遠慮なく言ってくれ)

(ああ)

リインフォースの姿の消滅と、通信の断絶を確認。

認識障害も終了してる。結界の解除が可能に。

「今日はここまでのようだ。」

まあ、顔見せと名前を伝える事は成功したから、結果は上々か」
「そやね。んじゃ、今からはバーベキューの続きや。」

「リインフォースがちゃんと出れるようになったら、またやるな?」
「そうだな」

A S編39話 嵐の前の

バーベキューから帰った後、日曜の夜。

大騒ぎの後だけど、土曜の朝に来日した事になってるヴィヴィオの歓迎会、それと、連れて行けなかったアギトを含めたパーティー的なものを決行。

ヴィヴィオは公的な身分が必要でなければ日本で行動出来たから、食器や家具等の準備は完了済み。バーベキューの後で温泉に入ってきたから、改めてお風呂に入る必要も特に無い。

「つまり、後は着替えて寝るだけだから、ゆっくり楽しんでくれ。

但し、明日は平日だ。学校やりに響かない程度にな」というわけで、パーティー開始へ。

但し、みんなお昼に食べ過ぎてるから、お鍋がメインのプチパーティー。雑炊の準備も完璧、というか、こっちがメインの可能性あり。アギトも昼は別荘で従者達とバーベキューだったから、凄くお腹が空いたわけでもないし。

ちなみにアギトは、StrikerSの寒そうな服装じゃない。赤い半そでのワンピース、ぶっちゃければ東方のチルノを赤くしたような感じになってる。

「けど、アタシまでこっちに来て、本当にいいのか？

この世界って、魔法が隠されてるんだろ？」

「見られなければ問題ないし、その程度の対策はしてある。

裏で何かやってると思われるのもなんだし、今のところシグナムがロード候補だと聞いているから、変に離しておくのもあれだ。

それに、フルサイズの状態が安定したら、こっちに来るだろう？

その予行練習のようなものだと思えばいい」

「そりゃあ、一緒に居れるのは嬉しいけどよ。ずっと居ていいわけじゃねーよな？」

「まずは雰囲気慣れるところからだな。他人に見られる状況にするわけにいかないから、たまにこっちに呼ぶ程度になるだろう。

普通に暮らせる程度に安定するには、最低でも1年程度の時間をか

けた方がいい様だしな。精々数か月の予定だったヴィヴィオはともかく、そこまで長いなら、別荘だけというよりもいいだろう?」

「そりやそうだけど……アタシみたいな大きさの人は、ここにはいないんだろ?」

なのに、アタシが使える食器なんてあつていいのか?」

アギトの前にも、当然食事を用意してある。

でも、お猪口や小皿、フルーツフォークといった一般的なものを使ってるから。

「食事関係の道具として普通にある物だけで、見られて困るようなものは使っていないから気にするな。

その分、使いにくい大きさのものも交じるし、どうしてもという場合は何か考えるが……フルサイズが安定するまでは、ある程度諦めてくれ」

「使い勝手とかはそこまで気にしないし、旨いものが食えるんだし、文句は無いつて。

とりあえず、あれだ。これからはこっちにもたまに顔を出すけど、よろしく、って事でいいんだよな?」

「ああ、それでいい」

「それなら、私からも。

これから正式にエヴァさんの片腕として働くため、こちらに住まわせて頂くことになりました。

仲良くしてくださいね」

「別荘で散々会つとるし、硬い挨拶はええよ。

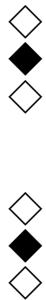
な、エヴァさん」

「そうだな。それに、待ちきれない様子なのがいるようだし、そろそろ始めよう」

「待ちきれなくてなくねーです」

八神ヴィータがじと目でお姉様を見てるけど、箸とフォークを握りしめてるから説得力無し。

でも、無意味に引き延ばす必要も無い。鍋の中もいい感じだから、そろそろ食べるべき。



翌日、つまり月曜日。

夕方と言うには少々早い、おやつの時間。別荘にプレシア・テスタロツサがアリシア・テスタロツサを連れてきた。

「ひろーい!!」

アリシア・テスタロツサは、訓練場となってる広い荒地を嬉しそうに駆け回ってる。

蘇生してから、ここまで広い場所に行った事は無いかもしれない。療養した時間加速型の別荘、時空管理局の病院、日本の街中。

温泉近くのバーベキュー場も、ここまでの広さは無いし。

「転ばないよう気を付けて、アリシア。」

怪我をしたら大変だから」

「はーいー」

その様子に目尻が下がりっぱなしのプレシア・テスタロツサだけど、今日の目的は別荘の紹介じゃない。

「それで、いつ魔法の練習を始めるんだ？」

デバイスは準備済みだと聞いているし、魔力の封印を解くから訓練場に来たんだらう。

「というか、いつの間に準備していた？」

「本局で缶詰になってる時に構想を練って、裁判が終わった後で手配していただけよ。」

時間がある時に調整していたから、かなり良い出来になったと自負しているわ」

「そうか。私は基本的に立会いでいいんだな？」

「娘の事だもの。だけど“おねえちゃん”として手を出したいなら、構わないわ」

「いや、本人に望まれない限りは、様子見をしよう。」

魔法の資質が増えた理由は気になるし、目的があったとはいえ助けた以上は見捨てないが、指導方針で対立しても面倒だ。ミッド式な

ら、私が出る幕は無いだろうしな」

「そう。じゃあ、始めましょう。」

アリシア、こっちにいらつしやい」

「はーい、ママ」

そして始まる、魔法教室。

アリシア・テスタロッサに渡されたデバイスは、待機状態は改造前のバルディツシュに似た三角ワツペン、起動状態は水晶球付きの短い杖……ぶつちやけマイクみたいなデザインのインテリジエントデバイス。

声は外見に似合わないけどバルディツシュと同じ渋い声で、名前はバルエシユカというらしい。

「早目に、魔力の制御に慣れる必要があるわ。デバイスが補助してくれるけれど、あまり頼り過ぎても駄目よ。」

まずは、光を灯してみよう。魔力を込めすぎると眩しいから、気を付けるのよ?」

「うん、わかった!」



そんな感じで、アリシア・テスタロッサも幼稚園の後に別荘で訓練するようになって、数日。

合宿組が帰った後、要するに夜中に、リインフォースから受け取ったデータの解析結果の報告を敢行。ぶつちやけあまり宜しくない結果だから、早めに報告しないと後がやばい。

「随分と無茶な改造がされたものだな……方向性の予想だけは出来たが、斜め上過ぎるだろう」

防衛プログラム、ナハトヴァールの魔改造。内容はともかく、方向性は想定内。

管理者権限の抑制や自爆まがいの暴走は、闇の書の破壊を目論んだ改造の結果。正確に言えば、主の権限を抑え込んで蒐集した魔力を横取りし、自己を巻き込む破壊行動に出る。これは、無限書庫の資料に

も残ってた。

これを実現する為か、本来は重要なリインフォースとのパスが劣化してるし、主とナハトヴァール間の直接パスが超絶強化されてる模様。結果的に、侵食が無くても命を削る上に、こっちのパスが上位として扱われるような腐れ仕様化してるけど。

守護騎士はリインフォースとのパスではなく、ナハトヴァールとのパスを使用してる。元々の仕様ではないような感じだけど、最終的に守護騎士が取り込まれるのは、ナハトヴァールが全力稼働する際に邪魔になるからという可能性も。

このパスの現状を放置すると、ナハトヴァールの降格が出来ない。ナハトヴァールを切り離してリインフォースに接続すると、ユニゾンで事故を起こす可能性が高い。劣化してるリインフォースとのパスだけだと、真の主になるには心許ない。

「……接続を変えた場合に、ユニゾン事故を起こさない可能性は？」
限りなく0%。現状ですら事故率が高すぎる。

パスの加工は、少なくとも八神はやて側が困難。既に穴をあけられた状態だし、ここを短時間で変えるのは無理。

夜天の魔道書側だけを本来の状態に戻したら、守護騎士へのパスが消失する上に、パスの能力不整合で、やっぱり八神はやてが主としての資格を喪失する可能性が高い。そうなると、転生してしまう可能性がある。

八神はやてが夜天の主として生存するためには、現在ナハトヴァールにつながってるパスをリインフォースに繋げるのが最良。接続を変えなくてもユニゾン事故を起こすなら、ユニゾン自体を諦めてもあまり変わらない。

「うん、色々と駄目だな。抜け道があればいいが、ゆっくり探るしかないか。」

基礎構造自体についてはどの程度調べてありそうだ？」

かなり微妙。少なくとも、変に弄った形跡が多々あるのは間違いない。

詳細な調査を行うには、情報不足。

だけど、リインフォースも権限が制限された状態で調べてる以上、ここまで解つたのはきつとすごく頑張った結果。

「そうだな。やれやれ、最終手段の候補だった完全初期化も、はやてが犠牲になるとはな。

誰だ、はやてをこんなに苦しめる様な仕様にした馬鹿は」

答え1、人の欲望。

答え2、神もどき。別名ジュエルシード。

答え3、世界。現実是非情。

「……つまりあれか。1で八つ当たりすべき相手がいない事でもやもやして、3だと思いい絶望するも、最終的にジュエルシードのせいだという事か？」

突き詰めれば、青のデバイスを作った私のせいなのか？」

そうは言っていない。

それよりも、夜天をどうするかが問題。

「可能な限り、はやてと守護騎士も助けたいが……そうになると、初期化は本当に最後の手段だな。

最低限、パスの構造を組み替えてリインをナハトより上位に戻すのは必須。融合事故は別途何とかするしかないが、方法は後で考えるか。

ナハトに限定した部分初期化はいけるか？ 変に改悪部分を探るよりも早そうではあるし、予定通り闇の書の罪を背負って一度消滅してもらった方が、事後を考えると楽そうだな」

原作の流れを踏襲するなら、きつと可能。

但し、八神はやてとリインフォースの頑張りが必須になる。

「あいつらに大きな責任を負わせるのもどうかとは思いますが、それ以外の手段となると……少なくともはやてが犠牲になる可能性が高いか」

管理者権限無しで介入した時点で、八神はやてに死亡フラグが立つ。

フラグの回避方法が不明だから、これを前提とした作戦はお勧め出来ない。

「だが、はやての意識が戻らない場合は、私達でどうにかする必要があるからな。

強制介入も含め、使える手段の模索は続けるぞ」
了解。



その後、調査をしたり、八神はやての協力で例の儀式おきぎしでリインフォースとの相談をしたり、お姉様経由だけど守護騎士達も交えて少し会話したりする日々が続くこと、10日ほど。

やっぱり記憶領域の空き容量に問題が出たから、リインフォースの記憶もバックアップの為に受け取った。抜けも酷いしかなりあやふやになってる部分も多いし、魔法関連の記憶は有難いけど、判明した範囲でも正直言つて色々酷い。

特に、歴代の主にリインフォースや守護騎士がどう扱われたか。原作で八神はやてを殺してしまう事を嘆いてたのがよく解るくらいに、道具扱いされてる事が圧倒的に多い。次に……うん、色々な意味で、言わない方が良さそう。とりあえず変態死ねとだけ言っておく、もう死んでるけど。

まれに現れる優しい主の多くが“闇の書”の破壊、そしてリインフォースと共に死ぬ事を求めたから主や自分を殺すような改編も受け入れて、他の主による扱いの悪さがそれに拍車をかけてたって、どれだけ世界に嫌われてるんだろう。

お姉様に関する記憶は無いけど、魔法の情報は義務感的な感じで送ってくれてた模様。闇の書完成から暴走までの短い時間しか出来ないのに、きつと生真面目な性格がそれを続けさせてた。ありがたやありがたや。

その間も本局でギル・グレアム達が色々動いていたけど、とうとう闇の書を起動する世界や同行者の選定と調整に目途がついた。

概ね予想や想定範囲内、第108無人世界ルスターに、執務官やら高官やらを合計20人くらい、それと武装局員の中隊を2つ連れて

行くことになりそう。

調べてみたら、最高評議会の息がかかっているのはお偉方。参加者に名を連ねてる悠久の翼の幹部は黒。高官も黒。未確定だけど査察官も恐らく黒。

執務官や武装局員は、比較的白い模様。

「つまり、指揮系を掌握して査察を好きに出来れば、執務官や下っ端は黙らせやすい、と」

恐らくそういう人選。

何かあった場合に命懸けで動くのは執務官や武装局員が先。

手駒を捨て駒にしない意味もありそう。

「優秀なんだか、解りやすいんだか。

対策はどの程度出来そうだ？」

守護騎士を連れて行くべきか微妙。関係者としてプレシア・テストアロツサが来るのは確実に、囑託魔導師の同行は拒否されないはず。聖王教会組とギル・グレアムと猫も来るのは確実だし、白い執務官が味方に付けば、アースラ内の戦力的には全く問題無い。

但し、執務官も敵だと、私達がちよつと本気を出す必要があるかもしれない。

問題は、高官、幹部、査察官。ここの権力をどう止めるか。黙らせるネタはそれなりに集まってるし、聖王教会と事を構える覚悟があるか不明だけど、うるさい可能性は高そう。

「連中が捨身で来ない限り、止まるはず……いや、腐れ脳みそが絶好の機会と見て、嫌な圧力をかける可能性もあるか。

下手につついて、過剰反応をされても面倒だ。現場で手を出して来たら全力で反撃、それ以外は基本スルーでいいか。

そろそろ蒐集も佳境のはずだったな。今のペースなら、あとどれくらいだ？」

既に600頁を超えてる。

魔力量的な意味で大物の犯罪者が数人、蒐集候補に挙がってる模様。決行時の最後の生け贄はこの数人を現地に連れて行く可能性が高い。計算上は、もう少し蒐集しておけば完成に手が届く。

あと1週間以内に、決行可能な状況が整う可能性が高い。ギル・グレアムや時空管理局も、それを想定して準備を始めてる。

あと数日は小口で蒐集、その後、待機してる巡航1級13番艦ヴィクタムに関係者やらが乗って地球方面に移動を開始する。

「……アースラの同型か？ アルカンシエルは？」

もちろん搭載済み。但し、現場付近にはアースラだけで行くことになってる。

ヴィクタムは後方で待機し、最悪の場合の切り札を担当する形。

最前線で現地入りしないよう、ギル・グレアムががんばった。

「そうか。それなら、一応は安心か……？ 中途半端に介入してこな
いか注意する必要はありそうだが。」

しかし、リインフォースに本来の情報を渡せているだけマシンだが、
何とかしてはやてを助ける切り札も必要か……」

A×S編40話 夜は闇に包まれて

いろいろ準備やらをしながら迎えた、5日後。原作A×Sではアースラが本局に到着したりフェイト・テスタロッサの裁判が大詰めになったりする、12月1日の昼。

地球にヴィクタムが到着し、予定通りに主要な人物がアースラに移動した。主要な面子はほぼ事前の情報通りで、ギル・グレアムwitt h猫やユーノ・スクライア、同行した八神チャチャを含んでる。ついでに秘書的な人もちらほらいるけど、気にしない事を推奨。

地球からも、主任扱いのプレシア・テスタロッサ、助手扱いのお姉様、主役の八神はやて、精神的な支えとして主とセツナ・チェブルー、協力者として囑託魔導師の他2人とアルフと聖王教会組、そして地球に駐留していたアースラスタッフといった面々が搭乗。

守護騎士や八神チャチャマル、ヴィヴィオ達は、今回は不参加。参加する理由が薄いし、姿を見せない方がいいと判断。八神ヴィータのみ見送りと言う形で顔を見せたけど、黒い人達には特に見られることも無かったから、問題は発生せず。

というわけで、明らかに怪しい相手との顔を合わせと、最終的な説明の時間。

「おお、これはお美しい。ワタクシは、悠久の翼でロストロギア対策を行っている、カミテイー・クカヴァタという者。お見知りおきを」
「見苦しいぞクカヴァタ。」

こほん。私は時空管理局の本局で遺失物搜索及び対策を行っている、ガング・ロフィーニだ。

大魔導師の手腕、見届けさせてもらおう」

真っ先に声をかけてきたのは、無精髭が目立つ中年男性と、サンダラスをかけた黒人男性。

中心人物という事になってるプレシア・テスタロッサと、助手という扱いになってるお姉様に興味津々らしい。

八神はやての方に嫌な視線を送りかけたけど、成瀬カイゼが壁になって阻止してた。隣に主もいて、2台の車椅子を押し役目としても

う2人の囑託魔導師もいる。その上、内1人がプレシア・テストタロツサの娘であるからか、それ以上何かしようとはしなかった。「ええ、無限書庫で得た情報通りであれば、どうにかなる手筈は整えたわ。

だからと言うわけではないけれど、繊細な内容だから、作業は私と協力者のエヴァンジュで行うわ。不用意な手出しはお断りよ」

「ふむ、繊細な内容だという事は理解出来るが、大魔導師のプレシア・テストタロツサ女史はともかく、そちらの御嬢さんは大丈夫か？」

「魔力量や年齢では測れんものがある事を示す事になるだろうな。

それに、可愛い家族のためだ。最後までやり通して見せるさ」

お姉様とプレシア・テストタロツサは平然と対応してる……風に見えるけど、お姉様はちよつと笑いを堪えてる？

微妙に口元が引きつってる。

(何だこの名前や外見のパチモノ臭と、強烈的劣化ヘイト臭は!?)

お前達も知っていたなら先に教えろ!!)

だって、先に情報を知ってたら……ねえ。

裏側の黒さでは群を抜いてる2人だし、下手な先入観を持たせても、ねえ。

(ねえじゃない!)

それに、無精髭の横にいたのは幻惑の銀幕シルバーカーテンやらで偽装したクアット

口だろうが! あっちの変態が直接手を出しているのを放置して大丈夫なのか!?)

今はまだ大丈夫、情報収集に徹してるし。ちなみに偽名はヴィオラで、カミティー・クカヴァタの秘書として搭乗してる。

動きがあるとすれば、闇の書の対策が完了してから。時空管理局がおかしな動きをするのもきつと同じタイミングだから、現時点で藪をつつくのはオススメ出来ない。

今回を逃したら、時空管理局合意の下での作業が絶望的になる。作業自体や完了後の敵対的干渉を減らすためにも、ここは抑えるべき。(先行きが暗いな……というか、無事に終わる見込みがまるで無いんだが)

潜入工作が主任務のドゥーエが来てないだけマシ。
それに、色々手は打ってある。

最終的には何とかなる。といいな。

(せめて言い切ってくれ……)



次元空間を抜けると、眼下に広がるのは雪景色だった。

でも、旅情を感じる暇も無く、慌ただしく始まる闇の書完成への準備と対策。

ヴィクタムは予定通り、武装局員の中隊1つを乗せて少し後方で待機。アースラが低軌道の衛星軌道に入り、武装局員や執務官が惑星の最終確認を開始。

もちろん、私達も動く。具体的には、変に召喚されたり闇の書が転移して来たりしても問題が起きにくいように、守護騎士の4人を時間超減速型の別荘(通称食糧保存庫)に入れたりとか。

闇の書に召喚されるにしても時間を稼げるかもしれないし、闇の書が守護騎士側に来ても同様。問答無用で召喚されたらどうにもならないけど、何もしない事より問題は増えないはず。

というわけで、お姉様、主、八神はやて、プレシア・テストロッサ、八神チャチャの5人に、クロノ・ハラウン他2人の執務官、それに3人の犯罪者と、その護送役を兼ねる武装局員の中隊が現地入り。

したのはいいけど、プレシア・テストロッサのバリアジャケットの防御力は上がってるみたいだけど、デザインが相変わらず。そんなに若返った乳を見せびらかせたいか。

「最終の確認だ。」

無限書庫からの情報通りであれば、書が完成してから数分で防衛プログラムが暴走を開始する。

まずは防衛プログラムを魔力ダメージで機能停止させ、八神はやてと管制プログラムに権限を取り戻させる。権限が戻り次第、防衛プログラムを分離、必要に応じて氷結封印やアルカンシエルでの破壊も検

討する事になる。これが、僕達時空管理局に期待されている役目だ。それと同時に、書の歪められた構造を暴走しないよう修復する。これを担当するのは、プレシア・テストアロツサと八神はやての家族達だ。大雑把な流れはこうだが、ロストロギアに関する事件だ。こんなはずじゃない事態になる可能性も決して低くない。油断せずにいこう。はやて、大丈夫だね？」

「ドキドキやけど、大丈夫や！」

もしもの時は、エヴァさん、よろしくな？」

「ああ。任せておけ」

そんなプレシア・テストアロツサの正面で、説明をしてるクロノ・ハラウンにお姫様抱っこされてる、八神はやて。

何にドキドキしてるのか、ちよつと問い詰めてみたい。

修復する、の辺りでアースラに残ってる高官の一部、特に後ろ暗い連中の表情が微妙に変わったけど、どこまで教えられてるのやら。

ギル・グレアム達もいるし、騒いでないから放置の方向で。

お姉様に任された最後の手札は、八神はやての眷属化。最悪の場合はナハトヴァールとラインフォースに真っ向から喧嘩を売る事で、話が付いてる。魂はともかく、リンカーコアが奪い合いで壊れる可能性もかなり高いから、本当にどうしようもない時にしかやらないけど。

「準備はいいわね？」

始めるわよ」

「ああ。3人をここに」

もがもが言いながら武装局員に運ばれてくる、ミノムシ3個……もとい、犯罪者3人。

回復不可のリンカーコア破壊は嫌なのか、暴れようとしてるけど気にしない。

実際に暴れるのは無理なように色々手を打ってあるから、問題無く、蒐集作業担当の八神チャチャが3人から蒐集。量も計算通り。

完成した闇の書は蒐集した場所に自力で浮かび、紫のオーラを放ち始めてる。

「これで、始まるはずね」

「そうだな」

「まずは、3人の收容を。ここにいても危険なだけだ」

プレシア・テストロッサとお姉様は気にしてないけど、クロノ・ハラオウンの指示で、蒐集された3人がアースラに回収された。

しばらく様子を見てると、闇の書から蛇が出てきた。

「というか、蛇の塊になった？」

八神はやてに浮遊魔法が発動。自力飛行と言うか、少なくとも落ちる事は無くなった模様。

「そろそろ僕も離れた方が良さそうだ。」

姿勢制御も問題無いようだが、気を付けて」

「うん、解ってる。こっからが正念場や。」

もうちよい待ってくれると有り難いんやけど……何か今まで知らなかった知識みたいなのが、頭の中をぐるぐるんぐるんしとる」

「エヴァンジュが言っていた、記憶の流入か。」

何とか受け止めてもらうしかないと思うが」

「時間があれば大丈夫や。やから、もうちよい、もうちよい待ってな」
今まで八神はやてを抱き上げてたクロノ・ハラオウンが、プレシア・

テストロッサの傍に移動。

八神はやては、目を白黒させてるけど、一応落ち着いてる。

「んー、その蛇みたいんが、ナハトヴァール……防衛プログラムやね。
んで、こっちにリインフォースが……おおっ!？」

八神はやての足下にベルカ式の魔法陣が展開。

直後、どん、と言う感じで、黒やら青やら紫やらが入り乱れた、魔力の柱が。

しばらくしてそれが収まると、そこには黒い六枚羽を持つ銀髪赤目の御嬢さん、要するにリインフォースが。

ミニスカートに片足だけハイソックス、胸を強調するラインの服つて、誰の趣味だろう。

「夜天……いや、既にリインフォースと呼ぶべきか？」

「エヴァンジュか。未だ管理者権限が機能しておらず、正式にリインフォースを名乗れる状態にはなっていない。」

ナハトも、もうしばらくは大人しいだろう」

リインフォースが左手で塊になつて蛇を掴むと、蛇が手にまとわりついて。

ごつつい籠手……じゃない？

えーと、パイルバンカー的な何かに変化した。

がしよん、つて杭が引つ込んで。いいなあ、浪漫武器。

「はやての意識は大丈夫か？」

「問題ない。我が主は、私の中で目覚めておられる」

『大丈夫や、声も聞こえとるよ』

「ここまでは順調だな。」

次の手順、ナハトヴァールの分離に進むぞ。戦闘準備を忘れるなよ」

『ごっちはいつでもOKや』

全員バリアジャケットは展開済みで、デバイスも持つてる。

心構えも、問題ない。

「よし。まずは、現状で切り離しが可能か、やってみてくれ」

『よっしゃ、やるよりリインフォース』

「はい、我が主」

再び、三角の魔法陣が現れて。

そして、パイルバンカーから、また蛇がうようよ？

「くっ……やはり強制的に……なにっ!!」

リインフォースが苦しそう。

というか、黒いスフィアみたいなリンカーコアみたいなのがいつぱい出てきた？

まさか、闇の欠片とか？

『な、何やこれ!!? こんなん情報にあらへんよ!!』

「これは……まさか!?!」

「総攻撃開始!」

純粹魔力攻撃でナハトヴァールをブツ飛ばせ!!」

驚いてる八神はやてとリインフォースには悪いけど、きっとお姉様が正解。

でも、正直一步遅れた感が。

『Strahlen Freundchen』『Stiger Blade』『Photon Burst』『Short Buster』(以下略)

ほぼ同時に20発以上の魔法が撃ち込まれるけど、多重展開された障壁に防がれてる。

随分と堅牢と言うか、100個を超えてまだまだ増殖中の黒いスフィアは、今の所は全部がオーバーS相当の魔力持ち。

プレシア・テスタロッサでも単独では抜けなさそう。

「ああ、何という事だ。

私は眠る事すら許していなかったのか……済まない、我が主達………」

主……達？ リインフォースの？

要するに、過去の闇の書の主のリンカーコア？

過去に取り込んだ主の成れの果て？

魂とリンカーコアが混じってる上に、気味悪い何かに変質してる。

剥奪するには、危険な香りがプンプンする。

「冗談じゃない、夜天の王様大行進的な意味で王の軍勢か!?

全員アースラに戻れ、邪魔だ!!」

「ちよ、ちよと待てエヴァンジユ!

君一人で何とか出来るわけが!!」

「私が得意なのは殲滅戦だ、味方の識別は苦手なんだ!

死にたくなければ戻れ!!」

魔力封印の解除を確認。お姉様のリンカーコア、全力稼働へ。

現地及び別荘からの魔力素集束と転送を開始。

アルハザード式の特化型デバイス4機を転送、ブレスレットとアンクレットで装備及びリンク完了。

って、主も魔力を解放してる？

「私は、エヴァと共に歩むと決めている。

置いていかれないためには、必要だと判断した」

「……私の前に入るなよ。巻き込まない事を保証出来ん」

「き、君達、その魔力は……」

『クロノ君、2人の魔力が凄い勢いで増える！』

具体的にはクロノ君の10倍を突破、まだ止まんないよ!!』

「なっ!?!」

「任せていいのね、エヴァンジュ?」

エイミー・リミエッタの報告で絶句してるクロノ・ハラウン。

プレシア・テストロツサは、全く驚かずに、状況を確認してる。

「オーバーSが入り乱れる戦場で無駄死にしたくなければ、下がれ。

クソツ、幾多の魂とはこういう事か……」

(妹達は可能な限り集まれ、この先に何かがあるか予想もつかん。

八神のはアースラに戻って馬鹿が何か仕出かさないと監視、対処は

任せる)

了解。全業務を一時凍結、最低限の維持担当以外は全員集合へ。

プレシア・テストロツサや執務官、武装局員も撤退開始。

八神チャチャもアースラに同行、転送……完了。

ラインフォースはどつかのアスキーアートばりに、うわあああつて

感じになつてる。

「はやて、ラインフォース!」

現状で分離は!?!」

『あかん、ラインフォースが浸食されとる!』

何とかしてナハトヴァールを止められへんか!?!』

「解った、可能なら障壁を弱めてくれ!」

妹達、砲撃200発準備!」

浪漫砲っ!?!

200人で全力砲撃、スフィア化して広域展開。魔力解放っ!

非殺傷設定なら、ミッド式の方が安全。

合言葉は、でいばいーん……

「撃て!」

ばすたー!!!!!!

って、黒いスフィアが超増殖、質は落ちたけど一気に1000越え

!?!

どう考えても、過去の主のリンカーコアだけじゃなくなってる。

ナハトヴァールも全力防御、障壁500枚越えを確認。

残り半分は攻撃に回る？

砲撃300発が準備中。

「私とアコノに思考支援、回避補助を最優先！」

攻撃ついでに奴を干上がらせる、この星の魔力素全て喰らい尽くせ

!!

わお、本気？

でも、お姉様と私達が本気になるなら、それくらい必要かも。

魔力素流入防止の結界と魔力素の回収に、えーと、1万人くらい？

とりあえず伝送ネットワークを形成開始。人員配分は後で調整、手

隙ならとりあえず攻撃を。

というか、ナハトヴァールのうねうねっぷりが凄い。

リインフォースが埋もれてる。

黒いスフィアからの砲撃は今のところはお姉様も主も舞うように避けれるレベルだけど、まだまだ増殖、増加中。

「攻撃は、全て障壁で防ぐつもりか……」

先にスフィアを減らさないと、千日手になるか？ 集中攻撃100

0発、撃て！」

でいばいんばすたあ、がとりんぐしふとつ！

ナハトヴァールと黒スフィアからの反撃、多数。

半分相殺されようが、平均の質も数もこつちが上。力で押し切る。

押し切ったけど、ちよつと潰した途端に逃げられて私達は深い悲しみに包まれた。

「この程度では埒が明かな。地表を削って吸収している様だし、干上がるどころか魔力は更に増大中、か。

スフィアを少し削った程度では……」

今の所、八神はやての生命反応は問題ない。

リインフォースの浸食も小康状態？

魔力素流入の結界を解除、より魔力を集める方向へ。

魔力素の枯渇よりも、こつちへの対処で忙殺してる方が、浸食も遅

れる様子だし。

「数はこっちがまだ上。」

妹達に防御を任せて、大きいのをやる?」

華麗に舞いながら、主がお姉様に近付いてきた。

どこの弾幕ゲームだと言いたくなる勢いで砲撃が飛び交ってるけど、それくらいの余裕はある。

「ベルカ式とかだと、非殺傷設定が怪しいが……このままもまずいな。

だが、何とかして非殺傷で押し切「エヴァっ!」なっ!?!」

主がお姉様に体当たり、後ろからの跳躍攻撃!?

攻撃で蛇が砕けたけど、破片がうざい。

って、お姉様の左腕に当たった場所が、黒く変色してる!

「クツ、左腕。パージ、バースト!!」

あつさり左腕を見捨てて爆破、デバイスは右手首に転送して浸食の広がり回避したけど、被害が大きい。

浸食速度が予想以上。大人モードのままだと再生は手間と隙が大きすぎる。

対空間跳躍の索敵を強化……新しい転移反応を感知。

「チャチャマル!」

「了解、攻勢防御を行います」

現れた蛇2匹は、即座に討伐。出待ちが報われた。

さつきと今回で主とチャチャマルも蛇の破片に接触したけど、特に侵食は無い?

だけど、お姉様は蛇の破片すら当たれない。迎撃すると破片がうざい。

なんて厄介な。

『私に構うなエヴァンジェリオン!』

このままでは、お前まで闇に……!』

リインフォースからの通信?

何というか、凄く慌てる。

『エヴァさん、何とかならへんか!?!』

ナハトヴァールを止められへんのもまずいんやけど、リインフォー

スが悪い方に覚悟を決めかけとる!!』

うそん。

先に対面とか名付けとかやっちゃったせいで、感動不足？

ここにきて過去の罪を見せ付けられた格好、上げて落とすしちやっただけ？

「諦めるなど言っただけだ。リインフォース、お前が弱気になっただけだ。腕の1本や2本がどうした、お前もはやてと歩む未来を望まないわけじゃないだろう！ 死んでも望む未来を掴みとれ！」

『だが、この状態では……しまっ!』

どかん、って感じで黒い魔力があふれ出して、球体になった？

外に出てた黒いスフィアは、全部巻き込まれてる。

攻撃は停止したけど、管制通信も届かない手応え。これは、きつと。

「……暴走前の、黒い澱みか。」

全く……本当に、こんなはずじゃない事ばかりだ」

澱みと言うか、黒いゲルが膨らんでる中から、蛇だか触手だかよく解らないものがうねってる様に見える。

単純な球体とタコ足だった原作と、色々違う。

『エヴァさん、現状の説明をしてもらってもいいかしら?』

リンディ・ハラオウンからの通信が来た。

実際は、その後ろにいるお偉方に対する説明になるだろうけど。

「あまり嬉しい状態ではないな。」

はやてとリインをナハトヴァールから分離出来ないまま、本格的な暴走の前段階に入った。どの程度時間があるか解らんが、あの中から浸食暴走体が現れて暴れ始めるのだろう。

アルカンシエルの準備をしてもらっても構わないか? 出来れば

2人が分離するまで発射を待つてほしいが、タイミングは任せる」

A S編 4 1話 夜に夜明けの祝福を

『ええ、この様な状況だし、準備は当然行うけれど、分離の見込みはどれくらい？ それに、エヴァさん自身は身を守れそう？』

「あまりにも可能性が低いようなら、こちらとしても動く必要があるわ』

「そうだな……」

リンディ・ハラオウンの質問に、お姉様が悩んでる。

「現状では、可能性が高いとは言い辛い。

ならば。

『こちら八神チャチャ。チクアープ、いる？』

『ここに。何か御用でしょうか？』

アースラのブリッジで、協力者を召喚。

「というか、声を掛けたら普通に出てくるあたり、予想通りと言うか。

「ちよつと待てチャチャ！」

『待たない、使える手札は使うべき。』

リインフォースからナハトヴァール……防衛プログラムを分離したい。

「死地だけど、飛び込んでもらえる？』

『ふむ、なかなか危険な任務で御座いますな。』

「以前は即座に潰されたので御座いますが、何か勝算がおりますか？』

『夜天の魔道書の、基礎構造への強制介入キーを受け取ってる。』

「デバイスの改変能力と併せれば、分離も可能はず』

「ああもう、それだけだと身を守る方法が無いだろうが！」

チクアープ、実験作ではあるが、デファクティブコア……疑似的なリンカーコアに近い物を渡そう。恐らく5分程度しか持たんだろうが、私達からSSS級の魔力を供給出来る筈だ。

「お前の分身能力があれば、何とか使えると思うが……いけるか？」
『なるほど、それでしたら何とかかなりそうで御座いますな。』

成功報酬として、何か1つ簡単なお願いを聞いてもらう、という約

束では如何でしょうか？」

「……無理な内容だと判断したら、拒否するぞ。それでも構わないか？」

『無理に押し通す願いでも御座いませんから、契約成立で御座いますな』

『エヴァさん、突入までは私も同行します！』

機動力には自信がありますし、私にも魔力供給してもらえれば、さっきの弾幕程度は力尽くでも突破出来ます！』

セツナ・チエブルーが参戦表明？

魔力供給との相性が異常なだけに、正面突破でも到達しそうではあるけど。

「あの、私も」

「僕に出来る事はあるかい？」

フェイト・テストアロッサと成瀬カイゼも、参戦表明をしたい？

だけど、2人はマズい。

「いや、お前達はまだ控えだ。プレシアと切り札を担当してくれ。

お前達まで助ける手段は、恐らく無い。それに、私達が浸食された時はお前達が頼りだ」

「そっか……うん、解った」

「了解。本格的に、最後の盾という事だね」

「まあ、チクアーブとセツナが私並みの速度で浸食されるようなら、その時の判断はリンディに任せる事になる。

はつきり言えば、生け贄だ。2人とも本当にいいんだな？」

『はいー！』

『勿論で御座います』

「やれやれ、どうしてこう命を粗末にする阿呆が多いんだか」

お姉様が呆れてるけど、これで問題の1つに対しては手札を用意出来た。

もう1つは……

「私がエヴァを守る。

蛇の欠片は私にも当たっていた。私も浸食しようとしてたみたい

「ただ、問題無く防ぐ事が出来たから、私の方が防御に向いている」
「ここにある戦力という意味では、主が最終的な防御を担当するのは理に適ってる。」

「少なくとも、浸食攻撃が致命傷になりかねないお姉様が表に立つよりは。」

「確かにそうだが……私の近くだと、攻撃で巻き込みかねんぞ。」

「それに、あの弾幕の中でどうする気だ？」

「ユニゾンすれば大丈夫。」

「エヴァが自分を攻撃する事は無いし、私は自分を守れば良くなるから、確実に防御出来る」

「そりゃそうだ。」

「しかも、お姉様は説得や攻撃に専念できるオマケ付き。」

「……否定は出来んが、ここでその手札を切るか？」

「逆に考えると、ここで使わないならユニゾンの能力を得た意味は無かった。」

「悪意を持って与えられた能力なら、この程度の嫌がらせもあつておかしくない」

「私は、これが終わったら静かに暮らしたかったんだがな……ああ、どンドン平穏が遠ざかる」

「私はエヴァが居ればそれでいい。それに、夜天……リインフォースを助けると決めた時点で、平坦な道ではなくなっている。」

「最悪の場合は遠い世界に逃げてしまうのもありだし、今は目的に集中するべき」

「そう、だな。」

「仕方ない、やるぞ」

「お姉様、幼女を経由して本の姿、更に光になって、主の中へ。」

「主は髪が金色になって、狩衣が黒色になった……くらい？ 何だか、お姉様や改造前のフェイト・テスタロッサみたいなカラーリングに。」

「ブレスレットとアンクレットのデバイスは、主が装備する形になる。」

「金髪……エヴァと一緒に。アクセサリーも」
笑った笑った、微笑み程度だけど主が笑った。
意外なツボ。

『いや、それは喜ぶところなのか……？』

まあいいか。リンデイ、手札としてはとりあえずこんなところだが』

『随分と大盤振る舞いだけれど、これでもとりあえずなのかしら？』

『けど、セツナさんは……』

『本人からの申請だ。それに、私が何の策も無しに見殺しに思うか？』

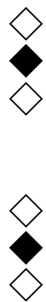
『大丈夫です。必ず、生きてまた会えますよ』

『そう……ここは信用しておくわ。』

エイミー、暴走までの予想時間は？』

『恐らく、あと1分程です！』

『そう。アルカンシエル、チャージ開始！』



『始まる、か……』

海中……地表が抉れたせいで流入してきた水から、黒い光が溢れて。

ゲルが爆発したら、そこにいるのは……怪獣に下半身が埋まって、目隠ししてわっかを背負ったヌードのおねいちゃん？

怪獣とヌードは原作通りだけど、目隠しとわっかは何処から？

やっぱり黒いスフィア多数出現。

物理と魔法の障壁、合計……1000枚ちよつと。

「やっぱり大盤振る舞い。作戦は変更なし？」

『そうだな。全員で砲撃して防壁を破壊、コアの座標を特定してセツナとチクアーブが突撃だ。後は状況を見ながら判断する。』

さあ、始めようか。まずは駄々っ子を叩き起こす！

出し惜しみは無しだ、全力でナハトヴァールを叩きのめせ!!』

超★浪漫砲、1万人態勢っ！

戦争は物量、馬鹿の一つ覚えだろうが数撃ちや当たるっ！

でいばいーん……

「ナハトヴァールが攻撃行動を開始しました。」

次元跳躍の反応もあります。マスター、主、ご注意ください」

チャチャマルの警告を気にせず、ばすたー!!

撃ち落とすぜー、撃ち抜くぜー！

「来る」

「攻勢防御を開始。数が多いので、主も回避をお願いします」

「解った」

ぶつつけのはずなのに、お姉様の飛行デバイスを使いこなして飛び回る主はやっぱりおかしい。

800枚くらい削れたくらいで障壁の再生成が拮抗して、しかも攻撃を続けられるナハトヴァールもおかしい。

移動は何とか抑え込めてるけど、内部にどんだけコアを溜め込んでいるんだと、小一時間問い詰めたい。

『このまま押し切る！アコノ、大技行くぞ！』

術式転送、結構大型の集束砲撃。

アルハザード式だけど、お姉様の大威力攻撃の中では非殺傷の魔力攻撃が可能な代物。

但し長い詠唱有りで制御も高難易度の馬鹿出力。お姉様の補助付きでどうぞ。

「解った。地から地へ、空を駆け、眠りに還る道標」

『エヴァンジュ！……駄目だ……早く私を……！』

『夜天か!? 諦めるなど言っただはすだ！』

何とかしてナハトヴァールを切り離せ!!』

「人の掴めぬ蜃気楼、賢者は時の流れに埋もれし夢を追う」

『だが……このままでは、お前まで……！』

この魔力は過去の犠牲者の……私を庇えば、お前達にも罪が、恨みが………』

『私を見縊るな！』

いくつもの世界を滅ぼし数十億の命を奪い、故郷を灰に変え製作者すらこの手にかけて私が、その程度で怯むとでも思ったか!?

正義の為でも、過去の主や犠牲者の為でも、お前やはやての為ですら無い!

私の為に生き足掻けリインフォース、私にこれ以上家族を殺させるな!!』

「冥界の果て、昏き微睡みの中、紅き瞳に映る始まりと終わり」

『我儘、なのだな……』

『私は、私の意思で生きると、自分で未来を選ぶと決めている!』

お前達のいない未来など、私は認めんぞ!!』

「揺らめくは7つの光、誓いの鍵を以て、開け天空の道。

エヴァ、行ける」

『眠れナハトヴァール! 「Iris caelum天空の七色」!!』

極太集束砲、いっけー!

見ろ、障壁が紙のようだ!

浪漫砲も発射継続中、ナハトヴァールの障壁残り僅かだけど、攻撃反応多数。

アースラのブリッジで旅の鏡展開、座標特定開始。飛び交う弾幕を避けるため少し後方へ。

チクアーブはセツナ・チエブルーの腕の中。

『デファクティブコア封印解除、フルドライブ!』

2人とも頼むぞ! チャチャゼロは2人の先導、突破口を切り開け!!』

『オウ、やっとで出番カ、切り裂くのは任せナ!』

『おお、これは……なかなか』

魔力供給の安定を確認、飛行魔法準備完了。

障壁残り7、6、5

『行きますー!』

転移完了、突撃開始。

攻撃反応の多くが迎撃に回る模様、支援攻撃を開始。

チクアーブが20匹ぐらいに増殖して、ネズミ玉と尻尾にしがみつ

く数珠みたいになってる。

セツナ・チエブルーは翼を展開、砲撃やらをギリギリで躲したり切り裂いたりしながら突撃。東方的に言えばグレイズ、グレイズ、相殺、たまに被弾。

障壁残り1、0。障壁破壊を確認、攻撃反応増大。

『多少攻撃がこつちに来ても構わん、可能な限りあいつらを撃たせるな!』

「現状では防御に余裕があります。支援を優先してください」
防衛プログラムの矜持、お姉様と主の守護はチャチャマルに任せ
て。

絶対に撃たせない、とは言えないけど、可能な限り汚物は消毒。

破片による浸食も軽微、主の集束砲撃終了までには到達の予想。

『エヴァンジュ……お前は……』

『泣き言は全てが終わってからだ、過去の暴走は忘れておけ！』

言ったはずだ、絶対に諦めるな!!』

チクアーブ、ナハトヴァールに接触。侵入を確認、魔力反応は健在。
チャチャゼロとセツナ・チエブルーは、そのまま近接戦を仕掛ける。

『2人とも早く戻れ！ そのままでは持たんぞ!!』

「ナハトヴァールをこちらに引き付けた方が、成功率も高いはずですよ!」

「ケケケ、使い捨て出来るモンはすりゃあいーんだヨ。

イモート達も、構わずブチ込みナ!」

『この阿呆共が、さっさと戻らんか!!』

ナハトヴァール内部、強制介入キーの発動を感知。

転移反応、八神はやてトリインフォースが離脱。

攻撃反応激増、大暴走開始!?

近くにいた二人が飲まれた。

『離脱するぞー!』

「援護します。お急ぎください」

「解った」

チャチャマルを殿しんがりに、離脱と言うか逃走……って、ナハトヴァールが凄いい勢いで追ってくる。

全体的にボロボロだけど、かなり速い。軽快に飛ぶ巨大ゾンビが狂ったように弾幕をまき散らしながら追ってくる。

アースラのアルカンシエルがチャージ完了、バレル展開開始。「申し訳ありません、浸食に抵抗出来ないため躯体を放棄します。御武運を」

『どれだけ闇を抱えていたんだあいつは!?!』

というか、主はそれ以上加速しちゃヤバいつて!

そのデバイスの飛行や転移魔法はお姉様の頑丈さをアテにしてるから、保護が弱いのに!!

(だけどチャチャマルが抵抗に失敗した以上、当たるわけにはいかな
い)

『くそつ、来たれ永遠の闇。暗い国の吹雪!』

広域氷結魔法、効果は……(´・ω・`)

動きが止まるどころか、移動がちよつと鈍くなるだけってどんだけー。

というか、主の回避運動がやばいつて!

遠隔のバインドも勢いを弱められてるかすら怪しいし。

あああ、内臓とか目とかがやばい事に!!

『何とかして勢いを弱めるからジュエルシードもどきを全て出せ!

使い捨てで構わん、あれの出力で抑え込む!』

了解、捕縛設定での起動準備へ。

主が持たない、お姉様急いで。

『すまんアコノ、もうしばらくだけ耐えてくれ!』

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

我に応えよ闇と氷雪と永遠の女王、咲わたる氷の白薔薇、眠れる永劫凍土

来たれ永久の闇、永遠の悲嘆』

主の目が、目がー!!

弾幕弱いよ、何とかならない!?

原作ブレイカー中以上に崩壊しても飛んでてコアが見えないのに
どうしろって!?

『氷れる川の底に、意思なき意識を囚えよ

妙なる静謐、白薔薇咲き乱れる永遠の牢獄

終わ^cりなき嘆^yきの川^u!』

広域凍結封印魔法、いっけー!

ナハトヴァールの速度、大幅低下。

ジュエルシード(本物) 21個転送、アルハザードの束縛魔法3枚
重ねにベルカ式もオマケっ!

『撃てリンデー! アコノ、離脱するぞ!』

出力最大、捕縛成功……って、ジュエルシードからの浸食!?

何か来るー、きちやうー!?

アツーーー!?

『な、何だ、これ、は……』

き、緊急離脱、強制転移っ!

転移、完了。って、衛星軌道近くまで来ちゃった!?

ジュエルシードからの浸食、沈静化。

アースラはアルカンシエルのロックを解除済み、発射手順進行中。

『思考支援、並行行使! Planet delete。Prerequisite。準備!』

わお、本気!?

アルカンシエルに耐える可能性を考えると、必要かも?

必要な魔力は、この星に残る魔力と魔力素が枯渇するくらいと予想。
ナハトヴァールとジュエルシードが魔力をばらまいてるから、多少の余裕はある。

全力集束、いっくよー。

アースラ、アルカンシエルを発射、ナハトヴァールへの着弾を確認。

集束は順調、発動可能水準まであと30秒。

効果範囲に魔力反応……無し。再生反応等も感知出来ず。

『ふう……だが、例の認識阻害の件もあるし、しばらくは発動可能な状況
を維持するぞ。』

あと、侵食の影響の調査を頼む』

了解。

惑星消滅砲撃の発動準備完了、発動遅延処置を開始。

次の仕事というか、本番の作業が残ってるけど。

正直、しんどい。

『私だって苦しいんだ。だが、もう少しだけ頼む。』

リインフォース、はやて。無事だな？』

『エヴァさん!? なんや凄い事になっとなつたけど、大丈夫なんか!?』

『私達は今の所、問題はない。』

その、少し休んではどうだ?』

「大丈夫。命に別条はない」

『休む前に、お前の最低限の修正をしてしまいたい。』

少なくとも、暴走する可能性だけは無くしてしまおう。こっちに來てもらえるか?』



リインフォースがお姉様の近くに転移した際に、集束した魔力を見て表情が引きつったのは見なかったことにして、夜天の魔道書の修正作業は、最低限の部分は無事に終了。

ナハトヴァールをほぼ初期状態に戻し、権限もリインフォースや八神はやてより下となるよう設定。危険そうな部分を色々削除した上で、ぶつとい。パスをリインフォースと八神はやての接続として切り替え。

この過程で、守護騎士達へのパスも一度切断。4人を食糧保存庫から出して再接続もしたし、他の細かい点はじっくりと時間をかけて修正すればいいから、早めにやらないといけない作業は、これで完了。最終的には予定通り、八神はやてを無限再生と転生の対象として取り込ませる事にも成功した。新たなエターナルロリの誕生である。今も外見はリインフォースのままだけだ。

魔力量やらの問題で確実に融合事故を起こすから融合が使い物に

ならなくなっただけ。

過去の改変やらアルカンシエルやらによる損傷の一部が回復出来てなくて、治療が終わるまでは全力が出せないけど。

「主はやて、本当に良かったのですか？」

『ん？ 何がや？』

「事実上の不老不死となった事です。

人が最後に求めるものであると同時に、それを持つ者は妬まれ、人の世から追われます」

『まあ、何とかなるよ。』

エヴァさんやアコノさんもいる。私達は、孤立してるわけやない』
『私達から見たら、仲間が増えたという事だからな。』

念のため言っておくが、お前達を見捨てる気は無い。それと……生き残ってくれて、有り難う」

「え？ いや、その、礼は私がすべきだ。」

私には、礼を言われる理由も、礼を受け取る権利も無い」

『お前が無いと思っただけでも、私にはある。』

2人を生き残らせたのは、家族を殺したくない、家族に死なれたくない私の都合だからな。

特にはやては、完全に私達の都合で不老不死だ。だから、有り難う』
『エヴァさんにはエヴァさんの理由や都合があるかもしれへん。けど、こうやってリインフォースと一緒におれるんはエヴァさんのおかげや。』

不老不死についても話は聞いてたから、騙されたわけでもない。さつきはちよつとびっくりしたけど、それもエヴァさんが何とかしてくれた。

ほんま、ありがとな』

ホント、ナハトヴァールの強化っぷりにはびっくり。

不老不死は、ちよつと改変して捻じ込んだ感があるけど、結果は約束通り。

全部何とかなって、本当に良かった。

「そうだな。私からも礼を。」

有り難うエヴァンジェリ

『どういたしまして。』

まあ、最大の問題は今からの様な気もするが……』

「やはり、私の罪が問題なのか……」

『どちらかといえば、私に対して煩くなる方が心配だな。』

下らんことを抜かす有象無象を、何とかして黙らせるしかないか』

「アースラに戻った時が、一番煩そう。主に、偽物みたいな2人」

『……最悪、物理的に黙らせるさ』

大丈夫、手札はある。

そろそろ説明とかもしないといけないだろうし、移動推奨。

その前に、ナハトヴァールやジュエルシードの反応も復活しなかつ

たし、そろそろ集束した魔力を解放すべき。

A S編 42話 作られた者達

そんな感じで、アースラに戻ってきたお姉様達。

ブリッジに直接転移したのはいいけど、カミティー・クカヴァタとガング・ロフィーニを中心に、武装局員が戦闘態勢を取ってる。査察官もその中にいる。

ハラオウン親子とグレアム一派とテストロッサ親子、八神チャチャ、成瀬カイゼ、ユーノ・スクライアが相對して睨み合ってる形。聖王教会組や派遣されてる執務官は中立というか、一方に肩入れするのを躊躇ってる様子。

『ふむ、何かお前達に不都合でもあったか?』

「あれだけ大口を叩いておいて、何人犠牲にしたか解っているのか!?

それに、何十億もの人を殺してきたとは、どういう事だ!」

「それに、まさかユニゾンデバイスとは。」

明らかにロストログア、見過ごすわけにはいきません」

ガング・ロフィーニとカミティー・クカヴァタが、何か騒いでる。

正義馬鹿に近い言動なのは情報として知ってたし、予想通りの行動ではあるんだけど。

暴れてないだけマシとはいえ、予想通り過ぎて胸焼けしそう。お姉様もため息をついてるし。

『はやての命とグレアムの立場を犠牲にしようとしていたお前達に言われたくないな。それに、当時の私は軍人だ。上の指示に従い人を殺す役目を全うした事に、何の問題がある。』

それで、私達をどうしたいんだ。平穩を脅かそうというなら、容赦せんぞ』

「そんな満身創痍で、何をしようというのだ。」

大人しくした方が身のためだ」

『大人しく封印か破壊されろと?』

冗談じゃない、お断りだ』

ユニゾン継続中だけど、主は目が潰れてるし、解除してもお姉様は片腕を飛ばしたままだし。

見た目的には、五体満足とは言い難い。

そうやって言い合っていると、カミティー・クカヴァタの秘書、要するにクアットロが、エイミー・リミエッタの方へ。

「そうやって言い合っていても、事態解決の役に立ちませんわねえ。」

「ここで真打の登場、といきましようかあ」

「何をやっているヴィオラ！」

「勝手は許さんぞー！」

「あらあ、ご自分の胸に、それを言える立場か聞いてみてはあ？」

「それでは、ちよつと失礼」

ぼちつとなという感じであつさり、エイミー・リミエッタが止める暇も隙も無い早業で通信を繋げて。

モニターに現れたのは、要するに変態博士ことジェル・スカリエツティ。

『おや、予想通りの展開という事かね、クアットロ』

「ええ、やっぱりおバカさん達が暴走しましたあ。喧嘩を売りたいみたいですすねえ」

『なるほど、2書共にユニゾンしたままという事は、少々お困りのようだ。』

「ウーノ、予定通りだ」

『はい、ドクター』

映像には1人だけど、近くにウーノもいるらしい。その声と同時にアースラとヴィクタムの、相互以外の通信がほぼ断絶状態になった。

声はしないけど、他に誰かいる気配もある。

『さて、こうして話すのは初めてになる。』

知っている者もいるだろうが、私の名はジェル・スカリエツティ。お偉方の2人には、馴染みのある名前だろうか？』

「有名な次元犯罪者ではないか。」

「貴様のせいで、どれ程の被害が出ているか。大人しく捕らえられろ！」

「ガング・ロファイニが騒いでるけど、仲間ではないらしい。同じように、後ろ暗い同類なのに。」

『ほう、私に行動を指示した者の部下が、結果を問題にするとは。

片腹痛いとは、こういう事を言うのだろうかね』

「……何を言っている?」

『時空管理局最高評議会。』

事実上、次元世界を統べる組織で最上位にある彼らだが……さて、本当に今でもそれに値する人物なのかね?』

「何を言っている!」

次元世界を平定した功労者達が、行く末を見守るために作った組織なのだぞ!」

『ふむ、やはりその程度か。やれやれ、これでは犬と呼ばれるのも仕方がない。』

それでは、最高評議会に作られた私に与えられた、最高評議会からの指示はどう判断するかね?」

具体的には、人造魔導師の製造、戦闘機人の製造、ロストログアの研究、最近では聖王教会から聖遺物を奪え、というものもあつたのだがね』

「自らの罪を、最高評議会の方々に擦り付けるつもりか!」

ふざけるな!!」

『感情的になるだけで、論理的な反論は無いのかね?』

では、説明してあげるとしようか。

今から60年少々前、暦が新暦に変わって間もない頃の話だ。最高評議会がある女性の遺伝子情報を手に入れたのが、私達の始まりになる』

「女性の遺伝子だと? 男のお前に何の関係がある!」

『その人物の名は、リーナ・ファ・ニピン。ある古い国で大魔導師や技術者の頂点等と呼ばれた人物のだが、最高評議会は、そのクローンを作る事に成功する。』

そのクローンは順調に成長し、オリジナル同様に大魔導師と呼ばれるほどに成長するのだが、ここで一つの誤算があつた。本格的な人造魔導師の研究を行わせるはずが、興味が別の技術開発に向いてしまったのだよ。

管理局に入った後に生命の誕生を目論む精神誘導も行われたようだが、それは結婚と出産に意識が向くという結果に終わった。そのため娘を殺害され、蘇生の代替手段としてのクローンによる人造魔導師の製造に携わる事になるのだが……」

「何を根拠のない嘘を並べている！」

そんな証拠がどこにあると言うのだ!!」

『おや、その本人を前に、よくそんな事が言えたものだ。』

どうかね、プレシア・テスタロッサ」

「……否定するだけの根拠は、持ち合わせていないわ。

リーナとかいう人物のクローンであり、精神に影響する魔導具が体内に在ったというのは、事実よ。

それがどう関係するのか、嫌な予感しかしないけれど」

『では、話の続きとこうか。件の大魔導師が管理局に入った後、精神誘導のための魔導具の交換が行われた際に、体内からある物が取り出されたのだよ。』

それが何か、正義感の塊に予想出来るかい？」

「それが何だと言うのだ！」

ここにこうしている以上、命に別状はないのだろうか!」

『うむ、命に問題は無い。だが、生命に対する冒涇ではあるだろうね。』

正解は卵子であり、それを使って生み出されたのがジェイル・スカリエッティという人形、つまりは私だ。

解るかね？ プレシア・テスタロッサとジェイル・スカリエッティ

という存在は、最高評議会が意図的に生み出した奴隷なのだよ』

「何を馬鹿な「黙りなさい」っ……!!」

プレシア・テスタロッサの一睨みで、ガング・ロフィーニが黙った。

大魔導師の本気の威圧感、半端ない。

「ジェイル、今の話は本当なのかしら？」

『勿論だとも、プレシア・テスタロッサ。』

いや、母上とでも呼んだ方が良いかな？」

「虫唾が走るわ、その呼び方は止めなさい」

『それは残念だ。』

私も最近知ったのだが、君が入局して2年程した頃に、卵子を取り出されたらしいのだよ。それを材料に5年程の歳月をかけて作られたのが私、という事になるようだ。

実に面白いと思わんかね？ 私が作られ人造魔導師の研究を命じられたのは、クローン技術の権威であったリーナ・ファ・ニピンのクローンである君が、その道に進まなかったからなのだよ』

「……そんな話を今している意図は、何かしら？」

『これに見覚えがあるだろう？ 私の中にも、これがあつたのだよ』

ジェイル・スカリエツィが見せたのは、見覚えのある思考誘導の魔導具。

プレシア・テスタロッサの体内にあつたものと、見た目は一緒。

「……ええ、あるわ。精神誘導の魔導具でしょう？」

『忘れていないようで何よりだ。』

私の場合は、未知に対して高い興味を示す事と、時空管理局や最高評議会といった権威あるモノを無条件に信用するという事の2点の様だ。つまり、研究者という名の奴隷を作るのにちょうどよい代物という事になる。

特に、無条件に警戒感を解く処置は効果的だ。同様の処置をされていたのではないかね、プレシア・テスタロッサ。

あれほど愛していた娘を殺された事故で、不確定な研究対象を示されただけで取引を受け入れたのは何故か。駆動炉を個人的に開発するなどという指示を受けたのは何故か。大した体調不良でもないのに何日も入院しなければならなかったのは何故か。

これらについて、考えた事はあるかね？』

「……ふっつ、影響が無くなつた今でも、改めて考えたくない過去よ。

それで、何を言いたいのかしら？ 管理局と一戦交えろ、とでも？』
『結果的にそうなる可能性は否定しないが、少なくとも今は違うのだよ。君達が現在住む世界の言い方だと……そう、旅は道連れ、といったところか。』

私が私であるために、最高評議会は障害なのだよ。それは、君やその仲間達にとっても同様だ。

誤った正義感で固められた人物の態度を見る限り、理解出来ていると思うが。どうかねエヴァンジュ……いや、曙天の指令書殿？」

お姉様に話が振られたけど、ジェイル・スカリエツティは割とお姉様を立ててる。

アルハザードの名を出さないとか、殿と呼ぶとか。

『私の事も調査済みか。』

だが、今の話だと世界に喧嘩を売りたいようにしか聞こえんぞ』

『精神の支配が解けた後に、改めて考えてみたのだよ。私が私であると言えるのは何処か。私が何をやりたいのか。その為には何が必要か。』

無限の欲望と呼ばれる程の知識欲、障害を排除してでも突き進む探求心は、無くなつたわけではない。生命操作技術への興味も残っている。それは認めよう。

だが、私としても意外なほど落ち着いている上に、未知なるものへの興味が、今の私を動かしているのだよ。つまり、根幹は研究者や探求者であると考えて、間違いないのだろう。

そして、研究や探究を続けるために必要となるのは何か。それは、自由だ。

おっと、勘違いしないで貰いたいが、別に管理局を今すぐどうにかする必要は感じていない。むしろ、それなりに落ち着いた世界でなければ落ち着いて研究する事も出来ないだろうから、管理局やそれに類する組織の必要性は理解出来ている。その意味では、今の私は比較的管理局自体に敵意を感じておらず、むしろ協力しようという気にすらなっている。この点は安心してくれたまえ』

『つまり、やりたいのは交渉か……？』

『依頼、もしくは取引だよ。私としては、犯罪者としての扱いを止めてもらいたいのだね。』

当然、今後は無暗に周囲を巻き込むような研究やらを行わない事が前提となるだろう。加えて、私にそのような行動を取らせていた、最高評議会に関する情報を渡す事が可能だ。

理解しやすいように言えば、諸悪の元凶に関する情報提供者とな

り、今後の行動について周囲への影響を考慮する代わりに、元凶の指示によるこれまでの行動の責を求めな、という事だよ』

『私に利は無いな。受けなかった場合は？』

『管理局の者達は、明日も生きている事を、居もしない神に祈る事になる。』

書の2人は、管理局を潰すという大仕事を行う事になるだろう。

最高評議会や管理局には、人には過ぎた力だという事実も理解出来ない者や、扱い切れない力だと理解し切れないまま利用出来ると盲信する者が多いのだよ。

このままでは全面戦争、私が手を出すまでもなく管理局が壊滅する事は確実だ』

『ふむ。受けた場合は？』

『最高評議会やその配下の排除に、全面的に協力しよう。』

利が無いと言っているエヴァンジュにも、愚か者が減る恩恵はあるだろう。加えて助手も用意するが、どうかね？』

『……さて、どうしたものか』

『あら。思ったよりも冷静ね？』

困ったように呟いてるお姉様の声に、リンディ・ハラオウンが反応した。

とつても意外そう。

『プレシアという前例があるだけに、腐れ脳味噌の連中なら確かにやりそうだと納得してしまっただけ。それに、私よりもプレシアの方が、直接的なだけに精神的なダメージが大きそうだ。』

それより、時空管理局としてはどうするんだ。最高評議会やらが主導して違法なはずの人造魔導師や戦闘機人を研究していたなどスキャンダルもいいところだろうし、その排除に動くなら協力するが』

『そうね……それに、そうでなければ、敵対する未来しかなさそうね。』

グレாம்提督、ここで決断しましょう』

『そうだな。』

宣言する！ 我々は、時空管理局を正しき道へ戻すため、時空管理局に巢食う闇の排除の為に立ち上がる！

これは反逆ではない。時空管理局の理念に反する者、法に反する者に対する、強い姿勢と意思を示す為のものである！」

『素晴らしい、実に素晴らしいよグレアム提督。今はまだこの場にいる者達にしか伝わっていないとはいえ、その意気は称賛すべきものだ。』

では、宣言通り私が持つ情報を渡そう。有効に活用してくれたまえ』

「待て！ 私達は納得していない!!」

そのロストログアを裁く方が先だろう!!」

ガング・ロフイーニが煩い。

というか、裁くって何をだ。

『ふむ、エヴァンジュの事かね？』

彼女が一体どのような罪を犯したのか、是非説明してくれたまえ』
「何の権限も無いまま何人も傷付け死に追いやった事が、何の罪にもならないとも思っているのか!? そもそも大量殺人を告白しているのだぞ!!」

『権限があれば何をやってもいいように聞こえるし、告白があれば証拠はどうでもいいとも取れるが……とりあえず、被害者がいなければよいのか?』

「明らかに死傷しているだろう!」

『面倒な男だな』

お姉様、ユニゾンアウト。書の姿經由で、本来の少女モードへ。

同時に、左腕の破損を修復。主は、えーと。

「エヴァ、一度放棄するから、再構成をよろしく。」

痛いのはそろそろ嫌」

「そうだな、解った」

というわけで、主も躯体放棄、同時に解体。光の粒になって消えた。

「躯体再構成、アコノ、チャチャゼロ、チャチャマル、セツナ。

ついでだ、少し修正するか」

了解、主とセツナ・チェブルーの障害点の一部修正を前倒し。

主の足に関する治療準備を適用。

セツナ・チエブルーの古傷及び後遺症の修正を適用。
チャチャゼロとチャチャマルは特に修正を指示や許可された点はない。現状維持。

適用完了、再構成開始。

「むっ……な、何っ!？」

驚いてる驚いてる。

4人の再構成が完了。主は相変わらず浮遊魔法で浮いてるから、車椅子が無くても問題無い。

「ええと……セツナさん、よね?」

リンディ・ハラウンもびっくり。

これで眷属についてばれるだろうけど、夜天の修正もそれなりに進んだし、問題無いよね。

「はい。言いましたよ、必ず生きてまた会えますって」

「ええ、聞いたけれど……どうして蘇生出来たのかしら?」

「厳密には、蘇生じゃないです。」

これ以上は、あまり人に話す事じゃないので秘密ですけど、他の人では無理ですよ?」

「え、ええ……」

納得したのか、してないのか。

リンディ・ハラウンはとりあえず頷いた。

「チクアープ。いるな?」

「勿論で御座います」

お姉様の声で、再び計器の中から出てきたチクアープ。もちろん、怪我1つない状態。

これで、死地に送った全員が揃った。

「さて、これで全員の無事が確認出来た上に、誰も被害を受けたと言っていないわけだが。」

おっと、私は大人の姿の方が良かったか?」

お姉様、大人モードに変更。

これで、全員が元通り。むしろ内部的にちよつとバージョン・アップ。

ガング・ロファイニーやカミティー・クカヴァタを始め、リンディ・ハラウンやギル・グレアムも含む時空管理局員や聖王教会関係者達は唾然としてる。

『素晴らしい！ 素晴らしいよエヴァンジュ！』

では、そんな君へのプレゼントだ。クアットロ』

「はあい、ドクター」

クアットロが、お姉様の前に歩いてきた。

偽装も解除、原作同様のぴっちりスーツ姿になってる。

『まずはクアットロを、従属させてほしいのだよ。』

私が作った戦闘機人の内、4人には無限の欲望たる私の因子が組み込まれていてね。それに君の持つ古の技術がどう影響するのか、見てみたいのだ。

もしも超えるなり抑えるなりすることが出来たなら、4人全員を君の下へ送ろう。どうかね？』

「片腕のウーノまで手放す気か。どんな意図だ？」

『言ったはずだよ、無暗に周囲を巻き込むような研究やらを行わない事は前提だと。しかし、その為には私の因子が障害となるのは明白だ。』

私としても、娘達を殺すのは忍びないのでね。君達との関係も強化出来るなら、そう、一石二鳥というものだ』

「ふむ……筋は通っているか。」

ところで、そこに^{ロリコン}変態……クーネはいるか？」

『うむ、ようやくお呼びかね。』

出番の様だよ、大人しく叱られたまえ』

『おやおや、叱られるような事はしていないと思っただけですがね』
映像の中、ジエイル・スカリエツテイの隣に^{ロリコン}変態が現れた。

表情を見る限り、全く悪びれた様子は無い。

「さて、この件はお前の仕業だな？」

何時頃から動いていたのか、何故私に黙っていたのかの説明をしてもらおうか」

『時期的には、日本では春と呼ばれていた頃ですね。』

黙っていたのは、プレシアさんの過去を知った時の荒れようを考えて、なるべく穏便に済むよう努力していただけですよ」

「で、どこまでがお前の差し金だ。聖遺物の頃には関わっていたのだろうか?」

『ええ、最高評議会の指示を無碍にするには、色々な準備が整っていませんでしたが。』

カリムちゃんが素早く動いてくれたので聖遺物を無事に返すことが出来ましたし、ついでにミッドチルダの研究所も封鎖出来ました。

誰にも疑われずに撤収出来たのは、不幸中の幸いでしたね』

「まさか、局員が襲撃してきたのもお前達の差し金とか言わんだろうな?」

『ハエを追い払うために少々餌を撒いたが、その程度だよエヴァンジュ。』

ロストログアが存在する疑いがあるという程度の情報に踊り、手柄を求めて突撃した結果があれだ。失敗した時や間違いだった時の為、他人に偽装出来る程度の小細工はしたようだがね。

その後の行動を見る限り、なかなか良いタイミングだったようだが』

「き、貴様が妙な情報を流したというのか!」

あれのせいで、何人の局員が被害にあったと思っている!!」

あ、ガング・ロフィーニが復活というか、また騒ぎ始めた。

というか、墓穴を掘る職人に思えてきた。

『妙? これはおかしなことを。』

闇の書という第1級搜索指定のロストログアが、実際に存在していたのだよ。それを未確認情報として伝えたのだが、どこに問題があるのかね?」

身勝手な襲撃を行ったのは、時空管理局なのだよ』

「伝えた手法が問題なのだ!」

何故正式なルートで伝えなかった!」

『広域指名手配されている私にとって、何が正式なルートというのかね?』

最高評議会の指示とはいえ、犯罪者として名を馳せているのは私だ。そもそも、個人的に聞いた話で暴走する人物を要職に置く事自体が誤りなのだ、理解出来る頭も無いようだ。

その頭で考える最も適切な手段とは何か。実に興味深い』

なんとというか、すごく低レベルな言い争いというか、 gangs・ロフイーニの劣化ヘイト臭が天元突破というか。

それより、そろそろgangs・ロフイーニを冷めた目で見てるクアツトロの処遇を決めるべき。

(……従属させるという事は、眷属、従者、使い魔の3択か。

魔法を使う事を考えると、使い魔が無難か?)

立場的には、一番無難。

だけど使い魔は体に手を加えないから、血や薬品類に由来する影響の矯正処理は難しい。

無限の欲望の因子を抑え込めるか、不安は残る。

(因子対策の安全策としては、色々修正しての従者が眷属。どちらにしても不老不死だし、魔法を使う事を考慮すると眷属になる、か。

……いつでも殺せるとはいえ、こんなのを永遠の配下にするのか?)

嗜好や思考の変化は、従属による因子の抑制を求めているジェイル・スカリエッティなら想定内のはず。

実際に問題となるのは、残忍さや人間性の嫌悪、それに自分達を特別視する点あたり。この辺を緩和すれば、後は何とかかなる?

今まで調査してたけど、因子となりそうなのは2系統。魂の改変と、刷り込まれ固定化された思考や感情。魂の改変を定着させる基盤として、血の改造や薬品類も使われた形跡がある。

魂や記憶に関しては、アルハザード時代に使ってた、洗脳状態の襲撃者から剥奪する際の処理を多用すればかなりの部分が矯正可能。体に関しても、薬物やらの影響を排除する処理でそれなりに何とかなりそう。時間がかかる部分や扱いが難しい部分は、追々調整すれば何とか。

使い魔にして暴走されるより、眷属にして抑え込める方が無難。眷

属なら強制躯体放棄で行動不能に出来るけど、自立型使い魔を強制的に止めるには殺すしかない。

(眷属化には賛成、なのか?)

他に良さそうな手段が無い、が正しい。

成功すれば、因子を持つ他の3人、ウーノ、ドゥーエ、トーレもジェル・スカリエツティから切り離せる。特にウーノを奪えるのは大きい。

ここで受け入れずに、ジェル・スカリエツティやらが暴走するのは色々面倒そう。

事実上の洗脳状態にある戦闘機人に対する、救いにもなるかもしれない。少なくとも、大手を振って外を歩けるようになるだろうし。

(私への忠誠という、別の洗脳にすり替わるだけだ。

それでも、敵対勢力を減らし、騒動を抑える方向なのは間違いないか……)

「……さて、クアットロ。馬鹿共は放置して、今からの話をするぞ。

スカリエツティの希望で私に従属させる事になったが、同時に、刷り込みと思われる思考や感情への影響の除外も行う。

結果として実質的に私の所有物となり、生殺与奪権は完全に私が握る事になる。

その後は基本的に私の助手か部下として扱う事になるだろうが、問題はありますか?」

「いいえ、ドクターの希望ですもの、問題ありませんわあ」

そう言いつつも、目は挑戦的。

やれるものならやってみろ、みたいな。

「ふむ。ならば、やってしまうか」

従属属性の眷属化術式、洗脳解除版の起動を確認。

記憶解析……完了。思考誘導及び固定の解除、クリア。感情誘導及び固定の解除、クリア。お姉様に関する知識の付与、クリア。属性付与、クリア。一部記憶の消去及び倫理関連知識の付与……クリア。

躯体制御パスの生成完了。

肉体及び機械部分の解析……完了、機械部分との親和性に影響が出

ない範囲で、遺伝子や血に刻まれた魔法の解除、薬物等の影響を除去
……………当面の処置としては完了。記録完了。

躯体に関する修正を適用する為に躯体を放棄、再構築へ。

躯体とのリンクを確認……………問題なし。

「あ、あらあ？」

ええと、エヴァンジュ……………お嬢様あ？」

クアツトロは、目を白黒させながら、周囲をきよろきよろ見てる。

冷静さもだいぶ失ったのか、どこことなく不安気。

「しばらくは記憶の混乱やらがあるだろうから、落ち着くまで静かに
しているといい。

次は……………とりあえずグレアムか？」

ガング・ロフィーニはどうやら周囲に見捨てられたらしく、周囲の
武装局員が円の内側を向いてるし。

カミティー・クカヴァタや査察官は、ちゃっかりと輪の外に出てる。
少なくとも映像として流されてるガング・ロフィーニの違法行為のり
ストを見てるようだから、無闇に助けようとはしないだろうし。

ちなみにリストの内容は、時空管理局員の越権行為を押し通したと
か、違法とされる手法での捜査とか、不十分な証拠での逮捕とか、そ
れに起因する冤罪が多い。正義馬鹿にありがちな内容。

ガング・ロフィーニは未だにこれは正義として正しい行いだつたと
か騒いでるけど、偏った価値観に酔ってる人ってコレだからやだ。

A☒S編43話 記憶の中の姿

「そっちはどんな感じだ？」

ジェイル・スカリエツティから送られてきた資料を真剣に見てるギル・グレアムやリンディ・ハラウン達に声を掛けたお姉様。

使い魔や息子共々ため息をついてた一団の様子を見ると、予想以上だったのかもしれない。

「いやはや、ある程度は聞いていたし、覚悟もしていたが。」

管理局の闇がこれ程とは……」

「こうして突きつけられると、思ったよりも心苦しいわね。」

ところでエヴァさん、私達は最高評議会を中心とする時空管理局の罪を暴きたいのだけれど……何か、一般の市民でも見て解りやすい証拠というか、目立つやり方で証明する方法は無いかしら？

現状では多勢に無勢。いくら多くの証拠を持っていても、闇から闇に葬られてしまうわ」

「見て解りやすい、か……心当たりが無いわけではないが、いくつかの条件が揃う必要がある。」

その前に一応確認なんだが、ガングロのアレが管理局の普通、というわけじゃないだろうか？

もしそうなら、少々考える必要があるぞ」

「普通ではない。普通ではないのだが、必要ではある、といったところか。」

上層部からの評価は、クレームや揉め事の対応に長け、小さな案件を速やかに処理する事には目を見張る成果を上げる、というものだ。少なくとも実績や推薦状はそうなっていたし、揉めた際の対処役を期待されて送り込まれてきたからね。

その実態がああだというのは、チャチャ君から聞いて知ったのだが……だからと言って、即座に処罰しようとするれば、彼の力を頼っていた部署が抵抗するだろう。時空管理局も人手が足りていない上に、一般の人々からは速やかな解決が望まれる。やり方に問題があるとはいえ、その方向で力を発揮してきた人物である事は確かだからね」

ギル・グレアムの説明は、明らかに時空管理局側、それも上層部から見た視線。

色々な声が煩いのは理解出来るけど、とりあえず正当化と冤罪はマズい。

「法を正義という免罪符で捻じ曲げ、人権を権力という名の暴力で踏み躪るのは、表立って認めない方がいいぞ？ 一般人も数の暴力で理念を潰すから、不要とまでは言わんが。」

それでも、正論や建前は大事だ」

「それは身に染みているよ。」

ところで、心当たりに必要な条件を揃える為に、我々に出来る事はあるかね？」

「そうだな……必要な情報を伝えるために、信用出来る者を集めて見せたい物がある。2時間後から2時間少々の間、関係者に集まってもらっつていいか？」

その間は一切の連絡を拒否するくらい確実に、時間を確保したいんだが」

「大丈夫だろうが、誰が対象かね？」

「アースラにいる面子だと……グレアム、ハラオウン、八神の家族全員と、地球に来てた聖王教会の3人とマリーだな。クアットロも含めていいが、エイミィは……念のため連絡担当や艦長の代行として残す必要があるか？」

「私達は蚊帳の外、かしら？」

プレシア・テスタロッサの目がちよつと怖い。

確かに名前は言わなかったけど。

「いや、最終的に私が伝えたい事については、全く問題ない。」

ただ、その前提となる情報に、お前達を大きく傷付ける部分があるだけにな……手放しでどうぞとは、とても言えん。止めておけと言いたいくらいだ」

「そう。どうするか判断する為に、もう少し詳しい話を聞いていいかしら？」

「それくらいならいいが、その前に、準備の話をしてしまおうぞ。」

あとは、それなりに広く安全を確保しやすい部屋を用意してほしい。それに、早目にヴィクタムの方の説得も頼む」

「あちらの説得は請け負おう。」

リンディ提督は、こちらの処理を。艦は本局へ向けてよいかね？」

「ミッドチルダの方がいい可能性はあるが、とりあえずは本局だな。どちらにしても時間がかかるだろう？」

「そうだな。まずは本局へ向け、必要があればミッドチルダへ行くという事か。」

リンディ提督は、本局帰還の手続きも頼む」

「了解しました、グレアム提督」

というわけで、2人の提督が事態を収めるために行動開始。

この頃にはクアットロも落ち着いたのか、すすすつとお姉様の隣に近付いてきた。

「エヴァンジュお嬢様あ、オハナシは終わりましたあ？」

「混乱は収まったようだな。気分はどうだ？」

「過去の自分を殴り飛ばしたくなるような、爽快なような、びみよくな気分ですねぇ。」

まさかここまで気分が変わるなんて、思いませんでしたあ」

「何か許せない事でもあったのか？」

「恥というものを知ったせいかな、黒い歴史がイ・ロ・イ・ロありますねぇ。」

例えばあ、この服装とかあ？」

「そうか。スカリエツティには何と伝えたい？」

「そうですねえ、ドクターは父の様な存在ですしい、希望の職に就く事を報告する娘の様な気分、というのは如何ですか？」

「ふむ。こんな感じだが、どう思う？」

『素晴らしい！ 見事だよエヴァンジュ。』

無闇に記憶を奪う事なく、見事に因子の影響を抑え込んでいる様だ。

これから本局へ向かうのだろうか？ 私達もそちらへ行こう』

「そちらって、今は何処にいるんだ？」

『目の前の星だよ。惑星破壊魔法の準備を始めた時は、久々にスリルを味わわせてもらったよ』

「……何故そんな所に？」

『ここにも戦闘機人の研究所があるのでね。廃棄処理も兼ねて立ち寄っていたのだよ。』

心配しなくても、ここには私とウーノしかない。ああ、クーネは例外だ』

「……結局、予言は概ね正しかった、か。

今来ても大丈夫だと思うか？」

「大丈夫だ。一時的に捕縛という形式は取る事になるかもしれないが、他の人達に手出しさせないよう保護する事くらいは出来る」

あ、クロノ・ハラオウンが話を聞いてた。

資料に集中してそうだったけど、これはきつとあれだ。

マルチタスク便利です、みたいな。

『ふむ、では、そちらに転移するでしょう』

『ついでなので、私が送りますよ。』

ここに1人残されるのも嫌ですからね』

そして現れる人影3つ。

要するに、ロリコン、ジェイル・スカリエッティ、博士、ウーノ。

「相変わらずだな君達は……軽々しく防壁を超えて転移しないでくれ」

「転移装置への強制転移も、色々危険ですからね。

外へ出るならともかく、中に入るなら余計な邪魔が無い方が平和なのですよ」

「気にすることは無い。何しろ私は、怖い犯罪者らしいからね。

それより、ウーノ」

「はい、ドクター」

ぴっちりスーツじゃなくて、普通にミニスカートの制服っぽい服装のウーノが現れた。

軽く調べた範囲では、必要な処置はクアットロと同じ。

但し、因子が少々強め。補正処理はさつきより念入りに。

「私がやる事は、基本的にはクアットロと同じだ。

伝えるべき内容もクアットロに言っていたのと同じになるが、聞いていたか？」

「ええ、しつかりと」

「連中が煩いからね。早めにやってくれたまえ」

「そうか」

クアットロと一緒にため過程省略。

無事に眷属化が終了、特に問題は見当たらず。

「……なるほど、これがマスターに従属するという事ですか」

「マスター？」

「関係性を示す呼び名として相応しいかと。私にとって、ドクターは1人だけです」

「まあ、いいが。さて、次の予定まで少々時間があるか。

クロノ、この3人も本局に行くなら、休める場所が必要だろう。クアットロも偽装前の部屋は問題が出そうだし、どこか使える部屋はあるか？」

「2人部屋を2つなら、すぐに割り当てられる。それでいいか？」

「ああ、大丈夫だ。」

さてと、変態は楽しい楽しい事情聴取の時間だ。逃げる事は許さんぞぞ。」



それから約2時間。色々な調整や調査、その他打ち合わせを行って。

ジェイル・スカリエッティの魔導具を抽出した際に、変態が魂を削って“無限の欲望の因子”を抑制してた事が判明したとか。取り調べ終了後、お姉様が個室に戻ってからジュエルシードから浸食を受けた影響を調べて、叫んだり落ち込んだりとか。色々あったけど。

予定通りに、関係者達がちよつと広めの部屋に集まった。

ハラオウン親子、テストロッサ親娘、ギル・グレアムに使い魔2人、

聖王教会の3人とマリエル・アテンザ、そして八神家の人達。

リインフォースはユニゾンを解除して、八神はやての車椅子を押し登場。八神家のくくりという事でセツナ・チェブルーと成瀬カイゼ、こちら側の関係者扱いでチクアーブとユーノ・スクライアもちやんと来てる。

ジェイル・スカリエツティと2人の戦闘機人、それに^{ロリコン}変態も増えるけど、話をした限りでは問題ないと判断した。

「さて、2時間もかけて見せたいものというのは何かね？」

ギル・グレアムは少し不思議そう。

その後ろからお姉様を睨んでるリーゼ姉妹は、そろそろ自重すべき。

「そう慌てるな。」

チャチャゼロ、チャチャマル、チャチャの3人は、この部屋の守りを。

誰にも侵入させるなよ」

「ケケケ、切り刻んでいいカ？」

「阿呆が暴力に訴えてきたなら、好きにしろ。」

さてと、始めようか。まずは、全員こっちを見てくれ」

パンパンと手を叩いたお姉様に視線が集まる。

ここで発動するのは。

「……幻想空間」
ファンタズマゴリア

他の世界でも同時に術式起動。該当者全員を同期、加速開始。

というわけで、小さな体育館みたいな空間にふかふかのカーペットを敷き、ソファアをいっばい並べた謎空間へようこそ。

「何だ、これは……」

真つ先に声が出たのは、クロノ・ハラオウン。

警戒はリーゼ姉妹の方が早かったけど。

「一種の精神世界、地球のSF的な言い方をすればV^{バーチャルリアリティ}Rの様なものだ。

ぶつちやければ映像や感覚付きの念話で、外部から遮断される代わ

りに24倍に時間を加速していると思ってくれていい。ここで1日過ぎても、外では1時間過ぎるだけだ。

要するに、外の2時間で48時間を確保出来る隔離環境だ」

「そ、そうなのか……」

知らなかつた人達の顔が引きつってる。

ここで、時空管理局の本局からレティ・ロウランが接続完了。

「……あら、リンディ提督に、グレアム提督も。」

本局からは直接転移が不可能な距離で、こうして顔を見せられる程の力は、どれほどの物なのかしらね。それに、有名な次元犯罪者まで同席しているなんて……」

したのはいいけど、どこか遠い目でお姉様を見る。

でもまあ、ルスターでの全力戦闘を見てた人達にとつては。

「この程度と感じてしまうあたり、私もかなり毒されてきたのだろう。」

リンディ提督は驚いていない様だが……」

「ヴィヴィオさんに、この魔法の話は聞いていたので」

そんな感じで話していると、地球組が接続開始。

まずは月村家から、姉妹と馬場鹿乃。

「げえっ、スカリエツティ!？」

「おやおや、体が大きい割に、肝の小さい男だ」

「ちよ、ちよつと待ってくれ、何でこんな事になってんだ!？」

「色々あつてな。いつの間にかスカリエツティ改心ルートになっていたらと思つて納得しておけ」

みたいなやり取りがあり。

続いて別荘経由で、高町家の子供3人、守護騎士の4人、ヴィヴィオ、アギト、アリサ・バニングス、アリシア・テスタロッサ、長宗我部千晴が到着。

アリシア・テスタロッサに関しても、プレシア・テスタロッサの強い希望で連れて来ることに。お姉様は止めておけと言つてたのに。

「だが、お前も来るとは思わなかつたぞ」

「何か気になつて。どーせなら知つところか、くらいなノリだけど、いいよな?。」

「お勧めしないとは伝えたはずだが……声をかけた以上、拒否する権利も無いが。」

さてと、とりあえず好きなのところに座ってくれ」

座ったところに、飲み物（気分的な意味で）も用意して。」

全員座つたのを確認したら。」

「では……つと、先に言っておくことがあった。」

ヴィヴィオ、ちよつといいか?」

「はい、何でしょう?」

「変態はともかく、お前個人は気に入っている。」

やりたい事があるなら手を貸すことに吝かでないから、それは覚え
ておいてくれ」

「それは有り難いのですが、今言う必要があるという事ですか?」

「意味は、今から見せるモノを見終わった時点で判断してくれ。」

他の連中は……よさそうだな。では、始めようか」

大型の空中モニターを展開して、最後の準備が完了。」

そこに映るのは、海から見た街並みの絵。

『この広い空の下には……』

「あれ? この声は、なのはちゃん?」

「にや? こんな知らないよ?」

「でも、どう聞いてもなのはよね? それにアタシ……つて、何で落書きの内容まで!」

「本当にあんな落書きしてたの?」

「アリサちゃん、結構気合い入れて書いてたんだね」

「そういう問題じゃない!」

そんな感じで始まる、アニメ作品。

「あれ、僕……つて、これってまさか!」

ユーノ・スクライアが気付いて叫んでるけど。

「そういう事だ。これが、私達が『原作』と呼ぶ物語」

『魔法少女リリカルなのは。始まります!』

「ふええええええええ!」

「魔法少女つて……なのは、本気?」

「ユーノ君も、何だかノリノリみたい」

「私こんなの知らないよー!!」

「ぼ、僕だって知らないよー!」

というわけで、上映開始。

オープニングを飛ばして、まずはユーノ・スクライアが倒れて小動物化するところから。

「ユーノ君、こんな感じだったんだ……」

「だが、やはり無謀だったように見えるな」

「この時は、魔力の適合不良で力が出なかつたんだ。」

まさか、うまく魔法が使えなくなるなんて思わなくて……」

「情報や準備、何より実行力の不足という意味では、やはり勇み足だろう」

ユーノ・スクライアがクロノ・ハラオウンにフルボッコされたり。

「恭也、家ではあんな様子が普通?」

「そうだが……それがどうかしたのか?」

「そう。この様子では、なのはちゃんが疎外感を感じても仕方ない、かな」

万年新婚夫婦は置いておくとしても、兄妹の距離感がやたら近い高町家に、月村忍がちよつとため息をついたり。

「そうそう、こんな言い合いもしたわね。」

で、理数の成績は相変わらず、体育の成績が改善して、魔法なんて特技を持ったなのはは、今はいったい何になりたいわけ?」

「えっ? えつと……」

「特技とか取り柄が無いーなんて、もう言わさないわよー!」

「だ、だめだよアリサちゃん……!」

微妙に喧嘩腰のアリサ・バニングスがいたり。

「なのは、フェレットに指を舐められて喜んでたけど……アレって、ユーノだったんでしょ?」

そう考えると、なーんか変態っぽくない?」

「いっ!」

あああ、あのときは、ほら、動物の真似をしなきゃって必死で!」

「助けを求めておいて、人が来たら動物の真似というのもどうなんだ？」

「そうだけど、なるべく知られる人を減らそうと思って!!」

ユーノ・スクライアいぢりに、クロノ・ハラウンだけじゃなくアリサ・バニングスも加わったり。

「そういうえば、お前もユーノのSOSが聞こえていたはずだな。」

介入する気は無かったようだが、この時は何をしていたんだ？」

「えーと、なんだ。」

布団の中でガタガタ震えて、命乞い？」

「……まあ、戦力を持たないなら仕方ないか」

お姉様が、長宗我部千晴の情けない過去を聞いたり。

「ああつ、折角の可愛い変身シーぶほあつ!!」

「黙れ変態^{ロリコン}！ 厳密には本人ではないアニメだろうが、知り合いの裸を必要も無い部分でこんな大勢に晒すわけがないだろうが!」

脱衣変身シーンをカットしたお姉様に抗議しようとした変態^{ロリコン}が殴り飛ばされたり。

「なんか理解してないあたりは、なのはらしいけど……服装とか違うわよね?」

「うん。似てるけど、本物はもつと戦うための装備、というか……」

「でも、私は最初からこつちの姿だったし……」

「その辺は後で説明してやるから、今はこういう話だと思って見ていてくれ」

見て判りやすい違い、つまりレイジングハートやバリアジャケットの差に早速気付いた3人娘がいたり。

「なのは……リリカルマジカルって、アンタ……」

「言ってるじゃない! 私、言ってるじゃないよ!! それにシーリングモードって何!?!」

「確かあの時は、バインドとシュートバレットを使ったはず……」

「そんな事よりも、なのは。あの夜はこれに近い出来事があったのは事実なんだろう?」

「こんなに危険な事を隠していたのは、やはり良くないぞ」

「あう……」

高町なのはが、アリサ・バニングスや高町恭也にフルボッコ気味だった。ユーノ・スクライアのフォローもフォローになってないし。

そして話は進み、第3話。サッカー大会の後の大樹。

「……アレって、落ち着いてたら防げたかもしれない、って事よね？」

「あの時はお店に変な人が来て大騒ぎで、そんな余裕なかったの！」

アリサちゃんもいたよね!？」

「うん、まあ、いたんだけど。」

あれ？ 完全に気付いてなかったって事は、こんなに落ち込まなかったって事？」

「えーと、あの時は、もつと頑張って探さなきゃ、って……」

要するに微鬱展開の回避が判明したり。

「……私だけど、バルディッシュの形が違う？」

「レイジングハートの形が違うのと、同じ理由だろうな。」

それも後からな」

「うん」

ビルの上に立つフェイト・テストアロッサとアルフ、続いて月村忍やメイド達が登場して。

「今までに比べれば、化け物っぽくはないけど……」

「見上げる様な子猫……え、フェイトちゃんが攻撃!？」

「この時は必死だったから。だけど、なのははこんなに弱くなかった」

「普通に歩いて帰ってきたわよね？」

「転んで怪我したとか言ってたはずだけど」

「この時には既に、それなりの空中戦をやってたわけだし。」

空戦の実力は、元々乖離が大きい部分。不思議に思うのも仕方ない。

「今度は春の旅行の話ね。」

「そういえば、なのはが必死でユーノを女湯に入れさせなかったけど……この時には人だって知ってたの?」

「まだ見たことは無かったけど、人だって話は聞いてたから」

「遺跡の発掘をしてたって聞いてるけど、お風呂とかはどうしてたのよ。なーんか、妙に純情っていうかさ」

「お風呂とかは男女で別か、少なくとも時間を分けるよ。」

人が少ない世界だと、輸送船を拠点にする事も多いからね。設備はそれなりに充実してる」

「ふーん。テレビで見る様な探検とは違うんだ」

「個人で空を飛ぶ技術もあるから。」

僕らにとって、あの国のテレビでやってるようなのは、探検じゃないよ」

どこぞの探検隊がデイスられた気がしたり。

裸を見て倒れてるユーノ・スクライアが苦笑を誘ってるけど、ここは部分的に湯煙風に塗り潰し処理をしてある。不満ロリコンそうな変態は再び撲殺された。

「……あれ？ アコノやはやてがないんだけど」

「ああ、はやてはまだ出てこないし、アコノを含む私達は存在しない。」

そういう話だと思ってくれ」

「ふーん。居るからこそ違う未来になった、って話？」

「そんな感じだな」

そして、現れるアルフ。

「アタシはこんなちよつかいをかけてないよ？」

「そうだな。確かこの時は……リーゼアリアと牽制しあっていたんだっただったか？」

「そうだそうだなーんか強そうな匂いがしてたから、潜んでたんだっただ。」

って、何であんなここにいたんだい!？」

「八神はやてを監視してた。今なら、説明はこれで充分でしょ。」

というか、気配は断つてたつもりだけど、匂いでばれるって……」

犬と猫の仲が微妙だけど、まあ、気にしなくていいや。

そして始まる、高町なのはvsフェイト・テスタロッサの2戦目。

「なのは、よわっー!」

「だけど、なのははもう少し対応してきた。少なくとも、こんなに弱く

なかった」

「だよねだよね！」

あつさりと負ける、アニメの高町なのは。

アリサ・バニングスが叫んでるけど、フェイト・テストロッサのフォーに食いつく高町なのが妙に必死。

「俺達は、温泉で魔法についての説明を受けたんだが……この話ではまだなのか?」

「そうだな」

蚊帳の外のままの高町恭也が、ちよつと不満そうだったり。

アニメは小学生らしからぬ喧嘩を経て、フェイト・テストロッサの話へ。

「ああ、フェイト……あんなに思い詰めていたなんて……」

「母さん……大丈夫。私も、母さんの娘だから」

「だから心配なんじゃない……」

自分の暴走癖的な部分が心配なのか、プレシア・テストロッサがフェイト・テストロッサを抱き締めてる。

もつとひどいシーンがこの先にあるけど、本当に大丈夫かこの親娘。

アルフの強制発動の後に始まる3戦目、そして次元震。

「フェイト、なんて無茶を……」

「違う……この時は私もなのも動けなかったから。封印してくれたのはアコノだよ、母さん」

「……そうだったの?」

うん、そうなの。

というか、この後は。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ママ、こわーい」

「ごめんなはうあっ!?!」

「大丈夫だよ母さん。私は母さんが大好きだから」

「ああ、フェイト……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん

なさいごめんなさい」

折檻のシーンで、プレシア・テストロッサが壊れた。アリシア・テストロッサも、無邪気に追撃してるし。

空気を読まずに始まる4戦目に割り込むクロノ・ハラオウンが登場して。

「僕は、2人の戦闘開始前に止めたはずだ。それに、バインドもした覚えがある」

「この辺も、現実と異なる部分だな。」

「言っただろう？ 何故か元々差異がある、と」

「アースラの中も何だか違う、こんなおかしなデザインじゃない。」

「ここは大きく違う点という事か……」

「だけど、僕は人だと伝えなかつたら、あんな目にあっていたのか。」

「良かった。早目に伝えておいて、本当に良かった……」

何か妙な点で、男子2人が納得してたり。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「えっと、その……」

アルフが暴言おこぼばあについて言い訳しようとするも、プレシア・テストロッサは相変わらず壊れてて聞く耳を持たなかつたり。

「フェイトちゃん、これって……」

「これは本当にあったよ、なのは。」

確かにこんな話をしたし、覚悟もしていたから」

「そう、なんだ……」

すごくしんみりとした空気になったり。

「そういうえば、こんな表情もしていたわね。」

なのはさん、人気者ね」

「この後の展開を見ると、奥手とへタレなんだがなあ……」

「誰が奥手で誰がへタレだったって？」

「まあ、最後まで見れば解る……かな？」

リンディ・ハラオウンとお姉様にクロノ・ハラオウンが弄られたり。

「そうだな、ずいぶんと寂しい思いをさせていたな」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん……」

高町なのはが高町恭也と高町美由希に抱き締められたりしてると。
ど。

ようやく、決定的に乖離する海上での強制発動シーンまで到達。

「リンデイ、貴女まさか……」

「いいえ。即座になのはさん、ユーノさん、エヴァさんの3人を現場に送っているわ。」

クロノには、この後の対処を頼んでいたけれど」

「この後？」

レティ・ロウランがちよつと責めるような視線をリンデイ・ハラオウンに向けたけど、ここはお姉様の入れ知恵で変わってる部分。

次元跳躍攻撃の後で、鞭打ちの場面再び。そして撃墜されるアルフ、一騎打ち直前のフェイト・テスタロッサの記憶と想い。

「ああああああああああ……」

「ええと、今回ののはやってないんだし、アタシだって殴ったり殴られたりはしてないんだし。」

その、なんだ……」

撃墜を回避したアルフがフォローしようとしてるけど、プレシア・テスタロッサのダメージがひどい。

仕方ないね、お姉様の忠告があつてなお、本人が知りたがった原作だもの。

そして行われる一騎打ち、撃ち込まれる集束砲撃。

「なのは、あれはさすがに……」

アリサ・バニングスが引きつつてるけど、実際に撃てるのはもつとひどいわけで。

「ママー、あれってわたし？」

「ええ……そうよ……」

「こう繋がるのね……だけど……」

「だから私は、見ない方がいいと言っただけがな。」

後でならいくらでも責められるから、もうしばらく待ってくれ」

リンデイ・ハラオウンの、お姉様を責めるような視線が痛いけど、本

人合意の下でそういう事をやってるんだから仕方ない。

そして虚数空間に落ちるプレシア・テスタロッサとアリシア・テスタロッサ、友なのはの手を取りながらも落ち込むフェイト・テスタロッサの姿を経由して。

最終的に、抱き締め合うフェイト・テスタロッサと高町なのはの印象を残して、1期目の上映が終了。

「こうなる未来もありえたという事ね。プレシアさん達はこうして生きていくけれど、過去や部分的にはかなり正しい部分も多い……確かに、使い辛い情報という評価に、間違いはなさそうね」

「今いる中に、この情報を知っていた人も何人かいるはずだ。

君達に聞きたいんだが、今の話と事前に知っていた事で相違点はあるか？

人によって何らかの違いがないか、確認しておきたい」

「無い。私は事前に照合しているし、覚えていた範囲で違いは見付からなかった」

「ああ、俺が覚えてる範囲では、こんな話だった」

「あんま細かいところは覚えてねーけど、たぶん一緒だ」

「そうだね。絵の一部が違っていたりしても気付かないだろうけれど、話の筋としてはこうだったね」

「我等は記憶を何度も確認いたしましたですが、この様な物語で御座いましたな。

厳密な話をすれば、オープニングやエンディングの省略と、肌色の隠蔽があつた程度かと」

「ええ、間違いありませんね。やはり、変身シーンを省略せずあぼう!？」

また変態ロリコンが殴られるようなことを。

本当に黙ってればいいのに。

「つまり、全員が同じ記憶を持っていた、という事か……」

クロノ・ハラオウンが気にした事は、普通なら考えにくい「転生」について？

前世の記憶。作られたものなら違いがあり得るだろうし、着眼点は

悪くない。

涙目になって話すことも出来なさそうな人も何人かいるけど、
フォローはいる……かな？

A☒S編44話 忘れた頃に

「さて、時間も限られているからな。休憩もこれくらいにして、次に進むぞ」

ある程度落ち着いた頃を見計らって始める、次の映像は当然。

「え？ この車椅子って私なんか？ それに、6月3日って……」

A☒sと名付けられた、2期目。

開始早々に闇の書の起動シーンだけど1人で怖がつてるからか、八神はやてが理解出来てない。

「ここで私が……」

裁判の話の後、リンデイ・ハラオウンの通信相手にレティ・ロウランが登場したり。

「あ、アタシは局員なんて襲ってねーかな！」

「大丈夫だ、それは協力してくれた者は全員知っている。

それよりもエヴァンジュ。我等の事情を知らない者は、ここにはいないのか？」

「ここにいる連中は、何らかの形で情報を知っているのがほとんどだ。問題にはならんだろう」

早速の襲撃シーンで八神ヴィータが騒いだり、八神シグナムが心配したり。

「私達は、本当は図書館で……？」

「それにシャマルがおるって事は、6月以降って事やね？」

服装を見た感じやと、11月か12月やろか……って、ヴィータ何してるん!？」

「落ち着けはやて、これはあくまでも私達が原作と呼んでいる物語だ。

私が避けたかった未来でもある」

「そ、そっか。こんなことはさせてへんけど、ほんまはこっそりとかやってへんよな？」

「模擬戦以外では、ヴィータとなのはは戦っていないぞ。

第一、私が襲撃などさせると思うか？」

「あ……そ、そうやね」

自分が直接関わる話になってから、八神はやてがちよつと不安定。自身にありえた可能性の話、動揺するのも仕方ない。

「うわあ……なんか、お互いに色々とえげつないというか無茶ばっかりというか……」

「こ、こんな事してないよっ!」

「そ、そうですよ! あくまでも、こうなる可能性があったというだけのはずです!」

「だが、あり得たという事は、相応の力を持つという事でもある。

なのは、自分の持つ力の意味を忘れちゃ駄目だ」

「う、うん、お兄ちゃん……」

胸から手が生えたりフラフラになりながら魔法を撃って倒れたりする姿にアリサ・バニングスが引いて、高町なのはと八神シヤマルが必死に釈明してるけど、何だか高町恭也がいい話に持って行ったり。「そうか、ここで私か。」

伝えた内容は正しいと言えるが、実態を知る身としては白々しいとも感じるな」

フェイト・テストロツサに裏切るなど言ってる姿にギル・グレアムが唖ってるけど、信頼してくれる人を裏切ってた自覚がある以上は仕方ない。

「フェイトさんを養子に……」

「……渡さないわ」

「大丈夫よ。親子の仲を引き裂くほど、野暮じゃないわ」

思わず呟いたリンディ・ハラオウンに向ける、プレシア・テストロツサの視線が怖かったり。

「あれ? この家って、今住んでいる……?」

「私達が住む拠点と同じ部屋みたいね。」

この話では、随分と確保が遅いみたいだけれど……」

「それに、フェイトと直接会うのってこんなに遅かったわけ?」

12月になってから、って事よね」

「そうだな。少し時間が前後するから少々追い辛い部分もあるが、12月になってからが話の中心だ」

現実とは違うはずなのに、妙な点で一致してる部分を見付けたり。「あれ？ 私まで……それに、カートリッジシステムの組み込み……」

自身の登場は予想してなかったらしいマリエル・アテンザが、びつくりしてたり。

「適当にあしらってって、クロノも言うねえ」

「あ、あれは僕じゃない」

「でも、言うような素地はあった、って事でしょ？」

「そ、そんなわけ……！」

レティ・ロウランに言った一言で、クロノ・ハラウンがリーゼ姉妹に絡まれたり。

「あああ、フェイト、そんなにまで私の事を……」

「母さん、大丈夫だから」

そろそろプレシア・テストロッサの壊れっぷりが手に負えなくなってきたり。

その後はカートリッジを装備したデバイスのセットアップをカットして、仮面の男が登場。

「エヴァンジュ、この男は？」

「この時点では、謎の男なんだが……その2人の様子を見ればバレバレか」

「この姿は一度も見せてないのに……」

「手の内を知られるとは思ってたけど、こんな所まで……」

「……やはり、そういう事か」

クロノ・ハラウンが、落ち込んでるリーゼ姉妹を見て実在した計画だと理解したり。

「何の説明も知識も無かったから、私は気絶してもうたんか？」

「申し訳ありません、我が主。」

せめて、先に少しでも知識を渡せば良かったのですが」

「リインフォースも謝らんでええよ。それに、エヴァさん達がいろいろ教えてくれたし、一緒にいてもくれた。」

「気絶もせえへんかったし」

「はい。その光景ははつきりと覚えています」

ここに入る、闇の書の起動シーン。

それを見てたジェイル・スカリエツテイの口元が笑ってるけど、これはやっぱり、アルハザード式の六芒星魔法陣のせいな気がする。

「それに、あんな服で出歩いてもうて……エヴァさん達が服を用意してくれへんかったら、こんな事になっとったんやね」

下着に近い姿で病院にいるのは、やっぱり駄目。

ここは肌色を削るわけにもいかないから、お姉様は変態ロリコンが余計な事を言う前に殴り飛ばした。

「そうか……闇の書の最後を知らなければ……我等は主を裏切り、破壊に向かって進んでいたのだな……」

「それが救いだと信じて、だよな……最悪だ……」

「過去に管理局と敵対した記憶はあっても協力した記憶は無いですし、私達の力でははやてちゃんをどうする事も出来なかったですし……」

「だが、エヴァンジュ達が先に手を打ってくれたおかげで、我等も主もこうしていられるのだ。

疑問が無かったわけではないが、感謝せねばならん」

覚悟を決めるシーンで、守護騎士達が落ち込んだり。

「無限書庫……僕はほとんど一人で挑戦するんだ……」

「私の都合で手を貸したが、闇の書に関してだけなら、お前だけでもどうにかなったはずだ。

それだけの調査結果は残しているだろう？」

「そりゃあ、まあ……今やれって言われても、無謀だと言いたくなるけど」

原作だとリーゼ姉妹の手伝いもあまり期待出来ない言い方をされてるからか、ユーノ・スクライアが驚いてたり。

「フェイトに、何て事を……」

「おおお、落ち着いて！」

「アタシ達は、あんな事やってない！」

フェイト・テスタロッサが蒐集されるシーンで、プレシア・テスタ

ロッサがリーゼ姉妹を凄い目で見たり。

「旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が暴走したものが、転生と無限再生……?」

「初期製作時点のデータを見る限り、転生と再生の機能が完成していたとは言い難い。」

一部は暴走していたようだが、機能が強化、完成された面もある気がするぞ」

「持ち主に対する性質の変化、というのは?」

「変化したという点は間違いない。だが、浸食は蒐集が無かった場合だけではなく、常にあるような感じだったな。」

完成した時点の破壊は、本来は無差別ではなく、主と闇の書自身を殺す事を意図していた。周囲を無差別に巻き込むようだから、外から見た場合の評価としては正しいんじゃないか?」

ユーノ・スクライアの報告内容に疑問を持ったクロノ・ハラオウンが、お姉様に疑問の目を向けたり。

「シャル……あの恰好は、テレビの見過ぎが影響しているのではないか?」

「本格的に料理の練習するゆーて、シェフの帽子とか揃えとったしな」
「ええっ!?! いくらなんでも、あんな怪しい恰好はしない……感じの

はずです!」
「言い切る自信が無いのならば、不用意に反論しない方が良いのではないか?」

サングラスとコート姿のシャルを見て、ザフィーラと八神はやてが突っ込んだり。

「……グレアム提督……」

「言い訳は出来ん。確かにこれは私達が当初持っていたプランで、有り得た手段であり、はやて君に対する罪だ」

「そう、なのですか……」

闇の書完成について、ギル・グレアムを見るリンディ・ハラオウンの視線がとても複雑だったり。

「これが、私の有り得た姿……エヴァンジュに救われなかった、私の

……」

ラインフォースが泣きそうになってたり。

「クライド……」

夫の死に様に、リンデイ・ハラオウンも涙目になってたり。

「リーゼアリア、貴女……」

「……あの叫びは確かに同意出来るし、あんな状況なら言つてたかもしれない。

アタシは、聖人や出来た人格者じゃないから……」

意外そうなレティ・ロウランの視線を、悲しげに受け止めるリーゼロッテが居たり。

「わ、私!? 一般人じゃなかったの!?!」

「いや、一般人だと言われているが」

「めっちゃ巻き込まれてるじゃないの!!」

やたら暗い雰囲気到我慢できなくなったのか、アリサ・バニングスがお姉様に噛み付いたり。

「ふ、ふふふ……エヴァンジュ、貴女はフェイトが嫌いなのかしら……?」

「いや、気に入っているが。」

「とうか……変わり身が早過ぎだ」

プレシア・テストロッサが危ない方向に突っ走りそうになった直後、ベッドの中のフェイト・テストロッサとアリシア・テストロッサの姿を見て蕩けてたり。

「リニス……」

「りにすー?」

意外な人物の登場に、フェイト・テストロッサが動揺したり。

アリシア・テストロッサはリニスの人の姿を見た事が無いせいとか、不思議そうにしてるけど。

「ああ、フェイト……」

「うん……母さんがいて、姉さんがいて……リニスははいないけど、お姉ちゃん達がいて……」

私は、夢じゃない、本物の時間を過ごせてるんだ……」

アリシア・テストロッサを蚊帳の外に、プレシア・テストロッサとフェイト・テストロッサが泣いてたり。

「やっぱこの流れは何度見ても泣いちまう！ うおおお!!」

リインフォースの名付けやらフェイト・テストロッサとアリシア・テストロッサの決別やらが続き、物凄いことになってる場の雰囲気は何とかしたいのか馬場鹿乃が騒ぎだしたり。

「我等の記憶は、やはり役に立たないのか」

「お前達の記憶は、凄惨な主の最後を知り蒐集を止めようとした時、部分的とはいえ主により消されている。

その後も似た行為が何度も繰り返されるうち、いつしか主にとって都合が悪いだろう部分は、転生時に消えるようになってしまった。自己防衛機能によるものだろうとは思うが」

「やはり、我等は戦うための道具でしかなかった、という事か」

八神シグナムの嘆きにリインフォースが説明したり。それ以外にもリインフォースが消してた部分があるはずだけど、それは内容的にも流石に言えない。

「闇の書の闇とか大袈裟な名前だけど、こんなの？

なーんか、見た目はボスキャラって感じだけど」

「実際にコレだったら、どんなに楽だったか……」

ようやく前向きな戦闘シーンになったせいも、アリサ・バニングスがちょっとおどけたり。

原作の防衛プログラムは殆ど何も出来ないままフルボッコだったし、思わず比べてしまったお姉様が落ち込んだり。

「はやて、アンタ……」

「いきなりこれって、えらいハードルが高い気がするけど……やり方は理解出来るし、リインフォースとユニゾンしとるっぽいから、いけそうな気はするよ。」

それより、元々訓練してたフェイトちゃんはともかく、ほぼ自主練だけのなのはちゃんの方がありえへん。エヴァさん監修の訓練とかが無い状態やろ？」

記憶の継承やらのあった八神はやて。魔導師としての経験はひ

よつこだけど、知識はその辺の魔導師とは比べ物にならないはず。だけど、いきなりの戦闘参加に引き摺るアリサ・バニングスは、間違ってる。

そうしていても場面は進み、アルカンシエルで戦闘が終了。

「何だか、全員助かりそうな感じが……」

「もう少し、黙って見ている」

不思議そうなユーノ・スクライアだけど、雰囲気が高いお姉様に黙り。

その雰囲気にも飲まれるように誰も言葉を発しないまま、最終話へ。

「うう、あかん、これはあかん……」

リインフォース、本当に大丈夫なんか？ 本当は消えるとか言わへ

んな？」

「大丈夫です、我が主。

初期構造に関する情報は既に受け取っていますし、ナハトヴァールの修正も完了しています。

ずっと、お傍におりますよ」

夜天の主従が涙目になり。

「これが避けたかった未来、という事か……」

家族を助けたいという願いだけで、随分と大きな手間をかけたものだ。ここまでの情報を持つのであれば、私達を断罪するだけの証拠はすぐに集められただろうし、最終的にそうしたのだから一人で対処した方が楽だったろうに」

ギル・グレアムが部分的に呆れてるけど、それは細事だから放っておいて。

「今の話については無事に終わったという前提で、私達に見せたのだと思うけれど……」

「今見せた理由を説明してもらえるかしら？」

重要なのは、リンディ・ハラオウンのこの疑問。今、原作を見せた理由。

ちなみに最終話のエンディングはカットしてる。

「そうだな。まず全員に聞きたいんだが、異常だとは思わんか？」

私や変態が知っていた事を考えれば、この物語は2500年前の時点で存在していた事になる。にもかかわらず、やたらと一致する点が多い。多すぎると言っている。

例えば、魔導師が少ないはずの地球で生まれた、高町なのは、八神はやて、ギル・グレアム。

例えば、ジュエルシードや闇の書の動き。

例えば、アースラや乗務員。

例えば、リンデイが海鳴市で確保する住居。

例えば、はやてが付けたリインフォースという名。

仮に未来視だったとしても、今度はデバイスやらの相違点が理解出来なくなる」

「そうね。確かに、異常と言えば異常ね」

「ええと、少し聞いてもよいですか？」

戦闘中の姿や、今の話を自分の事のように話している事について、誰も疑問を持っていないのは、やはり……」

普通に納得してるリンデイ・ハラオウン達に対し、納得出来ないカリム・グラシアがとうとう手を挙げた。その側では、シャツハ・ヌエラやマリエル・アテンザも、困惑しています！ と言いたそうな雰囲気漂わせてる。

シルフィ・カルマンだけは、とつと吐け、みたいな表情だけ。

「ああ、そういうえばお前達にははつきりと言っていないなかつたな。

私がリインフォースの妹であり、曙天の指令書の名を持つ魔導具だ。

今日の戦闘で見たと思うが、書が本来の姿、人の姿を取る時は幼女の方が通常の状態だ。諸々の都合で今はこの姿を使っているが……とりあえず、通常の状態に戻るか？」

そう言いながら、お姉様は幼女モードに。

おつ、とか声を出した変態を殴り飛ばしてから、話の続き。

「作られたのは、概ね2500年くらい前……のはずだ。ベルカ的に言えば、ピリウス歴の180年頃になる。

そういうば、お前は記憶を失っていないはずだな。私よりどれくら

「い前なんだ？」

「変態ロリコンの起動日？」

正確には覚えてないけど、結構前だったような。

「私ですか？」

そうですね、15歳くらい年上ですよ。ちなみに、エヴァちゃんの起動はピリウス歴だと182年です。

そうそう、知らない人も多いと思うので、ここではつきり言っておきましょう。

私ことクーネ・ルアソープは宵天の歴史書の名を持っている魔導具であり、ラインちゃんの弟、エヴァちゃんの兄です」

「ちよつと待て変態ロリコン、姉すらちゃん付けか？」

「外見は私の方が年上に見えますし、ラインちゃんは記憶の欠落が激しいですからね。」

活動した記憶を保持している期間という意味では、一番長いと自負しているのですが」

「だからと言ってその呼び方は、お前が使うと犯罪的過ぎだ！」

「いえいえ、無限の愛を込めた呼び方ですよ」

「貴様の嗜好が犯罪方向に向き過ぎている事が問題なんだ!!」

「エヴァさん、クーネさんのお仕置きは後にして、話を進めましょう？」

「……そうだな。」

まあ、こんな感じというか、私が私の記憶を持っていると言っていたわけだ。

「こんな話をいきなりされるよりは、現実的だっただろう？」

「ぎゃいぎゃいと騒いでたお姉様と変態ロリコンだけど、リンディ・ハラオウンの主張は正しい。」

「というわけで、カリム・グラシアに対しての釈明を試みたわけだけど。」

「反応を見る限りでは、他の方々は知っていたという事ですね。」

「私達は仲間外れでしたか……」

「ちよつと拗ねられた。」

「大丈夫だろうとは思っていたが、あまり広めるわけにはいかなかったからな。小言は後で聞くから、話を戻すぞ。」

今の話と比較すれば理解出来ると思うが、私達……はつきり言ってしまうえば、自分を転生者と呼ぶ私達が関わった部分に関しては、はつきりとした差異が出ている。これはリインフォースやプレシアを見れば、理解しやすいだろう。

だが、それ以外についての類似点の多さについて、実に不本意ながら、説明が可能になった」

「私達が修正力と呼ぶ代物の、正体でも掴めましたか？」

「ですが、不本意とは……」

ロリコン 変態も意外そうにしてる。

まあ、冗談抜きで、最新情報だし。

「ここでの定義を言っておくが、修正力というのは、二次創作における原作の流れに戻ろうとする力、余計な人物を増やしても流れそのものが変わらない言い訳の様なものだと考えてくれ。」

あと、並行世界や可能世界と呼ばれる概念も知ってほしい。これは、極端に言えば分かれ道を右に行くか左に行くかでも分岐する、無限に存在する可能性の結果を示す物に近い。次元世界と区別するために、ここからは並行世界と呼ぶことにするぞ」

「どちらも、二次創作では比較的ありがちな概念ですね。」

まさか、その存在を確信する何かでも見付けましたか？」

「並行世界の存在は、確定だ。私達の前世も別の並行世界、という事だな。」

そして、各並行世界は、相互に影響を与え合っている事も判明した。影響の与え方は様々で、人の意識に情報が流れ込んだり、同じような出来事が発生したりするようだ。

並行世界毎に“存在する力”のようなものもあり、これが強ければ他の並行世界への影響が大きく、小さければ消滅したり飲み込まれたりする事もあるようだな」

「それはつまり、私達が原作と呼ぶ作品も、別の並行世界の影響を受けた物である可能性がある。」

「そういう事ですか？」

「そうだ。今見せた『原作』によく似た、強い並行世界が存在している事は確認出来ているしな。」

そこから原作者の意識に情報が流れこんだのが前世、世界の出来事やらに影響が出ているのが今世という事になるだろう。

前世の形式だと『作品』レベルだろうから、特に気にしなくてもいいはずだ。だが、今世の様な形、それも多くの次元世界の存在やその内容にまで影響を受けているとなると、これは大問題だ」

「ちよつと待つてください。」

並行世界に関しては、実際に観測された例は無いはずです。恐らくはエヴァちゃんの時間魔法、未来や過去の不安定な観測がそれに類するものだろうとは思いますが、あれも正体は不明なままでしたし、その後も証明出来るような技術が開発されたことは無いはずです。

そんな詳細な情報を、どうやって……？」

変態コリコンの疑いの目が、嫌らしく思えて仕方ない。

だけど、この情報の元も、とつても嫌だ。

「……ジュエルシード、だよ」

「あれがどうかしたのですか？」

「あの腐れ魔導具め、別の並行世界に移動する能力まで持っているのに、最後の最後で私を浸食して居座りやがったんだよ！ おかげで並行世界関連の能力だけじゃなく、世界を書き換える能力が増えて、おまけに不死性やらまで強化されたんだ！ 世界と強制契約状態なんて、どこぞの英霊化したアーパー吸血鬼か私は!？」

そもそもどうして今頃なんだ！ 最初からならこうなったのかと思えたし、せめて春か夏までにこの力を得ていればこんな面倒な状態にならなかつたものを!!」

契約というか、世界の一部として取り込まれた感じ。俺が世界だ！

みたいな。世界の魔力的な何かも扱えるようになった上に、世界が存在する限り再生可能とか、非常識にもほどがある。これの劣化模倣的なものが転生機能とか、道理でアルカンシエルで吹き飛ばされたり虚数空間に落ちたりしても機能するはずだと思えるけど、正直色々

有り得ない。

書き換えは副作用が酷いことがあるみたいだから手軽に出来る事じゃないけど、恐ろしく強力かつ使い辛い力を得たのは間違いない。お姉様側の限界以外に制限が無いというあたり、暴走しろと言われてる気がして仕方がない。相変わらず吸血衝動は無く、世界もジュエルシードも今は意思の存在を確認出来ないから、行動が縛られてないだけマシだとは言えるかもしれないけど。

それでも願った特典から逸脱してない辺り、ジュエルシードも根性が悪い。

「ついでに、ジュエルシードの記録すら流れ込んできたんだぞ!? 前世の自分の頭が碎ける瞬間なぞ誰が知りたいと思うんだ!!」

ああ、それと……アコノ、セツナ、すまない。この影響でお前達まで死ねなくなつたようだ」

「ええと……何か変わったんですか?」

「別に、今までも実質的には死なない状態だったはず。何が問題?」

「私の手から、生殺与奪権が消えた。」

いつ私が消滅出来るのか想像も出来んが……その時まで、共に存在し続ける事になった」

「今までと、そんなに変わらないですよ?」

「生殺与奪権とか関係なく、私は最後までエヴァというつもり。」

そんなに落ち込まなくていい」

「それでも、お前達には『私に殺される』という選択肢があつたんだ。

それに、私は自己崩壊用の術式も持っていた。

まさか、そのどちらも使えなくなるとは……」

お姉様が、orzになつてる。

痛恨の強化。調査でこれが判明した時みたいに叫びながら転げまわらないだけ、まだ落ち着いてるけど。

現状で唯一成功する可能性がある消滅手段は、世界を崩壊させる書き換え。これすら確実じゃない感じもするし、流星にどうかと思う。

「ええと、主のアコノさんはともかく、セツナさんまで死ねなくなつたというのは、どうしてなのかしら?」

それが、必ず生きてまた会えると言った理由なのかしら？」

「アコノは私の主、セツナは私の眷属になっっている。」

解りやすく言えば、私が機能している限りは不老不死、例え体が完全に消し飛んでも事実上の復活が可能、例外として私が殺す事だけは出来る。そんな状態だったんだが……ジュエルシードめ、2人の不死性まで強化してしまったんだ。

おかげで、私が殺す事も出来なくなった。2人が死ぬるのは私が死ぬ時だけだが、私自身どうやったら死ぬるのか判らん以上、現時点で死ぬ方法は無いと言っつていい」

「そう、だったの……」

これ幸いと聞いたと思われるリンデイ・ハラウンだけど、予想以上の答に頷くのがやつとに見える。

クアットロとウーノは殺せる状態だし、眷属の構造そのものが影響を受けたわけじゃないのは幸いだと言えるけど。

「そ、それは……とりあえず、話を進めましょう。」

ジュエルシードですが、どうして今頃影響が？

戦闘中に使ったあれは、もどき、つまり模倣して作った物ではなかったのですか？」

場の空気を変えたいのか、ロリコン変態が別の質問をしてきた。

確かにお姉様は、ナハトヴァール戦で「ジュエルシードもどき」と叫んでたけど。

「この際全部白状してやる。アレは全部、21個全て本物だ。」

管理局にある18個は偽物にすり替え、虚数空間に落ちたはずの3個も回収済みだったからな」

「ちよ、ちよと待てエヴァンジュ、提出したジュエルシードは確実に本物だったはずだ！

それに、明らかに時の庭園は虚数空間に落ちていただろう!？」

クロノ・ハラウンが慌てる。

確かに、偽物を掴まされたという情報は嬉しくないだろうけど。

「落ちる前の回収に成功したのは事実だ。希望するなら後で証拠も見せてやる。」

それと、魔法戦の最中に気付かれないよう入れ替えるなど、そう難しくは無いです。ミッドでそういう状態になっただろうに」

「ま、まさかあの時……あの件にもかかわっていたはずだな、ジェイル・スカリエツティ」

「うむ、レジアスからの要請で、解析してほしいロストログアがあると言われたのだよ。」

「詳細な輸送計画まで付いていたし、無視するわけにもいかなかったのですね。やむを得ず襲撃したのだが……いやはや、エヴァンジュの関係者達は実に優秀だ」

「そう、なのか……」

「ちよつと褒められているせいか、関係者が大物過ぎたか。クロノ・ハラオウンの態度が微妙。」

裏がレジアス・ゲイズ、ミッドチルダの時空管理局の上層部というのは、知ってはいても突き付けられると嬉しくは無いはずだし。」

「話が逸れているけれど、エヴァさん。」

私達に「原作」を見せた意図は、何かしら？」

「つまり……並行世界からの影響を受けている、という事を知ってほしかったんだよ。」

私達「原作を知る者」が積極的に離れようと動いた場合を除けば、意外なほど「原作」との関連が強い。」

なのはとフェイトのデバイスに関しては、間違いなくこれの影響の「はずだ」

というわけで、3つ目の「原作」の映像。

『この広い世界には……』

「これは、1作目の映画版だ。」

似た話を繰り返すのもあれだから、見て解りいいところまで飛ばすぞ」

タイトルロゴまで進んだところで、戦闘シーンまでスキップ。

とりあえず、空飛ぶ猫もどき戦。動画も映しながら、2人が大きく映るシーンを静止画で切り出して提供。

「確かに、改造前のってこんな感じだったわね。」

「話自体はかなり違うみたいだけど……」

もはや使う事のない、カートリッジを搭載する前の姿との比較。

アリサ・バニングスは、一步引く立場だからこそよく見てる。

「さっきの話を、2時間に収めたようなものだからな。確かここは、神社の犬、月村家の猫、温泉での出会いを纏めたような話になっていないはずだ。」

ついでに『リリカルなのは元らしい並行世界』では、これは時空管理局が監修した広報用再現映画、という形で存在しているようだ。内容の確認は出来なかったが、私が知るものと同じ内容だとすると、プレシアが元管理局員に見えないよう描かれていたりしているはずだ」

「ふーん……そのうちゆっくり見てもいいんでしょ？」

「そうだな、ここまで見せたんだ。今更お前達に隠しても仕方ないから、時間がある時にな。」

それと、なのはと恭也。これが、2作目までの原作だ」

A S 編 4 5 話 未来と今の物語

「もう一度話を戻すけれど、並行世界、といったかしら。そこからの影響が強いというのは、そんなに問題なのかしら？」

状況や得た知識を考えると、既にこの未来にはなり得ない事はほぼ確実なのだけれど」

リンデイ・ハラオウンの疑問は尤も。

確かに、普通ならそれほど問題は無い、はずだけど。

「大きく離れてなお、強い影響を受けているようなんだ。以前の状況は知らないから、弱まっている可能性は否定出来ないんだが……それでも、今のままだと『原作』相当の流れに無理に引き戻される可能性がある。」

もちろん、内容に何の問題も無ければいいんだが……」

『小さい頃のあたしは……』

というわけで始める3期目、Strikers。強力な治癒魔法で疲れを誤魔化してるから、このまま最後まで突っ走る。

年号や場所まで明記されてるし、未来だというのは理解出来るはず。

「これってなのはよね？」

えーと、10年後なんだから……その年で魔法少女って無理がない？」

「し、知らないよー！ー！」

「空港壊してエース・オブ・エースって、魔法少女のわりに随分と物騒に出世しちゃってるし。」

とりあえず砲撃撃って済ませる、ってのはダメなんじゃないの？」

「にゃー！？」

早速、高町なのはがアリサ・バニングスに遊ばれ始めたり。

「スバル？ それに、あのデバイスは、まさか……って、ナカジマ？」

ほ、ほんとにクイントさんの……？」

早速知ってる名前が出てきて、マリエル・アテンザが動揺したり。

「リインフォース？ ちっこいリインフォースなんか!？」

「落ち着けはやて、あれはリインフォースを模して造られた融合騎、生い立ちや由来はともかく、技術的にはアギトに近い存在だ」

「そうなんか……生まれ変わるゆーとったけど、ほんまに生まれ変わるわけやないんやね？」

「ある意味では生まれ変わりではあるがな。」

技術的に可能かどうかはともかく、本当に夜天の魔道書を復活させるのは問題も大きいはずだ。建前としては後継あたりが限度だろう」「そっか……リインフォース、アルフさんみたいに、ちつくくなる気は無いか？」

「わ、我が主……幻影で誤魔化す事は可能ですが、その、あまりそのような……し、しかし主が望むのであれば……」

「そんな思いつんでええよ。冗談や冗談……って、私が立つとる!!」大騒ぎする八神はやての言葉を真に受けるリインフォースがいたり。

「エヴァさん、フェイトさんの名前のTは、やっぱり？」

「そうだな、テストロッサだ。」

「養子になつても、その名は捨てられなかったようだぞ」

「ああ、フェイト……」

「……また、こうなるのか」

リンディ・ハラウンがフェイト・T・ハラウンという名前に反応するも、プレシア・テストロッサは壊れたままだったり。

「リインフォースちつきー！」

アギトちゃんの同系つてのは、ほんまなんやね」

「わ、我が主、その……」

「気にせんでええって。リインフォースはリインフォースでいてくれれば充分や」

未だにリインフォースが思い詰めてたり。

「ゲンヤさん!? こ、こんな人まで……ギンガちゃんも……」

再びマリエル・アテンザがびっくりしてたり。

「……こんな形で、時空管理局の問題を指摘されるなんてね……」

「だが、迂闊な判断が出来ない上層部の事情があるとしても、現場から

見れば否定出来ない事実でもある。

この話のはやて君の様に、高ランク魔導師であり使命感の強い指揮官でもあるなら、もどかしく感じて不思議ではないだろう」

行動が遅すぎる、あちこち呼ばれるだけだと前に進んでいる気がしない、等の言葉にレティ・ロウランとギル・グレアムがショックを受けてたり。

もちろん肌色を隠蔽したお姉様は、何か言いそうだった変態ロリコンを殴り飛ばしてる。

「だけど、随分と奇妙な部隊ね。」

本局に所属しながら、ミッドチルダ地上に配置するなんて……」

「まだ始まったばかりだから。その辺は追々、それなりに説明があるぞ」

リンデイ・ハラオウンの疑問は、お姉様に置いておかれたり。

「こんな子供が……」

「魔導師は就業年齢が低い事が多いのは確かだが、流石にこれは……だが、これもあり得る未来だという事か……」

胸を揉んでいる……じゃない、エリオ・モンディアルとキャロル・ルシエの登場に高町恭也の表情が硬くなり、ギル・グレアムもため息をついてたり。

「グリフィスまで……？　　いったい、どれ程の人が……」

まさかの息子登場に、レティ・ロウランが驚いたり。

「ふむ、ここでレリックか。私の出番も近いという事だね？」

「そうだな。」

レリックの正体は掴めているのか？」

「現状では、人体との親和性が高いという事ぐらいか。」

最高評議会の老人達は随分と気にしている様だが、君は知っているのだろうか？」

「いや、知らんぞ。無限書庫もその方面は調べていないしな。」

現物があれば正確に解析出来るかもしれないが、それも可能性止まりだ」

「ふむ、そうなのかね？」

「おや、AMFもあと10年以内に機械化に成功するか。まあいい、未知のものが残るのは良い事だ。未来を楽しみにしておこう」

「ジェイル・スカリエツティが、妙に楽しそうだったり。」

「私が、最大の後ろ盾……？」

「リンデイ提督やレテイ提督を差し置いて……」

「だけど、クロノも10年以内、設立の準備期間を考えると5年もすれば提督、か……」

「頑張らないとね？」

「部隊の説明で、カリム・グラシアが驚いたり、クロノ・ハラオウンが温かい視線に晒されたり。」

「命日……？ クイントさんに、何が……」

「何があるかという事は、見ていれば解る」

「そう、ですか……」

「知り合いの死亡情報に、マリエル・アテンザの表情が暗くなったり。」

「この時点からの8年前、つまり今から2年後に知り合うはずだった……」

「だけど、お姉ちゃん、か……それに、この執務室は、父の……」

「自身の扱いや評価が色々で、カリム・グラシアが戸惑っていたり。」

「その隣でシャツハ・ヌエラが、登場した自身を思案顔で見たり。」

「SSにS+……才能が同じなら、物凄いわね」

「レテイ。エヴァさんがいる以上、無理に引き込めるとは思わない方がいいわ」

「大丈夫よりリンデイ、無理強いをする気は無いわ」

「提督2人が、言明されたランクでこそ話をしたり。」

「フェイトちゃんのマントが白くなったのは、ひよっとしてこれの……？」

「でも、パレオっぽい部分は今も白いよ？」

「これって、マントの中身は制服とかっぽいから……」

「いや、闇の書事件の広報用再現映画も存在する様だから、もしかすると、それで使われたデバイスとバリアジャケットが影響している可能性もあるぞ」

セットアップしたフェイト・T・ハラオウンの姿に議論が集まった
り。

もちろん、肌色の変身シーンはカットしてる。

「ふむ……周囲を見た感じでは、研究所か収容所といったところか。

言動といい、小さな子供に対するものではないが」

「この様な施設はいくつもあるのだよ、ギル・グレアム。

才能を持つがゆえに手に負えなくなった子供、表立って存在出来な
い子供を集め、教育という名の洗脳を行う。そんな場所なのだ、染ま
れなかった、役に立つと証明出来なかった子供の行く末などゴミ同然
だよ」

「これも、管理局が抱える闇の一端なのか。

子供達の社会復帰を促すという建前としても……内容があまりに
酷すぎる」

キャロル・ルシエの扱いが有り得る事をジェイル・スカリエツティ
に肯定され、ギル・グレアムが頭を抱えたり。

「ふむ、ここで私かね。プロジェクトFとは実に懐かしい」

「……渡さないわ。絶対に」

「おお、怖い怖い。

だが、安心したまえ。生命操作への興味はあるが、エヴァンジュと
敵対する気は無いのね。

彼女を姉と呼び、その庇護を受ける子だ。現実が見えない馬鹿でも
ないかぎり、手を出せばどうなるか簡単に想像出来るというものだ
よ」

プレシア・テストロッサが、今度はジェイル・スカリエツティを凄
い目で睨んだり。

「ゼスト……？ まさか、ゼスト・グランガイツ三等陸佐がここで？

だけど、レジアス中将の盟友のはず。それに、エヴァさんの話では
白だと……」

「この辺は色々あってな。見ていれば解る」

白いのは現時点だし、原作でもある意味では白だし。

だけど、この辺はリンディ・ハラオウンにもまだ説明せず。

「きつきから気になってんだけど、アタシや周囲の連中は、何でにやはをすげー気遣ってんだ？」

何も知らねえガキじゃなくなってんのによ」

「にやー！　だからなのはだってばー!!」

「その辺もそのうち話が出るから、もう少し待ってくれ」

不思議そうな八神ヴィータにも、やっぱりまだ説明せず。

「おー、これくらいになると、ドレス姿も様になつとるなあ。

けど、なんか私が妙に小さく見えるんやけど……」

「ん？　確かに、3人の中では一番背が低かったはずだが」

「ちやうちやう、そこやなくてな。

こう、母性的な部分が、こんな感じで……って、人様のぼっかり大

きくして、自分のを忘れてたんか!？」

「そっちの話か。設定上は……馬場、知っているか？」

「確か順位は……って、デリカシーのねえ質問だなオイ！」

「私は一応女だからいいんだよ」

「いや、人に言わせるのはあかんやろ」

スタイルの話で一部が盛り上がったたり。

「あれ？　今の……ユーノくん？」

「え、あれって僕なの？」

「たぶん……」

「背が伸びても男っぽくなくてない感じだし、そうなんじゃない？」

「ちよ、僕ってどれだけ女々しいのさ」

「女装させたら似合いそうなくらい？」

高町なのはに気付かれたユーノ・スクライアが、アリサ・バニング

スに遊ばれたり。

「アギト……？」

なあシグナム、まさか、アタシもいるのか？」

「私に聞かれても、内容を知らされてないから答えられん。

知っついていそうなのは……」

「いる。同じ名前になった時は、エヴァもある意味納得してたけど、驚いてもいた」

「まさか、アタシを助けたのは……」

「知っていたことが影響したのは否定しない。

「だけど、あくまでも切っ掛けの一つ。実験体として捕らえられているという情報を見付けたから動いていた」

「そ、そっか……」

「アギトの疑問に八神シグナムは答えられなかったけど、主があつさりとはらしたり。」

「ヴェロツサ……そう、査察官となっているのですか」

「軟派な弟がちゃんとした立場になつていても不真面目だと言われているからか、カリム・グラシアが微妙な顔をしてたり。」

「司書長……なんか、長つて威厳は無いわね」

「話には聞いてたけど、20歳程度の僕が何で司書長なんてやってるのさ!?!」

「にや? ちゃんと認められてるなら、いい事なんじゃ?」

「そ、そりゃあそうだけ……」

「相変わらず弄られてるけど、高町なのはのフォローに弱いユーノ・スクライアがいたり。」

「大きな組織では、心無いからという理由では無暗に排除も出来ないが……」

「問題となつたと言っている以上、許容したわけでも無いのでしよう。」

「それでも、家族への影響は……」

「ティアナ・ランスターの過去話に、提督達は思うところがある様子だったり。」

「なのは、アンタ……」

「これは、やり過ぎなんじゃ……」

「私じゃない! 私じゃないよー!!」

「ティアナ・ランスター撃墜シーンで、高町なのはが引かれたり。」

「体への負荷とその結果が、これか……それも、未来の話だ。」

「必要な要素の多くが揃っている以上、あり得ないと否定も出来ない。なるほど、禁止されるわけだ」

「そっか……こんな風になつちゃうんだ……」

高町なのは撃墜シーンで、高町兄妹が集束魔法を禁止された本当の理由を理解したり。

「レジアス中將、か。」

武闘派として実績も多いが、それだけに闇に飲まれる可能性も高かったという事か……」

「地上の平和を守るという意味では、かなりの貢献があります。」

様々な団体との関係が強く、強硬だったからこそ通った改善案もある。扱いの難しい人物と言えるでしょう」

「だからこそ、状況を変えるには壁を破る必要があるわ。」

「そのための切り札が欲しいのだけれど……」

演説で登場したレジアス・ゲイズの評価が、提督や執務官の間で微妙。

リンデイ・ハラオウンに視線を向けられてるけど、お姉様はまだ無視して。

「子供に甘くて過保護なあたりは、やっぱり親子、かしらね」

「……ふふっ。でも、子供なんて……」

「か、母さん、私は、まだ……」

リンデイ・ハラオウンの眩きに喜んでるのか怒ってるのか、プレシア・テスタロッサが相変わらず壊れてたり。

「ノーヴェエ、か。確か、クイントとかいう魔導師の遺伝子を使用したものだったか」

「えっ!? そ、それって……」

「ふむ、君はオリジナルと直接の面識がある様子だ。」

だが、同様の存在を既に2人ほど知っているはずだがね」

「それは……」

ジェイル・スカリエツェイのネタばらしに、マリエル・アテンザが動揺してたり。

「あら。クロノもこの頃には結婚？ 相手は……」

「ネタバレは……さて、どうするかな」

「ちよ、ちよっと待ってくれ!」

母とお姉様に遊ばれかけるのを、クロノ・ハラオウンが必死で止め

ようとしたり。

「ここでクアットロですかあ。確かに、管理局の機械を騙すなんてクアンタンですけどお？」

「能力は知っているし、敵対する必要もない。

無暗に煽るな」

「はあい、エヴァンジュお嬢様あ。でもお、自分達の力の限界を知る事も大事ですよお？」

「私が使った力だけで、理解出来ているだろうさ」

「それもそおですnee」

自身の登場に何故か嬉しそうなクアットロがいたり。

「あ……アタシっぽいけど……」

映像としてのアギト登場に、本人は恥ずかしそうだったり。

露出の多い衣装や背景の花火は、どうもお気に召さなかった様子。

「英雄気取りの青二才、ね。年長者からは若者が未熟者に見えて、それほど大切な未来の担い手なのだけれど。

普段は表に出さず人をまとめ上げているのは、演技力やカリスマの賜物かしら……？」

「犯罪者か。面と向かって言われたわけではないが、こう直接的に表現されるとやはり心は痛むな」

「はやてさんを犯罪者扱いするという話は、この事なのね。

想像出来ないわけじゃないけれど、ここまで言い切っているとは思わなかったわ」

提督3人の中で、レジアス・ゲイズの評価が下がっていったり。

「あらあ、セインちゃんにデイエチちゃん、トーレ姉様もですかあ」

起動してる姉妹の登場に、やっぱりクアットロが嬉しそうだったり。

「……これ、完璧にアタシだ……」

「だが、既に我等と共にある。もはやこの様な未来は無い」

「そう、だな……」

過去の暴露で落ち込んでるアギトを、八神シグナムが慰めたり。

「ヴィヴィオ……なるほど。この子が、私という存在の有り得た可能

性ですか」

「ヴィヴィオさん、聞いていたのですか？」

「はい、概要だけでしたけれど。」

この先に、エヴァさんが私に見せたい何かがあるという事ですね
ようやく出た幼女の名前で、ヴィヴィオが意図を理解したり。

「私の能力が、物語の根幹に関わるのですね。」

予言の内容を考えれば、確かに理解は出来るのですが……」

「時空管理局システムの崩壊、ね。」

確かにそう読むことは出来る内容に思えるし、私達が知ったような
不祥事が何の対策も無いまま広まっても、そうなる可能性はあるけれ
ど……」

「ふむ、最初の節がレリックと私を指し、後半が管理局崩壊を指すの
は、恐らく正しいと判断出来る。その上で気になるのは、死せる王、そ
れに彼の翼といったところか。」

心当たりはあるが、それはまだ秘密かねエヴァンジュ？」

「そうだな。ここで言ってしまうのは簡単だが、話を見てもらうか」

元凶側の当事者であるジェイル・スカリエツィには、聖王のゆり
かごを指すであろう『翼』に簡単に行き着いたらしい。

でも、これもまだ秘密。もうしばらくしたら解るし。」

「うーん、生き急ぐいうんは、多分私は回避させてもらたはずや。」

けど、力を持って孤独になるいうんは、エヴァさんが一番気を付け
なあかんか？」

「少なくとも、私とセツナは共にいる。」

はやても、一緒にいてくれる？」

「もちろん。私も人様とは違う力を持ったわけやし、ずっと一緒や」

八神はやてに対する評価を、本人がお姉様に振り向けたり。

「……なんという事だ。これが本当に、最高評議会の発言だと言うの
か。」

確認しておきたいのだが、直接依頼を受けた事や、何らかの会話を
する機会はあったかね？」

「もちろん。その上、彼らの日常会話も一部は記録しているよ。」

言い方の程度に違いはあれど、3人の老提督を見限る発言は度々行われている。10年後でも消えていないところを見ると、まだ使える可能性がある石だと見ているか、最早何の力も無いと放置されているのだろうか」

「最高意思決定機関であつても、通常はその力を振るわず、表に出る事も無い。」

その裏で、こんな事が……」

「腐れ脳味噌、ね。姿はまだ見えないけれど、これがエヴァさんの評価の根底かしらね」

「腐れ脳味噌とは、言い得て妙だ。」

あの姿も、この先で見られるのかね？」

「そうだな」

3提督に関する暴言を吐く最高評議会に、3人の提督が不信感を持つたり。

もちろん、ジェイル・スカリエツティの証言も後押ししてるけど。

「我ながら、何かが足りないと思える笑い方だ。」

君達の世界の言葉で言うなら、頭のネジ、もしくは理性あたりかな？」

「知性も足りないように思うが、どうだ？」

「なるほど、無限の欲望のままの私であるならば、その名の通り欲望に忠実だ。」

知性が足りないのも仕方ないだろう」

ジェイル・スカリエツティの馬鹿笑いを、本人とお姉様が酷評したり。

「ああ、フェイト……あんな状態で、私だけでなくアリシアまで……」

「クロノのお嫁さんって、エイミィ？」

それに、この時点で子供が2人も……」

「……エヴァンジュ、これは捏造、じゃないのか？」

「まさか。これは私の記憶から再現したものだし、そもそもお前が誰とくつつこうが知った事ではないが。」

つまり、この世界のクロノ・ハラオウンはエイミィが嫌いなのか。

狙いはなのほか？ それとも妹にならないフェイトか？」

「そ、そうじゃないが……」

母である2人がそれぞれの子に絡んだり、お姉様を疑ったクロノ・ハラオウンが反撃されたり。

「あらあ？ チンクちゃん、眼帯なんてしちやつて。

ファッシュョン、ではなさそうですねぇ」

何事だ、と言いたげなクアットロを、お姉様はあっさりとは無視したり。

「未知のスキルによる奇襲に、多数の機械を使った強力なAMF……
確かに、どちらも対応が難しい戦術ね」

「無知は恐れを生み、無力に通じる。古き時代から変わらぬ真理だよ。
その上、管理局は質量兵器を嫌い魔法に頼っている。魔法を無力化
されたら脆いのは明白だ」

リンデイ・ハラオウンのため息に、ジェイル・スカリエツティが追
撃したり。

「うお、なんか一瞬白いヴィータがおった!？」

エヴァさん、今んとこもう1回!」

「そのうち出てくるから、そこまで待ってくれ」

ユニゾンしたヴィータを見て、八神はやてが騒いだり。

「言動や真意は置いておくとして、やはり私の未来か。対外的な発言
には概ね同意出来る様だ。

どうだねエヴァンジュ。稀代の技術者でもある君は、私の可能性を
どう見る?」

「物語としては判りやすい敵役。人としては理解し難い狂人。それで
も技術者としては高水準で、後で語られる本当に求めているとされた
ものも理解は出来る。」

管理局の過去に興味は無いが……表にいる正義馬鹿や裏の腐れ連
中と友好的な関係を築けるとは思えんし、それは私も同じなのだろう
な。もっとも、他人を言い訳に使うのは感心出来んが」

圧迫され罪に問われた技術者達の恨みや、根底にあるはずの目的の
話に2人の技術者がちよつと賛同気味で、それが聞こえてた提督3人

がお姉様の方を凄いい勢いで見たり。

「ふむ、戦闘機人について、なかなか調査されているようじゃないか。」

レジアスの目に留まらないレベル、片手間で調べていたにしては上出来だ」

「その言い方だと、内容は概ね正しいという事かね？」

「うむ。人造魔導師を作る為に最大の障害となるのは、リンカーコアの生成でね。これが実に不安定で、あれこれ試すうちリンカーコア以外に関しては比較的良好な成果を得られたのだよ。」

使える手段を得たならば、これを利用しない手は無いだろう？

その構想を後押ししたのが最高評議会、それにレジアスだよ。それにしても、レジアスの計画はやはり愚直すぎる。物語となつてはいえ、これ程簡単に見破られるようでは」

「事実、だと言うのか……」

「タイプゼロと呼ばれていた2人もその計画の一環、恐らく技術検証用の試作なのだろう。」

私は直接関わっていないが、出来もなかなか良いようだ」

「……人の命を何だと思ってるのだ？」

「戦闘機人というアイデアや基礎技術を生み出したのは、私ではないのだがね。だが、私が改良した技術で生み出された者も、言ってみれば私の子供の様なものだ。」

子の出来不出来に一喜一憂する親、子に関心を持ってない親、子に嫌悪感を抱く親。どれが悪人と呼ばれるべきかね？」

「そうではない。そうではないが……」

ギル・グレアムが、ジェイル・スカリエツィに口で負けてたり。

「あれ？ この人、どこかで……」

「メガーヌの事か？」

「あ、そっか。メガーヌさんに……って、メガーヌさん!？」

という事はあの女の子ってこの前生まれただけのメガーヌさんの子供!？」

再び、マリエル・アテンザが知り合い登場で叫んだり。

「いい、いい話だったのに……」

どうして10年たっても料理がうまくなってないんですか!？」

八神シヤマルが、料理が下手というヴィータのセリフに落ち込んだり。

「最高評議会、それに時空管理局が……」

「言っただろう? 私が生み出したアイデアや技術ではない、と。」

表に出そうとした時に倫理的問題を克服出来なかったのが、当時の技術者の不幸であり、戦闘機人の不幸の始まりだ」

「未来の話だが、語られる過去についてはかなり正しい情報が得られる……」

そうだな、戦闘機人の事件は既に始まっていて、2人の少女も保護されているのだったな」

マリエル・アテンザが動揺してたのを思い出し、ギル・グレアムが戦闘機人に関する現状を正しく理解したり。

「聖王の器、聖王のゆりかご……」

あるのですね? ゆりかごが」

「私よりも、当事者に聞くべきだろう。」

どうなんだ、スカリエツティ」

「ミッドチルダの山中に埋められているよ。」

最高評議会の主導で隠蔽され、いつか切り札にしようと期待されている様だ。私が聖遺物の回収を指示されたのも、ゆりかごを起動する鍵を求めての事なのだよ」

「つまり、ロストロギアを管理する時空管理局、その最上位に位置するはずの最高評議会が、危険なロストロギアを隠し持っている。」

そういう事ですね?」

「そうだ。ゆりかごの起動は私の夢だが、最高評議会の希望でもあるのだよ。」

これを見せたという事は、示威の為に使いたい。そういう意図なのだろうか?」

「さて、な。」

私は、ヴィヴィオが願う事を、可能な範囲で叶えたいと思っている

だけだ」

「そうですか、ありがとうございます。」

「願いは急ぎますか?」

「話が終わってからで充分だ。末路も気になるだろうか?」

聖王のゆりかごとというキーワードの登場で、ヴィヴィオがお姉様の期待を理解したり。

「聖遺物の盗難が、こんな形で……」

「傲慢な矛盾か……私も、同じ罠にはまっていたのだな……」

「脳……これが、エヴァさん達が脳と言っていた、最高評議会の姿……」

「この顔は、まさか!」

「気付いたようだね、聖王教会のお嬢さん。」

最高評議会の隠れ家にも、私の娘を送っているのだよ。勿論、あの脳味噌達には気付かれていない。会話を記録出来ているのは、その成果だ」

「そう……なの、ですか……」

作中とこちらのジェイル・スカリエッティの説明に、偉い人達が揃ってショックを受けてたり。

「アルハザードの遺児、だと……?」

ギル・グレアムがドゥーエの言葉を拾って。

「そういうえば、ここでそんな話も出ていたか。」

「これは迂闊だったな」

「その割には、全く慌てていなように見えるが。」

「気遣いは不要だったかね?」

「まあ、ここの連中以外に知られていれば、騒動も大きかっただろうかな。」

「その意味では、助かった……のか?」

お姉様とジェイル・スカリエッティが、実質的に認める様な会話をして。

「スカリエッティがアルハザードの遺児、つまり、その遺伝子親でもあるプレシア君もまた……」

「ええ、どうもそうらしいわ。

私としては、かつて目指した場所が遺伝子的な故郷だった、というだけだけれど」

正しく真実を認識したギル・グレアムを、ようやく復活したプレシア・テスタロッサが肯定し。

「聖王のゆりかごが、アルハザードからの流出物……？」

「私が知る限りでは、アレそのものが存在していたわけではないがな。ただ、アルハザードの技術や次元航行船が元になっている可能性はかなり高い。虚数空間に落ちたアルハザードは母星だけで、支配する別の世界にいた技術者や兵器はそのまま存在していたからな。

それらが流出するのは確実、アルハザード式の魔法がほとんど残っていない事の方が不思議だ」

「エヴァさん……何だか自棄になっっていないかしら？」

軽々しく言っている事ではないと思うのだけれど」

「ここまで見せているんだ、お前達にはもういいさ」

心配するリンディ・ハラオウンをよそに、お姉様までアルハザードの知識がある事を肯定したり。

「人体実験、か。

人の命を弄ぶと表現されているが、その辺はどう考えているのかね？」

「技術の進歩には必要な事でもあるのだがね。

人は古の時代から、体内を知るために死体を切り刻み、薬を求めて研究と実験を繰り返してきたのだよ。そうやって得た技術でどれ程の人が救われたか、考えた事はあるかね？」

結果を享受する事に疑問を持たないまま、必要な過程を非難するのが一般人だ。殺す事を嫌悪しながら肉を食べる矛盾に気付かないようにね。

私は、汚れ役をやっているにすぎんよ」

全く悪びれた様子のないジェル・スカリエッティに、ギル・グレアムがため息をついたり。

「生命操作技術の完成を望み、そのための空間を欲する。

なるほど、実に私らしい」

「今でも、それを望むのかね？」

「1つの完成形が目の前にいるじゃないか。人としての意識があり、極めて高い能力を持ち、長い時を生き、人類の夢である不老不死を与えることが出来る。そんな存在がね。」

その技術は、未知なるものへの欲求という意味で魅力的だが、追い越すのはなかなか難しくそうだ。しかも、必要なコストは膨大ときている。

少なくとも、かなり大きな権力組織が残りつつ人権という概念が失われぬ限り、同じものを作るのは不可能だろう」

「私の作り方を知っているのか？」

「アルハザードの人工リンカーコア技術は、人工と言いながら多数のリンカーコアを製錬し合成したものだ」と知っているだけだよ。

つまり、主要な材料は生物であり、そのリンカーコアだ。しかも、人が最も効率が良い。

人のリンカーコアをコピーし、出来上がった粗悪品を集め宝石を作り出す。コピーした際の損傷を治療しながら何度も繰り返すのだから、人を家畜のように扱うという事だ」

「正解だ。それを知りながら、人造魔導師や戦闘機人に使っているようには見えんが……」

「魔導師10人を使い潰して1つ製造するより、人造魔導師を10人作って魔導師適性がある素体が1人生まれる可能性に期待する方が、圧倒的に安いのだよ。」

しかも、製造したコアに適合するよう作られた魔導具の君達と違い、人に使う場合は相性や適性も問題になる。もちろん外部供給に限定するなら問題は起きにくいが、それならばリンカーコアである必要も無い。

人を使い捨てにし、得た物を適切に使用するためにも大きな組織が必要となるアルハザードの人工リンカーコア技術は、少々使い辛かったのだよ」

話が盛大に脱線してるけど、ジェイル・スカリエツィに原作ほど

の執着は無いように見えたり。

「ゼスト三等陸佐を、レジアス中將が殺させた……？」

いえ、これは……」

「本局に多くの魔導師が所属している以上、耳が痛い話でもあるけれど。」

それでも……いえ、本局に所属する側が何を言っても、言い訳にしなければいねえ。

それに、エヴァさんがこれを見せている理由は、きっと……」

「さて、な。深読みするのは勝手だが、肯定も否定もせんぞ」

お姉様は、何か言いたそうな2人の女性提督の視線を無視したり。

「そういえば、クローンは埋め込み済みなのか？」

「そのための準備はしていたのだが、実行には至っていないかったのだよ。」

これほど大掛かりな行動に出る予定は、まだ無かったのね」

「そうか」

クアットロとウーノの体内には無かったけど、他の戦闘機人の中にも無い事が確認出来たり。

「あらまあ。未来の私って、こーんなにドジっ子なんですかあ？」

随分とお間抜けですねえ」

「過剰な自信や自尊心の結果だろうな。自分達以外の価値を認めていなかっただろう？」

「そうですねえ、ドクターや私達をどうにかできる人がいるとは思いませんでしたしい。」

でもお、エヴァンジュお嬢様から見たら、私達でもゴミみたいなものですよねえ」

「別に、私は全てを超越したなどと言う気は無いぞ」

壁抜きで撃ち抜かれる自分の姿を見て、クアットロ自身が色々酷評してたり。

「うわあ……なんだか、ますます物凄い事に……」

「流石にあの様な攻撃には、晒されたくありませんね」

「私じゃない！ 私じゃないよっ!!」

派手なスターライトブレイカーexfbに、アリサ・バニングスだけでなくヴィヴィオにもひかれて焦る高町なのはがいたり。

「私と娘達は全員捕縛又は死亡、ゆりかごも破壊される、か。なるほど、見事なまでの敗北だ。」

なかなか薄氷だが、流石は物語といったところか。最高評議会やレジアスが処断された様子が無いあたりも、実に管理局らしい」

エンディングの模擬戦開始まで見終わったところで、上映終了。

敗北する悪役のはずのジェイル・スカリエツティが一番ショックを受けてないあたり、らしいというかなんとというか。

「さて、以上が私達の知る原作だ」

「話を進める前に、幾つか確認させてほしい。」

これで語られた内容は、実際に現在進行形のものも多い。そう受け取ってよいのだね?」

ギル・グレアムの疑問は尤も。

だけどこれは、お姉様の話に直結する質問。

「そうだな。少なくとも、春までは明確な差異が無かったと断言してはいはずだ。」

最高評議会、レジアス、スカリエツティの行動に大きな違いは無く、ギンガとスバルの2人はナカジマ家にいる。最高評議会の近くに戦闘機人がいて、聖王のゆりかごも発見済みだ」

「だが、ここには関係者の多くがいる。こうなるという知識を得た以上、歴史は変わるはずだ。」

それに、並行世界という概念から判断すると、成功した未来と失敗した未来の両方があるという事なのだろうか?」

「さつきも伝えたが、この世界は、この話の様な歴史を辿る並行世界の影響を、今でも大きく受けている。それは結果的に、これに近づくような何かが起こる可能性が高いという事だ。」

そして、この並行世界への影響は、事件や出来事の結果を再現するという力が強いようだ。逆に言えば、参加者の増減や、同じ役目が出る人物への入れ替わりも許容される可能性が高い。

今のままであれば、はやて達は恐らく使命感の強い魔導師に。スカ

リエッティは手駒を失う最高評議会やレジアスが用意する誰かに。それぞれ変化した事件が発生する可能性が高い。

それと、分岐した並行世界がどう残るかは、存在する力の強さで決まる。最高評議会とレジアスが死ぬ並行世界の影響が強い以上、そうなった未来が残る可能性が高いと考えている」

原作相当の並行世界から分岐した、機動6課及び時空管理局が敗北した並行世界等も存在するはずだけど、ここへの影響が強い並行世界には見付けられなかったし。この世界から分岐した並行世界の発見も出来てないけど。

情報を確認するにも、並行世界からの情報取得は時間軸がかなり滅茶苦茶で、安定した接続はジュエルシードの情報を使っても難しそうだし。最も影響が強い原作相当の並行世界を見た時は、1度目がVivid開始後と思える状況、2度目は時空管理局設立前に見えた。

「影響を無くす事は、出来ないのかね？」

「複数の並行世界に跨る改変だ、幾ら何でも手に余る。それに、その規模の改変だと副作用がどうなるか予想出来ん。

頑張って切り離れた結果、世界が存在出来なくなりました、では洒落にならん」

「なるほど。ならば、事件や出来後の発生する時間については、変えることが出来るのかね？」

「多少の前後は許容されるようだ。それに、先に結果を作ってしまったら、そうなるような誘導も発生し辛い。

あくまでも可能性だが、意図的に行ったのはとフェイトのデバイス強化が、2作目での撃墜を回避出来た要因になったかもしれない、という事だ」

「そうか。では、別の質問だ。

「アルハザードについて詳しいようだが、その理由を聞いていいかね？」

「やっぱり来たー。」

「リンディ・ハラオウンは秘密にしてくれてたけど、あれだけ言っちゃえばばれるのは明白。」

「プレシアやスカリエツティの事も含め、秘密という事にしておいてくれよ？」

私はアルハザード出身だ。ベルカについては資料でしか知らんし、行ったことも無い」

「エヴァさん、本当にいいのかしら？」

「私としても、そろそろ区切りを付けないといけないからな。」

私を生み出した当時、アルハザードは確かに高度な技術を持っていた。だがその実態は、確認されていた次元世界の半分を武力で支配し、既に国としての限界が見え始めた軍事国家だった。

私がいたのはその中枢、国としてのアルハザードも当然含まれるが、世界、そして星としてアルハザードと呼ばれた場所だ。

リーナ……プレシアのクローン元だが、あいつが私を作ったのは、アルハザードという国が崩壊した後も魔法の可能性を追い、魔法の限界を知る為。情報収集を担当するのが夜天と宵天、集まった情報を管理するのが私、曙天。今世で目覚め、リーナを主とした時点で、上層部には秘密だとしながらそう説明されたよ。

ロリコン 変態、お前はどの程度説明されていたんだ？」

「今の話は概ね全て、でしょうか。アルハザードが最終的に崩壊するとリーナに伝え、エヴァちゃんを作るよう勧めたのは私ですからね。」

時期は読めませんでした。エヴァちゃんが間に合ってよかったですよ」

「そうか。まあ、その後私は情報の取りまとめをしながら、与えられた任務をこなしていた。」

最大の役目は、アルハザードの資料庫……言ってみれば今の無限書庫の様な、何でも放り込んで全く管理されていない情報の墓場を整理し管理する事。全ての魔法に精通するとかいう話の元は恐らくこれで、アルハザードで公式に存在が認められた全ての魔法の情報を見る事が可能な立場にいたという意味では、全くの見当違いでもない。

それと、私は兵器でもあるし、実際に多くの戦場で数え切れないほどの命を奪ってきた。世界を滅ぼした事もある。

夜天は魔法の情報を集めるためにリンカーコアを蒐集する能力が

あるが、加減する事で殺さずに済み、場合によっては強化される場合もある事は知っての通りだ。だが、兵器として私に与えられた能力はリンカーコアや魂の剥奪。相手を殺して奪う力だ。

私は文字通り、命を奪ってきたんだよ」

「アルハザードの最終兵器、その実態かね。実に興味深い」
「そう面白くも無い話だ。」

この能力で出来るのは範囲の調整程度、それ以外の加減や選別が来ん。奪える相手が効果範囲内に居れば問答無用で殺して奪い去ろうとする力をホイホイ使えるものか。

切り札ですらないんだ。察しろ」

「なるほど。通常の運用には適さない能力、というわけだね」

「そんな感じで、20年程経った頃だ。阿呆な貴族が魔法の実験を行い、そこで発生したテロでアルハザードが虚数空間に落ちた。」

当然私も巻き込まれたわけだが、虚数空間で私はリーナに依頼され、アルハザードの全てを灰に変え、リーナも殺した」

「待ちなさい。アルハザードの地が灰になっている、ですって?」
復活してたプレシア・テストロッサが、やっぱり乱入してきた。

命懸けで目指していた時の記憶があるだけに、無視は出来なかったらしい。

「飢えや乾きで獣に堕ちる友人を見るのは忍びない、と言われたよ。どんな形であれアルハザード中枢の資料が残る事も防ぎたかったよ。うだが。」

太陽も魔法も無くなった以上、滅亡は確定だ。だが、星ごと落ちたから大気があり、しばらくは生き長らえてしまう。だからこそ、爆弾やらの魔法を使わない兵器を使い、徹底的にな」

「そう。アルハザードに辿り着いたとしても、結局は何も出来なかったのね。」

「だけど、本当に行くことは出来ないのかしら?」

「虚数空間は座標も魔法も滅茶苦茶になるから、無理だ。」

発動可能なはずのランダム転移魔法はあるが、これも運頼みだ。私が脱出を試みた時も、結局これでは虚数空間から出る事も出来なかつ

たし、風景も変わらんから本当に転移していたのかも不明だ。結局は消耗し切って機能停止、普通の人間なら死亡して終了だ。

次元世界、その広い宇宙空間に出る事すら困難なんだ。たかが惑星1個の、転送可能な範囲に行き着く可能性など無いと言っている。私がおりにいるのは、転生機能が何とかしたからだろうとしか言えん」「貴女程の力があっても、そうなのね。

本当に精神の改変は恐ろしいわ。虚数空間の恐ろしさに気付きもしないのだから」

「その後の私は、ずっと眠っていた。時折夢を見ていた覚えはあるが、それだけだ。

気付いた時には目の前にアコノがいて、私の主になった後だったよ。眠ったのが2500年前だと知ったのも、ユーノと会ってからだ。

これが私の過去、私の正体だ」

A S編 46話 願い

「ちよつといい？」

アルハザードって、おとぎ話の世界じゃないの？ 最初の話だとそう言つてたはずでしょ？」

理解し切れてないアリサ・バニングスが、理解する下地の無い地球人代表で手を挙げた。

というか、理解してる方が少数。ギル・グレアムやレティ・ロウラも、納得は出来てない。

「一般的にはそういう認識だな。」

まあ、あれだ。ラピエタは本当にあったんだ、みたいなものだと思つてくれればいい」

「要するに常識的には与太話つて事じゃないの。誰が信じるつてのよ」

「私としては、別に信じてもらわなくても問題無い。」

目標はクリアしたし、騙し続けるのも疲れただけだ」

夜天の魔導書が本来の姿を取り戻し、八神はやても助かつてる。

時空管理局の横槍を、必要以上に警戒する必要が無くなったのと。

「燃え尽き症候群、かしらね。もしくは自棄かしら？」

リンデイ・ハラオウンの考えで、ほぼ間違いない。

「さあな。だがまあ……こんなしんどい事は二度とせん！

もう働きたくないでござる!!」

「ござるって、どこの侍か忍者よアンタ。」

それに、手を貸してもいいみたいな事を言つてたじゃないの」

「衣はバリアジャケットが便利で、食べなくても機能上問題が無く、別荘という住居を持ち、おまけに優秀な部下が多くいるという現実が目の前にあるんだが。」

生活と言う点では、本当に働かなくても全く困らん」

「エヴァさん、あのニート侍は本来働き者や。」

まあ、やる事はしつかりやつとるから、文句は言えへんけど」

「言いなさいよー」

いくら命を助けられたからって、甘やかしたらどこまでも引き籠りそうなんだから！」

「そう言われても、何かあったら、真っ先に動いてくれそうやし。」

なあ、エヴァアさん？」

「まあ、そうだな。家族や友人達に火の粉が飛んでくるようなら、外間を無視して全力で排除する所存だが。」

必要なら星の1つや2つ、吹き飛ばしてみせる！」

「外間は気にしなさいよ。それに星を吹き飛ばすって、出来るわけないでしょ」

「これはなかなか勇敢な御嬢さんだ。」

では、私からのプレゼントだ。ウーノ、出来るかい？」

「はい、ドクター。」

先ほどの戦闘に関する記録がこちらです」

というわけで、アリサ・バニングスを褒めた(?) ジェイル・スカリエツティ。その指示でウーノが上映した記録映像を見たアースラ非搭乗組は。

「な、何なのよアレ……」

啞然としてるアリサ・バニングスを筆頭に、全員が言葉も出ない様子。

「ちなみにエヴァンジュが最後に使おうと準備していた魔法だが、集めていた魔力量を考えると、実際に惑星1つくらいなら吹き飛ばし兼ねない威力が出るであろう代物だ。」

ナハトヴァールが想定以上だった事を踏まえても、随分と思いつたものだと感心するよ」

「アルカンシエルを超える威力で、真っ先に思い付いた魔法がアレだっただけだ。」

妹達1万人で攻撃しても墜ちなかった以上、可能性が否定出来なくてな」

「1万人って、チャチャさんは10人以上出せるとか言っていたはずだけれど？」

リンディ・ハラオウンに突っ込まれた。

3桁もサバを読むから。

「1万は10以上だ。嘘は言っていないが」

「確かにそうだけれど、随分と誤解を招く言い方ね。」

それに、魔力の計測だともっと多かつただけけれど、その言い訳も聞いておきましようか」

「私とアコノが逃げ回っている時に攻撃していたのは、ほぼ1万のはずだぞ。」

他は魔力を集めたり、私やアコノの補佐をしたりだ」

「結局、チャチャさんは何人いるのかしら?」

「2万……誰も墜ちてないだろうな?」

大丈夫、疲弊や破損はしても、破壊はしてない。

一部は少し時間がかかるかもしれないけど、回復出来る範囲。問題無い。

「うん、2万だな」

「2万、ね……」

「つまり、オーバーS級の魔導師2万人を擁する軍を持っているに等しい。」

そう考えて良いのかね?」

今度は、ギル・グレアムが質問してきた。

保持戦力の確認という意味で、意図は理解出来る。

「色々な役目を持っているから、全員が前線に出られるわけじゃない。司令部やバックヤード、その後ろにいる国の公務員まで含めて2万という表現なら、まあそうなるだろうが」

「だが、自分の領域を守る為になら、オーバーSの魔導師2万人が動く事が可能という事だ。」

時空管理局から見ても、大きな脅威に見えるだろう」

「火の粉を払う為以外に使う気は無いんだがな。」

さてと、ヴィヴィオ。そろそろ願いを聞こうか?」

「はい。」

私はオリヴィエ・ゼーゲブレヒトの記憶と力を持つ者として、ゆりかごを戦争や弾圧に使わせない事を望みます。

手段についてはエヴァさんに相談したいのですが、どの様な選択肢が存在するでしょうか？」

「その願いだと……まずはスカリエツティと変態の2人に聞きたい。ゆりかごについては、どの程度の調べが付いている？」

「機能の解析は進んでいるが、あれはなかなか高度で複雑な技術が用いられているのでね。現時点で聖王の器があつたとしても、私には全てをすぐに掌握出来るだけの情報は無いと言つていい。起動する事は出来るだろうがね。」

そうそう、先ほどの「原作」の様に、聖王の器側に細工をして制御する事は、恐らく可能だ。それを考えれば、10年後でも深層までの解析は出来ていないのだろうかね」

「そこで、私の出番ですね。」

以前調べていた情報なのですが、それなりのものは掴んでいると思いますよ。転送するので、内容を確認してみてください

情報の転送を確認、受信開始。

中身は……

「何故最初に来るのがオリヴィエの寝顔なんだ！」

ふざけているのか!? ふざけているんだな!!」

振るうぜバット、燃え尽きるほどヒットお！」

最終的に天井まで打ち上げたけど、落ちてきたのは……ボロボロのゾンビ人形？」

「いやあ、とっておきの一枚だったのですが。」

可愛いと思いませんか？」

「そういう問題じゃないだろうが!!」

スツ、という感じで横に現れた変態にバットを突き付けて、お姉様が吠える吠える。

「いえいえ、エヴァちゃんも原作ヴィヴィオちゃん5歳の寝顔を見せていたじゃないですか。」

50歩100歩ですよ」

「原作を見せるという目的で、不用意に改変すべきじゃないと判断しただけだ！」

寝顔そのものが目的のお前と一緒にするな!!」

お姉様は騒いでるけど、情報は最初の映像以外はちゃんとゆりかごに関するもの。

使われてる技術の多くは、予想通りアルハザードのものが基盤となってる模様。これなら。

それに、ヴィヴィオがお姉様に近付いてきてる。

「まあまあ、それほど騒がなくても大丈夫ですよ。それよりも、後で見せてもらえませんか？」

幼い頃の自分の寝顔がどのようなものか、興味があります」

「……ヴィヴィオ、それでいいのか……？」

「はい。当時の記録は多くが失われていますし。

もちろん絵画や逸話といったものは残っているようですが、今代の父様の技術であれば、鮮明な映像を見られると思いますから」

「……はあ、解った解った。

で、ゆりかごに関して、私が提示出来る選択肢は4つある。

1つ目、昔と同じように、お前が聖王としてゆりかごを起動する。止めておけと言いたいが、恐らく可能だろう」

というか聖王核まで準備済みって、変態ロリコンの仕込みが恐ろしい水準。

聖王核の劣化模造品がレリックって情報も気になるけど。

「それも視野に入れていたのですが、問題が大きいですか？」

「私が言うのもなんだが、人として生きる事を諦める選択肢だ。薦める気は無い。

2つ目、ゆりかごを破壊する。そうすれば、少なくとも〴〵そのものを利用する事は出来なくなるからな。壊す場所によつては残骸やらの問題が出るかもしれないが、禍根を断つには有効だ」

「ゆりかごを残す選択肢が、2つあるのですか？」

「3つ目、ゆりかごを私の別荘に移す。移動させるだけなら起動する必要も無いし、私の別荘に入り込んで盗み出すのは、まあ無理だろう。

ゆりかごを起動させずに残すなら、これがベストだ。私を信用出来るのであれば、という条件は付くが」

「エヴァさんでしたら、ゆりかごを不要と言い切る事が可能な力も技

術も持っていますから。これ以上の適任はいませんよ。

最後は、まさか私のクローンですか？」

「まさか。クローンだろうが1人は1人だ、そんな事はせん。

4つ目、ゆりかごを改造して、王も人として生きられる程度に制限を緩和する。

お前がゆりかごの王になり、その力と庇護を得た上で人に近い生活を送ることを可能とする事は、出来なくはないだろう。少々時間がかかる可能性はあるがな。

聖王として表舞台に立つなら、手札としては最強だ」

「なるほど、その選択肢もあり得るのですね。

それぞれの利点、問題点……少し、考える時間を頂いても大丈夫ですか？」

「すぐに答を出せるものでもないだろうしな。

多少時間がかかっても、納得出来る選択をしてくれ」

「はい」

重大な選択を突き付けられたとは思えない笑顔を残し、ヴィヴィオが離れて。

次にお姉様の前に来たのは。

「少々時間があるようですので、成功報酬について話してしまいたいので御座いますが、宜しいでしょうか？」

「チクアーブか。そうだな、確かに成功したし、話を聞こうか」

「では、単刀直入に参ります。

チャチャ様とのお付き合いを認めて頂ければ幸いに存じます」

私達？

お付き合いって？

「友人的な意味か？ それとも、男女的な意味なのか？」

前者なら今でもそう変わらんだろう。後者だと、そもそもお前達の性別は男と女でいいののか？」

「現実的な意味で前者、気分的な意味で後者で御座います。性別すらあやふやな人外であり、意識や記憶を共有する多数の存在を持つ、という点で近しい存在と言えますでしょう。

もちろんエヴァ様に従う事に異存は無く、従属する事にも問題は無く、いずれにせよ共に精一杯お仕えする所存。

「如何で御座いましょう?」

「簡単な、無理に押し通すような願いでもない、か。まあ、言っている事は理解した。」

「だが、私が認めるかどうかと、妹達が受け入れるかどうかは別問題だぞ?」

「当然で御座います。まずは第一歩、本人同士の意思以外の要因で付き合いが不可能とならない事を確認したので御座います。」

「現時点で否とされるならば、絶望的で御座いますから」

「ふむ……」

「さて、どうする? 今なら拒否は簡単だし、本人に何か言いたいなら好きに言えるが」

「服従属性の眷属なりにするかどうかは、とりあえず別の話として。」

「私達はお姉様の役に立ちたい。これは譲れないけど、邪魔する気は無さそうに見える。今までの態度や今の発言を考えると、むしろ協力的。」

「以前から、私達に対してそれなりに手の内を見せてたのは事実。ちなみに、5万ちよつとくらいまで増える事が可能だと聞いている。制限とか色々あるらしいけど、最大人数は今の私達を超える。」

「とりあえず、みんなで相談。どう判断するか、意見のすり合わせが必要。」

「それにしても、何故妹達なんだ?」

「普段は千晴の所にいる事が多いはずだが」

「よし、流された。」

ファンタズマゴリア

「幻想空間にいる全員集合。ヴィヴィオ達の会話には触れない方向で。」

「千晴嬢とは、能力的な相性はとても良いので御座います。ですが、比較的平凡な生活を志向する千晴嬢とは、考え方の相性はあまり良いとは言えないので御座います。」

「そして、我等の生態を鑑みましても、我等では千晴嬢を幸せにする

ことは不可能である、という結論に達したので御座います。

我等としても幸せを願う気持ちは御座いますし、気に入った相手であるからこそ、その幸せを応援したいので御座います。我等ながら女々しい話では御座いますが、千晴嬢につきましては、気に入った相手の不幸を少しでも回避する為に、近くに侍っている次第で御座います」

「らしいぞ?」

「あー、いや、なんだ。

ありがとう、とでも言っとけばいいのか?」

「色々仕出かしてしまいましたからな。

自己満足では御座いますが、せめてもの罪滅ぼしだと理解して頂ければ幸いです」

「えーと……まあ、いいか。とりあえず、ありがとうとは言っとくよ」

「どういたしまして、で御座います」

「それで、妹達はどうなんだ?」

「一般人と言える存在ではないと言う点も大きいので御座いますが、最大の行動理念、エヴァ様のお役に立ちたいという意味も、全力を以て応援する事が可能で御座います。

同じ方向を見て、同じ道を歩む事が出来る。人柄も好ましく感じられる。実体具現化している姿と言動を見る限りとても可愛らしい女性を基本としている。

その様な存在であるチャチャ様と歩む事で、我等にも幸せが見えるのではないかと考えた次第で御座います。

我等が釣り合えるのかという心配は御座いますが、それでも、我等にとって魅力的な方なので御座います」

「気持的には、千晴の方を若干贖する感じか……?」

「そこはやはり、この世界で目覚めてから初めて出会い、助けて頂いた人物で御座いますからな。

エヴァ様やチャチャ様と会う切っ掛けを用意して頂いたという事もあり、感謝という点で千晴嬢を超える人物は考えにくいので御座います」

「なるほどな。」

現状の確認だが、妹達に惚れ込み、入れ込んでいるというわけではなさそうだな？」

「それで御座いますな。現状では気になる相手、小学生の『好き』と大差無いのではないかと判断する次第で御座います。」

ですが、前世の自分を鑑みまして、自身の言動に責任を持つべき年齢だと自覚しております。であれば、一步踏み出す前の自己判断、そして状況確認は必須であろうと考えたので御座います」

「それがさっきの話であり、私への願いである。そういう事か」

「左様で御座います」

「そのレベルだと、未来は未定。永遠に寄り添う事を前提とせず、所謂結婚を前提ともせず。」

だから、お付き合いを認めてほしい、か」

(さて、どうしたものかな。あからさまにがつついてくるなら拒否しようかとも思ったが)

とりあえず、現状で大勢の意見としては。

絶対的に嫌いなタイプ、ではない。

保有する能力や任務の遂行能力を見る限り、役立たず、でもない。協力者としては、特に問題ない。

人の姿は犬上小太郎相当だと確認も取れてる。私達の基本形態を並べてみても、大きな支障は無さそうに思える。

だけど、ジュエルシードが齎した前世の情報的な意味で、態度を作ってるらしいと知った。付き合うというなら、これは望ましくない。

「……なら、その『似非執事的な言動』を何とかしたら、考えてやろう。

自覚はあるな？ 元似非関西人」

「いえいえ、前世に関しては、似非ではなく関西人で御座います。」

ですが、両親の仕事の都合で、関西を中心に引っ越しを繰り返しております。素の言葉遣いは悪い上に色々な地域の言葉使いが混じってしまい、少々コンプレックスがあるので御座います。」

それに、先ほどの話を考えますと、人物関連に“魔法先生ネギま！”に類する世界からの強い影響が疑われるので御座いますが」

「そつちからの影響は、ある意味で誤差だから構わん。そもそも、言動を変えた程度で影響が変化するわけでもないしな。

それよりも、付き合おうという相手に偽りの自分を見せ続ける気か？」

「……やっぱ、敵わへんなあ。

ワイの口調はあんまよーないけど、ほんまにええんか？」

うん、ジユエルシードの情報的に、これが素の口調と思える。

犬上小太郎よりもガラが悪い感じだけど、今までのあれよりはマシ。

「口の悪さなら、私も人の事は言えんさ。

だが、コンプレックスがあるからと言って、今までの口調はどうなんだ？」

「東京弁やら標準語やらも馴染みはあるさかい、違和感はあらへんけど、普通過ぎて地が出てまうんや。

こらあかんと色々試してみたんやけど、馴染みの薄い口調の方が、ボロが出にくいねん。人外っちゅー事は、口調が変でもそーゆーもんや思てくれそうやし」

「人の姿がアレだし、関西弁といつても地域でだいぶ違うんだ。地のままでも大して問題は無いと思うがな。

まあ、無理に地を出せとまでは言わんが、妹達には不人気だという事は覚えておけ。私からは、それだけだ」

「やっぱ、大つぴらに使うんは抵抗あるさかい……当面は、エヴァさんやチャチャさんと話す時と、小太郎の姿の時限定でええやろか？」

ネズミン時は、あのキャラ付けの方がイロモノで諦めてもらえそうやし」

「いや、それなりに拘る人しか気にしない口調より、イロモノ扱いの方が気にならないってのはどうなんだ？」

A S 編 4 7 話 力の前にある道

あれからのあらすじ。私達とチクアープが付き合う事になったらしい？

現実問題として、何が変わるのかよく解らない。今でも協力関係という形でやり取りはあるし。

とりあえずは様子見。それよりも、今からはきつとドロドロした時間。

地球の人達は帰った方が良さそうなので、順次送り届けて。残ってるのは、アースラ及び本局にいた顔触れ。

「その様子では、結論は出たようだが……」

何故そんなに並んでいる？」

その中からお姉様の正面に進み出たのは、ヴィヴィオ。

その横には提督3人とカリム・グラシアが並んでる。

「その説明の前に、1つお願いがあります。

少々無茶をしたいのですが、協力して下さいますか？」

「私に可能な範囲なら構わんが……何を思い付いたんだ？」

チクアープに気を取られ過ぎたせいで、誰も話を聞いてなかったし。

別に悪い事を考えるわけじゃないだろうと、信用したいところではあるけど。

「まずは、先ほどの願いの結論から。

ゆりかごの解析と改造をお願いします」

「改造、か。聖王として表に立つ気か？」

「はい。その上で、もう1つ協力してほしい事があります」

「この先は私が言おう。」

君達に、ある役職に就いてもらいたいのだよ」

「は？」

ギル・グレアムが話すという事は、時空管理局関連の役職のはず。

その上で、お姉様達……達？

「表舞台に立つ気は無いぞ」

それに、私達とはどういう事だ？」

「いろいろ検討したのだが、これが最も混乱を抑える事が可能だと思えるのだよ。また、『原作』を見せた意図であろう、回避すべき未来の災いにも対応出来る。そう判断したのだ。

今の最高評議会の断罪は、行うべきだ。だが、そうすれば時空管理局は大きく動揺するのは確実だろう。現在の『裏側』に属する者達をどう更生するのか。情報などの流出をどう抑えるのか。何より、何を以て時空管理局再生の象徴とするのか。問題は多くある。

そして、アルハザードの遺産である君達も、丁度3人だ。新生最高評議会として、人には不可能な視点から世界を見守ってほしいのだ」
「ちよ、ちよつと待て！」

私は兵器であり、主を持つ魔導具であり、元は人間の精神を持って
いるんだぞ!?

人には不可能な視点で見守るなどあり得ん！ それに私が欲しい
のは平穏だ、権力じゃない!!」

「それは理解しているが、最高評議会は君達に関する情報を持って
いると、ジェイル・スカリエツィも証言しているのだ。

その情報が拡散した場合、君が住む地にも犯罪者の手が伸びるのは
確実だ。そもそも、時空管理局の混乱に乗じて管理外世界を含む多く
の次元世界が荒れる、荒らされる事になるだろう。

我々だけでは、それを防ぐのは無理だと判断せざるを得ないのだ」
「だからと言って、何の実績も無い部外者の小娘がほいほいトップに
立てるものか！

そんな事をして誰も納得せんし、纏まるものも纏まらなくなるだ
けだ!!」

「君は闇の書の脅威をほぼ単独で排除し、無限書庫の有効利用の目途
を立たせ、時空管理局の闇に光を当てた功労者だろう。

まして、星1つを平和に支配する国の王と呼べる立場であり、時空
管理局と正面から戦えるような戦力すら持っているのだ。その力を
借りて時空管理局を立て直す事は、我々だけで行うよりは現実的だ」
「だから、私は表舞台に立つ気が無いと言っているだろう！

最高評議会の排除は簡単だし、アホ共を晒す材料は腐るほどあるんだ、何とかならんのか!？」

「今回我々が行うのは、ある種のクーデターなのだ。」

双方が様々な手で相手を潰そうとする以上、相応の混乱は避けられないだろう。皮肉な事に、証拠があまりにも多すぎるせいで、人的勢力でこちらが不利となりやすいという実情もある。何とか盛り返す事が出来たとしても、均衡してしまえば長期化や分裂の危険もあるだろう。

それを避けるために、アルハザードの崩壊から逃れ、表舞台から姿を消していた勢力の力を借りて、犯罪に頼る体質の是正を図る。どうかね?」

「アルハザードまで表舞台に出すなど、正気か!？」

ラインと変態も、何か言わんか!!」

「い、いや、私は、我が主に罪を背負わせないためには、人々の為に働く姿を見せるべきだと言われてしまい、その……済まない」

いつの間にか、ラインフォースが陥落してた。

管理世界を無視すれば、過去のやんちゃを清算する必要も無いけど。

そこまで気が回ってないだけか、責任感が強いのが原因か。

「まあ、嫌がる事は予想出来ていたので、ここで妥協案を提示しましょう。」

エヴァちゃんは、時空管理局を導く気が無い。そうでしょう?」

「ああ、そうだ! そんな事やってられるか!!」

「ですので、面倒を避ける方向で調整する、例えば最高評議会就任の前提として、権力の返還を含む立場の変更を条件とするのはどうでしょう。」

意思決定機関である事を止め、基本はお飾りに徹する。見守るための情報収集や監査といった部分に特化し、自分達に害がありそうな行為を摘発する権限は保持しつつ、権力構造的に最上位には立たない。これなら、ゴミの排除を少しは時空管理局に任せる事が出来るでしょう。

いかがですか？」

「……つまりあれか。私に、内部から潰す権力を持つてという事か？」
「外から潰すよりも、騒動は小さいですからね。それに、仲間と思われ
る立場にいる方が、余計な手出しをされにくいのですよ。」

アルハザードについても、今の最高評議会の関係者には多少なりと
知られているでしょう。無理に隠し続ける今の状況よりも、ある程度
公開してしまった方が健全だと思えますよ。そもそも技術に関して
は、アルハザードよりも古代ベルカの方が厄介ですからね。ゆりかご
の様にアルハザードからの流出物を取り込んだ物もある事ですし」
「……で、私達が時空管理局の、ヴィヴィオが聖王教会の象徴的な立場
に立つと仮定しよう。」

一方的に宣言していいモノじゃないが、どうやって立場を確立する
気だ？」

「まずはゆりかごを起動して、隠されてきた犯罪を一般の人達に解り
やすく見せ付けるとともに、聖王の継承者の存在を大々的に広めま
す。この際にマスメディアの協力も必要ですが……これは、エヴァ
ちゃんの技術力や人脈に期待ですね。」

同時に、3人の提督が秘密裏に内偵を進めていたという事で、最高
評議会の罪を暴露します。

もちろん管理局は動揺するでしょうが、事前にある程度根回しをし
ておく事で崩壊を防ぐ事は可能でしょう。正義感や責任感のある人
物であれば、協力してもらえらると思えますよ。」

例えば、悠久の翼は「ロストログリア対策の技術」が交渉材料として
使えます。使命感の強い組織ですが、好き好んで後ろめたい手段を使
うわけではないですし、管理局の権力よりも一般人の命が大事だと言
える上層部ですから」

「完全なショック療法じゃないか、管理局が崩壊する可能性も充分あ
るぞ。」

それに、タカミチもどきはガングロに同調していたが」

「便宜を図ってもらっていたという事もあると思いますが、エヴァ
ちゃんの力を危険視したのではないのでしょうか？ 特に敵対する様

子が無かったせい、早々に敵視を止めていますし。

それに、シヨック療法だろうが、後ろ暗い人達を何とかしない限り平穩は無いと思いますよ。ここまでやってしまったのですから」

そろそろ、お姉様は諦めるべき。

仕方なかったとはいえ、力を見せすぎた。

「……いっそ、地球付近を魔法完全禁止に書き換えてしまうか……？」

そうすれば、馬鹿共がいくら来ようとしても……」

「いえいえ、それは不老不死の隠蔽に支障が出ますし、ごく少数ですが存在する魔導師の命に係わる問題になります。

私達も魔法で維持しているのですから、何らかの問題が出るかもしれませんよ？」

「チツ……使えん能力だ」

「嫌だという事は見ていてとてもよく解るが、ある程度事態が落ち着くまででいいのだ。

我々の旗印となつてほしい。頼む、この通りだ」

ギル・グレアムが、ついに土下座し始めた。

「エヴァさん、お願いします。」

非力な私達がこの大事を成し遂げ、世界の未来へ繋げるには、力を持つ方の協力がどうしても必要なんです」

リンディ・ハラオウンまで土下座し始めた。

「私からもお願いします。」

現状では、私達はあまりに弱小。賛同する人数がどれ程になるかは、エヴァンジュさんの情報と立ち回りにかかっていると云えます。

それに、最高評議会として立場を確立出来た後なら、リンディ提督を中心とする部隊を親衛隊として常駐戦力とする事も出来るでしょう。そうすれば、犯罪者等の対策を行うと共に、時空管理局内部からの圧力を受け止めるクッションとして立ち回る事が出来ます。

これが、最も平穩に近付ける方法ではないでしょうか」

レティ・ロウランまで土下座した。言ってる事はリンディ・ハラオウンを生け贄にしているような気がしないでもないけど。

でも、敵対するよりは、穏当な結果を得られる方法ではある。

溢れるだろう犯罪者的にも、生まれるだろう時空管理局の残党又は後継組織的にも。

「……アコノとはやて、忘れているかもしれないがユーノはどうする気だ？」

私達3冊を最高評議会に据えても、それぞれが主を持つ身なんだからぞ」

「最高評議会が5人か6人になっても、特に支障は無いだろう。」

ユーノ君は立場や実績を鑑みて、やはり無限書庫の司書長が無難かもしれないがね。アルハザードの関係者と呼ぶには、少々辛いだろう」

「ふん……要するに、手に負えん危険物を纏めて祭り上げようという事か。」

ロリコン 変態、どこまでがお前の仕業だ？」

「こんな大それた事を、私には発案出来ませんよ。」

ですが、エヴァちゃんは、管理局の下につく気は無い。そうでしょう？」

「そうだな。上の連中が増長する未来しか考えられん」

「更に、管理局を導く気も無い。」

であれば、泥沼の敵対か、支配されないだけの権力を持つか。状況的に、もはやこの2択しか残っていないのですよ。

行方をくらませた場合、関係した人物が追及されるのは明らかですからね。全員連れて逃亡、というのは色々問題があるでしょう？」

「……やはり、力を見せすぎたか。」

やれやれ、最初から管理局を切り離れた方が良かったのか……？」

「悠久の翼や時空管理局の一部が闇の書の内容を知っていましたし、実際に動いていましたから、完全な切り離しは不可能だったと思いますよ。」

あり得た未来の中でも、比較的平穏が見えやすい道を歩めているのではないのでしょうか」

ロリコン 「変態に慰められてもな……」

「長男として、家族の行く末を心配しているだけですよ」



話し合いの結果、とりあえず方針を了承したお姉様達は、少々打ち合わせと、誤魔化していた疲れをとるための休憩をしてからファンタズマゴリア幻想空間を解除。面倒になったのか、お姉様は幼女モードのままにいるつもりらしい。

その後、お姉様、ヴィヴィオ、ウーノ、ジェイル・スカリエツィ、変態の5人は、早速ミッドチルダへ飛んだ。普通なら1回か2回の中継が必要な距離だけど、通信と魔法の回路が準備出来るから、お姉様なら一発。ついでに、転送も悟られないよう隠蔽も充分。

転送先は、もちろん。

「……確かに、ゆりかごですね。聖王核も反応していますから、間違いありません。

王となった私は、この王座の間、その王座に縛られました。懐かしいような、悲しいような、不思議な気持ちです」

ヴィヴィオも認める、聖王のゆりかご。

その中枢というか、少なくとも重要な施設である、王座の間。

同時に、チクアープもミッドチルダで大増員中、通信設備やらの掌握を開始してる。当面は私達からの魔力供給で大丈夫そうだし、いざとなれば駆動炉や発電所を制圧すればいいから、維持も問題ない。

「さて、情報の確認だ。

聖王はゆりかごの起動キーであり、強大な魔力や保護を受ける代わりに、生体コアとなって兵器の管制を司る義務を負わされる。

あくまでも求められるのは兵器としての役目であり、兵器としては不要な、人としては普通の事の多くが奪われていく。

「そうだな？」

「はい。かなり早い段階で、食事や睡眠も不要となります。

最終的には人の姿や声も認識出来なくなるという話でしたが、それには至らなかったので私自身が確認したわけではありません」

技術的には、魂の改変と肉体の強化の組み合わせ。

人としての粹を外れ、部品に落とし込む。

(……私達が作ったコンピュータと、考え方は同じか。

違いは、人の意識や記憶、それに体を多少なりと維持するかどうか。そんな所か)

似てなくはないけど、同じとはとても言えない技術。

死者に意識させないまま活用するのと、生者をじわじわ変化させるのは、同じと言いたくない。

方向性としては、銀十字に近いような気がする。お姉様の記憶には情報が少なかったけど。

(同じでなくとも、似たようなものだ。技術的にもな。

だからまあ、魂や体に対する改変の抑制と、兵器としての思考を強要するような機構の改造は、何とかなるか……)

「聞いた限りでは、やはり理解出来る技術の可能性が高い。

とりあえず調べてみるが、ヴィヴィオはその間どうする？ 何度か調整のための協力が必要そうだから連れてきたが、外見的に外に出るのはまずいだろうし、生活用の設備が動いていないようだから不便そうだが」

「私達が調査するための、休憩所が用意してある。最低限の設備と保存食しかないが、休む事くらいは可能だよ。

聖王陛下や家事はウーノに任せ、私がこちらを手伝いたいのだがね」

「そうですね、すぐに手を貸してもらえば必要は無いようですし、エヴァちゃんとしても、私達がヴィヴィオの傍にいるのは好ましくありませんか？

その点、ウーノならば休憩所とやらの状況や使い方も把握しているでしょうし、何より、エヴァちゃんに従う女性です。安心出来るのではないでしょうか」

「自分達が危険人物だと把握しているなら、何とか直せこの阿呆共。それ以前に、お前達では生活能力に問題しかないだろうが。

だがまあ、お前達の知識やらは、改修には役立つはずだからな。時間が無い以上、扱き使うぞ」

「望むところだよ。こんな技術の塊をどう料理するのか、楽しみだ」
「そうですね。エヴァちゃんやチャチャちゃんの本気を感じられそうですし、私としても楽しみですよ」
「趣味に走るな、とつととやるぞ阿呆共！」

A S編48話 暴かれる姿

そんなこんなで、数日が経過。

協力者達つかいまの好意でヴィヴィオとウーノがクラナガンの観光を兼ねて食事に行ったり、お土産に色々な食べ物を持ち帰ってきたり、入浴や睡眠の際は別荘に戻ったり、不眠不休のお姉様と変態ロリコンに付き合おうとしたジェイル・スカリエツティがウーノに叱られたり、結果的に休憩施設がジェイル・スカリエツティの仮眠所と化したりと色々あったけど。

お姉様によるゆりかごの改造と起動準備、私達とチクアーブによるマスメディアや通信関連や情報配信関連の施設掌握、味方にしたら後が楽そうな一部人物達の説得といった重要案件にそれなりの目処が付き、ドゥーエとトーレの眷属化も完了した頃。

アースラとヴィクタムが本局近くに到達した。

もちろん、ヴィクタムの艦長達も説得済み。正義感や使命感はそれなりにあったし、違法行為の証拠資料の山に腰を抜かしたのも大きい。

人選の時点で細工をしてあった事は、お姉様が知る必要は無い。

「さて、あとは合図を待つばかりなんだが……」

「おや。何か不満かね？」

「不満というか、アレとは敵対すると思っていたんだがな」

ゆりかごの玉座の間で最終確認を終え、ギル・グレアムからの書類を見てたお姉様が、どうしてこうなったと言わんばかりに呟いてる。

その原因は、協力者の欄に名前があるアレこと、レジアス・ゲイズ。

「アレはアレで、平和を求めるといふ点では純粹だ。

放漫な矛盾を抱え、施行されている法から見れば問題のある手法を使っていたがね」

「それでも、小を切り捨て、大を生かす選択を迫られるのが為政者です。可能な限り法に則した手法を使うべきですし、小をより小さくする努力や、切り捨てられた部分へのケアやフォロワーも必要ですが。

法と上位の権力を押さえられていた事を考慮した上で、治安に対す

る実績を見る限りでは、無能な人物ではないようですよ」

「ヴィヴィオ、悪くない評価でいいのか？」

「体制に擦り寄る人物と、体制の意図に添わなくとも信じる道を行く人物は、どんな組織にもいるものです。」

体制に問題があり、信じた道が正しく、組織の外から評価する場合は、後者の方が良い人物と言えますよ」

ジェイル・スカリエツィとヴィヴィオに評価されてるレジアス・ゲイズだけど、その実態は、最高評議会関係を除けば意外なほど真つ当。

現場に関わってた頃は、ヒュードラ事故でガタガタになった信用や組織をそれなりに機能させてたとか。

昇進してからは財界からの支援を取り付け、資金面からも人員の確保と維持を支えてたとか。

その為の経費は殆ど私財で、私腹を肥やす意図が欠片も見えないとか。

治安の向上に対する貢献と熱意は、間違いなく高い。

最高評議会のせいで方向性がおかしくなってたけど、犯罪行為につき込む金とその対策で余計に必要なってる経費や手間が減れば財政や人員の問題が軽減する上に犯罪発生率自体も下がる、と懇切丁寧に説明したら、理解してもらえた。

説明する際に色々説明済みのゼスト・グランガイツを立ち合わせたりしたけど。

ゼスト・グランガイツを説得する為に、戦闘機人の娘を持つクイント・ナカジマを先に説得したけど。

戦闘機人に関する説明をするために、マリエル・アテンザを連れ出したりもしたけど。

人脈があるって素晴らしい。

『エヴァさん、そろそろだけけど、準備はいいかしら？』

「リンディか。もうすぐ行動開始だな？」

『あと10分程かしらね。最終確認だけけど、準備は問題ない？』

席を外していましたとか、そういう理由で初動が遅れるのは問題だ

もの』

「予定時間通りだし、その辺は問題ない。

飛行ルートは変態ロリコンが誘導するとか聞いていないが……この阿呆、方法を聞いても見れば解るとしか言わん」

「とても解りやすい方法ですよ。目立つものを追うだけの、簡単なお仕事です」

『相変わらず、奇行に走っているのかしらね。』

程々にしないと、本当に殲滅されてしまうわよ』

「そうならない程度の自重はしていますよ」

「とてもそうは見えん」

そんな話をしながら、大事を仕出かす直前とは思えないくらいまつたりとした時間が、約10分経過。

予定時間になり、ギル・グレアムが時空管理局本局に対して宣言を開始。同時に、ヴィヴィオが鍵となりゆりかごに接続、起動開始。

「ヴィヴィオ、調子はどうだ？」

「前回と違い、自分が変わる感じはそれほどありません。それでいて全体の状況は把握出来ますから、改造に問題は無いようです。

この場所に縛られる感じはありますが、全く離れることが出来ないという状態でもないようです」

「やはり、この場を離れるにはもう少し改造が必要か。しばらくは不自由になるだろうし、完全に離れられるように出来るか判らんが、その辺は勘弁してくれ。

動力系に問題は無さそうだな。浮上制御、いけるな？」

「はい、大丈夫です」

「よし、行こうか。」

さてと変態ロリコン。そろそろ誘導をどうやってやるか、説明したらどうだ？」

「そうですね。では、少し浮上したら、船首の少し前に私の防衛プログラムを出しますから、その後を付いて行ってください。

それなりに大きいですし、ゆっくり移動しますから大丈夫ですよ」
そして少々浮かび上がったところで姿を見せたのは。

「ドラゴン……いや、手が無いからワイバーンの類になるのか？」

「というか……」

「どう見ても『魔法先生ネギま!』の、図書館島にいたアレ。」

確かに強そうで、それなりに大きい、アルビレオ・イマと関係のある戦力だけど。

「竜という表現でいいはずですよ。フリードも手がありませんし、問題は無いでしょう。」

ちなみに、名前はドラコちゃんです。女の子ですよ」

ぎやお、つて感じで一声吠えして、ゆっくり移動を始めるドラコ。ヴィヴィオが操るゆりかごも続いて移動を開始。

「いいのか？ そんな安直な名前で」

「私は気に入っているのですが。」

それより、一般の情報操作は順調ですか？」

時空管理局から公式情報を配信する施設を乗っ取って、順次公開中。

最高評議会の悪行を赤裸々に公開、それに戦いを挑むギル・グレアム一派という構図で世論を味方に付ける方向。放送でもテロップや臨時ニュースという形で情報を流してる。

地上やらの生活に密着した部隊は平常通りの任務に加えて混乱の鎮静化を行う必要があるけど、レジアス・ゲイズ自ら表に立って、上層部の放漫が招いた腐敗の結果であり、地上の平和を守る役目に変わりはない。今こそ市民を守る地上部隊の真価が試される時だ!」
とか鼓舞してる。ギル・グレアムの宣告と同時に行動を開始してるから、現場の混乱は当初の予想より小さくて済みそうかも。

一般人の反応は今の所小さいけど、まだ気付いてない人も多い。ゆりかごが肉眼で確認出来るようになる頃には、騒ぎが大きくなるはず。

レポーターやらを黒の騎士団の時の協力者達で固められるよう仕組んでるから、放送自体は変に煽ったりしない内容でいける予定。

「まあ、今のところは問題無いか。」

クラナガンから見えるまで、どれくらいの時間をかけるんだ?」

「1時間ほどですね。都市部上空や人里をなるべく避けるルートを飛行しますよ。」

その頃に聖王としての方針を放送する事になります。エヴァちゃんも顔くらいは見せてほしいと言われていましたが、どうします?」「私が好き好んで表に出ると思うか? まあ、ヴィヴィオが挨拶する横にいる程度はするが。」

ヴィヴィオも、曲がりなりにも王と呼ばれる立場だったんだ。声明程度で怯む事も無いだろうから、手を出す必要は無いだろう?」

「いえ、私は聖王と呼ばれていましたが、実質的には兵器でしたから。確かに王家の者として上に立つ事を教えられていますし、指揮官として動いた事もあります。王として人を導いた事はありませんよ」「ゆりかごの鍵としてしか扱われなかったのか。」

それでも、有象無象よりは上に立つことを知っているはずだが。制圧した街の住民に呼びかける様な感じが近いと思うが、その辺はどうなんだ?」

「状況は確かに似ていますね。情報戦というものには慣れていませんが、人的被害を抑える為には有効だと思えます。行為としても少々強弁な部分がありますが、正当性もあります。」

大丈夫です」

というわけで、ゆりかごはドラコに先導されてゆつくりと移動している。

時空管理局の情報配信設備が猛烈な勢いで稼働中。通常の公式情報を得る方法で最高評議会の真実やギル・グレアムの指針等が見れるわけで、騒動も散発的で暴動には至ってない。

現時点では悪事の公開を最高評議会とその周辺に限り、地上や次元航行部隊については批判対象としてない、むしろ今まで苦勞させられてきたという情報を付けてるのも大きい模様。騒動が起きてても怒りは上層部に対してで、鎮圧に出た陸士部隊には同情的で協力的だったりしてる。

むしろ、違法行為の実行部隊を殲滅するために動き出したゼスト・グランガイツの部隊の方が、大騒ぎの原因になりそうな予感。

「随分と都合よく話が進んでいるな。

まさか、これも変態の仕込みとか言わんだらうな？」

「いえいえ、私の手はそこまで広くないですよ。」

少人数を口先で丸め込むならともかく、多数の一般市民を相手に何か出来る力はありません。放送やらも私の管轄ではないので無理ですし」

……言えない。使い魔を量産して、小さな騒動で発散させてるなんて。

初期のガス抜きと今後の世論誘導を目的に、かなり多く確保したなんて。

実は先月から各所の説得を開始して、ユーノ・スクライアが紅葉狩り不参加だったのは、その為の資料集めで疲れ果てたからだだったなんて。私達以外が見付けた情報も確認したが、提督達の責任だけだ。

闇の書の対策がどうなるにしても、早い段階からお姉様を最高評議会に祭り上げる方向で調整が進んでたなんて。

ばれたら、絶対に怒られる。

「私が知らんところで散々仕込んでいたんだ、今更何かされても驚かん。

さてと、そろそろクラナガンが見えてくる頃か。放送関係の状況は？」

ほとんどの放送局が緊急放送に切り替わってる。

時空管理局に巢食う悪の親玉、それと戦う正義の勇者、という方向性。基本的に内部浄化のための動きだと認識されるような説明は、一応予定通り。

ぶつちやければ、一般人から見たら、ギル・グレアムが時空管理局の駄目な部分を正そうとしている。大スキャンダルだけど、普段の生活に大きな影響は無い」という感じの認識になるよう頑張ってる。

ヴィヴィオの生放送の受け入れ準備も完了済み。そろそろ頃合い。

「それなら、ご挨拶と行くか。」

生放送だが、気負わずにやればいいからな」

「はっ」

というわけで、ナレーターやニュースキャスターによる簡単な説明が終わるのを待って。

生放送開始。

『初めまして。私はヴィヴィオ・ルアソープといます。』

皆さんは、最後の聖王と呼ばれるオリヴィエ・ゼーゲブレヒトという人物に聞き覚えがある人も多いかと思いますが、私は、その人物の記憶と力を継承している者です。

記憶について今すぐ証明する事は難しいのですが、力については、聖王のゆりかごと呼ばれているこの船を起動させている事が証明となるでしょう。

ゆりかごは、今でいう古代ベルカの負の遺産、多くの命を奪ってきた兵器です。

時空管理局、最高評議会がどの様な目的でこれをミッドチルダに隠し持っていたのか、想像する事しか出来ませんが、少なくとも人道的な使い道が無い力である事は確かです。

私は聖王の記憶と力を持つ者として、不要となった、不要であるべき力を、決して手が届かないよう処理する事を決めました。

姿を見せているのは、記録に残る「ゆりかご」が、誰に、どの様な扱いをされようとしていたかを示す為。そして、過剰な力を求める者への警告です。

扱い切れない力は、容易に自身を傷付けます。

公に出来ない力は、隠す為に大きな労力が必要です。

平和を願う者の1人として、不要な力には代償がある事を忘れないでほしいと願います』

ここで場面転換。

映し出されるは、カプセルに浮かぶ脳味噌3つと、1人の女性。

多くの次元世界にも、生放送でお届け。

但し、それは3人^{の1みぞ}には気付かせない。生々しく語ってもらうために。

『最高評議会の皆様へ、報告があります。』

時空管理局が行ってきた「公に出来ない事業」に関する情報が、公開されています。

首謀者はギル・グレアム提督。時空管理局の理念や法に反する者を断罪する為、だそうです』

口火を切ったのは、ドゥーエ。スーツ着用で偽装状態の姿。

従属属性の眷属化も完了してるから、予定通りの行動を行ってくれるはず。

『馬鹿な。これだから、大きな魔力だけで成り上がった者は信用ならんのだ』

『我々の計画を邪魔させるわけにはいかん。何としても止めなければ』

『現在公開されている情報は、人造魔導師計画、戦闘機人計画、それらに関する違法研究への支援が中心となっています』

『レジアスは何をやっている。』

何のために地上のトップにいると思ってるのだ』

『レジアス・ゲイズ中將は自らの関与を認め、本来あつてはならない罪と認めています。』

その上で、いずれ来る裁きの時までには、全てをかけて地上の平和を守る、と』

『ジェイルはどうしたのだ。レジアスの後ろ盾を失うのだ、あやつとて無傷では済まんだらうに』

『皆様に作られ、レジアス・ゲイズ中將の保護を受けて研究を行っていた事を公表しています。』

ギル・グレアム提督へ、多くの情報を提供したようですね』

『何という事だ。』

『これでは、我々の計画が水の泡ではないか』

『だが、この場所はあやつらも知らん。』

最高意思決定機関たる力、使うだけの時間はある』

『こちらへは、ゼスト・グランガイツ率いる部隊が向っています。』

場所は、私が知らせました』

『まさか、お前までも私達を裏切ると言うのか』

『いいえ、裏切りなどとてもない。』

私達は最初から最高評議会に忠誠など誓っていないかった。それだけですよ』

そして、偽装モードだったドゥーエが、偽装解除。

といっても、服装はそのまま。クアットロ曰く黒歴史のぴっちりスーツになる事を避けて、無難な服装を選んだらしい。

『貴様、ジェイルの……!?!』

『貴方達最高評議会が見付け出し、生み出し育てた、異能の天才児。』

失われた世界の知恵と、限りなき欲望をその身に秘めた、アルハザードの遺児。

開発コードネーム、Unlimited Desire。

彼を生みだし、力を与えてしまった時点で、自身を傷付ける刃となる未来が決まっていたんですよ。

扱い切れるはずのない力は、必ず破滅を呼ぶものです』

『馬鹿なっ!? 我々は、平和の為に力を尽くしてきたのだぞ!!』

『それが傲慢なのだよ、最高評議会の諸君』

ここで、ジェイル・スカリエッティが通信で参戦。

というか、口撃開始。この映像と声も、生放送でお届け。

『何をやっているジェイル!』

『私を生みだし、人を材料に人造魔導師や戦闘機人を作る。』

人手不足に悩む時空管理局には、確かに魅力的な技術だろう。だが、全てを自分達が管理しようとする態度が、それを求める声を作り出してまで立場を維持しようとする姿勢が、犯罪者を生み出してまでそれを追い求める手法が、人手不足の原因だと何故気付かないのだ。

拳が生み出したのは、私の様な犯罪者であり、多くの違法研究所であり、数え切れない犠牲者達であり、それらを検挙し救おうとする局員達の過剰な負担だ。

人々を救うために人々を犠牲にしても良いという矛盾は、そろそろ解消すべきではないかね?』

『世界はまだまだ未熟なのだ、真の平和を目指す為には必要な犠牲もある』

『どの様な犠牲が必要なのか、判断すべき立場にいても思っているのかね？』

流石は、世界を見守るといふ目的で用意した立場にも拘らず、最高意思決定機関という権力を手放さなかつた亡者達だ。

それだから傲慢だと言っているのだよ。それに比べ、我々の協力者の何と慎ましい事か』

『そんな事を言っている場合ではない！』

早く何とかしろジエイル！』

『おや、最高評議会ともあろう方々が、犯罪者である私に命令かね。』

どう思うエヴァンジュ』

『悪行が暴露されて慌てているのかもしれないが、告発した人物に何とかしろとか、何を寝惚けているのだと聞きたいところだ。』

正直に言えば、正常な判断力を失っているとしか思えん』

『なるほど、そのような表現も実に面白い。だが、何故この様な状態でも最高意思決定機関に居られるのか、我々が理解するのは難しそうだ。』

さて、もうそろそろかね？』

『そうだな』

脳味噌がごちゃごちゃ言ってるのを無視して会話する、お姉様とジエイル・スカリエツィ。

2人が待っているのは。

『全員、動くな！……む？』

部屋に入ってきて声を上げた直後、何だこれと言いたげな雰囲気になったゼスト・グランガイツ。横には、クイント・ナカジマとメガーヌ・アルピーノの姿もある。

『ようこそ、地上の英雄よ。』

ここにいて動く事が出来るのは私だけ。さあ、早く捕まえて下さい』

ドゥーエは両手をあげ、無抵抗の姿勢。

ここは抵抗すると、状況が悪くなる。

『あ、ああ……ここは、最高評議会の部屋だと聞いていたのだが……』

『その3つの脳が、最高評議会ですよ。』

この姿では逃げも隠れも出来ませんから、ゆっくり料理して下さい』

『そう、なのか……君は?』

『私は、ジェイル・スカリエツティに作られた戦闘機人。』

最高評議会の動きを探る為にメンテナンススタッフとしてここに来ていましたが、それも終わりです』

『そうか。だが、君も犯罪者として知られる人物の関係者であり、重要な参考人でもある。』

大人しく付いてきてもらえるか?』

『ええ、もちろん。』

ドクターから捜査に協力するよう指示されていますし、抵抗する意味も理由もありませんから』

最高評議会逮捕というか、捕縛と言うか、捕捉のシーンの開始だけど、今のうちにゆりかごからの接続を終了。』

お姉様はヴィヴィオの挨拶中と、ジェイル・スカリエツティが口撃してた時にちょっとだけ映った程度。幼女モードだから外見についての偽装は無しだけど、地球と違って大人の姿じゃなくても不自由は無いだろうという理由。外見を大人に固定出来るわけじゃないし。』

「さて、あっちの劇が終わったら、次はゆりかごの転送だな。」

タイミングは指示するから、周囲を巻き込まない程度に急いで速度と高度を上げてくれ。通達はするが、報道のへりからかなり距離を取っておかないと、余波で墜落させかねん」

「解りました」

A S 編 49 話 道理を掲げて通る無理

別荘の衛星軌道上にゆりかごを持ってきたお姉様。

真っ先に取り掛かるのは、ヴィヴィオを王座の間からある程度自由に離れられるようにするための追加改造。

変態ロリコンとジェイル・スカリエツィイは、別荘を見に行ってしまったから、ヴィヴィオ以外に残ってるのはお姉様と私達、それにウーノになる。

「ゆりかごが起動したので生活用の設備も最低限は何とか動かせそうですね、別荘との通信も繋がっています。必要なものは転送で送ってもらおう事も出来ますから、それほど急がれなくても不自由はありませんよ?」

「だからと言って、後回しにも出来んだろう。当分は私の出番も無いはずだし、お前が日本で活動する事もそれなりには必要だ。

それに、この後でやりたい事もある。先にやってしまわんと、ずると先延ばしになるぞ」

というわけで、ゆりかごの管制システムや保護システムの、より詳細な調査と改変を開始。

仕組みのお姉様と主に似た基盤を使ってるのは確認出来てるし、お姉様と主は通信が断絶するほど離れない限り大丈夫だから、書の構造を参考にすれば改変はそう難しくはないはず。

この部屋の中限定という仕様に依存した構造が多そうで、既に変更が必要な箇所がいっぱい見付かってるけど。

調整も色々する必要があるので、順調にいつても1週間はかかりそう。

併せて、生活環境をきちんと整える必要もある。不調な設備やらは、何らかの方法で補う必要があるし。

物理的な作業もあるから、私達も何人か実体具現化してお手伝い。

「そうですね、有り難うございます。

ですが、時空管理局や聖王教会は大丈夫でしょうか?

かなり大きな騒ぎとなっているはずですが」

「今のところは順調の様だぞ？」

公開している情報も裏を取りやすいものを選んでいられるらしいし、正義感や使命感の強い者を中心に、どんどん味方に付きたいとやってきていると聞いている。最高評議会の醜態も公開したし、ここでアレの味方をすれば世間体が悪いという空気を作れたようだからな。

特に聖王教会は、今回の動きを全面的に支持すると発表している。ついでに、管理局の地上部隊と協力して市民の安全を確保すると宣言して行動も開始したそうだ。

うまくいけば、管理局と聖王教会の仲もマシになるかもしれんぞ？」

「そこまで上手くいくでしょうか？」

レジアス・ゲイズは、聖王教会に隔意があると聞いていますが「騎士団という独自の戦力が、邪魔で羨ましかったんじゃないか？。」

自身の悪事を探られると困る。人手不足なのにそんなに魔導師を抱え込むな。そんな感じだろうと思うが。

やましい部分は切り離れたんだ。後は自分が全てをコントロールしたいなどという気持ちはどうにか出来れば、協力は可能だろう」

「従来の関係は影響を残しますから、簡単にはいかないと思いますよ。」

それに、私達についての公式な発表は、どうなっていますか？」「お前については、カリムが聖王教会に上手く話を通してくれたようだ。」

記憶と力は本物、聖王の再来と呼ぶに相応しい人物ではあるが、聖王本人では無いため、信仰の対象ではなく1人の人物として良好な関係を築いていきたい、と公式の場で言わせることに成功している。

具体的には相談役辺り、精々が権力を持たない象徴的な扱いままで、権力構造の頂点に据える考えは無いという事だな。この方針だったおかげで、権力亡者達の説得も楽だったと言っていたが」

むしろ、体のいい看板を手に入れられると賛成が多かったらしい。威信が落ちる時空管理局との対比で、自分達がより有利に立てるという計算もあったらしい。

権力を持たないと言っても、影響力は拔群だから無碍に出来ないけ

ど。それ以上の利点があると判断する人が多かった模様。

「そうですか、それは良かったです。」

エヴァアさん達の扱いはどうなっていますか？」

「現状では、闇の書の悲劇を終わらせた功労者で、今回の件の協力者でもある、という扱いが中心らしいな。」

大雑把に言えば、闇の書に関する調査中に見付かった様々な資料や、対策中の時空管理局の暗躍が、この騒動の切っ掛けになったという筋書きで、その中心的な人物という扱いらしい。リインフォースや^{ロリコン}変態も含め、かなり真実に近い説明になっているぞ。

それと、無限書庫を復活させ、多くの情報を引き出した人物としても紹介されている。これはユーノと^{ロリコン}変態もだが」

公開している。これまでのあらすじ”は、複数ある。

一番サイズが大きいのは、”とある管理外世界での出来事編”。要するにジユエルシード事件と闇の書事件について。

ジユエルシード事件については、以前提出した報告書から抜粋。世界の番号や一部の個人名を隠したり、詳細な説明を省いたりしてる程度。経緯には手を加えず、アースラが地球に行った理由であり、関係者が出会う切っ掛けだったというプロローグ扱い。

闇の書についてが重要で、情報も多い。

既に一部の管理局員が闇の書の存在を掴んでいたものの、60億を超える人が住む管理外世界や多くの魔導師を犠牲にする対策案が有力だった事。カミテイー・クカヴァタ……悠久の翼の幹部が、実働部隊の一員として最高評議会の承認を得て動いていた事を、本人のコメント付きで暴露してる。

その上で、事後評価で失敗しただろうと判断出来る対策案を止めさせ、実際の対処に成功したのはお姉様とプレシア・テスタロッツサの功績だと大々的に称えてる。そして、それに協力したのは11年前の闇の書事件の関係者、夫を亡くしたりリンディ・ハラオウンと、アルカンシエルを撃ったギル・グレアムという事も記し、過去の悲しみを乗り越え、闇の書の悲劇を止める事に成功したと物語風に持ち上げてる。

過去の状況を調べるためにユーノ・スクライアを中心とするチーム

で無限書庫の調査を行い、その正常化への道筋も作った事も記載。ここには、お姉様と変態ロリコンの名と、時空管理局の裏側について様々な資料が得られた事も記してある。

対ナハトヴァール戦についても少々触れてあり、そこではお姉様の戦力を高く評価し、自分を犠牲にしようとするリインフォースを悲劇のヒロイン風に仕立ててある。リインフォースの過去や状況については、詳しくは夜天の書編を参照という事になってるけど、狂った防衛プログラムと狂わされた基礎構造に翻弄されてきた被害者という扱いはなってる。

ついでに、対策案だった凍結封印は、お姉様が使い拘束に失敗した広域氷結魔法程度の威力であり、この手法では確実に破滅的な結果になったとダメ押しもしてる。対ナハトヴァール戦のダイジェストまで公開してるのはいかがかと思うけど。

夜天の書編、別名闇の書編は、ヤバい情報が満載。

アルハザード産の、魔法の情報を集めるための資料本だったと最初に明記。

過去の主により道具として扱われてきた事。幾人もの主による改編により記憶や制御力を失い、破壊を振りまくようになった事。それにより闇の書と呼ばれるようになった事。過去に最高評議会を中心とするチームも改変を行い、これが暴走を決定的にした事も記載。

現在の主である八神はやてについても触れ、本来であればあと数か月の命だった事、それでも守護騎士を家族として扱い、勝手な行動を禁止して時空管理局と協力していた事等を説明。

併せて、守護騎士が黒の騎士団として、犯罪者対策に駆け回っていたことも公開された。

リインフォースや八神はやて、守護騎士達の写真も付けてある。団欒風景だけじゃなく、ナハトヴァールが暴走した時のうわあああつてなってるのとかも含めて、被害者側である事をアピールしてる。

宵天の書編は、凄く簡潔。

魔法の情報を集める夜天の書に対して、文化の情報を集めるために作られた、夜天の弟であると明記。

これまで改変を受けることなく情報を集めていただけの存在であり、壊れていく夜天を治療する糸口となる情報は集めていたが、夜天の居場所を把握出来ず、また、治療に必要な環境を揃える事が出来なかったとしてある。

無限書庫の復活に関わった事と、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの記憶と力を持つヴィヴィオを養女として保護していた事を、功績として紹介してある。

だけど、ユーノ・スクライアに関しては記載なし。主としては公表しない方向。

曙天の書編、要するにお姉様編は、情報が多め。

夜天と宵天が集めた情報を管理するために作られた、夜天と宵天の妹であると明記。御伽噺のアルハザードの元になったと言っても過言ではない、強大な軍事国家だった現実のアルハザードで最終兵器と呼ばれる程の力を持っている事や、最後までアルハザードに留まっていたためその終焉を知るが、2500年間も眠り続けていた事も紹介してある。

今年の春にジュエルシードの影響を受けた主を得て、目覚める事に成功。ジュエルシード事件の解決に協力し、その後夜天の書が闇の書と成り果てている事を知って、治療の為の行動を開始。主やその友人達の全面的な協力を得て調査を進めるうち、時空管理局の協力も得るが、同時に裏側の干渉や襲撃があつた事も記載。襲撃について謝罪した局員のコメント付きで。

無限書庫については、闇の書の過去を調査するチームに参加。情報統括能力や調査能力を駆使して、無限書庫を正常化する道を作り上げた中心人物としてあるし、その後の「時空管理局の悪行に関する資料」の裏付け調査に、お姉様やその部下達も協力したという実績もアピールしてある。

対ナハトヴァール戦に限らず、普段の言動も含めた人格面も説明。やっぱり過保護という点は外してないけど、身内には優しく、敵対者には厳しいという面を強調してた。

それと、通常では行き来が出来ない場所に独自の国を保有し、目覚

めた後に指導者として復位している事にも触れ、規模は小さいものの独自の技術や戦力等を保有している事も紹介してる。

ちなみに、公開している姿は全て通常、つまり幼女か書のもの。日本で使ってる大人の姿を公開してないのは、仮に日本を調査してもすぐには情報を悟られないようにするため、らしい。

アルハザードの遺児編は、要するにプレシア・テストロッサとジェイル・スカリエツィについて。

アルハザード人のクローンであるプレシア・テストロッサ、その卵子を無断使用して造られたジェイル・スカリエツィ、本人達にも知らせないままそれらを主導していた最高評議会、という関係がばっちり明記されてる。

ジェイル・スカリエツィが人造魔導師や戦闘機人の研究を最高評議会の指示で研究していた事は、レジアス・ゲイズ中将が実際に指示や支援を行った当事者として認めるコメントをしてる。

プレシア・テストロッサ凋落の切っ掛けであるヒュードラの事故も時空管理局の指示だったという事を証拠付きで記載。ディラン・ヒューイト一佐が当事者として、信じられない指示を受けて当時勤務していたアレクトロ社を飛び出した事等をコメントしてる。

その後、プレシア・テストロッサはロストログアと思われる何かによる娘の蘇生で正気を取り戻し、ジェイル・スカリエツィと共に埋め込まれていた魔導具の除去で正常な思考も回復。現在はギル・グレアムの重要な協力者となっていると締められている。

登場人物の地位と関係性的な意味で、最大級の爆弾。

全体的に見て、秘密や歪曲表現はあるけど新しい嘘は少ない。ジュエルシード事件も時空管理局内の資料との整合性を保ってるから、調査しても齟齬は無い。

という事を、実体具現化してる中の1人が、作業しながらヴィヴィオに説明。

長かった。

「暴露しすぎじゃないのか、とは思うがな。

特にレジアスは、自爆したいようにしか見えん。基本的に改心や更

生するなら追及しないつもりだったし、ここまでやる必要は無かったと思うが」

「罪悪感があったという事でしょうか。」

若しくは、事情を知る者に暴露される前に自分から公開する事で、ダメージを抑える事を狙っているのかもかもしれません。今であれば、ギル・グレアムの協力者という強力な盾がありますから」

「確かにそうだが……これが連中にとって、どう影響するかは他人事ではないか。」

ただ、正直に言つて、私は遠くに逃げたい」

「駄目ですよ、これほど世間を騒がせたのですから」

「ナハトヴァールが原作相当で、先にはやてを切り離せていれば、ここまでの騒ぎにせず済んだのにな。クロノとプレシアと武装局員でそれなりに大丈夫、控えにしていたセツナ、フェイト、カイゼにリーゼ達まで参戦すれば充分な筈だったんだ。」

クーデターに関しては私も知らんところでどんどん進んでいるし。クロノじゃないが、本当に世界はこんな筈じゃない事ばかりだ」

「現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だそうですね。」

無関係な人間を巻き込む権利は無いそうですね」

「私が積極的に巻き込んだのは、死ぬはずだったプレシア、ジュエルシード関連で転生者と無印までの原作連中、元々はやてに関係していたグレアム、リンデイの友人繋がりレティ、ベルカ繋がりのカリム達くらいまでだぞ。」

名前も知らんような局員と転生者以外は、原作や修正力的な意味で、無関係ではいられない人物だけだ」

「そういえば、見せて頂いた『原作』にいない人物は、転生者の方達とシルフィさんだけですね。」

ですが、シルフィさんも積極的に巻き込んだのではないのですか？」

「カリムが日本に来る時に、技術者として連れてきたのがシルフィだっただけだ。」

それに、少なくとも最初の内は、技術交流の範疇でしか対応する気が無かったんだ。あいつの押しの強さと、研究者として話が合う相性の良さやらが、今の状態になった原因だ」

「確かに立場を無視するような言動は多いようですが、場の雰囲気が悪くなるやり方ではありませんし。人を茶化しながら使う事は上手そうな方ですから。」

どちらかと言えば、積極的に巻き込まれに来た、といった感じでしょうか？」

「私から見れば、そうなる。本人に自覚は無かっただろうがな。」

まあ、私達が最高評議会になるにしても、色々条件を突き付けてやったし。否決するならよし、押し付けられても基本的に何もする気は無いから、何とかなると思うが」

条件というか、公約というか。

まず、なるべく多くの人を有権者とする、信任投票または選挙を行う事。上層部だけで決めるなど言う為に必要だった条件。

次に、就任直後に、今の最高評議会が持つ権限の多くを返還する事を公約。最高意思決定機関である事を放棄し、新しくなる時空管理局を見守り過ちを正すための監査機能に特化、他は精々助言やらを行う程度とする。

同時に、解任手段の明文化を要求。手荒な手段を使わなくても行使出来る、自分達で組織を正す手段を用意させる。

「意図としては、なりたくない、何もしない、大手を振って辞めたい。」

そんな感じですか？」

「そうだな。一応だが了承した以上は明確な拒否もどうかと思うし、この辺が落としどころとして妥当なところだと思ったんだが」

今の制度だと、はつきりしているのは最高評議会関連の位置付けのみ。最高意思決定機関であるからこそ、その決定を覆すのは簡単じゃない。

その権限を、投票で選ばれた新任自身が崩す。ギル・グレアム達は〴〵空席となってしまう最高意思決定機関を埋めるための方法を提示し、大勢の賛同を得て実行する〴〵という形で、制度破壊という実態が

悪しき前例となるのを防ぐ。これが、お姉様に説明された内容。

「ですが、現在の最高評議会が抱える問題の多くを解決するという意味では、理想的とも言える内容ではないでしょうか？」

公開されている実績も、闇の書の悲劇を終わらせ、無限書庫の本格的な稼働に目途をつけ、事実確認に力をふるったと多岐に渡っています。これまでの時空管理局が出来なかった事を、短期間で成し遂げたと云ってもいいでしょう。

国を統べる指導者だと広められていますし、時空管理局の上に立つのではなく、アドバイザー的な位置に留まろうとしているように見えます。

しかも、アルハザードの最終兵器と呼ばれた力の一部を対ナハトヴァール戦のダイジェストで公開し、身内には過保護でも敵には厳しい事を伝え、時空管理局の一部が敵対行動を取っていた事も明かしています。

事実上、おとぎ話に登場するような巨大な力と敵対するか、身内に取り込むかの選択を迫っていると云えます。敵対を避けるために、歓迎ムードを作られる可能性が高いように思いますが」

「……言うな。私も、情報を広められてから気付いたんだ」



そんなこんなで、2週間。

八神家は、お姉様とヴィヴィオが不在気味だった点以外は相変わらず。仕事等は私達が姿を変えて代行してたけど、既にヴィヴィオはそれなりの時間を日本で過ごしても大丈夫になってるし、リインフォースと八神はやては細かい調整や修正を行いながら、基本的に普通の生活を送ってる。

普通と違うのは、リインフォースや守護騎士が、犯罪者対策に時々呼ばれる事。八神シグナムと八神シャマルは元々のデバイスを使ってるけど、八神ウィータはお姉様製のデバイスを使う事がある。大人モードが気に入ったらしい。

……蒐集に動いてた頃と大差ないから、ある意味では普段通りと言えるかもしれない。ギル・グレアムの依頼で、派手に動いてる点だけが変わってる。

お姉様は現在、研究室で作業してる事が多い。

もちろん、八神家の家族と過ごす時間は大切にしてるし、関係者達との関係も続いてる。

ジェイル・スカリエツティは、本局でギル・グレアムに協力中。ウーノ達眷属化した戦闘機人も補佐として送ってるし、チンクや連れ去られた転生者達は現在管理局の保護施設に入ってる。もちろん裏側じゃなくて、真つ当な方。

現在は一般常識を勉強中。戦闘機人関係者という事で、クイント・ナカジマがアドバイザーとして呼ばれたりもしてる。

アースラの拠点は現在、アースラ関係者や聖王教会組が本局やミッドチルダに戻ってる関係で、実質的にテストタロツサ家になってる。

プレシア・テストタロツサは「元犯罪者が必要以上に表舞台に立つべきではないわ」と言つて日本に戻り、相変わらず娘達に甘い生活してる。情報操作をしてる報道を除外しても同情的な意見が優勢だから、表に出ても問題にはならなそうだけど、その気は無いらしい。

日本の環境や料理にもだいぶ慣れてるし、生活に支障は無さそう。高町家は、ほんのちよつとだけ変わった。

高町なのは曰く、夫婦や兄妹でやたら甘い雰囲気を出す事が、気持ち減つたらしい。それでも十分に甘いあたりは、相変わらずと言つていいそうだけど。

月村家やバニングス家、それに転生者達も、目に見えて変わったところは無い。今まで通り。

「……で、私達の最高評議会就任をどうやって確定したつて？」

そしてお姉様は現在、本局に停泊中のアースラにいる。

ギル・グレアムが話をしたいという事で、会いたいと連絡があった。「本局の将官全員と、各管理世界の代表者による信任投票だよ。君達3人のみと、その主を含む最大6人の2案についてだ。

どの組み合わせでも、支持率は70%を超えている。更に、管理世

界の票に人口比や面積比といった係数を使用しても、50%を切るパターンは見付からなかった。

それに、主を含む最大6人体制の方が、高い支持を得たのだ。君達の最高評議会就任は支持されたと受け取って、問題は無いだろうか？」というわけで、更にもうちよつと支持率が高め。

最も高い支持率になるパターンだと、90%に迫る。

「代表者というのは、現地の管理局の人間という意味か？」

「いや、原則として統治組織の代表だよ。地球で言う所の、大統領や首相……いや、知事や市長の方が近いかもしれないが、その様な立場の人物を選んでいる。」

多くは現地の法に基づき選ばれた人物だ、選択基準が問題とならないだろう。投票に関しても情報を公開しているが、批判の声もあまり聞こえてこないからね」

「やれやれ、クリアしてしまったのか。」

それで、解任させる権限は誰が持つ？　　というか、通常的意思決定はどうやっていた？」

「通常は統幕議会が行っている。大枠の法や制度、指針などを決めていたのはここだ。」

無論、細かな部分や各地域別で定めるべきものは、より現場に近い機関や専門の部署に任せられるがね」

「なら、とりあえずはそこに、不信任か弾劾で私達の権限を停止させる根拠を与えるのか」

「いや、その案は既に却下されたよ。各管理世界から信任された人物を、管理局の人員で構成される統幕議会が追いやることは出来ない、とね。」

それに、管理世界の代表者が集まる場という物が、実質的に統幕議会の信任を行う行事に成り下がったものしかない点も問題だ。それも踏まえて、仮に代表評議会と呼んでいるが、各管理世界の代表者が集まる組織を立ち上げようという話になっている。不信任に関する議決権はそちらが持つ事になるだろう」

むしろ、英雄扱いのお姉様を邪険に扱う可能性を減らす目的も大き

いらしいけど。

発起人のギル・グレアム、被害者でありながら平和の為に力を貸したプレシア・テスタロッサ、要所で多大な力を見せるお姉様が、3英雄として持て囃されてる状況。今まで英雄化を避けてた反動か、気持ち悪いくらいヨイシヨイされてる。

もちろん、協力者としてリンディ・ハラウンとレティ・ロウランも有名人に。ギル・グレアムを含めて、新・伝説の3提督なんて呼び方もされてるらしい。

ミッドチルダだと、元最高評議会を含む多くの犯罪者を捕らえているゼスト・グランガイツとその部隊、それと全面的にその動きを支援してるレジアス・ゲイズも英雄化してたりする。

こんな状況だからこそ、お姉様を危険視する人がいるのは間違いない。だからこそ、少なくとももある程度運営が軌道に乗るまでは、そういう人が厄介な立場から余計な事を言う可能性を減らしたいらしい。

ちなみに、現時点ではジェイル・スカリエツティも直接動いてるけど、犯罪者として有名過ぎる事と、闇の書対策や無限書庫正常化の様な解りやすい実績を持たない事が、英雄化されない理由らしい。

「今から組織作りか……時間がかかりそうだな。それも時間稼ぎの一环か？」

「法の整備の前に、管理世界の意見の調整も必要だからね。状況が落ち着くまでは、これ以上組織が動揺する事はしたくないのだよ。」

それに、統幕議会自身が、自分達を信用出来なくなっている面もある様だ。そのせいか、最高評議会に拒否権を与える事も検討している様だが」

一応捕捉すると、何でも拒否出来る権利じゃなくて、立法や法改正を阻止出来る権限。

加えて、施行されてる法の執行を一時的に強制停止する権限も検討中。

「また危険な代物を。そんなものは要らんぞ」

「だが、監査だけでは抑止力として弱いと判断したようだ。」

最高評議会は統幕議会に対する拒否権を。統幕議会は代表評議会

に対する解散権を。代表評議会は最高評議会に対する不信任決議権を。

また、管理局の運営指針の決定権を統幕議会から代表評議会に移す案もある。

そうする事で、力のバランスを取ろうとしている様だ。監査部は統幕議会が作る制度の影響を強く受けるから、最高評議会として他の手段も必要と判断した結果だ」

ちなみに逆方向は、原則として要請する権利を与える事を検討中らしい。統幕議会は最高評議会に対する協力要請を。代表評議会は統幕議会に対する立法や法改正の要請を。最高評議会は代表評議会に対する投票要請を。

それぞれ、不可能な場合は明確な理由の提示を義務付ける形で、実質的な強制権を持たせる。

つまり、お姉様は立法を阻止出来るけど、立法を強制するには代表評議会に立法要請案を提示して投票で支持されないといけない。

今のところは、そんな感じで話が進んでる。今後の調整で内容は変わるだろうけど。

「……確かに意思決定機関ではなくなっている様だが、権限が過剰すぎるだろう!？」

どう考えても運営に影響する立場じゃないか!!」

「監査部を独立機関として分離し、その頂点に立つてもらえるのであれば、ここまでの権限は必要無いのだがね。それに、通常は動かなくとも管理局の運営に支障は無い。期待しているのはあくまでも監査と助言、おかしな動きをした際に止めるだけの力を持つ事だ。」

護衛と業務補佐を担うために、リンディ提督が親衛隊の長として地球に滞在する事も関係者の合意を得ている。クロノ執務官が本局側の業務を補佐する形になるだろう。同時期にカリム君達が、君やヴィイオ君との関係維持の為に再び地球に向かう事になる様だ。そちらは、彼女の義弟であるヴェロツサ君が聖王教会側の担当を行う事になる様だね。

実際の就任はもう少し先になるだろうが、概ね、望みに応えられる

内容だと考えている。

「どうかね？」

この辺で妥協すべき。

これ以上何か言おうと、余計な業務が増える気がする。具体的には、警察に対する検察の役目を大々的に押し付けられそう。

元々阿呆の襲撃等に備えて、監視はするつもりだった。提示内容なら、やる事自体は大差ない。

逆に考えるんだ。権限を得ると、使える手段が増える、と考えるんだ。

ついでに、既に顔写真も公開されて英雄扱いされてるなら、これ以上箔がついても大差ないと考えるんだ。

「……私は、家族と平穏に暮らしたいだけなんだ。

リインフォースがいる時点で、叶わない願いだったのか……？ だが、肩を並べて共に歩める数少ない仲間を見捨てるなど有り得んし……」

そこまで含めて、ジュエルシードの罠だった可能性も。

「だけど、既に匙は投げられてる。

（せめて投げるのは賽にしろ！）

エピローグ　そして、未来へ

「6センチくらいの物が入る可愛い箱が欲しいなんて、さつきまで研究室に籠もっていた貴女が、いったいどんな気の迷いなのかしら？」

お姉様は、プレシア・テストアロッサと共に街に出ている。

今日は、世間はクリスマススイブ。まだ昼過ぎだから、広い意味で、装飾が華やかだけど、本番は夜になってから。

「せっかくのクリスマスだし、準備も間に合ったからな。ちよつとしたプレゼント用の買い物だ。」

私にはセンスが無いから、まともな意見が返ってくる女性の意見が聞きたい」

「あら、その外見でそれを言うのかしら？」

「私の服は、ほぼ妹達やお前達の見立てだぞ。」

スカートは拒否したし、色の好みも伝えたと思うが、自分で選んだものなどほとんど無い。

それに、女の子にプレゼントを渡した経験は無くてな、どうも勝手が解らん」

「そう。渡す内容や相手くらいは聞いてもいいのかしら？」

「相手ははやてだな。内容は、まあ、見た目は小物だ。後で見せてやる」

「危険物じゃないでしょうね？」

「それは有り得ん。私にしか作れんものではあるがな。」

さて、この店で良さそうか？　可愛らしい小物は多そうだから、箱もあるだろう」

「そうね、まずは見てみましょう」

入ったのは、お洒落そうな雑貨屋。

店内には女の子やカップルがちらほら。

クリスマススイブとはいえ平日の昼間だからか、人はさほど多くない。

「だけど、いいのかしら？」

アコノを差し置いて、はやてにプレゼントなんて」

「アコノには先に断られたよ、楽しくパーティーが出来れば充分とか言われてな。

今頃は、はやて達と一緒に準備中だろう。感情は戻りつつあるようだが……あの自己犠牲の考え方は、簡単には治らんらしい。

だから、物ではないものを考えているんだが、私一人ではどうにもならない内容でな」

「相変わらず難儀な子ね。

でも、まだ準備が終わっていないのは良くないんじゃないかしら？」

「まだ協力が必要な連中の了承も得られていないからな。買い物が終わったら、すぐに話すさ。

さてと、箱はこれがいいか……？」

お姉様を選んだのは、落ち着いた色合いの、街の風景の様な柄のもの。

うん、それは無い。

「こんなところを見ると、元は男性だったと実感するわね。

あれくらいの女の子なら、こっちの可愛い柄の方が喜ぶんじやないかしら。

渡す本人も見えた目はオンナノコ、でしよう？」

「むう……女は分からん」

「女の子のセリフじゃないわね」

「それは外見だけだ。

まあいい、それにするか。

さて、箱も選んだことだし、お披露目だ。近くに個室のある喫茶店がある。そこへ行くぞ」

「個室？」

やっぱり、危ないものじやないでしょうね」

「ありえんと言っているだろう」

お姉さまとプレシア・テストアロツサは箱を購入後、喫茶店へ。

一部屋半日予約済み。更生させた企業の系列、適正価格を支払い済み。

「何をやっているのよ、貴女は……」

「問題のある企業の更生だが、何か問題でも？」

それが私の表向きの仕事だし、いろいろと便利な上に、社会貢献も出来る。

「いい事だらけじゃないか」

「いえ……気にしないことにするわ」

「そう出来ればいいな？」

というわけで個室に入り、紅茶とケーキのセットを2つ注文。

雑談をしながらケーキを食べ、終わった頃に、本題開始。

「さてと、はやてに渡したい物は、これだ」

「これは、十字架……いえ、闇の書の表紙にあった……」

「そうだ。正確には夜天の魔導書の頃からあったものだがな。

起きろ、ルーナ」

「はい、マイスター・エヴァンジュ。初めまして、マイスター・プレシ
ア」

というわけで、見た目は妖精サイズのリインフォースⅡツヴァイ、現実名
ルーナ・リインフォースが登場。

お姉様が研究所に籠もってたのは、完成をクリスマスに間に合わせ
るため。

「これは、原作にいた……融合ユニオンデバイス騎を作ったのかしら？」

「はい、そうです」

「そうだな。アギトと同系の存在だ」

プレシア・テスタロッサの眩きに、ルーナ・リインフォースとお姉
様が揃って頷く。

身長は約30cm。普通の人だと思っ方が無理な外見。

「どうして、こんなものを……？」

「リインのユニゾン能力が使い物にならなくなったからな。具体的に
は、はやてとの繋がりが強すぎて事故を起こしやすくなってしまっ
た。はやてを取り込んで保護する事は出来るが、それ以外はまず不可
能だ。」

それに、はやて自身の魔法の素質はアコノよりだいぶ下だから、直

接補助する存在を用意してやろうと思つてな」

「さすが過保護者ね。」

でも、原作ではSSランクと言つていなかったかしら？」

「あれはリインフォースが消滅する際、はやてに力を残したからのようだぞ。それに、9歳で不老化して、成長が止まってしまったからな。結果的に何とかSに手が届くレベル、魔力量で言えばS―相当だな。」

それでも今のなのはやフェイトより多いし、これから技術を磨けば、魔導師ランクとしてのSやS＋なら手が届くとは思うが」

「SSランクにはそんな理由が……。」

「だけど、どうして闇の書の模様なのかしら？」

「外見は夜天の魔道書の頃から変わっていないんだ、せめて夜天の書の模様と言つてくれ。」

前提として、リインを修正する際に、零れてしまった部分やあえて外した部分があったという事実がある。それらを基本として、はやてとのユニゾンに最適化した、魔法の行使能力と補助能力に優れた夜天の魔導書の限定版を作つてみたんだ。夜天の魔導書を作れるだけの情報と技術を持つ私にしか出来ん芸当だな。」

通常使う魔法は、一応真正古代^{エンシェント}ベルカ式だ。守護騎士やアギトもいる事だし、一番馴染みやすいだろう」

「緊急時の切り札用にアルハザード式の魔法も使えますし、便利魔法の為のミッド式も教えてもらっているです。」

もちろん、普段はアルハザード式を使うつもりはありませんですよ」

「そ、そう……随分と無茶をしたのね」

「あいつらの事だ、未っ子として可愛がつてくれるだろう。」

当然、はやての戦力増強として申し分ない性能に仕上げたからな。はやてとユニゾンしてリインとルーナのリンクをフルに使えば、SSに手が届く計算だ。要するに、リインの魔力をはやてに流すための中継役も兼ねるわけだな」

「頑張るですよー」

「随分な性能ね……八神家の総戦力が恐ろしいわ」

「既に私やリインがいるんだ、今更条件付きSSSが増えた程度で恐れるな。」

まあ、間に合つてよかった。名前はアコノが付けてくれたし、調整やらのためにリインにも協力してもらったからな。

3人からのプレゼントだ」

「そう。ルーナ……確か、イタリア語で月だったかしら？」

「そうだな。祝福の夜に輝き照らす者、ルーナ・リインフォース、だそうだ。」

それなりに言葉も覚えてるじゃないか、似非イタリア人」

「名前繋がりとかでイタリア出身に設定したのは、貴方達でしょう？」

その上、身元がばれにくい様にその地域の勉強までさせて」

「嘘を本当に見せるには、相応の努力が必要なだけだ。」

さてと、そろそろ本題だ。一つ相談と言うか、提案がある」

「重要な提案なのです」

重要案件、その2。

むしろ、こつちが超重要で、ルーナ・リインフォースの紹介がオマケ。

「私に？ 何かしら？」

「私達の家の、家長にならないか？」

「正確には、八神家を丸ごと養子にしないか、なのです」

「……えっ？」

「今の八神家……はやての法的な家族関係には問題がある。」

家名の第一継承者で世帯主は、はやてだ。

年齢で言えば一番の上位者はアコノになるが、姉妹になった経緯上世帯主になれんし、一般的に言えば子供という点で、はやてとの差も無い。

私やチャチャは同居している遠縁の親類扱いだから戸籍上ははやての家族じゃないし、そうでなくともアコノが主だ。他の連中、要するにリインや守護騎士達も法的には直接の家族ではないし、本来ははやてを主と呼ぶ立場だしな。

それに、私はアコノはやてに、もう少しまともな形の家族を取り戻させてやりたいんだ。

はやての本来の家族は、既にもいない。

アコノの本来の家族には、管理局との関係や将来地球を離れる可能性を考えると頼み辛い。

そこで、魔法を知り、管理局とやり合えて、^{フエイ}年代の子が^{イト}いるお前だ。

母親役にうってつけだろう?」

「そもそも母親役が出来る人は、他にいないのですよ。

リイン姉様やシグナムやシャルはお姉さん系ですし、管理局員のリンディ提督に頼むわけにもいきませんし……」

「まったく……何を言い出すかと思えば」

「同じく八神姓の私も一緒に養子になるのも面白そうだぞ。

何と呼んでやろうか。お母様か? それとも、ママがいいか?」

「私は、お母さん、がいいですか?」

でも、マイスター・エヴァンジュもお母さんですし……」

「その呼び方はやめなさい!」

まったく……こんな時期に、随分思い切った事を考えるわね」

「頼れと言っていただろう?」

そもそも私達3冊は姉妹機で、アコノとはやては姉妹だから、最高評議会が家族経営になるのは既定路線だ。人間関係の実態は今でもさほど変わらんし、それほど思い切ったつもりは無いんだがな」

フエイト・テストアロッサやアリシア・テストアロッサは、お姉様に懐いてるし。

別荘では八神はやてとプレシア・テストアロッサが並んで料理してる姿もよく見るようになってきてるし。一緒に黒羽早苗もいることが多いけど。

「確かにそうね。でも、一つだけ問題があるわ。

昨日、求婚されたのよ」

「おお、おめでとうございますですよ」

「そうか。それはおめで……ん?」

今のお前に求婚する勇気のある男なんていたのか?」

「クーネよ。よく知っているでしょう?」

「変態さんですか!」
ロリコン

「あいつか!」

クソツ、嫌がらせか? 先手を打たれたのか!」

「まあまあ、落ち着きなさい。」

クーネはリーナが好きだった様だし、それほど不思議ではないんじゃないかしら」

「はあ!? あいつとリーナに、そんなに接点があるとは……」

「書の管制通信を使わずに夜天や宵天の動きを制御していた事に気付かないうっかりさんでは、気付けないんじゃないかしら」

「……まじ、か……」

まあ、言われれば確かに、接点はあってもおかしくない。

というか、無いとおかしいレベルかもしれない。

「クーネは、貴女の事を娘の様に思っているみたいね。」

少なくとも私が知る範囲では、貴女達をからかいにしても、欲情した目で見ている様子は無かったわ。私に求婚したくらいだし、真性の変態ロリコンではないんじゃないかしら?」

「うーん、私が受け取った記録では、確かにからかう以外は何もしていないようにも見えるですけど……」

「それで……受けた、のか?」

「ええ。不老不死というのも魅力だし、貴女達の近くにいれば研究対象や知識には事欠かなそうだし。もう、私が正式に『宵天の歴史書の主』になっているわ。」

ユーノは仮の主で、全ての能力を使う事は出来なかったそうよ。私が正式の主となった事で、保護機能も使える様になったらしいわ。不老不死の保護はその一環ね。」

ヴィヴィオには話してあったみたいで、既に保護対象に入っているわ。アリシアとフェイトは本人が望んだ場合のみと約束してくれたし、今夜にでも話をするつもりよ」

「そうになると、テスタロッサ家のお父さん、という事になるですよ!」

「くっ……アレを父と呼ぶ……無理無理無理無理！」

提案は撤回だ！」

「いえ、撤回しなくても大丈夫よ。

クーネは基本的に今まで通り、各地を旅するつもりらしいわ。役目の為に顔は出すけれど、その程度だそうよ。

ここまで言えば、意図は分かりそうね？」

「ずっとマイスター達の側にいてもらうため、ですか？」

「あいつが、そんな事を考えるのか……？」

「それは、クーネの行動を見て判断すればいいんじゃないかしら？」

嘘だと思った時点で、強制停止でも何でもしてやればいいわ。それだけの権限は持っているのでしょうか？」

「……恐らくな。試したことは無いから、正常に機能するかもわからないん。

まあ、最悪の場合は本当に焼けばいいか」

「脅すための見せ札としては有効でしょう？」

ふふっ、まさか、こんな結末になるとは、考えてもみなかったわ」

「大家族です♪」

「アコノ・テストタロッサ、はやて・テストタロッサ。この2人は確定だな。本人が希望したら、ミドルネームに小野や八神を入れるのもいいな。

ヴィヴィオは元々クーネの養女扱いで、不老不死にしたんだ。連れ子として扱うつもりだろう？」

私やリイン、それに守護騎士連中に融合騎達は養子である必要はないが、どうする。八神姓の同居人でも構わんぞ」

「まずは書と主から初めて、様子を見ながら順次、がいかしらね。一度に増やし過ぎると周囲が煩そうだし手続きも面倒だけれど、爆弾を後回しにするのも良くないわ。

あとは、貴女の配下2人とネズミの扱いかしら？ 同居したいならすればいいけれど。住む場所は年が変わってから決める事になるでしょうし、追って相談ね。

ジェイルの参入は断固拒否するけれど、問題無いわね？」

「無いな。まあ、アレも協力者と言う立場だし、こっちに来る可能性は

あるんだが……家族や血縁としては無関係、近所に住む研究者辺りで話を付けなければいいだろう。

戦闘機人の扱いも、とりあえず部下以外にする気は無いぞ」

「基本路線はこのくらいで、後は本人達の上承ね。

大騒ぎの管理局や聖王教会の人達には悪いけれど、騒がれる前に、こちらで既成事実を作ってしまった方がいいわ」

「好きで最高評議会なんて肩書を持ったわけでもないしな。家族になるのが適正でないとか言ったら、即座に辞任してやるさ。動かない言い訳を作るために権限を大きく削ったんだし、理由をつけて免職したいなら、むしろ大歓迎だ」

「それでも、当面は解任される方法が無いのでしょうか？」

「そうなんだが……まあ、あれだ。

リンディやカリム……いや、クロノやヴェロツサの胃には悪いが、人外の私達が出しやばるよりも、大人しく睨みを利かせる振りだけしておくのが一番だろう。

とりあえず今は統幕議会とグラム達も頑張っている様だし、管理局にはうまく世代交代してほしいとは思いますが、私の本音としては他人事だ。クロノやらの若い連中が頑張れる環境が続く間くらいは、任せしておくさ」

「ゆつたりと過ぎますよ」

「私も書の主となった以上、最高評議会に名を連ねる事になりそうだし。立場はそうも言ってもらえなくなるでしょうけれど……」

「そうね、下手に口を出すよりも、静観する方がいいわ」

「変に手や口を出すと、忙殺されてフェイトやアリシアと過ごす時間が減るぞ。

それに、私は静かに過ごしたいんだ。権力亡者の相手をするのも御免だ」

「確かにそれは困るわ。アリシアやフェイトと過ごす幸せを、誰にも壊させるものですか。

もちろん、貴女達が輪に入るのは歓迎するわ。力を合わせて、邪魔者を排除しましょう」

こうして出来る、テスタロツサ大家族。

表面上はお伽噺から蘇った新生最高評議会全員を含む管理局の監視者であり、聖王の継承者が存在し、真正^{エンシェント}古代ベルカの技術を復活させる鍵を持つ聖王教会の盟友一家でもある。

その実態は、アルハザードの全ての知識や技術、多くの世界の文化や歴史を記録する世界最高の知の集積点であり、常軌を逸した力が集まる特異点。

そんな家族が目指すは、穏やかな生活。

幸せを求めて駆け抜けた、お姉様が目覚めてからの激動の日々。

これにて、終幕。

後日談：とある家についての意識調査

大所帯になる事が決まったテスタロッサ家、必要な手続きは既に開始済み。

拠点は地球。必要になるのは大きな住居。年が明けてから手配を開始する予定。

でも、手配の前に行うべきは、どんな家がいいかの意識調査。

◆◆ 旧ルアソープ家 ◆◆

まずは、ロリコン変態。

変な事を言ったら叩き出す。

「私ですか？」

基本的に様々な世界を旅して回るつもりですから、専用の部屋は不要ですよ。

家については、そこに住む人の意見を尊重してください」
意外。

なんだか平和な事を言ってる。

「どうしてそんなに意外そうなんですか？」

もつとも、たまには帰る事もありますから、その時に休む場所があれば充分です。

その辺はまあ、プレシアと相談しますよ」

何だかおつても意外な結果に。

ロリコン変態の防衛プログラムは、そもそも地球で表に出せないから考えなくない。
ヴィヴィオは？

「そうですね、ある程度体を動かせる場所があれば充分です」

明らかに別荘の出番。

聖王全開で体を動かす前提なら、地球では無理。

だけど、日本に戸籍を持つなら住居が必要。

「それでしたら、ベッドと少々の私物を置くことが出来る程度の部屋

を希望します」

個室希望？

広さはそれほどでもなくてよい、と。

「部屋に籠る気はありませんし、訓練や運動がエヴァンジュさんの別荘であるなら、あとは友人が来た際に見せる事が出来る程度の生活空間があれば充分です。

基本的にゆりかごや別荘にすることが多くなるでしょうが、地球に住む形を取る以上は、魔法に関わらない人に見せられる住まいを確保しておくべきでしょう」

別荘生活に、すっかり馴染んじゃった。

ゆりかごもあるし、気兼ねなく力を使える環境。従者達とも仲が良
い。

確かに、居心地がいいかも。

◆◆ 旧テストタロツサ家 ◆◆

家長となるプレシア・テストタロツサと、その娘2人に使い魔1人。

肩書的な意味で、発言力が最も大きい人達。

「そうね。研究室は……この世界では表に出せないわね。

やっぱり別荘がいいかしら？」

別荘大人気。

地球に魔法の研究施設は作らない方がよいのは确实。

「それなら、大きいベッドや2人分の家具類を置ける程度の部屋が
いわ」

2人分？

大きいベッド？

「クーネは、自分の部屋は不要だと言っていたでしょう？」

でも、休むための場所や、必要な最低限の物を置く場所は必要よ。

それなら、妻である私の部屋が一番だと思わない？」

それなんて新婚夫婦？

「いいじゃない。どこかに必要なものを受け持つと言っているだけな

のだから。

アリシアとフェイトは……個室がいいかしら?」

「アルフは、私と同じ部屋でいい?」

フェイトアルフ
主と使い魔が同じ部屋なのは、特に問題ない。

今のアルフは子犬モードが基本だし、個室の希望無し?

「アタシはほら、フェイト一筋だし、戸籍もないしさ」

納得。アリシア・テストアロツサは……1人で個室?

「うん。フェイトはアルフがいるし、なのちゃんをよんだりしそうだから、べつのへやがいいかなって。

おかーさん、わたしもつかいまほしく!」

「ア、アリシア? ごめんなさいね、今すぐというわけには……」

「えー、リニスどこいったのー?」

「……ごめんなさい」

「アリシア、あまり母さんを困らせない方が……」

「だって、フェイトばかりずーるーいー」

わたしもおねーさんなりニスにあーいーたーいー」

大惨事。

駄々っ子恐るべし。

とりあえず個室ということで、撤回。

◆◆ エヴァンジュ配下達 ◆◆

要するに、セツナ・チェブルー、成瀬カイゼ、チクアープの3人。チクアープは、現在は明確な住所が無い。長宗我部千晴の家を中心に、アースラの地上拠点や八神家他をうろうろしてる。ミッドやらにもいるのは気にしない。

「部屋、ですか……私達も住んでいいのでしょうか?」

わお、根本的疑問。

少なくとも、眷属のセツナ・チェブルーは、お姉様繋がりで問題にさせない。

チクアープは……そもそも部屋が不要?

問題がありそうなのは、直接の関係性が薄い成瀬カイゼだけ？

「確かに、僕は問題かもしれないね。」

「これからも居候という扱いでいいのかどうか、他の人達の了承は必要そうだ」

その辺は、追って確認。

でも、反対しそうな人に心当たりがない。

「それでも、だよ。僕は保護されているだけで、八神でもテスタロッサになるわけでもないんだ。」

でも、普通に過ごせる部屋があれば、特に希望は無いね。同居せず、別に部屋を借りてもいいくらいだ」

「我等に、部屋は不要でございます。」

もし頂けるとしても、物置の様な場所があれば充分でございます」
何だか、とつても平和というか、要求らしい要求が出ない。

お姉様の眷属たるセツナ・チェブルーからは、要求が出ると期待。

「え……？」

え、ええと……その……飛ぶのは、やっぱり別荘限定、ですよ？」

地球で飛んで見付かったら、UMAやUFO扱い。

ミッドチルダも、少なくとも市街地の個人飛行は許可が必要。

素人にはオススメ出来ない。

玄人って何者だ。

「それなら、きつと、別荘にすることも多いと思います。」

だから、ええと……」

はいはい、普通の個室個室。

そんな感じ？

「あ、はい。それで」

なんて要求の出ない結果に。

意識調査の必要すらない？

◆◆ 旧八神家 ◆◆

お姉様や主、八神はやて達を含む、人数的には最大勢力。

他の人達の要求がなさ過ぎて、何か言えば通る状態に。

「なるほどな……で、どうしてプレシアと変態ロリコンがそんな事に……」

お姉様が頭を押さえてる。

1人は、ロリコン。

もう1人は、戸籍上は60歳で、今の肉体年齢も30歳くらい。

一皮剥けば、甘い空気が似合わない取り合わせ。

変態ロリコンが留守気味とは言え、同室すら似合わない。

「……まあ、別に場所を確保しなくていいということで納得しておくか。」

それより、私達の希望だったな。とりあえず個室が欲しいのは誰だ？」

「オレはいらねーヨ。このナリじや表に出れねーしナ」

チャチャゼロの身長は70センチくらい。

子供扱いするにしても、体型や言動に問題がある。

「私はマスターと同室で。」

保護者とし「誰が保護者だこのボケロボ！」防衛の指「それはもういい！」……残念です」

残念なのは八神チャチャマルの頭。

でも、チャチャゼロと八神チャチャマルが個別の部屋を要求してこない。

戸籍を持つてる八神チャチャはあった方が良さそうだけど、お姉様と同室でも問題ない。

主は？

「今と同じように、エヴァと同じ部屋がいい。」

でも、みんなが来ると人数が多めになるから、広めの部屋がいいと思う」

曙天関係者がほとんど集まっちゃった。

なんとという隔離環境。

夜天な人達は？

「うーん、今までの流れやと、主従は同室って感じやね。ラインは何か問題あるか？」

「いいえ、我が主。」

私は、いつでも主と共に」

「リイン姉様ばかりずるいですう。」

私だつてはやてちゃんと一緒にがいいですよ」

ルーナ・リインフォースが駄々っ子に。

ここにも子供がいた。

「全員が同じ部屋では窮屈になり過ぎますから、我々は別室が良いでしょう。」

我々3人で1部屋でも構わないかと」

八神シグナムが、やつとでまともそうな意見を出した。

というか、現実的な思考の結果とも言えそう。

でも、内容は八神はやてと部屋を分ける事のみ？

「んじゃ、アタシはシグナムと同じ部屋だな。」

こんなナリだし、一部屋は大きすぎだ」

主従のセットがここにも。

アギトは八神シグナムと同室というか、部屋の一角に住む感じ？

ただ、ルーナ・リインフォースもアギトも、地球では子供サイズ推奨で、1人分の空間が必要になるのを忘れてる。

「あう。でも、普段は部屋の片隅にちよつと場所があれば何とかなるんだ。」

こつちにも居場所が欲しいんだよ」

「はやてちゃんの側……」

アギトの意見もごもつとも。

ルーナ・リインフォースは幼児退行しないでほしい。

「それなら私とヴィータちゃん、シグナムとアギトのペアはどう？

1部屋に4人入るよりはいいんじゃないかしら」

八神シヤマルの意見が無難？

要するに、守護騎士で2部屋。

というか、ザファイラは座敷犬扱いでいいの？

「うーん、みんなが集まれる部屋というか、みんなで食事できるくらいのダイニングは欲しいと思わへん？」

みんな？

最大人数でカウントしてみる。

夜天関係者。八神はやて、リインフォース、ルーナ・リインフォース、八神シグナム、八神シャマル、八神ヴィータ、ザフィーラ8名。ナハトヴァールは日本での活動に色々無理があるから除外が無難と判断。

曙天関係者。お姉様、主、八神チャチャマル、チャチャゼロ、八神^{わたしたち}チャチャの5名。

一応人型のチャチャゼロも含めておく方がいいかも。大きさを子供くらいに誤魔化せるようになれば、活動出来るし。

宵天関係者と旧テストタロツサ家。プレシア・テストタロツサ、フェイト・テストタロツサ、アリシア・テストタロツサ、ヴィヴィオ、アルフの計5名。

ドラコと^{ロリコン}変態は有無を言わさず外してある。

セツナ・チェブルー、成瀬カイゼ、チクアープの居候3名も合わせて、合計21名分が必要な計算になる？

「家族みんなやから、全員や。」

20人を超えるととなると、結構広くないとあかんね」

「一般的な住宅だと、全員住むには部屋が足りませんし。」

集合住宅や寮みたいな建物を基本にした方がいいかもしれませんよ」

八神シャマルが、なんだか参謀らしいことをしてる。

やつとで、全体像に関する意見が出た。

「面倒だな、小さめのマンションを建物丸ごと押さえてしまえ。」

どうせ転移やらで行き来出来るんだ。それ程問題も無いだろう？」

お姉様、それはかなりの暴論。

転移出来ない人も……あれ？

こほん。今は転移出来ない、八神はやてとアリシア・テストタロツサがいる。

「でも、別居みたいになるんは嫌やし。」

全員が一緒に住むとなると……すずかちゃんのお家みたいな大き

さになってまうか？」

流石にそこまで大きくなくていい。

既存の戸建ての建物を軽く調べた感じだと、多くても7部屋くらいしかない。

必要な部屋数は、来客用や応接用を含めずに現在10、私達を別部屋にするなら11を想定。

2名以上の部屋が半分ある。明らかに広さが必要。

ダイニングも一般的な間取りだと無理がある。風呂やトイレも広さや数が必要。

一般的な住宅では不可能と言わざるを得ない。

「設計からせなあかんな。」

ダイニングだけやなくて、玄関とかもかなり広くないとあかんやろうし……」

「それなら、マンションで壁を抜いてしまえばいい。」

下の階ならともかく、最上階なら別に壁が減っても支障は無いだらう？

魔法で補強も出来るし、工事は妹達や従者達でどうとでもなるぞ。マンションの間取りを変える？

何て乱暴な。

お姉様らしからぬ……という程でもない？

アルハザード時代に、狭いからと研究所の壁を抜いた前科が。実はお姉様らしかった。

「間取りやらをある程度好きに変えられるんか？」

それならアリかもしれないな」

八神はやてが感化されちゃった？

真剣に考え始めてる。

日本でやるのは問題なのに。

「ヴィータ、どう思う？」

「さーな。アタシははやての近くに居ればいい。」

今いる連中以外は実感ねーしな」

ザフィーラと八神ヴィータは、蚊帳の外。

子犬モードのザフィーラはともかく、それでいいのか八神ヴィー
タ。

◆◆◆ 家具屋へGo ◆◆◆

結局、部屋の確保が課題という事で、結論は出ず。

とりあえず部屋の広さがどれくらい必要なのか考えようという事
になり、何班かに分かれて家具屋に下見に行く事に。

というわけで、今日はお姉様、主、プレシア・テストロッサ、ヴィ
ヴィオ・テストロッサの4人で家具屋にお出かけ。

「いつ見ても、この世界のベッドは小さいわね」

「住宅事情を考えると、仕方ないだろう。」

別荘には大きな部屋を用意しているんだから、広さが必要ならそつ
ちにしておけ」

夢の中でフェイト・テストロッサとアリシア・テストロッサが寝て
たベッドみたいなのを基準にされても困る。

どう見てもクイーンのロング級のベッドだったし。あのベッドだ
けで小さな部屋が埋まりそう。

そんなわけで、とりあえず日本での一般的なサイズの説明を聞い
て。

「うーん、だけど2人なら、最低でもクイーンサイズは必要かしらね
……」

「……どんな部屋に住むつもりだ」

悩むプレシア・テストロッサの眩きが耳に入ったお姉様が、顔を引
きつらせてる。

(どう見ても同衾する気満々だろうが！

本当にこの組み合わせでいいのか!?)

でも、夫婦だし。

それに、その隣でヴィヴィオ・テストロッサが見てるのも、似たよ
うなサイズ。

「え？ 以前使っていたものは、これくらいでしたから」

「全く、この金持ち共は」

「エヴァさんも、いつでも頂点に立てる身分を持っていたと聞いていますよ。」

別荘もありますし、相応の資産があったのではないのですか？」

「私は本来、モノだぞ。睡眠が必要無いし、他にすることが多すぎたらな。」

「寝室どころか私室すら無かったぞ。別荘は、公式には存在していませんでしたな」

「そうだったのですか。」

それでも、そちらでは広い部屋を使う事も出来たのでは？」

「使おうと思えば使えただろうが……感覚が日本人だし、物を置く場所も休む場所も、特に必要じゃなかったからな。」

私室として使うための部屋はあったが、使ったことは無いな」

「駄目ですよ。人として過ごしたいなら、少しでも人らしい生活をしなければ。」

自分から人である事を捨ててしまえば、どんどん人から離れてしまいますから」

「……そうだな」

なんとという正論。

人であることを止めた経験者と言う意味では、確かに同類。指摘は決して間違いじゃない。

後日談：正月前後

◆◆ クリスマスイブ ◆◆

「……というわけだから、私達が家族になる事になったわ」
クリスマスイブを名目に、別荘で行われてるパーティー。

その途中、プレゼント交換がそれなりに終わった後で、プレシア・テスタロッサが重大報告。

内容は、ロリコン変態との婚約と、書と主を全員養子とする事。

「えっと……私達もなん？」

困惑が声に出たのは、八神はやて。

ラインフォースも、それっていいの？みたいな顔をしてる。

「結婚に関しては知らなかったが、養子については私の提案だ。

アコノもはやても、母親のいる家庭ではなくなってしまうているしな。そろそろ、それなりの形の『家族』としたかったんだ」

「書と主という事は、エヴァも？」

「そうだな。プレシアが母で、子は上から私、ヴィヴィオ、ライン、アコノ、はやて、フェイト、アリシアが、日本での戸籍年齢順だな。

アルフは戸籍を作っていないから、今のところは子に数えていない。それと、守護騎士やチャチャ達は、ある程度様子を見てからと考えている」

「えー、わたしがいちばんいもうとー？」

アリシア・テスタロッサは、ちよつと不満そう。

でも、日本の戸籍は6歳として扱うようになってるから、既にフェイト・テスタロッサの妹になってるとも言える。

「えっと、姉さんが妹になって、お姉ちゃんが本当にお姉ちゃんになるって事でいいのかな……？」

フェイト・テスタロッサは、姉と呼ぶ2人の扱いに困惑中。

でも、どこか嬉しそうだから、問題は無さそう。

「エヴァが良いと判断してプレシアを頼ったなら、それでいい」

「日本での戸籍上は問題無いでしょう。」

管理世界向けの設定も、同じ順で扱うのでしようか？」

「アタシは自由に動ける今の状態の方が良さそうだし。」

「ご主人様と離れなくていいなら、どっちでもいいさ」

主とヴィヴィオ、それにアルフはとりあえず問題無さそう。

管理世界というか、時空管理局向けの設定も、取り敢えずは同じ順が無難だとは思う。

変えると混乱するし。

変える意味もないし。

「だ、だが、私まで家族になつてよいのだろうか……？」

一番というか、唯一狼狽えてるのがリインフォースというのは、想定範囲内。

だけど、現実のリインフォースの想定を超えてる。

「気にするな。管理世界では、悲劇のヒロインみたいな扱いになってるんだ。」

過去の罪を気にしすぎると、世間の夢を壊すぞ？」

「しかし、結果的に私が破壊を振りまいていたのは確かなのだ。」

その責任がだな……」

「何十億と殺してきた私も英雄などと呼ばれ、最高評議会の議長とやらに就任するらしいんだ。」

それに、評議員になるお前が率先して人を助ける様に動く事で、助けられる命もあると言われたのだろうか？

過去ばかり見ずに、未来も見ろ。それに、今の主を蔑ろにしているのか？」

「そうや。いっぱい悲しい事や辛い事があつたんやから、今度はいっぱい幸せにならなあかん。」

リインフォースが消えてもうたお話ともちやう。

「私らは、胸を張ってハッピーエンドを目指そうな？」

「はい……我が主」

リインフォースが嬉し泣きしてるけど、この主従も了承して事でいいんだろうか。

というか、お姉様ロリコンが変態変態を含めてない点を誰も指摘しない辺り、お

姉様がどう思ってるか言わなくても解るらしい。

「とまあ、これが、私とプレシアからのプレゼント　『家族』だな。

次に、私達からはやてへのプレゼントだ」

そう言いながらお姉様が出したのは、プレシア・テスタロッサと買
いに行つた小さな箱。

「わ、ありがとうなエヴァさん。

えーと中身は……夜天の書の表紙にあつたマークのネックレスや
ね？」

早速箱を開けて、中から出てきたのは剣十字のアレ。

「ただのネックレスじゃないぞ？」

出番だ、起きろ」

「待ちくたびれちゃつたですよ。

初めまして、マイスター・はやて」

「おおつ、ちっちゃいリインフォースや！

エヴァさんどないしたん!？」

「リインのユニゾン能力は、実質的に使い物にならなくなったからな。
それに、消滅前に力を残したという事も無いから、正直に言えば『原
作の八神はやて』の實力に届かないはずなんだ。

そこで、リインとはやてを繋ぐバイパス役と直接の補佐役として、
リインを修復した際に削つた部分やらを流用して融合騎を作つたん
だ。それがこいつ」

「ルーナ・リインフォースなのです！

命名はマイスター・アコノで、ツヴァイって番号で呼んじや嫌なの
です！」

「なんや、アコノさんもグルなんか？」

「私は名前を付けただけ。技術面は理解出来ないから、製作には関
わってない。

あと、ルーナもリインフォースを希望したから、念のために姉にも
ノツテと名前を付けた。普段はリインとかリインフォースでいいと
思うけれど、駄目だった？」

「ううん、問題無いよ。厳密に区別する時にはそつち使う感じやね。

やけど名前を貰った上にバイパス役って事は、リインフォースも知つとつたはずやね？」

「も、申し訳ありません我が主。」

エヴァンジュにどうしても今日までは秘密にするようにと強く頼まれていたので、言うに言えなかつたのです」

「びっくりさせよう思つたんやろうけど、びっくりさせ過ぎや。」

ほんま、ありがとうな……」

八神はやてまで泣いちゃった。

どうしよう、この涙もろい主従。

◆◆ なはと ◆◆

「エヴァンジュ、少しいいだろうか？」

ナハトヴァールの再構築が完了した。少し不安定だから、実体具現化させても大丈夫か確認してほしい」

八神はやてとリインフォースが、お姉様を訪ねてきた。

「そうだな、念のために別荘でやるか。」

「どんな姿になりそうか、知ることは出来たか？」

「大きさは大人の身長を2倍にしたくらいのようなうだ。人ではない姿を取るのだろうか」

「構造情報から姿を割り出すのは、思ったより大変や。」

「だいたいの大きさを計算したところで、力が尽きてもうた」

「そうか。それくらいのサイズなら、結界もそこまで巨大じゃなくていいな。」

「なら、早速やってしまおうか」

「ワイも連れて行ってもらってええか？」

「何度かやられた相手や。気になってしゃーない」

野生じゃないチクアープが現れた。

口調はだいぶ慣れてきたらしい、怪しい関西弁的な何かになっている。

「まあ、いいだろう。変な手は出すなよ？」

「もちろん。顔を拝むだけや」

というわけで、今日はまだだれも来ていない別荘の訓練場へ。

ここなら、大抵の事は何とかなる。

結界も準備出来た。念のために、大型結界も発動準備は整えてる。

「とりあえず、調査からだな。」

初期状態に戻っているかぐらいしか調べられんが……見える範囲に、問題は無さそうだぞ?」

「そうか、良かった。」

実体具現化を行うから、念のため少し離れてくれ」

本当に念のため程度の意味しかないけど。

お姉様と八神はやて、それにチクアールが少し離れたのを確認してから、リインフォースがナハトヴァールの実体具現化を開始。

先ず現れたのは、六芒星の魔法陣。その上に姿を見せたのは。

「……ラミア、か?」

「ラミアやね」

「幼女ラミアって辺り、狙ってるんちゃうか?」

てか、防衛プログラムと思えへん」

下半身が蛇の女性、造形としては3人の意見が一致してる。但し、チクアールが言ってる通り、幼女。上半身を見た感じでは推定7歳くらい。

なんだかぼやぼやした雰囲気だから、吸血鬼だの子供を食べるだのという部分は何処へ行ったと聞きたいところだけど。

「ナハトヴァールって厳つい名前やなくて、なはとちゃんやね。」

はじめまして、なはとちゃん。私の事、解るか?」

八神はやてがナハトヴァールの前に移動して、笑顔で挨拶。

ナハトヴァールは、じれったいくらいゆつくりと頷いて。

「主。夜天の。私、護る」

「んー、護るのは、今は危なくないし、そんな頑張らんでも大丈夫や。

それより、みんなと一緒にいても大丈夫なように、お勉強をせなあかん。頑張れるか?」

「一緒、いる。勉強。頑張る」

どうやら色々頑張る必要がありそう。

だけど、魔力や能力の制御は問題無さそう。安定してる。

「うん。それで、とりあえず今一緒に居る人達を紹介しとくな。大切な家族やから、あんま気を張らんでええよ。」

まずは、エヴァさん。私のお姉さんで、リインフォースの妹さんや」

「書……管制役。偉い人」

「初期状態でも、関係性は理解出来ているのか。」

まあ、指令書としての力を使う事は、そうないだろうからな。普通に家族でいいぞ」

「解った」

「それで、こっちのネズミさんが、チクアープさん。」

エヴァさんの部下みたいなの……ネズミさんや」

「ネズミは大切なんか?」

「大切やから、2回言っといたんよ?」

なはと、どないしたん?」

ナハトヴァールは、チクアープを見てにつこり笑ってる。

嬉しそう。

但し、口元からよだれが垂れてる。

「食べないでくれナハトヴァール!」

あんな姿だが恩人なのだ!」

「ワイは食いモンやない!」

「なはと、あかんよ! エヴァさんの部下で恩人さんから、食べたらかん!」

「……残念」

みんなに止められて、ナハトヴァールは本気で残念そうにしてる。

というか、侵入直後に殺されてたのって、排除されたんじゃないやなくて食べられてた……?」

◆◆◆ 親衛隊 ◆◆◆

「エヴァンジュ最高評議会議長様及び最高評議会関係者の、護衛任務

及び業務補佐役に就く事になりました、リンデイ・ハラオウン少将です。

親衛隊長への就任は後日であります、本日は僭越ながら挨拶に伺った次第です」

「……リンデイ、そういうのは止めてくれ。

堅苦しいのは苦手なんだ」

「そう？ それなら、今まで通りがいいかしらね」

年末も迫ったある日、八神家に尋ねてきたリンデイ・ハラオウン。挨拶に来るといふ話は聞いてたけど、今日は高町家にあるポートを使って、1人で来たらしい。他に人もいないし。

「私としては、肩書自体が要らないからな。そんなものは無い方が嬉しいんだ」

「それでも、抑止力としての意味はあるでしょう？」

「まあ、そうだな。

クロノは、かなり忙しいのか？」

「そうね、組織改革と犯罪者対策に駆け回っているわ。

本人は大丈夫と言っていたけれど、本当かしらね？」

「……まあ、これでも渡しておいてくれ。

穴が開く前に飲めと言ってな」

お姉様が出したのは、胃薬。

主に潰瘍の進行を抑える効果。

「そうね、頑張り過ぎないか心配だし。

有り難く受け取っておくわ」

「エヴァさん、リンデイさん来たん？」

「ええ。お久しぶり、かしらね」

「そやね。今は何をしてたん？」

「胃薬を渡してたところだ。上層部の悪事をばらしたせいで、なかなか大変な状況らしくてな」

「そっか。なんか私とリインフォースも最高評議会とかいうのになるらしいし、私らに出来る事があつたら言っただけ？」

「今まで色々とお世話になつとるんやし」

「今後はあくまでも抑止力としてだから、前線に立つことは少ないと思うけれど……それでも、何かあったらお願いするわ。」

「だけど、その前に、フェイトさんとアルフさんをお願いしたい事があるのだけれど」

「あの2人にか？」

「ええ。護衛のための部隊だけれど、急に決まった話だから人を増やせそうにないのよ。誰が信用出来るかという調査が出来るような時間も余裕も無いし。」

「だから、信用出来て他の部署に恨まれない人に教導に関する勉強をしてもらって、部隊に所属してほしいのよ。名目としては、こちらにいる嘱託魔導師や現地協力者への指導役、という事になるわね」

「フェイトを指導役にするか……まあ、見た目はともかく、書類上の体裁だけなら繕えるか。」

「だが、指導役としては守護騎士連中の方が向くんじゃないのか？」
「本来はそうなのだけれど、勉強の間も護衛役を減らすわけにいかないもの。」

「それに、フェイトさんよりもアルフさんが主体ね。一番時間や立場に余裕があるアルフさんに、きちんと学んでもらうのがいいのではないか、って話になっているのよ。」

「フェイトさんはアルフさんの主だから、どんな場所でどんな事をするか確認して、ついでに基本部分を体験して欲しいと言っていたわ。ザフィーラさんにもという話があるのだけれど……護衛の問題もあるし、まだ検討中みたいね」

「うーん、立場って色々面倒やなあ……」

「だから私は要らないと言っていたんだ。」

「だが、猫の手ならぬ犬の手も借りたいという事か。なかなか大変だな」

「ただでさえ人手不足なのに、その一部を捕まえる為に手間を取られるのなもの。現場はおおわらわよ？」

「そうそう、ユーノさんは正式に無限書庫の司書になるそうだけど、エヴァさんに無限書庫の設備管理をお願いしたいと言っているわ」

「……まあ、アレの深いところを動かせるのは、私と妹達だけか。

あくまでも設備に関する事だけで、蔵書やら利用者やらに関する管理業務はユーノというか司書達に任せていいんだな？」

「その辺は、まだ何も決まっていけないわ。設備の依頼は今のところ内輪の話だし、今後検討すべき点ね。」

さてと、今日は顔を見せに來ただけだし。お仕事に戻らないと」

「今日は、ほんまに顔見せと挨拶だけなん？」

「やはり、ゆつくりする暇は無いか」

「正式に日本に住むことになりそうだから、その手続きもあるのよ。」

それに、エヴァさん達の名前が変わるでしょう？ そっち方面でも、本局は大騒ぎよ」

「やつぱり、まづかつたん？」

「撤回はせんぞ」

「いきなりだったから驚いた事が大きいだけよ？」

グレアム提督は、表立ってアルハザードの関係者だと言えるプレシアさんがクーネさんの主になった事は安心したようだけれど、全員が家族になる事には少し難色を示していたわね」

「3冊の姉妹書を最高評議会に据える時点で、家族が前提だろうに。」

そもそも、リインも含めれば最初から八神が過半なんだから。問題になる理由が解らん」

「ええ。だから少しで済んだみたいね。」

さてと、そろそろ約束の時間が近いから、そろそろ行かないと。」

こちらのお正月には、みんなで来る予定よ」

「そうか、解った。」

年越しくらいは、ゆつくりしてくれ」

◆◆ 騎士団 ◆◆

『ええ。そちらの正月には、リンディさんと一緒に伺いますよ』

「うん、楽しみにしとるよ」

八神はやては、八神家に設置された通信機を使って、カリム・グラ

シアと歓談なう。

「ここしばらく、聖王教会とどんな形で協力するかとか、色々相談してる。」

「はやて、終わったのか?」

「うん、終わったよ。」

「やっぱあれや。原作でも言うと思ったけど、カリムはお姉ちゃん、って感じや」

「人当たりが優しいし、年も近いしな。」

「それで、正月は来るって?」

「その時に、ちよつと長めにいて色々と手続きとかやるらしいんよ。」

「戸籍の確保とか、してへんかったみたいやし」

「というか、テスタロッサ家とハラオウン家以外の拠点組は、全員が違法滞在だったし。」

「長期滞在を考えて、カリム・グラシア、シャツハ・ヌエラ、シルフィ・カルマンの聖王教会組の3人は戸籍を確保する事になったらしい。」

「要するに、聖王教会からの派遣組が、そのまま近衛騎士団という名前に切り替わる。」

「ついでに、更に必要な人を追加投入したい、という意向も伝えられる。」

「お姉様としては、別に人が欲しくないだけで。」

「まあ、あいつらが来るだけなら、特に問題は無いか。」

「日本の生活にも、割と馴染んでいた様だしな」

「最終的には別荘にも、やね。」

「でも、実質的に聖王の側近やから、色々大変とは言うとつたよ。予言もこつちの方が正確に解析出来そうやし、予言をする時だけミッドに戻る事になりそうやって」

「うん、まあ、その辺は何とかしてもらおう」

「そうそう、それとや。」

「今後は、なるべく秘密を作らないようにしてほしい、って言われてしもた。」

「やっぱ根に持つてるかもしれへんよ」

「……まあ、善処しよう」

◆◆◆ 正月に ◆◆◆

「ところでエヴァンジュ、そろそろ、ジュエルシードを回収した証拠を見せてもらっていいか？」

それ自体に意味は無いんだが、何を仕出かしていたのか、興味がある」

ゲームが終わり、それなりに休憩もしたところで。

クロノ・ハラオウンが思い出したように依頼してきた。

確かに、お姉様は見せると言っていた。

「そうだな、見せていなかったな。」

それなら……とりあえず、興味があるだろう連中は全員呼ぶか」

というわけで、大所帯で転移用の広場に集まり。

転☆送っ！

「……ここは、まさか……」

プレシア・テスタロッツサが真っ先に気付いたらしく、目を見開いてる。

「時の庭園、現在改修中だ。」

かなり荒れていたし、いくつか大穴が開いたりもしていたからな。

使える様になるには、もうしばらくかかりそうだ。

もっと大切に使われていれば良かったんだが、とぼやいておこう

か」

「こ、こんなものまで確保していたのか……」

使うにしても、どう説明すればいいんだ、これは……」

クロノ・ハラオウンが頭を抱えている。

報告書には、虚数空間に落ちたとはつきり書かれてるし。

「映像は、荒れ果てた状態のものしかないだろう？」

動力炉のコアを持ち出し、それ以外は無限書庫やらの資料を使って

復元したとでもすればいい。

実際、コアはチクアープが持ち出していたからな。本当に虚数空間

に落ちていたとしても、それなりに似た物は作れたぞ」

「……エヴァンジユ。リニスは残っていないかしら？」

「無理だ。体毛程度はあつたかもしれないが、少なくとも『あのリニス』を蘇らせるには色々と不足しすぎている。」

元々が人工魂魄で、魔力の供給が無ければ消滅してしまう存在だしな。その上、ジュエルシードの暴走する魔力に晒されたはずだ。既に調べてあるが、存在したという痕跡程度しか見付けられなかったな。情報やらも破棄されていたようだし」

「そう……次元空間に身投げするのを放置して色々破棄したのは失敗だったわ……」

時の庭園で死んでないなら、どう足掻いても無理そう。

残念っ！

番外：愛するが故に（クーネのA☒S編裏事情）

いやはや、プレシアさんがリーナのクローンとは驚きですね。若返った姿を見ると、本当にリーナとよく似ています。

エヴァちゃんは何か立ち直ってくれそうですし、アコノちゃん達には感謝しなければなりません。プレシアさんもなかなか良い母親の顔を見せていましたから、このまま良い関係になってくれれば理想的ですね。

あまり道化として役に立てなかったのは妬けるところですが、道化らしく八つ当たりの的になっていれば、プレシアさんの負担も軽くなるでしょう。

さて、問題はこれからです。

エヴァちゃんは、夜天を治療する環境を整えるために、管理局との接触を持ち、スケープゴートとしてプレシアさんを確保しました。

治療するまでの方針としては良いのですが、あのエヴァちゃんが、リーナのクローンであるプレシアさんを、恐らく感謝し慕ってくるであろうフェイトちゃんやアリシアちゃんを、簡単に切り捨てられるとは思えません。私としても切り捨てる気はありませんから、何とかして保護する方向で考える必要があります。

となれば、今の方針を維持出来るのは、夜天の治療が行われるまでですね。最終的には最高評議会関連の犯罪者達、管理局の闇との対立は避けられないでしょう。

最悪の事態になっても、エヴァちゃんなら本局とミッドチルダを丸ごと配下にする荒業が使えますから、力技で何とかするつもりかもしれません。自分だけの意志で滅ぼした事は無いはずですから、精神的に辛いでしよう。人らしく過ごしてもらおう為にも、これは避ける必要がありますね。

プレシアさんの過去を調査した結果として、少なくとも4月以前において原作との差異が小さい事は確認出来ています。つまり、最高評議会、レジアス・ゲイズ、ジェイル・スカリエッティの関係はS t r

ikerSで描かれたものと大差なく、プレシアさんの過去に管理局の影が見えるのも事実であり、違法な内容の管理局関連施設が蔓延しているのも事実です。

それに確か、スカリエッティはアルハザードの遺児とされていたはずです。

レジアスも、正義の為という人參に釣られ過ぎている感じがします。

横槍を防ぐ意味でも、早急に管理局に蔓延る最高評議会の実態を解明する必要がありますね。

……と思つて、ミッドチルダに来てみたのですが。

思つたより簡単に情報が見付かつたのはいいんです。ええ、プレシアさんに関する調査と一緒に調べればよかつた等と感じる程度は、よくある事ですから反省して終了すればいいんです。犯罪者が何人か不審な死を遂げたとか、気にするほどでもありません。それがたとえば地上本部の中に潜んでいた人物だとしても。

ですが、プレシアさんが入院した際に卵子が取り出され、それを使ってスカリエッティが作られたと言うのは問題ですね。確かにアルハザードの遺児と呼べそうな経緯ではありますが、今度こそエヴァちゃんが暴走してしまいますし、今度はプレシアさんも暴れるかもしれません。

少なくとも、敵としたまま放置する選択肢は選べませんね。となると、何とかして“無限の欲望の因子”なるものを排除する手段が必要ですが。プレシアさんのように、魔導具だけで済めばよいのですが。

レジアスと最高評議會は……まあ、今はまだよいでしょう。

「なるほど。つまり私は、手の平で踊っていると。」

「そういう事かね?」

「ええ、そうですよ。」

自由に研究出来る環境を求めている事が、既に自由な意思ではないとしたら。どうしますか?」

さて、ここが正念場です。

無限の欲望の因子、厳密には理性を麻痺させるような魂の改変と、それを安定させるための肉体改造のようなのですが、魂に関しては私の力で何とかする目処が立っています。肉体は難しいですが、胸の魔導具さえ何とかすればどうにかなるはずですよ。

その為にも、この交渉は失敗出来ません。

「ふむ、技術を求める欲求が作られたものである可能性は知っているし、それを満たすのも吝かではない。が、それ以外に何かある、という事かね？」

「ええ。未知なるものへの興味も強いと聞いていますが、正しいですか？」

「未知なるもの、か。甘美な響きだが、今の私にとって生命操作技術がまさにそれなのだよ」

「その技術を使って生まれ、操作された存在だという事は、知識としてはあるのでしょうか。」

では、操作されなかった自分はどの様な存在だったのか。操作はどのような結果をもたらしているのか。興味はありませんか？」

「つまりは本当の私に興味がある、という事なのだろう。」

わざわざ私に接触してまで話をしているのだ。目的は何かね？」

「私の目的は単純ですよ、幾人かの少女達の未来を憂いているだけですからね。」

先に言っておきますが、私が想定している敵は最高評議会です。今は周囲にいる人物を見定めているところですよ」

「なるほど、この場所を突き止める情報力は確からしい。」

だが、今の研究が楽しいのも事実なのだよ」

「そうですね。今の研究は、生命操作技術、それに戦闘機人関係でしたか。それらの、より高度な技術を知っているのですが……知りたいですか？」

「それが手札というわけかね。」

だが、私が敵と判断した場合は敵対するのだろうか？」

「結果的にはそうなるかもしれませんが、私はこれでも約束を守る男

ですから。

そうですね、1週間以内に本当の自分を見る事と、他人に広めない事を保証してもらえらるなら、情報を先に渡しても良いですよ。反故にした場合は排除すべき敵と認定しますが」

「ふむ……敵対しても問題無い自信はあるようだね」

「それはもちろん。ですが、無意味な殺生は好みませんから」

「なるほど、嘘を言っている様子は無いようだ。」

いいだろう、情報はウーノに渡してくれたまえ。納得出来る内容であれば、私の素顔を見るのも面白そうだ」

その後10分ほど待たされただけでOKが出たのは予想外でしたが、魔導具の抽出に立ち会えましたし、同時に魂の改変部分の除去も成功しました。これで、最も大きな壁は越えられたと見て良いでしょう。

後で聞いた話ですが、本物であれば今の研究が無意味になると判断したからという理由は、らしいと言えらしいですね。それに、私自身への興味もあつたようです。

それからの1週間ほどは様子を見ながら情報交換を進めていたのですが、闇の書に関して動いている人達の情報は有り難かったですね。ちゃんと裏を取ってエヴァちゃんに知らせてみたら、即オハナシに動いたのはある意味で予想通りでしたが、意外でもありません。

この頃には、スカリエツティの理性もだいぶ回復し、それなりに信用出来る状態になってくれました。それに、最高評議会関係者からの情報も欲しかったので、地球関係の情報も少々話していたのは確かなのですが。

「程度の悪い転生者とやらを、こちらで確保してはどうかね？」

迂闊な動きをされるより、犯罪者である私の手元に置いた方が、動きを制限しやすいだろう。

転生特典とやらに興味があるから、私に益が無いわけでもない。

一考の余地はあるのではないかね？」

こんな提案が、スカリエツティ側からあるとは意外でしたね。

いえ、少しでしたがアルハザードやエヴァちゃんに関する情報を最

初から持っていた事を考えると、協力的になる事も不自然ではないのかもしれないが。

「いえ、それ自体は願ってもない事です。ですが、この場所がエヴァちゃんに知られるのは、少々まずいですね。」

近い内に、ある人物のクローンを作りたいのですが、その際に設備を借りようと考えていますから。その情報が漏れるのは、かなりまずいのですよ。

そもそも、私がここに顔を出している事自体も問題ですからね」

「ふむ。エヴァンジュ達の調査を避ける技術はあるかね？」

「短時間であれば妨害する自信はありますが、頑張っても1時間、度々行うなら30分程度が限度でしょう。長時間は無理ですね」

「それなら話は早い。他の次元世界にある研究室を使うといいだろう。」

近い内に最高評議会とは手を切るつもりなのでね。この研究室もいずれは閉鎖するつもりなのだよ」

理性が戻った場合は犯罪から距離を置くことは予想していたのですが、やはり「すぐに」というわけにはいきません。しかし、これはいい感じですよ。

なので、喰い付きそうな餌、つまり「原作の情報」を渡してみたら、やはりスカリエッティは面白いですね。色々考え始めているようです。

まずは、この場所がどうなってもいいように、製造中の戦闘機人を別の施設へと移す事。これは逃亡先を確保する意味もありますから、生活環境を整える事を含みます。予定しているクローン製作作業はそちらを使用する事で話が付きましたから一安心です。私は先行でそちらに移り、連絡時のみ強烈なジャマー結界を使用すれば大丈夫でしょう。

それが完了した上で、次は転生者の確保です。

重要な2人の内1人は交渉で失敗したようですし、重要ではない程度のおまけが2人ほどいるようですが、まあいいでしょう。こちらで更生出来れば、エヴァちゃんの負担も減ると思いますし。

などと思っていたのが、フラグだったのでしょうか。

重要だと考えていた1人は落ち着いてくれたのですが、おまけの片方は魔改造ルート、もう片方は我儘放題のまま更生する余地が無い感じですね。

「いつその事、管理局の更生プログラムを受けさせるのはどうだろう。レジラスからの依頼で、ジュエルシードの輸送を襲撃して、詳細な調査を要求されたのだよ。」

私としてはあまり時間が取れないのでね。襲撃を失敗したいのだが、その際に生贄として差し出す事は可能だ。初犯であり、私に諭された等と言えればそう大きな罪とならないだろうが、人格面を考えれば施設行きはほぼ確実だろう。

「どうかね？」

優秀な人物はやりにくいですね。思わず同意してしまったじゃないですか。

仕方ありません。カイゼ君とチクアープがこちらで活動していますから、彼らに話を付けて協力してもらおうとしましょう。

と思っておりますが、正直に言って彼等も優秀すぎです。

エヴァちゃんやクロノ君に気付かれないように舞台を整えた挙句、きつちりとジュエルシードを奪い返した体裁を整えながら標的の1人だけを捕らえるとは。これもチートの一種、主人公体質的なナニカなのでしょうか。逃亡する映像を残して提出する事で、戦闘機人達を表に出せない理由を作り上げる事すらやり遂げていますし。

私としてはチクアープとの協力関係を作れたことが、今回の件で最大の成果ですね。

さて、次は聖遺物を奪うお仕事です。最高評議会からゆりかごに関する進展を要求されているという話は聞いていますが、その一環の様ですね。

ゆりかごを起動する為の鍵に関する情報という、かなり直接的な指示があったそうです。

もちろん、成功させる理由は、私やスカリエッティの中にありません。今回も状況を利用する事にしましょう。今回もあの2人に頼る

のは大人として少々情けないものがありますが、パイプ役として最適な位置にいますから、仕方ありません。

「うむ、この研究所は閉鎖しても問題ない程度になっているよ。」

踏み込ませるのは、やはり聖王教会の予言騎士かね？」

「そうですね。他に適任者も思い付きませんし、エヴァちゃんの関係者が直接交流している教会関係者は、彼女達だけなので。」

将来的な身分を確保する意味でも、手柄はある方が良いでしょう。もつとも、相応の手腕が必要ですので、その試験にもなりそうです。」「うむ、最高評議会の手の者が妨害工作を行うらしいのでね。我々の撤収までに踏み込むことが出来ればよし、出来なければ奪還失敗だ。」

今回は追跡側で参加するという事は、エヴァンジュに存在を知られても良いのかね？」

「変に無視する事で疑われてもいけませんからね。」

聖遺物を追跡する事で、こちらとの繋がりが無い事をアピールしますよ」

ヴィヴィオをエヴァちゃんに紹介するまでは、疑われたくありませんからね。」

ルスターという無人世界の設備は、なかなか優秀ですし。もうすぐ目が覚めるはずですから、ここで監視が強化されても面倒です。いくらカイゼ君に私の居場所を積極的には伝えないよう依頼してあつても、エヴァちゃんに聞かれたら誤魔化すのも難しいですからね。」

さて、予定通りにカリムちゃんに花を持たせ、ミッドチルダから撤収する事に成功したわけですが。」

「近いうちに最高評議会の関係者を殲滅するのだから、この辺で脛に傷を作っておいてはどうだい？」

またですか。しかも殲滅について断定形なのは何故ですか。」

「どうやら、最高評議会とレジアスは黒の騎士団がお嫌いらしく、躍起になって粗を探そうとしているようだ。少々つついてやれば簡単に暴走するだろうし、過剰な行動に出る前に、適度にガス抜きしておいた方が良くはないかね？」

それに、エヴァンジュが誰を警戒しているのか、幾人かは把握出来

ていると言っていたではないか。そういった人物を利用すれば、対策が遅れる事も無いだろう」

しかも、やはり反論の余地が無いじゃないですか。確かにチャチャちゃん達が警戒している人物を動かせば、完全な奇襲にもならないでしょう。

もちろん、結果は予想通りの返り討ちでした。

任務内容やポートの履歴を改竄し、監査依頼を握り潰した証拠は押さえましたから、とりあえず目的は達成しているのですが。

いけませんね、どうも主導権を握られっぱなしです。結果が悪い方向でないのが救いですが。

「父様、どうなされたのですか？」

ああ、ここではヴィヴィオだけが癒しですよ。転生者な人達との接触を避けるために別の区画にいるので、チンクちゃんにも会えませんし。

当面はプレシアさんの裁判や、カリムちゃんとエヴァちゃんとの直接接触待ちですね。余裕がある間に、元オリヴィエ陛下のヴィヴィオに、今の知識を色々教えておくとしましょう。

そう思っていたのは、もう1か月も前になりますか。エヴァちゃんにヴィヴィオを紹介したところ予想通り怒っていましたが、保護対象にも入れてくれました。

計画通り、と言っているでしょう。

ですが、蒐集の進捗があまり宜しくないのが気になりますね。と呟いたのがフラグだったのでしょうか。

「闇の書の存在を表に出すきっかけが必要そうだ。もう一度、管理局に手を出させた方が良いのではないかね？」

それに、起動してない娘達を移した研究所の辺りの捜査が強化されつつあるようですね。担当部署に都合よく動いてくれそうな人物もいるようだから、気をそらす餌としても有効そうだな」

どうしてこう、悪くない提案をされるのでしょうかね。

確かに、未起動の戦闘機人を見付けられるのも、あまり好ましくありません。闇の書を表に出すには何らかのきっかけがあった方がや

りやすいでしょう。

ああもう、この提案に乗る方が良いと思ってしまうあたり、駄目駄目です。

「随分と気にしてもらえているのは嬉しいのですが、ここまで来ると、少々警戒したくなるのですが。」

人が変わり過ぎではありませんか？」

「アルハザードの英知の結晶と渡りを付けられる可能性があるのだから、この程度の先行投資は必要だろう。ああ、楽しみだ。最終兵器と呼ばれながら研究者の最高峰にまで上り詰めた、曙天の指令書、エヴァンジュに会えるのが楽しみで仕方ないのだよ。」

その価値は、私が作ってきた全ての技術をはるかに超えるのは間違いない。最高評議会が必死に隠してきたアルハザード、あらゆる魔法が究極の姿と言わせる程の実力があつた国の技術を、多く持っているのだろうか？

その一端に触れられるのならば、最早価値の無い最高評議会に関する全てを投げ捨てても利益しかない。そう思わないかね」

……本質的には、変わっていませんか。ですが、触れる事が重要であつて、得る事は重視していない様にも聞こえますね。

しかも、本人も気付いているかどうか不明ですが、自身の身内と認めた相手には少々甘いところもありますか。この辺は、リーナの血のなせる業なのかもしれません……この情報は、いつ伝えればよいのでしょうか。既に本人も知っている可能性も無いではありませんが、証拠や詳細情報を持っていないので、説明し辛いのですよ。

悶々としているうちに襲撃は完了し、無事に闇の書発見という形で動き出しましたね。

というか、襲撃した局員が関与を認めるとは、いったいどんな伝手で何をしたのか、気になります。都合よく動き過ぎでしょう。

それよりも、無限書庫です。結界が意外に堅牢ですし、ここはユーノ君の出番ですね。予想通り調査員として送り込まれるようですし、転移目標……いえ、最初からこっそり同行した方が良いかもしれません。

もちろん、エヴァちゃん自身が乗り込んできて、無限書庫の機能を掌握してしまったのは予想外です。流星に斜め上過ぎたので、エヴァちゃんに地球へ戻るよう促したのですが……

「私達やユーノ・スクライアだけでも、調査は出来る。」

ここに居座っている理由は何？」

流星に、常駐しているチャチャちゃんの目は厳しいですね。

ここはひとつ、賭けに出るしかなさそうです。

「いえ、エヴァちゃんにまだ知られたくない情報を隠したいのですよ。チャチャちゃんが隠してくれるのであれば、私も調査に協力する方向で力を使えるのですが」

「内容次第。お姉様を知る事で不利益が発生するなら、隠す事も必要と判断する。」

知った方が良い事であれば、報告する」

「それでは、エヴァちゃんの心を乱す情報は、どの様な扱いになりますか？」

せめて夜天の対処が終わるまでは、そちらに集中してほしいと思っていますのですが」

「……不利益と判断、するかもしれない。」

それでも知るべきと判断する可能性は否定しない」

ふむ、思ったよりも思考を維持していますね。エヴァちゃんの考え方が影響しているのかもしれませんが、独立した存在として仕えている、という感じですよ。

リーナの言っていたイレギュラーのひとつですが、チャチャちゃんの感情や行動は、思っていたよりもエヴァちゃんに依存していないようです。これならば。

「では、夜天の対処が終わった後に発生するであろう騒動の予測とその対処を、私達で開始しておくというのはどうでしょう。」

事後に動けば後手に回りやすいですし、動きを知られたらエヴァちゃんの気が逸れる可能性もあります。それでも、一筋縄でいかない可能性くらいは予測出来ているでしょう？」

「それは否定しない。だけど、それは報告すべき情報と判断する」

「対処手段の選択理由に、まだエヴァちゃんに知られたくない情報を
含むのですよ。」

せめて、夜天の対処が完了して、気持ちに余裕が出来てから知らせ
たいのです」

「内容次第。どの程度知られたくない情報か、判断材料は？」

「そうですね、プレシアさんの卵子が本人の承諾も認識も無しで取り
出されていて、それから作られた人物が最高評議会の手下として動い
ていると言え、衝撃の大きさは理解してもらえますか？

遺伝子的に、リーナの子に相当してしまうのですよ」

「……確かに、お姉様に言い辛い内容。」

その人物を協力者として取り込む予定？」

「ええ、そうです。それと、闇の書関係で動いている提督達にも協力し
て頂くと、より安全な道を選択しやすいと考えています。」

いかがですか？」

「その道とは？」

「現在の最高評議会を排除した上で、エヴァちゃんを時空管理局の監
視者という立場に据えます」

「本気？」

「もちろん、本気ですよ。」

まず、独善的な野望を持つ最高評議会の排除は前提です。プレシア
さんもそうでしたが、エヴァちゃんやアルハザード関係の情報を持つ
ている人物がいるのですから、闇の書の脅威が無くなれば余計な手出
しがあるのは確実です。

この情報が外部にまで漏れてしまえば、管理局としては何らかの対
処をせざるを得なくなるでしょう。そして、公ではないとはいえ既に
拡散していると思われる、どこまで広まっているかも不明な情報を秘
密のままにするなど、現実的に考えて不可能と言わざるを得ません。

だからと言って、管理局まで殲滅すれば、今度は治安が悪化するで
しょう。当然、犯罪者が溢れる事になります。

これらを回避するには、少なくとも管理局と敵対しないという明確
な姿勢を示す以外の手は無いと言っていいのですよ。最も有効な手

段はエヴァちゃんが管理局の中に入り込む事ですが、アルハザードの頂点に立つことすら拒否したエヴァちゃんに、管理局を支配する気は無いでしょう。だからと言って管理局に所属すると、上に立つ者が暴走する可能性が高いです。

もちろん、完全に関係を断つという選択肢も存在はします。ですが、これは日本での生活を放棄するという前提が必要ですし、関係者達を見捨てるか連れて行くという選択をしなければなりませんから、現実的ではないでしょう。

であれば、管理局が妙な事をしないか監視する立場、指揮系統の上ではなく、力関係での上に立つのが最も無難です。

君臨すれども統治せず、という表現が適切かもしれません」

「……考えてみる。」

とりあえず、この話は秘密にしておく」

「それは何よりです。」

そうそう、プレシアさんの遺伝子的な子は、ジェイル・スカリエツティですよ。

無限の欲望の因子を抑える事は成功しましたし、最高評議会の悪事の証拠を用意しながら、関係を徐々に断とうと動いています。

この調子であれば良い協力者になってくれると思いますが、まだエヴァちゃんに知られたくない本当の理由は理解して頂けましたか？」

「……………本気で、考えてみる」

ええ、この時の「本気」の結果は、私としても予想外でしたね。

チャチャちゃんが禁書庫と呼ぶ領域の情報を、エヴァちゃんに隠したまま流してくれるようになりました。

当然、スカリエツティがプレシアさんの卵子から作られた事を示す資料も見付かったので、これはそろそろ教えるべきだという事ですね。それに、プレシアさんの出生についても説明しておくべきでしょう。

「そうか。なるほど、道理で会った時に近しいものを感じたわけだ。

まさか歴史に残る大魔導師の子、真実にアルハザード人の血を引く存在だったとは驚きだ」

「おや、驚きと言う感情があつたのですね」

「私を何だと思つているのかね。」

だが、ふむ。私はプレシアを母と呼ぶべきなのだろうか？」

「全力で拒否されると思いますし、呼んだ結果の責任は取れませんが、ご自由にとしか言えませんよ」

「まあ良い、本人に確認してみる事にしよう。」

父と呼ぶべき存在はどうだったのかね？」

「幸いかどうか不明ですが、既に亡くなつているようですよ。」

古代ベルカの技術者を元にしたクローンだったようですが、稚拙な技術で作られたせいあまり長く生きられず、名も残せなかつたようですね」

「それは残念だ、プレシアと会わせてみるのも面白そうだったのだがね。」

ところで、黒の騎士団と守護騎士の関係が疑われ始めたようなのだが……解決策は必要かね？」

襲撃ですね、解ります。ええ、黒の騎士団と守護騎士が同時に存在すれば、少なくとも同一人物とは思われないのは解ります。

この辺の状況を見て判断出来る人物が、どうしてStrikerSで失敗……いえ、あれはなのはちゃんの無茶を読み切れなかつたせいだと言えますか。天才に勝てるのは天才、なのですかね。

さてと、セツナちゃんの眷属化や、アギトちゃんの救出は、私は関与していないのですからきちんと言話を聞くまでは知らない方が良いでしょう。

ですが、はやてちゃんが倒れた事は見逃せません。時間が無いという報告書も提出するようですから、そろそろ動く必要がありますね。その案も、スカリエツテイのものがベースになって居る辺り、かなりどうかとは思いますが、有効な手段である事は確かです。聞いてしまえば、他の道が平穩ではないと思える程度の威力は、流石です。

最初に説得すべきは……やはり、グレアムでしょうか。正論を振りかざして最高評議会を排除する役目は、彼が適任でしょう。エヴァちゃんを象徴的な立場に押し上げる際も、今までの実績は有用な筈で

す。

手土産は、最高評議会の悪事に関する各種資料が良いでしょう。

「ふむ。実現は困難だと言わざるを得ないが……」

本当に、この様な手段しか残されていないのかね？」

「私の頭では、これ以上の良案を思い付かなかったのですよ。」

提督の計画を止める際に、かなり強引な説得、いっそ脅迫と呼べそうな話し合いがあったと聞いていますが、あの力を破壊に向かわせない唯一の方法だと考えています。

加えて、時空管理局の歪みを正し、より良い未来を目指す事が出来ます。

エヴァちゃんに権力を持つ気はありませんが、動きを警戒するのは一緒でしょうからね。どうせ警戒されるなら、管理局内部の腐敗を抑止する役に立つてもらった方が有益だと思いませんか？」

「案について、理解は出来ているよ。」

だが、どの様に実現するのか、が問題なのだよ。私も、道を踏み外した者だ」

「道を踏み外したからこそ、正規でない場所を歩けるのですよ。」

今の法には、最高評議会の退任に関する規定がありません。力技で周囲を納得させない限り、諸悪の根源を排除出来ないのですよ。もちろん、殺害という手段に踏み切るなら話は別ですが、断罪し辛くなるのでお勧めしません。

私としては、時空管理局内部の腐敗を一掃する為に行動する事を勧めします」

「その対象が最高評議会である、と？」

「最高評議会も含まれる、ですね。」

犯罪者を指導者と仰ぎたい人はいないでしょうから、事実上の退任としても反論は出ないでしょう。その上で、エヴァちゃんを後釜に据えるのが無難です」

「時空管理局の頂点に立たせるつもりかね。」

それは誰も納得しないだろう」

「無限書庫正常化の実績があり、その頃には闇の書対策の実績も増え

ているでしょう。加えて、エヴァちゃんは広大な土地と人を保有していますから、国王に近い肩書も持っているのですよ。

それに、エヴァちゃんは権力を嫌がりません。恐らく拒否されますので、権力の返還という条件を付け、それを利用して最高評議会を監査役という立場に変えてしまうのです。

そもそも、顔の見えない最高意思決定機関というものがまかり通っていた事が問題なのですが、今の法にそれを覆す手段はありません。ですから、権力を嫌がるエヴァちゃんを最高評議会という立場にし、最高意思決定機関という立場を使って権力の返還を行う。これが、悪しき構造を解体する最適な手段だと考えます」

「……彼女には、それだけの力と価値がある。

私はそれを、どう信じればいいのかね？」

「エヴァちゃんは単騎で、闇の書と戦える事を保証しましょう。そして、今のエヴァちゃんが使える全ての力で戦う気になった場合は、管理局と戦ったとしても確実にエヴァちゃんが勝ちます。それだけの力や手段を持つのですよ。

しかも、無限書庫を掌握しつつありますからね。管理局の内部情報もエヴァちゃんに筒抜け、技術情報も見放題です。そういえば、本局機密区画の見取り図と、ロック機構の設計書を見付けたと言っていましたね。

そもそも、本局内に部外者、つまりチャチャちゃんや私が気軽に入りしている時点で、力の差は明らかでしょう。管理局を内部から崩壊させる事くらいなら、私でも可能ですからね。

「これでもまだ信じる事が出来ませんか？」

「彼女は秘密主義なのか、手の内をなかなか見せてくれなくてね。

確かに本局に入られたのは事実だが、それ以外については、な」

「エヴァちゃんが力を見せる時は、覚悟を決めた時だけでしょから、仕方ありませんよ。

力を隠しているのは、事を荒立てたくないと思っっているという、この1点が全てです。逆に言えば、事が荒立ってしまったえば力を使わない理由が消滅します。

管理局が荒立ててしまえば、力は管理局に牙を剥くでしょう。その際は、最低でも本局とミッドの全滅は覚悟して下さいね。

エヴァちゃんが本気になれば、確実に1人も生き残れませんので」「……冗談、では済まないのだろうね」

ええ、済みませんよ。エヴァちゃんが覚悟を決めたら、広域剥奪で壊滅させるでしょうから。

とは言えませんが、どうにか納得してもらえたようです。手土産として最高評議会関係者の悪事の資料を渡してきましたし、エヴァちゃんとプレシアさん、ついでにグレアムを英雄に祭り上げる事も提案しました。

リンデイさんやレテイさん達と相談するそうですが、次回までに方針が固まるでしょう。

「引き入れられそうな人物の選定を依頼するわ」

……ええと、次回とはこんなに早いものなのでしょうか。

翌日にレテイさんからの連絡があるとは予想外ですよ。

「つまり、後ろ暗くない人の選別ですか？」

「それもあるけれど、後ろ暗くとも、やむを得ない事情があるとか、実態を知らないとか、更生出来る可能性がある人物の情報がより重要よ。」

あの資料だと、優秀とされている人や、重要な役職に就いている人の多くも後ろ暗い事になっているから、現状だと指揮系統がそのまま敵対勢力になってしまおうわ」

ご尤もです。もつとも、これはチャチャちゃん驚異の調査力に期待でしょうか。私の能力は個人相手の情報収集には向きますが、集団を調査するには向きませんからね。

ですが、更生出来る可能性がある人物、ですか。

レジアスを説得出来れば、ミッドの地上については動揺を防げますかね。ゼストがまだ生きていますから、そちらから手を回せば説得出るかもしれませんし。

それに、執務官の上役や艦隊司令辺りには、グレアムの顔が利く人もいるでしょう。

押さえるべきは、実働部隊の指揮に関わる人達ですね。監査は今までの実態を公開すれば事実上の崩壊に追い込めるでしょうから、怖くありませんし。

この方向で、チャチャちゃんと相談しましょう、そうしましょう。またチャチャちゃんの手の早さに舌を巻く結果になるのでしょうか、未来の為です。何の問題もありません。

さてと、手は尽くしました。

各所への根回しも順調、プレシアさんの英雄化も本人の許可を貰えましたし、グレアムに日本の奥義D O G E Z Aも教えました。後は夜天の治療を待つばかりなのですが。

『全員アースラに戻れ、邪魔だ!!』

どうして、こうも世の中はままならないのでしょうかね。

「ふむ、これはあまり好ましくない状況ではないかね?」

「この後の展開次第ですね。あまり被害が大きくならなければよいのですが。

力を見せるという判断をしたという事は、最終的な説得には好材料ではありませんし」

「だが、闇の書もなかなか手強いようだ。

ウーノ、魔力反応は?」

「オーバースが400、ニアSが600、AA以下が100を超えたところまでカウント出来ました。計測器が限界です。

また、広域の結界が張られました。これ以上の観測は不可能です」
「ふむ、所詮は哨戒用の設備か。

エヴァンジュは、あれと正面から戦っているようだが……個人の戦力だとは判断しにくい。空間から突然放たれている砲撃を行っているのは、何かね?」

「威力や数を考えると、チャチャちゃんでしょう。

見た感じでは、数百人は攻撃に参加しているでしょうか」

砲撃の高速連射など、それなりの人数でなければ現実的ではないでしょう。他の場所からの攻撃も行っていますから、ひよつとすると1000人以上かもしれません。

しかし、チャチャマルにチャチャゼロ、それに、恐らくセツナちゃんの眷属化もこれで情報が漏れる事になるでしょう。自棄になつたわけではないでしょうが、形振りを構うよりも、夜天の、リインフォースの事が大切という事ですか。

『私の為に生き足掻けリインフォース、私にこれ以上家族を殺させるな!!』

……なるほど。思ったよりも、外間より家族を、姉を優先するのですね。

ですが、これは好都合です。この会話は、悲劇の魔導書であるリインフォース、必死に姉を助けようとする人道的な兵器^{エヴァちゃん}という構図で広める事が出来ます。

必要な種は、チャチャちゃんやスカリエツティと共に、既に準備してあります。

提督達は、今後のプランで既に行動を開始しています。

協力者達の説得も順調です。

ヴィヴィオにはゆりかごの存在を教え、権力を持つ者としてエヴァちゃんの傍にいる事を了承してもらっています。

これだけやったのですから、後は確実に芽吹かせるだけですな。

茶番劇ですが、エヴァちゃんの平和な未来に必要な、最後の一押しとなる舞台です。高官の人達は夜天と曙天の確保が秘密任務なのですから、うまく踊って下さいよ？

番外：小話ズ その7

◆◆ 終わりが見えるならば（漂流編） ◆◆

これは、主を殺す書。

昔はゆつくりと命を奪っていくだけだったらしい。けれど、今では魔力も使えなくなる、魔導師として致命的なもの。

魔導師として殺してしまいう書。命を蝕み、ゆつくりと殺していく書。

……こうして目の前に現れると、怪談の一種だと思っていた話が、本当だと思い知らされる。

しばらく前までは、私は国でも上位の魔導師だった。

それが今では、最底辺。魔力が感知出来ないほどに低下し、魔法も当然使えない。

同時に、夢を見るようになった。

どうせ、仕事などありはしない。元々戦争の最前線で戦う事しか知らなかったのだから、力を無くせば役に立つ事など出来はしない。

未来に希望など無く、戦友達も手の平を返した。なまじ実績を持つだけに、交渉の生け贄くらいにしか使えない。それも無理なら、死ぬだけだ。

戦争が続くこの国に、役立たずを養う余裕はない。私が上司でも、そう判断する。

だけど、眠る時だけは、夢を見る。

不思議な、夢を。

「オー、今度ノ主候補ハスゲーナ。精神りんくヲ使エル程度ニ起動出来タノハ、久シブリダゼ。」

シカモ、オレタチノ事ヲ知ツテルミテータナ？」

出会ったのは、いまいち言葉を聞き取りにくい、少女のようなナニカ。

体の小ささから融合騎かとも思ったけれど、どうも違うらしい。

「フリーケド、ゴ主人ノ魔力消費ガフエチマツテンダ。」

オレたちモ好きデ魔力ヲ馬鹿食イシテルワケジャネーシタダ、ドーニモナラネー。

解析ハサレタクネーシ、愚痴ヤ苦情ヲ聞ククレーシカ出来ネーケド、勘弁シテクレヤ」

詳しく聞いてみると、この「ご主人」とかいう人物が融合騎らしい。

私が書の主ではないのか？ と聞いてみると、どうも微妙にややこしい。

「オレノ役目ハ、書ノ主トゴ主人ヲ守ル事ダ。ゴ主人ハ書ノ管理人ミテーナ感ジデ、ゴ主人ノ主ガ書ノ主、ミテーナ感ジダ。

書ノ主ハ空席ダシ、ゴ主人ハゴ主人ダ。アンタハ主ノ候補デハアルケド、主ジャネーシタダ、解ツタカ？」

よく解らない。

だけど、候補から魔力を奪うのはおかしいと抗議はしてみた。

「魔力ガ溜マツテゴ主人ガ目覚メネーシ、書ノ主ニ出来ネーシタダヨ。

違ウ方法ダト、今ントコ死亡例シカネーシ。ヤツテランネーゼ」

そのところも詳しく聞いてみたけど、書の主になる方法は2つあるらしい。

1つ、書の管理者による承認と登録。安全だけど、管理者が目覚めない不可能なのに、以前の主が死んでから目覚めたことが無いらしい。

もう1つ、このよく解らない存在による登録。感情の暴走で死に至る。

普通に考えれば、ゆっくり死ぬか、急いで死ぬかの2択。

「オレガ言ウベキジャネーシタダガ、止メタ方ガイイゼ？」

感情封印モ試シタケド、試シタバーサンハ死ンジマツタ。オレカラ見テモ、術式ハ完璧ダツタノニダ。アンタハ魔法ヲ使エネーカラ、オレカ他ノ協力者ガ封印スル事ニナルンダガ、正直アレヲ超エル封印ハ出来ネーシト思ウゼ」

だけど、私には時間が無い。殺されるか、死ぬかが選択肢。

生きる可能性は、候補ではなく、主となる事。

「生キルタメニ命ヲ捨テルカ。イイネイネ！」

ソナヤツハ嫌イジヤネーノダ。協力シテヤンヨ」

成功例の無い、危険な賭けでも。

それしか未来に続く道が見えないなら、私は……

◆◆◆ magician's operation (Axs編4

1.5話) ◆◆◆

「エヴァンジュ、この魔力はいつたい……？」

リインフォースが転移してきたけど、顔が引きつってる。

惑星破壊が可能なレベルの集束を維持してるから、そりゃあ膨大な魔力があるけど。

『気にするな、ナハトヴァールが活動を再開した時の備えだ。』

さてと、念のため確認だが、ナハトヴァールは停止しているな？」

「ああ、問題ない。しばらくは再生する事も出来ないだろう」

『管理者権限でも止めてるし、何日かは大丈夫な筈や』

『そうか。ならば、まずナハトヴァールを切り離して初期化するぞ。』

その上で、はやてとナハトヴァールが繋がってるパスを、リインフォースに切り替える。

この時に守護騎士も切り離されるが、1時間程度は大丈夫という判断に影響する何かはあったか？」

「元々1日以上余裕があったのだ、それくらいは問題無い。それに、今は時間の進みが遅い場所にいるから消耗もしていないはずだ。再接続の作業を終えるまで存在や記憶を維持する事に障害は無いだろう。」

パスが切れるならば私はしばらく眠る事になるだろうが、主が目覚めておられる。転生の発動も抑える事は可能だ」

『そうか。はやて、支援はあった方がいいか？』

『一人で全部やる自信は無いし、お願いや』

『よし、手順は先に説明していた通りで行けるはずだが、何があるか判らんからな。慎重に進めるぞ。』

まずは準備からだ。管制通信開始……接続は問題無さそうだな』

『何か声が二重に聞こえるから、変な感じやね』

『2系統での同時通信になるから、どうしてもな』

『そうだ、今のうちに強制介入キーを更新しておこう。』

受け取ってくれエヴァンジェリオン』

『それと、管制通信でも内部に手を入れられるよう許可しとかんと』

新しい強制介入キーを受領。

それと、管制通信に権限が付与された模様？

『要らない……とは、言い切れんか。予想外の事も多かつたし、有難く受け取っておこう。』

次は、ナハトヴァールだ。リンク部分を一度閉じるから、同時に守護騎士とも切り離されるはずだ。

余裕はあるはずだが、ここからは基本的に事前に必要と判断した確認と修正に止め、なるべく短時間で終わらせよう。心の準備はいいな？』

『あとちよつとや。リインフォース、気張っていこな』

『はい、我が主』

『よし。なら、ナハトヴァールの切断だ』

『よつしや、やるよ！』

八神はやてが元気に宣言した直後、リインフォースの魔力が急減？

これはちよつと予想外だけど、守護騎士システム及び防衛プログラムの分離を確認。

『やはり、一筋縄ではいかんか』

『だが、致命的ではない。我が主、ナハトヴァールの初期化を』

『手順は大丈夫や、急いでやるよ！』

八神はやて主導での、ナハトヴァール初期化手順開始。

不要魔力の解放を開始。過去の主の魂及びリンカーコアが順次消滅。

記憶のログを受信……ちよつとえげつない内容が多そうだけど、一応記録。

権限の降格に成功した模様、接続パスの小規模化も確認。

休止状態のままだから確認し辛いけど、思考パターンも正常化出来てるはず。

『次、一時的にリインフォースを切断、接続部分を変更した上でナハトヴァールが使用していたパスに切り替える。』

再接続が完了するまではやて1人の作業になる予定だから、慎重にな」

「我が主、お願いします」

『うう、やっぱ緊張するわ。』

けど、これ乗り越えな平穩は掴めへん。リインフォース、切だ……』

八神はやての意識が飛んだ!?

大変、転生の予備動作が始まってる。

『チツ、管制特権発動、強制介入!』

私は転生を抑え込む。キーを使っている、早急に改変を!』

了解、リインフォースの改変を開始。

接続部分を拡張、魔力のパスを旧ナハトヴァールの水準まで高める。

損傷が色々ありそうだけど、あまり構ってられない。致命的そのようなの以外は情報記録のみで。

転生先の選定機能が走って、主の保護機能が機能低下。

「はやては私が守る。みんなは、作業を優先で」

主の保護魔法?

宇宙だから必要だけど、正直有り難い。

リインフォース内に、怪しげかつ強力な封印を確認。魔力関係じやなさそうな部分、記憶に関するもの? ひよっとすると砕け得ぬ闇かもしれない?

『記憶なら後で返せばいい、切り離して保護!』

了解、封印ごと切り離して確保へ。

魔力制御機構に致命的損傷を確認、これは回復しないとまずそう。

ナハトヴァールの制御機構も破損がある。なるべく回復へ。

『リインフォースは大丈夫だと言っていたんだが……どれだけ弄られ

てるんだ、まったく。

リンカーコア関連は？」

出力の劣化を確認、伝達部分に余計な追加や破損にしか見えない
変を多数確認。

ある程度は除去や修復を試みるけど、時間が足りない。

『再接続と起動に必要な分を最優先、他は後回しだ。はやての命に
関わらないなら記録だけして放置していい。』

転生の抑制もあまり持ちそうにない。急いでくれ』

魔力回路自体は、もうすぐ接続可能。

魔力制御機構も応急処置は何か。

再接続……開始、魔力結合を確認。

『転生は止まったか……はやてとリインフォースは無事か？』

状態は安定、意識は戻ってない。

無限再生は……現在再生機能が停止。一気に改編したから状態の
確認中かも。

「このままだと守護騎士が外れる？」

『それもまずいな、守護騎士の再接続もこっちでやるしかないか。』

食糧保存庫から出せ。騒ぐかもしれないが、力尽くでもいいから黙ら
せろ』

了解、守護騎士を食糧保存庫から転送。

状況を纏めて転送、確認してる間に接続処理開始。

『ちよつと待て、はやては無事なんだろうな!?!』

『うるさい！ 無事にするためにこっちも必死なんだ手を取らせるな
!!』

……騒いで怒鳴られた八神ヴィータがちよつと不憫。

でも、黙ったのは確か。リインフォース経由での接続を完了。

魔力供給、そっちは問題無さそう。

『リインフォースが繋がっていた。パスからの魔力漏れが止められなく
なった。ナハトヴァールで塞ぐぞ』

安全を確認してからやりたかったけど、まだ八神はやてもリイン
フォースも目覚めてないし。

ナハトヴアールの初期化は一応完了済み。接続部分も一応繋げそうな水準。

再接続開始……浸食の反応を確認。

ああもう、次から次へと。

『もつと基盤の部分に……人工リンカーコア自体が問題なのか!？』

やむを得ん、ナハトヴアールは私が何とか抑える。今のを封印して予備に差し替えろ!』

あのレベルのは滅多に出来ないのにー。

でも、確かにこのままだとかかなりまずい。

ナハトヴアールのコアの座標特定、封印っ!

無限再生が反応、封印が侵食されてる。

『このっ……無限再生機構に介入、はやてを真の主として取り込ませて負荷をかける。』

リインフォース側のパスの維持を!』

真の主になるかどうかは、選択の余地があるはずだったのに。

お姉様も主も望んではいたし、そうなるよう仕組んでもいたけど。

『責任は私が持つ、早くしろ!』

はい。

八神はやてとリインフォース間のパス、補強及び監視強化。

リンクの強化を確認、無限再生機構及び転生機構、反応……接続を確認。

封印の侵食が停止、ナハトヴアールのコアの切り替えに成功。八神はやてとの再接続を開始。

『……やばい。はやてとリインフォースのパスが太くなりすぎた。』

しかも、リインフォースの人工リンカーコアが、普通に稼働出来る状態になっているよな?』

えーと……融合事故率、ほぼ100%?

ユニゾンよりも、取り込みに近い感じになりそう。

リインフォースからの魔力供給は、多すぎて八神はやてがやばい。

その制御に神経を使うより、リインフォースが取り込んで無双した方が確実。

ユニゾンデバイスとして色々間違ってる。

『ま、まあ、私が怒られるだけで済めば問題ない。』

……詫びも兼ねて、なにか考えるか』

「それより、はやては？」

ナハトヴァールは再接続完了、浸食等は見られず。

現在は無限再生機構が状態の確認中。そのうち回復が始まるはず。

八神はやてとリインフォース、意識レベル上昇を確認。

もうすぐ気が付く。

『ふう……何とかなった、と言っているのか……？』

「言っていた結果にはなってる。大丈夫」

『だといいんだがな』

◆◆ 一発ネタIF（もしも告白されたら） ◆◆

誰か 僕と付き合ってください！

シグナム 弱い男に興味は無い。どうしても言うなら、実力を見せてみる。

（竹刀か木刀を突き付けながら）

誰か 君の味噌汁が飲みたい！

シヤマル いいんです。どうせ私は料理下手なんです。何かやって馬鹿にされるんです……

野火乃の 結婚を目標にお付き合いしてください！

ヴィータ 断る！ 青い狸に依存してるメガネみたいな名前に誰がなるか!!

誰か 好きです！

はやて うーん、エヴァさんより男らしい人やないと、なんかこう、ぐつときいへんな。

誰か 君が欲しい！
アコノ 私はエヴァアの。他の誰のものにもならない。

誰か 君が欲しい！
セツナ ええと、エヴァさんが持ってますけど。

誰か 好きです！

エヴァ それは、私が性同一性障害だという事を認識した上での
発言か？

まずは私のどこが好きなのか、次にお前が私にとってどんな存在か。

更に、最高評議会の議長である私に関係した際に発生する懸念事項を説明してみろ。

◆◆ 一発ネタ（食事） ◆◆

エヴァ ……これは、オムライスでいいんだな？

早苗 そうだよ。可愛いでしょ？

エヴァ 卵を布団に見立てているのは、問題ない。

そこから顔を出すチキンライスがクマになってるのも、可愛いと認めよう。

だが、ケチャップと旗のせいで殺害現場になっているのは、何とかならんのか？

エヴァ ……チュロス、なのか？

シヤマル ええと、目標はそうだったんですけど……

エヴァ 味は、まあ、それなりか。だが……

シヤマル そ、その、目を瞑って食べてもらえると助かるんですけど……
ど……

エヴァ 見た目が劣化したかりんとうになってるのは、なんだ。
実に食欲をそそらないというか、何と言うか。まあ、頑張

れ？

エヴァ とりあえず、言い訳を聞こうか。

シヤマル ええと……パスタは好きですよね？

エヴァ そうだな。割と好きだ。

シヤマル ショートケーキとか、クリームを使ったケーキも好きですよね？

エヴァ そうだな。

シヤマル アンパンとか、羊羹みたいな和菓子も好きですよね？

エヴァ そうだな。

シヤマル 和菓子を食べてる時って、お茶を飲むことが多いですよね？

エヴァ そうだな。

シヤマル だから、全部の要素を合わせるとすごく喜んでもらえるんじゃないかと……

エヴァ 何でも混ぜればよいというものじゃないぞ。

切ったら、私も食べてやる。まずは自分で一皿食べてみる。最後まで遭難せずに食べ

シヤマル うう……遭難なんて酷いです……

エヴァ どの山の甘口抹茶小倉スパゲティだ、全く……

◆◆ 一発ネタ（その他） ◆◆

鹿乃 えーと、俺達も訓練に誘われたんだが……

エヴァ 昼からの訓練か？

テスタロツサ、高町、月村、親衛隊、近衛騎士団の大半が参加予定だと聞いているが。

千晴や亜美も来ていたし、転生者の多くにも声をかけていたのか。

鹿乃 マジか!?

エヴァ 半裸ボディービル装備で、大丈夫か？

鹿乃 ……いや、かなりやばい。羞恥心も実力も。
エヴァ 死ぬでないぞ。
鹿乃 止めてくれ、縁起でもねえ！

はやて 寿司も握れるって、どんだけ万能なん？

早苗 見様見真似だし、そんなに上手とは言えないよ？

アコノ 普通に食べるには充分以上。これの味付けは好みかも
しれない。

すずか あっ、私のお稲荷さん……

アコノ ごめん、気付かなかった。

はやて えーと、アウト……やね？

エヴァ どうだろうな。

エヴァ 漫画か？

アコノ テニス玉の様子、だって。王子様とは随分違う。

エヴァ ……名前が似てるだけ、なのか？

ちくわぶ ゲームで御座いますか。

カイゼ やりたいのかい？ だけど、このゲームは3人用なん
だ。

ちくわぶ おお、その台詞を生で聞けるとは。

セツナ 本場に3人用ですけど。

はやて 3人用のリバーシやね。

ちくわぶ マスが6角のもので御座いますな、確かに3人用で御座
います。

座 いますしょうか？
いやはや、脛夫はこの様なものを集めていたという事で御

カイゼ さあね。

アリサ ねえ、魔王みたいな事をする気は無いの？

エヴァ 無いな。

というか、ゲームやらでありがちな、世界征服やらを企むタイプの魔王の話か？

アリサ 眷属やら従者やらって、色々な意味で人と違うじゃない。

人と魔族みたいに対立すると、その頂点だから、魔王。違う？

エヴァ まあ、そう表現する事は出来るだろうな。

そうならないよう、色々手を打っているわけだが……

アリサ それで、退治しようと勇者がやってくるわけよ。

エヴァ 魔王は確定なのか。

そうなる……そうだな、とりあえず対立を解消するため
の交渉でもしてみるか。

アリサ 世界の半分を、とかって話？

何かのゲームであつた気がするけど。

エヴァ そうだな。どこその魔王が勇者を勧誘する際のネタで使っていた、有名な話だ。

勇者と魔王それぞれが支配する地の対立に変わるだけだ、
とかでな。

アリサ 駄目駄目じゃない。

エヴァ まあ、一時的であれば、やり方次第では悪い方法でもないぞ。

話を聞かない人の王や、力や恐怖で支配する魔王が上にいるより、という程度だがな。

交渉出来て国民が希望を持てる分マシだ、とは言えるだろう？

アリサ それって、マシって言うていいの？

エヴァ 大勢の命に直接関わる争いが無いだけ、マシだろう。

大航海時代と、第2次世界大戦と、冷戦。

世界的に見てどれが平和に近いか、と考えると近いかな？

アリサ 大航海時代って、植民地とか奴隷とかでしょ。大戦はあれだし。

だけど、冷戦時代にも戦争はいっぱいあったわよ？

エヴァ 巨大な兵力の直接対決や、多数の奴隷を生み出す事が持て囃されるよりは少しマシだ。

それに、仮に世界が1国の下に統一されたとしても、争いは無くならん。

例えば資本主義社会は、経済戦争という名の戦いに明け暮れる運命を持つ仕組みだ。

貧困層という奴隷の上に成り立ち、常に多くの敗者を生み出している。

アリサ うーん……解決策って、無いわけ？

エヴァ 究極的には、無いな。統治や経済の仕組みが変わっても、別の問題が出てくるだけだ。

結局はその時代に適しているのはどんなものか、という話になる。

アリサ 一番いいもの、つてのは無いわけ？

エヴァ 無いだろうな。

地球や管理社会は、基本的に貨幣経済だ。だが、別荘には貨幣が存在していない。

日本から貨幣制度を無くしたら、恐らく社会が成り立たない。

今の別荘に貨幣制度を持ち込めば、維持もままならなくなる可能性がある。

この時点で、一番が決められないじゃないか。

アリサ ……別荘でお金って気にしてなかったけど、無かったの？

エヴァ 無いぞ。みんな協力する、自分出来る事をする、というのが基本スタンスだ。

空間の維持といった、やらなければ致命的なものもあるしな。

アリサ それでも、全員が同じ考えってありえるの？

信者って感じだし、同じだって言われても納得しそうだけ

ど。

エヴァ それは無いな。

そもそも、2人いれば、大なり小なり衝突はあるものだ。
3人いれば派閥が出来る。

あいつらは、意見の相違は徹底した話し合いで解決する方
針らしいが。

但しその根底に、私ならどうするか、という神聖視すらさ
れる基準があるらしい。

……正直、迷惑な話だ。

アリサ 結局、神様やってるじゃないの。

エヴァ 本当に、どうしてこうなったんだろうな。

いや、私の役に立とうとする服従属性のせいなのは理解出
来るんだが……

設定資料（裏設定含む）

● 基本情報

原則として「物語内で2004年4月～2004年12月」の状況を記載しています。

不明となっている部分は、描写が無い、エヴァに調べる気が無い、要するに設定していない、というものです。

なお、名前の由来は、転生者のみの記載としています。

◇◆◇ 転生者 ◇◆◇

● 共通事項

「対応するジュエルシードの封印」まで、以下のような制限がありました。

※例外的に適用されない場合もありますが、別の制限等によって大きな影響が出ない状態が維持されます。

・ 原作関与阻害

一部の記憶（主に原作知識）を思い出せない、意識が無い、現地への移動手段が無い、関与に有用な能力の封印、無意識・偶発的な回避行動 など。

エヴァの意識不明、クーネの移動先設定不可、原作に関連する情報に対する記憶封印及び認識阻害もこれに該当します。

・ 魔法に関する相互認識阻害

魔法を使っても見付かりにくい、他人の魔法行使に気付きにくいなど。

千晴や妹達が他の転生者を見付けるのに手間取った最大の理由がこれです。

カイゼの能力は「転生者の位置」という魔法以外の物が基準だったので、能力の制限解除後は探す事が可能になりました。

● シリアル01：齊場さいば 有人ゆうと

前世：

不明（男性）

名前由来：

セイバー ↓ 西場^{せいば} ↓ 西場^{さいば} ↓ 齊場^{さいば}
アルトリア ↓ 有人^{あると} ↓ 有人^{ゆうと}

希望特典：

ニコポ

美形

セイバーの能力

裏希望：

神様転生つてのをしてみたい

容姿等：

「Fate/stay night」のセイバー

※但し男性

職業・身分等：

中学2年生

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

制約解除：

無印編36話。フェイトが無茶する海中の物

特典実態：

「Aランク未満の魔導師」が使う魔法は全てレジストする

※転移や回復等の補助系も含み、行使する魔導師の実力のみが考慮される

直感回避不能になった時点でたまに発動する。実質意味なし

ニコポは「百合の自覚がある女性」に限り効果があるが、1人につき1回限り

※男性とばれた時点で好意が嫌悪に変換される

裏希望が、転生時の神もどき登場の原動力の1つ

魔法関連：

魔力量はB相当

魔力光は不明

その他：

無印編08話にて死亡

●シリアル02：クーネ・ルアソープ ↓ クーネ・テスタロッサ
(予定)

前世：

大学教授、歴史研究者

名前由来：

アルビレオ・イマの偽名「クウネル・サンダース」と「くうねるあそぶ（某自動車のCM）」より

希望特典：

膨大な資料を手に入れて、解析して、記憶したいですね

裏希望：

資料を求めて世界を巡りたいですね

容姿等：

「魔法先生ネギま！」のアルビレオ・イマ

職業・身分等：

宵天の歴史書

プレシア・テスタロッサの婿(予定)

最高評議会書記(予定)

制約内容：

地球への転移制限。

「原作に何らかの形で表現された人物」に近付くと、本に戻り動けなくなる

※サーチャーを出す事や、魂の一部蒐集は可能

制約解除：

無印編28話。原作には対応する場面無し(なのはがアースラ滞在中に封印された物)

特典実態：

夜天の魔導書と同じく、各地を渡り歩いて情報収集を行う立場に

資料の解析や記録能力はエヴァ個人やリインフォースより上。但し妹達の人海戦術に負ける

魔法に関する能力は3冊中最弱、それでも世間的には規格外

魔法関連：

自身がアルハザード式を基本とするユニゾンデバイス

リインフォースよりは直接戦闘に向かないが、幻術系が得意

魔力量はSSS相当以上

魔力光は紫色

その他：

魔法関係を望んでいないのに、最強の一角を占める事になった不思議な人

初代主（リーナのクローン、実質的にリーナ）の影響でロリコンをこじらせた

実質的に、エヴァの保護者（裏）

●シリアル03：板井いたい 亜土夢あとむ

前世：

不明

名前由来：

痛い内容の特典 ↓ いたい ↓ 板井いたい

当麻 ↓ t o u m a ↓ a t o m u ↓ 亜土夢あとむ

希望特典：

ニコポ

いい頭

イマジンプレイカー

裏希望：

テンプレオリ主！

容姿等：

「とある魔術の禁書目録」の上条当麻

職業・身分等：

高校1年生

制約内容：

特に無し（但し、元々原作知識が少ない）

制約解除：

無印編36話。フェイトが無茶する海中の物

特典実態：

右手で「触れた」時に魔法等を破壊できる

い ※破壊対象は転生特典も含むが、イマジンブレイカー自身は含まない

生まれた時点で、転生特典及び制約「記憶の封印」を破壊済み

裏希望が、転生時の神もどき登場の原動力の1つ

魔法関連：

魔力量はB相当

魔力光は不明

その他：

無印編08話にて死亡

生まれた時点で意識や記憶があり、テンプレ「黒歴史な赤子時代」を

経験

成長促進の破壊、赤子には過負荷な記憶、オリ主の思い込みのせいで、頭はむしろ悪くなった

右手で触れなければ魔法を破壊出来ないため、複数の魔法弾に対処し切れず成瀬カイゼに完敗

●シリアル04：杉並すぎなみ 英春ひではる

前世：

不明（男性）

名前由来：

デユナミス ↓ ギナミス ↓ スギナミ ↓ 杉並
近衛詠春 ↓ 詠春 ↓ えいしゆん ↓ 英春えいしゆん ↓ 英春ひではる

希望特典：

高い魔力

剣術の才能

カリスマ

裏希望：

何もしなくていいくらい、えらくなりたい

容姿等：

「魔法先生ネギま！」のデユナミス

職業・身分等：

小学2年生相当

改造人間？

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

制約解除：

無印編36話。フェイトが無茶する海中の物

特典実態：

剣術の動きを練習すると、その通りの動きがしやすい

※「剣」を持たない時は動きの学習能力が低い

魔力や剣術関係の素質は神より授けられた才能、つまりカリスマ

※転生時の神もどき登場の原動力の1つ

日常生活に関する能力の低さで保護施設に入り、色々世話をされる
体に

魔法関連：

魔力量はAAA相当

魔力光は茜色

その他：

ほとんどエヴァ達に関わらないまま、闇から闇に流された

綺麗なスカリエツティが楽しそうに改造に励み、日常生活程度は可能になっている

今は管理局に身柄を確保されている（本人の意思でない異世界渡航者扱い）

※ミッドでない管理世界の違法研究施設が摘発された際に、記憶を封印して放置された。

※管理局を悪く思っている事（STSの記憶の影響）と素行の悪さ

が問題視されているが、日本では既に行方不明で搜索打ち切りとなっているため、更生プログラムで何とかならないかと淡い期待がもたれている。

●シリアル05：下出しもで 来人らいと

前世：

不明（男性）

名前由来：

クルト ↓ 来く人と ↓ 来らい人と

ゲーデル ↓ 下げ出でる ↓ 下出しもで

希望特典：

ニコポ

魔法使いの素質

戦士の素質

裏希望：

偉くなりたい

容姿等：

「魔法先生ネギまー」のクルト・ゲーデル

職業・身分等：

高校1年生

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

制約解除：

無印編23話。原作には対応する場面無し（なのはがアースラ滞在中に封印された物）

特典実態：

ニコポの実態は不明

魔法は初心者程度に使用可能

剣道で中学時代は団体戦で主将、全国大会で上位入賞する程の実力

魔法関連：

割り箸型デバイスを初期保有、後にギルに奪われる

魔力量はB相当
魔力光は不明？
その他：
包丁で殺された魔法使い

●シリアル06：夜月よつき ツバサ

前世：

20代半ばの女性料理人見習い

名前由来：

四葉五月 ↓ よつばさつき ↓ よつきつばさ ↓ 夜月よつきツバ

サ

希望特典：

料理がうまくなりたい

幸せになりたい

身を守るくらいの魔法は使いたい

裏希望：

騙されるのは嫌だ

容姿等：

「魔法先生ネギま！」のアンナ・ユーリエウナ・ココロウア（アー
ニヤ）

職業・身分等：

小学3年生

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

制約解除：

無印編36話。フェイトが無茶する海中の物

特典実態：

見ただけで味が解る

何があっても容姿が崩れない

シールド・転移・飛行・結界に高い適正を持つ

※儀式魔法である “Gefängnis der Seele 魂の牢獄” を、魔法未経験から半

年で個人行使出来そうと言える程度

下心が聞こえる

魔法関連：

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の入門用デバイスを使用

魔力量はA相当、Gef. ngnis der Seeleの牢獄”と練習に有用な結界系

以外の魔法はほとんど練習していない

気の素質は中

魔力光は薄茶色

その他：

下心が聞こえるせいで人間不信に陥っていた

ある意味アリサに近い、弄られ&ツツコミ役

●シリアル07：チクアープ

前世：

30代の男性プログラマ

名前由来：

ちくわふ（千雨の電子精霊）より

希望特典：

コンピュータやデバイスを弄ったり扱ったりする能力

大きな魔力

好きな場所に自由に移動する能力

裏希望：

変身したい

容姿等：

「魔法先生ネギま！」の長谷川千雨の電子精霊（ネズミモード）

「魔法先生ネギま！」の犬上小太郎をネズミ耳に（人間モード）

職業・身分等：

電子精霊、エヴァの配下

制約内容：

存在不確定（制約解除時点で起動）

制約解除：

無印編19話。クロノ介入直前の樹木の物

特典実態：

コンピュータやデバイスに侵入して、プログラムやデータの調査・
改変が可能

通信による情報伝達に乗って移動出来る

※電波を使った公共放送を使って、テレビやラジオ等への片道移動
も可能

記憶を共有する分体を作って、別行動が可能

※エネルギーが足りれば、フル機能と機能制限ありの分体を合わせ
て5万以上同時生成可能

※使用可能なエネルギーは魔力と電力(5万全てを電力で維持する
なら火力発電1〜2基分程度)

※通信切断時は「一時的に両方が存在」するが、通信が可能になっ
た時点で強制統合される

魔法関連：

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の入門用デバイスを多数使用

長宗我部千晴とユニゾン可能

魔力量はAA相当、気の素質は高ー

※分体を増やしても、魔力総量は増えない(この制限により、自力
での5万同時生成は不可)

※エヴァからS以上のものを含む多数の人工リンカーコアを貰っ
ている

魔力光は黒色

その他：

エヴァの部下で、一応チャチャシスターズと“お付き合い”してい
る

●シリアル08：真鶴まなづる 亜美あみ

前世：

20代の女性保育士

名前由来：

那波なば ↓ 波 ↓ n a m i ↓ n あみ ↓ 亜美あみ
千鶴ちづる ↓ 鶴 ↓ 真鶴まなづる

希望特典：

健康な体でいたい

探し物を見つけない

みんなの怪我を治したい

裏希望：

みんなの役に立ちたい

容姿等：

「魔法先生ネギま！」の那波千鶴

職業・身分等：

保育士22歳（4月時点）

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

制約解除：

無印編23話。なのはが封印した鳥の物

特典実態：

あらゆる薬品・毒物・病気に対する耐性

サーチ能力&探知系魔法への適性

ヒール能力&治療系魔法への適性

自身に関する危機感の欠落

魔法関連：

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の入門用デバイスを使用

魔力量はB相当、適性を持たない魔法に関しては壊滅的。気の素質

は中

魔力光は黄色

その他：

癒し系お姉さん、の筈だったんだけどなあ……

●シリアル09：（不明）

前世：

(男性)

名前由来：

不明

希望特典：

ニコポ

ものすごい金運

一方通行の能力

裏希望：

楽になりたい。

容姿等：

不明

職業・身分等：

無印編開始前に死亡済み

制約内容：

不明

制約解除：

無印編28話。原作には対応する場面無し(なのはがアースラ滞在中に封印された物)

特典実態：

ニコポは相手がヤンデレ化する

ものすごく「悪い」金運

一方通行の能力⇨ベクトル変化は、集中状態の時に、見える物1つを操作するのが限界

※得たのはベクトル変化のみであり、演算能力を得なかったため実力不足

魔法関連：

魔力量は不明

魔力光は不明

その他：

小学校入学直後に、ヤンデレ化した女の子に刺されて死亡
ヤンデレハーレムで苦勞する前に、悪い意味で楽になれた

●シリアル10：東渚あずま なぎさ

前世：

男子高校生

名前由来：

ナギ（スプリングフィールド）↓ なぎさ ↓ 渚なぎさ

当麻（上条）↓ とうま ↓ 東とう ↓ 東あずま

希望特典：

転生特典の無効化

ナギクラスの魔力

ナデポ

裏希望：

他人を痛めつけたい

容姿等：

「魔法先生ネギま！」のナギ・スプリングフィールド

職業・身分等：

高校1年生

制約内容：

無双するために魔法が上達するまで原作介入をしない、という意識
誘導

制約解除：

無印編05話。街を覆う巨大樹木、又はリア充の物

特典実態：

半径10m以内の「任意発動型・継続発動型の特典」を全て、今後
発動出来ない状態にする能力

ナデポは「命に係わる危険から救った直後」のみ有効（要するに吊
り橋効果の強化）

加虐趣味の悪化（元々素質はあった）

魔法関連：

割り箸型デバイスを初期保有

魔力量はSS相当だったが、A☒s編28話で魔力喪失

魔力光は赤色

その他：

一部とはいえ、特典に関する説明をされた唯一の人物
現在は全ての特典と魔力、一部の記憶を失って、引き籠り状態

●シリアル11：上羽うえば 天牙てんが

前世：

病弱な男子中学生

名前由来：

ウェイバー ↓ うえば ↓ 上羽うえば

ベルベツト ↓ ビロード ↓ 天鷲絨てんがじゆう ↓ てんが ↓ 天牙てんが

希望特典：

空戦魔導師の素質

高性能ユニゾンデバイス

高性能インテリジェントデバイス

裏希望：

もつと健康だったらなあ

容姿等：

「Fate/Zero」のウェイバー・ベルベツト

職業・身分等：

高校1年生

制約内容：

住所が隣県で、原作開始に気付かない（積極性が無い事も遠因に）

制約解除：

無印編36話。フェイトが無茶する海中の物

特典実態：

飛行系魔法に関する適性

※ナハトヴァールが崩壊ゾンビ状態でも飛び回ったのはこれのせ

い

ユニゾンデバイスを入手するがシンクロ率があまり良くない

インテリジェントデバイスを入手するが近距離陸戦用（素質「遠距

離空戦」と不適合)

家族がとても健康に(父がボディービルを嗜む程度)

魔法関連:

管理局の標準的ストレージデバイスを使用

魔力量はA相当、気の素質は低+

魔力光は薄緑色

その他:

原作知識があつたがデバイスが入手出来ていなかったのでも「こんなはずじゃない事ばかりだよ!」とばかりに、原作非介入を決め込んでいた

特典デバイスは馬場鹿乃に有償で譲った形に

●シリアル12:セツナ・チエブルー

前世:

20代の男性自衛隊隊員

名前由来:

桜咲 ↓ cherrybloom 咲 ↓ チエブルー

刹那 ↓ セツナ

希望特典:

自由に空を飛びたい

剣術を使いたい

主人公たちと肩を並べられるくらいの強さ

裏希望:

長生きしたい

容姿等:

「魔法先生ネギま!」の桜咲刹那

職業・身分等:

狩人的世界の戦士 ↓ 中学校2年生

曙天(エヴァ)の眷属

制約内容:

並行世界在住

制約解除：

無印編31話。原作には対応する場面無し（なのはがアースラ滞在中に封印された物）

特典実態：

飛ぶための翼を持つ、特殊種族に

並行世界で剣を使う戦士として鍛えられた

主人公（最終強化前）と一緒に戦える程度の能力持ちに

眷属化&ジュエルシードによる再強化により、消滅方法不明に

魔法関連：

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の専用デバイス「夕凧」と「不知火」を使用

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の入門用デバイスを学習用に使用

魔力量はS―相当、気の素質は異常

魔力光は緑色

その他：

エヴァからの魔力供給で、超高水準に能力が上がる

●シリアル13：馬場 鹿乃

前世：

男子高校生

名前由来：

ジャイアント
巨人 + 馬鹿（大男、総身に知恵が……）↓ 馬場 鹿乃 ↓

希望特典：

王の軍勢

優秀な従者

ナデポ

裏希望：

強くて大きい大人になりたい

容姿等：

「Fate/Zero」のイスカandal

職業・身分等：

高校1年生、月村家の警備員

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印？

制約解除：

無印編03話。原作サウンドステージだとプールの物？

特典実態：

自身が王と認めた者の死後、その力を借りることが出来る（逆・王の軍勢）

※ナハトヴァールが大量にスフィアを出したのはこれのせい

執事風自動人形「馬場止平」（由来はジャイアントの本名、1本抜けてる）に育てられる

好意を持って撫でられると、相手に惚れる（逆・ナデポ）

体が大きくて強そうな大人化 ↓ 高校生の時点でイスカandalの容姿

魔法関連：

上羽天牙から譲り受けたデバイス2機を使用

魔力量はC相当、飛行適性は無く、完璧な陸戦魔導師。気の素質は中

魔力光は茜色

その他：

近所のおばちゃんやらに「ポ」しまくった結果、「ポ」とその嫌悪感に翻弄される

自己嫌悪やら感情の諸々やらで、制約解除後もしばらくは原作やらを思い出せなかった

●シリアル14：成瀬 なるせ カイゼ

前世：

20代後半の男性ニート

名前由来：

完全なる世界 ↓ かんぜんなるせかい ↓ なるせ かいぜ
かんん ↓ 成瀬 なるせ カイゼ

希望特典：

オーバーSランク魔導師になりたい

他の転生者の居場所を知りたい

暗殺能力が欲しい

裏希望：

人前に出ても動揺しない男になりたい

容姿等：

「魔法先生ネギまー」のフェイト・アーウェルックス

職業・身分等：

犯罪者組織の暗殺者 ↓ 小学5年生

制約内容：

転生者探知能力の封印

組織の規律等による行動制限

制約解除：

無印編07話。月村家の巨大猫の物

特典実態：

転生者の位置を知ることが出来る（近いほど精度が上がる）

暗殺者として育てられたことで、暗殺関連技術と冷めた精神を手に入

入れる

魔法関連：

低レベル暗殺用デバイスを初期保有（検挙時に証拠物として提出）

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の専用デバイス「天津風」を使

用

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の入門用デバイスを学習用に

使用

魔力量はAAA相当、空戦魔導師として順調に成長中。気の素質は

中―

魔力光は青色

その他：

後期の八神家に住む、唯一の「男の人」だった（ザフィーラは子犬モードだし）

新テスタロッサ家でも、実質的に唯一かもしれない（不在宣言の変態、子犬、ネズミ）

●シリアル15：金子かねこ 狗太こうた

前世：

30代の男性ニート

名前由来：

黄金律 ↓ 金子きんす ↓ 金子かねこ

犬を侍らせる ↓ 犬（から見ても）尊い ↓ 狗太こうた

希望特典：

強大な魔力

黄金律

ハーレム体質

裏希望：

雌犬を侍らせて好きにしたい

容姿等：

「とある魔術の禁書目録」のスタイルIIマグヌス

職業・身分等：

沖縄の離島で監禁生活 ↓ スカリエツティに拉致 ↓ 管理局

に逮捕

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

制約解除：

無印編36話。フェイトが無茶する海中の物

特典実態：

魔力を「金」ゴールドに変換する能力

メスの犬に好かれやすく、主人と認められたら絶対的な忠誠を得る

※狼不可、人相当の知能がある場合不可（要するに使い魔不可）

魔法関連：

魔力量はS―相当、但し変換以外で使用した経験が無い
魔力光は茜色

その他：

幼い頃から監禁生活だったため、激しくやさぐれている
ほとんどエヴァ達に関わらないまま、闇から闇に流された
スカリエツティに拉致された後も戦闘機人達に嫌われ、結局管理局
に放流された

●シリアル16：エヴァンジュ ↓ 八神エヴァンジュ ↓ エ
ヴァンジュ・テストアロッサ（予定）

前世：

成人の男子大学生

名前は車田くるまだかずき一樹

名前由来：

エヴァンジュエリンかずき十一樹 ↓ エヴァン十樹じゅ ↓ エヴァンジュ
車関連の名前が多い ↓ 車だ ↓ 車田
ネギま最大の魔力 ↓ 世界樹 ↓ 1本の樹木 ↓ 一樹

希望特典：

真祖の吸血鬼みたいな能力

多くの知識

多くの友人

裏希望：

孤独は嫌だ

容姿等：

「魔法先生ネギま！」のエヴァンジュエリン・A・K・マクダウエル

職業・身分等：

曙天の指令書

コンサルティング会社役員

八神はやての保護者

クーネ・プレシア夫妻の養女（予定）

最高評議会議長（予定）

制約内容：

約2500年間の活動停止

制約解除：

無印編01話。神社の物

特典実態：

吸血鬼に近いと言えそうな多くの機能や能力を持つ魔導具化

アルハザードの資料庫、夜天と宵天の情報、無限書庫、ジュエルシー
ドの記録などを扱える

友人を多く得るために、嫌悪感を抱かれにくく、共感や親愛といっ
た感情が増幅されやすい

※リンデイ（クロノと重ねて、子を見る母の心境）やセツナ（TS
人外転生で共感）が代表例

孤独にならないために、書に多くの仲間がいる

魔法関連：

自身がアルハザード式を基本とするユニゾンデバイス

アルハザード式デバイス4機と、真正古代ベルカ式デバイス1機を
使用

実質的に妹達（チャチャシスターズ）もユニゾンデバイス扱いが可
能

初期登録された魔法や書的能力以外の制御力は凡才

※A☒s編24話の後書きで言う、専用チップを使えないものは
ミッド未満となる

※自身がデバイスなのに、別途デバイスを使用しているのはこのた
め

※長い鍛錬や魔法を工夫する時間があって、現在の実力に辿り着い
ている

魔力量はSSS相当以上、気の素質は高+

魔力光は銀色

その他：

本作主人公

最終的に最強をぶつちぎって、神と呼べるほどの能力を保有

※世界を改変可能とか、並行世界を覗けるとか
但し精神的な面は相変わらず

全員の特典やその改変方法も把握したが、ジュエルシードに侵食され世界とリンクしたエヴァ・アコノ・セツナの3人は改変不可。

●シリアル17：長宗我部ちようそかべ 千晴ちはる

前世：

女子高校生

名前由来：

長谷川 ↓ 長めの名字 ↓ 長宗我部

千雨 ↓ 千+天気 ↓ 千晴

希望特典：

魔法から逃げるために魔力を感知したい

探索とかで見付からないように隠れたい

コンピュータを自由に使えるといいな

裏希望：

人に出来ない事がしたい

容姿等：

「魔法先生ネギま!」の長谷川千雨

職業・身分等：

高校1年生

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

魔力感知能力の封印

コンピュータ類所有不可（携帯電話やゲーム機を含む）

制約解除：

無印編開始前。原作開始前にユーノが封印した物

特典実態：

常時発動&隠匿型魔力サーチが常時発動（千雨の認識阻害レジスト

体質もどき）

探知魔法で正確な位置を知られない（自力以外の単独転移も危険な

レベル)

見ただけで機械の操作方法がなんとなくわかる

チクアーブの力を借りて電子精霊化が可能になった(他の人には不可能)

魔法関連：

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の入門用デバイスを使用

魔力量はA相当、障壁以外は全く練習していない。気の素質は中十。

魔力光は深紫色

その他：

関わりたくないと言いながらばっちり関わる、千雨もどき(コスプレ趣味は無い)

電子精霊状態のコードネームは「メアリー」。由来は「壁に耳あり障子に目あり」

●シリアル18：ギル・ゲームス

前世：

新社会人の男性事務員

名前由来：

ギルガメツシュ ↓ ギル・ゲームス

希望特典：

王の財宝

ニコポ

魔力たくさん

裏希望：

美少女ハーレム作りたいて!

容姿等：

「Fate/stay night」のギルガメツシュ

職業・身分等：

大学1年生

制約内容：

リリカルなのはに関する人物や場所に近付いてはいけないという
強迫観念

制約解除：

無印編12話。温泉の物

特典実態：

手元に「自身の所有物」を転送出来る

美少女だと伝えながら「にっこり」笑った際の好意を若干増幅する

※「にやり」や「ははは」等と笑っても効果が無く、微笑みでも不可

魔法関連：

スカリエツティに貰ったデバイスを使用

魔力量はAA相当、技術はあまり伸びていない

魔力光は赤色

その他：

5番以降の戦闘機人（チンク、セイン、デイエチ）とはそれなりに
仲良くなっている

今は管理局の保護施設で更生プログラムを受けていて、そこそこ真
面目にやっている

※ジュエルシード輸送車襲撃に関与しているので、一応犯罪者とし
て扱われている

●シリアル19：黒羽くろぼ 早苗さなえ

前世：

小さなホテルの男性料理人
実は厳つくて筋肉質な外見

名前由来：

四葉 ↓ クローバー ↓ 黒羽くろぼ
五月 ↓ 早苗月 ↓ 早苗さなえ

希望特典：

みんなに腹いっぱい食べさせたい
食べた人には元気になってほしい

元気になった人には笑ってほしい

裏希望：

愛嬌があるって言われたい

容姿等：

「魔法先生ネギま！」の四葉五月

※但し男性

職業・身分等：

小学5年生

制約内容：

なし（但し原作知識も無し）

制約解除：

無印編17話。街中で次元震が発生した物

特典実態：

本気で食べてほしいと願った場合、おサルのオーラが出て、食べないといけない気分させる

料理を作っている時や作ろうとしている時は、体調が回復する
作った料理には、若干の治療効果と、少し気持ちが楽になる（楽しい気分になる）効果がある

魔法関連：

プレシアから送られたデバイスを使用

魔力量はA A相当、練習は殆どしていない。気の素質は低

魔力光は茜色

その他：

様々な料理の知識や技術は、多くが前世のもの

プレシア、フェイト、アルフの3人に、一番気に入られている男性
だったりする

エヴァに将来は料理人として働かないかと誘われていて、実際に検討中

●シリアル20：間宮 まみや 萬太 まんた

前世：

男子高校生

名前由来：

衛宮士郎＋マンマミーヤ ↓ まんた・まみーや ↓ 間宮^{まみや} 萬太^{まんた}

希望特典：

エミヤの能力

ナデポ

イケメン

裏希望：

ハーレムオリ主！

容姿等：

「Fate／stay night」の衛宮士郎

職業・身分等：

中学2年生

制約内容：

海鳴市から少し遠い場所に生まれ、好きな場所への遠出が出来ない

制約解除：

無印編04話。夜の学校の物

特典実態：

投影や無限の剣製は、「自分で構造把握を行った刃物」のみ可能

※鞘や柄の無いもの、刃引されたものは不可

※間に遮蔽物がある場合（ガラスなどを含む）も不可、解析可能な

距離は約1m

女性の頭をなでると、ぽつと火が付く（別名マツチ）

ハーレムオリ主になったという強制認識（弱）あり

魔法関連：

魔力量はD相当、素質は（技術・魔力量共に）へっぽこ

魔力光は紫色

その他：

アコノになじられて引き籠り化

●シリアル21：小野^{おの} アコノ ↓ 八神^{やがみ} アコノ ↓ アコノ ↓ アコノ・

小野・テストロッサ（予定）

前世：

未成年の女子大学生

名前由来：

近衛木乃香 ↓ k o n o e | k o n o k a ↓ k | o n o |
e k | o n o k a ↓ 後ろから読む（一部文字は無視）

希望特典：

沈着冷静

ずっと若く綺麗でいたい

いっぱい魔法を使いたい

裏希望：

誰かの役に立ちたい

容姿等：

「魔法先生ネギま！」の近衛木乃香

職業・身分等：

小学4年生、曙天（エヴァ）の主

クーネ・プレシア夫妻の養女（予定）

最高評議会評議員（予定）

制約内容：

リリカルなのはに関する記憶の封印

下半身の麻痺

制約解除：

無印編開始前。動物病院を襲った物

特典実態：

感情封印（破壊済み）

近衛木乃香（中2〜中3）相当の外見で不老不死化

極めて高水準の魔法関連素質＋エヴァの主となったことで魔法教
えてもらい放題

※素質や環境は不老不死化時点で完成（固定化）されているため、特
典破壊の影響無し

エヴァの主（活動の鍵）として存在し続ける事が確定、消滅方法も

不明に

魔法関連：

エヴァから貰った真正古代ベルカ式の専用デバイス2機
「東風檜扇」コチノヒオウギと「南風末広」ハエノスエヒロを使用

魔力量はSS相当で技量は超高水準、気の素質は高+

魔力光は淡赤色

その他：

本作主人公2、だけど最後は影が薄い

この外見なのに、原作エヴァと同じ「10歳の誕生日」に不老不死
になっている

麻痺の治療は、はやてと一緒に行う予定

◆◆◆ 転生者でない&リリカルなのはシリーズに登場しない人
物 ◆◆◆

●チャチャゼロ、八神チャチャマル

曙天の指令書（エヴァンジュ）の防衛プログラム。

チャチャマルは、エヴァから貰った真正古代ベルカ式の専用デバ
イス「梵」を使用。

●チャチャシスターズ（妹達）

曙天の指令書（エヴァンジュ）の補助魂魄。現在2万人。

法的には八神チャチャが存在している。

チクアーブと「お付き合い」をしている。

●エヴァの従者

別荘に約2000人。増員禁止中なのは変わらず。

・ロナ 料理主任。外見はローナ@シャイニング・ハーツ（獣
人部位抜き）

・名前未登場 農場管理主任、外見は茶髪シヨタ

・ナーディ 料理担当メイド、外見はナーディア@ふしぎの海のナ

ディア

・リーシエン 設備保守担当、外見は超鈴音@魔法先生ネギま！

●エヴァの使い魔

別荘に約100人。

地球に地域浸透担当、多くの次元世界に時空管理局の本局までの通信維持担当、ミッドチルダ他に情報操作担当など、今となっては物凄い人数が存在している。

・名前未登場 設備管理主任、外見は銀髪美中年

・リル 料理担当メイド、外見は星野ルリ@機動戦艦ナデシ

コ

●リーナ・ファ・ニピン

妹達が主様と呼ぶ、曙天^{エツァンジュ}の指令書の前主。3冊（夜天、宵天、曙天）の製作主任でもある。

そのクローンとして作られたのがプレシア・テスタロッサ。

●ドラコ

宵天の歴史書（クアーネ）の防衛プログラム。

魔法先生ネギま！ の図書館島地下にいるドラゴン。クアーネ曰く女の子。

●シルフィ・カルマン

聖王教会に所属する技術者。近代古代ベルカの両方の知識を持っている。

外見は「(カニじゃない) 鷺羽ちゃん@天地無用！」。

●デイラン・ヒューイット

ヒュードラ開発時にプレシアの助手をしていた。

最高評議会の糾弾に賛同、自爆覚悟で色々な情報を公開している。

●カミテイー・クカヴァタ
タカミチ・T・高畑@魔法先生ネギま！ のパチもの。
悠久の翼の幹部。

●ガング・ロフィーニ
ガンドルフィーニ@魔法先生ネギま！ のパチもの。
時空管理局の高官、黒人男性。エヴァはガングロと呼ぶことも。

●名もなき管理局員
八神家を襲撃したり、八神家に謝罪したり、その情報にコメントしたりした管理局員。
名前はまだ無い。

●榎原医師
元アコノの主治医。A☒S編でも出番なし。

●馬場止平
馬場鹿乃の育ての親。実態はノエル&ファリンに近い自動人形、執事風。

◇◆◇ 原作に登場する人物 ◇◆◇
※原作観賞の際に名前が出ただけの人物は、登場に含まないの除外します。

※原作に相当する存在がある人物は、こちらに含みます。

●八神はやて ↓ はやて・八神・テスタロッサ (予定)
夜天の主として、不老不死化。
原作より魔力量は少なく頑張ってもS相当、気の素質は高。
クーネ・プレシア夫妻の養女になる (決定)
最高評議会評議員に就任 (予定)。

●リインフォース ↓ ノツテ・リインフォース・テスタロッサ(予定)

夜天の魔導書の管制プログラム。

暴走しない程度の修復が完了。破損の修復が残っているが、ゆっくり行う予定。

リインフォースははやてが、ノツテはアコノが命名。

厳密には「ノツテ||リインフォース・テスタロッサ」とファーストネームが2個ある状態。だけどみんなリインフォースとかリインと呼ぶ。

クーネ・プレシア夫妻の養女(予定)。

最高評議会評議員に就任(予定)。

●ルーナ・リインフォース

原作のリインフォース・ツヴァイに相当する、はやて用融合騎。一応守護騎士ともユニゾン可能だが、相性はあまり良くない。

ナハトヴァールの汚染された人工リンカーコアを浄化して、コアにしている。

将来的には、クーネ・プレシア夫妻の養女になる予定。

※フルサイズでの実体化が安定していないため、戸籍の作成時期は未定。

●ナハトヴァール

夜天の魔導書の防衛プログラム。破壊前は映画版(MOVIE 2nd)相当の外見。

破壊↓初期化が行われたため、蒐集した特殊能力(王の軍勢など)は使えなくなっている上に、現在は少々不安定なため調整中。

再構築後は、はやて曰く「なはとちゃん」。外見は幼女でぽやぽやしてるラミア。

チクアーブを食べたくて、虎視眈々と狙っているらしい。

●守護騎士(八神シグナム、八神ヴィータ、八神シャマル、ザフィー

ラ)

黒の騎士団としても知られることに。特にヴィータは大人モードを気に入っている。

最高評議会直属の護衛として扱われる予定。そのうち、テストアロットサ家入りする可能性が高い。

気の素質は、シグナムとヴィータが中＋、ザフィーラが中、シャマルが中―。

●高町なのは

原作主人公。

最後まで「悲劇的な場面」に直面しなかった。

魔力量は原作相当だが技術的に若干上。気の素質は高。

●高町士郎、高町恭也、高町美由希

カートリッジを使つての魔法行使に目覚める。

気の素質は、恭也が高、美由希が高＋。

●高町桃子

パティシエとして元気に活動中。

●月村忍、月村すずか

カートリッジを使つての魔法行使に目覚める。

気の素質は、忍が高―、すずかが高。

●ノエル・K・エアリヒカイト、ファリン・K・エアリヒカイト

エヴァたちに魔改造されなくて、嬉しいような残念なような。

●アリサ・バニングス

魔力が無い上に気の素質も低―で、魔法が使えず悶々としている。

●プレシア・テストアロツサ

リーナのクローンで、クーネと婚約。

宵天の主として、不老不死化。

魔力が回復して素でS相当、気の素質は高十。

最高評議会評議員に就任（予定？）。

●アリシア・テストアロツサ

魔法少女として成長開始？ 魔力量はSを目指せる素質がある。

年上の金髪女性（エヴァ、シヤマル、カリム、アリサ、ヴィヴィオ）を「おねえちゃん」と慕っている。全員を含む金髪同盟なるグループを作るが、特に何かしてるわけではない。

フェイトは妹と認識しているので「おねえちゃん」には含まない。金髪同盟には含む。

●フェイト・テストアロツサ

原作主人公2。今作では、最後の方は出番が無いまま終了。

エヴァを「お姉ちゃん」と慕うようになっていたが、本当にエヴァが姉になる事に。

気の素質は、中十。

●アルフ

ご主人様^{フェイト}だけじゃなく、アリシアの護衛も務める日々。

危険な事は滅多に無いから報われてないけど、それが一番だと本人も割り切ってる。たぶん。

気の素質は、中一。

●ユーノ・スクライア

無事に、無限書庫の司書への就任が内定。

●リンデイ・ハラオウン

最高評議会の親衛隊長に就任（予定）。

●クロノ・ハラオウン

最高評議会の親衛隊に所属（予定）。

●エイミイ・リミエツタ

最高評議会の親衛隊に所属（予定）。

●アレックス・オーラム

AⅩs編では出番なし

●マリエル・アテンザ（マリー）

最高評議会の親衛隊に所属、するんじゃないかな。

●ギル・グレアム、リーゼロッテ、リーゼアリア

最高評議会の糾弾絡みで、一番苦労してるはずの人達。

●最高評議会

お前（の政治生命）はすでに死んでいる。

●ジェイル・スカリエツェイ、レジアス・ゲイズ

自爆特攻で最高評議会の糾弾に参加中。

色々な情報を公開したりしている、渦中の人

●オーリス・ゲイズ

レジアスと共に、渦中の人かもしれない。でも、登場しない。

●ゼスト・グランガイツ

レジアスの説得に関わった。

最高評議会の「逮捕」を行った部隊長。

●クイント・ナカジマ

レジアスを説得するためのゼストの説得に関わった。
最高評議会の「逮捕」を行った部隊員。セリフは無い。
戦闘機人（チンク達）関係で、保護施設に呼ばれることもある。

●メガーヌ・アルピーノ
最高評議会の「逮捕」を行った部隊員。セリフは無い。
ルーテシアを産んだ産休中に呼び出された、可愛そうな人。

●ゲンヤ・ナカジマ
接触を警戒されてただけで、登場していない。
マリーと面識あり。

●レティ・ロウラン
最高評議会の糾弾絡みに巻き込まれて祭り上げられてしまった。
表立った動きは少ないものの、人事面で動きを支えている大事な人。

●ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ
無限の欲望の因子を抑えるために、エヴァの眷属化。不老不死は副産物だけど、元々成長や老化しない可能性が高い（StrikerSやVividでも幼女のチンクを見る限り）。
今はスカリエッティの補佐をしながら、最高評議会の糾弾に参加中。

●チンク、セイン、デイエチ
今は管理局の保護施設で更生プログラムを受けていて、そこそこの真面目にやっているらしい。
※全員ジュエルシード輸送車襲撃に関与しているので、一応犯罪者として扱われている。

※マリーの紹介状を持って、陸上警備隊第108部隊に出頭した。

●カリム・グラシア

近衛騎士団長として、聖王（ヴィヴィオ）の側近に内定。

●シャツハ・ヌエラ

近衛騎士団員として、カリムとヴィヴィオの護衛を担当するんじゃないかな。

●ヴィヴィオ・ルアソープ ↓ ヴィヴィオ・テスタロッサ（予定）
オリヴィエの記憶や力を持つ、真正正銘の聖王の生まれ変わり。
聖王の記憶と力を持つ者として、世間一般に情報公開。
そのすぐ後に、クーネ・プレシア夫妻の娘になった。

魔力量はS、気の素質は高ー。

●石田幸恵

アコノとはやての主治医なのに、最後まで登場しない。

●クライド・ハラオウン

故人。登場しない。

●リニス

故人（故猫？）。登場しない。

●鮫島望

バニングス家の執事。名前が設定されたが、やっぱり台詞が無い。

●榎原愛

動物病院の人は、最後まで出番無し。

◇◆◇ デバイス ◇◆◇

●レイジングハート

映画2nd版相当にパワーアップした、ミッドチルダ式インテリジェントデバイス with カートリッジシステム。
使用者は高町なのは。

●バルディッシュ

映画2nd版相当にパワーアップした、ミッドチルダ式インテリジェントデバイス with カートリッジシステム。
使用者はフェイト・テスタロッサ。

●カツカラ

大出力対応のミッドチルダ式ストレージデバイス。
一言で言えば、プレシアが持っていた杖、一応映画1st版。
使用者はプレシア・テスタロッサ。

●バルエシユカ

ミッドチルダ式インテリジェントデバイス。
起動状態は水晶球付きの短い杖、ぶつちやければINNOCENTのマイクスター（装飾抜き）。
ただど声はバルディッシュと同じで、待機状態は改造前バルディッシュの三角ワッペン。
使用者はアリシア・テスタロッサ。

●S2U

無印編の頃から仕様変更なし。
使用者はクロノ・ハラオウン。

●レヴァンティン、グラーフアイゼン、クラーウルヴィント

原作でお馴染み守護騎士のデバイス。騎士服を含め地味に映画2nd版だけど、大きな違いは無い。
使用者はシグナム、ヴィータ、シャマル。

●レーベレヒト

エヴァ製真正古代ベルカ式、だけど見た目ミッドチルダ式の偽装用デバイス。

両刃の片手半剣を基本に、連結刃、バトルライフルの形態を持つ。使用者はシグナム（黒の騎士団スタイル）。騎士甲冑はレイア。

●ヴィルヘルム

エヴァ製真正古代ベルカ式、だけど見た目ミッドチルダ式の偽装用デバイス。

頭部が大きい目の戦槌で、普段から一方がドリル状になっている。巨大化やロケット化も併用可能で実装。

使用者はヴィータ（黒の騎士団スタイル）、大人モード使用可。騎士甲冑はザザミ。

●ゲオルクティール

エヴァ製真正古代ベルカ式、だけど見た目ミッドチルダ式の偽装用デバイス。

トンファーに似た形状で、探知系を超強化、近接戦用に蹴りの補助もあり。

使用者はシャマル（黒の騎士団スタイル）。騎士甲冑はベリオX。

●ルース

エヴァ製真正古代ベルカ式、だけど使用感がミッドチルダ式に近いカード型デバイス。

情報処理に特化していて、無限書庫へアクセス可能。チャチャの補助も受けられる特別仕様。

使用者はユーノ。

●黒龍

無印編の頃から仕様変更なし。

使用者はエヴァ。

●（無名：アルハザード式の特化型デバイス4機）
アルハザード時代に作成した、特定魔法特化型のアルハザード式デバイス。

ブレスレット型：直線型高速魔力弾、障壁

アंकレット型：飛行、転移

使用者はエヴァ。

エヴァとユニゾンしたアコノも使用可能だが、扱いが難しいので実用に耐えない（AⅩS編41話では、アコノが飛行魔法を使用して負傷している）。

●東風檜扇（コチノヒオウギ）、南風末広（ハエノスエヒロ）

無印編の頃から仕様変更なし。

使用者はアコノ。

●梵

エヴァ製真正古代ベルカ式アームドデバイス。白い鉄扇型でカトリッジは32発、支援寄りの万能型。

使用者はチャチャマル。

●夕風

エヴァ製真正古代ベルカ式アームドデバイス。ネギま！の夕風をモデルに、刀身に紋様が刻まれている。モデル同様の白鞘で、刀匠の協力を得て製作された。

野太刀と小太刀とペンダントの3形態で、黒龍等と同じ紋様型カトリッジシステム、ナマクラモードや魔法や攻撃の補助に使える匕首の展開機能も装備。

使用者はセツナ。

●不知火

エヴァ製真正古代ベルカ式アームドデバイス。ベースは木刀で、必

要に応じて魔力刃を展開する野太刀型。

カートリッジは2発で、手動装填が必要。

使用者はセツナ。

●天津風

エヴァ製真正古代ベルカ式アームドデバイス。デリンジャーがモデル。

カートリッジは2発で、手動装填が必要。

使用者はカイゼ。

●入門用デバイス（通称）

無印編の頃から仕様変更なし。

使用者は、チクアーブ（12機）、亜美（カード型）、千晴（プレスレット型）、ツバサ（ペンダント型）。

学習用限定で使用しているのは、カイゼ、セツナ（棒型）。

●サム

無印編の頃から仕様変更なし。

使用者は上羽天牙から馬場鹿乃に変わった。

●アドン

無印編の頃から仕様変更なし。

使用者は上羽天牙から馬場鹿乃に変わった。

●管理局の標準的ストレージデバイス

要するにS2Uの下位互換量産品。

使用者は上羽天牙。

●割り箸（仮称）

転生特典の、ミッドチルダ式ストレージデバイス。

使用者はいなくなった（東渚のものはエヴァが、ギルが持っていた

ものはスカリエツテイが回収済み)

●非魔導師組のカートリッジ練習用デバイス

基本的に真正古代ベルカ式。少ない魔力で動くことを優先し、色々な容量のカートリッジで問題が出ないように調整してある。起動用魔力の蓄積機能付き。

使用者は高町士郎、高町恭也、高町美由希、月村忍、月村すすか、エヴァの従者達。

●その他

ギルが、スカリエツテイから貰ったデバイスを使用。

早苗が、プレシアから貰ったデバイスを使用。

解説その他（裏設定含む）

◆◆ 漂流編 解説 ◆◆

全てを詳細に説明するのもしつこいと思うので、固まり毎に簡単なメモ程度の情報を記載します。

PCであれば、横にウィンドウを並べて表示してみてください。

夢をく ：（曙天の独白）

様々なく ：（曙天の独白）

きつとく ：夜天や宵天の情報を含み、自分の周囲の情報も含む。

私をく ：衰弱死寸前の、何も知らないまま曙天の主候補になっている人の姿。

分からない ：（曙天の独白）

乾いたく ：宵天の情報。砂漠のオアシスで元気に生きる人々の姿。

与えられく ：夜天の改変。守護騎士追加やアルハ式魔法ロストなど。

張りつめく ：衰弱死を知っている、曙天の主候補の姿。

戦乱がく ：夜天の改変。古代ベルカ戦乱期、ナハト暴走の始まり。

穏やかなく ：死を覚悟して、感情封印で主になろうとする曙天の主候補の姿。

夜天の悲鳴 ：夜天の改変。ナハト暴走悪化。

永遠にく ：夜天の暴走の記憶、「闇の書」の始まり。

多くの王く ：宵天の情報。古代ベルカ末期、オリヴィエやクラウドスに関する記録。

量産く ：宵天の情報。「後のロストログア」の量産と、失敗による破滅に関する記録。

絶望がく ：宵天の情報。次元世界の崩壊に関する記録。

私はく ：（曙天の独白）

枷く ：曙天の自己診断。

枷 Ⅱジュエルシードによる制限（この時は自覚なし）。

眠りからⅡ夢を見ると魔力を消費して、また眠りにつく。

戦争がⅡ：夜天の情報。自己消滅に関する改変と失敗の記憶。後の最高評議会が主導したもの。

最後の鍵 Ⅱ曙天（既に家族らしいとしか認識出来ていない）に対し「強制介入キー」の発行。

永遠にⅡ：（曙天の独白） かなり擦り切れ始める。

世界にⅡ：宵天の情報。時空管理局の設立と腐敗の記録。

私の力をⅡ：（曙天の独白）

私の目覚めⅡ：（曙天の独白）

私の真実をⅡ：（曙天の独白）

見覚えのⅡ：宵天の情報。ミッドチルダに関する記録。

記憶がⅡ：（曙天の独白） 記憶の混乱。

主がⅡ：（曙天の独白） 侵食が加速していて、主候補を殺して

いる事を自覚。

主。リーナⅡ：（曙天の独白）

アルハⅡ：（曙天の独白）

友がⅡ：（曙天の独白）

◆◆ 正月風景 解説（2013年版） ◆◆

「とある○○」は「とある家族」です。

物語内時間で2005年正月時点での八神家の風景です。この時点では「八神エヴァンジュ」「八神アコノ」で八神家入りしている状態です。手続きは開始していますが、法的にはまだ「テストタロッサ大家族」は成立していません。

各部分の内容は、以下の通りです。

● 2013 #1 :

エヴァの言う屑共とは、最高評議会等、管理局の地位を使って裏で

色々していた人達の事です。

彼らは今、突き上げやら告発やらで大変なことになっています。オリ主様系転生者（逮捕、能力封印、死亡済み）は、既に眼中にありません。

胃薬を渡されていたリンディも大変ですが、管理局側の実働はグレム、そしてクロノが頑張っている面が大きいです。リンディはさほど問題ありません。クロノは問題です。主に胃の調子的な意味で。

と言うわけで、（後日談・正月前後◇親衛隊◇で渡している）胃薬はクロノ用でした。

よく連絡してくるカリムは、おいしいです。

現代の聖王及び真性古代ベルカ（エンシエント）の技術保有者との繋がり、聖王教会内で絶大な力を発揮する事でしょう。

現時点では年が近い（外見的に9〜20歳が多い。カリム14歳）という事も親密感に繋がるはずですから、お友達感覚で付き合っています。

手下達（ヴェロツサ等）には相当な負担がかかっているでしょうが。

●2013#2:

アコノの「戸籍とかのゴタゴタ」は新テスタロッサ家入りや、地球での戸籍確保（クアーネとリインフォースが未取得）を指しています。

戸籍がしっかりしていないと不動産の手続き等で問題が出るので、家の手配が後になります。

次は、家や部屋割りの話になります。

はやては家族みんなが住める家を求めている、マンションをベースにするなら壁を破つても広さを確保しようとしています。

リビング等の、みんなが集まるスペースの確保が課題です。

エヴァが吠えているのは、プレシアとクアーネの部屋です。2人で1部屋を使い、巨大なベッドを配置予定です。

はやてがこの2人を重要と言っていたのは、プレシアが家長、クアーネはプレシアの婿となり、夫婦として家の調達を行う予定だからです。

● 2013 #3 :

テスタロッサ家に、養子として行く話です。

アコノの荷物の少なさの話は、アコノが八神家入りの時に1度引越しをしているからです (A s 編07話)。

地球人でない「本来のテスタロッサ家の人達」は生活習慣が異なるでしょうし、家族構成的にそちらが主体になる可能性があるのです、はやては文化の差を心配しています。

アースラの駐屯所に滞在するプレシアとアリシアの話も聞いていますが、安心は出来ないと思いますよ。自宅と居候では色々違うでしょうから。

同居人及び前世を含めると、新テスタロッサ家関係の日本関係者はエヴァ(元男)、アコノ(女)、はやて(女)、セツナ(元男)、チクアーブ(男)、カイゼ(男)、クーネ(男)の7人です。

純粋な女性が2人しかいません。だからこそ、アコノの「私はちやんと女性」発言があります。

● 2013 #4 :

今はエヴァの別荘にある、聖王のゆりかごの話です。ジュエルシードではありません。

はやてはゆりかご奪還に参加しておらず、直接見てもいません。まだヒヨッコなので、参加させてもらえませんでした。

アコノの言っていた「あつちの人」は、ゆりかごにいたヴィヴィオです。遊び相手がいなくて暇だったみたいです。

はやてが4番目になる条件は「ユニゾンあり、特殊な魔力供給あり」です。

この場合のランキング(期待値)は、以下の様になります。

1. アコノ+エヴァンジュ
2. プレシア+クーネ
3. リインフォース

4. はやて+ルーナ+リインフォースからの魔力供給
5. セツナ+エヴァからの魔力供給
- 6~10. 防衛プログラムwith書からの魔力供給
10. ヴィヴィオ
11. シグナム+アギト
12. フェイト
13. チクアーブ

(以下、後記「最終戦力」の順通り)

後記「最終戦力」と比べると解るのですが、要するに「エヴァ最強」プレシアの有無でリインフォースとクーネの順が変わる」「その次がユニゾンしたはやて」です。上位3位まではどう足掻こうが3冊の書の直接参加なので、ユニゾンははやてが4位になります。5位のセツナとは僅差。

リインフォース対ユニゾンははやては、リインフォースに魔力供給を切るという手札がある時点でリインフォースの勝ちが確定。はやては直接のユニゾンではないため効率が落ちますから、アコノやプレシアには届きません。

●その他、2013版で意図的に隠していた事：

#八神エヴァンジュ、八神アコノになっている事

エヴァンジュ・テスタロッサ、アコノ・小野・テスタロッサが内定している事

↓姓やフルネームを使うのは、ほぼチャチャだけです。

そのチャチャですが、エヴァを「お姉様」、アコノを「主」と呼びます。

……が、妹達（八神チャチャ）の出番自体が無くなりました。残念。

#守護騎士+「リインフォース+ルーナ+アギト」が家族として既存である事

↓指を啜えて羨ましそうに見ている人達という括りで、守護騎士に紛れてもらいました。

#成瀬カイゼとセツナ・チェブルーが八神家在住である事

↓明らすのは明らかにルール違反です。なので、先に別荘の温泉に行ってもらいました。

#ヴィヴィオも家族として既存である事

↓問題だらけです。なので、別荘にあるゆりかごに行ってもらいました。

◆◆ 正月風景 解説（2014年版） ◆◆

別荘内にある聖王のゆりかごから、温泉へ戻ってきたところからスタート。

●2014#1：八神家組

参加者：チャチャ、チャチャマル、チャチャゼロ、シグナム、シャル、ヴィータ、ザフィーラ

発言禁止人物：リインフォース、ルーナ、アギト、ヴィヴィオ
シャル「あそこで合流した方も参加出来ませんし……」

シグナム「時空管理局でカイゼやセツナが会っている方カリムの名前も出せん」

●2014#2：原作少女組

参加者：なのは、フェイト、アリサ、すずか、アルフ

アリサ「で、話だけは聞いてるけど……（最高評議会って）呼び名が増えたんでしょ？」

フェイト「お世話になってばかりだし、これ（訓練校に行く）くらいは何でもないよ」

※後日談：正月前後 | 親衛隊 で出た件。

●2014#3：女性転生者組

参加者：千晴、亜美、セツナ、ツバサ

エヴァ「ふふふ……どの道、セツナは私の（眷属で、永遠を共に過ごす仲間）だ。ゆつくり親睦を深めるのも……」

エヴァ「そうだな、アコノも私の（永遠の主）だ。来るか？」

●2014#4：男性転生者組

参加者：カイゼ、チクアーブ、クーネ、早苗、馬場、上羽

チクアーブ「（チャチャ様との交際を認めていただいた）我等についてはルールに抵触すると判断致しますが」

鹿乃「ええい、（すずかを好きになっちゃまった俺を）ロリコンと呼びたきや呼べ！」

●2014#5：幼女とメイド隊

参加者：ノエル、ファリン、アリシア、リル

アリシア「エヴァおねーちゃん（予定された戸籍上の姉妹的な意味で）たち！」

●2014#6：その他未成年組

参加者：エイミイ、クロノ、ユーノ、美由希

発言禁止人物：カリム、シャツハ、マリエル

クロノ「仕方ないだろう、（世界の秩序が崩壊しないために）最善を尽くした結果なんだ」

エイミイ「クロノ君、あの（エヴァを最高評議会にする）話の前は打ち合わせとかばっかりだったもんねえ」

ユーノ「あの（関係者を説得するための資料集めの）時は、僕もほとんど寝れてないし」

ユーノ「あんなのが続くなら、あの（書記長就任の）話も引き受けたくないよ」

クロノ「強力な支援（エヴァの施設管理と復活した検索機能）付きなんだ。人が揃うまでくらいは頑張ってくれ」

●2014#7：大人組

参加者：リンディ、プレシア、士郎、桃子、恭也、忍、クーネ、チャチャ

発言禁止人物：シルフィ

リンディ「エヴァアさん、やっぱり（考え直して、フェイトさんの代わりに）うちの子にならない？ 娘も欲しかったし、クロノはまだ駄目だし（、フェイトさんを奪うわけにはいかないし）。」

※この時点では法的な手続きが完了していないので、あわよくば程度の冗談です。

クーネ「おや、親権争いですか。これは（父親予定の）私も参加しなければ」

◆◆魔法に関する設定（A s編24話後書きより）◆◆

デバイスについては、半導体製品的に言えばこんな関係です。

古代ベルカ：専用チップ寄せ集め（低い技術でも実用性能を出せる）

+制御用コントローラ（人格とか。場合によっては人が担当したりもする）

ミッド：高性能汎用CPU（製造面は技術力で何とかする）

近代ベルカ：中性能汎用CPU+専用チップ（ゲーム用にグラボを刺した一般PCみたいな？）

アルハザード：専用チップ寄せ集め+制御と補助に汎用CPU的なもの

極端な話ですが、「電子楽器（デバイス）で音楽を奏でる（魔法を使う）」事を考えた場合。

古代ベルカ：DX-7（初音ミクの衣装モデルとなった、FM音源を内蔵したキーボード）で音楽を弾く事は可能です。うまく弾けない？練習頑張れ。音が気に入らない？別の楽器にすればいいじゃない。

※用途に応じて持ち替える。基本的に人が道具に合わせる、または人に合わせて道具を作る。

アルハザード：Z80でプログラムを動かし、FM音源を制御する事も可能です（PC-88やMSX）。ツールとは名ばかりの文字入

力？慣れだ。音が気に入らない？別の楽器を繋げればいいじゃない。

※基本的には古代ベルカに近いが、プログラム可能な分再現は楽。

ミッド：Pentium3は色々な音源（FM音源のエミュレータ等）を実行出来るし、いいツールも動かせるでしょう。音が気に入らない？エミュレータを変えれば違う音も出るんじゃないかな。VP1（巡音ルカの衣装モデル）の音を計算するには性能が足りない？ならばより高速なCPUだ。

※物理的な改造なしに、色々な事が出来る。但し再現するにも限界はある。

近代ベルカ：VP1の音が再現出来ないなら、音源として繋げればいいよね。お金がかかる？じゃあ安いCPUを使おうか。

※ミッドの使い勝手をなるべく維持しつつ、用途が狭まっても1点突破を狙う。

Z80は1976年、Pentium3(初期型)は1999年。トランジスタ数はそれぞれ8200、950万。製造難易度の差はお察しください、みたいな感じで。

音源の例として使ったDX-7は1983年、VP1は1994年。VP1は実際に弦を擦って震動を作ってるらしいので、揺らぎやらまで含めた完全再現はかなり難しいはず。ちなみに270万円。CPUの値段をケチってどうにかなる値段じゃないのは、気にしちゃうダメです。

そして魔法自体についてですが、コンピュータの言語で言えばこんな感じ。

古代ベルカ：アセンブリ言語。熟練すれば超高速なものが作れるよ。

※CPUが同時に実行出来る命令や処理時間まで考慮して組み合わせるがいたそうです。

ミッド：Java。これなら扱いやすいでしょ。

※Write once, run anywhereを「基本的な術式は誰でも使える」と解釈してみよう。

近代ベルカ：Java+JNI。基本的に扱いやすく、必要なら専用となる事を厭わない。

※部分的に専用の部品を混ぜて、色々やってみよう。

アルハザード：C言語+インラインアセンブラ。古代ベルカを含みつつ、使いやすくしたよ。

※全部カリカリに書くのは大変だし、心臓部以外は扱いやすい方が楽じゃない？

ちなみにアルハザード式は、過去の資産を無駄にしないまま色々改善しようという方向に進んだもので、ベルカ式の魔法も扱えます（ベルカの三角+制御用にもう1個の三角で六芒星を構成）。

当時はミッド式のデバイスを支えられるだけの技術基盤が無い&ベルカの資産が生きている&カートリッジも無い&訓練時間を長く取れる（娯楽が無い）軍国主義国家だったため、最強になりました。

アルハザード式の夜天の魔導書がベルカ式で弄られたのも、ベルカ式の魔法を含んでいるから。でも、アルハザード式の制御機構を変えずに実行部分「だけ」を改変したら、そりゃ暴走もします。

エヴァ製入門用デバイスは一応古代ベルカ式ですが、制御用を兼ねるAIを中心に、初心者用の簡易な魔法を大量に組み込んだ代物。構造自体は近代ベルカ式（むしろアルハザード式）に近いというオチ。だってエヴァ&妹達が一番馴染んでいる形だもの。

扱える魔法の種類を優先している事もあり、大きな魔力は流せません。それでも数回ならAAA級にも耐えます。

◆◆ 最終戦力 ◆◆

テストタロツサ家with居候は、トンデモナイ事になります。

ちよっと同居人を含めて「現状を元にした将来的な戦力候補」を書いてみます。

なお、リストの内容は以下の前提に基づきます。

・ある程度は将来性込み（現状から想定される能力をそれなりに使

いこなせた場合)とします。

但し、将来の魔改造的な強化は考慮しません。

・「戦力として」強い順に、相当する魔導師ランク(魔力量ランクではない)で表記します。直接戦闘での強弱比較ではないですし、評価方法等により多少の前後はあり得ますが、大きく順位が変わることは無いです。

・ユニゾン等の使用はせず、単独での能力とします。

非ユニゾンのデバイスと個人で可能な魔力供給(カートリッジや人エリンカーコアなど持ち運べるもの)のみが利用可能とします。

要するに、外部戦力の利用(ユニゾンデバイス、聖王のゆりかご、防衛プログラム、守護騎士、駆動炉やエヴァ等からの魔力供給、その他)は考慮しません。

(SSSクラス以上)

エヴァンジュ

曙天の指令書。最後の魔改造による強化を除外しても最強、妹達付きで更に凶悪化。

リインフォース(ノツテ)

夜天の魔導書。戦闘系魔法の適性的に宵天より上。

クーネ

宵天の歴史書。幻惑や補助系の適性が高いため、戦い方次第ではリインに勝てる事も。

(SS+クラス)

アコノ

曙天の主で不老不死。全てに高水準。エヴァ付きだとより凶悪な水準に。

(SSクラス)

プレシア

宵天の主で不老不死。駆動炉も使えばSS+、クーネ付きだとリインフォース越え。

ヴィヴィオ

宵天の保護で不老不死。宵天製聖王オリヴァイエのクローン。ゆりかごや聖王の鎧を除いても強力。

ドラコ

宵天の防衛プログラム。広域攻撃と高めの防御力を持つ。

チャチャゼロ

曙天の防衛プログラム。攻撃力全振りの一点突破型。

ナハトヴァール

夜天の防衛プログラム。攻撃防御補助と何でもこなす万能型。本来より出力が低下。

チャチャマル

曙天の防衛プログラム。防御や補助特化なので単独戦力としては弱め。

(S+クラス)

フェイト

速度だけならトップレベル。不老不死化はしていない。

セツナ

曙天の眷属で不老不死。翼を持つ空中戦のエキスパート。エヴァのアシストでSSS。

はやて

夜天の主で不老不死。ルーナとユニゾン&リインのアシストでSSS (でもクーネ未満)。

(Sクラス)

チクアープ

電子精霊で疑似的な不死。人工リンカーコア無しならAA〜AA A。電子戦最強。

カイゼ

暗殺者の訓練を受けた隠行のエキスパート。不老不死化はしていない。

アリシア

現在は魔導師としては駆け出しで、将来に期待。不老不死化はしていない。

ルーナ

エヴァ製はやて用融合騎。リインのアシストを受ける事ではやてをSSSSに出来る。

(Sークラス)

シグナム

夜天の守護騎士。夜天健在により不老不死。アギトやルーナ付きだとS＋SSー。

(Sクラス未満)

ヴィータ

AAA＋。夜天の守護騎士。夜天健在により不老不死。アギトやルーナ付きだとSくらい。

シヤマル

AA＋。夜天の守護騎士。夜天健在により不老不死。アギトやルーナ付きだとSーくらい。

ザフィーラ

AA。夜天の守護騎士。夜天健在により不老不死。アギトやルーナ付きだとAAA＋くらい。

アルフ

AAー。フェイトの使い魔。不老不死化はしていない。アギト

A＋。古代ベルカの融合騎。不老は確實。

(別格)

チャチャシスターズ(妹達。八神チャチャ等を含む)

SSSクラスが2万人。アコノやはやては1名の家族と数えたりする。

(広い意味でもテスタロッサ家ではありませんが、こんな人達もいます)

エヴァの使い魔達

魔法が使えないか、使えてもDーBクラスが多い。

人数はいっぱい

別荘に魔法を使える者が100人程

多くの次元世界に中継地管理要員が多数

地球に社会浸透担当がそれなりに

最終的に、ミッドチルダなどに情報操作担当やらが大量発生

エヴァの従者達

本来は魔法使用不可（リンカーコア無し）だけど、最近では気&カートリッジに目覚めている。

別荘に2000人程。

エヴァの眷属達

戦闘機人の4人（ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ）が該当、能力は原作準拠。

普通の武装局員のB〜Aクラスが、とてもとても貧弱に見えるメンツです。Sに満たないアギト、アルフ、ザファイラ、シャマル、ヴィータまでもが最弱組になるという、笑えない状態です。

現時点での最弱はアリシア（魔法は入門段階）で、フェイト・セツナ・カイゼ・チクアーブあたりはシグナムやヴィータと良い勝負か負けるくらいですが。

いくら3冊の書が弱点になる（破壊成功で一気に戦力が減る）と言っても、その弱点が戦力トップ3かつ転生能力（主も連れていく完全版）持ちなので洒落になりません。

しかも不老者や不死者多数。書、書の主、書の防衛プログラム、融合騎、被保護者、電子精霊で、計19人（妹達を除く）です。

追加で残りの4人（アリシア、フェイト、アルフ、カイゼ）が不老不死になる可能性もあります。

地球での交友関係も、ある意味ヒドイです。

将来性等も考慮すると、こうなります。

高町なのは。S+

気や御神流による能力上昇に加え、集束やカートリッジによるダ

メージを回避中。

原作より強くなる要素が多く揃っています。

黒羽早苗。A A A。

若干の治癒効果のある料理も作れます。むしろこっちは本業。

夜月ツバサ。A A。

下心が聞こえる能力持ちなので、ある意味では交渉最強。

真鶴亜美。A。

治療と近距離探知に関してはS S級。

長宗我部千晴。A。

チクアーブの協力があれば電子戦無敵で、探索魔法に引っかけからない特性持ち。

上羽天牙。A。

役立たずその1？ 武装局員の強い方くらいなんですけどね。

馬場鹿乃。B。

素だと役立たずその2？ それでも普通の武装局員くらいなんですけどね。

ユニゾンするとA A A A A A A A A Aくらい。

高町恭也。条件付きA A A。

短時間の近接戦ならシグナムやトーレに互角以上。

高町美由希。条件付きA A。

短時間の近接戦ならシグナムやトーレとも戦える。

月村忍。条件付きA A。

幻術とかが得意そうな予感？

月村すずか。条件付きA A。

やっぱり、氷結の変換資質持ちにすべき？(INNOCENT的な意味で)

なお、親衛隊(リンデイ達)や近衛騎士団(カリム達)やスカは本局やミッドで忙しく、グレアム及び使い魔リーゼしまいも地球に戻ってないので、ここには含みません。

こんなのがバックに付いた管理局と聖王教会はある意味で戦々

恐々。逆鱗に触れたら危険すぎます。

管理局側窓口担当のリンデイ、の手足として実際に動く事になるクロノの胃が心配。

聖王教会側窓口担当のカリム個人としては、楽しく付き合っている様です。年齢も割と近く、特殊な能力を持つていても気にしない人達ですから。仲がいいという事実だけでも相当な後ろ盾になるでしょうし、とてもお得です。ヴェロツサの胃に優しいかはともかく。臭いものに蓋おとなのじじょう的な意味で、テストタロツサ家の未来には穏やかな生活が待っているはず。穏やかじゃなくなったら世界がヤバイ。

寄ってくる犯罪者ハエども達は、この2大組織が全力で潰してくれることでしょう。

この一家が不穏な動きを見せたら、管理局と聖王教会が飛んできます。

止めてくださいと土下座して懇願するために。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2005年01月)

◆◆ 2005年(新暦66年)01月A ◆◆

お姉様達が「新テスタロッサ家、第1弾」に合意し、私達がお姉様の家族を原則名前呼びとすることを決めたちよつと後。

書と主の計6人が、新生最高評議会として正式に就任する事になった。

クリスマス前まで宵天の主扱いだったユーノ・スクライアは、無限書庫の司書長に。急ぎ過ぎだと思うけど、無限書庫正常化に関わり、検索機能を使用出来て、時間に余裕がある唯一の人物。無限書庫長を兼任するお姉様の補佐官として、他に選択の余地は無かつたらしい。ついでに、お姉様は元帥、他の2書と主3人は大将扱いになり、海の表現では提督と呼ばれる階級に。特進どころの騒ぎじゃないけど、立ち位置からいくと必要らしい。緊急時に指揮権を持つためとかいう建前で。

お姉様は就任の式典で挨拶をさせられた時に、意思決定機関としての権限破棄を宣言。

同時に挨拶をさせられた主、ラインフォース、はやて、プレシア、変態^{ロリコン}の賛成で有無を言わず可決。生放送で公開されてる中で行ったから、公約を実行する姿勢をアピールする結果に。

同時にプレシアと変態^{ロリコン}の結婚やお姉様達の養子化も発表したし、お姉様も幼女モードだったからか、質疑応答で意地悪な質問は確かにあった。

曰く。

「管理局は家族経営ではない。頂点に立つ者達が1つの家族に限定されるのは問題ではないか?」

「こんな子供に任せられるのか?」

これに答えたお姉様曰く。

「嫌なら、早く代表評議会を成立させて不信任案を可決しろ。そうすれば、私達は速やかに最高評議会という立場を手放すと言っているし、そもそも頂点に立つ気が無いからこそ権限も破棄した。」

この騒動の片棒を担いだ以上、組織が安定するまでは監視者として見守る気であるが、それ以降はお前達管理世界の住人が主役を担うべきだ。その区切りが、代表評議会の成立だと考えている。

何を言いたいかというと、こんなところでグダグダ文句を言っているくらいなら、管理局の安定に貢献して、早く私達が持つ肩書を持つていけという事だ」

お姉様に立場に固執する気が無いから、言える言葉。

時空管理局は未だ組織改編の最中。それに早く目途を付けて、その時点で嫌なら追い出せと言ってる。挨拶の時に騒ぐ程度の人にそれが可能とは思えないけど。

根性が腐ってる連中がどれくらい組織改編に協力するか、楽しみ楽しみ。

◆◆ 2005年（新暦66年）01月B ◆◆

お姉様達が最高評議会に就任したという事は。

「というわけで、よろしくね」

リンデイ・ハラオウンを隊長とする親衛隊が正式に赴任してくるという事であり。

「私もこちらに来ることになったよ。」

いやあ、楽しみだ」

ジェイル・スカリエッティが親衛隊技術部長に就任する事が明らかになり。

「只今戻りました、マスター」

ウーノ達の眷属化した戦闘機人が、親衛隊所属扱いで戻ってくるという事であり。

「これからも、お世話になります」

カリム・グラシアを団長とする近衛騎士団が派遣されてくるという

事でもある。

もちろん、シャツハ・ヌエラとシルフィ・カルマンも団員として来てるし、今回は期間も長いから世話係メイドさん的な人も来るらしい。

ついでに、親衛隊技術部員としてマリエル・アテンザにも辞令が出てる。月の半分くらいは本局やミッドチルダにいる事になるらしく、今日は来てないけど。

おまけを言えば、地球在住の協力的な魔導師は原則として、親衛隊か近衛騎士団に所属するという事で落ち着いた。分け方は使用する魔法の方式も少し考慮するけど、本人の希望が最優先。

但し、守護騎士や防衛プログラムは別枠。最高評議会の個人戦力で、直轄部隊扱い。

セツナ、つまり眷属もお姉様の個人戦力だけど、貸し出しに近い外部協力と言う形で、親衛隊や近衛騎士団に協力する事になった。

「ある意味では今までと大差ない顔ぶれだが、まあ、よろしく頼む。

だが、クロノやヴェロツサは忙しいか」

「時空管理局は、まだ落ち着いていないもの。

もうしばらくかかりそうよ」

とはいえ、部隊としては活動する必要がある。

当面の体制として、現地拠点をハラオウン家に置き、アースラを親衛隊と近衛騎士団の合同本部として扱う事になったらしい。アースラの役目はこれに加え、地球と管理世界の間の窓口と、近隣次元世界の治安維持に協力する事があるらしいけど。

武装隊や騎士団を日本に常駐させるわけにもいかないし、魔法を使えとお姉様の手助け無しで使える拠点が必要だし、それなりの戦力を遊ばせる余裕も無いから、仕方ない。

おかげで、アースラにも私達が常駐する事に。

めんどい。

「聖王教会としても、地上部隊との協力体制を今後どうするのかで少々揉めていますから。

今まであまり交流してこなかった事もあってか、お互いが主導権を持つために牽制しあっていると聞いています」

「なんて解りやすい。だがまあ、私達が横から口を出す問題でもないが、あまりに長引いて治安が悪化したりするようなら、双方の責任問題にしてもいいぞ?。」

「共にそうなる可能性を理解した上での駆け引きの様です。」

むしろ、どちらがどこまで請け負い、どの様な責任を持つべきか、という線引きが最大の論点と聞いています。

それも双方の状況を見ながら数年毎に改定する方向ですので、制度の硬直も防ぐことは可能でしょう。ただ……どちらも、少々強気らしくて」

「舐められたくない、か。」

気持ちは解るし、現場に無理がかからないならいいんだが……だからと言って、私が口を出す話でもないだろうな。

リンデイ、この辺の話を雑談程度で伝えられるか?。」

「ええ。本局と地上本部の風通りも少しは良くなっているから、問題ないわ。」

「だけど、効果は限定的よ?。」

「無暗に権力を振り回すよりもよほどマシだから、これでいいんだよ。」

そもそも、現場を知らない人間に妙な口を出される事も、確執の原因じゃないのか?。」

「そうね。確かにお互いの状況を知らな過ぎた、とは言えるでしょうね」

◆◆ 2005年（新暦66年）01月C ◆◆

「ちよつと待て、確かに本人が望んだ場合という事にはなっていたが、そんなに慌てて決める必要は無いんだ。もつとゆっくり考えた方がいいんじゃないか?。」

それに、お前の人生はお前のものだ。無理に私達に合わせる必要は無いんだぞ」

とある土曜日、八神家に遊びに来たフェイト達。

「だけど、お姉様が予想していなかった事態にハッテン。」

「そんなに考える時間なんてないよ。

それに、母さんやお姉ちゃん達の立場を考えると、私が弱点だと思われて狙われるかもしれないんだ。少しでも、弱点を減らさないよ」「いやまあ、言っている事は間違いじゃないんだが、どうして結論が私の眷属なんだ。」

少なくとも変態は似た保護が可能だし、それは解除可能だと聞いている。それに、プレシアはそっちだ」

「母さんとは遺伝子検査でちゃんと親子だって証明出来たけど、お姉ちゃんとは法的なものしかないから」
そりやそうだ。

実子のアリスアのクローンであるフェイトが、遺伝子的に無関係と判断される確率は恐ろしく低いし。

お姉様とフェイトは、プレシアを母とする義姉妹という形。

外見的には実母のプレシアより、金髪繋がりのお姉様の方が似てる気もする。

赤目繋がりのリインフォースでも可。

元々他人だったわけで、普通ならこれでも充分以上の様な。

「ええと、それは、ありがとうと言っておくべきところか？」

とりあえず、私の眷属になった場合の問題点をいくつか挙げておくぞ。

人でなくなる。私以外の理由で死ぬなくなる……というか、本質的には一度死ぬ事になる。その後私の眷属として作り変えられるわけだが、不死者らしく成長も止まり、子も産めなくなる。

それに、友人達に置いていかれるのは、辛いぞ？ 不死の根拠が別だと、私と変態が決別した場合にプレシアと別れる事になる可能性も高いしな」

「家族の殆どが普通の人じゃないんだから、今更だよ。私ももうすぐ10歳になっちゃやし、これ以上背が伸びたら、お姉ちゃんをお姉ちゃんって呼べなくなりそうなのが心配なんだ。」

この世界にいる時はまだ大丈夫だけど、管理世界向けは元の姿だよ
ね？」

これ以上って、お姉様は既に身長で負けてるけど。
現時点で、差が付きすぎるのを防ぐ程度の効果しかない。

「私の体格は昔基準のようだし、個人差が大きい部分だ。見た目の年齢などあてにならない。」

そもそも、生まれという意味ではリインフォースが最年長で、本来なら私の姉なんだ。呼び方など記号や愛称のようなものだから、気にしなくていいぞ」

「みんな気にしなさすぎだよ。私は、私に出来る限りで、普通の家族に近付けたいんだ。」

お姉ちゃんが、家族って言ったんだよ」
普通って何だ。

当たり前のように見受けるって事さ。

テスタロッサ家の普通って何だ。

不老不死って事さ？

つまり、テスタロッサ家は普通じゃない。

その中で、今はまだ普通の範疇に見える “姉妹の関係” を維持したがるフェイトがいじらしい。

「……またか。またブーメランなのか。」

とりあえず、あれだ。少なくとも、プレシアの許可が取れたらだからな？」

「うん、解った」

「それと、もう一つ条件を付けてみるか。」

普通の家族を目指すなら、普段からそれくらい言えた方がいいんじゃないか？ 家族に何か頼む時にも真剣に集中してないと赤くなるのは、普通と言えないと思うが」

「え……そ、そうかな……」

どう見ても、集中が切れた。

というか、もう赤くなってる。

お姉様のブーメラン返しは成功したけど、何この赤くてもじもじしてる可愛い生き物。

「親衛隊を増員だって？」

リンデイ・ハラオウンを経由した、レティ・ロウランからの連絡。ミッドチルダの地上本部からも、連絡役を兼ねて人を送りたいと強く要望されているらしい。

主要任務は、違法な渡航者や密輸に関する連絡と可能な範囲での対策、となってる。

ここが管理外世界だからこそ、何らかの人員が必要だろうという建前。今後戦力を持つなら、侵入後に地上で捕縛する部隊になるだろうけど。

「陸の連中としても、私達の顔色を伺うパイプが欲しいという事か？

連絡役に限定するなら問題ないだろうが、こっちの国の反応が問題になるかもしれない。忍達にも確認して、問題が無ければ許可する方向でいいか」

という会話から、1週間。

地球に常駐する時空管理局への窓口という扱いで、割と簡単に各国の裏側に存在を認められた。

ついでに、近衛騎士団は聖王教会への窓口扱いに。

共に、今までは連絡する手段が無い地球側の組織がほとんどで、手段があっても色々と面倒だった事、時空管理局の権力構造で最上位に近いお姉様達が地球寄りの立ち位置になり、その護衛ついでに違法魔導師の対策に動ける戦力が貸し借りにならずに常駐するという事で、意外なほどの歓迎ムード。

諸手を挙げて、親衛隊と近衛騎士団の戦力常駐が認められるほどに。

今までどれだけ迷惑をかけていたんだと、お姉様が思わず突っ込みを入れたほどに。

日本に窓口として機能する会社の設立を要求され、その準備に支援を受けられるほどに。

ちなみに支援を渋ったのは、グレアムという窓口を持つだろうイギ

リスや、その他数か国。経済的または人的に苦しそうな小規模の組織は、仕方ない。

私達としては、結果的に使い魔達の無難な就職先（という名目の増員理由）も確保出来るし、問題ない。人や資金は何とかなっても、法的な面は色々面倒だから、その方面での支援は有難い。

ついでに主とはやての治療に関して、石田医師へも裏から手を回してもらえることに。既に薬品の組み合わせの情報は渡してるけど、それとは別口での説明やらが行われる模様。

そういった話の結果として、お姉様達の前に現れたのは。

「ミッドチルダ陸上警備隊第108部隊所属、ゲンヤ・ナカジマ二等陸尉であります」

戦闘機人の父親で日系人、来たー。

予想はしてたけど。

StrikerSよりは若く見えるけど。

20歳を超えたくらいの筈のクイント・ナカジマと比べると……。年下趣味と弄るべき？

「やっぱりお前か……とりあえず、礼儀は気にせんとというか面倒だから普通に喋れ。

知っていると思うが、私が最高評議会の議長なんぞをやっているエヴァンジュだ」

「最高評議会評議員、ラインフォースだ。

厄介な立場になってしまったようだが、必要以上に気を張る必要は無い」

「いえ、公私の区別ははじめとして必要です。

私的な場でない以上、気を抜くわけにはまいりません」

「やれやれ、私は公の部分を投稿捨てたいんだがな。

ところで、選ばれた理由に心当たりはあるか？」

「祖先が当地の出身者であることから、家族を残して単身赴任するというカバーストーリーを用意しやすかったため、と聞いております」

「ふむ……まあ、建前としては充分か。

スバルとギンガの件も影響していると思うがな」

「娘2人が、ですか？」

「今の戦闘機人を技術的に完成させたのは、ジェイル・スカリエツティだからな。」

前の最高評議会に反旗を翻し、管理局の闇を暴いた元犯罪者だが……今はこの世界にいるぞ。というか、親衛隊の技術部長だ。

こいつの支援をする為に動いていたのがレジアスだから、良い環境を提供して罪悪感を紛らわせるとか、痛い腹を抉られるのを避けるという意図もありそうだな」

「そ、それは……」

「エヴァンジュ、そこまで言っただけなのか？」

「知らなかっただけで、現実を見れば関係者だからな。真実を知る権利はあるだろう。」

とはいえ、経緯はどうあれ、2人の調整が高いレベルで可能な環境がここにあるのは確かだ。今までメンテナンスに関わっていたマリーも親衛隊に所属していて、こっちに来ている事も多いか、慣れた相手がいる安心感もあるか。

それに、他の戦闘機人もいる。孤独を感じさせない効果も期待出来るかな。

他にも思惑はあるだろうが、お前が選ばれた理由はそんなところだろうから、機会があったら連れて来ていいぞ。ご先祖様の出身地だ、全く興味が無いわけでもないだろう？」

◆◆ 2005年（新暦66年）02月B ◆◆

話というか方針は確定していた、陸士訓練校への留学について。

フェイトが1か月、アルフとザフィーラが3か月の予定で、最終決定。

トーレが親衛隊に所属した事や、近衛騎士団に数名の若手騎士が加わった事も、必要な戦力はあると見なす根拠になったらしい。

それでも、相当無理がある超短期育成コース。

就任間もない最高評議会の家族。厳戒態勢で護る事になるけど、そ

れを維持出来るギリギリの期間らしい。

「本格的に、犬の手も借りたらしいな」

「人員として数えられておらず、確かに手が空いているように見えるのだ。仕方あるまい」

「だね。まあ、ちよちよいと行って、さっさと帰ってくるよ」

「駄目だよアルフ。ちゃんと学んでこないと」

お姉様と留学組は、必要な書類の準備をするために集まっている。ついでに。

「エヴァンジュお嬢様あ、こっちの学校への説明と手続を完了しましたあ。」

随分と聞き分けがいい相手でしたねえ」

私立聖祥大学付属小学校への説明から帰ったクアットロが、終了報告。

もちろん、主役はプレシア・テスタロッサ。クアットロは補佐というか、説明要員。

「若干だが裏側関係に理解があるらしいし、外国人設定だからな。故郷での資格取得で必要になったという建前は通しやすかったんだろう。」

半分以上は春休みを使う事になったが、済まないな。せつかくの休みを勉強で潰した上に、学校にも影響が出ってしまった」

「ううん、ちゃんと、みんなの役に立てる事だから」

「気負いすぎるなよ?」

「それを言うなら、お姉ちゃんは過保護だからね?」

◆◆ 2005年(新暦66年)02月C ◆◆

「一度ミッドチルダに戻る?」

「はい。着任早々なのですが、予言が可能な時期が迫っていますから。」

その際に、ヴィヴィオさんも聖王教会の方へ来て頂くかと考えています。解読に協力して頂けると非常に助かりますし、運よく時間が取れた人達と話す機会があってもいいのではないのでしょうか」

カリム・グラシアの予言能力、その行使条件。

月の魔力が云々という話だけど、丁度いい調査機会？

というか、何だか黒い。流石Strikersで機動六課の後ろ盾になれるだけはある。

運よくの後に、話を聞いてとかの言葉が隠されてる可能性しか思い付かない。

「運とは、お前との仲の良さか？」

「否定はしません。私が気持ちよく付き合える相手であれば、私が身近な人と話す声が耳に入る機会があったり、私の言葉の裏の意味も理解しやすかったりするだけですから。」

エヴァさんのやり方も、割と近いですよね？」

お姉様の方針的には、確かに似てなくはない。

カリム・グラシアも何だか染まつてきてるような、本性が出てきたような。

「否定はしない、と真似して言うておくか。」

予言は確か、年に1回程度だったな。ついでだ、私も同行するか？

せっかくだから、予言の魔法を見てみたい」

「そうですね……簡単に再現出来るとは思えませんし、悪用する必要があるとも思えませんから、見て頂く事は問題ありません。」

ですが、最高評議会議長がお忍びで聖王教会に、という件が広まるのは、あまり好ましくない事態になりそうです」

「心配するな、その程度は弁えている。元の姿しか広められていないようだから、こっちの大人モードなら気付く連中はそういないだろう。」

私も行くなら、直接ミッドに送ってやってもいいが。その方がヴィヴィオを隠しやすいぞ？」

「それなら大丈夫でしょうか。」

ですが、移動は正規の方法で行います。そうでなければ、運よく気付く事も出来ませんから。

異世界渡航に関する手続きはこちらで行っておきますが、観光などで滞在したい場合は日程を調整する必要がありますから、早めに仰つ

て下さいね」

というわけで、お姉様達はミッドチルダ入り。もちろん、大人モード。

魔法関係を知るヴィヴィオの友人として、観光に来たという扱い。おかげで大騒ぎにはなっていない。けど。

「……何故、こうなったんだ」

「あら。お気に召しませんでしたか？」

「私の精神は男性を基本としている、と言ってなかったか？」

「ですが、あれを見てしまえば、やはりこれしか思い浮かばなかったのです」

「だからと言って、どうして名前がキティ・マクダウエルなんだ！

くそつ、こうなるならネギまを見せるんじゃないか!!」

人目に付かない場所、具体的には空港のVIP用休憩室に着いてから、お姉様が大騒ぎ。

理由はカリム・グラシアが用意した、お姉様大人モード用の渡航査証。

「ですが、エヴァンジェリンでは名前から疑問を持たれる可能性があります。エヴァさんと呼びかけてしまえば、必要以上に周囲の関心を引いてしまうでしょう」

「キティとは、猫や子猫の意味でしたね。」

「可愛いと思いますよ」

目を除く表情だけは大真面目なカリム・グラシアと、ニコニコしてるヴィヴィオ。

結局、2人とも笑ってる。

「アタナシアかエカテリーナでいいだろうが！」

「色々秘密にされた意趣返しですから。ですが、アタナシアはともかく、エカテリーナは何処から出たのでしょうか？」

「見せて頂いた作品には無かったと思いますが」

「……キティの部分は、本来この名前だった、はずだ」

お姉様の目が泳いでる。

漫画じゃない派生商品に付属した仮契約カードが根拠……ではな

く、ネギ入り闇の魔法の巻物にも書いてあるから、間違いなく原作設定。

お姉様達は気付いてないみたいだけど。

「その辺は、また追々という事に。」

そろそろ時間ですので、行きましようキティさん」

「だからその呼び方は止めろ！」

何だか長身マッチョになった白い子猫を想像しそうになりながら、一行は聖王教会へ。

突然現れた聖王に、大騒ぎ……になる事も無く、裏口からカリム・グラシアの執務室へ。別に顔とかは隠してないけど、人との接触を避けられるよう、色々調整してあった模様。

「さて、ここからはどうするんだ？」

ヴィヴィオは運のいい連中とのお話だろうが」

「ふふ、そろそろ時間なんです。」

始めてしまいますよ？」

「……予言か。」

私はいつでもいいが、よくここまでギリギリのスケジュールで動いたな」

「いえ、もう少し余裕がある予定だったのですが、予定より遅れてしまいました。」

ヴィヴィオ様も宜しいでしょうか？」

「はい。私は見ているだけですから、いつでも」

というわけで、予言開始。

と言っても見た目的には、紙が舞い、その表面に文字が現れるだけの、地味なもの。

過剰な演出は、無かった。ちよつとがっかり。

「ええと、この様な感じなのですが……」

それでも、何が必要で何をやってたのか、その一部は判明。と言うか、ジュエルシードが妙な反応をしたのが鬱陶しかった勢い。

前提として、発動には大量の魔力が必要。加工された魔力はあまり効果的でないようで、人為的に魔力を振りまいても難しそうな感じ。

月の魔力がいい感じに満ちた状態になる事で、必要な条件を満たせると判断。

魔法の内容は恐らく3系統。細かい補助魔法も多数含まれる模様。その内1つに、お姉様の未来を見る魔法との類似点がある。内容は恐らく、未来に見える並行世界の情報を何度も観察する事。ジュエルシードに反応があったのもこの部分。細かい情報を多数集める事を主眼に置いてるらしく、広く浅く、参照先を追い切れない程に手を伸ばしてる。

情報収集がもう1つ。これは無限書庫に特殊な接続をしてる。管理システムではなく、蒐集システムに寄生する事前解析処理の結果を取得する模様。

最後は、これらの情報を詩文形式に纏める処理。お姉様のコンピュータシステムに割と近い実装も含まれてる模様。

どれも、かなり大きな魔力を使用するし、特に並行世界の観察時は繊細さも要求される。

かなり特殊な適性と、それを引き出すデバイスがあるからこそ行使可能な魔法だと確認出来た。

「……意外な結果が出たな。」

まさか、限定的とはいえ並行世界の参照を実現しているとは……」「そうなのですか?」

「ああ。未来を見ているつもりなのだろうが、参照先は間違いなく並行世界だ。」

そのペンダントが専用のデバイスのようだが……それは知っていたか?」

「はい。適性があるからと、私が継承したものです。」

グラシア家に、稀に現れる資質だと聞いています」

「だろうな。かなり特殊で、闇雲に探しても資質持ちを見付けるのは難しいだろう。」

ヴィヴィオ、そろそろ読めたか?」

お姉様は、魔法が終了した後で現れた詩文を読んだヴィヴィオの方を見た。

今回出たのは、3枚。

「日時や場所の特定は難しいですが、何が起こるかは概ね読めましたよ。」

「1つは気象災害による被害の発生を、1つは何らかの組織が暴走する事を示すようですね」

「管理局や聖王教会としては、無視出来ない情報か。もう1つは？」

「それが、どう解釈すべきか難しいのです」

「ヴィヴィオが出してきた1枚は、文字数は割と少ない。」

でも。

『隔たれた地を渡り、消えゆく絆が受け継がれる時

旅人は新たな命を得る

親愛なる者達が自らを導き、闇の船を砕く光の剣と成す事で

未来は鎖から解放され、新たな時を刻み始める』

……未来げんさくブレイクを変えろという意味で、お姉様関係と言えなくもないような気はする。

予言の際に数個しか追えなかったから、どんな並行世界を参照したのかは不明。少なくとも、追えた並行世界の情報にそれらしいものは拾えなかった。

時系列的に、次はStrikerSだけどブレイク完了済み。闇の船に相当しそうな最高評議会は既に裁きを待つ身だし。

Vividはヴィヴィオがオリヴィエで既に成人間近だし。

お姉様があまり知らないForce？ フツケバインの艦？

中途半端に知った分、やけにもどかしい。

「私達に関係するかも不明なんだ、世界を占った結果とでも思っておけばいいさ。」

カリム、これからの予定は？」

「この予言を持って、グラフィア家と関係者が集まる会議に出席します。ヴィヴィオ様には来て頂きたいのですが、キティさんはどうしますか？」

「その名前は止める、しつこいと戦闘機人風の姿を作ってキティとか名乗るぞ？」

とりあえず身分を隠している以上、会議に立ち入るわけにはいかんだろう。教会がどんなものなのか、観光がてら見させてもらおうさ」

「そうですか。それでしたら、案内にシスターを付けましょう。」

お一人で動かれて、しつこい男性に絡まれても大変ですから」

ヴィヴィオの関係者だと証明して、変な手を出させない壁役も兼ねると思うけど。

でも、一番の本音は、お姉様の監視役だと思う。

「……そうだな」

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2005年03月

◆◆ 2005年（新暦66年）03月A ◆◆

「戦技披露会？」

久しぶりに顔を見せたクロノ・ハラオウンから伝えられたのは。
要するに、戦えつて事。

「親衛隊について、色々と言われる事も多い。

具体的には、人を送り込むための言い訳だと思うが、最高評議会を守るには戦力が小さすぎるといふ批判をよく耳にする。

だが、君達は不用意に人を増やされたくないだろうし、こちらの人手も足りていない。そもそも現状でも戦力過多だ。

幸い、囑託魔導師を含む民間協力者が多いから、コストについての批判は多くないんだが」

「批判が出るのは、アースラの維持費くらいか？

あれはあれでこの付近の治安維持に協力する事になっていたと思うが……切り札兼後継者の不在で動きにくい様だぞ」

「無理を言わないでくれ、僕も早くこの状況を終わらせたいんだ。それに、その後も本局側の対応が主任務になりそうだから、哨戒任務をこなす時間は無さそうだ。現地に十分な設備を確保出来るならアースラも無くせるんだが、別荘を現地と見なすには問題が多いし、当面はこの体制のままだろう。

話を戻すと、今の最高評議会、親衛隊、近衛騎士団の戦力が充分だと示すには、実際に戦力を見せるのが一番手っ取り早いだろうという案が通りそうなんだ。

本局の武装隊との集団戦を考えているようだが」

「私達も含むとなると、妹達を数えなくても、オーバーSだけで軽く10人以上いるんだが。

というか、私かりインフォースだけで充分だ。他の連中は存在感す

ら無くなるぞ」

「そうなんだ。何かいい方法は無いか？」

「最高評議会の6人対それ以外、ならどうだ？」

念のため防衛プログラムや妹達を外しても、異常性を見せ付けるには充分だろう」

「武装隊が蹂躪されるよりは、無難か……？」

という会話から、早1か月。

別の案が出る事なく、お姉様の案が通っちゃった結果。

お姉様、主、プレシア、ラインフォース、はやて、ロリコン変態の最高評議会チームと。

クロノ・ハラオウン、セツナ、フェイト、シヤツハ・ヌエラ、守護騎士4人、アギト、成瀬カイゼ、高町なのはの護衛代表チームが。

戦技披露会という形で対戦を行う事になり、今は会場にいる。

『さあ、次の試合は何と！』

最高評議会 対 護衛代表という、本来ならばあり得ない組み合わせ！

アルハザードの遺産の実力はどの程度なのか！ 脆弱な子供部隊と批判されがちな護衛の実力は充分と言えるのか！

25分1ラウンド勝負、砂丘及び海上浮遊物なし、開始距離は200メートル！

カートリッジ使用制限なし、ユニゾンあり、結界内での魔力供給ありの、派手な撃ち合いが予想される一戦が、間もなく始まります！！

そしてなんと、解説には聖王の継承者、ヴィヴィオ陛下に来ていただいています！』

『こんにちは。ですが、聖王の記憶と力を継承したのであって、地位は継承していませんよ。』

陛下は無しでお願いします』

『そうですか！ では、ここからはヴィヴィオ様とお呼びする事に致しましょう！』

『いえ、あまり持ち上げる様な敬称も避けて頂けると嬉しいのですが』『無理ですー！』

ナレーターが嬉しそうに叫んでるけど、今回は管理世界全部で放送予定らしい。しかも、近い世界では生放送中。

だけど、戦いたくない相手を持つ人がいる。戦わせたくない人もいる。

だからこそ、お姉様がマイクを持って。

「開始前に宣言しておくぞ。」

チーム戦扱いだが、私達は原則として交代制でいく。誰かが前に出たら、それまで戦っていた者が下がる形だ。

だからと言って、ルールを縛る気は無い。全員で向ってくるもよし、回復や温存等の為下がるもよしだ。但し、後ろへの攻撃は同時参戦要求と受け取るから、そのつもりで行う事。

以上を理解したら、全力でこい。私達の力を知るお前達だ、手加減が不要な事は理解出来ているだろう?」

『これは驚きです!』

護衛されるはずの最高評議会が、まさかのハンディキャップ&全力を出せ宣言!

オーバーSランクやニアSランク魔導師を相手に、余裕の構えです!!』

『それだけの力を持つと、お見せ出来ると思いますよ』

だけど、プレシアがフェイトを攻撃するとはとても思えないし。

お姉様は主やはやてを前に出す気が無いし。

守護騎士達は、主やお姉様に剣を向けたくないだろうし。

グダグダにならないためには、必要な制限でもある。それに加えて。

「先鋒はお前だ、ロリコン変態。」

さっさとフクロになってこい」

「一番気兼ねなく戦ってもらえる立場だという事実は認めましょう。」

ですが、扱いが悪くありませんか?」

「好かれていると思っっているなら、墓場に行って埋まってこい。」

馬鹿も、死ねば治るかもしれん」

『最高評議会チームは、クーネ書記が先陣を切る模様!』

さあ、護衛代表チームの作戦は決まったのか!?

オーバーSやニアS魔導師の意地は、どこまで通じるのか!

手加減不要と言い切った自信は、どこまで実力に裏付けされているのか!

戦闘空間の固定も完了、双方の準備も完了!

それでは、試合、開始!!」

R a k e t e n h a m m e r
「ラケーテンハンマー!」

『おおっと、開始直後に元黒の騎士団、ヴィータ突撃隊長が突っ込んでいく!』

その後ろでは早速シグナム団長がユニゾンだあ!!』

『ほぼ全員が動くようですね。』

固まっていれば纏めて落とされる可能性が高いですから、散るのは正しい判断でしょう』

『ですがクーネ書記は涼しい顔で躲し、受け止め、受け流しています! 次々に現れるバインドの解除も極めて高速、ですが片足のバインドを1つだけ放置する余裕を見せています!』

『高度な幻術使いなので、普段は正面から戦う事が無い方なのですが、後衛のシャマルさん達は、やはり幻影の可能性も考慮していますね』

『そ、そうなんですか!?!』

接近戦を挑む騎士3人を霞めて撃ち込まれる誘導弾を操るのは、後衛の子供3人! これだけでも信じられない制御技術と度胸ですが!?!』

『あの3人でしたら、その気ならこの倍は制御出来ますよ。』

実際、手元や周囲にいくつか待機させているでしょう?..』

『ほ、本当です! 確か「雷鳴剣!」な、何事ですか!?!』

「エヴァちゃん、どうして相手チームに魔力供給をしているのですか!?!」

「うるさい! これくらいやらんと試合にもならんだろうが!!」

『え、えーと……』

『エヴァさんが、セツナさんに魔力を供給している様です。』

セツナさんは魔力供給の技術との相性がとても良いので、無視出来ない威力になっていきますね』

『だからですか！ 雷を伴う上空からの強襲に、この試合で初めてクーネ書記が真面目な顔で防御って、今度は全員を雷が襲いました!!』

「交代よ」

「助かった様な気分になれば良いのでしょうか？

思い切り巻き込まれたのですが」

「あら、この程度で墜ちるほど脆弱な夫だったかしら？」

『今の雷撃は、プレシア評議員だった模様です！ という事は、最高評議会チームは選手交代という事でしょう！

護衛代表チームで接近戦を行っていた3人……いえ、ユニゾンが解除されたため4人は、即座に転送されて治療を受けています！』

「フェイト、あの3人が動けなくなってしまったから、次は前に出るのでしょうか？

あまり無茶をしてはダメよ」

「か、母さん、その、今は試合中だから」

『親馬鹿です！ 親馬鹿がいます!!』

微笑ましい姿ではありませんが、試合中で相手チームという事を忘れていません!!』

『魔力を回復させていますから、試合だという事自体は忘れていないようですよ。

次はリインさんが出るみたいですから、横槍のお詫びかもしれません』

『おおっと、プレシア評議員への交代かと思いきや、フェイトちゃんを抱きしめた後はすぐに下がりました！

次は闇に翻弄された悲劇の魔導書、リインフォース評議員が出る様です!!』

「……エヴァンジュ。人前に出て、こんなに恥ずかしいのは初めてだ」

「言っただろう？ 悲劇のヒロインみたいな扱いだ」と

「みたいではなく、そのものと思えるのだが」

『ごっちはごっちで、照れています！』

6枚の黒い翼がパタパタ動く姿は、何だかクール可愛いです！』

「え、えっと、リインフォースさん。行きます！」

「ああ。早く始めて、この空気を変えてくれ」

『護衛代表チームで最も民間人に近い、なのはちゃん9歳が突撃！』

先ほどは素晴らしい誘導弾の制御技術を見せましたが、近接はどうでしょう!?!』

「なのは！」

『プレシア評議員の娘、囑託魔導師でもあるフェイトちゃん9歳も突撃！』

何というスピード、これは凄いです！』

『なのはさんは遠距離、フェイトさんは近接の方が得意ですね。』

もちろん、他が出来ないわけではありませんよ』

『そうなのですか！』

おっと、ここでクロノ執務官も前に出ました！ 同時になのはちゃんが少し下がって誘導弾に切り替える様です！ しかも囑託魔導師であるカイゼくん11歳も誘導弾での支援を継続中！

AAAランクの4人を相手に、リインフォース評議員は捌き切っております!!』

『リインフォースさんは、あれで広域型なんですよ。』

それに、まだ本調子ではないと聞いています」

『え、あれで本調子じゃない上に苦手な距離なんですか……?』

『その筈です。あ、なのはさんが勝負に出ますね』

『勝負……って、何ですかあれはー!?!』

桜色です！ 桜色の……えー!?!』

『集束砲撃、ですね。』

エヴァさんが使用許可を出していたので、どこかで使うとは思っていません』

「スターライトお……」

『だからって、9歳が使っている技術じゃないですよ!!』

『ブレイカー!!』

「さあ、遊びの時間はここからだ！ 敵弾吸収陣！」

キルクリ・アブソル・ブティオーニス

『と、止めたー!? エヴァンジュ議長が止めました!!』

『ていうか何ですかアレはー!?』

『エヴァさんが遊び始めましたね。』

とある物語に、相手の魔法を吸収する魔法が登場します。それを模倣した物だと思えますよ』

『だからって、だからって……!!』

スタグネット

コンプレクشنオー

プロ・アルマティオーネ

「固定、掌握！ 術式兵装 桜色の魔王!!」

「にやー！ 魔王って何ー!?」

『念話で説明されましたが、受け止めた魔力をカートリッジと同じ方法で加工して、使用しただけだそうです。』

魔力光が桜色のままですし、変換等をせず、直接利用しているようですね』

「その身に刻め！」

『今度は翼と槍ですか!? どっちも本物っぽい上に何だか神々しいんですね!!』

「ニーベルン・ヴァレスティ!!」

『なんと一発で撃墜！ AAAランクの4人を纏めて撃破です!!』

『これは……別の物語で、戦乙女とも呼ばれる天使が使用する技ですね。』

エヴァさん、物理攻撃に見えましたけれど、大丈夫ですか?』

「ん? 攻撃部分は非殺傷専用で組んであるし、見た目は演出効果の幻影が主体だ。』

翼もなかなか天使っぽいだろう。外見は良い出来だと思ってるが』

『そ、それなら、実物……ではないんですか?』

攻撃魔法は終了していますが、今でも翼が出したままですし』

「攻撃魔法とは別に、実体を持つように組んだ魔法だ。』

飛行補助でも使えるが……そっち方面は、今のところお勧めしかねる出来だな』

「エヴァ、使ってみたい。教えて?」

『おおつと、アコノ評議員が前に……つと、護衛代表チームの主力ほとんどが治療中ですね。』

「どうやら、アコノ評議員も翼を使う模様です!」

「私と同じ方式だと色々無理が出るから、別方式になるが構わんな?」

「大丈夫。見た目や出来る事が近いなら、手法は気にしない」

「んー、なら、これだな」

「ありがとう。ええと……こう?」

『おおつ!? アコノ評議員も翼を広げたー!』

何だか戦技披露会ではなく、特殊技術披露会になっているぞー!?!』

「飛行補助……こう?」

「待てアコノ!」

『あ、あれは危険ですね』

『ちよ、アコノ評議員が凄い勢いで飛び……えー!?!』

「だから待てと言っただろう!! 保護機能が変わらんに飛行魔法の性能だけが極端に上がるんだ、前みたいな事になってるだろうが!!」

「ごめん、またやった」

『え、ええと、これは、自爆……でいいのでしょうか?』

「というか、前って何でしょうかヴィヴィオ様!?!』

『以前、闇の書の闇との戦闘時に、危険な攻撃を避けるために高機動の回避を繰り返しました。』

その結果あの様な状態になっていたので、その事でしょう」

『そ、そんな事があったのですか。激しい戦いがあった事は公開されていましたが……』

え? こ、ここでやるんですか!?!』

『あら。あれは、ゼスト隊ですか?』

『そ、そうなんです。地上の守護者、英雄ゼスト隊から4人が挑戦者として来て、改めて最高評議会の戦力を証明するという話だったんです!』

「なるほどな。身内部隊で手加減や鼻肩があると思われても面倒という事だろう。」

私は構わんぞ」

「済まないが、上の指示だ」

「上と言うか、レジアスあたりか。」

お前とクイント、メガーヌは判るが、あと一人は普通の隊員か？

射撃か支援担当に見えるが」

「デュアリス・ドーフィン、うちの隊員だ。」

押しかけたのはこちらだ。準備や治療の間くらいは待とう」

「ふむ……そうだな。遊びの時間を続行でいいか。」

4対4、こちらの戦力を正しく示す為に私とアコノ、後の2人は護衛の連中から選ぶ。陸戦の方が得意だろうから、飛行する場合でも低空限定で上空には上がらない。

そんな感じでいいな？」

「俺達は構わんが、3人が手負いで戦えるのか？」

「私を見くびるなよ。」

死の、先を往く者達よ！」

『な、何だか勝手に話が進んでいます、また何か……って、今度は何事ですか!?!』

『これの元は、先ほどの技を使う天使が、仲間を呼ぶ時の台詞です。』

銀色の魔力光もうまく使っています……ええと、本人の言葉を伝えますね。無駄に洗練された無駄のない無駄な演出だと思いがどうだ、との事です』

『だからって、全員の治療まで終わっているじゃないですか！』

それに、エヴァンジュ評議長とアコノ評議員とセツナちゃんとフェイトちゃんって、子供だけですよ!?! 相手はあのゼスト隊なんですよ!?!』

『大丈夫だと思えますよ。』

それにほら、まだ何かする様です』

『ユニゾン!?! アコノ評議員が金髪になりました！』

というか、更に人数を減らすんですか!?!』

「25秒後に拘束、30秒後に撃ち抜くから、それまでに私を墜とすか耐え切る事。」

タイムアタック、準備して」

「おう。行くぜお嬢さん」

『なんとという自信！ 4人の攻撃を3人で抑え……何と護衛代表の2人の魔力が一気に膨れ上がった!? 今度はどんな仕掛けですかヴィオ様!!』

『魔力を供給しただけだと思えますよ。』

「さあ、始まりますよ」

『え、ええと、測定班からはSS級だという情報が来ていますが、とにかく、最高評議会と護衛チーム対ゼストチーム、戦闘開始です!』
「行くぞ!」

「百烈桜華斬!」

「30、29、28……」

『ゼストチームの3名、突撃開つと、出鼻を挫かれた!』

いきなり大技炸裂、砂煙で視界が!!』

『あ、後ろでドーフィンさんが斬られましたね』

『な、なんと!? フェイトちゃん速い、速すぎる!!』

デュアリス一等陸士を、後ろからずんばらりん!!』

「予想以上だな。クイント、足止めを頼む」

「後ろを見せるべきではないですよ!」

『おおっと、今度は砂煙の中から飛び出たセツナちゃんがずんばらりん、って翼が!』

『翼の扱いは、あの魔法の開発にも関わったセツナさんが一番上手なんですよ』

『そ、そうなんですか!』

「さあ、これでエヴァンジュ議長とアコノ評議員のカウントが……つて、本当にカウントを取ってるだけなんですか!?!』

『そうだが、何か問題でもあるのか?』

「19、18……」

『い、いいえ! ありません!!』

ゼスト隊長はセツナちゃんと、メガー又准陸尉はフェイトちゃんと
戦闘中!

「実質1対1の勝負に持ち込んだ!!」

『2人とも高速機動型ですし、そう簡単には隙を見せませんから。』

逆に、隙を見れば確実に突いてきますよ。セツナさんならSランクの防御でもある程度のダメージを通せますし、ゼストさんが強引に突撃しても届かないと思います』

『なんと、ヴィヴィオ様の予想では間に合わないという事でしょうか!?』

そう言っている間にも、カウントは確実に進んでいます！ さあ、ゼスト隊はどうなってしまうのか!?!』

「7、6、バインド」

『おおっと、ついに行動開始だ!!』

「4、集束、スターライト」

『なんですと!?!』

「ブレイカー」

『ちよ、戦闘空間を壊すってどんな威力ですかー!?!』

◆◆ 2005年（新暦66年）03月B ◆◆

「あれでも手加減されている事は理解出来ている。」

理解出来ているんだが……やり過ぎ、という言葉を送っているか?」

戦技披露会の終了後、地球に戻るためのアースラ艦内。

お姉様と主は、クロノ・ハラオウンにダメ出しをされてる。

「戦力が充分だと示す事が目的だろうか?」

同数で地上の英雄様を圧倒したんだ。それも、双方に怪我無く、私と護衛の力を見せて、だぞ」

「確かにそうだが……最後のアレは、どこまで本気なんだ?」

あの威力でも手加減していたとは思うんだが」

「1秒しか集束していないし、魔法名を言って何をするかも宣言したし、バインドの後にも時間を取った。使った魔法も得意じゃないミッド式で、なのはが直前に使用していた物。」

集束と発動の間に1拍入れたのも、手加減のつもり。あれだけ時間があれば、エヴァなら余裕でバインドを解除して墜としに来る」

「戦闘中に使った私達の魔力は、私とアコノの2人合わせてもAAかAA程度だ。技術や適性の問題は置いておくが、魔力出力だけで言えば、お前1人でも可能という事だな。戦闘前の魔力供給も、カートリッジで代用出来る範囲のはずだ。」

ただ、セツナとフェイトが5分耐えられたかは、正直言つて微妙だな。だからこそその30秒制限で、集束は私とアコノがユニゾンしている事が前提の速度だったが。

どこまで本気かと聞かれると……どう答えればいいんだろうな?」「やはりか……」

久しぶりにorzの姿勢を見た。

それに、お姉様や主が本気なら、自力の魔力だけであれ以上の威力を出せる。

集束した事自体も、手加減と言えなくもない。

「あえてゼスト達の駄目出しをするなら、2人の速度を甘く見た事が最大の失敗だろうな。」

人数減で油断した上に砂煙に気を取られて、後衛がフェイトの的になったのが最初のミスだ。突出したフェイトの対処に人を割くのは仕方ないが、向かおうとした隙をセツナが高速魔法弾で牽制しながら最大速度で突撃して突いたことにも事に対処出来なかったのも問題か。後ろを向いていなければ対処出来た可能性が高いと思うが、結果的に、速度に対処する前に2人墜ちている。

その後は2人とも突破は出来なかったが、墜ちてもいないんだ。せめて墜墜を1人で抑えられていれば、私達のところに辿り着いた可能性は充分あったはずだぞ。セツナもフェイトも変態ロリコンやリン相手にそれなりの速度を出していたんだし、予め魔力も増やしたんだから、予想外ではなかっただろうしな」

「……それは、本人達に伝えた方がいいか?」

「さあな、向上心が強くて精神的にタフなら伝えた方が伸びるかもしれん。プライドが高かったりするなら止めておいた方がいいが……」

そんな連中はそもそも出せんか」

「それはそうなんだが。」

とりあえずは、乱入を指示したレジアス中将には伝えて、本人に伝えるかどうかの判断は任せる事にするよ。

あと……あの演出は、フェイトも眷属になっているという事でいいのか？」

死の先を往く者。ぶっちゃければ死者。

クロノ・ハラオウンは眷属について知ってるから、あれがただの演出じゃない事に気付けたらしい。

「何だ、聞いていなかったのか？」

「ああ。眷属にすることは積極的ではなかったと思っていたんだが」

「フェイト自身の判断だ。」

それに、ずっと一緒にいたいという言葉で、プレシアがあっさり陥落した。そもそも不老の連中では説得力不足で、ストツパー不足なんだ。変態は話をするだけ無駄だろうしな。

ツツコミ役として、こつちに来てくれないか？」

「無理を言わないでくれ。いくらなんでも手に余る」

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2005年04月)

◆◆ 2005年(新暦66年)04月A ◆◆

年度が変わる頃、ようやく新テスタロッサ家が法的に成立。具体的には、戸籍が完成してプレシアと変態^{ロリコン}の結婚が成立し、加えてお姉様主、リインフォース、はやて、ヴィヴィオの5人もテスタロッサ姓となった。

ちなみに、ミドルネームに最初の姓を入れたから、主はアコノ・小野・テスタロッサに、はやてははやて・八神・テスタロッサになった。お姉様とヴィヴィオはミドルネームなし。つまり、エヴァンジュ・テスタロッサとヴィヴィオ・テスタロッサに。

リインフォースはちよつと特殊で、ノツテ・リインフォース・テスタロッサに。

どうでもいいけど、変態^{ロリコン}もミドルネームを使わないらしい。あと、結婚式も無し。管理世界向けには最高評議会就任式典で発表してるし、地球向けには既成事実的な感じになってるし、まだ住所が変わらないから新婚生活が始まるわけでも無いし。

現時点で、
エヴァ、リインフォース、クローネ、アコノ、はやて、プレシア、ヴィヴィオ、フェイト、アリシア
3 冊 + 3 主 + 1 聖王 + 2 娘の
9人が、日本の戸籍上は家族として扱われるようになった。もちろん、将来的にはもっと増える事が確定済みで、その最初の一步になる。というわけで。

「盛大にお祝いや！」

はやての提案で、大がかりなパーティーが開かれる事に。
名目は他にも色々ある。

主の誕生日が今日だったり。
起動日に合わせた結果として、お姉様の戸籍上の誕生日が明日だったり。
はやてが明日から小学校に通う事だったり。

今日あったアリシアの入学式でプレシアが暴走せずに済んだ……じゃない、アリシアが無事に私立聖祥大学付属小学校へ入学した事だったり。

その他、主とはやての足も少しなら立つて歩くことも出来るようになってきたとか、ユーノ・スクライアの来日から約1年とか、高町なのはが魔法に触れて約1年とかもある。

アリシアはフェイトと、はやては主と同じ小学校だから一緒の学校じゃないとか、そんな細かい事は、気にしな〜い。

そもそも関係者が多いから、今年度分のお祝いを纏めてやってしまおう、というノリ。

「とまあ、色々ある名目を全部ひっくるめて、全部おめでとうや。

みんな飲み物は持つとるな？ それでは、乾杯！」

というわけで始まる、立食パーティー。

主とはやては必要な時だけ立つ前提で、普通に椅子に座ってるけど。

周囲が協力してなるべく立たせない予定なのは、気にしちやいけな

い。
プレゼント類は準備に協力する事という名目で、原則として無しという事になってる。都度みんなが用意すると、それだけでもものすごい事になるし。

「ははは……そっか、まだ1年しか経ってないんだ……」

関係者としてパーティーに呼ばれてたユーノ・スクライア無限書庫司書長の魂が抜けかけてるのも、気にしない。あまりに濃い日々だったせいとか、時間の感覚がおかしくなってるみたいだけど。

お姉様が無限書庫設備管理者として、管理システムの強化作業を行う為に臨時休業を設定した上で、はやてがパーティーに誘ったのは、ある意味正解だったのかもしれない。

もちろん強化作業は本当にやってるし、これは一月ほど前から予告してる。嘘でも思い付きでもない。

「だけど、魔法を知らなかった時の生活って、もう何だかあやふやで……」

ユーノ・スクライアの隣で、高町なのはも何だか黄昏てるような。生活や常識が激変しすぎてるのは事実で、それに思い至っちゃった模様。

「忘れたい黒歴史の方が、忘れられないものだよ。」

僕はまだ人殺しの集団にいた頃だけど、その頃の記憶はそう簡単に消えそうにないからね」

「苦労してたんだね……」

こう言いながらも特に気にしてなそうな成瀬カイゼは、高町美由希に抱き締められてる。

逆光源氏計画は、地味に続行中らしい。

「我等など、1年前は恐怖の対象でしかなかったはずなのだがな。」

エヴァンジュが目覚めてから1年だが、我等が目覚めたのは2か月遅かったのだ。よくこの短時間で、ここまで変えられたものだ」

高町姉妹の近くでは、シグナムが何かを悟った様な顔をしてる。

その視線の先には、お姉様。もちろん主もそこにいるし、すぐ近くにはやてもいる。

「さて、プレゼントは禁止らしいが、装備品の支給だ」

そんな事を言いながらお姉様が渡したのは、髪ゴム。

主には黒、フェイトには金、はやてには黄と、髪色や普段使ってる色に合わせたもの。

「見た目は一般的やけど、どう見ても魔法関係やね。」

あー、だから装備品なん？」

「学校に護衛を付けて行くのは問題があるだろうが、何もないとアホ共が煩そうだろう？ それともう一つ、そのうち身体強化を常用する事になるだろうが、目立つデバイスを起動するわけにもいかんからな。というか、アコノは1年前から成長が止まっているから、そろそろ限界だろう。」

もう少し早めに渡した方が良かったんだが、大人モードの負荷を何とかしようとギリギリまで調整していてな。こんなタイミングになっちゃっただけだ」

「つまり、これはデバイス？」

「普段から身に付けやすいように、ってことやね。」

「やけど、プレゼントは無しやゆるたやん！」

「プレゼントではなくて、支給品だ。それに、私は何も準備に協力していないぞ！」

「似たようなもんやし、ここは別荘なんやからエヴァさん提供や！」

「どんどん感謝ばかりたまつてくやんか！」

「ふん、そのまま溢れさせてやるから覚悟しておけ」

「大丈夫。アコノ、溢れた」

「どこぞの人間型パソコンじゃあるまいし……!?!」

「わお、デュープ。」

「とりあえず、そろそろ別荘ここにキマシタワーを建てよう。」

「な、な……」

お姉様の目が点になつてる。というか、思考が止まつてる。

すぐ近くにいたし、立てるのも知つてたけど、この行動は明らかに不意打ちだった。

周囲の人たちは、うわー、って顔で見てる。

「私のファーストキス。このまま食べられてもいい」

「ちよ、ちよつと待て、今の私は女なんだぞ!?!」

「精神的には男性のはず。」

それに、性的な欲は無くなると聞いているから、大事なものは精神面。大切にしてくれる人を好きになる事に、問題や違和感はない。

キスも嫌悪感は無かった。どちらかと言えば、嬉しい感じ?」

「か、感情が戻ってきている影響……なのか……?」

「喜びの時も悲しみの時も、愛し敬い慰め助け、命ある限り真心を尽くす。」

「今なら納得出来る。エヴァ、結婚しよう?」

「ちよつと待てー!?!」

◆◆ 2005年(新暦66年)04月B ◆◆

「いやー、今日もめでたいなあ」

ご機嫌なはやてが、玄関で出かける準備をしている。

今日は登校初日。歩いて通学するのはまだ厳しいけど、車椅子のははやてはご機嫌。

「昨日はともかく、今日はめでたくねーです」

はやての隣で、不機嫌なヴィータも準備してる。

通信教育の言い訳が使えなくなり、一緒に通学する事が決まってる、ずっと機嫌が悪い。

ちなみにヴィータは3年生。はやてやフェイト達は4年生になったから、1つ下になる。

とりあえず、制服にランドセルの姿が可愛い。

「日本には教育の義務がある。義務を負うのは、保護者役のエヴァやプレシア。

エヴァを困らせたくないなら、学校に行くべき」

主は、玄関の場所待ちをしてる。その様子はいつも通りで、特に変化なし。

ちなみに、お姉様と主は結婚も婚約もしてない。するまでも無く家族で主従だと、お姉様が押し通した。

主だしもつと役に立ちたい、1人で抱え込まずにもつと頼ってほしいとか言われてたけど。

「理屈は解つけど、子供扱いが納得出来ねーです」

「その外見で現れて、そのまま戸籍を作ったからな。その頃は大人モードを使えなかったし、恨むなら……誰だろうな。その外見を設定した者か、その年齢で取り込んだ者……か？」

まあ、守護騎士システムを作った誰かを恨んでおけば、概ね間違っていないだろう」

お姉様は、見送り。

今は玄関まで喋りに来てる。

「そんなマジ回答は求めてねーです」

ヴィータは、深々とため息をついている。

見た目は子供、頭脳は大人な弊害だけど、主やカイゼ達も前世の記憶があるから今更の話。

郷に入れば郷に従え。法治国家ニッポンの表の枠に従いたまへ。
ついでに、普通の子供らしい生活もしてみろ、みたいな。

◆◆ 2005年（新暦66年）04月C ◆◆

「無限書庫の組織改編は、ようやくか……」
『うん、そうみたいだ。』

新しく書庫の長が任命されて、僕達司書はその下で管理を担当する形になるって聞いている』

お姉様が通信で話してるのは、本局にいるユーノ・スクライア。

お仕事で話があるという事で、内容は当然2人が関係してる無限書庫について。

「元々居た連中は結局、最高評議会関係だった、という事でいいのかわ？」

『管理者はそうだったらしいけど、実権は殆ど無かったみたいだ。』

リーゼロットさんは、役立たずが閑職に追いやられただけって言うてたし。最近はほとんど活用しようという動きもなかったって話だから』

「勿体無い話だな。」

新しい長は、グレアムの関係者か？」

『元々は腕のいい指揮官で、遠い管理世界に追いやられてた人だって言うってたから、多分。』

レティ提督も、実績や能力を見る限り、もっと上の役職に就いていべき人材だって』

正確には、ギル・グレアムが艦長をしてた頃、部下だった事がある人物。

参謀としての能力が高めで、人当たりも良い。

当時の人脈をそこそこ維持出来てるし、目立つ失態も無い。

妙な横槍が無ければ、辺境で燻ってるのがおかしな程度の経歴を持つてる。

「2人の墨付きの実力者か。」

それで、無限書庫の現場としては何とかかなりそうなのか？」

『まだ難しい、かな。』

とにかく人手不足なんだ。増員の予算は付くらしいけど、問題を起こしそうな人を増やすわけにはいかないからって。

僕は司書として、蔵書管理の仕事を最優先でやってほしいって言われてる』

「司書用のデバイスはリンディ経由で送っておいたが……ここでも信用出来る人が不足か。」

潰されるなよ？」

『大丈夫。今は一般の依頼を受け付けずに、設備や内容の掌握を優先してるから。』

迷宮やゴーレムが出てきて、気分は生きてる遺跡の発掘だけだ』

「ああ、確かに区画によってはそんな場所もあったな……というか、あの意味そのものか。」

スクライアの本業とも言えるが、楽しめているか？」

『割とね』

「それなら何よりだ」

◆◆ 2005年（新暦66年）05月A ◆◆

ゴールデンウィークなる大型連休……にいまいち成り切れてない、とある休日。

テストロッサ家に限らず、親衛隊や近衛騎士団も基本はお休み。買い物などで出かける人が多いけど、中には自宅でゴロゴロしてる人もいる。

そんな中、お姉様とリインフォースは2人でお出かけ。日本なのでお姉様は大人モード。

特に用事があるわけじゃない。たまには気楽に買い食いでもしようかという流れで、お姉様が連れ出した。

「私としては、早くこういうのんびりした空気に慣れてほしいんだがな。」

「この前行った温泉でも、緊張していただろう?」

「無理を言わないでくれ、これでも慣れようとはしている。

それに、周囲の情報を受け取っているが……私の警戒よりも嚴重で詳細だ。それだけ警戒していると思えるのだが」

「周囲を警戒して気を張ってしまう事を避けるためという理由で、欲しがった情報だぞ。

あと、妹達が警備方法を色々試すためにやっている面もあるらしい。この情報は、実験と検証の副産物らしいぞ?」

「とても、そうは思えない内容だ」

「全くだ。どうも、私に言わないまま色々仕出かす事が増えているな。

これもその一環だろう」

ばれてーら。

でも、実験と検証は本当。

犯罪者やらの襲撃を防ぐためには必要なのも本当。転移してくる

お馬鹿は、実際に存在したし。

被害を出させずに捕獲して、親衛隊に引き渡したけど。

「さてと、少し家を出るのが早すぎたか。

店が開くまで、その辺の喫茶店でも入るか」

「そうだな」

そんな感じで、2人は近くにあった喫茶店へ。

というか、魔法先生ネギま!のスターブックスコーヒーと同じ外見なのはどうなんだろう。

外に席がいっぱい。

人が殆どいなくて、経営が大丈夫か心配になるけど。

とりあえずリインフォースを席に座らせ、お姉様が飲み物などを買ってきた。

「いや、ケーキまではいらなかったのだが。

それに、翠屋のものがおいしいと言っていたはずだろう?」

「たまには翠屋以外のもいいじゃないか。好みの問題もあるし、まあ、あれだ。

一般的にはどんなものか、知っておくのも悪くないだろう?」

一般的というか、量産品というか。

普通のケーキ屋の方が、美味しいと思う。

値段とか他のメニューとか、色々な差があるから、どっちがいいとは言えない。

「そう、なのか？」

「正直に言えば、翠屋と早苗と別荘の水準がおかしくてな。

年齢を考えれば、はやてだって充分過ぎるほどに腕がいいはずなんだ。それが霞むような環境に浸かり過ぎて、無性にファーストフードやらジャンクフードやらが食べたくなる時がある。

前はよく食べていたし、思い出してしまうとなかなか忘れられんらしい」

「そうか、私を理由に食べに行こうという魂胆なのだな」

「1人で行ってもつまらんだろう？」

他の連中とは何度か行っているが、お前とは無かったからな」

「確かに、私達の修理や調整に手を取られていて、外出する機会も少なかったな。

おかげではやての足も、後はトレーニングでゆっくり回復していけばよい段階に到達した。お前には感謝している」

ちなみに、〃主〃等の日本の普通じゃあり得ない身分で呼ぶことを禁止したのはお姉様。敬称についても名前に様付けは禁止。これはリインフォースだけじゃなくて、守護騎士や防衛プログラム達を含めた全員が対象。

時空管理局的に違法という事で、必要時以外は認識阻害や認識誘導を使わないよう自粛するために必要な措置ではあった。

これに便乗して名前呼び捨てをリインフォース達に〃お願い〃したはやては、なかなか上手くやった。

「私は、やりたいようにやっただけだ。

お前を助けたのも、私が仲間を欲しかったからだぞ？」

「それでも、罪深い兵器だった私に心と未来を与えてくれたのだ。礼は受け取ってくれ。

生きる事が、少なくともお前の為になると言ってくれただろう？」

力を恐れも求めもせず、存在を求めてくれたのは、お前達が初めての
のだからな」

「あー……まあ、言ったな。」

あの時はアコノの補助をしながらだから、頭が上手く回っていない
状態だったな」

「その分、本心だったのだろうか？」

ふふ、家族とは……温かいものだな」

そんな感じでのんびりとコーヒーとケーキを味わっているところ
に、微妙な報告。

間宮萬太が接近中。

1年にわたる引き籠りを経て、ようやく外出する気になったらしい
けど。

なんてタイミングとコースが悪い。

「……ああ、そんなのもいたな」

「エヴァンジュ、誰か来るのか？」

「あー、うん、来るというか、偶然通りかかるだけのようだがな」

（以前軽く伝えたと思うが、質の悪い転生者の1人だ。真面目に相手
するだけ無駄だろうから、適当にあしらって追い払うぞ）

念話でリインフォースに説明しながら、お姉様は認識障害を準備。

どう考えても目立つから、見付からないとは考えにくい。

相手は引き籠り化したオリ主願望持ちだから、反応が予想し辛い。
だからというわけでもないけど、特にそれ以上の対策もせずに数分

後。

間宮萬太が通りかかり、啞然とした表情でリインフォースを見て
る。

（……あれは、どの様な意図なのだ？）

（あれも原作知識持ちのはずだ。

消滅しているはずのお前がケーキを食べている光景を理解出来ん
だけだろう。

何か仕出かしそうだから、認識障害はしておくぞ）

（魔法を広めるわけにはいかないというのは、面倒なものだな）

(私達は、この世界から見れば外来の異物だ。

ここで暮らしたい以上は、この流儀に合わせる必要がある。文化を壊したくも無いしな)

(なるほど、確かにそうだな)

表面上は特に会話も無く、実際は念話で喋りながら静かにコーヒーを味わってるお姉様とリインフォース。

間宮萬太は哑然とした表情のまま、近付いてくる。

「な、何で、何でだよ……」

「何故とだけ聞かれても、何が疑問なのか理解出来ないのだが」

「何で生きてるんだよ!」

「それは、私に死ねば良かったと言っているのか。随分と失礼な話だな。

そもそも、見ず知らずの人物に質問される謂れも無いと思わないか?」

「じゃなくて! 死んでるはずだろうが!」

「……エヴァンジュ、どうすればいいのだ。

思った以上に話が通じない」

割とあっさり、リインフォースが匙を投げた。

まあ、予想出来た事態だけど。

「だから、真面目に相手するだけ無駄だろうと言ったんだ。

さて、さつきから随分と人の家族を死者にしたいようだが……未だにここが物語の中だと思ってるのか?」

「誰だよ! お前は無関係な筈だろ!」

「家族を貶されて黙っている程、私はお淑やかでも大人しくも無いぞ。

もつとも、木乃香に言われたことを何一つ理解出来ない阿呆な頭では、何を言っても無駄かもしれないがな」

「黙れ! 僕が主人公なんだ!」

「はあ……強制認識とは恐ろしいな。ここまで強く影響しているか」

お姉様は転生特典の破壊を実行、完了を確認。

影響の残留は、それなりの外見と、若干の魔力程度のはず。

必要なら、リインフォースが魔力を死なないかつ回復出来ない程度

に蒐集すれば、より確実。

「……へ？」

「転生特典を失った気分はどうだ？」

ついでにハーレムオリ主だと思ひ込む強制認識も解除しておいた。黒歴史に悶えるがいい」

「あ？ え？ ええと……神様？ だけど、中年のオヤジで……へ？」
「さてと、行こうかりインフォース。」

この阿呆は当分このままだろうし、別に関わりたくも無いからな
「そうだな」

◆◆ 2005年（新暦66年）05月B ◆◆

「また増員か？」

「1人1人を見れば一時的な、派遣に近い扱いではあるんだが。」

交代制で、継続して送る方向で話が進んでいる」

主達が学校で勉強している頃、クロノ・ハラウンから連絡があった。

曰く、親衛隊の機能を増やしたい。

実力を示した事で、力不足という批判は鳴りを潜めた。だけど今度は、それだけの力を遊ばせておくのは勿体無い、ときた。

前線に出せと言うには色々怖いから、教導なら何とかなるのでは？

ちやうど都合よく勉強してる人もいるし、執務官不在で周辺の巡回にも支障が出てるし、という事らしい。

「加えて言えば、僕達が自分達に都合が良いように隔離して操作していると疑う人もいる。その対策として、君達が気軽に会える人を少しは増やしたい。」

加えて、将来的にはそちらを担当する人材を育ててほしい、という意見もある。派閥やらの息がかかった人材は色々問題があるから、新人に近い状態から育てて、将来の親衛隊を担えるよう鍛えてほしいという事だ」

「教導を建前に会える人を増やし、将来的には親衛隊員の育成か。」

「という事は、当面は現場の人間という事だな？」

「最初に誰を送るのかは、少々揉めているんだ。」

「だが、現場側の人物になるのは既定路線だから、間違いない」

「今と将来を考えると、おかしくはない内容ではあるか。」

「念のため、現状で決まっている事を資料にして送ってくれ。それを

「基に、早めに意見を聞いてみよう」

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2005年06月)

◆◆ 2005年(新暦66年)06月A ◆◆

「確かに、親衛隊が教導隊の側面を持つ事は了承した。

現場の人間が来るとも聞いていた。

だが、何故お前達なんだ？」

教導されに来る第1陣を迎えに、アースラの転送ポートに迎えに出
たお姉様(幼女モード)やリンディ・ハラオウン達。

その前に現れた人は、一応6人。

「政治的なあれこれがあつたと聞いています。ですが、まずは挨拶を」

「ああ、堅苦しいのは要らんから、普段通りに喋れ。

あの時の口調が普通だろう？」

「エヴァさんは元々こういう人だし、それ以上に、上に立つ気が無いの
よ。

立場を弁える必要があるけれど、態度についてはあまり気にしない
方がいいわ」

「そうか。なら、普段通りで行かせてもらおう」

というわけで、ゼスト・グランガイツ、クイント・ナカジマ、メガー
ヌ・アルピーノの3人が研修生としての来訪。

だけど、メガーヌ・アルピーノは赤子、ルーテシア・アルピーノを
抱いてる。本来はまだ産休を取っているはずが、年末からの大騒動で
駆り出されてたらしい。

「おとうさんー！」

「久しぶり」

「ああ、久しぶりだな」

そして、スバル・ナカジマとギンガ・ナカジマが、父であるゲンヤ・
ナカジマと会うために。

「なるほど、子供の成長は早いからね。

少々調整した方が良さそうだ」

ついでに、体のメンテナンスを受ける事を兼ねて……だけど、ジェイル・スカリエツティが迎えに来てるのはどうなんだろうね。

確かにアースラに滞在する事になって、メンテナンスは別荘の予定だけだ。

今すぐやるわけじゃないのに。

「……お前が、戦闘機人を完成させた張本人というわけか」

初対面となるゼスト・グランガイツの顔が渋くなるのも、仕方ない。

ジェイル・スカリエツティは全く気にしてないけど。

「ああ、そうとも。最高評議会だった脳味噌達の希望通りに、だがね」
「今でもそうだった技術に拘る気はあるか？」

「いいや。既に完成に近い娘達は、産みだした者の責任として目覚めさせるべきだとは思っているが、その後は管理調整に必要なものや、医療に転用出来る技術以外は凍結する予定だよ。」

それよりも興味深い事が多すぎて、私は忙しいのだよ。無論、現在の最高評議会の意に沿わない内容ではない事は、私の立場を見れば明らかだろう」

「……そうか」

一応納得したのか、ゼスト・グランガイツはそれ以上追及するのをやめるつもりらしい。

興味深い事に日本の文化面が多々含まれてるのは、言わぬが花。

「話が終わったなら、こっちの質問だ。」

政治関係のあれこれとは、何があつた？ お前達の立場なら、犯罪者対策の最前線にいる方が自然だと思うが」

「どうも表立って活躍しすぎたせいかな、英雄などと呼ばれてな。捜査に支障が出ているから、少し冷却期間が必要だとレジアスに判断された。」

それに、ここしばらくは働き詰めだった。ナカジマも家族と会いたいだろうし、アルピーノも子供と離れすぎた。

指導のやり方をこっちの新人に教えるついでに、3か月ほどの骨休めといったところだ」

既に2人の新人、アルフとザフィーラは訓練校から戻ってる。

今は周囲の協力を得ながら、囑託魔導師や高町なのはの指導を模索してるところ。経験者の助言は参考になるはず。

「ふむ、動きを縛っているのは、局内のやつかみか？ 報道やその辺の民衆か？」

「両方だが、問題は後者だ。」

一時期は外に出るだけで一苦労だった」

「そうか。ふむ……まあ、丁度いいか。」

適性試験の結果次第だが、カートリッジシステムに関連する、新しい技術の訓練をしてみる気はあるか？

「訓練の為という建前の説得力も上がるだろうし、うまく使えたなら戦力の増強が出来るかもしれない。骨休めにはならんかもしれないがな」
要するに、気に関する訓練。

実力を持つ魔導師からの適用で、徐々に浸透させる方針は決まっていた。

近衛騎士団に派遣された護衛担当には訓練を開始してるけど、管理局側にいい人材がいなかったから、テストケースとしてちようど良かったとも言える。

「それが、あの時の少女達の力の一端か？」

なるほど、確かに面白そうだ」

「それに、本部に戻ってからも、この技術の指導名目で引き籠りやすくもなるだろう。」

新しい技術だから、ある程度報告は上げてもらいたいかな」

「解った。よろしく頼む」

◆◆ 2005年（新暦66年）06月B ◆◆

ゼスト・グランガイツ達はその後、近衛騎士団や現地協力者達とも顔合わせを行い、その足でお姉様の別荘に案内された。

今ではお姉様を王とする国という扱いで存在自体は明かされてるから、驚かせる機会が減って少し残念……というのは置いて。

「ようこそ。私は案内役及び教師役を仰せつかった、ロクトという者です」

空色の髪をツインテールに括ったメイド姿でお辞儀をしてる、男の娘は楽し……問題かも。

おもちゃにされないか、的な意味で。

「ここはともかく、私が住んでいるのは魔法が秘匿されている管理外世界だからな。

行かないなら問題ないが、行くときは色々注意点やらを学んでおく必要があるし、相談役もいる方がいいからな。それと、ここでの注意点やらもある。

こいつを担当に付けるから、よく聞いておいてくれ」

「配慮は助かる。だが、今までに何かトラブルでもあったのか？」

「管理外世界の方は、ゲンヤは魔法が使えんから決定的な問題は起こせないし、リンディやカリム達は元々が裏方なせいか行動は平和なものだったな。

だが、お前達は現場側、何かあったら体が動く人種だろう？ クロ

ノは大丈夫だったし大丈夫だと信じたいが、念のためにな」

「そういう事か。」

この地は、魔法は大丈夫のようだが、他の注意点とは何だ？」

「そうだな……日本で一般的なマナーを守れば、概ね問題ない。日本とミッドの常識の違いを把握し切れていないが、比較的潔癖だと思っておいた方がいい程度だろう。

あとは不用意に私を批判しない事くらいか。私が何とも思わなくとも、このの住民が暴走しかねんからな」

「暴走とは人聞きが悪いです。」

この地にあるものは全て、我等が主であるエヴァ様の所有物なので。エヴァ様を批判する人物がそれを消費するなど、決して許しません！」

「……とりあえず、ここにいるのはこんな連中だと思ってくれ」

「そ、そうか」

いつの間にか棘の付いた金属バットに見えるデバイスを手にして

るロクトを見ながら、お姉様は遠い目をしてる。

その後は気を取り直して訓練場という名の荒野を見たり、別荘の施設を軽く案内したりしつつ、微妙な時間だからお風呂に入ろうという事になり。

一行は別荘の大浴場へ。もちろん、男女は別だから、ゼストやゲンヤ達が男湯、お姉様達は女湯へ。

「ここにいたという事は、待っていたのか？」

はやて達、つまり夜天御一行様が既にいるのは、お姉様的には予想してなかったらしいけど。

「そうや。私達も一応は最高評議会の一員やから、顔は早目に見たい方がええと思ったんよ」

それでも、本当の目的はきつと、解りやすいアレ。

「クイントにメガーヌ、一応先に言っておく。」

はやては揉み魔だから、嫌なら嫌とはつきり言った方がいい。それでも手出しする様なら、拳で黙らせても構わんぞ」

「いえ、流石に拳を使うのはどうかと」

「余計な肩書が付いているが、はやてはまだ10歳になったばかりの子供だ。悪い事は悪いと、きちんと教えんとな」

「ややなあ、それくらいはちやんと解つとるよ？」

「それでもだ。それとも、むやみに傳かれる方がいいのか？」

私としては、多少拳が出てても笑って済ませられる程度に気安い関係の方が、楽でいいと思うが」

「それはそうやけど、叩かれて喜ぶようなせーへきは持つてへんよ」

「アリシアと変わらん子供の前で、妙な用語を使うな。」

ま、こんな感じだから、見た目と中身が一致しない私の様なものいるが、特別扱いする必要は無い。肩肘を張られるのも鬱陶しいし、普通に過ごしてくれればいいからな」

「は、はあ……」

クイント・ナカジマとメガーヌ・アルピーノの目が点になってるけど、取り敢えず理解はしてもらえて。

一部の人にはとても楽しい、入浴の時間になった。

「なんや、素晴らしいハリとツヤやね？」

何も知らんかったら、2人も子供がいるとは思えへんとか言つてまうとこや」

もちろん、はやては迷わずに揉みに行った。

最初の標的は、クイント・ナカジマ。

「あの会話の後で早速つて、度胸があるのか何も考えてないのか……」
そう言いながらも、クイント・ナカジマは特に気にせず揉ませて
るけど。

「うーん、動じへんのは、奥様の貫録なんか？」

「そうね、子供相手に動揺するほど乙女じゃないわ。

それと、やったらやり返されるのは世の常、つてね」

「ひゃう!？」

胸を隠そうとしたはやては、腋を指でなぞられて妙な声を上げて。

次の瞬間、這うように逃げ出した。

「あかん、怖いよお母さん〜」

「あらあら、怖かったでちゅねー?」

そのまま、メガーヌ・アルピーノの胸に飛び込んだはやて。

だけど、ガシ、っと抱き抱えられて固定された上に、明らかに赤子
扱いであやされてる。

母性に触れた手には白のがかかっているし。

ハハから出るのにチチとはこれいかに。

座布団ボツシュート。

「うー、赤ちゃん扱いされるとは思わへんかった……」

「ふふ、私の娘は1歳にもなっていないもの。私を母と呼ぶ子はこれ
くらいの年齢よね。」

ねー、ルーテシア」

「あー」

メガーヌ・アルピーノの笑みを見てか、シヤマルに抱かれてるルー
テシア・アルピーノがパタパタ手を動かしてる。

どう見ても意味は解つてないけど、同意してる事にしよう。

日曜日。

世間は間違いなく、日曜日。
だけ。

「やああああっ！」

「行きますー！」

ゼスト・グランガイツ相手に元気に突撃する、高町なのはとフェイトがいて。

「飛べるからって油断しない！ 先読みに依存しすぎない！」

クイント・ナカジマにウイングロードで高速移動を潰され、苦戦するセツナがいて。

「くっ、これは……」

「1カ所に意識を取られ過ぎちゃ駄目！ 支援役は全体を見なさい！」

メガーヌ・アルピーノに誘導弾でフルボツコ寸前の成瀬カイゼがいて。

「うん、なかなかいい動きだ。

「けど、決める時はもっと思いつける事も必要だ」

「はい、ありがとうございます」

高町恭也と軽く手合わせしてるギンガ・ナカジマがいて。

「みんな、頑張ってるね」

「そやね。けど、大人モードの持続時間くらいは、はよセツナちゃん達に追いつかんとな。」

夜天の主として、みっともないままはあかんし。すずかちゃんも目標があるんやろ？」

「うん。がんばろう？」

「はやてちゃんもすずかちゃんも、ファイトですよ！」

地味な練習を続けるはやてと月村すずか、それを応援するルーナがいて。

「……あいつらの素質には、嫉妬しときゃいいのか？」

「さあ。でも、欲しい力に手が届くなら、別にいいんじゃない?」

「そりゃそーか」

すぐ近くに長宗我部千晴と夜月ツバサがいて。

「アタシ達にあの真似をしろって言われても、無理だよねえ……」

「幼いとはいえ、既に大きな力を持っている。我等では模擬戦の相手として力不足であろう。」

だが、眷属化で魔力が増えたと言っていたと思うが」

「フェイトの負担にならなくて済むだけで、最大量は増やしてもらえてないんだよ。」

魔力を割と自由に使わせてもらえるだけでも、有り難い話だけだよ」

「そうなのか。」

ならば我等に出来るのは、技術や戦術、心構えを教え、磨き上げる手助けをする事だろう。特に精神面は、我等でも支える事が可能だ。彼女達が、自分達の身を確実に守る事が出来るようにする。これを目標とすれば、エヴァンジュ達の期待には応えられるだろう。

管理局から期待される教育を施せるような知識は、我等に無いのだ」

「3か月の研修で教官にとって、無茶しすぎだよ。」

要は喧嘩すればいい戦技教導とかいうのじゃないんだしさ」

「そうだな」

少し離れたところに、困った顔で相談してるアルフとザフィーラがいて。

「……なあ、俺達は無視されてるのか?」

「今までに色々と指導されてるし、今は試験勉強が中心だからだって、ちよつとは前向きに捉えようよ……」

馬場鹿乃と上羽天牙が微妙に落ち込みながら魔法の練習をしている。

「今日は、なのはちゃんとフェイトちゃんが怪我をしそうですね」

「セツナちゃんも、かなり危なそうですし」

怪我人という出番を待ちながら軽い訓練をしている真鶴亜美とシヤ

マルがいて。

「ねえ、さんかしないの?」

「アタシが? 無理無理、あんなビックリ人間じゃないし」
「そうなの?」

また少し離れたところに、訓練の様子を眺めてるスバル・ナカジマとアリサ・バニングスがいる。

訓練しないのに来る辺り、付き合いがいいとは思えるけど。

2人の視線の先で激しく切り結んでるシグナムとトールは、まあ置いておくとして。

とりあえず、お前ら。休日なんだからもうちよつと休め?

◆◆ 2005年(新暦66年) 07月B ◆◆◆

「……よく、ここまで改造したわね」

プレシアが呆然と眺めてるのは。

時の庭園、改修版。

今日はテストタロツサ家一行へのお披露目。

「従者達が、本気で弄っていたからな。」

次元空間やらへの出入りには私達が必要だが、出てしまえば以前と同じように次元航行艦として機能する。

効率の悪い機構や劣化部分の改善も色々やってあるから、理論値だとアースラ以上の速度も出せるらしい。そこまでやると数日は動かせなくなるから、リミッターを付けてあるようだが」

従者、というかりーシェンが提出した仕様書を見ながら、お姉様が感心したような口調で説明してる。

駆動炉関連の設備保守を中心に力を振るってきた従者。時の庭園に関しては主に航行システムを担当してたから、仕様書もそれらが中心に記載してある。

「すごい……アルフと一緒にになった頃の風景そのままだ……」

横では、フェイトが感激してるし。

「……おにわだよねー!」

アリシアは早速芝生を駆け回ってるし。

「前は割と殺風景やったけど、綺麗なもんやなあ」

「移植する木の選定に苦労した、とは聞いている。

なるべく緑があった頃の景色に近付けたらしい」

「原作で見た限り、戦場となった時はかなり荒れ果てていたはずですが。

本来はここまで緑豊かな場所だったのですね」

主とはやて、それにシグナムは、前回とは比べ物にならないほど綺麗になった場所をきよろきよろ見えて。

「間取りは結構変わってるのかい？

こりや覚えるの大変だねえ」

アルフは地図とにらめっこしてる。

「住居部分をかなり拡張したし、研究室用の部分を分けたからな。

ああ、外周部に近い迎撃区画は最低限の通路だけ知っておけば充分だ。ぶっちゃければ、わざと転送しやすい個所を用意しての、傀儡兵の戦場用だからな」

「そんなの必要なのかい？」

「場所が余ったらしい。

あと、住居も研究室も、今は空き部屋が用意してあるだけだ。家具や設備類は自由に揃えてくれていいが、別荘の方に用意した書斎はどうする？

必要なら移しておくが」

「整理もしたいし、自分でやるわ。

別荘からなら、自由に出入りできるのでしょうか？」

「それは問題無い。

ああ、次元空間やらに出ている時は自由というわけにはいかないからな。そこだけは注意してくれ」

「別荘への出入りではなく、次元世界での転移扱いになるという事ではないのかしら？」

「別荘の一部ではない、という事ね」

「正解だ。」

とりあえず今日はコレが動かせる状態になった事を知らせる目的だ。

共同で使う設備やらはある程度準備し始めているが、自分の部屋に置く物は、各自で考えてくれよ」

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2005年08月

◆◆ 2005年（新暦66年）08月A ◆◆

「別の世界でも、空港って似てるのかな？」

「うん、そうみたいだ。地球の空港の写真を見ても、それほど違和感は無かったよ」

高町なのはとフェイトがいるのは、ミッドチルダの空港。

名目は、高町なのはが囑託魔導師の試験を受ける為。

フェイトは経験者で友人だから励ましたりアドバイスしたり出来るし、加えて母と姉妹が過ブレシアこした世界をゆっくり見てみたいという想いから、同行を希望してた。

訓練校の時は厳戒態勢で自由に歩ける時間が無く、観光も出来なくて悲しかったらしい。

今回はある程度状況が落ち着いてきた事と、ゼスト隊の隊員が同行するという事で、それなりに見て回る事が出来る予定。

「ミッドチルダの空港って言うと、あれが思い浮かぶんだが……」

「でも、まだ何年か先のはずだし」

同じく囑託魔導師の試験で、馬場鹿乃と上羽天牙もいる。

話の「あれ」は、間違いなくStrikerSで描かれた火災。インパクトはばっちり。

「ロストロギアを密輸する理由も組織も減っていますから。

きつと同じ事件は起きませんよ」

ニコニコ笑ってるシャマルは、医務官の試験を受けるために同行してる。

その他、クイント、ギンガ、スバルナカジマ家の女性3人は案内兼家の管理で一時帰宅、メガーヌ、ルーテシアアルピーノ家の2人は育児の為に自宅に戻るという理由で同行してるから、結構な人数での移動になってる。

決して、メガーヌ・アルピーノが気の素質が低かった事に拗ねてる

わけじゃない、はず。

もちろん、顔が知られてる数人は軽く変装をしてる。魔法は使っていないけど、一目で解る様な恰好はしてないし、人の少ない日や時間を選んでる上に人が少なめの通路になるよう調整してくれたらしいから、騒ぎにもなつてない。

ちなみに隊長のゼスト・グランガイツは、別荘で元気に気の訓練中。素質でクイント・ナカジマに負けたのが悔しかった模様。

「犯罪組織もだいぶ捕まえられてるし、事件の件数は数字として見えるくらい減つてるみたいよ。」

治安が良くなったせいで人の出入りは増えてるみたいだけど、元々大きな事件なんてそう減多に……あ、あら？」

クイント・ナカジマが胸を張りながら説明していると、割と近くから爆発音が聞こえてきた。

それも、複数。どこんどかんいつてる。

「……余計なフラグを立てたわね？」

じと目でメガーヌ・アルピーノがクイント・ナカジマを見てるけど、悲鳴も聞こえてきてる。

「あーあ、休暇中なんだけど、どこかの部隊が動くまではお仕事しなきゃね。」

ギンガ、スバル。お友達を外の広場まで案内してあげて。あと、メガーヌの先導も」

「ちよつとクイント、一人で残るつもり？」

「赤ちゃんを気にしてちゃ派手に動けないし、指揮官も必要でしょ？」

中は任されるから、どこかの部隊が到着するまで外で人の誘導と指揮をお願いします」

「私もお手伝いします！」

「あの、私も」

「なのはちゃんはまだ囑託の資格を取ってない一般人だし、フェイトちゃんは親衛隊管轄だから、簡単には協力要請を出せないのよ。」

だから、まずはみんなを外に出て、メガーヌが人に指示出来るように協力して欲しいの。緊急時の自衛程度なら特例が利くし、その後な

らきちんと要請を出せるから、お願い出来る？」

「クイントさん……はい！ 頑張ります！」

少なくともフェイトは本人の現場判断と言い張る事は出来るし、高町なのも現場判断での協力要請という形は取れるけど、それをしてら最前線に行きそうな2人。

流石二児を育ててる母親役、高町なのがいいように丸め込まれてる。

そんな時、館内放送を知らせるチャイム音が響いた。

『あーあー、もういいか？』

こほん。俺達はマディーラ解放軍！ 支配を押し付ける管理局のトップの小娘に物申しに来た！」

何やら若い男の声が館内に響き渡る。

けど、言っている事が意味不明。

ここにいる人物の立場にあつてない、的の意味で。

「管理局のトップの小娘……もしかしなくても、エヴァちゃんの事よね？」

「かなり甘く見ても、はやてちゃんやアコノちゃんまでしか該当しないわ。」

最高評議会の関係者はいるけど、本人は……あ」

ちよつと困った顔で話してたクイント・ナカジマとメガーン・アルピーノ。

その視線が、フェイトで止まっている。

「わ、私……？」

「最高評議会関係者で、テストロッサ姓で、金髪の少女となると……あまり当たってほしくないけれど、勘違いされる要素は多いかなってね」

「……私のせいだ……私が、一緒に来たいなんて言ったから……」

「そんなに気にしないの。それに言い方は悪いけど、こういう人達が問題行動を起こす可能性は考えていたから。まさか、権力的にトップに立っていると、本人がいるとか、色々勘違いしすぎてるのは予想していなかったけどね。」

状況は理解出来たから、急いで外に出るわよ。初動の遅さは多少改善してるはずだし、みんなが来る事も伝えてあるから、もたもたしてるなら問い詰めないと」

ふふふ、と不敵に笑ってるクイント・ナカジマがリボルバー・ナツケルデバイスを起動。それに続くように、フェイト、高町なのは、馬場鹿乃、上羽天牙、メガーヌ・アルピーノも。

シャマルもだけど、使うのはクラールヴィント。やっぱりゲオルク・ティーレは使ってくれない。

「……何度見ても、その恰好は慣れないわね。」

フロントをクイントとフェイトちゃんに任せて、正面口まで一気に突破するわよ。後ろは鹿乃くんと天牙くんに任せるし、私とシャマルちゃんで娘達と助けた人を守りながらセンターから援護するわ。

なのはちゃんは、逃げ遅れてる人がいたらその救出と、何かあった時はシールドでみんなを守ってもらえる？」

「うん、わかった」「大丈夫、任せて！」「お、おう、大丈夫だ」「う、うん」「やっぱり、この力は守るためのものなんです……！」

ポテイビルダー場違いに見える馬場鹿乃や1人感動してるシャマルを急かして、移動開始。

元々人が少なかった通路。今は人影が見えないし、シャマルの調査で正面の出入口までの通路に損害が無い事を確認済み。出勤してくる部隊との合流を優先するため、裏に出て迂回するよりも建物内を突っ切る事を選択。

「ですけど、私達を狙ったにしては、破壊場所がおかしいですよね。」

別の通路を封鎖するように爆破しても、意味は無いはずですけど「他の人と被らないように、配慮してくれたおかげかもね？」

本局との連絡航路は何度か使ったことがあるけど、この通路を使うのは初めてなもの」

「なるほど、それですか」

走りながら、何でも無いように会話するシャマルとメガーヌ・アルピーノ。

速度がスバル・ナカジマ基準で割とゆつくりだから、大人組は余裕

の表情。子供魔導師組も緊張で表情が硬くなってるだけで、疲れとかは問題なさそう。

「……誰かいる」

「待合室に、正面に3人いて、側面に2人隠れていますね。」

足止めと奇襲狙いですか。どうしましょう?」

通路の終わりが見える頃、2番手を走るフェイトと、周囲を警戒してたシャマルが、同時に敵勢力を報告。

数も位置も、ちゃんとあってる。

「探知と特定が早すぎでしょう、自信無くすわ……。」

狙いは多分交渉だと思うけど、こっちに相手がいないから、誘拐に踏み切る可能性があるわよ。

特に後ろの2人は側面に注意。なのはちゃんとフェイトちゃんには壁役をお願いするわ。

攻撃は私とクイントが担当、他の人は基本的に自衛と防御に徹して頂戴」

「え、私も……?」

「一番狙われる立場なんだから、前に出過ぎないでちゃんと守られてくれた方が、お姉さんとしては助かるんだけどな?」

もちろん、攻撃が行った時は反撃していいわよ」

「……はい。解り、ました」

冗談めかしてるクイント・ナカジマの言葉に、いかにも渋々と言った感で頷いたフェイト。

前に出ても問題ない戦力を持つとしても、護衛役としての顔を立てるのも大事。

身分って本当に面倒。

「さて、いきなりの可能性もあるから、みんな警戒してね?」

行くわよ」

先頭のクイント・ナカジマは止まることなくドアを開け放ち、そのまま3人組の前へ。

迎え撃つ側の3人組は、警戒はしてるけど即戦闘という雰囲気じゃない。

どちらかと言えば、威圧する訃音気（何故か変換出来た結果、死亡フラグが立ってるように見える）、みたいな印象。

「おいでなすったな、最高評議会の小娘」

「公共施設の破壊行為の関係者と判断します。大人しく逮捕されなさい！」

「いえ、私は最高評議会じゃありません」

3人の真ん中にいたチャラ男風の声に、ほぼ同時に反応するクイント・ナカジマとフェイト。

もうちよつと証言を引き出した方がよさそうなのになー。

「俺達の街を支配しようよ……へ？ お嬢ちゃん、今なんつった？」

「だから、私は最高評議会の議員や議長ではありません。」

それに、最高評議会の人が入れ替わってから半年と少し、指導者としての権限も成立直後に停止しています。どこかを支配しろという指示も、それを止める命令も、今の最高評議会は出す事が出来ないはずです」

「へ……？ おい、最高評議会の尻尾をようやく掴んだって、中身替わってんじやねーか！

どうなってやがる!!」

「しらねーよ！ 使ってた情報屋と連絡がつかなくなって、新しい伝手をようやく作れたんだ！

お前だって資料見ただろうが!!」

「チツ……お嬢ちゃん、名前は？」

「フェイト・テストロツサ」

「テストロツサ……家名は同じでも名前が違うじゃねーか！ それに色合いは似てるけど、写真と雰囲気違い過ぎんだろ!？」

くっそ、ここまでやつちまったんだ、悪いが人質になってもらうぜ。

なに、抵抗しなきゃ、悪いよーにはしねえ」

「母さんやお姉ちゃんの足枷にはならない。バルディッシュユ！」

『Yes, sir』

抵抗する気満々のフェイトに応えるように、バルディッシュユも鎌型のクレツセントフォームへ。

メガーヌ・アルピーノはあちやーって感じで頭を押さえてるし、クイント・ナカジマもため息をついてる。

「変に情報を与えないの、まったく。」

要人関係者襲撃の現行犯よ。大人しく「眠り「シユート！」「ファイア！」「チェーン・バインド！」なあっ!?!」……あーあ、本気だとこれだから……」

クイント・ナカジマの警告が終わるまでも無く、待機させていたらしい魔力弾を発動させようとした3人組と、そのスファイアを全て叩き落としたフェイトと高町なのは。

ついでに、どこからともなく伸びてきた鎖が3人を拘束。

なんという超反応。

予想外だろう結果に、3人組が啞然としてる。

「この子達は、ゼスト隊長ともやりあえる逸材よ？」

首都防衛隊特務ゼスト隊所属クイント・ナカジマ、テロ行為及び要人襲撃犯を……」

クイント・ナカジマ、猛然と突撃。

啞然としてた3人は対応どころか反応さえ出来ず、あっさりと昏倒させられた。

「……成敗。つてね？」

後方では、隠れてた2人もメガーヌ・アルピーノが狙撃済み。

というか、そっちもバインドでぐるぐるになってる。

「ユーノくん、来てくれたんだ！」

「さつきまで避難を手伝ってたんだけど、間に合つてよかつたよ」

姿と笑顔を見せたユーノ・スクライアを見て、高町なのはが嬉しそう。

到着予定は伝えてあったし、司書候補の面接でミッドにいるから何とかして来ると言つてた。

だから、居ること自体は不思議じゃないけど。

地味でもヒーローをやるうとする心意気は、認めてみよう。

「外に急ぎましようか。他にも仲間がいるかもしれないし、急いで態勢を整えないとね」

5人のデバイスを取り上げた上で、シヤマルが空に浮かせて連行準備をしてから。

余裕の表情で、先導を再開するクイント・ナカジマ。

少しは状況を知るユーノ・スクライアが、並走しながら説明してる。その後ろ姿を見る熱い目があるのは、まあ、伝えなくてもいいかな。とりあえず、他の脅威も無さそう。

だから、お姉様がフル装備で出待ちするのはもういい、とチャチャは進言します。

◆◆ 2005年（新暦66年）08月B ◆◆

「全員合格は、予想通りか。」

それで、襲撃してきた連中の理由やは、どうだった？」

フェイト達がミッドチルダに渡ってから2週間後。

まだ帰ってきてないけど、色々結果が出たから報告なう。

報告者は、クイント・ナカジマ。

地上部隊に所属した事件の関係者で、本来は親衛隊で訓練中の為業務から外れていて時間に余裕があり、一時的にフェイトの護衛に近い立場に立ったせいとか、この件の『最高評議会相手の窓口』をやらされているらしい。

囑託魔導師や医務官の試験結果は、ついでの連絡。

『数年前に結構強引に併合した世界の、抵抗勢力によるテロと断定されたわ。』

元々は無人世界で、犯罪者が逃げ込んで出来た街がある程度だけど、そこを管理世界に指定して統治しようとしていたそうよ』

ユーノ・スクライアが調べた無限書庫情報だと、無人世界を管理世界に変えるための言い訳として、犯罪者にある程度開拓させたように見える模様。

但し、穏便な方法で送り込んだわけじゃない。

追い立てるような形で、裏の関係者の伝手で逃げ込ませた。

結果的に、そういった人だけで1万人を超えてる。ぶっちゃけ、管

理性的な移民の10倍以上。

手配されてる人が殆どだから、抵抗側も必死。

冤罪が疑われる人や、刑罰が過剰と思われる人も多く混じってるし。

子供もそれなりに産まれてる模様。

「……色々悪手過ぎるぞ、どうやっても禍根しか残らんだろうに。」

統幕議会も頭が痛いだろうな」

『手出しをするつもりは？』

「無いぞ。」

責を問われるべきは脳味噌やその取り巻きだ。統幕議会やらが主導していたわけではないだろう？ 今の議会に関係者が残っているなら、監視役として告発する程度はしてもいいが、な。

私は、どう対処するかを決めるべき立場にない。それをすれば脳味噌の取り巻きを再生産する事になるし、手法はともかく、やろうとした事は理解出来るからな」

『助言を得られれば、って非公式に相談されちゃってるけれど……その様子だと、する気は無さそうね』

「最上の結果を得るのは不可能だからな。」

1万人以上いるんだ、過剰刑罰に該当するか調査する余裕があるわけでも無いだろう。

全員に恩赦を出すのは、本当の凶悪犯もいるようだから難しい。

管理世界化を進めるのも無人世界に戻すのも、利害関係で対立があるだろう。

合理的な判断をすれば感情を逆撫でし、感情に配慮すれば問題になるくらい大きな費用や労力がかかる。どの選択も正解ではなく、出来るのは、まだましと思える選択をして、それを信じて進む事だけだ。

私としては、真摯に未来を考えて選択した事を問題とする気は無い。結果に伴う責任を負うのは私の役目ではないしな」

『はあ……助言っぽい気もするけど、それを伝えるの、すごく気が重いのと思わない？』

「アルハザードなら問答無用で殲滅してから自国領として開発してい

たとか言つて、何かの参考になるのか？

現在だとあり得ない選択だと思うが……ああ、そういう選択でも、未来を考えた上で行い、その結果の責任を負うのであれば問題にせん、という参考にはなるか」

『ないわー。御伽噺なのに、夢も希望も無いわー』

「成長や発展も、過ぎればそれを入れる器が崩壊するからな。

地球の社会など、このままだと数十年か数百年で崩壊するぞ？ それを防ぐための政策を否定する気が無いのと同じだ」

『そ、そうなの？』

「人が増えすぎ、快適さを求めすぎだからな。

既に、地球という器の限界が近付いている。回避するには地球に住む人を減らすか、1人1人が使う資源を減らす必要があるだろう。

他の次元世界に行く技術を持つなら、新しい世界という器を用意するという選択も、あり得ない手段ではないという事だ」

『人を減らすって……』

「現実的には、弱者の切り捨てだな。

老人、病人、障害者、貧困層。

順序や意図的かどうかはともかく、致命的な状況になる頃には、こういういった者達から見捨てられていく事になるだろう」

『人権とか、そういうった概念は発達している世界でしよう？』

「追い詰められた者に、他人を考慮する余裕などない。

姥捨てや人身売買のような話などいくらでもあるし、自身の被害を避けるために他人の被害を許容する事は、緊急避難という名で正当化されている。そして“犠牲となる他人”は、常に自身よりも弱者だ」

『その世界が好きだから住んでるんですよ、何とかしないの？』

「私が気に入っているのは、正確には文化だが……この文化は、刹那的でもある。

大勢が永遠に無駄を続けられるほど、自然は優しくないしな。時期は読めんが、私がこの世界を離れる時はいつか来るさ。数十億の人間を見捨ててな」

『言いたい事は解るけど……そこまではつきり言つ？』

「真実はいつもみすぼらしく残酷なもので、一般的な御伽噺など、華やかな面だけを集めて都合よく脚色された物語でしかない。

今でこそ英雄などと称賛されたりもしているが、私は兵器であり、確実に史上有数の大量殺人者なんだぞ?」

『……ほんと、現実と御伽噺は違うわー』

◆◆ 2005年（新暦66年）08月C ◆◆◆

「いや、確かに問題をクリアしたのは事実なんだが……」

「頑張ったよ」

お姉様達の前で小さくガッツポーズしてるのは、月村すずか。

カートリッジの魔力を使用しての、2週間耐久大人モード継続試験をクリアしたところ。

再使用の為の回復時間も、お姉様と同程度で大丈夫だと確認済み。

それはつまり。

「これで眷属になっても、外見の問題は大丈夫だよね?」

というわけで、またまた眷属化希望者がお姉様を襲撃してるという事。

既にセツナやフェイトといった実例がいるから、特に不安も無いらしい。

それに、連続変化時間という意味ではお姉様を超えてるから、文句も言い辛いはず。

お姉様だけじゃなく、横で見てる高町なのはやアリサ・バニングスも、またか、って感じの複雑な表情をしてるけど。

「だがなあ……他の問題だって色々あるんだぞ?」

リンカーコアが弱すぎて、従者にしか出来ないとか。

家族との関係をどうするかとか。

「寿命や子供の問題は、夜の一族の時点で抱えてるから。不老不死でもそんなには変わらないんじゃないかな。

それに、体を調整出来るなら、血を飲まなくても大丈夫に出来るそうかも、って」

「……確かに出来そうではあるし、問題は既に抱えていたんだつたな……」

忍、本当にいいのか？」

「ええ。裏側って血や家の繋がりが重視されたりするから、利点も多いのよ。色々と誤魔化す必要があるという点も、大きくは変わらないし。」

本人が希望していて、政治的な面でも利益が大きくなれば、反対する理由は無いわね。

一応は伴侶候補もいるけど、目立ち過ぎて隠すのも大変そうなのよ。血を飲まなくても良くなるなら、その方が有り難いわ」
「この体のせいだよ」

月村忍の言葉と視線に、馬場鹿乃がダメージを受けてる。

まあ、やたら大きいし。

筋肉だし。

髭だし。

デバイスを起動すると、更にアレだし。

「ふむ、ここで私の出番ですね。」

私の不老不死の保護は、解除可能です。馬場君については、当面は不老で共にあるという妥協案はどうでしょう？

もし捨てられたりした場合には、ちゃんと死ねますからね。

この先もずっと生きる事になったなら、将来的には私の仕事を手伝ってもらうのもいいですね。普段は地球以外で活動し、時々帰れるような形であれば問題は無いでしょう。

今でも無限書庫にチャチャちゃんがありますから、本局経由で別荘に来ることは難しくありませんし」

変態ポリコンが突然現れた。

高町家道場経由で普通に転送してきてただけなんだけど、馬場鹿乃からは死角だった。

ちなみに、別荘の位置の基準が地球かお姉様だから、本局からの転送は色々面倒。

本局基準での経路を維持するのは、もつと面倒。

「……えーと、アレだ。」

外見の問題とか、俺はあるんだよな？ 大人モードは使えねえし」

「髭面高校生の時点で、問題が無いとでも？」

その外見のまま50歳となっても、肌が若々しい事を妬まれる程度で済むと思いますが」

「うぐう……」

「その姿でたい焼きの食い逃げはいけませんよ？」

犯罪ですし、何より可愛くありません」

「しねーよ！ てか、たい焼きの食い逃げって何だよ!？」

「おや、知らないのですか？」

名作なのですが……」

「……はあ、何でこう、大事な話が真面目なまままで終わらないんだろうな」

馬場鹿乃と変態ロリコンの会話を聞きながら、お姉様が遠い目をしてる。

けどまあ、月村すずかの従者化は、ほぼ決まりかな。

作ってて良かった、親愛属性の従者化術式。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2005年09月)

◆◆ 2005年(新暦66年)09月 ◆◆

ゼスト隊やナカジマ家の人(ゲンヤ・ナカジマを除く)が帰り、入れ替わるように陸や海の尉官や下士官が派遣されて来た頃。

お姉様はアルフとザフィーラに指導を任せて、別荘に引き籠る気が満々。

実技指導にはセツナ達に加え、小学校に通わされて不機嫌なヴィータも一人前扱いを目的に大人モードで参加するみたいだから、特に問題は無いと予想。

最高評議会としての仕事も、私達が調べた結果の資料だけで充分回せるから問題なし。

「これでようやく、本格的に能力の解析を始められるな」

ここまで研究開始が遅れたのは、対ナハトヴァール戦でアルカンシエルを地表近くに打ち込んだ第108無人世界ルスターを、お姉様の実験場として使う許可が出るのを待ってたから。

別荘や地球、その他人の住む世界でやるには色々ヤバい可能性がありそうだったし、最高評議会なんて肩書が付いたせいで、好き勝手に使用するのも問題だと自重してた。

ルスターは元々人が住める環境ではなかったけど、マントル層まで抉れた関係で酷い状態になってる。近くに有人の世界も無いため、お姉様の「人が活動出来なくてもいいから、何かあっても被害が小さくて済む次元世界で自分の状態を確認したい」というオネガイに応えて差し出された形。

「理由は何でもいいよ」。

世界の魔力的なナニカ、並行世界、世界の書き換え。どうやったら何が出来てしまうのか、何が起こってしまうのか。知っておかないと怖すぎるからな。

この世界の利用は実質無期限だ。慎重にやるぞ」

◆◆◆ 2005年（新暦66年）10月 ◆◆◆

「いや、地球の米も作っていたのは知っていたが……」

お姉様は、別荘で収穫されたばかりの米を前に、困ってる。

「こんだけあると、試食だけでも大変や」

「インディカ種まであるのは予想外だよ。」

パエリアやピラフとかに合うはずだけど、あんまり使った事は無いんだよね」

はやてと黒羽早苗は、嬉しそうに色々を準備していて。

「種類ばかり多くても、迷うだけよ。」

来年からは、せめて数種類にしてもらえると嬉しいのだけれど」

「初回なのでですから、こちらの風土に適合するものを選別する必要があります。あります。」

風味の変化もあり得ますから、調査データとしては有効でしょう」
プレシアとウーノは半ば呆れながら、それでも準備に参加して
いて。

「まあ、美味しそうだからいいんだけど」

夜月ツバサも連行されていて。

「美味しいからと食べ過ぎてしまうと、後が怖いわね」

「少なすぎると、味を判断し辛いですよ。悩ましいところですよ」

リンディ・ハラウンとヴィヴィオも手伝いという形で参加して。

「どうして私達はお皿の準備だけなんですかつ！」

私だって、最近はお料理出来るんですよっ!？」

「私はポイズンクッキングとか言われちゃってるから、しょうがないけど……」

「私も役に立てないどころか、お皿の準備を手伝う事しか出来ないのですよ。」

任される事柄がきちんとあるのですし、レシピ通りなら上達していると言われていたでしょう?。」

「うう……材料から料理を考える時は昔の癖が抜けてないから駄目って、酷いです……」

シヤマルと高町美由希が半泣きで皿を出してるのを、カリム・グラシアが慰めながら手伝って。

「はつきり言ってる、なのはやフェイトより下手なんだから。」

ああ言われても仕方ないじゃない」

「アリサ、はつきり言っちゃ駄目だよ」

「アリサちゃんだって、そこまで上手くないよっ!？」

「なのはちゃん、余計にシヨックを受けてる人がいるから……」

「みんな、がんばってー」

アリサフェイトなのははるかアリシア

5人の少女達を含む招待客は、大人しく料理待ちをしてる。

月村すずか改め、すずか・月村・テスタロッサは本来招待する側だけど、今も月村家在住。仲間と一緒に意味でこのグループに。

住処は未だに、目処が立ってない。正確には、土地絡みでクリアすべき問題が残ってるらしい。

「しかし、これだけ生産出来るとなりやあ、あれだな。」

親衛隊や近衛騎士団に卸すだけじゃなく、ミッドとかにも輸出出来るんじゃないか？

この世界の食い物の人気が上がったせいで密輸しようって馬鹿が増えてるらしいんだが、供給が増えりやあ少しは減るだろ」

「だが、土地はあっても人手が少ない。しかも、限られた人物しか住む事を許されない地だ。」

すぐに増産する事は難しいのではないかね？」

ゲンヤ・ナカジマが仕事の顔で考えてるけど、別荘の人手はそこまですぐに増産する事はない。ジェイル・スカリエツティの考察は間違ってる。

機械やら自動人形やらを増やせばどうとでもなるけど。

「訓練やらで使うのはまあいいとしても、移民やらを受け入れる気はないからな。そもそも、価値観やらが違い過ぎる。」

だが……管理世界と無関係のままと言うわけにもいかんだろうし、交流の一環としてはアリか。

農業用の自動人形を増やすべきか？」

お姉様の眩きに、お茶の準備をしていたノエル・K・エアリヒカイトと馬場止平の動きが止まった。

心配そうに、月村忍と馬場鹿乃を見てる。

「大丈夫よ。勝手に改造する人じゃないわ」

「そ、そう、だよ……な？」

「技術面は一部参考にするかもしれないが、改造だろうが製造だろうが、こっちだけで完結する。」

役目を持つ者を奪ってまでやることは無いぞ」

◆◆ 2005年（新暦66年） 11月A ◆◆

「とりあえず、要望通りに組み上げたつもりだが、どうだ？」

「うん、デザインは要望した通りだし、大きさもぴったりかな」

現在、別荘の訓練場にいるのは、お姉様とすずかの2人だけ。

要するに、完成した専用デバイスの説明なう。

StrikerSのキャロやルーテシアのデバイスに近い、手の甲に紫色の丸い宝石がある白いグローブがメインユニット。

曙天の指令書に似た、魔道書型の大容量カートリッジユニットをサブユニットとして使用。

待機状態はレイジングハートを紫色にしたようなペンダント。

色々サポートする為に、人格搭載型。魔力不足でお姉様の入門用デバイスも使えないし。

これらを使用可能とするため、低出力の人工リンカーコアを用意して、人格や格納領域の維持と起動魔力の確保、ついでに緊急時の保護を兼ねたカートリッジ無しでの簡単な魔法の使用可能とする。

実は従者にも強引に魔力を供給する事が可能だと判明してるけど、適性やらお姉様の手間やらを考えると、原則として行わない事になってるし、単独運用の為に魔力の確保が必要。

この辺までが、以前相談しながら決めた内容。

ここからは、お姉様に任された仕様。

世間に色々ばらしたこともあって、アルハザード式を基本に、ミッ

ドチルダ式も組み込んだハイブリッド構成に。アルハザード式に含まれる真正古代ベルカ式も行使可能で、熟練したら古代ベルカ式として使った方が、効率が良くなる。

魔道書型カートリッジユニットはもちろん紋章式で、333頁×4冊構成。

なんて贅沢な仕様なんだー（棒読み）。

非魔導師を魔導師化するフルカスタムデバイスの代表例になりそうだけど、後々変な影響が出る可能性は気にしちゃいない。

どうせこんな高コストの特殊機、量産されるなんてありえない。

「魔力が無い分カートリッジは多くしたが、同時使用数に制限を付けてあるからな。」

あと、氷結の変換資質に近い特性が確認出来たし、それに合わせた変換や増幅機能も何とかなった。冷気や氷は物理的な力を持つから、扱いは注意しろよ」

「うん、解った。」

えっと、この子の名前は？」

「そういえば決めていないな。」

今から私が付けるのもあれだ。好きに付けていいぞ」

「それなら……えっと、氷の力を持つ白いデバイスと、曙天に似た書だから……スノーホワイトと東雲しののめの書、というのはどうかな？」

レイジングハートと曙天の指令書にあやかってる感じ？

お姉様の、ネギまと軍艦と酒に塗れた名付けよりは、絆を感じるかもしれない。

こうして並べると、焼き鳥ねぎまと寿司ぐんかんと酒で、オヤジの食事に見える。

ふしぎ！

（やかましいー！）

「うん、いいんじゃないか？」

人格が維持出来る程度の魔力はデバイス自身に持たせてあるし、起動もそれを使っていつでも可能だ。

今までみたいに、魔力を使い切ったら起動も出来ない、みたいな制限は無くしているし、先生役としての情報も色々持たせた。

一緒に住めるようになるのは、まだだいぶ先になりそうだな。別荘や道場に来ない日は、これで練習するといい」

「うん。よろしくね、スノーホワイト」

『お任せ下さいまし、マスター』

◆◆ 2005年（新暦66年） 11月B ◆◆

「進路か……自由に決めていい、と言いたいところなんだがな」

「割と近い内に、引越す事になるからね。」

それに、裏に通じたところの方が色々と楽なはずだよ」

「あと、ある程度近い場所に集まった方が、都合がいいですよね？」

というわけで、八神家のリビングに集まって、相談しているのは進学について。

来年度に、セツナが高校に、成瀬カイゼが中学に進学する。

成績やお金に問題は無い。論点は、何処に行くか。

普通は問題にならない点が、問題として絡んでくる。

「それで、聖祥大の付属が第1候補か……確かに少しは裏に通じていたし、フエイト達も近くにいる。私立だから、中学生で少しくらい遠距離でも浮くことは無い、と。」

確かに、その意味では候補として間違っていないんだが」

「問題が無いなら、ええと思うよ。」

それに、新しい家の予定地って、リンデイさんとかなのはちゃんの家近くの話や。

この近くの学校にすると、引越した後が面倒になってまうし。

転校するにも微妙な距離や」

はやては、私立聖祥大学の付属校に賛成の方向らしい。

反対する理由も特にない、とは言える。

「だがまあ、中学はともかく、高校は進学が主目的の普通科だ。」

カイゼはともかく、セツナは将来どうしたいかも考えた方がいいぞ？」

「将来、ですか……日本で過ごす時の表の顔、みたいな感じですか？」

「裏とは切っても切れない立場ではあるが、無理に裏を中心に考えなくてもいい。

士郎だって、今の本職は喫茶店のマスターだ。御神流の剣士としての実績や実力は消えていないが、その活動は恭也や私達への指導程度しかしていないぞ。

魔法の練習も、趣味の範疇だしな」

「それはそうですね、ええと……」

「すぐに思いつかないなら、大学を目指すのもいいんじゃないか？

その頃までに、何をしたいか考えておくといい。最低限、理系か文系か、くらいは決めておく必要があると思うが」

「そうですね……もう少し、考えてみます」

◆◆ 2005年（新暦66年）12月A ◆◆

旧最高評議会の逮捕から1年が経過した頃。

日本では、ゆつくりまったりと状況が変わってる。

主とはやても自分の足でそこそこ歩けるようになって車椅子からの脱却に成功してるし、新テスタロッサ家第2弾として、守護騎士3人がテスタロッサ姓に変わってる。

当然の様に、ミドルネームは八神。

守護騎士で1人戸籍の無いザフィーラの背中が煤けてた気がしたり、立場が近いせいかわめてるアルフとの距離が妙に近い気がしたりするけど、とりあえず細事という事にして。

何より、ようやく住居についての目途が立ったというか、建築に向けた作業にこぎ着けたのが大きい。というか、古い社宅かアパートを潰すという方針は早々に決まっていたものの、候補が複数あった上に、住人の立ち退き交渉や新居の手配に時間がかかってたらしい。

実際は、恩を売りたい組織同士の駆け引きが長かったようだけど。

とにかく、使う土地が確定。新テスタロッサ家の住居に加えて関係者向けの住居も含む、思ったより大きな建物、具体的には5階建てのマンションに似た構造になる事になった。

加えて、様々な国や組織から要請された、連絡用の事務所が入るビルも割と近くに準備。

要請に併せて土地やら資金やら裏世界を知る業者やらが提供されたりして、現在設計なう。

そこそこ広くて、アースラ現地拠点や高町家に近い場所なのはいいんだけど。

管理人が住み込みで常駐する構造なのもいいんだけど。

断熱やら遮音やらに凝った上で、ヒートパネルやらを色々使った集中冷暖房になるのもいいんだけど。

冷暖房の設備に魔法を使うのもいいんだけど。

光熱費関係の偽装を兼ねて、屋上に太陽光パネルを配置するのもいいんだけど。

通信関係がやたら贅沢なのもいいんだけど。

某髭面^は高校生^かを見られたせいで、天井が高めで設定されそうなのもいいんだけど。

戦闘機人12人+変態博士を想定した部屋があるのも、放置は怖いからいいんだけど。

テストロッサ家だけで2階分使うのは予想してなかった。吹抜けや屋上の部分があるらしいから、上の階を丸々使うわけじゃないけど。

凶面の草案を見たら、1階に5家族程度が入れる大きさなのに。

LDKだけで1家族が過ごせるくらいの広さがあるのは、はやての希望だからいいとして。

浴室だけで30帖くらいに見えるってどういう事？

脱衣場も合わせると、管理人の住居部分に近い面積だよなこれ。

全部が廊下に面してるわけじゃないけど、30くらいの部屋数ってどうなんだろう。

気合い入れ過ぎ。そんなんだから2年くらいかかる見込みとか言う羽目になるんだよっ！

お姉様やはやて、プレシアまでノリノリだったから、何も言えないけど。

「ドクター、只今戻りました」

そんな中、チンク、セイン、デイエチの保護施設に入っていた戦闘
機人3人とギル・ガームスがアースラにやってきた。

更生プログラムを滞りなく終え、態度にも問題が無かったという事
で、戦闘機人はジェイル・スカリエツティの下に、ギル・ガームスは
故郷に帰る手続きが通つたらしい。

もつとも、ギル・ガームスについては、今後どうするか相談するだ
けらしいけど。日本では殺人の容疑で指名手配されてるし。

「お帰り。管理局の生活はどうだったかね？」

迎えに来たのは、もちろんジェイル・スカリエツティ。

近くにはオペレーションや受付業務担当の局員がいる程度で、他に
誰かが来てるわけじゃない。

「特に何も。」

程々に勉強し、程々の自由がありました。もう少し体を動かしたい
とは思いましたが、それだけです」

代表で答えてるのは、チンク。

姉としての矜持か、先頭で堂々としてる。

「そうか。」

さて、今後どうするか決めたのかね、ギル・ガームス？」

「正直、色々信じられない情報ばかりで、混乱してるんだが……

今の最高評議会の誰かと、話せないか？

少し、話を聞いてみたい」

「そうですか。では、私など如何ですか？」

「……は？」

ギル・ガームスが喋ってる間に、背後に変態ロリコンが立ってた。

怪しい、さすが変態ロリコン怪しい。

「おや、私も最高評議会の一員なのですが。」

ちなみに、原作知識持ちの転生者ですからね。話は通じますよ」

「そ、そうか。アルとかクウネルとか呼んだ方がいいのか？」

「いえ、公開している情報通り、クーネですよ。」

姓が変わってしまったので、面白味が減ってしまったのがちよつと

だけ残念です」

「へえ……ええと、知ってるみたいだけど、俺はギル・ガームス。見ての通り、ギルガメツシユの偽者みたいな感じだ。」

「あんたはアルビレオっぽい見た目だし、クウネル・サンダースに似た名前になったのか」

「いえいえ、自分で名付けたのですよ。」

「その時の名はクーネ・ルアソープです。いい名前でしょう?」

「いい……あー、うん。イイナマエデスネー」

「見事な棒読み、流石です。」

「さて、聞きたい事があるようですが、何でしょう?」

「……原作って、どう思ってる?」

「俺は最初、特典使って将来有望な美少女ハーレムでウハウハだと思ってたけど……現実には甘くないよな?」

「そうですね、望ましいなら手練り寄せ、望ましくないなら避けるための情報を得られるかもしれない参考資料、といった所ででしょうか。」

「原作関係者との関係を求めた時点で、求めなくとも関係を持ってしまえば否応なく、改変に手を付けるといふ事ですからね。何も変化しない事を期待してはいけませんよ」

「だけど、プレシアやリインフォースが生きてるって事は、誰かがそうなるように手を出したんだろ?」

「ええ、その2つに関しては、エヴァちゃん……今の最高評議会の議長が頑張ってくれました。」

「公開されている写真を見たなら解ると思いますが、エヴァンジェリンに似た転生者ですよ」

「そりゃまあ、解りやすかったけど。」

「何かすげーチート臭い実力じゃないか?」

「10年くらいは寝食娯楽を完全に投げ捨てて、研究と鍛錬に没頭していましたからね。」

「その後も食事はとるようになったそうですが、睡眠は投げ捨て続けていたようですし。普通の人が真似をしたら、数日で病院に連行されるレベルだったようですよ。」

そこまでして自分のものにした力ですが……欲しいですか？」

「いや……無理だろそれ。」

「だけど、結果的には人生勝ち組みだろ？」

「それを本人に言ったら、是非替わってくれと言われますよ。」

エヴァちゃんは必要に迫られて力をつけただけですし、原作介入も姉であるリインちゃんを助けたかっただけですからね。地位なんて飾りか足枷としか思っていないません。

防衛プログラムが予想外だったため実現出来なかったのですが、エヴァちゃんは表に出ないまま隠居するつもりでしたからね」

「うわ、なんて勝ち組の思考回路。」

「聞きたいんだけど、嫉妬とかしなかったのか？」

「私ですか？　あり得ませんね。」

可愛いは正義です。必死な姿を美しいとは感じますが、嫉妬するなと侮辱の極みですよ」

「駄目だコイツ、腐ってやがる」

「早すぎましたね。時代が追い付いてないようです」

「晩婚化に逆行しそうな性癖が何言ってるんだか」

「いえいえ、Yesロリータ、Noタッチが信条ですの。

まあ、私は私です。資料の海で溺れたかっただけの私が、何の因果かこんな力を持ってしまいましたからね。

力を求めなければ、嫉妬する必要などありません。守りたいものも色々増えましたが、守れるだけの力は持っているつもりですし。

様々な世界の文化に触れるのも楽しいですし、私は満足していますよ」

「へー……自分は自分、か……」

「そうそう、転生特典が不要なら、エヴァちゃんに相談してみるといいですよ。」

特典の破壊方法も判明していますし、縛られたくないならそういう手段もあります」

「……ま、まあ、それはいいや。」

「というか、本当に神だな……」

「本人は心底迷惑そうでしたが、能力的にはそう言っても良さそうではありますね。」

「それで、答は得ましたか？」

「うーん……日本に戻ったら犯罪者だしなあ。」

「そういや、俺が殺しちまったクルトっぽいやつって、どんなのだったんだ？」

「どんなの、とは？」

「いや、真つ当なやつだったのか、昔の俺みたいなやつなので、気分的にちよつとな……」

「聞いた話ですが、部活では割と中心的な人物だったそうですよ。」

「ジュエルシードを狙ったあたりは、オリ主様の思想もあったようですが」

「……悪人じゃない、って事か？」

「世の中には悪意しかない悪人や、どこを見ても腐っている人間など、そういうないものです。」

「お手軽な善悪の区別など、現実的ではありませんよ」

「まあ、そんなもん、なんだろうな。」

「とりあえず、何となく理解出来たような気もする。うん、もう少し相談してみるわ」

◆◆ 2005年（新暦66年）12月B ◆◆◆

ギル・ゲームスと変態がオハナシロリコンをしてる頃。

「初めまして、エヴァンジュ最高評議会議長様。」

ナンバーズ5番、チンクと申します」

「ナンバーズ6番、セイインです」

「ナンバーズ10番、デイエチです」

チンク達はお姉様に挨拶しに来てた。

お姉様はこれを見越してアースラに来てたし、今はアースラの応接室を使用してる。

日本に行くには魔法文化の無い世界に関する知識等が必要だし、親

衛隊としての教育も必要だろうという事で、3人はしばらくアースラに滞在する事になってる。

「私は見た通りの姿なんだ、あまり畏まらなくていい。」

目上の人物云々という教育もあっただろうが、私は別に上司というわけでもないしな」

「いえ、所属する組織の上層部の人物です。」

敬意は持つべきです」

お姉様の言葉に、セインとデイエチは少しほっとしてるみただけ
ど、チンクは硬いまま。

意地でも態度を崩すものか、という意気込みが見える。

「まあ、無理に崩せとまでは言わんが、私は堅苦しい雰囲気は好きじゃない。」

当面の扱いだが、親衛隊に所属する事になっているのは聞いているな？ この管理外世界に関する知識を学び、自分で出身地を選択して戸籍などの確保が出来るまでの期間は、原則としてアースラに滞在する事になる。

その後は、最終的にスカリエツテイの家族扱いで日本に住むよう調整するらしいが……希望や問題点、質問などはあるか？」

「希望を聞くという事は、選択肢があるという事ですか？」

「明確な選択肢は用意していないが、望んだ内容に問題が無ければなるべく通すと聞いている。」

当然、今すぐ思い付くとも思っていないが、戸籍の準備に入る頃が期限になるだろう」

「その希望に、教育内容を含む事は許されますか？」

「内容にもよるし、教えられる人員がいるかも不明だが、門前払いは無いぞ」

「そうですか。それでは、どうしたら体格で劣る姉が威厳を持てるか、エヴァンジュ最高評議会議長様に指導して頂ければと考えます」

お姉様が、豆鉄砲を喰らった鳩みたいになってる。

チンクが出した要求が、予想の斜め上過ぎる。

「……一応言っておくが、狙って偉ぶっているつもりは無いぞ？」

「こちらの世界向けの設定では、長女となつてしていると聞いています。ですが、リインフォース評議員より明らかに年下の外見とお見受けします」

まあ、設定上はそうだけど、重要な情報が色々抜けてる。というわけで、お姉様は大人モードに。

「私の日本での活動はこっちの姿を使っているから、見た目は問題にならん。」

それと、本来はリインの方が姉だ。体格や経験も影響するのだろうが、最終的には本人同士がどんな関係でいるかが重要じゃないか？

姉だから威厳があるのではなく、威厳があるから姉と呼びたくなる、の方が自然だろう。

作られてから2500年の私が、ミッドの戸籍では60歳のプレシアを母と呼んでいるんだ。実際の年齢など細事でしかないぞ」

言い終えてから、お姉様は通常モードようじょうに戻った。

姿が変わっても、言動は一緒。

「なるほど、態度と行動で姉であることを示す、というわけですね」

「姉である事に誇りと責任を感じるのは自由だし、悪い事ではない。だが、立場や外見に縛られ過ぎるな。」

相手の事を考えた上で、やりたい事をやり、嫌な事は嫌と言えればいい。

たまに喧嘩もしながら、最終的に納得出来る結果を得られてこそ、家族だろう？」

「ですが、各々が好き勝手を行えば、家族は崩壊します」

「少なくとも、お前が自分の我儘だけを通すとは思えないがな。」

まあ、今までのスカリエツティが親として適正かと聞かれると否定するしかないし、トーレやクアットロが母や姉役として微妙なものもある。

そんな中でお前が姉として気を張っていた事は理解してやれるが、あいつらも少しは改善しているはずだ。お前だけが責任を負う必要は無いし、そもそも、お前は妹でもある。

誰かを頼るのも、必要らしいからな。もつと“自分の姉”に理解さ

せてやれ」

何でそこだけ伝聞なんだー。

プレシアに、頼れっちはつきりと言われているのに。

主にも、1人で抱え込むなと言われているのに。

「なるほど、参考になります。」

これを踏まえて、もう1つ希望を言っただいでしょうか？」

「ふむ。なんだ？」

「師と呼ばせて下さい」

「……は？」

「幼い姿でありながら人の上に立ち、それでいながら家族とのよい関係をご存知と見えます。」

是非、参考にさせて下さい」

チンクが懐いた……？

より高みに見えるところに痺れて懂れた？

「……私は、口で言っている程うまく出来ているわけじゃないんだがな」

お姉様は、ちよつと困ってる。

嫌われるよりは良い気がするから、問題なし。

むしろ、視線で「どうすればいいのかな？」とさりあえず黙っていよう」って相談してる、放置状態のセインとデイエチの方が問題だと思う。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2006年01月)

◆◆ 2006年(新暦67年)01月 ◆◆

年が変わり、ギル・ゲームスが殺人の事を秘匿されたままひっそりと日本にある魔法関連の少年院に入ったりした頃。

未だにミッドチルダの留置所にいる金子狗太について、お姉様に打診があった。

曰く、だんだん話を通じなくなっているが、ジュエルシードの影響を調査する方法は無いか。

リンカーコアを回復不可になるまで蒐集したつもりだったけど、治療のせいでちよつとだけ魔力が回復したせいか、余計に引き籠りが悪化してるらしい。

無限書庫の調査が主な役目になってるユーノ・スクライア経由だけど、統幕議会も噛んでる依頼。明確な理由が作り辛いから、実質的に拒否権は無いに等しい。

「で、なのはまで呼ぶ必要はあったのか？」

「二応は関係者だし、原作を知ってる人だし、それに、その……」

とまあ、微妙に色気づいてるユーノ・スクライアをそのまま高町なのはに引き渡して、お姉様はミッドチルダへ。

クロノ・ハラオウンに案内され、留置所といいながらも隔離されたような部屋で、金子狗太と対面。

「さて、まともに話が通じないと聞いたが……」

クロノ、会話を成立させられるだけの会話能力は残っているのか？

「少なくとも意思疎通に関する能力が健在なのは確認している。

その意思が無いだけだろうだ」

「……失せな。勝者の憐れみなど受けたくもない」

金子狗太は、ぼんやりと椅子に座ったまま。

力のない目をお姉様とクロノ・ハラオウンに向けてる。

「別に、憐れんでなどいないし、自分を勝者だとも思っていない。

今の状況で勝者と言えるのは、この状況を作り出したジュエルシードや、死ぬ運命から逃れたレジアスやゼスト達の方だろうな。

グレアム達は相変わらず本局で忙殺されているし、私もやりたくもない仕事でこんなところにまで来させられる立場だ。

最高評議会などという肩書が欲しいなら、是非替わってくれ」

「……権限が減りまくった残骸だろうが」

「そんな立場の私を勝者と呼んだんだ。羨ましいのだろうか？

さて、私としてはこんな面倒な仕事はとっとと終わらせたいから、先ずは一方的に喋るぞ。

事の発端はジュエルシードだ。前世で日本に降ってきて、頭やらを貫かれて死亡した者の意識に干渉、特典のような悪ふざけの改造を行った上で、この世界に生まれさせたと思われるのが私達転生者だ」

「……は？」

「ちなみにこの悪ふざけは、言葉遊びに近い。

冷静になりたいで感情消失とか、撫でられたら相手に惚れるナデポとか、撫でたらぽつと火が付くマッチもどきになっていたとか、微笑みを向けたらヤンデレになり刺されて死んだというのもあったようだな。

お前の場合、魔力だけは多く、それを黄金に変える事で金を得る手段を持ち、雌の犬に好かれるわんわんハーレム体質だ。まあ、これについては、はつきり言ってもいい。魔力の大半は失っているしな」

「な、何だよそれ……」

「いや、良くはないだろう」

金子狗太は驚きで目を見張り、クロノ・ハラオウンは小さくため息をついてる。

珍しい能力だけど、すごく有効というわけでもない、微妙な能力とお姉様は判断したから、どうでもいいのは事実。

「一般人に戻りたいなら、早目に立ち直る事だ。今ならまだ、日本に戻

る事もミッドで暮らす事も可能だろう。真面目に復帰する意思と行動を見せれば、管理局としてはきちんと支援すべき対象となるだろうし、魔法を知る身であるから日本で魔法関連組織に保護される事も不可能ではない。

腐ったままいたいなら、フェイトに拾われる前のキャロのような立場、もしくは金のなる木のような扱いになる事は覚悟しろ。既に情報が裏で出回り、乏しくても魔力がある以上は、少しくらいなら変換出来るだろうと考える馬鹿が湧くのは防げん。

命を投げ捨てるなら、早い方がいい。

人道という糸で命を繋がれ、他人の金でマズい飯を食っているのが、今のお前の現状だ。それでもなお、黄金律などという希望が期待通りに機能していて、客観的に見て女に好かれる主人公だと思えるほど、おめでたい頭でもないだろう?」

「事実ではあるんだが、言葉を選んでくれないか。」

時空管理局としては、人権に配慮した選択をしたいんだ」

クロノ・ハラオウンが困った顔をしてるし、金子狗太は沈黙したし。ぶつちやければ、眷属化して金の生成を行わせるのが、お姉様的には一番有益な気がする。

お姉様の「世界の書き換え」でどうとでもなるし、魔力が激減してるから、有益と言える程じゃないけど。たぶん、カートリッジとかで大量の魔力を突っ込むと、金が出てくる程度の能力。

最近動物愛護団体が騒いでるフォアグラみたい。

「もう一度言うが、私達がこの世界にいる事自体が、ジュエルシードの悪ふざけだ。」

アレは誰かを主人公にしてくれるような都合のいい存在じゃない。特典が言葉遊びで済んでいるだけ幸運だとすら言える状況だし、そもそも転生者は21人いた。既に4人死んでいるがな。

改めて言うが、お前が選べる選択肢は3つだ。

一つ、真面目に一般人を目指すなら、ジュエルシードの影響で行動がおかしくなっていた事にしてやる。しばらくは教育期間やらがあるだろうが、犯罪者に飼われるよりはマシな生活が可能になるだろ

う。

一つ、腐っていたい、もしくは手出しを求めないなら、私は何もしない。

一つ、死にたいなら、そういう風に話を付けてやる。

おっと、番外。金を産む存在として私の奴隷になりたいなら、そう扱ってやる。

さて、どうする？」

「……俺の、ハーレムは……」

「あるわけがないだろう。雌犬を支配したいという願望の結果がわんわんハーレムだと、さつきから言っている。

それも、純粹に雌の犬限定の能力だ。元が狼で人としての意識があるアルフにも効かんから、無駄な足掻きは止めておけ」

「……何だよ……何でなんだよ！」

俺が主人公の筈だろう!？」

「ふう……強制認識が無くてもこれか。いくら犯罪者に幽閉されていたらと言っても、どこまでねじ曲がっているんだ。

私が羨ましいのか？」

油断すれば、以前の夜天やアギトの様に実験体として全てを貪られる可能性がある私が。

誰かと仲良くなっても、特殊な例外以外は看取る事になるのが確定している私が。

自然にも自分の意志でも死ねなくなった私が。

人類が滅亡しても死ねない可能性が高くなった私が。

そんなに、羨ましいのか？」

文明がまともな間はまだいいだろう。だが、文明が滅ぶ理由など、戦争や環境破壊、他にも色々ある。何百年後か何億年後か知らんが、最終的に考える事をやめるしかなくなる可能性がある存在は、そんなに……羨ましいものなのか？」

替われるものなら、是非替わってくれ。人権の無い戦乱の時代は価値観や倫理観を保てないほどに酷く、2500年の眠りはよく正気を保てたなど自分でも感心するほどに長かった。おかげで、敵を殺す事

を躊躇う心はとうに擦り切れている。ついでに言えば、今のお前は面倒な仕事の原因になった敵だ。

このままウダウダし続けるなら……そうだな、心臓でも抉り出せばスツキリするか？」

「待つてくれエヴァンジュ、流石にそれは恐喝に該当する」

「な、何でそうなるんだよ！

管理局は人道的なんだから!」

クロノ・ハラオウンのため息が深くなり、金子狗太が恐怖でチキン肌。

このままだと寿命がストレスでマツハに見える。

「お前も原作を知る身だろう？ 最高評議会が何をやっていたか、覚えてるんだろう？」

最高評議会が何をして、どんな末路を辿ったか。記憶は無くなっていないのだろうか？

そんな汚れ役を押し付けられるのは、どんな人物だと思う？

ハッキリ言つてやるが、私は自分が真つ当な感性を持つ人間だとは思つていない。選択肢を与えられるだけでも、譲歩されていると自覚しろ」

「ほ……本気、なのか……」

「兵器として作られた私の役目は、殺す事。せめてもの慈悲は、苦しませずに死なせる事。

そんな時代に生まれたんだ。生きるために足掻く以外の選択肢など死しかなかったし、足掻いても力が足りなければ全てを奪われるだけだ。

それに比べ、足掻かずとも命を奪われず、人格改造すらされていないように見え、妄想に引き籠つてなお生き長らえているお前は、何て幸せなんだろうな。嫉妬のあまり、永遠に金のなる木として家畜にしましめそうだ」

「いくら出来ると言つても、軽々しくやらないでくれ。

その情報もあまり漏れてほしくは無いんだ」

「ツ!? ま、まさか本気で……」

従者や眷属の実態を知るクロノ・ハラオウンのため息が海より深くなつてく。

それが、お姉様の言葉の信憑性を増す結果に。「アルハザードの技術を甘く見るな。」

そもそも、最高評議会すら脳味噌の状態で命を繋いでいたんだ。私にそれ以上のことが出来ないとしても?」

「わ、解った! 一般人になる! なるから助けてくれ!」
ついに恐怖が天元突破。

人権に配慮発言が効いてるのか、クロノ・ハラオウンに縋りついてる。

「ふん、さっさと決めればよかったものを。」

とりあえずジュエルシードの影響で思考がおかしくなったことにしておいてやる。真面目にやれば、そのうち普通に暮らせるようになる……が、再び妄想を垂れ流すようなら、家畜化だ」

必死で頷く金子狗太を放置し、お姉様が退室。

ちよつと遅れて部屋から出てきたクロノ・ハラオウンが、呆れ顔で近付いてきた。

「あんなに脅さなくても良かったんじゃないか?」

どう見ても、君の方が悪人だ」

「忘れていたのか。私は悪人だぞ?」

おかしくなった原因にジュエルシードが関わっている事は間違いない。それに、アレを養うための代金として金を作らせる事もやりたくないんだらう?」

そもそも、現実を忘れるために妄想に逃げている以上、逃げ続ける事にデメリットが無い限りはそう簡単には戻れんさ」

「だからと言って、あの脅しは……」

「必死にならなくても、自分を殺さなくても、生きていられたのが羨ましいのは本当だ。」

生きる気力や希望が無いなら、死んだ方が幸せかもしれん。

あのまま他人に迷惑をかけるくらいなら、服従属性の眷属にして金でも作らせていた方が、よほど有意義だ。

ほら、嘘は言っていないぞ?」

「……相変わらずだな、君は」

それでも、調査を超えて自助努力を開始するための道筋まで用意した以上、十分な成果を上げてる。

方法はともかく、結果に文句は言わせない。

◆◆ 2006年（新暦67年）02月 ◆◆

ゼスト・グランガイツ達がミッドチルダに戻ってから、約半年。2期目の研修生を送り返す頃。

気に関する報告と、各所が相談して立案した今後の指針が送られてきた。

曰く。

ミッドチルダでも、適性のある魔導師が有意な割合で存在してる事が確認出来た。また、適性がある非魔導師も同程度の割合で存在している事も確認出来ている。

カートリッジシステムをミッドチルダ式デバイスに組み込む技術に関して、レイジングハート及びバルディッシュでの実例があり、今後の研究で更なる発展が期待出来る。

また、カートリッジを使用しない場合や、カートリッジの適性が低い魔導師についても、若干の能力上昇が認められた。これは、魔力運用に関する技術向上に伴うものと思われる。

運用や教育に関する注意は必要だが、魔導師の能力向上技術の1つとして十二分な効果が得られると判断する。

よって、今後は魔法関連技術の一つとして、ゆっくりと広めるものとする。

これに伴い、3期目の研修生は教導隊や学校の教官とし、1年の予定で技術を伝える事を依頼する。この準備の為に、次期は5月開始としたい。

「……統幕議会とミッド地上本部と聖王教会の連名か。」

随分と風通しが良くなったと見るべきか、予想以上の効果に喰い付

「いてきたか……」

ついでに、英雄の肩書が余計な仕事をしてると予想。

空中で魔法が使えなくなっても、虚空瞬動で墜落を免れることが可能かもしれないか。

非魔導師がカートリッジ等で魔法を使うのは、補給しやすい防衛戦向き。

犯罪者が悪用するにも、デバイスに起動用の魔力が必要だから隠密性に欠ける。

コストも大き目だから、テロや襲撃には、低ランクで燻ってる魔導師や物理兵器の方がまだ使いやすいはず。

A M Fの機械化を研究してるジェイル・スカリエツィも、気の技術の価値を上げる要素。これ自体は設備防衛や防諜設備としての効果が期待出来るから、時空管理局公認で研究を継続中。

「まあ、これで堂々と使える方向になったわけだ。

A M Fの有効性も下がりそうだし、目標はクリア、だな」

◆◆◆ 2006年（新暦67年）03月 ◆◆◆

進学やら進級やら、年度末でバタバタしている頃。

お姉様は、ルスターで黄昏てた。

原因は、能力の解析がそれなりに進んでいる事。

「……本当に、どうしてこうなったんだろうな……」

まず、世界の魔力的なものがチート。

少なくとも、空間として認識出来る場所であれば確実に存在するし、空間を削り取るように還元する事で強制的に生み出す事すら可能。次元空間や虚数空間にも若干ながら存在するし。

要するに世界を維持する基盤的なナニカであり、神力とか呼んでもよさそうな勢い。

それを使って、魔法の様な現象を引き起こせる。虚数空間だろうが問題なしで。

一般的な魔法で出来る事、魔法の様な表現される現象はほぼ可

能。魂とイメージが魔力回路に近い働きをするようだけど、詳細は不明。

空想具現化じみた世界を書き換える能力もこの一例。だけど、あり得ない水準。試しにルスターの重力を減らしてみたら、遠心力で大気や海、大地までもが吹き飛びかけた。

無人世界で良かったとか、斜め下の方向で安堵。

もちろん元に戻して、ついでに抉れたままだった地表もあっさり回復元。温室効果のある気体の濃度が高めを維持するよう調整して、マグマ露出に伴う超大型台風を超える規模の嵐を散らし、動植物を生成したらあら不思議。

普通に緑豊かな星が出来上がった。

まさに、天地を創造出来る程度の能力。

3日目と5日目、それに6日目の一部を実証完了。

「他人の事なら、神とか言っただ草を生やすんだがなあ……」

従者達の反応が怖すぎるぞ」

以前から神に近いと言われてるし。

いまさら、いまさら。

同時に調査してた並行世界関係は、今でも情報の参照は可能だと判明してる。

手出しは、現状では手法が未確立。

並行世界への移動は、転生みたいな形なら可能だと判明してる。

ジュエルシードが世界を渡ってたのはこの方法。

世界の魔力を使い、書き換え技術を応用すれば、行き来も何とかなりそうな感じ。

将来的に、他の並行世界に移住したくなる可能性がある。

研究すべき。

「研究はいいんだが……」

本当に、どうしてこうなったんだろうな。どの辺が吸血鬼なんだ……」

きつと、吸血鬼系キャラクターの能力を再現出来る辺り。

あとは、吸血鬼系の能力を色々混ぜた上で相乗効果、みたいな。

過剰性能なのは、気にしちやいけない。たぶん。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2006年04月)

◆◆ 2006年(新暦67年)04月 ◆◆

セツナが高校生、成瀬カイゼが中学生、共に私立聖祥大学付属に入
学して。

ついでに黒羽早苗が自宅近くの中学校に通い始めた頃。

とうとう、時空管理局の代表評議会が正式に設立された。

「いや、それは予定通りだからいいんだが。」

解任方法が納得いかん!」

『だが、他の方法では、なかなか合意が取れなかったのだ。

この説得と調整だけで設立が3か月は遅れている。これ以外の方
法での合意は難しいのだ』

お姉様が吠えてる相手は、本局にいるギル・グレアム。

通信越しだけど、直接伝えてきただけ、まだ誠意は見せてる。

「だが、これでは……」

お姉様が問題視しているのは、最高評議会の解任と選出方法。

空白期を作らないため、現最高評議会と次期最高評議会候補で決選
投票を行う、というのが新たに施行された法に明記されてる。

逆に言えば。

「……辞めなければ次の生け贄を用意しろ、という事だろうか!」

『そう受け取られる覚悟は出来ている。』

だが、最終局面では、次代の信任投票で交代が決まる事とほぼ変わ
らんよ。

代表評議会議員の推薦やらは不要なのだ。自身で次代を用意出来
る分、まだ緩いと考えている』

「決戦投票で選ばれるような人物なら、推薦など軽く取れる。そもそ
も、任期満了や退任に伴う選出が本来の流れだろうが。」

全く……逃がす気は無い、という事か」

『私を含め、英雄や功労者などと呼ばれた者は、そう簡単には逃れられん。』

レジアスなど、これからも地上の平和を守る事を以て贖罪とする、等とされていたよ』

「縛る気満々か……それも、統幕議会が主導か？」

『意見を公募した上で、だがね』

公募と言うか、実際はミッドチルダ限定の国民投票という形が取られてる。

結果として投票率が8割近くで、その内レジアス・ゲイズの擁護票が7割。多数が擁護している事を理由に、実質無罪扱いとされた。棄権票が全て反対でも過半数となるからか、強硬な反対は無かつた模様。

逆に元最高評議会の腐れ脳味噌達は、ヴェロツサ・アコースや変態ロリコンの技能で全ての記憶を蒐集、同時に死刑が執行されるという最後が決まったらしい。

ジェイル・スカリエッティは既にお姉様の首輪が付いてるし、元々命じられた研究をしていただけだし、最終的に告発に協力して罪を暴いたし、という事で実質無罪が確定済み。罪を全て腐れ脳味噌に押し付けたとも言おう。

『もつとも、状況は改善しつつあるが、地上の人手、特に戦力不足は深刻だ。』

何か良い案は無いかね？』

「知るか。そもそも、質量兵器を禁止している理由が理解出来ん。」

戦力を魔導師に限定して、人手不足だと嘆かれてもな」

『これには、色々な問題が絡んでいるのだよ。』

例えば、出身世界による差別を無くし、実力で評価する例とされている。出身世界を問わずに魔導師を優遇する事で、ミッドチルダ出身者優遇という風潮を回避している面があるのだ。

無論、魔導師でない者の冷遇を避ける意味でも、魔法が不要な仕事では魔力の有無は評価されないが』

「ふん、魔導師を戦力化する意図しか見えんぞ」

『否定は出来んが、これが今の時空管理局なのだよ。』

それに現状では、時空管理局や現地の治安組織を特別扱いするのは危険だ。自警団や聖王教会も治安を担っているが、彼らに質量兵器の所有や使用を認めるのか、という問題に発展してしまう事になる。

加えると、今の制度であれば、質量兵器の製造工場や所持を全て違法として、即座に検挙する事が出来る。

許可されたものか、許可して良いのか。それらを調査し調整するための余力が、我々には無いのだ』

「非魔導師の戦力化なら、何らかの魔導具を使っても出来るだろう。」

今までその案が出た事も無いとは思えんが、やっていない理由は何だ？」

『質量兵器の禁止理由と同じだよ。様々な理由が付けられているが、最終的には、不相応な力を簡単に使ってしまう事が問題となるのだ。』

本質的に、魔法も科学も似たようなものだと思ってるとも言えるだろう。表立って言う事は出来んがね』

「だが、気の技術は……ああ、そういう事か。要するに気の技術は最終的に本人が運用するから、不相応と見做さない事が出来る、と。」

やれやれ。御伽噺の私が言うのも何だが、魔法の世界なのに夢の無い話だ」

『我々にとっては、現実だよ。』

加えて言えば、質量兵器の禁止についてはかなり浸透していてね。武装というものに忌避感を持っている者もいて、それが犯罪の抑止や、所持者、つまり犯罪者の摘発に役立つ場合もある。銃型のデバイスが不人気な理由でもあるがね。

だからこそレジアスは本局に優秀な魔導師を取られながらも風潮を変えず、魔法が不要な役職に非魔導師を重用する事で人員を確保しようとしていたのだが』

「間に合っていない、と。」

そうになると、魔導師もどきを増やせる気の技術を早急に広めるしかないんじゃないか？

「犯罪が増えるか減るか、賭けでもあるがな」

『話は聞いているが、危険性もある。

良いのかね?』

「どう情報を広めるかが勝負だろうな。

魔導師にも “自身の強化” というメリットはある。

非魔導師には “魔法を使える可能性” という心理的に大きなメリットを持つが、費用が掛かるといふデメリットも併せ持つ。

あくまでも新しい魔法運用の1形態であり、扱いを間違えれば自身を傷付けるデメリットをきちんと説明する事で、絶対的な技術だといふ空気を作らない事が重要だろうな」

『やはり、そう考えるのか……』

いやはや、自分で自分の価値を高めている自覚があるなら良いのだが』

「既に教えた技術を、いつまでも隠せるものでもない。いつか公開なり情報漏洩なりする事になるからな。

こちらから広める理由として充分だろうと判断しただけだ」

『それなら良いのだが』

◆◆ 2006年（新暦67年）05月A ◆◆

5月になった。

予定通り、時空管理局と聖王教会から、教官やら指導官やらが到着。

時空管理局本局武装隊航空戦技教導隊の教官。

時空管理局第四陸士訓練校の教官。

時空管理局士官学校の教官。

クラナガン中央魔法学院の教官。

聖王教会騎士団の技術指導官。

St. ヒルデ魔法学院の教師。

所属と肩書だけ見ると、なかなか壮観。

といっても、お姉様は直接指導する気が無い。基本的に私達が、時々セツナやフェイト達も協力して技術指導をする事になってる。

アルフとザフィーラは教導について教えられる立場になるけど、特

に問題は無い。はず。

要するに、お姉様は未だに色々と研究中。

興味を示したプレシアも巻き込んで、並行世界関連の調査を進めてる。

研究者としての波長が合うし、研究が進むのは予想出来てた。

あと、この事態も。

「リニスを連れてきなさい」

「命令形か？」

プレシアが、予想出来た事を予想以上に強い言葉で言い出して、お姉様困惑中。

直接の問題は、並行世界間の移動に関する理論が成立した事。

大規模な移動はともかく、人の1人2人くらいなら何とかなるのが立証出来た。

時間の流れがここより大幅に速い世界でなければ、私達が行き来しても大丈夫だったし。

ついでに、別荘への接続もちよつと大変になる程度。接続さえ維持出来ていれば、別荘経由でお手軽に移動出来る。

「だがなあ……干渉した場合の、相互影響や世界分岐の副作用は把握出来ていないぞ？」

チャチャが人知れず移動するだけでも、一時的に世界が分岐しているのを確認済みだ。小石を送っただけで、数週間は分岐したままだったんだぞ」

「誰にも知らなければ、時間がかかってもいつかは影響が消えるのでしょう？」

リニスは最終的に、次元空間に身を投げていたわ。その後は私も追っていないから、人知れずという条件はクリア出来るはずよ」

「……周囲の警戒くらいはしていたらどう？」

魔力を察知されずに次元空間に突入しろとか、どんな無茶振りだ」
「例の能力を使えば簡単でしょう？」

「まあ、そうなんだが……私の直接介入が、何か妙な事を引き起こさなければいいんだが」

「いつかは試す事になるわ。いい機会よ」

押されてと言うか、流されてと言うか。そんな感じで押し切られたお姉様。

「渋々ながら準備を整えタイミングを計ること、10日程。」

現場は、諸々の都合が良いルスタ。緑の世界になってるから、プレシア達も気楽に来れるようになってる。

「さて、介入先は恐らく原作相当と思われる世界、時間軸はジュエルシード事件の約3か月前、場所は意外にここから近い次元空間。」

「タイミングが合うのは、恐らくあと3分程後の数秒間だ。少しでもずれば失敗するから、それは解っておけよ?」

「理性では解っているわ。感情が納得出来そうにないだけよ」

「可能な限りの手配はしたんだ。それは理解出来るだろうに」

「だから、感情なのよ」

お姉様とプレシアは軽口をたたきながら、最終の準備なう。

連れてこられたアリシアが、その様子を面白そうに見てる。

「ところで、どこまで説明してあるんだ?」

「うまくいけばいい事がある、としか言っていないわ。」

「100%を保証出来ないのだから、必要以上に期待させては悪いもの」

「そうか。さて、そろそろ頃合いだ。」

「世界間通路、開くぞ」

「時間軸補正……成功、想定誤差の範囲内。時間経過は60倍程度の」

「差で安定。」

「座標結合……成功。」

「この先は、お姉様がやらないと隠蔽が難しい。」

「魂の離散速度を考えると、こちらの時間で身投げから0.15秒後、誤差0.05秒以内を推奨。」

「どこのゲームのコマンド入力時間だ……見付けた。」

「あそこからならこの辺に来るはずだが、時間的にも一度飛び込む必要があるか」

「いけそうっ?」

「恐らく。」

「……行くぞ」

じつとりニスの動きを見詰めてたお姉様が、動いた。

一瞬というか、突入から0.2秒弱で脱出完了。

腕の中には、目や鼻から血を流してる山猫が1匹。

「この魔方陣の中央へ早く！」

アリシア、怖くないわ。教えた通りにやれば大丈夫よ」

「うん、ママ。バルエシユカ！」

お姉様が山猫を魔方陣に置いた直後、アリシアがマイク……じゃない、バルエシユカを両手で握りしめて、魔力解放。

幼いけど、魔力量はフェイトやなのはに迫るものがある。

膨大な力を得た魔方陣が輝き、山猫が光に包まれて。

「……プレシア？ それに、フェイト……？」

「やったあ！ おねーさんなりニスだ！」

身投げ前と変わらない人型になったりニスに飛びついて、アリシアが喜んでる。

プレシアもニコニコ笑ってるけど、状況が理解出来てないリニスは、明らかに戸惑ってる。

「これは……私は、夢を見ているのでしょうか……？」

「いいえ、夢じゃないわりニス。」

一度貴女を見殺しにした私が言う資格は無いかもしれないけれど、これからはアリシアを守ってほしいの。

その為にも、知ってほしい事があるのだけれど……」

そして始まる、プレシアによる詳細説明。

ここが並行世界である事。

この並行世界のリニスが死んでから、2年以上経過している事。

抱き付いているのはフェイトではなく、生き返ったアリシアである事。

フェイトも元気に暮らしている事。

アリシアを生き返らせ、プレシアを若返らせたのはお姉様である事。

お姉様はアルハザード産の魔導具である事。

今では、大勢の“テスタロッサ”が家族として暮らしている事。そして、今のマスターはアリシアであり、生涯を共に過ごす、という契約となっている事。

戸惑いながらも黙って聞いていたリニスは、真正面からプレシアを見て。

「変わりましたね、プレシア」

どこかほっとしたようなため息をついた。

「そうね。ほとんど……いえ、全てエヴァのおかげよ」

「私は私の為に、原因とその影響を排除しただけだ。」

それも私を変えたのではなく、変えられていた物を正常に戻るように仕向けたにすぎん」

「他の人には出来なかった事よ。」

リニスには後でもう少し話があるわ。あまりアリシアに聞かせたくない事もあるから」

「そうですか。」

エヴァさんといいましたね。有り難うございます」

「礼を言われるようなことはしていない。」

そもそも並行世界とはいえ、私が今回やった事は人攫いだ。

プレシアやアリシアも、厳密に言えば本人ではないしな」

「それでも、ですよ。」

並行世界の理論や概念は詳しくありませんが、ここにいるプレシアは、プレシアの可能性の1つなのでしよう？

プレシアが幸せを取り戻す未来があり、それにはエヴァさんが関わっていて、それを私に見せてくれたのです。

「礼を尽くすのは当然です」

「やれやれ、どうして私の周りはお人好しばかり増えていくんだ。」

私は、私の目的の為に動いただけだ。それに、とりあえず今は、新しいご主人様のご機嫌を取った方がいい」

「え？」

リニスが下を向くとそこには、抱き付いてるアリシアのご機嫌斜め

な顔が。

「うー」

「す、すみませんフェ……ではありませんでしたね。」

「アリシア」

「けいごきんしつ！」

それと、フェイトのところにいこつ！ ぜつたい、あいたがるとおもうしー！」

「い、いえ、それは……少し待って下さい。心の準備がまだ……」

「きーんしー！」

◆◆ 2006年（新暦67年）05月B ◆◆

「並行世界への影響は、どうだったのかしら？」

リニスが表向きは猫としてテスタロッサ家に参加してから、数日が経過。

フェイトが嬉しくて泣いたり、アルフがもらい泣きしたり、家族が予想以上に大勢でリニスが目を回しかけたり、ラインフォース夜天の魔道書が闇の書だった事を知ってリニスが卒倒しかけたり、リニス登場を知った関係者の顎が外れかけたり、結局リニスの口調が変わらずアリシアがむくれたりするのも落ち着いた頃。

ルスターに籠もってたお姉様のところに、プレシアが現れた。

「……厄介な事になっている」

「世界の分岐が終息しないのかしら？」

「それだけなら予想の範囲内だし、どんなに平和だったか……」

ため息をついてるお姉様の顔が、憂いに満ちてる。

可能性としては考えてたけど、いざそうなると、受け入れるのに時間がかかる模様。

「つまり、分岐は終息していないし、それ以上の問題もあるのね？」

「そうだな。簡単に言えば、私の存在が、あっちの世界にも書き込まれたようだ」

「小石を送った時も、存在は消えなかったでしょう？」

それと同じ流れ……では、無いという事ね」

「そうだな。まあ、結論から言ってしまうか。」

今の私が死ねない理由に、世界による修復及び再構成の様なモノがあるんだが……それが行われる世界に、あつちの並行世界が追加されたようだ。

要するに、少なくとも2つの並行世界が消滅するまで、私は消える事が出来なくなったらしい。

……何の呪いだ、これは」

「それは……分岐した並行世界にも貴女が生まれる、という事かしら？」

「いや、こっちに『私』がいるからか、再構成は行われていないようだ。」

世界全てを調べられるわけではないから、感覚的な物でしかないが……どうも、私という存在はある種の特異点として扱われているように思う。少なくとも『もう1人の私』が存在する並行世界を見付けられていないんだ。

逆に、リニスを通して来た並行世界とこの並行世界の繋がりは強くなっているようだし、思った以上に厄介な事態になってしまっているぞ」

「繋がりが強く……リニスを通してきた世界は、原作に近い並行世界、だったわね。」

過去となったジュエルシード事件や闇の書事件はともかく、これからの事件に関する何らかの影響を受ける可能性が強い、という事になるわね」

「そうだな。」

だから実行前に、副作用は把握出来ていないと言ったんだ」

「実験にリスクは付き物よ。」

それに、分岐した並行世界、リニスがそのまま消えた方の影響はどうなっているのかしら？」

「そっちの影響は、かなり小さくなっているな。」

ほぼ、私が書き込まれた世界との繋がりとなったようだ」

「そう、ならば話は早いわ。」

このまま分岐が終息しないのであれば、書き込まれた並行世界を、こちらにとつて都合がよいように応援すればいいわ。

事前準備が可能なのだから、事件を起こさない事も可能よ」

「並行世界の原作破壊か。」

そうか……そういう事か。介入する時は、フエイト達も連れて行くぞ」

「いなくても、特に支障はないでしょう？」

「あつちの未来までは責任を持ってん。闇の書の時以上に、私達が表に出るわけにはいかないんだ。」

本人がいた方が説得力も差が大きいだろうし、それに……カリムの予言の問題がある」

予言は1年ちよつと前の話だけだ。

現状に当てはめるなら、隔たれた地が並行世界、消えゆく絆がリニス、命を得る旅人がお姉様。前半に関しては、問題なく対応していると判断出来る。

後半を原作介入に当てはめるなら、テスタロッツサ家と高町なのはで地球関係者や機動6課メンバーへの介入が最有力。

カリム・グラシア達で聖王教会介入も可能か。

ジェイル・スカリエツィと戦闘機人達で悪役側介入もあり。

ゼスト・グランガイツやメガヌ・アルピーノ、ナカジマ一家を呼ぶともっと面白そうだけど、忙しそうだし原作関係も教えてないから、これは除外？」

レジラス・ゲイズやオーリス・ゲイズは……色々無理がある。

「予言……ああ、そういうえば聞きに行ったと言っていたわね。」

失敗する予言でないなら、気にする必要も無いわ。

こちらの手札は、ジェイルを含めた事件の関係者存在と、事件のおおよその流れを知っている事よ。それに、多少の準備期間を確保出来るわ。

まずは、情報が少ないレリックかしら。恐らく類似している、こちらの世界のレリックを調査しておくべきよ。

聖王核の模造品らしいのだし、私達の技術と権力と情報、それに無限書庫とジェイルがいるのだから、そう時間もかからないでしょう」「詳細や対処法を知っていれば、介入もしやすいか。前提を崩す事も難しくない。

行くメンバーの都合とタイミングを考えると……」

現在の速度差で計算すると、こちらの夏頃に、あつちの並行世界でStrikerSが始まるくらい。

度々学校を長期間休ませるのもあれだし。

外人設定のフェイトは休む理由を作れても、主とはやての言い訳は作りにくい。

「……タイミングが合えば、夏休みが無難、か？」

「それで話を通しておいた方がいいわ。

だけど、決行までは情報収集に留めて、あまり干渉するべきではないわね」

「情報という武器の価値を落とさないため、か。

物語を崩すだけなら、例えば空港火災を防げば、機動6課が設立されないかもしれんが」

「それでは意味が無いわ。

望ましい目標は、脳味噌の罪を公にする事よ。そのためのシナリオを用意する必要がある以上、前提を崩すのは下策よ」

「まあ、そうなんだが……手出しはそれなりに自重するか」

蛇足：或いはこんな未来も／小話みたいな何か200
6年06月頃

◆◆ 花菖蒲の花見をしました ◆◆

アリサ さあ、今日くらいは訓練とか忘れて楽しみなさい！

エヴァ もっと構って、という本音が見えているぞ？

アリサ ちよ、そんなわけないでしょ!?

エヴァ そんな激しい訓練をしていて、怪我でもしたらと心配で

……

アリサ やめてー!!

はやて 花見と言ったら、お好み焼きと焼きそばは外せへん！

早苗 今川焼とかたこ焼きもおいしいよね。

ツバサ どうして主食系ばかりなのよ！

焼き鳥とか牛串とか焼き魚とかもあるんだから、手伝いな

さいよ！

プレシア コロツケや揚げ餅も用意してあるわよ。

油は確か……

茶々丸 こちらです

フェイト 母さん、私も手伝っていいかな……？

はやて 手伝いは大歓迎や！

ツバサ ちよつと、そつちじゃないでしょ！

アルフ 肉は任せときな。焼き加減は匂いで判るしさ。

天牙 買い物、終わりました。

鹿乃 追加の材料は、この辺に置けばいいのか？

ウーノ そこでいいわ。

恭也 頼まれたものは揃ったが、本当に今から料理を追加する

のか？

亜美 まさか、ここまで偏っているとは思っていませんでしたから。

リニス ええ、やります。野菜が少な過ぎて見ていただけません。どうしてアリシアとフェイトの分くらいしか無いのですか。

ノエル お料理を代わりましょう。

鮫島さんと馬場さんも、もうすぐこちらを手伝える予定ですし。

フアリン 最初の配膳は終わりました！

早苗 ボクはもうちよつとやるよ。

プレシア そう。無理はダメよ？

ツバサ あー、疲れた。

アリサ 1つだけ言わせてもらおうわ。何なのよこの不老や不死の子供軍団！

なのは だよねだよね！

エヴァ 何だ、私は大人の姿の方が良かったのか？

アコノ 最初の切っ掛けは、Death or Cheat死か魔改造の選択。普通は後者を選ぶ。

はやて リインフォースを助けてもらったら、こうなっとつただけや。

フェイト 普通じゃないなら、母さんやお姉ちゃんと一緒に良かったし……

すずか 私は、元から寿命が違うから。

ヴィータ アタシまで槍玉かよ。

アリシア ひとつとじゃないよー？

ルーナ 解ってるですけど、全然実感は無いですよ。

アギト アタシも子供扱いか？

なはと 私、死なない？

セツナ 私もですか？ ええと、そもそも人とは言い難かったで

すし。

ちくわぶ　ワイもか。不老っぽいのは事実やけど、そもそも人ぢやうで？

アリサ　他人事の様な顔をしてるけど、アンタもでしょ！

10年たっても外見が変わらないらしいじゃない！！

チンク　そうらしいが、私達は死ににくいだけで、恐らく不死ではない。

アリサ　外見的に不老ってのは、ほぼ間違いないでしょうが！！

チンク　姉として不本意なのだ。好きでこの姿のままというわけではない。

セイン　（良かった……子供とは思われてない）

千晴　不老不死か……

カイゼ　興味があるのかい？

千晴　ねーよ。私は普通がいいんだ。

カイゼ　女性なら、永遠の若さに憧れそんなものだけだね。

千晴　う……そりゃあ、まあ、そうだけど。

でも、あいつらみたいに10歳前後で、つてのも見ちまうとな。

美由希　やっぱり、中身で勝負しないとね。

カイゼ　逆光源氏計画はどうなんだい？

美由希　中の人がいるんだから、色々知ってるでしょ。

私が育てる必要は無いんじゃない？

カイゼ　……中の人などいない。

トーレ　なかなか賑やかだな。

セイン　本当にいいの？　こんなに騒いで。

シグナム　この国では、花や月を理由とした屋外の食事会という文化があるらしい。

無闇に騒ぐ事は許されませんが、許される範囲で楽しまねば失礼というものだ。

「デイエチ 人に迷惑を掛けない、という匙加減は？」

茶々ゼロ ドーセ貸し切りで人払い済みだ。あんま気にしなくてもいいぜ？

なはと 私、来てる。見られる、大問題。

シグナム 2人は、この世界ではあり得ない姿だからな。

物を壊したり人払いを破ったりしなければ、問題にならない程度に対策してあるそうだ。

アギト あーあ、もうちよつとフルサイズのフレームが安定すればなあ……

ルーナ まだ1週間も維持出来ないですよ……

疲れるですし、回復も時間がかかるです。

シヤマル まあまあ、時間はいっぱいありますから。

シグナム 実質的に家族として生活しているのだ。

書類上の事に、そこまで必死になる必要もあるまい。

リンデイ やつぱり、このお酒は美味しいわね。

年齢制限と一緒に飲める人が少ないのが残念だけれど。

プレシア 日本でやっているのだから、仕方ないわ。

大学生組は構わないような気もするけれど。

リンデイ 司法組織の一員として、法に反する行為を宥める責務があるもの。

魔法を表に出せない分違法な事もしたけれど、守る事が出来るものくらいは、ね。

飲めるのは、大人のエヴァさん、シヤマルさん……シグナムさんも大丈夫かしらね。

プレシア 恭也と忍も成人しているはずよ。

戦闘機人達の設定は何歳だったかしら……？

リンデイ だけど、積極的に飲むタイプはあまり多くないわね。

ジエイル ふむ、私は除外されているようだね。

リンデイ 飲むタイプには見えないもの。

それになんというか、色々と思うところもあるし。

ジエイル 私としては、母と飲む機会があっても良いと思うのだがね。

プレシア その呼び方は止めなさい。

ザファイー む？

アルフ どうしたんだい？

ザファイー 酒の話をしている方から、視線を感じたのだ。

アルフ 人の姿なら、飲めそうな外見だからじゃないかい？

ザファイー なるほど。だが、今は子犬だ。

アルフ この方が気軽だよ。やたら撫でられるだけでさ。

ザファイー それはそれで、複雑なのだが。

ユーノ やあ。

なのは あ、ユーノくん！

アリサ おっそい！

レテイ もうやっているのね。

グレアム やれやれ、少々遅れてしまったか。

マリー 転送ポートでのチェックが、前より厳しくなってますから。

思った以上に時間がかかっちゃいましたね。

クロノ 犯罪者の逃亡や密輸を防止する水際なんだ。多少窮屈なのは仕方ない。

リンディ お疲れ様。本局は落ち着いた？

レテイ 改善はしている、と思いたいわね。

少なくとも、たまの休暇を申請出来る程度にはなったけれど。

ロツテ 美味しそうなお魚の匂い……と、美味しそうなネズミっ子その2がいる。

アリア お魚はともかく、ネズミっ子はやめた方がいいと思うけど。

この集団に平気な顔で混ざれるんだから、絶対変な能力持

ちだ。

アリサ　そこ！ 私まで変人にしないで！

ちくわぶ　それはワイの台詞や。それに、変人とは言つてへんで？

ユーノ　こんな時に仕事の話で悪いんだけど、デバイスを追加してほしいんだけど……

エヴァ　無限書庫の検索用か。

最初の分で足りなくなったなら、少しはマシな司書が増えたか？

ユーノ　増えたのは司書よりも、魔導師じゃない事務員の方が多いけどね。

何とか。一般受付の開始直後は受付もパンク状態だったけど、今は

エヴァ　回るようになってきたなら、良かったじゃないか。

とりあえず20機ほど用意するが、権限は抑えておくからな。

ユーノ　それでも有り難いよ。

リニス　……………

ロツテ　……………

茶々丸　突然ですが、調理場が修羅場です。

アリア　魚の取り合いをしてるだけじゃない？

早苗　そう言いながらこっそり取ろうとするのはいいけど、まだ焼けてないよ。

プレシア　アリシアやフェイトの可愛さは、宝よ。

レテイ　グリフィスも負けていないわ。

リンディ　そうね。クロノは、もうちよつと子供っぽくてもいいと思うのだけれど。

ジエイル　チンクも精神的には大人びてしまっているか。

だが、私にはまだ目覚めていない娘達がいるのだよ。

エヴァ 私はルーナ辺りを愛でておけばいいのか？
グレアム ……リーゼ達では、会話に参加するにも弱いかな。

◆◆ お仕事もしています ◆◆

クロノ 現状の資料は先ほど送っておいた。

簡単に纏めると、陸、海、聖王教会の関係は改善されつつあるという事になる。

エヴァ 無駄な壁が無くなると、こうもあっさり変わるとはな……

クロノ 前最高評議会の横槍は、予想以上に広がっていた。

まさか、陸と海の不和を演出してまで、陸の捜査力を削っていたなんて……

エヴァ 大きな組織や実力のある犯罪者なら、複数の次元世界で活動する事もある。

その対策に海の戦力があまり使われていない事に気付いていなかったのも問題だ。

クロノ 耳が痛い話だ。

陸は地上及び航空魔導師が活動可能な高度程度まで。

海は宇宙空間、次元空間、管理外世界。複数の次元世界に
関係する大規模案件。

聖王教会は主に教会近辺や貧困層が多い地区の治安安定
化。

暗黙的でも管轄が決まっていたのは確かだし、分担として
間違っではないんだが。

エヴァ 役目が分かれているからこそ、協力も必要なんだがな。

クロノ 全くだ。それと、各地で政治家に干渉していた魔導師協
会の実態も浮き彫りになった。

魔導師の優遇やらについて、かなり強引な手段も取って
たようだ。

エヴァ やれやれ、それも脳味噌の差し金か。

クロノ 最近はそうでもなかったようだが、創設された頃はかなり強い関係があったらしい。

ともかく、合同捜査等で相互理解や連帯感の様なものが生まれているのは確かだ。

横槍も減っているし、当面はこのまま融和を図る方向で進めるそうだ。

エヴァ 人や予算関連に手が回るのは、いつになるだろうな。

クロノ 人の行き来はあるし、その分くらいは陸の負担も軽減されているはずだ。

それに、無限書庫の情報は有効だが、活用出来るだけの充分な人員がいない。

無限書庫の司書増員も含め、人や予算の配分は優先課題と認識されている。

融通もし始めているが、落ち着くのはもう少し先だ。調整が難しすぎる。

エヴァ だろうな。

まあ、あれだ。ユーノを潰すなよ。

クロノ 解っている。僕だって検索用のデバイスを渡されているんだ。

一般の分はともかく、自分の分まで任せきりにはしない。

クーネ とりあえず、レリッククを入手する事に成功しました。

当面はこれの解析ですね。

ジェイル 見事な早さだ。流石はアルハザードの遺産といったところか。

クーネ いえいえ、エヴァちゃんやチャチャちゃんの力が殆どですよ。

私は無限書庫の情報を使って、現地調査をしただけですからね。

資料の追加はありませんから、今からは現物の解析ですね。

以前にも解析した事はあるのでしょうか？

ジェイル 利用法を確立出来る程ではなかったがね。

それにしても、実に楽しみだ。

まさかロストログアの研究を、これほど大手を振って行えるとは。

クーネ 立場的に手法が限られますが、解析は正式な依頼ですからね。

こんな環境も、良いものでしょう？

マリー 身体強化による大人モード、幻影も駆使するイミテーションモード。

それに、ブラスタースピットですか。ふふ、ふふふ……

プレシア ええ。あまり期間は無いけれど、協力してもらえるかしら？

マリー もちろん！ ああ、こんなに面白そうな技術が……素材が……！

シルフィ 身体強化はバルディッシュと調整したデータが残ってるからね。

デバイスの改造無しでも使えるよう、ミッド式での改良に協力させてもらうよ。

プレシア 正式な依頼になるから、権限と節度に留意しつつ、全力で取り組んでいいわ。

セツナ 夕風の貸し出しはいいですけど、大丈夫でしょうか……？

シルフィ ブラスタースピットの参考にする為に、術式構造を調査するだけよ。

大丈夫、痛くしないから！

セツナ え、ええと……

◆◆ 個人的なお仕事もしています ◆◆

エヴァ はは、ははは……

チャチャ 行使結果解析。光学計測及び簡易チエツクによる誤差、想定範囲内。

チャチャ 大気成分、異常なし。現在の地球より清浄である事を確認。

チャチャ 生命反応、想定通り。野生動物の存在を確認。人類の存在確認出来る。

チャチャ 気温、現在の地球より僅かに低めと判断。

チャチャ 地形は人の手が入った部分も継承。概ね想定通りの状態。

チャチャ 公転軌道は別荘の惑星の反対側、誤差問題無し。

チャチャ 約300年前の地球のコピー生成、成功と判断。

エヴァ ははは……はあ、やはり惑星の生成も呆気なく成功か。

というか、同じ顔を大量に出すな。違和感しかないぞ。

チャチャ 野次馬、野次馬。

チャチャ お姉様が順調に神だと証明していると聞いて。

チャチャ こんな餌には全力で釣られくまー。

エヴァ ……全く。

というか、これをカバーするだけの自動人形の生産にどれだけかかる事やら。

チャチャ 従者大量生産でもある程度カバー可能。

チャチャ 親愛属性だろうが、お姉様の神格化は不可避。

チャチャ 魂の貯蔵は充分だ。

チャチャ 従者や眷属相当の存在の直接生成も、目途がついてる。

エヴァ やはり、そっちに走るのか。自動人形等とか濁した言い方をしておって。

チャチャ 地球産の動植物を育成するなら、生態系が出来上がってる別荘よりも適してる。

チャチャ 地球ではもうすぐ危険水準になる食材もある。ウナギとか。

チャチャ 田畑も、既存のものを利用可能なうちに対処を推奨。

チャチャ お姉様急いで。

エヴァ ……全く、お前達は。

エヴァ どうして、こんなのが出来たんだろうな……

アルク お母様、不満？

チャチャ どう見てもアーパー吸血鬼風（吸血衝動無し、能力自重無し）です。

チャチャ 長髪で紅月な感じの。

チャチャ 本当にけしからんおつ……じゃない、真祖の姫の名に相応しいです。

チャチャ 生まれながらの眷属にして、お姉様の代行者。

別荘チタマの統治者としての活躍を期待。

エヴァ ちょっと待て。私を母と呼ぶのも問題だが、何故新しい別荘がそんな名前なんだ。

アルク 地球では紛らわしいし、別の名を付けようという事になつたみたいよ。

別荘本星の住民による投票をしたら、この名になつたって聞いているわ。

チャチャ 別荘の図書館に、不調博士が置いてあったのが敗因。たぶん。

エヴァ ……それが、こんなところに影響するののか。

◆◆ 人間関係も色々あります ◆◆

アコノ 足りないものは、色々あると思う。情熱色気羞恥心おっぱいの大きさ。

だけど何より、スキンシップが足りない。

エヴァ どの兄貴の真似だというか、足りないのはそれなのか？

アコノ 言い換えると、エヴァ分が不足している。

不足すると、疲労や集中力・思考力の低下等の症状が現れ

る。

エヴァ どこぞのシユークリームじゃあるまいし。

アコノ ふれたい。さわっても、いいですか……？

エヴァ えっと……いきなりキスとかじゃなければ、そこまで確認しなくてもいいぞ？

というか、今度は駄肉な魔王なのか……

忍 そういえば、無償期間は来年の春までだったわね。

その後はどうするつもり？

鹿乃 え？ あ、そ、そうか。高校卒業まで、だったんだな。

どうすれば……

忍 進路も影響するでしょうし、早目に結論を出した方がいいいわ。

もちろん最初の話の通り、止平はいてもらうけれど。

鹿乃 だよな。

……どうすりやいいんだ……

はやて すずかちゃんも、不老不死になってもうたんよなあ……

すずか うん、そうだよ。駄目だった？

はやて エヴァさん曰く、すずかちゃんが一番大きくなるはずだったらしいよ。

皆さんの豊胸に協力すべく揉んどるのに……意味がなく

なってしまう。

すずか でも、それって口実だよね？

はやて え、そんな事は……

すずか 口実、だよね？

はやて ……はい。

美由希 ところでさ、家族が誰かと付き合いたいとか言い始めた

ら、どうする？

忍 基本的には祝福するわよ。二股とか明らかに不誠実な

相手じゃないなら。

恭也 ……相手次第、だ。

エヴァ 何故私を見る？

美由希 中の人と外見の、どっちの意見が強いのかな、って。

とりあえずアコノちゃんだった場合は？

エヴァ アコノの場合は、私の存在に惹かれた馬鹿が集ってきかねんからな。

少なくとも、私を殺せるだけの力を持つ相手以外は認めんぞ。

忍 つまり、嫁に出す気は無いつて事よね。

エヴァ アコノが曙天の主である以上、私とアコノは離れる事が出来ん。

これが前提となるから、私の力を求めず、恐れもしない理由が必要になる。

具体的には、私抜きのアコノを求める一途さと、私を排除出来る実力だな。

当然アコノも望む事が前提だが、条件に何か問題があるのか？

恭也 無いだろう。納得できる理由だな。

美由希 ……これも過保護って言うのかな？

忍 男性的な判断ではあるかもしれないわね。

ちくわぶ この辺からの刺激は、どうやった？

チャチャ 悪くないけど、さっきの方が良い感じ。もう一度やってみる？

ちくわぶ もうちよつと工夫してみたいところやな。

エヴァ 何を調べているんだ？
チャチャ 性交渉時の神経及び脳の反応について。

私達やお姉様には未実装、同様にリインフォースにも実装されてはいはず。

人を元にした戦闘機人や守護騎士は反応がある可能性が

ある。

ちくわぶ で、サンプルとしてワイ等のデータも取つとるわけや。

エヴァ ガチか。ガチなんだな。

……気付かなければよかつた。とりあえず、強制はするな

よ。

蛇足：StrikerSのはずだった何か 01

世間は夏休みに突入済み。
もうすぐ8月になる頃。

別荘に、大勢の関係者が集まっている。

「さて、最終確認を行うぞ。

今回行う並行世界への介入。介入可能となる時間は、StrikerSの開始後の予定だ。要するに機動6課は設立済み、フォワード達も揃った状況となる。

目的は、この世界に対する“原作相当の並行世界”からの影響を軽減する事。こちらの状況となるべく合わせる為、腐れ脳味噌の断罪を最優先に、レジアスの死亡回避、スカリエツティ及び一部戦闘機人の非協力化の回避を含めた3点を目標とする。

参加者は、高町家から高町なのは、高町恭也、高町美由希。

親衛隊からスカリエツティ、ウーノ、トーレ、ドゥーエ、クアットロ。

近衛騎士団からカリム、シャツハ。

テスタロッサ家は居候も含めて全員だ。

留守は、リンデイ、シルフィに任せる。アースラや高町にいるチャチャを残すし、必要があれば呼んでくれても構わないが、連絡が付かなくなる等の大事が発生した場合は、基本的にリンデイを中心に対応を頼む」

「やっぱり、非常時の対処はチャチャさんを中心とした方が、立場的にやりやすいんじゃないかしら？」

私はあくまでも親衛隊の隊長だから、近衛騎士団にまで口を出すわけにはいかないもの」

「本当に最悪の場合は、存在維持を私に依存するチャチャが活動出来なくなる可能性もある。

だから、私の関係者が壊滅しても生き残れるリンデイの方が適任だ。同じ理由で、別荘も使わない方がいいだろうな」

「そういう事ね。解ったわ」

お姉様が想定する最悪の事態は、並行世界の断絶。
繋がりが消え、行き来が出来なくなる可能性は、今のところ否定し
切るだけの根拠が無い。

それなのに参加者がこんなにいる事が意外。

「なのはやカリム達は、本当にいいのか？」

「うん、大丈夫！」

「ヴィヴィオさんが同行するのに、黙って見ているわけにはまいりま
せん」

「……なのは。すずかやフェイトが参加するからだろうとは思うが、
待ちぼうけのアリサの事を考えてもいいと思うぞ」

「でも、大変な目に遭う私を助けられるんだよね？」

困ってる人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら、迷っ
ちやいけない、って」

「あー……ここでそれが出るのか。」

内容には賛同するが、恭也、本当にいいのか？」

「荒事を含む可能性が高い以上、なのはだけに任せられないからな。
それに、向こうのなのはと話をしたい気持ちもある。

色々と頼り切りになるのは心苦しいが」

「やれやれ、参加者に変更は無しか。」

準備が出来次第、並行世界に接続するぞ。念のためリンデイ達は日
本かアースラに戻っていてくれ」



「さて、移動までは無事に終わったわけだが……」

リンデイ・ハラオウン達を日本に送り届けた後。

リニスを手連れて来た痕跡を使ってお姉様が並行世界線を移動して、
別荘をミッドチルダと接続して時間軸を切り替えてと、色々ややくし
い手順はあったけど。

お姉様達は現在、別荘で状況を確認中。

「山岳リニアレールから、レリックを回収しているところか。」

もう少し前の時間に繋ぎたかったんだが、準備に時間をかけすぎたか」

空中のモニタに映ってるのは、今のミッドチルダの風景。

具体的には、どうしてこんなところに建造したのか理解に苦しむ、崖の途中の僅かな空間を利用した鉄道もどき、只今停車中。

「フリード」は大きいし、ヘリに接続するウイングロードの上を「スバル・ナカジマ」と「ティアナ・ランスター」が歩いているのが見える。「手遅れではないのだ、特に問題は無いだろう。」

あの残骸はⅢ型と言ったか……どうもAMFに頼り過ぎの様だ。自爆はロマンだという点に異論は無いがね」

そして、ジェイル・スカリエツティがおかしなことを言ってる。

「いや、それは駄目だろう」

「隠したい部分を的確に破壊し、証拠を隠滅するには有効なのだよ。」

自身の痕跡を誇示する様に残す点を考えると、こちらの私はなかなかに顕示欲も旺盛なようだがね」

「……まあいい、程々にな。」

こつちのスカの様子は？」

空中モニター、もう1枚展開。

丁度フフフフと笑ってる場面。プロジェクトFの残滓とかいう言葉は、終わってる。

聞かれても、既に原Strikers作を見せた後だから問題無いんだけど。

「あー、とりあえず原作通りというわけだな。」

スカへの介入は、予定通り変態ロリコン主導でいいんだな？」

「ええ、その方向で構いませんよ。」

ですが、機動6課へ挨拶に行く際は同行しても良いでしょうか？」

「来ても役目は無いぞ。何か用でもあるのか？」

「キャラロちゃ「失せろ変態ロリコン！」ぶげらっ!？」

変態が別荘から蹴り出された。

実態は、ミッドチルダの山中への強制転移。

死なないし魔力が漏れる様なミスもしてないから、大丈夫。問題無い。

「ふう……さて、とりあえず、介入タイミングを決めるべきだな。
今はシグナムが留守のようだし、フェイトがスカリエツティの情報に気付くのは……明日の夜か？」

当面は情報収集に留めて、明日の昼にでも守護騎士達を留めておくよう連絡しておくか」

「私達の出番は、夜？」

「会話を確認した上でだが、夜の緊急会議の直前位に尋ねるのがいいだろう。」

はやてやなのは達も、そのつもりで用意していてくれ」
「成長した私かあ……ドキドキや」



というわけで、翌日の夜。

【八神シグナム】と【ヴァイス・グランセニック】の会話は確認済み。
情報提供をしたいから「地球組」をなるべく隊舎に残すよう伝言を頼み。

【八神はやて】、【高町なのは】、【リインフォースⅡ】^{ツヴァイ}、守護騎士全員が少なくとも近くにいる事を確認し、【フェイト・T・ハラオウン】の緊急会議の要請を【ナカジマ親子】と食事中的【八神はやて】に行つた事も確認した上で。

魔力量をAランク相当に偽装した主が1人で、機動6課に表から訪問。
問。

怪しまれながらも、到着した【フェイト・T・ハラオウン】を含む7人と1頭と対面。

「さて、随分と思わせぶりなキーワード付きの伝言やったけど、自己紹介からやな。」

先ずは、名前と、どこの人かくらいは教えてな」

【八神はやて】の声は落ち着いてるけど、目は真剣。

伝言に残したキーワードは、御神流小太刀二刀流、プロジェクトF、夜天の書、レリック」で、レリック及び関係者に関する情報等

を提供する用意がある」という意図を伝えてある。

「名前は、小野アコノを名乗っておく。養子になったから今の名前は違うけど、その名前は後で教える。所属についても同様。」

これは、前提となる状況を把握してもらってからでなければ、信じてもらえないから。

少なくとも犯罪者側の関係者ではない事は保証する」

「そか。私らの名前は知っとるみたいやけど、自己紹介はいるか？」

「いらない。先ずは信用してもらうために、私達の目的から説明する。」

私達の目的は、3つ。

1つ目、レリック等の事件の、真の黒幕を断罪する事。

2つ目、断罪の為に、事件の証人と成り得る、ある人物を改心させる事。

3つ目、同じく、事件の証人と成り得る、ある人物の死亡を防ぎ改心させる事。

これは、機動6課の役目と矛盾しない内容だと判断している」

主が、1本ずつ指を立てながら説明。

少なくとも、表向きのレリック関連、裏側の予言関連共に矛盾しない。

「確かに、話を聞くだけならそうや。」

けど、その目的を設定した動機が理解出来へんよ」

「それが、さつき言った『前提となる状況』に関連する。」

はやては『並行世界』を知ってる？」

「本の虫やったから、概念くらいは一応な。実在は証明されてへんのも知っとる。」

けど、ここで言うって事は、並行世界が関係しとるって事やね？」

「そう。あとは、並行世界間は色々な形で影響し合ってる事を知ってほしい。」

つまり、この並行世界の出来事が、私の並行世界の出来事に影響している、という事」

「うーん……こつちで黒幕を断罪したり、証人を保護したりする意味は、どこまであるん？」

さっきの言い方やと、この世界も、別の世界の影響を受けとるわけやろ?」

「私の並行世界では、黒幕は断罪済み。証人が改心し、死亡する可能性がある人物は政界の重要人物として頑張っている。」

「だけど、この並行世界は、黒幕が人知れず殺され、証人は口を閉ざし、ある人物も殺される並行世界の影響を受けている。」

心配しているのは、私の並行世界での揺り戻しや、別の理由による状況の再現」

「やつぱり、まだちよつと納得出来へんな。」

「この世界に手を出さなあかん理由は、何や?」

うん、「八神はやて」は落ち着いて考えられてる。」

「この並行世界である必要性、という重要な要素が抜けてる点に気付いている。」

「……他の人物も、何とか話を理解しようとしてるみたいだから、とりあえず放置。」

「フォローが必要ななら、後ですれば良さそう。」

「私の並行世界と、この並行世界が、並行世界に関する調査中に強い関係を持ってしまったから。」

「これを解除する方法は、今の所不明。それなら、この並行世界の状況を変え、他の並行世界からの影響を抑える方が現実的だと判断した」

「なるほどなあ。まあ、言いたい事は大分理解出来たと思う。」

「けど、こつちでは証明すらされとらん並行世界を移動して、やけどこつちと対応する人がいるってことや。」

「荒唐無稽で、聞いただけで納得出来るような話ではないって事は、解ってもらえるやろか?」

「もちろん。だから、今から証明する。」

「エヴァ、来て」

お姉様が、書の姿で転移。

主のすぐ横で、静かに待機。

「それはっ!?!」

「夜天の書に似ているが……」

思わず、と言った感じで、「八神ヴィータ」と「八神シグナム」の声が漏れた。

色が違うだけで、外見は確かに似てる。

「エヴァ、実体化を」

主の声に合わせて、お姉様が少女モードに。今は、大人モードになる必要も無いし。

その変化を見た機動6課の人達は、いい感じに驚いてる。

「ふむ、声も出ないか。はやての真似ではないが、先ずは自己紹介から始めるか。」

私はエヴァンジュ、曙天の指令書の管制人格だ。

解りやすく言えば夜天の魔道書の妹機、つまりはリインフォースの妹だな。この世界には私に相当する存在が無いようだが」

「はあ!？」

お姉様の言葉に、大きな驚きの声が返ってきた。

【ザフィーラ】までも、口がぽかんと開いてる。

「もつとも、これも与太話と思われても仕方のない内容だ。」

そこで、もつと話が早い者を呼ぶぞ」

そして、床に煌めくベルカ式の魔法陣。アルハザード式を見せる必要は無いし。

そこに現れるのは、こっちははやて。

機動6課の人達の目が更に大きくなってる。

「初めまして、と言うべきやろか。こっち側のはやてです。」

……けど、未来の私! 何で自分の胸を大きくせんかったん!? 人様の胸ばかり揉んどる場合や無いやろ!!」

「な!?! し、失礼やな!!」

着痩せするだけで数字はなのはちゃんよりもちよつとあるし、フェイトちゃんにも大きくは負けてへん!!」

「ふえ!?!」

「はやて、それは大きな声で言う事じゃないんじゃないかな」

「成長しても見た目には希望が無いって見せられとる私の身にもなっ

てや！」

「希望はまだ捨ててへん！　いつか目にも見せたる!!」

そして始まる、2人の「八神はやて」によるキャットファイトみたいな何か。

【高町なのは】が地味にダメージを受けてるのは、とりあえず放置しとこう。【フェイト・T・ハラオウン】も、軽く注意して苦笑いしてるだけだし。

「ま、こっちの私は成長せんのやけどな。いつまでも待つとるから、楽しみにしとるよ。」

「ん？　成長せんって何でや？」

「不思議やと思わへん？　私の見た目と、行動。あつてへんところ無いか？」

腰に手を当て、えっへんと胸を張るはやて。

その姿には、冷静になれば気付けるはずの、大きな違いがある。

「えっと、見た目は初めて会った頃のはやてちゃんと同じくらい……かな？」

【高町なのは】の見立ては、とりあえず正解。

「だけど、あの頃のはやては歩けなかったはずだから……」

【フェイト・T・ハラオウン】の記憶も、正解。

つまり。

「ええと、確認や。そっちの私は何歳で、何があつたんや？」

「ふふん、なんと驚きの11歳、こんなナリで小学5年生や！　4年生にヴィータがおるし、普段は魔法でちよつとおつきくなつとるから、学年最小で目立つとるわけやないけどな」

「アタシまで小学生やってんのかよ……」

【八神ヴィータ】の頬が引き攣ってる。

ランドセル姿のヴィータも可愛いのに。

「それで、何があつたか言うとや。おいで、私の騎士たち」

有無を言わさぬ、召喚魔法。

現れるのはもちろん、ラインフォース、ルーナ、シグナム、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラ、ナハトヴァールの7人。

同時に、夜天の魔道書もはやての手元に登場。

「というわけで、こっちはリインフォースが生きてるし、夜天の魔道書もこの通りや。」

この子が治療に成功したなはとちゃん……ナハトヴァールとか防衛プログラムとか言った方が解りやすいか？」

「……リイン、フォース……」

はやてが説明してるけど、「八神はやて」が泣きそう。「高町なのは」と「フェイト・T・ハラオウン」も目元が潤んでるし。

【八神シグナム】と【八神ザフィーラ】の2人だけが、ナハトヴァールを警戒してるのは流石。

現れた「もう1人の自分」も気になってるみたいだけど。

「私が旅立つ世界では、その様なお姿になられるのですね」

その様子を見るリインフォースは、感慨深そう。

アニメとしての原作は見てるけど、実際に見るのはやっぱり印象が違う。

「……そっか、そうやな。」

リインフォースやけど、並行世界やから、私のリインフォースや無い。そういう事やね」

「はい。ですから、どの様にお呼びすればよいか……」

「はやてでええよ。本当の主や無いわけやし」

「名前呼び捨ては私が先やから、さん付けあたりが無難やと思う」
確かに、呼び方はちよつと困る。

【八神はやて】の提案を一蹴したはやての案、さん付け辺りが、きつと無難。

この後の展開を考えても。

「さてと、これで並行世界については理解してもらえたと判断していいな？」

とりあえず切りが良くなったから、お姉様が乱入。

いい加減、話を進めたいし。

「夜天の書やらを偽造出来るとは思えへんし、まあ、一応は。

それで、情報を提供するって事やけど……」

【八神はやて】が、ちらつと【フェイト・T・ハラオウン】の方を見た。

緊急会議の為の情報、つまり、【ジエイル・スカリエツティ】が関わっているという話を知ってるのは、この場には他にいない。

「そうだな、とりあえず人の情報からいくか。」

実行犯の中心人物1人、協力者4人、真犯人3人だが、誰からがいい?。」

「具体的などこまで把握しとるって事やな。とりあえず、今言った順番……で、ええよ」

ちら、と視線と念話で相談した上で、話として盛り上がりそうな順で決定。

つまり、1人目の情報は。

「実行犯の中心人物は、ジエイル・スカリエツティだ。」

手駒として、戦闘機人12人と、大量のガジェット・ドローンを使っている。

ガジェットの動力源に、ジュエルシードが使われていたりもするな」

「どうしてそれを!?!」

お姉様の言葉に、【フェイト・T・ハラオウン】が盛大に反応した。腹芸が苦手なところは変わらないらしい。

「って事は、フェイトちゃんはそれを掴んだとこ、って事やね?。」

「うん。それで、緊急の会議をしたかったんだ。」

昨日破壊したガジェット・ドローンの写真に、ジエイル・スカリエツティの名前が刻まれたプレートとジュエルシードが写ってたから」

「つまり、この情報は最新のと一致しとるわけや。」

次も、教えてくれるか?。」

「次は、協力者だな。」

まず、現場側の協力者として、ゼスト・グランガイツ、ルーテシア・アルピーノ、アギトの3人がいる。

ゼストは殉職した局員、ルーテシアは殉職した局員の娘、アギトは古代ベルカのユニゾンデバイスだ」

「死者の蘇生……は、ありえへんな。殉職を偽装されたんか？」

「【八神はやて】の推測は、ある意味で正しく、ある意味で間違ってる。ゼストは、瀕死の状態を強引に維持している状態の可能性が高い。レリックを埋め込み、生物兵器のような改造を受けているからな。」

ルーテシアは、母親を目覚めさせるにはレリックが必要だと洗脳されたような状態で、精神に干渉する魔法も仕込まれている。母親はメガン・アルピーノで、ゼストの部下だ。ちなみに、母親は地道に治療すれば普通に目覚めるぞ。

アギトは、違法研究所から助けたゼストに恩を感じているだけで、スカリエツティの協力者と言うには微妙だな」

「……はやてちゃん。」

ゼスト・グランガイツとメガン・アルピーノの2人は、8年前の死亡が記録されているわ。だけど……死体は確認されてないみたいなの。

それに、娘のルーテシア・アルピーノは所在不明、って……」

「今の情報を否定する材料は無い、という事か」

ひっそりと調べてたらしい【八神シャマル】の、ナイスアシスト。

【八神シグナム】の結論は、当然。

「そして、権力的、資金的な援助をしているのが、レジアス・ゲイズだ。あれほど有名な犯罪者が、逮捕歴も無いまま長く活動を続けていられる理由の一部はこれだな」

「……大物もええとこや。」

けど、証拠はあらへんな」

「そうだが、ここまでは私達の世界ではそれなりに裁かれたりした上で、今も元気な連中だ。」

つまり、私達が助けたいと考えている人物だ。ああ、勘違いしないでほしいが、罪をもみ消せとか言っているわけじゃない。むしろ、罪を暴いた上で協力させる方向だ。

特にレジアスは、このままだと死ぬ確率が高いぞ」

「うーん……いまいちピンときいへんけど……」

「真犯人の罪を暴くには必要な人物だ、という事だ。」

何しろ、相手は最高評議会。時空管理局の上層部だからな」

「何やて!？」

「八神はやて」達、ぶっちゃければStrikerS組全員、驚愕の表情。

馬鹿な、とか、どうして、とか言ってる。

「最高評議会がアルハザードからの流出物で作った人物が、ジエイル・スカリエツティ。」

当然の様に最高評議会はスカリエツティを手駒として扱っているんだが、その補佐役として動かされているのがレジアスだ。

私は最高評議会の罪を暴き、きちんと裁きを受けさせたいんだ」

蛇足：StrikerSのはずだった何か 02

「んー、まあ、何をやりたいかは理解したと思う。

けど、現状では証拠があらへんし、はいそうですかと簡単に納得出来る内容でもない。

それは理解してもらってええか？」

【八神はやて】は、やっぱり安易な判断を避けた。

これは予想通りの流れ。

「当然だ。最初から全て信じられるような内容ではない事は自覚がある。

だが、レリックを追う事と並行して最高評議会の調査をするのは大変だろう。だから、戦力も提供しよう」

「えーと、副隊長陣の影武者、って理解でええの？」

「それだけじゃないぞ。

とりあえず、2人だな」

次にお姉様と呼ぶのは。

「ちっちゃい、私……？」

「まさか、プロジェクトF．A．T．E……」

フェイトと、高町なのは。

外見的には、10歳と11歳。高町なのはがちよつとだけ成長している。

「私達の世界のお前達で、間違いなく本人だぞ。

さて、外見のイメージは見ての通りだ。調整をしてしまうといい」

「うん、お姉ちゃん。バルディッシュ」

『Yes, sir. Optimization start.』

「う、うん。レイジングハート、お願いっ」

『All right, my master.』

お姉様に言われて、素直に強化魔法の最終調整を開始するフェイトと高町なのは。

でも、フェイトの言葉に、【フェイト・T・ハラオウン】が違和感を持ったらしい。

「お姉ちゃん……?」

「うん、お姉ちゃんなんだ。戸籍上は、だけど」

「そっか、そうなんだ。という事は、アコノも家族なのかな。」

今の名前を言わなかったのは、ハラオウンの名前を出したくなかったから?」

「前半はあつてるけど、後半は……違う」

何というか、2人の「フェイト」がギリギリなラインで会話してる。

別に秘密にする必要も無いし、見せちゃう? 見せちゃう?

「フェイトは、今でもフェイト・テストロッサだ。」

ちなみに、家族にはこんな連中もいるぞ」

追加召喚、ある意味で本来のテストロッサ家の人達。」

具体的には、プレシア、アリシア、アルフ、リニスの4人。

「母、さん……それに、リニスと……」

「アリシアだよっ!」

おねえちゃんとよべく!!」

「お姉ちゃん、は無理があると思うよ。」

今は小学2年生なんだから」

「そうじゃないでしょう。私達が死んだ世界のフェイトなのだから」

「うー、どっちのフェイトよりも、わたしの方が年上なのにー」

「駄目だよアリシア、死んでる間の26年まで足しちゃ」

「それなら、わたしの5年を足しちゃだめー! だからフェイトは6

さー!」

啞然としてる「フェイト・T・ハラオウン」達の前で繰り広げられる、コメディ的なやり取り。

会話が噛み合ってるのか、噛み合っていないのかすら微妙な感じで。

「えっと……アリ、シア……?」

「おねえちゃん!」

その上、おずおずと声を掛けた「フェイト・T・ハラオウン」に、アリシアが力強く要求してるし。

びし、って指までさして。

「えつと、じゃあ……お姉ちゃん。」

昔の事って、どれくらい知ってるのかな？」

「んー、たぶん、ぜんぶ？」

えつと、わたしがしんできたこととか、フェイトがわたしのクローンだとか、だよな。

わたしを生きかえらせてくれたのって、エヴァおねえちゃんなんだよっー！」

「私の病気を治し、若返らせたのもエヴァンジュよ」

「消滅寸前の私を助けてくれたのも、そうですよ。」

私はこの平行世界の出身ですが、次元空間に身を投げた直後に回収され、今ではアリシアの使い魔です」

「加えて言えば、私の闇を消し去ってくれたのもエヴァンジュだ。」

私達がこうしていられるのは、全てエヴァンジュのおかげだと言っていい」

「そう、なんだ……」

アリシアに加え、プレシア、リニス、リインフォースの援護。

この並行世界ではいなくなった人物の証言は、確実にお姉様をヨイショしてる。

「まあ、そういうわけだ。」

さてと、そろそろ準備が出来たか？」

「うん。レイジングハート！」

『All right. Imitation mode stand by ready.』

「バルディツシュ、お願い」

『Yes, sir. Boost start』

「ルーナ、やるよー！」

「はいです、はやてちゃん！」

3人が大人モードで、StrikerS版相当に。

デバイスやバリアジャケットも、一応それっぽい感じに調整済み。

後は微調整で何とかなる、といいな。

「な、なのは、ちっちゃい私がおつきい私で、昔のなのはが今のなのは

で」

「フェイトちゃん、落ち着いて」

「隊長陣まで影武者を使える、ちゅう事やね……」

この世界の3人娘は、いい感じに混乱……してない。

パニックになつてるのは、「フェイト・T・ハラオウン」だけ。ちびだぬきと不屈は、精神的になかなか強靱らしい。

「当然リミッターなんぞ無いから、上手く誤魔化せるなら、お前達のリミッターを解除せずにフルドライブ相当の魔法を使う事も可能だろう。」

もちろん経験が浅い分、実力的に未熟な部分もあるだろうから、リミッターは誤魔化す為のいい材料なんだが」

「はあ……こんな情報と戦力が揃うんやったら、機動6課を立ち上げた意味がのうなつてまうなあ」

お姉様はドヤ顔だけど、「八神はやて」は頭を押さえてる。

未だにあわあわしてる「フェイト・T・ハラオウン」を落ち着かせようとしてる「高町なのは」を放置してるし、実は現実逃避に忙しいらしい。

「私達が表に出るわけにはいかんから、隠れ蓑として必要だぞ」

「理屈は解るけど、納得は出来へん！」

けど、お互い様ではあるみたいやし、理解した以上は利用するよ。

全面的な信用はまだ難しいけどな。

最初にすべきは、何や？」

「ゼスト、ルーテシア、アギトの保護。」

次に、ゼストを連れてレジアスの説得だな」

「当てはあるんか？」

「近いうちに、ホテル警備の任務がある。その時に、少なくともゼストとルーテシアは近くに来るから、そこで接触出来るだろう。」

但し、お前達がモニターするのはいいが、捕らえるなら私達がやる方がいい。管理局として捕らえてしまうと、レジアスに会わせるのが難しくなるからな。

隊長陣はホテルの中で足止めされるから、現場管制はシャマルが担

当する事になる。そのついでと言ってはなんだが、情報の確認もしてくれ」

「ホテルが襲われる、ちゅう事やね?」

「大量のガジェットが挨拶に来る。」

そうそう、放置すると自分を凡人と卑下しているティアナが無茶をして、ミスショットで落ち込む事になる。先に手を打つなり、ケアを考慮しておくなりしておいた方がいい」

「そっか……うん、手順としては問題無さそうや。」

信用されん事を見越した方法を考えてたんやね?」

「いくらこっちの3人がいると言っても、いきなり全面的な信用を得られると思っていないからな。」

あと、状況を理解してからでいいから、聖王教会への繋ぎも頼みたい。理由は、これだ」

追加召喚、カリム・グラシア。

だいぶ若いと言うか幼さも残ってるけど、本人だと理解出来る外見。

「このタイミングで呼ばれるのでしたら、強化は出来なくとも、外見年齢を変える練習くらいはしておいた方が良かったかもしれないね」
「必要以上に年上だと思われたいなら構わんが。」

さて、現時点でカリムの能力は……フェイトやなのはは知らないんだっただか?」

「そうやね、裏側もまだ話してへんし。」

やけど、その口ぶりから考えると、その内容やらも把握しとるわけやね?」

「そうだな。このメンバーなら問題ないだろうし、私達なりの解釈を伝えてしまうか?」

この辺のわだかまりも解消してしまった方が、何をすべきか判断しやすいだろう。情報の齟齬があるかも確認出来るだろうしな」

「……そうやね、近いうちに話すつもりはあったし、お願いや」

「よし。カリムが行使できる魔法に、未来の情報を詩文形式で記述するものがある。要はレアスキルと呼ばれる代物だな。」

はやても聞いているだろう、一番問題となる予言がこれだ。

古い結晶と無限の欲望が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる」

「それって、まさか……」

「多分、なのはちゃんの思った通りや。

私達はこれを、ロストロギアの事件を発端とした管理局崩壊と解釈してる。これもあつて、伝説の3提督も非公式ながら機動6課への協力を約束してくれてるんよ」

「これに私達が持つ情報を加えろとだ。

ロストロギアであるレリックを、無限の欲望のコードネームを持つスカリエッティが手にし。

聖遺物の血痕から作られたオリヴィエのクローンを利用して、聖王のゆりかごが起動する。

戦闘機人やガジェット・ドローンの襲撃で、地上本部は壊滅しレジアスも殺されて。

最高評議会を闇に葬られ、ミッドチルダを人質に取られた管理局は役目を全う出来なくなる。

……となるわけだ」

「ありえん、とは言えへんな……」

「これがどの程度の真実を元に行っているかだが……」

まあ、見てもらった方が早いな」

更に召喚、ヴィヴィオとジェイル・スカリエッティ。

唯でさえ動揺してた「フエイト・T・ハラオウン」が、完全に止まった。

「こちらの世界の方々とは、始めてですね。

私はヴィヴィオ・テスタロッサ。オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの遺伝子と記憶を元に作られたクローンです」

「私についての説明は、不要なようだね。

おっと、いきなり逮捕は止めたまえ。私は協力者としてここにいる

のだよ」

「……衝撃的過ぎや。」

聖王様と犯罪者が並んで登場って、どういう事や?」

こつちの「八神はやて」は、聖王教会やベルカ関連の情報に触れる事が多かったはず。

そこで祀られてる人物と、犯罪者として追うべき人物。一緒に登場するとは、普通は考えない。

「オリヴィエとしての遺伝子と記憶は持っていますが、聖王という地位は持っていませんよ」

「冤罪は止めてくれたまえ。今の私は管理局の局員であり、新しくなった最高評議会の直轄で研究や開発を行う立場なのだよ」

こつちの2人としては、そんなの関係ないと言わんばかりだけど。崇められてるわけでも、追われてるわけでもないから。

「こつちのスカリエッティは、旧最高評議会の断罪に関して色々協力してくれたからな。」

アレの下で犯罪に手を染めていたわけだから、多くの証拠を握っていた。それを使って管理局の闇を掃ったし、今は違法な研究も進めていない。首輪は付いているが、実質無罪になったわけだ」

「新しい最高評議会の指示で、楽しい研究が出来るのだよ。」

その為の身分と繋がりを首輪と呼ぶのは、いささか口が悪いのではないかね?」

「それが無ければ無罪にならなかった程度には、世間では首輪と認識されているらしいぞ?」

「ちよい待ち。」

そろそろ、エヴァンジュさん達の身分を、ちゃんと聞いとかなあかん気がしてきたんやけど?」

ようやく気付かれた。

お姉様や主の身分は、結構重要な要素だし。

「そうか、まだ言っていないかったな。」

今は私が最高評議会の議長をやっている。議員にアコノ、はやて、プレシア、ラインフォースがいて、もう1冊存在している残念な頭の

書が書記だ。

ついでに、ヴィヴィオやはやて、守護騎士も家族で、テスタロツサ姓を名乗っている。

最高評議会と聖王の護衛兼側近として、管理局からリンディヤスカリエツテイが、聖王教会からカリム達私達が私達の近くに派遣された状態で、それぞれ親衛隊や近衛騎士団という部隊名だな。

本来は私達が表立って動く事は無いが、並行世界に関しては公表していない。それに絡む問題を大事にしないまま解決するために、渋々ながら出張ってきたというわけだ」

「あかん、色々突っ込みどころが満載や……」

けど、ちっちゃいなのはちゃんも来てるのは、何でや？ 家族とか最高評議会の関係者とかには含まれてへんよな？」

「管理局的に言えば、民間協力者といったところだが……まあ、友人枠だな。」

なのはが、友人や『もう一人の自分』を助けようと思わない思考回路だと思うか？」

「うん、動くやろうね。少なくとも、私やフェイトちゃんと友達になつとるのは一緒みたいやし」

「八神はやて」は、ちらつと大人モードで並んでる3人を見て、何かを納得したらしい。

やっぱり、ここで更に爆弾投下？

「ちなみに、こういうった人物も連れてきているぞ」

追加召喚、月村すずか、高町恭也、高町美由希。

「え、お兄ちゃん、すずかちゃんと……」

「なのはってば、お姉ちゃんと呼んでくれないんだ……そりゃあ、今の状態だと年齢で負けるから、姉って呼び方は微妙だけどさ」

「そ、そうじゃなくて、魔導師でもないのにどうして!？」

「確かに、俺達はリンカーコアを持っていない。」

だが、技術に関してはエヴァンジュがいるおかげでかなり違いがあるらしい」

「だからね、こんな事も出来るんだよ。」

スノーホワイト、お願い」

『お任せ下さいまし』

宝石付きグローブを展開、加えて防護パーツも装着。

これだけでも、魔導師風に見せるには充分な効果がある。

「えー……!?!」

「はは……あかん、すぐかちゃんか魔導師つて、何て冗談や」

「ううん、純粋な魔導師じゃないよ。」

私には魔法を使える程のリンカーコアが無いから」

「……シヤマル?」

「はやてちゃん……本当に、さつきからすぐかちゃん自身の魔力は検出出来てないの。」

「デバイスが魔力を生み出してる様にしか……」

「うむ、正解だ。自分で魔力を生み出せなくとも、魔力を扱う才能があれば魔法を使えるという技術の開発に成功してな。」

簡単に説明すると、デバイスに超小型の駆動炉のような魔力生成機能と、カートリッジを装備している。後は集束魔法を使う感じで魔法を行使すれば、魔導師もどきの完成だ。

もちろん適性の問題はあるが……すぐか和高町兄妹、他にも適性を持つ者がそれなりにいる事は確認済みだ。集束や魔力運用に関係する技術でもあるから魔導師にとっても有用だし、AMF対策という点でも意味がある技術だ」

「……それも教えてくれるなら、随分と大盤振る舞いやね」

「言ったはずだ。私達の目的は、最高評議会の罪を暴く事だとな。」

その為に有用だと思える手札を用意する事が、そんなに不思議か?」

「有難い話ではあるんよ。」

「けど、色々扱いが難しい話でもあるから、どう扱うかは相談してからでもええか?」

「構わんぞ。」

「そうだな、ホテル……じゃない、海鳴に行く頃に、また来よう」

「海鳴市に?」 「戻る予定は無いんやけど」

【八神はやて】は、不思議そうにしてる。

というか、サウンドステージで語られるイベント。

あまり一般的じゃないせいか、お姉様すら忘れかけてるし。

「発見されたロストログアの調査だ。レリックの疑いがあり、遺失物管理部の捜査課や機動課の手が足らんとかいう話らしい。」

というわけで、本局が元で聖王教会経由の、緊急調査依頼がある。

ある意味偶然のはずだが、結果的に里帰りのいい機会になるぞ。レリックとは無関係だしな」

「ネタバレもええところや……まあ、随分と詳細な未来情報が本当か、確認する最初のお機会やね」

「そうだな。」

ああそうそう、エリオが銭湯の女湯に連れ込まれるようだから、エリオとか呼ばれるようになる前に、何とかした方がいいかもしれんぞ？

唯でさえ出会った直後、キャロの名前を確認する前に胸を揉んだ前科持ちだ。まあ、キャロは気にしてない上に、女湯に連れ込もうとする主犯になるんだが」

「……あの子達は、何をしとるんや」



その夜は、プレシア、アリシア、リニスの 3 人（内 1 人は本人）とフェイト&アルフが【フェイト・T・ハラオウン】と。高町一家とすずかが【高町なのは】と。夜天関係者が、【八神一家】と。夜通し語り合ったりしてた。

具体的には。

「お姉ちゃんは、私の事をどう思ってるのかな？」

えっと、その……」

「クローンのこととか？」

へーこーせかいつてのはよくわかんないけど、フェイトはフェイトで、私のいもうとだよ。おそく生まれたふた子のいもうとみたいな

ものだって、エヴァおねえちゃんもいつてたし。

リニスだって、なんか目かのクローンだよね？」

「ええ、そう聞いています。」

アリシアが目覚めた時に飼い猫だった私が居なければ悲しむから、という理由らしいと聞いていますが……本当なのですか？」

「……その情報は、何処からかしら？」

「想像の通りではないでしょうか。もしかすると、他の方も知っているのかもしれませんが」

「全く……あまり知られたくない話だったのだけれど」

「えー？ ネコって、なんじゆう年も生きてられないんだよねー？」

「母さん、私も大丈夫だよ。」

姉さんを本当に大切にしていたからだ、って。だからこそ、利き腕や性格といった違いを受け入れられなかったんだよ、って」

「ああああああ……!!」

何故か精神にクリティカルヒットしてるプレシアがいたり。

こつそりネタばらししてお姉様が悪い気がしないでもないけど、ちゃんと話をしてない本人が悪い事にしておこう。

「お兄ちゃんもお姉ちゃんもすずかちゃんも、本当に魔導師じゃないんだよな？」

「うん、大きいのはちゃん。」

この中でリンカーコアがあるのは、なのはちゃんだけだよ」

「魔力を扱う才能は、リンカーコアとは別だそうだ。」

カートリッジシステム等で魔力を補う事が出来れば、それを利用して魔法を発動させる事が出来る才能を持つ人物はそれなりにいるらしい。自前の魔力が無い分、最初の敷居は高いが」

「だけど、危ないよ？」

魔法が使えて、手伝ってくれるのは嬉しいけど」

「うちの男連中に負けないくらい無茶して、同じくらい大変な目に遭っちゃったりするのには言われたくないかな？」

「同感だ。それにエヴァンジェリユが言うには、俺と美由希は対AMFで強力な切り札に成り得るらしい。」

そうだな、これは見せた方が早いかな」

「え？」

「俺達はこの様な、魔法ではない技術を持っている。」

「この世界の俺達が同じ技術を持っていると仮定して、なのはがこの世界の俺達を頼ってくれていたら、エヴァンジュがいなくてもこのことは違う道があったように思うが」

「え？　え？」

高町恭也の「神速」が理解出来ない「高町なのは」がいたり。

「なあ、小学生をやってるって、本当なのか……？」

「すつげー不本意だけど、真つ当な戸籍まで作られちゃったから、義務教育つてのを受けなきゃなんねーんだ。」

「じゃなきや、世話になってる人達に迷惑がかかっちゃう。具体的にはエヴァンジュとかプレシアとか」

「マジか……って、エヴァンジュって見た目はあたしと大して変わらねーよな？」

義務教育つてのは、教育を受けさせる義務で、保護者がどーとかつて話を聞いたよーな？」

「あいつ、戸籍は大人だぞ。」

「はやて達がでつかくなつてただろ？　アレだアレ」

「うわ、マジか……」

「何だか鬱るんですな感じの『ヴィータ』がいたり。」

「私にはルーナという立派な名前があるです！」

「ツツアイⅡ等という番号で呼ばれたくないのです！」

「アインス先代の後を継ぐという意思で付けられた、立派な名前なのです！」

「馬鹿にするななのです！」

「だからといって番号は無いのです！」

「番号じゃないのです！　昔の偉い人だつて1世や2世を名乗っているです！」

「だいたいルーナの方が意味わからないのです！」

「私は夜を照らす月なのです！」

「意味も役目もばつちりあるのです！」

名前で喧嘩してる、リインフォース（小）がいたり。

「お前が、あの防衛プログラムなのか……」

「初期化後、再構築。同一か、不明」

「私達が夜天の魔道書に追加される前、正しく夜天の魔道書だった頃はこうだったらしい。」

尤も、2つの世界には色々と細かな差異もある。エヴァンジュが存在しているかどうかもそうだが、私達のバリアジャケットも微妙に異なっている。

対応する存在であっても、リインフォースの武装でもあるナハトヴァールが同一の存在と言えるか、確証は無いそうだ」

「私、はやて、リインフォース、守る。」

存在理由、同一。多分」

「……そうか。元がそうだったからこそ、改造されてああなっってしまったのか。」

だが、その姿は人に見せられんな……」

「こちらでも、普段は隠れている。」

見た目の奇異さはあるが、威圧と言う目的では人の部分がこれだから……護衛として表に出すのも、まだ難しいと判断されていた」

ナハトヴァールを挟んで会話する「シグナム」達は、やっぱり真面目だったり。

「あの頃はおつきく見えとったけど、意外にそれほどでもなかったんやね。」

こつちのなのはちゃんと同じくらいか？ それでも、私よりはおつきいんやけど」

「そうですね。見たところ、こちらのなのはほぼ同じでしょう。」

日本の成人女性の平均身長くらいだと、エヴァンジュが言っていましたか」

「うーん、やっぱり態度が硬いなあ。私は主やないから、そんな畏まらんでもええよ？」

「この辺は柔らかさそうでおつきいんやけどなあ……」

「揉まれますか？」

体形は変化しませんから、豊胸という目的にはなり得ませんが」

「いやいやいや、いつでもそんなこと考えてるわけやないからな!？」

「つまり、今では豊胸とは別におっぱいを考えてるわけやね。」

流石私や!」

「ちよい待ち、流石って何や!？」

「自分も含めた成長せん人の多さと、すずかちゃんの本気で、私は悟ったんや。」

ちっぱいもおっぱいも共に素晴らしく、そこにある愛に触れる事こそ至高であると!」

「な、なんやってー!？」

何かおかしいことになってる。『はやて』達がいたり。

『シヤマル』が仲良くお茶を淹れながら料理の腕をぼやいたり、相変わらずファイラは隅の方で静かに見守っていたりしてるけど。

うん、一部を除いてだいぶカオスだけど、険悪な空気は無いし。

これ以上は見えてなくてもいいかな。

蛇足：StrikerSのはずだった何か 03

「銭湯って、11歳まで子連れOKやったか？」

という【八神はやて】の疑問の通り、やっぱり【エリオ・モンディアル】が【キャロ・ル・ルシエ】に襲われかけたらしいけど。

海鳴市への緊急出動は無事(?)に終了。事前にお姉様が渡した情報が概ね正しかった事も確認された。

ついでに海鳴市在住の【リンディ・ハラオウン】、ついでに【エイミー・ハラオウン】や【アルフ】とも話をしてきた。【フェイト・T・ハラオウン】を連れていったし、フェイトとプレシアとアリシアとアルフとリニスにも会わせた事で、そこそこ納得してもらえた模様。

それらの結果、だいぶ話が通じやすくなつたし、色々動けるようにもなった。

「さて、ホテル警備の指示が来たようだが……」

「情報早すぎや！ この部屋を監視しとるとしか思えへんタイミングやん!!」

「探っているのは、主に管理局と聖王教会の方だが？」

「それはそれで問題や！」

とかいう会話をしてから、軽く打ち合わせ。

隊長陣、要するに【八神はやて】【高町なのは】【フェイト・T・ハラオウン】は、ホテルの中に缶詰……じゃない、内部での警備任務。ドレス姿で主催者への対応や来客の保護も任務の内。だけど、本来指揮すべき部隊長と隊長が全部そっちでどうなんだろうね。

その上で予想されてる襲撃に対応するために、シグナムとヴィータが黒の騎士団スタイルで参加する事が決定。ホテル・アグスタには近付かず、遊撃として行動する。

ホテルの防衛は、【八神ヴィータ】とフォワードの4人が担当。【八神シャマル】が指揮を任される事になる。

【ゼスト・グランガイツ】と【ルーテシア・アルピーノ】の確認と接触は、【八神シグナム】、【八神ザフィーラ】、【リインフォースⅡ】^{ツヴァイ}が遊撃を装って向かう事に。まだ秘密だけど、お姉様が途中で乱入する

気んでいる。

「これらが決まった結果。」

「攻略本を見ながらゲームをしてる気分や。」

「実際に事が起こったら対処せなあかんから、有難い話ではあるんやけど……」

微妙に「八神はやて」が悩んでたけど、諦めるヨロシ。

そんなわけで、ホテル・アグスタ襲撃予定日……じゃない、オークシヨンの日が到来。

もちろん、お姉様やシグナム達は、隠れて観察中。

「これまで謎やった、ガジェットドローンの製作者、及びレリックの蒐集者は、現状ではこの男。」

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者、ジェイル・スカリエツテイの線を中心に、捜査を進める」

「こっちの捜査は、主に私が進めるんだけど……」

とかいうへりの中で行われている説明は、ほぼ原作と同様。

動いているという格好と、表から出せる証拠は大事だし。

フオワード陣に裏の裏を知らせる必要も無いし。

それからも特に違いが出る様な事があるわけでも……

「あ、ユーノ。久しぶり」

「フェイトじゃないか。今日は、どうしたの？」

「警備任務だよ。オークシヨンの」

……【ユーノ・スクライア】も来るとお姉様が漏らしてたからか、

【フェイト・T・ハラオウン】がオークシヨン前に発見したらしいけど。

まあ、大枠としては大きな違いが無い、【ティアナ・ランスタール】が

凡人だと思ってそうな表情もそのままに、ガジェット・ドローン、【ゼ

スト・グランガイツ】、【ルーテシア・アルピーノ】の反応を捕捉。

原作同様の襲撃発生を確認。

【八神シャマル】も反応を感知、機動6課が迎撃開始へ。

「エリオ、キャロ。お前達は上に上げられ。」

ティアナの指揮で、ホテル前に防衛ラインの設置をする」

「はい！」

「ザファイラは、私と迎撃に出るぞ」

「心得た」

「えっ？」

「ザファイラって、喋れたの!？」

うん、この世界でも「八神ザファイラ」は喋ってなかったらしい。

それはともかく、「八神シグナム」と「八神ザファイラ」は「ゼスト・グランガイツ」と「ルーテシア・アルピーノ」を抑えに行く予定。道中でガジェット・ドローンとの戦闘も有りだから、迎撃で間違っていない。

「ティアナ・ランスター」への情報転送も予定通りの内容で行う準備が整ったし、「八神シャマル」、「八神シグナム」、「八神ヴィータ」のデバイス起動も完了。「リインフォースⅡ」も既に出発してる。

勿論、こつちのシグナムとヴィータも黒の騎士団スタイルで迎撃開始。

夜天健在リミッター無しの底力を見せ付け……は、しない。

適当にあしらうだけでも充分な戦果が得られる。というか、殲滅はまずい。

「副隊長達とザファイラ、すごい!」

けど、ちよつと遠くで戦ってる2人がいるよね?」

「そうね……かなりの実力みたいだけど。」

シャマル先生! 遠くの2人は誰ですか!？」

『詳細不明だけれど、今はまだ調査する余裕が無いわ。』

それより、少数のガジェット・ドローンがこちらに近付いているから、迎撃準備を』

「了解っ!」「了解です」

うん、前線の情報が漏れるのは予定通り。

だけど、オモチャが必要以上にばらけていけば少人数で全部を抑えるのが難しいのは事実だから、必要以上に探られない様、ちよつと戦っておいてもらおう。

大丈夫、数は少ないし、強くもならないから。

「こんなところで見物か。」

元首都航空隊のゼスト・グランガイツと、召喚士のルーテシア・アルピーノ」

というわけで、「八神シグナム」と「八神ザフィーラ」、それに、途中で合流した「リインフォースⅡ」が到着。

この情報は、機動6課のロングアーチにも隠してる。「八神シヤマル」には見えるようにしてあるけど。

「こちらの情報は筒抜けか。」

だが、簡単に捕まるわけにもいかん」

「時空管理局としては、捕らえねばならんのだろう。」

だが、その前に話がしたい。結果次第では逮捕ではなく、保護する事になる」

「重要なお話なのです！」

「ゼスト・グランガイツ」は槍を手にしてるけど、「八神シグナム」はデバイスの剣を鞘に入れたまま、柄に手も触れてない。

「リインフォースⅡ」は、そもそも武器を持ってないし。

「お前達に出来る事ではない」

「普通に考えれば、そう思われても仕方ないと思うのですよ……」

「そうだな。だが、これを提案した人物は自信満々だったし、我等にも協力する用意がある。」

協力してくれるのであれば、レジアス・ゲイズとの対話と、メガ・アルピーノの治療を実現させるそうだ」

「……何だと？」

「本当？」

「ゼスト・グランガイツ」がちよつと動揺してるし、「ルーテシア・アルピーノ」が喰い付いた。

提示してる内容は、2人の行動理由。

無視する選択は、し辛いはず。

「本当だ。メガ・アルピーノはレリックなど無くとも治療出来るしな。」

ちなみに、協力とは「管理局の闇」に光を当てる手伝いをしてほしい、という事だ。

その過程でレジアスの協力も必要になるが、説得する際に手を借り

たい」

「待て。何故お前がここにいる」

お姉様、幼女モードで乱入。

八神家の3人も驚いてる……というか、「八神シグナム」に問い質された。「リインフォースⅡ」はぼかーんとしてるし。

「時空管理局としての行動ではない事を知らせておこうと思つてな。

ついでに、レリック無しでの治療を証明する為に、お前達に埋め込まれているレリックを取り出す事も出来るし、取り出さなくても少し体調を改善する程度の事は可能だ。

どうする?..」

「今はまだ、そこまで委ねる気になれん。様子を見ながら考えさせてもらおう。

ルーテシアも、今はそれでいいな」

「うん」

お姉様の提案が保留になるのは、想定通り。

今のところは、可能だと知ってもらえば問題無い。

「そうか。今のままでもレジアスに合わせるくらいまでは大丈夫だろうが、無理すればそれも危うくなる事は覚えておけ。それに、後になればなるほど治療の効果も薄くなるからな。

そうそう、アギトも連れて来ていいぞ。好き好んでスカリエツテイに協力しているわけでもない様だしな」

「研究材料にはさせせん」

「複数の融合騎に心当たりがあるし、製作した事もある。というか、融合騎なら目の前にも1人いるだろうに」

「わ、私も研究材料になるですか!？」

「阿呆、製作した事もあると言っているだろうが。」

別に研究したい事など残っていないから、研究材料にする必要が無いぞ? 逆に、不調があるなら治せるが」

「……そうか。」

だが、今は連れて来ていない。一度合流して相談したい」

「構わんぞ。6課というわけにもいかんだろうし……そうだな、私の

アドレスを渡しておく。

都合のいい日時と場所を指定すればいい」

「良いのか？ この者達はともかく、背後の人物がどう動くか予想出来んぞ」

思わずと言った感じで口を挟んだ「八神シグナム」の心配は、理解出来なくはない。

連絡する時に盗聴されれば、襲撃は簡単だし。だけど。

「10人程度の戦闘機人や数万のガジェット程度で私達をどうにかできると言うなら、やってみればいいさ。」

せっかく作った戦力が無駄になるだけだがな」

「数万程度、だど？ 本気か？」

「本気だぞ？」

もつとも、そこまで出されたら、面倒だから星ごと砕きたくなるが」

「……それが可能だという自信がある、のだな」

「可能かどうかより、砕きたくなる方が問題だと思うですよ……」



【ゼスト・グランガイツ】と【ルーテシア・アルピーノ】の離脱を見送った後は、普通にガジェットを殲滅して。

変態博士からの割り込みや依頼も無く、ついでに【ティアナ・ランスター】の誤射も無いまま、ホテル警備の任務が終了。

原作からの逸脱、つまり原作相当世界との乖離開始を確認。

ついでに、【ルーテシア・アルピーノ】の状況もある程度は把握出来た。子供に時間をかけてゆっくり仕込む『教育』と、偏った知識の強制的な埋め込みが主体の様な感じだから、果てしなく面倒そう。

後始末中に【高町なのは】と【ユノー・スクライア】、【八神はやて】と【ヴェロツサ・アコース】のペアでお喋りしたのは原作通り。この辺は無理に変えなくてもいいけど、ちよつと話をしておきたい。

それでも、原作相当世界の影響は、無くなったわけじゃない。

誤射ではなく、威力と精度の不足を気にして、「ティアナ・ランスター」が自主訓練を開始。

「ヴァイス・グランセニック」との会話で、凡人発言も確認。隊長陣の会話も、自分を卑下し力不足を異常に気にする事をきっかけに、原作より柔らかい感じではあったものの行われた。

自主訓練に「スバル・ナカジマ」はまだ参加してないけど、魔王フラグが折れてると確信が持てない。

「ゼスト・グランガイツ」からの連絡もなく、聖王教会への訪問も調整に時間がかかっている暇だからという理由もあって、お姉様が選択したのは。

「今日はちよつと変わった訓練をするよ。」

参加してくれるのは、こっちの3人」

「エヴァンジュだ。後ろにいるのは、アコノとセツナ。」

2人には、私の助手として手伝ってもらおう事になっている」
訓練への手出し。

【高町なのは】に紹介されて、お姉様（大人モード）達が登場。

主とセツナも、20歳ちよつとくらいに見えるくらいの大人数。身体能力は外見相応に上がるけど、お姉様の黒龍、主の東風檜扇、コチノヒオウギセツナの不知火には出力リミッターを設定してあるし、南風未広と夕ハエノスエヒロ凧は今回お休み。

元の姿だと天才だからとか拗ねる人がいるし、フル装備だと手加減があからさまになるし。

「今からやるのは、自分の長所と短所を知ってもらうためのものだ。」

具体的には、各々に制限を付けた上で4対4の対戦だ。バリアジャケットまで通る一撃を受けるか制限違反で撃墜判定、全滅した方が負けで、制限時間は10分で時間切れは残存数の多い方を勝者とする。それと、開始前に時間を取るから作戦会議もしていい。

まずは、1回目の制限を伝えるぞ。

高町なのは、バリアジャケット以外の防御魔法の使用禁止。

私、索敵魔法の使用禁止。

アコノ、攻撃魔法の使用禁止。

セツナ、カートリッジの使用禁止。

ティアナ、索敵魔法の禁止。

スバル、ウイングロードの使用禁止。

エリオ、補助魔法を受ける事を禁止。

キャロ、10秒以上の離陸を禁止。

先に言っておくが、離陸とは地面や建物に接していない状態を指す。つまり、竜やウイングロード上にいるのは離陸として扱うからな」

「質問です。3人の実力を聞いても宜しいでしょうか？」

「犯罪者がベラベラと手の内を喋ってくれるはずがないだろう？」

最初の内は相手を見極める練習も兼ねるから、後に続く結果を残してみせろ。

とりあえず、5分の相談時間を取る。盗み聞きする気は無いから、その間は自由に相談するといい」

「ティアナ・ランスター」の質問をぶった切り、お姉様は主とセツナを連れて、少し離れたところへ。

【高町なのは】もそれに続いて、歩いてきた。

「ふむ、早速魔力調査か。」

やるのはいいが、もう少しばれない様にやるべきだと言うべきか？」

「普通はなかなか気付かないよ。興奮してる犯罪者には気付かれない事がほとんどだし、現場ではばれてでも正確な情報が大事だから。」

それに、魔力量を誤魔化してるよね？」

「私はAに近いB、2人はA程度にしている。あいつらと大差ないレベルで、実際に使うのもそれくらいの予定だぞ。」

凡人と卑下するティアナに、魔力量に頼らない戦い方を見せる意味もあるからな」

「期待、していいのかな？」

「期待するのはいいが、最終的には指揮を任せるからな。」

成長したなのはがどの程度になるのか、見させてもらうぞ？」

「ふえっ!？」

そんな感じで軽くプレッシャーをかけつつ、相談や初期配置が終わって対戦開始。

1回戦をダイジェストにすると、割と単純になる。

開始直後、「キャロ・ル・ルシエ」が「スバル・ナカジマ」に多重ブースト。

「スバル・ナカジマ」と「エリオ・モンディアル」がセツナに突撃、同時に「ティアナ・ランスター」がお姉様と「高町なのは」に向けて牽制というには本気味の射撃。

要するに実力不明の3人の中で、魔力が多めで攻撃魔法を使用可能なセツナを先に落とす作戦。

でも、開始直後にフリーになった主も突撃。最初は「キャロ・ル・ルシエ」の方に、鎖を召喚された時点で「ティアナ・ランスター」に優先を変えてみたら、割と苦も無く到達。物理的に手を弾く事で魔法の発動を妨害したところにお姉様の高速直射弾が命中。

それに驚いて気が逸れた「スバル・ナカジマ」も、お姉様の狙撃で被弾。

残るは、地力に劣る年少組。少しは粘ったものの、「高町なのは」の出番が無いまま終了。

「いいところが無かった1回目の反省会だ。

まずは、なのは。反省点は？」

「う……私も3人の実力を判断出来てない事、かな」

「高町なのは」はばつが悪そうだけど、お姉様達は完全に狙ってやってた。

魔導師は魔力量が全てじゃない、という実例を見せ付けるのが目的。フォワード4人については、戦術は限定したけど戦闘力自体は落としてないわけだし。

「そうだな。狙ってやったが、活躍の場が無かったとか言っていたら説教部屋行きだったぞ。

さて、若い4人はどうだ？」

「スバルさんと2人掛かりだったのに、足を引つ張っていた事、です」

「エリオ・モンディアル」は、武術経験の差が如実に出てた。

セツナに軽くあしらわれた上に、「スバル・ナカジマ」に向けて投げ飛ばされてすらいたし。

「慌ててしまって、支援も足止めも上手に出来ませんでした……」

「キャロル・ルシエ」は主の突撃に対処しようとして、支援系魔法を最初しか使えなかったし。

「ティアナ・ランスター」を撃墜された以上、足止めも失敗と判断して間違いない。

「何をやっても受け流されてしまった上に、途中で集中が切れてしまいました」

「スバル・ナカジマ」も、武術経験の不足が問題。

そもそも拳と刀の近接戦闘だと、3倍段とか言われるような差が出たりもするし。

セツナみたいに回避と受け流しで対処されると、消費が大きいという問題もある。

「見た目と魔力量と制限に惑わされた事と、射撃が通用しなかった事です」

「ティアナ・ランスター」は、相手が悪かったとしか。

「ふむ。やはり、ティアナが一番マシか。」

全員言っている事は間違っていない。だが、だからと言って諦めるには早いと言っておくぞ。

次は10分後の開始とする。それまでは休憩しながら反省と打ち合わせをしておくといい。

制限の内容は――」

必要事項だけを伝えらると、お姉様達は再び離れた。

残された4人は、集まりつつ座ってお喋り。

「あー、なんかすっごく戦いにくかった！」

「スバル・ナカジマ」は、座るところか寝転んでるけど。

「ですね。動きが解らないと言うか……」

魔力量はそんなに変わらないはずですけど、殆ど使ってなかったと思います」

「お淑やかそうって言ってたアコノさんは、かなりカートリッジを

使っていたみたいですけど、速かったです。

アルケミツクチエーンも避けられちゃいました」

「エリオ・モンディアル」と「キャロ・ル・ルシエ」は、並んで座っている。

2人とも幼いと言っているいい年齢の割には、よく見てるとは言える。

「だけど確かに、禁止されてた魔法は使っていないみたいなのよね。」

それに……なのはさんが防御魔法の禁止だったし。当たれば終わりのルールなんだから、これってかなり大きなハンデのはず。

ひよつとして、あの3人も得意分野を禁止してた……？」

お姉様達が違反も嘘も誤魔化しもしてないのは、理解してもらえてるらしい。

少なくとも、「ティアナ・ランスター」には。

「あ、そうかも。」

やっぱりティアナは頼りになるな。さつきも一番とか言われてたしさ」

「うっさいわね。あんたも少しは考えなさいよ」

「えー、そういうの苦手ー」

蛇足：StrikerSのはずだった何か 04

その後、昼食を挟みながら幾度となく対戦を繰り返して。

【高町なのは】や【ティアナ・ランスター】がある程度お姉様達の実力を判断したと思える頃。

「さて、次のお題だ。」

高町なのは、攻撃魔法の使用禁止。

私、念話での発言禁止。

アコノ、移動魔法の使用禁止。

セツナ、カートリッジの使用禁止。

ティアナ、攻撃魔法の使用禁止。

スバル、5秒以上の接地を禁止。

エリオ、近距離以外の攻撃魔法の使用禁止。

キヤロ、回復魔法の使用禁止。

休憩は今までと同じ10分。じっくり作戦を練ってみるといい」

今までとあまり変わらない様子の、お姉様。

その後ろ姿を見送った4人は、やっぱり固まって座り込んだ。

「みんな、今回はチャンスかも」

その中で【ティアナ・ランスター】だけは、お姉様の意図を見抜いた模様。

「え、なんで？」

でも、【スバル・ナカジマ】は理解してない。

「私以外は、戦力的な制限が殆ど無いからよ。」

あと、今まで指揮してたのは多分エヴァンジュさん。あのなのはさに怒鳴ってた事もあったんだから、間違いないと思う。

だけど今回は念話禁止だから、他の人が指揮を執るはず。攻撃魔法を禁止されたなのはさんになると思うけど」

「アコノさんやセツナさんの可能性もあるんじゃないかと思えますけど……」

そう言いつつも、【エリオ・モンディアル】自身、あまり無さそうだと思います。と思ってる模様。

やっぱり、攻撃魔法禁止のインパクトは大きい。

「アコノさんは、なのはさんの代わりに固定砲台でしょ。なのはさんが妙な事を任されたりしなければ、だけど。」

自分の足で移動するのは速くないみたいだし、あれだけカートリッジを使うなら、魔法を使う時の集中はかなり必要になるはず。だから、普通なら指揮までは任されないと思う。

後は、セツナさんに前線を維持するのに手一杯になってもらえば何とかなるわ。多分、エヴァンジュさんがサポートすると思うけど……エリオ。2人を足止め出来る?」

「え、2人を、ですか?」

「そうよ。」

セツナさんは近接がメインだし、勝つ必要は無いから、なるべく時間稼ぎ。

出来れば援護するけど、攻撃は隙があったらで。いいわね?」

「は、はい。頑張ります」

「スバルとキヤロは、アコノさんを何とかして」

「わ、解りました」

「えー? あの射撃はきついし、接地は禁止なんだよー?」

「2人掛かりなんだし、地面すれすれをウイングロードで走るのは禁止されてないんだから、何とかしなさい」

「うーん……じゃあ、ティアナはどうするのさ。」

攻撃魔法は禁止なんだし」

「遠隔操作で石をぶつけられて転がされてたじゃない。要するに、攻撃じやなきやいいのよ。」

なのはさんの牽制と、サポートをするつもり。早く勝てそうな方から手を出すから、何があっても驚かずに行動する事。いいわね?」

【ティアナ・ランスター】は、”ルールを掻い潜る”をチャージ開始!

許された範囲での抜け道は、目的さえ間違えなければ有効な手段。特に、思い詰める生真面目な優等生タイプには、その辺のさじ加減が大事。

でも、攻撃魔法禁止の時のお姉様は、石をぶつけたわけじゃない。「スバル・ナカジマ」の目の前、ウイングロード上に石を置いて固定しただけ。

避け切れなかった「スバル・ナカジマ」が躓いて転んだだけ、と主張。遠隔のシールドでも同じことが出来るわけだし。

そんな感じで始まった試合は。

開始早々、突撃した「エリオ・モンディアル」の支援と「高町なのは」の指揮妨害を兼ねると思われる、閃光弾もどきが炸裂。

反応が遅れて体勢が崩れたセツナの足元にアンカーショットが撃ち込まれ、足が引つかかり気も散ったところに「エリオ・モンディアル」の攻撃が命中。早々にセツナが脱落した。

その後、「ティアナ・ランスター」は、「エリオ・モンディアル」にお姉様へ突撃する指示を出すと、閃光発音弾的なものも混ぜて高町なのはに向けて発射。

援護無しとなった主が、「フリード」も含めた実質3対1の勝負で負けると、後は一方的に。

魔力を制限したお姉様を数で押し潰すと、攻撃魔法を禁止された高町なのはにまともな撃墜手段が残ってないため、勝敗が決まった。

「最後はなかなかいい動きをしたじゃないか。」

だが、非致死性兵器に相当する魔法は攻撃魔法か否か、という点が問題か。

確かに、直接的な攻撃ではない。だが、光も音も、大出力になれば感覚に対する攻撃とも言えるからな。

お前は執務官志望だったな。今はともかく、問題になる可能性がある行動が隙になる事は知っておいた方がいい。少なくとも、目的を間違えた行動は後で問題になりやすい。

何のための行動なのか。得られるものは何か。どう評価される可能性があるのか。そういった事を考える事も必要だ」

「目的は達成したけど、過程とその評価と情報の拡散が予定や予想から大きく外れ、不要な肩書を持つ破目に陥ったのがエヴァ。」

そもそも目的自体、最初の一步が違っていれば抱えずに済んだ事。

経験者の愚痴と忠告だと思ってい

主が思ってるのは、ラインフォースを助けるという目的と過程、結果としての最高評議会の肩書について？

最初の一步は、転生特典？　これが違っていれば、車田一樹という男性がお姉様になる事は無かったとは言えるけど。

そうなれば、お姉様と私達が存在しない事に。

それは悲しい。

「アコノ……それはフォローなのか？　それともツツコミか何かか？」

「認めたくなくても、事実ではあるはず。

それに、机上の理論よりは納得してもらいやすい」

「それはそうなんだがな。

さて、そろそろいい時間だろうし、こいつらの勝利で今日の訓練を終了したいが。

なのは、どうする？」

「じゃあ、いつもより少し早いけど、今日はここまで。

かなりハードだったと思うし、体を休めるのも大切だからね」

「それでも何かしたいなら、今日の反省点や改善すべき点を話し合うのもいい。

チームで行動する以上、仲間の力や考え方を把握する事も重要だ」



その夜も、相変わらず「自主訓練」を続けてる「ティアナ・ランスター」。

そこへ現れたのは、お姉様。

「やれやれ。休息も大切だと言われていたはずなんだがな。

無理をすると、伸びるものも伸びなくなるぞっ！」

「それでも、詰め込んで練習しないと、上手くならないんです。

凡人なもので」

やっぱり、本人の認識は変わってない。

でも、そもそもそれが勘違い。

「凡人、か。」

それは、20歳や30歳で武装隊の隊員をやっている連中、つまり管理局の主戦力は軒並み落ちこぼれだと言っているんだな？」

「そうは言っていないませんー！」

「だが、既にBランクを取得し、訓練でAAランク相当の射撃魔法を成功させている16歳のお前が、凡人だと自称しているんだ。」

武装隊の隊員はBランク、隊長でもAランクくらいが多いと聞いているぞ。20代や30代でそれくらいの連中は凡人のお前以下、つまり非才だという事になるだろう？

執務官やエースといった花形は、少ないからこそ成り立つ切札だしな。それとも、命懸けの武装隊が、訓練やランク試験で手を抜いているとでも言いたいのか？」

「いえ、それは……」

「確かに今のお前の力は、はやてやなのはといった化け物連中に届かんだろう。だが、平凡と呼ぶには高い才能を持つ事も自覚した方がいい。」

全く……私から見ても羨ましい程の可能性を持っているのに、どこが凡人なんだか」

「それは、どういう意味でしょう？」

あ、ちよつと怒ってる。

というか、絶対に間違った認識をされてる。

「私が今日使った攻撃魔法など、シュートバレットを少々拡張したもののばかりだぞ。他の魔法も得手不得手はあるだろうが、高難易度と言えるものはない。技術的にも魔力量的にも、お前なら私がやった以上の事が出来るはずだ。」

私が魔法に出会ったのはお前が生まれる前だが、その時から寝食を放棄するような訓練をし、一般的な魔法に大した適性が無いと知った後はデバイスやらで何とかしようとして研究を繰り返した結果が、私だ。はつきり言ってしまうえば、デバイスや他の者に頼り切っているわけだな。

感覚で魔法を組めるのはや、気合で高難易度の魔法を成功させられるお前の才能が、本当に羨ましいよ」

うん、大きな嘘は言っていない。

攻撃魔法は、誘導弾すら使っていないし。

小さな石を動かす程度は、人を浮遊させるよりも簡単だし。

2500年前に「ティアナ・ランスター」が生まれてるはずも無く。

一時期は寝食を完全放棄し。

アルハザードで一般的な魔法を高効率で使う為のデバイスをいくつも作成したのが、お姉様。

古代ベルカ式やアルハザード式の弱点、デバイスは設計時に想定していない魔法をあまり補助出来ないという点が、根本的な問題なんだけど。

「私が生まれる前から……？」

「そうだな。」

正確な年齢は秘密にしておくが、間違いなく、私はお前達が思っているよりも年上だ。

アコノやセツナに魔法を教えたのは、私や私の仲間達が中心だしな」

うん、これも絶対に勘違いされる。というか、混乱させる言い方。外見的にも実力的にも、指導歴2年ちよつとは思われなだろうし。

「……例え、そうだとしても。」

私には夢があります。その為には、力が必要なんです」

「手段と目的を間違えるな。」

目的は、兄が無能ではないと証明する事だろう。ならば、兄と同程度、むしろ少し下の魔法が使えれば充分だ。それ以上の力でねじ伏せてしまえば、兄が力不足だったと言っている事になりかねん。

それに、指揮や支援に長けるなら、その役目は仲間の力を最大限に引き出す事だ。

確かに地味で目立たないだろう。だが、最も勝敗に影響する立場であり、お前がその為の才能を持っているのは確実だ。

支援向きの人物を単独で運用する無能な上司がいる事を浮き彫りにする方が、よほど目的に適うと思うがな」

「なぜ、それを……」

「お前達を指導するという事で、経歴やらを調べさせてもらったし、色々話も聞いている。」

お前の兄が殉職した時に、無能な上司が阿呆な事を言ったようだが……ある種のトラウマだろうし、気にするなと言っても無理な事は理解出来る。」

だが、囚われるな。阿呆な発言が問題になる程度の程度の良識は管理局にもある以上、阿呆の妄言を絶対的な評価だと思ひ込むな。」

お前に、お前が目指す執務官に必要なのは、精神的な強さと冷静な判断力だと私は思うぞ」



「……偉そうにお説教しとるけど。」

これって必要やったん？」

お姉様と【ティアナ・ランスター】の様子を出歯亀してるのは。

【八神はやて】以下、機動6課の中心人物達。

それと。

「無駄ではないはず。」

誤射はしなかったけど、根本的な原因は改善してない。放置すれば、致命的な事故に繋がる可能性が高い」

本来の姿の主と、リインフォースがいる。

音声と映像を流してるのは、主だし。

「確かに、時々度を超えてる事はあったんだよな。」

けど、これで改善すんのか？」

いまいち納得してない人代表は、【八神ヴィータ】。

やり方に思うところがあるのは、仕方ない。

「解らない。本当は1度痛い目を見た方がいいのかもしれない。」

それでも、やらずに後悔するよりは、やって後悔する方がいい」

「そりやそうだけだよ。」

けど、あの訓練自体が出来レースだろ。すげーリミッターかけてんだし」

「エヴァが言っている内容に、嘘は無い。」

今日使った魔法はどれも、あの4人ならすぐにも同等以上のものを使えるようなレベル。

それでも最後以外は私達が勝てたのは、戦術や指揮の差があったからこそ。

それに、私とセツナの魔法使用経験は、まだ2年とちよつと。本来は私達が一番未熟なはず」

「ちよい待ち。2年とちよつとって、ほんとか？」

それに、エヴァさんに一般的な魔法に適性が無いとは、とても思えへんよ」

「本当。エヴァと出会う2年ちよつと前まで、私とセツナは魔法に触れた事が無かった。時期としてはジュエルシード事件の頃で、私達よりもなのはの方が早かつたくらい。」

それに、エヴァの能力はかなり偏ってる。デバイス無しで一般的な魔法を使おうとすると、自分の魔力に振り回されると聞いている。それを、文字通り寝食を犠牲に、普通の人には真似出来ないような真似をして改善したとも」

「エヴァンジュの能力は指令書の名が示す通り、直接戦闘があまり考慮されていません。情報処理やその関連能力に特化しているのです。戦闘用の魔法を、デバイスを使わず同じ魔力量で行使するならば、殆どの場合で私の方が上になるでしょう。」

それを補えるデバイスを作る技術や知識、それと、私を大きく超える魔力を持っているだけなのです」

リインフォースの説明は嘘じゃないけど、ちよつと微妙。

正確には、情報処理の為の“私達や眷属達の維持”に特化。

それに必要な能力として、剥奪という材料入手手段、強靱な体、膨大な魔力を持つてる。

転移はかなり遠くの次元世界間まで行けるけど発動に時間がかか

り、飛行魔法は速度重視で機動性に欠ける長距離移動用のみ、攻撃魔法も数えるほどしか回路を持ってないのは、まともに戦闘する設計じゃないから。

数少ない攻撃魔法に隕石^ク落^テとしが含まれてるのは、きっと主様のせい。

世界の魔力的なナニカは、今は考慮しない。

「何か意外や。色々完璧っぽく見えとったのに」

「エヴァにも不得意な事はある。苦手な事もある。出来ない事だってある。」

全知全能には程遠いし、どんなに大きな力を持っていても本質は人と変わらない。

目的に沿うように、納得出来る結果を得られるように努力するだけ」

「そか。それで、ティアナの説教も必要と思ったわけや。

こつちとしても気になってたみたいやし、当面は様子見や」

【八神はやて】は理解してくれたけど。

今回の最大目的が【高町なのは】の魔王化を防ぐ事だと言ったら

……納得、してもらえるのかな？

蛇足：StrikerSのはずだった何か 05

お姉様のSEKKYOUから、1週間とちよつと。その間、「ティアナ・ランスター」の自主訓練にちよつかいを出す形で、お姉様が直接指導する事数回。

【高町なのは】の教導を邪魔する気は無い事もあって、内容は限定的。しかも、考えさせることを優先しつつ早めに休ませる方向に持つて行つてから、体調も少し回復気味。

個人での強さではなく、グループを利用した戦術的な強者を目指すように誘導する事を目標とする内容で、若干は効果が出てる感じがするから、当面はこの流れを維持する方向。「スバル・ナカジマ」の参加も阻止出来てるみたいだし。

その他の状況としては、情報収集も着々と進み、変態^{ロリコン}の手回しも順調だという話を聞いている。

順調じゃないのは、「ゼスト・グランガイツ」の決断。

同じく遅れていた【聖王教会^{カトリック}】や【時空管理局^{ロケット}本局】との会談は、ようやく舞台が整った。

今は「八神はやて」が先に話をしてて、お姉様は「高町なのは」と

【フェイト・T・ハラオウン】の2人と一緒に聖王教会にやってきた。

「高町なのは、一等空尉であります」

「フェイト・テストアロツサ・ハラオウン執務官です」

「エヴァンジュ、だ」

びしつと敬礼してる2人と比べて、お姉様は自然体。

別に緊張するような相手でもないし。

「いらつしやい、初めまして。

聖王教会、教会騎士団、騎士カリム・グラシアと申します。

どうぞ、こちらへ」

出迎えたのは、本人の名乗りの通り、この世界の「カリム・グラシア」。

窓辺の席にいる「クロノ・ハラオウン」と「八神はやて」の方へ……つて、お姉様の存在以外は、どこかで見たような構図と流れ。

そう固くならないでとか、お兄ちゃんとかいうじやれ合いの後で、カーテンで窓を塞ぎ。

真面目なお話の開始。

「さて、その少女が大きな鍵を握っているそうだが、
いったいどこから話してくれるのかな」

「エヴァンジュ・テスタロッサという名前についてから、ですか？」

「クロノ・ハラオウン」と「カリム・グラシア」の声は柔らかいけど、
目はあまり笑ってない。

大真面目な話だから、そのほうがいい。

「そうだな……はやて。私達や目的について、どの程度話してある？」
「見た事と聞いた事は、一通りや。」

並行世界の私達とか、聖王オリヴィエのクローンの存在まで含めて
やけど……簡単に信じてもらえる話や無いからな」

「リンディ母さんも、ある程度は説明してあるって言ってたよ。」

アルフも本局の方で手伝ってもらってるし」

「耳にはしているが信じられない、と。内容を考えると当然だな。」

とりあえずは……この2人か」

お姉様が呼び出したのは、連れてきたヴィヴィオとカリム・グラシア。
ア。

「初めまして、と言うべきなのでしょうか。」

聖王教会、近衛騎士団、団長。カリム・グラシアと申します」

「オリヴィエの力と記憶を継承したクローンの、ヴィヴィオ・テスタ
ロッサです。」

だからと言って、変に崇めたりはしないで下さいね」

2人はにこやかに挨拶してるけど、初対面で挨拶されてる2クロノとカリム人の
表情に、緊張が見える。

「何と言うか……絵画に残された姿、そのままなのです」

「絵から出てきたような、と聞いてはいたが」

「両手が無事ですから、ちゃんと違いはありませんよ」

「さて、とりあえずの役者は揃えた。」

次は、本人だと言う証明代わりだ。カリム、頼む」

「はい。予定通り、ですね」

小さい方のカリム・グラシアが紙の束を取り出し、その紐を解き。光り輝いて、周りを取り囲むように整列してく。

「それは……預言者の著書、ですか？」

「はい。私なので、当然使う事が出来ます。」

その中で関連すると思われる予言が、これです。ヴィヴィオ様、訳をお願いします」

「様付は禁止、ですよ。では。」

『隔たれた地を渡り、消えゆく絆が受け継がれる時

旅人は新たな命を得る

親愛なる者達が自らを導き、闇の船を砕く光の剣と成す事で

未来は鎖から解放され、新たな時を刻み始める』

この予言が、私達から見た現状を示していると判断しています」
「これまでの経緯を説明するのだ。」

私達の世界で3か月前、この世界では10年近く前に、並行世界に対する影響調査を兼ねてこの世界から消滅寸前のリニスを連れて来てアリスアの使い魔にしたんだが……恐らくはこれが前半だな」

「その言い方やと、エヴァンジュさんの手出しが発端って事なん？」

確かに、リニスさんはこの世界出身や言ってたけど」

「私が並行世界に移動した場合の影響を調べる意図もあったから、そう判断せざるを得ないな。」

この時に並行世界の分岐やら相互影響の状況の変化やら、色々あったのは事実で、この世界と私達の世界が比較的密接な繋がりを持つようになったのは確かだ。

その上で私達は、ある程度落ち着いた状況を変に崩されたくないから、この世界での事件を少し良い方向に変える手伝いをするために来た、というわけだ。

前提はともかく、意図についてははやてやリンデイにも伝えていたはずだが」

「良い方向、なんか？」

「実力があるとされている政治家が死に、黒幕が闇に葬られ、実行犯達は反省も捜査協力もせずに長期間の投獄生活を送る。

実力があるとされている政治家が平和の為に活動し、実行犯達は違法行為を止めた上に証拠を提出し、黒幕が裁かれる。

さて、どちらの方が「良い結果」だろうか？」

「確かに、その話だけならば後者だ。

それぞれの名も聞いているし、この世界がそうなる可能性が高いから行動しているのだろうが、どんな手段を使うつもりなんだ？」

我慢できなくなったと言うよりは、内容的に口を出すべきと判断したのか。

「クロノ・ハラオウン」が会話に参加してきた。

「予言の後半に相当する部分だな。

とりあえずは、連れてきたはやてやフェイト達が、この世界の機動6課メンバーやらを助けつつ黒幕を断罪する事で、未来を変える。

少なくとも、私達はそれが可能だと判断した上で動いているし、手助けも始めている。

手を出す相手は6課メンバーだけではないしな。向こうの準備も出来た事だし、追加で呼ぶぞ」

お姉様がそう言いながら、数歩離れた場所に転送したのは2人。

「スカリエツティ!?!」

「ここで呼ぶん?」

先に説明しとかんと、色々問題があると思うんやけど」

「クロノ・ハラオウン」は、即座に戦闘態勢。

反応はいいけど、転送したのがお姉様というのを忘れ……る前に、お姉様も信用されてない?」

「八神はやて」は、自分なりに納得したらしい。けど。

「ふむ、やはり勘違いされている様だ。

ごきげんよう、管理局と聖王教会の若き英雄候補達よ。

いや、初めまして、の方が良いかね?」

「初めまして、からでしょうね。」

私はクーネ・テスタロッサ、しがない魔導書ですよ。解りやすく言

えば、リインちゃん……こちらで言うアインスの弟、エヴァちゃんの兄ですね」

「私については知っている様だが、改めて言っておこう。

この世界で、次元犯罪者として手配されているジェイル・スカリエッテイが私だよ。

つまり、クーネやエヴァンジュ達が連れてきたジェイル・スカリエッテイとは別の存在という事になる」

うん、これは “Striker” 的な意味で本物の、つまりはこの世界の【ジェイル・スカリエッテイ】本人。

色々調査した結果、この【ジェイル・スカリエッテイ】に魔導具埋め込みは無かった。代わりに魂や遺伝子の改造でんこ盛り、強制認識や記憶の埋め込みもまします。

多少改善したとはいえ影響がまだ残ってるけど、とりあえず “最高評議会の罪を暴く事” に関する協力はしてくれらることになってる。

「……エヴァンジュさん。これはちよつと予想外や」

「だが、黒幕側の実行部隊のトップが協力してくれると言うんだ。

感情や盲目的な法の運用で、この機会をふいにする事も無いだろう？」

「それでも、少々危ない橋を渡っているのだよ。

私の因子を持つ戦闘機人が4人いるのだが、ウーノ以外、特にクアットロは私の方針変更が気に入らないらしくてね。

どうやら、事情を知らない他の者達を扇動するつもりらしい」
「人を見下す思想が仇になっているか。

因子を持つ4人は、最悪死んでもこちらに大きな影響は出ないと思うが……どうしたい？」

「私としては、自由にさせてみたいところだがね。

どの様に行動し、どの様な結果が残るのか。実に興味深い」
「いや、それはあかんやろ」

「八神はやて」が頭を押さえながら、力の無いツツコミ。

「クロノ・ハラオウン」と「カリム・グラシア」は、頭を抱えたような雰囲気になってるし。

「それをすれば、お前の責任も問われる事になる。

暴走する兵器を製造し運用しようとした、くらいは言われる事になるだろうし、それでは私が面白くない。

早めに止めた方がいいと思うが」

「そう言われても、動ける者は出払っていてね。

通信を妨害されては説得も出来ないが、それはクアットロの得意とするところだ。

くくく……いやはや、困ったものだよ。ここしばらくは、騎士ゼストとルーテシアにも色々吹き込んでいるようだからね」

「笑い事ではない。

今は聖王のクローンの確保に動いている、のか？」

「うむ、素晴らしい情報と予測の確度だ。

数日中にクラナガンに運び込まれるのは确实、放置すれば早々に高評議会が関係する研究所に届けられるだろう。だが、管理局として検問以上の積極的な妨害は難しく、仮に確保しても、しかるべき部署に引き渡せば最高評議会の関係者に渡る事になる。

どこかに隠したところで、場所が判明してしまえば力尽くで奪いに来るのは确实だ。当然、周囲の被害など気にも留めない。

さて、どうするかね？」

「表側で何とかするなら、何とかして確保、聖王教会の預かりにした上で、6課で保護。

裏側で処理するなら、私が確保してそのまま保護。

确实性なら後者かもしれないが、前者でも確保の手伝いくらいは出来るだろうから極端な差は無いだろうな。

さて、この世界のお偉方はどう判断する？」

必要と思われる情報は、今の会話で概ね出揃ったはず。

「ジェイル・スカリエッティ」はお姉様を見たままだけど、この先は、2人だけで進める話じゃない。

「見捨てるという選択肢はエヴァンジュさん達には無い、と思っただええの？」

どの程度の手助けを期待しているか、って事やけど」

お姉様に話を振られた【八神はやて】の心配は、お姉様の前提を見逃してる。若しくは、点と点の結び方が足りない。

ヒントは、色々出てる。

「オリヴィエのクローン、つまりは私達が連れてきたヴィヴィオに対応する存在だぞ？」

この世界では外見こそ5歳の少女だが、同じヴィヴィオの名を持つ、オリヴィエの血の継承者だ。妙な影響を避けるために、最悪の事態は避ける方向で動きたい。

具体的には、お前達が当てにならないと判断したら私達が勝手に動く。その程度には期待してもらっていい」

「放置しても解決され……てへんな。こういう言い方は好きやないけど、不正や違法行為の明確な証拠やし。保護するにしても、経緯の説明も出来んようでは怪しまれる。」

全部ひっくるめて、私達がどう対応するか、って事やね？」

「聖王陛下のクローンとなれば、聖王教会として放置するわけには参りません。手放すという選択肢もありませんから、何としても保護する事になるでしょう。」

もちろん、違法な出自に対する調査等は必要ですが」

ようやく、この世界の【カリム・グラシア】が再起動。

というか、このまま手をこまねいてるわけにはいかなかっただけかもしれない。

「時空管理局としても、放置は出来ないだろう。」

少なくとも、違法行為の追及は必要だが……問題は、他の部署だけでなく上層部にも隠して動かなければならない点か。

話半分や妄想と切り捨てるわけにはいかない状況や情報が揃い過ぎている」

ずっと様子を見ながら考え込んでいた【クロノ・ハラオウン】も、ため息をつきながら歩調を合わせる方向に。

とりあえず原作やお姉様の想定通り、聖王教会と機動6課で保護する方向に持って行けそう。

「方針はこれでええとして、問題はどうかやって敵さんより先にその子

を見付けるかや。

陸士部隊にも、余計な情報を知られたらあかん人はおるはずやし……」

「なら、4日後にでもフォワード連中に休暇を出して、街に遊びに行かせたらどうだ？」

裏の意図さえ漏れなければ、ギンガ達が動くのも問題無いだろう。人を動かしておけば、意外な場所であったりという可能性もあるかもしれないぞ。私もフォローしやすいしな。」

というか、原作的な意味でそれが一番確実かもしれない。

私的な外出中に遭遇して対処するなら、越権だの管轄外だのと言われにくいだろうし。

今のところは「ジエイル・スカリエツテイ」の関係者が関わってないあたりに、原作で強引に奪おうとした事情が透けて見える。

「フォローって、どれくらいの事が出来るん？」

というか、4日後って根拠は？」

「秘密裏に奪うなら今すぐにでも可能だと言えば、概ね想像出来るか？」

クアットロも情報を見ている様子があるらしいし、争奪戦になりそうだな」

「笑い事や無い！ というか、私らは完全に当て馬や！」

「クアットロや最高評議会が優勢だと思ってるのか？」

正確には……はじめてのおつかい、か？」

「もつと悪いわ！」

「八神はやて」が叫んでるし「クロノ・ハラウン」は頭を抱えてるし。

お姉様の例えがピンと来てない「カリム・グラシア」が一番平和なのかもしれない。カリム・グラシアが説明してるから、時間の問題かもしれないけど。

蛇足：StrikerSのはずだった何か 06

予定された休暇の日。

朝の訓練で第2段階のテストをクリアし、フワード4人のデバイスのリミッターも1段階解除する事になった。

そして、「八神一家」と「高町なのは」、それに「フェイト・T・ハラウン」が食堂でテレビを見ながら食事をしてる時に。

「このおっさんは、まだこんなこと言ってるのな。」

敵も多そうだし、命があぶねーってのはわかっけど、本来の目的って何なんだ?」

「レジアス・ゲイズ」の演説を聞いた「八神ヴィータ」が、難しい顔をしてる。

「レジアス中將は、古くから武闘派だからな。」

発言自体は不思議ではないが、何か裏があるという事か」

「本人の気性もあるが、一種のパフォーマンスでもある。派閥を纏めたり、資金を集めたりするのに効果があるらしいぞ。」

それと、本当の目的はミッドチルダの平和を守る事だ。現在の手段はともかく、目標自体は純粹で真摯な、本質は夢を追う少年なんだぞ。見た目と態度と手法がアレなだけで」

「八神シグナム」の言葉を受け、お姉様が会話に参加。但し。

「エヴァさん!? いつからおったん!」

コーヒートを片手に座ってるのを、この場の誰にも気付かれないままだった。

認識障害やらを使つてのこっさり転移、楽しいです。

「いや、疑問を解消しておこうかと思つてな。」

ちなみに演説でも言つていたインヘリアルは、純粹魔力攻撃の誘導弾で犯罪者を遠隔狙撃する事を狙っているらしい。陸士部隊で対処出来ない相手を強引に叩き潰す切り札だそうだ。

艦載砲や対空砲の技術が元らしいが、よくここまで改造した物だと感心するよ」

「……それ、言ってもええん？」

「陸士部隊で対処出来ない相手にアインヘリアル自体を襲撃される事を想定していない、運用面の欠陥を抱える不良品だしな。大規模な組織立った犯行には力不足だとも思う。それでも、普通の犯罪者には脅威だ。さっきの20%やら35%やらの数字を達成出来るかは知らんが、きちんと運用出来れば少しは効果を出せるだろうな。」

但し、ある程度情報を広めなければ抑止効果が出んから、順調に話が進めばきちんとして発表するんじゃないか？」

「情報の筒抜けが酷いなあ。」

導入を焦る理由は……やっぱり、人手不足なんか？」

「優秀な魔導師を本局に取られると嘆く人物が、人の育成を優先する、優先出来ると思うか？」

兵器であれば、最悪でも技術を渡せば実物は維持出来る。そんな思惑があるようだぞ」

「地上と本局の仲が悪いのは、その辺もあるんやね……」

「戦力を魔導師に頼る組織や文化なんだから、限りある“人”の取り合いになるのは当然だな。」

金で有力選手を引き抜いていった巨神を苦々しい思いで見る阪人、程度の敵愾心か？」

「うわ……なんか嫌なもん想像してもうた」



実にのんびりした空気が流れてる。

【八神はやて】達は簡単な事務仕事や調査を。

フォワードの4人は街で買い物などを。

【カリム・グラシア】と【クロノ・ハラオウン】は聖王教会の方で話し合いを。

【八神シグナム】は、合同捜査の会議を。

【八神ヴィータ】は、海上で演習を。

【ギンガ・ナカジマ】は事故現場の検証の手伝い等を。

【ヴィヴィオ】は地下水路で放浪を。

だんだんのんびりって感じじゃなくなってる気がするけど、そんな感じでいろいろやってる、おやつの時間。

お姉様は【八神はやて】の部屋で、のんびりと雑談中。

「でも、こんなにのんびりしててええの？」

夕方までには、って言っつつたけど」

「すぐに慌ただしくなるからな。今のんびりしなければ、いつするんだ。」

そうだな……あと数分で、エリオとキャロがヴィヴィオと接触する。

気付けばという条件は付くが、気付かなそうなら適当に音でも出してみるか」

「えーと、ちよい待ち。」

いつから捕捉してるん?」

「輸送していたトラックが爆発した直後くらいからだな。」

もうすぐ20分ほど経つか」

「小さい女の子を、そんなに放置したんか!」

「だが、休暇中のあいつらを何でもないのに地下水路に行かせるわけにもいかんしな。」

周囲の警戒はしているし、箱の中にあつたレリックも回収済みだ。

「箱が2個あつて重そうだったから、1個を水の中に落とす手伝いもしてみたが」

「そういう問題やない! ああもう、何でイベント待ちなんてせなかんのや!!」

知らん方が精神的に平和やん!!」

「私達が手出ししなくていい範囲で何とかしてほしい、お前達が必要以上に睨まれる要素を減らす。待つ理由は、主にこの2点だな。」

もどかしい気持ちはよく分かる。色々とばれている自分の世界なら、とつくに手を出している自信があるからな」

「うー、悪い意味でドキドキや」

落ち着かない【八神はやて】は、とりあえず放置して。

「エリオ・モンディアル」が音に気付き、「ヴィヴィオ」がマンホールから登場。

「ふむ、周囲がまるで気にしていない音に気付くとは。

流石はエロオ、女の子には敏感だな？」

「茶化してる場合ぢやう！ つと、一斉通信やな」

『こちら、ライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します！』

「キャロ・ル・ルシエ」の報告は、原作同様。ケースを開けてないから、レリックが無い事には気付いてない。

それを受けて「高町なのは」がお休みの中断を宣言、「フェイト・T・ハラオウン」が救急の手配や「スバル・ナカジマ」と「ティアナ・ランスター」の移動を指示。

そんな中、「八神はやて」はと言うと。

「全員待機態勢。席を外してる子達は、配置に戻ってな！

先ずは、その女の子を安全確実に保護するよ！」

お姉様の入れ知恵のせいで、レリックの話が抜けた。

バタバタと人が動いてるけど、ヘリで現場に向かう人員や、市街地や海岸線を担当する部隊に戦闘の可能性を知らせてある点までは変化無し。

「八神はやて」は移動せずに、聖王教会にいる「カリム・グラシア」、「クロノ・ハラオウン」、「八神シグナム」に連絡してるけど。これはきつと、お姉様がいるせい。

「レリックはエヴァンジュさんが確保済みという事や。

残るは、聖王陛下の違法なクローンとはいえ、普通の女の子。きちんと保護せなあかん」

『本当に現れるとは、な。

問題はガジェット・ドローンや戦闘機人の動きだが……』
「それは私が説明しよう。」

現在、海上と地下水路からガジェット・ドローンが侵攻中だ。特に海上は、クアットロがレアスキルの幻影で増量する準備をしてあるようだな。

ヘリの狙撃にデイエチ。恐らくサポートだろうが、少し離れてトーレ、セイン。さらに少し離れた海の方に、クアットロ。

地下水路に近い位置に、ルーテシア、ゼスト、アギトの3人。それと、どうも水路の方に向かっていると思われる、チンク、ノーヴェ、ウエンデイがいるんだが……この3人の動きが気になる。稼働が長いチンクはともかく、ノーヴェとウエンデイは調整が終わっていないはずなんだが」

「ゼスト・グランガイツ」が来てるのは、まあ解らなくはない。

でも、原作的にも「ジェイル・スカリエツテイ」からの情報的にも、「ノーヴェ」と「ウエンデイ」の武装が調整中なのは間違いない。

特にノーヴェは、原作でも出撃を止められてた……けど、何という事でしょう。止める立場だった「ジェイル・スカリエツテイ」と「ウーノ」は、既にこつちに来てるではありませんか。

『6課で対処は?』

「今、なのはちゃん、フェイトちゃん、シャマル、リイン、ザファイラがヘリで現場に向かってくれている。

少なくとも女の子をヘリに収容するくらいの時間はあるそうやし、フォワード達に地下水路の、フェイトちゃんとリインに海を、シャマルとザファイラにヘリの守りを任せる予定や。逮捕はシグナムに任せるから、早目に向かつてな」

『了解しました。では、早速』

「ついでに言えば、こつちのシャマルとザファイラも支援の為に送り込む予定だ。

Sランク相当の砲撃は少々荷が重いかもしれんが、4人いれば何とかなる。魔力が似ているから誤魔化しやすいしな」

夜天の魔道書の有無のせいかな、細かく調べると違いはあるけど、普通は気付かない程度には似てる。

ついでに言えば、主とシグナム、ついでにはやとリインフォース姉妹とヴィヴィオもここに手を出せるように待機予定。

地下水路にお姉様、高町恭也、高町美由希、トーレが。海にプレシア、セツナ、フェイト、ヴィータ、高町なのは、クアットロが。それ

ぞれ手助け出来るよう準備してるから、別に偏ってるわけじゃない。どこも全力なら間違はなく過剰戦力になるし。

そんな感じで、お姉様達が表に出ないまま、事態は着々と進行してく。

「八神はやて」が私と一緒に司令部に向かうと同時にお姉様が別荘に引つ込み、【高町なのは】達が現場に到着し、ガジェット・ドローンを機動6課でも捕捉し、【八神ヴィータ】と【ギンガ・ナカジマ】が戦力に加わり、フォワード達が現場調査を始め、【フェイト・T・ハラオウン】と【リインフォースII】が海上へと向かう。

この辺の多くは、割と原作同様。

明確な違いは、ヘリにザファイラが搭乗している点、【八神はやて】に私が1人同行している点。

それと。

『ルーお嬢様はあ、地下のレリックを探して回収して下さいねえ。』

邪魔する人がいますけどお、気にせずやっつけちゃって大丈夫ですからあ』

【ルーテシア・アルピーノ】に指示をしているのが、【クアットロ】になってる点。

【ルーテシア・アルピーノ】の横に【ゼスト・グランガイツ】と【アギト】がいる点も。

だからか、指示の内容もレリックに絞られてる。【ジエイル・スカリエツテイ】と【ウーノ】が不在だし、それを誤魔化す為にも、本人の目的に沿わせてる感じ。

とりあえず事態は原作からあまり乖離しない。

ある程度の戦闘の後、【クアットロ】がシルバーカーテンで幻影のガジェット・ドローンを出すところまでは。

「航空反応、増大！」

これ……嘘でしょ!？」

「実物に近い反応をする高度な幻術や、解析用のパターンは一応入手してる。」

「チャチャちゃん、情報よろしくな」

「解った」

通信用に調整済みの私達のデバイスから、情報転送を開始。

元ネタは予め解析しておいたクアットロの情報だけど、同じやり方で識別出来る点は既に確認済み。こんな事もあるうかと、とか言う雰囲気じゃないから、これはちよつと自重。

あと、識別は戦闘中の個人でやれる処理じゃない。負荷が大きくて、戦力低下が激しすぎる。

「識別成功……？」

全体の9割が幻影ですが、遠方にも実機が存在しています！」

「情報をフェイトちゃん達と陸士部隊にも送ってな。」

グリフィス君は航空武装隊に応援要請。範囲が広すぎるし、相手は今の所ほとんどが海上や。なのはちゃん達と陸士隊では対応し切れへん」

「了解！」「了解です」

まあ、航空部隊は当てにしてないけど。

少なくとも最速で情報を渡した事実があれば、後々つつく材料になる。

というか、材料にするための応援要請。

そんな感じで慌ただしい様子を、別荘から見ているお姉様はと言うと。

「エヴァンジュお嬢様あ。」

あのガラクタを操って被害を出させるのは、どれくらい後ですかあ？」

「通信網の掌握は完了している。いつでも可能だよ」

「せめて10分か20分くらいは待ってやらないとな。」

急げば間に合ったと思わせないと、反省も出来んだろう」

「了解ですう」

クアットロやジェイル・スカリエッティと一緒に、絶賛悪巧み中。

具体的には、遠くにいるガジェット・ドローンの制御を乗っ取り、その付近の「お姉様の好みでないモノ」に被害を出させる。

最高評議会関係の犯罪者に被害を与え、航空隊の動きの遅さを浮き

彫りにし、用事が終わったたら要らないモノの機能を落として排除して
もらおうという、無駄のない計画。

「さて、海のゴミ掃除は任せるぞ。」

私は少し話をしてくる」

というわけで、お姉様が転移。

行き先は、ゆっくり接近してきている【ゼスト・グランガイツ】の
一行。

「……突然だな」

残念、【ゼスト・グランガイツ】はお姉様に慣れてしまった。

臨戦態勢になってない以上は敵対する気は無いんだろうけど、警戒
心は相変わらず。

【ルーテシア・アルピーノ】は驚いてるだけで、【アギト】は臨戦態
勢に見える。

（予定通り、可能な範囲で精神干渉。ルーテシアの思考を矯正するぞ）
了解。

外部からの干渉は既に妨害してるから、後は本人に仕込まれた部分
を改善。

何をどうやったかのは【ジエイル・スカリエツィ】の証言で判明
してる。即時の除去は不可能でも、強制認識やらを使って、緩和くら
いはやって見せる。

「なかなか連絡が無いから、来てしまったぞ。」

それと、スカリエツィを引き抜いてからクアットロの動きがおか
しいんだが、お前達に妙な影響があったなら謝罪しよう」

「そうか、クアットロが口煩くなつたのは、お前達の影響か。」

改めて聞くが、時間の猶予ほどの程度残っている？」

「クアットロやドゥーエの行動次第だ。最速の場合、今日中に事態が
大きく動く。」

逆に……そうだな。今なら、直ぐにレジアスと会わせる事も可能
だ。突然押しかけても、お前なら話ぐらい出来るだろう」

まだ【レジアス・ゲイズ】と接触してないから仕方ない。【ゼスト・
グランガイツ】抜きでの接触は決裂しか想像出来ないし。

その【レジアス・ゲイズ】は、ガジェット・ドローン大量発生と機動6課からの応援要請の報告はさつき受けてた。出動を指示して伝令が退出した後は【ジェイル・スカリエツィ】と【八神はやて】を罵倒しまくってるけど。

部屋には、他に誰もいない。絶好の襲撃日和。

「そうか。だが、計画の割り込みになるのだろう。問題は無いのか？」
「無いな。どうせお前を連れていくことを先に伝える事は出来んし、事態が動いた後では会話自体が無意味になりかねん。その意味では、タイミングとして今でもかなりギリギリだ。」

私としては、もう少し余裕があると思っていたんだがな」

「ふむ……」

「……母さんは……？」

考え込んだ【ゼスト・グランガイツ】にかわり、【ルーテシア・アルピーノ】が控えめな声で質問。

その肩付近にいる【アギト】の表情は相変わらずだけど、話を中断させる気は無さそう。

「体の維持は今も行われているようだし、望むなら、すぐにでも連れてきて治療を行おう。」

時間の問題で、ゼストの話の方を優先させてもらうが……事態が動くか、クアットロ辺りが余計な事をするまでに決断したなら、治療成功を確約しよう」

「そう……わかった。お願い」

「うむ、了承した」

細工は流々、仕上げはご覧の通り。【ルーテシア・アルピーノ】自身が望んだと、【ゼスト・グランガイツ】と【アギト】に認識されたから、設定目標をクリア。

では早速、【メガーヌ・アルピーノ】の回収から。

治療はすぐ始められる。でも、意識の回復は保留で。どうせすぐには効果が出ないし。

「んじゃ、次はアタシだ。」

研究対象にする必要が無いって事、どうやって信じればいいんだ

？」

融合騎として散々な目に遭ってた【アギト】の心配は、理解出来る。口先だけなら何とでも言えるのは確かだし。

「ふむ……なら、これでどうだ？」

「私も融合騎の一種だからな。もつとも、適合率は恐ろしく低いが」お姉様、ベルカ式の魔法陣を出して、モードチェンジ。名付けて、妖精モード。

外見は幼女のまま30cm程に縮むだけとはいえ、今回だけでお蔵入り予定。

なんてもつたいない。

「え……うそ……だろ……」

「嘘に見えるか？」

研究対象に見られて嫌な思いをする事は、私も共感出来る。それに、融合騎の構造や作り方も知っている。研究しない理由はあつても、する理由や意味は無いわけだ。

そうそう、多少手を入れる事になるし、時間制限やらが付くが、お前も10歳程度の人の姿になれるようにする事も出来ると思うぞ。私はそっちの姿の方が安定するんだがな」

お姉様、幼女モードに復帰。

【アギト】の人間サイズ化は、アギトで使った手法を流用出来る、といいな。破損してる機能の復元と強化が主体だけど。

難点は、アギトもまだ常用出来るほどには安定してない事。元がユニゾンしない戦闘時の身体能力向上が主目的の機能だけに、燃費が悪いし、長時間の連続使用が想定されてない。

「そんなわけだから、まあ、あれだ。

同胞を歓迎する事に問題は無いだろうか？」

蛇足：StrikerSのはずだった何か 07

お姉様が3人とオハナシしている頃、地下水路ではなかなか激しい戦闘なう。

フォワードの4人は協力して戦闘してて、とりあえず劣勢にはなっていない。

問題は、まだ合流出来てない「ギンガ・ナカジマ」。

それと、その前にいる「チンク」達。

「私達は、確かめたい事があるだけだ。

邪魔するなら排除する」

「私は管理局員よ。」

こんな事をしてる人を見て、はいそうですかって引き下がれないのよ」

うん、一触即発の気配。

「ノーヴェ」もやる気だし、「ウエンデイ」はやる気はともかく戦闘態勢ではある。

仕方ないから、先生、お願いします。

「止めんか！

こんなところで争っている場合ではない！」

というわけで、ぴっちりスーツ着用のトーレを投入。

当然のように通信は妨害中。

「あれー？ トーレ姉もこっちだっけ？」

【ウエンデイ】が不思議そうにしてるけど、ここは勢いで押し切るべき。

「ここしばらくドクターやウーノを見かけないと思っていたが、今回の件はクアットロの暴走らしい。

ドクターはガジェット・ドローンを動かす指示をしていないそうだ」

「だが、あたし達の王様は見ておきたい」

不満そうな【ノーヴェ】が、原作でもあった気がする要求を言うけど、これに関してはぶっちゃけ期待するだけ無駄なレベル。

「ドクターが得た情報だと、聖王のクローンである事は确实だが、記憶も能力もマトモに発現していない、世間知らずで臆病な子供らしい。道具としての価値はともかく、現時点で王の資質が見えるとは思えん」

「……わかった」

うん、「ノーヴェ」の興味が急速に薄れた。

これで突撃は防げたかな。

「もう一度言うが、今回の件はクアットロが原因らしい。

あれが何を企んでいるか解らん以上、ドクターとの合流を優先しろ」

「了解した」「わかった」「あいよー」

「逃がしません」

ああもう、3人の誘導が成功したのに、「ギンガ・ナカジマ」が真面目過ぎて困る。

トーレを含めた4人を相手にしたら、勝てるわけがないのに。

「生憎だが、ここで戦う気は無い。

だが、どうしてもやると言うなら相手になろう」

とりあえず時間稼ぎというか、3人を引き離すのが先決。

話は……連れてきたウーノの方が早いか。

妨害を迂回して通信オープン、つと。

『チンク、ノーヴェ、ウエンディ。』

経路を指示するから、3人はその場を離れなさい』

「タイプゼロは？」

『今は必要ないわ』

「了解した。トーレ、この場を頼む」

「任せよう。早く行け」

よし、これでお話の準備が……うん、整えられる。

【チンク】達が移動していった方に防音結界を張って、と。

「……？ 何を考えているのです？」

突然構えを解いたトーレを見て、【ギンガ・ナカジマ】が怪訝な顔をしてる。

「戦う気は無いと言ったはずだ。」

説明は私ではなく、信用出来る筋から受けろ」

『そんで、援護に向かってもらえば、つて、なんやチャチャちゃん……え、もう聞こえてるんか?』

「え? 八神部隊長ですか?」

『あー、こほん。突然やけど、その人は協力して……もうちよい言つてええか? うん、裏側から協力してくれてる人や。』

近いうちにちゃんと説明するから、今はうちのフォワードの援護に回ってもらつてええか?」

あと、ちよーつと訳ありで情報を出せへんから、さっきの3人も反応を追おうとしたけどガジェット・ドローンの妨害があつて接触出来へんかった、反応がロストしたからうちの援護に回つたつて事にしてもらえるのと有り難いんやけど』

「ええと……よく解りませんが、事情があるのででしょうか?」

『色々を抱えてるんよ。』

とにかく、ガジェット・ドローンが多くてスバル達も苦戦してるよ
うやし、詳しい話は後回しや。早いとこ援護お願いな?』

「解りました」



その後は、ほぼ予定通りの展開に。

砲撃は「八神シヤマル」と「八神ザフィーラ」に加えて、海に行かなかつた「高町なのは」がきつちりと防御。その後は「デイエチ」は
応援に来た「シヤツハ・ヌエラ」が、「トーレ」と「セイン」は「高町
なのは」が捕らえた事になった。実際はアレだけど。本気のリイン
フォースとヴィヴィオおつかないです。

海上のガジェット・ドローンは、リミッターを解除した「フエイト・
T・ハラオウン」と「八神ヴィータ」に凄いペースで落とされつつ、一
部が暴走（誰のせいかはナイシヨ）して研究所っぽい施設やらに被害
を出した。もちろん、その後で出動してきた局員とも激しい戦闘をし

てて、徐々に数を減らしてる。

地下のガジェット・ドローンは現場の5人の活躍と、ひっそり行われた高町兄妹の腕試しで無事排除され。

捕まえた6人の戦闘機人は、ジェイル・スカリエツティとウーノと「ウーノ」に現状の表向き情報と一部の真実を説明されて、とりあえず大人しくすることを決めた。この際に「トーレ」は抵抗しようとしたけど、トーレに拳で黙らされた。

武力鎮圧で思ったより余裕があったから、改造しすぎたかなと、ちよつと反省。

起動してない3人の戦闘機人も生体ポッドごと確保済みだから、現時点で既に、残るは「クアットロ」と「ドゥーエ」の2人だけという有様。

そして、お姉様達はと言うと。

「邪魔するぞ」

「久しいな、レジアス」

部屋に1人でいる、「レジアス・ゲイズ」を襲撃中。

お供は「ゼスト・グランガイツ」、「ルーテシア・アルピーノ」、「アギト」の3人。

勿論、移動の道中で色々とお話なんかをしてある。

「何者！……だ……」

最初は怒鳴ろうとしてた「レジアス・ゲイズ」の声が、急速に萎んでく。

ものすごい顔になってる。

「聞きたい事は、1つだけだ。」

8年前、俺と俺の部下達を殺させたのは、お前の指示で間違いないか」

静かに語ってる「ゼスト・グランガイツ」。その表情に、感情はあまり見えない。

向かい合う「レジアス・ゲイズ」の顔は、蒼白だけど。

「俺はいい。お前の正義の為になら、殉じる覚悟があった。」

だが、俺の部下達は、何の為に死んでいった。その娘は、何故実験

体になっている。

共に語り合った、俺とお前の正義は。今はどうなっている」

「……力が、必要だった」

観念したらしい「レジアス・ゲイズ」が、ぽつぽつと語り始めた。

「地上には金も人も足りん。人を育てても本局に持って行かれる。

だから俺は、戦闘機人の研究に手を貸した」

「違法と知りつつも、最高評議会の誘いに乗ってか」

「そうだ。」

地上の平和を守るには、本局に持って行かれない戦力が、どうしても必要だった」

「正義は、消えたわけではないのだな」

「……ふう、そんな事だろうと思った」

そろそろ頃合いと見て、お姉様が介入開始。

とりあえず、ため息から。

「色々言いたい事はあるが、とりあえずこれだけは言わせろ。」

お前、阿呆だろう」

「小娘に何が解る」

「見かけに騙されるから阿呆だと言っている。」

犯罪に手を貸す前に、犯罪者を身内に抱える事で管理局の対処能力が数割落ちている事に気付くべきだったな。下手をすれば半減しているぞ？

管理局は本来、もっと力がある組織のはずだ。今の人員であってもな」

「知った様な事を抜かすな！」

「犯罪行為や犯罪者を隠蔽する労力。真実に気付いた局員の処分。これらが管理局の力を削る事くらい解るだろう？」

戦闘機人に関して隠蔽されていなければ、ゼスト達も死ぬ必要は無かったはずだ。

優秀だが最高評議会に反抗的だという理由で左遷されたと思われる者もいる。

地上と本局の間に溝がある事で協力体制が作れず、調査が進んでい

ない事件もある。

何より、真実に気付いた、気付きかけた者が“処理”されているのが問題だ。そんな不穏な空気を感じ取った優秀な卵達が自衛に入るか表の事件に忙殺され、お題目に踊らされる正義馬鹿が暴走するようでは、組織の実力など出せるわけがないだろう。

何も知らないと言いたそうだから、そろそろこれを渡しておく。簡単に調べてみた、ここ最近の殉職及び死亡退職に含まれる“消された可能性が高い人物”の情報だ。

詳しく調べた人数は少ないが、無視出来ない割合で該当したぞ？」お姉様が投げたのは、紙の束。内容は“明らかに消されたと断定出来た”殉職者及び死亡退職者に関する調査結果、6人分。

ミッドチルダに限定、かつ、簡易調査で怪しそうな人30人弱に絞ってからだけど、詳細調査で黒と言えたのが2割以上。グレーはリストに入れてないし、決して嘘は言っていない。

ちなみに調査は「ユーノ・スクライア」大先生と変態^{ロリコン}、それに「リンドン・ハラウン」を中心に行ってた。もちろん、「アルフ」やアルフや私達も盛大に手伝ってる。

ある程度の情報を見る権限は大事だし。

ここの無限書庫はお姉様の技術が入ってないから、調査が面倒だし。

「黙れ」

「さて、それは何の為に必要だった？」

体制の維持か？ 権力の維持か？ それとも、最高評議会のご機嫌取りか？

そもそも、お前の目標は何だ。その為に使った手段で、何を犠牲にした。

今、海の方を荒らしているのはスカリエッティが作った兵器だが、スカリエッティを支援しているのはお前達だ。平和や正義を願いつつ、自らそれを犠牲にする矛盾に、いつ気付けるのだろうか」

「黙れ！」

「私は、犯罪者を利用するなどは言っていない。利を得るために汚い

手段を使う事も、大を助けるために小を犠牲にする事も、必要な場合がある。と知っている。大きな国や組織ならそれを正義の為だと言いつ張るだろうし、仮に小の側に真の正義があつたとしても、敗者になつた時点で悪に塗り替えられる。歴史など勝者が語る物であり、真実など闇に葬られるのが常だ。

それでも、あえて聞くぞ。

今の手段に納得し、望んだ結果を得られているか？」

「何も知らない小娘が、理想論を語るな!!」

「私は、今は無い国で兵器として作られた存在だ。この手で殺した人数など億の単位でしか数えられんし、下らない理由で始まつた戦争が正義の為だのと公表されるのも散々見てきた。

国が他国で犯罪者を利用する事など常識、自国の国民から搾取するのも常識、敗戦国が全てを失うのも常識。戦争の現場に正義は無く、残されるのは凄惨な破壊の痕だけ。そんな時代であっても、その国が減ぶ切つ掛けになつたのは怨念だ。

私には、今の管理局が同じ道を歩みつつあるように見えるぞ」

「レジアス。エヴァンジュを……この者を見かけで判断するな。

俺達よりも人の裏側を見ているはずだ。

それに、実験体や研究材料になる身の辛さは、想像を超える。目的が無ければ生きる事に絶望し、全て滅べばよいと考えても不思議ではない程にな。

同じ倫理観があれば、人としての意識を持つ戦闘機人が同じように思つても不思議ではない」

血管が切れそうな「レジアス・ゲイズ」を、「ゼスト・グランガイツ」がちよつとクールダウン。

実験体云々は……自覚の有無はともかく、ここに連れて来た3人全員が経験あり。

経験者が語る。

「……戦闘機人は、戦力にならんという事か」

「管理局が率先して開発していたと知れば、反抗心や怒りが管理局に向く可能性があると言っている。そうなれば、戦力どころか敵を増や

す結果に繋がる事も有り得るだろう。

逆に倫理に疎いなら、治安を任せる事など出来ん」

「……ならばどうすればいいと言うのだ！」

人が足らん、金も足らん、戦力も増やせんでは、平和は守れんのだ
！」

「エヴァンジュが言っていたはずだ、管理局の実力はこんなものではないと。

機動6課の八神はやて部隊長が、地上部隊は承認ばかりで動きが遅すぎる、そこに風穴を開けるために部隊を持ちたかつたと言っていた。

拙速が良いとは言わん。だが、隠蔽の為の無駄な手続きが横行しているのなら、俺は八神はやてを支持する」

「ゼスト……儂は……」

「今からでも遅くないはずだ。

管理局が、最高評議会が本来の役目を果たせなくなっているなら、それを正すのが俺達の正義ではないのか」

お姉様のお話、つまり現状の正確な情報と今後の予定、それと、親友だからこそ道を間違えた友を正しい道に連れ戻して見せろという発破は、予想以上に「ゼスト・グランガイツ」を動かしてる。

これ以上は、お姉様が悪役になる必要も無さそう。後は暑苦しい友情に任せるよろし。



一方その頃、とある場所では。

「ジェイル、何をしに来た!？」

「何故ここまで」

「どうやって来たのだ」

「お別れを言いに来たのだよ」

3個の脳味噌と【ジェイル・スカリエツィ】が面会中。

まあ、一方的に押しかけたただけなだけ。

「ここに来たのは簡単だ。協力者がいるのだよ」

そう言う【ジェイル・スカリエツィ】の隣に歩いてきたのは、メンテナンズしてる時の姿になったドゥーエ。

ちなみに【ドゥーエ】はカイゼが捕縛済み。転送後5秒の早業だった。

暗殺（？）スキルばねえ。

「何故お前が!？」

「馬鹿な!」

「最初から、この時の為に来ていたからですよ。

身に余る力では、望む物を得られない。

手綱も握れない暴れ馬が、勝手に動き出すのは当然の事。

これは、成るべくして成った結果です」

にこやかに語ってるドゥーエだけど、様子を覗いてるお姉様が複雑な表情をしてる。

目の前で【ゼスト・グランガイツ】と【レジアス・ゲイズ】の話が続いてるのに。

内容が【ルーテシア・アルピーノ】や【アギト】について、それも死んだ部下の娘だとか、違法研究の対象になってたとか、かなり深い部分に関わってるから、逃避したくなってるのは解る。けど、逃避先が悪かった。

「さて、今後についてだが……殺すのは止めにしたよ」

「ジェイル、何を……」

「本来であれば、退場して頂くこうと思っていたのだがね。

だが、より興味深い事が見付かってしまったのだよ。そして、それを追うには今までの経歴が邪魔になる。

「聡明な最高評議会なのだ、意味は理解出来るだろう?」

「夢物語だ」

「闇に生きた者は、陽の当たる場所には立てん」

「ククク、今の陽は、時空管理局という寛容な組織の威光だよ。

恩赦や司法取引といった、犯罪者を救う制度がしばしば用いられているのだ。その実態を知る私が、それを使えないとも思っているの

かね?」

「ジェイル。お前を恨む者は多い。

簡単には許されぬ」

「罪の重さは、理解しているよ。

だが、ここにそれを背負ってくれる人物が3人もいるのでね」

「それぐらいにしたらどうだ」

「やれやれ、これはとんだ大物だ」

ようやく到着したのは、「八神シグナム」と「ヴェロツサ・アコース」。

逮捕と査察の実行役。英雄という名の生け贄とも言う。

「ジェイル。まさか、本気で……」

「さあ、始めようじゃないか。腐った組織の大手術だ!」



最高評議会に対する総攻撃（ふくろだたき）（罪状やら逮捕の事実やらを表に出すパフォーマンズ的な意味で）の準備が着々と進む中。

某所のアジトでは、「クアットロ」が必死でキーを叩いてた。

「何で何で何で!?!」

ドクターの夢が……! 世界が、楽園が……!!」

鬼気迫る表情だけど。

留守の間にシステムを制圧してありますから。残念っ!

しばらくダミーデータと戯れるがよいわ、ふははははー（棒読み）。

とりあえず、逮捕可能な誰かが到着するまで。

具体的には「フェイト・T・ハラオウン」が着くまでだけど、途中のガジェット・ドローンが多すぎて、ちよつと時間がかかっている。

移動する先に紫やら金やらの雷がどっかんどっかん落ちてるのは、想定内の範囲内。時間の短縮になるし、やり過ぎなければいいや。

「フェイト・T・ハラオウン」も誰がやってるかに気付いてて、ちよつと嬉しそうだし。

「私は、ここにいてもいいの?」

「ややこしい話は、立場のある大人に任せればいい。」

それに、誰だつて家族の心配はするさ」

そして、お姉様と「ルーテシア・アルピーノ」は、別荘の治療施設へ。

「メガーヌ・アルピーノ」は現在、ここで治療中。3人の未起動戦闘機人も、今のところはここで預かつてる。

「違う。この場所、この世界は、おかしい。」

ミッドチルダから転移出来るはずなのに、座標が解らない」

「そっちの話か。どうも特殊な場所らしく、私の様な特殊能力持ち以外は転移出来ん場所らしいぞ。管理局にも見つかっていない隠れ里のようなものだな。」

誰かに言っても信じられんだろうから、おかしな人や密航者と言われたければ言いふらせばいい。そうでなければ、事情を知る者に限っておくことだな」

「誰なら大丈夫?」

「今のところ、機動6課の課長隊長副隊長、スカリエツティとウーノ、聖王教会のカリム、本局のクロノとリンディとユーノ。」

多少漏れはあるし、今後増えるだろうが、この辺なら問題ないだろう」

漏れてるのは、シャマル、ザファイラ守護騎士2人、アルフ使い魔、戦闘機人6人、一緒に別荘へ来た「アギト」。

多少ってレベルじゃない気もする。

まあ、特に「アギト」はアギトとのご対面（転移直後、説明前）で目を回してたから、大丈夫と言っていいか微妙だけど。

「わかった。母さんは?」

「1か月以内には目覚めるだろうが、事態が落ち着いたら機動6課か聖王教会で保護する事になるんじゃないか?」

存在を隠し過ぎると普通の生活に戻れなくなるからな。恐らくは、お前の教育やらと一緒に検査やら療養やらをする事になるだろう。体力が落ちているから、トレーニングも必要だ。

最悪でも、一緒に暮らせるようにはする。それに、相談には乗るぞ」
「うん」

蛇足：StrikerSのはずだった何か 08

ミッドチルダを初めとした、時空管理局が言う所の「管理世界」は、大騒ぎなう。

震源は、ミッドチルダ。

先ずは、地上本部のトップと、公式指名手配されてる犯罪者と、8年前に死んだはずのストライカー級魔導師が、並んで最高評議会の犯罪を告発。

その直後に機動6課の突入と最高評議会の逮捕が報告され、聖王教会との関係が強い査察官が同行してる等、「一部の腐敗した上層部」と対決する陸と海の実行部隊や聖王教会という演出も開始。

人員の多くが本局所属の地上部隊で、聖王教会との関係も強い機動6課の立ち位置って便利。ここが動いて上手く情報を広めるだけで、これら3組織が協力してる様に見せられる。

ついでに、伝説の3提督からの支持も、秘密裏から公然のものに切り替え済み。これにより、上層部全てではなく一部の腐敗である事を強調したりもしてる。

「けど、準備不足やね。必要な人手が全然足らへん」

だから、「八神はやて」が部隊長室で疲れた顔を見せてるのは仕方ない。騒動の中心付近、実働部隊の中心にいるのは間違いないし。

局員や協力者に該当する人達は忙しく走り回ってるけど、部隊長は指示を出し終えたところ。

そんな感じで、お茶とお菓子を手に束の間の休憩中。

「私達の時は、まだ準備期間があったからな。レティやグレアムも先に巻き込んでおいたし、無限書庫も掌握済みだった。

その意味では、こちらの方が少々強行軍ではあるが……想定していた状況でないという点では大差無いぞ」

「グレアムおじさんもなんか？」

「夜天の魔導書の治療直後、要するに闇の書事件の最終段階で事態が動いてしまったからな。

本来は私の関与を隠すために人を集めていたんだがなあ……」

「関与を隠すつて、要はここそこそしとったんか。

なーんか、今みたいな感じやね?」

「私の様な存在は本来、表に出るべきじゃない。

まして、権力の頂点に立つなど間違っている。『空の網』や『終わらせる者』に勝てないからと言って、そいつらを権力の頂点に据えるようなものなんだが」

「ででんでんででん、な曲でおなじみのあれやね。人に作られたものって点もやし、過去に介入するのと、並行世界に介入するのも似たような感じや。」

けど、エヴァさんは別に、人類相手に反乱を起こしたとか、人を滅ぼそうとしとるわけやないよね?」

「過去にそんな事もあつた様な気がしないでもないが……まあ、現時点ではそうだな。それでも、人でない者、不老不死の化け物が上に立つと言うのは、色々都合が悪いんだぞ。」

老化やらを理由に引退出来ない、とか。

身分制度とは比べられない程に、地位や権力が人の手から離れてしまふ、とか。

アレに任せとけばいいやと下の連中が無気力になる、とか。

頂点に上り詰めようと張り切る権力者の勢いがなくなって、結果的に政治が停滞する、とか」

「最初のは個人的やけど、外のは割と真つ当な理由やね。」

けど、エヴァさんは自称悪人のお人よしやつて聞いているよ」

「こつちでは悪人だと名乗つていなかったはずだが?」

それに、少なくとも善人でないのは確かだ」

「見捨てる見捨てる詐欺をよくする自称悪人てプレシアさんが言つてたつて、フェイトちゃんから聞いてるよ。」

敵対すれば厳しいけど、そんな相手を傷付ける事すら、自分の為に言いながら誰かの為になつてるつて」

「プレシアか……意趣返しのももりか?」

誰かの為と思って行動しているわけではないんだがな」

「プレシアさんを助けたのも立場を利用する為のはずやのに、先払い

で問題の殆どを解決した上に、協力自体が追加報酬に繋がるやり方
やったって。

アリシアちゃんはそれで救われたし、フェイトちゃんも傷付かんで
済んだんやろ？ その上、今はみんなが家族で大事にされてるって」
「う……ま、まあ、確かにそういう手法は使ったが。

それは、あれだ。信賞必罰というか、盛大に恩を売っておけば裏切
られにくいというか、結果的にそうなっていたというか……」

「照れんでええよ。やっぱり、エヴァさんはツンデレさんや」

「ちっがーうー！」



一方、その頃。

とある隠された場所では。

「ふむ、やはりこの方法で起動する事は不可能のようだ。予測通りで
はあるが、残念だよ」

「そうですね。それでは、第2案を試してみましょう」

ヴィヴィオとジェイル・スカリエッティが、聖王のゆりかごの起動
に失敗してた。

目的は、この世界の【聖王のゆりかご】の保護。原作通りに破壊す
るのは、改造中の……じゃない、完全稼働状態で確保済みの聖王のゆ
りかごに影響する可能性を考慮して避ける方針。

ヴィヴィオによる起動が出来たらよかったけど、やっぱり多重接続
に無理があつた。予想通りだから、他の案を順に試していくだけだ
けだ。

「あのマテリアルを使えば、確実に起動出来るのだが。

それは本意ではないかね？」

おまけと言っちゃなんだけど、【ジェイル・スカリエッティ】もいる。

【ヴィヴィオ】用、正確には聖王のクローンでも起動出来るようあれ
これ弄つてあるらしく、その解説役として同行してる。

「はい。私の対となる存在ですが、一般人として過ごさせるなら、それも

また一つの可能性として見てみたいですから。

起動の鍵として使ってしまったら、必要以上に縛られてしまいます。最悪、その力を借りる必要がある場合でも、私が矢面に立ちますが」「最初から矢面に立つ事が組み込まれているのだ。

鍵の存在を隠すのは容易、むしろ無理に表に出さない限りばれることは無い。計画通りだよ」

ジェイル・スカリエツティが言ってる通り、計画ではヴィヴィオが「オリヴィエ」として表に出る予定。

起動の目処がつき次第【クロノ・ハラOWN】に連絡を入れ、クラウディアを中心とする次元航行部隊の一斉砲撃で撃沈、に見せかけて別荘に確保する計画。

【聖王のゆりかご】を宇宙まで移動させる途中に、ヴィヴィオが【カリム・グラシア】経由で聖王教会に通信を入れ、一方的に宣言をぶちかます事も予定済み。

「では、レリックを直接使用しての制御を試してみるところでしょう。

完全起動には程遠いが、移動くらいは可能になるはずだ。変に弄られている部分が干渉しなければ、だがね」

玩具を手にした子供のごとく、わくわくしてるジェイル・スカリエツティは、平常運転。

その横で、似たような様子の【ジェイル・スカリエツティ】も、平常運転。

「遊びではないのですよ?」

ヴィヴィオは、自身の力だけだとこれ以上は不可能だし、レリックの解析はジェイル・スカリエツティが行っていたのだし、と、ちよつとため息。

性格やらはアレだけど、2人とも実力はあるマッドサイエンティスト。

天才とナントカは紙一重、ナントカと缺は使いよう。

癖があるモノをうまく扱うのは、大変だ。



そして、聖王教会の病院では。

「申し訳ありません！」

「状況はどうなってますか？」

【ヴィヴィオ】が検査の合間に姿を消して、【フェイト・T・ハラウン】と【八神シグナム】が到着したところだったりする。

人が変わってるのは、多分、ライトニングの2人が行く事になったから。

既に特別病棟とその周辺が封鎖されるのはまあいいとしても、病院にいたシスターや看護師、医師までが総出で探し回って、大騒ぎになってる。

そんな感じだから。

「こんな所にいたの。心配したんだよ？」

中庭で【フェイト・T・ハラウン】が見付けるのは、予定調和として。

「陛下!？」

即座に飛んできて跪きながらも、出歩かないでほしいオーラが漂う【シャツハ・ヌエラ】達の態度が原因にしか見えない。

ぶっちゃけ、ものすごく怖がられてるし。

だから。

「ごめんね、びっくりしちゃったかな。

大丈夫だった？」

普通に優しく接してくれる【フェイト・T・ハラウン】に懐く流れになるのは、仕方ないと言うか。

聖王教会にどっぷり取り込まれるのも避けたいし、何か手を打とうかと話はしてたけど。

なんという、人物入れ替えで部分的原作準拠な展開。

原作準拠なら、この後は機動6課にお持ち帰りして離れたくないとぐずられる。でも、【高町なのは】より子供の扱いが上手い【フェイト・

T・ハラウン】だと、どうなるのかな？



更に、機動6課の食堂では。

「なーんか、私達ってこんなに平和でいいのかな？」

「知らないわよ」

「スバル・ナカジマ」と「ティアナ・ランスター」が、ゆっくりと昼食中。

機動6課も慌ただしく動いているのは確かだけど、フォワードが全員出払うわけにもいかないという事で、2人は待機任務中。

デスクワークが少しあるとはいえ、必要以上に体力を消耗するわけにもいかないから訓練も制限されてるし、時間に余裕がある。

だから、のんびりというか、ぶっちゃけだらけてる。

「フェイト執務官とシグナム副隊長は保護した子のところ、なのはさんとヴィータ副隊長は調査で駆け回ってる。エリオとキャロはギン姉の応援。

八神部隊長達も色々大変みたいだしさー」

「待機だって重要な任務なんだから、我慢しなさい。

権限的に資料のまとめ位しか手伝えないんだし、さつき手伝ってたのだから、守秘義務でガチガチな内容じゃない」

「でもさー、ティアだって何か落ち着いてないしさー」

「そりゃあ、何か他に出来る事があるんじゃないかって思ってるわよ。

けど、私達が見た内容から何かを考察するのは無理なんだし、今は私達以外の誰が戦力として待機出来るのよ」

「肩書上はそうだけどさー」

「じゃあ、少しばかり裏話を聞いてみるかい？」

「……え？」

パスタを口に入れたまま、「スバル・ナカジマ」の動きが止まった。視線の先にいるのは、成瀬カイゼ。

その手にあるのは、コーヒー。

「……アンタ誰よ」

「エヴァさんの部下とえば、理解しやすいんじゃないかな。

関係者である以上、君達も少しは知る権利があるだろうと言っていたよ」

「そう。で、防音の結界まで張って、何を語ってくれるのかしら」

「テイアナ・ランスター」の右手は、フォークを持ったまま。

だけど、左手がデバイスに向かっている。

「今更敵対する気は無いから、心配しなくていい。それに、話をすることは八神部隊長も了承済みだ。」

まずは、この部隊が設立された理由、というのはどうだい？」

「ロストログアの対策を専門に行う事を目的に、試験的に設立された部署。」

「違うんですか？」

「納得出来ない顔で言っても、説得力が無いよ。」

部隊長や隊長がオーバース、副隊長ですらAAA以上で、全員がリミッターを付けてる。その反面、部下は新人ばかり。

表から見える情報だけでも、突っ込みどころが満載だからね。これがどれくらい異常か、理解して……いない人は置いておこうか」

「え？ えつと……」

「スバル、ちよつと黙ってなさい。」

確かに異常ですが、理由を聞いてもいいんですか？」

「最悪の事態は回避され、機動6課の立ち位置が重要になってしまっているからね。」

元々は、聖王教会にいる予言能力者が、管理局の崩壊と思える予言を行った事が発端だよ。しかし、色々理由があるにせよ、地上本部は対策を行わなかった。それに対して本局と聖王教会が用意した手段が……」

「機動6課、ですか」

「そういう事だね。」

聖王教会との関係も強い本局所属の部隊長。

本局のエースオブエース。

本局の提督の家族で、本局所属の執務官。

後ろ盾も、聖王教会と本局の人物。

地上本部に喧嘩を売っていると思われるでも仕方ない人選になっているのは、こういう理由だからだね」

「それでも、必要だと判断したんですね。」

ロストロギアの対策も、まさか偽装……？」

「いや、ロストロギアに関する事件が切っ掛けになるという予言に対応している以上、事件への対応が主任務なのは間違いない。」

事件に対応した先を重視しているだけだね」

「そう、ですか。」

ですが、ここまでの話は、後々公開される内容。嘘ではなくても、真実でもない。

ですよね？」

「テイ、ティアあ……やめとこうよ……」

【ティアナ・ランスター】の眼が鋭く、【スバル・ナカジマ】の顔が情けなくなってる。

もちろん、ある程度資料を理解してるなら気付けるはずだけど、口にしていいかは別問題。

「そうだね。」

では、ここまでは期間限定の秘密、ここからはある程度事情を知っている人限定の話としようか。

何を聞きたい？」

「貴方達について。」

都合よく戦力が出てくるなんてあり得ないし、どう考えても裏側の担当ですよね？」

「うん、そうだね。」

僕達については、多くは語れないけど……そうだね、この法では管理されていない、と言っておこうか。

管理世界の出身ではない異世界渡航者のようなもの、と言えば想像出来るかい？」

「おおよそは。」

エヴァンジュさん達と……恐らくですが、ホテルアグスタで戦っていた人達もそうですよね。

目的は何ですか？」

「現状、正確に言えば最高評議会がのさばっている管理局の在り方だけど、これによる好ましくない影響を受ける事を避けるため、だね。僕達は、好まない影響を避けることが出来て安心。」

君達は、組織の闇や犯罪者を生み出す構造を排除出来てめでたしめでたし。

明かせない情報や人の関与はあるけど、大局的に見てウインーウインではあるね」

「放置は出来なかった、という事ですか」

「こちらにも予言の能力持ちがいてね。」

そうそう、念のため言っておくけれど、予言と言っても未来を明確に知る事は出来ないそうだよ。曖昧だったり抽象的だったりするから、実際に何があるのか、何をすれば対処出来るのかという点では少々頼りない面もあるらしいね。

だけど、原因に心当たりがあり、結果が避けるべき内容である場合は、放置するわけにはいかない。

というわけで、調査と必要な対処に来たのが僕達、という事だ。理解してもらえたかい？」

「……おおおそは」

まだ何か考えてるけど、伝えようとした内容はこれで全てのはず。

最高評議会発の犯罪者が管理外世界に余計な手出しをして大変な事になるのを阻止しに来た、みたいに理解してくれてるといいな。

この内容が、時空管理局の上層部向けの話になるから。

蛇足：Strickersのはずだった何か 09

最高評議会の断罪開始から、1週間が経過。

既に【ヴィヴィオ】を利用せずに【聖王のゆりかご】を起動する目途はついてて、今は、破壊を印象付けるためのデモンストラーションの準備中。

時空管理局の改革については、こちらの世界の人、具体的には【レジアス・ゲイズ】や【クロノ・ハラオウン】達に任せろべき段階になっている。

【ゼスト・グランガイツ】と【アギト】は、【八神シグナム】達と共に現場を駆け回ってる。その過程で【八神シグナム】と【アギト】の仲が良くなってるのは、どう見ても早目に死ぬ気だと思える【ゼスト・グランガイツ】の仕込み。

未だ意識が戻らない【メガーヌ・アルピーノ】は、レリックを抜いて療養が必要になった【ルーテシア・アルピーノ】と一緒に、シヤマル特製カルテ付きで聖王教会の病院に移送済み。概ね被害者という扱いになってるし、カルテの内容も【八神シヤマル】の確認と納得の上だから、後は任せられる状態。

戦闘機人達の大半は【ジェイル・スカリエツィ】の所に戻って、今では助手的な役目を担ってる。【トーレ】はトーレや高町兄妹との手合せやらを通じて少し落ち着いたし、例外は反抗的な【ドゥーエ】と【クアットロ】の、収容所行きになった2人のみ。これくらいは許容範囲か。

というわけで手が空いたお姉様は、別荘で何度も報告書やらを見直してる。

「そんなに見ても、意味は無いんじゃないかしら?」

その様子を見るのは、のんびりお茶してるプレシア達。

特に問題は発生してないのに、みたいな視線で。

「いや……いつもそろそろ終わるといふタイミングで、予想外の事があるんでな。

気になってどうも落ち着かん」

「それでも、報告書を何度も見る意味は無いわ。予想出来ないからこそ、予想外なのだから。」

「ねえ、アリシア」

「だよなー」

「予想外といっても、悪い事だけではありませんよ。」

「次元空間に身を投げたはずの私が保証します」

アリシアとリニスはにこにここと笑ってるし、フェイトも黙ったままうんうんと頷いてるし。

けど、ジュエルシードの時（主様のクローン発覚）も、闇の書の時（ぶつとびナハトヴァール&お姉様更にチート化）も、ついでにアルハザード崩壊時（主様殺害命令）も、お姉様は予想してなかった事態に直面してる。

警戒したくなるのも、理解は出来る。

「想定外の事態に警戒しつつ、例え戦闘中だろうと回復出来る時は疲れを取る。」

「長期戦では重要な事だ」

「戦闘中だろうとって辺りが、無茶言ってる気がするけどね」

高町恭也と高町美由希は、すぐ動けるようデバイスを手元に置きつつリラックスしてる。

その隣にいる高町なのは、役に立つ場面が少なかつたせいかな不満そう。

「解ってはいるんだが……もうすぐ、ゆりかごの偽装破壊だからな。」

何かあるとすればその時か、そうでなければ腐れ脳味噌の悪足掻きか、スカリエツテイの暴走か、帰る時か。

「畏がありそうな場面が、まだいくつもあるんだ」

「立場や今後が気になるのは、ゼストかしらね。」

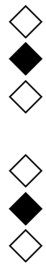
「レリックの回収を拒否されたのでしよう?」
「ロストロギアが埋め込まれている事を公表する為に、実験体としての証拠を残すとかでな。」

「こっちの技術では安全に除去出来ないからと言っていたが……死に急ぐ必要も無いだろうに」

「それもまた、責任の取り方よ。

本人に悪気は無いでしょうし、必要以上に一人で抱え込む点で、誰かさんと同類かしら」

「目的の為に自分を含めた全てを投げ出そうとした誰かさんには、言われたくないな」



別荘はそんな緩い空気のまま、次の日になって。

ミッドチルダでは【聖王のゆりかご】が浮上して大騒ぎ。

その様子を空中モニターで見てる、フル装備のお姉様といつも通りの他の人達がいる。

というか、浮かんでいる空中モニターが多数。どれも内容が異なっていて、中には【聖王のゆりかご】の状況を表示しているものもある。

「起動レベルは想定通りで、状況も安定しているか……」

「当然だよ。本物の聖王核を持つ聖王の協力も、聖王核の模造品であるレリックも、事前調査で得た情報もあったのだ。それらが有効である事が確認出来た以上、失敗する要素など無いと言っているいい。

仮に問題があっても、いくつもの予備策を用意してあるのだよ。文字通り大船に乗った気分ですべて待っていたまえ」

自信満々のジェイル・スカリエツィが、笑ってる。

起動レベルが落ちても破壊予定場所までの移動は何とか出来るよう準備してあるし、最悪の事態に備えて【ヴィヴィオ】も搭乗済み。

同じ名前のヴィヴィオを姉と教えたせいかわいさしい感じに懐いてるし、転送要員やらで一緒に来てる私達ほか数人も、お友達として一緒に遊んだりしてる。予定してる演説の時は、聞かれないよう席を外してもらうつもり。

【クロノ・ハラオウン】率いる艦隊も、巡回任務という形でミッドチルダの近くを通りかかっていた時に連絡を受けたという形で、もうすぐ到着するし。

当然、連絡したのは【ジェイル・スカリエツィ】から話を聞いた

「八神はやて」と「カリム・グラシア」という事になってる。

関係者の多くが関わってるから、何かあっても多くの人が動ける態勢が整ってる。

「確かにそうなんだが……」

「何かあっても、大抵の事はどうにか出来るだけの力は揃っているわ。」

1人で全ての対処をする必要も無いのだから、もっと私達を頼りなさい。

使うのではなく、よ」

「……善処する」

「どこかの政治家の様になっては駄目よ」

そんなゆったりだかグダグダだかの空気のまましばらく時間が過ぎて。

マスコミや市民の目が集まったところで、ヴィヴィオ達による宣言を開始。

『初めまして。私はオリヴィエ・ゼーゲブレヒト、今は聖王等と呼ばれている様ですが、兵器と成り果てた過去の遺物です。』

私が乗るゆりかご……正確には聖王のゆりかごという名ですが、これは暴力の為の力、破壊の為に作られた兵器です。不完全なクローンとして目覚めた私は、残された時間を、平和な世界には不要なこの様な武力の象徴、過去の亡霊を無くす為に使いたいと思います。

今の世の話は聞きましたが、私とゆりかごは、違法な手段、後ろ暗い理由で確保され、目覚めさせられたようです。この身は盗難物を使用したクローン、ゆりかごも身勝手な目的の為に隠されていたと。

話をしてくれたのは管理局の方々ですが、無理に聞き出し、協力を願ったのは私です。

彼等、彼女等を責めないで下さいね』

『時空管理局 本局古代遺物管理部 機動6課 部隊長の八神はやてです。』

突然な話なのは解っていますが、これまでの経緯と現時点での状況を説明したいと思います。

聖王のゆりかごについてですが、最高評議会が王政国家を作るため

の戦力として確保していたようです。そして、その起動に必要な鍵として、聖王のクローンを作ろうとしていました。

その結果として、ここミッドチルダで聖王のゆりかご、そして、聖王陛下の記憶を持つクローンが発見されました。

情報の提供者はジェイル・スカリエツィイ。彼が持つクローンに関する技術的な見地と発見時の状況から、聖王陛下が生きて居られるのは安静状態でもあと数日、活動可能なのは数時間が限界だと判明しています』

「ヴィヴィオのショートヘアは久しぶりだな」

「元に戻すだけで、ばれにくくなるもの。」

もうしばらくこの世界にいる事を考えると、悪くない偽装方法よ」

『聖王教会 教会騎士団 騎士 カリム・グラシアです。』

聖王のゆりかごの歴史的な価値は、確かに計り知れません。しかし同時に、過去にいくつもの国や世界を滅ぼした記録がある、とても大きな危険性を持つものでもあります。

私は今回判明した悪用されつつあったという事実、そして何より、聖王陛下の強い願いを受け、聖王のゆりかごを破壊する事を決めました』

『時空管理局本局 次元航行部隊のクロノ・ハラオウンだ。』

偶然とはいえ近くにいた我々は、確固たる平和への意思を尊重し、聖王のゆりかごの破壊を担当する事となった。

現在我々はミッドチルダに向けて航行中、間もなく到着する』

『ミッドチルダ首都防衛隊代表、レジアス・ゲイズだ。』

地上の平和を預かる我々にとって、このような兵器がミッドチルダに隠されていた事は脅威以外の何物でも無く、犯罪者の手で使われる前に対処出来る事は幸運である。

破壊という聖王陛下の決断を称え、しかし、あまりに急な事態であるが故に通達が間に合っていない事を、地上に住む全ての人々に謝罪する』

「……レジアスまで参加するのかわ」

「青二才だけでは本局の上層部を抑えられんだろう、等と言っていた

そうよ。

地上の平和に対する願いだけは真摯という点で、どちらの世界も同じね」

「ツンデレがデレた……か？」

それとも、燻っていた正義感がミラクルを起こしたか？」

お姉様達は好きに喋ってるけど、放送の多くは既に自称専門家による解説や解析に切り替わってる。

専門分野が政治やら歴史やらバラバラだけど、多くが通信での対応となってる辺り、手当たり次第に連絡して協力を取り付けた感が強い。

それくらいしか出来ないくらい、急な話にしたわけだけど。

「ゆりかご」を破壊する事への反対は、思ったより低調だな。

やはり兵器である事実が、貴重な遺産という価値を曇らせてしまうか」

「どれほど貴重な物か知らないまま、世界を滅ぼした兵器だと言われたのだから、当然よ。

その上、教会の崇拜対象が決断した事でもあるし、しかも教会や管理局の支持を得ている様な内容の宣言付きなのだから。内心では反対であっても、表向きは正負の両面を説明しつつ中立の立場を取るのが限界よ」

「立場を明かして私達が決めたと言っているだけで、教会や管理局の決定だとは言っていないんだがな。

レジアスだけはトップの決断になるし、伝説かつこわらしい提督3人も破壊に関して明確な反対の立場は取らない約束は取れたから、大問題になる事は無いと思うが」

「あら、お偉方の説得は終わったのかしら？」

それに、態々妙な言い方で蔑まなくてもいいと思うのだけど」

「ついさつき、妹達から連絡があったぞ。出来れば賛成の声明が欲しかったところだが、現状では確約しかねるそうだ。情報不足だから妙な言質を取られたくない感じらしいが、これはまあレジアスが補ってくれたか。

そもそも、生きている人物を伝説の存在と言われてもな。過去に活躍したのは事実だろうが、本人がいるのに態々「かたりごと」の「噂話」だと主張する必要があるなら、恣意的な誇張が必要だという事だろう?」

「随分と歪んだ解釈だが、それも人というものだろう。」

真実は伝えられる事も無く、多少関わった程度の事も本人の功績だと持ち上げられ、立場に縛られ、責任に縛られ、役目に縛られる。

よくある、少々目立ってしまった者の末路だよ」

「そうなるのが嫌だから、目立つ身分は要らないと言っているんだがな……」

そんな事を言いながら、待つことしばし。

聖王のゆりかごが大気圏を離脱し、アルカンシエルのやたら広い効果範囲でも地上に影響が出なくなった頃。

【聖王のゆりかご】の玉座では、ヴィヴィオがぐったりとしてた。見かけ上は。

『陛下、脱出を!』

『無理、なのです。』

鍵となった聖王は、ゆりかごの一部となり、兵器として生きる事を、強いられます。

もはや、この部屋から出る事すら、叶わないのです』

『そんな!?!』

必ず戻ると仰っていたではないですか!!』

『今の私は、兵器、なのです。』

お願い、します。私を、人として、死なせて下さい。

私を、人に、戻してください。このままでは、時間が……』

ヴィヴィオと【カリム・グラシア】の悲劇的な寸劇が繰り広げられて。

最終的に【クロノ・ハラオウン】の決断で、聖王のゆりかごはヴィヴィオと共に破壊された。

公式には。

当然、実態はそんなはずがなく。

「エヴァンジュお嬢様あ、任務は完了ですう。

嘘と幻の爆破イリユージョン、如何でしたかあ？」

「流石に、戦艦の砲撃は強力でした……」

「だが、私も手助けしたとはいえ、あと少しであの威力の砲撃を受け切る可能性すらあったのだ。

素晴らしい実力だと言っている」

「偽装の汗が気持ち悪いので、ちよつと流してきますね」

別荘には、やっぱり緩い空気が流れてる。

砲撃前に、「聖王のゆりかご」は聖王のゆりかごの近くへの転移が完了してた。転移以降はクアットロのシルバーカーテンで存在を偽装、砲撃が命中した事を計測させるためのシールドはお姉様のバックアップを受けたセツナが担当して、リインフォースにサポートとフォローを頼んでた。

転移は時間的に余裕を持たせてたし、他の2点は成功すれば計測値として嘘が無くなり、失敗しても情報操作やらで誤魔化せる部分。

安全策は、抜かりない。

その分、ヴィヴィオの汗は水分的な意味で本物になったけど。幻影やらで服や髪のべたつきまで再現するのは、手間ばかりかかって仕方ないし。

【ヴィヴィオ】も機動6課に帰してあるし、これで、私達が関わる必要がある作戦は、一通り終了したはず。

「後は概ね状況を見守るだけだから、峠は過ぎたか。

拍子抜けする程度に順調だが、いい事だ」

では、今後についての注意点を報告。

元の世界とこの世界の、時間経過速度の差が小さくなってる。

既に2倍程度になってて、なおもゆっくりと減速中。

元の世界での時間経過は、現時点で概ね3日半。

これも想定して長期休暇を使った決行になったけど、長居しすぎると色々よろしくない。

「問題は、そっち方面だったか。

想定はしていたが……随分と減速が早いな」

「世界間の繋がりが強固になったという事でしょう。不思議がる必要は無いわ」

「他の世界から切り離され、我々の世界と強く影響しあうようになったのだ。」

我々の世界の時間がこちらの世界の時間に追いつく事になっても、何も驚かんよ」

「そうだが、思ったより減速が早い。」

これは、早めに撤収した方が良さそうだな」

「ええ。フェイトやアリスアを不良にするわけにはいかないもの」

「……まあ、そうだな」

作戦目標はクリアしてるし。

お姉様は時間経過が早い方の世界にいた方が諸々の都合がいいけど、こつちに使い魔や私達が残る気は無いし、これくらいの速度差なら通信も何とかなるし。

というわけで、撤収準備開始？

やりたい事が残るとあれだから、すぐに帰るわけじゃないけど。

「そっか、そろそろ帰る準備を始めなあかんのか……」

ちっちゃい私らはあんまり顔を見せへんから、普通に移動してると思ってたんやけど」

撤収準備を始めるにあたって。

とりあえず話はおこうと、お姉様は「八神はやて」の所へ。

そこで、まずは簡単な説明なう。虚実織り交ぜながら。

「時間の流れが違ってている上に、移動自体も安全だと胸を張れるほどには検証出来ていないからな。恐らく大丈夫だと判断出来たから実行に移したが、帰るべき世界を見失ったり、最悪の場合は移動に失敗して存在が消えたりするリスクは0ではないんだぞ。

尤も、目に見える一番の問題は、夏休みは有限だという事なんだが。

気軽に移動出来ん以上、遅くなり過ぎない内に帰してやらんとな」

「ちっちゃい私らはまだ小学生やし、エヴァさんも似たような外見やし。日本で暮らしてるなら、学校にはちゃんと行かなあかんよ。

でも、そんなリスクがあるなら、気軽に会うのは止めた方がええな……」

実態としては、リスク自体は小さいと判断出来る。

時間の流れも近くなってきたり、強くなった影響力が即座に無くなる事も考えにくい。

ただ、気軽に往来出来ると思われるのは、あまり好ましくない。

「何だ、寂しいのか？」

「んー……うん、そうやね。大変やったけど、思い出してみると楽しかった気がするし。

いっぱい助けてもらったのに、まだ何も返せてへんから、せめてお礼くらいは言わせてな。

エヴァさん、色々ありがとうな」

「あ、ああ。

とりあえずだな、恐らくあと1週間前後で帰る事になる。カリムやクロノにも話しておいた方がいいだろうし、それまでにやっておきた

い事があるなら早めに……何が可笑しい!？」

お姉様の目が泳いでる。

どう見ても、照れてる。

それを見てる「八神はやて」は笑ってるし。

「いやな、プレシアかあさん」から聞いてた通りや思って。

要するに……」

「言わんでいいっー」

言わなくても、予想はきつと正しいし。というか、以前言ってるし。

見えてる地雷は。避けるよろし。突っ込むと突っ込み(物理)で返されかねないから。



そんなわけで、やり残した作業を順に潰していく巡礼の旅。

本局への長いトンネルを抜けると書国であった。

はあーるばる来たぜ、無限書庫。

「そしてこちらが予め準備しておいたユーノになります、つと」

「えっと、料理番組じゃないんだけど」

「おー、来たのか。久しぶりだなー」

けど、アタシはいちやまずかつたかー？」

お姉様の日本どっぷりなネタは幼女な「アルフ」に流されたけど、

「ユーノ・スクライア」に通じてる。

日本にいた期間はさほど長くないはずなのに、何で馴染んでるんだろ。

「いや、この際だからアルフも聞いておいてくれ。

とりあえず、ユーノは初めましてからか。聞いていると思うが、私がエヴァンジュだ。

先ず、今回の件での協力に感謝する」

「話は聞いているけど、並行世界だったよね。

本来はこの世界に関わらなくてもいいのに、この世界の問題を解決に導いてくれたんだ。感謝するのは、僕達の方じゃないか」

「フェイトも、今じゃ一般人にまで有名になったし。

なんか、あの3人のファンクラブが出来るとかって話だしなー」

「介入は私達の都合で、この世界に都合がよくなったのは結果だからな。

だが、あいつらのファンクラブか……むさい野郎どもの集まりか？」

「女の子も多いって話だぞー？」

話を聞いたスバルがハッスルしすぎて幹部になっちゃったー、とか騒いでたしなー」

仕方ないね、元から【高町なのは】好きの【スバル・ナカジマ】だもの。

でも、お姉様達、正確には『新最高評議会と美形な仲間達』のファンクラブが存在してるのは公然の秘密で、お姉様の耳に入ってる事実は、当然、非公式。

もちろん、お姉様がそういう事を好まないという情報は流してあるから、表立っては活動してない。雑草の草の根みたいで勢いで広がってるらしいけど。

愚痴を言いながら、それを暴走しないように監視するのもクロノ・ハラオウンのお仕事。同じく本局にいるユーノ・スクライアと掛け算されてる情報うすいほんが、ため息の増量に貢献してるのはお約束。

「まあ、その辺はあいつらが好きにすればいいさ。本当にあいつらを好きな連中なら、本人が嫌だと言えば地下に潜るなりして目立たなくなるだろうしな。

それよりも、だ。ユーノに聞いておきたいことがある」

「何かな？ 無限書庫についてとか？」

「私の世界の無限書庫は掌握済みだ、こつちよりも有効に利用している。

そうではなく、並行世界だからこそ発生する、並行世界に関係する問題だ」

「それは……僕に解る事なら」

「難しい問題だが、最後の答えはお前にしか出せん。

ユーノ・スクライア。お前は、高町なのはをどう思っている？」
「……え？」

「並行世界に關係する……？」

「ユーノ・スクライア」がぼかーんとし、「アルフ」が悩んでる。

どう考えても、意図が伝わってない。この質問で伝わるわけがないけど。

「私の世界とこの世界は、相互に影響しあっている。

何故と言われても困るが、対となる存在に何かあれば、もう一方に影響が出る可能性がとても高い。ユーノ・スクライア同士、高町なのは同士で、何らかの繋がりとあるという事だ。

そして、私の世界の高町なのはとユーノ・スクライアは、どうもお互いを意識している。まだ子供だし、どれくらい自覚があるか微妙ではあるがな。

そうであるなら、そろそろ大人と言っていいお前は、どうなんだ？」

「え……えっと………」

「ユーノもなのはも、鈍いからなー。

鈍感系の両片思いつてやつかー？」

「アルフから見てもそうか。

ネタを言ってしまうが、こっちの予言で、この先4年だか6年だか経つてもまるで進展がないという、素晴らしいワーカホリック振りを2人とも発揮する可能性があるらしくてな。

なのはの負傷にも關係しそうだから、付き合うなら正々堂々とやってほしいんだが」

「ヘタレだし、無理だと思うぞー？」

「なのはもその辺は疎いから、簡単に行くとは思っていない。

だから、こうして話をしに来たわけだ」

「ちよ、ちよつといいかな。

問題は、僕となのはだけじゃないはず。フェイトやはやても恋人がいる様子は無いし……」

フェレットもどきの、話題逸らし！

「この世界の2人はともかく、私の世界の2人はかなり特殊だな。は

やてから話を聞いていると思うが、要するに不老不死のような状態だ。

誰かを愛しても子を産む事は出来んし、共に永遠の牢獄に囚われるか、相手だけが年老いるのを見守るかの2択だ。そんな辛く重い愛を、愛で受け止められる男が存在する事は期待せんよ。

だが、なのははまだヒトだからな。こんな茨の道を歩まなくて済む為にも、人としての幸せを見付けてほしいんだが……一番有望な相手が、このワーカホリック系フェレットなんだ。残念ながら

「そりゃー大変だー……」

逸れた話題が、斜め上に！

犬耳幼女のじと目！ フェレットもどきにだっただけきー。

「ア、アルフだつて不老だから、似たようなものじゃないか」

フェレットもどきは、懲りずに話題逸らし！

「アタシはフェイト一筋だし、そもそも使い魔だしなー。

ちっこい子供の相手も、なかなか楽しいぞー？」

「こつちのアルフは、ザフィーラと仲がいいな。

共に不老で狼の使い魔的な存在だし、一緒に仕事をしている事も多いからだろうが」

「フェイトとはやてが不老で家族なら、アタシ達もずっと一緒にいられるつて事だもんなー。

そつちのアタシもやるなー」

にやり、とした笑みを浮かべる「アルフ」。その視線の先には。

「そ、そんな……」

余計に抉られてる「ユーノ・スクライア」がいる。

でも、玩具にするのも程々にしないと、拗ねて悪化しそう。

「まあ、永遠に縛られた連中はどうか出来るものでもないから、今は無視するぞ。

問題は、今を生きるお前達だ。ヴィヴィオが学校に通い始めたら、一緒に様子を覗きに行きそうな程度の仲なのに、それ以上進展する様子が無いのはどういう事だ。

自信が無いだけなら、逃げているだけだ。極上の優良物件と評価さ

れるような立場と嗜好の持ち主なんだぞ？」

「え……う？」

「どうしてそう意外そうなんだ。」

その若さで既にそれなりの権力とそれに伴う収入を持ちながら、比較的安全な後方勤務の魔導師。簡単に代わりが見付かるような実力と実績じゃないから、当面は安泰で将来性もあるだろう。

酒や女に溺れる様子も無く、もはや幼馴染と言つていいほど付き合いが長い女性と親交が続いている。誠実さや一途さを表しているとと言えるな。

カタログスペックでお前に勝てる、同年代の独身男がいるのか？」

「え、えっと……あまり同年代の人と関わらない仕事だから、心当たりは……」

それに、お互い仕事で忙しいし……」

「それが逃げだと言っている。」

あの堅物で仕事の鬼の様なレジアスにも、信頼関係が出来ている娘がいるんだ。アレが恋愛という過程を経たかどうかは知らんし知る気も無いが、少なくとも家族愛はあり、きちんと家族と向き合ってきたのだろう。

それに比べて、お前はどうか。なのはからだだけじゃなく、自分からも逃げていないか？」

「そ、それは……」

原作知識ありな転生者なら、修正力のせいとか言えるんだろうけど。

なんて真面目なフェレットもどき。

「ま、散々言っておいてなんだが、お前の人生はお前のものだ。」

無理にくつつけとは言わん。仕事に生きるのも他の女とくつつくのも、選択肢としてはありだろう。生きていれば後悔する事も誰かを傷付ける事もあるし、それを怖がるのも自然な事だ。

だが、人として納得出来る、少なくとも納得出来るよう努力した結果の選択をしているか。

それくらいは考えてくれよっ。」

「う……うん………」

お姉様の威圧!

【ユーノ・スクライア】は、頷いた!
多分、無意識に。

「おや、エヴァちゃん。

なのはちゃんの未来を案じつつ、ユーノ君で遊んでいるのですか?

それにしても、やはり可愛いですね」

ロリコン
変態が現れた!

ロリコン
変態は、笑ってる。

そして、視線が【アルフ】の方を向いてる気がする。

「自重しろ変態^{ロリコン}」

「阿部氏っ!?!」

すぐく……アップパーカットです……

「良かったのか? ホイホイ性癖をさらけ出して。

私は身内だろうが構わず殺ってしまう化け物だぞ?」

ロリコン
変態は犠牲になったのだ。古くから変わらない性癖……その犠牲
にな。

「いつもながら、容赦がないね」

「カイゼか。まだ調べものか?」

吹っ飛んだせいで姿が見えなくなった変態^{ロリコン}に代わりまして。

説明役、成瀬カイゼ。

「少し気になる事があったからね。

捜査の邪魔はしていないから、その辺は心配しなくていいよ」

「そういえば、お前には無限書庫の権限を渡していなかったな。

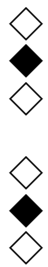
ユーノ……あっちのユーノに頼めば、大抵の事は調べられると思う
が」

「あっちのユーノも忙しそうだし、こっちの方が向いている事案もあるから、適材適所だよ

欲しい情報も概ね見付かっているしね」

「そうか。まあ、管理局も大騒ぎ中だから、必要以上には邪魔にならん
ようにな」

「エヴァさんよりは静かにしているつもりだよ」
「私の用事は終わっているからいいんだ」



巡礼の旅、2番目の札所は。

「ヴィヴィオ、元気でしたか?」

「うん……でも……」

軽く変装したヴィヴィオを連れて、「ヴィヴィオ」の所へ。

でも、お姉様を見て怖がってる。

「エヴァさんは、私の家族です。」

少し言葉使いは悪いですが、優しい人ですから大丈夫ですよ」

「初めて見る顔だ、警戒するのは仕方ないがな。」

そうだな、乱暴者の姉か友人あたりだと思ってくれていいぞ」

「う、うん……」

ちよつと言っただけで懐柔出来る程、子供は簡単じゃない。

うん、これが普通。」

アリシアは色々な事情やら理解力チートやらが重なった結果と再確認。

「あー、だが、ちよつと嫌な話をする事にはなるのか?」

それほど深刻な話ではないし、先送りした方がいい気がするが」

「そうですね……もう少し後でもよいのではないのでしょうか。」

すぐに決められる事ではありませんし、何らかの形で連絡出来るようにするのでしよう?」

こちらで預かる以上、音信不通というわけにもいきませんし」

「出来る事を疑わないのか?」

「経過を見る為にも、このまま放置はしないと信じていますから。」

そうですね……ヴィヴィオ、少しだけ良いですか?」

「うー……」

どう見ても、「ヴィヴィオ」は目の前の話に付いてきてない。

理解出来ないから、警戒を解く事も出来てない。

「ヴィヴィオだけが扱える物を、私達が預かっているのです。」

今はまだ危ないですから、ヴィヴィオが大きくなったら、どうした
いか、どうするかを考えてほしいのです」

「ヴィヴィオ、の……？」

「はい。」

もちろん、その頃にどんな物なのか改めて説明しますし、家族も含
めたみんなで考える事になります。と思います。

その頃まで忘れていても良いのですが、そんな事も言われたなど覚
えていてもらえると嬉しいですよ」

「うん……」

まあ、誰かがたまに言わなきや、覚えてないだろうけど。

保護者や関係者、要するに3人娘や守護騎士達にも伝えておけば、
問題無いかな。

どっちにしても、当分はお姉様が責任を持って隠す事になってるわ
けだし。

蛇足：StrikerSのはずだった何か 11

「晴れた空、白い雲。

ミッドをこうやって歩けるのは、こっちならでは」

「憧れるなら、そよぐ風じゃなかったか？ それだと土に埋まってしまうぞ」

「ミッドは気になってたけど、憧れてたわけじゃないから、別にどっちでもいい」

巡礼……は、日も変わってるし、もうどうでもいいや。

お姉様と主は、2人でクラナガンの中心部、商店街的などところに到着したところ。

特に偽装はしてないけど、アニメ世界では意図的に不細工設定されたキャラ以外はみな程々の容姿の法則（命名、私）により、極端に目立つわけでも無い。

子供2人に見えるのだけがちよつと気になるけど、逆に軟派野郎が寄ってこない分でイーブン？

「あつちだと、まともにミッドの街中なんて歩いた事が無いからな。

余計な身分のせいで護衛やらがわらわら付いてきそうだし、そもそも顔が知られているしな……」

「その意味では、私達が知られてないこの世界はいいかもしれない。

割と気軽に管理世界を出歩けるという意味で」

「それはそうだが、思った以上に地球との差を感じないのはどういう事なんだろうな。

まさかゴーヤクレープを見掛けるとは思わなかったぞ」

「地球と言うより、ネギま？」

「他の話で見た覚えは無いな」

でも、メニユーとして出してる店は現実にあったりする。

探せばレシピも見付かるし。

現実と魔法先生ネギま！のどちらが先かは知らないけど。

「文字も小さかったから、色物趣味な店長の暴走か、罰ゲーム用の罫メニユーと思っておく？」

だけど、みたらしコーラとゆずぽんコーラのインパクトは危険。やっぱリネギまとも思える」

「麻帆良の怪しげな飲み物か……原作的には関係無いはずだが、何かあったのか？」

軽く調べてみたら、10年近く前の雑誌でイロモノの店のオープンが報じられてた。

今まで見た事も無いメニユーの数々という触れ込みらしいから、恐らくここが元祖的な何か。

少し改装して普通の店に近くなった形跡はあるけど、場所や店名、それにメニユーに漂う色物臭を考えると、お姉様と主が見かけた店は間違いなくコレ。

「10年近く前？ 時期的に微妙過ぎるな。」

ジュエルシード……いや、リニスを攫った頃から開店準備を始めると、丁度その頃……か？」

「エヴァの存在が確定した時点で、ネギまの影響を受けるようになってたと理解するべき？」

「並行世界間の影響と考えると、無理は無い」

「こんな影響は、予想してなかった……」

この世界が“お姉様が再構成される世界”である間は並行世界の繋がりが切れないだろうし、お姉様自身が魔法先生ネギま！の影響を大きく受けてる。その影響は今後も続く予想。

文化浸食と言えなくもないけど、並行世界関係はまだまだ謎が多い。放っておいても影響が出る時は出るはずだし、どんな形が出るかも様々。出ないときは出ないのではないかという推測に無理があるとは思えないような気分……

「……確信出来てない事を無理に説明しようとして墓穴を掘らなくてもいいんだぞ？」

「一言で言えば、気にするなという事。実際、気にしても仕方がない」「まあな。さて、どうにもならん事は置いておいて、散策の続きを楽しむか」

「散策より、デートと言う方が好み」

主はお姉様の手を取って、何故か恋人繋ぎに。

それでも、デートではなく仲のいい妹分の手を引いているように見えるのは、きっと2人とも本来の外見年齢でいるせい。

「好み、か……？」

まあいい、普段来れない場所に来ているんだ。アコノは何が見たい？」

「せっかくだから、普段行けない店を。」

エヴァなら、きっとデバイス関係の店に行きたいんじゃないかと予想している」

「確かに、気にならないわけじゃないが……情報や現物を仕入れる伝手はあるしな。」

それに所持金もさほど多くないし、コアやそれなり以上のパーツは身分証明やらも必要だから、買えないぞ？」

「それでも、実際に物を見るのは違うはず。」

通信販売とウインドウショッピングの違い？」

「それは解るんだが……いいのかわか？」

他にも色々ありそうなものだが」

「大抵のものは地球でも楽しめるし、地球を遊び尽したわけでもない。」

エヴァの好きなどころで、問題無い」

「んー……まあ、管理世界にしかないものではあるし、ネタアイテムがある可能性もあるか。」

とりあえずはデバイスのパーツ類が多そうな店を適当に覗いてみよう。途中で気になる店があったら入ってみればいいしな」

「うん、それで」

そんなわけで
てくてくてく？

「AMF対策として、個人で携帯可能な質量兵器を一部解禁か……まあ、アリと言えはありか」

「デバイスとしての認証と登録が必要になっている点が、苦肉の策を感じさせるところ？」

それでも、魔力が無い人でも使えるくらいに調整してあるから、技術や案はあったと思える」

「認証は身分証の技術を流用したような感じだが……少なくともこの件に、はやては嘸んでいないだろうな。銃器類が広まって喜ぶような性格じゃないだろうし」

特殊デバイスとして銃器の類が販売され始めてるのを見て、好き勝手に批評したり。

現時点ではAMF等で魔法の行使に支障がある環境又は対象限定、かつ、対人での使用は原則禁止で自己防衛に限り許可とかいう面倒な制約付き。

話を聞いた店の人も、周知用に仕入れたけど売れる事は期待してないと言ってた。

デバイス屋を出た後は、ふと気になった店に入って。

「部屋は広くなるし、ベッドも広い方がいい。

具体的には日本で言うキングサイズ、運搬が難しいならシングルを2つ並べる勢いで。

身長を考えると、ロングでなくても充分だけど……広い方がいい？」

「いやまあ、設計ではつちやけすぎた上に、尺モジュールだと思っていたらメーターモジュールだと途中で言われたから、大きくても楽に置けるのは確かだが。

それでもそれは広すぎないか？」

「今だと狭いからと言って、なかなか一緒に寝てくれない。

それくらい広ければ、その言い訳は使えなくなる」

「週に何回かは一緒に寝ているぞ？」

「私が眠った後で抜け出す事が多々あるから、減点。

エヴァはもつと休むべきで、私はエヴァをもつと全身で感じたい」

「その言い方は色々アウトじゃないか？」

「エヴァならエロもうえるかむ」

「それは直球でアウトだ」

建物の完成まであと1年以上かかるのに、インテリアショップの

ベッド売り場であれこれ見ながらいちやついたり。

もちろん、言葉だけじゃなくて。

「後ろからとはいえ、抱き付かれてると動きにくいんだが。」

「このままおんぶした方がいいのか？」

「所謂あててんのよ状態なのに、反応が薄い」

「私に男としての欲求が残っているなら、歓喜するだろうがな。」

それに、よく抱き枕にされていれば、慣れもする」

「女性でも、はやては喜びそう。」

「だけど、やっぱり大きさが足りない？ それなら大人モードで、ついでに脱衣もサービス」

「やらなくていいからな？」

「駝鳥的な意味で？」

「それとも、人前じゃなくてベッドの中がいい的な意味で？」

「本当に、どっちもやらなくていいからな？」

うん。もはや、何をしに来てるのか解らない状態。

そんな空気のまま、それでもあれこれと見た後は。

「タコは種類の1つで、むしろソーセージやチーズがメインか？」

ツナにエビに鶏に豚、コーンやキノコ類もあるのか」

「ミニトマトや餅は、食べるとき気を付けないと熱そう。」

「ただど種類以前に、自分で焼くタイプのたこ焼き屋がある事の方が意外」

「和食風の定食を出す店があるくらいだから、たこ焼きもどきの存在自体は不思議でないがな。」

それに、似たような料理があってもおかしくない」

何故か、たこ焼き屋のテーブルで向かい合ってる。

「といつても、純粹なたこ焼き屋じゃない。」

しかも、テーブルチャージ料(時間制)が必要。その分メニューは安めみたいだけだ。

「こっちのメニューに載ってる、ケーキポップ風のとベビーカーステラ風のデザートも地球のに似てる。」

「ただ、アヒージョ風の方が気になる」

「こっちのメニューに載ってる、ケーキポップ風のとベビーカーステラ風のデザートも地球のに似てる。」

「ただ、アヒージョ風の方が気になる」

「こっちのメニューに載ってる、ケーキポップ風のとベビーカーステラ風のデザートも地球のに似てる。」

「ただ、アヒージョ風の方が気になる」

「ただ、アヒージョ風の方が気になる」

「アヒージョ?」

説明しよう!

アヒージョとは、オリーブオイルとニンニクでエビやキノコ等の食材を煮る、スペイン南部の料理である。

食材を小さめにしてたこ焼き器つぼいので煮る事により、オリーブオイルの必要量と調理時間を減らす効果が期待出来るような気がする。あと、設備の簡素化。

「気がするって、説明になってないような」

「別にいいんじゃないか? 店にとって経費や原価の削減は重要だし、少ない追加投資やリスクで新しい商品を増やせるなら魅力的だ。食材的にも流用出来そうなものも多いし、色々選べた方が嬉しい客もいるだろう。」

文句があるとするれば、色々焼くには狭い事か。もう少し穴が多ければな」

「細かく分けてあるから、ゆっくり食べるなら大丈夫かもしれない。」

それに、定食や丼物、サイドメニューもそこそこある」

「お好み焼き丼にしか見えないのは、ありかどうか悩むところだがな」
「大阪にはお好み焼き定食もあるらしいから、あり得ないとは言えない。」

ラーメンとチャーハンのセットみたいなもの? 炭水化物の組み

合わせという意味なら、パスタのセットにパンが含まれるのも同じ」

「……その意味ではあり、なのか?」

とりあえず、色々注文するか」

「うん」

そんなわけで、最初にたこ焼きの材料が来たけど。

「いつもと違って、2人しかいないんだ。ピックくらい持ってもいいんじゃないか?」

材料や道具を、主が全部確保してる。

凄く手慣れてるとは言い難いけど、危なげない感じで焼き開始。

「エヴァがやりたいなら止めないけれど、義務感でやろうとしているなら必要無い。」

料理が苦手な事は知っているし、店の人も熱いから気を付けてと言っていた。見た目はエヴァの方が子供だから、体裁を考えてもエヴァはゆっくり待つべき。

それに、正妻として譲れない」

「確かに好きではないし、体裁も解るが……最後の正妻は何だ」

「永遠の伴侶。その上、中の人の性別で言えば男女。」

肉体面や法制面はともかく、夫と妻が結び合い一体となる事を推奨する、キリスト教を都合よく解釈した意味なら夫婦と呼んで問題ない」

「だからと言って、私が何もしない理由にはならんぞ？」

「夫と妻では、役目が違う。」

対等だけど同業ではない。男尊女卑や女尊男卑ではなく、それぞれが別の役目を担うのは、自然な考えと思える」

「うーん……今は私も女という定義に該当するし、キリスト教徒でもないぞ。そもそもあれは、男性らしさや女性らしさという言い方で役目を縛る意味合いもあるしな。」

分業の考え方自体は否定しないが」

「エヴァの精神は男性が基本のまま。性同一性障害者という扱いで正しい以上、女性という定義にそのまま当てはめられない。」

家庭での料理は、一般的に言えば妻の役目。エヴァは料理を作るのが好きなわけじゃないし、私は私に出来る事をエヴァにしたいと思っている。

だから、私が作って問題ない」

「……うん、これは、あれだ。」

フェイトと同じで、一歩間違えれば自立を邪魔してマまるでダメなおっさんオを育ててしまうタイプだ」

「エヴァは大丈夫だと信じている。」

私程度で駄目になるなら、妹達の時点で墮落しているはず」

「信用が重いな……」

「それに、私達の家族は似たようなもの。」

エヴァだけじゃなく、プレシアやフェイト、はやてだって家族を大

事にしすぎる傾向がある。リインや変態ロリコンも似たような面があるし、使
い魔や守護騎士や防衛プログラムも主や仲間甘い。

厳しい事を言えそうな人は、王族としての教育を受けたはずのヴィ
ヴィオ、家族という関係自体に惹かれたわけじゃないですか、友人と
して隣に立つセツナくらい？」

「ヴィヴィオやすすかは優しさが先に来そうだし、セツナは恩とかで
気後れしなければだろうな。」

こうして考えると、誰も締める役が出来んのは問題か……」

「だから、中心にいるエヴァが大変。」

私はエヴァの役に立ちたい。大した事は出来ないけれど、日常の雑
務くらいなら引き受けられる」

「……さっきの言葉を返すが、義務感でやってるなら必要無いぞ？」

そうでなくても、助けられている部分は色々あるんだ」

「これは、それなりに感情が戻った結果。」

やりたい気持ちでいっぱいだから、やらない方が我慢する事にな
る」

「はあ……気持ちは受け取るが、無理に続ける必要は無いとも言つて
おくからな」

「大丈夫、解ってる。」

そろそろ焼けたから、あーん」

「……ちよつと待て。」

だいたい、焼きたて過ぎて熱いだろう」

「大丈夫、食べ方は明石焼き風。冷たいだしに浸けてあるから、少し冷
めているはず。」

心配なら口移しで」

「……とりあえず、色々待て」

そんな感じで食事を終えて、お昼が過ぎて。

雑貨屋で部屋に置く小物を見てみたり。

お姉様も主も飾り付けに拘る気が無いから、結果的に実用性重視に
なる。よって、規格等の問題もあるから日本で買う方がいいだろうと
いう結論が出た。

服屋で互いを着せ替え人形にしてみたり。

もちろん、普通の服なら地球でも出来る。管理世界ならではと言っているか微妙だけど、バリアジャケット風の服を扱う店を発見。見た目はコスプレ屋に近くても、実際に着る服として作られてるし、デザイン案としての利用価値もある、立派に実用的なお店だった。

下着屋にお姉様が引きずり込まれたり。

仲のいい妹みたいな友人にいろいろ教える姉的な人、みたいな微笑ましい感じで最初のうちは見られてた。後半は、まあ大胆な口り百合、つて目になってたけど。

そんなこんなで、夕暮れ時。

2人はお茶を手に、公園のベンチで休憩中。

「2人だけでこうして1日を過ごしたのは、初めてかもしれない」

「厳密には妹達がいるが……確かに、初めてだな。

前はやる事が多すぎたし、最近は他の誰かがいる事が多かったか」

「2人だけの時間は、意外に短い。特に感情が戻ってからは。

都合よく人通りも無いから、この際はつきり言っておく。

私はエヴァが好き。

戻った感情も、前世の記憶も、間違いなく私がエヴァを異性として愛していると叫んでいる」

「異性として、か……夫婦と言っていたのは、それが理由なのか」

「エヴァの事だから、主従関係とか、主になった時の改変の影響だとか考えてると思う。

だけど、それは関係ない」

「いや、関係無いはずが……」

「関係無い。

だから、また——みみちゃんって呼んで、かずき先輩」

「え……かずき、先輩って事は、前世の……はあっ!？」

ちよ、ちよつと待ってくれ。みみ……みみちゃん……って、まさか美術部の……? 五月祭のステージデザインの打ち合わせくらいでしか、会ってない、はず……だよ、な?」

「それで合っている。それに、私は迷惑をかけるばかりだったし、老け

顔で美人でも可愛くも無かったから、良く思われているわけがないと思っっている。美術部の可愛い先輩をちらちら見ていたのも気付いていた。

「だけど。優しくフォローしてくれたのは嬉しかった。慌て者で失敗の多かった私でも出来る仕事を回してくれて……知り合いですらなかった私の、居場所を作ってくれて。」

「その時に私は、この人の役に立ちたいと思った……生まれて初めて、思ったんです」

「……何てこった。ここにきて前世絡みなのか……」

「だから、転生とか主従とか今世の出来事は、気持ちが強くなった要素ではあるけれど。」

「気持ちを伝える自信を持つために、必要だったけれど。」

「みつおかみずは光岡水葉でもある私が、車田一樹でもある貴方を、愛しています」

「あくまでも私を男性として見ていたのは、そういう訳だったのか……」

「ジユエルシード事件の頃は、面影を重ねていただけだった。私が役に立ちたいと思った時に似た条件が揃っていると思えたから、きつと同じように思うだろうと考えていただけ。」

「エヴァの前世に気付いたのは、五月祭の時。あれだけ解りやすい情報を漏らしてくれたから可能性に気付いて、妹達に名前を確認して確信した。」

「転生特典を破壊した後、最初に感じたのは、愛おしい気持ち。」

「あの時、貴方に会えて。もう一度、貴方に会えて……本当に、良かった」

「全く……今も昔も、私の目は節穴だな」

「私は何も言わなかったし、妹達にも伝えない様に頼んでいた。」

「気付かなくて当然」

「いや、そうじゃない。」

「ここまで想ってくれている事に気付かない……散々好きだと言われていたのに、本気で考えていなかった自分に呆れているだけだ」

「今のエヴァは女性の姿をしている。」

だから、男性として想われる事を除外して考えても仕方がない」

「そうなんだろうが、言い訳でしかないな……だけど、まあ、なんだ。とりあえず、どっちの名で呼べばいい？」

「今の名前、アコノで。」

水葉だと他の人に説明しないといけなくなるし、一緒に過ごした2年以上の時間を捨てる事にもなるから」

「解った。一度しか言わないからな。」

私、エヴァンジュ・テストロツサは、アコノ・八神・テストロツサを妻とし、この約束をお互いの譲れない意思によるものだ和理解し、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、永遠の果てに2人が死を迎えるまで共に歩む事を誓う。

……指輪はしっかりとった物を用意したいから、後日でいいか？」

「誓いだけでも、嬉しい。」

「……」

「……アコノ。目を閉じてくれ」

「うん……」

そして重なる、お姉様と主の影。

機動6課メンバーや犯罪現場との遭遇？

そんな無粋なイベントが発生するわけがない（使命感）。

蛇足：Strikersのはずだった何か 12

お姉様と主の事実婚が成立して、早1週間。とは言っても、その事実は2人とも口にしてないし、指輪もまだ出来てないし、元々主従として一緒にいたし。そんな感じで、表面上の変化はない。

細かい変化は、もちろんある。

お姉様と主の距離（物理）が近付いたり、お姉様と主の接触（物理）が増えたり、主の甲斐甲斐しさがアップしたりと、いちやっついてると言われてもおかしくない行為が増加してる。けど、元々主が何度も求婚求愛してたからか、あり得る変化として生暖かく見守られてる。

人前以外、要するにベッドの中だと、一緒に寝る時に主がしがみつく部分が腕から体が変わって密着度が大幅アップ。但し、性的な欲求が希薄になってるからか、（ピー）や（アッ）な事にはなってる。山場を過ぎ、お姉様のやる気が地に落ちてる並行世界への介入は、やる気と同じくらい手を出す必要性も下がってる。

細かい問題は山積みだし、問題が無いとは言えない。だけど、致命的になる前に対処したり、急ぎでないものを見極めて先送りしたり出てくる。表に立つべきはこっちの世界の人だし、「八神はやて」や「レジアス・ゲイズ」達はしっかりと役目をこなせてる。

成瀬カイゼ達の調査も終了したし、主要な人物には顔を見せ終わってる。こっちに留まる必要性は無くなったと言っている。

というわけで、撤収の連絡等を兼ねた、関係者というかお姉様達と機動6課の3人娘による雑談タイム。

場所は、機動6課の部隊長室。要するに「八神はやて」の仕事場。

「破壊したはずの聖王のゆりかごをどうするかとか、色々先送りしてるけど……通信機も預かったし、悩むのは後でええな。

けど、メールとチャット……文字通信機能だけのを3台つてのは、理由があるん？」

「時間の流れが違うから、通話は候補から除外した。以前は60倍速だったから、あつちの1秒がこっちの1分に相当していたしな。2倍でも早送り状態になるから、リアルタイムの通信では会話が成立しな

い。

3台渡すのは、壊れない事を保証出来んし、紛失や盗難の可能性だってゼロではないからだな。魔力やらでガチガチに使用者を限定してある思考制御型だから、お前達以外は使えないはずだが」

というわけで、文字通信専用通信機を「八神はやて」、「フェイト・T・ハラオウン」、「高町なのは」の3人に進呈。

こちら側で対応する端末を持つのは、お姉様、主、フェイト、プレシア、はやての5人という事にしてある。

「うー……」

「だから、何かあった時に動ける権力や実力と、責任を負える立場を持つ人物に限ると言っただろう。

今のなのはでは、実力はそれなりにあるが、権力や立場が不足するぞ」

そして、高町なのはが恨めしそうにお姉様を見てる。

フェイトも持つのにかと思ってそうだけど、フェイトは明確に最高評議会側でシグナム達に近い立場でもあるから、親衛隊管轄でしかない高町なのはとは条件が違う。

同じく、「高町なのは」もちよつと寂しそう。

だけど。

「なのは同士で話をすると、本人達だけで突っ走る可能性があるから駄目。直接の手出しはエヴァがないと不可能だけど、誰かが手助け出来る事も2人で完結されたら誰も気付けない。

言ってくれば普通のメールとして転送するから、連絡は出来る。

事態が落ち着く事、きちんと安全性の確認が出来る事、何かあった時に対処出来るようになる事が、クリアすべき最低条件」

主の説明に加えて、高町なのはに関しては全力全開の癖が無くなる事が必要かも。

少なくとも、こんな並行世界のゴタゴタに首を突っ込まない程度には。

「ああ、これは全員に言っておくが、通信の記録は全て保存するつもりだし、通信の影響調査は随時行う。何かあった時には、メールの内容

を参照する事もあるかもしれん。

並行世界関係は、私達も手探りで調べている段階だからな。監視や干渉をする気は無いが、見られて恥ずかしい話や困る話は別途やってくれ。ある程度落ち着いたら、たまに会うくらいは何とかなるだろうしな」

「こつちで協力しようにも、ユーノ君もちよつと調べた程度では情報が見付からんゆーてたし、そもそも並行世界なんて前代未聞やしな。本格的に調べるには人手も時間もたらへんし、公開するわけにもいかへん。

けど、個人で出来る範囲なら、調査の手伝いくらいいつでも協力するよ」

「並行世界など公開したら何が起こるか予想出来んのは、こつちも同じだ。

調査は私達が個人的に行うだけに留めるから、当面はたまに話をする程度になるだろう」

ついでに、時空管理局大改革の影響があるのも同じ。程度は違っても、

「別荘って言ってた、あの世界の人はどうなん？」

結構人がいそうやったけど、こつちを知ってるんやから公つてわけやないと思うし」

「あいつらは……手伝いはさせるが、あいつら主体ではやらせん。

当分は調査するにも私の力が必要という事もあるが、研究熱心過ぎで暴走されても困る」

「ああ、そういう系統の人達なんや……」

げんなりしてる「八神はやて」の脳内にはきつと、元気に暴走する【ジェイル・スカリエツィ】や、守護騎士システムやら融合騎やらをいぢりたくて仕方ない聖王教会や時空管理局の技術者の姿が。

事件に直接かかわってない分、魔女つばい【プレシア・テスタロッサ】の記憶は無いはず……だけど、【高町なのは】や【フェイト・T・ハラオウン】の脳内には、ちよつと浮かんだかもしれない。

親馬鹿化してるプレシアの印象で上書きされてるかもしれないけ

ど。

「ところで、私達が『気』と呼んでいる技術は、どの程度使えそうද？
すずか達からは、それなりに使えるようになってきたと聞いている
が」

「素質は充分や聞いてたし、すずかちゃんの教え方もうまかったしな。
時間が足らへんのが残念やけど、基本くらいは何とか理解出来たはず
や。魔力素を意識して扱うのはまだまだやけどな。」

けど、こうやって色々理論を聞くと、昔のなのはちゃんがどんだけ
無茶しとったかを理解出来るくらいや」

「そ、それは秘密だつて！」

「いやな、これは言っておかなあかんし、きつと知つとるはずや。」

それでも撃墜される前のなのはちゃんがおるんやから、先人として
当事者として、ちゃんと伝えられる事は伝えなあかん！」

「私達よりもちゃんと教えてもらつてみたいだから、それも理解出
来てると思うよ？」

「それでもやフェイトちゃん。」

いつも全力全壊ではあかん、見てる方は心配で堪らんと、何回言つ
ても瀕死になるまで理解せんかったお方やからな。

ちっちゃいなのはちゃんが撃墜してないのはいい事やけど、痛い目
にも合つてないつて事や。本質的には理解出来てないかもしれへん」
「ちゃ、ちゃんと理解してるのっ！」

親友達に好き放題言われて言葉も出ないくらい落ち込む「高町なの
は」と、必死で無実を訴えてる高町なのは。

周囲の環境が違い過ぎて単騎で頑張る必要性が皆無という点は大
きくても、友を心配する気持ちは同じで有難い事なのに。

「その辺は怖い先生もおるし、大丈夫やと信じたいけどな。」

ところで先生、今のフェイトちゃんの状況はええの？」

「死に別れた姉や母とのスキンシップなんだ。」

みんな嫌がってないんだから、好きにさせてやれ」

正確に言えば、プレシアの両脇に『フェイト』がいて、「フェイト・
T・ハラオウン」の膝の上にアリシアがいる。

その上で、プレシアが全員を抱え込むように抱き寄せてるから、まさに団子。おかんの付いた3姉妹。

「会ってる時はずっとあの調子やからな……」

「そういうお前も、はやてとリインを両脇に抱えているじゃないか。」

まあ、はやてはダウンしているが」

今の「八神はやて」は、リインフォースとはやてを侍らせ、両肩にちっちなリインフォースを乗せてる状態。

団子っぷりでは、テストタロツサな母娘に負けてない。

「夏休みの宿題をサボり過ぎたとか言ってたから、自業自得なんやけど……しばらく会えへんかもしれないのやから、ちよつと寂しいな。」

でも、私と同じ性格なら怠けて溜め込むようなことはせえへんから、こつち来てはしやぎ過ぎたのが原因や思うんよ。となると、ちっちなのはちゃんとか、ちっちなフェイトちゃんも怪しい気がするんやけど」

ばれてるーよ。

フェイトと高町なのはが、ぼつが悪そうに横を向いてるし。

「でも、楽しかったよ?」

帰ってもそれほど日にちが進んでないから、戻ってからでも挽回出来るはずだし」

根が真面目なすずかは、余裕の表情。

凄く成績がいいわけじゃないけど、極端に苦手な科目も無い。

挽回する必要が無いくらいには、きちんと終わらせてある。

「その辺は自己責任で、こつちに来てている間に進めておくのも、こつちを堪能して帰るのも自由。」

こつちに1か月半くらいいるけど、あつちはまだ1週間くらいしか経っていない。来ている人は同じだけの時間があったけど、その使い方をお細かく指示する気はエヴァも私も無い。期限までに出来ていない場合に、本人が苦しんだり誰かに叱られたりするだけ」

既に大半の宿題を終わらせている主だけど、お姉様やすずかと同じく、それを人に強制する気は無い。

少なくとも、余裕がある間は。

「一見優しいように見えて、冷たい考え方やね？」

「休みが終わるまでにやらないといけない事は、何度も言われなくても解ってるはず。それに、急いで済ませる必要が無い間なら、何を優先するかの問題。それくらいは判断出来るようになってほしい。」

あと、私は食堂とか人のいる場所で宿題をしていたし、決めたところまで終わるまでは何かに誘われても断っていた。私達がやらなくていい雰囲気を作っていたわけじゃない」

主は言ってる通りだし、お姉様は基本的に情報収集や調査で留守がちだったし。

のんびりした空気を醸し出してたのは、高町な人達と、元からテストタロツサだった人達。

「あー、それはちっちゃい2人の責任やね。」

ところで、あとどれくらいで帰るつもりなん？ せっかくやから、一緒に食事でもどうや思うんやけど」

「もうすぐ昼か……まあ、それくらいの時間なら問題無いが、何処で食べるんだ？」

この人数と顔触れでは、別荘以外の選択肢は無さそうだが」

「あとちよつとでシグナム達も戻ってくるみたいやし、報告に来るついでに運んでもらうよ。」

お客さんが来るって言うてあるから量が多くても大丈夫やけど、ちよい時間がかかるかも知れへんから、早目に連絡しとくな？」

そう言いながら、「八神はやて」はポチポチとメールを送信。

音声での通話は、周囲の声が漏れる可能性がある。その意味では賢明な判断。

移動する必要も無いから、のんびりと雑談してると。

「お待たせしました、主はやて」

「注文が多すぎて、まだ全部は出来てねーってよ」

「出来たら連絡してくれるそうですから、後で取りに行ってくださいね」

「あー、腹減ったー……」

ドアが開いて、色々な料理が乗ったカートを押す【守護騎士】の3人と【アギト】。

それに。

「え……う？」

「嘘……う？」

「何で……う？」

同じくカートを押してるけど、驚愕の表情で動きが止まった【ギンガ・ナカジマ】、「ティアナ・ランスター」、「スバル・ナカジマ」の3人がいた。

「この3人には教えるという事か。」

だが、本当にいいのか？」

「ギンガには教えると言ってもうたし、そうになると2人に黙っておくのも心苦しいしな。」

そんな訳やから、説明よろしくや」

「丸投げか？」

まあいい、取り敢えず全員入ってドアを閉めろ。部外者にこの状況を見られるのは不味い」

「は、はい……」

ぎこちない動きのままの3人も部屋に入り、料理を配って。

まずは、いただきます。

「さてと、話を始める前に、これだけは言っておくぞ。」

今からの話は完全オフレコ、下手な者に漏らすと面倒なことになる情報が満載だ。黙っている自信が無いなら、ここで退室した方がいい」

「この部屋の状況を見ただけでも、ツツコミどころが満載やけどな」

「そこ、説明を任せたら黙っておけ。」

これも様式美というか、念のための確認だ。私としてはこんな話を広める気は無いんだからな」

それでも、聞かないって選択肢は無いと予想。

表情を見ただけで、覚悟完了の気配がプンプンしてる。

「予想通りに退出なし、と。」

まあいい、取り敢えず説明するが……」

と言うわけで、食事をしながらの説明タイム、スタート。

その内容を簡単にまとめると。
並行世界の存在について。

お姉様達が並行世界から来た人物で、その並行世界では闇の書事件が終わって1年半程経過しているが、ジュエルシード事件以降の出来事に大きな差がある事。

ここにいる「ちっちゃい高町なのは」達が、少なくともジュエルシード以前は本人と同じ経験をして、ある意味で本人である事。

ジェイル・スカリエツィや戦闘機人達も連れてきていて、「ギンガ・ナカジマ」が話したトールは連れてきた方の存在だという事。

今回は世界間の悪影響を防ぐために介入した事。

この辺までの、一方的な説明が完了。

「はあ、そんな事があるんですか……」

説明を聞き終わった【ギンガ・ナカジマ】は、納得してるようないないような、微妙な表情。

隣の【スバル・ナカジマ】も似たようなものだけど、更に隣の【ティアナ・ランスター】は、まっすぐお姉様を見てる。

「それで、その姿はいつたい？」

私達に訓練をした時は、大人の姿でしたよね」

「あれは、肉体強化魔法の一種だ。この姿では威厳が足らんし、年上だと言ってもなかなか信じられんだろう？」

実際はヴィータの様なエターナルロリな訳だが、あの場でそれを納得させるのも無駄な手間だ」

「誰がエターナルロリだ！」

「私やお前だが。アコノやセツナを含めてもいいぞ？」

【八神ヴィータ】が吠えてるけど、事実ではある。

大人の姿で訓練をしたのは、実際には説明の手間よりも心情面を考慮した結果だけだ。

「エヴァンジュ、私の妹であると言ってしまうえば、この場での説明として充分ではないのか？」

「それでもロストロギアと呼ばれた身なのだ」

「それはそうなんだが、それだと私までロストロギア扱いされそうだ」

「違う名前であっても、ロストログア扱いはされていたはずだが」
お姉様は主殺しの書の名で、確かに認定された。

正式な名前での登録に変わった今でも、危険度が高いロストログア扱いだったはず。

敵対したらやばい的な意味で。

「この世界には私に相当する存在がいなく、どっちの名でもロストログアとして登録されていないんだ。

少しくらい抵抗させてくれ」

「存在が明らかになれば、明らかにロストログアとして扱われるのだ。
登録の有無は誤差でしかないだろう」

「そうなんだが、少しくらい夢を見たっていいじゃないか」

お姉様とリインフォースが言い合ってるけど、「ナカジマ」の2人と
【ティアナ・ランスター】は、誰か理解してない。

「何か、アインスの事を知ってる前提で話をしてへん？」

「だが、映像を……っと、そういうえば、撃墜を避けたから過去の映像は
見えていないんだつたな。

えーと、どこまで言ってるいいんだ？」

「まあ、ここまで言ってるわけやし、知ってる人は知ってる情報や
ら。」

ええと、このおつきいリインフォースやけど、うちのリインのお姉
さんというか……元になった人に相当する人や。

こつちでの名前もリインフォースで、今はリインがいるから、私
はアインス……リインフォース I ^{アインス} っと呼んでる」

「知つての通り、私はリインフォース II ^{ツヴァイ} なのです」

「まあ、アインスに会った事のある人はかなり少ないんやけどな。

簡単に言えば、アインスは闇の書の管制融合騎で、闇の書の悲劇を
繰り返さない為に消えてもうた、私の大切な家族や」

語ってる【八神はやて】は懐かしむようなちよつと悲しそうな表情。
それを見て、余計に3人が理解に苦しんでる。

闇の書の悪名と【八神はやて】の態度が、どうにも結び付かないか
らかも。

「はやてを我が主とした当時の私は、改悪され、呪われていたのだ。主の命すら蝕み、最終的に破滅をもたらす事しか出来ない程に。」

エヴァンジュに救われた私は破滅をもたらしに済むようになり、アインズと呼ばれるこの世界の私は破滅の再現を防ぐために自らの消滅を望んだ。

それが、闇の書と呼ばれた私なのだ」

「お前を助ける事が、妹機として作られた私の役目でもあったからな。」

まあ、私達の関係はこんな所だ。理解したか？」

「は、はあ……」

どう見ても、あんまり解ってない。

けど、大食いの2人の食が進んでないくらいには、衝撃的な話だったらしい。

時間と状況的に、「八神シャマル」が運んできた追加の料理を食べたら撤収しとく？」

「ま、深く考える必要も無いさ。」

私達はこの食事が終わったら、元の世界に戻るからな」

「そう、です、か……」

どう見ても、「ティアナ・ランスター」がオーバーヒートしてる。

訓練の時の手加減がとか騒がれないのはいい事だけど。

だめだ、こりゃ。

「後は……アギトは何か言いたそうだな？」

「んー、まあ……あの辺でバツテンチビがデレデレしてんのが気に入らねーっていうか……」

そもそも、アンタも融合騎だったよな。全部で何人いるんだ？」

「融合騎が、か。」

私と3人のリインが一応そうだな。

ここにはいないが、こつち側のお前も当然そうだし、もう一人変態ロリコンがいる。

お前以外に6人という事になるのか」

「そうか……はあ。今までのアタシは何だったんだ……」

深いため息をついている【アギト】だけだ。

世界はそんな筈じゃない事ばかりなわけで。

「今だからそう見えるだけだ。」

「ずっと幸せそうなのは、変態ロリコンくらいなものだぞ？ 本人だけだろうが」

「とてもそうは見えねーよ！」

大体、そんなだけの力を持ってりや大抵の事は出来んだろ!？」

「私は1人目の主をこの手で殺し、2人目の主に出会うまで意識が無いまま2500年ほど彷徨っていた。その上、2人目の主からは知らないうちに人としての生を奪い、永遠などという檻に閉じ込めてしまっていたからな。」

意図せずに余計な事ばかり仕出かす力が疎ましい時も多々あるぞ」
「やれやれと言いたげなお姉様を見て居られなくなったのか、【アギト】は視線をずらして。」

「私か？」

呪われ、闇の書と呼ばれるようになってから、100人以上の主と、数え切れない程の人を殺してきた。エヴァンジュに救われたが、融合すると確実に事故を起こすようになっていた。

今の私は、融合騎としては欠陥品だ」

私も主と融合したいのだがな、と呟くりインフォースも見て居られなくなったのか、更に視線をずらして。

「私ははやてちゃん専用の融合騎なのです。」

シグナムやヴィータとの相性もアギトに負けるですし、何より、はやてちゃんとの繋がりが消えたら、2度と目覚めないはずなのです！」

「ちよ、何なんやそれは!？」

【八神はやて】が驚いて叫んでるけど、はやては未だ熟睡中。

だからこそ、ルーナも言えたと思うけど。

「お母さん達の絆が羨ましかったのです！」

それに、私の役目はリインお姉ちゃんとははやてちゃんの橋渡しなのです。はやてちゃんが居なくなっただ後にリインお姉ちゃんが別の主を得ても、そこに私の居場所は無いです。

それに、はやてちゃんとお母さんの関係を考えたら、問題無いのです！」

「いや、私自身も我が主を失えばどうなってしまうのか、確証は無いのだ。」

エヴァンジュは治療の為に研究を続けてくれているが……いつか我が主と共に眠りにつくなら、それも良いのではないかとも思っている。それが数年後なのか、幾千幾万の時を超えた先なのか、予想も出来ないが……エヴァンジュやアコノ達との関係を見ると、すぐに別れるという事もあるまい」

「治療は、不測の事態ではやてを殺してしまわないためという意味もあるからな？」

「どうか、こんな時に私をお母さん呼びわりするのか」

「私を作ったのはエヴァちゃんなので、お母さんなのです！」

私が心配してるのは、はやてちゃんが居なくなっても稼働出来るように、何か仕込んでいないかなのですよ？」

「いや、それを諦めて特化したからこそその性能だから、仕込む余裕など無いぞ。」

仕込んでおきたかったのは認めるが」

「エヴァンジュの事だ、我が主が私やルーナ達を気にせず死という選択肢を考える事が出来る様にとでも考えているのだろうか？」

だが、優しい我が主のことだ。仮に私達が生き残る事が出来たとしても、次の主がエヴァンジュ達とよほど良い関係を持てる者だと確信出来ない限り私達に遠慮するだろう。成長が止まった事以外の実感はまだ無くとも、不老や不死について考える時間や知識はあるのだ」「……まあ、はやてはそうだろうが、それでも、枷を増やすのは正直に言っつてな……」

「エヴァちゃんだって、アルクとかウーノ達とかを増やしてるのですよ？」

それに、はやてちゃんやフェイトちゃん、すずかちゃん、セツナちゃんやヴィヴィオちゃんだっているのです。過保護なエヴァちゃんがみんなを見捨てるとは思えないのです！」

「自分から関わった分に関しては、納得済みだからいいんだよ。そもそも私は死ぬ方法すら見失っているから、枷がどうかはあまり関係なくなってしまうているしな」

「リイン、心配しなくていい。」

エヴァにとつて最大の枷は、主である私のはず。私はエヴァを残して死ぬ気は無いし、都合の良い事に私も死ぬ方法を無くしている」

「いや、都合がいいわけがないからな？」

人にとつて、永遠なんて猛毒だからな？

私達も何も変わらないわけじゃないからな？」

「猛毒になるのは、元々人だったエヴァにとつても同じ。」

私は最低でもエヴァの隣に立てくるくらい、出来れば頼られるくらいに成長したいから、全く変化出来なくなる方が怖い。自分の迂闊さは理解してるつもりだから、死別を気にせずじつくりと取り組めるのは、とても有難い」

「そういう意味じゃなくてな？」

「私も一緒になったのは、お姉ちゃんのリインの重荷になつてるのかな……」

でも、一緒じゃなくなるのは死ぬ時だけだって聞いているし……」

「ああもう、フェイトは久しぶりに内罰的な考え方を発揮するんじゃない！

既に数千人も抱えているんだ、1人2人増えただけと思えば大した事じゃないだろう！」

「だけど、話をした時もあまり嬉しそうじゃなかったから……」

「友人が永遠なんて狂気の世界に縛られる事を喜ぶわけがないだろうが！」

「何だ、この空気」

ダダ甘になった空気に、思わず「アギト」がげんなりと呟いている。

ただ、話してる内容はかなりネジが外れてるような？」

現時点では連続稼働可能時間が短いだけの「リインフォースⅡ」ツヴァイは、微妙に隠れ気味だし。

説明してさらに混乱させてる気がするの、説明させた「八神はやて」達が悪いという事で事後処理を丸投げする事にして、と。

呆然と様子を眺めてるだけになってる3人が復活しないうちに食事を食べて、撤収く！

蛇足的資料：StrikerSの筈だった世界の人物
達まとめ

【八神はやて】

- ・ 並行世界の存在だが「リインフォース」と再会し、全力で堪能する。
- ・ 並行世界に関する説明を受け、通信機を所有。
- ・ 気に関する指導を受ける。
- ・ 最高評議会弾劾の中心的人物（陸・海・聖王教会の橋渡し役）に。

【高町なのは】

- ・ AMF下での無茶な魔法行使や戦闘を行わず、弱体化フラグを回避。
- ・ 高町家の戦闘力を知る。
- ・ 並行世界に関する説明を受け、通信機を所有。
- ・ 気に関する指導を受ける。
- ・ ヴィヴィオにさほど懐かれていない。

【フエイト・T・ハラオウン】

- ・ 並行世界の存在だが「母と姉」と再会し、思い切り甘える&甘やかされる。
- ・ スカリエツティによる悪辣な口撃も回避。
- ・ 並行世界に関する説明を受け、通信機を所有。
- ・ 気に関する指導を受ける。
- ・ ヴィヴィオに懐かれている。

【八神シグナム】

- ・ 並行世界に関する説明を受ける。
- ・ 気に関する指導を受ける。
- ・ 最高評議会の逮捕を断行した空尉、という偶像化の道押し付け

られた。

【八神ヴィータ】【八神シャマル】【八神ザフィーラ】【リインフォース
ツヴァイ
II】

- ・ 並行世界に関する説明を受ける。
- ・ 気に関する指導を受ける。

【スバル・ナカジマ】

- ・ 【ギンガ】破壊でのブチ切れや、対【ギンガ】戦を回避。
- ・ 【ティアナ】撃墜も無く、肉体的・精神的なダメージを回避。
- ・ エヴァ達によるしごきを受ける。
- ・ 並行世界に関する説明を受ける。

【ティアナ・ランスター】

- ・ 誤射 及び 【なのは】による教導中の撃墜を回避したが、エヴァにSEKKYOUされる。
- ・ エヴァ達によるしごきを受ける。
- ・ 並行世界に関する説明を受ける。

【エリオ・モンディアル】

- ・ エヴァ達によるしごきを受ける。
- ・ 【ルーテシア】との殴り愛が消滅。

【キャロ・ル・ルシエ】

- ・ エヴァ達によるしごきを受ける。
- ・ 【ルーテシア】との殴り愛が消滅。

【ギンガ・ナカジマ】

- ・ 戦闘機人戦での撃墜や洗脳を回避。
- ・ 並行世界に関する説明を受ける。

【ヴィヴィオ】

- ・「聖王化」「レリックウエポン化」「ブレイカーで撃墜」「聖王のゆりかご破壊」を回避。
- ・結果的に、弱体化要素と強化要素が全て潰れた。
- ・どちらかと言うと【フェイト】に懐いている。

【クロノ・ハラオウン】

- ・並行世界に関する説明を受ける。
- ・最高評議会弾劾の中心的人物（海の代表的役割）に。

【リンディ・ハラオウン】

- ・並行世界に関する説明を受ける。
- ・【アルフ】や【ユーノ】を指揮して殉職者の裏を探ったりと、地味で危険な役回り。

【アルフ】

- ・並行世界に関する説明を受ける。
- ・【ユーノ】と共に、殉職者の裏を探ったり、無限書庫で並行世界に関する調査をしたり。
- ・エヴァと共に、【ユーノ】を焼き付けたりもした。

【ユーノ・スクライア】

- ・並行世界に関する説明を受ける。
- ・【アルフ】と共に、殉職者の裏を探ったり、無限書庫で並行世界に関する調査をしたり。
- ・エヴァに焼き付けられ、【なのは】をちよつと意識するようになったかもしれない。

【レジアス・ゲイズ】

- ・ドゥーエによる死亡フラグを回避。

- ・ エヴァのSEKKYUと【ゼスト】の説得で、鞍替え。
- ・ 最高評議会弾劾の中心的人物（陸の代表的役割）に。

【伝説の3提督】

- ・ 最高評議会弾劾についての支持者に。
- ・ ゆりかごの破壊時には沈黙を守り、反対の声明は出さなかった。賛成の声明も無かったため、エヴァには積極的な支援者と思われない。

【ゼスト・グランガイツ】

- ・ 少なくとも機動6課との対立は全回避。原作期の罪状がほぼ消滅。
- ・ 騎士としての死亡フラグを回避。
- ・ レリックウエポンのまま治療せず。活動限界による死亡フラグは健在。
- ・ 最高評議会弾劾に伴う混乱を抑える為、現場を駆け回っている。

- ・ 【アギト】を【シグナム】に任せようと画策中。

【アギト】

- ・ 少なくとも機動6課との対立は全回避。原作期の罪状がほぼ消滅。
- ・ 並行世界に関する説明を受ける。
- ・ 通常は【ゼスト】を補佐しているが、【シグナム】とも仲良くなっている。

【ルーテシア・アルピーノ】

- ・ 少なくとも機動6課との対立は全回避。原作期の罪状がほぼ消滅。
- ・ 並行世界に関する説明を受ける。
- ・ レリックを摘出し、レリックウエポンから脱する。

・【メガーヌ】を看護しながら、目覚めを待っている。

【メガーヌ・アルピーノ】

・ 聖王教会の病院（聖王医療院）にて治療中。

【ジエイル・スカリエツティ】

・ 並行世界に関する説明を受ける。

・ 最高評議会弾劾の中心的人物（犯罪者側からの告発役）に。

【ドゥーエ】

・ 死亡フラグを回避。

・ 反抗的のため收容所行きに。

【クアットロ】

・ 反抗的のため收容所行きに。

【ウーノ】【トーレ】【チンク】【セイン】【ノーヴェ】【ディエチ】【ウエ
ンデイ】

・ 【ジエイル・スカリエツティ】の助手的立場を継続。

・ 並行世界に関する説明を受ける。

【セツテ】【オットー】【ディード】

・ 起動前にエヴァ達が確保。トーレの教育やクアットロの最終調整を受けていない。

・ 並行世界に関する説明を受ける（別荘で起動したため）。

【カリム・グラシア】

・ 並行世界に関する説明を受ける。

・ 最高評議会弾劾の中心的人物（聖王教会の代表的役割）に。

【ヴェロツサ・アコース】

・ 最高評議会の査察を断行した査察官、という偶像化の道を押し付けられた。

【最高評議会】

・ ドウーエによる死亡フラグだけは回避。
・ 今までの行いをスカリエッティ達に暴かれ、権威消失。
・ 自力での脱出は不可能なので、物理的には大人しく裁判を待つ身となっている。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2006年08月)

◆◆ 2006年(新暦67年)08月A ◆◆

お姉様達が、元の世界に戻ってきた。

こちらでの時間経過は、1週間と3時間。

当初の予想よりは長いけど、可能性として考えてた範囲。

学生は夏休みだし、仕事も長めの休暇を入れてあつた期間で収まった。

並行世界移動も安定している事が確認出来たし、大きな問題は無い。

意外にもクロノ・ハラオウンからの、戻ったら連絡を欲しいという伝言があつただけで。

「で、何があつた?」

『悪い事じゃない。むしろ、一般的には喜ばしい事だ。』

プレシアが提供した技術が、実際に幼い命を救つたんだ。

臨床試験を受け入れた両親が大変喜んでいて、礼をしたかったので療養を兼ねて滞在している別荘へいらして下さい、気に入られましたらいつでも準備を整えておきますのでご自由にお使い下さい、と言っているそうだ』

「確かに、実際に治療で使えたならプレシアも技術を提供した甲斐があつたと言えるし、礼を受け取るかどうかはともかく、喜ぶのも理解は出来る。」

だが、プレシアの現在の地位を知ってそう言えるなら相応の地位や資産を持つのだろうか、私達にとっては問題があるという言い方だな?」

『ああ。』

1つ目、その家は近隣の次元世界を股に掛ける商家だ。どうも今回の改革で発生した混乱から距離を置き、市民の生活を支えていた実力

者という事らしい。下手に断って関係を悪化させてほしくないと近隣世界の代表数人が代表評議会で発言する程度には、軽視出来ない相手だそう。

それに、僕達が最高評議会とのパイプを独占しようとしているという批判がまた出始めている。もう少し他の人とも交流してもらえると有り難い』

「確かに私達にとって面白くない展開だな。批判の矛先も、私達を追い落とす方向に向いてもらった方がよほどいいんだが……」

それに、まだあるのか？」

『2つ目なんだが。』

救われた子供の名は、エリオ・モンディアルだ』

「……そう来るか。そう来てしまうのか。」

今更原作がどのと言う気も無いが、ここでその名を聞くとは思わなかった」

だって、つい先日まで間近で見れたし。

訓練で何度も撃墜させてたし。

『もちろん、訪問を強制するような馬……じゃない、立場や役目を理解出来ない者はいないが。』

どうする？」

「とりあえず言っておくが、勝手に処分しなくてもいいんだぞ？ 八つ当たりの相手が減ってしまうからな」

『やったのは僕じゃない。苦情はわざわざ付け入る隙を晒した犯罪者達と、二次被害を警戒して過剰反応する人達に言ってくれ』

「ああ、そういう連中か……優先順位が変わっただけなら、何を言っても無駄そうだ。」

ところでお前個人としては、交流を持つても大丈夫そうな相手だと思っているのか？」

『正直に言えば、よく解らない。ただ、本人達は純粋な感謝の気持ちによる招待であり、この繋がりを利用する意図は全く無いと明言しているのは確かだ。それに、経歴から見て政治とは距離を置いているし、交易と言う意味では地球や別荘産の品はあまり出回っていない地域

になる。政界進出以外ではあまり利点が無いとは言える。

交流に反対する意見は、この様な形で先例を作って今後招致の嘆願が増える事を危惧する事務方のもと、仲が良くない次元世界の代表が牽制してきたものくらいしかなかったのも事実だ。それも独占を批判する声であつさりと撤回する程度だから、あまり問題視されていないと見ていい』

「事実上、反対が無いのか。」

とりあえず、モンディアルの件をどうするかは、保留だ。近いうちに相談して決めるから、それでいいな?」

『ああ。僕達が止めているという状況でない事を説明出来るようになれば、大丈夫だ。』

そうそう、もう1つ別件の連絡がある。

君の国がある世界は、第1到達不可世界として扱われることになった。ようやく、辿り着けない事に納得してもらえたようだ』

「到達不可、か。安直だな?」

『隠されているとか、行つてはならないとか、そういう意図的な制限ではない事を明確にする為の呼称だ。』

定義は、通常の手法では到達出来ず、往来するには特別な手段が必要となる世界。通常の手段では往来出来ないという事は管理も不可能、広い意味では管理外世界の一種という扱いになる。

他にそのような世界が存在している可能性が否定出来ないから、新しいカテゴリーに分類する意味は充分だろう。例えば並行世界が何らかの形で広まってしまったら、これに該当する事になるはずだ』
「まあ、そうなるだろうが、別に呼び方などどうだっていいさ。」

一般的にあの世界はエヴァンジュ・リゾートで通つてしまっているわけだし、並行世界も私達が介在しなければ証明出来ないからな』
『違うない』

◆◆ 2006年(新暦67年)08月B ◆◆

「という訳ですので、この様な内容での契約とさせて頂きたいと考え

ております」

お姉様とプレシアは現在、とある人物を交えて真面目なお話し中。主な内容は、新しい家に関して……なんだけど、それだけじゃ済んでない部分もかなりある。

「ふむ。要するに、私達が所有するのではなく、私達に貸すのでもなく、私達に管理を任せるといふ形にするわけか。一応接待やらで使う事も想定するが、私達が認めた相手以外に使わせる必要は無い、と。

随分と私達に都合の良い話には聞こえるが……」

「管理費という形で給与も支払えますし、税金もこちらで処理出来ます。将来的に戸籍の切り替え等を行う際も契約者を変更するだけです。相続関連の心配もありません。」

勿論、我々の組織は呉越同舟ですから、持続性に不安を感じるのは仕方ありません。

ですが、当社の役目は貴女方に快適に過ごして頂き、管理局や犯罪者に関する業務を円滑に行える環境を維持する事にあります。その点でのブレはありませんし、意思決定のルールも株式会社という体裁で定義されているものに従います。

最大株主は土地及び建物を現物出資する我々となる予定ですし、主要国の関係組織で過半数の株式を保有致します。他の組織や国は、関係を維持する為に株主になるようなものです」

「まあ、言いたい事は解る。だが、私達の関係者で色々やるつもりですが、それはどうなる?」

「マンションとしての管理業務を委託する者は、必要です。事情に明るく真面目な方がいれば、是非紹介して頂きたいくらいです。」

我々がテストロッサ家に委託するのは、マンションの一部に設けられた接待用設備の管理及び接待業務ですので、その為に必要な人手を雇用等の手段で得る事も、問題ありません。

また、テストロッサ家とグラシア様には、これまでと同じように管理局や聖王教会関連の業務を依頼する事もありますし、その依頼料は経費等と合わせて別途計上する事になるでしょう。

交易関係に関しても、多くの国と関わる事が可能な状況が出来上が

ります。現状より動きやすくなるのは間違いありません。

伺っていた事や、こちらで予想したものはこれくらいですが、他に何かありますでしょうか？」

「ふむ……まあ、所有に拘る気は無いし、問題は無さそうだが……」

プレシア、どう思う？」

「話を聞く限りでは、問題無さそうね。」

以前渡した技術の技術料を受け取っているけれど、その扱いはどうなるのかしら？」

「今後も従来と同じ形で継続致しますし、スカリエツテイ様の部屋もその報酬の一環とする方向で調整が進んでおります。」

当社の業務として、各国での特許取得と企業への売り込みも行う予定です。参加国が多い事で売り込み先が増える可能性もありますし、特許の同時出願を行い易くなりますから技術料を上げる事も可能になると予想しております。悪用する相手の対処に関しては、それこそ裏側の力の見せ所です。

ちなみに社名はテストロッサに因んで、レッドヘッド株式会社となる予定です。

いかがでしょうか？」

「そうね、問題無いわ」

そんな感じで、話がまとまって。

正式に契約を結んだ帰り道。

「まあ、私達の所有としない事で、私達を縛りやすくする目的はあるのだろうか……」

「当然でしょう。」

私達がこの星を捨てる事が出来るからこそ、結びつきを強くしておきたいという意図が透けて見えていたわ」

「管理局やらとの交渉で、私達の存在は有利に働いている様だからな。」

金で恩を売れるなら、この程度の金額は惜しくないという事か」

「貨幣経済では、最も汎用性の高い恩の売り方よ。」

必要な物でもあるのだし、貰う方がうまくいくのだから、貰っておきなさい」

「そうなんだがな。正直言って、家の方もはっちゃけ過ぎたのが悪かった気がするぞ。」

建てる事になったせいで、他の家にも引越しい辛いし……今の八神家では、全員入れん」

「たまに顔を出しているけれど、母親らしくは無いわね。」

解体も終わって、基礎工事が始まったところらしいけれど……あと一年半くらいと言ってたかしら？」

「まだ先だな。私達の時間から見れば短いものだが、私達が住むだけの建物ならもつと早かったんじゃないかとも思うぞ」

「それがさほど気にならないのも、別荘の弊害かしらね」

◆◆ 2006年（新暦67年）08月C ◆◆

クロノ・ハラオウンとの会話から、約2週間。

時折やり取りしてるメールでエリオ・モンディアル（真）が生きていたことを知らせて「八神はやて」達を驚かせたり、本人と月村家の依頼と了承で馬場鹿乃の転生特典を解除したりしながら、なんとなく準備は進み。

お姉様達は、とある管理世界に降り立った。

「ようこそおいで下さいました。」

私はこの街で商人のまとめ役をしております、ソリオ・モンディアルと申します」

それを出迎えるのは、まとめ役としては比較的若い男性。

痩せ型でどじよう髭（短い方）の顔も、ぶっちゃければStrikerRSにちよつと出た姿と一緒。

ぶっちゃけそれはどうでもよくて
閑話休題。

この街は観光に訪れる人も多い交易都市。大型のイベント会場や宿泊施設も多く、大型のハブ空港もすぐ近くにある上に、直上の静止衛星軌道には中継用の宇宙ステーションも完備してる。

近隣の次元世界から物や情報が真つ先に集まるから、個人組織を問わずに買い物目的の人も多く、中心部はいつも超賑やか。買い物目的

なら、つい最近歩いたクラナガンよりも歩き甲斐があるかもしれない。

まさに、商人の商人による商売の為の街。

1年中気候が安定しているせいか、郊外の方には療養や医療目的の設備が多く静かな区画があり、ここが療養地として有名。技術交流も活発だから治験等も盛んに行われてるらしく、プレシアの技術が流れてきたのはある意味必然に見えるけど、お姉様には直接は関係しない。

移動は、アースラが整備や補給の為に本局に戻るのに便乗、本局からはこっち方面担当の巡回を担当する部隊に護衛されながら。お姉様は自前か一般の旅客艦でいいと言ってたけど、体裁と警備と騒動対策の為にそれは止めてほしいと担当者……クロノ・ハラオウンの本局での補佐官に、泣いて説得されてた。

「だが、本当に良いのか？」

もう少し話をして良かったと思うが」

「一応、私もお偉いさんの肩書で来てるはずやし」

そしてラインフォースとはやては、ジユースを手困惑中。

その理由は、挨拶もそこそこに、プレシアと護衛とセツナやすずかたちゆつくりしたい人と変態ロリコン以外の人、つまり、主、はやて、ラインフォース、ヴィヴィオ、カリム・グラシア、リンディ・ハラオウンを、お姉様が観光に連れ出した事。

付いてくる護衛な人達は、連れ出した数に含めない。シグナムやシャツハ・ヌエラ達と現地の警備部隊が調整して、邪魔にならない程度に控えてるだけだし。

ちなみにアルフとザフィーラ、おまけにエイミー・リミエツタ達は、日本で留守番。教導の仕事やら親衛隊としての防衛任務やらもあるから、全員で来るのは無理。似た理由で、クロノ・ハラオウンも本局でお仕事中心。

「少なくとも表向き目的はプレシアだから、これでいいんだ。私達があいつらに取り込まれたように見えると、余計な場所に蠅が湧く可能性がある。私のスタンスはプレシアが伝えてくれるはずだから、そ

れで充分だ。

それに、どうもこの近隣世界は政治や宗教といった権力的な物から距離を置く傾向がある文化らしい。明らかに権力側で護衛やらの姿も見える私達の場合、空気を読めない阿呆や外部からの刺客的な馬鹿くらいしか寄ってこない可能性が高いらしいぞ？

聖王教会の勢力も小さくて、冠婚葬祭と医療程度に徹しているようだしな」

「つまり、私達が護衛される側である事を自覚する限り、比較的普通に動く事が出来るという事。教会も間を飛ばして中央にすり寄る事の危険性は把握しているし、そもそも熱心な信者も騎士団もないから、司祭が挨拶に来る程度の筈。

ヴィヴィオやカリムを含めた私達にとって、管理世界では珍しい騒がれずに行動出来る”地域の可能性が高い”

「あの地での生活も特に騒がれる事は無いのですし、私は聖王陛下の威光が届いていない事を嘆くべき立場なのですが」

「魔法の秘匿を気にせず、かつに自由に動ける地、という意味では貴重ですよ。

それに、私の権威に意味はありません」

ヴィヴィオは微笑んでるけど、カリム・グラシアは苦笑気味。

立場をどう考えるかで、この世界の意味が大きく変わる。

「ヴィヴィオ様自身はそう感じておられるかもしれませんが、道義や倫理はある程度統一されている事が望ましいのです。

何が推奨され、何が許されないのか。その指針を維持し、教え広めるのも、私達聖王教会の役目なのです」

「だからと言って、少数の意見を殺してしまうのは良くありませんよ？」

「もちろんです。

時代が変われば考え方も変わります。住む場所が違えば、気候が違えば、文化が違えば、民族の成り立ちが違えば、歩んできた歴史が違えば。守るべき約束もまた変わるのは当然の事です」

「その意味では、人と人の間に立つ商人も、似た事を考える者は多いと

思うぞ」

「商人は理解をしても、広めようとはしません。

商人とは、基本的に利を追うものです。人を繋ぐのは利に繋がるからであり、理や情によるものではありませんから」

「だが、人が動く、人を動かすには十分な理由だぞ。

人と人が互いに求めるものを交換する為に、対話する必要がある。お互いがいなくなつては困る立場になる事で、平和な状態を維持しようという力が働く。

ただ平和を求めたり、一方的に要求したりするよりも、よほど安定すると思うがな」

「それはそうなのですが、利益のために人を抑圧したり、人の命をも商品と見なしたりするのもまた商人なのです。

いえ、商人には限りませんね。大きな組織……統治機構や時空管理局であっても、道を踏み外す事はあるのです」

「それは宗教も同じで、聖王教会も大きな組織という点では大して変わらんさ。

むしろ、勢力を広げるために他の宗教の神を悪魔と罵り信者を弾圧する事もあるくらいには、盲目になった信者や正義という名の免罪符を手にした指導者は恐ろしいぞ」

「確かに、それも無視すべきではない危険性です。

それでも、お互いを尊重し、手を取り合える未来を目指すという点だけは、揺らいではならない理念であり、人が信じるべき教えの根幹になるべきものだと思うのです。

その模範となり、架け橋となれる信徒の存在は重要です」

「その辺は宗教の立ち位置にも絡む問題で、文化の違いが大きく影響する部分だと思うが。

……ところで、観光都市に遊びに来ているのに、どうしてこんな話になつているんだ？」

「きつと、視点や価値観の差異と、論点がずれているせい。

そもそも立場や状況をどう扱うか、エヴァとカリムで大きく違うから」

ジュースを飲みながら静観してた主の、的確なツッコミ。
でも、もつと根本的な部分は、お姉様がここを「管理世界でも立場で縛られずに動ける場所」と判断して、カリム・ロシア達にもそう認識させようとしてる事だと思う。

◆◆ 2006年（新暦67年）09月 ◆◆◆

各地の権力者や有力者からの誘いを、権力目的ですり寄る馬鹿に用は無いと一蹴しつつ。

今日も今日とて、お姉様は研究中。

理由はもちろん、能力を全て把握するに至ってないから。

世界への干渉は感覚的なものが大きくて定量化出来そうにない上に、やろうとした事は大抵出来てしまうから、限界を把握するのは既に諦め気味だけど。

問題は、どこまで出来るか。

ついでに既存技術とお姉様の力で行使した結果の差異やらも調査中だし、既存技術をお姉様の力で検証もしてる。

「今となって見ると、別荘の空間はちよつとざわつくような感じがするが……」

というわけでお姉様は現在、別荘の空間を調査中。

特に別荘にいる時に、空間に違和感があるようになってきたらしい。

私達や既存の設備では、誤差や世界毎の差異といった「正常範囲内である」事しか判らない。

お姉様以外は違和感を感じてないし、ここしばらくで変化があった様子も無い。

考えられる可能性は、お姉様の能力向上？ 機械的なノイズを拾ってしまふようになった？

他の次元世界や並行世界に滞在した影響？ モンディアルな所に行っていた間は、別荘に入らなかつたし。

「データベースの格納領域ではほとんど気にならないのが余計に解らん。

プレシアの研究室用に使っていた物以外は小さすぎて、比較対象にも出来んが。

検証の為だけにデバイスを作るのも面倒だし、他の世界と別荘の違いを調べた方がまだ……あゝ」

出てはいけない声が聞こえた気がする。

何だか警報音が聞こえる。

設備の管理や保守を担当してる従者達が慌ててる。

なんとということでしょう。お姉様の手によって……いったい何が？

『……エヴァンジュより、別荘の全住人に通達だ。

空間維持設備を順次停止してくれ。同時に一部駆動炉を停止してエネルギー供給量を削減、過剰供給への対応を頼む。

警報自体は問題ない。別荘の空間は現在……私の制御下であり、これまでの様な維持管理は必要無くなっている。念のため設備自体はしばらく維持しておいてくれ。

以上だ』

なんとということをしてくれたのでしょうか。お姉様の手によって、2500年続いた別荘の空間維持管理業務が取り払われたではありませんか。

人工空間でなければ不要だった作業が減るからいい事ではあるだろうけど、突然すぎて担当者達がちよつと不憫。

「……ぬああああああああああああ!!」

やつてもうたああああああああああああ!!!」

お姉様のキャラまで壊れてる。

もしくは、お姉様が壊れた？

想像出来る気がするけど、いったい何が？

「……この空間そのものに私が同化して、安定的な空間に変化した。この空間を世界と表現するなら、この世界が私で、この世界にある物は全て私の支配下にあり、この世界が無くなるまで私も消える事が出来なくなつた……と、思う」

取り敢えず、お姉様が再構成される世界が増えたのは確実？

これで3つ目？

「違う。この世界がある限り、再構成すら必要無くなったという意味だ。」

今はこの体が基点になっているが……」

ん？ お姉様基準の探知領域が急速拡大？

魔力生成速度も急上昇？

「取り敢えず、日本相当範囲を覆える位にまで『私と認識する範囲』を広げてみた。」

だが……状況を調べるにも慣れが必要そうだな。従者達の居場所を把握する程度は問題無いが、自動人形まで広げると数が多すぎるし行動を調べるには情報量が増えすぎる」

本来は慣れなんてレベルじゃない。

でも、これだけはやっておきたい。

うはwwwwwwそれなんて神wwwwww

「うざい」

ひどい。

でも、会話は従来通り？

従来の2つの世界での扱いは？

「物理的なインターフェースとしての体は、維持する事になるだろう。別荘以外で体が必要なのは今まで通りの様だから、日本で過ごすには不可欠な端末でもあるしな。」

あの2つの世界での再構成がどうなるのかはよく解らんが……私が管理し切れるなら、体も増やせそうだな。どれも本物で、どれも本体ではないが」

お姉様の本体が別荘の世界になったから？

お姉様が増える……

もしかして：別途魔力回路を用意しなくても私達が複数の世界で活動する事が可能？

「……うん、出来そうだな。」

魔力や通信の維持に特化するなら、人型である必要も無いだろうし……」

魔力回路維持担当使い魔の存在意義の危機をお知らせします。

「……いけるな。これならアコノやセツナ達に私が付き添えば、行動範囲の制限は無くなるか。感覚やらを切っておけば居場所以外は伝わらんだろうし、それは今でも変わらんな。」

面倒事のせいで他の次元世界に行くこともあり得なくはないだろうから、一応相談を……いや、別行動しない理由を残しておいた方がいいか？ だが、書の構造を迂闊に漏らすわけにも……」

ああ、お姉様がポンコツに。

最終的には本人に相談して希望を受け入れるんだから、悩むだけ無駄なのに。

でも、思考がグルグル回ってるお姉様も、何だかかわいい。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2006年10月)

◆◆ 2006年(新暦67年) 10月 ◆◆

もう、秋です。

読書とか食欲とか、いろいろ言われる季節です。

並行世界では「ヴィヴィオ」が「フェイト・T・ハラオウン」の娘になる事が決まったのに、相変わらず「高町なのは」と「ユーン・スクライア」の関係が進展しない、鹿しか恋しいかもしれない季節です。

そんなわけかどうかは置いて、お姉様は珍しく八神家のダイニングでポテチとチューハイをお供に、夜の読書中。

もうすぐ日が変わる時間。主やはやては寝てるし、ヴィヴィオや守護騎士達も自分の部屋や別荘にいる。つまり、割と広いLDKにお姉様1人。

セツナが階段を下りてくる音が聞こえてるけど。

「……どうした、眠れないのか?」

「はい……疲れは感じてるんですけど。」

あ、ポテチ少し貰っていいですか? チューハイ飲みたいです」

「ポテチは構わんが、酒を飲んでいいのか高校生?」

「前世は成人済みでたまには飲んでましたし、今世はこの姿で固定ですし、エヴァさんも小さい方の姿で飲んでますし。」

心や体への影響とか自制心とかが禁止の理由だと思っんですけど、ぶっちゃけ私達には関係なくないですか?」

「違うない」

そんな事を話しながら、セツナは冷蔵庫と食器棚を経由してお姉様の隣に。

ぷしゅって音が、とっても缶のチューハイらしい。

「で、何かあったか。」

「愚痴ぐらい聞けるし、可能な範囲なら手助けも出来るぞ?」

「それなら、ちよつと愚痴をこぼすので、聞き流してください」

それからぼつぼつと話す内容は。

要約すると、女子高生怖い。

「私は、そういう状況になったことは無いが……そんなにか」

「一部の人だけなのは解ってますけど、その一部の頭がピンク過ぎて……」

こっちは精神的に男なので、誰が誰を好きだのお前は誰が好きかだの彼のどこがいいだの彼と付き合ってる彼女はあれが駄目でこれも駄目だの……付き合い切れません。

子宮で思考する肉食系女子、怖いですよ……」

「股間で思考する野獣系の男もいるから、あまり言えん部分ではあるが……絡まれたのか?」

「最初は、そんな子達のグループが姦しく喋っていたのが聞こえてきただけでしたし、無視していたんですけど……どうも、その中の1人が好きな人が、私を好きらしいと噂が立ってですね……」

男に惚れられても気持ち悪いだけですし、それをオブラートに包んで言っても彼のどこが気に入らないんだとか言っても切れるし……」

未だに女って理解出来ません……」

「心配しなくていい、私にも解らん。」

鈍感系ハーレム主人公のどこがいいのか理解出来るのと同じくらい、現実の女の恋愛観も複雑怪奇だ。人によるのだろうが……それもな」

「ですよー。呼び出して振るから落ち込んだところを優しく励ましたらどうかって提案したら、なし崩しで見せ付ける様に付き合うつもりなのでしょとか、意味が解りません。自分以外は全員敵なのでしょとか……その割には群れてますけど。」

あ、ポテチ無くなったので、次のを取ってきます。何味がいいですか?」

ポテチ等々は、戸棚にいっぱい。

煎餅やチョコもあるし、色々と買い置きしてある。

「別にポテチじゃなくても好きな物でいいが、ついでに私の酒も頼む。昔から色恋が原因の騒動はあるからな……私達に直接影響しそうな連中は、比較的平和だと思えるんだが」

「お酒は何味がいいですか？」

「と言うか、直接影響しそうって、なのはちゃんとユーノと……」

あの2人は……ねえ。

並行世界の2人は、相変わらずの奥手っぷりを発揮してるらしいし。【ヴィヴィオ】の【フェイト・T・ハラオウン】ファミリー入りが内定して、2人の時間は原作より作りやすいはずなのに。

「甘めのなら何でもいいぞ。」

原作で結婚するクロノとエイミイ、同じく恭也と忍、恋愛と言っていいか判らんカイゼと美由希、外に相手がないザファイーラとアルフ、既婚のプレシアと変態^{ロリコン}。

とりあえずの組み合わせは、これくらいか？」

「プレシアさんが、早苗くんを気に入ってませんでした？」

あと、すずかちゃん、馬場と契約が云々とかあったような」

「黒羽は料理が恋人みたいだし、異性に恋愛感情を持っているのか微妙じゃないか？ それに、フェイトやアリシアも異性としては意識していないと思うが。」

将来はともかく、今はまだ仲のいい友達程度に見えるぞ」

いやいや、当時のフェイトはちよつと意識してた気も。

プレシアに紹介するくらいだし。

恋愛と言つていいかは確かに微妙だけど。

「あと、馬場はな……すずかがテストタロツサ家入りした時点で、可能性はほぼなくなっていると思つているんだが。契約以前に、血を飲む必要が無くなっているからな。」

駄目押しで、あつちの世界から戻つてから逆ナデポも破壊しているし」

「やっぱり、そうなんですか。あ、がちよいのバナラピーチミルクでいいですか？」

あとは……男が少ない割に、天牙つて誰ともそんな感じが無いです

よね?」

「ああ、有り難う。」

天牙の場合、視線は行っているが特定の誰かという感じじゃないな。あれでも男だし、思わず目が行っているだけだろう」

「胸とか足とか、ですよ。男のチラ見は女のガン見って言うらしいですけど、確かに気付きますし。」

でも、私は魔獣と戦っていたせいで視線なんかを感じるのには慣れてますけど、世の女の人ってどうやって気付いてるんでしょう……?」

「私は暗殺者対策で鍛えていたな。」

妹達が捕捉していたから、不意打ちを受けた事は無いんだが……そういうえば、殺す為にわざと私のところまで通した事はあったか」

「殺す為って、ひどくないですか?」

「生きて捕らえた場合、大抵は拷問の後、人体実験、資材、奴隷、狂人共の玩具のどれかだ。外見が良くて若い女なら性奴隷、反抗的だと手足を切られて処理道具扱いになる事すらあった。」

私が殺し、一瞬で全てを奪ってしまった方が救いになる場合だってある。そんな時代だ」

「殺伐としてますね……リアル魔物を狩るモノたちも似たようなものですけど。仲間が生きたまま食べられてるところなんか、トラウマものですよ。」

ところで、眷属とか従者って、子供が出来なくなって性欲も無くなるんですよ?」

「そうだな。それがどうかしたか?」

「いえ、フェイトちゃんとか、すずかちゃんとか……恋愛するのかなと思っただけ。」

それに、性的な行為自体はどうなのか、詳しくは聞いてないなと」
「性的な欲求や興奮が無くなるだけで、肉体的な反射は一応あるし、刺激で少し気持ちよくなったりはするらしいぞ。疲れた肩や腰のマッサージの方が気持ちいい程度らしいが。」

お前達の感情面は、さほど変わっていないはずだ。従属属性の連

中、要するに別荘の従者や戦闘機人はこの辺もかなり狂っているんだが……それよりも、不老化した年齢の方が問題だな。

あの年で、どこまで異性を意識してるやら。本当の体が成長しない以上、成長に伴う学習がうまくいくか判らんし」

一応、大人モードやらで、体の成長を模倣してはいるけど。

不自然さはどうしたって出る。

夜寝る時とか、体を休めるためにも大人モードを解除してるし。

「好きな気持ちがあっても、性的な欲求が無いわけだから……静かに寄り添う老夫婦、みたいな感じになるんでしょうか？」

それか、仲のいい友達に好きとか言う子供らしい付き合いとか」

「当面は子供らしい付き合いになるだろうが……難しく考えない方がいいかもしれん。

従者連中の話を聞くと、仲のいい相手とデートでいちやついて、食事して、休憩したりする事もあったりしているようだ。つまり、休憩がホテル用語ではなく本来の意味だけで、普通の人と大差は無い。

その辺が気になったという事は、誰か気になる相手でもできたか？」

「私が誰かに恋をするのって、あまり想像出来ません……少なくとも、男性相手は全力で遠慮したいです」

「あらんかぎりの力でそれとなく断るのか。高等技術だな」

「拒否とか拒絶とかでもいいんですけどね。」

エヴァさんはどうなんですか？ アコノさんがあからさまに好意を向けてますけど」

「私も恋は無理だろうが……アコノを好きか嫌いかで言うなら好きだし、男として一途に想われるのが嬉しくないわけもない。永遠なんて狂気の世界を押し付けた責任を取る気もある。

もつとも、日本で同性婚は認められていないし、法的には姉妹になっっているからな。家族として仲良くやっていくさ」

家族（笑）

言い方だよねえ。

正確には家族ふうふうって言うべき。

「それ、同性婚が可能なら結婚するって聞こえますよ?」

日本とかならともかく、別荘だとエヴァさんが法律ですし」

「そういう形式をアコノが喜ぶなら、用意するぞ。」

ただ、別荘には戸籍という制度すら無いが」

「あれ、無いんですか?」

「というか、いくらなんでも人の管理はしてますよね?」

「人を管理する名簿はあるが、人の関係に関する記載はメモ程度しかないぞ。」

私の使い魔は子孫を残せるんだが、別荘の連中は年齢操作をする事が前提だからか自主規制しているらしいしな。金や財産というモノ、死や世代交代という区切り、血族という繋がりが無いとなると、家という概念が不要になる。全員まとめて家族の様なものだしな。

1人暮らしから多夫多妻まで、色々な形で集まったりばらけたりしているらしい。その集団を見分ける一番簡単な方法は、住所だそう。複数登録してある場合もあるから、単純には調べられんが」

本宅や本籍という概念も無いから、本当に曖昧になってる。

本人の特定は、IDと認証情報的な感じで問題になってないし。

連絡手段も、本人直通と主要な関係者が判れば充分だし。

「はあ、やっぱり別荘って制度が特殊ですよね……あれ?」

使い魔の人は、死ぬ事があり得ますよね。その場合は色々問題が出るんじゃない?」

「死亡した事は確かにあるが、貨幣が存在しない上に全てが私のものという前提だから、個人の資産や遺産は無い。つまり、死亡した場合全ての持ち物が共有物に戻されるから、相続問題は発生しない。子孫や扶養者がいないから、親権やら養育云々の問題は原因すら無いしな。精々が思い入れのある品の取り合いになる程度らしい。」

問題が出るとすれば業務の維持に関してぐらいだが、複数人体制が当たり前に組まれているし、少人数で行う業務でも人の入れ替えはあるから経験者はまあまあいるらしい。だから、残りの者で調整するなりすれば問題無かった、と聞いている。

そもそも2500年でも数えられるほどしか死んでいないし、使い

魔達は魔法を使う役目を担っていたから複数人体制が必要だったよ
うだ」

「魔力の有無で、役目が変わるってことですか」

「自分の能力で役に立つ業務の担当になるという前向きな建前で、実
際問題としても、自分達がやっているんだという自負とプライドは相
当なものだぞ。」

実際、法的な決め事と言う意味では、人の役目を限定するものは無
い。私が頂点である事、私が過ごしやすい事、あいつらに可能な手段
で維持管理する事、全員が人として互いを尊重し合う事。憲法に相当
する決まりの内容など、この程度だ。

法律に近いものもあるが、担当者が作った説明書や引継ぎ用の手順
書のような形式が多いしな。幾つか見せてもらったが、内容決定や改定
の経緯や理由、根拠なんかも書いてあつて、むしろ文化的な資料とし
ての方が優秀かもしれん。要求される能力の記述もあるが、日本でも
技術や資格が必要な仕事などいくらでもあるのと同じようなものだ。

その辺の記述がしつかりしていたせいか、チタマの方の従者達も一
旦はそのまま取り入れる方向になった様だしな」

それもあつて、最近は魔力が必要な業務に、カートリッジを引っさ
げた従者が参加する事も増えている。

規定を満たしているから問題ないし、問題が出たら原因を調査して
規定が変わる。

「決まった頃は人数が少なかったから、なんですよね？」

そのままだと、人数が多いチタマの方だと問題があるんじゃないか……
「私という最高意思決定者の不在という状況と、別荘の維持という負
担もあつたからな。ある程度は担当する者に任せ、文句が出た場合は
都度相談して改善しながら運用するという体制で落ち着いたらしい。

それに、どうしてこうなっているかという情報があるんだ。とりあ
えず取り入れて、必要に応じて改定していくという方針らしいぞ。現
状を理解して話し合いをスムーズにするためには有用な情報だし、制
度面まで人を回す余裕も無いかららしいが」

「確かに、たたき台としては優秀かもしれませんがね。」

現実というか、法律とか組織の決まりとかには無い情報が付いてるって事ですよね？」

「正確に記録を残すのは難しいし、その維持にも手間暇がかかる。経緯を残したくない連中も中にはいるだろう。」

運用に必要なのは結果であって経緯ではないし、公布するには不要なものでもある」

「完璧って、あり得ないですよね……」

「どれくらい努力して、どこで妥協するかどうかだろうな。」

怠けたらいいものにならないのは当然だが、やり過ぎも時間や費用の無駄になる」

その辺は、時間がいくらでもあった従者達の特殊さというか。

お姉様や私達がいつ戻るか不明だったから、場当たり的に対応出来る柔軟さを維持しながら安定する方法を手探りで探すという、正解のない答えを模索し続けた結果と言うか。

「ですねえ。でも、管理局でも法が決まった経緯とかが公開されていれば、夏に行った並行世界の事件は起こらなかったかもしれないですよね」

「その時は、それを前提とした隠れ方をするだけだと思いが。適当な理由を付けて明文化しないとか、方法はあるからな。」

別荘は、全員が協力して維持するという質の悪い洗脳国家だから維持出来ているだけだ」

「テロリストを社会維持に使えるように教育するって表現にすると、悪い事かどうか判断出来なくなりますよ。管理局の更生施設なんか、その為の公的機関じゃないですか。」

「こっちの世界では結構埋まってるらしいですし……あっちの並行世界にもありますよね？」

「あるはずだが、こっちの方が時間の流れが速くなっていてな。」

待っている時間ほどは事態が変わらないし、把握するのも面倒だから、あまり話を聞かないようにしている」

「そうなんですか？ 確か、最初はあっちが60倍だったはずですよ。帰った頃には2倍くらいになってましたっけ」

「そうだが、今ではこつちが2倍くらいになっている。

最終的には同じ時間になるくらいで落ち着くんじやないかと思うが……こればかりは、様子を見るしかないな」

「初めての事だと、予測も難しいですよね」

「そうだな」

◆◆ 2006年（新暦67年）12月 ◆◆

別荘の空間維持設備が全て停止し、駆動炉の出力もようやく安定した頃。

日本の学校は、冬休みに入ってた。

「で、お前達が休みにちよくちよく出かけていたのは知っているが……」

何故私まで行く必要がある？」

そして、お姉様は変態ロリコンと成瀬カイゼの依頼で、とある次元世界へこつそりと潜入してた。

他の同行者は、主のみ。4人（私達を除く）でお出かけ。

「私達だけで何とか出来れば良かったのですが、やはり難しそうだという結論になったのですよ。」

自分の専門分野以外の事でその道に明るい人に心当たりがある場合は、任せられた方が良い結果が期待出来ますからね」

「だから、何をさせたいかを聞いている。」

何の説明も無いままこんな所に連れてこられてるんだ。さあどうにかしてくれと言われても、意味が解らんとしか答えられん」

目の前には崩壊しかけてる石柱が並ぶ遺跡のようなものがあり、周囲は夕暮れを過ぎて闇に染まり始めてる。

人の気配は……遺跡の中に1人だけある。

「それは当然ですね。」

とりあえず、場所はこの遺跡です。カイゼ君は手筈通りに」

「解ったよ」

ロリコン 変態の合図で、成瀬カイゼが闇に消えた。

相変わらず暗殺スキルがいい仕事をしてる。

「それで、私の役目は何だ？」

「とりあえず、歩きながら説明しましょう。」

依頼するのは、この遺跡で眠っている人物の治療と、能力の封印又は制御です。上手くいけば、不老不死仲間が増えますよ」

「また眷属や被保護者が増えるという事か？」

「いえいえ、素で不老不死らしいですよ。1000年程前の文献にも存在していた事を示す記録がありましたから、少なくとも人の寿命を超越している事は確かです。一言で言ってしまうえば改造人間に該当しますし、聖王等と同じく、兵器としての力を与えられた存在ですね。」

その現状を説明しますと、兵器としての機能を制御出来ないために活動を停止している状態ですから、これを何とかする事が最優先の課題になります。

次に眠っている状態を調査し、自然に意識を取り戻させる必要があります。友となる為には会話出来る事が必要ですし、無理に目覚めさせるのは無理がかかる可能性がありますからね。

私からの依頼は、以上2点です。すぐに意識が戻るかという問題もありますから、以降の対応は追って相談するつもりですよ。もちろん私の独断ですから、事後は全て私が見るつもりなのですが、それで問題が無いか、より良い方法が取れるかどうかの相談ですね」

「概ね理解した。」

だが、これだけは言っておく。自重しろロリコン変態」

「おや、少女とは言っていないませんが」

「どう考えてもイクスヴェリアだろうが！ 貴様にストライクだから助けるとしか思えん!!」

お姉様のサウンドステージXのブックレットの記憶は、あまり鮮明じゃない。

けど、高町ヴィヴィオと同年代か精々少し上程度と思える少女の姿で描かれてるように見える。

つまり、少女または幼女と呼ばれる年齢。外見上は。

「流石にばれますね。そういう訳ですので、色々と面倒なことになる前に対処してしまおうと思っただけですよ。」

我々、聖王教会、管理局。それぞれの利益を考えても、こうしてしまうのが一番問題ないかと」

「解った解った。だが、ロリコン変態に事後をエサ任せる気は無い」

「ええ、問題ありません。彼女としても、外見的に同年代の友人と過ごす方が良いでしょう。」

到着しましたよ。この扉の奥です」

「くそっ、手のひらで転がされているようで気に入らん」

ようだというか、どう考えてもいいように使われてる。

益があるだけに、無暗に断るのもどうかと思わせられてる辺り、ロリコン変態が上手いというかお姉様がちよろいというか。

それでもお姉様は扉に手を当て、解析開始。

「ふむ、封印処理はされているのか。術式は割と最近のものだが……脆弱だな」

「実力不足なのでしょう。解放戦線で活動しつつ、劣勢を覆す切り札としてロストログアを漁っている人物ですから。」

違いますか？ トレディア・グラージェ」

「は、離せっ！」

ロリコン変態の視線の先には、成瀬カイゼに拘束された中年男が。

なんだか神経質そう。

こんなところで活動してるせいとか、少々栄養不足気味に見える。

「コレが、アレか。」

マリアージュという深淵を覗き、私達という深淵に見付かった不運男か」

「随分な言いようですね。否定はしませんが、エヴァちゃんは怪物ではないでしょうっ！」

「怪物や化け物の類だろう。というか、ツツコミはそっちなのか」

「それはそうでしょう。ああ、不運という言葉も相応しくありませんね。」

身に余る力を求めた結果、圧倒的な力に潰されるのですから、良く

ある話で、不運ではなく必然でした」

「それもどうなんだろうな。」

さて、イクスの状態は概ね把握した。というか、欠陥兵器だな。現状では制御する能力が力不足過ぎだ。

死を恐れぬ兵と言えば便利そうに聞こえるが、生きていければ敵味方関係なく殺し、作った死体から新たな兵を生み出す事しか出来ん。これでは、最終的には生物のいない荒れ果てた地を生み出すだけだろう。

眠っている状態なら、新たなマリアージュを生み出す事も無いようだが……イクス自身は、これ以上の破壊を望んでいないんだっただけ？」

「そうですね、資料等もそう読み取ることが出来ましたから、恐らく間違いないかと」

唾然としてるトレディア・グラーゼを放置して、お姉様と変態ロリコンの会話と、お姉様の作業が進む。

男3人は、作業の役に立たず。

「それなら、マリアージュを生み出す能力を封印か破壊してしまうのが最も簡単か？」

だが、生命維持や意識と直結していたら厄介だな……その辺の情報は無かったのか？」

「いくら無限書庫でも、見付からない情報はありますよ。」

活動した際の情報は見付かりましたが、構造面の情報はさっぱりです。奇跡の産物とか、どうしてこうなったとしか読めない技術者の手記とか、役に立たないでしょう？

そういえば、とある魔道書の設計草案を基に研究を行った、という記述がありましたね。人の魂を核とし、死者を使い魔として使役するという構造を……どうかしましたか？」

ガン、つていい音が、扉に打ち付けられたお姉様の頭から聞こえてきた。

何だか、物凄く心当たりのある構造。

「……キサマ……嫌がらせか!? 嫌がらせなんだろう!!」

そういう情報は先に言うか、隠したなら最後まで隠し通せ!!」

「いやあ、ショックが大きいだろうと隠しておこうかと考えていたのですが、少々苦戦していたようでしたし、反応がおも「死ね!」しうあつ!」

一瞬で大人化したお姉様の右ストレート（超音速）が、綺麗に炸裂。
変態の頭が吹き飛んだ。文字どおりの意味で、粉々に。

ついでに、衝撃波で遺跡の壁にひびが入ってる。

今の主になってから、お姉様の身体性能がツツコミにしか使われてない気がする。

それも、変態相手の。

「……エヴァさん、遺跡の崩落は大丈夫かい?」

声は冷静な成瀬カイゼだけど、額に冷汗が見える。

トレディア・グララーゼは、今ので白目を剥いてるし。

「……………しばらくは大丈夫だ。」

まあ、何だ。少々腰を据えて解析する必要がありそうだし、ここから動かしでも大丈夫そうだから、イクスは連れて行く。

ソレは……スカリエツティと繋がっていたんだっただか?」

「そうだね。この世界については、彼からの情報だよ」

「なら、過去の清算的な感じで処理しておけばいい。」

後味が悪いなら、この世界に対する腐れ脳味噌絡みの弾圧やらが無かったか調査して、改善するよう手を打つのもありだ。やろうとしていた内容を考えると、放置はあまり宜しくないだろうからな」

「了解したよ。」

「その肉塊は、何かしておいた方がいいかい?」

「放っておいても、そのうち復活するさ」

「なるほど、確かにそうだね」

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2007年01月)

◆◆ 2007年(新暦68年)01月 ◆◆

年が明け、とりあえずみんなでお姉様とヴィヴィオを詣でて。

「いや、何故私を神扱いするのが当然だと思ってる?」

「同感です。私自身は聖王教会にほとんど関係していませんよ」

……身分はともかく、宗教的な価値を自覚したがないない2人をしつかりと拜んで。

カリム・グラシアがまだ目覚めないイクスヴェリアにも祈っていたのを生暖かい目で見つつ。

今は別荘でお餅タイム。

みんなでワイワイと、雑煮やら磯辺焼きやらあべかわ餅やらおはぎやらを作ったり食べたり。

「でも、いいのかな?」

「こんな事に使って」

「これも『へーわりよー』ってやつだ」

ちよつと気まずそうなフェイトは、餅をついてるヴィータのお手伝いをしてる。

グラーフアイゼンも、まさかこんな事もちつきに使われるとは思ってなかっただろうに。

「……で、無料な変態ロリコンがこんな時に何の用だ?」

そんな中、ふらりと無限書庫に現れて、書庫担当のチャチャに別荘への転送を要求してきた変態ロリコンがいる。

お姉様とアルクに用事らしいから通したけど、通すべきじゃなかったかもしれない。

「いえいえ、これでもちゃんと『頼まれていた用事』を済ませようとしているのですよ。」

これはアルクちゃんからの依頼の品なのですが、渡して良いか確認

しておこうと思ひまして」

「そう言いながら出してきたのは、紫色の本。

表紙には、槍と言うには先端の三角が大きい、むしろ傘に近いようなマークがある。」

「魔力反応も、割と大きい。」

「ロストロギアの一種か？」

「ええ、そうですね。本来の名は知られていない様で、研究施設では紫の書という名前で呼ばれていたものです。」

「そうそう、先に言っておくべき事がありました。この書はアルクちゃんの依頼の範疇ですが、名指しで求められたわけではありませんし、方向性としては少々ずれるものでもあります。ですが、参考になるものではあると思つて持ってきたものですよ」

「ふむ……アルク、ちよつといいか？」

「はあい、お母様。」

「何か御用？」

呼ばれたアルクが、間髪を入れずに登場。

「流石はお姉様の自重無しの眷属、素晴らしい実力。」

「ロリコン変態に、どんなものを集める様に依頼したんだ？」

「生命や生物の強化や改造に関するものよ。」

「チタマの方も人手不足だし、せつかく眷属や眷属もどきを作るなら色々試してみようと思つて」

「……つまり、何だ。魔改造した部下を作る為に、なのか？」

「そうね、それで間違つてないわ。」

「お母様の従者は農地の広さに比べて少なすぎるし、自動人形でカバーするのも限界があるもの。」

「全てを維持する必要は無いと言われてるし、消費し切れなから生産量が減るのはいいけど、種類はなるべく維持したいから人手が必要なのよ」

「300年前の地球の人口は、概ね6億から7億。」

「それを1万人と自動人形で引き継ぐのは、どう考えても無理がある。」

作物は品種改良した現代のものに順次入れ替える予定だけど、苗の生産やらにも手間がかかるし、農場の維持は自動人形に任せられても、調整や改良、作物の変更等は人の判断も大事になる。

「あー……まあ、意図は理解した。」

で、その魔導書は、この意図からどうずれるんだ？」

お姉様は、ちよつと頭を押さえながら変態ロリコンの方に向き直った。

農地をカバーするという名目とは思えない程、怪しげな物体。

「人を兵器化する研究の過程で作られた物の様ですからね。肉体や魔法に関しては色々強化出来るようなのですが、精神面の崩壊が前提のようです。それを何とか出来れば使い物になるかも、という代物です。すね。」

まあ、信頼のおけるところで管理した方が良さそうな危険物でもありそうですし」

「……今度はForceか。Forceなんだな？」

エクリップスやらデイバイダーやらの元とかいうオチなんだな？」

「正解です。いやー、カイゼ君に手伝ってもらって、並行世界でも情報を調べた甲斐がありましたよ。事件がある場所を予め特定して、先回りで動くのは楽ですね。」

そうそう、銀十字の書はまだ設計段階でしたし、エクリップスウイルス自体も完成したとは判断されていなかったようです。感染実験の犠牲者はいましたが、それを含めきちんと処理してきたので安心して下さい。対処漏れは、恐らくありませんので」

Force終了のお知らせ。

トーマやリリイ、フツケバインな人達なんかログアウトしました。

「はあ……まあ、放置した場合は被害が大きそうだし、いいと言えばいいのかもしれないが。」

アルク、悪用はするなよ？」

「当然よ。お母様に不利益な事はしないわ」

「……そうか。」

一応確認しておくが、研究しているのはそれだけなのか？」

「私が管轄しているのは、これだけね。」

本星の方でバリアジャケットの強化を試しているのは聞いているけど、少し相談されているだけだし。っと、そつちの話は聞いている?」「ロボットアニメに触発されたとか言っていたやつなら、話だけは。」

結構本腰を入れてるのか……?」

気の技術を応用して、カートリッジ以上に効率良く魔法を使う為の補助具を作りたいと、従者達が言い始めたのが発端。

ただ、人間搭乗型ロボットや、機械化人間を作ってるわけじゃない。

A M F等の魔法妨害にも強い、個人用補助装備の方向。

簡単に言えば、アームドデバイスとForceのA E C装備を足した感じのものを装備化出来ないか、色々と研究してる。

「お母様のA M Fは存在しているし、スカリエッテイのA M Fも試作は成功しているし。」

その影響下でも飛行や防御くらいは維持したい、といったところよ。

あとは、お母様に負担にならず、かつ安心して魔法を使うためでもあるわね。日常の業務で、魔法を使える使い魔達の負担を減らせるし」

「その方向なら、まあいいか。」

で、変態^{ロリコン}。本来の名が知られていないと言っていたが……知っているんだらう?」

「八雲の書、らしいですよ。」

兵器化を妖怪化と捉え、分断する機能は境界を操る能力の影響と考えれば妥当でしょうか?」

「今度は東方か。東方の影響なのか。紫^{むらさき}ではなく紫^{ゆかり}で、本当に傘なのか。」

……どうしてお前が持ち込むナニカは、やけに影響が大きいものばかりなんだ」

「影響の小さいものは、私達でも処理出来るからですよ。」

全て人任せにしたり、任せるに値しない人を頼ったりするほど、落ちぶれていません」

なんという正論。

実際、有象無象はそこそこ片付けてきてるだけに、批判もしにくい。迂闊な組織や人物に聖王・冥王・エクリプスウィルスの元を渡すのは、更に面倒な事になりそうではあるし。

ジェイル・スカリエッティ関係とか、トレディア・グラージェとか、研究施設とか、その辺はほぼお任せ状態だったし。

「……今後は、管理局に任せられるものは任せろ。連中にも面子はあるし、こっちにばかり頼られるようになってはかなわん」

「ええ、解りました。

原作絡みの問題はこれで概ね終了ですから、大丈夫だと思いますよ」

予想出来る範囲で残ってるのは、Vivid関係でベル力繋がりの方が来る程度？

確かに、原作絡みの『問題』は、終了したかもしれない。少なくとも、私達が知る範囲では。

◆◆ 2007年（新暦68年）02月 ◆◆

『……当初の予定とはだいぶ変わっているが、このような方針が決定された。

もちろんこれは形式や制度上の事で、君達が通常の運用に関わる必要は無い。管理局との関わり方も従来通りで問題無いよう調整は出来たつもりだ』

「……………まあ、その意図があるのは一応理解するが……………」

ギル・グレアムからの連絡は突然に、と言うわけではないけど。

資料の到着から10分後って、あまり読ませる気ないよね？

でも、その内容は、重要。時空管理局の体制の変革について。細かい法整備や組織変更はこれからだけど、大まかな方針が決定したらしい。

ひとつ。時空管理局の権限縮小。管理世界全体の治安維持に特化

し、広域犯罪や大規模な犯罪組織への対応、危険なロストログアの管理、様々な技術の開発と管理、紛争等の調停を行い、管理世界間の交流及び交易を円滑に行える環境の維持を存在意義とする。

ひとつ。地上部隊、つまり警察組織の運営及び管理を、原則として時空管理局から各地の行政機関へ移す。行政機関は時空管理局に業務を委任する事も出来るから、これからはそれぞれの世界や地域の人の選択に任せる事になる。また、質量兵器が該当地の行政機関に承認された組織に関しては解禁されることになった。但し、警察組織や次元航行部隊であつても、承認が無ければ質量兵器の使用は認められない。

ひとつ。統幕議会が、治安維持に関する運用及び維持管理を行う。これには次元航行部隊や司法関係の部署が含まれる。

ひとつ。代表評議会が、憲章や広域法の制定と、管理世界間の調停を行う。

ひとつ。最高評議会は、通常は各議会等への助言を行い、法令違憲の最終判決を行うことが出来る。また、緊急時に限り、次元航行部隊または監査部または最高裁判所への命令権及び指揮権を持つ事が出来る。

「……現状で持っている、法令の停止権限以上の劇薬まで仕込まれているんだが？」

『あまり綺麗ではないが、地球の3権分立に近く、かつ君達に配慮した結果なのだよ。』

各管理世界の行政は、最終的にそれぞれの世界自身に任される。

立法を含む指針の決定は、代表評議会の役目だ。

統幕議会は時空管理局の維持管理を担当する。次元航行部隊の運営や技術開発、司法関連の管理もここだが、それぞれ別の下部組織となるようだ。

最高評議会は、重石だ。ここまで重ねれば、そう遠くないうちにこの体制に対する反発も出るだろう。それをうまく利用してほしい』

「やれやれ、この身分からの脱出は自前なのか。落ち着くまでという話だったはずなんだがな」

『それについては、申し訳なく思っている。

それでも、管理局の一部解体を伴う改編なのだ。安定するにはまだ時間がかかるだろう』

「それなんだが、要は管理局を縮小して地上部隊を拡充し、警察権を各管理世界に戻すという事だろうか？」

「当然しわ寄せは次元航行部隊にも来るし、高位魔導師という牙を地上に戻すという事でもある。

本当に安定させられるのか？」

『管理局の設立当初は不可能だっただろうが、最近では人や物、文化の交流もそれなりに盛んになっている。その上、管理世界から外れる事は、技術でも後れを取る事になる可能性がとても高い。大規模な犯罪組織に対抗するには、やはり協力が不可欠という理由もある。

そもそも、犯罪組織よりよい傘だと思われたいようでは、我々の存在意義が無いのだ』

「となると、心配すべきはマッチポンプと大規模事件への対応力低下か……」

その辺の対応は？」

『犯罪組織も拠点や人員は必要になる。大きな組織ほど、それは隠し辛いものとなるはずだ。

管理世界の捜査は現地行政機関の目と耳が頼りになるが、逆に言えば、管理局が揉み消す事が難しい場所が増えるという事になる。

対応力に関してだが、次元航行部隊の専属魔導師は減らすが、その分は地上部隊からの派遣で賄う事になっている。金銭面で苦しい世界が人的貢献をする為や、人的な交流を増やし協力関係を強固にする為ではあるが、次元航行部隊の実態や実情をオープンにする為でもある』

「管理局より各地の行政機関の方が犯罪者を抱えない、犯罪者が紛れ込む可能性が高くなっても上層部に犯罪者が混じっていた以前の状況よりマシ。そう思われたのか。

管理局の維持そのものが心配になるレベルだぞ」

『国際連合に近付くと考えてもらった方が良いかもしれない。平和維

持軍や国際司法裁判所、国際連合教育科学文化機関といった組織の集まりとなる感じだよ。

スローガンは、全ての世界、全ての人々の為に。

中央集権の体制をある程度解体していくと同時に、広報活動にも力を入れて、世界の事を知ってもらおうとしているのだ』

「管理世界全体の教育レベルと経済水準は充分なのか？」

他人に目を向けるには、この2点が最低必要条件だが」

『行き渡っているとは言い難いが、それを何とかする為の協力も管理局の役目となるだろう。』

従来の様に管理局主導で、とはいかなくなっていくがね』

「やれやれ、気の長い話だ。」

益々、私達の立場が特殊になっていくじゃないか」

『我が祖国、英連邦王国の女王陛下と同じく、君臨すれども統治せず、という姿勢をある程度貫く事は可能となっているはずだ。』

だが、従来の上意下達体制は腐敗という弱点で倒れたが、完全な自由は自己中心的な考え方の蔓延等といった問題を孕むことになる。私としては、切り札としての力を持つ象徴でいてもらいたいとも思っているのだよ』

「結局、逃がす気は無いという事だろうか」

ここで文句を言っても、決まった事は変わらないけど。

結局、お姉様が少し文句を言う程度で、通信が終了。

法令が違憲かどうかの最終判断を押し付けられてる時点で、統治せずには該当しないだろうし。

それでも通常は助言程度で済むくらいには、頑張つて配慮してるようにも見える。

あとは、式典やらに呼ばれる可能性が上がるくらい？

今はたまに変態が顔を出してるだけで済んでるみたいだけど。

「……面倒事を請け負ってくれているという点は、アレに感謝すべきか……」

◆◆ 2007年（新暦68年）03月 ◆◆

「えーっと、名前は書けてるし、ノートも揃ってるし……」

はやてが紙を片手に確認してるのは、ルーナとアギトの入学用品。

2人はようやくフルサイズのアウトフレームが安定し、幻術やらと組み合わせれば大人としても活動出来るだけの目途が付いた。

余裕を持って手続きを進められたのは、「リインフォースⅡ」の稼働情報のおかげ。ありがたやありがたや。

というわけで、ちゃんと戸籍を確保する事になり、必然的に学校に通う事になったわけで。

「はやてちゃん、そんなに何度も確認しなくても大丈夫ですよ？」

「買いに行った時も、名前を書いた時も、しつこいくらい確認してんだ。

それに、1年生になるつつつても、中身は子供じゃねーよ」

2人を直接保護する立場に立つはやてが落ち着かない。

ヴィータの時は、どちらかと言えばいぢって楽しんでいたのに。

何という格差。

「住所がうちやないからな。

直接見れる時間が少ないんやから、仕方ないんよ？」

そして、2人の「住所」は、一時的に月村家という事になった。

八神家は満員だし、新テストタロッサ家は未だ工事中。そこで、姉となるはずかの現住所であり、部屋数も余裕がある月村家の居候として、約1年間の予定で住むことになった。

プレシア達は相変わらずハラオウン家在住だから、テストタロッサ家の別居状態が悪化の一途。

「すずかちゃんや忍さん、ノエルさん達だっているです。

なんくるないさー、ですよ」

「ふっふっふ、ここでその言葉はあかんよ。

それは本来、人として正しい事をしていれば、という意味の言葉に続けて使うんよ。人事を尽くして天命を待つ、の後半と同じや。

つまり、まずは人事を尽くさなあかんということや！」

「おい、バツテンチビ。」

余計な事言っちゃまったぞ」

「あうう、やってしまったです………というか、バツテンチビは酷いのですよー!」

うん、これはルーナの大失言。

はやてが本気風になった。

でも、やってる事は道具類の確認。心行くまでやればいいんじゃないかな。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2007年04月)

◆◆ 2007年(新暦68年)04月A ◆◆

今年も来ました、お姉様と主の誕生日に合わせたお祝いの日の、よく晴れた昼下がり。

今年も主の私立聖祥大学付属中学校入学に加えて、ルーナとアギトのテストロッサ家加入及び私立聖祥大学付属小学校入学もある。

おまけとして、来年の今頃には新テストロッサ宅に住んでる予定だから、その前祝いの物まで含んでるらしい。

今年の会場は月村家だから、月村忍や馬場鹿乃達もいる。

広さに余裕があるからという事で色々と声をかけた結果、アリサ・バニングス、高町なのは、夜月ツバサ、真鶴亜美、黒羽早苗もいる。

長宗我部千晴と上羽天牙は、馬場鹿乃と併せて大学進学祝いを名目に本人も招集済み。

ついでにリンディ・ハラオウン、カリム・グラシア、シャツハ・ヌエラもいたりする。

スカリエッティな一家は残りの戦闘機人の調整で手が離せない作業があるらしく、不参加。マリエル・アテンザやシルフィ・カルマンも、本局や聖王教会に行つて同様。

「去年はセツナさんが遠慮しすぎたせいでちよつと地味やったけど、今年も派手にやるよ！」

「結局、数か月に1回は何らかの形でやってるんだがな……」

高らかに宣言するはやと、苦笑するお姉様。

それでも、誰かの誕生日がある度とかじゃなくなってるだけ、お姉様の意図は伝わってる。

そんな感じで始まったパーティー、大人数。それでも関係者限定のイベントだから、お姉様を含めた外見年齢を詐称してる人も最初から本来の姿で参加。

人が多いから、ある程度の人数のグループがいくつか出来て、人が入れ替わっていく感じになってる。

「来年になったら、聖祥大の付属中学校に行くんでしょ？」

受験、失敗しないでよね」

「アリサちゃん、はやてちゃんが来れなかったら寂しいって言っているんだよ？」

「すずかー！」

小学6年生になった原作娘達は、今はまだ別の学校に通うはやてに絡み。

「ま、あたしはもう1年あっけどよ。」

「アンタは、はやてと一緒に聖祥大付属って選択はしねーんだよな？」

「当たり前でしょ、うちは普通のサラリーマン家庭なの。」

散々迷惑かけたんだから、これ以上は負担を増やしたくないわよ」

5年生になったヴィータは、はやて達と同じ6年生の夜月ツバサの進路を確認し。

「そうか、ドイツへは行かないのか」

「そうよ。鹿乃の話だと、原作では海外行きのはずだったのでしよう？」

実際そういう話もあつたけれど、裏の役目もあるから月村家として誰も居なくなるわけにはいかないのよ。

すずかも月村の名を残しているけど、家名としては別のものを名乗っているわけだから」

「そういえば、海鳴の近辺はお前達が管轄しているんだつたな。」

馬場はどうするんだ？」

「警備の契約は、大学に通っている間は継続する事になっているわ。」

だから、あと4年近くは今の状態よ」

「そうか……役に立っているのか？」

正直に言えば、能力はアレだろう？」

「管理局との繋がりがある魔導師がいるという、抑止効果と宣伝効果で元を取れるわ。小者くらいならあの外見に威圧されてくれるし。」

それに、管理局に事務的な連絡をする時も、親衛隊管轄の魔導師という肩書は色々と便利よ」

「……理解した。能力はまるで関係ないな」

お姉様と月村忍が、今後についてちよつと話をして。

「人形焼き、お待たせー！」

「なんの、こっちはシナモントーストが焼けたよ！」

「ですから、野菜を放置しないでください！」

黒羽早苗とはやてが争うように料理を作り、その横でリニス文句を言いながら野菜スティックとティップの準備をして。

「何だか、以前に見たような光景ね」

「うん。その時は母さんと一緒にコロツケを揚げたんだよ」

ほのぼのとした雰囲気、プレシアとフェイトがポテトを投入した油の管理をしてる。

チャチャマルやノエル達もクレープやワツフルを作っていたりしてるし、今回はなんと高町なのはが自作シユークリームを持ち込んだりもしてる。

凄いやね、最後までおやつたつぷりだもん。持ち寄られたお菓子やら用意されてる材料やらの量を見る限り。

お姉様やすずかが料理を手伝ってないからまだ大丈夫みただけど、アリサ・バニングスがちよつと動揺してた。

「さてと、今年はアコノに渡す物がある」

ある程度の量が出来上がり、まったりおやつモードになった頃。

お姉様が主の方へ歩いてく。

「何やエヴァさん、また支給品つて名前のプレゼントなんか？」

「中学生になって髪型を変えるにしても、デバイスってそんなにホイホイ渡していいものなの？」

近くにいたはやてやアリサ・バニングス達が不思議そうな顔をしてる。

一昨年、髪ゴム型のデバイスを数人に支給したのは記憶にあるらしい。

最近、時々フェイトが髪を後ろで束ねるだけにしている事も、髪型変

更を連想させる理由かもしれない。

「確かにかなり気合を入れて作ったデバイスでもあるが、それはまあオマケだ。

少々時間がかかってしまったが……アコノ、受け取ってもらえるか」

そう言いながらお姉様は白く小さい箱を出し、主に向かって開けた。

主はそこにあるものを一目見て。

「喜んで」

即答すると自分の名の書かれた方を取り、迷わず左手の薬指へ。

しばらく、その銀色でシンプルな指輪を嬉しそうと判る表情で見詰めると、大事そうに右手で包み込んだ。

「ここに、エヴァがいる……これで、ずっと一緒に居られる。

もう、絶対に外さない」

「渡した私が言うのも何だが、まだ中学生だからな？」

そう言いながらも、お姉様はもう一つの指輪を自分の左手薬指に。

誰がどう見ても、結婚指輪。婚約指輪ですらない。

「な、な、何やってんのよアンタ達は……」

そして、予想通りにアリサ・バニングスが叫んでる。

「婚姻の真似事だな。

残念ながら神を信じているわけでも無く、法的に夫婦になることも出来んから、こんな形になってしまったが」

「何でそうなのよ！」

アコノも嬉しそうにしてないで何か言いなさいよ!!」

「私は2年前に結婚を申し込んでいたから、希望が叶った。

それに、これをこの場で渡されたという事は、秘密にしなくてもいいという事。

雰囲気のことかを言いたいのかもしれないけれど、私は、隠さなくていい事の方が嬉しい」

「それ以前に女同士でしょ!! 冗談じゃなかったの!?!」

「エヴァの前世は男性で、私はエヴァの心に惹かれている。

子供を産める体でもないから、私は私の心のまま、エヴァを愛する。
何が問題？」

「私を見た目だろうな。」

「そういえば、あの力を得てから外見変化の調査はしていなかったな……まあ、幻影で良ければ簡単に来るか。」

アコノ、私はどんな姿がいいと思う？」

「希望は特に無いし、エヴァはエヴァのままいてほしい。」

それに、変に外見を変えると、頭のおかしい転生者を思い出しそう」

「そうか。それなら変えるのは止めておくか」

「なんて会話してんのよこのバカップル！」

「よし、アリサの言質は取ったな」

「カップルと認めてくれて、ありがとう」

「ちつがーう!!」

お姉様と主が夫婦初めての共同作業的に仲良くアリサ・バニングスで遊んでると、ちよつと様子をうかがいながらセツナが近付いてきた。

「ひよつとして以前言っていた、分身入りですか？」

「そうだな。アコノは身に着ける形のを欲しがったし、ちよつどいいと思っただが。」

欲しくなったか？」

「私はエヴァさんかアコノさんからそこまで遠く離れることは無いと思いますし、別にいららないと思います。」

確かに身に着ける物ですけど、意味合的に思い切ったなと」

「今はともかく、大人になってからなら常時身に着けても問題無いものだろう？」

そんな感じで、セツナは納得。そして、周囲の反応は様々。

ルーナとアリシアといった単純かつ派手に祝福してくれるお子様達や、めでたい事という事でとりあえず騒いでるはやてもいる。ついでにアギトはあまり意味が解ってなさそうだけど、釣られた上に巻き込まれてる。

素で頭を押さえてる長宗我部千晴や、悪戯する気じゃないって事は

本気なんだとか言って頭を抱える夜月ツバサもいる。

ぽかーんとしてるのは、男共……訂正、馬場鹿乃と上羽天牙の2人だけ。

他は、まあいいんじゃないとかやっぱりの反応や、あらあらお目出度いわね的な消極的祝福。

概ね予想通り。

少し羨ましそうにしてるリインフォースや、何故か少し寂しそうなフェイトとすずかがいたりするけど、今までと大きく変わるわけじゃない。

最終的に、アリサ・バニングス以外の積極的反対やツツコミは無かった。私達としてはお姉様や主が他の男性とくつつく姿が想像出来ないから、誰ならいいのかアリサ・バニングスを小一時間問い詰めてみたい。

その後も大騒ぎして、日が落ちる時間。

風もちよつと冷たくなってきてる。

この後は、明日は普通に学校だから夜更かし禁止&このままだと栄養が不足すぎだというリニスの主張により、軽く夕食を食べてから終了という事になってる。

だから。

「そろそろ、いい時間だな。

話を……してあったか？ 伝わってないかもしれないが、今日のメイニンイベントだ。

参加者は集まってくれ」

大人モードになったお姉様が、行動開始。

現テストタロツサの面々には予め話してあったし、それ以外の大人組や転生者組にも念話で何をやるのか通達。

その結果、殆どの人……既に夕食の準備を開始してる黒羽早苗とチャチャマルとノエル、落ち込んでる馬場鹿乃、気まずそうに遠慮した上羽天牙の3人以外が集まった。

「見事に料理人と男が減ったな。

というか、カリムとシャツハもいけるのか？」

「それでも、騎士ですよ」

「得意とは言えませんが、予定されている内容であれば問題ありません」

この会話で、更に馬場鹿乃が落ち込んだり。

実は必要な物を持ってきてないだけだった、上羽天牙の気まぐさかレベルアップしたり。

「では、先ずは……そうだな。

アリサ、ちよつと来てくれ」

「何よ。私は何も聞いてないんだから、説明くらいしなさいよ」

「心配するな、大人しく見ていればすぐに解る。

では、ちよつと失礼するぞ」

「きやつ!? な、何すんのよ!!」

お姉様、アリサ・バニングスをお姫様抱っこ。

防護フィールド問題無し。

光学迷彩準備完了。

他の人も、バリアジャケットを展開中。

「さあ、行くぞ」

準備が出来た時点で、魔法陣を展開。

転移、いつきまーす。

「~~~~~」

転移が終わったけど、アリサ・バニングスは必死に目を閉じて、お姉様に力いっぱいしがみついている。声も出ない様子。

転移自体は別荘で慣れてるはずなのに。

突然なんだから仕方ない？

だけど、これはサプライズイベント。先に伝えたんじゃ面白くない。

というわけで、予定地点の能登半島付近、上空2キロメートルに到達。

「さあ、目を開けて見てみるといい」

「……………、そ……………」

目を開けると、そこには。

東側に、赤く染まった海と空が。
西側に、同じく赤く染まる山々が。

魔法陣の消えた足の下には、港や漁村らしい町も見えてる。

「夕焼けの日本海を見るのは初めてか？」

悪かったな、今まででずるずると先延ばしにしている」

「……な、何がよ？」

呆然としてたのか、景色に見とれてたのか。

アリサ・バニングスの反応が鈍い。

「私達の中で唯一魔法が使えず、最も一般人に近いのがアリサだ。

だからこれは私達のちよつとしたお節介、これが、私達が見る事の出来る光景だ」

「……何よ、自慢なの？」

ぷい、って横を向くような感じで、夕日に目を向けるアリサ・バニングス。

その表情は、怒ってない。やっぱり見とれてる感じ。

「魔法関係では、随分と仲間外れにしてしまっているからな。せつかくファンタジーな世界に触れているんだから、転移以外にも少しくらい役得があつていいだろう？」

地球の技術でこんな景色を見るには飛行機やらを使うしか無いが、それでは手間もかかるしゆつくりと話をしながら楽しむのも難しい。自慢になるが」

「本当に自慢なの!？」

なのはとすずかも笑ってないで何か言いなさいよ！」

「手にした時は、自分だけの力だと思つてちよつと嬉しかったから」

「私は、エヴァさんの技術が無いと飛べないんだよ？」

管理局の技術ですらないから、自慢しても仕方ないんじゃないかな」

「そもそも今いる面子の内、何人が私の指導やらを受けたと思つている。

それに、だ。

「ここにいる全員が、自慢の仲間だろうか？」

「……けど、私は……」

「知らない間に貢献している部分も多いんだが……それは置いておこう。」

油断するとすぐ訓練漬けや研究漬けになる、私を含む馬鹿共を現実
に引き戻してくれるのは、他の誰よりも軋轢を生まないという点で有
難いんだぞ。節度も守ってくれているしな」

バニングス家という範囲まで見れば、表社会との繋がりも大きな恩
恵だし。

表に出して問題無い取引まで、裏側関係者で揃える必要は無いわけ
で。

特に、今建ててる家に付随する諸々なんかで、色々と世話になって
たりもする。

アリサ・バニングス自身も、社会勉強と称してバニングス関係企業
の打ち合わせに呼ばれたりもしてるけど、実際はお姉様達の考えを推
測する為だったりするから、バニングス家の裏方的な意味で不可欠な
存在になってる。

「馬鹿って自覚してるんなら、自分で何とかしなさいよ」

「簡単には何ともならんから、馬鹿だと言っているんだ。」

だからまあ、今回は馬鹿が馬鹿な事したらちよつといい事があつ
た、程度に思っておけばいい。

それに、夕焼けが綺麗な時間は短いぞ?」

「だったら、話しかけずにゆっくり見せてよ」

「ああ、それは悪かったな」

◆◆ 2007年（新暦68年）04月B ◆◆

その夜。

少なくとも、各自が現住所に帰る予定の時間を大きく過ぎた時刻。
月村家の一室で、本来自室にいるはずの少女が数人集まっている。

「それでは、結婚の件についての質問を開始しますね。」

結婚する事を決めたのは、いつですか?」

口火を切ったのは、ヴィヴィオ。

この部屋に在中で、最もお姉様に強くものを言える立場。質問に妙なルビが付いてた気がするけど、口ぶりは普通。今の所は。

「……去年の夏だ」

「つまり、半年以上前という事ですね。」

それでは、結婚の決め手となった行動又は言葉は、どちらのものでしたのですか？

最終的にエヴァさんからだという事は予想出来ますから、それに踏み切った切っ掛けはどちらにあったのかという意味で、ですよ」

「……その言い方なら、答えは予想出来ているだろうに。」

それに、アコノは何もしていないと言っても納得しないだろう？」

「それでも、そうだと確定する事に意味があります。」

アコノさんの言葉が切っ掛けだった、という事で良いのですね？」

「……そうだな」

「その内容を、家族である私達に教えてくれますか？」

「それは……どんな羞恥プレイだ。」

私は言いたくないし、アコノの許可なしに言っている事ではないだろう」

「なるほど、確かにそうですね。」

では、その言葉の何が理由で、結婚に踏み切ったのか。それくらいは教えてもらえますか？」

「……アコノを甘く見ていた事を自覚させられたから、だ。」

これ以上は勘弁してくれ」

「なるほど、そうでしたか。」

覚悟なり想いなりが、予想以上のものであった、という事らしいですよっ。」

ここでようやく、ヴィヴィオがお姉様から目を離した。

正確には、部屋にいたフェイトとすずかの方に目を向けた。

「お姉ちゃん……私だって、覚悟して眷属になったんだ。」

だから……」

「私も、元々人じゃないからといっても、何も思わないわけじゃないんだよ？」

「だから……」

「2人はここで一度止めて。」

「そして。」

「アコノさんだけ、ずるい！」

声を揃えて、叫んだ。

「ちよ、ちよつと待て、お前達の認識だと私は女寄りじゃないのか!?

アコノは私を男と見なしているんだぞ!？」

「お姉ちゃんは、女っぽくないから」

「忍お姉ちゃんより恭也さんの方が、イメージが近いかな」

（＼（＾o＾）／）

お姉様、それは発音出来ない。

せめて、オワタとか追加しておかないと。

取りあえず、ここにキマシタワーを増築しよう。

「それでは、私はこの辺で。」

家族としてちゃんと話をして下さいね」

「なんとという無茶振り……」

「自業自得、ですよ?」

ウインクを飛ばして、ヴィヴィオ退室。

部屋に残ったのは、お姉様を含めて3人。

「えーと……」

「怒ってるわけじゃないんだけど……」

「やっぱり、何も知らされなかったのは、寂しいんだ」

「だから」

「添い寝を要求します!」

「あ、ああ……解つ、た」

それで納得してくれるなら平和なもの。

ここにきてなんとという百合ハーレム（外見的な意味で）。

けど、やってる事はStrikerSの初期で、なのフェイはやてが一緒のベッドで寝てたのと大して変わらないような?

何だ、普通の事じゃまいか。

(いや……普通か……?)

普通普通。

少なくとも、行為だけで見れば。

18禁な展開になるわけじゃないんだし。

◆◆ 2007年(新暦68年)08月 ◆◆

あれ以来、自宅ではお姉様の左手薬指に指輪が常備されて、同衾&睡眠の頻度が上がったりもしたけど。

それ以外には特に大きな変化は無い。

主も、学校では指輪を自重してるし。

アリサ・バニングスも、飛ぶことを要求することは無いし。

かといって、遊びに連れ出さないわけでも、訓練してる時に顔を出さないわけでもない。

そんな夏休みの、某モンディアル家が所有する別荘から帰ってきた、とある日。

訓練場受付としておなじみになってる高町家の道場に、難しい顔の長宗我部千晴が現れた。

「あー、やっぱりここにいたか」

「ん？ 何か用でもあったか？」

という訳で、珍しくお姉様が居るタイミング。

魔力感知的な意味で、知ってて来てるはずだし。

「いや、な。」

こんなページを見付けちゃったんだけど……何か知らねーか？」

そう言いながら出てきたのは、”ちうとゆかいななかまたち”というブログを印刷した物。

内容を一言で言えば、コスプレ。

「いや、私はこのページは知らないが……ネタ的に、アレだな？」

「間違いなくあれで、あの人だよな？」

問題は、そのキャラクター。

本来、この世界には無い物語の人物が写ってる。
具体的には超鈴音、お祭りでの戦闘服姿。

別荘の設備維持の仕事が減って暇な時間が増えたとかいう話を最近聞いた気がしますが、どう見てもリーシェンです。本当に撮影協力ありがとうございます。

その他に、魔物を狩るモノたちの甲冑姿や、終末の幻想の装備を着てる写真もいくつがある。

「どう見てもあれで、あいつだな。何をやっているんだか……」

(お前達は何か知っているな?)

知ってる前提の質問なのは何故?

確かに知ってるけど。

日本や地球との交易手段の1つとして、販売を計画中。

出来のいいコスプレ衣装や甲冑が出回れば、バリアジャケットを誤魔化しやすくなる。

魔導具系小物も、それっぽいデザインのアクセサリーとして売れそうだし。

現在は知名度を上げるための公告期間的な?

コスプレ趣味の無い長宗我部千晴に見付かるくらいの効果を確認。

「……無意味にやったわけではないのか。

だが、何故「ちう」の名前を使った?」

別荘の関係者で名前を決めた時に賛同者が多くて、合意が楽だった。

この世界も魔法先生ネギま!の影響を受けるなら、ブログの女王という結果が引つ張ってくれるかもしれない。

一番嫌な顔をしそうな長宗我部千晴に関しても千雨という名ではないし、迷惑がかかることは無いと判断した。

「あー、確かに私がやってるわけじゃねーし、私に似た顔も出てねーくらいいんだけどよ。」

何も聞いてねーのにこんなのを見付けた時に、心臓が止まるかと思っただけで」

確かに何も言わなかったのは悪かったかもしれない。

要するに、事実上の結婚についてお姉様から何も言われてなかった、フェイトやすすずかの心境と同じらしい。

「……そこで私に飛び火するのか」

「ま、まあ、怒ってるわけじゃねーから。」

ただ、知ってるなら先に言っといてくれよって思っただけで……」

お姉様がorzになったから、怒られる問題は回避した。

拒否される問題も回避したから、この路線は継続。

計画通り。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2008年

◆◆ 2008年（新暦69年）01月 ◆◆

家という名のマンションもどきが、ついに完成。

新築5階建て。1階と2階は関係者用、3階はジェイル・スカリエツテイと戦闘機人とカリム・グラシア達用で、4階と5階がテストロッサ家用。

隣接する工場跡地はまだ工事中だけど、住居の方は問題ない。

というわけで、今日はテストロッサ家のお引っ越し。

旧八神家、月村家、ハラオウン家の3カ所から集まってくるけど、荷物はさほど多くない。

新しい家具類は先に配達してもらって予定の場所に配置し終わってるし、別荘やデバイスの格納領域も便利。

「今日から、私達もここに住むことになるわ。」

雑務や管理業務、よろしく頼むわね」

「はい、お任せ下さい」

プレシアと挨拶してるのは、コンシエルジュ的な役割、要するに管理人さんを任せる事になってる高無惣一郎・響子夫妻。ジュエルシード絡みで色々やってた頃に、事故から救出した使い魔。

1階入り口の受付奥に住居部分があつて、引っ越し作業や事務所の準備はほぼ完了してる。

住居部分は2LDKだけど広い部屋だし、子供もないから問題ない。

「うわ、こうやって見るとえらい広いなあ」

「そりゃあ、キッチンもLD部分も、学校の教室並みの広さがあるからな。」

しかもオープンキッチンだから、見た目は増量だ」

「数字だけならそうやけど、図面だとそこまで解らんし」

「それはそうだが、人数を考えると、これくらい必要らしいぞ？」
そして、みんながちよつとびっくりしてる、LDK部分。

合計床面積は135㎡。正確には、キッチンが52㎡でLD部分が83㎡。一般的な小中学校の教室が60㎡から70㎡だから、お察しください。

システムキッチンが3つ並び、業務用オーブンや大型の鉄板まであるのは、普通の家庭じゃ見られない光景。完全なオープンじゃないけど、9.5mある幅のうち5mくらいがオープンになってるから、それなりに見通しもいい。

ついでにLD部分の半分以上が上の階への吹抜けになってるから、開放感もある。

その片隅に、5階への階段が見えてる。階段のほとんどは壁の向こうだけ。

5階にも勝手口があるから、共用のエレベーターで5階に持ち上げる事は可能。重い荷物を4階から手で5階に上げる必要は無いようになつてる。

そして、割り当てられた部屋を見た、各人の感想(ダイジェスト)は。
「……やはり、広いな」

「もっと狭くてもいいと言ったけど、大きなベッドを置けるから構わない」

「そういう問題か？」
主は納得してるけど、お姉様は合計55㎡になる2部屋を見てちよつとため息を漏らし。

「普段1人で使うには、広すぎたかしらね」
「家長ですし、良いのではないでしようか。」

時の庭園では、もっと広い部屋だったでしよう？」
「それもそうね」

プレシアと、いつの間にか現れてた変態は、お姉様達と同じ大ききの部屋にさほど困惑せず。

「ここに3人つて、やっぱり広すぎや。」

今まで、8帖の部屋にヴィータと2人でいたんやけど」

「私達と一緒にですけど、ヴィータちゃんは別になっちゃったですし……」

「立場上、騎士達より明確に狭くするわけにもいきません。

広い部屋ですが、これでも1人分の広さとしては、他の者より狭いはずですよ」

「それは聞いてるけど……」

やっぱりお姉様達と同じ大きさの部屋に、はやとルーナが困惑し、リインフォースが窘めて。

ちなみに、一部例外を除いて1人当たりで20㎡ちよつとになるように調整してある。

その割り当ては、当然ながら1人部屋もあるわけで。

「こちらに置くものも多くはありませんし、これくらいでしうか」「えつと、学校の荷物はこれでいいはずだから……」

ヴィヴィオとすずかは、ごく普通で。

「イメージしてた以上に、広い部屋ですけど……」

「居候の身分には、過剰だね」

戸惑ってるセツナと成瀬カイゼがいて。

「おお、これは良い秘密基地でござい……秘密基地やな」

他の人より狭くて窓が無いけど、希望より広い部屋に喜ぶ、これまたいつの間にか現れたチクアーブがいて。

「今日から、この広さに1人なのかよ……」

今までと比べ、異様に広くなった部屋で顔を引きつらせるヴィータがいる。

「あの、私は……？」

シャルは面白くなかったから除外。

ついでにチャチャマルと私達は、建築中の差し入れとか配達時の搬入指示とかで何度も来てるから除外。

他の面子というか主従ペア、要するにフェイト&アルフ、アリシア&リニス、シグナム&アギト（なんとなく姉妹っぽい雰囲気で落ち着いてる）の3組は、それぞれ2部屋ずつの割り当て。

2部屋合計で40㎡ちよつとくらいだけど、2人で使う前提だから

か、過去の経験の賜物か、特に戸惑ったりする様子は無い模様。
そんなこんなで、各自の部屋を最低限整えて。

5階の西側、テスタロッサ家のプライベートガーデンとして屋上緑化された部分を見て大騒ぎしたり。

5階の東側にある、民宿には負けない気がするサイズの浴室（ちなみに63㎡くらい）を見て歓声を上げたり。

夕食時に、引越し記念と称したパーティーをしたりしつつ。

今年もよろしく願います？

もうすぐ2月になるんだけどねっ！

◆◆ 2008年（新暦69年）02月 ◆◆

引越してから、2週間ちよつとが経過。

色々と慣れない部分があったり、お風呂ではやての揉み癖が悪化したり、お姉様の同衾率が更に上がったたり、別荘で訓練する時にどこに行けばいいかで連絡の不備があつてどつちでも良くなったりと、ちよつとした事はあつたけど、概ね平和な時間が流れてる。

カリム・グラシア達（シルフィ・カルマンを含む）やジェイル・スカーリエッティ達の引越しも完了済み。もちろん起動済みのナンバーズ7人も全員集合してるし、ようやく安心して娘達を起こす事が出来るとかも言ってたから、ついに残る5人を起動する気になつたらしい。というか、今まで住居面で遠慮してたのが意外と言えば意外。

そして、1階と2階にはお姉様を使い魔にした家族やらが住み始めてる。

某ナカジマ家のゲンヤ氏が、普段1人で住むには広すぎるとか言いながらも入居してたりするのは、色々と都合が良いから。たまにクイント ギンガ スバル 奥さんと子供が遊びに来たりするから、不要な広さでもないし。

そんな日常の水曜日の夜。

数人の女性が、台所に集まった。

「せっかくの広い台所と機会やから、みんなで共同作業や！

者共、気合は充分か!？」

「そんなに叫ばなくても大丈夫。」

「けど、はやてが音頭を取るのは予想外」

「こんな感じに、首謀者ははやてで、協力者が主。」

「けど、私はどうやればいいのか、よく解らないし……」

「教えてもらった方が、助かるんだ」

「個別でやるよりも、いいんじゃないかな」

賛同者、フエイトとすずか。

「まあ、不安はシャルマルやけどな?」

「最近は、だいぶ改善してますっ!」

おまけ、シャルマル。

「というわけで、バレンタインはエヴァさんをチョコレート漬けにしてやんよ作戦、決行や。」

材料はいっぱい用意してあるし、オーブンやらまで揃ってる。予定通り、チョコケーキ、チョコクッキー、バイクドチョコタルト、ガトーショコラのレシピも揃えてある。

シャルマルは……バイクドチョコはどうや?」

「私は焼くだけですかつ!」

「けど、翠屋とか別荘の人らとかに対抗出来る味を出さなあかんからな。」

レシピ通りならほぼ大丈夫になつとるんは知ってるけど、慣れん台所で失敗するかもしれへんし」

「ううう……」

「私もエヴァさんに感謝してるし、やっぱりあの人は姉とか母やなくて、兄か父や。」

日頃の感謝を伝える為にも、私は本気や。手抜きはせえへんよ」

「わ、解りました……」

(だ、大丈夫かな……?)

(はやてちゃんがこの中で一番上手だから、出来る物は確かじゃないかな。

それに、私達は眷属になつてから1晩寝ないくらいは大丈夫になつてるはずだし、朝までに完成すれば何とかなるよ、きつと)

「んじゃ、始めよか。」

……こんだけ騒いどいてなんやけど、エヴァさんは別荘やね？ 部屋に戻ってるとか無いよね？」

フェイトとすずかがコソコソ話してるのを無視したはやて。

台所の真上がお姉様と主の部屋だと思いつ出すのが遅すぎる。

取り敢えず、お姉様は現在、眠れる冥府の少女を色々調査してる。

「大丈夫、今はイクスを見てる。」

だけど、いつ戻るかまでは解らないから、早目に始めた方がいい」

「そやね。」

「それじゃ、やるよ！」

というわけで、5人による作業が開始。

結果？ お姉様が、当分チョコレートは見たくないとか言いながら

も全部食べ切ったんだから、上手に出来たんじゃないかな。

◆◆ 2008年（新暦69年）04月 ◆◆

「さあ、今年は理由もたつぷり、設備も揃ってる。

派手にやるよ！」

「……平日なんだ。騒ぐのも程々にな」

例によって行われる、4月のパーティー。

原作娘達は揃って聖祥大学付属中に進学してるし、その関係で高町なのはやアリサ・バニングスも呼んである。

ついでに、料理人として黒羽早苗と、大学を卒業して社会人になった月村忍・高町恭也の婚約済みカップルも。

馬場鹿乃と上羽天牙は、女性過多の空間に耐えられないという事で参加辞退。

仕方ないね、数少ない男もいちやついてるとか料理してるとかだもん。

他には、普段からちよくちよく来てる、スカリエツティ家の戦闘機人やカリム・グロシア達もいる。来てる目的は1に風呂、2に食事だから、人恋しくておっぱい好きの料理人はやてが全力で歓迎してた。

対価は労働力で、やっぱり賑やか好きなのはやてが、人が増えると大喜びしてた。

「……実に居辛い空間だね」

会場で普通にしている唯一の男となった成瀬カイゼがぼやいてるけど、それが日常。

「というか、変態はほぼ留守だし、ザフィーラは日本だと子犬形態、チクアーブもネズミか留守が殆どだから、普段からテストタロツサ家にいる唯一の男になってるわけで。」

「で、この家でアタシだけ別の学校になっちまったけど、取り敢えず祝つとけばいいんだな？」

前の住所の近くの小学校に行ってたヴィータは、昨年に主が、今年にはやてが聖祥大学付属中学校に行つたため、取り残された形。あと1年だし、路線バスを使えば通える距離や位置だし、転入するにも6年生の定員に空きが無いらしいしという事で、無理に転校する必要もないという結論に達しちゃった結果。仕方ないね。

アリシア、ルーナ、アギトの3人は、最初から聖祥大学付属小学校だし。

おまけとして、セツナだけが高校生、しかも3年になって未だ進路を迷つてたりもする。

同じく進路を考える必要がある中学生3年の成瀬カイゼは、早々に進学と決めて余裕の構え。

「というか。」

「当分は学生の予定か。」

その技術なら、資格さえ揃えば第一線で働けるがな」

「うん、栄養学をちゃんと学んでみたいから、大学まで行きたいかなつて。」

それに、今までずっと下つ端だったから、少しは人の上に立つ練習もしたいし」

「そうか。」

向上心があるのはいい事だ。しっかり学ぶといい」

同じく中学3年生の黒羽早苗は、将来を見据えて次（高校）の次（大

学)まで計画済み。

人生設計という意味で、一番しつかりしてる。

前世と四葉さつちやん五月の影響かもしれないけど、すげえ。

◆◆ 2008年(新暦69年)05月 ◆◆

最近では、お姉様が直接関わる事は殆ど無かった、教導隊としての業務。

生徒の入れ替わりは5月が定着済みで、最近は指導員と若手が混じるようになってきてる。

ついでに、訓練ばかりで実戦経験が不足してる親衛隊の隊員も、ある程度入れ替えていくことになったらしい。本当の理由は、お姉様の情報がある程度知れ渡り状況が落ち着いたことで、入れ替えられる人員が確保出来るようになったからと、親衛隊も多少は教導のお零れにあずかれるから(クロノ・ハラオウン談)だそう。

それでも放置する気でしたお姉様だけど、今回ばかりは、無視出来ない点があった。

「で、あいつがどんな人物か知っていて送り込んできた、という事ではないんだな？」

『先に断わっておくが、僕が率先して動いたわけじゃない。』

ミッドチルダ首都航空隊からの推薦だ』

というわけで、本局でお仕事をしてるクロノ・ハラオウンに連絡。別に怒ってるわけじゃないけど、どうして来たかくらいは気になる。

「競争率が高いとか聞いているし、こっちが左遷的な扱いになってるわけじゃないだろうに。」

何があった？」

『人伝で聞いた話になるが、旧最高評議会と関係があった犯罪組織に踏み込み過ぎて、命を狙われているらしい。』

得た情報は貴重だし、その熱意と技術は高く評価するが、もう少し命を大切にすることを教えてほしいそう。当面の危険から遠ざける

緊急回避的な意図もあると聞いている』

「ふむ……随分と気に入られているな。情熱が能力を超えてしまつて、命が危ないという事か？」

「というか、未だに火種は燻っているのか」

「というわけで、今回来る生徒の事前情報で見付けた、原作関係者。」

その名は、ティード・ランスター。

死亡時期は年度的にこの辺になるから、命が危ない状況になつてるのは理解出来なくもない。

『以前の裏側関連組織は、意外なところまで蔓延っている。』

それに、地下に潜ってしまった連中を追うのは大変だ』

「それはそうだろうが、その辺は頑張ってくれとしか言えんな。」

で、来た理由は解つたが、妹はどうした。両親が健在だったりするのか？」

『いや、両親共に最近亡くなっている。』

正確には、両親が亡くなった事故を起こした犯罪組織を追つた結果、こうなつたそうだが』

「……駄目じゃないか」

『というわけで、捜査協力で知り合つて、そこそこの交流があり、年齢の近い娘がいて、親衛隊での教導にも理解がある、地上部隊関係者の家庭に預ける事になつたそうだ』

「妙な予感、気のせいではないな？」

『いや、気のせいではない。』

恐らく予想していると思うが、ナカジマ家に居候しているそうだ。あと、その下の娘さんは、既にシューティングアーツに目覚めているという話も聞いている』

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターの出会いイベントが、既に終了していた件。

ついでに、空港火災イベントの回避が確定的に明らかになった。

稀によくあるバタフライエフェクト的な何か。

「今更やっちゃまったとか言う気も無いが……未だに原作に絡まれるとはどういう事だ」

『君達が行った並行世界の影響だと推測する。』

あの世界は、3作目が始まっていたと聞いているが』

「ああ、そうだ。その通りだ。」

全く……あと6年くらいは、こんな事があるのか………?」

お姉様がため息をついてる。

本当に、世界はいつだってこんなはずじゃない事ばかりだ。

◆◆ 2008年（新暦69年）07月 ◆◆

なんだかんだと時間は過ぎて、夏と言っているいい季節になった。

そして、色々あった結果。

「別に、私は説教を趣味にしてるわけではないんだが……」

ぼやくお姉様は、別荘で焼き肉が乗った皿を手にしてる。

周囲は賑やかにバーベキュー中。

参加者は、テストアロツサ家、親衛隊、近衛騎士団の主要なメンバーと、生徒達。

つまり、ティータ・ランスターを含むし、このイベントはアルフとザフィーラが困ってリンディ・ハラオウンに相談した結果、開催されたもの。

そして、お姉様への依頼は、ティータ・ランスターの熱血ぶりを何とかする事。正確には、復讐心を基にした執着を緩和する事。

「別に、熱意を殺せと言っているわけじゃないのだけれど」

「だがな……親を殺した組織を追っているのだろうか？」

私ならもつとひどい事になる自信がある以上、窘める権利すら無いと思うが」

「私も経験しているから解るけれど、健全な状態ではないわ」

「人としては不自然とは言えんぞ」

そんな事をお姉様とリンディ・ハラオウンが話しているのを聞いたらしく。

ティータ・ランスターが登場。

「お初にお目にかかります、エヴァンジュ最高評議会議長。」

ミッドチルダ首都航空隊所属、ティード・ランスター1等空尉であります」

「ああ、話は聞いている。

とりあえず、私の見た目はコレだし、身分も面倒だと感じる人種だ。フランクに話していいぞ」

「いえ、そういう訳には参りません」

うーん、やっぱり固い。

主に頭が。

「ま、好きにすればいいさ。

早速だが、親の仇である犯罪組織に深入りして命を狙われているというのは、本当か？」

「そこまでご存知でしたか。

はい、本当です」

「ふむ、自覚はあるのか。

それなら、肉親の死に囚われ過ぎて、生きている肉親を犠牲にするな。

私が言えるのは、それだけだ」

「エヴァさん、本当にそれだけ？」

「私はリーナの死後、それを理由に身内を犠牲にしたつもりは無いぞ。プレシアに八つ当たりしかけたが、あの時はまだ身内とは呼べなかつたしな。

それに、リーナを誰かに殺されていたら、犯人を殺さずに済むほど自重出来る自信は無い。

実力や実行力が不足する中で報復を目指すのはどうかと思うだけで、その行動自体を悪だとは言わんし、言えん」

「実力と実行力の不足、ですか……」

「家族や仲間を傷付けられた事に怒りを覚えるのは当然だ。だが、その報復で別の家族や仲間を傷付けるようでは、本末転倒だろうか？」

多少腕に自信がある魔導師だろうが、1人で組織を相手にするのは難しい。だからと言って、素質のある人間が努力すればバグと呼ばれるような化け物に成れるなんて思わない方がいい。異常な存在は、や

はりどこかがオカシイものだからな。

つまり、組織には組織の力で対抗するのが正道で、組織を動かす力が実行力に直結するんだ。

執務官などという、人手不足を個人プレーで解消しようなどという腐れ制度が無くならない程度には、管理局も困っているのだろうか……」

「腐れ制度ですか!？」

おおう、ティード・ランスターの反応が激しすぎる。

目指すものが貶されたと言っても、この反応は予想以上。

「執務官1人で、司法関連の色々な権限と、それを行使する為の武力を持つ必要があるんだぞ。

私が今住んでいる国で言えば、警察、検察、執行、刑務、保護観察……あたりだったか？ どれもきちんとした資格や知識が必要な業務で、今言っただけでも5人分の役目を負う事になる。専門の者5人分の訓練や学習の時間を確保した上で任務をこなすなど、高度な社会では狂気の沙汰だし、1人で捜査から判決まで関わるなら冤罪も免罪もやりやすいだろう。

おまけに、私が最初に会った執務官は、軍事力である海の次元航行部隊で、切り札と呼ばれていた。悪い言い方をすれば、軍と司法の癒着に繋がる運用がまかり通っていたという事になる。

これも腐れ脳味噌の負の遺産だと言える気がするが、どう思う?」「しかし、必要であるからこそ、今でも無くなっていないはずですよ。」「作られた当時は、少ない戦力を活用する効果的な手段だったのだろう。それに、ヒーローが悪を倒すような耳触りのいい偶像として、実際に利用しやすい権力を持っているとも言えるな。正義感に溢れる目障りな人材を死地に送る場合にも、都合がいい役職だ。

だが、体制そのものが限界を迎えて変わりつつある現状では、最終的に執務官制度も変わると思っている。組織改編に手を取られ、少ない人手で何とかしている間は難しいだろうし、変わるのが何時になるかなど予想出来んがな」

「……それが、最高評議会としての判断なのですか?」

お姉様、言いたい放題。

というか、執務官制度そのものをディスりまくってる。

ティーダ・ランスター本人を責める気が無いからって、それもどうよ。

「いや、私個人の感想だ。」

最高評議会としての私達は、どう変えるかを指示した事は無い。今回の改革の口火を切った事でこんな立場に立っているが、期待されている役目は監視者であって、指導者ではないしな。

そもそも、私はあの腐れ脳味噌より古い存在だ。覇権主義者好みの暴力装置であり、懐古主義者好みのアンティークでもある私が権力を振りかざしたところで、碌なことにならない。未来は、今を担うお前達が作るものだ。

せっかくだ、組織を動かす力を持つために、最高評議会の座を目指してみるか？」

「最高評議会を、ですか……？」

ティーダ・ランスターは、啞然としてる。

あまりにも気軽に、重要な決断を迫られてる自覚は……あるかな？

「私は死ねないから、このままずるずると新しい組織の癌になる未来しか予想出来ん。」

残念ながら私の意志で譲位する事が出来んから、代表評議会を説得してもらふ必要はあるが、それさえ為せば最高評議会のメンバーが総入れ替えになる。

そういう制度になっているんだよ」

「え、しかし、やはり妨害等も……」

「私は邪魔せんし、させる気も無い。邪魔者を自認する私が、やる気がある若者の芽を摘んでどうする。」

ま、別にそれを目指せと言っているわけじゃないし、犯罪者連中を叩くにはそういう道もあると知っておくだけでも意味があるかもしれない。

自分は何を目指し、その為にどの様な手段を使うのか、たまに考えてみるのも良い事だぞ。私の様に、立場に縛られているわけじゃない

んだからな」

お姉様、肉を焼いている方へ移動。

少し離れてたリンディ・ハラオウンは、ティード・ランスターが唾然として立ち尽くしてるのを確認して、お姉様に接近。

「随分と制度を批判していたけれど……」

「本人を批判する気は無いと言っただろう。」

まあ……クロノが今の話を聞いたら、ショックを受けるかもしれないが」

「どうかしらね。今のクロノは、執務官としては殆ど動いていないもの。」

意外に賛同するかもしれないわよ」

「現実問題として、少ない人手で回そうとする場合は、広い範囲の権限を持つ者が必要になるのは確かだ。それに、必要な人数が増えれば増えるほど、必要な時間も長くなるしコストも上がる。それは身軽さが失われることに直結するからな。」

結局は、どこでバランスが取れるか、どこで関係者が納得するか、なんだが……現状では、腐れ脳味噌の揺り返しで極端に走らなければいざと思いつながら、生暖かく眺める事しか出来ん」

「あら、温かく見守るんじゃないやなくて？」

「私の手は、仲間や従者達でいっぱい。」

管理局の連中まで手を伸ばしても碌な事にならんし、知らない連中を守る気も無いからな」

どちらかというところ、お姉様の力をあてにする阿呆の暴走が、碌な事にならない原因な気がする。」

その意味では、必要以上には頼らない今の仲間達と、命と生きる場所を授かったという既存事実だけに基づく信仰心を持つ従者達は、このカテゴリーに入りにくい。

お姉様の選択は、きつと、結果的に正しい。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2009年

◆◆ 2009年（新暦70年）04月 ◆◆

今年もお姉様達が拜まれたり、チョコレート爆撃を受けたり、ようやくヴィータが聖祥大学付属の学校に合流したり、セツナが何故か農学の道に進んだり、ノーヴェとウエンディが挨拶に来たりしながら、既に4月。

ようやく時空管理局の新しい体制が落ち着いてきたのか、少しは時間に余裕が出来たと言って、クロノ・ハラウンが地球に顔を出した。偶には休めとばかりにユーノ・スクライアも連れて来てるし、日程もちょうど良かったから、この際だからと関係者を多数集めて、恒例のパーティを増員して開催。

人数が多くなったから、会場は別荘になったけど。

「は、初めまして、エヴァンジュ最高評議会議長さま」

「別に肩書のイメージ程偉いわけでもない。気軽にしていいんだぞ、ティアナ」

「済まねえな。コレが目的で預かったように見られちまいそうだから、会わせる気は無かったんだが」

「権力ボケしてるなら拒否するが、なかなかしつかりしてそうな目をしてるじゃないか。それに、それなりの素質もありそうだな。」

指揮官に向きそうだが、クイントよりお前に師事した方が伸びるんじゃないか？」

「おいおい、俺は最近部隊の指揮もせずに、事務仕事ばかりだ。」

やり方を見せる場もねえし、どう考えても錆びついちまつてるよ」
集まった中にナカジマの家族with居候がいるのは、偶然にも日本に来てたから。

この際だからと、ついでにティアナ・ランスター脱凡人用の仕込みを少々。地位も実力もあるお姉様に認められる発言をされた経験が

どう影響するか、知らないけど。

ゲンヤ・ナカジマについては、地球と管理局の連絡係の片手間に交易の監視をする立場に落ち着いてるから、部隊指揮より経営とかの能力が求められるようになってきてたりする。

そんな感じで、ナカジマクイント、ギンガ、スバルな家族やらとも久しぶりと挨拶したり。

「この先、どうするのか。」

答えは出たか？」

「いえ……今でも迷ったままですし、急に立場を変えられない身分でもありません。」

ですが、前を見ているつもりで、後ろを向いていた事を自覚しました。もう少し周りを見てみようと思います」

もうすぐ教導期間が終わる、ティーマ・ランスター達と話をしてみたり。

「こうして会うのは久しぶりだね、なのは」

「うん、久しぶり。お仕事は落ち着いた？」

「無限書庫には未だに驚かされるけど、日常の業務は何か」

「そっか」

「で、成長しても外見が女々しいフェレット君が挨拶するのは、なのはだけなの？」

「つまりあれや、恋は盲目で他の人は目にはいらへんって事か？」

「ちよ、そ、そんなんじゃないよ……」

高町なのはに声をかけたユーノ・スクライアが、アリサ・バニングスやはやてに絡まれたり。

「そうか、執務官は権限を縮小して当面は存続か」

「ゆっくりとだが、次元航行部隊に協力する、僻地での捜査や簡易的な司法判断を行うための役職に変えていくそうだ。逆に言えば、本局やきちんとした司法機関のある地域では、あまり力のある役職ではなくなる。」

これで、僕も肩の荷が下りるかもしれない」

「どうかな。適当な地位と権限を持たされて、祭り上げられる可能性は否定出来んぞ？」

「普通の人の、一生分の苦労はした気がするが。」

親衛隊は次元航行部隊に所属しているし、僕がアースラの司法権限を預かったままだ。執務官の制度はまだ変わっていないし、そろそろ本来の役職に戻って良い頃だ」

「だから昇進を蹴っていたのか。将来は執務官長を任せられたかと、少し前にグレラムが嘆いていたぞ。」

しかし、アースラの司法関連は、お前抜きでどうやっているんだ？」
「エイミイは、あれで優秀な執務補佐官だ。」

執務官資格は持っていないが、司法官資格は持っている。僕の代理という立場も使えるし、そもそも管理局の司法が役に立つ場面は少なかった」

「密航や密輸は、発見次第本局に連行していたからなあ……」

護送はアースラの連中に任せていたが、立場を悪くしていたか？」
「いや、親衛隊が設定した監視域の外での捕縛だから、それは無い。」

最高評議会の戦力評価にプラスで、親衛隊の設定戦力が現状でいいのかという議論の元にはなっても、全体としてマイナスにはなっていないんだ。

現状でも、隊員数に比べると広めなんだ。これ以上広げるには親衛隊の拡充が必要だという認識は持ってもらえている」

「……説得が大変そうだな。御苦勞と言っておこう。」

ところで、執務官の形が変わるのは気にならないのか？ 検討はされているようだが」

「僻地ならともかく、本局や大きな都市では権限が過剰だとは感じていた。それが改善されるのを問題視するほど馬鹿じゃない。」

グレラム提督の誘いがあったのも確かだが、僕では若すぎるし、人脈も弱い。一般人受けする広告塔になるだけで、実権は誰か別の人が握るか、そうでなければバラバラに分解だ」

「今でも広告塔に近い扱いだったと思うがな。」

最年少執務官の記録保持者で英雄の教え子、悲劇を超えて闇の書を止めた勇者……だったか？」

「間違っていないだけに否定出来なくて、恥ずかしいんだ。」

せめて君達くらいはそれを使わないでくれ」

「気持ち解るが……リンディやエイミイ辺りが、嬉しそうに使うのだが」

「だから、なんだ……」

「そうか、既に使われているのか」

相変わらず気苦労が多そうなクロノ・ハラオウンが、お姉様と喋っていたり。

いつもと似て、いつもとちよつと違うところもある風景。

こんなのが、ずっと続くといいね（フラグ）。

「……いや、フラグにするなよ?」

大丈夫、フラグって言っておけば、逆のフラグが立つから。

◆◆ 2009年（新暦70年）06月 ◆◆

「ええ、まだ予想になるけれど、もう少ししたら順次出荷出来る予定よ。」

秋頃からになるものもあるけれど、間に合うかしら?」

「いや、充分だ。」

日本食のブームは落ち着いたんだが、定着しちまったものもあって、品薄が続いてんだ。種なんかは生態系への影響やらの都合で簡単には持ち込めねえし、助かる」

「私達としても、交易の一環よ。Win-Winでいきましよう」

場所は、ゲンヤ・ナカジマが社長として扱われてる交易会社の会議室。

そこで会話してるもう一人は、お姉様の眷属兼娘の、アルク。

内容は、農作物の輸出について。

ミッドチルダとかでは代替品を使った料理が広まってるみたいだけど、本場を謳う日本料理屋なんかの需要はかなり根強いらしい。

もちろん、取引に関するお姉様の許可は取ってる。

管理世界向けに輸出するのは、増産しつつある「地球の作物類」の過剰在庫やその加工品。高品質の物は必要分をお姉様達用に確保し、

従者達の消費分も確保すれば、他は売っても問題ない。

現状で最大の問題は、管理世界から買う物があまり無い事。管理世界の通貨で支払われてるお姉様達の給与すら、物凄く余ってる現状。

従者達が気兼ねなく使えるお金もあれば、色々と買う物が増えるかなど期待してる面も。

「当面はこの量で何とかなるが、恐らくかなり早い段階で増量の要望が来るのは間違いない。」

その返事はどうしておけばいい。増産、いけそうなのか？「急には無理だけれど、順次増やしていく予定よ。」

元々あった地球との伝手を潰す気は無いし、当面は輸出する一方になりそうだから、様子を見ながらになるわ」

「有難いつちや有難いが、今後は直接取引を求める連中も出てくるはずだ。」

そいつらは、どうすればいい」

「お母様達とのパイプを欲しがってる連中は却下よ。その意味で、モンディアルと商売をする気は無いわ。」

それ以外なら……規模が大きくなったら、ある程度は付き合う必要があるかしらね。本来、貴方は交易担当ではないのだから」

「ああ。どうも最近、俺を地球との交渉役と勘違いする連中が増えてな。」

それも仕事の1つではあるんだが……本来は密輸や密航対策の筈だったんだが」

「あら。お母様や、優秀な親衛隊と近衛騎士団がいるのよ。それに、地球の組織だって無能ではないわ。」

その役目は名目で、本質はパイプ役でしょう？」「
「違いねえ」

◆◆ 2009年（新暦70年）08月 ◆◆

「もうすぐ開店、か……」

世間は夏休みのある日。お姉様は、リビングの窓から、南側に出来た建物を見下ろしてた。

そこは元々、工場があった場所。

今では3階建ての、店舗とオフィスが入る複合ビルが建ってる。

1階は店舗。コンビニ(バニングス家の伝手)、イタリアンレストラン(お姉様とプレシア関連+別荘関連)、ガールズ&レディスのカジュアルウエア(各国裏組織+別荘関連)、雑貨屋(各国裏組織+別荘関連)、和菓子屋(使い魔関係)と、バリバリに裏側とコネで構成されてる。

2階も店舗。文具店と100均のお店は、普通にバニングス家の伝手。フォトスタジオは使い魔に写真家がいたから実現。こつそり魔法を使う予定の美容室と、別荘が全面協力するコスプレコスチューム&小物製作販売がめつちや裏側。

3階はオフィス。レッドヘッド株式会社ごつた煮会社の事務所だけじゃなく、お姉様のコンサルディング会社や、中島商事……ゲンヤ・ナカジマが社長を務める時空管理局の会社も入る。日本の裏側に関係する法律事務所と会計事務所まで入る事になってるのは、重視されてると見るべきか警戒されてると見るべきか。

「どの店も、普通に収益を上げるつもりで準備している。」

出資してる組織も、お金を捨てるつもりは無いはず」

主が言ってる通り、お店のビルや住んでいる建物、それに土地を含む不動産、中に入る店等も、テストアロッサ家の為に設立された会社が管理する事になってる。その出資者にいつの間にかバニングス家が混じってた辺りが、恐ろしいというか何というか。

「だが、雑貨はほぼ世界を網羅する勢いだし、衣服はどちらかと言うと私達を着飾らせようと企んでいる気がするんだが……」

紹介されたメーカーや販売会社の担当者の目が、本気すぎる。変態ロリコンに似た方向で」

「全員の本来の姿の写真を持ってて、大人と子供両方のサイズを測らせてくれと土下座まで覚えてきたのはどうかと思うけど、本腰を入れてるのは間違いない。」

それに、使い魔の写真家も、熱意は似た方向を向いていた。オタクの素質もあつたのか、コスプレの撮影も諸手を挙げて喜んでいた」「コスプレも、民族衣装は本物や本場で生産された物を調達可能な体制が整っているからな……」

大手製作会社やゲーム会社とのライセンス契約も取って、更に各種制服の小口販売窓口も兼ねるって、いったいどこまで協力を求めたんだか」

民族衣装は、各関係組織が地元企業との伝手を売り込んできた結果。文化交流的な意味合いもあるらしい。

制服類は、製作会社と交渉した時に本物も扱ってみるかと言われた結果。特撮やドラマで使う衣装の内、普通に購入している物を作ってるメーカーを紹介された。

実績と技術次第ではこっちへの発注（特撮の衣装や小道具製作的な意味で）もあり得るかもとか言ってたけど、これはきつとリップサービス。メーカーやらの権利でガチガチのはずだし。

「少なくとも、準備段階は問題無くクリアしている。」

あとは、やる気が空回りしなければ大丈夫かもしれない」

「いくら近くに学校や住宅街が多くて、交通量もある道沿いだと言ってもな……」

まあ、心配しても仕方がないか。私達が直接関わっているわけでも無いしな」

「お手並み拝見。」

ただ、近いうちに着せ替え人形にされる覚悟だけは必要かもしれない。

下手をすれば、本格的な写真撮影付きで」

「……そうだな。まあ、お前の生みの親に送る写真を撮るにはいい事だと、喜んでおくか……」

なんて、お姉様がため息をついてるといふ事は。

当然、フラグなわけです。

具体的には数日後、正式開店の前日に招待されてた内覧会にて。

「……どうして、こうなった……？」

ここで、集まった面子を発表。

曙天組、お姉様、主、チャチャマル、チャチャ、セツナ、フェイト、アルフ、すずか。

夜天組、はやて、リインフォース、ルーナ、シャマル、ヴィータ。宵天組、プレシア、ヴィヴィオ。

その他テスタロッサ家関係者、アリシア、アギト。

親衛隊、リンディ・ハラウン、エイミィ・リミエッタ、マリエル・アテンザ。

近衛騎士団、カリム・グラシア、シルフィ・カルマン。

スカリエツテイ家、ウーノ、ドゥーエ、クアットロ、チンク、セイ、デイエチ、ウエンデイ。

その他友人関係、高町なのは、アリサ・バニングス、長宗我部千晴、夜月ツバサ。

いくら開店前からって、呼び過ぎた。というか、何人か不参加なだけで、地球にいる関係者の女性殆どが集結。当然、日本なんだからお姉様達は大人モード使用で。

残念そうにしてた真鶴亜美はともかくとして、シグナム、トーレ、ノーヴェ、シャツハ・ヌエラの4人は、ぶっちゃけ仕事の都合とかを言い訳に逃げた気がする。

特にシャツハ・ヌエラ。護衛役が、メイドさん（聖王教会から派遣された、護衛を兼ねる近衛騎士団員）と普段出来ない掃除と一緒にする為に護衛対象と別行動するって、どう考えて無理があるから。

「いや、何か珍しいブランドのがすごく安く買えるって聞いて……」
「ヨーロッパからの輸入物って、いいのは安くないのよね」

うん、関係者割引に釣られた長宗我部千晴と夜月ツバサは、大人しく着せ替え人形になってなさい。お姉様達と並べても大きくは見劣りしない程度に、整ってる外見なんだし。

メーカーや商社の担当者が、てぐすねひいて待ってるから。

当然、お姉様も無関係でいられるはずが無く。

「待て、スカートは嫌だと言っているだろう！　ましてミニのタイトスカートなど絶対はかんぞっ!!」

「いえいえ、こちらは当社のチーフデザイナーが全身全霊を籠めて、お嬢様の為に手作りした一品で御座いますから。」

「お嬢様の魅力を最大限に引き出してみせます!」

「私の魅力など引き出さなくてもいいんだっ!」

明らかに商品じゃない物を着せようとするメーカーの営業(?)から逃げ回ってたりしてる。

その近くでは。

「やっぱり、エヴァンジュさんは女性らしい服装も持っておくべきよね?」

「普段の服装も、悪くはないのですが」

リンディ・ハラオウンとヴィヴィオが、次の服を選んでたりもする。

まあ、それはそれとして。

「やっば、和服系が似合うよなあ……元ネタの家柄ってやつか?」

「キャラとしては、そういう方向付けの設定がされている気がする。」

でも、浴衣を着るのは久しぶり」

「ちよつと前の正月で着させられてたわね。」

けど、着物とかも写真を撮るとかで着させられてたんじゃないの?」

「お雛様のデザインとかで、着させられたことがある。」

その前は温泉だから、回数自体は多くない」

「デザインって……着せる意味あんのか?」

しかもアレって十二単衣だろ」

「重かった。」

でも、エヴァの束帯姿を見れたから、私は満足」

「……ちよつと見てみたいな、それ」

主は長宗我部千晴や夜月ツバサと一緒に、何故か浴衣のコーナーにいたり。

「エヴァさんの横は、アコノさんががちり押さえとる。その周りをフェイトちゃんとすずかちゃんが固めとるから……やっば、真っ向勝負するなら色気しかない。」

「シャマル、必要なのは若奥様の色気や!」

「こ、こんな露出の多いのは、若奥様でも色気でもないですっ！」
ヘソ出し超ミニのボディコンを着させられてる、シャマルがいた
り。

犯人ははやてだけど、恥ずかしがっててもしっかり着てる辺りがま
あ。

色々な意味で、拒否出来なかったんだらうなー。

「あんな服もありっすかねえ」

「ウエンデイなら似合いそうだけど、一步間違えたら、エヴァ様の嫌いなケバいいーちゃんじゃ？」

「私じゃ胸が足らな……胸……」

「下品にならない様に着こなすのは、難しいと思いますよ？」

そんなシャマルの様子を見てるウエンデイは興味津々だけど、胸が
足りないセイと淑女なカリム・グラシアには、不評だったり。

はやてもある意味では本気じゃないらしく、この恥じらい方がとか
言ってるし。

「これ、夏に着る服じゃないですよ……というか、どうしてこんな時期
に？」

「一通り選んでって希望を叶えてるだけよ。」

それに、服はお店に並ぶ時期が早いし、北欧とかの寒い地方なら夏
でも普通に売ってるんじゃないの？」

デニムパンツにニットセーター、更にトレンチコートを着たセツナ
が、選んだアリサ・バニングスに暑いと訴えてたり。

「チンク、これを着なさい！」

「私にそれは似合わないし、威厳も何もなくなってしまう！」

私はエヴァ様の様に凛々しくありたいんだ！」

「マスターに心酔するのは良いけれど、それとこれとは別よ！」

ウーノがゴスロリドレスを持って、チンクを追いかけてたり。

って、チンクがヴィータに捕まった？

「店の中を走り回ってんじゃないやねーよ。」

それに、ゴスロリくらいでうろたえんな」

「恥ずかしい服装が気にならない嗜好の持ち主に言われたくは無い

！」

「アタシの騎士甲冑の事を言ってるんのか？」

あれははやてから賜った大切なもんで、アタシにとっては奇跡の象徴で、あれを着るのは忠誠と感謝の証みてーなもんだ。はやてにも可愛いって言ってもらえたしな。

そんな騎士甲冑を、誰にも批判はさせねえ」

「そ、そうか。済まない。済まなかった。ゴメンナサイ」

ヤバい、ヴェータの目の色がおかしい。

本気で怒りかけてる。

睨まれたチンクが、涙目で謝ってる。

「さあ、反省も済んだようだから、着替えなさい」

「し、しまっ!？」

満を持して……?」

チンクが、ウーノに連れていかれた。

一名様、ごあんなーい。

「なっ!? どうしてこんなに服が!？」

「チンクちゃんに似合いそうな服を用意してみましたあ。

どうですかウーノ姉様あ」

「いい仕事よ」

「どうしてこんなに種類がある!？」

「マスター達の本来の姿を知っている業者だと知っていれば、簡単に解りますよねえ?」

確かに、簡単だよねえ。

本来の姿の身長がチンクと近いのは、お姉様、はやて、フェイト、すずか、私達。

現在小学3年生のルーナやアギトもいる。

面子的にも人数的にも、手を抜くなんてあり得ない。

◆◆ 2009年（新暦70年）12月 ◆◆◆

時空管理局の大改革から、5年。

お姉様達、正確には最高評議会の6人と聖王認定されてるヴィヴィオ、加えて親衛隊と近衛騎士団に護衛少々は、ミッドチルダに来てた。表向きの目的は、記念式典への参加。もちろん、それも嘘じゃない。けど、ある意味で本命である裏の目的は、別にある。発端は、クロノ・ハラオウンから報告が来た、辺境管理世界発の地球襲撃計画。

標的は当然、最高評議会であるお姉様達。

「ようやく得た機会だ。実に楽しみだと思わんか？」

それを知ったお姉様は、喜んで“利用する事”を通達。

お楽しみを邪魔するなという意図は、少なくともクロノ・ハラオウンには伝わってる。

けど、その本人は、あまり嬉しそうな顔をしてない。

「希望通り本局からの護衛はいないが、僕は親衛隊としての護衛になる。」

その辺は考慮してもらえると助かる」

「善処の仕方が解らん。」

まあ、まだ執務官の権限が変わっていかないなら、逮捕権は持っているな？ それなら、事後処理を任せることは出来るが」

「現場がミッドチルダのクラナガンになる以上、それは本来、陸……治安部隊の仕事だ。」

今回は内通の疑いもあるし、僕が動く口実は充分以上にあるが」

「各世界に権力や戦力を割り振り過ぎという危惧に対応する意味もあるんだらう？」

少なくとも空港の警備に来てる連中は、ほぼ全員が内通している連中のようなだ。上手くレジアスを出し抜いたものだと感心するぞ」

「それは……予想以上の事態だ。」

いいのかわ？」

「あのレジアスの足元でも発生したと、過剰に権利を主張する連中への牽制にもなるだらう？」

私は、不要な騒動を起こす連中に八つ当たりしたいだけだが」

「そんなあからさまな」

それ以上の目的もあるにはあるけど、根本はこれだし。そんな無駄話をしながら、一行はクラナガン近郊の空港へ。どうしてミッドチルダの空港って、登場するたびに騒動の現場になるんだろうね？

「少なくとも今はマスコミと黄色い声の連中で騒がしいという辺りが、ありきたり感を醸し出してるがな」

苦笑するお姉様達だけど、周囲はカメラやら人やらがいっぱい。

式典に参加するという話は公表してるから、これ自体は予想の範囲。

でも、こんな状況で襲撃しようという阿呆の気がしれない。

「あまり期待出来んとは思ってたが……予想以上に程度が悪いな」

「あんな相手じゃ、釣った意味が無いわね」

「まあ、八つ当たりのサンドバックにはなるか」

プレシアも一緒にこっそりため息をついてるけど、視線の先には、人ごみに紛れてるつもりらしい、不良系の若い男がいる。

測定魔力量は、S+からSS-くらいと、かなり多い。

ストレージデバイスの所持も確認。カートリッジシステムは搭載してない模様。

周囲に協力者と思われる数人の魔導師もいて、デバイスを隠し持っている。

でも、魔力量的にせいぜいAくらい。役に立ちそうにない。

「……単独犯に仕立てるつもりか。

切り捨て前提の様だが……実は邪魔だから捨てに来たとかいうオチか？」

「それでも、手加減はしないのでしょうか？」

「当然だ。全力で遊んでやろう」

思いつきりそつちを見てにやりと笑ったお姉様。

それに釣られたのか覚悟を決めたのか、不良風の男がロープを飛び越えてきた。

警備もちよつと声を掛けただけで、動く様子は無いし。

「このクソガキ！」

とつとと最高評議会を辞めやがれ!!」

「突然何を言うかと思えば。

頭が悪いようだが、一応言っておいてやる。先に法を確認してから発言する事をお勧めするぞ」

「お高く留まってんじやねえぞクソが!」

男は逆上してる風で、デバイスを構えた。

お姉様は一步前に進み、プレシア達はその後ろで傍観の構え。

「残念ながら、私はお前の要求に応える事は出来ん。

それに、今の時代を作っているのは、代表評議会だ。最高評議会が最高権力者だった時代は、既に過去となっている」

「最高の評議会だろうがクソが!」

あらいやだ、話を通じない。

というか、どう逆上するとこんな感じになるんだろう。

「時代の流れは残酷だ。だが、流された方が平和な時もあるぞ?」

「流されるかよクソが!」

お、シューター発射……いやん、低レベル。

お姉様が避ける気すら無くしてる。

「可愛そうに、詰まっちゃったのか。

汚物は、綺麗にしないとイケないな。消毒するには火か?」

お姉様が攻撃する気になった……?」

というか、火?」

ぼう、って火が吹き上げる程度って、何て優しい。

「何しやがる!…んな攻撃が効くかよ!!」

いや、髪の毛焦げますやん。

服も燃えかけてるし。

「ふむ、加熱したらヤケクソになってしまったか。

何というか、余計に固まってしまった感じだな」

「うるせえ!」

お、今度はマトモな、砲撃……?」

マトモ?」

魔力量しか取り柄が見当たらない。

「……その程度で流れに逆らうか。実に詰まらんど」

お姉様の機嫌が悪くなった。

砲撃は魔力吸収陣であっさりと消滅ちゃったし。

男は啞然としてるし。

「キサマ……この程度で私をどうにか出来るつもりだったのか？」

流されるのを拒否しても、馬鹿でも出来る力押ししか出来ない様では、所詮は恰好と感情だけの口先男としか評価出来んど。

言っておくが、私はこの地位に固執する気は全くない。適任者がいるなら早く替わってほしいくらいだ。だが、代表評議会の過半数の支持を得る者が現れる、若しくは私達に関する法が改定されない限り、私達が最高評議会を辞める事は出来ん。現行法でそう決められてしまっているし、私に法を変える権限は無い。だから、先に法を確認しろと言ったんだ。

その悪い頭でも理解出来たか？」

「ふざけんな！　んな無茶苦茶な話があるか!!」

あるんだよねえ、困った事に。

男の逆上つぷりが再燃したけど、お姉様の機嫌が更に悪化してる。

「ああ、実にふざけた話だ。だが、それが現実で、私がそれを直接変える事は権限と制的に不可能だ。

だからこそ、これからの若人に期待したかったんだが……」

「だが、何だっつてんだ！」

「現実を見ようともせんテロリストの分際で、巨大な管理局という組織をどうにか出来ると思いいあがるな！　代表評議会の連中の支持も取れんような連中に後を任せても、組織が纏まるわけがないだろうが！

だいたい、どうして私に反抗しようという気骨を見せたのがこんな阿呆なんだ！　せめて論戦でも交わせる程度の能力があるなら、多少は私を蹴落とす手助けを出来る物を!!」

「バカにするなクソが！」

「だっつたらもう少しまともな方法を考えろ！」

私は単身でアルカンシエルとの撃ち合いが出来るような化け物で、

腐れ脳味噌以上の骨董品なんだぞ?! 私に喧嘩を売るくらいなら、管理局自体を襲撃するなり、代表評議会の支持を取り付けるなり、法の内容が異常だと訴えるなり、他に方法は幾つもあるだろうが!」

「他の方法なんて知るか!」

「考えるのはお偉い連中の仕事だろうが!」

「だったら貴様の言うお偉い連中に考えさせる!」

「ここで騒ぐだけ無駄だと言っているんだ!」

「どうやって考えさせりゃいいってんだ!」

「指示を拒否すれば別の手段を取らざるを得んだろうが!」

「貴様は口を開けて指示^{エッサ}を待つだけのサルか!」

「んな権利あるわきゃねーだろーが!」

「……ふむ、やはり誰かの命令、それも強制か。」

背後にいる連中について、調べるとするか」

急にテンションを落としたお姉様が、男をバインドで大の字に固定して。

「ついでに、障壁で保護。下手すれば後ろから撃たれそう。」

「な、何をしやがる!」

「少々調べるだけだ。貴様の意思は無関係だから、拒否しても無駄だぞ。」

「取り敢えずは……静かになつてもらうか。リイン、こいつの魔力を死なない程度に奪ってくれ。」

「このままだと大暴れしそうだ」

「良いのか?」

「あの力は、その、あまり好まれるものではないが……」

「私がやると殺してしまうからな。」

「殺さずに無力化する手段としては優秀なんだ。後遺症が出ない程度なら問題無いさ」

「そうか」

「お姉様が引きそうにないからか、リインフォースは夜天の魔道書を具現化して。」

ズキューン的な感じで、魔力蒐集。

ちよつと呻いたけど、叫ばない辺りは随分と我慢強い。
意識も失つてないし。

「変わった魔法はあったか？」

「……いや、ありがちな物だけの様だ。」

次元世界間の転移魔法だけは少々高度だが、他は比較的簡易な魔法しかない。ミッドチルダ式でも少し古いようだが

「わざと古い技術を流されているか、取り残されているかのどちらかという事か。」

さてと、せつかく喧嘩を売ってくれたんだ。面白い物を見せてやろう。

Load : Verossa Acous
Ready : Imitation skill | Umfr
age Speicher | Go

お姉様の右手の周りを、帯状の魔法陣がくるくる回ってるけど。

空想具現化もどきで、ヴェロツサ・アコースの思考捜査技能を再現しただけとも言える。

再現出来ちゃった辺り、呆れるしかないだけで。

「……思考捜査スキル、再現出来たのか……」

クロノ・ハラオウンの表情が引きつってるし、呻くような声になってる。

仕事で協力する中で仲良くなった人物のスキル。

腐れ脳味噌にも使ってるし、割と有名になったものでもあるけど。

「いや、使えたら便利そうだろう？」

「レアスキルなんて、普通はホイホイ再現できるモノじゃないんだが」
「出来たのだから仕方ない。」

心配しなくても、私以外には真似の出来ない方法だ。私と同レベルの化け物がいない限り広まる事は無いし、そもそも私は相手を殺していいなら全ての記憶を奪える能力持ちなんだ。

殺さなくて済む分、優しくなったつもりだぞ？」

「そうなのかもしれないが、それでもだな……」

葛藤するクロノ・ハラオウンをよそに、記憶の調査完了。

必要情報を無限書庫で補完して、と。

「ふむ。頑張れよクロノ、見事に厄介事だ。」

コイツは辺境にある管理世界の行政府主流派の鉄砲玉だ。敵対組織や反対派を物理的に潰す役だな。

わざわざ私達を狙った理由はよく解らんが、代表評議会で気に入らない議決が多かった事に腹を立てているようだし、最高評議会というある意味で特殊な権力を羨んだ結果かもしれない。

ほれ、こんな化け物を権力で縛っている弊害が、解りやすく出て来たじゃないか」

「どうしてそんなに楽しそうなんだ」

「これを機に、最高評議会の位置付けを見直す動きになれば、私としては嬉しいからな。」

早く一般人になりたい、と叫びたいのを我慢しているんだぞ」

「いや、自分で化け物と言っていたじゃないか」

「身分的な意味でだ。心配しなくても、今更普通の人間になれるとは思っていないさ。」

さて、コイツの記憶と無限書庫の資料をまとめた物は、追って用意しておく。

とりあえずはコイツの処理は任せるぞ」

「……了解、しました」

クロノ・ハラオウンは思いつきりため息をついてるけど、お仕事お仕事。

でも、この様子は思いつきり生中継されてたけど、いいのかしらん？

お姉様は自分の立場がおかしい事を広めるつもりだけど、統幕議会と聖王教会は、親衛隊と近衛騎士団の合同で護衛の随伴部隊を作る理由にする気にいるらしいのに。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2010年

◆◆ 2010年（新暦71年）04月 ◆◆

「付き添い？」

「正確には、保護者役や。」

学校の友達とか、みんなでカラオケに行こうって話になったんやけど、私らはまだ中学生や。アコノさんも誘ってるけど、高校生になっただばかりで保護者としては微妙や。

その点、大人で会社社員のエヴァさんならばっちりや」

学校が始まってすぐの、休日。

はやてが、お姉様を遊びに誘いに来た。

「それは構わんが。人数は多いのか？」

「ヴィータは参加せえへんらしいから……いつもの5人とアコノさん、エヴァさん、後は学校の知り合いとかが10人くらいやと思う。」

20人の部屋をアリサちゃんが予約してくれてるから、場所は大丈夫や。あ、全員女性やし、料金は割り勘する事になってるから、変に出してくれんでええよ」

「そうか。まあ、端数くらいは出すさ」

というわけで、やってきましたカラオケボックス。

いつものメンバー、はやて、フェイト、すずか、高町なのは、アリサ・バニングスに、夜月ツバサとそれぞれの同級生を加えた13人の中学生。

主を含め、4人の高校生。

それにお姉様を加えた合計18人が集まり、適当に挨拶した後で部屋に入ったけど。

「……どうしてこうなってる？」

お姉様の左隣に座り、腕を絡ませてご満悦の主。

その更に隣で笑ってるすずか。

お姉様の右隣に座り、やっぱり嬉しそうなフェイト。

テーブルを挟んだ向かい側から、それをキラキラした目で見る学友達。

「要するに、誰かさんが学校にまで指輪を付けてきたからよ」

「私はもう16歳。法的には結婚が可能だし、プレシアも反対していない。

問題は、エヴァが法的には女性で、同性婚が認められていない事くらい」

アリサ・バニングスによる暴露と、それに平然と補足を加える主。でも、お姉様は気にしてるのはそっちじゃない。

「いや、それも充分に問題ではあるが、指輪を渡したのは事実だし、今はいいんだ。

問題は、そっちの連中だ。どうして百合の花が咲きそうな連中が集まっているの？」

「延々と姉自慢を聞かされても、へこたれずに興味を持ち続けた猛者だからよ。

それに、あんたも無駄に顔がいいじゃない。美辞麗句で膨らんだ妄想に負けない程度には」

アニメ世界では意図的に不細工設定されたキャラ以外はみな程々の容姿の法則（使用2回目）はちゃんと発動していて、学友達の外見も別に悪くはない。

お姉様達は、そこからもう数歩、見た目がいいというか、存在感があるだけ。

それでも、美形という事実には無いわけで。

「アリサちゃん……そんなエヴァさんと対等に話せるくらいの度胸と根性があるから、お姉様なんて呼ばれるんだよ？」

「ぐっはあっ！」

ああっ、さすがのツツコミで、アリサ・バニングスが大変な事につ
!

テーブルに突っ伏して、ぴくぴくしてる。

「んじや、質問いいですか？」

あ、私は聖祥大学付属中学校3年生、クラスメイトの朝倉知世です」手を挙げたのは、どこかで見たような感じが……具体的に魔法先生ネギま!の朝倉和美を腰までのウエーブヘアに変えたような人物。

何故かビデオカメラを持つてる。

「まあ、答えられるものなら。だが、言いふらすのは感心できんぞ?」

「うっ……なのはちゃん、新聞部を全否定されたー!」

「だから言ったのに……あんまり詮索しない方がいいよって」

「なのはちゃんも何だか謎が多いしなのはちゃんの両親の年齢も不詳だしアリサちゃんも何だか大きな家で秘密がありそうだしテストタロツサな人達は謎だらけだしー!」

何だこのカオス。

とりあえず、その高校生。タイミングを狙ったかのように、ミステリアスガール♪とか歌ってないで。

どこの猫目さんだっつーの。

◆◆ 2010年(新暦71年)05月 ◆◆

今年もやってきた、生徒と隊員交代の時期。

ついにと言うか何というか、クロノ・ハラオウンが親衛隊の地球側の業務に入る事になり、今年の生徒や新しい隊員達と一緒に移動してくる事になったらしい。

最高評議会の業務については今まで通り親衛隊経由で行うから、クロノ・ハラオウンと直接顔を会わせやすくなる程度で、お姉様としては特に変化なし。クロノ・ハラオウン自身は、本部に残してきた補佐官に遠隔で指示する事になるから少し面倒になるそう。

それでも挨拶はしたいという事で、親衛隊長のリンディ・ハラオウンとエイミー・リミエツタ、近衛騎士団のカリム・グラシア、アルフとザフィーラの教師役2人、お姉様、プレシア、リインフォースの最高評議会3人が……

「いやあ、そろそろクロノ君も日本基準で成人ですし、年貢を納めるの

でしょうか。

原作やあちらの並行世界では、そろそろだったと思うのですが」
……3人と1変態^{ロリコン}が、アースラの転送ポートまで足を運んでる。
なんでコイツまでいるんだろう。

「この世界でどうなるか以前に、現状すら不明だし、どうでもいい。
それより、どうしてこんな所にいる？」

「どうも私に関係しそうな事がありそうな予感がしたのでですよ。」

勿論、得た情報からの推測等も含めた判断ですから、当てずっぽう
ではありませんよ」

「ふん、とりあえず余計な事は言うな。」

それで妥協しておいてやる」

「結構です。では、変な事を喋らない為に、このマスクでも……」

「やめんかー！」

赤いバッテン印の付いたマスクを手にした変態^{ロリコン}をお姉様が殴り飛
ばしていると、20人近い人数が転移されてきた。

今回の転送は4回に分けて行うらしく、1回目と2回目は親衛隊の
隊員と、新設された直近護衛部隊員。前回の襲撃時、親衛隊と近衛騎
士団は「管轄の場所Ⅱ最高評議会の居住地近辺の警備」の為に現場に
居ることが出来なかった事と、ミッドチルダ地上本部で再び大嵐が吹
き荒れた事に対する時空管理局としての結論が直近護衛部隊^れ。つい
でに、親衛隊と近衛騎士団の権限も増えたりしてる。
「お久しぶりです。」

直近護衛部隊、隊長クイント・ナカジマ以下35名。只今を以て、着
任いたします」

……とつても見覚えがある顔は、ある意味仕方ない。

直近護衛部隊の設立案の時点で、統幕議会と聖王教会に直談判し
て、この地位をもぎ取った行動派の英雄だし。

真の希望理由が、状況（夫の単身赴任状態）が変わらないなら自分
（の立場や勤務地）を変えればいいじゃない、というものだったりする
けど。

愛されてるねえ、ゲンヤ・ナカジマ。

陸士訓練校で寮に入ったギンガ・ナカジマと、今度はランスター家に行ってるスバル・ナカジマも、母の行動を応援したらしいし。

取り敢えず、設備的に親衛隊に間借りする事になるし、立場上是親衛隊と近衛騎士団の下となる直近護衛部隊は、カリム・グラシアとエイミー・リミエツタに連れられて移動。

3回目は今年の生徒達のみで、教官と有望な若手と研究職の組み合わせ。とりあえず簡単に挨拶した後は、アルフとザフィーラに引き連れられて移動してく。

続く、4回目の転送は。

「クロノと……妙なのが3人？」

お姉様が訝しがってるけど、確かに妙な老人と老人と幼女がいる。

3人は転送直後に平伏してるし。どっかの民族衣装っぽい格好だし。

お姉さまも、プンプンする心当たりのにほいのせいで頬が引きつってるし。

「とりあえず、先に挨拶だけはさせてほしい。」

クロノ・ハラオウン執務官、只今を以て親衛隊本体へと合流し、現地での任務遂行に当たります」

「クロノも、そんなに固くしなくてもいいのに」

びしつと敬礼してるクロノ・ハラオウンに比べ、リンディ・ハラオウンの脱力っぷりが酷い。

一応形式としては重要なのに。部外者もいるし。

「さて、積もる話もあるだろうが……その3人は何だ？」

「ああ、君達の力を借りたいそうさ。」

今回の特別枠候補で、正式採用となるかは返事次第という事になっている」

「随分と回りくどいやり方だな。押し込むには問題がある人物か？」

「相談を受けたのがギリギリで、本来の手順では間に合わなかったんだ。今まで時空管理局と距離を取っていた関係であまり良い関係を築けていなかった事もあって、むしろ良かったとも言えるんだが。」

実際は旧最高評議会関係の組織と敵対していただけだから、誤解等

は解消している。それでも、この教導は競争が激しくて、後ろ盾が大きくないと押し込むのは難しい。求める助力の内容が特殊と言う事情もある」

「それで経緯や状況を盾に、直接話をしに来たという事か。

まあいい、話を聞こうか」

「は、はい。

私は、アルザスのルシエの民を纏めている者でございます」

はい、キャロ・ル・ルシエきたー。

原作の追放処理よりは随分とマトモな手段だとは言える。

お姉さまにとつては、突然で経緯が意味不明なだけで。

「話は概ねわかった。

クロノ、どういう経緯で連れてくる事になった？」

「聖王のゆりかごを起動した際に、飛竜に先導させただろう。

それを知って、その力があるなら彼女を導けるのではないかと思っただろうだ」

「……またか変態^{ロリコン}！ これも計算した結果か!？」

「はい、いやまさか」

「認めたな!?! 一度認めただろう!!」

はっはっはっと笑ってる変態^{ロリコン}の首を、お姉様がつくんがつくと揺らしてゐる。

その様子を唾然と見てゐる、ルシエな3人。

碌に説明してないのに、どんどん話が進んでるというか、脱線していくというか。

「はあ……まあ、取り敢えず、キャロは預かる方向でいいんだな？」

力の制御方法を教える事と、一般的な教育を受けさせる事……他に何か希望はあるか？」

「は……い、いえ、充分でございますが……」

自分達には過ぎた力だからとかブツブツ言ってるけど、お姉様に聞こえてない。

というか、声になってない。

「お前達の事を知っているのは、あれだ。色々な報告が飛び交って

る中で耳にしたとか、そういう感じだ。

飛竜の100や200でどうにかなる私達ではないから、その辺は安心してくれていい。母親役は……すまんがプレシア、頼めるか？」
「やっぱりその方向になるのね。」

他に適任もないし仕方ないけれど、家族にどう説明するの？」

「ありのまま言うしかないだろう。」

あいつらの事だから細かい事は気にせず、妹が出来たと喜びそうだしな」

「確かにそうね」

「それなら、受け入れが決定したと関係者に通達しておく。」

「詳細の打ち合わせや調整も可能な範囲でしておくが」

「ああ、その辺は任せる。」

当面の住居は……必要な別荘に何か用意するが」

「その方が助かる。一応は封印処理をしてあるが、不安定なんだ」

拒否して放逐でもされたら後味が悪いにもほどがあるし、というお姉様の呟きや、細かい事では……と平伏したまま頭を抱えてる爺さんは無視して、話がどんどんまとまってく。

取り敢えず基本方針が決まったところで、お姉様は、まだ一言も喋ってないキャロ・ル・ルシエの頭にぽんと手を置いて。

「そんなわけで、歓迎するぞ、キャロ。」

取り敢えず、怖がらなくていい事を実感してみるか？」

うん、どう考えても、魔改造で最終的にテストタロツサ家入りするフラグです。

はやてが嬉しそうに歓迎会を開く様子が目に浮かぶようだ。

◆◆ 2010年（新暦71年）07月 ◆◆

キャロ・ル・ルシエがやってきてから、2か月。

その間、割と大変だった。

盛大に行われた歓迎会で、キャロ・ル・ルシエが目を回してたり。ついでにと呼ばれたクロノ・ハラオウンとユーノ・スクライアが、隣

にエイミイ・リミエツタと高町なのはを置いてからかわれまくったり。特にキャロ・ル・ルシエが眠気に負けた後は、並行世界でようやく夫婦になった【ユーノ・スクライア】と【高町なのは】——両方が有名すぎたため表向きは別姓のままらしいけど——ネタで盛り上がった。

フリードリヒ（大）が、ドラコに完敗したり。

別荘ではヴォルテールを呼べず、一度ルスターで召喚してから別荘に連れ込んだり。

ヴォルテールが、変態の幻術マジックに完封されたり。

寝ぼけたフリードリヒがラインフォースに噛み付き、でこピンで地に伏す羽目になったり。

全力のフリードリヒとヴォルテールのコンビが、お姉様に手も足も出なかったり。

同じコンビで、戦闘訓練させてほしいと出張ってきたアルクにも簡単に叩きのめされたり。

竜達がぼこぼこにされてる横で、ルーナやアリスに猫可愛がりされてあわあわしてるキャロ・ル・ルシエがいたり。

うん、特に大変だったのは、キャロ・ル・ルシエの賑やかな仲間達でしたが何か。

住んでた辺りの地形もちよつと変わってるけど。

それでも「暴走すると危険な力」を簡単にねじ伏せ、それ以上の事を仕出かす人達を含む大勢に可愛がられる生活は、抑圧されないという心理的な余裕を生むわけで。

「普段の制御は及第点か。荒事に巻き込まれる予定は無いし、この調子なら外に出ても大丈夫そうだな。

心配なら、もう少しマシな封印の準備もしておくが」

結果として、多少動揺したくらいなら暴走しなくなった。

暴走しても無駄だと思ひ知らされた、とも言うかもしれない。

「えっと、お願い……します」

「そうか、解った。

あと、この世界や管理世界に行くときは構わんが、私達が住む地球

には魔法が無いし、飛竜もいない。そこに行くときは少し窮屈な思いをさせるが、その辺は我慢してくれ」

「いえ、大丈夫、です」

未だに遠慮がちというか、お姉様に対しては借りてきた猫的な態度が抜けてない。

とはいえ、別荘の住居区付近に住めるようになるのは大きい。

元々が自然と生きる部族で、私達が常に傍にいたと言っても、人と触れ合いにくい環境に長くいるのは良くない。例え、毎日誰かが来ると言っても。

◆◆ 2010年（新暦71年）08月 ◆◆

恒例行事になりつつある、モンディアル家の別荘旅行。今回はキャロ・ル・ルシエも参加。

竜が暴走した時に対処出来る戦力が多い場所にいた方がいいとか、通常の生徒ではないとか色々理由を付けてたけど、すっかり妹ポジションで落ち着いているのが最大の理由。

一番構ってるのがルーナとアリシア、続いてアギトやヴィータというあたり、設定年齢が本来の外見年齢が近いという理由もあるだろうけど、どれだけ年下が欲しかったんだと小一時間問い詰めてみたい。今年もアルフとザフィーラとエイミー・リミアは留守番だし、それに付き合っただけクロノ・ハラオウンも留守番組。

そんなわけで、テストロッサ家メンバーとしては1人増えただけ、全体としては直近護衛部隊も増えた状態で、やってきましたモンディアルな別荘。

「今年もようこそおいで下さいました」

「おいで下さいました」

出迎えに出てきたソリオ・モンディアルと、その子であるエリオ・モンディアル。

でも、挨拶をした後、エリオ・モンディアルが固まってる。

キャロ・ル・ルシエを見ながら。

「ああ、今年も楽しませてもらう。

ところで、あれはいいのかわ？」

「うーむ、若さとは良いものです。

いかがですか？ 我が子ながら、真っ直ぐに育っていると思います
が」

「キャラは本人が持て余している力を扱えるよう指導しているだけだし、他人の恋愛に口を出す気は無いぞ。そもそも、預かっているだけで私達の家族ではないしな。

目障りなタイプや脅迫やらの後ろ暗い手段を使うような下種なら叩き潰すが、それだけだな」

「ははは、なかなか手厳しいですな」

「エヴァンジェリオンが過保護者と呼ばれる理由、理解してもらえたかしら？」

「それはもう。プレシア様が以前仰っていた通りです」

「……何を言ったんだプレシア」

「事実を伝えただけよ」

事実だけで十分に過保護だし。というか、お姉様の実態はかなり知られてたりするし。

ジュエルシード事件から管理局の革命までの辺りが何度も映画化やドラマ化されてるのは、お姉様も耳にはしてる。意図的に忘れたがってるだけで。

ただ、実際の映像が多々使われてる、成人指定とされた某ドキュメンタリー映画に関しては知らないはず。キャッチコピーが「お前達のない未来など、私は認めない」で、成人限定の理由が負傷流血身体崩壊を全く隠してないからという、暴走ナハトヴァール戦の実際の映像をほぼノーカット収録した、お姉様にとつての問題作は。

変態^{ロリコン}と変態博士とプレシアと某ネコミミな時空管理局員がノリノリで全面協力したという辺りも含め、隠されてる理由をお察し下さい。

◆◆ 2010年（新暦71年）11月 ◆◆

「ついに明日か。だが、本当にこっちでやってよかったのか？」

「いいんじゃない？ あつちだと、テロ対策やら野次馬対策やらが凄
い事になりそうだからさ」

お姉様は現在、ハラオウン家でエイミー・リミエツタと雑談中。

家主のリンディ・ハラオウンは、アースラで親衛隊の業務中。

クロノ・ハラオウンは、打ち合わせとかで留守にしている。

だから、今ここに居るのは、お姉様とエイミー・リミエツタと。

「お姉ちゃん、飲み物はここに置けばいいかな？」

お姉様についてきたフェイトを含めた3人だけ。

フェイトは3年前までここに住んでたし、勝手知ったるという事でお手伝いを買って出た。

「ああ、有り難う。」

確かにクロノも私も、名前が売れすぎているか。騒動を起こさないよう小さくやるなら、こっちで済ませた方が楽そうだが……形式や
はいいのか？」

「騒ぎが大きくなる以上に、招待客の事を考えると形式に拘ってられ
ないって。」

最高評議会と聖王が来ちゃうんだよ？ 時空管理局も聖王教会も

下手な人を送れないとかで、調整に数か月とかかかっちゃいそうだし。

さすがにそれだと……ね？」

「出来婚の辛いところか」

というわけで、明日に迫った結婚式の話。

経緯を纏めると。

5月、クロノ・ハラオウン、現地（地球）に着任。

8月、お姉様達がモンディアル家の別荘へ。リンディ・ハラオウンが同行し、クロノ・ハラオウンとエイミー・リミエツタが地球側の維持管理や教導等を担当。この際、クロノ・ハラオウンがエイミー・リミエツタに食べられる。

10月、妊娠発覚。

11月、結婚式。いまこの直前。

「でも、随分と積極的……だよな？」

「あはは、私だって、色々……ね？」

「リンディに反対する気があるなら、何年も息子の補佐官と同居して
いないだろう。」

「というか、襲うとは思わなかったぞ。性別が違う双子だから、排卵
誘発剤すら疑ったが」

「あれ？ 男の子と女の子なんだ。いつの間に……」

「でも、薬は反則でしょ？」

「シヤマルに診断されている時だ。私もいた時があっただろう？ と
いうか、シヤマルも気付いていて、既に話していると思っただんだ
が。」

「これは知っていると思うが、自然な妊娠での異性双生児は、かなり
率が低いんだぞ」

「この世界のお医者さんじゃまだ判断出来ないのかな。魔法の診断は
経過を確認するだけって言ってたから、その辺まで気が回らなかった
とか？」

「それはそれとして、本当に薬は使ってないって。本局でちやほやさ
れているのを聞いてたら、腹立たしいというか、何で私が隣にいないん
だというか……しかも、帰って来たって相変わらずの鈍感系のくせに
やたら背も伸びてるし？」

「それで盛大に喧嘩して、気付いたらこんな事になってたってわけ
よ」

「いや、こんな事と言われてもな」

「そう、なんだ……」

「はっはっは、なんて笑いながら暴露してるけど、お姉様達にここま
で言っただけのいいのかなあ。」

「フェイトも顔を赤くしながら聞いてるし。」

「概要は既に主要な関係者には知れ渡ってるから、手遅れだけど。」

「まあ、本人同士にその気はあったんだろうし、それはそれで切っ掛け
としては良かったんだろう。」

「というか、明日のサプライズで、クロノが倒れないかを心配した方がいいかもしれんぞ」

「日本の結婚式って、宗教を無視した形だけでいけるから気楽だよねえ。」

「ヴィヴィオ様って牧師役を頼んだ時も、冗談のつもりだったし」
「様付けだけは嫌がられたがな。それでも本人はノリノリだし、どうせキリスト教の信者でない夫婦の結婚式に来る牧師は、それっぽい外見のバイトだ。止める理由が思い付かん。」

それに、管理世界を知っている裏の連中ほど、反対出来んだろう。聖王教会の生き神様が自ら出てくるんだからな」

「そう考えると、贅沢だよねえ……」

「絶対に別れられない、かも?」

「大丈夫だって。最悪でも寿命つてもんがあるし、子供っていうかすがい鎧もあるんだから、問題ないない。」

「フェイトちゃんだって、永遠を誓って眷属になったんでしょ?」

「そ、それは……うん……」

「どうして、そこでフェイトの顔が赤くなるんだろう(すつとぼけ)。」

「少なくとも当初は、恋愛の意味は無かったはずなのに。」

「親愛属性の眷属化にも、そんな効果は無いはずなのに。」

「まあ、これで前例が出来るからな。もしカリムが結婚するなら、嬉しそうに行こうとするんじゃないか?」

「聖王教会の上層部がひっくり返りそうだが」

「カリムちゃんは立場を理解してるから、大丈夫じゃない?」

「それもそうか」

「そんな、一部以外にとっては平和な結婚式。」

「本番でクロノ・ハラオウンの意識が飛びかけた事以外、平和に終了。出番を譲ったカリム・グラシアが目を輝かせて牧師役のヴィヴィオを見てた辺り、本当に聖王が好きなんだねえと思っておく。」

「……まさか、こんなとこにまで百合の花は咲かないよね?」

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2011年

◆◆ 2011年（新暦72年）04月A ◆◆

「今年は、人生の節目を迎える人が多いからな。

ちよつと派手にやるよ！」

というはやての音頭の下、今年もパーティーが行われてる。

原作娘達が揃って高校に進学、アリスアも中学生に。それを「八神はやて」や「高町なのは」に伝えたら、本当に進む道が違うんだとしみじみしてみたみたいけど、これはぶつちやけあまり重要じゃない。

人生的な意味では、長宗我部千晴、上羽天牙、馬場鹿乃が大学を卒業したのが大きい。

「そうか、契約自体は続けるのか」

「俺の存在が役に立ってるって言われるのは、やっぱり嬉しいんだ。

今更どつかに引越すつてもアレだし、爺さんと別居になつちまうしな」

「で、レッドヘッドとも契約か……」

「会社と月村家を交えて相談した結果だから、問題無い。

まあ、現実も知つちまつたしな」

馬場鹿乃が知った現実は、すずかと婚姻や契約をする可能性がほぼ無くなっていたという事。

すずかがお姉様の従者になった時点で予想はしてたと思うし、転生特典を破壊した時点ではほぼ確定的ではあったけど。やはり、言葉で伝えられたという事実は大きい。

そもその原因が、月村すずかだったときに性教育が行われたら馬場鹿乃の体格を怖がったからというの、お姉様も知らない事実。仕方ないね、幼女と巨獣だもん。

ちなみに、馬場鹿乃は今後、日中は基本にお姉様関係のお店やマンションの警備兼用務員を担当。夜は月村家にある家に戻り、戦力と

して待機する形を取る。

月村家としては、時空管理局所属の魔導師と契約して手元に置いてあるという事実があれば、問題無いそう。戦力面では、月村忍と高町恭也の（同居してるのにまだ籍を入れないのかと周りをもよもやさせてる）実質的な夫婦もカートリッジで魔法を使えるわけだし。

「で、お前が事務員、と。」

それはいいが、どうして中島なんだ」

「一応商業科出身で帳簿は扱えるし、一応交易をやってる商社だし、魔法に理解があるし……」

なんか消極的な理由だけど、上羽天牙はゲンヤ・ナカジマの部下に。表向きは事務員。実質的にも事務員として働きそう。

元キャラのウェイバー・ベルベットの様に出世する事は、無いな。

「それはそうなんだが、まあ、無難ではあるのか。」

そういう意味では……」

「何だよ。これでも、割と評判良いんだぞ？」

長宗我部千晴は、フリーのシステム屋。

といっても、お姉様経由で伝手のある会社やら相手にウェブサイトやデザインしたり、ちよつとした管理ツールを作ったりしてる程度。

でも、お姉様に近い以外に変なシガラミを抱えてないし、裏を知ってるし、個人だから秘密が漏れた際の責任がはつきりしてるし、割と出来もいいしと、発注先として使い勝手が悪くないように見えるせいか、普通の会社員以上の収入を得てる。大学行ながらだったのに。

「引き籠りニートにならないなんて、ちはたん頑張った」

「ちはたん言うな、声に出てるぞ」

「申し訳ありません」

すまないね、ワザとなんだ。

でも言った本人はちゃんと謝ったから。

さて、今年はどうな事になるかな、つと。

未だに生温い関係の、高町美由希と成瀬カイゼとか。

◆◆ 2011年（新暦72年）04月B ◆◆

「次にリンディと会うのは、1月近く後か」

「その予定だ。僕達は問題無いと言っていたんだが」

原作娘達が高校に進学してしばらくたった、ある日。

今年は教導の生徒達の入れ替えに合わせ、アースラとリンディ・ハラウンが比較的長く第97管理外世界を離れる事になって、今はお姉様とクロノ・ハラウンがお茶を飲みながらだべり中。

これまでもメンテナンス等で年に数回はアースラ不在になる事があつたけど、今回はちよつと長め。

理由は。

「それにしても、クラウディア、か。」

狙ったような名前だな？」

「全くだ。ただ、艦長は僕じゃなくて母さんだが」

「それはまあ、現場を退いていないからだろう」

親衛隊が使う次元航行艦が変更になり、その艦長にリンディ・ハラウンが就任するから。

アースラ自体は現役を続行するけど、親衛隊の乗組員は殆どがクラウディアに移るそう。

例外は整備等を担当する技師達くらい。

「知っているのは資料や話だけだし、竣工したばかりらしいが、長期の広域調査に向くよう設計された新型艦だそう。アースラより少し大型で搭乗人数も増えるから、親衛隊自体の増員も決まっている。

母さんが本局に戻ってから何度か演習をする事になっていて、それが終わって戻るまでが、1月の予定だ」

「要するに、リンディの仕事が少し増えるわけだな。」

新型艦の訓練が1月も無いのは大丈夫なのか？」

「配置換え等で乗り換える事だつてあるから、新型艦だからと手間取ってはいられない。」

それに、空間シミュレータを使った訓練は開始している」

「ああ、それでここしばらくは教導で別荘を使う事が多かったのか。」

そうになると、次は地球に置いてある設備に不満が出そうだな」

「話は既に出ているし、切り替える為の準備も進んでいる。

中島商事が在庫管理用に倉庫を用意する事になったから、その地下に隠す形で設置する予定だ。

本部機能もようやく家から外せるし、その近くに隊員や生徒用の宿舎も準備している。少し散らばっていた今までよりは楽になるはずだ」

「そういえば今までは、アースラが戻る時はハラオウン家に人が増えていたんだっとな。

所で、管理局はどうやって地球の通貨を得ているんだ？ 大つぴらな交流は無いし、裏取引だけだと家やらの維持は厳しいだろうに」

「魔法関連と思われる事件の調査協力要請は度々あるし、国が相手なら護衛や警備を請け負う事もある。資源国相手に鉱脈調査等で技術協力をする事もあるらしい。

最近では金属資源の輸出も始めていて、交易だけなら黒字になっっている」

「随分と大がかりというか、人手や手間がかかりそうだが」

「この世界の技術ではそうかもしれないが、魔法の技術があれば話は別だ。

それに、親衛隊が暇を持って余し気味という現実もある。余力を現地通貨獲得……もとい、現地組織との友好の為に使う事も通常任務の範囲で認められている。

現金に余裕があれば遊びに行く時に両替しやすいから、隊員も協力的だ」

「……何だか、意外に苦勞していそうだな」

「個人的な交流が建前の君達と違って、僕達は時空管理局として対話する必要があるんだ。

一方的な利益収受で立場を悪くすれば責任問題になるから、あまり甘えられないというのもある」

「私達はいいのか？」

「時空管理局への利益提供ではなく、時空管理局への影響を持つ人物との関係を良くする為だと説明されている。君達自身の希望と現地

組織の意向が噛み合った結果だし、最高評議会が特定の管理世界に肩入れする事を避けるという意味表示でもある事になっているから、糾弾する意見は少数に止まっているのが現状だ。

ついでにばらしてしまおうが、モンディアル家との交流も、最高評議会や聖王として騒がれない土地柄を気に入っていて、交易で明確に対象外とされたという話も伝わっている。モンディアル家も最初の宣言通り、繋がりを笠に着た言動をしていないし、何より、それをすれば簡単に見限られるだろうとも公言している。

君達と繋がりを持つ事が利益になりにくいと判断されたせいとか、技術という実利がある教導以外については、思ったよりも静かになっている」

「それは何よりだ。

交易と言っても大して大規模ではないし、あの世界では日本料理やらを見かけなかったしな。あいつらにとって、本当に恩返しで充分なんだろう。

私達へのパイプを持つ事で、暗黙的な利益はあるだろうしな」

ただ、エリオ・モンディアルがキャロ・ル・ルシエに一目惚れした様子なのが、微妙な影響を出すかもしれない。

おかしいな、原作だとキャロ・ル・ルシエの方が積極的なのに。

◆◆ 2011年（新暦72年）05月 ◆◆◆

恒例の、生徒と隊員が入れ替わる時期。

キャロ・ル・ルシエの教導続行、ぶっちゃけ実質的な家族化が決まったりもしたけど。

クイント・ナカジマに快適さやらを自慢されたりしたメガーヌ・アルピーノが自分も行きたいと騒いだりもしたらしいけど。

ハラオウン家は、それとはまったく別件でバタバタしてる。

「そんなに心配しなくても、大丈夫よ」

「だけど、母さん。

「こんな時はどうすればいいか……」

「信じて待つだけよ?」

要するに、エイミイ・ハラオウンの出産で、クロノ・ハラオウンが落ち着いてないだけ。

冷静な執務官も、自分の事には弱いらしい?

その点、自身も出産経験があるリンデイ・ハラオウンは落ち着いてる。

当然のように裏を知る病院で、しかもシャマルと私が手伝いとして参加してるから、まず問題無いのに。

魔法的な手伝いも、ばつちりなのです。

「ところで、名前は決まった?」

「それは、エイミイと話し合って決めてあります。

カレルと、リエラです」

「そう、いい名前ね」

「……並行世界と同じ名前、ですか」

ありや、ばれた。

流石親子。それなりに表情を隠すのが上手なリンデイ・ハラオウンだけど、前提となる知識を持つクロノ・ハラオウンには隠しきれなかった。

もちろん、リンデイ・ハラオウンに情報を渡した犯人は、お姉様。

「ええ。別世界の影響を受けるのが嫌なら、変えるのもいいかもしれないと言っていたわ。

私としては気にするほどの事ではないと思っているし、伝える気も無かったのだけれど……どうする?」

変えろと言っているわけじゃないけど、同じ道を歩まないという意思表示をするかどうか。

する事に、意味があるわけじゃない。

しなくても、全く問題ない。

本当に、気分の問題。

「……この名前を決めたのは、僕とエイミイです。

並行世界の僕達と同じ判断をしたのであれば、それも僕達の判断の筈です。

ですから、変えません」

「そうね、そう思えるなら、変える必要は無いわ。

この話は、エイミーには秘密よ?」

「了解です。むしろ、僕に悟られないで下さい」

「そうね、失敗したわ。

でも、別の事を考えたおかげで、少しは落ち着けた?」

「……はい」

うん、原作と同じ名前で確定したっぽい。

分娩室では、問題無く生まれたみたいだし。

もうすぐご対面の時間。

覚悟しろよ、新米お父さん?

◆◆ 2011年（新暦72年）09月 ◆◆◆

やっぱりエリオ・モンディアルの方が積極的だと確認出来た、夏のイベントを確認して数週間。

お姉様は、別荘チタマに来ていた。

その理由は見せたいものがあるから来てほしいと、アルクにお願いされたから。

「で、見せたいものとは何だ?」

「ふふ、それはね。じゃーん!」

転移魔法で転送されてきたのは。

男女3人ずつの……

「……エルフ、か?」

耳がみよーんと長く、身長高め、体の線が細めの美男美女達。

軽く調べた感じ、魔力は相当高め。全員がSSクラスと言ってよさそう。

「そうよ。いい感じでしょう?」

中でも私の直接眷属の6人は、王族設定かつハイエルフ設定で不老不死だから」

「設定じゃないだろう……というか、不老不死?」

「私の眷属だから、お母様から見れば孫かしら？」

リーダーはこの子ね」

「リット、と申します」

丁寧な頭を下げてるけど、外見はどう見ても某呪われた島のハイエルフ。

2番目のケイナはちよつと子供っぽい感じ、だけど魔力はこの6人中最大という危険物。

3番目のラファイーは、呼ぶがよいの人の耳を伸ばした感じですね分かります。

男性陣の、レゴラ、スポーク、ブラムは……一括りで堅物そうではないや。首輪とトラックと尻尾みたいだし。

「あと、この子達の下に、普通のエルフ……寿命は人より長いけど、ちゃんと寿命のある、魔法特化型種族も用意してあるわ。

取り敢えず3000人程で、全員がオーバースかニアSとかいう枠に入るはずよ」

「……アレで研究した成果が、コレか……」

お姉様の魂が口から抜けそう？

でも、まだ終わってない。

「えつと、次に……」

「まだあるのかっ!？」

「あるわよ。魔法特化種族だけじゃ、問題があるでしょ?」

というわけで、次の転移魔法は。

「……ドワーフ、か。これも眷属か?」

これも、男3人、女3人。

男は見て判りやすい、ちんちくりんな筋肉髭オヤジ。女はどう見てもロリ粹、但しちよつとぽっちやり気味できよぬー。

魔力も意外にある。具体的には、6人全員オーバースくらい。

「ええ、便宜上ハイドワーフと呼んでるわ。主に力仕事の担当、根気や器用さもあるから鍛冶や技術系なんかもいけるわ。

こっちは男がリーダーだけど、順列は男女交互よ。

男は順にモートソグニル、ヴィトル、フラール。女はドウリン、ニー

イ、サラルステインね。普通のドワーフも3000人いるわ。それで……」

「まだいるのか……」

「ちよつと体格は小さいけど、敏捷性と器用さを重視したコビットね。機械の操作とかにも向いてるし、農林水産業の広い範囲をカバー出来るはずよ」

「……何というか、ギリギリというか安直と言うか……」

現れた6人は、シヨタ&ロリな6人。

エルフと違ってちんまい。ドワーフと違って細い。見た目は本当に子供っぽい。

6人の魔力はオーバーS、つまり魔改造ドワーフ並み。

「男がゴクン、バキン、ケンタ。女がプラム、カシス、ジヨナよ。」

勿論、普通のコビットも3000人ね」

「名付けがいい加減になってないか？」

「仕方ないじゃない、ホビ……こほん。コビットに似たキャラクターなんて少ないし、ドワーフほど元が明確でも無いんだから」

「はあ……まあ、何だ。外に出すなよ？」

人外扱いで酷い目にあいそうだ」

「もちろん、その辺は理解してるわ。」

それで、1つ相談があるけど、いい？」

「……まあ、聞くだけなら構わんが」

「犬耳や猫耳も作りたいけど、人の耳をどうするかで悩んでるのよ。」

犬日々なんてアニメもあったわけだし、可愛いと思うのだけど、お母様はどう思う？」

アルフやザフィーラを見る限り、人の耳は無いけど。

某犬姫や某猫閣下を見ても、人の耳は無いけど。

「知るか！　というか何でそんなのまで作ろうと思った!?!」

「可愛いと評判で、大人気なんですよ？」

「2次元と3次元くらいは区別してくれ……」

「最近はやりの『ゆるキャラ』なるものは3次元なんだし、いいじゃない。」

それに、セツナさんの様な、先天的に魔法的な能力が必要な種族ま
では作ってないわ」

「いや、作ってしまった3種はともかく、犬耳や猫耳は十分に異常だか
らな？」

特徴や整形で誤魔化せるようなレベルじゃないからな？」

でも、今のアルクの事だから、そのうち気付いたら作ってる。
間違いない。

◆◆ 2011年（新暦72年） 11月 ◆◆

「なあ、このサイト、色々と悪化してないか？」

肌寒くなってきた、とある日。

長宗我部千晴が、別荘での訓練の前に、お姉様を訪ねてきた。

手にしているのはコスプレ屋の広告塔にして、コスプレ系としては破
格のヒット数を稼ぎ出しているブログ「ちうとゆかいななかまたち」。

原因は、もちろん。

「……どう見ても、ドワーフだな」

フアンタジーな格好で無骨な戦斧を構える、ちんちくりんな筋肉髭
オヤジ。

着たり持ったりしてるモノの多くは、実際に販売してる。この辺が
ヤラセと批判される理由……だけど、明らかにダイレクトマーケティ
ングだし、モデルに服を着せてカタログを作るのと何が違うのか解ら
ない。

でも、撮影で使った1つ以外は受注生産のオーダーメイドになるも
のが多くて、当然の様に値段も高い。安い設定があるものは当然劣化
品だし。

だから、売る気のないショールームとも呼ばれてる。

実際は買う人がいる事も多い辺り、オタクってすげえ。

「なんつーか……よく、こんなモデルを見付けたな。」

別荘で見た事はねーし、どうやって見付けたんだ？」

「いや……今は、いる。気付いたらアルクが作っていた、が正しいか。」

本当にドワーフをコンセプトにしたらしいから、ドワーフと呼ぶべきなんだろうな。

表には出していない様だが、エルフもいる。耳が長くて魔法が得意な連中だな。

実際に会ったから、確定だ」

「うわ……マジか。」

いいのか、それ。お約束で美形だろうし」

「エルフは美形だし、女ドワーフはロリだし、ロリシヨタ向けなのかコビットとかいう小人までいたぞ。」

そのうち猫耳や犬耳も作りたいと言っていたし……今まで以上に、表に出せない世界になっていくんだが」

「マジか……」

お姉様と長宗我部千晴が、そろってため息をついてる。でも、楽しい。

エルフに関しては防衛戦力の意味合いが大きいし、ドワーフやコビットも既に実務に参加してる。

安全面や今後の事を考えると、無駄と言えないわけだし。

せっかくのファンタジー路線。アルザスやらを参考に、ドラゴン等も作らないと（使命感）。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2012年

◆◆ 2012年（新暦73年）05月 ◆◆

成瀬カイゼが大学に進んだり、スカリエツテイ家にセツテが加わったり、教導の生徒が入れ替わったりしながら、既に5月。

そんなとある休日に、テスタロッサ家のリビングではちよつとしたお茶会状態になつてる。

来てるのは、偶然だけカリム・グラシアとアリサ・バニングスの金髪コンビ。

アリサ・バニングスははやてやすすか達と遊びに。そしてカリム・グラシアはお姉様と話をしに来た。

「そうか、エリオがか……」

そんなカリム・グラシアが持ってきた話の内容は、某モンディアル家の子息の事。

要約すると、キャロ・ル・ルシエを守りたいからという不純な理由で、親衛隊か近衛騎士団経由で護衛部隊を目指し、早く近くに行きたいから親衛隊の教導に参加したくて、比較的参加条件が緩い聖王教会の門を叩いた、という事らしい。

ヴィヴィオがいるせいもあって最終的な競争倍率は半端ないけど、後ろ盾が重視されないという点で時空管理局より敷居が低いと判断したらしい。まだ10歳にもなっていないのにちゃんと情報を調べ、決めた後の動きが早いあたりは、商家の血を引いてるだけあると感心すべきところ？

「聖王教会の勢力が小さい世界なのですが、逆に、所属支部の推薦を取りやすく、かつテコ入れで本部から枠を与えられる可能性もある、という計算もあるようですよ。」

両親はあまり歓迎していないと言っているのですが、これらを調べたのも両親だそうですから、応援半分、反対半分といったところの様

ですが」

「……違うな。エリオは単純に、キャロを目指しているだけだろう。それに、あの世界の聖王教会の力とモンディアルの立ち位置を考えると、枠を与えられる可能性は低いはずだ。」

恐らく、競争率から考えて願いが叶うとは思えないから、強硬に反対してミッドやらに行かれたり、管理局に行かれたりするより、目が届き権力も弱い地元の聖王教会に行く理由を考えた……と言ったところか」

「聖王教会も時空管理局も、何らかの梃入れを意図した割り当てを行った事が実際にあるそうですから、根拠のない話ではないようです。」

それに、初恋の人を守る為に直近護衛部隊を目指すなんて、世間受けが良さそうでしょうか？」

「キャロは、正確には私達の家族ですらないんだがなあ……」

それに、確率は低いだろう？」

「勿論です。人格面と能力面で、聖王教会の代表として相応しいと示さなくてはなりません。」

それが出来て初めて、枠の争奪戦に参加する資格を得る事が出来ま

す」
「当たり前だな。まあ……本人がその気なら、別に止める義理も無いが。」

ギンガはゼストやメガーヌの下で元気に暴れてるらしいし、スバルやティアナは目標があつて陸士訓練校に行っているようだし、ルーテシアは順調に召喚魔法やらの才能を開花させているらしいし……若い連中が元気なのは、良い事なんだろう、きつと」

「少しばかり、年寄りくさいですよ？」

「2500年も前の骨董品なんだ、古臭くもなるさ」

「こんなに可愛らしいお姿なのに」

「……見た目だけだ」

身内だけだからと、幼女モードでいたお姉様の油断。

だけど、2500年は正しいけど間違ってもいる。

意識のある期間だと……前世も合わせると45年を超えるくらい。
ロリBB Aならぬ、ロリ中年オヤジ？

◆◆ 2012年（新暦73年）08月 ◆◆

「これで、全員が揃ったのか」

「全ての娘達が目覚めたのでね。」

ようやく、子育てに精を出せるというモノだよ」

「子育てと言える年齢ではないでしょう」

お姉様達がモンディアルな別荘から帰って来た後の、テストロッサ家。

ジェイル・スカリエツィ達が、セツテ、オットー、デイードの3人を連れて来た。

軽く挨拶をした後で、セツテとデイードははやてに連れられてお風呂に行き。

オットーは、ウーノに台所の説明を受けてる。

お姉様、プレシア、ジェイル・スカリエツィが座るテーブルには、オットーが練習で入れた紅茶と、手土産で持ってきたお菓子が並んでいる。

紅茶の味は、良くも悪くもない。基本の手順通りに作った普通の味。

起動直後に近い状態だと考えると、よく頑張ってる。ぶっちゃけると今のシヤマル（ミスしなかった時限定）と同程度なわけだし。

「特にあの3人は、原作で感情に乏しかったようだからね。」

だからこそ、人らしくあるために、念入りに調整を重ねたのだよ。

人はそれを、子育てと言う。違うかい？」

「間違っではないが……そうか、あの3人は最初から精神面が魔改造されているのか」

「魔改造とは人聞きが悪い。」

きちんとした教育を与えた、と言ってくれたまえ」

「ああ、その方が耳触りがいいな。」

だが、オットーも女だろうに、あんなに男っぽくていいのか？」
「それも個性、嗜好の問題だよ。」

それに、行動が男性的な女性にも、心当たりがあるからね」

「……いや、何故そこで私を見る」

いや、中身は男だと公言してるし。

ガワは幼女だし。

「管理社会で実質的な頂点に立ち、経済的に不自由がなく、女性ばかり家族にしている、外見は女性の男性がいたと思ってるね。」

外から見れば完全無欠だが、精神面が男性である以上、ある種のハーレムである家庭内では微妙だろうとね」

「ほっとけ」

「エヴァンジュの場合は、出しゃばらずに任せるべきことは任せ、周囲もそれを当然としているから、上に立っているように見えるだけよ。特に家庭内の事は、女性の方が得手としている事なのだから。」

ジェイルも食事だけでなく、身嗜みもウーノに頼りきりなのでしよう？」

「うむ。やはり、研究に没頭してしまうと、他の事に頭を使う気になれなくてね。」

これがマッドと呼ばれる所以なのだろうが、2人とも覚えがあるのではないかね？」

「……ほっとけ」

「……不必要な過去は振り返らない主義よ」

「ククク……以前の私が見ればぬるま湯に浸かっていると思うのだろうが、やはり、この様な空気は良いものだ。加えて、娘達の成長を見守ることが出来る。」

平凡な幸せというのは、この様な物なのだろう」

「娘達と幸せの点だけは、同意するわ」

「……マッドな時点で平凡じゃないだろう」

「だが、幸せを感じる内容については、平凡そのものだよ。」

無限の欲望と呼ばれた私が、この様に感じるとは。実に感慨深い」
「……私に迷惑にならない範囲なら、好きにすればいいよ」

ああ、お姉様が何かを諦めた。

というか、性格面が魔改造された戦闘機人の内、2人は楽しそうにお風呂ではやてと揉み合ってるし。1人は静かに紅茶を入れる練習をしているし。3人とも、問題があるようには見えない。

お姉様の迷惑にならない範囲は割と広いから、随分と甘い裁定なのは確定的。

おかげで私達や眷属従者達が、色々と研究したり工作したり出来るわけだし。

◆◆ 2012年（新暦73年）11月A ◆◆

「うーん、こうなるのは予想していなかった……」

「可愛らしいお姿ですね」

随分と長く眠ったままだったイクスヴェリアに漸く変化があったため、駆け付けたお姉様とヴィヴィオ。

その前にいるのは。

「サイズとしては、ルーナやアギトの本来の姿くらいか。

脳波やらは覚醒状態だし、移動端末の様な感じだが……喋れないのか？」

お姉様の言葉にコクコクと頷いてる、ちっちゃいイクスヴェリア。

ふわふわと浮いてるところも、とつても融合騎っぽい。

本人と言うか本体と言うか、お姉様が連れて来た体は寝てる様にか見えない。

サイズが違っても外見的特徴は一致してるから、別人という事も無いようだし。

「こちらの言っている事は伝わるようですから、会話の手段は何かあるでしょう。

それよりも、服を揃える必要がありますね」

「そうだな……とりあえずはルーナとアギトに借りるのが一番早いな。

この時間なら学校が終わる頃だろうし、適当に持ってきてもらう

か」

「他の人達にも伝えた方が良いでしょう？」

仲間外れは良くありませんから」

「……そうだな」

そんな流れで、一通り声を掛けた結果。

「初めまして、イクスヴェリア陛下。」

私は聖王教会 騎士カリム・グラシアと申します」

護衛も付けずに最速で駆け付けた教会関係者がいて。

「色々持ってきたのです！」

「おー、本当にアタシらと同じくらいなんだな」

ルーナとアギトが、いくつかの服を持って現れて。

2人とも子供サイズのままであったけど、同じくらいとアギトが言った時にイクスヴェリアが頷いてたから、本来の姿も記憶にあるらしい。

いつから周囲を見てたんだろう。

「おお、ほんまに融合騎っぽい姿やね。」

可愛いなあ……リインフォースは美人さんで方向性が違うんやら、悔しがらんでええよ?」

「は、はい」

相変わらず小さくなれず融合も出来ない事を気にしてるリインフォースが、恨みがましい視線を向けて、はやてにフォローされ。

「か、可愛い……」

「アリサちゃん、表情が崩れてるよ」

「Shut up! そう言うのはだって崩れてるじゃないの!」

「2人とも、喧嘩は駄目だよ……」

「こうして話をするのは初めてだから、初めまして。」

エヴァから聞いているけど、私達の事は知ってる?」

「私の事も知ってるのかな?」

「知ってるみてーだな。って事は、あたしの事も知ってるって事か。」

ま、よろしくな」

はやてと一緒に高校から直行してきたアリサ・バニングスと高町な

のはが妙な言い合いを始め、さすがが仲裁しようとしてる横で、主とフェイトとヴィータが満面の笑みで頷いてるイクスヴェエリアと握手して。

「すみません、遅くなりましたっ！」

体調管理の為にちよくちよく訪れてたシャマルが飛び込んできて。

「……いや、現状はとりあえず安定しているし、私達もいるんだ。

そこまで急がなくても良かったんだが」

「そ、そういうえば……」

お姉様の冷静なツツコミに落ち込んだりもしたけど。

イクスヴェエリアに対しては予想以上に好意的な反応。

「さてと、全員に一応言っておくが、どの程度活動出来るのか、どこまで移動出来るのかを確認するのはこれからだ。この姿では地球に連れていけないし、管理世界やらに連れ出したりするのも問題が無い事を確認してからになる。」

特に、どうやって政治的に問題が無いかを確認すればいいのか、頭を悩ませているところだ。その意味でも別荘の外に行く目処が立っていないから、当分は別荘の中だけになる。

そういう訳だから、無理に連れ出そうとするなよ？」

はーい、って元気な返事をしてる、高校生以下組。

その横で、どう扱うか考え込む様子のカリム・グラシア。

古代ベルカ、ガレアの王。しかも本人。

記憶等を受け継いだクローンと公表してあるヴィヴィオより、扱いに慎重を要する。

◆◆ 2012年（新暦73年）11月B ◆◆

イクスに関する話をしたチャットログから抜粋。

エヴァ：という訳で、こっちのイクスは融合騎風謎生物になった。

大はやて：早く見てみたいなあ。

大はやて：こっちはようやく事態が終息したとこやし。

エヴァ：ルネッサの改心は無理だったか。

大なのは：ティアナも頑張ったんだけど。

大はやて：残念ながら、聞いてたみたいの結果になってもうた。

大はやて：陸士部隊ではマリアージュに対応できへんかったのが敗因や。

大フェイト：イクスも診断で、もう目覚めないかもって言われてたんだよ。

大フェイト：良かった、目が覚めるんだ。

アコノ：自由に会話が出来るわけでも、自由に動けるようになったわけでも無いけれど。

エヴァ：イクスに融合騎的な機能も組み込まれているのは確認済みだ。融合は無理だがな。

エヴァ：マリアージュとリンクして制御する部分に、似た部分があった。

エヴァ：それを利用して、交流用の端末を生成しているような感じだな。

大なのは：普通に目覚めるのは無理なの？

エヴァ：こっちのイクスを調べた限りでは、という条件だが。

エヴァ：今以上に生命活動のレベルを上げると、マリアージュの生成機能も稼働するようだ。

エヴァ：影響をささずに切り離すのは、なかなか難しくてな。

大はやて：難易度は、どの程度や？

エヴァ：はつきり言えばリインフォース、そっちのアインスを構造情報無しで治療するくらいだ。

エヴァ：救いは、時間の制限がとても緩い事くらいか。

エヴァ：既に1000年以上生きているんだ。10年や100年で死ぬ事は無いだろう。

大なのは：無限書庫は？ ユーノくに頼めば何か見付かるかも。

アコノ：こちらの無限書庫は調査済み。構造に関する情報は見付かっていない。

大フェイト：こっちにはあるかもしれないよ。

エヴァ：その可能性は否定しない。だが、こっちとそっちで構造が

異なる可能性もある。

大はやて：やってみるまで解らんってことや。

大はやて：片手間でええから探してもらおうよう、頼んでみよか。

大はやて：なのはちやんが。

大なのは：え!?

大フエイト：夫婦なんだから、内密に伝えるのは私達より簡単だよ。

エヴァ：相変わらずのワーカホリックで、夫婦らしくない生活をしているのか？

大なのは：え？ 違うよ？ 違うからね？

アコノ：それなら、夫婦らしく愛のある生活をしている？

アコノ：エロ同人みたいに。

大なのは：ちよつと、それは！

大はやて：2言目で色々と台無しや。

エヴァ：意外に通じるものだな。人妻補正なのか、ユーノが仕込んだのか……

大なのは：違▽B∩→▽⇔γH

大はやて：なんや、エラーか!?

エヴァ：思考が乱れすぎて、誤認識しているだけだ。

エヴァ：記号も処理できるようにしてあるから、その影響だろうな。？U?とかも書けるぞ。

大なのは：》≡と…γH

大はやて：おー、まだ暴走しとる。

アコノ：時間の流れが違うと言つても、新婚の時期は終わってるはず。なのに、乙女？

エヴァ：免疫の無さは筋金入りか。

エヴァ：フエイトも沈黙しているし。

エヴァ：流石はやて、ネタ枠担当で追従を許さないだけある。

大はやて：(・D) r z

アコノ：弄られて喜んでる芸人に見える。

大はやて：間違えた。こつちやorz

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2013年

◆◆ 2013年（新暦74年）09月 ◆◆

「で、新型の装備……の前に、山の方に居たアレは何だ」

お姉様は再びアルクに呼ばれて、別荘チタマにあるアルクの官邸へ。

今日のお題は、新型装備。

だけどお姉様は来る際、遠くに見えたナニカが気になる模様。

「山の……ああ、あの子達ね。」

キャロの飛竜を真似て作ってみたんだけど、いい出来でしょう？」
「確かに単純性能だけならドラコ並みに見えたが、そっちは似た者フリートがいるからまだいいんだ。

もう1頭……数え方は頭でいいのか？ まあいい、もう1頭いたアレは何処から出てきた。

変態ロリコンと正面から戦っても勝率が見えそうなレベルに見えたぞ」

「神龍の方？ 心配しなくても、似たようなナマモノがいるわよ。」

原作のシグナムが蒐集しようとしていた相手に、似たようなのがいたでしょう？ 地球から個人で転移出来る範囲にいるはずという事で、ちゃんと探して、見付けてあるわ。

取りあえず、これが2人のスペック表よ」

「要らん。と言うか、数え方は人なのか」

スペックを確認すると……うん、飛竜の方はドラコを少し肉体派にした感じで概ね互角。但しドラコやフリードリヒと違って、手がある。ゲームとかで一般的なドラゴンに近いから、別の呼び方の方がいいのかもしれない。

神龍は魔法関係に全振りで、変態ロリコンに10回挑めば1回くらいは勝てるかもしれない感じ。

「名前だけれど、飛竜はバハムート、神龍はカドゥルーよ。」

共に女性で、王になってもらってるわ。ハイエルフ達のような立場ね」

「……こいつらも増やすのか」

「もちろん。人型の種ほどは増やさないけど、戦力として当てに出来る数は揃えるわ。」

転移方法が開発された時に、お母様に頼らなくとも別荘の2惑星を防衛出来る戦力を揃える事が目標だもの」

「不要だと思っただがなあ。」

そもそも、魂はどうした。人のものは適合出来そうにないし、他の生き物のもものでは理性が欠けるだろうに」

「これは私達の自己満足で、材料が無いなら具現化で作ればいいじゃない。」

見せ札として使う事も考慮しているから、必要だと思っただら遠慮なく使ってね?」

「無茶しやがって……使う場面が思い付かんぞ」

お姉様がため息をついてると、ドアがノックされた。

「アルク様、お茶をお持ちしました」

「ありがとう。入って」

「はい」

そして、入ってきたのは。

「……猫耳?」

「まだ直接眷属の女性2人しか作ってなくて、それも調整中だけどね」
「初めまして。マレットと申します」

頭を下げ、お茶を置いてくその姿と声は。

某ビオレさんそっくり。

「2人……女性2人か。もう1人はレオなのか」

「シエリー様ですか?」

モデルは確かにレオという方だと聞いていますが」

「はあ……やってしまったのか。犬耳も作っているとかなわんだろうな?」

「勿論言うわよ。」

「ミルヒちゃんとか、可愛いし」

「確定なのか。これ以上作っていないだろうな？」

「えーと、他は……そうそう、狼がもうすぐ目処が付くわ」

「狼？ 犬耳とは別にか？」

「ええ、狼よ。」

「見てもらった方が早いかしらね。おいで、マテラス」

「アルクの転送魔法で呼ばれたのは……うん、確かに狼。」

「アルフやザフィーラの狼形態とほぼ同じ大きさで、純白の毛並。」

「当然のごとく、魔力も高い。」

「お初にお目にかかります、創造主様」

「伏せに近い感じで頭を下げてるし、女性の声だし。」

「静かに佇む姿には、気品すら感じられる。」

「……あれか。狼が大神で天照とかいう発想なんだな。」

「というか、私の事は名前と呼べ。創造主なんてガラじゃない」

「それではエヴァ様、と」

「そんな話をしつつも、思わずといった感じで狼を撫でてるお姉様。」

「マテラス
狼も嬉しそうに目を細めてる。」

「ええ、そうよ。」

「太陽神の由来に負けない能力に仕上げる用途は付いてるけれど、もう少し調整が必要ね。」

「相棒のフェンリルはその後に取り掛かる予定よ」

「そっちは、そのまま……というか、マテラスの方が特殊なのか？」

「バハムートは有名過ぎるからいいとして、カドゥルーの由来は？」

「インド神話、蛇神ナーガの母よ。発音の揺らぎとかもあるけど、一応はそのまま使ってるわ。」

「マテラスはあれよ。天照の名は別件で使おうと思って」

「増やすから母なのか……」

「ここに來てから何度目か数える気にもならない、お姉様のため息を見なかった事にして。」

「というか、新しい眷属達の話が既に別件だから。」

「マレット マテラス
猫耳娘と狼が退室し、お姉様とアルクの2人だけになったところ」

で、本来のお話を開始。

「というわけで、お母様に来てもらった、本来の用事なんだけど。

私達で、色々と研究してた成果が出来たから、見てもらおうと思つて」

「あいつらだけで、お腹イッパイなんだが」

「大丈夫、貰った原作情報も考慮した、デバイス発展形の様なものだから。」

具体的には、対AMFや対EC、要するに魔法阻害系技術対策も考慮した装備って言つていいかしらね」

具体的には、中止のお知らせが届いてるForceで使つてたAEC装備のような。

取り敢えずとして、結界や戦闘機人システムを参考にした外部干渉に強い構造、構成によつては質量兵器やカートリッジ代わりの小型駆動炉等も採用する。

「ちよつと待て、機動スーツでも作るつもりか？

それに、質量兵器は色々面倒だぞ」

「そこまで大きなものじゃないけど、近いものはあるわね。

だけど、Forceだと魔法で氷塊を作つて物理攻撃をしようとするし、鉄球を撃ち出すヴィータもいるんだから、魔法で砲弾を作つて撃つたつていいじゃない。

少なくとも、AMFとかで色々妨害されてる時に使える手段なら」

「言い訳だなあ……」

「使わずに済むのが理想、見せ札や警告射撃レベルで済めば及第点。どこかで実験はしたいけど、本格的に実戦投入するには色々と未完成ではあるわね。

それでも私達は、お母様と共に歩みたいの。傘の下で安穩としてるなんて、我慢出来ないのよ」

「全く……私達の安住の地を維持する事だつて、簡単な事ではないだろうに」

「ええ、全くその通りよ。

だから、安住の地であり続ける為に、外敵が現れた時に慌てなくて

も済む力を望んでいるの。

ついでにこの装備は、日常でも危険な作業をする場合なんかに役に立つしね」

明らかに、日常で使うにはオーバースペックだけど。特に対AMFの部分とか。

ただ、絶対という事は、あり得ない。

別荘の世界が、絶対に侵入出来ないとは言い切れない。

要するに侵入方法が見付かった時、お姉様や私達だけで対処する事に、アルクや従者達が異議を唱えてるといふ事。

「……何度も言っている気がするが、そこまで頑張る必要は無いんだぞ」

「あら。私達の存在意義で、自分達の安全を守るためでもあるのに。

特に本星の従者は戦争をした頃から居るんだし、チタマの従者も素材は当時のものでしょ？ 力無き者が虐げられる現実を知っていれば、弱者でいる事に何も思わないわけがないじゃない」

「解った解った。

で、どんなのを作ったんだ？」

お姉様が意見を受け入れた………というか、説得を諦めた。

うん、この辺までがいつものやり取り。ある意味テンプレート。

さて、本番いっくよー。

「そうね、見てもらった方が早いわ。

隣の部屋に用意してあるから、行きましょ」

場所も変わって。

実物を目の当たりにした、お姉様の表情も変わった。

ぽかーんとしてる。

「えーと……」

「これが全力稼働する時の姿で、製造時に物理的な作り込みを行うために必要な大きさを確保するための形でもあるわ。

変形としては、待機状態がブレスレットとかのアクセサリー、移動や魔力の補助だけの限定起動状態と、この姿の完全起動状態の3つが基本かしらね。

設定する機能や構造によっては、限定起動状態を無くしたり、変形自体をオミットしたりする場合もあると思うけど」

「……それは、まあ、いいとして。」

名前は何？」

「インフイニツト・シェル^{infinites shell}。駆動炉が稼働する限り、甲殻や砲弾を生成し続けるという事に因んだ名前よ。」

まあ、少しは某インフイニツト・ス「アウト」……言わせてもらってもいいじゃない」

いや、最初に目に入る位置に置いてあったのは、まさにアレと言っている形だし。」

下半身が重厚というかまともに足を動かせるのか心配になるレベルで、翼に見立てたような巨大肩部装甲がある辺りが特に。」

「これは一応、機装という区分で呼んでるわ。どちらかと言えば機能や出力よりも機動力を重視した、航空機のような運用を目的にしたものよ。」

例えばこれはカシス用ハイコピットに組んでる近接戦用のものだけど、魔法阻害を含むあらゆる状況下で防御力と機動力を維持や強化する事を主目的にしてるわ。それなりに物理攻撃も出来るけど」

方向性で言えば、死なない事、最悪でも檻を食い破って逃げれる事。その為の力として、敵を倒す能力も持っている感じ。」

「……で、その隣の、戦艦を切り貼りしたようなのは？」

「あれ、艦隊娘コレクティブは知らない？」

戦艦とか駆逐艦とかを擬人化したゲームなんだけど」

「やっぱりアレなのか……軍艦、なのか」

でも、艦装とは呼ばない。」

装備するのは、人だから。」

「軍艦を装備するから、艦装と呼んでるの。機動力を犠牲にして、大出力で大規模な機能を組む事を想定してるわ。」

これの簡易版として、生存と移動に必要な機能と、人が運べる程度までの小型化に成功した駆動炉をパッケージにして、リュックやランドセルの様に背負えるようなものも計画中。日常用で、変形機能もオ

ミットするのがこれね。

大出力のものは……色々ね。治療設備丸ごととか、大型の砲とか。46センチ砲も理論上ではいけるわ」

「日常用や治療設備はともかく、発射の衝撃だけで人を殺せるものを装備させるな。」

「というか、サイズがオカシイだろう」

「実際に1.5トンの砲弾3発を40キロ以上飛ばせるようにするつもりだけど、少し時間差で発射して、数秒後に本来の砲弾サイズに戻すから大丈夫よ。」

「いくらなんでも、2000トン以上ある本物の砲塔を背負わせるわけにもいかないでしょ?」

「どつちにしても、普通に無理があるからな。」

「で、これは誰のなんだ?」

「ハイエルフラファイー用よ。砲弾に組み込む対シールドの術式とか炸裂術式も作ってるし、35.6センチ連装砲の試射も成功してるわ。完全起動状態だと速度を犠牲にしているから、使うとすれば砲台役ね。」

「構想としては、私のと連携して別荘から部下を直接転送するポート役も考えてるわ」

「どこかに攻め込むつもりか?」

「お母様は外で活動してるのだし、何かあつたら駆けつけたいでしょ?」

「そんな事態は、無いと思うんだがなあ……」

「お姉様は困った顔をしてるけど、あつてほしくない事態に備えるのが、軍隊の役目。」

「別荘チタマを統率し、技術開発やらに関しては別荘本星の従者達も巻き込んでるアルク。」

「屯田上等、むしろ全力で屯田兵化を希望する別荘の住人達。混ざったらこうなった。」

「杞憂で済んで良かったと言えるから、無い方がいいのよ。」

「次の説明に進んでもいい?」

「銀色の輪もそうなのか?」

他の2個とは随分と毛色が違うが」

「ええ。あくまでも魔法の行使を重視して、主に妨害対策の機能を詰め込んでるわ。」

魔装って枠の名前も付けてあるし、これはハイエルフケイナ用なんだけど……」

「何か問題でもあるのか？」

「ぶっちゃけて言えば、対AMFや対ECの防護機構と、魔法の強化機構の検証用に近いのよ。駆動炉もオミットしてるし。」

広域魔法を撃ち込むためにAMFを押し返して魔法を使えるエリアを作ったりする能力はあるけど、敵味方を問わずに割と広い範囲で魔法が使えるようになるから、使い勝手が微妙なのよね。

殆どのインフィニット・シエルに対AMFとかの機能を持たせるから、AMFの無効化そのものが利点にならない場合もあるし」

厳密には、広域に対AMF結界を展開する為に、切頂八面体で空間充填的な仕切りいっぱいの結界を作る点が特殊能力。艦装や機装は自分が魔法を使う為の機能として装備してるから、仕切りが無く狭い結界を想定してる。

魔力の強化は、超強化ミッドチルダ式デバイスみたいなもの。艦装や機装でもサイズと出力にものを言わせれば実現可能だけど、他の機能が犠牲になる。それに、そこまでの強化が必要なのかという疑問を解決する必要がある。

「単純な魔法の補助なら、普通のデバイスやカートリッジでもいいわけだしな。」

「ここまで大掛かりな物を作る利点が薄いわけか」

「リュックタイプの艦装の方が、作りやすい上に使用者が限定されにくいから。」

「そんなわけで、魔装は少なくなると思うわ」

「ついでに興味や浪漫に走ったのは内緒。」

「その辺は、実用性重視なのか。」

「作っているのはこの3種でいいんだな？」

「厳密に分類するなら、元々AMFの影響が薄い戦闘機人用の派生品

があるわ。具体的には、クアットロさん用の、機装をベースに広域探知と探知妨害の補助を重視した機体ね。

対AMFや対ECの情報蓄積する為に、協力してもらってるのよ」

「あいつまで関わっているのか……スカリエツティもか？」

「当然よ。大艦巨砲は男のロマンだとか言いながら、嬉しそうに砲撃部分を開発してくれたわ。」

AMF環境下での移動能力は、戦闘機人の飛行システムを参考にしているし」

「なるほどな。」

で、ここままでやっているんだ。お前自身のもものも作っているんだろう？」

お姉様の、じと目！

アルクは、ちよつと怯んだ。

「え、えーと……まだ構想しか無い上に、付ける機能も研究中と言うか……」

「今更怒りはせんから、言ってみろ」

「私も一応は別荘と他の世界を繋げられるから、それを安定させて、お母様やチャチャさん達の手を煩わせずに眷属達を移動させられたらなあと……」

「……それで、転送時の座標特定でハイエルフのを使いたいのか。」

内容的に、艦装で空母でも名乗るつもりか？」

「駆動炉とか無くてよさそうだし、内容が特殊すぎるし、神装とか宮比とか呼ぼうかなあつて……」

ダメ？」

アルクの、不安気な上目遣い！

あざとい。実にあざとい。

「神で宮比……確かアメノウズメ、だったか。」

まさか、私のが天照なのか？」

「内容は全く決まってるから、名前の予約だけよ。」

……本当よ？」

「全く……やるなとまでは言わんが、やり過ぎだ。

もうちよつと自重してくれ」

「何かあつてから後悔したくないから、全力なのよ」

「……そうか」

自重に関しては、お姉様も人の事は言えないし？

流石親子、こんなところまでよく似てる。

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2014年05月

◆◆ 2014年（新暦75年）05月 ◆◆

「何というか……このタイミングで来るか？」

お姉様は珍しく、教導の生徒達を迎えるためにクラウディアを訪れる。

そして、目的の人物が現れた時に言ったのが、これ。

「お久しぶりです。ギンガ・ナカジマ、着任します」

「同じく、ティアナ・ランスターです」

「同じく、スバル・ナカジマです」

「同じく、エリオ・モンディアルです」

「ルーテシア・アルピーノと、召喚獣のガリユードです」

この5人+1キャロが含まれるとなると、無視するわけにもいかない。今年は改革10年目。教導の生徒達も記念式典の警備に使って成果をアピールするという事で、研究者や指導者を含まない若手前線メンバーだけになってる。

どうやら、5人はそこにうまく割り込んだらしい。

ちなみにクイント・ナカジマは、あまり歓迎してない。警備任務の際に娘や娘の様な存在に対して「非情な命令」を出したくないかららしい。

「何か問題がありますでしょうか？」

「ああ、いや、こつちの話だ。」

先に言っておくが、特別扱いはせん。それと、生活面は親衛隊の管轄になるから、リンディの指示に従えよ」

「了解です」

そんな感じで、今年の若い生徒達はアルフとザファイラに連れられて案内の時間。

「エヴァさんは、今年に何かあると思ってるのでしょうか？」

その姿が見えなくなった後で、一緒に残ってたリンデイ・ハラオウンが真面目な顔で問いかけてきた。

実際、Strikersの年に機動6課関係の主要メンバーが多く集まるってどういう事だっばよ？

高町なのは日本で学生をしているし、はやととフェイトも同様。守護騎士達がはやとから離れるはずも無く、キャロル・ルシエはすっかりテスタロッサ家のマスコットになってて、後ろ盾や後見人の内、リンデイ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、カリム・グラシアの3人がいる。

敵役を見ても、ジェイル・スカリエツティと戦闘機人12人が勢揃いで、アギトもいる。

「これで無邪気に何も無いと思えるなら、いつでも気楽に暮らせるのだろうな」

「全くね。」

だけど、直接的な原因は全て排除済みでしょう？ レリックも研究用に集めてしまっているし、敵役は全員が対処済み。

エヴァさんが敵に回らない限り、あんな騒動は起きないと思うのだけれど」

確かに腐れ脳味噌は排除済みだし、レジアス・ゲイズは元気に犯罪者相手の大鉦を振るってる。

ゼスト・グランガイツは第一線からは引退気味だけど、英雄として祭り上げられたまま後進の指導に当たってる。

健やかに成長中と思ってたルーテシア・アルピーノは、何故かこっちに来た。

地下に潜った連中が集まるには、求心力やカリスマを持つ人物が足りない。

お姉様の心配は、杞憂だろう（フラグ）。

「……絶対に、何かあるな」
なんでー。

◆◆ 2014年（新暦75年）06月 ◆◆

もうすぐ、梅雨の季節になる、とある日曜日。
でも、今日はいいい天気。

月村家の庭には様々な花が咲き、多くの関係者と料理が並んでる。
「やけに人が多いが、要するに親睦会的な何かだ。」

この家の住人は魔法を知っているが、あくまでもこの地の協力者であって、管理局との直接的な関係は無いからな。騒ぎ過ぎて迷惑をかけるようなことはするなよ」

そんなお姉様の言葉が始まる、お花見。紫陽花なんかが見頃だけど、まあ、それは口実的な。

お姉様の言葉通り、招待客を含めた参加者はとても多い。

例えば。

「わりいな、俺達まで呼んでもらっちゃまって」

「訓練やらシフトやらで、全員が集まる時間は意外に短いだろう？」

少々うるさいかもしれないが、家族とゆっくり過ごせる場面くらいはあってもいい」

ナカジマ家全員 with 元居候のティアナ・ランスター、な集団が居たり。

「ゲーキは自分達で配らなくていいのかい？」

「タイミングはお任せだし、作るのを手伝ったなのはの方が適任だから。」

私は運んだだけだし……うう、どうして上手に作ろうとするとダメになるんだろ……」

「シヤマルさんも、レシピに無い事をしようとするとか何故か失敗するけどね。」

あれだけ注意して練習しても駄目なのは、どうしてだろうね？」
「ううう……」

相変わらず生暖かい感じの、成瀬カイゼと高町美由希がいたり。

この2人は、大学生と社会人になっても全然変わってない。

「今まで招待された事など無かったのだが。」

やはり君の手回しだったか」

「たまには故郷に戻るのもいいだろう？」

「こつちも色々な伝手が出来ているし、お互い損はしない話だと思っ
が」

「確かにそうなのだがね」

イギリス女王の誕生日パレードに招待という名目で、地球に戻った
ギル・グレアムがいたり。

日英の移動は魔法ですぐだし、招待状も政府関係組織から送られた
本物。もちろん、イギリスの組織にお姉様が入れ知恵した結果だった
りはするけど、局員上層部で英雄的人物との伝手の強化というエサに
は抗えなかった模様。

そして、ギル・グレアムがいるという事は。

「このまま嫁に（むしやむしや）お持ち帰りすれば（ぱくぱく）」

「ああ、それはいい考えね」

「何馬鹿な事を言ってるんですか。他の人の迷惑になるので、食べる
のも自重してください」

「家庭に1人（もぐもぐ）料理上手が（はぐ）んーんーんーんー!？」

「ちよ、ロツテ!？」

「お仕置きです」

リニスが握る寿司をがつつきながら、よからぬ相談を始めてたりー
ゼ姉妹もいる。

たっぷりわさびでリーゼロツテが撃沈してるのは、食べ過ぎに対す
る嫌がらせだけじゃない。

「チャーハン作るよー！」

「出来たよー！」

その横では黒羽早苗が中華鍋を振り、アリシアが配ってたりする。

直前の会話が聞こえてたとはいえ、悶絶してるリーゼロツテを気に
してないあたり、随分黒くなったというか馴染んだというか。

「揚げ餅とかコロツケとかは、動きに派手さが無いなあ。」

「選択を失敗したやろか？」

「揚げ物に派手さは要らないですよっ！」

「確かに、調理中のシャマルに芸をさせると、どつちも失敗しそうや

し」

「そういう意味じゃないですっ!」

はやととシャマルが、天然でボケとツツコミの応酬をしてたり。

「話は聞いてたけど、管理世界ってやっぱり就業年齢低すぎよね。」

ナカジマな娘さんは私達より年下だし、妹分みたいに思ってたんだけど」

「うん、そうだね。」

なのはちゃんは小学校の間から働きそうだったし、ユ一ノくんは司書長になつてたかな」

「私はちゃんと大学に行く予定なの!」

「でも、まだ学部で迷ってるんだよね?」

「うう……そうなんだけど、フエイトちゃんの意地悪……」

今のところ、固まって喋ってる原作娘達がいたり。

既に高校3年生だし、そろそろ真面目に将来について考えてもいい頃だけだ。

特に、大学に行くかどうか、行くならどんな学部に行くかを。

「ママ、ごはん!」

「ごはん!」

「はいはい、ちよつと待つてね!」

2人の3歳児カレル&リエラにたかられてるエイミイ・ハラオウンがいて。

「スープとごはんですよ!」

「熱いからな、気を付けて食べるんだぞ?」

「駄目よ、もう少し冷ましてあげないと」

それを構おうとするルーナとアギトに加えて、真鶴亜美もいる。もちろん、会場が月村家でゲンヤ・ナカジマがいるという事は。

「相変わらず、俺達は場違い感が半端ないよな……」

「だよね……」

隅の方で大人しくしてる、馬場鹿乃と上羽天牙もいるし。

「いくらなんでも、あの翼はコスプレって言ってるのいいのか……?」

「しかも、物凄い値段だったじゃない。」

誰が何で作ったのよあんなの」

「作ったのは別荘の人達で、コスプレと言い張ってましたよ。

しかも、売れちゃったらしいんですね……恐ろしい事に」

長宗我部千晴と夜月ツバサとセツナが、最近公開された写真について話をしたりもする。

特に秘密にしていない以前に広告を意図したサイトだから、知られるのは別に不思議じゃない。

でも、セツナはもうちよつと出るのを嫌がると思ってた。

翼を見られた時の言い訳に良いという売り文句にあっさり釣られたセツナは、きつとチョロイン。

「それにしても、平和ですね。」

イクスも来れたら良かったのですが」

「本体が別荘にあると、別荘以外での維持が大変だそうですから。」

この世界であれば危険は無いと思うのですが、手間を掛けさせる事への忌避感が消えないようなのです。どう説得すれば良いのでしょうか？」

「ゆつくり、時間をかけるしかありませんよ。」

念話を応用した会話装置も出来たのですから、後は誠意をもって話し、互いの理解を深めるしかないでしょう」

「はい。頑張ります。」

でも、イクス様に姉と慕われているのですから、ヴィヴィオ様も説得して下さいもいいのではありませんか？」

「私よりイクスの方が先輩なのですが……どうしてこうなってしまったのでしょうか。」

平和のために行動したと言われても、私も周囲に流されていたと思うのですが」

ヴィヴィオとカリム・グラシアが、物理的と気分的な問題で参加していないイクスヴェリアについて話してる。

その隣を見ると。

「なんだかんだ言いつつ、ロストログアやらの研究ならぶっちぎりだねえ」

「おや、そうかね？」

「そうですよ。機械式AMFの量産化で重要施設の魔法防御能力が上がった代わりに、質量兵器が実質的に解禁になっちゃいましたし」
「質量兵器に関しては、今でも禁止のままにするという選択肢は残されているよ。」

それに、ミッド式やベルカ式のデバイスに関しては、君達の方が詳しいだろう」

「そりゃまあ、私らはそれが専門だし」

「でも、熱心な後輩に追い付かれないか、冷や冷やしてるんですよ……」

あの子は本局の技術部にいるから、メーカーや研究所からの情報が早いですし」

シルフィ・カルマン、ジェイル・スカリエッティ、マリエル・アテナの技術系3人が駄弁つてたり。

ある意味で、混ぜるな危険。

ちなみに本局の後輩ことシャリオ・フィンノーは、マリエル・アテナが本局に戻った時には補佐的な仕事をしてる。そして、この3人やプレシアと同じく、性根は技術オタク。

うん、お姉様の同類。はつきりわかんかね。

「子供って大変でしょ?」

「全くだ。」

だが、以前の様に次元航行部隊にいるわけじゃないから、顔も覚えてもらえないような状況にはならないで済む。その点は喜んでいい事だとエヴァンジュには言われているんだが」

「確かにそういう話は、聞いた事があるわ。」

また来てねおじさんって子供が言っちゃうのは、まだ平和な方らしいし」

「それ程か……」

子持ち繋がり、クロノ・ハラオウンとクイント・ナカジマが子供を見ながら話をしてたり。

また来てねという事は、顔を覚えていて歓迎してるのだから、まだ平和と言える。

来るなど拒否されるとか、原作クロノ・ハラウンみたいに覚えてもらえないとかよりは。

「キャラちゃん、はい、これ」

「ありがとう、エリオくん」

「どう見ても最高評議会の護衛役つてより、その家族のお世話係よね？」

「そ、そりゃあ、まあ……」

「はいはい、会いたい一心でここまでやったんだし、行動力だけは認めるわよ。」

でも、立場つてのは忘れない方がいいんじゃない？」

「えっと……はい」

エリオ・モンディアルがキャラ・ル・ルシエの世話を焼き、ルーテシア・アルピーノに突っ込まれる姿もある。

10歳相当のお子様軍団は原作キャラらしく、年相応の行動力や態度じゃないらしい。

「……何というか、平和だな」

「うん、平和」

そんな様子を見ながら嬉しそうなお姉様と、恋人繋ぎで幸せそうにしてる主。

これも、お姉様が目指した風景ではあるはず。

身分と性別を気にしなければ、きつと、お姉様の望みは叶ってる。

◆◆ 2014年（新暦75年）11月 ◆◆

「やれやれ、予想以上の反応と言うか……ある意味で大物が釣れたと言わべきか」

「どうも、そうらしい」

12月に行われる予定の、10周年記念式典。

当然、お姉様も呼ばれてる。

当然の様に、お姉様を狙うネズミも現れる。ここまでは予想通り。ただ、規模と内容と首謀者が、予想を超えてた。

と言う流れで、クロノ・ハラオウンがお姉様と話をしに来てる。

「まさか、ルネッサとはなあ……ここで出るのか」

「知っているのか？」

「懐かしの、原作関係者だ。」

StrikerSまでは見せたな？ あれの後日談的なドラマC

D……音声だけで作られた話があるんだが、その黒幕役だ」

「危険人物なのか？」

「一応そうなるだろうが、昔捕らえた 트레이ディアに育てられた時期があるとか、その理想をどーのとか、典型的な、道を踏み間違えた優秀な奴といった感じだったはずだ。」

確か、カイゼが 트레이ディア絡みで介入した時、オルセアで保護された中にいたとかいう話を聞いた気はするし、この世界でも同じ考え方は知らんぞ」

あの時は、成瀬カイゼから結果報告の資料を受け取る時に、口頭で伝えられたはず。

最終的には時空管理局でも解放戦線でもない、現地住民による自治組織が安定して機能し始めたところまでは確認してる。ルネッサ・マグナスはその頃設立された孤児院という名の養成所で発見したわけだし。

蝙蝠と揶揄されながらも時空管理局と解放戦線の両方から支援と協力を引き出し、急速に安定させたのは、成瀬カイゼもやり過ぎと言うかなんというか。

本人は意外に何とかなるもんだねとか、涼しい顔をして言っただけど。

「反時空管理局の様な教育をされた可能性はどうだろう。」

保護された後の教育に、時空管理局がどの程度関与しているのかによるのだろうか」

「可能性は低いだろう。私達が存在を確認したのは蝙蝠的組織の人材育成機関だが、敵だろうと利益を引き出すのが最上という教育方針だそうだ。」

少なくとも、考えなしの破壊行動は是とならんらしい」

「つまり、襲撃から利を得る事が可能と判断している可能性が高いという事か。」

ところで、トレディアという人物の理想とは？ 今でもそれを追っている可能性は考慮すべきだろうか」

「原作のルネッサの言葉だと確か、管理世界の平和は人が多いだけで空っぽ、人は争って傷付けあうばかり、戦いの意味や空しさを知ってほしい……だったか？」

その手段として原作のルネッサが使おうとしていたのが、トレディアが見付けたマリアージュ、つまりはイクスだ」

「……そんな繋がりか。」

だが、現時点で把握出来ている襲撃の規模は、警告ですら無い。最早戦争だ」

「資料を見る限り、その様だな」

クロノ・ハラオウンが出してきた資料は、無限書庫の情報と比べても、間違つてるとは言えないレベル。

A M Fを装備するガジェット・ドローン（仮称）が、1万程度。

次元震を起こせるレベルのロストロギア、複数。

これらを多数の次元航行艦に乗せて、ミッドチルダを強襲。

世界の住人を人質に取って、交渉する……らしい。

この計画のほぼ中心に、ルネッサ・マグナスの影が見える。

「少なくとも、地球を襲わないという事は、君達の抹殺を目標にしているわけではないらしい。」

それに、君達との交渉でも無いのだろうか」

「わざわざ警戒が厳しくなるミッドでの式典を狙うくらいだから、そうなるだろうな。」

標的が私達なら地球を奇襲すべきだし、地球全体を人質に取る事も選択に入るだろう。」

そうなる問題は強襲方法と要求内容だが、この2点に関する情報は無しか」

「探ってはいるんだが、確定出来ていない。」

だが、可能性としては、君達の捕獲もしくは破壊を目指していると

「いう話もあるらしい。明らかに手段と矛盾しているが」

「つまりは力に魅せられたルネッサが、大衆の面前で私達をどうにかするのが目的か……?」

だが、本当にミッドチルダを強襲出来る程の力があるなら、私を標的にする理由がパフォーマンス以外に思い付かん。

手段を問わないなら、襲撃自体はそこまで難しくないと思うが」

「……いや、君達の間でそうでも、一般的には違うだろう」

「そうか?」

格納領域に特化したデバイスがあれば、個人でもガジェットの数百や数百を簡単に運べるんだ。次元世界間の移動が多い組織が関われば、大して難しくも無い。

式典に向けて各地から集まる客を運ぶ旅客船や輸送船も、次元航行が可能な船だろうに」

「それはそうだが……」

「事実上の戦争を始める構えの相手だ。それに、以前の襲撃時は地上部隊の連中が内通していたんだから、民間企業や各地の連中が相手側に協力しないと考える方がどうかしている。」

そもそも、統治や治安組織、多くの企業もグルでなければ、作る事も隠す事も不可能な数だ」

「やはり、その結論しかないのか。」

無限書庫にも手段や理由に関連する情報が入ってこないのは、収集の範囲外だからだろうか?」

可能性1。クロノ・ハラオウンも考えてる、収集範囲外で活動されてる。

無限書庫もある程度公開されてるから、情報がある世界と無い世界を見分けるのは難しくない。

可能性2。書面に残してない。

音声での連絡や電子媒体であれば、無限書庫の収集対象から外れる。これも、無限書庫の特性を調査すれば、さほど苦労せずに判明する事。

可能性3。襲撃やガジェット・ドローン（仮称）の準備自体がブラ

フ。

生産や計画に関する情報の一部しか見付かってない以上、これも無視出来ない程度には可能性がある。

「いずれにせよ、十分な警戒が必要になる。」

どうせスカリエツティ達も呼ばれるだろうし、こちらでも戦力を整えてから乗り込むさ」

「周囲への被害は程々にしてくれ」

「善処はする。だが、相手の行動次第だから、保証はしかねる」

蛇足：或いはこんな未来も／StrikerSだった
何か2014年12月

◆◆ 2014年（新暦75年）12月A ◆◆

やってきましたミッドチルダ。

空港に到着したお姉様達を歓迎する式典的なイベントやらの都合で、記念式典自体は明日。

なので、お姉様達はクラナガンのホテルに宿泊。

当然の様子にお姉様やヴィヴィオはVIP用のスイートルームで、護衛的な扱いのセツナや戦闘機人達も同じ階の（位置的に高級以外あり得ない）部屋を割り当てられてる。

警備や護衛として直近護衛部隊に加え、時空管理局や聖王教会から派遣された人も常駐してる。そういう人用の控室もちゃんとある辺り、ホテルの用途が解りやすい。

「しかし、襲撃の情報があると知っているのに、こういう人物を護衛に寄越すか？」

「あまり感心出来ませんよ」

そして、お姉様とヴィヴィオ、ついでに変態を除く最高評議会メンバーが揃って渋い顔をしてる前には、2人の少女が。

まだ名乗る前だけど、カリム・グラシアが護衛の中に会わせたい人がいると連れて来た。

幼いけど、どこかで見た面影もある。

「前線に立たせるためではありません。有事の際に近くで緊張を解くためという名目の、皆さんが無茶をしないための枷ですから」

「それは、正直に言ってしまった方がいいのか？」

「ええ、隠しても無駄です。それに、外見年齢だけを根拠に立案された、問題と抜け穴だらけの名目に拘る必要はありませんから。

2人とも、自己紹介を」

「はい。私は雷帝ダールグリユンの血統、ヴィクトーリアです」

「ジークリンデ・エレミア、です」

そんなわけで、Vividに登場した古代ベルカ関係の人物2名が現れた。

カリム・グラシアは枷と表現したけど、ヴィクトーリア・ダールグリュンは高い魔力ときちんと研鑽した技術を持つし、ジークリンデ・エレミアは制御がまだまだ甘いとはいえ特定条件で恐ろしい爆発力を発揮する。

12歳や11歳と若すぎるだけで、戦力としては下手な局員や騎士より評価出来る辺り、とても拒否し辛い。ミッドチルダでは10歳のエリオ・モンディアルやキャロル・ルシエが最前線で戦っても法的に問題が無い上に、この2人も直近護衛部隊の臨時増員という形で来てるし。

キャロル・ルシエも教導の生徒という体裁でお姉様の下にいる以上は仕方ない。

ついでに、この話を聞いて一番ぶーたれてたのは、地球で留守番になった高町なのはだった。

「そうか。まあ、この顔合わせは私達と言うよりは、オリヴィエとしてのヴィヴィオに合わせる事が目的だろう？

雷帝なんて、いかにも王族関係な血筋だしな」

「私としては、エレミアの方が深い関係にありますよ。」

リッド……ヴィルフリッド・エレミアには、随分と助けられたものです」

「なんだ、そっちが本命なのか。」

変に私と関わりと権力が云々と煩い連中もいるだろうし、お邪魔虫は席を外すぞ」

「いえいえ、そうやって逃げようとししないで下さい。権力亡者達を牽制する為にも、若い2人を連れてきたのですから。」

「それでも、頑張つて騒音を遠ざけているのですよ？」

「……解った」

腰を浮かせてたお姉様が、渋々座りなおしてる。

でも、騒音対策方面を頑張つてるハラオウン親子やカリム・グラシ

ア達は、もうちよつと労つてもいいかもしれない。
連れてきてる人も、あれこれ煩いのはいないわけだし。

◆◆ 2014年（新暦75年）12月B ◆◆

そして迎えた、記念式典当日。

表向きは広い会場が必要だからと説明され、実際は襲撃時の被害を減らす事を目的に用意された、湾岸地区の式典会場へと移動。

うん、ちよつと離れたところに何かで見たような建物が見えるのは、気にしないでおこう。

その後、式典は滞りなく進んでいく。

相変わらずいつでも辞める姿勢を崩さない、お姉様の挨拶とか。賛否両論ではあるけど、旧最高評議会の悪行とお姉様の異常な実力と別荘産食材の人気のおかげで、支持率の方が高いままらしい。どうしても下らないんだらうね。

相変わらず暑苦しい、レジアス・ゲイズの挨拶とか。襲撃予定自体には触れてないけど、今でも世界には多くの危険があると訴えてる。

第一線から身を引くというか、身を引ける程度の根回しが出来たギル・グレアムの挨拶とか。もちろん完全な引退は不可能で、ご意見番的な名誉職に就く予定だけだ。

特別編集のドキュメンタリー映画の上映（一部にお姉様が突っ伏すような内容アリ）があったりとか。

渋いおつちやんの楽団による演奏が……行われてる頃。

海上に、時空管理局でも感付くレベルの魔力反応が現れた。

同時に、強烈なAMFと電磁波ノイズの発生も確認。

「ふん、ようやく動く気になったのか」

お姉様には昨夜のうちに潜伏場所を報告済みだし、お姉様自身も確認済み。ついでに少々仕込みもしてある。

但し敵の情報は、他の人に渡してない。

一応は招待された立場だし、緊急時でもないのに指揮権を発動させるわけにもいかない。情報提供程度なら問題無いとはいえ、干渉と

言つて無駄に騒ぐのに姉様を最高評議会でなくする力は無い阿呆の相手も鬱陶しい。

時空管理局と聖王教会が自分達の手に余ると判断した時点で、試験開始の予定。

「ふう、駄目ね。魔法式も機械式も、通信を寸断されてるわ」

「こちらも同様ですわ」

「海上に、敵勢力と思われる飛行型機械を目視で確認。

本格的に攻めて来るようです」

親衛隊長のリンデイ・ハラオウンと近衛騎士団長のカリム・グラシア。それに、直近護衛部隊長のクイント・ナカジマが困った顔をしてる。

お姉様は、困ったら手を貸すと伝えておいたから、結果的に。

「エヴァンジュ最高評議会議長様。

助力をお願いできますでしょうか？」

こうなる。リンデイ・ハラオウンの言葉使いが硬いのは場所と状況的に仕方ない。

そして、助力第1弾は予定通りに。

「解った。ウーノ、予定通りだ」

「了解しました、マスター。」

クアットロ、空から状況の把握を。セツナさんは随伴と迎撃、トーレも上空で上がってくるゴミを潰しなさい」

「了解ですわ。インファイニットシエル I S 機装、セントリー。発進しますわ」

「機装、トムキャット展開……この濃度のAMFでも、本当に動くんですわ」

「もたもたするな。ホーネット、出るぞ」

インファイニットシエル I S の実戦試験を開始。

今のところは某インファイニット・スげふんげふんに似た形のものでけだけど、まだまだ行くよー。

「セイン、この付近にあるAMF発生装置の搜索と破壊、ある程度目途がつき次第ロストログアの掌握を。」

ドゥーエ、敵後方の攪乱及び工作妨害」

「あいよー。艦装ノーチラス展開、つと。いつてきまーす」

「艦装龍田、装着。攪乱するのはいいけれど、無力化してしまっても構わないのでしょうか?」

「好きにすればいいけれど、その台詞を使う必要があるほど追い詰められる事は許さないわ。」

「デイエチとすずかさんは、そのビルの上から海上のゴミ掃除を。フエイトさんはその護衛を任せます」

「ああ、あそこからならよく見えそうだ。」

「艦装鞍馬展開、行ってくる」

「あ、はい。長門展開、行きます!」

「えっと、フアントム展開……うん、大丈夫みたい」

壁の中からでも色々出来るようにする特殊装備と、固有武装のイノメスカノンを補佐する特殊装備と、魔力の無い人用のフルカスタム装備。

潜水艦や戦艦に似たデザインのこれらも、ついでに試験試験。

「他の者達は、一先ずこの場の防衛を。状況により、追って指示するわ。」

「IS機装ナイトウォッチ展開。通信の回復を試みます」

最後に、ウーノもISを展開。

脚部装備のせいで身長が伸びたような状態になったから、お姉様からは今まで以上に見上げる形になる。

その表情は……

「……………この程度?」

実に、つまらなそう。

少し離れた通信設備は生きてたし、簡単に接続出来たし、それを踏み台に管理局の地上本部やらのやり取りも出来てしまった。ぶっちゃけ、戦闘機人モードでゴリ押しする必要すら無かった。

トーレは、戦闘機人モードで暴れてる。

セツナは、クアットロの近くから中距離火砲支援。ISも問題無く稼働してる。

すずかとデイエチは、快調に砲撃中。特にすずかの魂に響く砲撃音

が、頼もしさを醸し出してる。
そして。

「ウーノ姉、こんなの見付けたんだけど」

地面から出てきたセインが、芋虫の様に縛られた女性を放り出した。

どう見てもルネッサ・マグナスです。

「あら、早かったわね。

だけど、ゴミ掃除がまだ終わっていないわ。ソレはそこに放置すればいいから、役目を続行しなさい」

「あいよー」

啞然としてるルネッサ・マグナスを転がして、セインは再び地中へ。交渉の為に近くにいたと思われるし、声が届くところまでの接近に成功したとも言えるけど。

抜け出す隙が無い感じで捕縛終了済み、しかも、兵器群も遠方でガンガン破壊されてる。

普通に考えれば詰みです本当にお疲れ様でした、とはまだ言えない辺りが、これまた面倒臭い。

「クアットロ、状況は？」

『そーですnee、この近くはともかく、全体的に物量に押されてる感じですよ。連携も何もないけど数だけが多い相手だけに、地上部隊では対処に困ってる感じですねえ。』

母艦的なのは全部で4艦、その連携はドゥーエ姉様が寸断してるみたいですけどお、無力化やロストログア奪取には時間がかかりそうですねえ』

「そう……この位置なら、2つは射程内ね。

すずかさん、指示する地点を目標に、主砲で砲撃を」

『え？ はい、ええと……射程ギリギリなので、当たらないと思います。』

それに、完全な物理攻撃ですし』

「最初は牽制と射弾観測用ですから、普通に考えれば外れる事が前提となります。

仮に命中しても、問題ありません。

人員は少数のテロリストだけですし、使用しているのは軍用艦から転用したものです。個人が行使する武装程度で死者を出すほど腑抜けてはいないでしょう」

いや、その理屈は本来おかしい。

直径41センチで約1トンの砲弾を2発同時に38キロ先までお届けする武装は、どう考えても個人用じゃない。

主用に用意された、46センチ3連装よりは……うん、五十歩百歩としか言いようがない。

『え、ええと……』

「ああ、撃って構わんど。派手な方が、連中も白旗を上げやすいだろう」

『あ、はい。では、いきます！』

お姉様の許可だとあっさりとな得する辺り、さすがもやっぱりチョロインの素質がある？

普段のウーノがお姉様の指揮下にあるように見えないから、どこまで従っていいか迷った面はあるかもしれないけど。

ともあれ、すがーん、という派手な砲撃音と共に、2発の弾が打ち出された。

それは、銃弾と言うにはあまりにも大きく育ちすぎた。

砲身より大きく、重く、そして無節操すぎた。

それは正に、鉄塊だった。

「ベルセルクおつ。というか、直撃コースに乗ってないか？」

風の影響等で外れる可能性が、微レ存。

99%以上の確率で、2発とも命中するけど。

「砲弾に風除け用の術式も刻んであると聞いているが、影響……？」

だから、微粒子レベル。限りなく0に近いナニカ。

というか、超高空に上昇したセツナが長距離ミサイルを乱れ撃ちしてるのは、ツッコミ無し？

「200キロ以上の距離がある相手を撃ってるわけだし、ミサイルはアリだと思っぞ？」

元ネタで考えるとあり得ない数なだけで」

「ゴミを盾にする等の対策は当然してくるでしょう。この距離では命中率も下がりますから、数を揃えるのは必然です。

幸いにも2万メートルの上空まではAMFが届いていないようです。すから、ISもフルパフォーマンスで稼働出来ます」

「保護機能に問題は？」

「あるのであれば、降下しているでしょう。自身がそこまで上昇する必要はありませんから」

ここで豆知識。フェニックス等の長距離空対空ミサイルは、発射後のロケット噴射で高高度へ上昇。そこから滑空して目標を目指す。遠距離の目標到達まで噴射し続けられる程の燃料は、搭載してないし出来ないから。

なので、長距離ミサイルの射程や速度なんて飾り。ついでに、フェニックスの公式な戦果は、無い。

なんという威圧用兵器。

あと、高高度といつても、高度1万キロとか。2万キロまで上がる必要は、全くない。

「んー……まあ、本人は楽しそうだから、いいか。

で、さすがの砲弾が命中したようだが？」

「命中した場所は人がいない場所の様ですから、気に病む必要はありません。

これで何らかの動きがあるでしょう。それが片付けば、騒動も終わりです」

「さて、どう動くかな？」

お姉様とウーノが話してるけど、テロリストの4艦ある母艦の内、まだ援護射撃をしてない2艦の周辺は相変わらず地上部隊が押されてる。そっちはセツナが射撃を開始した頃に姿を消してるセツテとオットーが向かってるから、あとは制圧するだけ。

ロストログアも、今は封印状態。迂闊に発動させるわけにはいかないと思ってるどころか、そう簡単には発動出来ないよう仕組みられてる様にはしか見えない。

中心人物と考えられてる、ルネッサ・マグナスの意図が読めない。
「……あら」

AMFの減衰を確認、同時にガジェット・ドローンの転移を感知。
その数……20ほど。意外に少ない。

「こうなったら、ちゃんとお仕事しないとね?」

ここまで出番のなかったクイント・ナカジマを中心とした護衛チーム、一歩前へ。

当然のように大人組が前に出て、ティアナ・ランスターやヴィクトリア・ダールグリウン達は後詰担当。

でも、避難の為に集められてた観客達から、飛び出す人影が1つ。

「ヴィヴィオ、あれを確保!」

「はいっ!」

というわけで、少女追加入りました!。

「駄目ですよ、個人で対処すべき相手と状況ではありません」

「し、しかし……」

「王であればこそ、組織を軽んじてはいけませんよ。」

「そうでしょうか? クラウス」

「っ!」

もがく幼女というか、幼いアインハルト・ストラトス(仮)を宥めるヴィヴィオ。

ガジェット・ドローンは問題無く抑えられてるし、クラウス・G・S・イングヴァルドの記憶に翻弄される力不足の個人にかき回される方が有害だから、これでいい。

気の技術を持つ直近護衛部隊や戦闘機人達により、転移してきたガジェット・ドローンは比較的短時間で全て沈黙。転移後にAMFを強化したようだけど、無駄だった。

母艦達は、ずずかの砲撃、セツナのミサイル、セツテとオットーの爆撃で中破や大破に。全て積極的な戦闘行動は不可能になってる。既にAMFの濃度が下がってきてるし、航空武装隊も全力で出動してるから、制圧は時間の問題に。

セインがロストロギアの回収に向かっているから、こつちも時間の問

題。

「作戦を終了。セイン以外は戻っていいわ

セインは回収が済み次第帰還しなさい」

『あいよー』

ウーノの指令で、ISの検証の終了をお知らせ。

実に有効に機能する事が確認出来た。

めでたい。

「さてと、後は……事情聴収か。

目的や背後関係を聞き出す必要があるだろうが、どうするリンディ
？」

「そうね……スムーズに話が出来る様子には見えないし、外でやるの
も問題かしらね。

予備情報の時点で名前が出ていたし、重要参考人として逮捕又は保
護する事になるわ」

「……話す事は何もない」

今まで黙ってたルネッサ・マグナスが、リンディ・ハラオウンを睨
んでる。

でも、何故かチラチラとお姉様を見てる。

なーんか、企んでると言うよりは……

「ふむ。では、1つだけ聞いておこう。

お前達が喧嘩を売ったかったのは、管理局か？ それとも私か？」

「最優先の標的は、貴女様個人です」

おんやー？

お姉様を狙った割に、お姉様には敬語的な？

お姉様を狙ったから、時空管理局には話さないの？

つまり……お姉様による断罪又は尋問がお望み？

お姉様が記憶を読む能力を使えるのは、5年前にばらしてるし。

恐らく、お姉様に記憶を渡す事を目的にしてると推測。

本人は有能なはずだし、この際だから……一本釣り推奨。

(……従者化、か?)

暗殺等の手段を取られても安心。

「従属属性の付与を推奨。

現時点でも敵対意思はあまり無い気がするけど、時空管理局とのやりとりと、こうなるぞというアピールとしては有用。

むしろ、ここでやることで強制的に行える事を示せる。

（力の誇示か……）

お姉様は、国を持つ王であり、世界を従える主でもある。

別荘の世界以外でも、空想具現化じみた能力は有効。

事実上、神と呼べるだけの力がある。

特に今回は、お姉様個人と時空管理局員の前で明言された。能力面を別にしても、背景に国を持つという点で、明らかに一般人だと言えない。

隠す事による不利益が、もはや無視出来ない。

有象無象を黙らせるためにも、この機会に動くべき。

（……無闇に箔を付けるのも、どうかと思うがな）

「リンデイ、こいつの身柄は私が貰っていいか？」

「ええと……犯人や犯行組織の手掛りが無くなるのは避けたいのだけれど」

「私の予想が正しければその辺の情報はいくらでも得られるし、お前達がやるよりはスムーズに事が進むだろう。

標的は私らしいしな」

「そうね……国王として狙われたとも言える様だし、捜査協力に問題が無い、むしろ捜査が進むという事であれば、問題無いかしらね。

「だけど、身柄を預かるという事は、記憶を読む以外の方法という事でしょうか？」

リンデイ・ハラオウン、だうと。

お姉様の言葉と違う。

「身柄を預かるのではなく、貰うと言っている。

簡単に言えば、ルネッサには一度死んでもらおうと思っただけ」

「……えっ？」

声を出したのは、リンデイ・ハラオウンか、ルネッサ・マグナスか。いずれにせよ、淡い光がルネッサ・マグナスの体から飛び出し、お

姉様の手に吸い込まれて。

ルネッサ・マグナスが倒れた。

「……なんとまあ」

剥奪した魂の記憶を軽く解析してみたけど、これはびっくり。

犯罪者共を煽ってお姉様に喧嘩を売らせて叩き潰してもらおうとか、
なんという埋伏の毒。

その為に、関係組織の情報を全て持つてるルネッサ・マグナスが、お姉様に記憶を読ませる為に近くに潜むとか、自爆覚悟どころじゃない。

本来はある程度声明とか脅迫とかの手順を踏んだ後でドジを踏む予定だったのが、随分と繰り上がっただけで。

「ええと……」

そして、放置されたリンデイ・ハラウンが困惑してる

仕方ないね、どう見てもルネッサ・マグナスが死んでるし。

「ああ、とりあえず、裏は判明した。

当面は捜査に協力させるから、詳しい話は本人と話をしてくれ」

魂の改変は完了済み、貸与……問題無し。

さつきまでピクリとも動いてなかったけど、今は不思議そうに周囲
を見てる。

別に念願じゃないけど、ルネッサ・マグナス（従属属性付き）を手
に入れたぞ。

すずかと同じく元の魔力が無すぎで、魔改造しない限り眷属化は
無理だから、これでいい。お姉様がやろうと思えば出来る目処が付い
ちやってるけど、しないと云ってるし。

「ええと……」

「ああ、私の事は好きに呼べばいい。

それと、当面の処遇だが、今回の件について管理局の捜査に協力す
る事。それが終わったら、私達の所に戻ってくるという。

自分の状態は理解出来ていると思うが……無茶はするなよ？」

「……はい、了解しました」

元々の目標にも合致するし、指示を拒否したくなる理由は無いは

ず。精神的にまだ安定してなくても安心な指示内容。

心配なのは、事実上の不死である事を利用した釣り餌になろうとする事。

お姉様に魂を抜かれて突然死するとかならともかく、明確な死の記憶は心を摩耗させるし。

「とまあ、こんな所だが。どうだ？ リンデイ」

「文句は無いのだけれど、カメラの前で少々やり過ぎと言うか……賛否両論になりそうではあるけれど、積極的に敵対しようとする勢力は勢いが削がれるんじゃないかしら？」

最高評議会を辞めたいなら、そういう勢力もある程度は大切にしない」と

「私を権力の椅子から引き摺り下ろす方向に走る相手なら放置するんだが、大抵は周りに余計な負担をかけてるだけだから……」

正直言つて、当分の間、要するに改革やらについて直接知ってる連中が多くいる間は無理だろうと諦め気味だ」

全く、世界は本当にこんなはずじゃない事ばかりだ、とかお姉様がぼやいてる。

それでも、雑事が少なくて済んでるのは、周囲の協力があってこそ。それを理解してるから、お姉様も大人しくしてる。

「それで納得しているなら、いいのだけれど。」

それと、あちらの少女は？」

リンデイ・ハラオウンの視線の先には、ヴィヴィオ達に説教されて涙目のアインハルト・ストラトス（名前確認により確定済み）が。

しかも、戦闘終了に伴い、ヴィクトーリア・ダールグリユンとジークリンデ・エレミアも説教する側に。

なんとというフルボッコ。

「あー、まあ、あれは、あれだ。ベルカ絡みで、余計な事を仕出かす血統の犠牲者だ。」

どう考えてもヴィヴィオは関与するだろうし……あれを何とかするのは、気の長い作業になりそうだ」

原作のヴィヴィオと違って、本人だし。

色々やり辛いよねー。

時間をかけてじっくり矯正するしかないかな？

まだ幼いし。早めに対処出来ると喜んでおこう。

幸い、StrikerS関係もこれで出尽くしただろうし。

「……またフラグか？」

なんでー。

蛇足：或いはこんな遙かなる未来も

長い時間が過ぎた。

その間にも、色々な事があった。

歴史は繰り返すの言葉通り、人と人が争う事もあった。

その中でもお姉様達は、勢力を維持し、支持者を増やして。

「……その結果が、アレだぞ？」

増えすぎた。

「いやあ、まさかここまで大きな勢力になるとは思いませんでしたよ」

「^{ロリコン}貴様が元凶だろうが。これだから宗教は嫌いなんだ」

「諦めるにや、現実はこのまんじや」

「お前が言うな。」

「だいたいどうして私の巫女が猫耳で、にやーにやー言うのが直らないんだ？」

「お、今のをもう少しかわいぶしつ!？」

「諦めるにや。名前が『えばんにゆ』の時点で、私はネタキャラが確定してるにや」

「周囲を放置して騒いでるのは、お姉様と^{ロリコン}変態、それと『福音教』で唯一の巫女、えばんにゆ。アルク謹製の、黒い短髪の猫耳娘……見た目はぶつちやけノワール@犬日々。」

「そして福音教は、お姉様を神格化して、現実を生きると突き放しつつ医療や教育を施すツンデレな宗教団体。神のお姉様にはほとんど放置（ごく稀に実験と称する技術提供あり）され、えばんにゆは冷めた目で毒を吐くキャラなのに、何故か人気不衰えない謎宗教。」

「今じゃこうなっちゃったけど、それでも聖王教会や次元世界広域協力協定機構が暴走しないための重石としては、重要な位置にあるわ。」

「その偶像役をやり切った事は高く評価出来るし、お母様は偶像役を代行してくれていたえばんにゆに感謝すべきよ」

「だったら口調ぐらい何とかしてやれ、アルク。」

「こんな細工をしておって」

「嫌よ、可愛いじゃない」

「母様の説得は、とつくの昔に諦めたにや」

「全く……同じように王族設定のない玉藻は、異常な尻尾のポリウムと鼻から出る忠誠心以外まだマシなのに、なんでこいつは……」

「玉藻は私の補佐官だし、真面目さと忠誠心が重要じゃない。」

九尾も魔力の制御機関なんだから、これも重要。何も間違っていないわ」

「……何度聞いても、藍とキヤス狐だな……」

お姉様は脱力してるけど、えばんにゆも大変だった。

主に、愛でようとする女性と、萌える男性の対処が。

「というか、お前はよくこっちに來れたな。」

あの連中がお前を簡単に手放すとは思えんが」

「出会いも別れも突然だけど必然とか、子はいつか親離れするものだとか言ったら、勝手に納得されたにや」

「それでいいのか福音教……」

それでーいいのだー。

「それよりも私としては、エヴァちゃんが移動に踏み切った事の方が驚きですよ。」

あの地位も便利でしたし、関係も悪くなかったと思うのですが」

「便利ではあるが、私は神と呼ばれて喜べるほどおめでたい頭をしていない。集まってくる連中だって、私達を崇拜するか利用しようとするかのどっちかだけになって久しいぞ。」

「だいたい、どうして管理局やらの主導権を争う連中は、悉く私を神輿にしようとするんだ」

「そりゃあ、エヴァちゃんが第2位の宗教で崇められる神で、トップの宗教で崇められる聖王の家族で、平穩を重視するからですよ。」

表立って権力を争う連中も平和を標榜していましたが、戦力的にも国力的にも支持率的にも、エヴァちゃんとの敵対は避けたいでしょうからね。

それでも、大きな変革がある度に権限を削ったじゃないですか」

「だが、そう頻繁にあるものでもないからな……1回目までに、友人として接してくれたのはやアリサ、クロノ達への義理も充分に果たせ

とは思うが。

それに結局、実質的に不滅だという確信が強くなる一方だ。だから、今までは「私が再生する世界」の増加を避けていたが、リリカルなのはが主軸でない世界でも同じ事が起こるのか確認してみたくなった」

「殴り込みですね解ります」

「違うわ阿呆！ 乱入狙いなら、ある程度条件を絞るとはいえランダム転移などするか！」

「いえいえ、別荘の住人もいるのですから、神と天使軍の殴り込みと言っても差し支えないでしょう。加えて、我々もいますし」

「どの様な世界かにもよるのだろうが、超常的な存在が跋扈する世界でもない限りは、過剰な戦力を抱えている事になるのだ。」

世界に不幸があると判っているなら、それを防ぐ事に吝かでない」
でも、リインフォースや変態ロリコンがいるかどうかに関わらず、行った世界でもお姉様の能力が使えたら、本物の神以外なら何とかなる気がする。

その辺の確認も兼ねる移動、なんだけど。

「何が不思議？」

主は、お姉様と一緒にだからいいとして。

「新しい世界にも興味があるわ。それに、不測の事態で往来が途絶える可能性もあるのだから、一緒に行動した方がいいわ」

「そうや。家族なんやし、今更危ないからってのは無しや」

プレシアとはやてがついてくることを決めたから、より大所帯での移動が確定したわけで。

曙天、夜天、宵天の3冊と主。及び、それぞれの眷属や配下等全員になるわけだし。

最大人数は別荘を抱える曙天組だし、お姉様も置いていくのは反対されそうだと行ってたから、問題無いといえ、ない。のかな？

「にしても、一応ある程度の人類と文明が存在しているという条件を付けると言っても、どんな世界か予想出来ないんだぞ？」

「誰かさんが言つとったよ、世界はこんなはずじゃない事ばかり

やって。

「ここしばらくは惰性に近くなつとつたし、ここで1つ、気合を入れるのもええよ」

「そろそろ、新しい研究材料も欲しかったところよ。」

「やっぱり必要以上の富や名声は駄目ね。人を腐らせるわ」

「豊かになろうという意思が、人類の力でもあるんだがな。」

「ま、私には別荘だけでも過剰になっているし、他の組織にまで手を伸ばしたいとも思わん。」

「新しい世界を適当に楽しむさ」

「エヴァ、それはフラグ？」

「そんなフラグは要らんど。普通の平穩が必要以上に難しいなら、再移動も考えるしな」

「不義理はあかんよ？」

「移動先が滅亡寸前とかなら、即再移動する自信がある。」

「条件やタイミング的に、色々面倒な状況も考えられるからな」

「世紀末でヒヤッハー中だとか。」

「銀河の中心でなんてこつたと叫ぶ髭オヤジがいるとか。」

「人類を補完しながら騎乗位で重なってるとか。」

「んー、まあ、そういうのならしゃあないか」

「そんな世界でも、研究対象としては面白味がある事もあるのだけれど」

「そこまで食欲にいくか？」

「プレシアがなんだか楽しそうだけど、そろそろ予定時間。」

「巨大な積層型魔法陣は完成してるし、魔力の充填も間もなく終わる。」

「ランダム転移する方が多大な労力がかかるのに敢えてそれを選ぶ辺り、お姉様も趣味人。」

「もうすぐ準備が完了する。予定通り、全員別荘へ行っておいでくれ。」

「サーチャーの情報は流したままにしておくから、様子は見えるからな」

「解った」

「そうね。」

アコノを置いていくことは無いでしょうから、しばらくは様子を見させてもらおうわ」

「どれだけ信用が無いんだ私は。」

「さあ、行つた行つた」

さてと、全員別荘に収容完了。

魔力も充分。

いつでもいける。

「さてと。行くか」

見知らぬ地、見知らぬ世界へ。

鬼が出るか、蛇が出るか。

何が出るかな？

「縁起でもない。まあ、それも行ってのお楽しみだ。」

並行世界間ランダム転移、発動」

魔法陣が銀色に輝いて。

いざ行かん、約束の出来ない地へ——

番外：小話ズ その8

◆◆ リニスとフェイト ◆◆

「ほらほら、こっちこっちー!」

ハラオウン宅を元気に走る、アリシア。

アリシアに手を引かれるのは、未だ全ての状況を把握してはいないけど、アリシアの使い魔として色々説明を受けた直後のリニス。

一気に説明を受け過ぎて、混乱気味なのは仕方ない。

そんな精神状態だと、連れていかれる先がどこかを考える余裕も無いらしく。

「そんなに走ると危ないですよ」

とりあえず、現状に対しての注意だけで精一杯らしい。

「だいじょーぶ!」

もうついたし! どーん!!」

アリシアはその勢いのまま、叫びながら体当たり同然にドアを開けて。

「フェイトー! つれてきたよー!!」

問答無用で、ベッドに座って本を読んだフェイトの目の前にリニスを突き出した。

「え……リ……ニス……?」

「な、何でリニスがいるんだい!?!」

「フェイトと、アルフ……なの、ですね」

突然の事に混乱するフェイトとアルフに対し、リニスは何となくでも現状を理解したらしい。

ドヤ顔で胸を張るアリシアをちらりと見ると、そつとフェイトを抱きしめた。

「フェイト、元気でしたか?」

あれから2年と少々経っているようですが、ちゃんとご飯は食べていますか?」

フェイトは集中するとご飯も忘れてしまう事があるので、ちよつと

心配です」

全然成長してないしと続きそうだけど、それは自重したりニス。
「で、でも、どうして……」

相変わらずフェイトは混乱中。

助け、又は説明を求める様に、アリシアの方を見た。

アルフは口をパクパクさせてるけど、声が出てない。

「ママとエヴァおねえちゃんがやってくれたんだよっ！」

へーこーせかい？ とか言ってたけど」

「ああ、エヴァンジュがまたとんでもない事をしたって事だね」

「お姉ちゃん、が？」

……そっか。じゃあ、本当に……リニス、なんだ」

「何だか、不思議な納得のされ方ですね……」

はい、リニスですよ」

リニスは苦笑気味だけど、2人ともしつかりと抱き合ってる。

その間から、すすり泣くような声が聞こえるのは、無かった事にしよう。

それからしばらくして。

「そろそろ落ち着いたか？」

そんな事を言いながらお姉様がフェイトの部屋に入ってきたのは、アリシアの突撃から10分後くらい。泣いてしまっただちよつとばつが悪いフェイトと、感情に引っぱられたせいかもしれない泣きしてたアルフト、何を話していいか迷ってるリニスがお見合い状態になった直後。

もちろん、様子を見計らったの乱入。

「あ、お姉ちゃん。えっと……」

「リニスの事か？ 説明が難しいが……本人と言っているはずだ。

それと、私は実行犯で、主犯はプレシアだ。何か言いたい事があるなら、プレシアにもな」

「う、うん。じゃなくて、リニスは無理って言ってたよね。

どうやったの？」

「並行世界から攫ってきた。並行世界に関しては……まあ、そのうち

説明するが、今回に限って言えば過去だと理解しておいてくれ。

攫ったタイムミングとしては、ジュエルシード事件の前、フェイトが最後に会った直後くらいだ。今はアリシアがマスターになっている程度の違いはあるが、間違いなく本人だな。

とりあえずはこんな所だが……他に、早く聞いておきたい事はあるか?」

「ううん、大丈夫」

「そうか。このまま他の連中に知らせると歓迎会になだれ込むのだろうが……何の準備もしていないし、すずかはまだ塾の時間だな。

紹介する順を考えるのも面倒だし、この際だ。寿司屋でも貸し切つて全員呼ぶか」

「え、お寿司?!」

アリシアの目が輝いてる。

「寿司……ですか?」

「うん、お寿司。この国の料理なんだ。

お魚だから、リニスも気に入ると思うよ」

「おいしーよ!」

猫だし、きつと大丈夫。

とりあえず、関係者に通達しないと。

店の確保、いそげ!。

◆◆ とある男達の冒険? ◆◆

日本は今、2006年の夏。つまり、StrikerSの介入から戻って色々やった後。

ここは、とある深い森の中。

そこを必死に歩く、男が2人。

「なあ、道はこつちで合ってたんだよな?」

鬱陶しそうに木を掃いながら進む大男、馬場鹿乃と。

「うん、指示されたルートは外れてないよ。

もうすぐ見えてくるはずだけど……」

後ろでちよつと歩きやすくなった場所を歩く、けど根本的に体力が不足してる上羽天牙。

2人はとある変態ロリコンに依頼されて、つまり、実質的にお仕事で、こんな所にいる。

もちろん、2人とも興味があつたのは事実で、報酬にも納得して請け負った事。

その目的は。

「ん？ お、あれだな。やっと着いたぞ」

「でも、ここからが本番だし……」

「訪問した理由の半分は嘘じゃねえんだ。

それに、何だ。俺達の度胸を付けるとか、そんな意味もあるとか何とか……はあ」

「僕達って、そんなに頼りない……よね……」

「そんなんだから俺もすずかちゃんに愛想を……ま、まあ、あれだ。今回の最低限の目標はほぼ失敗しないだろうって内容だし、気楽に行こうぜ」

「う、うん」

いや、逆ナデポの破壊は、任務中に誰かに惚れたりしないための対策でしかないけど。

まあいいか。

そして、2人は前を向いて。

「いぎ、ルシエの里へ！」

足を進めた。

村に入り、里長と話がしたいという事で、面会を求めて。

「ふむ、飛竜を見たい、と……」

現在、お話中。オハナシではないけど、この場を作れた時点で、最低目標のクリアは確実。

「はい。ある事件で、飛竜を使役する人物が活躍したらしく、その映像を見て広い世界にはこんな生き物がある事を知りました。

可能であれば、間近で見たいと……もちろん、仲良くなれたら嬉しいですが、使役する力も環境もありませんし、召喚したいわけで

はありません」

「ふむ。その人物に見せてもらおう事は不可能なのかね？」

「今では時空管理局のとても偉い人になってしまったので、一般人の俺達では、普通の方法で会うのはちよつと……」

「そうそう、これがその時の写真です」

「そう言いながら馬場鹿乃が出したのは、聖王のゆりかごを先導するドラコの姿。」

報道ヘリが撮影した、ヘリなどと一緒に映ってる、つまり大きさが比較的想像しやすいものも含む。この里の人がどの程度ヘリに慣れてるか知らないけど。

「それで、何処に行けば会えるかを調べた結果、ここに竜を召喚する一族がいるという情報を見付け、伺った次第です」

この部分はいぶ嘘に聞こえるけど、それでも嘘は言っていない。ルシエの里の「場所」を調べたのはこの2人自身で、ルート情報も地元ガイド等から得てるから。

さて、この時点で最低限の目標、ルシエの長老達に「強力な飛竜を使役する人物」の存在を教える事に成功。

ここからは個人的に親睦を深め、何かあったら然るべきところに連絡するよう促すだけ。

さて、うまくいくかな？

◆◆ ザファイラとアルフ ◆◆

「……これは、どういう事だ？」

新テスタロッサ家への引越の日。

4階南東の角部屋が割り当てられていると初めて聞いたザファイラが、その部屋を訪れてみると。

「教導の為に夏の旅行に行かないのだし、座敷らしい座敷もないのだから、部屋を持っておけとは言われていたが。」

しかし、これは……」

明らかに2人分の広さがあり、しかも、明らかに女性が使う事を前

提とするものを含む家具類も置いてあった。

鏡台とか。

どうしてこんなものがと困惑していると、入口の戸が開く。

「あれ？　なんでザファイーラがいるんだい？」

「アルフか。この部屋を使えと言われたのだが……」

「アタシもなんだよねえ。」

普段はフェイトと一緒にだけど、夏の旅行で別行動の時なんかはこつちとか言われたんだよ。

「……どういう事だい？」

どういう事も何も、周囲の人にはペアとして認識されているわけ。

ここでカップルと言えないあたり、微妙だけど。

「男をこの辺りに集めたのだと思っていたのだが」

「カイゼとチクアーブもこつちだっけ。」

けど、チャチャもこつちだし、変態はプレシアの部屋だぞ？」

「しかも、お前もこつちを使う事があるとなると……ダイニングの玄関側に、旅行中にもいる者を集めるという事か？」

「かもねえ。小さい風呂もあるし、洗濯や掃除以外ではダイニングより奥に行かなくてもいいって事かね」

なんか納得されたけど、同じ部屋を割り当てられてる点が華麗にスルーされてるのはどうなんだろう。

明らかに同衾を推奨されてるんだけどなー。

◆◆ こたつむり ◆◆

新テスタロッサ家、4階南西の角部屋。

第2のリビング的な、みんなで使う広めの部屋では。

「……あつたけー……」

垂れてかけてる、ヴィータと。

「……………」

既に睡魔さんの誘惑に完敗してる、シヤマルと。

「……動けん」

主とリインフォースに挟まれて、むしろがっちり抱き付かれ抱きしめられていて身動きの取れない、幼女形態のお姉様がいる。

全員こたつに入り、毛布まで掛けた状態。確実に、このまま寝る態勢と言えり。

お風呂に入ってる他の人用の毛布も、準備済みだし。

「お待たせや。もう寝てるん？」

「ミカンの箱を持ってきたのだが、不要だったか」

はやてとシグナム達が来ても、誰も見向きもしないレベル。

お姉様は、物理的に見れないだけだけど。

「来たか。済まない、助けてくれ」

「んー、その様子やと無理や。」

リインフォースも、姉らしい事が出来てへんって気にしとったし。

それに、リインフォースを引き離しても、後でフェイトちゃんかずかちゃんが行くだけや」

「……神は死んだ」

「そんなんでエヴァさん、すぐ死んでしまうん？」

「淋しすぎて、死んでしまうわ」

「碧いバニースーツのエヴァさんが爆誕。」

成長するんや、ぼんきゅっぼんが似合う年齢まで」

「自分でも苦しいと思ったんだが、よく拾ったな」

「ふふん、元は暇人やったからな」

そんなネタまみれの話しながら、はやて達は隣のこたつに。

「他の連中は、まだ風呂にいるのか？」

「もうすぐ出るって言っとったから、そのうち来るよ。」

でも、みんなでこたつむりになるのも、何か楽しいなあ」

「本来は、みんなでパジャマパーティーとか言っていたんだがな」

「こたつの魔力、恐るべしや。」

おおっと、こたつに召喚の構え！」

「現れた途端、気力やらが吸い取られて行動不能になりそうだな。」

おおっと、こたつの中にいる！」

「こたつの中、あったかいナリ……」

「何をやってるんですか？」

到着したセツナが、呆れてる。

お姉様とはやての会話が、少し聞こえてたらしい。

「身動きが取れんし、パジャマパーティーの真似事をしようとしたんだが。」

何かを間違えたらしい」

「間違え過ぎですよ……」

◆◆ アコノ ◆◆

「そういえば、口調はそのまま変えないのか？」

「どうして？」

とある夜。

お姉様と主が、ベッドの中で喋ってる。

「いや、感情はそれなりに戻っているようだし、そもそも一般的な話し方をしないのは何故だろうと思っただけなんだが」

「前世は口下手であまりはつきり喋る方じゃなかった。その口調に戻すのは嫌。」

今世はずっと、この口調。今更変えるのも何だか……ちよつと、恥ずかしい。

エヴァが変えてほしいと思ってるなら、変える」

「理由が気になっただけで、別に嫌という訳じゃない。」

「そうか、むしろ感情が戻ったから変えない面もあるのか」
「そう。」

突然口調を変えると、絶対に何かあったと思われる。

でも、私にとって、エヴァと一緒にいられる事以上に大事な事は思
い付かない」

「そ、そうか」

◆◆ ぎんのあね ◆◆

「……姉らしさとは、どの様なものなのだろうか」

「年長である事は、らしさとは言えない。やはり、経験や包容力といったものではないか？」

その意味では、あの方の姉であるのは難しいと思うが」

とある日のパーティー会場にて。

ラインフォースとチンクが、並んで難しい顔をしてる。

「頭では理解しているのだ。」

様々な意味で助けられ、既に頭が上がらないのは承知しているが、それでも……いや、だからこそ、私は少しでもエヴァンジュを支えたいのだ」

「気持ちには解るが、支えるのは下の者の役目ではないのか？」

「そ、それは……確かに、そうかもしれないが。」

だが、私の経験は役に立たず、包容力はアコノに圧倒的大差をつけられているのだ。

その上、普段はエヴァンジュの方が年上の姿をしているから、どうしてもな……」

えーと、主は親愛より恋愛方向だから。

競うべきは、プレシア？

親馬鹿を拗らせた包容力はたまに洒落にならないから、侮れない。

「外見の年齢に関しては……事情がある以上は仕方がない。

それに管理世界でのあの方は、私と変わらない外見であっても威厳が衰えない。

……羨ましい限りだ」

いやあ、そうでもない気が。

普段は偉そうな幼女だし。

(聞こえているぞ)

きゃー、ばれたー(笑)

(……どうして嬉しそうなんだ……?)

◆◆ ある日の光景 ◆◆

とある時代。とある地。

そこにある、魔法の練習場にて。

「とまあ、こんな感じだ。」

ある程度効果が見え始めるのは恐らく半年以上先だが、どこかに間違いや勘違い等があれば効果が無い事も考えられる。

その判断材料にしたいから、何をどれくらい練習したか、記録は正確に取っておいてくれ。全員何もしないのは困るが、練習できない日がある事を問題視する気は無いからな」

「「「「はい！」「」」」」

お姉様は、魔法教室に通ってる6歳から18歳くらいの子供達を相手に、新しい魔法の練習方法を指導中。

講師、生徒、生徒の親の同意を得て……というか、合意を得た相手だけに指導する予定で話を進めたところ、あっさり全員が賛同したという経緯が。

宗教が活発でない次元世界とはいえ、福音教の魔法教室に神が来れば、そうなるよねえ。

次元世界では本来の幼女バージョンなせいかな、子供達のウケも悪くないし。

「それでは、今日はここまで。」

もうすぐ暗くなる時間だから、早めに帰るんだぞ？」

「「「はいー」「」「えー」「」」」

年少組は素直に返事してるけど、年長組はぶーたてれる。

もつと話をしたいのにー、とかの声も聞こえる。

「今回は説明が長引いたせいで、本来の終了時間をだいぶ過ぎている。それに、事前に説明した通り情報収集の意味もあるから、たまに顔を出す予定でもいる。」

質問や話は、その時にでも出来るんだ。今日は早く帰るといい」

「「「はい」「」」」

そんな感じで、子供達が退散した直後。

主が転移で登場。

「お疲れ、エヴァ。」

「終わった？」

「様子を見ながら出待ちしていたんだろう？」

「見ての通り、終わった直後だな」

「じゃあ、今からは自由時間。夕食デートを希望」

言いながら主はお姉様の後ろに回り込むと、おんぶをせがむように抱き付いた。

（入り口の方で様子を見ている連中はいいのか？）

正確には入り口の陰に、帰ろうとしてたはずの生徒達が隠れてる。

日本では言えば高校生くらいの女の子が3人。

（じゃあ、お題は……で）

「食べたいのか？」

「食べたい。柔らかいものの割れ目に肉の棒を挟んで」

「かけるのか？」

「どろっとしたもの？ 当然。」

でも、口から零れるから、かけすぎ注意」

「全部口に入れようとするからだろう。無理して啜えなくてもいいんだぞ」

「好きだから仕方ない」

「仕方ないか。」

「どこで食べるんだ？ 一応ここはベンチで水分補給以外は飲食禁止になっていたはずだが」

「そういえば。エヴァがスカートなら、中に潜り込んで……」

その時、がたつ！ と、入り口の方から物音が（棒読み）

思春期の女子には刺激が強すぎたかもしれない。

「もういいか。さて、お前達は何を考えていたかは……その様子では簡単に想像が付くな」

お姉様が入り口から顔を出すと、そこには！

顔を真っ赤にしてる、3人の女の子が。

「エヴァ、ネタバレしておく？」

「しておかんと、余計な妄想を掻き立てられるだろうな。」

「お前達も食べるか？」

「「……………」」

目が点の3人の前に、お姉様は紙で包んだホットドックを5個、それにマスタードとケチャップの容器を出した。

「これは、とある地域で食べられている食べ物だ。簡単に言えばパンに切れ目を入れてソーセイジやらを挟んだものだ。野菜を使う事も多いが、これは一番シンプルなものだな。似たようなのはこの世界にもあるが、味や食感に違いがある。」

味付けは好みだが、こっちの黄色いのは少し辛いから注意しろよ？」

「は、はあ……………」

お姉様にホットドックを渡された女の子達は、固まってる。

どうしたらいいんだろうこれ、みたいな声が聞こえる。

「アコノは、マスタード少なめだったな？」

「体に引っ張られているせいか、やっぱり辛いのは苦手。」

でも、マスタード無しのエヴァよりは食べられる」

「私は元々、辛いのはあまり好きではなかったからな。」

この外見なんだから、お子様の味覚でもいいじゃないか」

「駄目とは言っていない。むしろ、好みが近いから食事で揉めなくて済むから問題無い」

お姉様と主はぱくぱくと食べると、持ったままだったマスタードとケチャップを一番近くにいた女の子に渡した。

かぶりつく様子を見て赤くなってるのは、なんでだろー。

「さてと、私達は行くからな。それを食べたら早く帰るんだぞ」

そして逃亡……………じゃない、練習場から立ち去るお姉様と主。

ほかーんとしたまま取り残される女の子達は、そつとしとこう。

◆◆◆ むかしばなし ◆◆◆

昔々、あるところに1つの魔導具がありました。

その魔導具は多くの意思を持ち、その中の1つが主人格として他の

意思を統率していました。

その魔導具は、正しく兵器として存在しました。作り出した国に命じられ、多くの人の命を奪い、多くの街を滅ぼしました。

そして、その意思は思います。

こんな事をしたのではない、と。

静かに暮らしたいのだ、と。

恨みや妬みを向けられない世界が欲しい、と。

しかし、国はとても巨大で、強欲でした。

反抗的な世界は、邪魔なので攻撃します。

従う世界は、滅びない程度に搾取します。

豊かな世界は、搾取するために攻撃します。

貧しい世界は、生きるために争い続けます。

どこにも、平和なんてありません。

魔導具には、魔法に関する情報を集める役目もありました。

魔法を開発する能力もありました。

自分が望む世界、干渉されない世界を求め、動き始めます。

苦勞を重ね、やっとでできたのは、小さな入れ物でした。

人どころか食べ物すら入れられない、危険な空間でした。

ですが、他人から干渉されにくい、自分だけの空間でした。

長い時間をかけ、更に技術を磨き続けます。

より、広く。

より、安定を。

多くの失敗を重ねながら、ひそかに動き続けます。

そんなある日、魔導具は国に命令されます。

兵器として、世界に終焉を。

魔導具の意思たちは考えます。

これは好機なのではないか、と。

その日、ある世界から星がなくなりました。

意思たちは望みを完成させます。

広大な空間を作る技術と設備を作りました。

星を持ち込み、人が住めるようにしました。

奪っていた命を、もう一度生きられるようにしました。

海も。

山も。

植物も。

動物も。

人も。

作られた空間、外部から隔離された場所で、存在できるように
しました。

もちろん、魔道具は国が保有する兵器です。

少ないながら、仲間も理解者もいます。

作った世界でずっと過ごす事はできませんでした。

意思たちはこの世界を別荘と名付け、穏やかな休暇を過ごす場所と
しました。

そして、その管理を、住ませた人に任せました。

その約束はとても穏やかで、優しいものでした。

必要な維持を行えば、余暇は自由に過ごしてよいとされました。

自然に負荷をかけない範囲であれば、資源も自由に使つてよいとき
れました。

命令する権利は保持しても、それはほとんど行使されない権力でし
た。

この世界、この約束を守ることに、異論が出るはずありません。

住人たちは、魔道具の主人格を主と仰ぎました。

住人たちは、自分たちを従者と呼びました。

主と従者は協力して、別荘をもつと豊かで安心できる世界へと変え
ていきました。

別荘は平和でも、外の国は違いました。

魔法で支配し、魔法で搾取していた国は、魔法を使えない空間に落
ちてしまいます。

主も巻き込まれ、仲間だけでなく、親のように慕っていた製作者も
喪いました。

それから主は、普通の空間に戻るために試行錯誤を繰り返します。しかし、うまくいきません。

別荘に入ってしまうと外との繋がりが完全に失われるので、休むことすらできません。

精神と魔力を消耗する日々が続きます。

残りの魔力が僅かになり、主は決断します。

意識を閉じ、現象としての死をきっかけに発動する魔法に賭けると。

主は従者たちに、別荘の全てを任せました。

従者たちは、主の復活を信じて待つことしました。

それが、とても遠い未来になるとは、誰も思っていないませんでした。

古参の従者たちによる昔語り 別荘の始まり